

統六合村誌



チャツボミゴケのある風景



花楽の里支配人 (フラワーデザインプロフェッショナル)
志保がみともお
瀬上奉夫氏作品



旧太子駅 (安原義治氏提供)



小倉のシダレザクラ



赤く染まったオランダセダム



太子駅跡



白砂溪谷冬景色



白砂溪谷沿いの紅葉



朝焼けの浅間山と六合の谷



野反湖錦秋



世立のシダレグリ



子女様 (生須)



ねどふみの里 (根広)



渡峠から見た芳ヶ平



荷付場のこいのぼり



赤岩集落遠景



集落内をめぐる七福神たち「おんべーや（引沼）」



六合ふるさとまつり



凍み豆腐作り



牧水まつり (暮坂峠)



野反湖のシラネアオイ群生



湯本家住宅

野反湖の消えゆく花たち

野反湖は花の好きな多くの人に親しまれ、300種類に近い花が咲くといわれている。その陰では昨年見られた花がさまざまな理由で今年は出現出来ないということがおきている。

そんな野反湖周辺の消えゆく花たちの一端を紹介したい。



クチバシオガマ

八間山コースでまれに見られたこの花は、2005年を最後に出現していない。再出現の情報を期待したい。



ウメガサソウ

野反湖では2007年に1株確認されたが、2010年人為的な工事のため生育地が土砂に埋もれた。復活はあるのだろうか。



コウリンカ

炎色のこの花は毎年数本発生するが生育地の植生が変わり野反湖周辺の「次に消える花」の最有力候補だ。



コケイラン

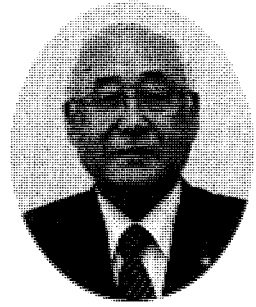
数カ所あった生育地で次々と姿を消し、今では一カ所で数本が見られるのみ。その生育地も2011年9月の台風で土砂に埋まるダメージを受けた。



ホソバコゴメグサ

カモシカ平や白砂山登山道では見られるが、八間山域の生育地では姿を消した。

続六合村誌発刊に寄せて



中之条町長 伊能 正夫

平成二十二年三月二十八日に中之条町と六合村が合併し、新しい中之条町が誕生し早くも四年が経ちました。

現在、「花と湯の町 なかのじょう」をスローガンに郷土の発展を期して努力しているところです。この機に続六合村誌が発刊されることは誠に意義深く、大変喜ばしいことであります。

旧六合村においては、昭和四十七年に「六合村誌」が刊行されましたが、町村合併を契機に旧六合村の貴重な歴史や文化、そして村民一人一人が支え発展させ築き上げてきた「六合村」の歴史を後世に残すために、昭和四十七年以降、合併までの記録をまとめていただきました。

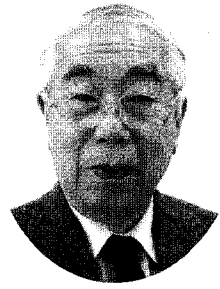
平成二十二年八月に「続六合村誌編纂委員会」が組織され、編纂委員皆さんの献身的な努力によって、ここに「続六合村誌」発刊の運びとなりました。

太古の時代より先人たちは、雄大な自然の中で自然と調和しながら暮らしを営み固有の歴史と文化を育んできました。そこに住む人達が、心豊かに常に夢や希望を持ち未来に向かって生活が出来ること、一番の望みであつたのではないのでしょうか。

今回発刊される続村誌は単なる記録物でなく地域の貴重な財産でもあります。この続村誌が旧六合村のみでなく、「新中之条町」の発展に大きく貢献することを期待します。

この続六合村誌の編纂刊行に当たっては、唐澤定市編纂委員長をはじめ編纂委員の皆さん、更には多くの関係者の方々に長い間多大なご指導とご協力をいただきました。皆さんのご苦勞に心から感謝申し上げ発刊に寄せる言葉といたします。

続六合村誌発刊のことは



続六合村誌編纂委員長

唐澤定市

六合地区は、明治二十二年四月町村制施行によって草津村となったが、明治三十三年七月一日に草津村から分村し、大字草津村と大字前口村が合併して草津町となり、そして大字入山村・同小雨村・同太子村・同日影村・同赤岩村・同生須村の六大字が合併して六合村となった。

日本の古典である『古事記』、『日本書紀』の中に、古代国家の成立を、東・西・南・北と天・地の六つを併せて、国としたとある。このようなことから六合村（くにむら）と命名して、草津町から離れて出発した。当時の指導者の見識に敬意を表したい。

上越国境に近いこの村は、多くの物語を残している。草津温泉で湯治をした湯客が、沢渡温泉で仕上げをしており、六合から暮坂峠を越えて沢渡で湯治している。暮坂峠は、草津温泉の通行で賑わっていた時代もあった。六合地区の特産物である工芸品の中で、木工品のメンパ（赤松の板を加工して作る）、シャモジ・シャクシヤ、大きな栃の木から作る木鉢（うどんなどを作る時に捏ね鉢）がある。また、わら細工の「こんこんぞうり」など今も作られている。中之条町への安市などの折に出品していた。このようなことから、暮坂峠は、経済の流通経路、文化の交流道として重要な街道であったことが偲ばれます。

中之条町と六合村の合併を契機に編纂された続六合村誌が関係者のご協力により発刊される運びとなりました。

今回発刊される続六合村誌は単なる記録物でなく過去の足跡を振り返り、新しい将来の礎となることを願い発刊のあいさつとします。

凡例

一 本書は、続六合村誌である。既刊『六合村誌』に続くものとの考えから、記述は昭和四十八年から平成二十二年三月二十八日までを内容とした。また、既刊村誌同様、総説、自然、歴史、行政、交通、産業経済、文化、文化財、教育、社会教育、宗教、民俗、資料集を基本とした。

一 六合村誌編纂委員会民俗部会としての調査は、随時、高齢者等からの聞き取りを行ったほか、個別調査によって資料収集を行った。地域がわかるものについては、大字だけでなく、小字までを表記するようにした。

一 引用文献は、それぞれの項目の文末に「〔 〕」で記した。

一 文書史料の中で欠字・不明箇所・及び解読不能の文字は字数に応じて□で示した。

一 民俗用語は、原則としてカタカナ書きとした。また、動物・植物もカタカナで表記した。

一 本文はできる限り常用漢字・現代かなづかいを用いた。但し、固有名詞等は、原文の文字を使用したものもある。また、難解な用語、誤読の恐れがあるものについては適宜ふりがなを付けた。

一 漢数字の表記は、原則として十、百、千、万を省略したが、省略すると読みにくくなると思われる場合には、省略せずに使用した。

一 本文の執筆分担は、巻末に記した。

一 編集は、編纂委員の内の編集委員によって行った。

目次

口 絵

続六合村誌発刊に寄せて……………中之条町長 伊能 正夫

続六合村誌発刊のことば……………続六合村誌編纂委員長 唐澤 定市

総説

一、村のすがた……………1

人口 1 産業 3 商工業 3 交通通信 5 保健衛生 5

観光 6 情報通信環境整備 6

三、村誌（明治二十一年）……………63

吾妻郡村誌解題 63 資料編 78 上野國吾妻郡日影村地誌 78

上野國吾妻郡生須村地誌 82 上野國吾妻郡赤岩村地誌 86

上野國吾妻郡太子村地誌 91 上野國吾妻郡小雨村地誌 95

上野國吾妻郡入山村地誌 100

二、地名……………8

小地名調査 8 赤岩 10 日影 17 太子 20 小雨 23

生須 25 入山 28 参考資料 58

自然

- 一、シラネアオイの復元……………111
- 二、穴地獄とチャツボミゴケ……………113

歴史

- 一、古代……………123

熊倉遺跡 123

- 二、中世……………126

中世の六合 126

- 三、近世……………138

ふるさとの文化人・宮崎竹坡と残された作品 138

- 四、近代……………152

明治三十三年の六合村の成立 152

二、村政……………159

基幹集落センターの建設 159 村制施行八十周年記念事業 161

六合村民の日を定める条例 178 六合村制施行百周年記念事業 179

役場組織（昭和四十七年・昭和五十九年） 190

新自治体の構築と市町村合併 191 中之条町六合村合併協定調

印までの主な経緯 195 中之条町・六合村合併協定書 197

閉村式 213

三、歴代三役……………214

村長 214 助役 218 収入役 218

四、議会……………219

歴代村議会議長・副議長 219 歴代の村会議員 220

五、財政……………223

歳入歳出の変遷 223

六、消防団……………232

七、福祉と厚生……………238

六合温泉医療センター 238 六合村高齢者センター 247

六合保健センター・赤岩温泉長英の隠れ湯 249

民生児童委員 252 六合っ子養育手当支給条例 256

行政

- 一、六合村章の制定……………159

六合村社会福祉協議会 258

交通

一、長塚 節、暮坂峠から大倉峠を

越え秋山郷へ……

二、明治以後の交通……………267 265

六合への歴史の道 267

産業・経済

一、六合の花の始まり……………305

二、六合の特産物……………318

メンパ、シヤモジ、ヒシヤク、木鉢 318 花インゲン 327

入山キュウリ 328 京塚カブ 328 入山かりんとう 328

八滝の会 329

三、六合村農業協同組合……………330

あがつま農業協同組合 六合支店 335

四、国鉄六合山荘……………339

野反湖の冬山開発構想の思い出 341

五、六合への電気導入と県営発電所……………342

六、小倉の硫黄鉱山……………351

文化

一、冬住みの里資料館……………353

文化財

一、指定文化財……………355

国天然記念物 355 国選定 356 県指定 363 村指定 367

二、石造文化財……………383

六合の石造物調査 383 赤岩地内 384 日影地内 392

太子地内 399 小雨地内 402 生須地内 410 入山地内 417

六合の石造物と若干の考察 441

教育

一、教育委員会……………455

教育長 455 教育委員 455

二、幼保一体事業の導入……………457

「六合こども園」の誕生 457

三、学校教育……………467

小中学校の沿革 467 六合小学校 467 南小学校 474

入山小学校 476 入山中学校 482 六合中学校 486

学校の統合 492 入山小学校、六合中学校統合 492

南小学校、六合小学校統合 494

入山小学校、六合第一小学校統合 495

元山・品木・長平分校の統合 496 入山中学校郷土学習 497

ふるさとの昔と今 497 研究内容一覧と研究員 499

開校百年記念事業 510 六合小学校 510 南小学校 511

入山小学校 512 社会科副読本編纂事業 513 白根開善学校 519

四、社会教育……………522

文化協会 522 六合の文化を守る会 532 体育協会 533

五、六合山岳会……………549

山岳会の記録 552

六、婦人会……………585

七、青年団……………591

八、六合かるた……………598

宗教

入山の「仏堂存置願」 601 根広の月洲庵 603

月洲寺の数珠回し 604 「神祠取調明細記」―入山 604

「神社明細帳」 604 六合地区の社寺の合併記録 606

民俗

一、六合の民俗……………609

食事 613 本尊様 614 十日夜 615 山神様 618 オボヤサン 619

生須のウブヤシナイ 620 十二様 620 上棟式 621 禁忌作物 621

ツレニイグ 623 病人駕籠 624 葬礼関係の習俗 627

年取り 628 筒粥 632 神様 635 婚礼習俗 636

赤岩のジジツカケ・ババツカケ 641 京塚の子守様 644

なぞなぞ 644

二、六合の昔話……………646

六合の昔かたり 648

年表

続 六合村誌

総説

一 村のすがた

本村は、群馬県の北西部に位置し、東は中之条町、南は東吾妻町と長野原町、西は草津町と長野県の高山村・栄村・山ノ内町に、北は新潟県の湯沢町に接している。県庁所在地の前橋市へ七〇キロメートル（車で約一時間三〇分）、高崎市へは八〇キロメートル（車で約二時間）、東京都心まで二〇〇キロメートル（関越自動車道渋川伊香保IC利用で約三時間）の距離にある。面積は二〇二・八一平方キロメートルで、そのうち山林と原野で占められ、わずかな田、畑、宅地が白砂川を中心に点在し、自然が豊富である。

主な公共交通機関は、鉄道駅が存在しないため、JR吾妻線の長野原草津口駅が最寄りとなっている。村内の交通手段は、国鉄バス、草軽バスが定期運行していたが、利用者が減少し廃止となった。平成二十三年度より民間事業者への委託で交通確保をしている。

人口

昭和三十年代に群馬鉄山が営業されていたこともあり、四、三八三人であった。その後、昭和三十七年～四十年にわたり閉山となり、徐々に減少し過疎化現象があらわれ、昭和四十五年の国勢調査では二、五八〇人となっている。その後、平成十七年調査では一、八四二人となった。

人口のうつりかわり

年次	世帯数	総数		人口		一世帯員 平均人
		男	女	男	女	
昭和四十五	六二三	二、五八〇	一、二五七	一、三二三	四・一	
〃 五十	六二四	二、三三三	一、一五四	一、一九九	三・八	
〃 五十五	六二〇	二、二四五	一、一三〇	一、一一五	三・六	
〃 六十	六九九	二、二二八	一、一五七	一、〇七一	三・二	
平成 二	六六七	二、一四四	一、一〇六	一、〇三八	三・二	
〃 七	六八二	二、一〇九	一、〇七一	一、〇三八	三・一	
〃 十二	七〇一	二、〇四五	一、〇二五	一、〇二〇	二・九	
〃 十七	六六七	一、八四二	九二三	九一九	二・八	
〃 二十二	六二七	一、六三二	八一三	八一九	二・六	

単位：人

年次	自然動態			社会動態			純増減数
	出生	死亡	増減数	転入	転出	増減数	
平成 9 年	19	16	3	164	157	7	10
平成 10 年	24	15	9	119	164	-45	-36
平成 11 年	11	23	-12	122	124	-2	-14
平成 12 年	16	21	-5	99	147	-48	-53
平成 13 年	15	21	-6	112	134	-22	-28
平成 14 年	11	31	-20	80	129	-49	-69
平成 15 年	15	18	-3	138	136	2	-1
平成 16 年	9	17	-8	63	105	-42	-50
平成 17 年	7	35	-28	89	103	-14	-42
平成 18 年	10	24	-14	61	88	-27	-41

地区名	世帯数	総数(人)	男(人)	女(人)
京塚	二〇	六〇	二六	三四
世立	五〇	一三三	六九	六四
引沼	六一	一六二	七七	八五
花敷	一一	一七	九	八
和光原	三一	九七	四六	五一
根広	二三	五四	三〇	二四
長平	七	一〇	六	四
小倉	六九	八八	六二	二六
熊倉	四	七	四	三
田代原	二三	八二	四二	四〇
品木	八	二二	一〇	一二
梨木	一一	三四	一七	一七
太子	四四	八七	四四	四三
湯久保	三四	八五	四〇	四五
八幡	二七	六六	三三	三三
中組	四〇	一〇二	五〇	五二
下沢	二四	四八	二〇	二八
赤岩	五九	一五七	七三	八四
広池	四〇	一二五	五九	六六
高間	六	九	三	六
鍛冶坂	一六	三一	一五	一六
生須	三四	九六	四九	四七
沼尾	一〇	三一	一三	一八
小雨	四九	一二〇	六四	五六
総数	七〇一	一、七二三	八六一	八六二

地区別人口(平成二十二・三・二十七合併時)

産業

平成十七年における産業別就業者数は九二〇人であり、一、〇〇〇人を割り込み減少しており、サービス業を除く、すべての産業において、横ばい、又は減少傾向である。産業別でも減少傾向で、産業別構成比の推移をみると、第一次産業は過去一〇年間に一定している。第二次産業は年々減少傾向にあり、第三次産業は増加傾向にある。産業別総生産は、第三次産業が最も高く、約四六億円になっている。分類別にみるとサービス業、公務、不動産業が高くなっている。

農業は、農家数は経年的に減少している。専業農家及び第一種兼業農家数が減少していることから、農産物を販売して農業所得を得る状況が困難になってきている。そういった中で、昭和六十三年ごろより六合の資源を活用した花卉が、高齢者を中心として栽培・販売が始まり、販売二億円を目指す主要産業となった。畜産業は、平成八年に暮坂地区に畜産基地が整備され、大規模農家として酪農が開始された。農業の振興策として活性化センター「よつてがねえ館」、総合交流ターミナル「花楽の里」、特産品加工施設「花いんげん缶詰・納豆等」、直売所「くにっこハウス」などが整備され、活性化を推進している。

商工業

商業は人口減少による販売力の減少で営業が厳しい状況であり、小売店は廃業し村内ではなくなりました。唯一営業しているAコープ六合店、農産物直売所のみとなった。

	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
農業	285	213	177	181	172
林業	49	38	35	24	21
漁業	0	0	0	0	0
鉱業	4	3	2	7	1
建設業	222	191	194	171	139
製造業	82	80	57	36	30
電気・ガス・熱供給・水道業	6	10	11	9	6
情報通信業・運輸業 計	39	43	36	34	26
卸売・小売業	99	109	86	82	61
金融・保険業	6	8	9	6	4
不動産業	5	4	4	4	4
サービス業 計	375	375	429	416	401
公務（他に分類されないもの）	58	66	56	53	55
分類不能の産業	2	0	0	1	0

資料：「国税調査」（総務省）

項 目	生産額	総生産額 (百万円)	割合%
第1次産業		265	4.1
農業		234	3.6
林業		30	0.5
水産業		1	0.0
第2次産業		563	8.8
鉱業		0	0.0
製造業		169	2.6
建設業		394	6.1
第3次産業		4,571	71.1
電気・ガス・水道業		588	9.1
卸売・小売業		71	1.1
金融・保険業		41	0.6
不動産業		846	13.2
運輸・通信業		271	4.2
サービス業		1,604	25.0
公務		1,150	17.9

資料：「市町村別総生産・分配所得」(平成17年度、群馬県総務部統計課)

	第1次産業		第2次産業		第3次産業		合計
昭和60年	334	(27.2%)	308	(25.0%)	588	(47.8%)	1,231
平成2年	251	(22.0%)	274	(24.0%)	615	(53.9%)	1,140
平成7年	212	(19.3%)	253	(23.1%)	631	(57.6%)	1,096
平成12年	205	(20.0%)	214	(20.9%)	604	(59.0%)	1,023
平成17年	193	(21.0%)	170	(18.5%)	557	(60.5%)	920
平成17年(群馬県)	66,291	(6.6%)	332,689	(33.0%)	608,896	(60.4%)	1,007,876

資料：「国税調査」(総務省)

	水稻		野菜等 (大豆・スイートコーン)		花卉		左3種計	
	作付面積 ha	生産量 t	作付面積 ha	生産量 t	作付面積 ha	生産量 箱	作付面積 ha	—
平成7年	5	23	15	18	10	21,600	30	—
平成12年	4	17	6	8	14	33,000	24	—
平成17年	2	9	2	3	20	44,000	24	—

資料：「作物統計調査」(六合村)

	作物名					農業計 百万円	1戸当たり 農業産出額 百万円
	(1位)	(2位)	(3位)	(4位)	(5位)		
平成7年	畜産	野菜	雑穀豆類	花卉	いも類	420	0.3
平成12年	畜産	野菜	花卉	雑穀豆類	いも類	400	0.6
平成17年	畜産	花卉	野菜	雑穀豆類	—	410	0.6

資料：「生産農業所得統計」(六合村)

交通・通信

本村における交通は、昭和四十五年に鉄道の太子線が廃止されてJRバス、草軽バスが定期運行の足の確保は保たれていたが、社会情勢の大きな変化により草軽バス運行が昭和五十九年に廃止、JRバスも平成二十一年に廃止された。生活の足が絶たれ、何とか住民の足確保ということで民間事業者への委託運行を実施した。

道路整備は、国道の狹隘部や橋梁架け替えと整備され、村外への移動に大きく時間短縮が図られた。

通信は、農村集団自動電話が整備されて以来、情報、文化の進展は大きく変わり、日本電信電話公社による全自動化となった。情報化の社会となり、どこでも移動しながら電話ができる携帯電話社会が急速な勢いで普及した。また、いつでもどこでも情報が得られるインターネット社会も同時に普及し、目まぐるしい社会変化が起きた。本村でも平成十九年四月に情報化格差の是正を図ることから補助事業を活用し、デジタル放送の再送信、インターネットサービスの健康管理等情報連絡施設が整備された。

保健衛生

医療機器や医療制度が充実され病気に対する対応は各段によくなっているが、人々が安心して暮らせる環境づくりが大きな要因となり平成五年九月に、三六五日医師が居て住民の健康管理をと六合温泉医療センターが建設された。併設施設として、介護保険施設、健康増進施設が併設され、医療、保健、福祉の拠点となった。平成十年には、住民の保健事業の拠点に赤岩に保健センターが、温泉入浴施設「長英の隠れ湯」が

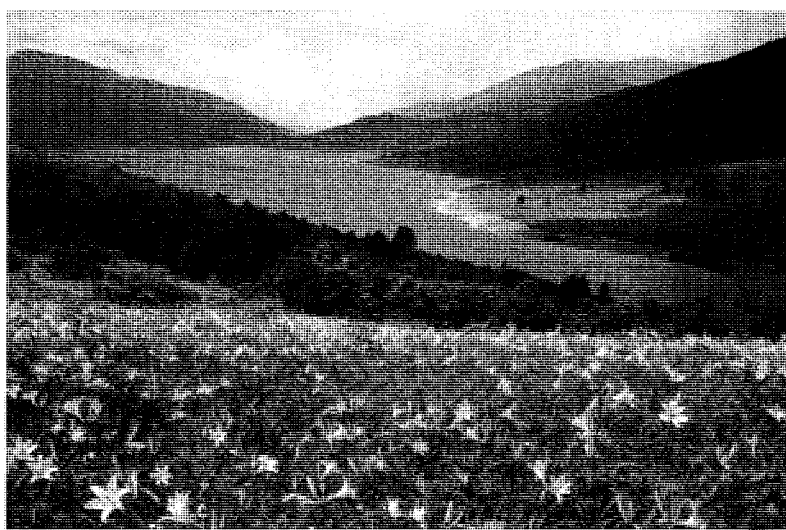
併設オープンされ、南部地域に大きな喜びとなった。

水道給水状況

水道施設名	給水人口	給水戸数
水道施設名	給水人口	給水戸数
中部簡易水道(小雨)	一二九人	六七戸
中部簡易水道(生須)	一二一人	六一戸
中部簡易水道(梨木)	三四人	一四戸
南部簡易水道(赤岩)	一六二人	六七戸
南部簡易水道(日影1、2系統)	二四四人	一二七戸
世立簡易水道	三〇九人	一五九戸
広池簡易水道	一二九人	四二戸
和光原簡易水道	一〇二人	四七戸
小倉簡易水道	一〇一人	二四戸
田代原簡易水道	九二人	三四戸
京塚簡易水道	六三人	二〇戸
根広簡易水道	四二人	二二戸
湯久保水道	九〇人	三八戸
暮坂パイロット水道	一三人	八戸
長平小水道	一〇人	一五戸
太子小水道	五六人	二九戸
高間小水道	八人	六戸
合計	一、七〇五人	七八〇戸

観光

観光施設は、温泉施設等が国道沿いに多く点在しており、古くから宮みのある温泉旅館が営業をしている。近年は経済情勢に大きく影響され、六合を訪れる観光客は減少している。その中でも特色を出して魅力あるサービスを行っている施設もある。自然豊富の野反湖は、四季折々の自然美を見せてくれる。また、三〇〇種類の高山植物が咲き乱れ、観光客を楽しませてくれている。平成十四年には「日本で最も気持ちいいキャンプ場」、「全国遊歩百選」にも選ばれた。



ノゾリキスゲ咲く野反湖

情報通信環境整備

一九九〇年代後半以後、インターネットや携帯電話の普及に伴い、高度情報化社会と称される変革の時代に入った。都市のみならず農村部でも高速通信環境が必要とされ、通信事業者や自治体がこぞってその整備にあたるようになった。その多くはNTTなどの通信事業者であったが、企業活動であるがゆえに六合村のような不採算な農村部は後回しにされ、取り残される危機に直面した。さらに地上波テレビ放送のデジタル化政策により、二〇一一年七月二十四日すべてのアナログ放送が停止されることとなり、この対応策の検討を余儀なくされた。

平成十二年樹立した六合村の第五期山村振興計画にもとづき、平成十五年度新山村振興等農林漁業特別対策事業に着手、健康管理等情報連絡施設（情報ネットワーク）を整備、高速通信環境の構築と地上波テレビ放送デジタル化への対応を図ることとした。平成十五年度に「地域活性化支援機構」を設立して全体計画の立案を行い、平成十六年度に調査設計、平成十七年度から翌十八年度にかけて施設設備の工事を実施した。

平成十九年四月から施設の運用を開始し、高齢者宅へのテレビ電話配置、インターネットサービスの提供、テレビ放送・FM放送再送信、自主放送「くにつこチャンネル」放映を開始した。テレビ電話は高齢者（七五歳以上）のみの家庭間をつなぎ、安否確認や情報交換に活用されている。インターネットは、従来NTTのISDN回線接続のみであり、通信速度は理論値六四キロビット毎秒と非常に遅く不便を強いられていたが、情報ネットワーク整備に伴い、約五メガビット毎秒と一〇〇倍程度の大きな改善結果が得られた。地上波テレビ放送再送信は、アナログ波とデジタル波のサイマルキャスト（同時送信）方式を導入、受信アンテナは

暮坂峠に設置し、アナログ波、デジタル波ともに榛名中継所からの電波を受信している。また放送大学は入山田代原予備受信アンテナで受信している。尚、アナログ波は平成二十三年七月二十四日正午停波した。くにつこチャンネルは運用開始以来毎週一番組を基本として、六合地区の行事や風景、暮らしの様子などを取材し放送している。学校などでのこどもたちの活動の紹介は特に人気がある。

情報ネットワークの設備構成は、光ケーブルと同軸ケーブルを組み合わせるHFC（ハイブリッド・ファイバー・コアクシヤル）であり、全線光ケーブルではない。時代遅れではないかとの批評もあるが、建設当時は光ファイバー設備が高価であり、設置費用と加入者の負担軽減を最優先した結果である。テレビ放送視聴には全く支障はなく、インターネット接続も、当面必要な性能を有しているが、より高速な通信環境が求められる場合には設備増強も必要となろう。

事業の内容

伝送路 光ファイバー五三km 同軸ケーブル八五km

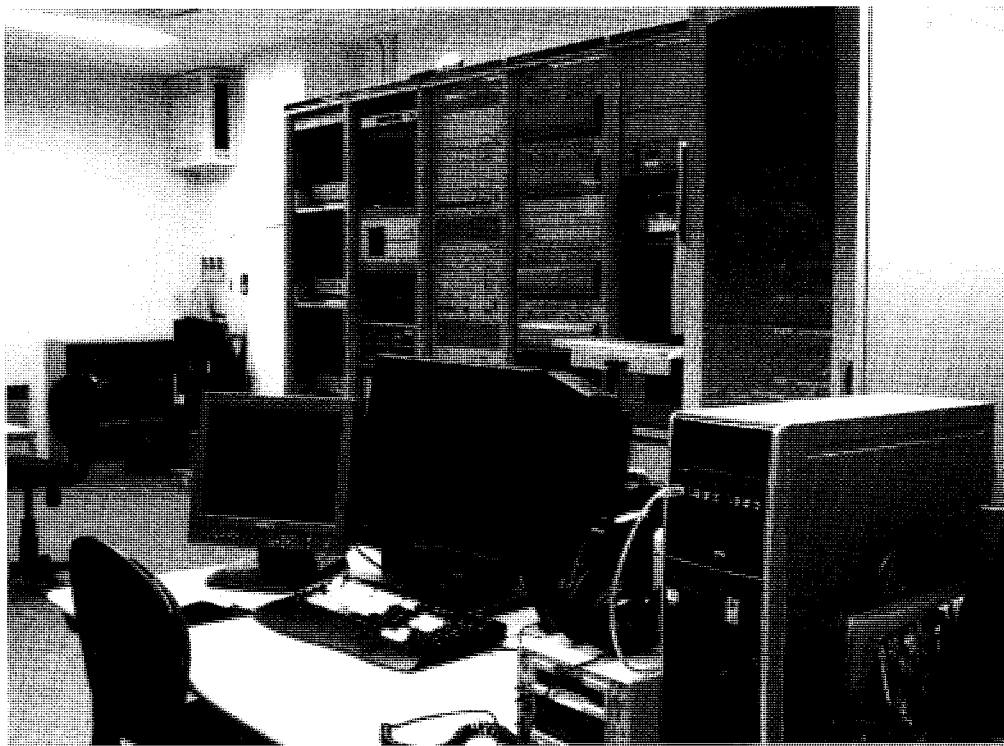
地上波再送信 アナログ九波 デジタル九波 FM二波

総事業費 三億九、一四六万二、〇〇〇円

財源内訳 元気な地域づくり交付金 二億二、七八〇万円

地方債（過疎債） 一億五、四六〇万円

村負担 九〇六万二、〇〇〇円



放送局舎

二 地名

六合地内の小地名（口承地名）調査

小地名調査に際して

私たちの日常会話にはよく地名が登場する。仕事や旅行に出かける際は、必ず〇〇に行くと言地名を欠くことが出来ない。大地に根を下ろし共同生活を営む人間には、土地の地名を知ることが生きるための必須知識の一つといえる。

地名について、日本の民俗学創始者柳田国男は、地名は「二人以上の人の間に共通に使用せらるる符号である」と書いている。地名研究者都丸十九一は、著書に「地名とは地表上にある土地の名である」と定義し、「地名は人名とともに固有名詞の代表的なものである」、「時代により、時には人によってすら変わり得る」と先学は記している。私も地名とは何かと聞かれたら、土地の名や、土地に付けた符号を連想する。時代の流れで、新たな地名が生まれ、消滅する地名もあろう。長い時間を消えずに生き抜いた地名には、土地の歴史や先人の生活を知る貴重な無形の文化遺産としての価値も感じる。比較的新しい地名でも、後世には時代や産業を語る資料として評価されることもあろう。

思えば六合の先人は当地で汗を流し働き、子を育て、次の世代に家を引き継ぐ営みを連綿と繰り返してきた。だが、戦後の高度経済成長頃か

ら社会構造は激変し、農山村の若い世代は生活の場を都市に求め土地を離れ、高齢化した親の世代が当地に残る構造になってしまった。山に囲まれた当地では、耕地は何よりも大切に、日当たりが良ければヒラの狭い土地でも、切り開き利用した。だが、今では家の周辺以外の耕地の多くは荒れたり、自然に戻ってしまった。時間の経過と共に、この地の山野を生活の場とし、多くの地名を伝える古老も少なくなった。日常の会話でも、以前働いた採草地や炭焼きの場も話題にならず、地名を語る機会もない現状が続けば遠からず消えていく運命と思われる。今なら幸いにも、周辺の畑を耕し、採草地に通った古老も相当数が健在であり、消滅寸前の状態にある小地名（口承地名）を思い出し、聞くことも出来る。この地を長く生活の場とした古老にお会いし、紙の上の記録だけでも残して後世に伝えることが、我々の責務と感じ小地名調査を行うことになった。

小地名聞き取りの基礎調査は、六合南部が山田武俊、中部は黒岩石勇、北部が山本茂と、当地に生まれた三人が担当した。編集担当の田村正勝も、バイクで暮坂峠を往復し、古老にお会いし補充の聞き取り調査を行った。

本来ならば集落の古老に一同に集まっていたら、語られた地名を取捨選択し、小地名の所在地を訪れて地図に記入するのが理想だろう。だが、刊行までの時間も限られ、一対一の対面調査に頼り、然も広大な山間地帯の現地を確認するのも非現実的なため、精度面では不十分な報告になってしまった。ただ、『村誌』に掲載された明治十四年の群馬県調査は小地名のみの報告で、場所が特定出来なかった。今回の報告では、所在地等も多少は紹介したので、一歩前進と思っていたら、許しても

らえるならば幸いである。

小地名調査着手前は、公的地名の小字は境界や範囲を示す正確な地図が存在し、既知の事実と思っていた。だが、調査開始後、いただいた小字の概略図は行基地図的な内容と分かり、小地名の所属小字の正確な特定も困難と感じた。六合地内には広大な国有地内も含み一六〇程の小字があるが、この機会に小字の位置関係等の概要は紹介しなければと感じるようになった。国土調査が進行中の現状では、集落周辺は比較的正確な『小字集成図』を利用し紹介することにした。だが、集落を離れた山地、特に国有地内は地形とは無関係の一筆表記で、境界も不明な個所が大部分である。不十分な集成図だが、小字を知るために多少は役立つという現実的な判断だが、許していただきたい。

以上のように、弁解がましい不十分な調査報告だが、次ぎの機会を待つことは出来ない。我々も全力で調査に取り組んだ。お会いした古者からお聞きした小地名を、『六合村誌(続編)』に収載し、この地に生きた先人が大地に残した足跡の一端を後世に伝えることが出来たのは大きな喜びである。

この地名調査にあたり、入山では根広の中村福美氏、中村一雄氏、黒岩みつ氏、長平の山崎忠一氏、小倉の山口源次氏、山口長一氏、矢倉の霜田かず子氏、和光原の本多秀次氏、山田作次氏、引沼の山本栗岡氏、山本二郎氏、山本公雄氏、山本国雄氏、世立の山本正夫氏、関千代衛氏、山本由平氏、山本荒次郎氏、京塚の山口盛雄氏、見寄の山本新十郎氏、山本次一氏、梨木の湯本久夫氏、荷付場の中澤総一郎氏、中澤長太郎氏、暮坂の熊川寅吉氏、田代原の山口一元氏、山本久義氏、諏訪ノ原の中沢富士氏、山口市郎氏、品木原の山口まさ氏、生須の黒岩きくゑ氏、

市川浪二氏、中澤富一氏、小雨では市川伸夫氏、市川義夫氏、津田国松氏、沼尾の福島仁一氏、太子では富沢久幸氏、富沢一二氏、富沢正峯氏、田村友重氏、田村信一氏、浦野幸一氏、日影では下沢の山本正美氏、篠原道男氏、中沢の富沢春男氏、篠原勇氏、茂木真一氏、平沢の富沢久好氏、橋爪喜美雄氏、小池孝三氏、田端の湯本一好氏、八幡の富沢初男氏、富沢昭司氏、湯久保の安カ川正一氏、富沢栄雄氏、富沢三司氏、小池誠一氏、赤岩の安原繁安氏、安原義治氏、関駒三郎氏、関口源四郎氏、富沢和吉氏、広池の篠原巖氏、篠原朝吉氏、篠原幸夫氏、出立の篠原光男氏、矢ノ下の篠原きぬ氏、中室の篠原みさを氏、高間の篠原正一郎氏、他に名前をお聞きしなかった方々のご協力をいただき、お蔭で故郷六合の小地名を後世に伝えることが出来ました。

特に何度も伺ったり、時には現地案内までお願いした中村福美氏、本多秀次氏、熊川寅吉氏、篠原巖氏、篠原光男氏には大変お世話になりました。改めて御礼を申し上げます。 編集担当 田村 正勝

小地名報告資料を見る方へのお断り

一、掲載地名と概要は、古者から地名を聞き、田村の判断で文字化したもので、現地を知らず隔靴搔痒の面もあり、勘違い、誤りも多々あるかと思われる。

二、小地名(口承地名)が属する小字は、古者の土地勘と、集成図を参考に決めたが、山地等は参考程度である。

三、この種の調査は地域の古者が一堂に会して、文殊の知恵を伺うのが理想だが、この資料集は限られた方々からの聞き取り調査で、多々不十分な面もあると思われる。

四、調査困難な白砂川上流部、ガラン沢筋等の地名は、『村誌』記載の登山報告や川筋遡行の紀行文に掲載の地名を参考までに転載したものである。

五、現在の公的な小字名と、古くから使用した小字名が異なる例が幾つかあった。地名が歴史的にも確たる場合は、本来の地名表記で載せた。

六、明治十四年の調査で紹介の小地名は、刊行物掲載の文字を原則として使用した。初見の小地名で、地形用語等は常識的判断で表記した。地形の窪は、久保でなく窪を使った。不明な地名は漢字表記を避けた。

大字／赤岩

小字名 ○小地名	備考
小字／すずのたいら (鈴ノ平)	白砂川左岸(太子駅跡付近対岸) 旧道沿い一帯。東は穴ノ上、南は水ノ窪、西は白砂川、北は大字生須に接する。地名の鈴は篠竹類の植物スズで細工物にも使う。
○うめのきたいら ○おおよせ ○こよせ ○ぼくちあな	梅の木平。大寄の先、生須に向かう小平。植物名に因む。大寄。博打穴がある沢、梅の木平の南になる。小寄。大寄の手前、赤岩寄りにある沢。博打穴。岩下が洞穴で、この穴で博打をしたと伝わる。
小字／みずのくぼ (水ノ窪)	白砂川左岸、ツツジ沢の北々南大橋く赤岩ふれあいの家付近。東北は穴ノ上、東は岩ノ上、南は鍛冶谷戸、西は白砂川、北は鈴ノ平に接する。保健センター、長英の隠れ湯がある。
○まいぐち ○こまつばら ○おみや ○つつじさわ ○どろんた ○やぶしば ○いちばんのくぼ	前口。長英の隠れ湯(共同浴場) 付近の西、道下の白砂川沿い斜面付近。 小松原。長英の湯の東側山地。 御宮。長英の湯の西下付近。社に由来するか。 ツツジ沢。ツツンジャー(土沢)と転訛。長英の隠れ湯から昔の里道片ふた道に入って、最初に渡る沢。地形図にはツツジ沢と表記する。 泥田。ツツジ沢と旧道交差五〇メートル程上流。右から入る沢にあった水田跡。湿地状の所か。 藪柴。泥田の少し上流。柴は薪か。 一番の窪。ツツジ沢沿いにある一番深い窪。左岸が民有地、右岸は国有地である。

<p>○やぶしばゆうすい ○にばんのくぼ ○さんばんのくぼ ○わさびくぼ ○てらやま</p>	<p>藪柴湧水。美味しい水が湧く所。 二番の窪。藪柴湧水の奥。国有地的な地名。 三番の窪。二番の窪の奥にある窪。 山葵窪。沢の上流で三番の窪の先にある。一本木の手前。 寺山。南から来る旧道が土(ツツジ) 沢を渡り、白砂川沿いになった付近の道上。龍沢寺の所有林があった。</p>
<p>小字／あなのうえ (穴の上) ○かれぎざわ</p>	<p>白砂川左岸、花園大橋く龍沢寺対岸の鈴ノ平東側の山地。北は大字生須、東は岩ノ上、西南は水ノ窪、西は鈴ノ平に接する。地名は鈴ノ平二帯に多い岩穴上方の意か。 枯木沢。山の崩れた所か、水涸れになりやすい沢の意か。</p>
<p>小字／いわのうえ (岩ノ上) ○こさかば ○またぐち ○やすみば ○しらいし</p>	<p>赤岩重伝建東奥一帯の山地。北はツツジ沢源流付近く南は出立北方。東は深山口、至球、南端は出立、西は中野、鍛冶谷戸、水ノ窪、穴ノ上に接する。寺社木林道が走る。 小坂場。寺社木林道、簡易水源脇から鍛冶屋敷方面への旧道を少し入った最初の馬頭観音付近。 又口。前記の先、道の右、樗の根元に馬頭観音が置かれた付近。又は分岐地点入口であろう。 休み場。又口と白石の間。道脇に休息に適した石がある。白石。又口の先、左右に白い軟らかな岩がある付近。 昔、この付近が耕地の最終地点だった。 上がり上げ。白石から曲折した坂道を上り上げた所。 地形図上の九一八メートルの三角点付近。 宮の尾根。法印だった鏡(教) 学院跡裏手の山。 奥の院。寺社木林道上で、諏訪神社の前身があった所。 今も跡地に当時の敷石がある。</p>
<p>○おつびらき ○しょうぶさわ</p>	<p>寺社木線沿いの窪。清井戸沢の水源上方になる。 菖蒲沢。菖蒲が生える沢の意味だろう。</p>

<p>小字／かじやど (鍛冶谷戸) ○なかのせ ○あらいやしき ○いどり ○かみひら ○おおうえ ○いなりやしき</p>	<p>集落内は赤岩ふれあいの家南側く消防火のみ櫓の四本辻に至る。東北は岩ノ上、東南は中野、南は林橋ノ木、西は白砂川、北は水ノ窪に接する。字義は鍛冶職に由来の垣内地名に感じるが、ヤドの発音で詳細不明。重伝建の中心部で、湯本家や上の観音堂がある。 中ノ瀬。町宮住宅付近から白砂川に面す斜面。川には湯本医者と河童伝説頃から近年まで中ノ瀬橋があった。 新屋敷。稚蚕共同飼育所跡地裏の土地。 井戸入。エドリと転訛。湯本家住宅脇を流れる清井戸沢源流付近一帯。飲み水用の井戸の奥(イリ)の意味か。 上平。秀英法印の墓地付近の斜面(ヒラ)。</p>
<p>○かみのかんのんどう ○じじっかけ ○ばんばさき ○ぶたい ○くまのじんじゃあと ○しみいどさわ ○きょうがくいん ○やすはらいなり</p>	<p>爺崖か。清井戸沢が白砂川に流れ込む所の崖。地名の由来は古い時代の棄老伝説に因む場所か。 婆崎。関口家の墓地付近から白砂川に面した斜面。川に突き出た崖の先端、ハバII崖の先。棄老伝説も誕生。 舞台。湯本家裏、墓地道沿い。常設の芝居小屋の場所。 石段上の小平所が小屋跡である。 熊野神社跡。湯本家東北、山根の土手上。 清井戸沢。湯本家北脇を流れる沢。水源上がオツピラキ。清水が湧き出す所II井戸と考えたのが由来か。 鏡学院。当地にあった修験(法印)の寺。入口の石垣寄進碑に六合以外の西吾妻七ヶ村の村名がある。 安原稲荷。鏡(教) 学院の裏山に祭祀。安原姓の稲荷。</p>

<p>小字／りんごのき (林橋ノ木)</p>	<p>赤岩分校跡南く火の見に至る町道道下。東は中野、南く西は白砂川、北は火の見から来る道境に鍛冶谷戸に接する。河岸段丘上は水田を含む耕地。南部体育館、赤岩公民館、東堂がある。果実の林橋に因む地名だが詳細不明。</p>
<p>○あくと</p>	<p>足。前原耕地の白砂川に面した斜面。対岸日影側にある足の踵の形に似た岩に因む地名。</p>
<p>○めーつばら</p>	<p>前原。東堂の西側一帯の耕地。河岸段丘上の平地。</p>
<p>○ひがしどう</p>	<p>東堂。お釈迦様を祀る観音堂のある所。</p>
<p>○したざわ</p>	<p>下沢。東堂の南前を流れる沢。</p>
<p>小字／なかの (中野)</p>	<p>赤岩集落南側の町道道上。北は消防火の見、南は赤岩神社続き尾根、東は堰堤の奥旧鍛冶屋敷道沿い山地。東北は岩ノ上、東南は出立、西南は林橋ノ木、北は鍛冶谷戸に接する。三階の関家等重伝建地区、赤岩神社がある。</p>
<p>○とちぼら</p>	<p>栃洞。中堰と水の源の中間、上沢の堰堤付近。</p>
<p>○あらい</p>	<p>新井。アレエの発音。栃洞上方の呼称。</p>
<p>○みずのもと</p>	<p>水の源。寺社木林道上、生須の簡易水道水源。昭和三十四年まで、樋でこの水を引き飲料水と水田に使う。</p>
<p>○せぎあげ</p>	<p>堰上げ。水の源と同じ。中堰(中瀬木)の取水場所。</p>
<p>○すわさん</p>	<p>諏訪神社上り口付近。</p>
<p>○おどりば</p>	<p>踊り場。赤岩神社参道入口を少し上った平らな場所。昔、ここで念仏をしたり、舞を奉納したりした。</p>
<p>○むこんじょう</p>	<p>向城。寺社木林道に入り坂を上り、左の観音堂の先、空堀跡あり。集落の沢を挟んだ向かい、城跡の遺構か。</p>
<p>○なかのいり</p>	<p>中野入。赤岩神社本殿付近の北下。中野の奥の意味。岩下に湧水があり、飲み水に利用。</p>
<p>○ひがしのくぼ</p>	<p>東の窪。タカヤの尾根の赤岩側の窪。</p>
<p>○うわざわ</p>	<p>上沢。下沢上流の呼称。</p>
<p>○たかや</p>	<p>尾根が白砂川側に突き出た所。一軒家があった。秀英法印が発起開削した難所で、赤岩道路開削記念碑がある。</p>
<p>○たかやのおね</p>	<p>境の沢と東ノ窪の間にある尾根、先端は白砂川に落ちる。高い崖(ヤ)の地形に因む地名だろう。</p>

<p>小字／いでたつ (出立)</p>	<p>出立大橋東一帯。町道赤岩日影線が走り、秀英法印開削のタカヤ尾根付近まで。東北は岩ノ上、東は至球、東南は矢ノ下、西南は白砂川、西北は中野に接する。</p>
<p>○さかいのさわ</p>	<p>境(堺)の沢。サカヤの沢と転訛。出立と広池境を流れる。町道と林道至球線の分岐点付近、南が出立になる。</p>
<p>○うばいわ</p>	<p>姥岩。矢ノ下沢と国道交差付近から見える岩山。</p>
<p>○ひたぐさか</p>	<p>出立入口から赤岩に向かう坂？</p>
<p>○さか</p>	<p>坂。清水屋商店付近から赤岩への旧道は、国道上に通じた坂だが車道建設時の開削で消える。上に旧道跡が残る。</p>
<p>○かぶといし</p>	<p>兜石。三階家上道脇にある。兜に似た石で、他から運ぶ。</p>
<p>○にしざわ</p>	<p>西沢。発音ニシザ。兜石上方を流れる。橋山の西隣り。</p>
<p>○うえのはし</p>	<p>上ノ橋。古い出立橋跡地。対岸が狭い所で、明治十年の村誌に、「板橋長サ九間三尺、中九尺、水深キ事丈七尺、橋ノ高サ水面ヨリ二丈九尺」とあり刎橋だった。</p>
<p>○わぐ</p>	<p>出立橋下流側の白砂川沿い小平な所、桑畑もあった。下流は水浴び場。ワグは川流が屈曲する所の地名。</p>
<p>○はしやま</p>	<p>橋山。旧出立橋跡左岸上方に続く山。歴史的地名。狭い岩場に架けた出立橋(刎橋構造)架橋や修復時に使用する材木はこの山の木を利用した。橋の架橋等に必要が無い期間は、集落で肥料用の刈敷を採る共同の山だった。</p>
<p>○ほそくぼ</p>	<p>細窪。赤岩バス停、清水付近上方にある窪。</p>
<p>小字／やのした (矢ノ下)</p>	<p>矢ノ下沢と至球沢の合流、白砂川合流までの兩岸一帯。北端は至球、東北は大平、東南は前坂分岐付近で広池、南は白砂川、西く北は出立に接する。ヤは地形用語の谷崖で、ヤは六合地区に多くある地名。</p>
<p>○うしがふち</p>	<p>牛ヶ淵。矢ノ下沢が白砂川に合流する付近。伝説では広池の縁を牛が踏み抜き池が消滅し、その牛が落ちた淵。</p>
<p>○しみず</p>	<p>清水。赤岩バス停付近、細窪の下方。</p>
<p>○おちい</p>	<p>落合。矢ノ下沢に至球沢が合流する付近。</p>

<p>○あぶらいし ○だるまいし ○したのかわら ○やのしたてーら ○ふじがしら ○こんびらあと ○ばくちあな ○くらぶ ○ひがし ○おとぼう</p>	<p>油石。清水屋裏、白砂川左岸寄り。水浴びの飛び台に使用した石。名称は表面がツルツルと滑らかな石に由来。達磨石。油石のやや下、河床にある丸い石。水浴び場。下の川原。矢ノ下集落前方の白砂川一帯。矢ノ下平。国道下、白砂川沿いの三軒家付近の小平地形。藤頭。白砂川と矢ノ下沢合流付近。矢ノ下沢左岸で大藤があつた。カシラは先端か。金比羅跡。前坂の対岸、洞窟内に湧水。通称博打穴で寺銭も落ちていた。当社の石燈籠は赤岩神社石段脇に移る。博打穴。金比羅様の洞窟。博打を行った所と伝わる。倶楽部。前坂を下った国道脇。以前、公民館が置かれた。東。倶楽部（公民館）跡の奥。小平な所で、以前は畑や製材所があつた。今は竹林、杉林になつた。矢ノ下左岸沿いの道、発電所取水堰手前、カーブの間付近、以前は沢から滝の首が聞こえた。</p>
<p>小字／ひろいけ (広池)</p>	<p>発電所、国道、広池集落南側。釜抜け沢が大平との境。東、南は長野原町境、西南、西は白砂川で吹久保、下沢、西北は矢ノ下、北は大平に接する。地名は当地にあつたという広池に因む伝説が由来か。</p>
<p>○たなはた ○うつくしでーら ○なしつくぼ ○いけのもと ○げたや ○むろぐら ○まるや ○まるやとうげ</p>	<p>棚畑。広池発電所の上方、国道付近。棚状地形の畑。美し平。広池発電所鉄管の始まる付近、国道上。浅間山など周囲の展望が優れる場所。梨窪。美し平を過ぎて下り終えた最初の窪。植物の梨か。池の元。広池伝説の池は牛が縁を踏み抜いて水がなくなり消えた。山本今朝信宅付近。地滑りが伝説の背景か。下駄屋。国道から集落に向かい上り上げた付近。山本昭二宅西側斜面。広池伝説の池の水源、今も水が湧く。町境の丸谷峠東側の窪地。ムロは穴、クラは岩の意味？丸谷。前の国道の峠付近、西側にあつた小高い山。丸谷峠。国道の町境付近。最近、国道改修で地形は一変。</p>
<p>○ひらのまのさか ○じゅうにのもり ○しんどう ○こいがせ ○つつみ ○はば ○まえさか ○うまみち (うままわり) ○よこて ○にごや ○にたたき ○おちい</p>	<p>広池の上り口の坂で、左の二軒目の家付近。ヒラは斜面。十二ノ森。篠原貞子東上付近。以前、十二山神を祭祀。新道。今の国道。広池と矢ノ下付近。昭和初期に開削。広池発電所付近。渡渉地点の浅瀬の意味か。水浴び場。広池バス停付近の小名。広池入口付近から崖沿いを通り前坂へ向かう旧道跡。ハバは傾斜地の上方、端沿いをさす地形用語。前坂。広池集落と矢ノ下間の旧道の坂。新道開削前の本通り。旧道は坂を下ると、矢ノ下の川沿いを通つた。馬道。前坂分岐の右が緩やかな迂回道で、馬が往来した道。左は距離の短い急な徒道。道標にはむま道と表現。横手。広池から矢ノ下沢に下つた所、山腹を通る道。荷小屋。前坂分岐、道上に炭等を保管した小屋があつた。山本由三郎宅裏下方。矢ノ下沢に支流が合流する付近。沢と道に挟まれた間、ニタノ湿地状の場所である。落合。矢ノ下沢と至球沢の合流付近。</p>
<p>小字／おおだいら (大平)</p>	<p>釜抜け沢右岸、広池集落北側、町道広池暮坂線と林道至球線分岐付近まで。東は尾根で長野原町境、南は広池、西は矢ノ下、北は至球、白張に接する。</p>
<p>○ひろいけいせき ○だいにちどう ○おてんとうきん ○みずのくぼ ○うえのはら ○うえのはらの じゅうにさま</p>	<p>広池遺跡。町指定、縄文中期の円形住居跡。標高七〇〇メートルの南面傾斜地にある。大日堂。本尊の石造物は男根状の棒か。堂内には文政三年の子安地藏や鉄砲の腕前を競つた鉄砲額もある。御天道さん。篠原庵宅東、旧道沿いに祭祀。彼岸中日の天道念仏に由来か。文久四年の石の大日如来像を祭祀。水の窪。釜抜け沢上流、坂を上り終えた付近。上ノ原。釜抜け沢と水ノ窪の上方。上ノ原の十二さん。三角点付近に、今は二代目の樅の木があり、無銘の石祠を祭祀する。</p>

○あかにた	赤仁田。上ノ原十二さんの北側斜面。アカは壁土か粘土、ニタは山間の湿地、猪が体に泥を塗りつける湿地の意味。
○ずみのくぼ	赤仁田の斜面下の窪。下方は成仏沢。ズミはバラ科落葉樹、葉の先端はギザギザ、赤い実がなるコリンゴか。
○じゃあな	蛇穴。上ノ原の南斜面、町境付近。昔、広池の壁土は当地から取って来て使った。ジャは蛇抜け等の地滑り地形。釜抜。篠原巖宅の東側を流れる沢。尾根が囲む釜状の地形。ヌケは地滑りで、地滑りで抜けた所か。
○かまぬけ	水の窪北側、尾根を越えた窪地。篠原巖宅入口付近から入った所の涸れ沢。成仏はこの北側にある。
○まんどこ	横手。マンドコの窪の西側。広池と暮坂線沿い。マンドコの北方を流れる沢。地名の由来不詳。
○よこて	至球沢沿いの山地一帯。北東は大塚、東は中室、南は矢ノ下沢で大平、矢ノ下、西南は出立、西は岩ノ上、北は深山口、潜石に接する。南を林道至球線が走る。字名の至球の意味は不詳。
○しとこ	高平。林道至球線に入り、道上に岩場付近のヒラ(斜面)。細窪。高平下方の窪。西沢の東隣で、沢の水源地。
小字／しぎゅう(至球)	金毘羅尾根。以前、金毘羅社を祭祀した。細窪と大窪の間に位置する尾根。
○たかひら	大窪。窪一帯は杉林である。金毘羅尾根の東続き。
○ほそくぼ	長窪。広池側から林道至球線に入り、炭窯上側の呼称。
○こんびらおね	寺山。炭窯手前、カーブ道下の呼称。寺に縁の山林か。
○おおくぼ	至球沢左岸東に続く八四〇メートル余り、山頂がなだらかな山植物の花よりも、地形の先端 ^{ツノ} 鼻に縁の地名か。
○ながつくぼ	至球沢にある滝。センは滝の意味。
○てらやま	潜の下。センの滝の下一帯。
○はなみね	潜の上。センの滝の上一帯。
○せんたき	沼田。至球沢のセンの滝の上流。菅が生える湿地。
○せんのした	梨の木。沼田の上方。ヤマナシの木に因む地名か。
○せんのうえ	
○ぬまた	
○なしのき	

○ひなたつぎか	日向坂。センの滝と成仏の間、南向きの日向斜面の坂。
○みようがくぼ	茗荷窪。日向坂を上り上げた所。成仏橋右岸袂三〇メートル程を、北へ入った所。茗荷が多く採れた場所か。
○はなつくぼ	鼻窪。茗荷窪上方の窪。花が咲いている窪。ハナは突き出た先端の意味も。至球沢寄りに茗荷窪が、東の尾根を越えた側には粟種窪、荒圃がある。
○どじょうくぼ	泥鱈窪。付近で矢ノ下沢が終わる。上流側が成仏。
○いしづか	石塚。天理教育成キャンプ場付近の小地名。
○いっぼんまつ	一本松。大谷地の下方。目印的な存在の松。
○おおやち	大谷地。地名は大きな低湿地状の所の意味か。
小字／みやまぐち(深山口)	林道寺社木線の一本木付近で旧鍛冶屋敷道に入った道沿い山地、他に水梨東方に飛び地がある。鍛冶屋敷道の道標「沢渡道」付近も深山口。主要部は東は潜石、東南は至球、南は岩ノ上、西は生須境、北は鍛冶屋敷に接する。
○いっぼんぎ(いっぼぎ)	一本木。ツツジ沢經由旧道跡と寺社木林道が交差する付近。林道の西上に、十二山神の石祠を祭る。
○かやば	萱場。一本木の先、旧道上の山頂付近。
○ほどくぼ	上がり上げく一本木の中程、道の右下の窪。ホドはホド芋で、薯蕷は食料。山中に多い地名。ホド ^ノ 窪の意味。
○やきば	焼き場。流行病の死者を焼いた窪。林道から入った山中。
○はんのき	榛の木。御亦の鍛冶屋敷寄り。榛の木が生えた所か。
○おまた	御亦。至球沢上流部、鍛冶屋敷寄りの水源付近。キャンプ場跡上方に位置、至球沢が支流カゲノ沢を分岐する。
○どぼし	土橋。沢に架けた簡単な土橋か、左右が落ち橋状通路の道か不詳。中之条町大塚の小名土橋 ^{つちばし} は後者の好例。
小字／かじやしき(鍛冶屋敷)	赤岩本村からの旧道と林道吾嬬山線交差付近。以前は赤岩の採草地。東は天狗平、南は大塚、潜石、深山口、西は大字生須境、北は入山境に接する。林道線沿いに暮坂陶芸研修センターや耕地がある。

○かやかりば	萱刈り場。小林宅付近く天狗山一帯。赤岩の屋根葺き用の萱刈場。約一〇町歩あった。
○さいそうち	採草地。赤岩の家畜飼料用の草場、約六〇町歩あった。芸術区く中室一帯。各家々が知る持ち分は決まっていた。萱刈場の一軒家（小林宅）付近。意味不詳。
○でーけえ	大栗。小林宅く芸術村の中間付近。栗の大き木に因む。
○おおくり	荻ノ平。暮坂芸術区の広池寄りの平、吾孀山林道が通る。植物の荻が多く生える平か。
○おぎのたいら	四人沢。山論で入山との境に確定。鍛冶屋敷手前の沢。治郎右衛門谷戸。開拓者名に因むか。ヤトは低湿地。
○よつたりさわ	東端は高間開拓、西南端は林道至球線と町道分岐。集落は林道吾孀山線沿い中室、高間開拓地。東北は一ツ深山、東は高間、南は矢ノ下沢沿いで五輪平、白張、西は至球、大塚、北は天狗平に接する。中室集落は中世の頃、中室千軒と呼ばれ賑わったと伝わる。
○かしわきづか	柏木塚。柏木某の墓があつた所という伝承に因む。以前、倉林昭三郎氏宅があつた所。
○びしゃもんぎ	毘沙門木。中室の北側の端。毘沙門堂に因むか。
○あわたねつくぼ	粟種窪。天明の大飢饉の際、中室で粟種が収穫出来た唯一の場所という。歴史的な地名。
○あれつぼ	荒圃。粟種窪下方に位置、地力が低い畑。
○かのきひら	桑木平。成仏川右岸、日向側の斜面。
○やくしどう	薬師堂。薬師堂があつた所。川中新道跡が付近を通る。葎が沢。粟種窪の東の沢。葎が沢沿いに多くある所。
○よしがさわ	笹平。桑木平の尾根を登った平らな場所。
○ささいいら	待場。成仏沢分岐で、道を左に行った直ぐ先。入山と広池の方が薬師堂の祭典等で待ち合わせをした所という。
○まつば	弁天池。中室への旧道沿い、沢を渡る手前左側。石積の小池があり、池の中に石祠と首が欠けた弁天像を祭祀。二つの沢が合流する所に、一石に複数の童子墓がある。
○べんてんいけ	

○じゅうにさん	十二さん。弁天池の南、道上に祭祀。平板な石があつた。
○はちまん	八幡。弁天池北側の斜面に、昔は八幡様を祭祀。以前、正月には注連縄を供えに行つた。神社跡は小平な所。
○がまがさわ	蝦蟇ヶ沢。弁天池入口先の大カーブの沢。蝦蟇が生息。
○よしがやち	葎ヶ谷地。葎ヶ沢の水源付近の谷地。
○かげのさわ	中室北方の沢。
○おてんぐざん	お天狗さん。中室の篠原正一宅裏の尾根に祭祀。暮坂の天狗様を勧請した。近くの山から現在地に移した。
○てんぐだいら	天狗平。中室集落裏山、お天狗さん付近の尾根。
○まむしつびら	蝮平。落葉松窪の北、笹の南斜面。蝮が多く生息。この東北が小字一つ深山方向である。
○からまつくぼ	落葉松窪。寺屋敷北裏の窪。北に蝮平がある。
○てらやしき	寺屋敷。弁天沢の上流、龍沢寺の前身があつた場所と伝わる。高間上水道水源上方である。
○やしきのさわ	屋敷の沢。開拓農家の飲み水を小水道で取る沢。龍沢寺の前身寺屋敷の屋敷に由来し、その付近を流れる沢の意。
小字／ごりんだいら (五輪平)	長野原町の火打花から来る道を上り終えた付近の山地。東は水梨、南は長野原町境の尾根、西は白張、北は中室に接する。火打花く高間越えの道筋は、戦国の戦略道路とされる。地名は地内にあつた五輪塔が由来。
○ごりんとう	五輪塔。長野原町の火打花から仏坂を上り尾根で六合側に入る。その旧道脇の五輪塔が、小字名の由来になった。付近は中世の戦略の道で、高間越えの岩櫃城攻めで利用。
小字／みずなし (水梨)	高間山の西に続く一帯。東は深山口、南は長野原町境、西は五輪平、北は高間に接する。長野原町の入会があり、王城山東山腹を通り林に通じる道もあつた。
○みずなしさわ	水梨沢。高間開拓の南を流れる沢で、水が少ない。
○みずなしのじゅう にさん	水梨の十二さん。高間山山頂から北側に下つた鞍部、東吾妻町側の杉岩側の通じる菅林署道沿いに石祠がある。

<p>小字／たかま (高間)</p>	<p>高間山周辺一帯の山地。北↘東は東吾妻町境、南は深山口、水梨、西は中室、一つ深山に接する。『加沢記』に、真田軍が岩櫃城攻めの際に高間を越える記述がある。戦後高間開拓の入植で開かれたが、今は離農で戸数も減少。</p>
<p>○まりしてん (まりしそんてん)</p>	<p>摩利支天。高間山中腹に祭祀、今は参道も消えたが、戦時には武運長久祈願で賑わった。宝暦十二年の石祠あり。</p>
<p>○ほんざわ</p>	<p>本沢。摩利支天付近から流れる沢で、下流は矢ノ下沢。</p>
<p>○あらぎ</p>	<p>荒木。高間山付近の尾根を、アラキの尾根とも呼ぶ。林道からの登山道沿いか。「地名用語」を見ると、アラキは新しく開墾された所の意味もある。</p>
<p>○あなぐら</p>	<p>穴倉。ゴウロの尾根から下った窪。腐れつ窪の南尾根を越えた所に始まる沢。アナは洞穴で、クラは岩で、岩場に洞穴がある所か。窪を南に登れば水梨地内に続く。</p>
<p>○どうあと</p>	<p>堂跡。以前、お堂跡は今平だが、シャクド詣りの石があった。道中には開拓の方の地藏堂もある。</p>
<p>○じぞうそん</p>	<p>地藏尊。堂跡北側小尾根に祭祀。留場氏が開拓地の心の拠り所として笠地藏を寄進し祀る。今は離農し三軒になったが、五月一日には集まる。幟や造花で飾った。</p>
<p>○とちのき</p>	<p>栃の木。地藏尊付近の北側斜面。付近に栃の木があった。</p>
<p>○とちのきざわ</p>	<p>栃の木沢。屋敷の沢と無名の沢が合流した、栃の木付近での沢の名前。</p>
<p>○どうりつばら</p>	<p>堂裏原。高間開拓地周辺、平で開拓され耕地。</p>
<p>○くされつくぼ</p>	<p>開拓耕地の東にある窪。痩せ地の意か。今は落葉松林。</p>
<p>○よへーあれつぼ</p>	<p>与平荒圃。留場宅裏側。堂裏原の西隣。開拓者名+地力が低い所。そのため荒れた圃場になった。</p>
<p>○わくみず</p>	<p>湧く水。屋敷の沢源流付近に湧く清水。高間集落と一つ深山の中間付近の沢筋になる。</p>
<p>高間開拓(堂裏原)の北奥に続く山地。東は高間、南↘西は中室、北は天狗平に接する。</p>	

<p>○ひとつみやま</p>	<p>一つ深山。開拓地の東北に見える標高一、一八〇メートル程の山。高間山続でなく、独立峯に見える。付近の小字になる。</p>
<p>○りゆうがくら (きつといわ)</p>	<p>龍ヶ倉。高間開拓北東に位置。鞍に似た姿の岩で、岩に小石が粒状に付いた感じの岩。日影にある龍沢寺のリユウはこの一字を入れたと古老が語る。キット岩と同じか。</p>
<p>○ごうろ</p>	<p>クサレツ窪の東側の尾根。尾根には大石が多くある。大石がゴロゴロする所の典型的な擬態語例。</p>
<p>小字／てんぐだいら (天狗平)</p>	<p>暮坂芸術区東奥山中。東は東吾妻町境、南は一つ深山、南↘西は中室、西は大塚、西北は鍛冶屋敷、北は入山境に接する。芸術区に隣接、旧道脇の石祠(天狗)は以前、天狗山で祭祀した。</p>
<p>○てんぐやま</p>	<p>天狗山。赤岩の萱刈り場に続く一、三〇〇メートル余の山。昔、山頂付近に天狗の石祠があったが、今は麓に祭祀する。</p>
<p>小字／おおつか (大塚)</p>	<p>地内を走る林道吾嬭山線周辺の山地。東↘南は中室、西↘南は至球、西は潜石、北は鍛冶屋敷、天狗平に接する。</p>
<p>○がっこうりん</p>	<p>学校林。粟種窪の北、窪に沿い中室↘大谷地への旧道が走る。大谷地手前、窪の北側沿いのヒラが学校林だった。</p>
<p>○かげのさわ</p>	<p>蔭の沢。大谷地上流の支流。開墾跡付近から東北へ分流。昔、沢にはイワナがいて、魚釣りに来たと古老が語る。</p>
<p>○さきのくぼ</p>	<p>笹ノ窪。蔭ノ沢源流の北、尾根を越え、右に続く尾根下。</p>
<p>小字／くぐりいし (潜石)</p>	<p>東は大塚、南は至球、西は深山口、北は鍛冶屋敷に接する山地。地内に深山口が島状にある。</p>
<p>○くぐりいし</p>	<p>潜り石。小字名に因む石。中室と生須を結ぶ旧道が、至球沢を大谷地で渡河する対岸(右岸)の尾根にある。尾根にある石の右下を旧道が走り、深山口に通じた。石は高さ二メートル程、長さ五メートル程で、石が組み合い下を潜れる。</p>

<p>小字／しらはり (白張)</p> <p>○じょうぶつざわ ○じょうぶつ</p>	<p>林道至球線と町道分岐の東奥、成仏沢沿い一帯になる。東は五輪平、南は長野原町境尾根、西は大平、北は中室に接する山地。</p> <p>成仏沢。上ノ原十二様の北方、矢ノ下沢上流部。高間方面へ通じる深い沢になる。</p> <p>成仏。矢ノ下沢と支流成仏沢分岐付近が成仏、意味不詳。</p>
<p>大字／日影</p> <p>○小地名 ○小地名</p> <p>小字／ふくぼ (吹窪)</p> <p>○ふくぼさか ○みずのひら ○みずのもと ○だいじんぐう ○さかいずいどう ○きりごめ ○ところくぼ？ ○たぬぎやら ○みねのはたけ ○うっこし</p>	<p>備考</p> <p>日影の南端、長野原町に接し、当地經由の道があった。地内を林道下沢線が通る。東は白砂川右岸、南々西は長野原町境、北は下沢に接する。風の強い窪か、露が生える窪か不詳。</p> <p>吹窪坂。下沢から山中に入り、吹窪へ行く旧道の坂。</p> <p>水野平。集落南西の山際に湧水地があり、その付近のヒラ(斜面)の呼称か。山本ヨシ宅南の畑一帯。</p> <p>水の源。山本ヨシ宅西南の林内、以前は池があった。付近には馬頭観音像等がある。</p> <p>大神宮。集落、車道東側。伊勢神宮を勧請した。</p> <p>境隧道。長野原町境の旧太子線跡、隧道付近。</p> <p>新道下、川側斜面の呼称。</p> <p>野老窪。ヤマイモ科の野老が生える窪の意味か。</p> <p>林道の町境付近。右へ入る掘り割り状の旧道付近。</p> <p>峰の畑。町境付近の畑の呼称。</p> <p>打越。廃棄物処分施設脇を下った付近。太子線跡の隧道出口付近が下方。対岸は貝瀬。尾根を越す場所の意味か。</p>

<p>小字／しもさわ (下沢)</p> <p>○うるしざわ ○あたご ○あみだどう ○さわりり ○しんどう ○みなみてーら ○したつてーら</p>	<p>出立大橋右岸袂の南方、町道日影下沢線が下沢集落際を走る。付近東は白砂川右岸、南は吹窪、西々北は尾根で長野原町、北は中沢に接する。</p> <p>漆沢。今の下沢。年配の方は漆沢と呼ぶ。</p> <p>愛宕。下沢集落山腹斜面の社。京都にある火伏せの神。阿弥陀堂。下沢左岸の車道下にある。石造物が多い。</p> <p>沢入。下沢の奥、当地の飲料水に利用。</p> <p>新道。下沢々吹久保間の車道。山中を通る道は旧道の名。</p> <p>南平。集落の長野原町寄りの耕地一帯の呼称。</p> <p>下平。集落の東、白砂川寄りの一段低い段丘面の平地。</p>
<p>小字／なかさわ (中沢)</p> <p>○こうじいり ○かみのはし ○ひろやさか ○どうみょう ○むこうばたけ ○めえやま ○どうしんぱたけ ○べんてんさん ○なかいかわら ○したかわら ○ばんばでら ○てらやしき</p>	<p>主に集落は国道沿いにあり、中沢林道沿線も含む一帯。東は白砂川、南は下沢、西は尾根で長野原町境、北西は一本木、北は平沢に接する。</p> <p>出立大橋袂、下沢と中沢境付近。昔は小さな丘だった。コウジは小道の意味か、不詳。</p> <p>上の橋。大橋上方の車道の橋。橋下の川の呼称になる。</p> <p>昔の出立橋右岸から堂名に通じる坂。淵の上方を通る。堂名。出立橋右岸袂、下沢分岐付近一帯。由来は不詳。</p> <p>向こう畑。国道上の耕地。</p> <p>前山。向こう畑の奥にある山。</p> <p>道心畑。白砂川縁のハバ地形の畑。下川原の沢の対岸。</p> <p>弁天様。道心畑から川原に下り、長さ七メートル、高さ八メートル程の大石。梯子上の石に鳥居、弁天の無銘石祠二基。水浴び場。</p> <p>前記、弁天岩付近の川原の呼称。上流はタカヤの崖の下。</p> <p>下川原。弁天様付近の上の段、昔は水田があった。</p> <p>馬場平。寺屋敷に隣接する平らな所。昔、学校があった。</p> <p>寺屋敷。中沢林道入口の右、土手上の平地、今は屋内ゲートボール場。龍沢寺が一時置かれたことに因む地名。</p>

<p>○ちよつきら ○とのぼたけ ○たのもと ○かりまた ○ろくどうのつじ</p>	<p>林道に入り、最初に左に旧道分岐付近の対岸、急な山。六道の辻への旧道脇窪地の畑跡。トノは棚の転訛か？中沢林道、水道施設先で旧道を右に入る。この窪の沢には水が湧き、昔は水田もあった。六道の辻への旧道と、中沢林道が交差するカーブ付近。六道の辻。中沢林道、田ノ元入口先の大カーブの窪を左に入り、町境の尾根で六本の道が交差する下沢か。</p>
<p>小字／ひらさわ (平沢) ○うつの ○あたござわ ○あたごさん ○かつばら ○えどくぼ ○まぶね ○どうそじん ○なかのたな ○がんざわ ○かりまた ○ばんばたいら ○ごんげん</p>	<p>集落付近では、北は旧中ノ瀬通り、南は愛宕隧道が境。白砂川、南は中沢、西は一本木、北は田端に接する。平沢入口付近の国道西の山中、以前は畑。山間に多い地名で、人里から離れた盆地状の平らな場所に因む。愛宕沢。平沢集落入口手前、国道を横断する沢。沢沿いの山頂に火伏せの神、愛宕の石祠を祭祀が地名の由来。愛宕様。愛宕沢手前、国道上山頂に愛宕の石祠がある。桑原。大きな地蔵の北、耕地。引き墓(詣り墓)の東。井戸窪。田端の沢の奥、水源の窪か。馬舟。国道から旧道が湯久保、長野原方面へ向かうが、国道入口から双体道祖神付近一帯の小名。道祖神。旧道左、双体道祖神は耳だれの神でもあった。中の棚。旧二軒屋道、馬頭観音上、湯久保道分岐の平地。蟹沢。中の棚の東の窪。簡易水道の取水場所である。蟹沢の西(上方)山地、その上は一本木になる。馬場平。田の元の上、権現。中沢林道、田ノ元上、中沢林道脇の埋立地付近。付近に権現堂があったのか。中沢に所属か。</p>
<p>小字／たばた(田端)</p>	<p>中組公民館の北周辺。集落付近は北が田端沢、南が旧中ノ瀬通りが境。東が八升蒔、白砂川、南が平沢、西は一本木、北は岩景山、壱貫地に接する。</p>

<p>○しもつかわら ○おおみどう ○みなみでーら ○いどくぼ ○いどで ○いでいり ○なかのたな ○やすみいし</p>	<p>下川原。旧中ノ瀬橋へ向かう旧道付近の斜面、川沿い。大御堂。中組公民館の東、耕地内に三原観音札所跡。南平。田端集落の南側一帯。井戸窪。田端沢の西奥、沢の水源付近。井戸出。平沢集落南端、井戸のある場所。平沢か。井戸入。田端バス停西奥の窪地、堰堤付近。中ノ棚。田端から湯久保へ行く旧道を上り上げた付近。休石。湯久保道の曲折した岩場付近、一休みをした石。</p>
<p>小字／はつしようまき (八升蒔) ○さんげー ○てんじんさん ○ひなたみち</p>	<p>南大橋右岸袂付近の白砂川沿いの小名。地名は河岸段丘上の地形が三段(三階)か、懺悔の転訛か不詳。天神様。国道上の日向道沿いに祭る天神社。日向道。田端沢の北側、天神様の前を通り湯久保に向かう道。日向側斜面を通る道。</p>
<p>小字／よしはた (葎畑) ○なかしば ○さけーえのくぼ</p>	<p>町道太子湯久保線を上り、太子の湯窪を過ぎた畑地一帯。東は大字太子、南は岩景山、西は長井、西北は北は湯久保に接する。植物の葎に因む地名。中芝。湯久保の共同墓地付近。死ぬと中芝へ行くと語る。境ノ窪。中芝の北側、尾根より裏の畑一帯。</p>
<p>小字／ながい(長井) ○やなぎくぼ ○しもやけ</p>	<p>町道太子湯久保線の終点付近。道が長井沢を越えると長野原町になる。東は葎畑、東南は岩景山、南は一本木、西は長野原町境、北はウルエノ、北東は湯久保に接する。草津街道が地内を通った。柳久保。八幡へ通じる旧道筋。秋葉山分岐を少し過ぎた付近の窪。八幡坂を上り上げて平らになった所である。霜焼。柳久保付近を右に入った窪。霜が強い場所。</p>

<p>小字／いつかんじ (壹貫地)</p>	<p>中沢林道が上り終わった町境付近の山林。東は田端、平沢、南は中沢、西は長野原町境、北は長井に接する。 赤羽根坂。中沢林道を横断し二軒屋へ向かう旧道の坂。赤羽根は関東に特有の赤土を意味。赤羽根へ続く坂。 湯久保農免道路が草津町に入る手前付近。東は長原、湯坂、湯久保に、西南は長井に、西は北は長野原町や草津町境に接する。西続きの草津側に、開拓地ウルイノがある。地名はウルイの生える野で、植物名に因む。ギボシの異名が山菜のウルイやウリツバ。</p>
<p>○あかばねざか？</p>	<p>湯免の湯久保道がウルイノに入る手前付近。水が湧く所で、原野を開発した所か。ホツ開発、パは接尾語か。</p>
<p>○ほっぱ</p>	<p>湯坂道を上り上げ、草軽電車軌道跡近く、町境付近。以前は萱場、今は山林。東は湯坂、南はウルイノ、西は北は草津町境に接する。</p>
<p>○かやば</p>	<p>萱場。屋根葺き用に使う萱を刈る場所。</p>
<p>小字／ながつばら (長原)</p>	<p>堀口と榎木間、草津への旧湯坂道沿いの尾根一帯。草津街道のメイン道路。東は草津町境、東南は大字太子、湯久保、西南はウルイノ、西は北は長原に接する。</p>
<p>○どうろくじん</p>	<p>道禄神。旧湯坂道の上り口付近。旧湯坂、堀口、榎木の三本辻。以前、樅の太木があり雨宿りをした所。</p>
<p>○ほりぐち</p>	<p>堀口。湯坂道左下の窪、耕地が多い。昭和十五年頃開拓。</p>
<p>○ぶなぎ</p>	<p>榎木。湯坂道右下側の耕地一帯。榎が茂った所。</p>
<p>○やち</p>	<p>谷地。榎木の奥。明治末頃、栃木県に加藤氏が開拓。</p>

<p>○いつかんじとうげ</p>	<p>壹貫地峠。神社前、国道の橋付近の所。</p>
<p>○はちまんざわ</p>	<p>八幡沢。八幡神社付近を流れ、小字の境である。</p>
<p>○だいいんまえ</p>	<p>大神前。八幡神社の前。</p>
<p>○おうきいり</p>	<p>大木入。八幡沢沿い墓地の対岸(右岸)付近。</p>
<p>○あんば</p>	<p>案場。湯久保への旧道が、堰堤脇に八幡坂付近の右、墓地付近。この先の尾根で日向道と合流。暗か、庵か不詳。</p>
<p>○はちまんざか</p>	<p>八幡坂。湯久保へ向かう坂の名。入口の八幡神社に由来。</p>
<p>○はんねいし</p>	<p>八幡坂道のガードレール設置付近。岩が多い難所。岩が刎ね出た所の意味か。岩下に馬頭観音数基祭祀。</p>
<p>○やしやーらく</p>	<p>八幡坂を下る道沿い、柳窪と刎石の間の小平な所。</p>
<p>小字／あいののはた (合ノ畑)</p>	<p>龍沢寺付近一帯、東は白砂川、南は壹貫地、西は岩景山、北は大字太子境に接する。</p>
<p>○おおすぎ</p>	<p>大杉。妙全杉下の国道のバス停の名前が地名化。</p>
<p>○みょうぜんすぎ</p>	<p>妙全杉。町天然記念物の巨木。寺の開闢妙全比丘尼に縁。</p>
<p>○かわぼた</p>	<p>川端。白砂川沿いの呼称。</p>
<p>○なしのきでーら</p>	<p>梨ノ木平。龍沢寺と白砂川の間の平らな所。</p>
<p>○うえのやしき</p>	<p>上ノ屋敷。龍沢寺北裏、高い所の平地、耕地で利用。</p>
<p>小字／がんけいざん (岩景山)</p>	<p>龍沢寺の裏山一帯。東は合ノ畑、壹貫地、南は田端、西は長井、北は葭畑、北東は大字太子に接する。寺の山号。</p>
<p>○どろのきくぼ</p>	<p>泥の木窪。岩景山の上方、秋葉神社東裏の窪。</p>
<p>小字／ゆくぼ (湯久保)</p>	<p>湯久保公民館付近一帯。東は葭畑、南は長井、西はウルイノ、北は湯坂、大字太子境に接する。東に隣接の大字太子では湯窪の表記。</p>
<p>○じょうせんづか</p>	<p>ジウセンヅカとも発音。公民館裏西側、田所宅付近の畑。</p>
<p>○かしわぎづか</p>	<p>以前、付近から五輪塔が出た。行者に關係する塚か。</p>
<p>○こいでむこう</p>	<p>柏木塚。カシヤギヅカとも発音。農業用水取水口の左、山中へ数十メートル程入った、一ヘクタール程の広さの平な所。堀口の窪を通る湯久保農道を越え、その奥へ入った所。昔は萱刈り場だった。</p>

○ながい(なげー)	長井。町道太子湯久保線が長井沢渡る付近、長野原町にかかると。安カ川宅付近、長井沢付近。
○おおくぼ	大窪。田所宅脇から長井沢川沿いの道に入り、右岸に渡り上り上げた所。長野原町境付近。以前、畑だった。湯久保公民館西側、長井沢川左岸に至る峰。転訛してトリゴネとも呼ばれる。
○つちはし	土橋。以前、安カ川宅前の小沢にあった土橋に由来。
○たけのくぼ	竹の窪。公民館裏水路の東、ジョウセンヅカの向かい側。
○がんけいさん	岩景山。絶壁上の山林で、昔は畑もあった。
○あぎばおね	秋葉尾根。集落東、秋葉山を祭る尾根。採草地だった。
○あぎばさん	秋葉山。集落の東、標高九四六の山頂に祭祀。石祠は安永十(一七八二)年に麓の田端、八幡、榆木で建てた。

大字／太子

○小字名	備考
○小地名	
小字／しもおとし(下太子)	町道太子湯久保線が国道に合流付近、太子公民館がある。東は白砂川、南は水戸沢で花園に、西は太子、北は大字小雨に接する。
○うんどうば	運動場。以前、小雨の小学校は庭が狭かった。運動会等は平らな土地がある当地に移動し行った。国道東の下太子最後の民家裏。富沢和彦宅所有地。
○みしまじんじや	三嶋神社。静岡県三島市、東海道筋の三嶋大社を当地に勧請した。集落の西、沢沿いに祠がある。
○みしまぎわ	三嶋沢。三嶋神社付近を東に流れる。寛文三年の検地帳に三嶋沢がある。
○みやのまえ	三島神社前方の土地。寛文三年の検地帳に宮わきの地名。

○はなわさか	鼻和坂。花園橋から太子へ上る旧道の坂。ハナは先端が突き出て、輪状の地形がハナワ。馬頭観音付近。
○よこみち	横道。鋼管鋳業用地付近で、土地造成で今は消える。
○おち	落ち。白砂川沿いの太子共同の土地付近。白砂川に水戸沢川が合流する落ちがオチの語源であろう。
○しばっこし	芝越。三島神社西側の墓上、太子境。尾根を越す場所か。行人塚。集落内、小雨への旧道脇を二〇〇メートル程入った所、今は民家。この地で修行し、永眠した行者の塚か。
○ぎょうにんづか	岩ノ下。三嶋神社の上方にある岩の下部。
○いわのした	水戸沢沿いで、温かな水が湧く所か。
○ぬるい	品井戸。ヌルイの温かな水を利用、品の木の皮を漬け、柔らかくし衣料で利用した井戸か。信濃のシナも品の木。凧揚げ場。携帯電話の中継塔付近。風が強い所。
○たこあげば	

小字／おとし(太子)	町道太子湯久保線が通る。俗称ジョッコシに共同墓地、町営水道配水池もある。東は下太子、南は水戸沢で花園に、西は潜下、北は尾根境で大字小雨や下太子に接する。太子発祥の地か。
○めで	前出。上太子の道下の畑。
○こうさつば	高札場。向けえ衆の上。防火水槽下手、道脇。為政者からの指伝達を伝える高札を設置した場所。
○こうさつやしき	高札屋敷。高札を掲げた所、屋敷跡。高札場と同じ。
○どう	堂。大黒天上方の洞で、お堂があった。種々の石造物がある。昔、この場所で剣道の試合を行ったという。
○うしのはなげ	牛の鼻毛。堂の東北の尾根、風化して牛の鼻輪に見える。
○うえのやま	上之山。太子集落北側の山の呼称。
○いど	井戸。昔、太子の方の共同井戸で飲料水に使用。
○くらぶ	倶楽部。太子公民館の場所。昔の呼称。
○むかいしょう	向かい衆。太子集落の東向かいの家。屋号の地名。
○はなしゅう	鼻衆。太子集落の入口(鼻)付近。屋号の地名。

<p>○せど ○ひら ○やせおね ○ふたごつばら ○といのくち ○みずみ ○あしがつくば ○じよっこし ○たけのはな ○じょうつぶれ ○しょうじば</p>	<p>背戸。民家と平の間、家の裏側で耕地。 平。上之山麓付近の斜面。集落裏の畑続き、今は山林。 瘦せ尾根。太子集落裏の狭い尾根。樗と杉の間付近。 双子平。小雨側から見える北東斜面、大石が二つある。 樋の口。旧草津道で、堂の上付近で旧道は深い凹（樋）状になる。葎ヶ窪方向へ通じる谷の入口。樋状の地形。 三角。民家と墓の間。地形か耕地の形状が由来か。 葎ヶ窪。双子平の奥、小雨境付近。 城越。旧道が墓地裏へ潜戸、不動堂側へ尾根を越す所。 竹の鼻。ジョッコシの山側、竹が生えている付近。 山の斜面で岩がゴロゴロしている所。城越とほぼ同じ所。 墓地脇の旧道を行くと、左側に岩が散乱している。 精進場。旧道の道祖神脇の旧草津道上り口付近の東下。 高札を立てた所よりも、発音では酒肉を慎み心身を清め精進潔斎の場所か。寛文三年の検地帳にある「志やうしげ」は、七筆二反一畝で、上畑が一筆ある。</p>
<p>小字／かぞの (花園) ○みずつと ○くぐりいし ○でつくりいし ○まとばのたいら ○ゆくぼさか ○うえのやま ○ひら</p>	<p>花園大橋の南側、旧国鉄太子駅跡付近一帯。東は白砂川、南は小屋根、西は阿ノ山、六郎谷、北は水戸沢で下太子、太子に接する。戦後、六合村の玄関口だった太子駅前は、鉄道の廃線で駅もなくなり寂しくなる。 水当。花園、下太子境の花園橋右岸袂付近のやや上流。旧道が水戸沢を渡る渡河地点。 潜石。花園から湯久保へ行く旧道沿い。岩の多い上り坂の難所、道脇にある潜れそうな石門状の岩が地名の由来。 湯久保へ行く旧道坂道を上り上げた送電線下付近の道脇。畑に荷を背負い往来する時に一休みした休み石。 的場ノ平。湯久保への旧道、デッキリ石手前の平らな所。 湯久保坂。湯久保へ最初の急坂で、送電線下で平になる。上ノ山。湯久保坂を上り上げた先、右上に見える山。平。上ノ山付近から潜石付近の山の斜面。</p>

<p>○ざるまき ○おやま ○すみやき ○いわした ○かぞのどう</p>	<p>ざるまき沢付近。国道脇、沢は暗渠。 御山。花園の共同墓地。 炭焼き。でつくり石付近の平らな場所の上下。 岩下。潜石の下方に見える岩場の下。 花園堂。三原三十四番観音札所。太子駅跡東の田村宅裏。</p>
<p>小字／こやね (小屋根) ○ぬるい ○しぶつた ○せどのさわ ○さわむかい</p>	<p>六合へりポート付近。東は白砂川、南は楡木、西は樽ノ久保、北は花園に接する。 温井。温水が湧き、昔はシナの木の皮を浸した場所。 渋田。南部運動場西側の麓。水質に渋味のある水を利用した水田。渋川の渋と同じ語源。今は荒地地である。 背戸の沢。木戸沢と同じ。楡木集落裏（背戸）を流れる。 沢向。背戸沢の対（右）岸、民家付近の呼称。</p>
<p>小字／にれぎ (楡木) ○かわら ○きどさわ ○びわのくぼ ○さとうじ</p>	<p>国道が通り、東は一部白砂川に、南は大字日影に、西は樽ノ久保に、北は小屋根に接する。 川原。白砂川の中程の土地（中州）だが、今は消滅。 木戸沢。集落裏を流れ別称セドノ沢。木戸は寺の門？ ビワの窪。木戸沢の奥の岩下。ビワは崖のある谷川か。 木戸沢と渋田の間。一軒家裏の平らな所で耕地。意味不詳。</p>
<p>小字／ゆくぼ (湯窪)</p>	<p>花園から旧湯久保道を進み、潜石付近から上り上げ平になった西側の窪で山地。東は小屋根、楡木に、南は大字日影、西は湯窪、北は六郎谷、阿ノ山、東北で花園に接する。タルは垂直状の地形か弛んだ所だろう。 中心は町道太子湯久保線が湯久保坂を上った集落・耕地一帯。阿ノ山の南、六郎谷の北、三七二番地が飛び地である。中心部は東が樽ノ久保、南は西は大字日影、北は六郎谷に接する。</p>

<p>○あがりあげ ○よしばたけ ○なかしば ○うつくしだら ○みずとう</p>	<p>上がりあげ。湯窪坂を上り上げて平になった所。 葭畑。湯久保坂を上り上げ、その先にある農耕地。 中芝。集落の墓地がある山。前は太子や日影の採草地。 美平。湯窪坂の上、白根山が見える小高い所で、一時開拓した。明治十四年の調査にも載る昔からの地名。 水遠。太子湯久保線道で湯久保に出た所と榎木の間の窪。トウはタワの転訛で峠状の鞍部。渋峠は池の塔だった。 北は水戸沢右岸で太子不動尊対岸。東端は湯窪、潜下で、南は湯窪、西端は六郎谷、北は水戸沢川に接する。東は花園、南は樽ノ久保、湯窪、西端は北は水戸沢川で六郎谷、山路、潜下に接する。「あの山」が地名に昇格したか。</p>
<p>○ぬるい ○ゆくぼざか</p>	<p>温井。阿ノ山の沢と水戸沢川との合流付近。潜石の対岸。温かな鉱泉が湧く場所か。 湯窪坂。二又を過ぎ水戸沢を渡り湯窪へ向かう坂。 水戸沢左岸で、太子不動や不動の滝周辺、東端を除くと大部分は山地。東は太子、南は水戸沢川で阿ノ山、西は山路、北は大字小雨境に接する。センは滝で、不動の滝下の意味。仙、潜、線、千も同じ滝の宛字。</p>
<p>○うしろくぼ ○おおしふどうそん ○ふどうのたき ○くぐど ○じんがたき ○やけんた ○おおみね</p>	<p>後久保。太子の裏山の北にある窪。ヤケンダ寄り窪。 太子不動尊。太子集落の西、木戸沢川に岩山が迫り出した狭隘部に祭祀。沢に不動の滝が、お堂は岩に懸崖造り。不動の滝。不動堂下の水戸沢川に見える滝。 潜戸。不動堂の東、二軒の家がある付近。ククド地名は河川と山地が迫り接するような狭い所。水車もあった。 潜戸の道下の水戸沢川に落ちる滝。崩落で滝は低くなる。不動堂の裏山。大峯下方で、斜面も凹もある地形。約一町歩の山腹。ヤケンが薬研状の凹地形か。 大峯。不動堂の北西山頂（標高九四〇メートル余）。当地の修験の山か、有名な奈良県の大峯を勧請したか。</p>

<p>小字／やまじ (山路)</p>	<p>水戸沢左岸、町道の二又から旧採草地や草津道に入る。潜下の草津寄りの山林。東は潜下、南東に阿ノ山、南は六郎谷、西は太子原、北は六郎谷、大字小雨に接する。一帯は山地で、以前は採草地だった。</p>
<p>○ふたまた ○どうしんぼら (どうしんぼ) ○やまじの十二さん</p>	<p>二又。湯窪への道と旧草津道の分岐する場所。 道心(原)。太子不動の先の大カーブで、右に入る道が旧草津道(笠松道)。少し入った右側、採草地で畑もあった。山路の十二さん。旧採草地内、草津への旧道を進み、平になった付近の分岐を左に進んだ道沿いにある。 中尾根。旧笠松道と水戸沢川(六郎谷沢)の間の尾根。笠松の手前、尾根下の窪の採草地。コゴミが採れる所か。</p>
<p>○なかおね ○にがごこみ 小字／ろくろうや (六郎谷)</p>	<p>水戸沢の奥。東は阿ノ山、湯窪に、南は西は大字日影、北は山路に接する。六郎は人名、轆轤？やは谷だろう。 坂下。旧太子湯久保線で、湯窪手前の水場付近。 御行平。中尾根の奥、水戸沢沿いの左岸斜面。行者が修行したヒラ(斜面)の意味か。</p>
<p>○おぎようさん ○さかした ○おぎようひら ○おぎようさん ○したあれつぼ ○なかあれつぼ</p>	<p>御行さん。御行平の岩場、左端岩下に祭祀。大日如来座像を祭祀、背に宝曆の年号がある。修行の場に相応しい。 下荒保。水戸沢川沿いに、昔の畑跡。荒地である。 中荒保。水戸沢川沿い、以前畑だった所。アラク、アラキは開墾、アレは放棄畑。開墾地か。今は荒地。 上荒保。水戸沢川沿い、一番奥の畑跡。御行平下付近。 三ノ沢。水戸沢川最上流部、沢が三筋に分流。草津境か。</p>
<p>○かみあれつぼ ○さんのさわ 小字／おおしはら (太子原)</p>	<p>山路の奥、草津町寄り。東は山路、六郎谷、南は大字日影境、西は北は草津町境の山間。以前は太子の採草地。 笠松。草津町境に近い尾根、旧道沿い。笠状の松がある。楽泉園方面が見える場所。</p>
<p>○みずおちつくぼ ○むこうつばら ○かさまつ</p>	<p>水落久保。太子採草地内の水場。水出窪ともいう。 向原。笠松の先、草津寄りの斜面。旧草津道が通った。</p>
<p>小字／かいこ (カ井コ) ○きどはら</p>	<p>東は太子原、南は大字日影、西は北は草津町境、窪が多い。地形のカイ＝崖や谷、開＝開墾。コ＝接尾語で所？草津町境に近い太子の採草地、萱刈り場だった。 木戸原。採草地で、木戸でも置かれたか。</p>

大字／小 雨

小字名 小地名	備考
小字／遠北 (とうぎた)	道の駅周辺の平地と西側山地。東は白砂川、西は沼尾、西北は足倉の山地、北は入山境に接する。
○なかきた	中北。国道沿いの平地付近。
○なかきたのしただん	中北の下端。福島宅東、白砂川へ下る中段。今は耕地跡。
○どうしんさわ	道心沢。道の駅付近。今は暗渠で、沢は見えない。
○おおみね	大峯。道の駅付近で左に入れば旧道が山腹を通っている。旧道分岐を左に入った周辺の呼称。栞景園經由草津道。
○はら	原。大峯への道筋の途中にある開墾された所。
小字／沼尾 (ぬまお)	沼尾集落付近と山地。東は遠北、南は白砂川、西は中棚、北は足倉、少し野嶽に接する。
○はなんさか	鼻坂。山田宅北、旧道の坂で、岩下の先端(鼻)付近。道は弘法岩脇に通じる。国道カーブ吹き付け付近。
○つばくらくち	燕口。弘法岩の南東、白砂川段丘上平地、屋敷跡もある。
○むえんどうさか	無縁堂坂。墓地の無縁堂に因む。発音めんどう坂。
○こうぼういわ	弘法岩。商工会脇の旧道を下った先、三本辻にある岩。
○みとうさか	弘法太子伝説に因む岩か。双体道祖神がある。
○はげやま	御堂坂。国道付近に上った坂。お堂に因む地名か。
○じょうらくえん	禿げ山。毘沙門堂左側にあつた畑。今は荒地。
○なみき	沼尾バス停、毘沙門堂の途中、中沢宅付近の畑。
○かんのんびら	並木。初代村長宅や弘法の東。白砂川寄りの耕地。
○ぬまおであと	観音平。田村宅西南五〇メートル程、沢の対岸、国道上斜面。三原三十四番観音札所二十五番沼尾寺跡一帯。
	沼尾寺跡。三原三十四番観音札所二十五番沼尾寺所在地。跡地に宝曆十一年の聖観音、文化十四年の献灯碑がある。

○なかだな	中棚。観音平西奥、影の沢右岸。昔は畑地。平らな所。
○おおさか	大坂。沼尾から草津へ通じる旧道の長い坂。
○しりさか	尻坂。沼神社の東、沢沿いに畑へ行く道の坂。距離の短い直ぐ路だが、急坂で尻をこする程だった。
(しるしきか)	
○おおさかだいら	大坂平。観音様の三〇〇メートル程先。畑は買収、今は栞景園。
○くりゆう	栗生。大坂頂上の下側にある窪、以前は畑だった。
○びしゃもんどう	集落上、旧道脇。山田姓の守護仏。芭蕉句碑もある。神社正面には「多聞天」の額がある。
○ぬまじんじや	沼神社。毘沙門堂の右脇にある。沼尾の伝説に関係か。
○じょうのいわ	沼神社東上の岩場。昔、地滑りがあつた。以前はジクジクした湿地で、この場所を利用し一時水田があつた。
○かげのさわ	影の沢。沼尾入口、共同墓地手前の沢。林内で日影の所。
小字／足倉 (あしくら)	逆三角形の形状で山地。東は遠北、南は沼尾、西は野嶽、北は草津町、北は東北は入山に接する。地名は芦十岩か。
小字／野嶽 (やたけ)	沼尾からの旧草津道南一帯で山地。北は東は足倉、東は南は中棚、西は南は上日影、西は北は草津町に接する。
小字／中棚 (なかだな)	泉宮湯川発電所付近の国道沿い一帯。東は沼尾、南は白砂川、西南は小雨川で金蔵沢、西は北は野嶽に接する。
○しょうきおち	鍾馗落ち。沼尾の影沢の南、道路沿いの岩場。
○うばのたき	祖母之滝。旧隧道(屋根道路)入口の崖から落下の滝。
○さるこうぜ	猿越瀬。小雨川と白砂川合流付近。旧道は危険な崖道。サルは浸食され崩落した崖、コウセは川越の瀬の転訛か。
○おうらさわ	往来沢。古老も場所不詳。
○てんぐいわ	天狗岩。小雨川の天狗岩橋左岸袂脇、道沿いの大岩。
○おおぜんのたき	小雨川が白砂川に合流付近。センは滝で大滝の意味。
小字／金蔵沢 (こんぞうさわ)	南北は小雨川右岸、旧道大坂分岐近く、東西は吾嬬橋袂、大坂終点付近。東は白砂川、南は小雨、西は上日影、原に接する。地名は地内を流れる金蔵沢に由来。

<p>○うえのはら</p>	<p>上ノ原。合流付近から西の産廃施設の間、畑だった。</p>
<p>小字／原（はら）</p>	<p>旧大坂道を上り、道沿い南側一帯、諏訪神社からの南坂經由道と、旧草津道と合流する付近。東北は金蔵沢、東は小雨、東南は南、西南は西は林道で樋ノ口、栃洞、西は廻り石に接する。緩斜面で畑もあったが、今は植林。字境沿いを旧大坂道（牧水コース）、林道小雨線が走る。</p>
<p>○かざあな ○しみず ○ようす</p>	<p>以前、大坂道から嬭仙の滝方面へ分岐する道があった。滝方向へ少し入った山の斜面。</p>
<p>小字／上日影（うわひかげ）</p>	<p>旧大坂道を上り、道沿い北側山地。東は金蔵沢、南は原、西は草津町、北は小雨川で野嶽に接する。</p>
<p>○こんぞうざわ ○はなかんのん ○こんぞうどう</p>	<p>鼻観音。大坂入口の墓地から道を曲折し草津道を進むと道の左に自然石があり、石に彫られた菩むす観音像の名。</p>
<p>○てんぐいわずいどう ○きたのはじ ○きた ○おおさか ○あんのさか ○こうせんじざわ ○こうせんじあと</p>	<p>天狗岩隧道。昭和十二年竣工の入山への県道で難関の場所、小雨川右岸に出来た隧道。今は道路改修で消滅。北の端。小雨の耕地の北外れ、その先は小雨川河谷。北。大坂入口付近の北、農業用ハウスのある耕地。大坂。旧草津街道の大きな峠越えの長い坂。庵之坂。光泉寺沢。旧草津道大坂入口付近の沢。寺名に由来。光泉寺跡。山崩れで押される前、草津の光泉寺があった旧道を上り、最後の民家上、道の左奥付近に廻国百番供養塔や千手観音等の石造物が点在する。金蔵堂跡。大坂上り口の墓地下、地藏や馬頭観音がある小平な所。三原三十四番観音札所二十四番の金蔵堂跡。金蔵沢。金蔵堂跡の少し先を流れる。字名になる。</p>

<p>○うえのはら ○みついし ○びょうぶいわ</p>	<p>上ノ原。太子不動尊の手前付近の小平な場所。三ツ石。白砂河床にあった三つの大石に由来。屏風岩。白砂川右岸。岩の下の淵は子供の水浴び場。</p>
<p>○きおとし ○じゅうにさか ○みなみさか ○しみず ○ぎょうて</p>	<p>木落。十二坂の上、東側の急斜面。斜面を利用して、木材を落とし、運ぶ負担を少なくした場所。</p>
<p>○どぼし ○はば</p>	<p>土橋。郵便局の南、ゴミ集積所脇駐車場付近。旧道に土橋が架けられていた。</p>
<p>○ひょうごいり ○てんじんやま ○きたむきかんのん</p>	<p>兵庫入。発音シヨゴリ。小学校体育館と天神山間の窪。天神山。天神社様のお宮を祀る山。入口に庚申塔が点在。北向観音。天神社の石段左に荒れたお堂がある。以前、三原三十四番観音札所二十三番小雨寺とも呼ばれた。南集落の白砂川右岸寄り。ハバは地形用語で斜面上方の平地で当地も該当する。昔は桑畑で、所有者の名を付けてサイタロウの桑原と呼ぶ人もいる。</p>
<p>小字／南（みなみ）</p>	<p>諏訪神社や六合郵便局周辺から小雨林道北側一帯。東は白砂川、南は下平、西は原、北は小雨に接する。</p>
<p>小字／小雨（こさめ） ○かつばら ○どうのした ○さかやのやしき</p>	<p>小学校、支所、JA等の施設があり大字小雨の中心部。東は白砂川、南は南、西は原、北は金蔵沢に接する。古くは草津街道筋、草津温泉の冬住の里で栄えた。桑原の転訛？。小学校と大黒屋付近の裏、山根一帯。堂の下。支所裏、馬頭観音像付近下側。お堂跡の下方。酒屋の屋敷。吾嬭橋袂、派出所付近。昔、酒蔵があった所。西の山際に酒蔵へ水を引いた用水路跡があった。</p>

<p>小字／下平 (しもだいら)</p>	<p>○ぶうぶう ○うるしざわか ○はつでんしよあと</p>	<p>○つばなはら ○どうえ ○ふどうさん</p>	<p>○せんのさわ ○がにざわ ○みつし</p>	<p>○ふたごつぴら</p>	<p>小字／樋ノ口 (とよのくち)</p>	<p>○ふどうのたき ○あしがくぼ</p>	<p>小字／柴久保 (しばくぼ)</p>	<p>小字／栃洞 (とちぼら)</p>	
<p>下平橋付近からヅウヅウ沢上流兩岸一帯。東は白砂川、南は下太子、西は樋ノ口、西北が原、北は南に接する。</p>	<p>川の音が転訛した地名か。下平橋の上流に発電所跡。漆沢川。営林署の地図に、ぶうぶう沢の呼称で記す。発電所跡。下平橋の上流側、滝の下に発電所があったが、堰堤の堆砂で埋没。今、小雨林道の水道施設脇から川に下ると堰堤跡残る。大正九年着工、小雨や生須に配電。</p>	<p>燕名原。小雨林道のカーブ手前、水道施設付近。水道施設脇よりヅウヅウ沢に向かい、右岸付近の山の名。不動さん。発電所跡上流で不動を祭祀。不動の滝は林道工事で消滅し、不動像は林道脇に移し祭祀。泉の沢。センノ滝で、滝が落ちる沢の意味か。蟹沢。下平橋手前、国道を横切る小沢。蟹が生息。三ツ石。下平橋手前から農道を下った、白砂川の河床にあつた石。今は顕著な石は一つしか見えない。双子平。発電所跡付近の右岸(太子側)の山、北側斜面。</p>	<p>ヅウヅウ沢右岸、太子集落裏の北側斜面山地。東は原、南は下平、大字太子、西北は北は柴久保、栃洞に接する。</p>	<p>不動の滝。ヅウヅウ沢にあり不動像を祭祀。林道工事で滝は消滅し、不動像は林道脇に移る。芦が窪。不動様の西約七〇メートル、太子寄りの尾根付近。</p>	<p>東は樋ノ口、南は太子、西は草津町、北は栃洞に接する。村誌には芝之窪。大部分が山地。</p>	<p>廻り石付近の小雨林道の南、ヅウズウ沢沿い一帯の山地。東は南東は樋ノ口、南は柴久保、西は草津町境、北は廻り石、東北部はヅウズウ沢で原に接する。</p>			

大字／生 須

<p>小字名 ○小地名</p>	<p>小字／廻り石 (めぐりいし)</p>	<p>○どはし ○いちりじぞう</p>	<p>小字名 ○小地名</p>	<p>小字／寺社木 (じしゃぎ)</p>	<p>○はやしおした ○ぬくい</p>	<p>小字／東平 (ひがしたいら)</p>	<p>○みなみはた ○くぼ ○かきのきたいら ○むこうばたけ ○いんきよやしき ○おおばたけ ○ひら</p>		
<p>備考</p>	<p>村誌は廻り石。地内を牧水コース、林道小雨線が通る。小雨林道と牧水コース分岐付近西側一帯の山地。東は原、南は栃洞、西、北は草津町に隣接する。地名は林道から一〇〇メートル程旧道に入った道にあつた石に由来する。</p>	<p>土橋。廻り石の少し先、土橋状の凸地形の所。一里地蔵。草津町境付近の草津道脇にある。この付近が小雨と草津の間で双方から一里の地点である。</p>	<p>生須の南端。東北は駒ヶ沢、東は南は赤岩、西は白砂で太子、北西は駒ヶ沢川で辰ノ口に接する。ジシヤの木に由来する地名か。林道寺社木線沿いの前半部も寺社木。河岸段丘の平地は耕地。赤岩間の里道片益道路は廃道。</p>	<p>林の下。フレイムハウス南、道の東の山際付近。寺社木のフレイムハウスの赤岩寄りの一段下。日溜まりの場所。</p>	<p>生須集落内を走る旧草津道東側一帯。東北は辰ノ口、西は北は西裏に接する。上の茶屋跡や赤城神社がある。</p>	<p>南畑。赤城神社東南の耕地。窪。赤城神社裏、黒岩輝雄宅裏にある栗の木付近。柿ノ木平。シラキタさんの山根。以前は畑、今は荒れ地向畑。集落上方の畑。隠居屋敷。集落の墓地に隣接。大畑。滝ノ上の水流末端付近。大きな畑の意味か。平。大畑の北側、大神宮付近の斜面。</p>			

<ul style="list-style-type: none"> ○たきのうえ ○もくべえ ○ほりっこ ○みなみ ○だいじんぐう ○どうやしぎ 	<p>滝ノ上。黒岩勇宅の東南約一〇〇メートル。近くに湧水地がある。李兵衛。黒岩本平宅の隣。赤城神社裏は李兵衛畑、李兵衛井戸の名。人名から生まれた地名。</p> <p>山市屋下。旧道の急坂。子供心に小豆あらが出た怖い所。南。集落の南一帯。</p> <p>大神宮。辰ノ口の下、山腹斜面に祭祀。伊勢神宮を勧請。堂屋敷。子安様に隣接の墓地付近。明治四十二年七月二十三日、上の茶屋に落雷、その際に他の三軒と共にお堂も焼失。</p>
<p>小字／西裏 (にしうら)</p>	<p>集落内は旧草津道西側、北は湯川発電所対岸付近。東北は大梨、東は東平、南端は辰口、西は北は白砂川で大字小雨、東北端で大梨に接する。草津街道の継ぎ場、下の茶屋もあり、白砂川を渡る小雨橋左岸の交通の要衝。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○こうしんとう ○じゅうにのまい ○しばはら ○しばのてーら ○たどおし ○しんみち ○したのてーら ○したのほら ○しばっこし ○あらやしぎ ○おかりや ○さんぼんつじ ○さるっこうぜ 	<p>庚申塔。中学方面への県道分岐。米が一字に一升入。十二前。庚申塔の西、道下付近。山神十二に因む地名か芝原。大庚申塔付近。</p> <p>芝ノ平。公民館脇から北へ下り、耕地内を走る道の東側意一帯の畑地。道の西下耕地は松場。新吾孀橋下付近。以前、水田があった。</p> <p>新道。山市屋裏、今の県道。</p> <p>下ノ平。生須の下手、自動車整備工場、町営住宅付近。下ノ原。生須の下手、自動車整備工場付近の畑。</p> <p>芝越。吾孀橋下、町営住宅北側、白砂川の崖上の地。新屋敷。黒岩テルコ宅付近。</p> <p>御飯屋。集落の出入口を守る道祖神を祀る信仰の場で、歓送迎の場だった。古く茅葺きの御飯屋が置かれた。</p> <p>三本辻。小雨、赤岩、生須への旧道の分岐。御飯屋付近。猿越瀬。白砂川沿い、発電所取水口付近。カワデーラとシバノテーラの間。サルは浸食地形で、コウゼは越す瀬の転訛で川越えをする瀬の意味か。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ○かわでーら ○まつば ○なかのたいら ○けーだら ○うまおとしば 	<p>川の平。中の平の北側。砂防ダムになり耕地も消滅する。松場。公民館裏側にある畑一帯。東は道を挟み芝ノ平、西の崖際は中ノ平になる。</p> <p>中の平。なかんでーら。けーだらの上の平。</p> <p>沼尾や湯川発電所対岸。ケーは川の転訛か、タルは断崖。馬落とし場。松場の北外れ、下の猿越瀬に死馬を落とした。死馬は足を縛り、担いで運び、下に掘った穴に埋葬。</p>
<p>小字／大梨 (おおなし)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○せきとりば ○ながくぼ ○ちゆうなくぼ ○てんぐさわ ○てんぐいわ ○おおなし ○おたねくぼ ○けなし 	<p>関取場。県道脇の庚申塔からグラウンド下付近。長窪。六合中学校裏。</p> <p>中学校の体育館裏付近。手斧で削られた形状の窪の意か。天狗沢。降跡を水源にして、中学校裏を流れる沢。天狗岩。竜宮橋の左岸袂、北側の岩。</p> <p>大梨。テニス場付近の小名。昔の地形は窪だった。麻種久保。野球場付近の呼称。オオナシとケナシの間。子供園やグラウンド下の畑。孀恋村の小串鉢山付近に毛無峠。当地もケは木で、ナシは無、木のない土地か。</p>
<p>小字／一ツ内 (ひとつうち)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○くるみたいら 	<p>国道沿いの道の駅対岸一帯。中学校裏、湯の平温泉に向かう白砂川左岸の旧道沿いの山地。東は降跡、南は大梨、西は白砂川で大字小雨、北は大字入山に接する。</p> <p>胡桃平。中学校の北、湯の平へ通じた昔の道沿い。</p>
<p>小字／降跡 (ふりあと)</p>	<p>駒ヶ沢ダム付近の北、駒ヶ沢右岸山地、東は立石、駒ヶ沢で長藪、南は同夫婦石、西南は一部辰口、西は大梨、一ツ内、北は大字入山に接する。地名の由来は、県道大カール北山中、降跡家伝説に因むが、池は消滅する。</p>

<p>○べんでんさま</p> <p>○ぬかりつくば</p> <p>○えどつくば</p> <p>○わなばさわ</p> <p>○なしつくば</p> <p>○たなくぼ</p> <p>○あかぞれ</p> <p>(あかくずれ)</p> <p>○やつづか</p> <p>○はつこうざか</p> <p>○じゅうにさか</p> <p>○うしろつかわぎ</p> <p>○ふりあとばし</p> <p>○かわぎ</p>	<p>弁天様。降跡池跡の小高い所で、伝説沼の主に由来の円転様の石祠を祭祀。石祠は文化五(一八〇八)年建立。</p> <p>泥濘窪。一帯は採草地。弁天、降跡碑付近にある窪。窪に入ると、先で二又に分岐する。左がエドックボ、右がナシックボに通じる。泥濘の窪の意であろう。</p> <p>井戸窪。生須の採草地内で、水飲み場だった。</p> <p>畏場沢。井戸窪の北側の小尾根を越えた所の沢。狩猟の罾を設置した沢の意味か。</p> <p>梨窪。井戸窪の隣の窪。梨の木が由来か。</p> <p>棚窪。梨窪の隣の窪。棚状の地形の窪か。</p> <p>赤崩。赤土の崩れた所。県道から降跡や採草地入口付近。東側の赤土斜面が崩れている。</p> <p>八ッ塚。庚申塔付近で山に入った暮坂方面へ通じる旧道が、県道と合流する手前の道下。石が多い所である。</p> <p>郭公坂。庚申塔付近から旧道に入り、右に簡易水道施設がある付近の坂。ハッコウは郭公であろう。</p> <p>十二坂。郭公坂と同じ坂。山神十二を祀った所の意か。</p> <p>後川岸。県道から入り赤崩の先、最初の窪を東に入った付近。採草地で、井戸窪周辺の尾根下。</p> <p>降跡橋。堰堤入口の急カーブ付近、旧県道で水がない。</p> <p>桑萩。駒ヶ沢堰堤付近の県道下。斜面はカワギの平と呼び、以前は耕地や水車もあった。堰堤入口三〇メートル程に暮坂と鍛冶屋敷の旧道分岐があった。川岸の意味か。</p>
<p>小字／立石</p> <p>(たついし)</p> <p>○やのしたばし</p> <p>○やのした</p>	<p>駒ヶ沢ダム末端付近県道大カーブ東、牧水清水周辺、駒ヶ沢右岸山地。東く東南は駒ヶ沢で長敷、南く西は降跡、北は大字入山に接する。牧水清水付近の県道上に旧道跡。</p> <p>矢ノ下橋。旧県道時代、牧水清水付近にあった小橋。矢ノ下。谷下の意味か。牧水清水周辺の駒ヶ沢沿い。</p>

<p>○ぼくすいしみず</p> <p>○いぼいし</p> <p>小字／長敷</p> <p>(ながやぶ)</p> <p>○わさびさわ</p> <p>○まつのきさわ</p> <p>小字／夫婦石</p> <p>(ふうふいし)</p> <p>○さくらどう</p> <p>○たなくぼ</p> <p>○ふうふいし</p> <p>○せんのいり</p> <p>小字／駒ヶ沢</p> <p>(こまかさわ)</p> <p>○じゅうにのくぼ</p> <p>○せんのさわ</p>	<p>牧水清水。県道脇に湧く清水。清水脇に平成五年に建てた文学碑がある。近年、水を汲むドライバーが多くなったが、特に牧水に縁はない。上方を旧道が通る。</p> <p>疣石。牧水清水上方の旧道を東に行き、馬頭観音を過ぎ、道脇にある平らな石。石の凹の水を疣に付けると落ちた。</p> <p>駒ヶ沢左岸山地。東北は大字入山、東は大字赤岩、南は夫婦石、西は駒ヶ沢で降跡、立石に接する。駒ヶ沢沿いはダム末端上流側く牧水清水対岸付近。</p> <p>山葵沢。牧水清水対岸付近で駒ヶ沢に合流。</p> <p>松ノ木沢。</p> <p>駒ヶ沢川左岸山地。東は大字赤岩、南は駒ヶ沢、西は駒ヶ沢川で辰ノ口、北西は同降跡、北は長敷に接する。小字名は鍛冶屋敷への旧道沿いにある大石に由来する。</p> <p>桜道。駒ヶ沢ダム堰堤を通り、左岸沿いに二〇〇メートル程行った窪入口付近。生須の採草地。桜の木がある所の意味か。</p> <p>ド(ウ)は接尾語で道より「所」の意では。</p> <p>棚窪。桜道の窪に入り、右方へ上った所。採草地である。</p> <p>夫婦石。駒ヶ沢ダム堰堤左岸沿いに桜道入口を過ぎ、二〇〇メートル程先で鍛冶屋敷への旧道の窪に入る。窪に入り三〇メートル程行つた沢の斜面にある大石。一部が二つに分かれ、高遠石工の悲恋伝説もある。旧道は沢を渡り鍛冶屋敷へ。仙ノ入。沢の奥に小滝がある所。</p> <p>駒ヶ沢下流左岸山地。東は大字赤岩、南は寺社木、西は駒ヶ沢川で辰ノ口、北は夫婦石に接する。</p> <p>十二ノ久保。山神十二様を祭祀する窪か。</p> <p>千ノ沢。辰ノ口の南、駒ヶ沢左岸に合流する沢。センは滝で、滝のある沢であろう。</p>
---	---

小字／辰ノ口 (たつのくち)	東は駒ヶ沢川で夫婦石、駒ヶ沢川、南は寺社木、西南は白砂川で大字小雨、西は東平、一部が西裏、北は大梨に接する。地名は生須集落東南に位置。尾根の岩場裂け目が辰ノ口で、降跡沼伝説の竜が飛び出した伝説の所。
○うつこし	打越。シラキタ様から続く尾根の東斜面。東平のヒラヤ大神宮の裏側に位置。ウツコシは尾根越えの場所。
(うつこうし)	集落東側の尾根、尾根が凹型に落ちた所の北方。岩場に祭祀。三峯信仰。地滑りから守る神か。祭は五月五日。
○しらぎたさん	氷穴。辰ノ口の岩場にある横穴。冬に雪を入れておき、夏に病人などがでた場合、区長の許可をもらい取りに行っていた。
○こおりあな	

大字／入山

小字名 ○小地名	備考
小字／大沢 (おおさわ)	地内を大沢川が東流。東を田代原、南は大部分が長笹川で草津町境、北は東北端で田代原、他は西山に接する。旧草津道が走り、大沢集落の西に大沢ダムがある。
○まついわ	松岩。古道の辻、分岐の松から左が草津道で、大塚宅裏の耕地を横切り、赤松の古木から山林に入り、大沢へ下る。山林に入った道筋沿いにある大岩の名前。
○おおにしよこて	大西横手。大沢に向かう車道、霊神碑手前付近。
○したのさわ	下の沢。大西横手と霊神碑の中間の道下。
○さるみづか	大沢橋を渡り、一つ目のカーブ左、大沢川右岸。町境。
○ほりわり	堀割。旧道が大沢を渡り、草津町境付近の堀割状の所。
○みなみきどはば	南木戸幅。西山林道ゲート付近、大沢川寄り斜面一帯。
○さんのくらしり	三ノ倉尻。西山林道沿い、三ノ倉を経て萱場に行く途中、大沢川寄りの斜面。三ノ倉の末端の意味か。

小字／南小倉 (みなみこぐら)	小倉集落の南、長笹川右岸山腹、北側斜面。東は東小倉、南東端で根広向、南は尾根で田代原、西は山葵沢で西山、北は小倉に接する。旧小雨道沿いには日曹硫黄鉱山跡、山葵沢沿いを旧草津道が走る。
○とど	旧小雨道が日曹跡を過ぎ、田代原道に合流手前付近。
○とどのみね	硫黄山跡からの旧道を上り上げた尾根の北斜面。
○につそう	日曹。硫黄山とも。会社名で、硫黄鉱山跡地付近の通称。
○いどさわ	井戸沢。地元ではエドツサワと発音。硫黄鉱山の社宅付近。山葵を栽培した清流。
○みやま	深山。旧草津道沿い、一休みの所。小倉対岸で向山とも。
○せきそんのたき	石尊の滝。小倉の対岸、田代原側から落ちる滝。相模大山の石尊社を祀った石祠が、滝の奥にあるという。
○わさびざわ	山葵沢。石尊の滝の沢を過ぎ、旧草津道沿いを流れる。
○ひびいし	輝石。シビ石と転訛。馬頭観音分岐、右の沢沿い草津道にあるヒビ状の割れのある石。往来する人の休み場。ここまで出征兵士を送り、空砲で祝って送った所である。
○やのうえ	家ノ上。田代原から小倉に向かう車道が北斜面に移ると岩場になる。付近の崖上一帯の呼称。やは岩や谷地形。
○やのした	家ノ下。前記、家ノ上下方、車道下一帯の呼称。
○おおくぼ	大窪。小倉対岸、小雨との旧道分岐を田代原へ向かう草津道沿いの窪。東は車道が通る山側で、西が沢のある窪。
○さんかくやま	三角山。小倉集落の南、形状に由来。石尊の滝の沢と、旧草津道の沢に挟まれた山。石尊の石祠がある山か。
○すいしゃあと	水車跡。石尊の滝の沢を利用し、上車と下車があった。
○ひとついし	一つ石。小倉橋右岸に突き出す岩。弁天滝付近の地名。
○べんてんたき	弁天滝。長笹川の橋の上流に落ちる滝。美人滝とも。
○なかごのたき	前記、小倉橋右岸袂先で、上の台地に行く道があった。この道に入った分岐を右に行くと熊倉に通じた。分岐を右に少し行つた地点に落ちる滝の名前。

<p>○なかが ○はし</p>	<p>中子。熊倉への近道、馬の背状の狭い尾根の上り坂で危険な所。刀の柄に入ったナカゴのような狭い所の意味か。梯子。前記の道は右が熊倉で、左は群馬鉄山方面へ分かれるが、途中に崖がある。この崖に木製の梯子があり、移動の際に利用した。鉄山に通う人や郵便配達は、梯子を昇降し移動する危険な場所だった。</p>
<p>小字／西山 (にしやま)</p>	<p>東北は小倉、東は南小倉、南は田代原、大沢、北は長笹に接する。群馬鉄山跡は、町に譲渡されチャップボミ苔公園になる。西山林道沿いには旧信州道が走る。</p>
<p>○さんのくら ○ぎどはば ○はちこく ○へぼつそ</p>	<p>三の倉。林道ゲート西の緩斜面。クラは岩場の意味。木戸幅。西山林道ゲート東付近。山神十二の石祠がある。鉢国。元山分校跡手前。新旧の道が合流付近。小倉橋右岸袂の先、右に上る道を入ると、少し先で分岐。左の道は岩場に木の梯子の難所で、元山鉢山で働く人や郵便配達を通った。この梯子上の緩斜面の小名。</p>
<p>○ぐんまつつざん ○もとやまいけ ○やまじんじゃ</p>	<p>群馬鉄山。太平洋戦争末期、国家的要請で開発され、終戦後は川崎に運び日本経済再建に貢献する。一時は釜石鉄山につき日本二位の採掘量を誇る。昭和四十年に閉山。元山池。鉢山跡入口付近、右の林内にある人工池。山神社。元山神社。群馬鉄山跡内。山神、鉢山で働く人の安全を祈った。昭和四十年の終山式も神社前で実施。</p>
<p>○あなじごく ○ぬるゆさわ</p>	<p>穴地獄。元山鉄山跡西端。昔は白根火山爆発で出来た掘り鉢状の穴で、底から湯が湧き、動物が落ちると出られなかつたと『入山研究』に載る。褐鉄鉱の露天掘り採掘され、今は当時の面影はない。鉢山末端の穴地獄から強酸性の温水が湧き、付近は貴重なチャップボミゴケ群生地になる。価値が評価され県天然記念物に指定される。温湯沢。穴地獄から流れ出す沢。鉄山跡一帯を流れる。冬も凍らない温かな水が湧き、今は公園内の風呂に引湯。</p>

<p>○しらきぬのたき ○ぬるゆだいら ○おんせんおおたき</p>	<p>白絹の滝。穴地獄見学木道が始まる少し手前、石岸の奥に落ちる。形から近年の命名。温湯平。穴地獄から流れ出す沢付近。暖かく冬でも凍らず、猪が冬越しをした所と土地の古老が言う。温泉大滝。穴地獄のチャップボミゴケ見学者用駐車場付近に落ちる滝。付近の温湯平等から温かな沢水が流れる。萱場。三の倉の西、屋根葺きに使用する萱刈り場。中原。萱場の中心付近の呼称。焼け野原。大火に遭った採草地。萱の宝庫。炭俵等に利用した萱場だった。</p>
<p>○かやば ○なかつばら ○やけのはら</p>	<p>川平。元山鉄山に通う草津の方が、大沢を渡って最短距離で行く道があった。付近の川沿いに小平な場所があり、そこが渡河地点だった。林道ゲートの西南約二〇〇メートル付近。落とし。平兵衛池の東側の斜面。斜面を利用し、薪や萱等をここで落とし、運ぶ手間を省略した所に由来の地名？落としの平。平兵衛池東、田代原側を向いた斜面で、萱場。ここに三回雪が降れば、集落も雪が降ると言った。上荷場。旧道の平兵衛池と穴地獄分岐付近。ここに刈った萱を集めて、馬で集落へ運ぶ集積場。</p>
<p>○かわでーら ○おとし ○おとしのひら ○うわにんば</p>	<p>下荷場。旧道の坂が始まる付近、坂が終わると上荷場。井戸尻。下荷場付近から少し入った付近。清水が湧くが、田代原の上水道の水源になる。</p>
<p>○したにんば ○えどつちり ○みついで</p>	<p>三ツ池。昔、曲げ物細工の小屋があり、伝説もある。西へ東に長笹川が流れる。東はガラン沢で小倉、南は長笹川で西山、北は栃洞、松岩に接する。地内には熊倉開拓、県史跡熊倉遺跡があり、県営熊倉発電所水路が通る。小字名は地内を流れる長笹川に由来する。</p>
<p>○からさわ</p>	<p>唐沢。元山へ熊倉間の長笹川沿いのハギワ林道を八〇〇メートル程行った所。水の少ない涸れた沢の意味。沢の西奥に、古老が語るハギワ、信州古道、ゴフク平の地名が遺る。</p>

<p>○のるいでーら ○さとうたき ○わさびざわ</p>	<p>のるい平。ハギワ林道の唐沢付近にある平。ノルイは不詳。小倉の子供が大正末頃、付近で狐に化かされて死んだ。植物ウリツバ(ウルイ)が生える平の転訛か。 佐藤滝。長笹橋下流、熊倉開拓の南の沢にある滝の名。 山葵沢。小倉く熊倉へ向かう途中の沢の名。 南北が深い谷の隔絶した土地。北く東北は御殿、東南は金山沢川で長平、南は川の合流く集落南付近まで長笹川右岸に及び、西南の小倉橋付近は西山、西はガラン沢川で長笹に接する。入山一ノ一番地の白根開善学校、白根神社、町天然白根桜、熊倉発電所がある。番屋平の地名等から、江戸初期頃の信州古道が当地を通り、沿線に古道らしい地名もある。白根神社は歴史は古く、当地の社が元祖ともいう。木地師集落か地形に因む地名か不詳。</p>	
<p>○ぎばんさか ○よこみち ○どうさか ○おどう ○しらねじんじゃ</p>	<p>小倉橋左岸袂付近に馬頭観音があり、その脇を旧道が集落に向かう。集落が見える付近の坂の呼称。 横道。キバン坂を過ぎ、集落手前の道。 堂坂。白根神社手前のお堂付近の坂の呼称。 御堂。集落中央付近にあるお堂。白根神社入口にある。 白根神社。集落上方、草津の白根神社の前身という古社。西に白根山を望む所で山を祀る。町天然白根桜がある。 犬窪。お堂裏にあった窪で今は平。犬の由来は不詳。 白根ノ森。神社周辺の境内林。今は樹木は少なくなる。 立道。山口源次宅脇を通り車道を越えた先付近までの名称。直線状の道が走り、番屋平方向に通じた旧道。 番屋平。小倉から長平へ行く旧道筋、庚申塔付近の平らな所、番屋があったという。番屋は寛永頃に閉鎖か？番屋く小倉く栃洞く熊倉く萩輪く呉服平く芳ヶ平く山田峠經由の信州古道が本通りだった時代に置かれた番屋か。庚申さん。下り坂手前で、享保十五年の庚申塔を祀る。</p>	
<p>○いぬつくぼ ○しらねのもり ○たつみち ○ぼんやだいら</p>	<p>○きつねやぶ ○はらやみさか ○ながさか ○おさくらばし ○やせおね ○ろくのじゅう ○ごんのじゅう ○あんば ○こかみ ○ひのはち ○したぜ ○みずばたけ ○なかずり ○したぜ ○あかもも ○やまんなか ○やまんなかうえ ○さぶろうまえ ○えどした</p>	<p>狐藪。庚申塔付近で川に向かって下り坂になる。少し下った付近で、周囲は熊笹が茂る。狐が棲むような藪か。腹痛み坂。長坂の上、狐藪の下。長坂の上り坂に疲れてしまつて腹が痛くなるような急な坂の意味。 長坂。庚申塔付近から、川へ向かい下る急な坂。 小倉と長平間の金山沢川に架けた橋。今も鉄材が架かる。瘦せ尾根。一つ石対岸、小倉側の尾根。発音ヤソ尾根。車道が尾根を切り開いて通っている。 堰工事道終点の先、下方。小尾根状の所で、無縁の方等を葬ったという。地名由来不詳。 堰工事道終点の先、上方。小尾根状の所で、無縁の方等を葬ったという。地名由来不詳。 安場。長笹川の堰堤工事道終点の西方。以前は耕地。熊倉の西奥の山地。旧道が古かみから呉服平に通じる。 東原の川沿い上方。小倉硫黄山で働く人が近道で利用した道沿い。旧道は堰堤工事道路脇で、工事道は右へ曲がるが、旧道は川側に下る。この道の川近くの急斜面。 下瀬。小倉集落の南、長笹川沿い。川の手前の緩やかな斜面で、以前は耕地だった。堰堤への道の川付近の呼称。水畑。集落南、車道下の小沢状の所の畑。以下、墓地前まで、山口源次宅の地積台帳にあり、結いで手伝う等で、多くの古者は知る。「今日は水畑で草むしり」等に使う。 中反。一筆二反七畝の畑。車道から堰堤工事道入口三〇メートル先、左のプレハブ宿舎西側耕地。 下瀬。中反下方、長笹川左岸沿いくその上側の畑。 赤桃。中反と水畑の間の小さな畑。地名の由来不詳。 山中。中反と下瀬の間に位置する畑。アンバの西。 山中上。山中の上方。 三郎前。立道の西、車道の下側。 井戸下。水が湧いている所。山口トモオ宅下。</p>
<p>○こうしんさん</p>	<p>○えどした</p>	<p>井戸下。水が湧いている所。山口トモオ宅下。</p>

○せぎしま ○ようや ○ぼちまえ ○うしろばやし ○ひがしつばら ○じゅうにつばら ○はら ○かやば ○えどじり ○きつばた ○がにさわ ○べにおね 小字／栃洞 (とちぼら)	堰島。水畑の西にある耕地。 中反の少し西南、南向きの土地。以前は耕地だったが、今は落葉松が植林される。 墓地前。集落東の大カーブ付近から神社方面へ入る付近。道脇にある墓地前方。以上は耕地の地番に付けた小名。後林。小倉集落の北く東、長平へ向かう旧道脇の林。東原。小倉集落の東。民有林が多い。 十二原。開善学校方面へ向かう旧道と、今の車道に挟まれた一帯。山神十二神を祀ったことに因む。 原。白根開善学校付近。以前は採草地。大原と同義か 萱場。開善学校先、グラウンド付近。小倉の採草地だった。井戸尻。開善学校のグラウンド手前から、右に入ったヒラにある小沢。日当たりの良い温かな所で蕨が採れた。 切畑。林道分岐を一〇〇メートル程行き、斜面を沢方向に下ると耕地があつた。山を切り開いた畑の意味か。ガラン沢川の古名は切畑川と『村誌』に載る。 蟹沢。林道分岐を二五〇メートル程行った所の小沢。 紅尾根。蟹沢を過ぎ、崩れやすい赤色の岩の尾根。
○とちぼらあと ○いちのほら ○くらんど	小字集成図では栃洞集落跡、熊倉発電所やその上流の兩岸一帯。北く東は御殿、南は小倉、長笹に接する。 栃洞跡。小倉集落の西、熊倉発電所管理道路ゲート先の右上。文政に飢饉で被害、残つた三軒も小倉、品木、京塚に移住と『入山研究』にある。今も無縁墓地が六基。 一の洞。栃洞集落跡を過ぎ、小沢のある窪。以前、山菜栽培に取り組むが、今は落葉松は植林。「地名辞典」に、ホラは山など崩れた所や崖とある。 倉ン戸。林道ゲートと馬止の中間付近。小平な地形で、以前は山菜(蕨やウリツバ)の採れる所だった。この先は馬止。以下、便宜的に栃洞に含めたが小字不詳。

○うまどめ ○うまどめさわ ○きのこさわ ○たかのすおね ○たかのすいわ ○しろざさ ○そうきちおね ○そうきちぞう 小字／御殿 (みどの)	馬止。大高山登山口付近。奥山から曲げ物材料を背負いここまで人の背で運び、この先は馬で家に運んだ。 馬止沢。馬止からガラン谷へ方面への山道しばらく行き、山道を横切る沢。この先が茸沢になる。 茸沢。ガラン谷方面への途次。沢水は飲料水可能。 鷹巣尾根。茸沢と馬止沢に挟まれた稜線の尾根。奥はキノコ沢の水源になる。 鷹巣岩。鷹巣尾根の奥にある岩。鷹巣に因むか。 白笹。キノコ沢を過ぎ、三〇〇メートル程、なだらかな斜面で、以前は萱刈り場だった。 惣吉尾根。惣吉地蔵付近から北へ続く尾根。 惣吉地蔵。ガラン沢で、大正五年冬、遭難死した猟師本多惣吉(長平)を供養のため、ガラン沢道の岩場に祀る。地蔵と猟犬像は中之条町の浅川時計店主の篤志で建てた。 大高山続きの南斜面山地。東は金山沢で長平、南端く西は小倉、西の一部が栃洞に接する。草津湯本姓祖細野御殿介に縁の地名である。
○みどのぬま ○みどのかわ ○ほそのたいら ○わなば ○よもぎづか ○ひとついわ ○おつたてとうげ 小字／長平 (ちようへい)	御殿沼。細野平地内にある沼で、細野御殿伝説に縁の地名。 御殿川。細野平地内を流れる。細野御殿伝説に縁の地名。 細野平。屋敷跡は一段と高くなり、周囲には堀がある。 畷場。大高山登山道の一つ石手前南斜面。畷場平と同じ所。猟師が罾をかけ動物を捕らえる場所。 蓬塚。馬止から、五〇〇メートル程大高山方面登った周辺。一つ岩。地形図には一つ石。馬止から大高山方面へ登り、標高一、八二五メートルの尾根続きの山頂。 信州県境付近の峠状の鞍部。北は魚野川斜面になる。 東北は金山、東は村木沢で東小倉、南端は長笹川で東小倉、西は金山沢で小倉、御殿に接する。

○うわむら	上村。分校跡付近。集落上方、上組と同じ。
○したむら	下村。集落の下方、下組と同じ。釣り堀付近。
○しみず	清水。上の山採草地の縁を通り、村木沢の橋の袂付近。
○うえのやま	上ノ山。上村の北、村木沢右岸沿いの採草地。
○こかやま	旧公民館の南、車道の向こうに見える丘状の小山。
○にしおした	西の下。長平分校跡付近の南、川側の急な斜面。
○はちろいし	鉢路石。分校跡から小倉へ行く旧道沿い斜面。
○しらくちざわ	金山沢と横岩沢合流点から、長笹川との合流点までの呼称。本来は白濁沢、シラクチに転訛と古老が語る。
○あんばざわ	安場沢。長平から小倉へ向かう車道が、分校跡を過ぎ最初に合おうカーブ地点の沢。
○ふかさわ	深沢。金山林道に入り大カーブする場所を横切る沢。
○うしろやま	後山。上の山と金山沢の中間付近、車道脇の発電所取水隧道入口の上方。官林を借り長平の山崎角蔵が開拓した付近一帯。集落の後方の山の意味か。
○ひらくちざか	小倉から来る旧道がシラクチ沢を渡り、長平側に入った所の坂道の呼称。
○こいぜ	越瀬。オボヤシナイ行事の岩穴への道筋。採草地道を少し行った村木沢沿いで、近くに水車があった。この付近の上方に山犬（狼）母子が棲むという岩穴があった。
○えぬつくぼ	犬窪。山崎宅裏から五〇〇メートル程山道を上り、右下に下った南向きで日当たりの良い窪。狼（山犬）が子を産む時期、赤飯を炊いてお産見舞いに行った岩穴がある。オボヤシナイ行事では、子供を岩穴に連れて行き赤飯を食べさせた。子供の無事の成長を願う民俗信仰といえる。
○むらぎやま	村木山。村木沢の源流付近の山。
○はらざき	小倉からの旧道が川を渡り、坂を上った水道施設付近の小名。道脇の荷鞍状の石付近、分校手前付近。
○てんぐさん	天狗さん。長笹沢川と白濁沢合流地やや下流、左岸の岩山に祭祀。今は参拝に便利な公民館裏手に石祠を移動。

小字／金山 (かなやま)	○いちりづか	地内を金山沢が流れる。東南、西は長平に接する。佐久間象山以前からの鉾山跡や、昭和の菅谷金山跡もある。金山千軒の伝承や、金山平、金吹、寺沢の地名が遺る。
	○きんじゅうみやま	一里塚。上の山の牧野が終わり、防火線沿いに一里程尾根道を進み、急斜面を上り上げた付近。塚は林班境の目印。蔵の産地でシーズンには盛んに往来した。
	○うまあらいいど	金重御山。一里塚から金山沢方向へ下る急坂付近。以前は天然林だったが、今は落葉松が植林されている。
	○かなやまだいら	馬洗い井戸。金山へ荷物を運ぶ馬の足を冷やした井戸。足がのめり込まないように下に切石を敷いたという。
	○てらざわ	金山平。金重御山を過ぎ、金山沢川へ下った付近の平地。水もあり金山時代の中心部。
	○てらやしき	寺沢。菅谷金山事務所と採掘坑道入口の間の沢。弁天山西裏付近が水源になる。今の地図は金山沢の名で表示。
	○かなふぎ	寺屋敷。時代は不詳だが、金山全盛時代の寺跡地。
	○さいのかわら	金吹。金山平一帯の沢筋に数カ所小屋跡があり、鉾石を溶かす風を送る轆が置かれた所。付近に残滓が点在。
	○しかざわ	賽の河原。『上越の山』の地図に、金山沢と寺沢合流の下流左岸沿いにこの地名が入る。荒涼たる風景に由来か。
	○しらざわ	鹿沢。『上越の山』の地図に、金山沢と寺沢合流の下流右岸に最初に入る沢の地名。
	○はまいわさわ	白沢。『上越の山』に、鹿沢と浜岩沢の間、右岸に入る沢。地図に載る白濁沢のことか。
小字／村木 (むらき)		浜岩沢。『上越の山』の地図に、白沢と御殿沢の間で、右岸に入る沢の名。今の地図にある横岩沢のことか。
		東北は上大久保、東南は根広、南は東小倉、西南は長平、西は金山に接する。村木沢源流付近の山地。

○ねびろであい	根広出合い。長平や小倉からの野反道と、根広からの道が合流する所。根広分岐（ワカサレ）ともいう。
○いわすげにんば	岩菅荷場。根広や長平の野反道合流地の二〇〇メートル程先。岩菅を二本まで人の背で運び、馬の背に付け替えた所。
○いしどや	石都屋。長平く野反道筋、根広道合流手前にある大石（二〇坪位）付近。休み場所。三角点付近、周囲よりも高い。
○いしまき	石時。昭和十二年刊『上越の山』に、地図入りで標高一、三一八メートル付近にこの地名。今の石都屋と同じ場所か。
○しぶいけ	渋池。石都屋からの急坂を下つて平になった所にある。地名は池の水が酸性のため渋味が強いのが由来。
小字／東小倉 （ひがしこくら）	東北端で根広、東は上祖倉、南は長笹川で東小倉、西は新井田沢、権現沢で長平、北は村木に接する。古者には「とう」の発音もする。小倉の東方の意味だろう。
○やせおね	瘦尾根。集落の北（裏）側に連なる尾根。村木沢沿いに採草地へ行く道筋にある瘦せた尾根。
○うばがみ	姥神。長平の道祖神の東方、根広への旧道から北へ少し入った所に祭祀する子育ての神様。
○うばがみざわ	姥神沢。姥神方面から流れて来る沢で、村木沢の東で車道を横断する。
○こかやま	権現沢と新井田沢に挟まれた北側山地。裾は畑だった。
○になわがた	荷縄方。国有地と民有地境付近。緩斜面で耕地だった。
○あらいた	新井田。姥神から根広へ向かう道筋、御経尾根手前の沢。地名は滑りやすいなめつた状の河床に因む。
○うわよし	上芳。村木沢左岸沿いの採草地。ヨシは葎の意味か。
○しみず	清水。上ノ山採草地の縁を通り、村木沢渡る橋の袂付近。付近は湿地状の所が多い。
○やくしつぱら	薬師平。上の山採草地の東、村木沢寄りの斜面。ホド薯の採れる所。山火事で焼けたヒラ（斜面）。
○なかだん	中段。長平から東へ向かう車道がアライタ沢を渡り、道の右脇にある平らな所。長笹川左岸の高い場所。

小字／根広向 （ねびろむかい）	根広集落の南、対岸の北斜面の山地。東は湯ノ上、南は田代原、西南は南小倉、西は東小倉、北は長笹川で根広、木川附に接する。
○やばな	野花。尻焼温泉右岸、関晴館付近の平地。発音の佳字である。地形用語はヤハ谷、崖。ハナは先端。
○しりやきよこて	尻焼横手。花敷から尻焼へ向かう旧道筋で、尾根の中腹を通ったが、その道沿いの地名。今の車道の上。房敷沢。キッコ沢下流で合流する支流。薬師堂と尻焼温泉の中程、車道から南へ入る新道跡を少し上った所の沢。薬缶落とし。屋敷沢の畑沿い。昔、畑仕事に行く時、持ってきた薬缶を沢に落としてしまった故事に因む。
○やしきざわ	おたね窪。尻焼の露天風呂の少し上流。車道脇の馬頭観音と堰堤間の右岸に入る沢の窪。以前は桑畑もあった。
○やかんおとし	深沢。根広集落から西に見える窪。長笹川右岸。古者は「深沢に残雪があるので春には早い」と季節の目安に。
○おたねくぼ	辰五郎あらく。長平の対岸、長笹川右岸の棚を開墾地。開拓者の名。不利な北斜面で開拓は永続せず失敗した。
○ふかさわ	泰磨開墾。尻焼温泉上流、長笹川の堰堤と深沢間の右岸中腹の開墾地。戦後の食糧難の時代、根広の中村泰磨が開拓したが、場所も悪く短期間で終わった。
○たつごろうあらく	北く東は上大久保、東南は根広、南西く西は東小倉、西北端で根広に接する。ソは複合語語頭の背？、クラハ岩。
○やすまろかいこん	御経尾根の旧道沿いで、権現沢と新井田沢の中程付近。
小字／上祖倉 （かみそぐら）	昔、一軒家があったが、永荒のためこの地を離れた。
○ふぐら	風穴。岩の隙間から風が吹き出す。今はないが、御経尾根の長平側崩壊斜面。冬は暖かく、夏は冷風と感ずる。
○かざあな	権現沢上。権現堂跡上方。付近の五輪塔は車道脇に移す。
○ごんげんさわうえ	権現沢。御経尾根を越え、長平側に三〇〇メートル程行った所。地名由来は沢筋にあった権現堂。車道脇に石造物を移動。
○ごんげんさわ	

<p>○ごんげんどう ○ひがしはた ○おきょうおね</p>	<p>権現堂。御経尾根を過ぎ、長平側に行つた道筋にあつたお堂。車道脇に五輪塔等の石造物は移される。 東畑。集落西端、権現沢付近にあつた一軒屋の東の畑。 御経尾根。根広と長平間の尾根。大規模な地滑りで地形が一変する。根広と長平の旧道筋の尾根。根広の車道カーブから入り一〇〇以程度。月洲庵の僧が経巻を石のカロウトに地滑りを鎮めるため埋納した伝説がある。</p>
<p>小字／根広 (ねびろ) ○しょうぼうたいら</p>	<p>北東と東は上大久保、矢倉、木川附、矢ノ下、長笹川で根広向、西と北西は上祖倉に接する。ねどふみの里、龍沢寺の隠居寺月洲庵跡(今は集会所)がある。 消防平。ねどふみの里付近。昔、消防訓練を行つたことが地名になる。</p>
<p>○まきのうち ○かやば ○とや</p>	<p>槇の内。付近は曲折した坂道が続く所。 萱場。根広と矢倉の道が合流する手前、西に入つた所。国有地を借りて、大屋根に使う萱を刈つた場所。 鳥屋。赤土手前から入つた集落北端の窪、畑だつた。渡り鳥等を捕獲した所か。水もある小さな窪で、小屋掛けも可能である。トヤネビロと同意。</p>
<p>○なしきこや ○ゆんば ○はつこうば</p>	<p>梨木小屋。消防防火線沿いの道沿いで、小さな窪。 地形は小さな尾根状。寮坊の畑の少し上方である。集落外れ付近、都丸氏は弓場、ハマイバではと推測する。 郭公場。根広集落の西外れの家付近。毎年、郭公(はつこう)がよく鳴く場所に由来。</p>
<p>○えどした ○おどうまえ ○せぎなかがこ</p>	<p>井戸下。寮の沢付近の車道下。 御堂前。観音堂付近の車道下。 堰と堰に挟まれた場所の畑。長笹川の堰堤のやや上方で、今は水面下に沈む。</p>
<p>○がんざわ ○さかなか ○ぼうのはたけ</p>	<p>蟹沢。長笹川河床、蟹の多い所。せぎなかがこのやや上流。長平と根広道分岐手前、長笹川に下る旧道の坂の中程。坊の畑。寮の沢の下流。車道下、川より一段上。</p>

<p>○なしのき ○たかぐね ○やんぶし ○つたのき ○まえで ○こやのした ○ひらのやしき ○しばっこし ○いちべえ ○ひらのかしら ○げつしゅうあん ○りようのさわ ○りようぼう ○げんどう ○たつみち ○そんま</p>	<p>梨の木。根広に西から入り、車道と中村宅入口分岐手前、道上に以前梨の古木があつたことに因む小地名。 高久根。梨の木下付近の小尾根。猪除けのクネに因むか。ユンバもタカグネ内の小地名。 山伏。地元には山伏殺害に因む話が伝わる。山伏と鏡を埋めた供養塔付近の呼称で、高久根の東にある小平。葛の木。山伏の東、集落の南方。葛は境に植えた。二畝程度の狭い所だが、地力がある土地。 前出。集落の南、葛の木の東北に位置、車道下。 小屋ノ下。白根ハイムの南下で、曲げ物細工の作業小屋があつた。 平の屋敷。寮の沢の末の斜面、集落が背で北風を防ぐ。 芝越。花敷と尻焼からの旧根広道に挟まれた尾根。馬頭観音像付近。芝山の尾根を越す所、温泉が下方に見える。 市兵衛。長平分岐から根広に向かい、車道カーブ右上。土地の開拓者に因む地名。以前、畑だつた。 平の頭。トヤの西、公民館東の斜面。平ノ屋敷裏手山沿い。山林と隣接した高い所の畑。 月洲庵。龍沢寺の隠居寺の名。公民館付近が跡地。 寮の沢。デスを源流に南流、月洲庵跡脇を下り、根広集落中程を流れ長笹川に落ちる。寮は月洲庵関連の地名か。 寮坊。寮坊は月洲庵の僧、彼が耕した畑と伝わる。長平分岐より、尻焼側に二〇〇メートル程に下つた道上。今は荒れ地。月洲庵住職で名僧。観音堂付近南下、二畝程の耕地。井戸下地内に含まれる。 立道。野反方面への近道で、観音堂と大神宮下を通る。真つ直ぐの上り道の意味か。 損馬。死馬(損馬)を捨てた場所。道の分岐を長平側に一〇〇メートルも行つた所で、ここに馬を捨てた。</p>
--	--

○ひびようおとし

避病落とし。伝染病などで亡くなった方を捨てた場所か。損馬落としの少し東側で、下は長笹川。

○なしのきした

梨の木下。根広集落の西外れ。瓢箪状の実を付けた梨の大木があつた。ハッコウ場付近。

○かわばた

川端。根広の西外れ付近、長笹川沿い。今は水没。

○しばら

芝原。白根ハイム付近。山芝の生える荒れ地だつた。中村一雄宅屋号はシバラーノショウである。

○にしのかほ

西の窪。根広集落西外れ。旧長平道と車道の分岐付近。井戸尻。消防小屋の先、道下。井戸水の水尻。根広東部の方が飲料水に利用。車道上の急な斜面で近道である。

○えどつちり

落とし。集落に近い採草地内。蒟つた草や薪類を背負つて下らず、斜面を有効に利用し落とし、労力を省いた。

○おとし

出水。採草地と子宿沢方向への林道支線交差手前、西下の窪。湧水地で寮の沢源流になる。

○たかちやのじゅうに

高鳥屋の十二。根広から野反へ向かう道筋、高鳥屋山頂近くに祭祀の山の神十二、白根山を一望できる所。石祠は集落上方に祀る大神宮に移した。

○しょうすけくぼ

昭介窪。東根広からの野反道の西下の窪、大開の手前に位置する。中村福美宅先祖の名前に因む地名。

○おおびらき

大開。採草地道下、昭介窪を過ぎ西下に向けた緩斜面。沢の両岸一帯。狭い沢沿いの所が終わり開けた所。

○しかつくぼ

シカ窪。西根広からの野反道の東下、大開の西側に位置。槇の内と萱場の間にある窪。老婆シカに由来の地名。

○せんそうびら

戦争平。野反道の西下、昭介窪の手前に西向き斜面。良い草が生える採草地。草を刈る時、老婆が鎌を振り自分の刈り場と主張、それに抗議した所。動物峰の西下斜面。

○またぐち

戦争平入口付近。寮の沢に別の沢が合流する付近。

○うわだんはげ

上段禿。矢倉と東根広の野反道合流地点の少し先、西向きの斜面。風があたり樹木が生えにくい場所。

○だしのわるいくぼ

出しの悪い窪。道までの足場が悪く馬の足も捕られる程の湿地で苦勞する窪。戦争平から一〇〇メートル程西に入った所。

○ねひろおおくぼ

根広大窪。東根広から野反道に少し入り、東に見える窪。

○ながつばら

長原。矢倉・東根広と西根広の野反道が合流する付近。

○やちのひら

谷地の平。子宿沢側への林道支線が合流する手前、西下の湿地状の場所。

○かやば

萱場。採草地が終わつた先にある屋根葺き用の萱狩り場。

○ほうだい

東西根広から来る野反道合流手前西側一帯。矢倉の東と矢倉からの野反道合流した少し先、上り上がった所の小名。付近に三角点もあり、見晴らし良好。

○どうぶつみね

動物峰。野反道沿い、標高一、二〇八メートル付近の尾根。野生動物生息地域か。ここもホウダイも見張り所もほぼ同じ。

○みはりじょ

見張り所。春の山火事予防見張所で今はない。最初、タカトヤに設置、後に三角点のあるホウダイの山に移つた。見晴らしも良く草津と専用電話で結ばれた。

○ひなたさか

日向坂。野反道を進みエビ山が正面に見える付近、道の東南斜面。日向坂の岩菅は良質だつた。以後は根広続きの国有林内だが、根広の生活圏だつたので根広に含めた。

○ひなたつくぼ

日向窪。日向坂の先、東斜面になつた窪。

○ひなたさか

中窪。日向坂の先、野反道の東に突き出た二つの尾根に挟まれた東向き斜面。良質の岩菅産地だつた。

○なかつくぼ

外窪。中窪の北側尾根の先、東向きの窪。

○そとつくぼ

根広尾根。『上越の山』の地図は、根広と根広禿へ続く尾根を、地図に線入りで記す。(門松尾根)と○に入れる。

○ねひろおね

根広禿。二箇所あり、根広の西からの道筋、消防平付近の植生が乏しい場所。

○ねびろはげ

日向坂の上、左カーブすると小さな尾根の南山腹を通る所。本来は雪崩を避け尾根を通るのが普通だが、ここは尾根の中腹を通る。シュミセンは植物名か？不詳。

○しゅみせんよこて

根広禿。野反への道を上り上げた尾根の禿。

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○ねびろはげ

○じゅうにやま	十二山。別名根広峠。根広禿近くのピーク。国土地理院の地形図に弁天山と誤植。近くに山の神十二神の石祠。
小字／木川附 (きがわつく)	矢倉、根広間の道下一帯。白砂川、長笹川合流付近北側。東北は矢倉、東南は白砂川で花敷、打越、南は長笹川で湯ノ上、根広向、西ノ北は根広、矢ノ下に接する。長笹沢沿いに尻焼温泉(白根ハイムを含む)がある。
○とうろく	藤六。根広集落の東外れ。尻焼側へ向かう山道沿い、危険な急斜面が多い。寛文三年の検地帳に「藤六」とある。
○うえとうろく	上藤六。天狗尾根の西沿い、赤土から凹地を少し下った急な斜面。転落をして亡くなった方がいる。
○したとうろく	下藤六。集落東端手前から急の畑道を下り、尻焼温泉側に一
○こうろ	○メートル程行つた、露天風呂少し手前の車道上、急斜面。天狗尾根の西、埋土の道下斜面。岩の多いゴウロと思えるが岩は目立たない。寛文十二年の入山村新田改に根広分に「かうろ」の名が載る。
○てんぐおね	天狗尾根。根広の赤土付近から尻焼温泉裏に続く尾根。尻焼温泉裏のピークに天狗石祠を祭つたことが由来。
○こうろ	天狗尾根の西、埋土の道下斜面。岩の多いゴウロと思えるが岩は目立たない。寛文十二年の入山村新田改に根広分に「かうろ」の名が載る。
○くずればた	崩れ畑。湯坂道と尻焼道分岐付近で、畑もあつた。崩れやすい崩壊地形の斜面にあつた畑。
○どうす	旧湯坂道の尻焼分岐を過ぎ、馬頭観音がある付近。尻焼側を向く急斜面の呼称である。以前は桑畑もあつた。
○やばな	谷鼻。関晴館の対岸、長笹川の谷に、やや突き出した所。湯坂。花敷温泉から根広へ向かう旧道の坂。「湯坂曲がり」は十三曲がり、曲がり曲がりに糞がある」の戯れ歌があつた。
○ゆさか	ブンギの東、車道と旧花敷道とに挟まれた所。
○みちい	柿の木。車道から旧花敷道に入ると、左に細窪方面へ通
○かきのき	じる道がある。この分岐と細窪の中程付近にある耕地。

○ほそくぼ	細窪。赤土と湯坂道に入り、すぐに左に分岐する道の行き止まり付近。窪の形状に因む。
○やすんば	休み場。湯坂道を上り終わった付近。雨宿りの場だった。
○のどのくち	喉の口。温泉側から見た白砂川の岩場狭隘部。昔、水を溜めて一気に材木を流したドンガラの場合。
○のぼりうち	『村誌』は昇中、読み「しょうちゅう」。根広へ向かう旧道筋。尻焼から来る道と、花敷からの湯坂を上った旧道が合流、この先の根広寄り、車道手前の坂付近。
○わさび	山葵。細窪の南の凹地で湧水。飲料水にも利用される。
○てんぐおね	天狗尾根。尻焼温泉、光山荘裏、旅館に一番近い山頂に天狗の石祠を祭祀。今は祠はないという。根広の赤土付近から尻焼温泉裏に続く尾根の名。
小字／矢ノ下 (やのした)	矢倉と根広間中程、道上の山地。南は木川附、西ノ東は根広に接する。地名はヤノ谷で谷下か、笹岩の岩の下か。
○こだまいわ	笹岩。岩に向かい怒鳴ると反響がよく返ってきたという。
○といくち	樋口。笹岩の東(矢倉側)にある窪で、普段は水がないが、大雨では水が流れ出し樋の口みたいな形状になる。
○ほら	洞。笹岩脇の凹状の地形の所。樋の口と同じか。
○ほらのおとし	洞の落とし。笹岩付近斜面に木を落として運んだという。
○きたむき	北向き。赤土より二〇メートル程東道上、北斜面で笹岩と対峙。
小字／上大久保 (かみおおくぼ)	南北に細長い山地。東は小宿沢で中ヲネ、南東は矢倉、南西で根広、西は上祖倉に接する。
○まむしつぱら	蝮平。野反道で、西が昭介窪付近で、東の子宿沢側に下った斜面。蝮が多く棲むことが地名由来。
小字／中ヲネ (なかをね)	矢倉川と小宿沢間の尾根の西側一帯。東は門松、南端は矢倉、西は小宿沢で上大久保に接する。
○おおよつくら	大矢倉。小宿沢上流左岸、発電所取水場奥。中尾根西山腹緩斜面。昔、霜田氏が、戦後は中村氏が開拓に挑む。地名とは裏腹、付近には岩場は少ないという。

<p>小字／矢倉 (やくら)</p> <p>○てんぐおね</p> <p>○おてんぐさん</p> <p>○いわすごでーもん</p> <p>○やくらおおくぼ</p> <p>○くまん</p> <p>○ねげえり</p> <p>○おとし</p> <p>○そんま</p> <p>○まえさか</p> <p>○ほら</p> <p>○いなりさん</p> <p>○だいじんぐう</p> <p>○おどうやしき</p> <p>○しばら</p> <p>○かみやしき</p> <p>○ほそくぼ</p>	<p>矢倉集落周辺一帯。東は矢倉川で和光原、南は木川附、 南西は根広、西北は北大久保に接する。地形用語では、 ヤル谷、クラル岩場の意味。県営矢倉発電所、県文化財 浄土信仰仏画(阿弥陀如来像掛軸)がある。</p> <p>天狗尾根。鉄塔付近から天狗さんに続く尾根。瘦せ尾根で、 危険な所。天狗の石祠は先端付近に祭祀。</p> <p>お天狗さん。天狗尾根の先端付近の瘦せ尾根に矢倉集落 で祭祀。天狗の石祠は明治二十五年に矢倉で建て、組中 とあり関係者や石工名も刻む。</p> <p>岩菅大門。車道の天狗尾根道入口の北側、尾根の続きを 上り上げた高い所。岩菅山は見えないが、以前は岩菅信 仰の遙拝所だったのか。石祠等の遺構もない。</p> <p>矢倉大窪。矢倉から野反道に入り、西方に見える窪。大 窪が終われば尾根道になる。</p> <p>矢倉大窪北東急斜面。ホラの一尾根北の東向き斜面で官 林。暗い所よりも、ンが接尾語で、熊が棲む所か。</p> <p>矢倉発電所鉄管が道を横切る所の西、道下で畑だった。 ねがえりの窪とも呼ぶ。</p> <p>落とし。大窪の先、足場が悪く、道に薪を落とし運ぶ。 損馬。死馬を捨てた場所、当地では三軒の道下斜面 前坂。道祖神付近から斜面を下る旧道の坂。</p> <p>動物峰付近の小名。台は一段高い場所の意味か。</p> <p>洞。矢倉の一キロ位奥。採草地道の東下にある窪、沢沿 いの崩れた場所である。</p> <p>稲荷さん。お堂屋敷の下。切石上に立派な木製の社。 大神宮。集落の裏山にある。村を見下ろす所に祀る。 お堂屋敷。採草地への道、入口付近。三基石仏がある。 柴原。道祖神のある付近。柴は燃料用の薪の雑木林。 上屋敷。採草地への道が林道を横断した先。昔の屋敷跡。 細窪。天狗さんの尾根に入り、西下の窪。その下は木川 付地内になる。</p>
<p>○きつぱた</p> <p>○きねんりん</p> <p>小字／和光原 (わこうはら)</p> <p>○あおぎざか</p> <p>○おおしも</p> <p>○おおしもざか</p> <p>○こうしんさん</p> <p>○そんまがはら</p> <p>○むけえー</p> <p>○どうやしき</p> <p>○そね</p> <p>○なかござわ</p> <p>○にしざわ</p> <p>○しものやしき</p>	<p>切畑。矢倉集落手前の舞茸工場付近の畑。農家が徐々に 荒れ地を開いた切添新田に因む地名か。</p> <p>記念林。上屋敷の先。日露戦争の戦勝記念で植林した。</p> <p>標高九〇〇メートル級南斜面に集落。東は白味田、南東端 は白味田沢で大原、南は白砂川で日ヶ瀬、花敷、西は矢倉 川で矢倉、北は門松に接する。寛文三年の検地帳は若子原 とある。字名は修験和光院に關係するか。山本、山田、本 多、霜田姓が多く、同姓はほぼ同じ地区に居住する。</p> <p>青木坂。下村方面への旧道分岐付近の国道の坂。道路工 事の時、当地の工事請負を青木班が行い、小屋もあった。 大霜。旧道脇、青面金剛付近から始まる凹状地形で、白 砂川に及ぶ。霜が降りやすい窪地形に因む。</p> <p>大霜坂。白砂川側青面金剛付近の旧道の坂の呼称。 庚申さん。白砂川側からの旧道沿いにある大きな青面金 剛塔付近の呼称。青面金剛塔は庚申信仰の対象である。 歩く時代には付近は絶好の休み場だった。</p> <p>損馬ヶ原。庚申さんの道向下、昔の死馬捨て場馬落とし。 近くの馬頭観音には、馬供養の銘が刻まれる。</p> <p>向かい。下村と同義。旧道筋の庚申さん付近から見ると、 沢向こうに下村が位置したのが由来。</p> <p>堂屋敷。損馬ヶ原下方旧道沿い。良質の水が湧く井戸は、 湯水期には下組でも利用。大霜内で、古い御堂跡か。</p> <p>曾根。中子(西)沢と下の農道の交差付近の小尾根。地 名用語のソネは、浸食作用から残った高い(尾根)部分。 中子沢。大谷地方向から流れ、集落共同墓地の東を流れ る沢の呼称。白砂川側に近くでは西沢に呼称が変化。</p> <p>西沢。中子沢の下流の呼称。下村から見た場合の西沢か。 下の屋敷。御堂平西南、白砂川沿い。本多一族最初の移 住地で、後に現在地に移ったという。大霜の末に含む。</p>

○あつちもて (あつちもてーら)	ダム湖終点付近。昔の川縁で畑だった。アッチは方向、オモテの転訛で、表Ⅱ南向きの耕地に適す所で、白砂川上流の川浦のウラ(裏)は奥や日陰の意味とも思える。下村から彼処平へ行く途中の坂の呼称。
○あつちもてざか	休み場。アッチモチ坂の途中に、集落と耕地の間を重い荷を背負い往来する際に一休みに格好の石があり休んだ。同様な場所は大霜坂や引沼集落と温泉医療センター間の旧道三叉路等が往来の人が一服する場だった。
○あつちもてざか	下の屋敷から下村南端の家の付近に上る道。人名由来か。
○ひなためん	日向面。下の屋敷の東、小さな尾根の日向側斜面。
○しばはら	芝原。下組南端の家付近。シバは草の芝。青木宅付近。下組からアッチモチへは喉端、アッチモチ坂、猪小屋屋敷が道筋の位置関係になる。
○とつさき	突先。芝原の東、白砂川に突き出た急なヒラ。東は喉端。喉鼻。トツサキの東に位置。地形が突き出た先端か。木が茂る前は白砂川がよく見える所だった。
○のどつばな	御堂平の東にある小さな尾根。
○まつばおね	御堂平。下組集落東南の耕地。子安地藏付近の御堂か。
○みどうでーら	引き墓。御堂平の南、畑際の墓地。両墓制の参り墓跡。
○ひきばか	前畑。下組の南、下の農道上の耕地名。
○めーえぞり	前反り。御堂平の西下の耕地。前畑の東の狭い耕地。
○いなりさん	稲荷さん。下組。昔、碓氷峠の熊野権現を勧請。味噌桶に当社の鳥のお札を貼ると、良い味噌が出来たという。
○なかご	中子。国道から中組へ分岐の火の見付近。国道を挟んだ墓地や沢沿いの地名。ナカゴの地名は狭い小尾根地形に多く、当地も東西が小沢に挟まれる。
○まきのうち	和光原集落の東端、国道沿い、道祖神付近の小名。
○おおやち	大谷地。野反への旧道入口、お堂の東側、旧道沿いのヒラで国道方向につながる。一帯はジメジメした所。
○しねーど	品井戸。木の皮を、水に浸し柔らかくした井戸か。旧道が国道と合流する西一〇〇メートル、国道上のジメジメした所。
○つきのき	榎木。山田隆太郎宅西上の耕地。上の農道下方。榎があつたのが由来か。
○こぼしり	和光原バス停付近の小名。意味不詳。
○ゆすま	和光原バス停西側の道下、本多宅付近。
○どうつびら	堂平。お堂の西北方向のヒラ(斜面)。清王の森の左奥。
○せいおう	清王。集落東北の御堂上方周辺、清王の森。信仰の場所。
○おとしだ	落とし所。山田良秋宅裏付近のヒラ。後山に続く崩壊斜面。国有林から運んで来た薪類を、この斜面を利用し下に落とし、手間を少なくした場所。
○しちろう	七郎。榎木の上方、山際の呼称。下方からの配列はナカゾリ、オキノクボ、ツキノキ、シチロウと続いている。
○なかぞり	中反。集落上部、上組の民家の西、石仏付近から国道方向面に下る道沿い。小尾根状地形で、小尾根を境に東向き斜面が西向き斜面に変化。地形が反った所である。
○ならのき	榎の木。白砂川沿い、大霜を通る旧道、青面金剛塔の辻上方、国道下付近。寛文三年の検地帳にも載る。
○しんでん	新田。ナカゾリの西側、国道の上方の耕地、一反歩程。
○おきのくぼ	近世の新田開発に由来する地名。
○とうばのうえ	沖の窪。上組集落外れの西側、道沿い(北)の耕地。天保四年の巡拝塔があるナカゾリを過ぎ、すぐ先の道沿いに馬頭観音像がある付近の窪。トマの対語、オキは遠い？
○おもり	当番の上。八幡社上、上の農道の西側耕地。中の農道下は御森。昔、ここで獵師が当番で見張りをした所という。
○はちまん	御森。上組を通る農道から、諏訪神社への道が分岐する。分岐の西、車道下の西向き耕地。地名は神社の森か。
○むこうびら	八幡。上組集落西、上の農道中の農道合流付近、上の農道下。今は八幡様を祀る。以前、ここに諏訪神社と八幡神社が祀られた。諏訪神社は国道上に移転し跡地になる。
○すわのもり	向平。当番の上の西側斜面、車道上。水道施設の東一帯。車道下は昔の沢で、矢倉方面が見える。
	諏訪の森。上組の車道より諏訪神社への参道沿いの森。

○しばこし	おもりと諏訪神社の間、文字道祖神付近。矢倉と和光原からの旧道が合流する場所。
○すわじんじや	諏訪神社。以前は御森付近にあったが、今は国道上に移る。和光原では大神宮が東北の鬼門除けで、諏訪神社が西南の鬼門除けという。
○もりそと	森外。御森の西外れ、耕地が終わった西向き斜面。
○すげんさわ	菅の沢。向平の車道下の窪、古井戸山の北方になる。菅に因む地名であろう。
○こいどやま	古井戸山。森外の西の尾根状の小山。小か古か？
○こいどいけ	古井戸池。増田宅裏湧水池。別称ボクボク井戸。湧水期は上村の方もこの水を利用。古くからの湧水池井戸。棚。増田宅南、道上の棚状の平地。
○たな	上組からの車道が西に下って、国道と合流付近。原か。
○はらじ	下平。ハラジの西、約一〇〇坪の国道下、フレーム付近。
○したつてーら	深山口。当番の上の西上方の山林、矢倉川沿い西向斜面。
○みやんぐち	和光原西端で山林。奥山入口の意味か。
○うまぼち	馬墓地。下平の東、旧県道沿い。損馬ヶ原後の馬捨て場。
○くぞつびら	葛平。下組分岐のすぐ先、青木坂の大カーブを過ぎた国道上。植物の葛に由来する地名。以前は耕地。
○むけーやま	向山。集落東端付近で国道東側に見える山。城峯の石祠。
○そとで	向山の国道U字大カーブ下の急な東斜面。旧道沿い一帯。
○ほそくぼ	細窪。三峰山の東斜面（ヒラ）下の山根の細長い窪。
○やぶでーら	藪平。細窪の南続きの平坦な所。白味田沢右岸。
○ししごややしき	猪小屋屋敷。アッチモテーラの東方。昔、猪除けの見張り場所があったことに由来する。
○うしろやま	後山。集落の北方に見える稜線の山で、北側は官林。
○だいじんぐう	大神宮。伊勢神宮を勧請。集落東北の山中にある。
○さけーだ	境。大神宮の西下付近、官林と民地の境に由来。
○みどうたいら	御堂平。集落東南、本多大膳宅東の小平な所。御堂は子安地藏脇の御堂に由来か。

小字／門松 (かどまつ)	和光原集落の北方、一帯は国有林。東は白味田、南は和光原、西は中フネに接する。尾根がほぼ民有林と官林境。野反に向かう旧道が走る。秋山から和光原に来た山田一族が正月に間に合わず、当地に門松を祀ったという伝承に由来する地名。今の石祠は昭和年代で新しい。
○みのわ	箕輪。箕の形に似て、南以外は尾根に囲まれた地形。
○ほそくぼ	細窪。向山の東側、民有林と官林境。東が藪平。
○ごはんぎよう	御判形。官林の入口。集落からの旧道が国道と交差する付近。付近で旧野反道や大原經由旧四万道が分岐。官林署の見張り場があり、官林利用鑑札を確認する場所か。
○かどまつのじゅうにさん	門松の十二さん。国道から旧野反道に入り、一キロ程行つた道脇に石祠がある。山田一族で祭祀。今の石祠は昭和に建てたもの。
○よしのしり	葦の尻。旧野反道入口の国道下。植物の葦に因む地名か。
○くぞのした	葛の下。葦の尻の先、国道脇水槽付近の下方。昔は耕地。
○おがみいし	拝み石。門松の祠の先、道の右側にある岩状の石。
○くまつさわ	熊沢。国道大原口一キロ弱手前大カーブの沢。沢筋で熊を捕獲したことが地名になる。
○おぐりしみず	小栗清水。和光原から越後に落ちる途次、小栗上野守婦人一行が飲んだという湧き水。国道から清水に行ける。
○さくましみず	佐久間清水。佐久間象山が野反方面へ資源調査に行く時に飲んだ清水。旧道の東斜面、今も国道脇に水が滲む。
○おおなら	大櫓。野反への旧道脇、旧道が国道を横断した大櫓バス停付近。二又の大櫓があり、仕事の時の休み場。
○はげ	禿。富士見峠付近。草が生えていない場所。
小字／白味田 (しろみた)	大原の台地下を流れる白味田沢右岸一帯。沢の下流は小字が和光原になる。東へ南は大原、南端で和光原、西は旧野反道で門松に接する。
○かやば	萱場。白味田沢川を渡れば大原、手前右岸の一段上の所。
○くりでーら	栗平。大原入口付近の国道沿い。車道開通後の地名。

<p>小字／大原 (おおはら)</p>	<p>台地状の平地。東は白砂川で三浦、松岩、南も同川で日ヶ 圍、西南は白味田沢で和光原、西は旧野反道で門松に接 する。以前は和光原、引沼の採草地。南側は野反湖パー クランド和光原大自然村別荘地に開発。採石場がある。</p>
<p>○あまいけ</p>	<p>雨池。和光原から白味田沢を渡り、左岸の先にあつた耕地。 地名は池がつくが、付近に池はない。今は落葉松林。</p>
<p>○くららざか</p>	<p>白味田沢左岸から雨池方面へ通じる坂。坂の途中、平ら な所は戦後の食糧難時代に開墾された。クララは下り坂 で、古老は長く急な坂と語る。</p>
<p>○ひれーでざか</p>	<p>雨池の東側から大原に上る坂。引沼衆が採草地に行く道。 雨池の東から大原へ上る、尾根通りの坂道。</p>
<p>○しれーだ</p>	<p>佐久間清水。大原台地から十二坂を下り終えた付近。昭 和十二年刊『上越の山』の地図にも記される。『風雪三十 年』の「野反湖」には、「佐久間象山がこの辺で金鉱を掘つ たとき発見して、世人に飲用できることを教えた伝説が のこっている」と記される。野反道の佐久間清水程知ら れないが、象山に縁の清水と伝える古老もいる。</p>
<p>○さくましみず</p>	<p>蕨平。十二坂の途中、蕨が多く出る所と古老がいう。</p>
<p>○わらびだいら</p>	<p>十二坂。旧四万温泉道が白味田沢を渡り、大原へ上る曲 折した坂。坂が終わると、十二山神の石祠がある。</p>
<p>○じゅうにさか</p>	<p>荷場。上がり上げ。十二坂が終わった所。山神十二の石 祠あり。人の背で運ばれて来た荷を、馬の背に乗せ換え る所。昔、上がり上げ付近が荷場だった。</p>
<p>○にんば (あがりあげ)</p>	<p>大原の十二さん。十二坂が終わった所に祭祀。明治 三十二年に和光原、引沼、世立、京塚組で建てた祠がある。</p>
<p>○おおはらのじゅう にさん</p>	<p>野首。大原北部の造林地内。クビは入口、頭部、括れた所等。 地内にノクビ坂、ノクビ平、ノクビ沢がある。</p>
<p>○のくび</p>	<p>野首坂。大原北部の野首に上る坂道。</p>
<p>○のくびさか</p>	<p>野首平。大原北部の野首一帯の平らな台地状の所。</p>
<p>○のくびたいら</p>	<p>野首沢。野首平から白味田沢に流れ出す沢。</p>
<p>○のくびさわ</p>	

<p>○きょうがはら</p>	<p>京が原。『上毛温泉遊記』に「大なる高き原に出づ、京が 原と云」と大原を記している。</p>
<p>○そうしおね</p>	<p>ソウシ(白樺)尾根。ソウシ⇨白樺。別荘管理棟裏手の 小さな尾根。以前、白樺の木が多く茂っていた。</p>
<p>○えもんだいら</p>	<p>別荘ゲート手前の左側。戦後、ここで足の不自由な人が 死去した所という。</p>
<p>○なかつばら</p>	<p>中原。別荘地入口と四万への道の分岐付近。</p>
<p>○おおほど</p>	<p>大ホド。採石場の東下の小さな窪。白砂川に向かった東 面で、良い萱が採れた所。意味はホド薯の生える窪。</p>
<p>○いしがたいら</p>	<p>石ヶ平。大原の東、林道が白砂川を渡る手前の、道下で ある。菅刈の場所だった。</p>
<p>○こもいし</p>	<p>薦石。石ヶ平内で、形状が薦をかけたような丸っぽい石。 平らな所で目立つ、赤っぽい色の石。</p>
<p>○わらびでーら</p>	<p>蕨平。蕨が多く採れた場所。蕨は貴重な収入源だった。 十二坂を上り上がり、分岐を右に少し行つた付近。ここ で蕨の根を掘り出し、デンプン粉を作つた。付近は蕨を 掘つた後、整地しない凸凹の地表が見られた。</p>
<p>○ほつぱ</p>	<p>白砂川に落ちる北斜面一帯。東は松岩、東南は込山、南 端で八穀、上世立、西南は赤渋、松場、登屋、西は山村 広場付近で花敷、北は白砂川で和光原、大原に接する。</p>
<p>小字／日ヶ圍 (ひかぐら)</p>	<p>引沼の採草地だった。日照時間が少ない北斜面の意味か。 絆の森駐車場付近、下側の呼称。昔は畑や井戸があつた。</p>
<p>○みずのはら</p>	<p>十二ノ前。萱場採草地奥、松岩山の十二神下方。国有地。</p>
<p>○じゅうにのまえ</p>	<p>萱場。観音尾根を左に下つた引沼の萱場。</p>
<p>○かやば</p>	<p>蓬平。蓬の多い斜面の意。引沼の採草地。</p>
<p>○よもぎだいら</p>	<p>砂塚。ヤスミドの先。</p>
<p>○すなづか</p>	<p>中原。砂塚の先、以前は畑があつた。</p>
<p>○なかつばら</p>	<p>観音尾根。尾根の道脇に馬頭観音がある。左へ下れば萱 場採草地へ、右は蓬平採草地になる道の分岐点。</p>
<p>○かんのんおね</p>	

<p>○ほそがや ○ほそつばら ○よもぎだいら ○おおだわ (おおだ) ○おおくぼ ○ながびなた ○くろぜん ○じゅううにさま ○あまいけ ○またぎたいら ○てんぐだいら ○てんぐいわ</p>	<p>細萱。観音尾根付近の左下の萱刈り場へ入り左側の呼称。 細原。観音尾根の右上に位置、高い所にある草刈り場。 地名は細長い形に由来。 蓬平。細原の先、やや南寄りの緩斜面。蓬が多かった。 蓬平側に向かう斜面。十二様を祀る松岩山手前、北向き 斜面の呼称。オオダと同じか。尾根の反対側は雨堤。タ ワやダワは尾根が撓む鞍部や峠を指す地形用語。 大窪。尾根の南は世立側の雨堤で、尾根の引沼側にある 大きな窪地。 長日向。十二の前の奥。戦後、一時個人の開拓農家が入 植した。日照時間が長かった場所か。 寶蔵沢の東を流れる沢の滝。暗い場所に落ちる滝？ 十二様。山神十二神を祀る場所。様と丁寧語。松岩か？ 雨池。大原採草地へ行く道筋。休み所の先で、白砂川方 向に下り、丸木橋を渡り右岸に進む。手前の左岸で、特 に雨が溜まる窪でもない。対岸は和光原側の雨池になる。 マタギ平。引沼と世立道の合流点。近年の登山用地名。 天狗平。松岩登山道、尾根道に変換手前。登山用地名。 天狗岩。天狗平の先、尾根にある岩。登山用地名。</p>
<p>小字／花敷 (はなしき)</p>	<p>国道白砂隧道西側く医療・保健施設付近。東は山村広場 の東で日ヶ岡、南は登屋、打越、西く西北は白砂川で木 川附、北は同川で和光原に接する。つつじ荘、六合診療所、 温泉医療センターや山村広場、白砂ダムがある。</p>
<p>○ずいどう ○うしいわ ○ししやぐら</p>	<p>隧道。診療所付近で、森林軌道のトンネル跡付近。 牛岩。和光原から白砂川を渡河する旧橋（吊り橋跡支柱 残存）を左岸に渡り、少し上った場所。沢渡通いの道筋。 猪やぐら。医療センター西南端から引沼側へ旧道を約二 〇〇メートル、大日如来碑がある分岐付近。昔、付近を 猪除けの垣根で囲んだ所に由来する地名。</p>

<p>○めえはなしき ○はなしきしば ○でんすけたいら ○じょうがいわ ○まながのあたま ○まぐそさわ (まぐんさわ) ○のどのくち</p>	<p>前花敷。隧道く馬糞沢付近。 花敷柴。温泉医療センター付近。当地では、柴は燃料（薪） になる檜など広葉樹の雑木山の呼称。 引沼、打越上方を通る和光原への旧道筋、医療センター 手前の直線付近。山村広場へも通じた。 隧道上の岩場の呼称。城址ではない。古者は昔、対岸の 天狗山、諏訪尾根の金比羅山と当地は見張り場と語る。 診療所の建物付近。馬鍬の頭？由来不詳。 馬糞沢。白砂隧道手前付近、東から国道側に流れる小沢。 隧道工事で水脈が切断以前は歩行者の格好の水場だった。 喉の口。開運橋から上流を見ると、両岸が狭くなり、喉 の入口に見える。</p>
<p>小字／湯ノ上 (ゆのうえ)</p>	<p>花敷温泉や合流付近右岸一帯。東は白砂川で打越、引沼 東南は川端、南く京塚、樋口、西南で田代原、西は根広向、 北は長笹沢川で木川附に接する。花敷温泉や入山郵便局 付近は長笹沢川左岸だが湯ノ上に含まれる。</p>
<p>○おおどがわ ○ぬすつとかわら ○さんたいわ</p>	<p>花敷温泉前の白砂川の別称。狭い河谷を抜けた大川か。 盗人川原。GS付近から見た白砂川右岸。由来不明。寛 文三年の検地帳、引怒田・花敷分に「ぬす人」の地名。 三太岩。花敷の薬師堂く京塚への旧道途中、白砂川対岸 に体育館が見える付近一帯。昭和十二年の入山への車道 開削前、川中発電所隧道工事の資材を運送で運ぶため、 草津く品木経由道が来た。工事で転落した人の名に因む。 朝鮮岩。薬師堂裏から旧道を少し行った付近。昭和初期、 不景気の救農事業で草津く花敷の直結道路を開削。多く の朝鮮人労働者が働いた。サントイと同じ場所か。</p>
<p>○ちようせんいわ ○きっこざわ ○しみず</p>	<p>花敷く尻焼間で長笹川に合流する沢で、京塚く田代原間 の旧道下付近が水源。沢沿いに田代原の通学路が走る。 清水。薬師堂脇に出る旧道際。京塚分岐手前の崖上、美 味しい水で通学時に飲んだ。一時は学校プールにも利用。</p>

<p>小字／打越 (うつつし)</p>	<p>花敷温泉と野反方面分岐付近一帯。東は登屋、南は大神宮の尾根で引沼、西は白砂川で湯ノ上、木川附、北は花敷に接する。神社付近の小尾根を越す場所の意味か。小字名は尾根を越す所に由来。入山体育館やプールがある。以前は小学校、中学校等の文教施設があった。</p>
<p>○きつねやぶ ○はなしきこうざん ○しみず ○べんてんいけ ○べんてんやま ○ぬまじり ○しよんまおとし ○うまぼち ○ぬまんさか ○ぬしのかろうと ○たきんとこ</p>	<p>狐藪。花敷温泉口付近は、今は家並みが続くが、清水屋進出前は、家も無い場所だった。 花敷鉢山。戦後一時、清水屋商店一帯から褐鉄鉢を採掘し、太子駅まで運び出荷した。今は鉢山跡は住宅になる。 清水。花敷温泉口付近は、和光原に通じる隧道開削以前は豊かな湧水地点だった。 弁天池。今は消滅。池跡を埋め入山体育館が出来た。 弁天山。入山体育館付近。山は池の埋め立てに利用。 沼尻。入山体育館の下方。弁天池時代の水尻。 損馬落とし。死馬捨て場。ガソリンスタンドと清水屋の中間付近の国道大カーブ下、白砂川斜面。 馬墓地。損馬落とし後に、新たに設けた墓。花敷温泉口分岐を和光原側に一〇〇メートル程行った右側で、今は山林になる。 沼坂。隠居安兵衛脇から旧和光原道へ向かう坂道。 主の唐櫃。引沼伝説の龍の物入れ、畑中に箱形石がある。 滝の所。沼坂上り口付近。屋号で「後滝」がある。</p>
<p>小字／引沼 (ひきぬま)</p>	<p>国道沿い、大神宮南一帯。東く北は登屋、東く南は山岸、西く南は川端、西北は白砂川で湯ノ上、北は打越に接する。ガソリンスタンド等の商店、大神宮、公民館がある。 地名は引沼伝説とあるが、検地帳では寛文三年は引怒田、同十二年は引仁田で、ニタⅡ湿地、湿地が引くが語源か。</p>

<p>○てんまるやま ○べんてんさん ○だいじんぐう ○じょうどう ○にしつばら ○まました</p>	<p>天丸山。大神宮、弁天様がある尾根。打越と引沼境。 弁天さん。引沼の弁天様は、清水屋付近が故地、次に学校付近、今の天丸山と三遷している。 大神宮。引沼公民館裏、天丸山の尾根に祭祀。 十王堂。国道上の墓地にある十王堂が由来。 西原。豆腐屋くガソリンスタンド付近。 畑下。ガソリンスタンド裏、川側の場所。ママⅡ土手は地形用語である。</p>
<p>小字／川端 (かわばた)</p>	<p>白砂川左岸（京塚橋付近く上流の蛇行付近）。北く東は引沼、東南は山岸、南端は花輪、西は白砂川で京塚、西北は湯ノ上に接する。川沿いには町営住宅、民宿くじらや。</p>
<p>○どうしんいわ ○まえさか ○いばいし</p>	<p>道心岩。京塚橋左岸袂の下流の岩、岩下に道心坊が住んだことに因む。 前坂。車道下、町営住宅裏付近の旧道の坂道。 疣石。前坂にある大石。凹に溜まった水を疣につければ疣が治ったという素朴な民間信仰の対象。</p>
<p>小字／山岸 (やまぎし)</p>	<p>世立入口付近の西側一帯。東は登屋、赤渋、南は赤渋沢で新藪、南西は花輪、西は川端、北は引沼に接する。山根と同意で、山際であろう。</p>
<p>○まつたやしき ○ふたござわ</p>	<p>双子組と新藪組境の墓の南東小尾根。マツタの意味は不詳だが、小さな屋敷跡。この墓もマツタ屋敷の墓と呼ぶ。 双子沢。赤渋沢の下流。飲料水に適した水である。</p>
<p>小字／新藪 (あらやぶ)</p>	<p>コムテン（世立道脇）付近の東側一帯。東北は赤渋、東は上世立、東南く南は世立、西南は花輪、西北く北は山岸に接する。赤渋側に引沼の数軒分の水源がある。</p>

<p>○おたねつくば</p>	<p>麻種窪。世立坂の南側。以前は水田があり、蛸も見られた。工務店付近の道の右側。オは麻で、麻栽培に適した凹地か。</p>
<p>小字／登屋 (とや)</p>	<p>東は松場、南は山岸、引沼、西は打越、西北は花敷、北は日ヶ闇に接する。旧道引沼入口の七五三周辺(引沼側は除く)一帯の山地。山中の渡り鳥の通過場所、鳥網を張つたり、鳥を捕獲する人の小屋のあつた所か。</p>
<p>○しちごさん</p>	<p>七五三。世立側からの引沼入口。不審者を集落に入れないため注連縄を張つた所。今も祈禱札が置かれる。</p>
<p>○ごほんつじ</p>	<p>五本辻。七五三の所。引沼からの二本の道、和光原への道、採草地への道、世立に行く道、計五本の道が交差した所。当地の嘉永七年の道標は、右は沢渡、左は山道。</p>
<p>○しみずよこて</p>	<p>清水横手。和光原へ向かう旧道筋で、七五三へ隠居安兵衛等へ分岐する間の横道。</p>
<p>○たなよこて</p>	<p>棚横手。馬糞沢付近く七五三付近の山腹の道。地形が棚状の場所を通ることが由来か。清水横手とほぼ同じ。</p>
<p>○とやぎか</p>	<p>登屋坂。新屋組から七五三に向かう旧道の坂道。</p>
<p>○とやつばら</p>	<p>登屋原。民地が終わつた先、絆の森付近の採草地の呼称。</p>
<p>○ししぐね</p>	<p>猪久根。絆の森西下、日ヶ闇林道の上方。昔、耕地を荒らす猪が入れない久根を設けた所。デンスケ平の北側。</p>
<p>○ほほうたいら</p>	<p>絆の森から休み所への途中、道の右手一帯。意味不詳。</p>
<p>○やすみど</p>	<p>休み所。通称登屋原の休み場所。絆の森の先、馬頭観音のある小高い場所、ちょうど一服する場所。傍らには明治四十三年に建てた馬頭観音が置かれる。</p>
<p>小字／松場 (まつば)</p>	<p>林道日ヶ闇線、引沼と医療センター分岐地点北側山地。西北く東は日ヶ闇、南は赤渋、西は登屋に接する。採草地通いの仲間と待ち合わせをした所か。</p>
<p>○まつば</p>	<p>松場。マツタ屋敷と七五三の中間、炭窯付近。</p>
<p>○まつばのしば</p>	<p>松場の柴。民有地が多く、薪を採りに行った場所。</p>

<p>小字／赤渋 (あかしぼ)</p>	<p>世立の共同墓地付近一帯。東は日ヶ闇、南は上世立、西は新敷、山岸、北は松場に接する。林道日ヶ闇線が通る。鉄分を含む赤色、酸味の水が湧くのが地名の由来。</p>
<p>○かんのんどう</p>	<p>観音堂。世立の共同墓地にあるお堂。</p>
<p>小字／込山 (こめやま)</p>	<p>上世立集落の東方。西く東は日ヶ闇、南は八穀に接する。世立の採草地があつた。</p>
<p>○あまづつみ</p>	<p>雨堤。裏無から北へ続く尾根。上の棚の十二様の東上に位置する窪。世立の採草地で、雨後には水が溜まる凹地。</p>
<p>○うえんたな</p>	<p>上の棚。松岩山への車道が込山に入り、道下に畑が始まる手前付近道上。旧道脇、十二様石祠付近の呼称。棚状の平地。</p>
<p>小字／八穀 (はちこく)</p>	<p>町道引沼暮坂線が八石沢右岸を走る。東は村松、南は小前、上世立、井戸入、西は諏訪下、上世立、日ヶ闇、北は込山に接する。字の名は地内を流れる八石沢に由来。</p>
<p>○あらいた</p>	<p>洗板。揚葉橋左岸袂先、川寄りに棚状下の八穀沢の河床が洗濯板状で、洗い板と地名化する。</p>
<p>○たるみたいら</p>	<p>弛み平。揚場橋と天龍橋間、町道脇道下。地形の弛みか。大岩に通じる道と八石沢源流側に続く道に挟まれた山地。</p>
<p>○さつさむき</p>	<p>農場建物付近から窪を上つて眺望の良い峠に至る。大岩不動への最短ルート。昔の山岳雑誌に載る新暮坂峠か。</p>
<p>○あげば</p>	<p>揚場。八石沢上流で伐採の木を流し、引き上げた所。木の葉沢は揚場橋下で、沢に流した薪類を揚げた場所。</p>
<p>○うすさわ</p>	<p>硫黄山の沢を過ぎ、上流で八石沢右岸に入る沢。</p>
<p>○いおうやまのさわ</p>	<p>硫黄山の沢。旧暮坂道入口の先、山際に蛇籠がある手前の沢。昔の硫黄採掘跡を、終戦後に再試掘したという。</p>
<p>○このはさわ</p>	<p>沢の入口、右岸沿いに山中へ続く道跡が見られる。木の葉沢。揚場橋下方で八石沢に入る沢。</p>

○みずいで	水出。道は天龍橋左岸付近の車道を入り上り上げた付近。水源で世立簡易水道取水場。入山で最初の簡易水道、集落への距離約二、七〇メートル。一時、暮坂の神代牧場採草地利用を考えた。
○とうへいざう	世立の採草地。水出の東奥で、水出と八穀採草地の中程。松岩山麓の急斜面の場所だった。意味不詳。
○いしづか	石塚。町道と中山間農場分岐の橋付近の呼称。付近の沢をイシヅカの沢と呼んだ。
○はちこくさいそうち	八穀採草地。八石沢上流にあつた世立の採草地。
○びあじろ	八石沢上流にある農場建物付近。以前は八穀採草地だった。一枚萱。ビアジロを東に行った松石寄りの萱場。今は農場洗板。一枚萱の奥にある沢。河床が洗濯板状か。
○あれえた	琵琶窪。八石沢の上流部。由来は琵琶の形に似た窪か。
○びわくぼ	琵琶の滝。町道の牧水コース入口付近、八石沢に落ちる滝。
○たるとき	樽滝。八石沢上流の滝で、形が円く膨らんでいる。
小字／小前 (こぜん)	新道(牧水コース)の東、八石沢左岸北斜面の呼称。東は熊ノ沢、南は葡萄酒道、西は灰川、北は井戸入、八穀に接する。牧水道入口付近、八石沢の滝はコゼンと呼ぶ。
○しんどう	新道。見寄分岐から右に分かれる道。町道側から牧水コースに入り、見寄分岐に至る通りがオツウ坂道後の新道。
(しんみち)	小ゼン。牧水コース口より渡河地点間、八石沢の小滝。
○こぜん	小仙の平。硫黄山の沢対岸、八石沢支流の小滝沿い斜面。
○こぜんのひら	新道と引沼暮坂線車道の峠の中程、八石沢左岸の窪。
○おうちく	町道引沼暮坂線の峠付近北側一帯の呼称。意味不詳。
○おうちくざわ	八石沢から町道引沼暮坂線の峠方向に入る沢とも、中山間地事業建物付近で、八石沢左岸に合流の沢とも言ふ。
○はちこくとうげ	八穀峠。町道引沼暮坂線の尾根越え部分。営林署に長く勤めた古老は八穀の峠的な表現で使用。古道ではなく、最初は営林署作業道だったと語る。オウチク峠と同じ。
○おうちくとうげ	町道引沼暮坂線の最高地点。八石沢と暮坂側の間の尾根を車道が越える所。国有林作業道が前身になる。

小字／井戸入 (いどいり)	諏訪神社付近の南、八石沢左岸北斜面一帯。東は小前、南は灰川、西は見寄、岩ノ下、北は諏訪の下に接する。
○おつうざか	新道以前に暮坂に通じた坂。キャニオンの対岸、八石沢左岸に遺る。牧水の通った道は新道と呼び、それ以前の道が古道。坂を上げれば尾根になり、見寄分岐で合流。お通は人名か、地形の地溝状の谷か崖のウツが転訛か。短距離で世立と連絡、急坂で沢水も多く、新道を開削。
小字／諏訪ノ下 (すわのした)	諏訪神社周辺。東は八穀、東南は八石沢左岸で井戸入、西は岩ノ下、北は依田尾川で上世立八穀に接する。
○なかのじょうぐち	諏訪神社西尾根に堀跡、金毘羅山に曲輪、新道以前の古道おつう坂道尾根越え道跡、神社板壁に江戸期の落書。
○さつうぜんのたき	中之条口。ホリギリ沢へ下りた付近。中之条への出口か。寛文三年の検地帳には、世立内に中條口があり、屋敷十一軒とあり、村の中心付近と思える。
○すわじんじや	殺人の滝。金比羅山下、八石沢に落ちる滝。最大の滝で、キャニオン脇から滝への見学道。ゼンはセンが濁った。
○ほりきり	諏訪神社。諏訪ノ尾根にある。神社の板壁に江戸時代に泊まった方の落書があり、旅人の宿になったか。見寄分岐からおつう坂を経由する旧道が神社脇の尾根を横断。堀切。諏訪神社と金比羅山の間、尾根を横切る堀状の所。
○こんびらやま	大昔、金比羅山城址が見張り台の防御施設で掘ったか。
○すわのおね	金比羅山。諏訪神社西の小ピーク。金比羅宮の石祠。世立を一望出来る。入山へ入る不審者の見張り場所か。
○けんずりあな	諏訪ノ尾根。天龍橋左岸袂から西へ突き出す尾根。依田尾川と八石沢に挟まれた尾根。諏訪神社に由来。
	剣磨穴。天龍橋下を通る旧道橋跡から五メートル程下流、依田尾川右岸にある甌穴状の穴。直径一〇センチ、深さ二〇センチ程。大蛇が尻尾(ケン)で彫った伝説が『入山研究』に載る。

<p>小字／上世立 (かみよだて)</p> <p>○かみつばら</p> <p>○すぎな</p> <p>○やまぎし</p> <p>○おとし</p> <p>○どんがらまつ</p> <p>○かどまつ</p> <p>○なしのき</p> <p>○なみき</p> <p>○うらなしやま</p> <p>○ほつばのさわ</p> <p>小字／岩ノ下 (いわのした)</p> <p>○おおぜんのたき</p> <p>○てんぐのあしあと</p> <p>○だったのたき</p> <p>○はこのたき</p> <p>○きゆうないのたき</p> <p>○きゆうないぶち (きゆうないぶち)</p>	<p>標高九〇〇メートル級高地、関姓の集落。東は日ヶ間、八穀、南は諏訪下、世立、西は新藪、西ノ北は赤渋に接する。</p> <p>上ノ原。大神宮付近、車道上の畑一帯。</p> <p>杉菜。長塚節歌碑東、町道沿いの馬頭観音付近。地名は酸性地を好む杉菜が生えている所。</p> <p>山岸。杉菜の馬頭観音の上方、松岩方面への車道左側。落とし。山岸の奥にある死馬等の死んだ家畜を棄てた所。開田を試み用水を引き落とした窪が由来とも。</p> <p>雷松。天龍橋右岸手前、山本の門松があったが、昭和二十年頃落雷で枯れた、以後雷松と呼ばれる。</p> <p>門松。天龍橋右岸袂、町道道上。石造物がある付近、当地の明けの山本の門松代わりで、今は枯れて二代目。梨の木。上世立、洞のあった大木、日陰になると伐採。並木。関千代衛宅付近の呼称。屋号的な地名。裏無山。集落の東に見える端正な形の山。由来は裏表が同じ姿。アラヤ(アリアン) 沢上流部の呼称。</p>
<p>世立八滝の核心部、八石沢と依田尾川間の岩場。東は諏訪の下、南ノ西南は井戸入、西は小屋場、北は依田尾川で世立に接する。天狗の足跡岩もある。</p> <p>大仙の滝。世立八滝の最下段、国道脇、滝見ドライブインから近い。新道川(八石沢)に落ち、高さ約二〇メートル。天狗の足跡。大仙の滝左岸方の岩に足跡状の形がある。段々の滝。八石沢上流、高さ三〇メートルで二段、危険注意。箱の滝。段々の滝上方。高さ四メートル、淵の形が四角枡状。久内の滝。箱の滝上方。高さ三メートル。久内という人が引き込まれた河童伝説の滝。仙の滝の東に位置する。久内淵。『村誌』には見寄と世立境付近の淵で、伝説では世立の久内が、この淵に河童(魚)に引き込まれ死んだ。</p>	<p>たてあな</p> <p>○ふしぎたき</p> <p>○いどのたき</p> <p>○せんのだき</p> <p>○せんのした</p> <p>○ぼうずいわ</p> <p>○にんぎょういわ</p> <p>小字／世立 (よだて)</p> <p>○こもつげい (こもちがゆ)</p> <p>○すぎなのたんぼ</p> <p>○ひらいし</p> <p>○しだれぐれり</p> <p>○にしのおね (おね)</p> <p>○てつぼうびら</p> <p>○でんづか</p>

<p>堅穴。久内淵縁に川中発電所隧道に八石沢の水を引き入れる堅穴がある。</p> <p>不思議滝。久内の滝の上、高さ五メートル。姿が見えにくい場所であり、音だけが聞こえるので不思議の滝と命名。井戸の滝。高さ二〇メートル。周囲は岩場で、険しい場所。仙の滝。ホリギリ(依田尾)川に落ち、高さ一五メートル。集落からも見え、近くに駐車場もある。センシ滝である。仙の下。仙の滝の下付近で、昔は畑があった。</p> <p>坊主岩。人形岩と同じ。仙の滝下に続く岩場に、二本立つた岩が坊主に似る。今は樹木の成長で見えない。</p> <p>人形岩。滝下流沿いの岩場に人形形の岩がある。</p> <p>枝垂れ栗付近下側、集落は山本姓が過半。東は岩ノ下、南は小屋場、大霜、西は尾根で花輪、北は新藪、上世立に接する。木曾義仲が当地を離れる時、家来に当地に残り「世を立てろ」と話した伝説に因む地名とも。ふるさと活性化センターよつてがねえ館がある。</p> <p>子持ち粥。門松(堀切川)と庚申塔(アラヤの沢)に挟まれた、旧道沿い付近。義仲の側妻が身重でこの地に来た時、付近で子を産み、近くの沢の清水で子の粥を炊いたという世立の義仲伝説の地。付近の小平な場所が木曾義仲が住んでいた屋敷跡という伝説もある。</p> <p>杉菜の田圃。長塚節歌碑東、沢の手前町道下。</p> <p>平石。長塚節歌碑の土台石で、周辺の名になる。枝垂れ栗。県天然記念物で、周辺の呼称にも。</p> <p>西ノ尾根。道祖神のある尾根。世立と引沼間の尾根。世立集落の西に位置する尾根。</p> <p>鉄砲平。活性化センター下方斜面。世立側に見える斜面で、殿塚の西に続くヒラ。猟師が雉を待ったという。殿塚。活性化センター下方、世立側を向き、鉄砲平の東。</p>	<p>○こもつげい (こもちがゆ)</p> <p>○すぎなのたんぼ</p> <p>○ひらいし</p> <p>○しだれぐれり</p> <p>○にしのおね (おね)</p> <p>○てつぼうびら</p> <p>○でんづか</p>
---	--

<p>小字／花輪 (はなわ)</p>	<p>○やすみば 休み場。七五三付近で農道から作場道に入った道の脇。一休みに適した大石がある。 七五三。農道沿いの畑下付近、集落入口で、今も他との結界を意味する注連縄を張っている。 ○ゆみやだけ 弓矢竹。義仲軍の落人縫之丞が帰ったと、京塚から合図の弓を射て、照雄宅と由平宅間にある笹藪に落ちた。今もこの地には昔と同じ弓矢竹が茂っている。 ○どうおね 仙の滝駐車場右下に続く尾根の呼称。ドウが転訛しドウネと発音する。ドウはお堂に因むのか。 (どうね) ○やへいじ 弥平治。山世組付近の地名。昔の屋敷跡か。 ○めえやしき 前屋敷。公民館西南、農道上一帯。集落の前方。 ○まました 畑下。前屋敷西南、農道の大カーブ付近。ママは吾妻郡では土堤、土手の地形の意味。大間々も同様な用法。 ○そり 反。焼畑のソリでなく、反った形状の地形の意味だろう。ママシタの下方、道脇に小尾根と窪がある付近か。 ○すなほら 砂原。弥平治下方、畑下の西方一帯。 ○こくさぎ スナハラの下方、反の西側付近。意味不詳。 ○てんこう 大霜とこくさぎの間、右は農道の発電所隧道入口、農道の左上一帯の呼称。テンコウは意は不詳。 ○ありあんざわ あらやの沢とも。公民館の東、庚申塔付近の旧道脇の沢。『入山研究』に、沢の水は義仲縁伝説に因み、側妻の産湯に使用という。古老は本来は「洗上げの沢」という。</p>
<p>世立口バス停南へ喜久工務店南付近。東は尾根で世立、南は大霜、南へ西は白砂川で小沢、京塚、北西は川端、北は山岸、新藪に接する。一段と高い地形が突き出た先端ハナが、白砂川に円形ワ状に突き出し所に由来する。</p>	

<p>小字／見寄 (みより)</p>	<p>○よだてさか (えだつさか) ○おねのわき ○こやば ○てんぐじんじや ○よなきじぞう (こなきじぞう)</p>	<p>小字／小屋場 (こやば)</p>	<p>小字／大霜 (おおしも)</p>
<p>吾妻石材対岸、耕地が狭く古来「見寄七軒」と伝わる。東は井戸入、灰川、南は白砂川で川向、西も同川で小沢、北は岩ノ下、井戸入に接する。周囲が川と山に挟まれた地形、耕地約四町歩。地内に大日堂、ドンガラ(雷)松、弥藤五郎の抱き石がある。</p>	<p>世立坂。道祖神のある尾根から世立側へ下る旧道の坂の呼称。(一)内は世立坂の転訛と古老は語る。 尾根の脇。道祖神のある尾根の西、花輪側一帯。 東へ南は依田尾川で小屋場、西南は白砂川で小沢、西は花輪、北は世立に接する。滝見ドライブイン上方、農道入口付近へ世立に向かう道沿い。地名は霜が降りやすい地形とされる。 世立八滝入口、滝見ドライブイン周辺。東北は岩ノ下、東は八石沢で井戸入、南は見寄、西南は白砂川で小沢、西は依田尾川で大霜、北は世立に接する。川中発電所隧道入口がある。出耕作の農作業小屋に由来の地名か。 小屋場。国道から世立集落への農道に入り、少し行きチェーンの先にある川中発電所隧道入口に向かい、左上の斜面一帯。今は荒地だが、昔は耕地があった。 天狗神社。小屋場付近に祀る。天狗の足跡が信仰対象か。夜泣き地蔵。滝見ドライブイン庭。昔、当地は村外れの寂しい場所だった。間引きの対象で亡くなった子供の霊が泣く声が聞こえて来た。その供養で明治二十年頃建てた地蔵様という。入山に痲瘡が流行し、多くの子供が亡くなった。 親は伝染を畏れて亡骸を当地に埋めたが、悲しい子供の泣き声が聞こえた。子供の供養で建てた地蔵と語る方もいる。</p>	<p>世立八滝入口、滝見ドライブイン周辺。東北は岩ノ下、東は八石沢で井戸入、南は見寄、西南は白砂川で小沢、西は依田尾川で大霜、北は世立に接する。川中発電所隧道入口がある。出耕作の農作業小屋に由来の地名か。</p>	<p>世立坂。道祖神のある尾根から世立側へ下る旧道の坂の呼称。(一)内は世立坂の転訛と古老は語る。 尾根の脇。道祖神のある尾根の西、花輪側一帯。</p>

○どい	国道滝見橋付近の白砂川左岸沿いの見寄や大日堂へ通じた旧道筋。一帯は崖で、崖の中程に狭い道があった。「ドイの道は危ないから」と親から言われた所。崩れた所のドエの転訛だろうか。
○おおどい	見寄に向かう危険な崖沿いに旧道で、見寄の大日堂脇を過ぎ、最初にある長い崖道の危険個所の呼称。
○こどい	大ドイの崖道を越え、次の危険個所が短い崖道の呼称。
○しただん	下段。上の十二の先、見寄採草地のある山腹、下側一帯の通称。
○うわだん	上段。見寄採草地の上側一帯の通称。
○いどむかい	井戸向かい。見寄集落の東の沢の対岸。畑があった。
○さか	坂。見寄集落から採草地や暮坂へ向かう旧道沿いの坂。
○おてんぐさん	お天狗さん。集落の東、松の生える山に祭祀。旧道を少し上った馬頭観音の南に見える岩山。木製の社は壊れる。
○したのじゅうにさん	下の十二さん。採草地への坂道が一段落した所、杉や松の古木に囲まれ趣がある。昭和の石祠がある。
○うえのじゅうにさん	上の十二さん。尾根を越す所。屋根破損。明治の年号。
○せど	背戸。見寄集落の裏山の呼称。
○まつばら	松原。白砂川の橋を渡り、最初の家がある所との中間。
○どんがらまつ	集落手前、墓地や大日堂入口の道上にある大木。以前、落雷で木が傷んだが、落雷があった松の意味。
○あんばのおね	鞍馬の尾根。大日堂付近く白砂川に続く馬背に似た尾根。
○だいにちどう	大日堂。以前、墓地付近にあったが、崩落のため大正十四年に、現在地の尾根付近に移動。世立への旧道右脇。
○なかつくり	どんがら松と集落の間。地名は畑の真ん中の意味という。
○みちした	道下。集落に向かう道の下側。
○だきいし	抱き石。集落東端、道の北側。右近の抱き石の説明は間違い。力持ち弥藤五郎が抱いて運び、洗濯に使用という。
○つばいり	集落東端で、右近の抱き石から採草地へ向かう道の入口。
○いどり	井戸入。簡易水道の取水地。つば入りと十二の間。
○おおまがり	大曲。集落入口付近の家の下の白砂川の大きな曲折部。

○こまがり	小曲。集落入口の橋の下手、川の曲折部。
○そうぶち	見寄集落下の白砂川の淵。岸壁から転落死した方の名。
○おかねぶち	見寄バス停先の白砂川の淵。淵で亡くなった女性の名。
小字／川向 (かわむこう)	白砂川の大蛇行地形、吾石見寄工場周辺。北く東は白砂川で見寄、東く南は同川で灰川、西は細尾に接する。
○びわのくび	琵琶の首。吾石付近は白砂川の大蛇行場所。地形は国道側の入口が狭く、川寄りの東が広い地形、その形状に由来した地名。埼玉県にある中着田の地形も同様である。
○こさめみち	小雨道。梨木から旧道は尾根に上がり、見寄分岐から下り見寄へ通じる枝道が小雨道。白砂川は丸木橋で渡った。
○しただん	下段。白砂川沿い右岸の小名。
○うわだん	上段。白砂川右岸上方の小名。
小字／細尾 (ほそお)	国道吾石手前く鍋割沢右岸。東く東南は白砂川で菅川、西南は梨木、西は梨木原、北は久保入、小沢に接する。河岸一帯の平地は京塚の方が利用した耕地。
○ほそおおね	細尾尾根。昭和十二年の県道開削前、京塚の方が細尾にある畑に通うのにこの尾根の山道を下り通った。
○といし	砥石。細尾尾根から下る旧道が国道を横切った先。吾石とバルブ工場跡の中程、川寄りにあった砥石鉾山付近。
○おりつと	下りた処。細尾尾根の旧道を下りきった、国道合流付近。
○みやのまえ	宮ノ前。南信バルブ工場跡付近。今も事務所建物がある。
○すけがわ	何のお宮をさすのか不詳。
○かつばぶち	昔の隧道手前で、国道に流れ落ちる沢。
小字／小沢 (こざわ)	河童淵。大神宮裏付近の白砂川の淵。ここに棲む河童から腕を借りる腕貸し伝説のある淵である。
	南は吾石入口付近北く京塚南端に至る白砂川右岸沿い。東く東南は白砂川で花輪、大霜、小屋場、見寄、南端に川向、西南は細尾、西は久保入、北は京塚に接する。小沢沿いに京塚の耕地がある。

○きょうづかよこて	京塚横手。梨木く京塚間の旧道が平らな山腹を通る所。林道上、観音尾根手前西側付近。世立がよく見える。
○かんのんおね	観音尾根。京塚横手が終わり、尾根のカーブ地点に松の古木がある。根元に宝暦年間の馬頭観音像がある所。
○こざわおね	小沢尾根。林道上の旧道が観音尾根を過ぎ、次の尾根を越える所が小沢尾根で、京塚も近くなる。
○こざわ	小沢。京塚の方の耕地が沢の両岸にあった。京塚寄りの左岸に沿いの耕地を小沢と区分した。
○むこうこざわ	向こう小沢。小沢の右岸沿い一帯にある耕地の呼称。
小字／京塚 (きょううづか)	東南斜面に集落発達。東は白砂川で川端、花輪、南は小沢、西は久保入、沢向、北西は樋口、北は湯ノ上に接する。地名由来の経塚は京塚橋右岸袂付近にあった。
○かわばた	川端。京塚温泉付近の場所。
○まえがわら	前河原。集落前方の川原。川端と同義である。古者は「前川原の畑に行く」等の呼称を使った。
○かざあな (ふうけつ)	風穴。京塚橋上流、旧京塚橋右岸袂上。涼しい風が吹き出す所で、以前は蚕種保管に使用した。今も形は残る。
○からすいし	烏石。京塚橋下右岸、昔の川沿い、今の埋立地内にあった大石。色が黒っぽい石で、子供の遊び場だった。
○おきょうづか	御経塚。地名京塚の由来の場所。京塚橋右岸袂付近、道路開通前は塚状の土盛りがあった。当地は昔、山崩れが多くて難儀し、災難防止の願をと、石に経文を書いて埋めた所。残念だが、架橋時の道路工事で消滅する。
○こもりさん	子守さん。子育ての神様のため、お参りは子持ちの女性が多かった。当地の山口傳兵衛が勧請した社で、旧二月十八日が祭日。以前は長野原や赤岩からも参拝に来た。
○はば	ハバの地名は斜面が急な崖地形に変わる場所に多くある地名。京塚橋右岸に渡り、最初の右カーブ手前道上がハバ地形。付近には屋号「ハバシヨウ」の家もある。

○たけつびら	竹平。竹の生えている斜面（ヒラ）。場所は集落の中心を過ぎ、道が左に大カーブする付近。今も竹が生えている。
○だいじんぐう	大神宮。集落の北、伊勢神宮を勧請し小高い所に祀る。地形は斜面。山口盛雄宅裏付近の耕地の呼称。寛文三年の検地帳にも記載の地名。
○ひら	観音堂。集落中程にあり、裏には石造物がある。
○かんのんどう	菅ノ沢。子守りさん付近く観音堂脇を通り流れる沢。
○すげんさわ	瀬沢。普段は水が少ない沢。菅ノ沢の南から白砂川に入る。
○からさわ	合流付近は対岸が突き出た花輪地形。十三瀬がある。
○じゅうさんぶち	十三瀬。白砂川に瀬沢が合流する付近の白砂川の瀬。昔、一三歳の子供水死が地名の由来という。
○あともぎか	後見坂。水道施設脇から田代原へ向かう旧道入口付近。
○うまのりいし	馬乗り石。田代原への旧道入口付近、左下に砂防堰堤が見える付近、道の左。馬に跨る格好の踏み台の石で利用。
○しんでん	新田。江戸時代に開かれた耕地。田代原への旧道筋、今は杉林。水が湧く場所。休石の手前である。
○しんでんざか	新田坂。アトミ坂を過ぎて、周囲が針葉樹内の坂道。
○やすみいし	休石。新田が終わった付近の旧道脇。畑仕事の途次、この石付近で休み、情報交換や世間話を楽しんだ所。
○なかだん	中段。旧道京塚、花敷分岐の花敷側に少し行った道下。山中だが小平な所で、以前は畑だった。
小字／久保入 (くぼいり)	京塚集落の西方山地。東北は梨木への旧道で京塚、東南で小沢に、南は細尾、須立、西は鍋割沢川で梨木原、沢の右岸山地で品木原、西北で田代原、北は旧信州・草津道で沢向に接する。尾根の東西を京塚林道が走る。
○きょうづかかしら	京塚頭。花敷の薬師堂付近から品木へ向かう道筋の最高点。信州道と草津道の分岐で、道標や道祖神がある。
○どうそじん	道祖神。京塚からの旧道が、尾根で右は信州、左は草津へと分岐地点にある道祖神付近。草津への旧道は、道祖神付近から今の林道側に下ったが、跡は消滅する。

<p>○ほりわり</p>	<p>堀割。鍋割り沢手前、道祖神付近で信州、草津への旧道分岐。堀割は林道京塚線から旧道に向かう途中、尾根の切り通し形状に因む呼称。改良道路で開削された。鍋割。京塚頭の下。窪を鍋割沢が流れる。形状に因む？</p>
<p>小字／沢向 (さわむこう)</p>	<p>林道京塚線が鍋割沢川を渡る手前、沢の上流山地。東は道祖神で京塚、南は沢沿いで久保入、西は田代原、北は旧道で樋口に接する。</p>
<p>○あかぞろ</p> <p>○うしろつさわ</p> <p>○きつこざわみね</p> <p>○めーつたな</p> <p>○おくでつたな</p>	<p>京塚の道祖神から、右の田代原方向へ行った道脇。赤色の壁土に因む。日当たりが良く、穴(室)に野菜を貯蔵。後沢。鍋割沢上流の呼称。京塚集落の後方の意味。田代から来て、右が京塚、左が花敷の分岐付近の山。前棚。鍋割沢の久保入橋を右岸に渡り、その先で右に入る。周囲を国有地に囲まれた耕地で、棚状の平地。奥出棚。前棚の奥の棚状の平地。国有地に囲まれた耕地。小分けて運ばれた収穫物を、ここにまとめて運んだ場所。</p>
<p>小字／樋口 (とよぐち)</p> <p>○きつこざわ</p>	<p>東は京塚、南は旧道で沢向、西は田代原、北は湯ノ上に接する。地名は沢が岩下で落ちる姿が樋の落ち口に似る。普段は水量が少ない沢で、田代原から流れ出し、水が落ちる樋口を過ぎるとキッコ沢と呼び旧道沿いに窪を流れ、花敷葉師堂の二〇〇メートル程先で長笹沢川に落ちる付近では屋敷沢と呼ばれる。</p>
<p>○ななまがり</p> <p>○ふたついし</p> <p>○びようぶいわ</p> <p>○いわした</p>	<p>七曲がり。キッコ沢沿いの曲折する急坂のこと。二つ石。キッコ沢沿いの坂道の途中にある二つの石。こは一休みをする場所だった。屏風岩。キッコ沢の峯に上る急坂正面に見える岩。以前、付近は尻焼や根広集落が見える場所だった。岩下。キッコ沢源流付近。岩下の日溜まりで、春になると山菜がよく採れる所だった。</p>

<p>小字／品木原 (しなぎはら)</p> <p>○うえのはら</p> <p>○たかとう</p> <p>○じょうとくはら</p> <p>○うばいしさわ</p> <p>○うばいし</p> <p>○うばいしはら</p> <p>○こぐらみち</p> <p>○おおやち</p> <p>○でんじゅうさんのおね</p> <p>○あなんた</p> <p>○がんやき</p> <p>○みずくんば</p> <p>○みずくんばのぶんぎ</p> <p>○かそうばあと</p>	<p>北ノ東北は大久保、東は沢向、東南は久保入、南端で梨木、須立、西南で品木、西ノ西北で田代原に接する。上ノ原。品木原に人が住む以前の呼称。集落上方の意味。土地の方は車道の田代原分岐ノ京塚道付近という。一、〇八二、五メートルの三角点付近、品木の採草地。京塚から林道大カーブを曲がり、鍋割沢川対岸に見える高地。常徳原。京塚からの車道が左は品木ダム、右は田代原の分岐付近、旧道は道上の耕地一帯。</p> <p>姥石沢。田代原の東、ヘリポート跡北、平地を流れ小沢。姥石。姥石沢左岸にある大石。古い白根信仰時代に、この先への女人立ち入り禁止の結界石と考えられる。</p> <p>姥石原。前記、姥石周辺、採草地の原の呼称。小倉道。品木から来る小倉への旧道筋、山本宅付近。大谷地。山本宅付近のジメジメした谷地。水田だった。旧京塚道とキッコ沢沿い学校道分岐付近の尾根。デンジュウという方に因む地名だろう。</p> <p>京塚ノ田代原への道が、キッコ沢の峯を過ぎた先、道の狭い岩場付近。ここは日溜まりで風もない格好の休み場。岩焼き。旧道がキッコ沢の峰を過ぎた狭い所。岩を焼き崩して道を開いた場所が由来か。アナンタとほぼ同じ所。水汲み場。後沢と別の沢の合流付近、木橋や湧き水があった。旧小倉道分岐近く、出耕作や採草地の方の水場。水汲み場の分岐。水場付近で、品木ノ小倉間の道と、京塚ノ田代原旧道が交差した。小倉道は尾根越えで日本曹達の硫黄山跡を通り行った。火葬場跡。堆肥置き場の東方。病で死去した方を火葬。</p> <p>大正頃、京塚集落の出耕作地が発展し定住集落になる。東は沢向、久保入、南は品木原、品木、西沢、南西は大沢右岸山地で草津町、西は大沢、西山、北は南小倉、根広向、湯ノ上に接する。高冷な土地で広大な平地を活かした専業農家がある。旧信州道と草津道が分岐する。</p>
<p>小字／田代原 (たしろはら)</p>	

<p>○おおくぼ ○おおくぼかしら ○びょうほ ○いつぼんまつ ○だいじんぐう ○ぶんぎのまつ ○あつちおおさわ ○うえんてーら ○やち ○うしろつざわ ○おおさわ ○ほりぐち ○なかつしろ ○みなみきどはば ○じゅうにさん</p>	<p>○おおくぼ 大久保。以前は小字名だった。一本松付近から東に続く長い窪地。以前は京塚の方の茅刈り場、今は耕地である。大久保頭。一本松付近の西側に続く窪。以前は田代の方の茅刈り場だったが、今は耕地になる。頭は窪の高い所。苗圃。ビョウフとも発音。集落の西の丘陵。以前、営林署の苗木を育てた場所だった。</p> <p>○いつぼんまつ 一本松。道の目印になった松。根元の山神石祠は、右は京塚や中之条、左は小倉や越後を教える道標を兼ねる。</p> <p>○だいじんぐう 大神宮。田代集落の中央付近、伊勢宮を勧請し祭祀。</p> <p>○ぶんぎのまつ 分岐の松。地元の方に親しまれた松だが、製材が購入し反対を受けたが伐採。根元にある享保年間の大日如来碑は、右が信州道、左が草津道の道標、交通の要衝だった。</p> <p>○あつちおおさわ 分岐の松や車道四つ角付近から大沢川、草津町境付近。上ノ平。分岐の松の東、車道の四つ角付近ノ田代原集落間の平らな耕地。</p> <p>○やち 谷地。田代原の集落周辺。以前は谷地状の場所だった。</p> <p>○うしろつざわ 後沢。山口牧場の肥料置き場付近の窪を流れる沢。</p> <p>○おおさわ 大沢。豆腐屋付近の呼称。</p> <p>○ほりぐち 堀口。豆腐屋付近の南方に位置する平な場所。</p> <p>○なかつしろ 中田代。苗圃と山口牧場の肥料置き場付近の間、昔の通学道沿いの平らな所。</p> <p>○みなみきどはば 南木戸中。木戸中の十二様の南斜面。</p> <p>○じゅうにさん 十二さん。木戸中の十二様とも。西山林道ゲート手前、林道北側の尾根に祭祀。京塚、梨木、田代原、荷付場集落で祭祀。昭和三十六年に石祠建立。祭日は五月八日。</p>
<p>小字／西沢 (にしきは) ○てんぐやま ○てんぐいわ</p>	<p>東は須立、南は諏訪ノ原、西は草津町境、北は田代原、東北ノ東で品木に接する。大沢川と谷沢川合流付近一帯。天狗山。湯川と谷沢川に挟まれた尾根。集落前方にあった。水没せず、湖岸より見える。尾根に天狗の祠を祀る。天狗岩。天狗様の石祠付近で、付近は木が生えない岩場。</p>
<p>○くらがさか (くだりさか) ○あがりあげ ○しんまわし ○おおでーら ○にしぎわむかい</p>	<p>○くらがさか 下り坂の意味か。草津へ行く入山衆は急なクララ(下り)で大変だと言った。天狗山と湯沢の間を走る旧道の坂。上がり上げ。急坂の終点、大縦があり草津原になる。新回し。上がり上げの急坂の迂回道、富士氏が整備。大平。谷沢川沿いの平地。以前は畑地だが、今は山林。</p> <p>○しんまわし 西沢向。谷沢川右岸、大平の対岸付近。平地で前は畑地。</p> <p>○おおでーら 品木ダムノ上州湯ノ湖付近。東は須立、南は湯川、大沢川で西沢、北西は田代原、北東は品木原に接する。水没前は十数戸の集落、分校もあった。ダム完成後、住民は品木原、草津原、諏訪原等周辺に移った。信濃のシナと同じ、シナの木に由来の地名。</p>
<p>小字／品木 (しなぎ) ○したよこて ○うわよこて ○せんした ○かみのき ○くぼいり ○なかくぼいり ○うわて ○しもて ○たついし ○くるまざか ○かんのんさん ○じんのうえ ○じんのさわ ○ごうろ</p>	<p>○したよこて 下横手。品木集落から諏訪ノ原への旧道筋、直線状の道。</p> <p>○うわよこて 上横手。旧道の下横手の先、急カーブが終わった先の直線状の道。この先、馬頭観音の所を過ぎると諏訪ノ原。</p> <p>○せんした 仙下。湯の湖に諏訪原から注ぎ込む滝の下。今の砂防ダムの付近、橋の下になる。</p> <p>○かみのき 神ノ木。品木集落上手から田代原への旧道筋、急な谷間沿いの呼称。坂が終わると品木の十二様石祠になる。信仰由来を思わせる地名だが、周囲の木は伐採したという。</p> <p>○くぼいり 窪入り。神ノ木のあった沢の呼称。窪の奥の意味。</p> <p>○なかくぼいり 中窪入。品木から田代原へ向かう旧道に入り、右から小沢が流れる最初の窪。窪には枝道が入った。</p> <p>○うわて 上手。品木集落の上方、高い場所。</p> <p>○しもて 下手。品木集落の下方。学校や水車周辺。</p> <p>○たついし 立石。谷沢川沿い、下の平上方。大きな立った石の呼称。</p> <p>○くるまざか 車坂。谷沢川沿い、集落の共同水車付近の坂。</p> <p>○かんのんさん 観音さん。百八十八観音一帯の通称。</p> <p>○じんのうえ 百八十八観音付近一帯。</p> <p>○じんのさわ 百八十八観音の東下を流れる沢。</p> <p>○ごうろ 谷沢川の橋の上流、右岸崖下、崩壊地で石がゴロゴロしていた。石の多い崩壊地の典型。箱根の強羅温泉は好例。</p>

<p>○やのした ○くぞばだいら ○ささびら ○せんした ○おりんがせん ○したのたいら ○どばし ○えりい</p>	<p>谷ノ下。大沢左岸で、対岸はゴウロ。大沢川左岸沿い上流は岩場が続いている。ダム湖終点付近から奥になる。葛葉平。谷ノ下の始まる付近、馬の飼料の葛葉の多い平。笹平。大沢川左岸の岩場沿い。付近は熊笹が茂り、豊富な湧き水がある。山椒魚が棲み、以前は山葵を栽培した。仙下。大沢川沿い、笹平とオリンが仙の滝の間、川原。笹平から一キロ程上流の大沢川に落ちる滝。高さ一五メートル程、滝の下までは品木の方の生活圏。滝は人名か？下の平。大沢川と谷沢川合流付近下方。水田があった。土橋。ジンの沢に架かる橋。旧道梨木道と京塚道が分岐。土橋の先、品木の民有地が終わる付近の道の右側。</p>
<p>小字／須立 (すだて) ○すだてわかされ ○こすだて ○みずなし ○がにざわ ○うえのはら ○くぞばたいら</p>	<p>品木ダム下流、湯川沿いの両岸山地。東北は梨木原、久保入、東は梨木原、東南ノ南は梨木、西は西沢、品木、北は品木原、梨木原に接する。 須立分岐。梨木ノ品木への旧道の、須立方面への分岐。古須立。品木と梨木間の旧道から分岐し、須立の民家跡に下る途中、畑があった。昔、集落の前身があった所か。水無。①古須立へ下る道で、右(西)側を流れる沢。伏流か。②古須立対岸、クゾ(葛)場平の上方。今は山林。地名と異なり、山葵栽培をするなど、水はあった。 蟹沢。ガン沢とも。須立に下る途中で、蟹が多かった沢。上ノ原。梨木ノ品木を結ぶ旧道上一帯。今の品木原。葛葉平。須立の民家跡の対岸、山林。葛が多かった所。</p>
<p>○はらざか 小字／梨木原 (なしぎはら)</p>	<p>梨木集落の北方、以前は採草地だった。鍋割沢川右岸で南北に分割。東は鍋割沢川で久保入、細尾、南は梨木、西は須立、西北は品木原、北は久保入に接する。旧道の京塚分岐から品木原への道ノ上ノ鍋割沢付近に至る。 原坂。京塚分岐より品木原、小倉への坂。採草地の原。</p>

<p>小字／梨木 (なしぎ) ○うつつさわ ○ふるやしき ○なかだいら ○はしのうえ ○たつわり ○うままわり ○やまね ○きょうづかぶんぎ ○さんぼうつじ</p>	<p>湯川が白砂川に合流手前左岸、集落や耕地は南面緩斜面。東北は鍋割沢川で細尾、東は白砂川で向山、南は湯川で荷附場、南西は諏訪の原、西ノ西北は須立、北は梨木原に接する。集落の北で旧道が草津、京塚、小倉に分岐。烏通沢。荷付場境、草津から流れる湯川の梨木付近での呼称。地溝状の狭い谷の「うつ(空洞)」に連なる語源か。古屋敷。山本宅北東の呼称。今は畑だが屋敷跡だろう。中平。梨木集落入口の北方、道沿いの平な場所。橋の上。梨木集落入口付近。以前、対岸の採草地や応徳、湯の平温泉へ連絡する橋があった。その橋の上にあたる。集落の西、周囲は耕地、墓地脇のお堂周辺。耕地が直線的な区割になっているのか。 馬廻。お堂付近の平な場所の呼称。 山根。旧道は尾根に通じるが、上り口の山際。畑である。 京塚分岐、三方辻。旧道は梨木から尾根に上り、北端で三方に分岐。馬頭観音の道標は、右が京塚、中が小倉、左が草津を教えていたが、観音像は近年行方が不明。 三方辻。左と同じ右は京塚、中は小倉、左は草津道の辻。</p>
<p>小字／向山 (むけえやま) 小字／大木平 (おおきだいら) ○おおさかい ○くまのさん ○おうどくやしき</p>	<p>梨木集落対岸一帯の山、梨木の採草地だった。東北ノ東は山地で菅川、東南は小森口、南は応徳、西は白砂川で梨木、荷付場、大木平に接する。 草津と野反への国道分岐付近。東は河岸段丘面の耕地ノ西は諏訪の原境の山地。東は白砂川で向山、応徳、南は足倉、西端は諏訪の原、北は荷付場に接する。 大境。国道東側の大木平耕地中央に熊野の社に向かう道が走り、耕地を南北に二分する。昔、南側は当地に住んでいた湯本氏が所有し、北側は荷付場の方が持っていた。土地を二分する境道の呼称。今は荷付場の方が全て所有。熊野さん。大木平の東端、熊野神社を勧請。 応徳屋敷。熊野社の花敷寄りにある畑。応徳温泉を開発した山田氏の屋敷跡。</p>

○しちべいやしき	七兵衛屋敷。分岐を草津側五〇メートル先カーブ右下の竹藪。この土地に定住した先祖様の屋敷跡。向かいに祠がある。
○しちべいいなり	七兵衛稲荷。屋敷跡の向かい側道上にある木製の祠。
○したのじゅうに	集落周辺一帯。北へ東北は湯川で梨木、東は白砂川で向山、南は足倉、西は諏訪ノ原に接する。古くから草津と経済的な結びつきが強い。草津へ向かう急坂に備え、馬荷を付替えた所に由来か。ニンバ（荷場）も同じ意味。
○かんのんさん	下の十二。旧道は簡易水道上で国道を横切るが、その上の旧道沿いに祀った山神十二。昔の休息や待ち合わせ場。観音様。上下の十二様間の旧道脇。鉄塔入口の馬頭観音で、左は草津、右は山道の道標。右はミスナシへ通じる。
○うえのじゅうに	上の十二。旧道が鉄塔脇を過ぎ、国道交差点地点の下の山際に、中沢氏が建てた十二様がある。休息場だった。
○わかみやさん	若宮さん。当地に定住した先祖の落人を祀ったという祠。集落を見下ろす西の山腹、木の祠や天神様の石碑もある。
○こやすさん	子安さん。寅さんバス停付近、左の旧道に入ると、社がある。子安神社は、今も当地の方々に大切に守られる。
○さがり	下がり。お堂裏の畑。集落下手。堂裏、田ノ尻と混じる。堂裏。観音堂裏側一帯の呼称。耕地が多い。
○どううら	大石。観音堂と集落の間、旧道脇にある大石の呼称。
○おおいし	田ノ尻。国道上の耕地。古者は当地に水田はなく、周囲を河川に囲まれた地形で、棚の尻が田ノ尻に転訛という。
○たのしり	屋敷のハバ。集落の北側一帯。ハバは崖、傾斜地の呼称。
○やしきのはば	車沢。集落前の沢の別称。以前、水車が三台程あった。
○くるまざわ	集落前を流れる沢。ウツウは山中の寂しい所の地名。
○うつつざわ	新開橋。今の国道の前身、県道開通当時、集落前の沢に架けた橋の名称。当時の文書はウツウ沢に架設とある。
○しんかいばし	ウツウ沢の水を集落に取水する場所。簡易水道以前は飲み水で利用した。今は水質の心配もあり利用しない。
○みずかけ	蟹沢。集落前を流れる沢上流、昔は沢ガニが多く採れた。草津への国道の中段付近、右に須立方面への林道ゲートが見える付近一帯。水の多い場所という。
○がんざわ	
○みずなし	

○さわいり	沢入。集落の前を流れる沢の上流。意味は沢の奥。力自慢の弥藤五郎が抱えた石を捨てた大石があるという。
○うつつこし	打越。沢入の奥の呼称。地名から尾根越えの場所か。
○にほんまつ	諏訪神社付近一帯、耕地も多い。東へ南は荷付場、南端は足倉、西は草津町境、北は西沢、梨木に接する。ダム竣工後、品木の方が移る。入山の鎮守諏訪神社がある。
○すわじんじや	二本松。荷付場からの旧道坂道が終わった付近の尾根。
○みずのくぼ	旧道跡は今は笹藪。入山の伝説、右近と左近に困む老松。諏訪神社。明治六年に入山村の村社、同十二年には火災に遭うが再建。同四十四年には入山地内の白根神社二座、伊勢宮四座、諏訪神社、赤城神社等を合祀した。
○かんすけおとし	水の窪。諏訪神社境内にある水の湧く窪。今も湧き水は諏訪神社で利用する。
○さくらざわ	国道脇の中村自工付近へ西奥山地。東は白砂川で応徳、南は大字小雨、西端は諏訪ノ原、北は大木平に接する。地名はアシノ葎、クラノ岩場の意味か。
○どくみずのさわ	勘助落とし。湯の平温泉入口の先、国道上の旧道難所。眼下に湯の平温泉一望、コンクリート吹き付け上方、目の眩むような岩場。入山の方が墜落死をした所。
○おうどく	桜沢。修理工場前の沢の名称。以前、沢沿いに山桜が多く咲いていたという。
○小字／応徳	毒水の沢。修理工場裏を流れる沢。白砂川合流部の対岸は応徳温泉源泉。沢水が温泉を感じさせる白濁した沢になる。飲むのには躊躇する水で毒水と名付けたか。
○小字／足倉	湯の平温泉周辺。東は小森口、南は大字生須、西は白砂川で足倉、大木平、北は向山に接する。白砂川河床にあつた応徳温泉は流失、今は道の駅に引湯し、応徳温泉くつろぎ湯で利用する。年配の方はオウドクと発音する。
○小字／諏訪の原	効能大Ⅱ応毒を、佳字の応徳にしたのか。
○すのははら	

○ぬくいくぼ	温い窪。マラ石峠を越えた中腹を通る平らな道沿い、日当たりの良い場所である。
○たるざわ	樽沢。応徳温泉の源泉の一〇〇〇程下流、白砂川左岸に合流。
○とちぎざわ	栃木沢。湯の平温泉一〇〇〇程下流で白砂川左岸に合流。
小字／小森口 (こもりくち)	東は旧暮坂道の南、北は尾根境。南は旧暮坂牧場続きの尾根境。東は旧町境。西は湯の平温泉へのハイキングコースの一〇〇メートル程行った地点。小森口国有林時代は、駒ヶ沢ダム付近まで含む。暮坂牧場後、名称が暮坂に
○ちようちんざか	提灯坂。沢渡や長野原へ馬を牽き通う方が、夜が明けて木の洞や枝に提灯を保管し、帰路も暗くなると利用した。一点に特定できないが、後坂／暮坂峠付近。歴史的呼称。小森口川。明治四十三年の村誌は、駒ヶ沢川をこの名で記している。一帯の国有林は小森口国有林と呼ばれる。
○うえのやち	上の谷地。御師ノ沢沿いの谷地。下方に下の谷地がある。
○とうげのやち	峠の谷地。暮坂峠駐車場下。飲料水を取る。ヤチ＝湿地。
○おおやち	大谷地。神代牧場牛舎上の谷地。飲料水の水源。
○たかまつざわ	高間沢。畜産団地、上の牛舎と下の牛舎の間を流れる沢。昔、沢筋を高間新道が走り一番低い尾根を越え、高間の大黒様付近で合流する。
○おしがはし	御師ヶ橋。旧県道と旧暮坂峠からの道が峠の西で合流し、沢を渡る場所。御師殺害事件の話や木の祠もあった。
○めおとばし	夫婦橋。県道から見ると、二ヶ所が落ちている所。
○わらびばし	蕨橋。県道と旧道が分岐する埋め土の丘付近。
○ぜんまいばし	薇橋。旧県道が駒ヶ沢を渡る所。
○こまよせばし	駒寄橋。暮坂集落東端空家東のカーブ、駒ヶ沢を渡る。
○あとざかばし	後坂橋。直売店と道標がある旧道入口、東側の沢。
○やしきばし	屋敷橋。花栗の里付近にあった橋。
○くれさかばし	暮坂橋。花栗の里の西で、駒ヶ沢を渡った橋。
○かしわざいだいら	柏木平。十二の森東南、道上の耕地。柏の木が多かった。
○ほていざわばし	布袋沢橋。旧県道は駒ヶ沢左岸で、布袋沢に架けた橋。

○じゆうにのもり	十二ノ森。町天然記念物大櫓の所。山神十二の石祠あり。
○じゆうにばし	十二橋。今の十二橋と異なる。橋を渡る手前が十二の森。
○おおはし	大橋。昔の県道は駒ヶ沢左岸を走り、牧水歌碑のある湯の平温泉口手前の橋。ここで沢を渡り今の県道に合流。
○まつのきだいら	松の木平。釣り堀付近の十二の森付近の古称。
○おおにたばら	熊川宅南の湿地。ニタは沢筋などのジメジメした所。
○やしきのたいら	屋敷の平。花栗の里付近、昔は桑や屋敷跡の段があった。
○ひのまえとうげ	日ノ前峠。湯の平側へ水を引いた堰跡付近。荷付場や梨木側では、朝日がいち早く上がる尾根の前方にある峠。
○まらいしとうげ	湯の平温泉への歩道の峠。以前、男性器状の石が道沿いに突き出ていたという。今は沢に落ち見えない。応徳境。
○ほていざわ	布袋沢。江戸時代、入山と赤岩で境界争いがあった。布袋沢を赤岩側で境と主張した。十二の森の東。
○なしのきざわ	梨の木沢。赤岩と入山の抗争で、入山側が主張した境。
○よつたりざわ	十二の森を過ぎたカーブ付近の沢。
○あつたりざわ	四人沢。境界争いは入山側が勝利。勝訴の勢いで、この沢が新しい境界になる。鍛冶屋敷手前の大カーブの沢。
○あとざか	後坂。暮坂から旧道に入り、尾根までの曲折する坂道。付近一帯に提灯坂の異名もある。
○あとざかとうげ	後坂峠。後坂を上り上げた峠。峠道にあった石造物は材木運搬車の邪魔等で、今は馬頭観音一基が残るのみ。
○しようじいわ	障子岩。花栗の里北方で、西向き側が崖。障子状の崖か。
○たかましんどう	高間新道。高間沢の峠寄りの沢を上り、一番低い尾根を越えた道。高間大黒の岩付近でメインの道に合流し、高間牧場管理棟付近に出た新道。
○かわなかしんどう	川中新道。暮坂峠と百番観音の中間程の低い尾根を越え、窪から町境付近の尾根沿いを通り、牧場入口前から檜窪に通じる。中室方面で聞く川中新道とは違う。尾根沿い道に百番観音配置。川中入口の道標に記す草津新道か。
○しんみち	新道。花栗里付近から世立方向に抜ける道。

<p>小字／菅川 (すげがわ)</p>	<p>吾石見寄工場対岸付近、人家のない山地。東は灰川、南は小森口、西は菅川、西は向山、北は白砂川で細尾。</p>
<p>○すげがわやま</p>	<p>助川山。見寄集落の南、助沢の南側の斜面や尾根一帯。</p>
<p>小字／灰川 (はいがわ)</p>	<p>古老はヘイガツパと呼び、場所は後坂峠く見寄分岐、横手のヒラ(斜面)。白砂川に向かう斜面。見寄の採草地もあつた。東は小前、東南端で葡萄酒、南は小森口、西は菅川、北西端は白砂川で細尾、川向、北は見寄、井戸入。</p>
<p>○でんぼら ○しんみち ○さくらくぼ</p>	<p>見寄東南。助川山の東統きの山。法螺吹き炭焼きの名。新道。牧水が通つた旧道で、それ以前はキャニオン対岸尾根のオツツ坂を上り、見寄分岐付近に出る道が古道か。桜窪。見寄採草地から花楽里方面への道沿いの窪。</p>
<p>小字／葡萄酒 (ぶどうみち)</p>	<p>暮坂峠の西、後沢入口直売所東側一帯にある国有林の呼称。</p>
<p>○おうちくとうげ ○しんくれさかとうげ</p>	<p>町道引沼暮坂線の最高地点にある峠。古老は昭和十二、十三年頃、営林署で歩道を造り、後に林道に拡張したと語る。新暮坂峠。『上越の山』の地図に載る。古老は八石沢奥から尾根越えて大岩不動の祭日には行つたという道の鞍部。</p>
<p>小字／熊ノ澤 (くまのさわ)</p>	<p>八穀沢上流部一帯。国有林十林班。昔の大岩不動に抜ける山道付近が東端。</p>
<p>○くまなんざわ ○おうちくざわ</p>	<p>八穀沢上流部の呼称。大正十年刊『山に忘れたパイプ』の地図もこの地名を使用。熊の沢の発音が転訛した。中山間事業建物付近、右(南)から八石沢に入る沢。</p>
<p>小字／村姿 (むらまつ)</p>	<p>八石沢の上流一帯で、北は松岩山に連なる。以前、国有林は八穀を含み十二林班と呼んでいた。</p>

<p>小字／松岩 (まついわ)</p>	<p>松岩山一帯。地形図に載る松岩山は一、五二メートル。古老は松岩山への途中、左に入った松と岩のピークを松岩山と呼び、山頂に山神十二の石碑があり、松岩山と刻む。</p>
<p>○よもぎ ○まついわ</p>	<p>蓬。山神十二様の石碑のある山に続く。引沼の採草地。松岩。一、五二メートルの三角点のある松岩山でなく、登山道では松岩山手前で左に入った一、三二五メートルの山頂。文字通り松と岩の山で、大正十二年の十二山神の碑がある。</p>
<p>○ほうだい 小字／三浦 (みうら)</p>	<p>松岩山北斜面を三浦沢が流れ、大原別荘地南東で白砂川に合流する。この沢に因み、一帯の小字名になつた。</p>
<p>○ふたついいし ○ききょうだいら ○てつぼうざわ</p>	<p>二つ石。松岩山く相倉山への尾根、一、三四〇メートルの三角点があり、周囲は国有林。岩茸の採れる場所。桔梗平。四万への峠、つじヶ丘から松岩方面へ尾根を進んだ所にある平らな場所。鉄砲沢。三浦沢が南に一八〇度大転換する地点があるが、その地点で東方から合流する沢の呼称。</p>
<p>小字／相ノ倉 (あいのくら)</p>	<p>四万境の標高一、五六七メートル、白砂川に落ちる相ノ倉山西斜面。一帯は人家のない山深い土地である。</p>
<p>○かさまつばし ○じゅうにしや ○だごのさわ ○げたきざか</p>	<p>笠松橋。大原から下り、白砂川左岸に渡る四万への旧道に架けられた橋の名前。肘曲がり沢が本流に合流の下方。入山林区笠井氏と、四万林区松岡氏の姓の一字に由来。十二社。笠松沢を渡り、旧道沿いに祀つた山神の社。四万への尾根道から北、肘曲がり沢側にある沢。下駄木坂。旧四万道筋。白砂川を肘曲がり沢下方で左岸に渡渉、川岸から始まる急坂。下流には下駄木沢がある。</p>
<p>○げんしろうしみず ○だるまいし ○ふたついいし</p>	<p>源四郎清水。相倉山の鞍部(峠)下の旧道脇に湧く清水。達磨石。万沢林道筋の尾根、一、三四〇メートル余の三角点の所。双ツ石。達磨石の別名。昭和十二年刊『上越の山』の図。</p>

<p>○あかざわのかしら ○ちゅうじろうのかしら</p>	<p>小字／川浦 (かわうら)</p>	<p>○つつじがはら (つつじがおか) ○しまぎれめ ○はらうおかわ ○しみずだいら (しみずだん) ○さぶろうた ○せこひらさわ ○せぼと ○ぎんぶち ○ぞうざんしくつあと ○ぶえもんざわ ○たつのくち ○りょうしのいわあな</p>
<p>赤沢の頭。上ノ間山から続く、一、九六〇メートルの小ピーク。忠治郎の頭。二、〇八四メートルの忠治郎山付近の小ピーク。</p>	<p>古くは白砂川の名、大正十三年以降白砂川の名。白砂川の竜ノ口、廊下の奥は、下流の表に対して裏と呼ぶ。現在は白砂川の最上流部の意。川裏川浦である。</p>	<p>躑躅ヶ原。大槻文彦が通った道筋、相倉鞍部の峠。以前、青年団が草刈りをした。地元では四万切目とも。この稜線が四万と入山の境。旧道は荒れてしまう。四万切れ目。四万と入山境の旧道の峠。キレメは峠の意。原魚川。白砂大橋袂付近、右岸から合流する川。清水平。清水段。白砂大橋袂付近、右岸の原魚川付近の棚状の場所。三郎夕。相ノ倉山から右岸に合流の米々沢の少し上流、対岸にある絶壁。三郎が岩茸採りで墜落死した所。世古平沢。新山沢合流を過ぎ、川が右に大カーブする付近で右岸から合流する沢。左岸には木戸沢が入る。狭戸。木戸沢合流上流で、川幅が川原状から、岸壁で川幅五メートル程になる付近。銀淵。セバトを過ぎ、再び川原状に広くなった所。昔、淵は白銀に輝いていたという。黄銅鉱等の粒砂らしい。象山試掘跡。銀淵左岸の川縁に見える横穴が、幕末に資源調査に来た、佐久間象山の金鉱試掘跡という。武右衛門沢。右岸に獵師の沢が合流する付近で、左岸から合流する沢の名前。名前の人は不明。竜ノ口。獵師の沢合流付近で、本流は狭くなり入口には滝がある。この奥が廊下状になり遡行が困難という。獵師の岩穴。廊下を迂回する際、獵師の沢を上るが、沢の右にある岩穴。迂回コースは尾根を越えて上流に下る。</p>

<p>○いかはげ</p>	<p>○べんてんとうげ</p>	<p>○わこうはらはげ</p>	<p>○のぞりとうげ</p>	<p>○のぞりとうげ (ぬまやま)</p>	<p>○よこへいざわ</p>	<p>○よこへいざわ</p>	<p>○よこへいざわ</p>	<p>○だいきくのかしら ○せぼとのかしら</p>
<p>烏賊禿。野反峠の東北、八間山登山道の西に見える禿。象山の書に記す歴史的地名。近年、烏賊の形が変形する。</p>	<p>弁天峠。地形図は誤植で十二山を弁天山と記述し、登山家が使った。根広道の尾根で根広禿、根広峠が相応しい。</p>	<p>和光原禿。野反峠手前付近の植生が乏しいヒラ(斜面)の呼称。地元の方は禿でも分かる。</p>	<p>野反峠。富士見峠と同じ。野反池を望む峠が本来だろう。</p>	<p>野反峠。野反湖を望む稜線鞍部。今は富士見峠が一般的。</p>	<p>野反湖に隣接する付近一帯。</p>	<p>○よこへいざわ</p>	<p>○よこへいざわ</p>	<p>大黒の頭。二、一〇八メートルのピーク。白砂川本流水源奥。一、八八〇メートルの小ピーク。旧中之条町境に近く、セバトは北の新潟県側、清津川に落ちる支流。セバトは狭い所。貉(騙しの)平。大黒本峰を瀬にした広尾根。貉も騙しも、広い尾根で迷いやすい所の意味であろう。庄(正)九郎沢。廊下を越えた川原に、右岸から合流。磨白の岩洞。左岸に四万沢合流を見て、さらに川浦の奥の沢沿いにある。昔は獵師の宿、五く六人泊まれる空間。磨白岩。磨白の岩洞の上方の尾根にある石白に似た岩。獵師の頭。獵師の沢源流の尾根、標高二、〇四二メートル付近。黒檜池。登山家が上ノ間と白砂山間の稜線の池に命名。笹平池。登山家が白砂山と堂岩山間の尾根下の池に命名。白樺池。登山家が白砂山と堂岩山間の尾根下の池に命名。営林署の地図に、八間山と堂岩山に続く尾根一、八九五メートルから東に派出する尾根、一、七四三、三メートルのピークに名がある。『地名のはなし』に、崖↓斜面↓堤防↓海浜と連続する「崩壊地形・浸食地形」とある。以前の字名八間樋で、これの訓読みで同意か。与五兵衛沢。濱土井の南、白砂川から支流黒沢沢に入り一〇〇メートル程で右岸に合流する沢。沢の名は人名に因む。</p>

○きんぎよはげ
○べんでんさま

金魚禿。鳥賊禿近く、南に見える小さな禿。形状に由来。弁天様。富士見峠西の弁天山頂に、天保十三（一八四二）年に村で立てた弁天石祠を祀る。雨乞いに利益が大きく、池で騒いだり魚を釣ったり泳いだりして弁天様の氣に障れば、必ず雨が降ったと『六合村の民俗』にある。

○えびさわ
(ゆびさわ)

エビ山頂東南五〇〇メートル付近湾入部に入る沢。古者はユビ山、ユビ沢、ユビ平とユビの発音、地形図はエビ沢で載る。北平。野反湖の西南、エビ山頂東南約五〇〇メートルの湾入部付近の平地。

○じろうさんのかやば
○おんだし
○どじょうこや
○かもしかぶち
○えびだいら
○じゃていがはら
○いけでえら
○したにんば

次郎さんの萱場。野反湖西南、エビ山東斜面の萱場付近。押出し。野反湖西南、エビ山頂東一キロ程の半島状部分。泥鰌小屋。押出し東南の山小屋付近。泥鰌が多かったか。羚羊淵。エビ沢が注ぐ付近の湖の淵。観光地名。エビ平。十二山とエビ山の間、エビ沢沿い平地。蛇帝ヶ原。エビ沢が注ぐ湾状部、北沿い。観光地名。池平。野反湖東南、お押ししの対岸。引沼の採草地下荷場。八間山頂東の野反湖岸。山で採った曲げ物材料等をこの地まで降ろし、里から馬で運びに来た場所。善次郎横手。昭和十三年刊『上信境の山々』に、荷場平

○ぜんじろうよこて
○かやのおね
○しらかばぶち
○うえにんば
○いけのとうげ
○こじり

を受け、その方から聞いた地名だろう。茅の尾根。八間山頂西北側く湖尻方向に連なる尾根。白樺淵。テント場と蛇帝ヶ原間、野反湖西岸沿いにある淵。観光地名。上荷場。八間山頂西北の尾根道が車道と交差する付近の稜線。曲げ物材料等をここに運び受け渡した場所。池の峠。萱の尾根の末端付近、野反池から地蔵峠側に越す稜線鞍部。実際の古道は手前から尾根を越え、榛の木沢取水口を下る道沿いと思える。新しい地名という。湖尻。湖の東北、ハンノ木沢から取水の水が注ぐ付近。

○すけえもんざわ

○たかんぼうざわ

○いたばのさわ

○どういわのさわ

○じぞうとうげ

○みずば

○おおからほりざわ

○いかいわざわ

○はちけんざわ

○かめやまざわ

○かなやまざわ

○みやじろうしみず

○さんかべ

○たかさわおね
○かもしかぶんぎ

助工門沢。地藏峠下、今の峠への道沿いにある取水隧道入口付近を落ちる沢。人名由来だが、どんな人か不詳。ハンノキ沢が取水口の upstream で二又になるが、堂岩山側に分かれる沢の downstream の名。タカンボウ沢の upstream の名称。堂岩沢。ハンノキ沢が取水口の upstream で二又になるが、南側に分かれる沢。

地藏峠。野反く秋山への途次、右が白砂山への分岐になる峠。『上信境の山々』に、長野原の方が石仏を岩菅山に奉納のため峠まで来たが、先に進むと足が痛み、引き返すと軽くなり、ここに岩菅山の効験を勧請、石仏を安置とある。同書に大慈峠と呼ばれた時期もあったと記す。大慈は観音様の功德。石仏は姿や銘の法名から阿弥陀如来と思われる。

水場。堂岩山の西、八十三山頂東側にある。大洞堀沢。昭和十二年刊『上越の山』にはオオカラ沢。日常は伏流し、水が少ない涸れた沢の意味であろう。八間山西斜面が源流で、国道一、一五五号地点を流れる沢。鳥賊岩沢。一、八二八メートル下の鳥賊岩付近に生まれ、国道の一、五四二メートル付近を流れ野反湖に入る沢。八間沢。今の鳥賊岩沢の昔の呼称。八間山から流れる。営林署の地図に載る。野反キャンプ場南下、三壁山から流れ野反湖に入る。

金山沢。前記、カメヤマ沢を、観光地図や『上越の山』には金山沢とある。カメヤマはカナヤマから転訛だろう。宮次郎清水。野反のバンガロー付近から三壁山登山道沿いにある湧水場。登山者に親しみ利用される。三壁。営林署で働いた古老が、先輩が三壁山をミツカベと呼び、サンカベと呼んだという。本来の名称か。高沢尾根。三壁山と高沢山の間尾根。登山案内掲載。羚羊分岐。高沢山頂の北側手前、右が羚羊平へ分岐点。

<p>小字／上長笹 (かみながさ)</p>	<p>長笹沢上流一帯。寛永の頃、小倉の番屋が閉鎖以前の信州への古道筋を思わせる地名が地内に点在する。</p>
<p>○せんにいけ</p>	<p>仙人池。赤石山山頂から、野反方向へ東約三〇〇メートル程稜線少し下った地点。人里離れた幽邃郷にある二ヘクター程の浅い池。仙人が住みそうな場所である。</p>
<p>○たいのおね</p>	<p>鯛ノ尾根。赤石山頂の東三〇〇メートル程から南、ガラン沢に続く尾根。赤石山の崩壊地帯の岩に因む地名。</p>
<p>○くまずりおね</p>	<p>熊ずり尾根。赤石山西南約一キロ、標高二、〇一〇メートル付近からガラン沢に続く尾根。白水沢合流地点の先。狚師が射止めた熊を引き下ろした尾根と『村誌』に載る。</p>
<p>○はちいわ</p>	<p>赤石山付近を中心に六合側斜面一帯。</p>
<p>小字／鉢岩</p>	<p>魚釣りの、狚師、木地師が往来。一つ石。馬止くオッタテ峠の尾根、標高一、八二五メートル地点。</p>
<p>○おつたてみね</p>	<p>オッタテは天狗のことで、オッタテ峰は天狗の住む峰。</p>
<p>○おつたてとうげ</p>	<p>湯本氏祖、細野御殿介に縁の池。付近の土塁は館跡か。</p>
<p>○おつたてみね</p>	<p>標高一、八八〇メートル。天狗の住む峰の意。</p>
<p>○おつたてみね</p>	<p>御殿池。別名細野池。五三郎小屋の南斜面の池。草津の湯本氏祖、細野御殿介に縁の池。付近の土塁は館跡か。</p>
<p>○おつたてみね</p>	<p>天狗原。五三郎小屋の南斜面にある緩斜面。</p>
<p>○おつたてみね</p>	<p>羚羊原。高沢山と大高山の鞍部。</p>
<p>○おつたてみね</p>	<p>大高山等の南斜面一帯。北斜面は長野県の魚野川河谷。本来は魚ノ川は信州側の河川の名称になる。</p>
<p>小字／大倉 (だいぐら)</p>	<p>地蔵峠を越え、信州に入ると右に大倉山があり、道は山腹を通り秋山郷へ向かう。野反東北、大倉山は信州側の地名だが、字切図には沼山(野反)の西にある。</p>

<p>○はちやまざわ</p>	<p>鉢山沢。六合の西端、鉢山が水源の沢。左岸に合流。</p>
<p>○くまざわ</p>	<p>石山側から続く熊擦り尾根の一キロ程西でガラン沢に合流。赤鉢山沢。六合の西端、鉢山が水源の沢。左岸に合流。</p>
<p>○ねじれのおおたき</p>	<p>捻れの大滝。ガラン沢右岸に合流する横手の沢から落ちる滝。由来は滝の形状が捻れて見えるか。</p>
<p>○こたき</p>	<p>小滝。仙十の滝の一〇〇メートル程上流部にある滝。</p>
<p>○せんじゅうのたき</p>	<p>仙十の滝。小倉の山口仙十郎氏が命名。</p>
<p>○なめたけ</p>	<p>滑滝。ナメツタ状の滑りやすい河床の滝？</p>
<p>○おみだいわ</p>	<p>黒ゼン。ガラン沢の名瀑。両岸崖壁で、遡上を阻む。</p>
<p>○くろぜん</p>	<p>大正五年、長平の狚師本多惣吉遭難場所。</p>
<p>○あみだいわ</p>	<p>日向ガラン。南面したガランで太陽を浴びる。</p>
<p>○ひなたがらん</p>	<p>阿弥陀岩。阿弥陀沢筋の岩尾根にあり、形状に因む。</p>
<p>○ひかげがらん</p>	<p>日陰ガラン。北面した部分で、寒々としている。</p>
<p>○たいのいわ</p>	<p>観世音の滝。ダン沢合流地点に落ちる滝。</p>
<p>○かんぜおんのたき</p>	<p>鯛の岩。赤石山の南面に見える赤禿状の崩落斜面。世立から形状が鯛に見え、雪溶けの形が鯛だと農業の準備。</p>
<p>○うえのがらん</p>	<p>先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○さんだんのたき</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その</p>
<p>○したのがらん</p>	<p>馬止付近下のガラン沢の崩壊部分。</p>
<p>○がらん</p>	<p>三段の滝。キノコ沢合流点より、やや上流の本流の滝。</p>
<p>○からさわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はぎわたいら</p>	<p>観世音の滝。ダン沢合流地点に落ちる滝。</p>
<p>○ごふくだいら</p>	<p>白砂川の支流、長笹川の上流部。ガランは崩壊や崩落した地形。英国の武官ピーコックの謎の失踪等遭難多し。</p>
<p>○しんしゅうこどう</p>	<p>馬止付近下のガラン沢の崩壊部分。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>三段の滝。キノコ沢合流点より、やや上流の本流の滝。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本流上流部、ガラン沢核心部。</p>
<p>○はちやまざわ</p>	<p>惣吉地蔵から来た道は小倉口でガラン沢に出合う。その先の本</p>

<p>○ゆのはなざわ ○くさつとうげ</p>	<p>湯ノ花沢。草津峠下付近が源流の沢。源流部にある温泉特有の湯の華に因む名称。 草津峠。横手山と鉢山の中程にある峠。標高一、九五三メートル程。明治十九年、前橋街道として開削。横手山東山腹を通るが、積雪量が多く荒れてしまう。峠道は通行困難で、群馬側は立入禁止。ガラン沢迦行の終点。</p>
<p>小字／芳ヶ平 (よしがたいら) ○こふたいげ</p>	<p>上信越国立高原内のミニ尾瀬。標高一、八〇〇メートルを越す高層湿原。池塘が点在し、ワタスゲ等の高山植物も豊富。 小不多池。明治の『村誌』に「澁嶺ノ半腹・東西三町、南北一町三十間・其中浮島アリ・風ニ随テ漂流シテ・水上ニ遊ブガ如シ・奇観ト・」と芳ヶ平を記述。 三ツ池。芳ヶ平遊歩道沿いに三つ連なる池塘の呼称。</p>
<p>小字／池ノ峠 (いけのとうげ)</p>	<p>峠付近にある唯一の飲用可能な水場に因む。池があるタワ(撓んだ所) 峠が由来か。古図は池の塔(タワ)。明治十四年の調査に中牛馬、国堺、花歌、木屋場、横市、見アテザハと国境、交易関連の地名が報告、所在未確認。</p>
<p>○ひこべおね ○だましだい</p>	<p>横手山から鉢山へ行く尾根筋の名称。 騙し平。芳ヶ平から澁峠道に入り少し上り上げた緩斜面。スキー客がガラン沢へ迷い入った地名に由来とあるが、象山の紀行にも載る。由来は坂が終わり、峠になったと勘違いするような所の意味か。現状は笹が地表を覆う。</p>

参考資料Ⅱ 検地帳に見る小地名Ⅱ

入山区有文書に寛文三(一六六三)年の『草津分入山村御検地帳』と、寛文十二年の『入山村新田御改帳』がある。この文書は、江戸初期の当地の古地名を知る貴重な資料だが、従来の『六合村誌』には載っていない。紹介の資料は『温泉草津史料第一巻』に載るものだが、参考のため紹介する。同様に、入手した日影、太子、生須等の寛文三年の検地帳も、入山と同様に紹介する。

検地帳には、小地名と田、畑、屋敷の区分と田畑の等級、測量の計測数値と面積、耕作者名が載っている。掲載地名の他に、地名毎の耕作者数と筆数を合計してみた。例えば入山の「打越」は、うつこし、うちこし、打越の表記があるが、同じ「打越」と考えてまとめた。該当地名に耕作者が一人、筆数が一人、面積が一反以下は表示を略した。地名のみの表記は、一人、一筆、一反以下である。当地では田畑は下々々の等級が大部分だが、肥沃な上々中の畑地や水田と、屋敷地は抜き出した。表記は上畑は上、中畑は中、屋敷は屋である。面積は三〇歩Ⅱ一畝、一〇畝Ⅱ一反、一〇反Ⅱ一町の基準で計算した。

検地帳に記載された地名と、今回の小地名調査で確認された地名が合致すると、長い歴史の荒波を乗り越え生き抜いた地名として愛着を感じる。反面、調査では確認されない消えた小地名も多くあり、長い時の流れと若干の寂しさも感じた。

寛文三年草津分入山村御検地帳

(品木・小倉分)

品木・しなき…二九筆(中八・屋四) 四人一町七反三畝／くらの坂…二筆／川平…三筆／川端…一筆／黒木／西澤ノむかい…三筆一反三畝／嶋さき…二筆二人四反一畝／あかつち／神ノ島／せきノ入…二筆二人二反／原…一八筆五人一町四反八畝／むかい小倉・こくらむかい…九筆二人一町三反六畝／と、の下のいど澤…五筆二人六反三畝／ほり口…三筆二人一反一畝／こすだて…九筆二人一反八畝／かに澤…二筆／すたて…一九筆(中二・屋二) 八反六畝／水なし…三筆二人／みね／上ノ原…二筆一反三畝／原坂

(長平・小倉・根廣分)

きつはた…一四筆二人一町七畝／とちほら…七筆二人八反八畝／うちのほら…四筆四反五畝／なしノ木／よし原／うしろ山…四筆二反八畝／小倉・こくら…一五筆(中三・屋四) 四人五町九畝／こくらそへ…四筆(中三・屋三) 三人一反二畝／屋しきそへ…二筆(中一・屋二) 一反／ちやうへい・てうへい…四〇筆(上二・中四・屋二) 三人二町二反三畝／にしかい戸…三筆四反六畝／屋の下…三筆／つくしたいら／こが山・こかやま…一四筆三人六反四畝／屋くら…二二筆(中一) 四人九反七畝／ぶぐら…二筆(屋二) 二人／かぜあな…二筆二人／なしの木…一二筆三人四反一畝／ねびろ・ねひろ…三六筆(上二・中四・屋四) 四人二町二反／川はた…八筆四人四反三畝／ねひろたいら…ねびろそへ(上)／ぼら…二筆二人／ねひろ平…五筆三人一反九畝／のほりおち…一〇筆三人四反九畝／のほりおち岩ノ下…二筆／とう六・藤六…四筆三人四反一畝

(野倉・若子原・根廣・品木共)

湯坂…八筆四人三反三畝／川はた／しりやき・尻やき…一〇筆四人三反四畝／藤六ノ向／尻やきやくら・ル屋倉…三筆／尻やきねかいり…八筆(中一) 四反二畝／てんぐ岩…二筆／きかあづく…一八筆(中一) 一町三反四畝／岩ノ下…二筆一反二畝／大久保…二筆二人二反六畝／水ノ久保…二筆一反三畝／上ノ原…四筆一町二反七畝／うしろひら…六筆(上二・中一・屋二) 八反二畝／くまん島ケ…二筆一反一畝／もちほつた…二筆／ほら…三筆一反八畝／おしな平／いど／前坂…三筆／ゆての、坂／つくよけ…四筆一反四畝／きつはた…三筆／いとしり／岩ノ下／岩ノ下ひら…五筆二反五畝／つくよけひら／ゆとの原・ゆとの、原…一三筆四人一町六反三畝／くぞひら…一筆三人四反八畝／すけのひら…一二筆三人九反一畝／ならノ木…四〇筆(上四・中六・屋二) 五人二町九反五畝／しろひら…三筆二人一反八畝／こいど…三筆(屋二) 三人／こいどそへ…一〇筆(上二・中二・屋四) 五人三反九畝／さかい…二三筆三人八反五畝／若子原の内…五筆二人一反／戸や…一筆(上二・中一・屋三) 三人四反六畝／いゑの前・家ノ前…二二筆(中一) 一町三反七畝／やすみど／くどれ二人三筆一反五畝／まのた…二筆一反四畝／やぶの下…四筆三反六畝／やぶの下五筆三反八畝／下ノ平三筆一反一畝／あまいけ…二筆四反

(入山之内…大木平・梨子木・荷付場)

沢入…一筆二人三反三畝／大木たいら…八筆(中二) 二人一町三畝／櫻澤／ままた…三筆一反／につけば…二反八畝／ゆノたいら…五筆(中二・屋二) 二人七反／屋敷うら／水かけ…二筆／すハのはら…一筆四人一町七反七畝

(入山之内：梨子木分)

なしの木・なし木：六三筆（中九・屋三） 一人四町六反五畝／につけ
場／くほ入／とんミね／堂ノもと／なし木屋敷きわ二筆一反三畝／いと
むかい：二筆二人／道下：三筆／わかきの本／いの下

(入山之内：経塚村分)

ほそお：一七筆三人二町二反六畝／あなふち／あなふちたかとや／小澤：
六筆二人四反四畝／ひら：一六筆（上二・中一・屋二）三人一町四反五
畝／まへ・前：一八筆（上二・中三・屋二）三人八反八畝／はたとひら：
二筆二人一反二畝／川はた：一二筆三人六反九畝／すけの沢：三筆二人
一反三畝／前で：四筆（中一）三人一反五畝／中たな：三筆一反五畝／
くとれ／きつきさ／屋しき前：三筆（上二・中一）二人一反六畝

(引怒田・花敷村分)

前川はた：三筆二人一反六畝／川はた：九筆二人五反五畝／西川はた：
三筆二人一反五畝／ひきにた：五五筆（中九・屋六）六人三町九畝／ぬ
す人／ゆの上／しらあき／こしまき／ゆ坂／打越・うちこし・うっこし：
二二筆二人一町四反一畝／ぬまのじり：二〇筆二人六反二畝／馬ぐそ澤：
三筆二人一反四畝／とや：二九筆二人一町九反九畝／あらやぶ：一三筆
二人六反八畝／ひがくら・ひかくら・ひかぐら：一一筆三人五反九畝／
はなしき：九筆（下々田一・屋二）／くら鹿立め：二筆一反六畝／前
花敷：六筆五反二畝／あまいけ：五筆四反八畝／若子原ノ下たいら

(入山之内：余立村分)

上よだて：二六筆（屋一）三人／山きし：二六筆三人八反二畝／中條口：
一六筆一人（屋二）四反二畝／屋敷そへ：二筆二人／馬つなぎば：
四筆一反五畝／屋敷きわ：二二筆四人一町二畝／彌平次屋敷：五四筆二

人二町四反三畝／しゃうじば澤：二筆二人／よだて・よたて：七筆二人
二反／よだて坂・よたて坂：八筆四反六畝／はなわ：四筆九反二畝／中
ご：三筆二人／大しも：一五筆二人五反三畝／小屋場・こやば・こ屋ば：
二〇筆二人九反四畝／こ屋ばせんの下：三筆二人二反六畝／岩ノ下／石
かうろ：八筆四反七畝／きば：五筆四反七畝／きばふどうぞうり・クふ
とさうり：八筆二人四反四畝

(入山分余立村之内：赤渋村／見寄村分)

みより・ミより：三五筆三人（上二・中一・屋三）三人三町四反五畝／
あかしぼ：二〇筆二人（中一・屋二）二人一町六反七畝／まつば：四筆
五反六畝／こミ山・こミやま：六筆三人四反二畝／はいかや：三筆五反
八畝

寛文十二年入山村新田御改帳

(小森口新田分) 砂場／原：二筆／立石

(長平分) つくし平：二筆／後山：三筆一反七畝

(根廣分) 後山／こが山／ほくめぎ／とや／芝原／かうろ・こうろ：三筆
／芝こし／大くほ：三筆一反三畝

(梨木分) すわノ原

(品木分) つち橋：二筆一反二畝／品木原切そへ／こミ山／こミ山原：二筆二

反／赤土：四筆一反二畝／長さき：五筆二反二畝／こくら切そへ：三筆二人

(よ立分) うつら坂／はちから澤：二筆／こもりこへ／すきな／上ノ原：二

筆／あらやふ／木落し・きおとし：七筆三人二反二畝／びいら屋敷／山きし

(見寄分) みより：二筆

(引仁田分) 引にた：二筆／川はた／打こし／まぐそ澤／よ坂／前花し

き／はしばノ上／とや原／沼ノ坂

(若尾原分) あんば／川端切澤…二筆／くそ平／後平／上ノ原／大くほ
／栗木おね／すわノ平／すわノ平こし…二筆／くらノ平…三筆三人／と
や／境平／せとノ平／こいと／ゆでノ原

(矢倉分) 前坂／上原…三人三筆／大くほ／いと／栗木おね／天狗岩／
岩ノ下

寛文三年吾妻郡長野原之内坪井・羽根尾・生須・日影・逢子・持車木・
小森口の冊子掲載の、六合地区分を抜粋したのが左記である。

(日影村分) 水たう…四筆(中二)、作人二人、六反三畝／中ノたな…四筆(中
一)、五反四畝／まふ祢口…(上二)／田端…(上二)／中わり…二筆(上二)
一反三畝／堂のまへ／南た…(中田九畝余)／大木の入…五筆二人一反
四畝／ひかけ…(上二)／ほり端…(中二)一反二畝／沢畠／すくぢ畠…(上
一・中二)一反三畝／大門わき…(中二)／竹のくぼ／わさび平／さんけ…
三筆一反五畝／こしまき…二筆一反六畝／井戸尻…(中二)／なしの木平…
三筆(上二)二反一畝／わぐ…二筆／川端…六筆二人一反五畝／こやな
い…一九筆二人九反／さたうし…三筆、二人二反七畝／きと沢…三筆／
くうつう…二筆(下々田)／すけのくぼ／くわその…一八筆(上五・中
六・屋二)二人一町二反一畝／さるまき…三筆二人

(日影村之内逢子村分) ※当時は日影村内で、太子を逢子と表現する。

柴原…五筆二人／迎／志るた…三筆三人／井と尻／前出…七筆(上二・中二)
三人二反三畝／前畠…二筆(中一・屋二)／志やうしば…七筆五人一反

／城越／くぐど…四筆(中二)、三人二反五畝／いこそり沢…二筆(中四)、
五人三反八畝／石こ祢…四筆(中二)二人六反八畝／越まき…八筆(上二・
中六)五人二反九畝／たかひら…一〇筆(中二)四人六反六畝／よこ畠(上
一)／屋くら畠／志おの木…九筆(上六・中二・屋二)四人四反一畝
／しなの木…四筆(上三・屋二)、三人二反一畝／屋せお祢…六筆(上二・
屋二)三人一反七畝／井戸はた…二筆二人一反一畝／宮わき…一二筆五
人五反七畝／行人塚…八筆三人四反一畝／三嶋沢／すなわら…二筆二人
三反四畝／そり畠…三筆三人四反八畝／はしは／落合…六筆四人一反六
畝／せんの下…八筆五人一反四畝／霜押…七筆四人八反五畝／よこ道…
九筆五人二反三畝／川原／はじ／川はた／大しくほ／志もはれ…二筆二
人一反五畝／ゆくほ坂

(持車木生須籠口新田共に) ※持車木は寺社木で生須内の小名、籠口新
田は暮坂付近の小字小森口であろう。

森の下…五筆一反八畝／たうの下…九筆三人／下平…七筆(上七)四人
二反一畝／道六神畠…二筆／たうのそり…九筆(中一・下田五)三人一
反九畝／みなみ畠ヶ…六筆(中三)二人一反九畝／かきの木入／かきの
木入ひら…六筆(上四・中二)三人三反二畝／ひら…五筆(中二・屋二)
三人二反四畝／いすす…三筆(上二・中二)二人二人／かち屋敷…四筆(上
一・中一・屋二)三人一反八畝／くぼ畠／堂の上…二筆(上畑二)二人
／久く木の下／柿の木の下／家ノ後…二筆(中一・屋二)／家のまゑ…(上
二)／西うら…二筆二人／新道…二筆(屋二)二人／くぼ／柴平…三
筆二人四反九畝／てんぐ岩…五筆三人／ふりあと…六筆二人二反六畝／
赤くづれ…二筆二人一反／ぬまの尻／柴原／十二のまえ…七筆三人四反

一畝／せき取場・四筆三反／十二のくぼ／大なしくぼ・三筆一反／大なし・六筆三人四反二畝／おた祢くぼ・六筆三人三反四畝／けなしあり・二筆二人三反二畝／長くぼ・二筆二人／てうなくぼ／さるかうて・二筆二人／川平／中のたいら・二筆一反一畝／八ツ塚・二筆二人／くわばき・二筆二人／中屋ぶ・二筆一反九畝／打越／こざめ・三筆三人一反／たうのわき・二筆

三 村誌（明治二十一年）

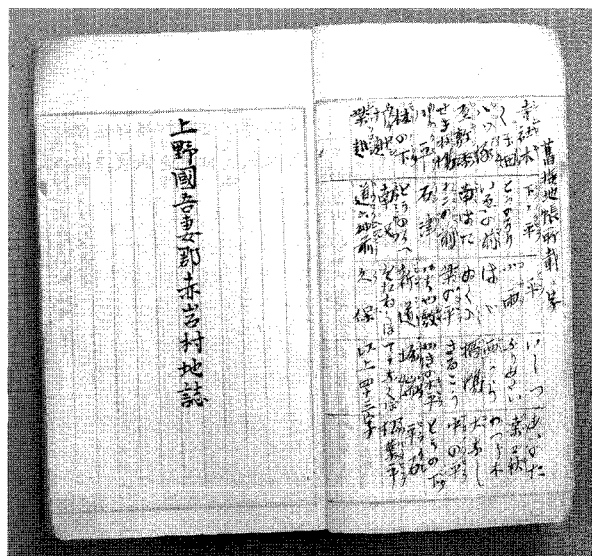
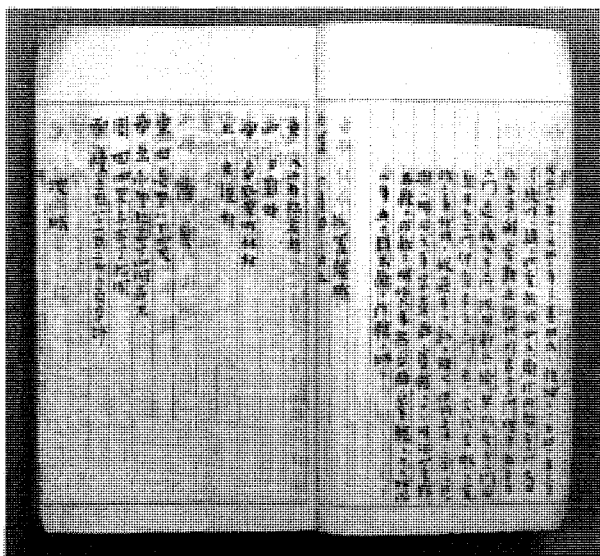
吾妻郡村誌解題

郷土のあゆみや概況を記した『吾妻郡村誌』

一 はじめに

明治二十一年（一八八八）の『吾妻郡村誌』は、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」に二冊の簿冊として所蔵されている。昭和五十七年（一九八二）十一月の同館開館時に中之条町立第一小学校（現、中之条町立中之条小学校）から移管された史料である。表紙に「明治二十一年は吾妻郡が八〇町村から一三町村に再編成された「明治の大合併」（市制・町村制）の前年にあたり、残念ながら一部欠落もみられるものの町村の概要が沿革・境域・古跡・人物などの二五項目の基準で記されており、合併直前の町村の実態を知る好史料となっている。未だ刊本として紹介されたことがなく、幸運にも六合地区の六村（日影村・生須村・赤岩村・太子村・小雨村・入山村）がもれなく収録されていることから、今回『続六合村誌』を編纂するにあたり、六合地区のみを抽出して資料編に収録するとともに、この解題で、本史料を概観してみたいと思う。





二・『吾妻郡村誌』編纂に至るまでの明治初年の概観

(一) 近代日本の自治行政制度について

慶応三年（一八六七）十月、十五代将軍徳川慶喜は大政奉還を上表し、同年十二月、朝廷より王政復古の大号令が発せられ、天皇中心の新政府が樹立した。薩長中心の新政府は慶喜に官位辞退と領地返上を命じることを決めたため、翌年一月には不満をもった旧幕府勢力との間に鳥羽・伏見の戦いが起こり、ここに戊辰戦争が開始された。新政府はこの年の九月に明治と改元したが、この一連の戦いは明治二年（一八六九）の箱館の五稜郭で旧幕府勢力が破れるまで続いた。

中央集権国家体制を目指す明治政府は、まず旧幕府領を府（東京・京都・大阪など）・県（前記以外）とし、二七〇余りの諸大名領は従来通り藩として残す「府藩県三治制」を敷いた。その後、明治二年に版籍奉還（諸大名の領地と領民の返上）を、明治四年に廃藩置県を行い、ここに全国（三府三〇二県↓三府七二県）を直接支配するに至った。本県「群馬県」（第一次群馬県）もこの廃藩置県の行われた明治四年十月二十八日に誕生している。明治五年には地方統治機構としての大区小区制が施行され、群馬県内は二二の大区と二四七の小区に設定されたが、明治六年には群馬・入間の両県が廃され熊谷県となり、明治九年には再び群馬県（第二次群馬県）がほぼ現在の県域として成立し、これに伴い県内は二三大区二五七小区に編成替えされた。大区小区制は制度上、近世における町村を否定していたが、明治十一年（一八七八）の郡区町村編制法により、旧来の郡制を復活させるとともに町・村（戸長役場の設置）を法律上自治体として認めた。明治十七年の制度改正では、町村の区域は

そのままにして複数町村単位に一つの役場をおく連合戸長役場が設置され、戸長の権限強化が図られている。その後、明治二十二年施行の市制・町村制によって、町村は大日本帝国憲法下の地方自治制度として確立した。明治の大合併と称される市制・町村制によって、本県に二〇六町村（三五町一七二村）が誕生した。

(二) 吾妻郡の変遷について

吾妻郡は江戸時代初期、沼田藩真田氏の所領であつたが、天和元年（二六八一）真田氏改易後は幕府直轄領の時代を経て、天領や旗本領などの分割統治となつた。明治維新を迎え、大区小区制の時代を経た後、「地方行政区画便覧」（別表一）によれば、明治十九年（一八八六）の吾妻郡は八〇町村が存在していたことがわかる。当時の吾妻郡は江戸時代の流れを受け、現在のみなかみ町（旧新治村部分）の一部が含まれ、群馬郡に属していた高山村分（中山村・尻高村）は含まれていない。後述する「吾妻郡村誌」は行政区画上ではこの時期のことが町村別に書き上げられている。

参考までに明治二十二年（一八八九）の市制・町村制施行後の吾妻郡を概観すると、表1のとおり吾妻郡は一三ヶ町村（中之条町・沢田村・伊参村・名久田村・草津村・東村・太田村・原町・岩島村・坂上村・長野原町・嬭恋村・久賀村）となつた。明治三十三年七月一日には、日影村・赤岩村・太子村・小雨村・生須村・入山村が草津村から分離し、六合村が発足したが、分離の経緯については『六合村誌』を参照されたい。これより前の明治二十九年（一八九六）三月二十九日には群馬郡高山村が吾妻郡に編入となり、同年四月一日、吾妻郡久賀村が利根郡に編入となり、明治四十一年、久賀村と湯の原村が合併し、利根郡新治村が発足

し、現在の吾妻郡の郡域となつた。

昭和の大合併では、昭和三十年（一九五五）四月、中之条町・沢田村・伊参村・名久田村が合併して中之条町が、太田村・原町・岩島村・坂上村が合併して吾妻町（改称は翌年）が誕生した。

平成の大合併では、平成十八年（二〇〇六）三月二十七日吾妻町と東村が合併して東吾妻町が、平成二十二年三月二十八日には中之条町と六合村が合併して中之条町となつて、現在の吾妻郡は六ヶ町村で編成されている。なお、大筋については別表1の「吾妻郡の変遷（江戸時代から現在まで）」のとおりである。

(三) 明治期の県内における史誌編纂事業の動向

明治政府は、江戸幕府の封建制国家を打破し、中央集権国家体制を整えるため、府県史編纂事業に着手し、全国に実態調査の命令を出している。群馬県における明治期の主な史誌編纂として次の三つがあげられる。

① 『群馬県歴史』（群馬県史）編纂（明治前期～中期）

明治七年（一八七四）、明治政府の命令によって行われた府県史編纂事業の一環として『群馬県歴史』がある。これは太政官の「歴史編輯例則」や修史局の「同分類細目」に基づいて編纂され、中央政府に提出されている。内容は、大別して「制度部」（県の官制・職制・兵制・租法・禁令など）と「政治部」（駅通・県治・学校・勸業・民俗・警保・刑罰など）が収録されている。対象となつた時代は明治初年から明治九年までの第一次群馬県、熊谷県時代までが記述されている。この資料は、幕末維新期から府県制への移行期における群馬県の行政や諸制度の沿革・変遷の実態を説明する上で不可欠な基本史料となつていて、群馬県史の別称で呼ばれることもある。

②『上野国郡村誌』（明治十一年）

明治政府は、統一国家としての日本を認識するために、その歴史と地誌を明らかとすることを目的に、明治五年（一八七二）九月二十四日、皇国地誌編集を太政官正院で行うと布告した。明治八年六月五日、「皇国地誌編輯例則并着手方法」を、十一月十二日にはその「追補」を各府県に通達し、郡誌・村誌の担当者を決めて数十項目にわたる調査を行い、地図を付して内務省地理寮へ提出するように命じた。こうしてはじまった「皇国地誌」の編纂事業は、内務省地理局から文部省に移管され、明治二十三年には帝国大学に地誌編纂掛が置かれ、翌年には史誌編纂掛に改組されるなどの変遷を辿ったが、残念ながら明治二十六年にその事業は中止されている。『上野国郡村誌』は皇国地誌の稿本や写しが主体となっていて、各郡村の境域、管轄沿革、地勢、戸数、古跡、物産などが郡および町村ごとに記述された貴重な史料である。なお、昭和五十二年（一九七七）〜平成三年（一九九一）に群馬県文化事業振興会（丑木幸男編集）によって刊行（全一八巻）されている。

③『郷土誌』

過去の県史や郡村誌は全国統一のものであったが、群馬県では明治四十二年（一九〇九）郡市町村および市町村立小学校に対して「郷土誌」の調製を発令した。県内二〇八市町村に沿って翌年までに調製することが命じられたが、本書は役場と小学校に一冊ずつ備付け、一冊県へ提出させている。『郷土誌』は、統一した目次で調製され、明治末年の県内における市町村の状況を総括的に把握・比較できる基本史料であるが、残念なことに、市町村すべてが残っていない。なお『郷土誌』については今井啓介氏が「群馬県内における明治期『郷土誌』編纂の動向について

」で国の内務省の地方改良運動の一環で行われたことを指摘している。

三・吾妻郡村誌について

(一)『吾妻郡村誌』

吾妻郡における郡村誌・町村誌などの変遷についてみると、江戸時代では郷帳や村差出明細帳があり、明治期では明治十一年『上野国郡村誌（吾妻郡村誌）』、明治四十二年の訓令により各市町村で編纂された『郷土誌』（中之条町・沢田村・伊参村・原町・長野原町・草津町が現存する）などが周知されている。『上野国郡村誌』（群馬県文化事業振興会刊）は明治十一年に全国統一した様式に沿って、町村単位ごとに一斉に提出させたものである。『上野国郡村誌』の中で吾妻郡の項は「吾妻郡村誌」（別表3『上野国郡村誌』の吾妻郡収録町村一覧表参照）として収録されている。しかし、今回紹介する「吾妻郡村誌」（明治二十一年）とは、明らかに表記やボリュームにおいて異なっている。ただし、記述様式は江戸時代の村差出明細帳から倣っている部分も見られ、そうした部分は共通性が見いだせる。こうした見地に立って「吾妻郡村誌」をみると、本史料は明治二十二年の市町村制が施行される前年に吾妻郡役所が郡村誌編纂の目的で町村ごとに書き上げられた地誌を編集したものと考えられる貴重な史料である。以下本史料は「吾妻郡村誌」の表題を活かすとともに、二冊を「甲」・「乙」で表記したい。なお、前述の『上野国郡村誌』に収録されている「吾妻郡村誌」については、混乱をきたさぬよう、ここでは『上野国郡村誌（吾妻郡村誌）』と表記し、差別化を図りたい。先にも触れたように、「吾妻郡村誌」は中之条町歴史と民俗の博物館

別表1 吾妻郡の変遷（江戸時代から現在まで）

我妻郡															群馬郡			郡名	寛文郷帳 (一六六八年)					
赤岩村	日影村	大塚村	平塚村	横尾村	赤坂村	蟻川村	五反田村	四方村	上沢渡村	下沢渡村	山田村	折田村	市城村	青山村	伊勢町	西中野条村	中野条町	下尻高村		上尻高村	中山村	町村名		
吾妻郡															群馬郡			郡名	元禄郷帳 (一七〇三年)					
赤岩村	日影村	栃久保村	大塚村	平塚村	横尾村	赤坂村	大道新田村	蟻川村	原岩本村	五反田村	四方村	上沢渡村	下沢渡村	山田村	折田村	市城村	青山村	伊勢町		西中野条村	中野条町	尻高村	中山村	町村名
吾妻郡															群馬郡			郡名	天保郷帳 (一八三四年)					
赤岩村	日影村	栃窪村	大塚村	平塚村	横尾村	赤坂村	大道新田村	蟻川村	原岩本村	五反田村	四方村	上沢渡村	下沢渡村	山田村	折田村	市城村	青山村	伊勢町		西中野条村	中野条町	尻高村	中山村	町村名
20	20	20	20	20	20	20				20								20			20	9	大区	大区小区 (一八七七年)
11	7	8	7	8	7	7				6								5			8	2	小区	
吾妻郡															西群馬郡			郡名	地方行政区画便 (一八八六年)					
赤岩村	日影村	栃窪村	大塚村	平塚村	横尾村	赤坂村	大道新田村	蟻川村	原岩本村	五反田村	四方村	上沢渡村	下沢渡村	山田村	折田村	市城村	青山村	伊勢町		西中之條村	中之條町	尻高村	中山村	町村名
吾妻郡															西群馬郡			郡名	市町村制施行 による町村名 (一八八九年)					
草津村		名久田村						伊参村												中之条町		高山村		町村名
吾妻郡															西群馬郡			郡名	町村合併促進法 公布時の町村名 (一九五三年)					
六合村		名久田村						伊参村												中之条町		高山村		町村名
吾妻郡															西群馬郡			郡名	昭和大合併後 (一九六二年)					
六合村																						中之条町	高山村	町村名
吾妻郡															西群馬郡			郡名	平成の大合併後 (二〇一〇年四月 現在)					
																							中之条町	高山村

我妻郡																												
須賀尾村	大柏木村	大戸村	厚田村	三島村	横谷村	松尾村	岩下村	矢倉村	郷原町	原戸村	河井村	金井村	岩井村	植栗村	小泉村	泉沢村	新巻村	奥田村	五町田村	箱島村	岡崎新田村	前口村	草津村	入山村	生須村	小雨村		
吾妻郡																												
須賀尾村	大柏木村	本宿村	萩生村	大戸村	厚田村	三島村	松尾村	岩下村	郷原町	原戸村	川井村	金井村	岩井村	植栗村	小泉村	泉沢村	新巻村	奥田村	五丁田村	箱島村	岡崎新田村	前口村	草津村	入山村	生須村	小雨村	大子村	
吾妻郡																												
須賀尾村	大柏木村	本宿村	萩生村	大戸村	厚田村	三島村	松尾村	岩下村	郷原町	原戸村	川井村	金井村	岩井村	植栗村	小泉村	泉沢村	新巻村	奥田村	五町田村	箱島村	岡崎新田村	前口村	草津村	入山村	生須村	小雨村	太子村	
20				20			20			20			20			20												
1		9			2		3			4		11																
吾妻郡																												
須賀尾村	大柏木村	本宿村	萩生村	大戸村	厚田村	三島村	松尾村	岩下村	矢倉村	郷原町	原戸村	川井村	金井村	岩井村	植栗村	小泉村	泉沢村	新巻村	奥田村	五町田村	箱島村	岡崎新田村	前口村	草津村	入山村	生須村	小雨村	太子村
坂上村				岩島村			原町			太田村			東村			草津村												
吾妻郡																												
坂上村				岩島村			原町			太田村			東村			草津町		六合村										
吾妻郡																												
吾妻町									東村			草津町		六合村														
吾妻郡																												
東吾妻町											草津町		中之条町															

我妻郡																																		
入須川村	須川町	湯之宿村	布施村	師田村	田代村	大笹村	干保村	大前村	門貝村	西窪村	鎌原村	中井村	赤羽根村	芦生田村	袋倉村	今井村	狩宿村	小宿村	古森村	与木屋村	荒井村	羽尾村	立石村	勘場木村	坪井村	河原湯村	河原畑村	林村	横壁村	長野原村				
吾妻郡																																		
上須川村	入須川村	峰須川村	須川村	湯宿村	布施村	師田村	田代村	大笹村	干保村	大前村	門貝村	西久保村	鎌原村	中居村	赤羽根村	芦生田村	袋倉村	今井村	狩宿村	小宿村	古森村	与喜屋村	新井村	羽根尾村	立石村	勘場木村	坪井村	川原湯村	川原畑村	林村	横壁村	長之原村		
吾妻郡																																		
上須川村	入須川村	峰須川村	須川村	湯宿村	布施村	師田村	田代村	大笹村	干保村	大前村	門貝村	西窪村	鎌原村	中居村	赤羽根村	芦生田村	袋倉村	今井村	狩宿村	小宿村	古森村	与喜屋村	新井村	羽根尾村	立石村	勘場木村	坪井村	河原湯村	河原畑村	林村	横壁村	長野原村		
19	19	19	19								20						20	20			20		20				20							
8	9		8	10							12						11	12			10		11				10							
吾妻郡																																		
入須川村	東峰須川村	西峰須川村	須川町	布施村	師田村	田代村	大笹村	干保村	大前村	門貝村	西窪村	鎌原村	三原村	蘆生田村	袋倉村	今井村	応桑村	古森村	与喜屋村	羽根尾村	大津村	川原湯村	川原畑村	林村	横壁村	長野原町								
吾妻郡																																		
	久賀村												孀恋村																				長野原町	
	利根郡																																	吾妻郡
	新治村																																	長野原町
	利根郡																																	吾妻郡
	新治村																																	長野原町
	利根郡																																	吾妻郡
	みなかみ町																																	長野原町

我妻郡		
長井村	吹路村	猿ヶ京村
吾妻郡		
合瀬村	長井村	吹路村
吾妻郡		
合瀬村	長井村	吹路村
19		
9		
吾妻郡		
永井村	吹路村	猿ヶ京村
吾妻郡		
久賀村		
利根郡		
新治村		
利根郡		
新治村		
利根郡		
みなかみ町		

*本表は『群馬の地名(日本歴史地名体系十)』平凡社を引用・参考にして、平成の大合併を追加して作成。
 *明治三十三(一九〇〇)年七月一日、日影村・赤岩村・太子村・小雨村・生須村・入山村が草津村から分離し、六合村が誕生した。分離の経緯については『六合村誌』(P三三八〜三九三)を参照されたい。
 *明治二十九(一九〇六)年三月二十九日には群馬郡高山村が吾妻郡に編入となる。
 *明治二十九(一九〇六)年四月一日、吾妻郡久賀村が利根郡に編入となり、明治四十一年、久賀村と湯の原村が合併し、新治村が発足。なお、新治村からみなかみ町へ至る経緯は吾妻郡外となるので表の中では詳細は触れない。

別表2 吾妻郡における主な郡村誌・町村誌の変遷

年代	郡村誌・町村誌名	備考
明治11(1878)年	『上野国郡村誌(吾妻郡村誌)』	
明治21(1888)年	吾妻郡村誌	
明治末期	『郷土誌』	中之条町・沢田村・伊参村・原町・長野原町・草津町が現存する
大正8(1919)年	『中之条郷土誌』	柳田阿三郎著
昭和4(1929)年	『吾妻郡誌』	『吾妻郡誌追録』を昭和11年に刊行
戦後	町村誌	『原町誌』(昭和35年)、『あがつま 太田村誌』(昭和40年)、『あがつま あづま』(昭和40年)、『あがつま 坂上村誌』(昭和46年)、『岩島村誌』(昭和46年)、『高山村誌』(昭和47年)、『六合村誌』(昭和48年)、『中之条町誌(第1-3巻・資料編)』(昭和51~58年)、『長野原町誌(上・下)』(昭和51年)、『嬭恋村誌(上・下)』(昭和52年)、『草津町誌(第1-2巻、自然・科学編)』(昭和51年~平成4年)

「ミュゼ」に二冊の簿冊として所蔵されている。表紙には「明治二十一年 調 吾妻郡村誌 吾妻郡役所」と記され、「二冊ノ内甲」と「二冊ノ内乙」との二冊からなる。大きさは縦二三・五センチメートル×横一五・五センチメートルで、地誌標準と銘打った執筆様式を示し、沿革・位置・境域・地味適種・地質・字地・戸長役場・農工場・会社・病院・神社・寺院・道路・渡津・橋梁・湖沼・瀑布・古跡・古墳・名勝・人物・流謫・舊検地帳表書合計・古文書・変異記事の二五の分類項目を基準に、各町村の有志によって執筆されている。基準は示されているものの内容は町村によって差異がみられ、記述の長短についてもまちまちである。収録の形態は、罫紙や和紙に墨書され袋綴じにして簿冊状で二分冊からなり、一部を除き、概ね連合戸長役場単位(別表1参照)でまとめているようである。

本史料の「甲」には「草津村・前口村・日影村・生須村・赤岩村・太子村・小雨村・入山村・門貝村・岩下村・松谷村・三島村・三原村・鎌原村・西久保村・袋倉村・今井村・芦生田村・大戸村・萩生村・奥田村・新巻村・箱島村・岡崎新田村・五町田村・小泉村・泉沢村・岩井村・植栗村・長野原町・大津村・羽根尾村・与喜屋村・古森村」の三四町村(ただし、長野原町部分については外四ヶ町村が一括で記されている)が、「乙」には、蟻川村・五反田村・吹路村・永井村・猿ヶ京村・大道新田村・原岩本村・須川町・師田村・入須川村・東峰須川村・西須川村・布施村・横尾村・平村・大塚村・赤坂村・栃窪村・折田村・山田村・下沢渡村・上沢渡村・四方村」の二三町村が収録されている。合計すると五七町村となるが、明治二十一年(一八八八)当時の吾妻郡は、現在の利根郡の一部町村を含む八〇町村から成っていて、中之条町・西中之条村・伊勢町・青山村・市城村・原町・金井村・川戸村・郷原村・矢倉村・厚田村・

本宿村・大柏木村・須賀尾村・川原畑村・川原湯村・横壁村・林村・応桑村・大笹村・田代村・干俣村・大前村の二三町村が欠落していることになる。また、現在吾妻郡に属している高山村は、当時は西群馬郡に属していた。なお、ここに収録されている五七町村の現在の町村名については、別表1の「吾妻郡村誌」記載町村一覧を参考にされたい。

欠落している町村はあるものの、統一した分類項目で調整された「吾妻郡村誌」は、明治十一年の『上野国郡村誌』から明治末期の『郷土誌』編纂に至る明治中期の過渡期の郷土編纂史料であり、今後吾妻郡の歴史研究に活かされることが期待される。

(二)「吾妻郡村誌」における六合地区の村

ここで六合地区について触れてみたい。江戸時代の村の単位については、別表1の「元禄郷帳(一七〇三年)」をみると後の六合村の原形となる日影村・生須村・赤岩村・大子村(太子村)・小雨村・入山村が出揃って、これを以って明治維新を迎えている。幸運にも、明治二十二年の町村合併直前に編纂された「吾妻郡村誌」に、六合地区の日影村・生須村・赤岩村・太子村・小雨村・入山村はもれなく収録(本書の資料編に全文を原文筆写に若干編集を加え収録)されていた。各村によつて編集者(誌料編輯有志賛襄者)の表記の有無はあるものの、概ね地誌標準に沿つて日影村一一項目、生須村一〇項目、赤岩村一一項目、太子村一一項目、小雨村一一項目、入山村一五項目が記載されている。明治二十二年の合併を経て草津村から分離して六合村が成立するのは明治三十三年のことであるが、明治二十一年時点では六村は連合戸長役場の形態をとつており、六村はすでに編集者は異なるものの歩調を合わせた記述形式をとつ

ている。その内容や「小雨村外五ヶ村戸長役場」の罫紙を使用して記載されているなどがそれを裏づけている(別表4参照)。

明治十一年の『上野国郡村誌(吾妻郡村誌)』にも六村は載つていてその執筆様式は概ね「境域・幅員・管轄沿革・里程・地勢・地味・税地・字地・貢租・戸数・人数・牛馬・山・川・森林・原野・牧場・鉱山・湖沼・道路・揭示場・堤塘・滝・温泉・冷泉・陵墓・社・寺・学校・村町事務取扱所・製糸場・古跡・名勝・物産・民業」などが項目として示されている。これに対し「吾妻郡村誌」は、「沿革・位置・境域・地味適種・地質・字地・戸長役場・農工場・会社・病院・神社・寺院・道路・渡津・橋梁・湖沼・瀑布・古跡・古墳・名勝・人物・流謫・舊検地帳表書合計・古文書・変異記事」の二五項目を基準としている(別表5参照)。このように項目の違いもさることながら、全体を通じたボリュームは「吾妻郡村誌」が多くなつている。これは、字地などの地名が詳細であることや旧検地帳が収録されていることにも原因があると考えられる。明治十一年から十年しか経過していないこともあるが、一方で「十年ひと昔」ともいうことができ、小雨村の学校生徒数を一つみても、男女一二人から男女六五人と増えているなど村の様子が変化していることを見取れる。

内容の詳細については史料編に譲りたいが、本誌に「吾妻郡村誌」を掲載したのは、『上野国郡村誌(吾妻郡村誌)』にも『六合村誌』にも掲載されていない新史料であり、編纂史的には明治十一年の『上野国郡村誌』から明治末期の『郷土誌』(ただし六合村は不明)までの明治前期の過渡期の編纂であり、草津村への合併の直前の時代的背景の中で、六合地区の人によつて書き上げられているまさに六合の歴史を知る上で欠くことのできない重要なものと考えたからである。

別表4 「吾妻郡村誌」記載町村一覧表

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
泉沢村	小泉村	五町田村	岡崎新田村	箱島村	新巻村	奥田村	萩生村	大戸村	芦生田村	今井村	袋倉村	西久保村	鎌原村	三原村	三島村	松谷村	岩下村	門貝村	入山村	小雨村	太子村	赤岩村	生須村	日影村	前口村	草津村	町村名
東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	婦恋村	婦恋村	婦恋村	婦恋村	婦恋村	婦恋村	東吾妻町	東吾妻町	東吾妻町	婦恋村	中之条町(六合地区)	中之条町(六合地区)	中之条町(六合地区)	中之条町(六合地区)	中之条町(六合地区)	中之条町(六合地区)	草津町	草津町	現在の町村名
甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	冊別
一七丁	一八丁	三一丁	二二丁	二五丁	二二丁	二二丁	一九丁	七九丁	三一丁	一八丁	一五丁	一四丁	一六丁	二五丁	二六丁	三〇丁	二二丁	一六丁	二二丁	一〇丁	九丁	一一丁	九丁	一〇丁	五丁	二三丁	丁
植栗村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用	植栗村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用	五町田村連合戸長役場の罫紙を使用	五町田村連合戸長役場の罫紙を使用	五町田村連合戸長役場の罫紙を使用	五町田村連合戸長役場の罫紙を使用	五町田村連合戸長役場の罫紙を使用	罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙及び和紙の二種使用	大戸村連合戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙及び和紙の三種使用	三原村戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙の二種使用	三原村戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙の二種使用	三原村戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙の二種使用	三原村戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙の二種使用	三原村戸長役場の罫紙を使用	三原村戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙の二種使用	岩下村連合戸長役場の罫紙を使用	岩下村連合戸長役場の罫紙を使用	岩下村連合戸長役場の罫紙を使用	三原村戸長役場の罫紙と鉛筆で罫線を入れた和紙の二種使用	小雨村外五ヶヶ村戸長役場の罫紙使用	小雨村外五ヶヶ村戸長役場の罫紙使用	小雨村外五ヶヶ村戸長役場の罫紙使用	小雨村外五ヶヶ村戸長役場の罫紙使用	小雨村外五ヶヶ村戸長役場の罫紙使用	小雨村外五ヶヶ村戸長役場の罫紙使用	草津村連合戸長役場の罫紙使用	草津村連合戸長役場の罫紙使用	備考

*簿冊は袋綴じとなっているが、袋綴じ1枚分を1丁(現在のページでは1丁が2ページ分に相当する)と表記した。町村別に収録丁数を表記したが一部欄外記事はここから除いた。

*中之条町の中で、六合地区に相当する部分のみ()書きで六合地区と表記した。参考として、以下に欠落している23町村を表記しておく。中之条町・西中之条村・伊勢町・青山村・市城村・原町・金井村・川戸村・郷原村・矢倉村・厚田村・本宿村・大柏木村・須賀尾村・川原畑村・川原湯村・横壁村・林村・応桑村・大笹村・田代村・干俣村・大前村なお、高山村が吾妻郡に編入される中山村・尻高村は当時、西群馬郡に所属。

57	四万村	中之条町	乙	二八丁	四万村戸長役場の罫紙を使用
56	上沢渡村	中之条町	乙	五三丁	山田村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
55	下沢渡村	中之条町	乙	三四丁	山田村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
54	山田村	中之条町	乙	六六丁	山田村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
53	折田村	中之条町	乙	四三丁	山田村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
52	栃窪村	中之条町	乙	六丁	罫紙(記名なし)
51	赤坂村	中之条町	乙	七丁	罫紙(記名なし)
50	大塚村	中之条町	乙	一六丁	罫紙(記名なし)
49	平村	中之条町	乙	一五丁	罫紙(記名なし)
48	横尾村	中之条町	乙	二〇丁	罫紙(記名なし)
47	布施村	利根郡みなかみ町	乙	一九丁	須川町連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
46	西須川村	利根郡みなかみ町	乙	一三丁	須川町連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
45	東峰須川村	利根郡みなかみ町	乙	一二丁	須川町連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
44	入須川村	利根郡みなかみ町	乙	一〇丁	須川町連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
43	師田村	利根郡みなかみ町	乙	二九丁	須川町連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
42	須川町	利根郡みなかみ町	乙	一九丁	原岩本村連合戸長役場の罫紙を使用
41	原岩本村	中之条町	乙	一三丁	原岩本村連合戸長役場の罫紙を使用
40	大道新田村	中之条町	乙	一九丁	吹路村連合戸長役場の罫紙を使用
39	猿ヶ京村	利根郡みなかみ町	乙	一九丁	吹路村連合戸長役場の罫紙を使用
38	永井村	利根郡みなかみ町	乙	一二丁	吹路村連合戸長役場の罫紙を使用
37	吹路村	利根郡みなかみ町	乙	一八丁	ペン書きの罫線入りの和紙を使用
36	五反田村	中之条町	乙	一八丁	原岩本村連合戸長役場の罫紙を使用
35	蟻川村	中之条町	乙		
34	古森村	長野原町	甲		
33	与喜屋村	長野原町	甲		
32	羽根尾村	長野原町	甲		
31	大津村	長野原町	甲		
30	長野原町	長野原町	甲	六〇丁	長野原町連合戸長役場の罫紙と和紙を使用。長野原町外四ヶ村を一括で作成
29	植栗村	東吾妻町	甲	二四丁	植栗村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用
28	岩井村	東吾妻町	甲	二〇丁	植栗村連合戸長役場の罫紙と和紙を使用

別表5 「吾妻郡村誌」における六合地区村別地誌標準の執筆の有無

変異記事	古文書	旧検地帳表書	流	人物	名勝	古蹟	古跡	瀑布	(原野)	湖沼	(山岳)	橋梁	渡津	道路	寺院	神社	病院	会社	農工場	(学校)	戸長役場	字地	地味適種	境域	位置	沿革	
×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	日影村
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	生須村
○	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	○	×	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	赤岩村
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	太子村
×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	小雨村
×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○	×	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	入山村

*六合地区村別地誌標準には無いが、記載事項があるものは()でくくり有無を表示した。

四・吾妻郡村誌の位置づけ

本史料は、明治二十一年に郡内の町村から町村誌的な記録を吾妻郡役所に提出させていることから、昭和初年の『群馬縣史』第四卷や萩原進著『群馬県史明治時代』で「明治二十一年四月に市制町村制が公布（翌年施行）され、それに伴って内務省地誌調査本部は各府県に対して郡村誌の編輯申達を命じ、本県では同年八月に訓令として郡町村へ移達した。これは、地誌と呼ばれるもので、新しい町村の区域、人口、資力等の調査をなし、各郡ごとにまとめて郡長の意見を附し、府県を通じて内務大臣に提出した」と触れている郡村誌の控えに相当するものと考えられる。群馬県内でのこの時期編纂された同様の史料は群馬県文化事業振興会によって刊行された『上野国郡村誌』の一七巻の邑楽郡の項に見取れる。『上野国郡村誌』の解題には、「邑楽郡の分は明治二十二年十一月二十九日に邑楽郡役所第一科の編輯で『群馬県邑楽郡町村誌材料』として刊行されており、邑楽郡誌が併録されている。邑楽郡以外には郡村誌はなく町村誌のみである。邑楽郡以外は草稿である。」とあるが、その内容には明治十年代後半にまで及ぶ記述がみられ、明らかに『上野国郡村誌』の中では異質である。むしろその執筆様式も「吾妻郡村誌」に近く、明治二十一年の市制町村制公布に伴う郡村誌編輯の一史料と考えて良いと思われる。残念ながら県内ではこれ以外に同様な史料は見当たらない。また、全国の状況がどうか判断する材料も今のところ持ち合わせておらず、明治二十一年の市制町村制公布に伴う郡村誌編輯の実態を再現するには史料が乏しくその位置づけも不完全な状況であることは否めない。しかし、明治二十二年施行の市制・町村制によって、大日本帝国憲

法下の地方自治制度が確立する直前の吾妻郡（六合地区を含む）の町村の実態を知る上ではたいへん貴重な史料である。今後県内の吾妻郡・邑楽郡以外からも同様な資料が発見されることが期待される。

（引用・参考文献）

『六合村誌』（六合村）、『中之条町誌第一巻』（中之条町）、『群馬県史』（群馬県）、『群馬の地名（日本歴史地名体系一〇）』（平凡社）、『吾妻郡誌』（吾妻教育会）、『利根郡誌』（利根教育会）、『高山村誌』（高山村）、『長野原町誌』（長野原町）、『新治村誌』（みなかみ町）、『上野国郡村誌 第一巻、丑木幸男「解題」』（群馬県文化事業振興会）、『群馬県史明治時代』（萩原進著）、『群馬縣史』（群馬縣教育會）、『群馬文化二〇〇号「地方史誌・研究誌」（阿久津宗二）』（群馬県地域文化研究協議会）、『双文VOL・一九「群馬県内における明治期「郷土誌」編纂の動向」（今井啓介）』（群馬県立文書館）、『双文VOL・二四「群馬県における史誌編纂事業とその変遷」（岡田昭二）』（群馬県立文書館）、『群馬新百科事典』（上毛新聞社）、
 解題執筆にあたり、群馬県立文書館・岡田昭二館長にご教示いただき、「吾妻郡村誌」原文筆写にあたり、日本古文書学会会員・小山友孝氏、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」古文書ボランティア員・富川栄子氏にご指導いただいた。

別紙3 『上野国郡村誌』の吾妻郡収録町村一覧表

②①	須川村（利根郡みなかみ町）	②①	泉沢村（吾妻郡東吾妻町）
②	東峯須川村（ ” ）	②②	新巻村（ ” ）
③	西峯須川村（ ” ）	②③	厚田村（ ” ）
④	入須川村（ ” ）	②④	箱嶋村（ ” ）
⑤	猿ヶ京村（ ” ）	②⑤	岡崎新田（ ” ）
⑥	吹路村（ ” ）	②⑥	赤坂村（吾妻郡中之条町）
⑦	布施村（ ” ）	②⑦	平村（ ” ）
⑧	師田村（ ” ）	②⑧	大塚村（ ” ）
⑨	永井村（ ” ）	②⑨	栃窪村（ ” ）
⑩	五町田邨（吾妻郡東吾妻町）	③⑩	中條町（ ” ）
⑪	大戸村（ ” ）	③①	伊勢町（ ” ）
⑫	本宿村（ ” ）	③②	西中條村（ ” ）
⑬	萩生村（ ” ）	③③	青山村（ ” ）
⑭	須賀尾村（ ” ）	③④	市城邨（ ” ）
⑮	大柏木村（ ” ）	③⑤	横尾邨（ ” ）
⑯	原町（ ” ）	③⑥	蟻川邨（ ” ）
⑰	山田村（吾妻郡中之条町）	③⑦	原岩本邨（ ” ）
⑱	三島村（吾妻郡東吾妻町）	③⑧	五反田村（ ” ）
⑲	奥田村（ ” ）	③⑨	大道新田（ ” ）
⑳	小泉村（ ” ）	④⑩	川戸村（吾妻郡東吾妻町）

⑥0	⑤9	⑤8	⑤7	⑤6	⑤5	⑤4	⑤3	⑤2	⑤1	⑤0	④9	④8	④7	④6	④5	④4	④3	④2	④1
小雨村()	生須村(吾妻郡中之条町)	古森村(吾妻郡長野原町)	赤岩村()	日影邨(吾妻郡中之条町)	千俣村()	門貝村()	西窪村()	大前村(吾妻郡嬭恋村)	長野原町()	横壁村()	川原湯村()	川原畑村(吾妻郡長野原町)	四萬村()	上沢渡村()	下沢渡村()	折田村(吾妻郡中之条町)	植栗村()	岩井村()	金井村(吾妻郡東吾妻町)
⑧0	⑦9	⑦8	⑦7	⑦6	⑦5	⑦4	⑦3	⑦2	⑦1	⑦0	⑥9	⑥8	⑥7	⑥6	⑥5	⑥4	⑥3	⑥2	⑥1
草津村(吾妻郡草津町)	田代村()	大笹村(吾妻郡嬭恋村)	応桑村(吾妻郡長野原町)	今井村(吾妻郡嬭恋村)	矢倉村()	松谷村()	巖下村()	郷原邨(吾妻郡東吾妻町)	大津村(吾妻郡長野原町)	芦生田村(吾妻郡嬭恋村)	林 村(吾妻郡長野原町)	三原邨(吾妻郡嬭恋村)	與喜屋村(吾妻郡長野原町)	鎌原村()	袋倉村(吾妻郡嬭恋村)	前口村(吾妻郡草津町)	羽根尾村(吾妻郡長野原町)	入山村()	太子村(吾妻郡中之条町)

資料編

上野國吾妻郡日影村地誌

上野國吾妻郡日影村地誌標準

- 沿革 ○
- 位置 ○
- 境域 ○
- 地味適種 ○
- 地質 ○
- 字地 ○
- 戸長役場 ○
- 農工場 ○
- 會社 ○
- 病院 ○
- 神社 ○
- 寺院 ○
- 道路 ○
- 渡津 ○

橋梁

湖沼 ○

瀑布 ○

古跡 ○

古墳 ○

名勝 ○

人物 ○

流謫 ○

舊検地帳表書合計

古文書 ○

變異記事 ○

沿革

名称 村落ノ創設不詳村名ニ異變ナシ明徳年間太子村ヲ分ツ

古ヘヨリ吾妻郡ニ属シ三原ノ莊坪井ノ郷ト云フ天保年間

ヨリ大戸村外四十四ヶ村大組合草津村外七ヶ村小組合トス

明治二年草津村外七ヶ村肝煎名主彦名置明治四年

群馬縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻

郡役所ノ所管トナル太子村外四ヶ村聯合トナリ明治

十七年改メテ赤岩村外四ヶ村聯合トナリ明治十八年

十月入山村ヲ合併シ小雨村外五ヶ村聯合トナル

分合 往古太子村ハ一村タリシカ明德年間分離シテ太子村ヲ創設ス

天正十八年ヨリ天和元年マテ真田氏ノ領地タリ天和元年ヨリ

寛保元年マテ徳川ニ隸シ代官熊澤武兵衛・竹村惣

左衛門・大田弥太夫・雨宮勘兵衛・竹川吉左衛門・増井

管轄 弥吾左衛門・造藤七左衛門・池田新兵衛・早川安

左衛門等交代シテ支配ス寛保元年ヨリ徳川ノ旗下

伊丹・深津ノ両氏ノ領地タリ明治元年岩鼻縣ノ

管轄トナリ明治四年群馬縣ト改称明治六年熊谷縣

ニ轉シ明治九年七月再ヒ群馬縣ノ所轄ニ皈ス

地味

色 赤黒

質 礪土ニシテ窒素質多量ヲ含ム

適種 麦・麻・稗等ニ宜シ

地勢

山脈 白根・萬座ノ山脈西方ニ接ス

水脈 東方ニ須川流通ス

東部 川

西部 原野山林及岩石

南部 長野原町界耕地及原野

北部 村落及耕地

全地形勢 戸数五十一戸人口式百三十六人ニシテ人家接近ハ稍平

坦ナリト雖モ西部一面岩山屹立ス用水至便ニシ

テ水田僅少ナレバ灌漑患ナシ

位置疆域

位置 吾妻郡ノ西北

東 赤岩村

西 大津村・前口村

南 長野原町

北 太子村・前口村

幅員

東西 五十丁

南北 三十丁壹間貳尺

周圍 三里三十丁五十四間

面積 百九十八万七千七百四十八坪

字地

ウルのイノ	筆数	壹筆	湯坂	筆数	壹筆	タカヤ	筆数	貳筆	湯窪	筆数	六十九筆	岩景山	筆数	拾七町壹反七畝廿七歩	老貫地	筆数	六拾九筆	田畑	筆数	貳拾四町九反五畝拾六歩	中澤	筆数	六拾三町五反八畝廿歩	吹久保	筆数	百四十六筆
	反別	五拾八町八反三畝廿四歩		反別	七町三反三畝拾七歩		反別	三反貳畝拾三歩		反別	六拾町貳反九畝廿五歩		反別	拾七町壹反七畝廿七歩		反別	五町八反八畝廿五歩		反別	貳拾四町九反五畝拾六歩		反別	六拾三町五反八畝廿歩		反別	貳拾六町壹反壹畝拾三歩
			長原			長井			一本木			葎畑			合の畑			八升蒔			平澤			下澤		
			筆数	段別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別	筆数	反別
			壹筆	百九拾三町貳反四畝歩	廿八筆	四拾壹町六反三畝貳歩	貳十二筆	貳拾六町九反六畝廿五歩	三十六筆	貳拾五町四反四畝拾七歩	湯窪	湯窪	七十九筆	八町七反拾九歩	合ノ畑・井戸入・道下	百拾壹筆	七町八反拾歩	八升蒔	百四十壹筆	貳拾四町八反壹畝四歩	平沢・川端	三百拾貳筆	六拾貳町四反八畝廿貳歩	漆沢・大木の入・下の畑		

戸長役場	学 校
神 社	赤岩尋常小学校日影分校
八幡社	所在 吾妻郡日影村字中沢
所在 日影村字八升蒔 坪数二千百坪	地 坪 二百九十壹坪
祭神 譽田別命	建 坪 二十八坪
社 格 村社	種類 木造ニシテ萱葺平家
創建年月 不詳	生徒 男二十人
祭日 八月十五日	女二十四人
氏子 五十一戸	教員 吉村初太郎
末社 ○	
現任官若クハ祠官ノ名 高山茂樹	
寺 院	
岩景山龍澤寺	
所在 日影村字合ノ畑坪数四十九坪	
宗派 曹洞宗 寺格 上野国碓氷郡上後閑村	
開基人名 湯本三郎右衛門	
開基年月 天養元年三月	
末寺院 吾妻郡入山村月洲庵	
現住ノ姓名 土屋一政	
雑項	
天養元年老宇ヲ建立シ尼僧妙全住居ス	
後臨濟宗僧榮昌ナル者住ス事数十年ニシテ右堂	
破壊セシヲ以テ文禄三年曹洞宗明堂宝珠ヲ以テ	
鎌倉將軍源頼朝公簾下湯本三郎右衛門源行	
綱開基シテ再建則チ開基法名龍澤寺殿口	
月東江居士ト号ス慶應二年十月廿日悉皆	
焼失セリ同三年四月庫裏再建ニテ現今ニ至ル	

古跡 ○

古墳 ○

名勝 ○

人物 ○

流謫 ○

舊檢地帳表書合計

古文書 ○

変異記事 ○

誌料編輯有志贊襄者

群馬縣下上野国吾妻郡生須村中澤藤衛

身分 平民

履歴 明治十七年十月十五日吾妻郡赤岩村聯合村會議員当撰候事

同十八年四月三十日群馬縣第一百七学区学務委員申付候事

同年七月五日吾妻郡赤岩村聯合戸長役場詰筆生申付候事

同年十一月廿一日赤岩村聯合會議員当撰相成候事

同廿年十二月廿九日職務勉勵ニ付為慰勞

位置 吾妻郡ノ西北

東 赤岩村

分合 ○

天正十八年ヨリ明曆三年迄真田氏ノ領地タリ同年十一月徳川氏ニ隸シ延享三年幕府ノ旗下伊丹孝之丞ノ知行所トナリ明治元年岩鼻縣ノ管轄トナリ明治四年群馬縣ト改称ス明治六年熊谷縣ニ轉シ明治九年七月再群馬縣ノ所轄ニ皈ス

沿革

金五拾錢給与ス

同廿一年五月十日吾妻郡小雨村外五ヶ村用係申付候事

沿革

名称 往古寺社木村ト称シ天正年間改メテ生須村ト称シ

古ヘヨリ吾妻郡ニ属シ三原ノ莊坪井ノ郷ト云フ天保年間ヨリ大戸村外四十四ヶ村大組合草津村外七ヶ村小組合トス明治二年草津村外七ヶ村二肝煎名主老名ヲ置ク明治四年群馬縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻郡役所ノ所轄トナル太子村外四ヶ村聯合トナリ明治十七年改メテ赤岩村外四ヶ村聯合トナリ明治十八年十月入山村ヲ合併シテ小雨村外五ヶ村聯合トナル

所屬 縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻郡役所ノ所轄トナル太子村外四ヶ村聯合トナリ明治十七年改メテ赤岩村外四ヶ村聯合トナリ明治十八年十月入山村ヲ合併シテ小雨村外五ヶ村聯合トナル

分合 ○

天正十八年ヨリ明曆三年迄真田氏ノ領地タリ同年十一月徳川氏ニ隸シ延享三年幕府ノ旗下伊丹孝之丞ノ知行所トナリ明治元年岩鼻縣ノ管轄トナリ明治四年群馬縣ト改称ス明治六年熊谷縣ニ轉シ明治九年七月再群馬縣ノ所轄ニ皈ス

管轄 之丞ノ知行所トナリ明治元年岩鼻縣ノ管轄トナリ明治四年群馬縣ト改称ス明治六年熊谷縣ニ轉シ明治九年七月再群馬縣ノ所轄ニ皈ス

位置 吾妻郡ノ西北

位置疆域

東 赤岩村

分合 ○

西 小雨村

南 赤岩村

北 入山村

幅員

東西 廿七町五十間

南北 三十町壹間

周囲 二里廿丁拾間

面積 九拾貳万三千九百廿壹坪

地味

色 赤黒

質 窒素質ニ乏シクシテ多く剥簾並斯質ヲ含ム

適種 粟・稗・麻・蕎麥ニヨロシ

地勢

山脈 東方高間山脈ニ接ス

水脈 西方ニ須川流通ス

東部 山林原野

西部 川

南部 岩山

北部 山

全地形勢 戸数十八戸人口百八人家接近ハ耕地ニシテ稍

平坦ナリ北部岩山屹立ス用水不便ニシテ水田少ナシ

字地

寺社木			東平			大梨			降跡			長敷			駒ヶ澤		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
百廿八筆		寺社木・ぬく入・石津	百貳拾三筆	三町貳反九畝廿九歩		九拾八筆	貳拾六町貳反七畝拾壹歩		四十三筆	三拾七町九反八畝拾六歩		七筆	三拾八町五反六畝三歩		五筆	六拾八町三反壹畝廿八歩	
辰ノ口			西裏			一ツ内			立石			夫婦石			小雨		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
五拾六筆		八町八反三畝貳拾八歩	二百筆	拾町貳反四畝拾壹歩		五筆	拾貳町八畝貳歩		八筆	拾五町五反五畝拾四歩		六筆	三拾八町四反貳畝廿五歩		七筆	三反五畝拾六歩	

神 社
 赤城神社
 所在 生須村字東平
 坪数 五十七坪
 社格 大國主ノ命
 創建年月 不詳
 祭日 三月十五日
 氏子 十八戸
 末社 八幡社金毘羅社
 現任官司若クハ祠官ノ名 高山茂樹

道路

同郡赤岩村ヨリ同郡入山村ニ達スル里道村内字寺
社木辰ノ口西裏大梨一ツ内等ヲ経テ入山村字
應徳界ニ達ス

等級 二等

長 三十丁壹間

幅 六尺

並木 ○

形状 坂路僅ニシテ平坦ナリト雖モ西片岩山ニシテ

險阻左右小屈曲多シ

湖沼

所在	降跡沼 吾妻郡生須村字一ツ内
徑	三十間
面積	十五間
物産	二百廿四坪
水利	○
雑項	○ 本村字降跡山谷ヨリ水源ヲ発ス 該沼ニ入ル下流ハ本村字大梨ヲ 西流シテ須川ノ中流ニ入ル

舊検地帳表書合計

表書		合計	
貞享三 寅年	丙年	上野国吾妻郡生須村御検地水帳 九月 酒井河内守内 高須隼人	壹冊
古検	式反三畝廿五歩	田方	壹反七畝廿歩
内	七畝廿五歩	下田	九畝廿五歩
下々田	九十町七畝拾壹歩	古検	六町三反四畝拾三歩
内	六反三畝拾九歩	上畑	六反廿九歩
中畑	三町三反壹畝九歩	下畑	四反五畝拾貳歩
下々畑	三町三反壹畝九歩	山下々畑	壹反八畝廿五歩
屋敷	九丁三反壹畝六歩	古検	合六町五反式畝三歩
田畑屋敷	田方	内	拾七石七升貳合
古検	八反六畝廿歩	雑木林	百姓林六ヶ所
内	分米三石壹斗八升貳合五ツ		
	分米二石四斗三升九合四ツ		
	分米三石四斗貳升九合三ツ		
	分米六石六斗貳升六合二ツ		
	分米四斗五升四合一ツ		
	分米九斗四升貳合五ツ		
	古高九十七石五斗五升三合		
	分米拾七石五斗四合		

古跡 ○

古墳 ○

名勝 ○

人物 ○

流謫 ○

舊檢地帳表書合計

古文書 ○

変異記事

沿革

名称 村落ノ創設不詳

古ヘヨリ吾妻郡ニ属シ三原ノ莊坪井ノ郷ト云フ天保年

間ヨリ大戸村外四拾四ヶ村大組合草津村外七ヶ村小組合トス

明治二年草津村外七ヶ村二肝煎名主耆名ヲ置ク明治四年

群馬縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻郡役

所ノ所管トナリ太子村外四ヶ村聯合トナリ明治十七年改メテ

赤岩村外四ヶ村聯合トナリ本村ニ戸長役場ヲ置ク明治

十八年十月入山村ヲ合併シ小雨村外五ヶ村聯合トナリ

分合。

天正十八年ヨリ万治二年マテ真田氏ノ領地タリ万治二年十一月

ヨリ徳川ニ隸シ代官熊沢武兵衛・竹村惣右衛門・大田

弥太夫・雨宮勸兵衛・竹川吉左衛門・増井弥吾左

衛門・造藤七左衛門・池田新兵衛・早川安左衛門・石

原半左衛門・伊奈半左衛門ニ至リ交代支配ス寛

政二年村内ノ税過半ヲ割ケ旗下伊丹孝之丞二分

與ス明治元年岩鼻縣ノ管轄トナリ明治四年群

馬縣ト改称ス明治六年熊谷縣ノ管轄トナリ明治

九年再ヒ群馬縣ノ所轄ニ皈ス

位置疆域

位置 吾妻郡ノ西北

東 入山村・松谷村

西 日影村

南 長野原町林村

北 生須村

幅員

東西 壹里八丁四尺

南北 壹里拾壹丁四間壹尺

周圍 四里三十壹丁拾間

面積 三百八十一万二千三百六十坪

地味

色 赤稀ニ黒土ヲ雜ヒ

質 瘠土ニシテ窒素質ニ乏シ

適種 粟・稗ニ最モヨロシ

地勢

山脈 東方ニ高間山脈ニ接
 水脈 西方ニ須川流通ス
 東部 原野山林
 西部 川
 南部 山林
 北部 岩山
 全地形勢 戸数六十二戸人口三百十一人ニシテ人家接近ハ稍平坦ナリ
 ト雖モ東部一面岩山屹立ス用水至便ニシテ水田
 僅少ナレバ灌溉ノ患ナシ

字地

鈴ノ平			岩ノ上			鍛冶谷戸			中野			矢ノ下			大平			潜石		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
九拾筆	拾壹町五反廿三歩	鈴ノ平	六拾貳筆	六拾九町貳反貳畝廿三歩	鍛冶谷戸・上ノ平	百四十八筆	拾町貳反四畝三歩	中野・新井	百八十六筆	拾八町七反六畝廿三歩	矢ノ下	七町七反八畝拾九歩	百四十九筆	廣池	三拾貳町壹反壹畝廿歩	百五十壹筆	境沢	貳拾七町六反七畝廿歩	壹筆	貳拾七町六反七畝廿歩
穴ノ上			水ノ窪			林橋ノ木			出立			廣池			至球			深山口		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
拾四筆	四拾壹町壹反九畝拾八歩	鈴ノ平	水ノ窪・宮原・觀音堂	拾七町四反八畝拾貳歩	百三十五筆	七町壹四畝四歩	林橋ノ木・前原	矢ノ下	百三十九筆	貳拾町九反貳畝廿七歩	廣池	三拾九町九反九畝拾五歩	貳百十五筆	至球	八拾壹町貳反五畝拾七歩	百三十九筆	深山口・廣堤	六拾九町九反七畝廿五歩	三拾壹筆	三拾壹筆

高山 タカヤマ			五輪平 ゴリンタヒラ			中室 ナカムロ			天狗平 テングヒラ			鍛冶屋敷 カジャシキ			
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	
壹筆	七拾八町壹反壹畝十四歩	高山	壹筆	貳拾五町八反貳歩	深山 ミヤマグチ	百四十八筆	百六十町七反七畝三歩	中室	壹筆	百貳拾七町六反九畝拾七歩	鍛冶屋敷	七十壹筆	七拾八町四反七畝廿歩	鍛冶屋敷・老本木 イツボンキ	
			水梨 ミツナシ				白張 シラハリ			一ツ深山 ヒツツミヤマ			大塚 オホツカ		
			筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	
			壹筆	五拾八町九反三畝三歩	栃洞 ノチボ	壹筆	貳拾町五反壹畝拾八歩	中室	壹筆	五拾貳町四反壹畝廿歩	深山 ミヤマグチ	壹筆	百四十五町七反三畝五歩	中室 ナカムロ	

道路

<p>戸長役場沿革 明治十七年八月太子村聯合ヲ 赤岩村聯合ト改称セシニヨリ本 村ハ戸長役場ヲ設置ス明治十八 年十月入山村戸長役場ヲ廢セ ラレタルニ付同村ヲ合併小雨村 外五ヶ村戸長役場ヲ小雨村ニ 設置ニ付小雨村ニ移轉ス</p>	<p>学 校 赤岩尋常小学校 所在 吾妻郡赤岩村字林橋ノ木 地坪 百二十四坪 建坪 貳拾四坪 種類 板葺平家 男 二十一人 生徒 女 二十二人</p>
<p>神 社 諏訪神社 所在 赤岩村字中野 坪数 三百二十一坪 祭神 建御名方ノ命 社格 村社 創建年月 享保三年 祭日 八月二十七日 氏子 六十二戸 末社 ○ 現任官司若クハ 祠官ノ名 高山茂樹</p>	<p>教員 中澤直吉</p>

同郡日影村ヨリ入山村ニ達スル里道村内字出立中野
深山口鍛冶屋敷ヲ経テ入山村界ニ達ス

等級 二等

長 一里二十三丁四十四間一尺五寸

幅 六尺

並木 ○

形状 坂路多クシテ平坦少シ左右屈曲多シ

橋梁	出立橋
所在	吾妻郡赤岩村字出立
長	拾間
幅	九尺
構造	木造板橋
架設年月	明治十年八月
雑項	芻橋ニシテ赤岩村字出立 ヨリ同郡日影村字下沢ニ 達ス里道須川ノ下流ニ架ス

山嶽

高間山

所在 吾妻郡赤岩村字高間
 形状 長丸ニシテ南北ニ延フ
 高 千二百十五尺
 周囲 二里十八丁
 登路 廿五丁
 樹木 檜・桐等ナリ
 景致 同郡松谷村及岩下三嶋諸村ニ臨ム

原野

鍛冶屋敷原

所在 赤岩村字鍛冶屋敷
 所属 赤岩村に属ス
 段別 二百二十一町三反五畝式歩
 形状 角長ニシテ南ニ延ヒ高間ノ山脈ニ接ス
 生産 秣

舊検地帳表書合計

表		書		合	
貞享三	丙	年	寅	一冊	
上野國吾妻郡赤岩村御検地水帳	九月	酒井河内守内	高須隼人		
古検	田方	式反式畝廿三步	式反五畝拾歩	分米九斗六升五合	
内	下々田	壹段八歩		分米五斗壹升三合五ツ	
悪地下々田	壹段五畝式歩			分米四斗五升式合三ツ	
古検	三拾壹町壹段壹畝六歩				
畑方	三拾四丁四反八畝拾壹歩			分米百十二石五斗三升式合	
内	上畑	壹町貳反式畝七歩		分米拾壹石壹合九ツ	
中畑	貳町八段式畝七歩			分米十九石七斗五升六合七ツ	
下畑	三町五段九畝七歩			分米十七石九斗六升式合五ツ	
下々畑	四町四段五畝廿壹歩			分米十三石三斗七升壹合三ツ	
山下々畑	貳拾壹町五段八畝式歩			分米四十三石壹斗六升壹合二ツ	
屋敷	八反廿七歩			分米七石式斗八升壹合九ツ	
古検	三十壹町三反三畝廿九歩			古高三百四十四石九斗九升	
田畑屋敷	合三十四丁七反三畝廿壹歩			分米百十三石四斗九升七合	
内	九斗六升五合	田方			
百十二石五斗三升式合	畑方				
古検	五反三畝廿八歩				
雑木林	九段五畝廿五歩	百姓林十ヶ所			

- 古跡 ○
- 古墳 ○
- 名勝 ○
- 人物 ○
- 流謫 ○
- 舊検地帳表書合計
- 古文書 ○
- 變異記事 ○

沿革

名称 本村ノ創設不詳

古ヘヨリ吾妻郡ニ属シ三原莊坪井ノ郷ト云フ天保年間

ヨリ大戸村外四拾四ヶ村大組合草津村外七ヶ村小組合トス明治

二年草津村外七ヶ村二肝煎名主名ヲ置ク明治四年群馬

所属 縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻郡役所

ノ所轄トナル太子村外四ヶ村聯合トナリ明治十七年改メテ赤

岩村外四ヶ村聯合トナリ明治十八年十月入山村ヲ合併シテ

小雨村外五ヶ村聯合トナル

分合 往古日影村ト一村タリシカ明徳年間分離シテ太子村トナル

天正十八年ヨリ天和元年マテ真田氏ノ領地タリ天和元年

ヨリ徳川ニ隸シ代官熊沢武兵衛・竹村惣左衛門・太田弥太夫・

管轄

雨宮勘兵衛・竹川吉左衛門・増井弥五右衛門・造藤七左衛門・池田新兵衛・早川安左衛門・石原半左衛門・伊奈半左衛門・牧野駿河守・山本平八郎・会田伊右衛門・川田甚番・嶋田佐十郎・稲樋^(野)藤四郎・前沢藤十郎・池田喜八郎・久保田十左衛門・野田弥一左衛門・蔭山外記・布施弥一郎・岩出伊右衛門・平岡彦兵衛・遠造藤兵左衛門・原田清右衛門・辻六郎左衛門・小笠原仁右衛門・篠山十兵衛・布施孫三郎・古橋隼人・吉川永左衛門・佐藤忠右衛門・山元大膳・大原四郎右衛門・矢嶋藤藏・羽倉外記・伊奈友之助・森親之助・関保右衛門・林部善右衛門・設楽八三郎・小林藤之助・川上金五郎・小笠原助三郎・中山誠一郎・木村甲斐守・木村飛騨守等交代シテ支配ス明治元年岩鼻縣ノ管轄トナリ明治四年羣馬縣ト改称ス明治六年熊谷縣ニ轉シ明治九年七月再ヒ群馬縣ノ所轄ニ皈ス

位置疆域

位置 吾妻郡ノ西北

東 赤岩村

西 草津村

南 日影村

北 小雨村

幅員

東西 式拾三丁式拾八間
 南北 拾三丁五拾二間
 周圍 二里三丁拾七間
 面積 七拾三万七千式百十六坪

地味

色 赤黒

質 礫土シテ窒素質少量ヲ含ム

適種 麦・粟・稗・蕎麦等ニヨシ

地勢

山脈 西方ニ白根山脈ニ接

水脈 東方ニ須川流通ス

東部 川

西部 原野

南部 耕地

北部 耕地

全地形勢 戸数廿一戸人口百四十六人人家接近ハ斜ニシテ北部
 一面岩山屹立用水至便ニシテ水田僅少灌漑ノ患ナシ

字地

山路 <small>ヤマヂ</small>			平澤 <small>ヒラサワ</small>			吉貫地 <small>イックワンヂ</small>			潜ノ下 <small>カクレノシタ</small>			湯久保 <small>ユク久保</small>			榎木 <small>エノキ</small>			花園 <small>クラソウ</small>			下太子 <small>シモトウジ</small>		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
式拾式筆	三拾町八畝廿式歩	せん <small>の</small> 下 <small>シタ</small>	七筆	五反四畝廿三歩	まふね	式拾壹筆	壹町三畝拾歩	合ノ畑	六拾六筆	拾四町三反五畝廿五歩	せん <small>の</small> 下 <small>シタ</small>	式拾筆	拾六町式反五畝廿五歩	湯久保・うるひ	五拾三筆	拾式町式反五畝拾六歩	川端・梨木平 <small>カワバタ・ナシキヒラ</small>	六拾五筆	拾八町式反三畝七歩	桑その・下大石 <small>クワソノ・シモオウシ</small>	八拾筆	拾三町三反六畝拾式歩	下太子
六郎谷 <small>ロクロウヤ</small>			長井 <small>ナガイ</small>			田畑 <small>タバタ</small>			合ノ畑 <small>アノノタ</small>			アイノ山 <small>アイノヤマ</small>			樽ノ久保 <small>ヅノ久保</small>			コヤネ			太子 <small>タウジ</small>		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
拾式筆	五町式畝拾七歩	三毛 <small>ミケ</small>	七筆	壹町壹反六畝式歩	長井	七筆	五反式畝拾八歩	田端 <small>タバタ</small>	拾四筆	九反六畝廿四歩	合ノ畑	拾六筆	拾九町六反八畝廿六歩	大木ノ入 <small>オホキノイリ</small>	五筆	七町壹畝拾式歩	わさひ平 <small>ワサヒヒラ</small>	五拾壹筆	七町三畝五歩	小屋根 <small>コヤネ</small>	百四拾三筆	式拾三町六反壹畝拾歩	太子・中棚・横道 <small>オウヂ・ナカダテ・ヨコミチ</small>

戸長役場 明治十二年赤岩村・日影村・生須村・ 小雨村・太子村五ヶ村聯合トナリ 本村二戸長役場ヲ置ク十七年 八月赤岩村聯合ト改称セシニヨリ 赤岩村へ戸長役場ヲ移ス	神 社 所在 太子村字花園坪數百七拾貳坪 祭神 建御名方ノ命 社格 村社 創建年月 不詳 祭日 七月廿七日 氏子 貳拾貳戸 末社 ○ 現任司官若 クハ祠官ノ名 高山茂樹
---	---

道路

同郡日影村ヨリ入山村ニ達スル里道村内字楡木・
コヤネ・花園・下太子ヲ經テ小雨村ニ達ス
等級 二等
長 十三丁五十二間五尺
幅 六尺
並木 ナシ
形状 坂路僅ニシテ平坦ナリト雖モ左右小屈曲多シ

舊檢地帳表書合計

表	書	合	計
貞享三丙寅年	壹冊	上野國吾妻郡日影村之内太子村御檢地水帳 九月 酒井河内守内 高須隼人	古檢 三反九畝廿六步 田方 三反三畝廿壹步 内 中田 四畝廿步 下田 六畝拾五步 下々田 六畝拾五步 惡地下々田 壹反六畝壹步 古檢 十壹町三反六畝廿貳步 畑方 拾壹町三反貳步 内 上畑 五反九畝壹步 中畑 七反九畝廿四步 下畑 壹町八反五畝八步 下々畑 壹町六反貳畝壹步 山下々畑 六町壹反八畝貳步 屋敷 貳反五畝廿六步 古檢 拾壹町七反六畝拾八步 田畑屋敷 合拾壹町六反三畝廿壹步 内 壹石六斗八升壹合 三拾九石七斗壹升貳合 田方 畑方 古檢 五畝廿六步 雜木林 三反廿步 百姓林五ヶ所
		分米 壹石六斗八升壹合 分米 壹石六斗八升壹合 分米 四斗貳升九ツ 分米 四斗五升五合七ツ 分米 三斗貳升五合五ツ 分米 四斗八升壹合三ツ 分米 三拾九石七斗壹升貳合 分米 五石三斗壹升三合九ツ 分米 五石五斗八升六合七ツ 分米 九石貳斗六升三合五ツ 分米 四石八斗六升壹合三ツ 分米 拾貳石三斗六升壹合貳ツ 分米 貳石三斗貳升八合九ツ 古高百拾七石七斗九升三合 分米 四拾壹石三斗九升三合	

舊検地帳所載ノ字

貞享三寅年九月 検地役人 高須隼人

外九人

田端 タバタ ヲワン 太子 ユクゴ 湯窪 わさひ平 タヒラ 三毛 ミケ 小やね コヤネ	小やなへ 小木の入 ウキイ うるひ なしの木平 キヒラ まふ年 以上式拾壹字	せんの下 シタ 長井 ナカイ 中棚 ナカダ 横道 ヨコミチ 下太子 シモヲワン	川端 カワバタ あい畠 アハタ 桑その クワソノ 下大石 シモヲワン 下はれ シモ
--	---	--	--

上野國吾妻郡小雨村地誌

上野國吾妻郡小雨村地誌標準

誌料編輯有志賛襄者

沿革

位置

境域

地味適種

地質

字地

戸長役場

農工場

會社

病院

神社

寺院

道路

渡津

橋梁

湖沼

瀑布

○

○

○

○

○

○

- 古跡 ○
- 古墳 ○
- 名勝 ○
- 人物 ○
- 流謫 ○
- 舊検地帳表書合計
- 古文書 ○
- 變異記事 ○

沿革

名称 古へヨリ小雨村ト称シ變遷ナシ

古へヨリ吾妻郡ニ属シ三原莊坪井ノ郷ト云フ天保年間

ヨリ大戸村外四拾四ヶ村大組合草津村外七ヶ村小組合トス

明治二年草津村外七ヶ村肝煎名主彦名ヲ置ク明治四

所属 年羣馬縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻

郡役所ノ所管トナル太子村外四ヶ村聯合トナリ明治十七

年改メテ赤岩村外四ヶ村聯合トナリ明治十八年十月入山

村ヲ合併シ小雨村外五ヶ村聯合トナリ本村二戸長役場ヲ

置ク

位置疆域

位置 吾妻郡ノ西北

東 生須村ニ界ス

西 草津村ニ界ス

南 太子村ニ界ス

北 入山村ニ界ス

分合。

天正十八年ヨリ天和二年マテ真田氏ノ領地タリ天和

管轄

二年ヨリ徳川ニ隸シ代官熊沢武兵衛・竹村惣左衛門・

太田弥太夫・雨宮勘兵衛・竹川吉左衛門・増井弥五左衛門・

造藤七左衛門・池田新兵衛・早川安左衛門・石原半左衛門・

伊奈半左衛門・牧野駿河守・山本平八郎・会田伊右衛門・

川田甚蕃・嶋田佐十郎・稻樋藤四郎・前沢藤

十郎・池田喜八郎・久保田十左衛門・野田弥一右衛門・蔭山

布施弥一郎・岩出伊右衛門・平岡彦兵衛・造藤兵右・

原田清右衛門・辻六郎左衛門・小笠原仁右衛門・篠山十

兵衛・布施孫三郎・古橋隼人・吉川永左衛門・佐

藤忠右衛門・山元大膳・大原四郎右衛門・矢嶋藤藏・

羽倉外記・伊奈友之助・森親之助・関保右衛門・

林部善右衛門・設楽八三郎・小林藤之助・川上金

五郎・小笠原助三郎・中山誠一郎・木村甲斐守・

木村飛驒守等交代シテ支配ス明治元年岩鼻

縣ノ管轄トナリ明治四年羣馬縣ト改称ス明治六

年熊谷縣ニ轉シ明治九年七月再ヒ群馬縣

ノ所轄ニ皈ス

幅員

東西 式拾八丁四拾五間
 南北 三拾丁五拾間
 周圍 三里拾丁
 面積 八拾五万七千六拾五坪

地味

色 赤黒

質 礪土ニシテ重ニ窒素質ヲ含ム

適種 麦・粟・稗・麻ニ適ス

地勢

山脈 西方ニ白根方坐山脈ニ接ス

水脈 東方ニ須川ヲ通ス

東部 川流

西部 原野

南部 耕地

北部 山嶽

全地形勢 戸数二十八戸人口百七十二人ニシテ人家接近ハ斜面ニテ

西部ハ一面岩山屹立ス用水至便ニシテ水田僅少ナレハ

灌漑ノ患ナシ

字地

巡り石			柴ノ久保			下平			小雨			上日影			中棚			足倉			遠北			
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	
式拾貳筆	拾八町七反八畝廿六歩	巡り石	壹筆	拾貳町三反廿五歩	柴ノ久保	五拾壹筆	拾六町八反廿四歩	下平・堀端	百四筆	八町五反六畝廿五歩	小雨・川端・屋敷添	拾貳筆	三拾八町六反廿六歩	上日影	五拾筆	五町四反五畝六歩	中棚・さるこうせ・おはかとう	貳拾四筆	三拾壹町六反五畝拾九歩	つつみや	百壹筆	貳拾壹町七反七畝八歩	遠北	東北・沼尾向・小もん
				枋洞			樋ノ口			南		原		金蔵沢		野嶽						沼尾		
			筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	
			拾九筆	三拾九町五反七畝拾六歩	枋洞	貳拾五筆	拾五町六反三畝拾四歩	つはなはら・せんの澤	百七拾五筆	拾四町三反九歩	南頭・はば・そとあと・ひやうこ入・薬師前・柿ノ木平・つとのわき	七拾貳筆	三拾壹町貳反四畝拾九歩	原	百拾八筆	九町六反貳畝拾歩	金蔵沢・御門前・こんさうとう	拾四筆	貳拾九町壹反七畝貳歩	野嶽	百五拾八筆	拾壹町六反拾九歩	沼尾・沼尾ふち・塚堀 つはてふち・すなてふち	

<p>戸長役場 小雨村外五ヶ村戸長役場</p> <p>所在 吾妻郡小雨村字金藏沢</p> <p>所轄 小雨村・太子村・日影村 町村 赤岩村・生須村・入山村</p>	<p>神社 諏訪神社</p> <p>所在 小雨村字南坪数百拾五坪 祭神 武御名方ノ命 社格 村社 創建年月 不詳 祭日 八月廿七日 氏子 二十八戸 末社 ○ 現任司官若 クハ祠官ノ名 高山茂樹</p>
<p>學校 赤岩尋常小学校小雨分校</p> <p>所在 吾妻郡小雨村字金藏沢</p> <p>地坪 四拾八坪 建坪 式拾八坪 種類 木造ニシテ萱葺平家 生徒 男三拾貳人 女三拾三人 教員 富澤安太郎</p>	

道路

同郡太子村ヨリ同郡入山村ニ達スル里道村内字下平・
南・小雨・金藏澤・中棚・沼尾遠北ヲ経テ入山村界ニ達ス

等級 式等

長 三拾丁五拾間

幅 六尺

並木 ○

形状 曲坂ニシテ平坦少シ

雜項 ○

<p>橋梁 小雨橋</p> <p>所在 吾妻郡小雨村字小雨</p> <p>長 式拾壹間 幅 八尺 構造 土橋 架設年月 明治十六年七月</p> <p>雜項 棒橋ニシテ小雨村字小雨ヨリ同 郡生須村字西裏ニ達ス縣 道須川ノ中流ニ架ス</p>	<p>瀑布 姥ヶ瀧</p> <p>所在 吾妻郡小雨村字中棚</p> <p>高 六丈二尺 濶 五尺 下流 須川</p> <p>雜項 吾妻郡小雨村字野嶽山中 ヨリ水源ヲ発シ南流シテ本 瀑布ニ落チ下流数距ナラス シテ須川ノ中流ニ入ル</p>
	<p>潜流瀧</p> <p>所在 吾妻郡小雨村字樋ノ口</p> <p>高 式丈三尺 濶 四尺 下流 須川</p> <p>雜項 吾妻郡小雨村字巡り石溪 谷ヨリ水源ヲ発シ東流シ テ此ノ瀑布ニ落チ下流凡 五丁距ニシテ須川ノ中流 ニ入ル</p>

上野国吾妻郡入山村地誌

上野国吾妻郡入山村地誌標準

誌料編輯有志賛襄者

沿革

位置

境域

地味適種

地質

字地

戸長役場

農工場

会社

病院

神社

寺院

道路

渡津

橋梁

湖沼

瀑布

古跡

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

古墳 ○

名勝 ○

人物 ○

流謫 ○

舊檢地帳表書合計

古文書 ○

変異記事 ○

誌料編輯有志賛襄者

群馬縣下上野国吾妻郡入山村山田彌□治

身分 平民

履歴 明治九年十一月十七日地租改正ニ付地主一同ノ撰挙ニ因リ

入山村地主惣代申付候事

同十二年一月廿日吾妻郡入山村戸長申付候事

事

同十四年一月四日職務勉勵ニ付為慰勞金壹円

式拾五錢給與候事

同十五年一月十八日吾妻郡第十八学区学務委員申付候事

同十七年八月十一日吾妻郡入山村戸長役場用係申付候事

同年十二月廿五日吾妻郡赤岩村聯合戸長申付候事

同十八年三月十二日吾妻郡入山村戸長兼務申付

候事

同年十二月廿六日職務勉勵ニ付為慰勞金
壹円廿五錢給與候事

同十九年四月十五日吾妻郡大笹村外三ヶ村戸長申付
候事

同廿年三月卅一日職務勉勵ニ付為慰金三円
給与ス

同年十二月廿九日職務勉勵ニ付為慰金四円給与ス

同廿一年四月十二日吾妻郡小雨村分五ヶ村戸長申付候事
群馬縣下上野国吾妻郡入山村中沢多總治

身分 平民

履歴 明治十七年三月十七日吾妻郡入山村々々會議員当撰
候事

同年八月十一日吾妻郡入山村戸長役場筆生

申付候事

同年八月廿日吾妻郡入山村々々會議員当撰候
事

同年十月廿八日吾妻郡聯合町村會議員撰挙

候事

同十八年一月四日吾妻郡入山村戸長役場誥用
係申付候事

同年十一月廿七日吾妻郡小雨村外五ヶ村用係申付
候事

同十九年一月四日職務勉勵ニ付為慰勞金五拾
錢給與候事

同年四月二日職務勉勵ニ付為慰勞金貳円貳拾
錢給與候事

同年十二月廿九日職務勉勵ニ付為慰勞金貳円給
与候事

名称 本村大同年間ニ村落創設ト云フ

所屬 古ヘヨリ吾妻郡ニ属シ三原ノ莊坪井ノ郷ト云フ天保年間

ヨリ大戸村外四拾四ヶ村大組合草津村外七ヶ村小組合トス明

治二年草津村外七ヶ村ニ肝煎名主老名ヲ置ク明治四年群

馬縣第廿大区十一小区ト改ム明治十一年十二月吾妻郡役

所ノ所管トナル本村ニ戸長役場ヲ置ク明治十八年十月赤

岩外四ヶ村聯合ト合併シ小雨村外五ヶ村聯合トナル

分合。

永祿年間ヨリ天和元年マテ真田氏ノ領地タリ天和元年ヨリ

徳川ニ隸シ代官熊沢武兵衛・竹村惣左衛門・太田弥太夫・雨宮

勘兵衛・竹川吉左衛門・増井弥吾左衛門・造藤七左衛門・池田新兵衛・

早川安左衛門・石原半左衛門・伊奈半左衛門・牧野駿河守・山本

平八郎・会田伊右衛門・川田甚蕃・嶋田佐十郎・稻樋藤四郎・

前沢藤十郎・池田喜八郎・久保田十左衛門・野田弥一右衛門・蔭山

外記・布施弥一郎・岩出伊右衛門・平岡彦兵衛・造藤兵

右衛門・原田清右衛門・辻六郎左衛門・小笠原仁右衛門・篠山十兵衛・

布施孫三郎・古橋隼人・吉川永左衛門・佐藤忠右衛門・山元

大宗四郎右衛門・矢嶋藤藏・羽倉外記・伊奈友之助・森親

之助・関保右衛門・林部善右衛門・設楽八三郎・小林藤之助・川

上金五郎・小笠原助三郎・中山誠一郎・木村甲斐守・

木村飛驒守等交代支配ス明治元年岩鼻縣ノ管轄

トナリ明治四年羣馬縣ト改称ス明治六年熊谷縣轉

シ明治九年七月再ヒ群馬縣ノ所轄ニ皈ス

適種 粟・稗・蕎麦ニヨロシ

地勢

山脈 東ハ川浦山脈西ハ池ノ峠北ハ八間樋沼山木ノ諸山脈

ヲ延フ

水脈 須川ノ源流村内ノ中央ヲ串流ス

東部 原野

西部 高嶽

南部 山林及岩山

北部 諸高嶽

全地形勢 戸数百七拾八戸人口九百四拾四人四方嶮山ヲ帯ヒテ

村落恰モ小山嶽ニ位スルカ如シ

位置疆域

位置 吾妻郡ノ西北

東 上沢渡村・松谷村

西 草津村及長野縣下高井郡平穂村

南 赤岩村・生須村・小雨村

北 長野縣下高井郡塚村

幅員

東西 四里五丁

南北 四里六丁

周囲 拾三里拾八丁

面積 四千五百八拾万三百六坪

地味

色 概シテ赤黒

質 窒素質少量ニシテ剥篤並斯質多シ

字地

東小倉			金山			御殿			長笹			西山			大沢		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
六拾弍筆	八拾三町弍畝拾七歩	閑嶋・閑添 ままね・十二のむかへ	弍筆	九拾壹町三反弍歩	金山	拾弍筆	百廿町四反三畝拾歩	御殿	弍筆	弍拾八町九反八畝五歩	長笹	弍筆	七拾五町五畝十一歩	小倉・むかへ	弍筆	四拾壹町三反四畝五歩	大澤
根廣向			村木			長平			栃洞			小倉			南小倉		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
弍筆	三拾町七反弍畝拾歩	根廣向	弍筆	百三町九反歩	村木	百七拾八筆	弍百六拾五町六反弍畝廿歩	宮ノ平・長平・前おとり	拾四筆	七拾九町六畝廿歩	前・洞	弍百八拾三筆	六拾六町七反弍畝拾七歩	小倉・中井戸家の前・かきのと・十二の澤	拾三筆	四拾九町八反廿八歩	小倉分・井戸際・道嶋・井戸澤

大原			川松			矢倉			保上大久			木川附			上租倉		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
拾八筆	百八拾七町弍畝廿四歩	大原	弍筆	弍百五拾九町八反弍畝廿四歩	川松	七拾筆	拾七町七反六畝廿四歩	矢倉道下・新田下・井戸・くるみの木の下のくらの平	弍筆	三百三拾六町九反弍畝拾歩	三歩	百四拾六筆	三拾四町七反弍畝廿五歩	木川附・尻阿き後平・や不畑	弍拾八筆	八拾八町弍反弍畝拾五歩	やふあな・石とうろ・さい・志ら木
日ヶ間			白味田			和光原			中畦			矢ノ下			根廣		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
六筆	五反六畝九歩	日ヶ間・まきは澤	弍筆	八拾六町弍反七畝拾六歩	白味田	五百六拾弍筆	六拾五町五反弍畝拾三歩	中そり・つぎの木・すわこし・とう平・屋敷添・おやのわき	弍筆	八町六反弍畝七歩	中畦	弍拾八筆	五拾町七反九畝拾歩	矢倉道・井戸口・上の原・矢倉奥平	百六拾六筆	弍拾三町六反九歩	根廣東畑・高く祢・畑わり・藤六・根廣

小セシ			コミ山			松葉			新藪			山キシ			打コシ			花敷		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
壹筆	五拾七町九反六畝七步	小セシ	壹筆	四拾四町八反五畝貳步	コミ山	三拾四筆	壹町四反五畝四步	松葉・馬つなぎば	四拾九筆	貳町五反七畝九步	新藪・しほこし・後岩根	九拾六筆	三町三反六畝貳步	山キシ・萩の久保・こいと	百六拾八筆	八町九反四畝四步	打コシ・沼坂・沼の尻	六拾筆	六町八反五畝廿七步	花敷・はしばの上
井入			八穀			赤渋			登屋			川バタ			引沼			湯ノ上		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
壹筆	四拾貳町八畝步	井入	壹筆	六拾九町三反五畝拾四步	八穀	六拾四筆	七町八反七畝五步	赤渋・屋根・屋敷	五拾壹筆	五町七反五畝廿五步	登や原・三山口・すけの原・ゆつば・東畑	六拾壹筆	貳町九反九畝貳步	川バタ・すけの澤・畑わり・ぬかつかこつくね・道上	貳百貳拾九筆	八町五反五畝廿一步	引沼・森の上・ごうろ	四拾九筆	九拾五町三反五畝步	湯坂・前花敷腰巻・やせおね

久保入			小沢			川向			小屋場			花ワ			岩ノ下			下の方		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
拾壹筆	三拾六町六反五畝廿四步	細久保・やふ平・そとて平	貳拾壹筆	式拾五町九反四畝廿四步	小沢・くつれ畑・みとり	式拾筆	八町八反八畝拾五步	川原・中棚・くつれ	六拾壹筆	九町五反七畝步	小屋場・しやうしば沢	八拾六筆	六町九畝拾四步	栗の木たな	三拾七筆	拾壹町壹反九畝八步	天狗岩	九筆	貳拾町七反六畝廿七步	ならの木・あまち
沢向			京塚			細尾			見ヨリ			大シモ			世立			上世立		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
壹筆	四拾六町三反三畝壹步	沢向	百九拾五筆	貳拾貳町九反貳畝廿六步	川端通・石本・関中戸	五拾筆	拾壹町三反壹拾四步	細尾・ひろ川原平・後平	九拾六筆	五拾八町九反八畝八步	見ヨリ・中の条口・細久保・細畑	百拾貳筆	六町六反四畝廿步	大シモ・なるこ前・世立坂・まぎ内	貳百七拾六筆	拾町六反壹畝拾七步	山伏・前畑	貳百拾壹筆	貳拾町七反貳畝拾九步	上世立・山峯・弥平治屋敷

原 ^ス 方 ^ワ ノ			大 ^オ 木 ^キ 平 ^{ヒラ}			梨 ^ナ 木 ^キ			須 ^ス 立 ^{タテ}			西 ^シ 澤 ^{ザワ}			品 ^シ 木 ^キ 原 ^{ハラ}			樋 ^ヒ ノ ^ノ 口 ^{クチ}		
筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ
貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	廿 ^ニ 五 ^ウ 町 ^{チヨウ} 貳 ^ニ セ ^セ 拾 ^{シヨウ} 九 ^ク 步 ^フ	原 ^{ハラ} 方 ^{カタ} ノ ^ノ 原 ^{ハラ}	三 ^{サン} 拾 ^{シヨウ} 貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	拾 ^{シヨウ} 四 ^シ 町 ^{チヨウ} 三 ^{サン} 反 ^{ハン} 四 ^シ 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 壹 ^{イツ} 步 ^フ	大 ^オ 木 ^キ 平 ^{ヒラ} ・西 ^シ 畑 ^{ハタ}	百 ^{ヒャク} 八 ^{ハチ} 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 筆 ^{ヒツ}	六 ^{ロク} 拾 ^{シヨウ} 町 ^{チヨウ} 六 ^{ロク} 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 六 ^{ロク} 步 ^フ	井 ^イ 戸 ^コ む ^ム か ^カ へ ^ヘ ・ナ ^ナ シ ^シ キ ^キ ・も ^モ ん ^ン み ^ミ ね ^ネ ・す ^ス ん ^ン は ^ハ 原 ^{ハラ} ・久 ^ク 保 ^ホ 入 ^入	百 ^{ヒャク} 八 ^{ハチ} 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 筆 ^{ヒツ}	四 ^{シヨウ} 拾 ^{シヨウ} 七 ^{シチ} 町 ^{チヨウ} 五 ^ゴ 反 ^{ハン} 九 ^ク 畝 ^{クニ} 拾 ^{シヨウ} 九 ^ク 步 ^フ	須 ^ス 立 ^{タテ} ・こ ^コ 須 ^ス 立 ^{タテ} ・か ^カ に ^ニ 沢 ^{ザワ}	四 ^{シヨウ} 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 筆 ^{ヒツ}	百 ^{ヒャク} 三 ^{サン} 拾 ^{シヨウ} 六 ^{ロク} 町 ^{チヨウ} 壹 ^{イツ} 反 ^{ハン} 五 ^ゴ 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 五 ^ゴ 步 ^フ	西 ^シ 潜 ^{セン} 戸 ^コ ・山 ^{サン} 峯 ^{ホウ}	貳 ^ニ 拾 ^{シヨウ} 八 ^{ハチ} 筆 ^{ヒツ}	百 ^{ヒャク} 六 ^{ロク} 町 ^{チヨウ} 七 ^{シチ} 反 ^{ハン} 壹 ^{イツ} 畝 ^{クニ} 四 ^シ 步 ^フ	原 ^{ハラ} ・中 ^{チュウ} 藤 ^{トウ} 六 ^{ロク} ・く ^ク ぞ ^ゾ 平 ^{ヒラ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	貳 ^ニ 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 町 ^{チヨウ} 六 ^{ロク} 反 ^{ハン} 七 ^{シチ} 畝 ^{クニ} 拾 ^{シヨウ} 四 ^シ 步 ^フ	樋 ^ヒ ノ ^ノ 口 ^{クチ}
足 ^ア 倉 ^{クラ}			荷 ^ニ 附 ^{ツケ} 場 ^バ			向 ^{ムカ} 山 ^{ヤマ}			梨 ^ナ 木 ^キ 原 ^{ハラ}			品 ^シ 木 ^キ			田 ^タ 代 ^{ダイ} 原 ^{ハラ}			大 ^オ 久 ^ク 保 ^ホ		
筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ
三 ^{サン} 筆 ^{ヒツ}	拾 ^{シヨウ} 貳 ^ニ 町 ^{チヨウ} 四 ^シ 反 ^{ハン} 八 ^{ハチ} 畝 ^{クニ} 六 ^{ロク} 步 ^フ	桜 ^{サクラ} 沢 ^{ザワ}	五 ^{イチ} 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 筆 ^{ヒツ}	三 ^{サン} 拾 ^{シヨウ} 町 ^{チヨウ} 五 ^ゴ 反 ^{ハン} 九 ^ク 畝 ^{クニ} 九 ^ク 步 ^フ	荷 ^ニ 附 ^{ツケ} 場 ^バ ・屋 ^ヤ 敷 ^キ 裏 ^{ウラ} ・つ ^ツ き ^キ の ^ノ 木 ^キ ・ま ^マ ま ^マ 下 ^カ 沢 ^{ザワ} 入 ^入 ・み ^ミ つ ^ツ み ^ミ 畑 ^{ハタ}	貳 ^ニ 拾 ^{シヨウ} 六 ^{ロク} 筆 ^{ヒツ}	六 ^{ロク} 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 町 ^{チヨウ} 五 ^ゴ 畝 ^{クニ} 四 ^シ 步 ^フ	向 ^{ムカ} 山 ^{ヤマ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	拾 ^{シヨウ} 八 ^{ハチ} 町 ^{チヨウ} 八 ^{ハチ} 畝 ^{クニ} 貳 ^ニ 步 ^フ	梨 ^ナ 木 ^キ 原 ^{ハラ}	百 ^{ヒャク} 六 ^{ロク} 拾 ^{シヨウ} 貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	六 ^{ロク} 拾 ^{シヨウ} 町 ^{チヨウ} 六 ^{ロク} 反 ^{ハン} 七 ^{シチ} 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 三 ^{サン} 步 ^フ	し ^シ な ^ナ ぎ ^ギ ・湯 ^ユ 沢 ^{ザワ} ・家 ^イ の ^ノ 後 ^{ノチ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	七 ^{シチ} 拾 ^{シヨウ} 三 ^{サン} 町 ^{チヨウ} 壹 ^{イツ} 反 ^{ハン} 三 ^{サン} 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 四 ^シ 步 ^フ	田 ^タ 代 ^{ダイ} 原 ^{ハラ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	四 ^{シヨウ} 拾 ^{シヨウ} 五 ^ゴ 町 ^{チヨウ} 四 ^シ 畝 ^{クニ} 五 ^ゴ 步 ^フ	大 ^オ 久 ^ク 保 ^ホ

沼 ^{ヌマ} 山 ^{ヤマ}			川 ^{カハ} 浦 ^{ウラ}			三 ^{ミツ} 浦 ^{ウラ}			村 ^{ムラ} 松 ^{マツ}			通 ^{トウ} リ ^リ ト ^ト ウ			小 ^コ 森 ^{シン} 口 ^{クチ}			應 ^{オウ} 德 ^{トク}		
筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ
貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	千 ^{セン} 五 ^ウ 百 ^{ヒャク} 六 ^{ロク} 町 ^{チヨウ} 七 ^{シチ} 反 ^{ハン} 廿 ^ニ 五 ^ゴ 步 ^フ	沼 ^{ヌマ} 山 ^{ヤマ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	千 ^{セン} 四 ^シ 百 ^{ヒャク} 五 ^ウ 拾 ^{シヨウ} 八 ^{ハチ} 町 ^{チヨウ} 三 ^{サン} 反 ^{ハン} 三 ^{サン} 步 ^フ	川 ^{カハ} 浦 ^{ウラ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	百 ^{ヒャク} 拾 ^{シヨウ} 壹 ^{イツ} 町 ^{チヨウ} 八 ^{ハチ} 反 ^{ハン} 七 ^{シチ} 畝 ^{クニ} 拾 ^{シヨウ} 壹 ^{イツ} 步 ^フ	三 ^{サン} 浦 ^{ウラ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	九 ^ク 拾 ^{シヨウ} 五 ^ウ 町 ^{チヨウ} 九 ^ク 反 ^{ハン} 四 ^シ 畝 ^{クニ} 五 ^ゴ 步 ^フ	村 ^{ムラ} 松 ^{マツ}	貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	六 ^{ロク} 百 ^{ヒャク} 壹 ^{イツ} 町 ^{チヨウ} 五 ^ウ 反 ^{ハン} 四 ^シ 畝 ^{クニ} 拾 ^{シヨウ} 四 ^シ 步 ^フ	ブ ^ブ ト ^ト ウ ^ウ 通 ^{トウ}	五 ^{イチ} 筆 ^{ヒツ}	五 ^{イチ} 百 ^{ヒャク} 六 ^{ロク} 拾 ^{シヨウ} 九 ^ク 町 ^{チヨウ} 三 ^{サン} 畝 ^{クニ} 拾 ^{シヨウ} 貳 ^ニ 步 ^フ	小 ^コ 森 ^{シン} 口 ^{クチ}	九 ^ク 筆 ^{ヒツ}	四 ^{シヨウ} 拾 ^{シヨウ} 町 ^{チヨウ} 六 ^{ロク} 反 ^{ハン} 五 ^ゴ 畝 ^{クニ} 六 ^{ロク} 步 ^フ	湯 ^ユ ノ ^ノ 平 ^{ヒラ}
大 ^{ダイ} 倉 ^{クラ}			八 ^{ハチ} 間 ^{カン} 樋 ^ヒ			相 ^{アイ} ノ ^ノ 倉 ^{クラ}			松 ^{マツ} 岩 ^{イワ}			熊 ^{クマ} ノ ^ノ 沢 ^{ザワ}			灰 ^{ハイ} カ ^カ ツ ^ツ			助 ^ス 川 ^{カハ}		
筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ	筆 ^{ヒツ} 数 ^{スウ}	段 ^{ダン} 別 ^{ベツ}	舊 ^{キウ} 字 ^ジ
壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	千 ^{セン} 百 ^{ヒャク} 七 ^{シチ} 拾 ^{シヨウ} 七 ^{シチ} 反 ^{ハン} 九 ^ク 畝 ^{クニ} 五 ^ゴ 步 ^フ	大 ^{ダイ} 倉 ^{クラ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	五 ^{イチ} 百 ^{ヒャク} 九 ^ク 拾 ^{シヨウ} 壹 ^{イツ} 町 ^{チヨウ} 八 ^{ハチ} 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 五 ^ゴ 步 ^フ	八 ^{ハチ} 間 ^{カン} ト ^ト イ	貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	三 ^{サン} 百 ^{ヒャク} 九 ^ク 拾 ^{シヨウ} 壹 ^{イツ} 町 ^{チヨウ} 三 ^{サン} 反 ^{ハン} 五 ^ゴ 七 ^{シチ} 廿 ^ニ 四 ^シ 步 ^フ	相 ^{アイ} ノ ^ノ 倉 ^{クラ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	百 ^{ヒャク} 三 ^{サン} 拾 ^{シヨウ} 四 ^シ 町 ^{チヨウ} 八 ^{ハチ} 畝 ^{クニ} 拾 ^{シヨウ} 步 ^フ	松 ^{マツ} 岩 ^{イワ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	九 ^ク 拾 ^{シヨウ} 五 ^ウ 町 ^{チヨウ} 八 ^{ハチ} 反 ^{ハン} 壹 ^{イツ} 畝 ^{クニ} 七 ^{シチ} 步 ^フ	熊 ^{クマ} ノ ^ノ 沢 ^{ザワ}	壹 ^{イツ} 筆 ^{ヒツ}	八 ^{ハチ} 拾 ^{シヨウ} 町 ^{チヨウ} 五 ^ウ 反 ^{ハン} 七 ^{シチ} 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 三 ^{サン} 步 ^フ	灰 ^{ハイ} カ ^カ ツ ^ツ	貳 ^ニ 筆 ^{ヒツ}	百 ^{ヒャク} 貳 ^ニ 拾 ^{シヨウ} 八 ^{ハチ} 町 ^{チヨウ} 四 ^シ 反 ^{ハン} 壹 ^{イツ} 畝 ^{クニ} 廿 ^ニ 八 ^{ハチ} 步 ^フ	助 ^ス 川 ^{カハ}

芳ヶ平 <small>ヨシカケヒラ</small>			上長笹 <small>カミナカササ</small>			魚川 <small>ウサノカハ</small>		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
壹筆	七百七拾四町九反九畝五歩	芳ヶ平	壹筆	貳百四拾五町壹反七畝廿七歩	上長笹	壹筆	貳千百四拾八町貳反三畝拾歩	魚川
池ノ峠 <small>イケノツツ</small>			ガラソ			鉢岩 <small>ハチイシ</small>		
筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字	筆数	段別	舊字
壹筆	七百五拾壹町三反廿五歩	池ノ峠	壹筆	貳百八拾貳町七反五畝歩	ガラソ	壹筆	千三百拾八町三反九畝拾七歩	鉢岩

<p>戸長役場沿革 明治十二年ヶヶ村獨立シテ戸長役場ヲ設置セラレシカ明治十八年十月本村ノ戸長役場ヲ被廢赤岩村聯合ヘ合併セシニ付同郡小雨村ヘ戸長役場ヲ移ス</p>	<p>學校 赤岩尋常小学校花敷分校 所在 吾妻郡入山村字花敷地坪 百廿坪 建坪 拾四坪 種類 萱葺平家 生徒 男四十六人 女四十七人 教員 市川萬平</p>
<p>神 社 諏訪神社 所在 入山村字諏方ノ原坪數二千百六拾三坪 祭神 建御名方ノ命 社格 村社 創建年月 不詳 祭日 八月廿七日 氏子 百七十八戸 末社 十二社 熊野社 現任官司若クハ祠官ノ名 高山茂樹</p>	

道路

同郡小雨村ヨリ本村ニ達スル里道村内字足倉・大木平・荷附場・梨木・京塚・引沼・花敷・湯ノ上・根廣・長平・小倉ヲ經テ本村内ヲ通串ス

等級 貳等

長 貳里貳拾町拾間

幅 六尺

並木 ○

形状 坂路ニシテ左右屈曲多シ

橋梁

界橋 所在 吾妻郡入山村字川端 長 拾貳間 幅 八尺 構造 木造ニテ板橋 架設年月 明治十九年八月 雜項 勿橋ニシテ入山村字京憤ヨリ 同村字引沼ニ達スル里道 須川ノ上流ニ架ス	榎橋 所在 吾妻郡入山村字和光原 長 拾間 幅 六尺 構造 木造ニテ板橋 架設年月 明治十八年五月 雜項 勿橋ニシテ入山村字日ヶ圍ヨリ 同村字和光原ニ達スル里道 須川ノ上流ニ架ス
---	---

山嶽

岩寥山

所在 吾妻郡入山村字魚ノ川
 形状 長丸ニシテ東西ニ延フ
 高 八千二百八十尺
 周圍 三里貳拾丁
 登路 壹里三丁
 樹木 笹生シテ樹木ナシ

景致 越後信濃ヲ臨ミ景致最モヨロシ

湖沼

野反沼 所在 吾妻郡入山村字沼山 徑 縱 拾四丁貳拾間 横 五丁拾間 面積 八千六百四拾坪 水利 ○ 物産 ○ 雜項 下流ハ北流シテ越後國魚沼郡 二藤牧川名ヲ魚ノ川ト云フ

原野

大原

所在 入山村字大原
 所属 入山村ニ屬ス
 段別 百八拾六町七反六畝七步
 形状 長丸ニシテ南北ニ延ヒ字八間樋ノ山脈ニ接ス
 生産 秣

小森口原

所在 入山村字小森口
 所属 入山村ニ屬ス
 段別 五百六拾八町九反拾貳步
 形状 爰ニシテ高間山ノ山脈ニ接ス
 生産 秣

舊検地帳表書合計

表	書	合	計
貞享三寅年	武冊之内		
上野國吾妻郡入山村御検地水帳			
九月	酒井河内守内		
	高須隼人		
畑合	式拾七町式反七畝拾歩		
内			
中畑	式町式反廿九歩		
下畑	六町式反四歩		
下々畑	拾四町七反三歩		
山下々畑	四町壹反六畝四歩		

舊検地帳表書合計

表	書	合	計
貞享三寅年	武冊之内		
上野國吾妻郡入山村御検地水帳			
九月	酒井河内守内		
	高須隼人		
畑屋敷	合式拾八町式反五畝三歩		
内			
中畑	五段八畝壹歩		
下畑	式町七反七畝拾壹歩		
下々畑	式拾式町壹反拾式歩		
山下々畑	壹町八反六畝六歩		
屋敷	九反三畝三歩		

武冊之寄

中畑 式町七反九畝歩 分米拾壹石壹斗六升四ツ
 下畑 八町九反七畝拾五歩 分米貳拾六石九斗貳升五合三ツ
 下々畑 三拾六町八反拾五歩 分米七拾三石六斗壹升二ツ
 山下々畑 六町貳畝拾歩 分米六石貳升三合二ツ
 屋敷 九反三畝三歩 分米四石六斗五升五合五ツ
 古検六拾八町六反六畝廿五歩
 畑屋敷 合五拾五町五反貳畝拾三歩
 古高高百三拾六石八斗七升七合
 分米百貳拾貳石三斗七升三合 畑方
 古検壹町三反五畝廿三歩
 雑木林壹町六反四畝廿七歩 百姓林拾四ヶ所

舊検地帳所載ノ字

貞享三寅年九月 検地役人 高須隼人

外九人

矢倉道	さか□□く	中藤六	高くね	ねひろ東畑	山伏	川端	岩松	西皆戸	かに澤	西澤	小倉むかへ	柴山	小倉	あれほら	ひろ畑	木場	川ま	千助畑	道嶋	西の前	家の前
上の原	石とうろ	くつれ畑	ねひろ	畑わ里	つたの木	こうろ	大久保	長平	すたて	家の後	いときわ	十二の前	林の根	山の根	そこみす	座場	道添	桃木	おや本	そり	こさいと
矢倉うち平	はつ畑	しろうき	後平	川端道	みつみ畑	腰巻	もり上	とけの上	峯	あといら	いと澤	きつ畑	横道	山の下の	大畑	ははみ	たつ畑	道畑	まいて	ままね	道下
くらの平	やふ畑	しら木	平	石本	東畑	やせおね	前畑	宮の平	後山	湯澤	原	とち□□	細わり	とや	岩の上	あたいら	三助畑	横畑	中皆戸	関鳴	いと下
ささい	とい口	やふあな	藤六	関中戸	洞	ゆつば	細畑	後	西京	こす立	しなき	小倉分	山わき	やツ倉畑	あつみ	中いと	小市畑	大桑の木	かち畑	関添	ままた下

湯坂	ぬはく	あけやぶ	はいかつば	澤入	湯の平	なしき	中野條口	山岸	赤しほ	きつはたむかへ	とうそり	ねかへり	つくらいは	久保尻	坂	かうろう	十二の澤	長畑	細久保	くぞ平	くるみの木の下	ならの木	こいと	屋敷添
尻あき	はなしき	山きにた	中棚	ほそを	桜澤	いとむかへ	しやうしは澤	よたて	松葉	河原	とうの前	四枚畑	こか山	いと下	下の平	しなの木	まき内	十二のむかへ	そとて平	栗の木	新田	中そり	しばこし	どう平
沼の尻	はしはの上	山口くら	くつれ	みより	大木平	若木本	岩の下	弥平治	上よたて	天狗岩	宮平	水のここ	そくら	嶋あら	あんい	ひろ河原	のき平	おやのわき	みどう	大霜	しないと	つ木の木	たつくね	み山口
以上式百式拾九字	まきは澤	とや原	前	小澤	につけば	久保入	屋敷脇	弥平治屋敷	馬つなきは	くり木	ゑていり	ぬくいり	かせあな	家添	よすま	かきこみ	さい口	前のそり	とて平	あま地	すわこし	道上	細まり	すけの平
	前花敷	沼坂	よたて坂	なるこ	もんみね	すわの原	こやば	屋根前屋敷	前坂	山の澤	道やい	上の原	くね下	はなわ	井はた	から堀	西畑	たな	やふ平	ぬかつか	矢倉道下	萩の久保	すけの澤	

凡例

- 一. 中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」所蔵の「吾妻郡村誌」の旧六合地区分を収録するものである。
- 二. 明治二十一年四月に市制町村制が公布（翌年施行）され、これに伴って政府は各府県に対して郡村誌の編輯申達を命じ、本県では同年八月に訓令として郡町村へ通知した（昭和初年の『群馬縣史』第四卷や萩原進著『群馬県史明治時代』による）ものである。
- 三. 原則として原本全文を収録した。
- 四. 村の配列順序は原本通りとした。
- 五. 旧漢字は当用漢字等現在一般に使用されている漢字に改めた。
- 六. 合字は以下の通り改めた。メ↓シテ、
- 七. 明らかな間違いは訂正したが、その他は原本通りとした。
- 八. 村名、項目標題をゴシック体にし、閲覧の便に供した。
- 九. 企画編集は、『上野国郡村誌』（群馬県文化事業振興会）を参考に、六合村誌編集委員会（原文筆写は福田義治が主に行った）で行った。

自然

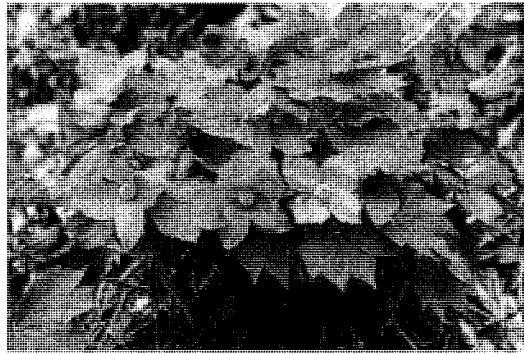
一 シラネアオイの復元

中学生とのシラネアオイ植栽活動

シラネアオイは、一科一属一種の日本の固有種の花である。日光国立公園の白根山で発見され、葉がアオイに似ているのでその名が付いた。かつて、弥陀が池のほとりには四ヘクター程の群落があつたと言われていたが、長い間の盗掘と、頭数が増えた日本鹿の食害によってかなりの数を減らしてしまった。今や絶滅危惧種の仲間入りをしているのもうなすける。

日本の国立公園に群生していた植物が姿を消してしまい残念であるとともに、何とかみんなの力で復元ができないものか、吾妻地方で育てた苗でも提供できたらと考え、片品村役場に出向き、苗の提供を申し入れたが色好い返事はもらえなかった。

また、地元野反湖に昭和三十一年に完成したダムによって生態系も変わってしまった、それまで咲き乱れていたシラネアオイもほとんど姿を消



シラネアオイ

してしまつた。そこで、ダムを造つてしまつたせめてもの罪滅ぼしにと考えるようになった。荒れていく野反湖に何とか花を咲かせたいと願いながらも、規制の厳しい国立公園での植栽の許可を得るまでには長い年月と労力、そして多くの方々の協力を要した。

少しずつ計画も前へ進み、用地の確保もできた平成八年、六合村役場職員とボランティア数名の力で一、三〇〇株の苗を植えることができた。

その後は、六合中学校の地域ふれあい学習の一環として植栽活動を続けている。中学校生徒、保護者、村議会、役場、森林管理署、東京電力、環境省、村内外のボランティアなど、総勢一〇〇名ほどが参加し、まさに官民一体の活動になつた。

植栽数の最も多かつた年度では一万五、〇〇〇株が植えられ、現在（平成二十三年）では、その数は八万株余りとなり、五月下旬ごろから見事な花を咲かせる。大勢の一般ボランティアとともに貴重な高山植物の復元を進める体験は、中学生にとつて郷土への誇りとたくさんさんの感動を得ることができ、毎年、価値の高い充実した活動が展開されている。

野反湖畔周辺に植えられるシラネアオイは、種まきから五年以上の間、唐松林を切り開いて作つた山の斜面の畑で育成されている。種子は一つの殻から約四〇枚採れるが、様々な条件がそろわないと発芽をしない。また、種子は野ねずみにとつても大切な食料であるため、時期を逃すとすべて食べられてしまい、採取できないこともある。

種まき後、一〜三年かけて発芽するが、一年目は貝割れ葉で秋を迎え、二年目に三センチ程の葉をつける。年ごとに枝分かれをしながら成長し、一個の淡紫色の大変美しい花（萼片）をつけるには五・六年の月日を要する。その間、除草はもちろん周辺の笹刈りなども行っている。花の時

期が終わり、結実を迎える九月下旬、スコップやくわを使って苗（株）の掘り上げをする。あげられた苗は、葉を切り落とし、一〇株ずつまとめてわらで縛り、植栽する場所に運ぶ。

これまでは、役場職員とボランティアの力で行われてきたが、数年前から中学一年生にも参加してもらい、シラネアオイの学習につながりが出てきた。

シラネアオイなど、高山植物は環境条件次第で枯死してしまう。また、植栽する野反湖畔一带は熊笹が群生し、花の成長を妨げてしまう。植栽前に熊笹の刈り払いと植栽場所の整地、穴掘りをしなければならぬ。これまでは、村関係者で行ってきたが、民間業者への委託も導入されてきた。

九月下旬の早朝、富士見峠に集合して植栽活動が始まる。参加者は、苗、スコップ、鎌等を手に急斜面に立ち、丁寧に苗を植える。昨年まで植えた場所の下刈りも併せて行い、中学生は来春自分たちが植えたシラネアオイの花を見て、植栽活動のまとめをする。

平成八年から始められた野反湖畔への植栽活動は、地元中学生とともに行うボランティア活動として定着してきた。自分たちが生まれ育った地元の山に花を植えることにより、ふるさとに誇りを持ち、豊かな心を育んでほしいと願う。

出口の見えない暗い世の中ではあるが、花を見に来る大勢の人々の心の中に美しい花を咲かせるためにも、このシラネアオイ植栽活動を続けていきたいと考えている。



六合中学生によるシラネアオイの株分け



六合中学生による野反湖のシラネアオイ観察

二 穴地獄とチャツボミゴケ

平成二十三年度 白根開善学校高等部 テーマ学習



図1 国内最大のチャツボミゴケのコロニー 2011.6.8

高等部二年	泉 直人
高等部二年	清水 涼太
担当教員	関口 正人

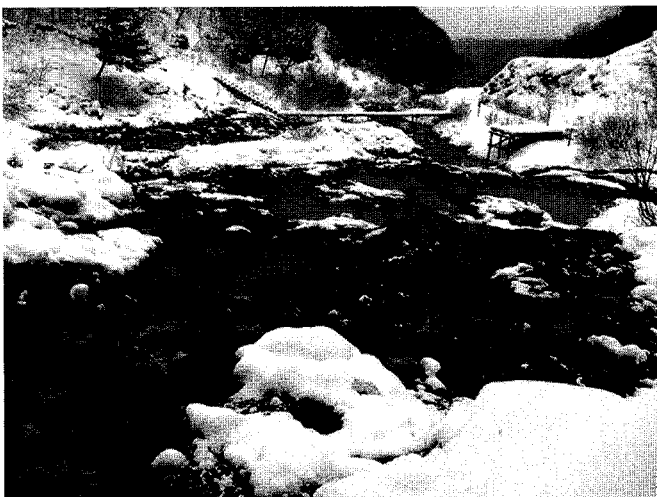


図3 深い雪に閉ざされる冬の穴地獄 2011.12.17



図2 レンゲツツジが咲く初夏の穴地獄 2011.6.8

一 はじめに

穴地獄は「奥草津休暇村（中之条町六合地区元山）」にあり、国内で最大のチャツボミゴケの群生地です。六合地区が、「日本で最も美しい村」連合へ加盟となった要因の一つでもあります（図1、図2、図3）。水生苔類のチャツボミゴケは、酸性の強い温泉の水が流れる場所に繁殖する不思議な植物です。今回のテーマ学習では、関口先生からの誘いもあり、この不思議なチャツボミゴケについて調べてみようと思い、共同研究で取り組みました。

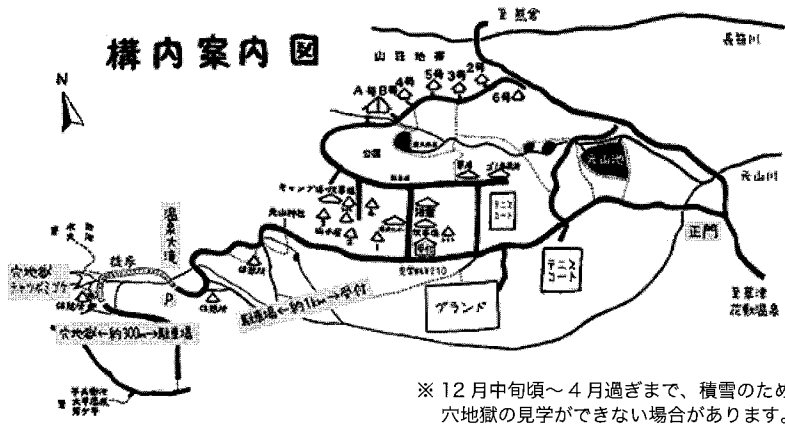


図4 奥草津休暇村 構内案内図

二 穴地獄について

穴地獄は、白根火山の火山活動でできた「すり鉢状」の大きな穴が始まりで、鉄分を多く含む鉱泉が湧き出していました。この穴に動物が落ちると出られなくなり、死んでしまうのでいつしか「穴地獄」と呼ばれるようになりました。

このあたり一帯は、太平洋戦争の終盤から戦後にかけて、鉱山「群馬鉄山」として褐鉄鉱を中心に鉄鉱石を掘りだしていました。奥草津休暇村は旧群馬鉄山跡地を緑化し、グラウンドやキャンプ場、温泉などを設けた宿泊施設です（図4、図5）。

二〇一〇年十月二十五日、日本テレビ「不思議探偵団」の中で、「火山が生み出した群馬・奇跡の三大パワースポットを調査せよ！」で草津「緑のじゅうたん」として「穴地獄」が紹介され、観光客が急増しているそうです（図6）。

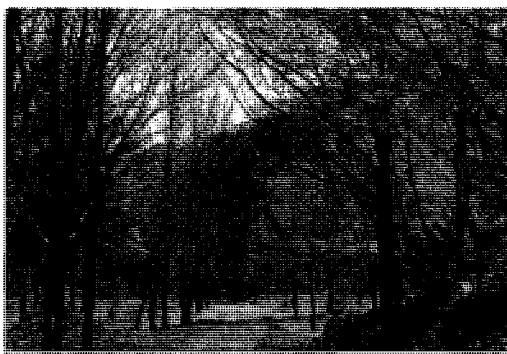


図5 奥草津休暇村の紅葉 2011.11.2



図6 チャツボミゴケのコロニー 2011.5.18

三. コケについて

(一) コケの概要

日本には約一、七〇〇種類ものコケが生育しています。コケは大きく
 蘚類と苔類、ツノゴケ類に分かれます。

コケには栄養分を吸い上げる根っこがないので、水を空気中の湿度か
 ら吸収している生き物です。空気のきれいな山などの湿ったところにた
 くさんの種類が生活しています(図7)。

また、ホンモンジゴケのように銅と結びついたり、チャツボミゴ
 ケのように硫黄泉などの酸性の条件下で生育する特殊なコケもありま
 す。

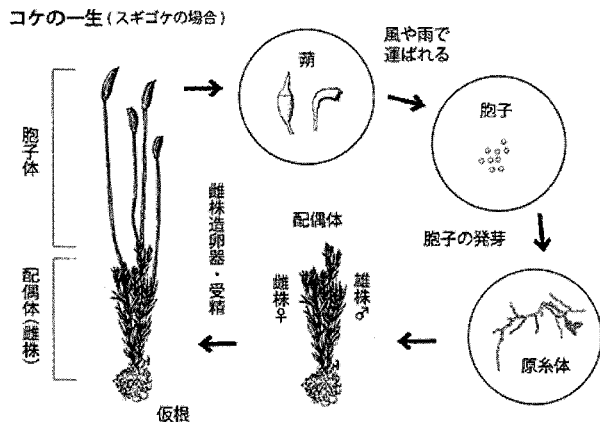


図7 コケの一生

(二) 蘚類

日常、目にするコケの仲間はこのグループが多いです。茎と葉の区別
 があって、茎が立つグループと、はうグループに大きく区別できます。
 葉の先がとがるものがほとんどです。

左の写真は学校の職員室の下にある「スギゴケ」です。庭園によく植
 えられ、蘚類の代表として一般の人々にもっとも馴染みの深いコケです
 (図8)。



図8 スギゴケ

(三) 苔類

目立つものはゼニゴケなどの茎と葉の区別がない葉状体のグループで
 す。

次の写真はジャゴケです。このコケは学校では女子風呂と男子風呂の
 間にあります(図9)。

チャツボミゴケは苔類のウロコゴケ目ツボミゴケ科で、学名は

Junggermania vulcanicola (ユンゲルマンニア・ブルカニコラ)と
 言います。



図9 ジャゴケ

(四) つぶけ類

胞子体が動物の角状でその表面に気孔があるなどの特徴があります。

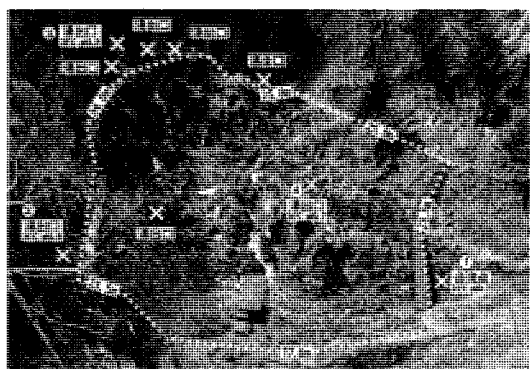


図10 穴地獄全景 (測量・水温・pH 調査)
 2011.12.7 気温 2°C

四. 穴地獄の調査

今回の調査では、測量・水質・pH値を調べました(図10)。

鉱泉の水質については×湧出口が八箇所確認でき、合流点を含め四箇所です。サンプリングを実施しました。

(一) 測量結果 (点線内)

円周 約一五二・二メートル、直径約四八・五メートル、面積約一、八四六・五平方メートル

(二) 水温・pH値結果 (図10、図12)

- ①合流点 二二度 pH二・七
- ②湧出口 二三度 pH二・八
- ③湧出口 二八度 pH二・八
- ④湧出口 二六度 pH二・七

(三) 水質・成分分析の実験

③湧出口の鉱泉 (二八度 pH二・八) を使用、「腐った卵」に似た硫化水素 H_2S の臭いです。

(a) 炎色反応は黄色、分光スペクトルでナトリウム Na とカルシウム Ca が確認できました (図11)。

(b) BTB 溶液の pH による色の变化で黄色 (酸性) になりました (図12)。

金属イオン反応と成分の分離と確認 (図12)

(c) 水酸化バリウム $Ba(OH)_2$ と硫酸イオン SO_4^{2-} の反応。白

色の硫酸バリウム BaSO_4 の沈殿が生じました。

(d) 黄血塩 $\text{K}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]$ を加えると鉄イオン Fe^{2+} に反応し深青色の沈殿が生じました。

(e) 硝酸銀 AgNO_3 を加えると塩化物イオン Cl^- と反応し白色の塩化銀 AgCl の沈殿が生じました。



図 11 分光スペクトルの確認

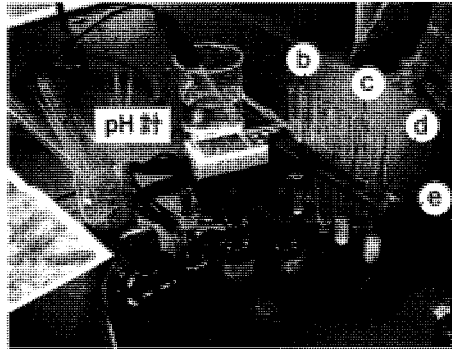


図 12 pH計, (b) BTB 溶液, (c) 硫酸バリウムの沈殿, (d) 青色に反応, (e) 塩化銀の沈殿

(四) 「立正大学教授 佐竹 研一 講演会」より

平成二十四年一月二十二日、中之条町ツインプラザで立正大学地球環境科学部環境システム学科・研究科 佐竹研一教授の「チャツボミゴケの神秘に迫る」の講演会が開催され、チャツボミゴケや穴地獄についての話を伺うことができました。穴地獄の源流部ではアルミニウムが非常に多く、鉄も多く含んでいるということでした(表1)。

穴地獄でよく見られる白い沈殿物は、硫化水素が空気に触れ、酸化して沈殿した硫黄の粒子です(図13)。

茶色マット状のものは耐酸性の珪藻(学名: *Pinnularia braunii* var.

amphicephala) のコロニーです(図14)。

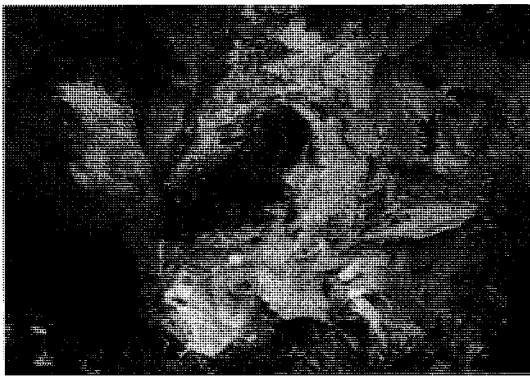


図 13 硫黄粒子の沈殿

穴地獄源流部の水質		
アルミニウム	Al	126 mg/l
カルシウム	Ca	115
ケイ素	Si	56
ナトリウム	Na	43
マグネシウム	Mg	42
カリウム	K	29
鉄	Fe	26
マンガン	Mn	2

表 1 穴地獄源流部の水質



図 14 珪藻のコロニー

五. チャツボミゴケについて

(一) チャツボミゴケの特徴

水生苔類のチャツボミゴケは、「マリゴケ」とも呼ばれ、酸性の強い温泉の水が流れ込む場所に丸みのある群生をつくりまします。

屋根瓦が重なるように葉がつながり、根元は茶色くなっています(図15, 図16)。

成長速度が遅く一年に数ミリ程度、繁殖のための花被や蒴は確認できませんでした。

蘚苔類の多くの種で無性芽をつくり新しい原系体ができたり、葉や葉の一部が落ちて新しいコケになる栄養生殖で繁殖する場合もあるようです。

佐竹教授の調査でチャツボミゴケには、体内に重金属の水銀を蓄積できることが発見されています。穴地獄の水質には水銀を含んでいないので水銀はありませんが、穴地獄のチャツボミゴケの科学組成からは、カリウムが多く、鉄、リン、アルミニウム等が確認されており、わずかですが火山性のヒ素も蓄積されているそうです。



図15 チャツボミゴケの茎葉体

葉

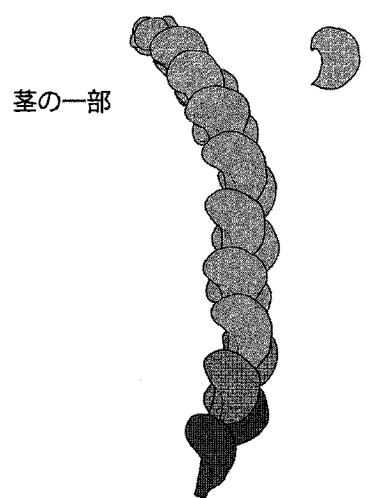


図16 チャツボミゴケの茎の一部・葉

(二) チャツボミゴケの分布について

図17 一〇年前の点線内はほぼすべてにチャツボミゴケがりますが、二年前、二〇一一年とチャツボミゴケが減少し岩肌が見えているのが確認できます(図17, 図18, 図19)。

鉱泉の湧出量が減っているのか、赤矢印・青矢印部分の流れが止まっています。

水生苔類でもあり、環境の変化に敏感なチャツボミゴケは枯れてしまったようです。

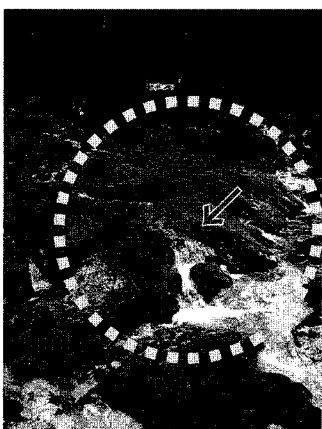


図17 10年前 2001.9.5

穴地獄は標高一、二八九メートルの寒冷地であり、冬期は深い雪に埋もれてしまい、翌年四月過ぎまで閉ざされます。冬に入り初めてまとまった降雪があり、翌日穴地獄を訪れました。鉱泉の熱もあり、チャツボミゴケは顔をだしていました。

(三) 冬の穴地獄 (図20, 図22裏表紙)

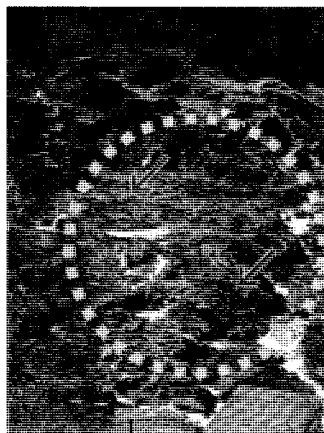


図19 2011年 5.18

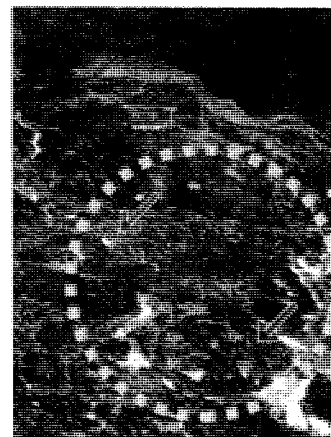


図18 2年前 2009.9.23



図20 冬の穴地獄 2011.12.17

(四) 考察く特殊な環境に生きるために

穴地獄のチャツボミゴケは、強い酸性の水辺で体内に鉄やアルミニウム、猛毒のヒ素などを貯めこみ生きています。チャツボミゴケはなぜこれらの金属と結びついても生きていられるのでしょうか。佐竹教授のチャツボミゴケの調査では、青森の頭無川かしらなしかわのチャツボミゴケでは重金属の水銀(Hg)を一パーセント体内に蓄積している例もあり、体内に蓄積された金属がどこに分布しているのかを調べたところ、そのほとんどは細胞質ではなく細胞壁に蓄積されていたそうです。細胞質という生命活動を活発におこなっている場所ではなく、いつてみれば壁や柱の役割を果たす細胞壁に金属を貯め込むことで、悪影響を最小限に抑えているのだと考えられています。チャツボミゴケがなぜ有害な金属と結びついて生きているのかはよくわかっていませんが、ほかの植物が入ってこられない環境を自ら繁殖の場所としているのだと思います。

六. 謝辞

調査で繰り返しお伺いした「EJ」奥草津休暇村の北川様・本間様、本文内容の確認と報告書のまとめ方のアドバイスをいただいた立正大学 佐竹研一教授、鉱泉の成分分析実験・写真を提供していただいた麻野忠彦先生、引率・写真提供、PCでの編集作業等で最後までご指導いただいた関口正人先生に心から感謝を申し上げます。

七. おわりに (図21)

校外指導で穴地獄の写真撮影に調査、学校のコケ調べは、文化祭の間発表の時に学校周辺のコケを採集して展示用の標本を作りました。今まであまり興味がなかったコケに対して少し興味を持つようになり、今まで当たり前だったコケに目をやり見ることが増えました(泉)。

佐竹教授は講演の時に「チャツボミゴケは中之条町のタカラモノ」ですと言っていました。草津の西の河原にも以前チャツボミゴケがあったそうですが、現在は壊滅状態だそうです。観光客が増えることはうれしいことですが、自生地が荒らされてしまうことが心配です。今回は文献を見ても難しく大変でした。これからもチャツボミゴケを見守りたいと思います(清水)。

引用文献

- 一) 原色日本藓苔類図鑑 保育社 一九七八 著者 服部新佐・岩月善之助 水谷正美
- 二) 苔の話 小さな植物の知られざる生態 秋山弘之 著 二〇〇四 中公新書
- 三) 新装板山溪フィールドブックス八 しだ・こけ 二〇〇六 解説 岩月善之助 写真 伊沢正名
- 四) 続・ふるさとの昔と今 入山中学校郷土学習調査報告集 一九九三 六合村立入山中学校



図 22 冬のチャツボミゴケ 2011.12.17



図 21 穴地獄にて 2011.5.18

平成 23 年度 白根開善学校高等部 テーマ学習報告書
「穴地獄とチャツボミゴケ」

高等部 2 年 泉 直人・清水 涼太
担当教員 関口 正人

発行 白根開善高校
平成 24 年 2 月 4 日

群馬県吾妻郡中之条町大字入山 1-1

学校法人 白根開善学校

白根開善学校高等部

白根開善学校中等部

TEL 0279-95-5311 (代)

FAX 0279-95-5315

URL <http://www.shirane.ac.jp/>

歴史

一 古代

熊倉遺跡

一、位置

熊倉遺跡は、群馬県の北西部に連なる山間地にあたり、吾妻郡中之条町大字入山字松岩に所在する。そして、草津白根山麓の標高一、〇〇〇メートル部に位置する草津白根の山麓地帯である。

二、遺跡の発見、調査

熊倉の地は、戦後（昭和二十年以降）になって開拓集落が形成されるまでは、まったくの未開の荒野であった。遺跡周辺の土壌は開拓の鋤が入れられるまで、ほとんど攪乱を受けることがなく、耕作地内にポツン、ポツンと凹地がみられ、その周辺には土器片が散乱していた。

昭和三十七年、同三十八年の二ヶ年にわたり、群馬大学史学研究室尾崎喜左雄教授の指導による発掘調査が行われる。調査概要は既に群馬大学尾崎研究室より「昭和三十七・八年度における発掘調査」報告や『六合村誌』に記載されている。そして、一、二〇〇メートルの高原におけ



熊倉の開拓地と熊倉遺跡

る遺跡発見は非常に興味ある問題を提起してくれるものであるとし、定期的にはおそらく八世紀末から九世紀初頭ごろの集落と考えられると、結んでいる。さらに、住居跡のほか「かまど」が発見されている。かまどは壁から床に傾斜した石組で作成され、須恵器の杯がかまどの下の焚口の部分に置かれており、鉄製品も近くから出土している。尾崎教授は『群馬県の遺跡』の中で、「特殊な集団ではなかったかと想像せしめる」とのべられている点、この熊倉遺跡は貴重な遺跡であろう。

○第二次 熊倉遺跡発掘は、昭和五十七年八月一日から翌三月末日まで遺跡の範囲・住居跡発掘調査・熊倉火山灰の分布調査が主なものであった。

○第三次調査 調査期間は昭和五十八年七月二十五日から翌三月末日まで、内容は前年と同じく遺跡の範囲の確認、発掘調査、さらに遺跡の生産域確認（焼畑）調査、山積み集落毎に関する調査が主なものである。調査結果については、昭和五十九年六合村教育委員会より『熊倉遺跡―山積み集落の探究―』が報告書として出版されている。

七号住居跡発掘

昭和五十六年九月十日から一五日間、発掘調査を実施する。遺跡は東端の山林中に位置し、遺跡のほぼ全面がキャベツ畑と化した中で、唯一個残された凹地の明瞭な住居跡であった。住居跡は一边が四メートルほどの方形で、かまどの位置については不明である。炭化材のほか遺物はごく少なく、土師器の甕口縁部二個にすぎない。

八号住居跡発掘

昭和五十七年、調査する。住居跡は東西三メートル、南北三・五メー

トルと、やや南北に長い隅丸の長方形である。熊倉火山灰層下の黒ボク土中に掘りこまれ、壁高は四〇センチ、東壁の南からかまどを設け、貯蔵穴もある。

遺物は完形品はなく、土師器の甕である。復元口径は

図の①②参照

①一九・八センチ

②一九センチ

③一一・四センチ

④底径四・五センチ胎土

には、いずれも〇・五

ミリ〜二ミリ程の砂粒

を含み、焼成は硬調で

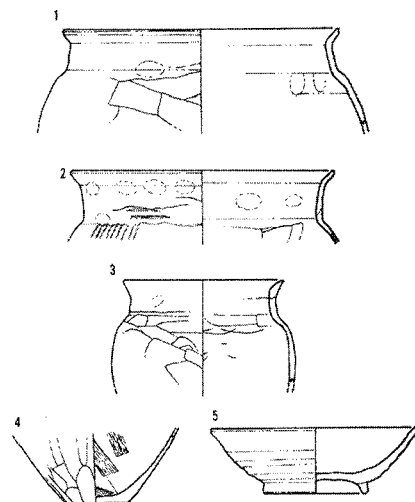
良好な品である。

⑤須恵器坏は、復元口径一四・八センチ、底径七・三センチ、器高四・七センチである。胎土には、〇・五ミリ〜五ミリ程の砂粒を含み、焼成はやや硬調で灰黄色である。

胎土や焼成の点から、この須恵器は利根郡月夜野周辺の月夜野窯跡群の産品である可能性が高く、利根郡域と吾妻郡の交流、交易のありようを示唆するとともに、熊倉遺跡が「上毛の文化圏に属する人々によって形成されていたことを再度確認させることとなった。」ともいう。

九号住居跡

ハンドオーガーボーリングにより遺構確認調査によると、底面中央部の規模は南北四・六四センチ、東西三・六六センチで、やや南北に長い



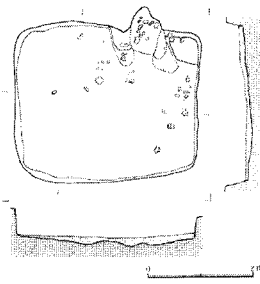
8号住居跡出土土器

長方形である。

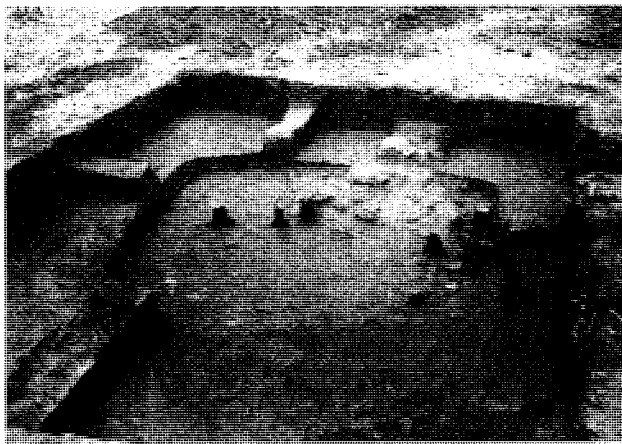
かまどは、八号住居跡と同じく東壁南寄りに、黒ボク土を掘り込んで設けられている。貯蔵穴に相当する施設は検出されなかった。出土遺物は比較的によく、かまど内及びかまど前面に集中し、南壁沿いにも散在する。

出土した灰釉陶器は長頭瓶かと思われる破片である。熊倉遺跡における灰釉陶器の出土は群馬大学によって調査時から知られていたが、県下でも古い一群に属するものであり、流通経路やその性格など、解き明かすべき問題は多いといわれる。

白根山麓の遺跡を見ると、白根山麓一帯は、火山山麓であるとともに高冷地であるために、現在でも未開発な地が多く、そのために遺跡の発見も少ない。発見されている遺跡の多くは戦後の入植による開墾時に発



八号住居跡
全 景
実測図



八号住居此

見されたものが多い。弥生・古墳時代の集落及び古墳は未発見である。

三、熊倉火山灰について

調査の方法 草津白根火山起源の完新世テフラについては、これまでほとんど知られていない。今回の調査では、熊倉遺跡の発掘に伴って確認されたテフラ層を熊倉火山層と呼び、その示標テフラとして記載することを目的とした。なお、テフラという用語は、降下火砕物と火砕流堆積物の総称である。

分布 熊倉火山層は、浅間火山起源の完新世のテフラ層とは明らかに性質が異なることがわかった。なお、熊倉火山層は草津町から六合地区にかけて広く分布している。

四、黒ボク土について

熊倉遺跡の特徴の一つに、廃絶された住居が埋まりきらずに凹地として残り、現地表面でその存在が認知された。

入山地区の農業はハタケ志向でその大部分が傾斜地の段々畑である。土壌を「黒ボク土」と「真土(まつち)」とに区別している。黒ボク土は火山性の土壌で酸性が強く、作物を作るのには適さない。黒ボク土は、ノツボ土・ノボウと称されて、耕作不適土の代名詞にもなっている。

真土は定畑にできる地味である。

熊倉遺跡の集落が、九世紀後半ごろの一時期に限定しているのは、この地味と気象条件によるものと考えられる。つまり、農耕生活を始めるが黒ボク土や霜害のため畑作ができなくなり、谷筋の真土のある斜面に移動したとも考えられる。入山地区では、木工が冬の仕事として行われ

たものは稀である。

参考文献

- | | | |
|------------|-----------------|--------|
| 六合村教育委員会発行 | 熊倉遺跡 | 昭和五十九年 |
| 〃 | 六合村誌 | 昭和四十八年 |
| 上毛新聞発行 | 群馬県遺跡大辞典 | 平成十一年 |
| 尾崎喜左雄著 | かみつけより群馬へ昭和三十八年 | |
| 群馬県発行 | 群馬県史通史編 | 平成二年 |

原始古代1

二 中世

中世の六合

草津温泉は、温泉の湧出量・効能・収集客数などから全国的に有名な温泉である。六合地区は、草津温泉の冬期に寒さを避けて住む「冬住みの里」となった。江戸時代より、旧暦四月八日から十月八日までが草津入湯の時期となり、十月八日から翌年四月七日まで冬住みの里で生活している。冬住みの里は、六合地区に限定しないが、六合地区が、最も多い。草津・六合地区を併せて「草津谷」と称したのは中世以降である。この地方の領主として活躍する草津湯本氏は、中世後期（戦国時代）になって出現する。湯本氏は、源頼朝が建久四年（一一九三）三月二十一日那須野及び三原にて狩をした折に、お供をして草津温泉に案内した細野御殿介が恩賞として湯本姓を賜わり、湯本幸久と名乗ったことによる。（『草津温泉由来記』上野国草津温泉由来 ○草津光泉寺所蔵）

湯本氏の出自について、赤岩湯本家の家系図によると「清和天皇の皇子貞元親王、清和天皇五男滋野親王也、始滋野姓を賜り（略）信濃国下向、小県郡海野庄に居住し、彼国守護、法名開善寺殿と号す。（略）子孫に至り毎年四月四日・八月四日之を祭る。」とある。

清和天皇―貞元親王―幸恒

号海野小太郎

信濃国大守

幸明 ― 細野美殿助福宗・号竜興

号海野小太郎

法名前山寺殿

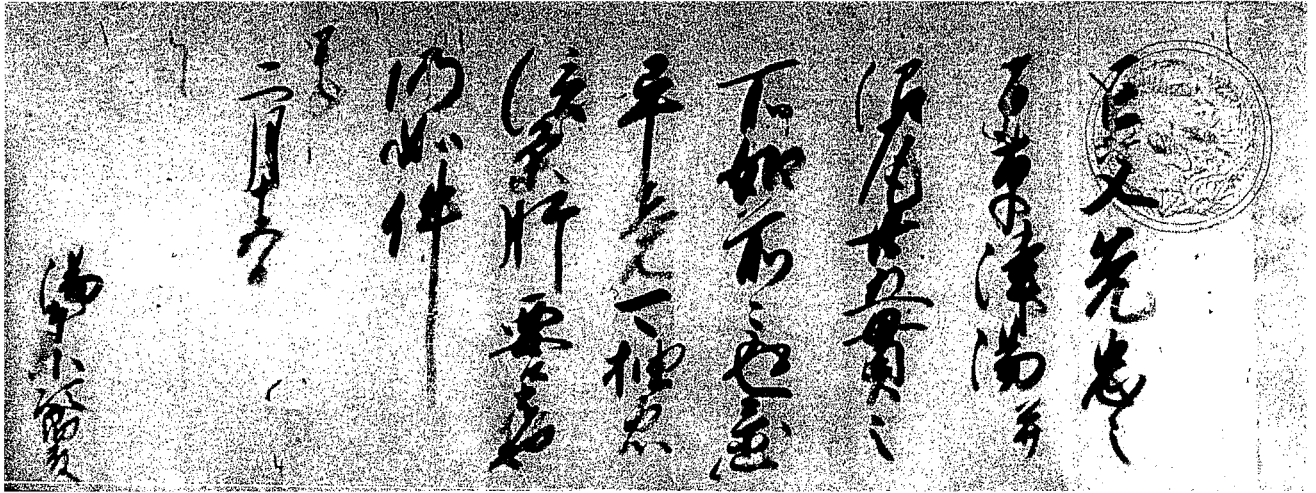
〔自元祖三十七代目・古湯本三郎右衛門尉幸綱（以下略）

住草津、竜沢寺開基、法号竜沢寺殿月州乘江居士

寛永二年乙丑歳十二月廿二日卒、内沢但馬娘

赤岩湯本系図によると、湯本三郎右衛門幸邦の長男湯本長右衛門幸常は、病身のため赤岩に隠退して医者となり次男の図書幸宗が三郎右衛門の後を継ぎ、沼田藩真田氏に仕えた。図書は男子がなかったので、娘尊の高須貞顕（前橋藩酒井家の老臣）の末子を養子にと願い出たが藩主真田信澄はこれを見とめず、湯本図書の死によって草津谷八百石の領主湯本家は断絶し、草津は沼田領代官支配となった（前橋市正幸寺湯本貞顕墓碑銘による）。湯本氏の戦国期から江戸初期までの活躍を示す古文書は、草津湯本図書家のもので、湯本貞顕墓碑銘を残した熊谷家に伝えられた「熊谷文書」によって知られる。湯本氏関係の系図書などにもその出自は区々で明らかでないが、戦国時代以降になると正確になってくる。結局は、拠所となる文献史料の不足であり、古文書など文献史料の残っている時から、それぞれの歴史が明らかで正確となる。

草津には、建久四年（一一九三）三月、源頼朝の三原狩の折、草津温泉に立寄ったという伝説があり、その後大友頼泰・本願寺蓮如・常光院堯恵・長尾能景・長野業尚・白井双林寺三世曇英・万里集九・横瀬成繁・宗祇・宗長・長尾爲景など武将・僧侶・文人などが入湯し、「三国一之名湯」として有名になってくる。草津湯本氏に関する文書・記録等によって十六世紀後半からこの地方の領主となった経緯をみることにする。史料は『群馬県史』資料編7によった。



①武田家朱印状

①武田家朱印状（折紙）熊谷次郎氏所蔵文書（県史二二二八）

（龍朱印）

亡父先忠之

間、草津湯井

沼尾廿五貫之

所、如前々返置候

早竟可抽忠

信条、肝要候者也、

仍如件、

甲子

二月十五日

湯本小次郎殿

〔訓読〕 亡父先忠の間、草津湯ならびに沼尾廿五貫之所、前々の如く

返置候、早竟、忠信を抽すべきの条、肝要に候者なり、仍って件の如し。

吾妻東部の中心となっていた吾妻氏の岩櫃城が、武田方の攻略によって前年（永禄六年）十月十三日落城し、城主斉藤憲広（一岩斎）は吾嬬山から反下を越えて稲包山の麓を経て越後国へ逃れている。この岩櫃城攻略の論功行賞として、翌年（永禄七年甲子歳）二月十五日、湯本小次郎あてに朱印状が与えられ、草津における本領安堵状が出ている。そして、前日の二月十四日に、折田将監・八須賀縫殿助あてに朱印状が出され「今度忠信、比類なき次第に候、これによって本領〇貫分・新恩〇貫分（略）出し置き候」という文言である（折田将監・県史二二二五・八須賀縫殿助・県史二二二六）。



②武田家定書

②武田家定書 熊谷次郎氏所藏文書（県史三〇六四）

定

彼三人、草津湯治

不可有異議之由、被

仰出者也、仍如件、

天正九年

卯月廿四日

真田安房守

奉之

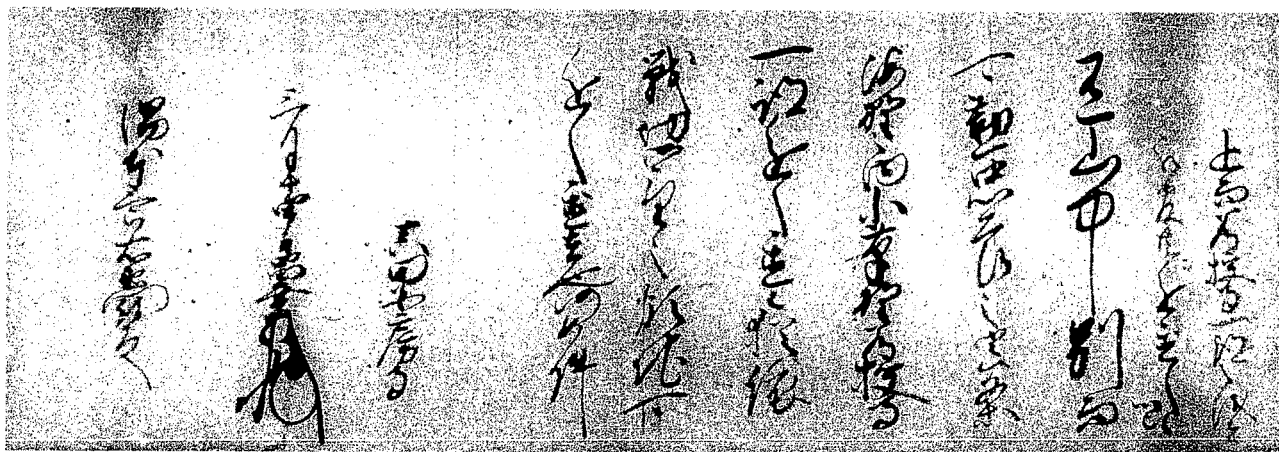
（龍朱印）

湯本三郎右衛門尉

（封紙付）

〔訓読〕 定

彼の三人草津湯治、異義有るべからずの由、仰せ出さる者なり、仍つて件の如し



③真田昌幸判物（折紙）

③真田昌幸判物（折紙） 熊谷次郎氏所蔵文書（県史三二〇六）

追而、若狭守一跡之儀者

被官共ニ進置之候、以上、

有山中、別而

可懃忠節之由候条

海野之内小草野若狭守

一跡進之置候、猶依

戦功御望之領地可

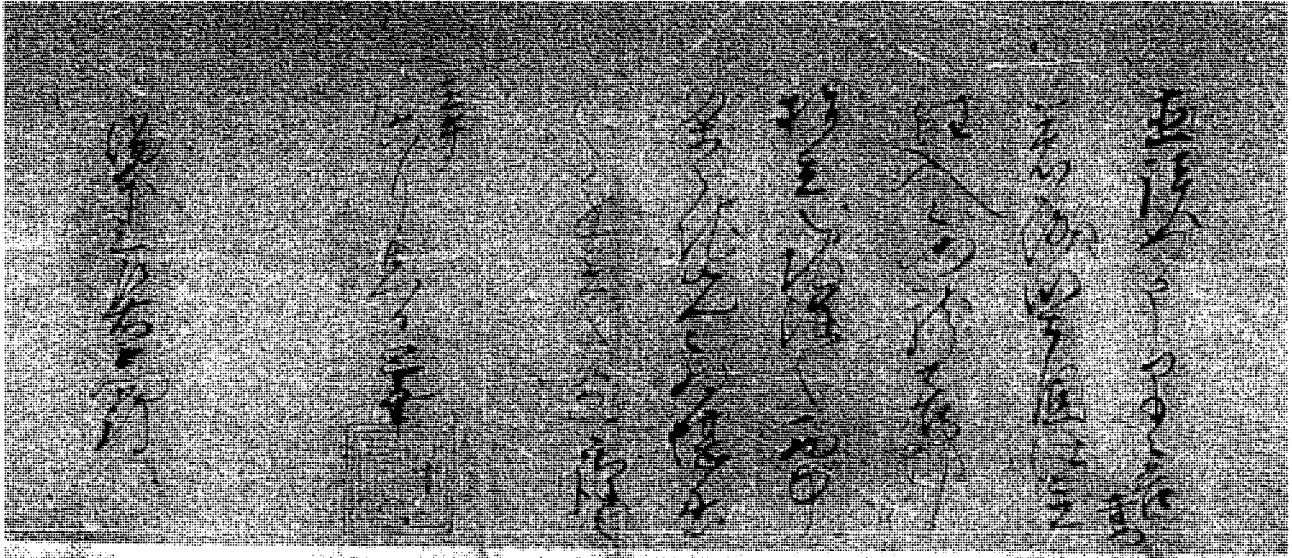
進之置者也、仍如件、

（天正十年）真田安房守

三月十四日 昌幸（花押）

湯本三郎右衛門尉殿

〔訓読〕追而、若狭守一跡の儀は、被官共に、これを進じ置き候、以
 上山中に有つて、別して忠節を励むべきの由に候条、海野の内小草
 野若狭守の一跡、これを進じ置き候、猶、戦功に依つては御望の領
 地これを進じ置くべき者なり、仍つて件の如し、



④真田昌幸書状（折紙）

④真田昌幸書状（折紙） 熊谷次郎氏所藏文書（県史三一三八）

直談如申、早々吾妻

着城、堅固仕置

任入候、仍龍善坊

指置之地除之、西中

条之地、先々爲勘忍

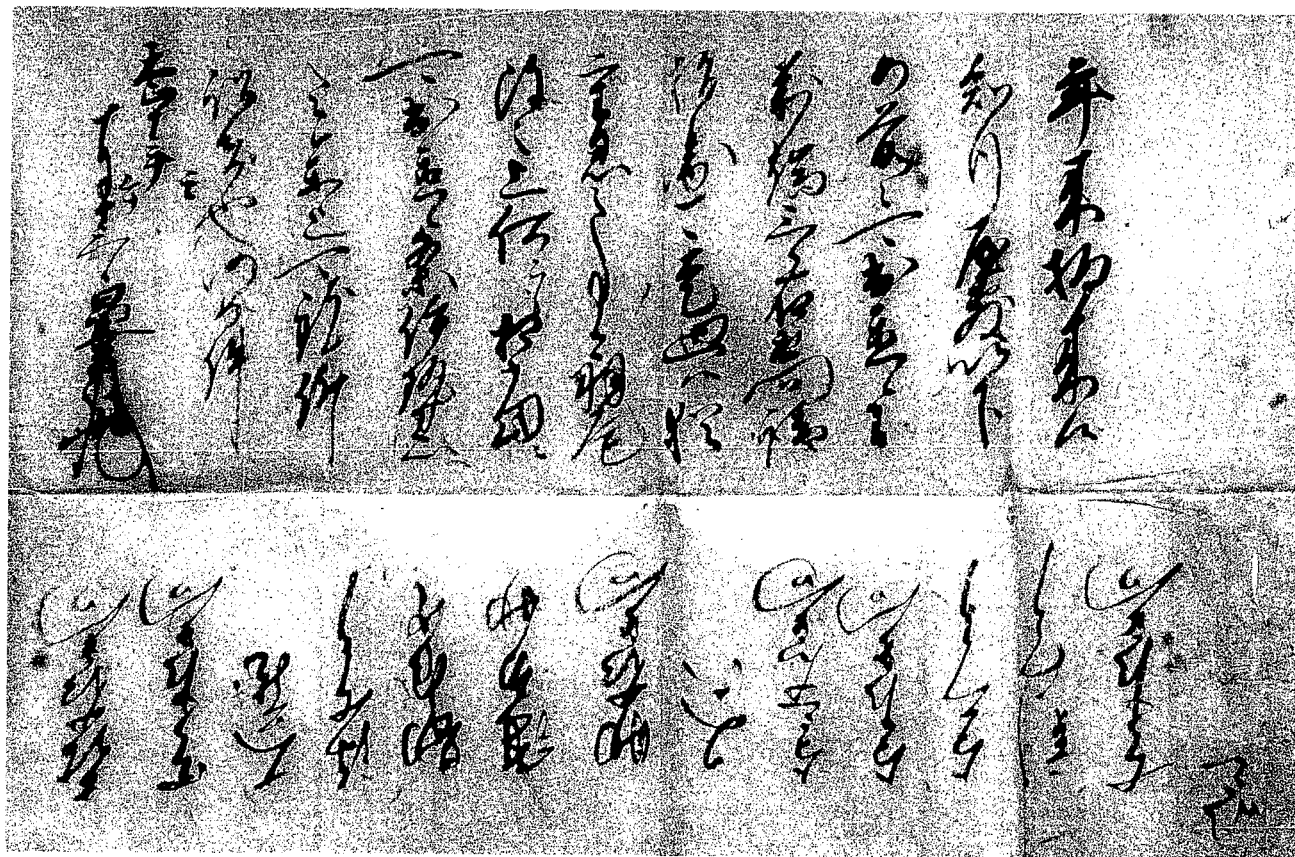
分、進置之候、恐々謹言、

（天正十年）壬午

六月廿一日 昌幸（朱印、印文「道」）

湯本三郎右衛門尉殿

〔訓読〕直談申す如く、早々吾妻に着城し、堅固の仕置任せ入り候、仍つて龍善坊指置の地はこれを除き、西中之条の地、先々堪忍分として、これを進じ置き候、恐々謹言、



⑤真田昌幸判物（折紙）

⑤真田昌幸判物（折紙） 熊谷次郎氏所藏文書（県史三二八六）

年来拘來候

知行・屋敷以下、

如前々可出置候間、

萬端三郎右衛門尉請

指圖、可走廻候、猶

重恩之事者、羽尾

改之上、何二も相當二

可出置候条、伊勢山へ

令参上、可致訴

訟者也、仍如件、

天正十年壬午

十月十三日 昌幸（花押）

喜右衛門尉

四郎左衛門尉

大藏

彌七郎

勘解由

縫殿助

助右衛門尉

又六

與三右衛門尉

與左衛門尉

與二郎

新五郎

七郎左衛門尉

以上、

以上、

⑥眞田昌幸書状(折紙) 熊谷次郎氏所藏文書(県史三二八七)

今度有吾妻

別而被勲奉公

忠節候条、海野

之内、若狭守分之内

五拾貫、河中嶋

之内寺尾分、并

須田領之内五百貫、

右如此進置候、猶

依戦功一所可相渡

候、恐 謹言、

天正十年壬午

拾月十三日 昌幸(花押)

湯本三郎右衛門尉殿

〔訓読〕 年来拘来り候知行・屋敷以下、前々の如く出し置くべく候の

間、万端三郎右衛門尉の指図を請け、走廻すべく候、猶重恩の事は、

羽尾改の上、何れにも相当に出し置くべく候の条、伊勢山(信濃小

県郡にある昌幸の本城)へ参上せしめ訴訟致すべき者なり、仍つて

件の如し、

以上、

天正十年壬午

十月十三日 昌幸(花押)

喜右衛門尉

四郎左衛門尉

大蔵

彌七郎

勘解由

縫殿助

助右衛門尉

又六

與三右衛門尉

與左衛門尉

與二郎

新五郎

七郎左衛門尉

〔訓読〕 今度吾妻に有りて、別して奉公忠節を勤められ候条、海野之

内若狭守分の内五拾貫、河中嶋の内、寺尾分并に須田領の内五百貫、

右かくの如く進じ置き候、猶戦功により一所相渡すべく候、恐々謹言、

⑦眞田昌幸定書（折紙）熊谷次郎氏所蔵文書（県史三一八八）

定

羽尾在城申

付候上者、今度

鎌原方西窪

出置候、重恩之所

者、向後羽尾城

普請可被申付

者也、仍如件、

天正十年壬午

十月十四日 昌幸 □（朱印 印文「道」）

湯本殿（三郎右衛門）

〔訓読〕 定

羽尾在城申付候上は、今度鎌原方西窪を出し置き候、重恩の所は、向後羽尾城普請申し付けられるべき者なり、仍て件の如し、

⑧眞田昌幸過所（折紙）熊谷次郎氏所蔵文書（県史三二四九）

每月市中二、

月荷物五駄宛、無

異儀可通者也、

仍如件、

天正十一年癸未

五月十三日 □（昌幸朱印・印文「道」）

湯三（湯本三郎右衛門）

〔訓読〕

每月市中に、月荷物五駄ずつ、異儀なく通すべき者なり、仍て件のごとし、

⑨眞田信幸充行状（折紙）熊谷次郎氏所蔵文書（県史三六六七）

以上、

今度其方知行

就改、本百廿五貫文之

所、百八拾仁貫五十文二

令検使候、右之外草

津百貫文、合仁百八拾

仁貫五十文、如此出置候、雖

然、向後役才（等）之儀者、貳

百卅五貫文分可被相

勤候、尚依戦功可令重

恩者也、仍如件、

天正十八歳

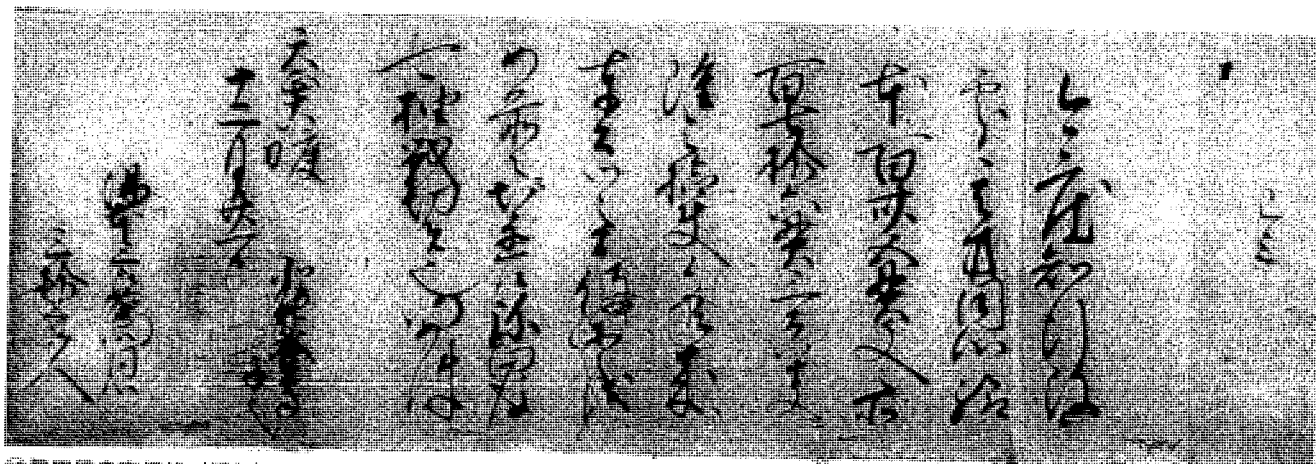
十二月廿一日 信幸（花押）

湯本三郎右衛門尉殿

〔訓読〕

以上

今度その方知行改むるについて、本百二十五貫文の所、百八十二貫五十文に検使せしめ候、右の外草津百貫文、合せて二百八十二貫五十文かくの如く出し置き候、然りと雖も、向後役等の儀は、二百三十五文分相勤めらるべく候、なお戦功に依り、重恩せしむべき者なり 仍つて件の如し、



◎眞田信幸充行状 (折紙)

⑩眞田信幸充行状 (折紙) 熊谷次郎氏所蔵文書 (県史三六八)

已上、

今度知行改候

處、其方同心給

本百卅五貫文之所、

百七拾六貫三百八十文二

雖令檢使候、年來

奉公候之間、役才(等)儀

如前々ニ出置候、彌向後

可抽戦功者也、仍如件、

天正十八庚 (眞田信幸朱印 印文「萬福積」)

十二月廿一日 □ 北能登守 奉之

湯本三郎右衛門尉同心

三拾壹人

〔訓読〕

已上

今度知行改め候処、その方同心給本百卅五貫文の所、百七十六貫三百八十文に檢使せしめ候と雖も、年來奉公候の間、役等の儀は、前々の如くに出し置候、いよいよ向後戦功を抽んずべき者なり、仍つて件の如し

⑪眞田伊賀守信澄所領安堵状（折紙） 熊谷次郎氏所蔵文書

我妻郡之内、草津

谷八百石之所、前々

如領地来候、無相違

出置訖、全可收納

者也、仍如件、

万治貳亥年

十月五日 信澄（花押）

湯本図書殿

〔訓読〕 吾妻郡の内、草津谷八百石の所、前々領地し来り候如く、相

違なく出置き訖んぬ、全く收納すべき者なり、仍つて件の如し

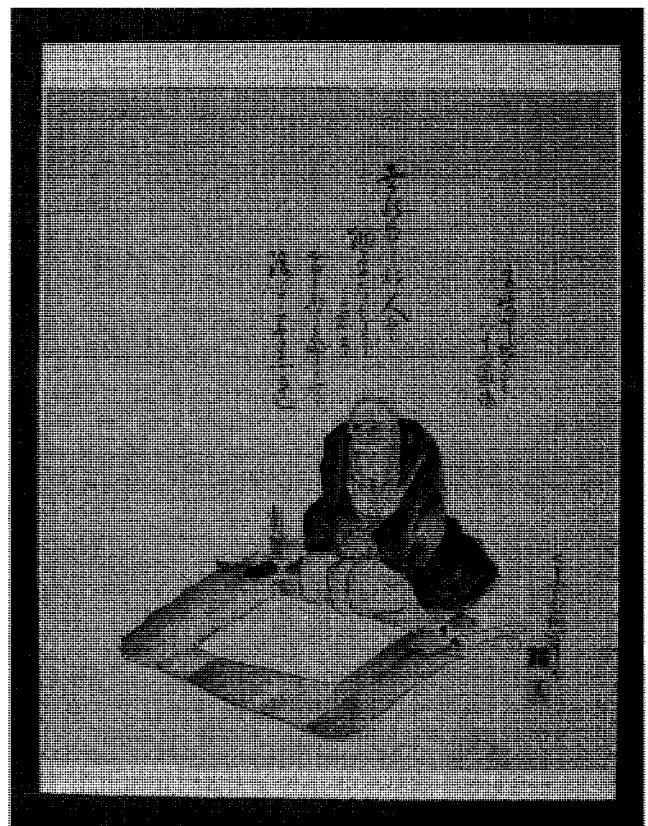
三 近 世

ふるさと文化人・宮崎竹坡と残された作品

一. はじめに

宮崎竹坡は江戸後期の画家で赤岩村（現、中之条町大字赤岩）の名家・湯本明敬の次男として生まれ、その後、草津の宮崎家の養子となった人物である。『六合村誌』には、「画才があり、竹坡と号して、吾妻郡内各地に作品が残る」と記述されていた。また、『草津温泉誌』で、著者・萩原進氏は竹坡の作品について「作品は非常に少なく、僅かに目にしたのは十二點にすぎない」と述べている。

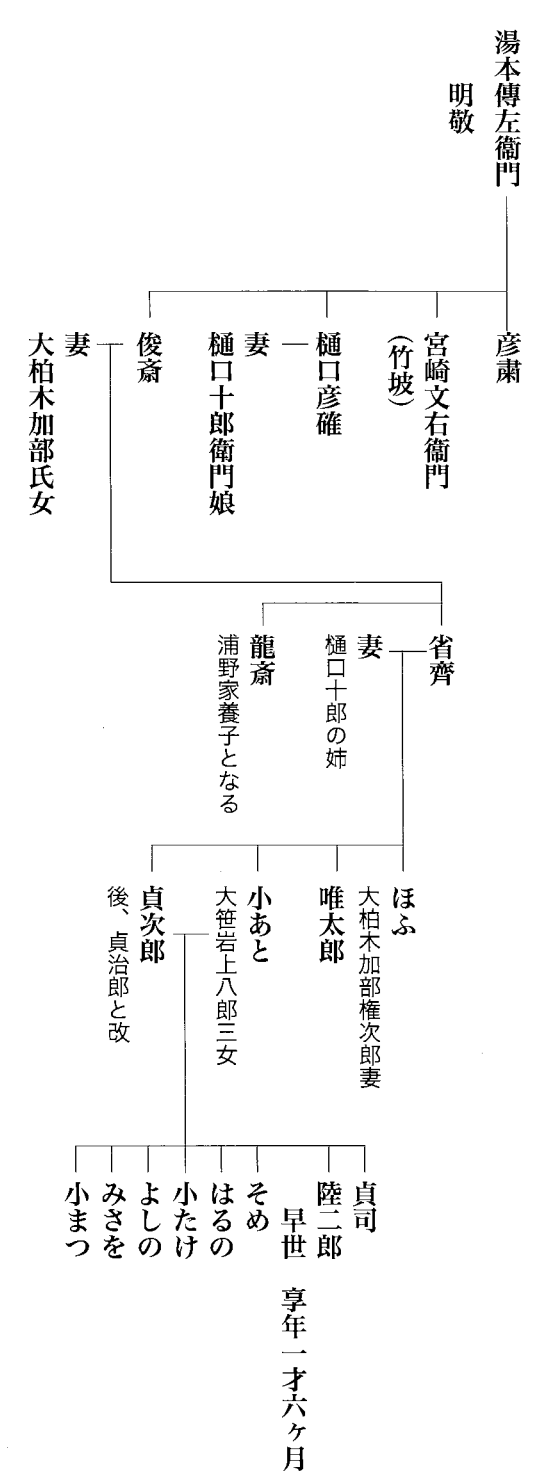
平成二十二年（二〇一〇）三月二十八日に中之条町と六合村が合併したが、これを記念して同年十月一日～十一月三十日にかけて中之条歴史民俗資料館（現、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」）で企画展「宮崎竹坡展―第四回ふるさと文化人展―」を開催した。この展示会では「スズメ竹坡」と称されるように花鳥画などの作品を残した画家・宮崎竹坡をふるさとの文化人として紹介した。竹坡が赤岩村（旧六合村）の湯本家出身であり、草津村の宮崎家に婿入りして文右衛門として活躍し、



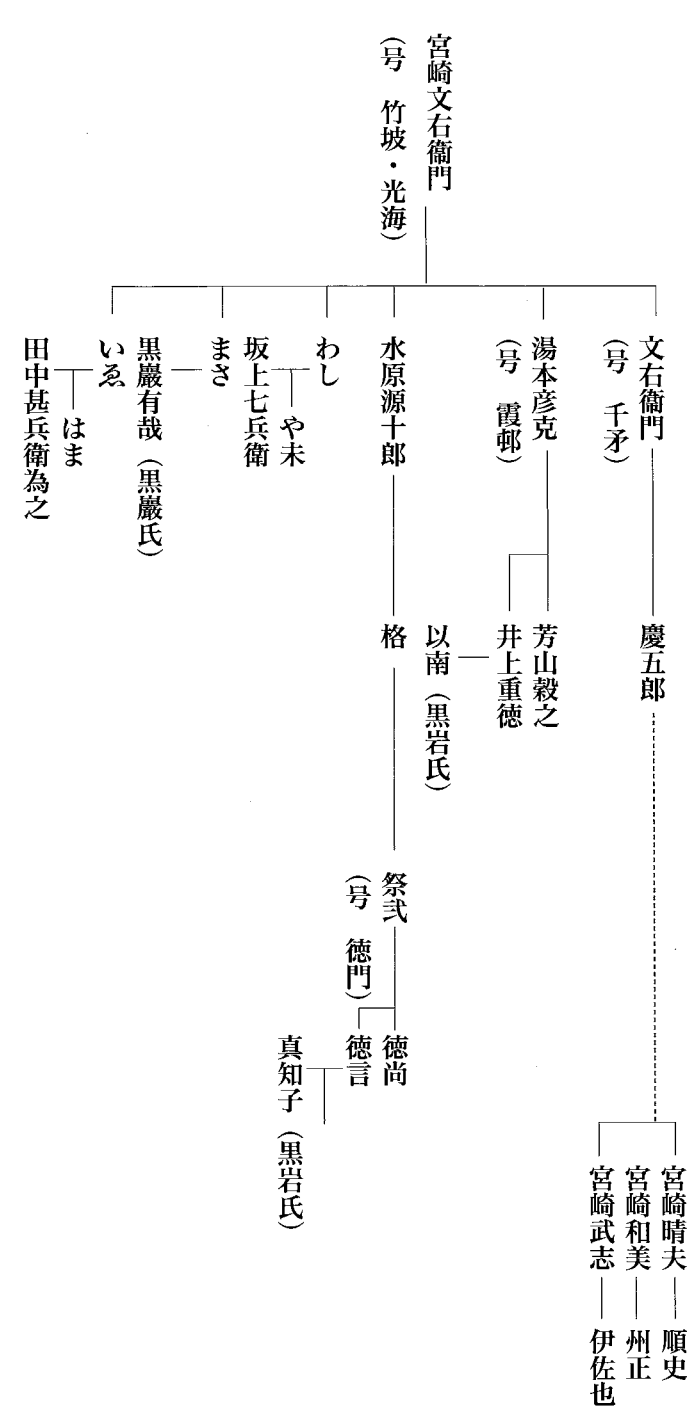
宮崎竹坡肖像画（宮崎武志氏所蔵）

晩年は娘の嫁ぎ先である中之条町の田中甚兵衛方に身を寄せたことなど六合・中之条両町村に関係した人物であったことも記念展として取り上げた理由の一つとなったことは言うまでもない。前述のごとく、その経歴や作品数が少ないことが予想された中での展示会であったが、新たな竹坡の作品とともに肖像画（萬松齋画）が発見されるなど少なからず成果が上がったことから、この機会に、竹坡の残された作品を通してその足跡を記しておきたい。

湯本家 略系図



宮崎家 略系図



二. 宮崎竹坡の足跡

宮崎竹坡（一八〇三—一八八六）は、赤岩村（中之条町大字赤岩）の名家・湯本明敬の次男（幼名捨弥、名は徳隠、字樂行、雅号は竹坡、光海）として生まれた。後に「赤岩湯本家に四天王と呼ばれた四人の男子があり」と評されたように竹坡等兄弟は優れた人物であった。長男・彦肅は黒田侯（筑前国福岡藩）の侍医を勤め、三男の彦確は、馬庭念流（高崎市吉井町）で名高い樋口家の養子に入り藤岡で医院を開業、末弟の俊齋は江戸で遊学の後、郷里で医業を継ぎ多数の編著書を著すとともに、蘭学者・高野長英との親交なども伝えられている。

次男の竹坡は草津の大家・宮崎家（旅館業・屋号「田龍屋」）の養子となり、文右衛門（文右衛門徳隠）を名乗った。宮崎家は財政的にも豊かであり、旅館業を営む傍ら得意の画才をのぼす機会に恵まれ、竹坡と号して、創作活動を行っていたことが想像される。ところが、明治二年（一八六九）の草津の大火や宮崎家が竹坡の孫の時に廃業したことなどが影響してか、竹坡の初期の作品は今ではほとんど目にする事ができない。晩年は、各地をまわり、娘の嫁ぎ先である田中甚兵衛方（中之条町大字中之条町）に身を寄せた。現在の中之条簡易裁判所東隣の田中家の貸家に仮住まいして、亡くなる直前まで画業に打ち込んだといわれ、田中家にもこの頃の作品や遺品が少なからず残されている。

『諸家人名録』に「詩 草津 宮崎文右衛門 竹坡」とあり、竹坡は漢詩人として紹介されている。これは、竹坡と親交の深かった同郷の俳人・坂上竹烟（一七八五—一八六二）の影響があり、俳句や漢詩も創作していたことが窺われる。これまで、宮崎家が輩出した画家「宮崎竹坡」

と俳人「宮崎光海」は別人として捉えているように見受けられる文献にも出会ったが、草津町の宮崎家墓誌には光海は竹坡の別雅号として刻まれている。なお、以前、宮崎竹坡の墓（『群馬人国記』の宮崎竹坡の紹介の中に写真掲載）は草津町に建立されていたが、現在は取り壊され存在しない。

三. 残された宮崎竹坡の作品

企画展「宮崎竹坡展—第四回ふるさとの文化人展—」における竹坡の作品の調査では、竹坡の作品は未展示のものも含め、別表一の「宮崎竹坡作品目録」のとおりであった。三〇点ほどの作品のうち、生家の湯本家、草津の宮崎家、晩年に身を寄せた田中家を合わせると縁者関係宅に全体の四分の三が残されていた。中でも、娘の嫁ぎ先であり晩年に身を寄せていた田中家の作品が半数以上に及び、所蔵品の多くが初公開される幸運に恵まれた。展示会以前から予想していた通り、竹坡の作品は「花鳥図」が中心であったが、「山水図」も二点ほど確認することができた。前述の如く、明治二年の草津の大火や宮崎家が竹坡の孫の時に廃業したことなどが影響してか、竹坡の初期の作品は今ではほとんど目にする事ができない中で、出品された中に嘉永三年（一八五〇）の作品（花鳥図「朝顔」）が含まれていたことは収穫であった。この作品にも登場する落款印「田龍画屋」は、草津温泉の湯畑をめぐる温泉旅館の中で、北側の一等地で宮崎文右衛門（竹坡）が営んでいたとされる旅館「田龍屋」（屋号）との縁を示していて、他の作品三点にも捺印されている。圧巻なのは、冬住の里資料館（市川義夫館長）が所蔵している「群雀図」で、

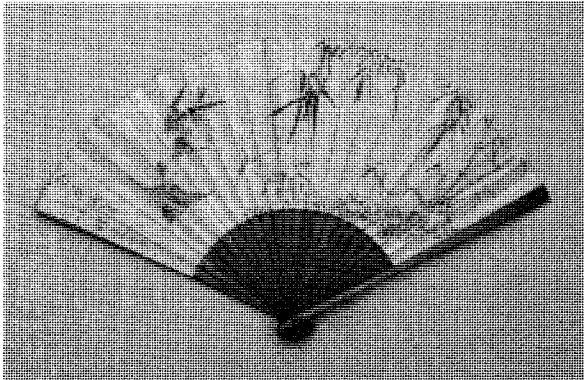
竹坡最晩年の力作となつてゐる。明治三十年頃まで冬期の草津は寒さが厳しく、湯治客も少ないこともあり、草津周辺の集落に冬の内だけ寒さを避ける冬住みの制度があつた。毎年十一月八日に冬住みの家に移り、翌年四月八日に草津にもどつてゐる。六合地区の小雨は、草津からの距離も近く、冬住みの里として最適であつた。

先にも触れたように『諸家人名録』に「詩 草津 宮崎文右衛門 竹坡」とあり、竹坡は漢詩人として紹介されているが、倉賀野宿（高崎市）出身の飯塚久敏（二八〇九―一八六五）編著の歌集『玉籠集』には光海（竹坡）と長男・千矛の作品が収録されている。地元・草津には俳人・坂上竹烟（一七八五―一八六二）がおり、竹坡がその影響を受けたことは明らかである。坂上竹烟には子供が無かつたため、竹坡の長女（わし）が夫婦養子として坂上家に迎えられているなどは、親交の深さを示す一端とならう。また、中之条町の田中家には、竹坡の三女（いゑ）が嫁いだ際に贈られた竹烟と竹坡の合作の桐製柱掛が残されている。宮崎竹坡漢詩「西国兵乱有感慨賊一絶」は、明治十年（一八七七）の西南戦争を政府軍が平定したことを詠んでいる。余談になるが、竹坡の長女の夫は、西南戦争に従軍し戦死している。

別表1 宮崎竹坡作品目録

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
作品名	花鳥図	扇面「花鳥図」(表)宮崎竹坡画・裏「俳句」	書画集(宮崎竹坡作品八点収録)	花鳥図「群雀図」	花鳥図「朝顔」	花鳥図「菊の図」	山水図	山水図「瀬戸瀑布真景」	花鳥図「オナガ」	花鳥図「雀」	書画帳(宮崎竹坡「花鳥図」収録)	花鳥図「春之図」	花鳥図「南蘋調綬帯鳥墨菊竹図」(秋の図)	花鳥図「菊に蝶図」(宮崎竹坡画)讃谷老	「幽谷墨蘭図」
制作年(西暦)		文久三年(一八六三)			嘉永三年(一八五〇)		明治九年(一八七六)								
材質・技法・形状	紙本墨画淡彩・マクリ	扇面	紙本墨画等・折本	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画彩色・軸装	紙本墨画・軸装	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画淡彩	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画淡彩・マクリ	紙本墨画淡彩・軸装	紙本墨画・マクリ
員数	1枚	1面	1帖	1幅	1幅	1幅	1幅	1幅	1幅	1幅	1冊	1幅	1枚	1幅	1枚
寸法(縦×横cm)	90.3×120.0	22.5×44.5	16.2×12.0	134.0×48.4	111.0×33.8	111.8×34.8	129.1×30.2	127.2×27.4	135.0×63.0	135.0×64.0	27.5×16.0	135.0×63.5	138.5×65.0	108.5×30.0	129.0×64.0
所蔵者(敬称略)	湯本滋	湯本滋	湯本滋	市川義夫	高橋俊信	須賀昌五	中澤政一	篠原千里	宮崎武志	宮崎武志	高橋敏子	町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」	田中宏宜	田中宏宜	田中宏宜
備考			明治十年代	竹坡八四歳の作品	(「田龍画屋」の落款)	(「田龍画屋」の落款)	「丙子秋月夜雪戲二高崎在京竹坡生(落款)」		竹坡八一歳の作品	竹坡八一歳の作品	高橋景作書画帳「水禽窺魚」	竹坡八三歳の作品(「田龍画屋」の落款)	竹坡八三歳の作品(「田龍画屋」の落款)	頓て鳴やうすや鹿の身繕ひ	竹坡七四歳の作品

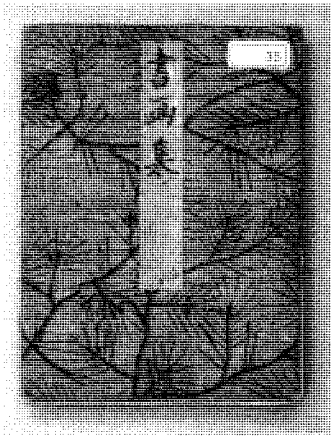
No	作品名	制作年(西暦)	材質・技法・形状	員数	寸法(縦×横cm)	所蔵者(敬称略)	備考
30	竹坡愛用の慳貪(蓋に竹坡漢詩「万里の長城」)		慳貪箱の蓋(木製)	1箱	43.0 × 32.0 × 1.3	田中宏宜	祖舜宗堯自太平秦皇何事苦 蒼生不知禍起蕭牆内虚築防 胡萬里城有感事録唐人句 竹坡宮崎隠□(落款)
29	「西国兵乱有感慨賊一絶」(宮崎竹坡漢詩)	明治十年 (一八七七)	紙本墨書	1枚	44.0 × 26.5	田中宏宜	
28	「西国兵乱有感慨賊一絶」(宮崎竹坡漢詩)	明治十年 (一八七七)	紙本墨書	1枚	43.5 × 25.5	田中宏宜	
27	柱掛宮崎竹坡(「薔薇」)と坂上竹烟(俳句)の合作		桐板柱掛	1本	107.0 × 10.0	田中宏宜	「永き日を安而続く天 気かな 竹烟(落款)」
26	柱掛宮崎竹坡(「菊」と坂上竹烟(俳句)の合作)		桐板柱掛	1本	120.0 × 13.0	田中宏宜	「蜂も花も忘るる幾く の盛りかな」(竹烟)
25	柱掛「一朵紫雲」	万延元年 (一八六〇)	桐板柱掛	1本	140.0 × 13.5	田中宏宜	
24	柱掛「菊」(表)・「墨蘭図」(裏)		杉板柱掛	1本	160.0 × 14.5	田中宏宜	竹坡七五歳の作品
23	柱掛「一朵紫雲」		杉板柱掛	1本	160.0 × 14.5	田中宏宜	竹坡七五歳の作品
22	柱掛「桜に蝶図(表)」「日東名花」(裏)」「墨梅図」		杉板柱掛	1本	160.0 × 14.5	田中宏宜	竹坡七五歳の作品
21	扇面「薔薇図」		扇面	1面	24.5 × 44.0	田中宏宜	竹坡八〇歳の作品
20	花鳥図「野薔薇に蝶図」		紙本墨画彩色・マクリ	1枚	21.5 × 21.0	田中宏宜	「竹翁」の署名
19	「響清之図(菊と竹)」		紙本墨画・マクリ	1枚	44.5 × 64.0	田中宏宜	
18	花鳥図「燕と紫陽花」		紙本墨画淡彩・マクリ	1枚	67.0 × 60.0	田中宏宜	
17	花鳥図「ツグミ」	明治十年 (一八七七)	紙本墨画淡彩・マクリ	1枚	49.0 × 59.0	田中宏宜	「竹坡迂老」の署名
16	花鳥図「竹と雀」	明治十年 (一八七七)	紙本墨画淡彩・マクリ	1枚	137.0 × 64.0	田中宏宜	「竹坡老人」の署名



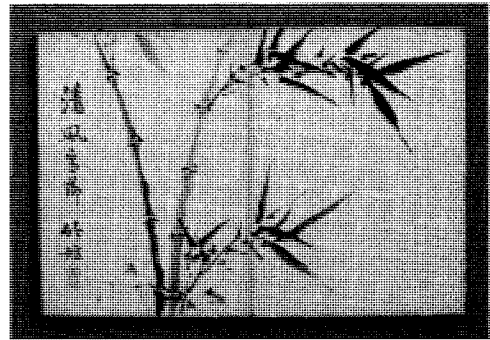
2 扇面「花鳥図」



1 花鳥図



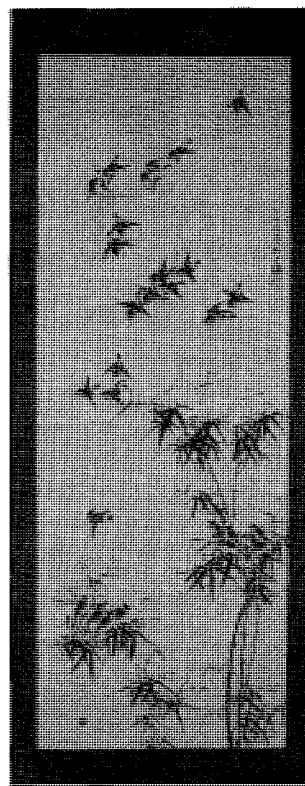
4-1 書画集



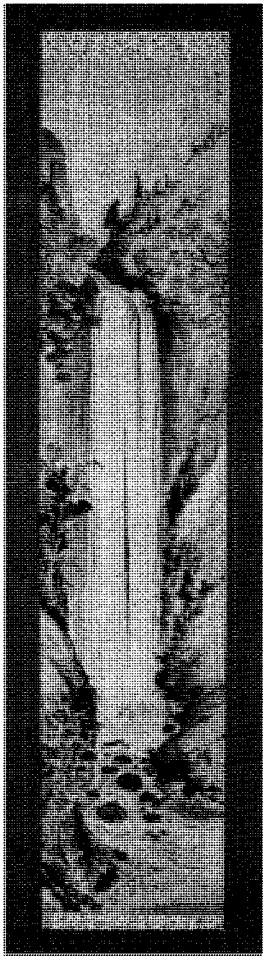
3-2 書画集



5 花鳥図
「朝顔」



4 花鳥図
「群雀図」



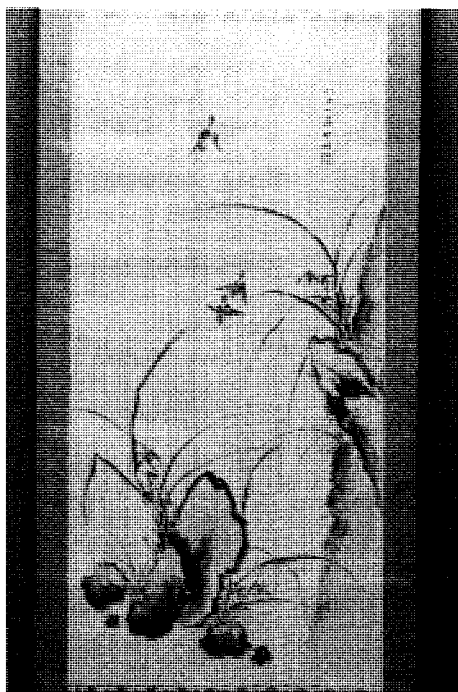
8 山水図「瀬戸瀑布真景」



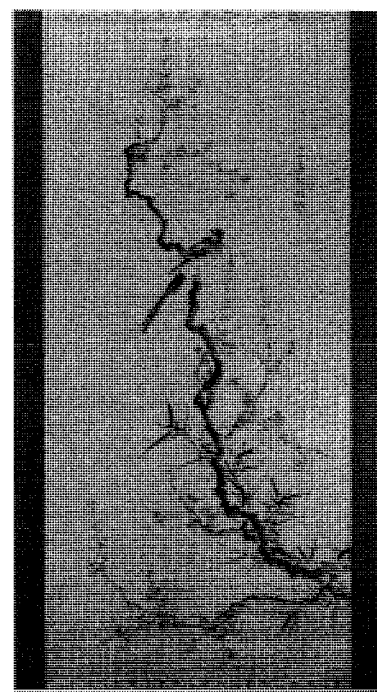
7 山水図



6 花鳥図「菊の図」



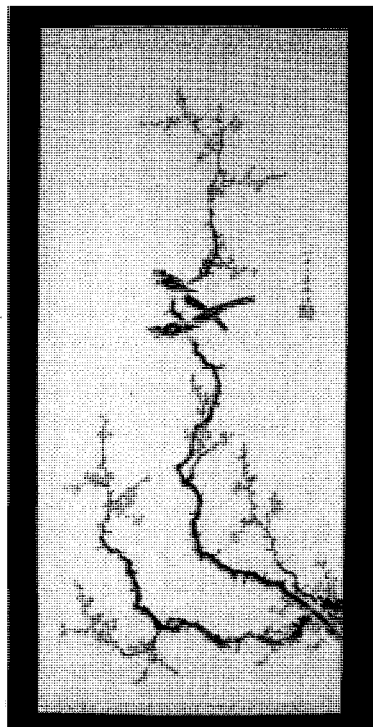
10 花鳥図「雀」



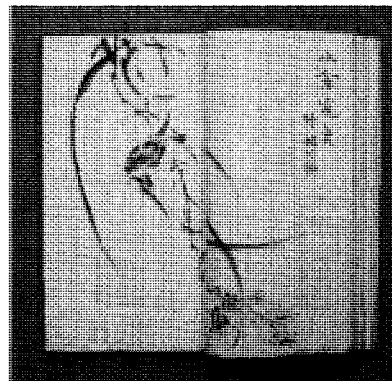
9 花鳥図「オナガ」



13 花鳥図「南蘋調綏帯鳥墨菊竹図」
(秋の図)



12 花鳥図「春之図」



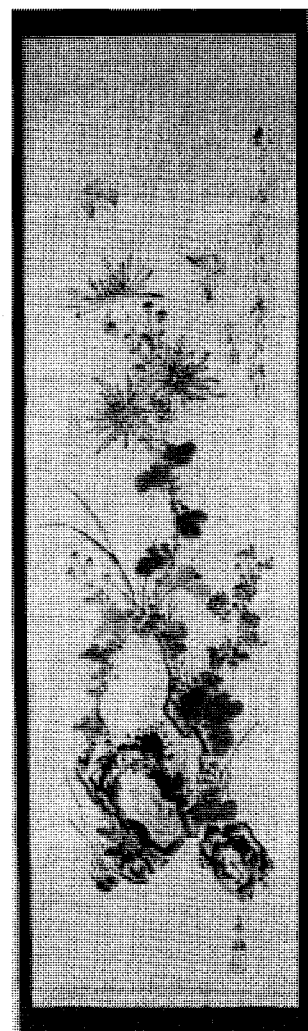
11 書画帳 (宮崎竹坡「花鳥図」収録)



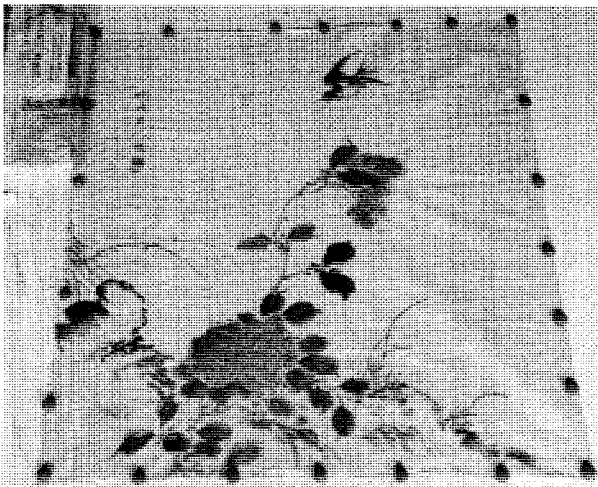
16 花鳥図「竹と雀」



15 「幽谷墨蘭図」



14 花鳥図「菊に蝶図」
(宮崎竹坡画/讀谷老)



18 「燕と紫陽花」



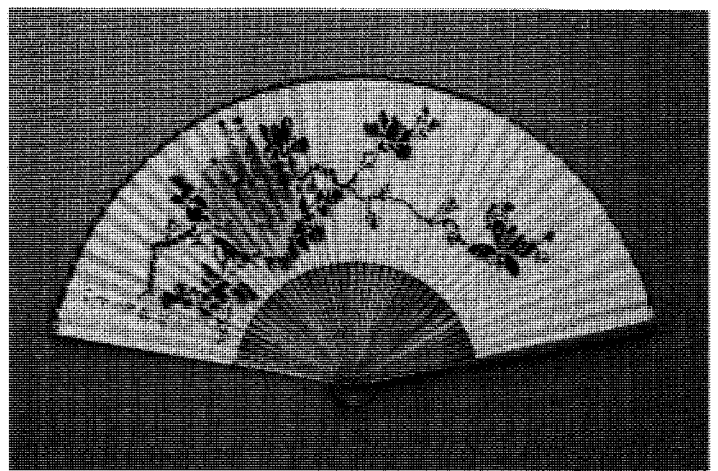
17 花鳥図「ツグミ」



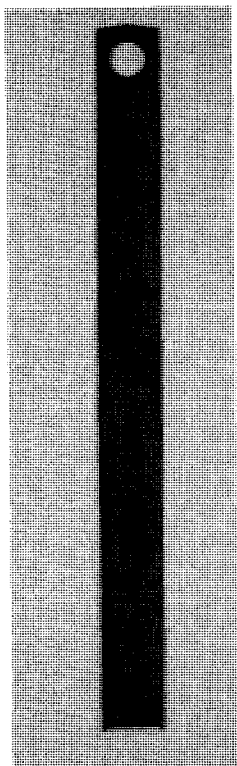
20 花鳥図「野薔薇に蝶図」



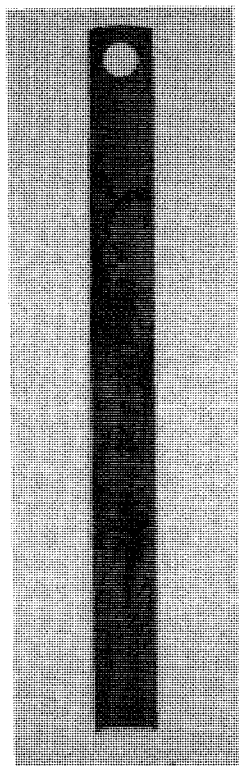
19 「警清之図（菊と竹）」



21 扇面「薔薇図」



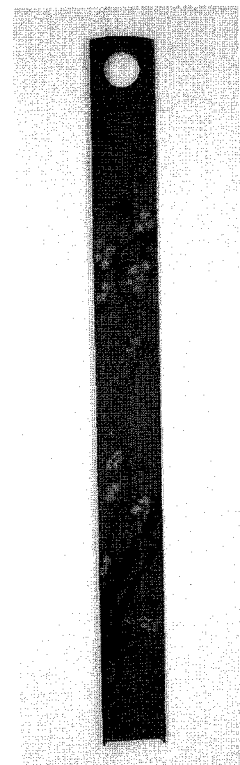
24-1 柱掛
「菊」(表)



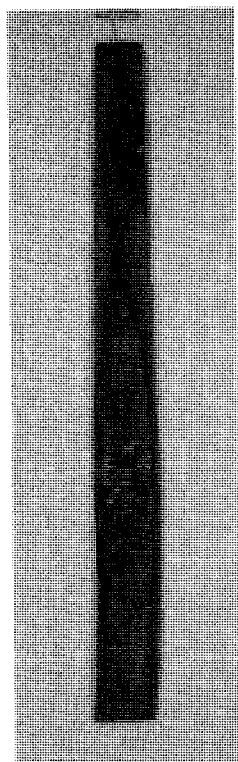
23 柱掛
「一朵紫雲」



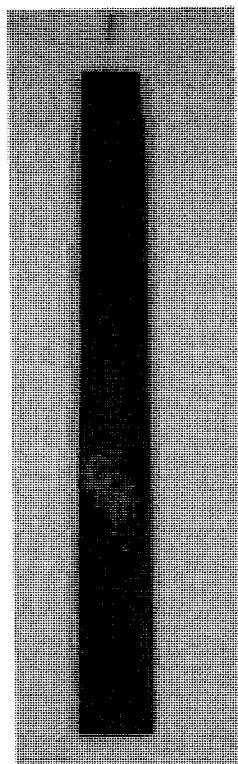
22-2 柱掛
「墨梅図」(裏)



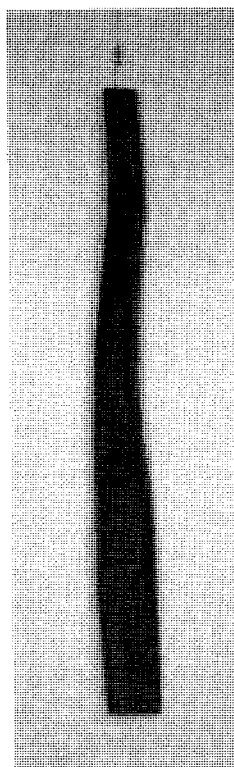
22-1 柱掛
「桜に蝶図」
(表「日東名花」)



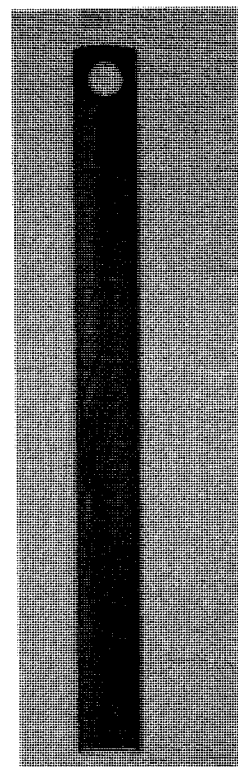
27 柱掛
(宮崎竹坡「薔薇」)と
坂上竹畑(俳句)の合作



26 柱掛
(宮崎竹坡「菊」)と坂上
竹畑(俳句)の合作



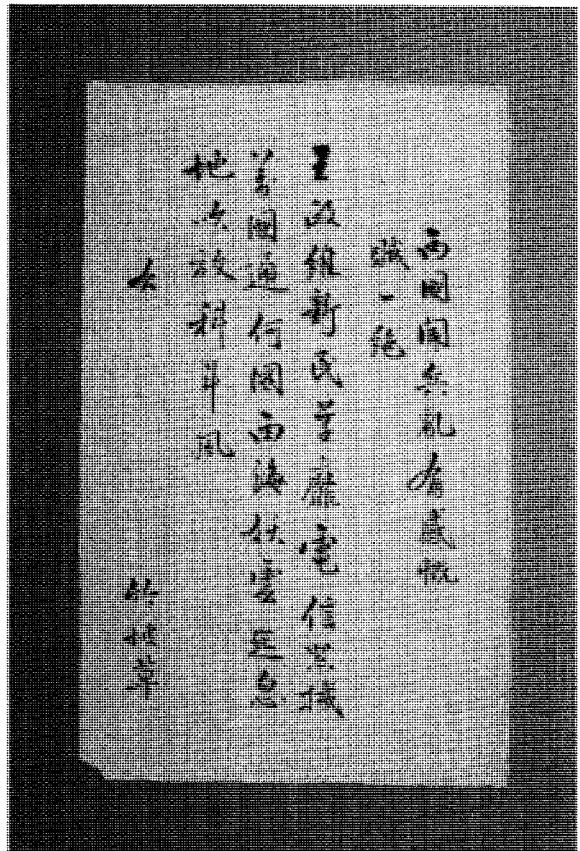
25 「一朵紫雲」



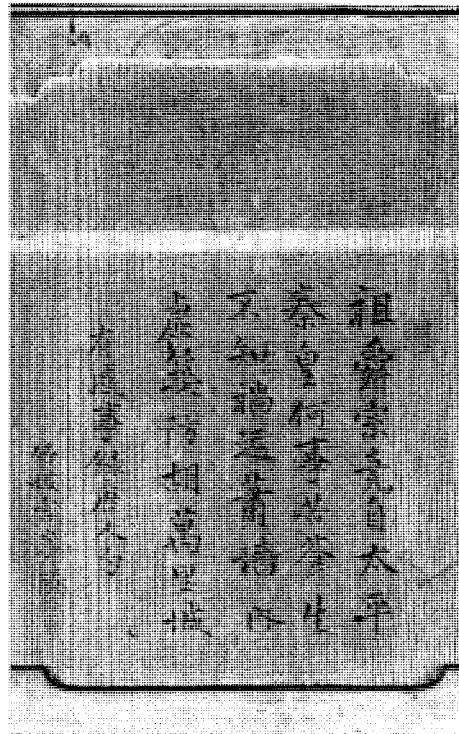
24-2 柱掛
「墨蘭図」(裏)



29 「西国兵乱有感慨一絶」(宮崎竹坡漢詩)



28 「西国兵乱有感慨一絶」(宮崎竹坡漢詩)



30 竹坡愛用の慳食(蓋に竹坡漢詩「万里の長城」)

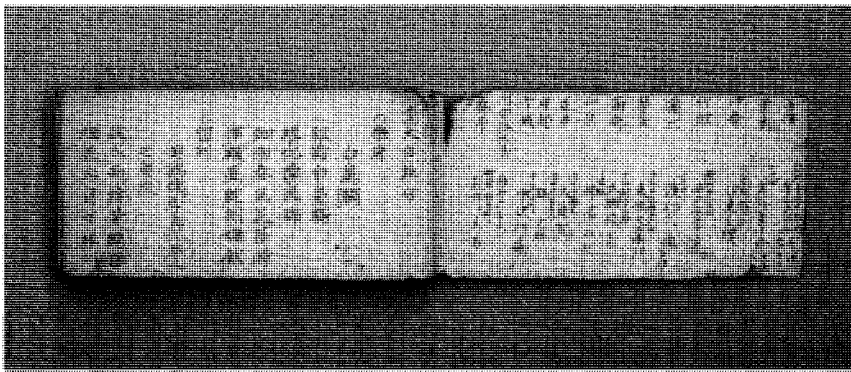
四、竹坡をとりまく人々

最後に竹坡をとりまく人々を簡単に紹介するとともに今後の課題を記してみたい。

高崎の画家・武居梅坡（一八三一—一九〇五）が一八歳の時、両親に無断で竹坡に入門し、数年間の修行後、師の竹坡から教えることは何もないとして、江戸の画家・岡本秋暉（一八〇七—六二）へ推挙してもらい、以後新たな師の指導が受けられたとの有名な挿話が残されている。

高野長英門下の高橋景作（二七九九—一八七五）と交流のあったことを示す資料として、高橋家に遺された画帳のなかに竹坡の作品「カワセミ」が収録されている。また、景作の江戸遊学時代の随筆「詞海漁網」の裏表紙に記された人物名の中に竹坡の名が見えるが、これに拠れば竹坡が高野長英私塾・大観堂のあつた江戸麹町・甲斐坂に住居していたことがわかる。

竹坡が画の手ほどきを誰に受けたのかは現在では全くわかっていないが、竹坡が岡本秋暉と交流があつたことは前述の挿話が物語っている。岡本秋暉が渡辺崋山に教えを受け、



高橋景作随筆「詞海漁網」

沈南蘋など明清の画風にならった花鳥画を得意としているところをみても、竹坡も江戸に遊学し、同様な手習いを受けたことは十分に考えられる。

晩年を過ごした中之条町の田中家には、竹坡が四万の画家・宮崎醉山（二七七七—一八六〇）が安政六年（一八五九）に中之条町で開いた「名残雅会」に招待されたとのエピソードが伝えられている。また、中之条町出身の画家・千輝玉斎（一七九〇—一八七二）や柿沼山岳（一七七四—一八五九）門下・小板橋吾卓（生没年不詳／伊勢町）等の作品が同家に保管されていることから、竹坡が同世代・同郷の画家たちとお互いに影響し合う間柄にあり、結び付きがあつたことなども想像される。結局のところ、弟子は武居梅坡以外には見当たらないが、竹坡には長男・千矛のほか二男彦克（号は霞邨）、三男竹堤がいて、その作品が田中家に残されていることから竹坡に画の手ほどきを受けたものと思われる。草津町の宮崎家に残されていた宮崎竹坡の肖像画には「宮崎竹坡先生八十の歳像」とあり、描いた萬松齋は七〇歳であつたことがわかり、あるいは竹坡の弟子であつたかもしれないが詳細は今のところ全く掴めていない。

竹坡についてはその経歴に謎の部分があり、時代も経過していることから、今後、解明されることはますます少なくなることが予想されるが、吾妻郡内に埋もれているであろう竹坡作品の発見に気をとめ、その解明に役立てることが今後の課題と考えられる。

原稿執筆にあたり、田中宏宜氏はじめ多くの方からご教示を受けたことに感謝申し上げます。



宮崎家墓誌（草津町）

（参考・引用文献）

- 『六合村誌』（六合村誌編集委員会）、『群馬県姓氏家系大辞典』（角川書店）、『群馬県百科事典』（上毛新聞社）、『高野長英門下 吾妻の蘭学者たち』（金井幸佐久著）、『高橋景作日記』（高橋景作日記刊行会）、『中之条町歴史民俗資料館常設展示解説図録』（中之条町歴史民俗資料館）、『温泉草津史料第一巻』（中沢温泉研究所）、『群馬人国記』（歴史図書社）、『群馬の医史』（群馬県医師会）、『国史大辞典』（吉川弘文館）、『上毛南画史』（加部進）、『飯塚久敏と良寛』（高木明著）、『幕末の文人画家千輝玉斎』（玉村町歴史資料館）、『上毛古書解題』（篠木弘明著）、『山岳岱岳遺墨集』（山岳岱岳遺墨展開催準備会）、『特別展群馬の絵画一世紀―江戸から昭和まで』（高崎タワー美術館）、『草津温泉史』（萩原進著）

四 近代

(吾妻郡草津村)

吾妻郡役所

明治三十三年の六合村の成立

知事[㊟]代理

議事係[㊟]

[㊟]

参事官[㊟]

兵事係[㊟]

[㊟]

第三課長[㊟]

学務係[㊟]

[㊟]

吾妻郡草津村廃止草津町、六合村新置ノ件告示等伺

群馬県告示第百四号

明治二十一年四月法律第一号町村制第四条ニ依リ

明治三十三年七月一日限り、吾妻郡草津村ヲ廃シ

大字草津村、前口村ノ区域ヲ以テ草津町ヲ置キ

大字入山村、生須村、小雨村、太子村、赤岩村

日影村ノ区域ヲ以テ六合村ヲ置ク

年六月廿八日

知事名

(右告示ハ来ル廿八日迄ニ号外発布ノコトアルトキハ併セテ

公示シ、号外発布ナケレハ同廿九日発表(定日)発刊シ可然哉

訓令乙第六七一号

其郡草津村(草津村訓令ニハ「其村」ヲ廃シ
大字草津村、前口ノ区域ヲ以テ草津町ヲ置キ、大字入山村、
生須村、小雨村、太子村、赤岩村、日影村ノ区域ヲ以テ
六合村ヲ置クノ件、今般内務大臣ノ許可ヲ得タルニ依リ
本年七月一日配置施行候条此旨 予メ心得ヘシ 知事名

訓令乙第六七三号

吾妻郡役所

本年七月一日現在、其郡草津町、六合村

人口必要有之候条両町村事務取扱

者ヲシテ明治三十一年時、内閣訓令第一号

統計表式第一号及第三号

ニ依リ調製セシメ同月五日迄ニ申報スヘシ

年 月 日

知事名

群馬県告示第百三二号

吾妻郡草津町、六合村役場位置 左記ノ通定ム

年 六月二十八日

知事名

草津町大字草津字西町四百七番地

六合村大字小雨字金蔵沢四百十一番地

(右告示ノ時期廃置告示ニ同シ)

第一二二號

明治卅三年六月十八日

癸六月十八日
鎗居 庸

内務部長

課長 係

知事

吾妻郡草津村ヲ廢シ、草津町、六合村

ヲ置ク件、裏々内務大臣ノ許可ヲ得候ニ

付施行時期等ニ関シ取調候処、郡役所

村役場等ニ於テハ、七月一日ヨリ御施行

相成度希望ニ有之、且準備上等不都合

無之二付、右期日ヨリ御施行相成可然哉

右御決裁ノ上ハ左案ヲ以テ中之条区裁

判所、中之条稅務署へ通知シ置キ候様

致シ度仰御裁候

中之条区裁判所

宛 県名

中之条稅務署

管下吾妻郡草津町(村カ)廢シ、大字草津村

同前口村ノ区域ヲ以テ草津町ヲ置キ、大字入

山村、同小雨村、同生須村、同赤岩村、同日影村

同太子村ノ区域ヲ以テ六合村ヲ置クノ件 今般内

務大臣ノ許可ヲ得候ニ依リ、來ル七月一日廢置
施行ノ見込ニ有之候条、予メ及御通知候也

追テ本件へ未タ公然發表セナルモノニ有
之候条、御含置相成度此如申添候也

議案七二號

明治三十三年 県參事會議決

町村分割議案 三月二十七日

吾妻郡草津村分割ノ件關係村會

及郡參事會ノ意見ヲ徵セシニ別紙ノ通

何レモ異議ナキニ依リ左ノ通り分割セントス

明治三十三年三月二十七日

群馬県知事 古莊嘉門

分村区域

甲町 大字草津村、前口村

乙村 大字小雨村、生須村、入山村、太子村、

赤岩村、日影村

本月二十日議第六六号ヲ以テ諮問セラレタル本村

分割之件ハ數年來全村之興望ニシテ

既に明治二十二年町村制實施以來建議請

願ヲ繼續シ昨年四月村會一致之決議ヲ

以テ意見胃具申致置候ニ付本件ノ義ハ

異論無之旨滿場一致之賛成ヲ表シ候条

別紙議事録写 相添此段答申仕候也

吾妻郡草津村會議長 中澤藤衛

明治三十三年三月二十三日

群馬県参事会

群馬県知事 古莊嘉門殿

議事録写

明治三十三年三月二十三日 村会開設ス

出席議員拾三名

一番 富澤慶太郎

二番 市川善三郎

三番 山田弥惣治

八番 関 五一郎

七番 市川久三郎

拾五番 羽田 五郎

拾番 本多茂十郎

四番 湯本柳三郎

九番 中澤市郎治

拾四番 山田建治郎

拾壹番 篠原祐太郎

拾三番 萩原助四郎

議長拾六番中澤 藤衛

同日午後三時 開会

議長 本日ハ兼テ希望タル本村分離ニ関シ

本県参事会ヨリ諮問ニ付意見答申之

件ヲ付議ス

二番 本件ニ付イテハ諮問ノ通り本員ハ決シ

テ異議ナシ

之二同意者 一番 三番 七番 拾三番

議長 採決 二番説ニ同意者ハ挙手ヲ願マス

挙手全員 以テ之ニ決ス

議長 就テハ左ノ意見書ヲ起草セリ 宜敷

審議アリタシ

本月二十日付議第六六号ヲ以テ諮問セラレタル

本村分割之件ハ数年来全村之與望ニシテ

既ニ明治二十二年町村制実施以来建議請

願ヲ継続シ昨年四月村会一致之決議

ヲ以テ意見書具申致置候ニ付本件之

議ハ異議無之旨満場一致之賛成ヲ表

シ候条別紙議事録写相添此段答申

仕候也

吾妻郡草津村会議長

明治三十三年三月二十三日 中澤 藤衛 印

群馬県参事会

群馬県知事 古莊嘉門 殿

甲第一二七号

本村分割之件 御諮問ニ付本月二十三日

村会ヲ招集シ右諮問候処別紙ノ通り

異議無之旨議決相成候ニ付意見答
申書及進達候也

吾妻郡草津村

明治三十三年三月二十三日 村長 中澤藤衛 印
群馬県知事 古莊嘉門 殿

内務省許申第四九号

(応供覽 明治三十三年五月十八日

庶務第五四号 稟請 群馬県吾妻郡

草津村ヲ廢シ、大字草津村及前口村ヲ以テ草津町ヲ
置キ、大字小雨村、生須村、入山村、太子村、赤岩
村及日影村ヲ以テ六合村ヲ置クノ件
右、町村制第四条ニ依リ之ヲ許可ス

明治三十三年五月三十日

知事 函

部長代理 函

内務大臣 侯爵 西郷從道

課長 函

参事官

草津村、分離ノ件 既ニ 県参事会ニ於テ議決相成候ニ付、制第四條
依リ内務大臣、許可ヲ受クル件、左按ヲ以テ

上申可然乎

縣下 吾妻郡草津村、明治二十二年

町村制施行ニ際シ旧八ヶ村を合

併シテ、一村を組織シタルモノナリト雖モ
大字草津村及前口村ハ他六ヶ村ト

著シク、其の地勢、人情、風俗を異ニスル
ヲ以テ、随テ諸般ノ行政上、彼此、利害

關係、相同ジカラス、延テ村治ノ發達ヲ
企画シ、住民ノ幸福ヲ増進ニスルコト

能ハサルノ嫌アルハ常ニ遺憾トセル所ナリ
而シテ、今回村会ニ於テ全会一致ヲ

以テ本村大字草津村及大字前口村
ヲ草津町ト称シ大字小雨村外大字

五ヶ村ヲ六合村ト称シ両町村分割
セントスルノ意見上申候ニ付、熟々之

レヲ町村制施行以來ノ終歴ニ徴スルニ
本村ヲ分離シテ両町村トスルハ、最モ適

応ノ処置ニシテ且ツ之レカ為兩町村ノ
獨立維持、敢テ困難ニアラサルヲ認め、

之ヲ縣参事会ニ附議セシニ、亦全会
一致ヲ以テ之レヲ可決スルニ至レル次第

ニシテ從來党派軋轢ノ結果又ハ、一時ノ
感情ニ出テタル町村分離問題トハ

全然其の趣ヲ異ニスルモノニシテ、本件
分離の処分ハ此際決行ノ外ナキモノト

認め候條、至急御詮議、相成度、別紙取調

書等添付此段及稟請候也

年月日

追テ大字小雨村外大字五ヶ村、六合村

ト称セントスル義ハ、著名ノ山川名

或ハ古来ノ郷名等適當ノモノニ無之ニ

依リ大字六ヶ村ヲ合セタルニ取り候

モノニ付、右ニ御了知置、相成度、

此段申添候也

内務大臣 宛

知事名

甲第二七五号

当草津村ハ明治二十二年自治制実施以前ニアリテハ大字

草津村大字前口村ノ二大字ヲ連合役場区域トシ大字小雨村同入山村同

生須村同赤岩村同日影村同太子村ノ六大字ヲ以テ連合役場区域タリシカ

町村制実施当初ニ於テ此ニ連合ヲ合併シテ一ノ自治区トシ将来利害得失

ノ可否御諮問相成タルノ当時ハ地形ノ不便風土民情ノ差異ヨリシテ一

団体トシテ結合シ能ハサルヲ憂慮セシモ制度ノ改革、社会ノ進歩ニ随ヒ

多額ノ費用ヲ要シ到底薄費ノ村民負担ニ堪ヘサルヲ恐レ止ムナク官庁ノ

御諮問ニ応答シ自治区ヲ組織セシモ 第一回ノ村会ニ於テ早既ニ将来団

結シ能ハサルヲ覚悟シ全会一致ヲ以テ旧役場区域ノ如クニヶ町村ニ分離

セラレントヲ建議シ尔来年々建議 請願等ヲ継続シ来タルモ終ニ其目

的ヲ達セス一同憂慮ニ堪ヘサルモ前陣ノ如キ不便不利年一年ニ甚シキヲ

加ヘ漸ク村治ノ円滑ヲ欠カントスルニ至レリ加フルニ本年七月ハ改正条

約実施ノ期ニ迫リ大字草津ハ全国有名ノ鉱泉地ニシテ閑雅幽静嵐氣清澄
ノ境ナルニヨリ一層外人ノ来リ遊フモノ多キハ従来ノ状況ニ照シテ明
カナリ故ニ大字草津ニ限り此際更ニ面目ヲ改新シ雑居ノ準備ヲ期セサル
ヲ得ス斯ノ如クナレハ他ノ大字村ト万般ノ事情ヲ異ニシ到底将来同一ノ
自治団体トシテ結合ヲ期シ難キモノナレハ町村制第四条ニヨリ左記ニヶ
二分村ノ義御処理相成度別紙参考調査書相添ヘ制第三十五条ニ依リ
此段意見書具申仕候也

明治二十二年五月三日

吾妻郡草津村会議長

草津村長

中澤藤衛 印

群馬県知事

古莊嘉門 殿

甲町

大字草津村 前口村

乙村

大字小雨村 大字生須村 大字入山村 大字太子村

大字赤岩村 大字日影村

草津村分割ニ関スル事實理由

本村ハ郡ノ西北隅ニ位シ東西五里余南北七里ニ亘リ 草津 前口 入
山 生須 太子 小雨 日影 赤岩ノ八大字ヨリ成レル大村ニシテ 山
岳起伏の間民家点在シ其数五百六拾有戸ヲ算ス 之ヲ以テ村役場ヨリ最
遠民家ニ至ル其距離殆ント三里ノ上ニ出ツルモノアリ以テ区域ノ広潤ナ

ルヲ知ルベシ 而シテ大字草津及前口村ヲ除キ入山以下五大字人民ハ概
 農桑ヲ主トシ林産物ノ製作ニ勉ムルノ他殆ント業務ノ執ルヘキナシ 之
 ヲ以テ其性質自カラ淳朴粗野生計ノ高カラサル知ルヘキナリ 中ニ介シ
 テ特ニ異彩アルヲ大字草津村トス 大廈高楼雲ニ聳ヘ浴客常ニ二十五万ヲ
 以テ数フ 実ニ全国有数ノ鉱泉場タリ 故ニ業務ノ相違スル所自カラ其
 俗ヲ異ニシ人民ハ概華美ニシテ驕奢ノ風アリ 其農桑ニ衣食スル如キハ
 之ヲ求ムルモ得ヘカラス 即チ八大字ハ山岳重疊ノ裡ニ位スト雖モ自ラ
 別乾坤ヲ成セルヲ以テ之ヲ前者ト同一団体ニ混和セントスル固ヨリ柄鑿
 ヲ免レサルヲ信ス然ルニ明治廿二年町村制実施ニ際シテ是等八大字ヲ以
 テ一村ヲ形成セシメラレタルモ当時人民ニ於テ甚シキ異論ナカリシハ蓋
 シ自治制創設ノ際 曾テ經驗ナキノ然ラシムル所タルノミ爾來星霜ヲ經
 ルニ隨ヒ年一年と其不便利ヲ感シ漸ク其親和ヲ歛カントスル傾向ヲ生
 シ前年来數回分離ノ義ヲ当路ニ請願セシコトアリト雖モ當時不幸ニシテ
 尚ホ容ル所トナラス復タ大字草津村ハ別ニ財産区ヲ設ケ之カ經營ヲ盡ス
 ト雖モ一財産区ノ業務ニ委スル如キハ到底満足ナル發達ヲ望ム能ハサル
 ナリ

- | | | |
|-----|-------|-------|
| 甲 町 | 大字草津村 | 大字前口村 |
| 乙 村 | 大字小雨村 | 大字生須村 |
| | 大字赤岩村 | 大字日影村 |
| | | 大字入山村 |
| | | 大字太子村 |

熟ラ按スル本村ヲシテ充分ニ発達セントスルニハ之ヲ分割シテ二ヶ町村ト為すカ或ハ一部を他町村ニ合併セシムルニアルモ其人情風俗ニ於ケル地理上ノ關係ニ於ケル共ニ他町村ニ合併セシムルヲ得サルハ明瞭ノコトナリトス 蓋シ本村分割ノ要ハ専ラ大字草津村ノ地理人情風俗ノ關係其他財産上ノ異動ニ因レルモノナルモ大字前口村ハ從來草津温泉ノ要路ニ當リ縣道之ヲ貫通シ恰も唇齒輔車ノ關係ヲ有シ自カラ一村ヲ形成セシムルニ足ルベキ区画ヲ存セルを以テ之ヲ附シ他ノ六大字ヲ以テ別ニ一村ヲ形成シ前記甲乙二ヶ村ニ分割スルノ外途ナキナリ 依テ更ニ其沿革ヲ考フルニ維新前ハ大字草津村名主役元ニテ大字小雨前口 生須村ヲ兼テ大字□□太子村ハ大字日影村ト一村タリ其他ノ大字ハ各單獨ナリシカ明治初年大区ノ制ヲ置カレタルトキ此ハ大字村ハ纏メテ一小区ニ編入セラレ次テ明治十二年郡區編成法ニヨリ大字草津村ハ大字前口村ト聯合シ大字入山村ノミ獨立セシカ幾千モナクシテ大字小雨村ニ聯合シ大字小雨村ハ大字赤岩村 生須村 日影村 太子村ト聯合シ廿二年ニ至リテ再ヒ是等八大字ヲ合シテ草津村ト為シタルモノナルカ故ニ寧口現時ノ山区制ニ比シ聯合當町ノ勝レルヲ信スルナリ役テ地形圖ノ外更ニ資力ニ關スル左ノ諸表ヲ添付シ聊カ 参照ニ資セントス

一 土地人口表

二 草津村歳入出決算表

三 草津區歳入出決算表

四 甲町歳入出算見込額表

五 乙村歳入出算見込額表

六 草津村會議事録写

行政

一 六合村章の制定

制定 昭和四十八年五月二十五日

「六合」の二字を図案化したもので、未来に向かって大きくはばたく六合村の姿を表している。



二 村政

○ 基幹集落センターの建設

明治二十二年市町村制が実施され、大字草津村外で草津村になりましたが、生活習慣その他諸々の事情によって、明治三十三年七月一日草津村から分離して、六合村が誕生しました。役場は小雨四一番地に設置（現在のAコープ附近）し、村長、助役、収入役と職員は一名で発足した。

昭和十一年十一月小雨五五一番地（現在の六合小学校校庭の一部）に木造二階建の役場庁舎が改築落成、村長他三役と職員は三名程であった。戦前、戦後を通じて三八年を経過、老朽化と年々増加する業務によって手狭となり、増改築を何度か行われ他町村では、新庁舎が次々と建設され始めた。

昭和四十八年指定の第二期山村振興計画の山村地域農林業特別対策として、教育、道路、生活環境の整備、農業振興事業をはじめ、人口の規模によって集合施設として国の承認を受け基幹集落センターの建設も認められた。

基幹集落センターの建設に当っては、役場だけでなく六合村農業協同組合も関係して計画を開始した。

建設委員会を発足させ、委員長に六合村議会議長の山田松雄氏が当たった。

土地の選定については、小雨の市川義夫氏に役場の道路を挟んだ一等地の畑で、小雨五七七番地の一面積二、七〇〇平方メートルを提供して

もらい、賃貸借契約をした。

設計は、五社の応募の中から、前橋市の塩崎建築設計事務所を選定して設計を実施した。

建物の内容は、半地下、地上二階の鉄筋コンクリート造り、床面積、一階六八六平方メートル(役場庁舎)二階六一八平方メートル(役場庁舎・四八七平方メートル 農協庁舎・一三二平方メートル)三階六二七平方メートル(基幹集落センター)総面積一、九三九平方メートル、地階は、会議室、書庫、倉庫等、二階は役場事務室、農協事務室、売店、基幹集落センターへの階段、三階は基幹集落センター大小各会議室の間取りとした。

三階の基幹集落センターが山村振興事業として認められ、役場庁舎、農協庁舎を合わせた、一体化の建物として総合庁舎として建設が決定した。

九月には役場庁舎、農協庁舎分が指名競争入札が行われたが不落となり、九月十八日補正予算を組んで最低入札者の吾妻町の南波建設株式会社と一億五、三〇〇万円で契約が成立し、十月八日には、地鎮祭並びに起工式が行われた。

当時オイルショックの影響で、建設資材は不足し、物価の高騰で大変な事態となり財源の不足は村有林の一部を売却せざるを得なくなった。

工事は、例年に無い寒気と、積雪に悩まされながらも、安全第一、早期完成に向け進められた。

補助対象事業の基幹集落センターの設置は、四月二十二日役場庁舎との関連で、事業費三、九七四万一、〇〇〇円を議会で議決され、南波建設と随意契約をした。

塩崎建築設計事務所との設計監理委託は、六五六万円で契約し、総合庁舎の新築には、村内外の多くの皆さん方の絶大なるご協力によって、昭和四十九年九月二十五日秋晴れの好天気にも恵まれて、庁舎屋上に於いて、来賓、関係者約二三名のご列席のもと、盛大に落成式が挙行された。

《建築概要》

- ・ 設計監理 塩崎建築設計事務所
- ・ 施工 南波建設株式会社
- ・ 工期 昭和四十八年十月一日～昭和四十九年八月三十一日
- ・ 建築費 一億五、三〇〇万円

- ・ 附帯工事 一、二四〇万円(一般財源)
- ・ 備品購入費 八八〇万円(一般財源)
- ・ 建築床面積 役場庁舎(一階 六六六㎡ 二階 四八七㎡ 三㎡)
- ・ 農協庁舎(二階 一三一・二二㎡)
- ・ 基幹集落センター(三階 六二七・〇三㎡ PH 二七・〇九㎡)

(延床面積 一、五九五、三〇㎡)

構造 鉄筋コンクリート造、アスファルト防水コンクリート
陸天屋根



基幹集落センター

○ 村制施行八十周年記念事業

昭和五十五年は六合村が分村して八十周年になる。村では八十周年にもわたる長き村制を記念して昭和五十五年十一月二十八日に式典を行った。

記念事業として、功労者表彰、感謝状贈呈、村民憲章、村の歌、村の花、鳥、木、村三景の制定や作文の募集を実施。アトラクションとして、陸上自衛隊第十二師団音楽隊による村の歌の発表、婦人会による六合よいとか音頭の踊りの披露が行われた。

六合村制施行八十周年記念行事実行委員会

- ・ 委員長 篠原秀雄
 - ・ 副委員長 富沢恵秋
 - ・ ” 中村福美
 - ・ ” 山本虔一
- △ 専門部会 △

◇ 褒賞

- ・ 部長 黒岩善一
- ・ 副部長 本多春長
- ・ ” 中沢富士
- 田中金蔵 山口雄平 山本由平
- 高原秀雄 篠原恵太郎 富沢豊
- 山本 保

◇ 村民憲章制定

・ 部長 中沢要平

・ 副部長 湯本喜太郎

山口国次 福島仁一

山口仙之助 山口 昂

茂木 賢 関富士雄

関勘三郎

山本岩次

・ 副部長 市川義夫

・ 湯本栄次郎 関庄太郎 倉林昭三

山本貞男 山本敬一郎 黒岩春夫

黒岩竹松

◇ 村歌策定

・ 部長 中沢定雄

・ 副部長 富沢かん

・ 湯本貞二

山本昭五郎 市川浪二

中沢一孝 山崎とよ

黒岩いち

山本二吉

山本海太郎

◇ 事務局

山本栗岡 湯本省三 萩原与吉

中沢富一 市川今朝彦 富沢虎四郎

安原義治 明田川道雄 篠原正忠

中沢久吉 中沢宏衛

◇ 村の木・花・鳥指定

・ 部長 山口種雄

・ 副部長 中村弘治

・ 安力川正一

加辺秀市 山本 勲

小林四郎 田村 尊

山口宮治郎

萩原長一

川口栄市

○ 六合村制施行八十周年記念式典

日時 昭和五十五年十一月二十八日 午前十時

場所 六合村民体育館

○ 記念式典次第

1 開式のことば 助役 山本栗岡

2 国歌斉唱

3 式辞 村長 篠原秀雄

4 あいさつ 議会議長 富沢恵秋

5 功労者表彰

◇ 村三景指定

・ 部長 山田隆太郎

6 功労者感謝状贈呈

7 村民憲章、村の歌、村の花・鳥・木、村三景、作文入選者発表・表彰

8 受彰者代表あいさつ 功労者 本多春長

9 来賓祝辞

10 祝電披露 教育長 萩原与吉

11 閉式のことば 収入役 湯本省三

アトラクション

六合村の歌・六合よいとこ音頭発表

歌謡メドレー 陸上自衛隊第十二師団音楽隊

六合よいとこ音頭 踊り発表

六合村婦人会

村政功勞者表彰

(順不同 敬称略)

5	4	3	2	1	氏名 生年月日	住所	功績事項
山口 助 大正三年十月二十四日	山田 松雄 明治四十五年二月八日	本多 春長 明治三十八年一月二十五日	福嶋 松次 明治三十四年一月十四日	富沢 虎治郎 明治二十三年九月二十九日			
品木	和光原	長平	小雨	八幡			
村議會議員、議長、村長、 農業委員、民生委員等多くの公職を歴 任し、多年村政発展に貢献	村議會議員、正副議長等多くの公職を 歴任し、多年村政発展に貢献	村議會議員、副議長、村長、 教育長、消防団長、農地委員、 民生委員等多くの公職を歴任し、 村政発展に貢献	村議會議員、議長、助役、村長、 消防団長、農業委員等多くの公職を歴 任し多年村政発展と地方自治振興に貢 献 勲五等受賞	村議會議員、議長、収入役、 助役、村長、教育委員、民生委員等多 くの公職を歴任し、多年村政発展に貢 献			

○ 功 勞 者 感 謝 状 受 賞 者

(受賞者は、昭和五十五年十一月末日で満八〇歳以上の方です。)

山口 小櫻	黒岩喜久蔵	霜田 やそ	山田 とら	本多 つる	山本 さか	山本 しか	山本 みや	花沢 つね	山口 やす	山本 きさ	篠原 つな	倉林 しげ	篠原 鶴吉	篠原留十郎	湯本友十郎	関 才次郎	山本 孝吉	宮田 エノ	安力川喜作	富沢虎治郎	萩原 げん	小林 わか	熊川卯三郎	中沢 あき	市川 かく	武藤 きく
80	81	82	82	80	88	86	81	81	85	83	86	87	81	85	89	81	86	81	83	90	83	86	89	88	81	84
小倉	根 広	根 広	和光原	和光原	引 沼	引 沼	引 沼	引 沼	田代原	梨 木	広 池	広 池	赤 岩	赤 岩	赤 岩	赤 岩	下 沢	下 沢	湯久保	八 幡	八 幡	太 子	鍛治坂	沼 尾	小 雨	小 雨
山口岩治郎	黒岩 いそ	霜田 彦造	山崎 とよ	山本 みち	山本 まつ	山本 中助	山本 ふで	山本貞次郎	関 たま	山本 あい	篠原 芳平	篠原 富次	山本 とめ	富沢 アサ	安原和二郎	安原 義雄	湯本 よし	山本 忠司	橋爪 げん	富沢 りう	岡部 豊一	富沢 とく	篠原 たき	福島 こう	黒岩 あて	市川 ぢう
88	81	83	80	88	80	81	82	82	84	83	81	80	83	81	86	81	80	80	82	87	80	82	80	91	83	80
小倉	根 広	根 広	長 平	和光原	引 沼	引 沼	引 沼	引 沼	世 立	田代原	広 池	広 池	広 池	赤 岩	赤 岩	赤 岩	赤 岩	下 沢	中 組	八 幡	八 幡	太 子	太 子	沼 尾	生 須	小 雨

作 品 入 選 者 表 彰

村三景	村の鳥	村の花	村の木	音頭	村歌	村民憲章	部門
” ” ” ” 入選	” ” 入選	” ” 入選	” ” 入選	” 佳作 入選	” 佳作 入選	” ” 佳作	賞
山本美幸 篠原文子 篠原朝夫 星野豊作 霜田文雄	山本元信 山田幾久 富沢近泰	中村三千郎 湯本聰子 中沢 清	山口さと子 福島政雄 山本三男	関 常男 市川安江 片貝俊郎	市川昭次郎 吉岡敬一郎 片貝俊郎	中沢いし 安原義治 黒岩 勇	氏名
下 沢 ” 広 池 小 雨 根 広	引 沼 和光原 八 幡	根 広 赤 岩 生 須	引 沼 小 雨 京 塚	赤 岩 小 雨 吾 妻 町	吾 妻 町 生 須 高 崎 市	生 須 赤 岩 生 須	住所

感謝状 日本コンロンビア株式会社

○ 村の花・鳥・木 昭和五十五年十一月二十八日制定

花 れんげつつじ 燃えるような朱色の美しい花で、野反湖を中

心に、村内一円に自生している。

鳥 やまどり 深山幽谷な地形を好み、村内に多く生息し容

姿佳麗な鳥。

木 あかまつ 村の広範囲に繁茂し、力強く大地に根を張り

四季を通じ緑で優雅な景観をつくっている。

○ 六合三景

野反湖

周囲一二km、標高一、五二四mの高山湖で、訪れる人々に自然の雄
大さと、美しさを十分に楽しませてくれます。特に湖畔をうめるれ
んげつつじはすばらしい。

横手山・芳ヶ平

横手山頂二、三〇四mから三六〇度の展望は、上信越高原国立公園
随一の景観で原生林から一步下がった芳ヶ平は、池塘が点在する湿
原で高山植物の宝庫です。

暮坂高原

赤松・落葉樹・広葉樹に囲まれた暮坂峠には、旅の歌人、若山牧
水の「枯野の旅」の詩碑がある。

○ 六合村の歌

吉岡 敬一郎作詞・團 伊久摩作曲
石本 美由起補作・佐伯 亮 編曲
歌 三鷹 淳

一 横手の山や 八間の
ふもとに集う 里の屋根

愛と和の 歴史をつたえ
明日へながれる 白砂川よ

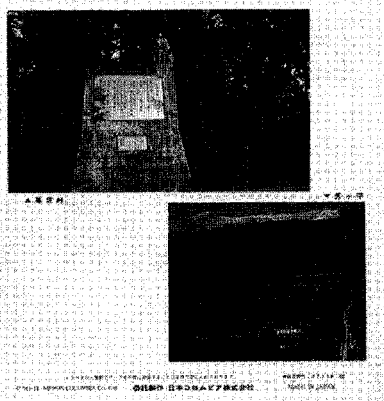
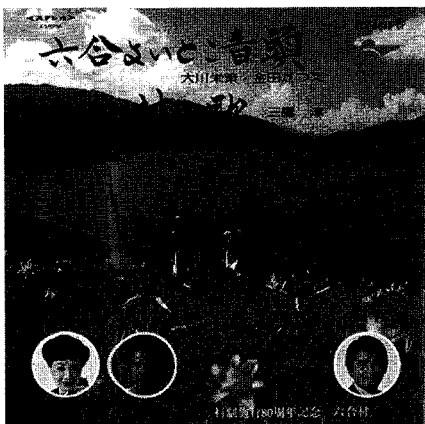
あゝこの恵み この暮らし
六合に吾れらの 喜びがある

二 空より碧い 野反湖の

水にも秘める 永遠の夢
生産の 力をあわせ

汗の尊さ たしかめあおう
あゝこの誇り この郷土
六合に吾れらの 幸せがある

三 根を張り繁る 赤松の



姿を誰か見習わん

いつの日も 希望を呼んで

ともに求める 文化の光り

あゝこの歩み この若さ

六合に吾れらの 行く道がある

○ 六合よいとこ音頭

片貝 俊郎作詞・和田 香苗作曲・編曲

石本美由起補作詞

歌 大川 栄作・金田 たつえ

一 春の六合なら 牧水コース サテ

風と小鳥が ガイドする

こだま嬉しい 暮坂ゆけば

アリアアリアアリア

山のわらびも 顔を出す ソレ

(囃) 六合はよいよい よいとこ音頭

あーちゃあ 一緒に唄おうよ

あーちゃあ みんなで 踊ろうよ

二 夏の六合なら 野反湖キャンプ サテ

水とみどりの 色模様

地図を ひろげて コースを決めて

アリアアリアアリア

若い仲間は ハイキング ソレ

三 秋の六合なら まつりの太鼓 サテ

天地四方へ 冴えわたる

あの娘 年ごろ 紅葉は見ごろ

アリアアリアアリア

人に見せたい ものばかり ソレ

四 冬の六合なら スケート スキー サテ

温泉 泊りの なじみ客

夢の夜語り 囲炉裏も更けて

アリアアリアアリア

胸に つもるは なんの雪 ソレ

五 六合の四季なら ゆたかな自然 サテ

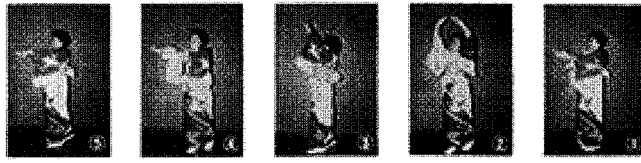
伸びて赤松 葉も繁る

今も昔も 他国の人へ

アリアアリアアリア

道をおしえる 道祖神 ソレ

PES-8033-CP



六合よいと二音頭
「舞」 藤原 保夫

一、舞の舞を作り、反時計回りの方向に振り込みます。
脚を八時位置に置き、時計回りの方向を向いて舞ります。

二、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第一拍）

三、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第二拍）

四、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第三拍）

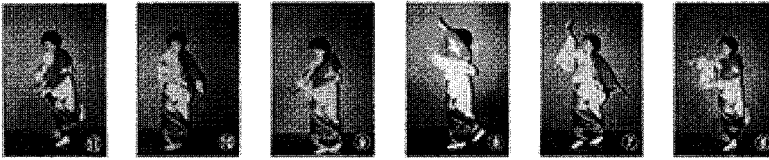
五、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第四拍）

六、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第五拍）

七、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第六拍）

八、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第七拍）

九、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第八拍）



十、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第九拍）

十一、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第十拍）

十二、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第十一拍）

十三、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第十二拍）

十四、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第十三拍）

十五、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第十四拍）

十六、舞の舞
手を伸ばし、足を踏み出す。
（第十五拍）

ニッポンコロムビア Co., Ltd. 愛知製作 日本コロムビア株式会社
6-5

PES-8033-CP

六合村の歌

吉岡 敬一郎 作詞
石本 美由起 作曲
岡 伊玖磨 作編曲
佐伯 亮 編曲

musical score for 'Rokkoku no Uta' with lyrics in Japanese and musical notation including dynamics like *mf*, *mp*, *crescendo*, *fz*, *f*, and *ff*.

よそね ころは てのり やあし まおげ やいある はのあ ちぞか けりま んのこ ののの ふみす もにた にもを つひだ どもれ うるが

さどま ののら やゆわ ねめん あせい どのの わんひ ののも れちき しかば ををを つあよ たわん えせて

あせも へのに なども がうと れども るさる したぶ らしか なめの があひ わおか ようり あああ あああ

ののの めほあ ぐこゆ みりみ ののの くおか らうか しどき くにに くにに

ににに わわれ ららら ののの よしゆ るあく びせち ががが あああ えるる

PES-8033-CP

六合よいとこ音頭

片貝 俊郎 作詩
石本美由起 補作
和田香苗 作編曲

The musical score is written in G major and 4/4 time. It consists of four staves of music with lyrics underneath. The lyrics are: はるのーくになら ぼくすいーこー ス かぜーと
ーことりが ガイドーすー る こだまう れー しーい
くれさかーゆけー ば やまのわらびも かおそだす くにはよいよい
よいこおんど あちあいつしにうたおうよ あちあみんなて おどろうよ

○ 私たちの六合村 作文募集入賞作品

優秀作 「だいすきなくにむら」

六合小学校一年 なかばやしひろゆき

ぼくは、くにむらに うまれたから くにむらが だいすきだ。

山と木が たくさん あつていい。

はつばが こうようして とつてもきれいだ。しらすな川もながれていて あかい大きいはしもある。

「水がつめたくつておいしい。」つて まえばしの たかしくんがいった。

おじいさんのことものときには、がつこうは、六ねんまでしかなかつた。がつこうへ あんまり いかない人もあつたんだつて おじいさんが、はなしてくれた。

ラジオも テレビもなくて、しばいを見るのが たのしかったんだつて。むかしのこどもは、なにをして あそんでいたのかな。

でんきもなくて らんぷでくらししていたんだつて。らんぷの中のせきゆは、ながのはらまであるいて かいにいったんだつて。そのらんぷは、いまもだいじに しまつてある。ぼくは、くらかつたらうなと おもつた。

むかしは、おおしまで き車がおつていてよかつたらうな。いまはほそどうろで、バスがとおつているけど き車があれば なおいいな くにむらに はいしやさんがあればいいな。ぼくは、はいしやさんにながのはらまでいくので いやになる。

一ねんせいは七人だけで もつともつと人がふえればいいな。そしてがつこうもあたらしくなるといいな。

優秀作 「こうなつたらいいなあ」

南小学校二年 富沢 みさき

学校をたてなおしたいなあ。いまは、木でできているけど、こんどはコンクリートでできればいいなあ。戸も、あたらしくしたいなあ。それから学校のたいいくごやがきれいになればいいなあ。いまは、あながあいているけど、もつといい戸になればいいなあ。学校のわがひろくなればいいなあ。そうごうぐらんどぐらいのにわがほしい。そんなにわができればもつとあそびどろぐがほしいなあ。いちばんほしいのは、メリーゴーランドがほしいなあ。もつと花だんがひろくなればいいなあ。その花だんに花がいつばいさけばいいなあ。もつとせいとがいつばいければいいなあ。そのためにははたらくところがあつていつばい人がひっこしてくればふえるだらうな。

優秀作 「六合村に生まれて」

入山小学校長平分校三年 山崎 英之

ぼくの生まれたぶらくは、小倉というぶらくです。そこには、しだれざくらという、すごくふとく 春になると いつばいざくらの花をさか

せる木があります。

ほかにも、いろいろなところがあります。たとえば、白砂溪谷や、芳ヶ平のワタスゲや、南大橋に、県指定天然記念物のしだれぐりに、ほかにも、いろいろなところがあります。ゆうめいなところは、若山牧水のたつていくれさかと、野ざりこです。

ほかにも、たいへんめずらしいおんせんがあります。このおんせんはかたこりやしんけいつうに、よくきいて、いっぱい人がきます。

こういう、いろいろなところがあるので、六合村に、いっぱい人がくるのだとおもいます。

ぼくの生まれた六合村には、山がいっぱいあります。木もいっぱいあります。

そのおかげで、くつきもきれいで、水はおいしく、そのうえに、いろいろなをとれます。春は、ぜんまいやしいたけ、夏は、あまりありません。秋は、とうもろこしや花いんげんに、まだまだいろいろなものがあります。また、秋は、なんといっても、こうようがきれいです。山々は、赤やきいろに、へんかします。

秋がおわると、たのしみにしていた冬がやってきます。冬は、楽しみなスキーが、できます。家の畑やどうろのさかで、スキーをします。

ぼくの生まれた六合村は、山や木がいっぱいあって、きれいだから、おとなになっても、六合村にすみたいとおもっています。

優秀作 「おじいさんが教えてくれた 世立の伝説」

入山小学校四年 山本 裕二

ぼくは、入山の世立にすんでいる。世立には伝説がいっぱいある。中でも一番知られているのは、けんずり穴だ。

その伝説は、おじいさんから聞いた話だが、じゃとう（へびのでつかいみたいな化け物）が、野反湖からきて、しつぽを入れてから榛名湖へ行ったという話だ。伝説はおじいさんが生まれるずっとまえからの、云いつたえだ。どうしておじいさんが知っているかというところ、おじいさんは、おじいさんのお父さんに教えてもらったという。

けんずり穴のすぐそばに、川が流れている。その川でぼくたちは、とぎどき手づかみで魚とりにする。いる魚は、ヤマメ、イワナだ。

おじいさんは、ほかにもたくさんのお話を知っている。その中には、おそろしいような話もある。それは、キューベータ谷だ。キューベータ谷が、いまのキューベータ谷で魚つりをしていると、二メートルちかくの魚をつりあげた。キューベータさんが、家に帰って魚をほしていたら、魚が「キューベータさらば」といって、川にのびていってしまった。もう一どキューベータ谷に魚つりにいった。そしたら、小さくもがきて、キューベータさんの足に糸をまいて川へと、何とも何ともくもは、おなじことをくりかえした。しばらくすると、キューベータさんは、なにかにひきずりこまれてしまった。人々がいくらかさがしてもみつからなかったそうだ。

ほかにも、伝説はたくさんある。世立だけでなく引沼、和光原、根広いろいろなところに、いろいろな伝説がある。

ぼくのおじいさんは、しゃくしけずりをしている。たまたま町の人が

しゃくしけずりを見学にくる。おじいさんは、しゃくしをけずるところをみせたり、民話や伝説を聞かせたりしている。

おじいさんは、ぼくの血のとまるおまじないを教えてください。言いかたはわすれたが、おじいさんに聞けばすぐわかる。「伝説を聞かせて」というと、すぐに教えてくれる。

こんな伝説を知っているのは、ぼくのおじいさんしかないと思う。そんなおじいさんが、とつてもすぎた。

優秀作 「発展してきた六合村」

六合小学校五年 富沢 功

昔、六合村は、人工的にもめぐまれず、くらしもそれほどよくではなかったそうです。

仕事は、すみしよい、かいこかいなどでした。収入も少なく、とてもたいへんでした。しかし今では、りっぱな 役場、温泉の旅館、村民体育館などができています。これは村長さんをはじめ、たくさんの人々によってつくられた物です。

そのほかに交通の便がよくなりました。道路もほとんど、ほそうされました。だからバス、乗用車、トラック、オートバイなどいろいろな乗り物が通っています。

交通の便がよくなって、観光客が、たくさんくるようになりました。観光の場は、野反湖、白砂山、横手山、芳ヶ平、暮坂峠、白砂ダム、村営ロッジなどです。とくに野反湖などは、観光客のいいの場となつて

います。

六合村の村民は、スポーツにも関心をもっていて大きな総合グラウンドができ、そこでソフト大会や、村民運動会などいろいろなスポーツの行事をしています。

六合村には、他村で見られない事が、いくつもあります。メンパ作りなども、その一つです。メンパは入山の、人がいまは、一人しかのこっていないといわれています。だから六合村の宝といっているくらいです。

しだれぐりなども県指定天然記念物になっていて六合村の宝です。牧水歌碑もそうです。牧水は自然の美しい六合村を愛して、詩や歌を作ったのだと思います。

自然にあふれみちた六合村に三つの小学校があります。六合小学校、入山小学校、六合南小学校です。この三校も百年を歩みました。一口に百年といつてもたくさん年の年月がたっています。

昔は、小学校とはいわず、寺子屋といったそうです。それが今では、りっぱな学校になりいろいろな面がかつやくしています。

これらも発展しつづける六合村、町にもまけないせつ、せつび、文化を、とりいれて文化のすすんだ町といつても、いいくらいの、村にしていきたいと、思います。

優秀作 「移り変わる六合村」

六合南小学校六年 関 豊

ぼくは、十二年前この六合村に生まれ、十二年間この村で生活してき

ました。

しかし、ぼくの覚えがある六合村は、五年ぐらい前までの六合村です。ぼくが生まれる前の六合村は、どんなふうだったのでしょうか。今と昔ではずいぶん変わってきています。昔は、道路がとても悪かったと思います。それに大きな橋ありませんでした。

今はちがいます。大きな橋はそこらじゅうにできて、どこもだいたいほそう道路です。

今は、村営住宅もたくさんできました。ぼくの家の前にも村営住宅ができました。畑を切り開いてつくつたのです。赤岩に、人が増えるのはいいけれど、ぼくはあんまりよくありません。それは、元の形がほとんどこわれていくからです。今までの畑は、もう二度と見られないからです。

昔は、太子に列車が通っていたけれど今は通っていません。とても残念だと思えます。その代わり、国鉄六合山荘というのができました。でもやっぱり列車が通っていてももらいたかったです。六合山荘には、よく老人クラブの人たちが行きます。そこには、温泉があるそうです。

六合村には、数々の観光地があるけれど、野反湖もその一つです。

六月には、野反湖でつつじ祭りが行われます。

夏になると観光客がたくさん来ます。

もうすぐ野反と新潟をつなぐ道ができるそうです。

その道が完成すれば新潟まですぐに行けるので便利になると思えます。

ぼくたちが遠足や、どこかへ行くと、あっちの方の人たちは、ぼくのぼうしや、むねの名ふだを見てたいがい

「ろくごう村から来たの?。」

と言います。そうすると、ぼくたちは、

「ちがいます。六合村から来たんです。」

と言います。そう言ってもあっちの人たちはパツとこないような顔をし

ます。

ぼくにも六合という字がくと読むなんてふしぎに思います。知らない人が、ろくごうと読んでもおかしくないと思います。

ぼくは、六合村の中で一つだけいやな事があります。それは白砂川に魚がいらないということです。白砂川に魚がいればどんなにいいことかもしれません。

これからどんどん発達していくのはいいけれど、自然をなくさないようにしてもらいたいです。だから自然の所は、そのままにしておいて、そうでない所にいろいろな物をつくってほしいです。

これからの六合村は、人口が増えて、観光地が増えて、観光客が増えて、有名な村になってもらいたいと思います。

優秀作 「私たちの六合村」

六合中学校一年 安原 百代

「あなたの住んでいるところはいいところですか?」と聞かれたら、私は自信を持って答えるでしょう。「六合村は、とてもいいところですよ」って。

その六合村は、六つの村が集まってできました。だから「六合村」と

いうのです。六つの村とは、小雨村・生須村・日影村、それから、赤岩村・太子村・入山村です。

六合村の中心には「須川」という美しい川が流れています。その須川に沿っていくつかの部落が並んでいます。しかし、村の中心を流れる須川は、残念なことに「死の川」なのです。魚は住んでいないし、橋まで溶かしてしまうと言われています。

それは、須川は酸性が強いからです。今は草津で石灰を流しているのです、だいぶ中和されるようになりました。

六合村は、今、毎年のように人口が減っています。中学生になったばかりのころ、社会科の授業で、六合村について調べたことがありました。私は、人口の移り変わりについて調べた班でした。

群馬鉄山があったころは、人口が四千人を越えていました。しかし、現在は、二千五百人足らずになってしまいました。鉄山が閉鎖され、そこで働いていた人たちが、みんな六合村から出ていってしまったからです。

そこで、六合村に、働く場所をつくればいいのじゃないかなと私は思うのです。そうすれば、草津や長野原まで出かなくても、村内で働くことができますから。

役場の人の話によると、これからの六合村は、観光地として栄えてゆくだろうということでした。でも、六合村には美しい場所がたくさんあるのに、草津にみんな行ってしまいうから、草津に負けないような設備を備えればいいと思います。

たとえば、大きなスキー場を造るとか、昔の太子線にSLを走らせるとか、温泉をもっと大規模にするとか、考えればいろいろあると思います

す。

これは私の勝手な考えで、実際にはできないかもしれないけど、六合村には美しい自然や温泉があるのだから、なんとか考えてほしいと思います。

この前、友だちとふざけて、「ネス湖のネッシーじゃないけど野反湖のノッシーでも出ればいいのにな」なんて話し合ったことがありました。六合村が草津から独立して、もう八十年にもなるのだし、まだまだ広い土地があるのだから、もつともつと発展すべきです。

私の故郷の六合村が、これからどのように変わっていくのか解りませんが、美しい自然はなくさないで、もつともつと発展してほしいと思います。

優秀作 「わがふるさと 六合村」

六合中学校二年 富沢 日出夫

六合村が草津から独立して八十年。この八十年の間に、いろいろな人がこの六合村を訪れ、そして去って行った。

無限の時の流れの中では、群馬鉄山の繁栄も、この六合村の八十年の歴史も、ほんの一瞬のできごとである。ぼくはこの八十年のうちたった十四年間だが、この六合村に住んできた。

この十四年間、六合村はいろいろと変わってきた。ぼくの知る範囲で言えば、まず道路が舗装され整備されたことだ。それにモダンな総合庁舎ができた。広い総合グラウンドもできた。六合村はますます立派になっ

ていく。それに反して残念なことは、自然破壊と人口の減少の事実である。

総合グラウンド建設による山の切り崩し。また、道路整備による車の通行の増加と排気ガスによる大気汚染。それによつて草木が死んでいくこと等の問題である。

六合村のよいところは美しい大自然にあるのだから、これは好ましくないと思う。繁栄の陰には必ず「自然破壊」がつきまとうものである。村の繁栄のために自然を捨てるか、自然保護のために村の繁栄を押しやるかの選択を迫られた場合、その両立がむずかしければ、ぼくは後者をとるだろう。

ぼくの考えでは、都会の人々は、どうも人間性に欠けるようである。生活が豊かになり便利になれば、人間は、わがままを言いたくなるし、人間関係もうまういかなくなるようだ。そんなふうになるよりも、人口が少なくてもいい、静かでゆつたりしていて、美しい自然にかこまれて心休まる六合村、そんな村になることをぼくは望んでいるのだ。

先生の話によると、村では「六合」を観光地にしようとしているようだが、ぼくは反対である。そんなことをすれば、車の往来がますます激しくなり、排気ガスによる大気汚染が大きな問題となってくる。そうなれば、美しい木々は枯れはじめだろう。ぼくはこの「六合村」を、富士スバルラインの二の舞をさせたくないのだ。

ぼくにはよくわからないが、自然を破壊しないで人口を多くする方法だつて、きつとあると思う。そのことを、村長さんをはじめ村役場の人達におねがいをして、この作文を終わりにする。

優秀賞 「我が郷土六合村」

入山中三年 山口 由起江

私がこの世に生まれてから十五年間。私は、自然と一緒に育ちました。私の郷土である六合村は、自然に囲まれた美しい村です。私はこんなのだかな村が大好きです。しかし、改めて、今考えてみると、六合村について私はどんな事を知っているというのでしょうか。八十周年という事も今年初めて耳にした事でした。

私たちの学校では、三年前から郷土学習を始めました。この学習のねらいは、自分の郷土について少しでも多くの事を知り、村の歴史や色々な問題について、生徒自身で調べ、研究するという事です。私もこの学習を三年間やってきて、やつとおもしろさというものがわかってきました。と同時に、私たちの上にふりかかってくるたくさんの問題は、どう解決すべきなのかということを改めて考え直さなければいけないなと思いました。そしてそれは、これから六合村を守っていかなければならない私たちの義務かもしれないなと思えました。

私たちが調査研究したのは入山地区だけです。しかし、その中で取り上げられた問題は入山地区だけの問題としてかたづけられる事ではありません。どの問題にしても、六合村全体で考えなければならぬと思います。

まず大きな問題の一つとして、過疎化という事があります。でも過疎化をくい止めるのは容易な事ではありません。どんどん地方都市へ出ていく若者を止める権利はないし、かと言って六合村を都市みたいにするのは、あまりほめられた事ではありません。しかし、十五年間私が見た

中でも、ずいぶん変わったと思われる面があります。もちろん自然環境

の面ですが…という事は、やはりだんだん都市みたいに自然が破壊されていくのではないかという問題。自然保護は、どうすれば良いのかという事が挙げられるので。私も時々こんな事を考えます。これから二十年、三十年後になった時、今の自然がどれほど残っているのだろうか…と。そして、何だか、全然変わった世界になってしまふのではないだろうかと不安を抱いたりする事があるのです。確かに六合村が発展するのは、良い事ですが、私たちの思い出が少しも残らないというのでは、なんだかさみしい気がします。私は、自然が大好きです。公害で汚れた都会の空気よりも、六合村のきれいな空気の方が、ずっとずっと好きです。私たちの六合村だから、自然は、大切なものだから、みんなで守っていきたいものだと思います。私は、自然がいつぱいの六合村が大好きです。

優秀賞 「六合村の過疎に参加する人へ」

入山中三年 山本 明

まわりには山、そしてその木々の緑に囲まれて、私は十五年間、この六合村で育ってきた。

昔は、かなり林業がさかんだったそうだが、今はこれといった産業もなく、わずかに和光原と野反湖の間あたりに、林業が残っており、田代原で牛乳、暮坂で羊を飼っているぐらいで、あとは、ほぼ村内全域で農産物が取れるだけ。職人が多いけど、年々仕事の量が減ってきている。今、一番さかんな仕事は出かせぎだけど、出かせぎは、六合村の発展にはつ

ながりにくい。

そんな、ほとんど何もとりえない六合村だから、現在は、過疎化が激しい。若い人がどんどん都市へ、移り住んでいく。勉強するために、都市へ出て行くのなら良いのだけれども、そのままずっと、住みこんでしまふケースがあまりにも多すぎる。

しかし、若い人達がそうするのは、六合村には仕事がないからだ。一生懸命勉強して、それを身につけても、身につけたことを試す職場が、仕事が無かつたら、誰だって、職場の多い都市で働くだらう。

だけど、今は都市でも、就職の競争率が高く、なかなか思ったところへ就職できない。特に、女性に対しては、男女差別がまだまだにつきまとい、就職できるかどうか、危ぶまれるケースが多い。

それでも、若い人達は、都市への流出をやめない。やめるどころか、豊かな生活を求めて、さらに多くの若者が、都市へ移り住んでいく。

だけど、本当に六合村では、大勢の人が生きてゆくことが不可能だろうか？ 職場が少ないということだけで、人間が、滅びることがあるだろうか？ 自分らしく生きていく時が…。

六合村で、生きていくことが、少しでも可能だと思つたら、それにかけてみるのも、一つの生きがいじゃないかと思う。自分の故郷を捨てても、生きてゆくようなことはしないでもらいたい。世界一をめざして、羽ばたくために、六合村を捨てるのならともかく、六合村とほとんど生活水準の変わらない生活をするためになら、六合村を捨てても、生きてゆくようなことはしないでもらいたい。

私が、この六合村で十五年間過ごして来て、「六合村つて、なんて素晴らしいんだろう」と思ったことが、何度もあります。六合村はどちら

かつていうと、山奥の農村っていうイメージがあります。四方八方、山に囲まれ、そこに住む、動物の数もかなりです。しかし、そんな自然と接していると、毎日がとても楽しく、いやなことでもすぐ忘れてしまいます。又、まわりに木があるということは、自分自身、ゆとりがわいてくるような気がします。とにかく口や言葉で表現できないほどの、魅力と、不思議さ、感心することがたくさんあります。

ただ、毎日毎日、くる日もくる日も、変わらない山が、木が、あるだけで、底知れないほど、嬉しい気持ちになります。ただ、立っているだけの木だけど、無いととても寂しく悲しい感じがします。

ちょうど故郷のように、昔のまままでいてくれると、とても嬉しく、昔と変わっているとても悲しい気持ちになるように。

何もなくても、どんな悪い土地でも、そこに故郷があるならば、故郷に残って、故郷と共に生きていこうとする心を、いつまでも、大切にしてもらいたいと思います。たとえば、どんなに遠く離れようとも……。

○ 六合村民の日を定める条例

平成十二年三月十日

六合村条例第四号

(趣旨)

第一条 村民が郷土の歴史を知り、郷土についての理解と関心を深め、地方自治の意識の高揚を図ることによって、活力ある豊かな郷土を築き上げることを期する日として、六合村民の日(以下「村民の日」という。)を設ける。

(村民の日)

第二条 村民の日は、七月一日とする。

(行事等)

第三条 村は、村民の日の啓発を行うとともに、村民の日を中心として、村民の日の趣旨にふさわしい行事を行うものとする。

(村民等の協力)

第四条 村民及び機関や団体は、村が実施する村民の日の行事に対し、積極的に参画するとともに協力するものとする。

(使用料の免除)

第五条 村が設置した公の施設の使用料で、別に村長が指定するものについては、当該使用料に係る条例の規定にかかわらず、村民の日に限り、これを免除する。

附 則

この条例は、平成十二年四月一日から施行する。

○ 六合村制施行百周年記念事業

明治三十三年（西暦一九〇〇年）七月一日に、草津村と分村して村制を施行し、以来、永い歴史を重ね、平成十二年（西暦二〇〇〇年）に百周年という記念すべき節目の時を向かえ、この間、産業振興、生活環境、交通通信、教育文化、医療・福祉等の整備、充実を各種施策により推進してきた。

これまでの一世紀にわたる先人たちの功績に対する感謝とこれからの二十一世紀へ向けた活力ある六合村づくりのスタートとするために、「六合村制施行百周年事業実行委員会」が組織され、四つの専門部会において各種事業の検討を行った。

六合村第二次総合計画のテーマである「私のすむ六合 地球色」―高原と温泉と福祉の村づくり―の理念を基に、「百周年記念事業等」が平成十一年度から平成十二年度にかけて実施された。

○村制施行百周年事業実行委員会

○委員長 本多 秀里 ○副委員長 富沢 久好

○専門部会

・モニュメント（記念碑） ヘリコプター郷土視察

○部長 山本三男 ○副部長 山田正人

○委員 中沢一孝 萩原長一 本吉修二 中沢富一

・イメージマスコット制定、音楽会開催

○部長 山口一元 ○副部長 山本今朝好

○委員 湯本尚好 山本由平 霜田清光 関 フサ子
・広報縮刷版作成、CD-ROM製作

○部長 富沢久好 ○副部長 富沢一二
○委員 市川伸夫 黒岩善一 安原義治
・写真百年史編集・作成

○部長 市川昭次郎 折茂賢二郎
○委員 中村義司 篠原太郎 市川春男
○事務局長 中沢富一

○事務局 富沢一二 市川春男 富沢和吉 市川永二

○ 記念式典

式典日 平成十二年七月一日（土）

場 所 六合村民体育館

1 開会のことば 助役 中沢富一

2 オープニング・セレモニー

百周年記念調印 六合村長 本多秀里

草津町長 市川紘一郎

3 式辞 村長 本多秀里

4 あいさつ 議会議長 富沢久好

5 イメージマスコット発表

6 二十一世紀「くにづくり」作文発表

- 7 毎日・自治大賞（優秀賞）披露
- 8 表彰

百周年特別功勞

百周年特別感謝

イメージマスケット、愛称、作文

- 9 満百歳達成者紹介 山崎とよ
- 10 受賞者代表謝辞 村功勞者 山口 助
- 11 来賓祝辞
- 12 祝電披露 教育長 市川春男
- 13 閉式のことば 収入役 富沢一二

○ 記念パーティー

期日 平成十二年七月一日（土）午前十二時

場所 六合村柔剣道場

- 1 開宴
- 2 あいさつ 百周年実行委員長
- 3 乾杯 議会副議長

―― 祝宴 ――

百周年記念事業「ビデオ」放映

- 4 万歳 総務文教厚生常任委員長
- 「六合村の百周年の歩み そして 未来へ」二〇分

○ 記念音楽会

期日 平成十二年七月一日（土）午後一時三十分

場所 六合村民体育館

- 1 開会 六合八間太鼓保存会演奏
- 2 あいさつ 百周年事業実行委員長
- 3 音楽会 弦楽四重奏
歌のお姉さん
- 4 閉会 産業建設常任委員長

○ 六合村制・草津町制施行百周年記念調印

私たち、六合村と草津町は、千年紀の平成十二年に意義ある町・村制施行百周年を迎えました。

百周年を迎えて顧みると、江戸時代以来の自然発生的な町や村での行財政機能の充実強化を目論み、全国一律に断行されたいわゆる明治の大合併によって誕生した草津村は、この時代の潮流に流されることなく分離分村を選択し、明治三十三年七月一日に六合村・草津町としてそれぞれの自治を歩みだしました。

爾来、明治・大正・昭和を経て平成の元号に改まった今、「福祉リゾート六合」「国際温泉観光都市草津」として、他の羨望を受け、誇れる郷土づくりが出来たことは、先人達の言葉には語り尽くすことのできない努力はもとより、相互理解に基づく住民の深い関わり合いによる何者で

もありません。

私たちは、百周年を契機として、二十一世紀の次代を担う子ども達のために、元氣と活力いっぱい美しい郷土をもって、世界に情報発信する六合村・草津町を目指して更なる相互理解と地域連携の強化を確認し、ここに記念調印いたします。

平成十二年七月一日

― 六合村制施行百周年記念式典において ―

群馬県吾妻郡六合村長 本多 秀里

群馬県吾妻郡草津町長 市川 紘一郎

○ 六合村イメージキャラクター募集

キャラクター募集 応募総数 三〇五作品

入選 三好健一(四八歳) 福岡県福岡市

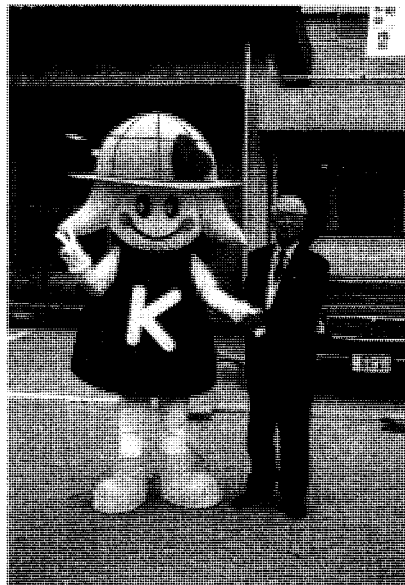
愛称募集 応募総数 一〇五作品

入選 安原十三四(六一歳) 六合村小南

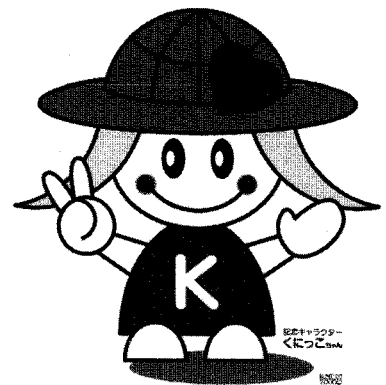
六合村の「六」をモチーフに地球の帽子をかぶり、高原で元氣に遊ぶ六合村の子供(未来をイメージ)を表現

○ 毎日・地方自治大賞「優秀賞」受賞の披露

二十一世紀の地域づくりを目指す優れた事業や運動、企画を表彰する一九九九年「毎日・地方自治大賞」(毎日新聞社主催、自治省後援)に、六合温泉医療センターを中心とした「保健・医療・福祉の連携による健



くにっこちゃん



私のすむ六合 地球色

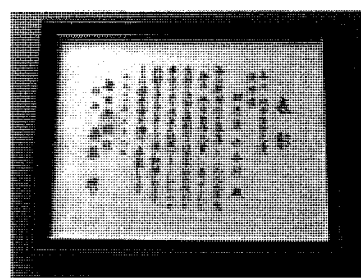
高原と温泉と福祉のむらづくり

六合村制施行 100周年記念

「康づくり」が評価され、平成十二年三月八日、毎日新聞社において「優秀賞」を受賞しました。

表彰

百周年特別功労者



山口 助	品木	村長・村会議員・農業委員
湯本喜太郎	赤岩	議長・村会議員・選挙管理委員 農業委員
中村 義司	根広	議長・村会議員
本多 秀次	和光原	議長・村会議員・農業委員
山本 由平	世立	議長・村会議員 固定資産評価審査委員
富沢 久幸	太子	議長・村会議員 固定資産評価審査委員
黒岩 善一	根広	議長・村会議員
山口 國次	京塚	村会議員
安原 繁安	赤岩	村会議員
山口 一元	田代原	村会議員・民生委員
山口 雄平	品木	村会議員
安原 義治	赤岩	助役
山田 達治	沼尾	助役・収入役・監査委員 選挙管理委員

福島 仁一	沼尾	収入役・教育長
富沢虎四郎	八幡	収入役
篠原 太郎	太子	農業委員
山口 栄蔵	田代原	農業委員
篠原 好次	広池	選挙管理委員・農業委員
茂木 和	中組	選挙管理委員・教育委員・村会議員 農業委員・民生委員
萩原 長一	小雨	教育委員
中村 福美	根広	教育委員
山本 善繁	引沼	教育委員
中沢 一孝	梨木	民生委員
山田 覚治	沼尾	地域医療福祉功労
折茂賢一郎	花敷	県伝統工芸師・村会議員
本吉 修二	小倉	教育振興功労
中山 穰	鍛冶坂	地域振興功労(陶芸)
山本善太郎	引沼	県伝統工芸師・村会議員
篠原きくの	赤岩	叙勲者
関 幸一	赤岩	叙勲者
関 千代衛	世立	叙勲者
高原 秀雄	小雨	叙勲者
中沢 富士	品木	叙勲者
富沢 かん	小雨	県文化功労
市川 伸夫	小雨	県総合表彰
山崎 とよ	長平	長寿者満百歳

村制百周年特別感謝者

星野 次雄	篠原 辰夫	篠原 茂夫	浅見 行雄	富澤 英治	山本 照雄	本多 佐京	星野 捨吉	中沢 清	篠原 幸夫	篠原 松次	黒岩 勇	市川 浪二	池澤忠五郎	山本 好一	市川昭次郎	山本 敏明	山田隆太郎	町田 喜彦	福嶋 貞夫	関 勘三郎	山本 三男
小雨	赤岩	広池	太子	太子	世立	和光原	小雨	生須	広池	高間	生須	生須	八幡	世立	生須	引沼	和光原	太子	小雨	赤岩	引沼
村会議員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員・民生委員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員・農業委員	村会議員	村会議員	村会議員	村会議員・農業委員	村会議員・民生委員	村会議員	村会議員	村会議員・教育委員	村会議員

福島ハルエ	市川 安江	市川 トヨ	山本 茂樹	関 庄太郎	田村 尊	山本荒次郎	山本 正美	山本 貴	山本敬一郎	山口 徳慧	安力川正一	中村 弘治	佐藤 要治	中沢 久吉	市川 春男	富沢 一二	山口宮治郎	篠原 正忠	山本 栗岡	中沢 富一	山田 正人	山口 悦行
沼尾	小雨	生須	引沼	世立	中組	世立	下沢	品木	和光原	田代原	湯久保	根 広	熊 倉	生須	生須	太子	京塚	太子	引沼	生須	和光原	品木
民生委員	民生委員	民生委員	教育委員・監査委員・選挙管理委員	教育委員・農業委員	教育委員	選挙管理委員	農業委員	農業委員	農業委員	農業委員	農業委員	農業委員	農業委員	教育長・村会議員	教育長	収入役	収入役	収入役	助役	助役	村会議員	村会議員

○ 記念事業 二十一世紀「くにづくり」作文募集

中学生の部

最優秀賞 「感動をあたえる六合村」

六合中学校三年 関 裕子

「未来の六合村」それはいつたいどうなっているだろうか。まだ見ぬ明日の六合村。とてもたのしみなものであると思いませんか。

さて、将来の村のすがたということで自分が思うにやはり伝統的文化・家・物・昔から伝わってきた物を残していくべきではないでしょうか。古くさいことだと思えますが大切だと思います。自分は赤岩に住んでいるのだが、最近「高野長英の隠れ家」「長英の隠れ湯」などができ、観光客がふえてきた。よく道を歩っていると古くからの家・蔵などがならんでいるのを見るたびに、なぜ感動するのだろうかと思う。自分にとつては見なれた光景だ。でも今は考え方がかわった。やはり、その感動は大切な物だと思う。人に感動をあたえる六合村は、すばらしいと思は思う。これから先、伝統的な物を残しつつ新しい物を取り入れ、すばらしい六合村をきづきあげていければいいと思う。それが未来の六合村だいいと思います。

さわやか・ぬくもり・はつらつ・のびやか・うるおい・ふれあい・そんな六合村にあるよう、将来に期待していききたいところです。

一〇〇周年おめでとうございます。

優秀賞 「未来の六合村、現在の六合村」

六合中学校二年 茂木 勇人

今まで発展してきた、六合村になってから百年。そして、更に未来へ向かう。理想の未来ってどんなだろう。六合村はどう変わるか。

交通が不便、店、施設が少ない、仕事がない等、色々と不便ですが、今のままでも充分いいと思います。自分は東京のように高層ビルが建ったり、都市化みたいになってほしくないと思います。自然はそのまま残し、今の六合村でいってほしいと思います。

その中で、今考える理想の未来。簡単にはいかならないと思いますが、農業、酪農を発展、広めていく。今でもいろんな所で行われていますが、もつともつと広めていく。道端は水田や畑でうめつくされ、山には牧場があり、牛・馬・豚や羊等の家畜でいっぱい。その他のところでも、花や植物でいっぱい。そんな農業とかでいっぱいの六合村「農業大国」というふうに言われるような村がいいなと思います。更には乗馬やフラワーパークといった観光地をつくったり、六合村にしかない花を開発したり、もう本当に自然がいっぱい、作物、家畜でいっぱい、そんな六合村がいいなと思います。

自然や文化が減っていくだけに、自然や文化、歴史等を大切にしていきたい、この六合村を大事にする。そんな前述したことが実現出来たらなあと思います。

優秀賞 「未来の六合村」

六合中学校一年 篠原 穂二

ここは、ぼくが想像する未来の六合村です。これから、未来の六合村を案内します。

まず、村の人口です。このころ日本では、田舎で、農業をするのが流行して、六合村が全国にテレビやインターネットで紹介されて、六合に引越してくる人がたくさん増えました。なので、小学校の児童数が二百人位まで増えました。

次は、施設のことです。まず一つ目に案内するのは、六合総合温泉センターです。これは村内にあるたくさんの温泉を大きなパイプで、センターに集めて、センターに行けば、すべての温泉を一か所に入れるという施設です。二つ目に案内するのは、六合総合スポーツセンターです。これは、プール、体育館、テニスコート、スポーツジムなどを設備していて、ユニホックの県大会なども、行われました。三つ目は、県立天文台です。これは高山の天文台よりも大きな物ができました。

次はかいごのことです。六合村は、高れい化社会になってるので、大きな老人ホームができました。そして、かいごについての専門学校もできました。

次は六合村に残っている問題です。一つは、観光客が増えてゴミが増えていることです。なので、学校のクリーン活動がいつばいおこなわれています。二つ目は、いろいろな施設を造ったので、森が少なくなつたということです。なので植林などを行っています。

小学生高学年の部

最優秀賞 「二十一世紀の六合村」

入山小学校 六年 山本 理紗

私達の住んでいる六合村は、たくさん自然やお年寄りのためのしせつなどもあるとてもよい所です。

でも自然がたくさんあるといっても、年々森林の木はどんどん切りたおされて無くなっています。私は自然がなくなるのは、すごくいやです。山に居る動物たちもすむ場所が無くなり、こまっていると思うし、かわいそうです。

二十一世紀の六合村は自然がたくさんある村にしたいです。そのため次の事に気を付けていけたらいいと思います。

まず、森林の木を自分達で育て増やしていく。次に、川に油などを直接流さない。こうすれば自然の中の動物も、住む場所や食料などもなくなるしないし、環境にとってもいいと思います。

次に、六合村のいい所は、お年寄りのしせつなどがあるという事です。六合村は、お年寄りが多く、介護などを必要としている人もたくさんいます。介護が必要な人はつつじ荘などに居る人もいます。

ふだん私達の生活の中でお年寄りと接する事はあまりありません。だから、入小の四・五・六年生はお年寄りの人も仲よくなれるように、つつじ荘訪問などを行っています。

このような事をする事で、お年寄りの人も仲よくなれて、すごく楽しいです。でも一回ではあまり完全に仲よくなる事はできません。なの

で、もつともつと2カ月間に一度などと回数を増やしていけば、リハビリなどを毎日がんばっているお年寄りの人とも、だんだん仲よくなれると思います。

二十一世紀の六合村は自然を大切にするために木々をもつと増やし、環境をよくしたり、お年寄りの人との交流の多い村にしたりしていきたいです。

優秀賞 「六合村の未来は花いっぱい」

六合第一小学校六年 霜田 佳奈江

私たちの六合村の未来は、いつも花いっぱいの六合村がいいです。でも、そのためには今から努力をしないと、花いっぱいの六合村にはならないと思います。道に落ちているゴミをひろったり、地いきの行事などですんで参加したりなど、私たちにもできることが、たくさんあります。あと、この二つのことを一人でも意味がないと思います。六合村の人全員が、このことにすすんで参加すれば、みんなも気持ちがいいし、未来のためにもなると思います。六合村の人たちが気持ちよく、毎日ですごしたらいいと思います。

学校の帰り道、友だちに

「まだ、バスの時間には早いから、そこの前のゴミ、ひろってかない。」

「うん。そうしようか。」

「早くいこう。」

とこのような会話ができればな、思っています。六合村の人、みんなが

このようになって、六合村の未来にいかしていきたいと思います。花だけでなく、とつてもすばらしい自然。この緑いっぱいの自然は、ずーつと昔の人からのおくり物だと思います。

いつになるかはわからないけど、きつと花いっぱいの六合村になると思います。みんなが努力してできていく、この六合村を、いつまでも、自然にめぐまれている、そんな村にしていきたいと思っています。

優秀賞 「六合の伝統と新しい技術」

入山小学校六年 黒岩 咲貴

私が、えがく未来の六合村は、六合村の伝統が残っているながら、新しい、ハイテク技術のある村です。

私が考える六合村の伝統の一つは「方言」です。私は、社会で方言について、学んだ経験があります。それまでは、

(方言ってよくわかんないなあ)

と思った事もありましたが、社会で勉強してからは、

(方言って、ここにしかない言葉だから、ずつと守り続けたいなあ。)

と思うようになりました。最近、悪い言葉を使う人もいます。でも私は、六合村のすばらしい方言を使って、次の世代の人へ伝えていきたいと思っています。

もう一つの、六合村の伝統は、「こんこんぞうり」や「めんば」竹やつるを使った「かご」などです。最近では、これらの民芸品を作る人が減っているそうです。六合村のすばらしい伝統なので、ぜひ作る人を増やし

て、いつまでも残してほしいです。そして、このすばらしい六合の伝統をいつまでも守ってもらいたいです。

私のもう一つの理想は、新しい技術も備わった六合村です。でも、かんとんに新しい技術を取り入れると、自然を破かいしてしまいます。だから、ソーラーシステムや風力を使った技術を使い、自然を残しながら新しい物を取り入れていくと、いいと思います。

未来の六合村は、伝統も、技術も、自然もみんなバランスよく共存できるといいです。私のえがく未来の六合村を、実現させるには、私たちも協力していくことが大切だと思います。

小学生低学年の部

最優秀賞 「じぶんがすみたい六合村」

入山小学校二年 山本 雄一

ぼくは、じぶんが大きくなったらこんな六合村にしたいです。しごとほだいくでしぜんをよごさない六合村にしたいです。たとえばまわりにあきかんやゴミをみつけたらひろいます。なぜかというまわりにごみがあると六合村がどんどんきたなくなっていくからできるだけひろいたいです。そうゆうのはきらいだからです。ほかにもおみせがあつたり花がいつばいさいいたりちかくにしぜんがいつばいあつたりする六合村がいいです。それからいじめもいやです。どんだんけが人がでてしまつてそれがひろがつてしまうのでいじめはきらいです。でもいじめがない六合村ならすきです。こんなふうなしぜんをせかいじゅうの人にみせてあげたいです。こんないつばいしぜんのある大きな六合村にしたいです。

六合村はきつとへいわなくにだとおもいました。それからだいくのしごとは大きな大きなたてもものやいえをつくつてすごいだいくになりたいです。いいしごとでもうけてしんじてもらいたいです。こんなしごとがしたいです。

村制施行百周年事業審議委員会名簿

審 議 委 員 会																		番号				
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	委員職
		副委員長																				委員長
教 育 長	収 入 役	助 役	温泉医療センター長	白根開善学校長	農業委員会会長	森林組合理事	婦人会長	文化協会会長	体育協会会長	教育委員会会長	長寿会長	民生員総務	社会福祉協議会長	観光協会会長	消防団長	J A 六合支店長	商工会会長	産業建設常任委員長	総務文教厚生常任委員長	議会副議長	議会議長	職名
市川春男	富沢一二	中沢富一	折茂賢一郎	本吉修二	篠原太郎	安原義治	関フサ子	萩原長一	霜田清光	山本今朝好	黒岩善一	中沢一孝	山本由平	市川昭次郎	市川伸夫	湯本尚好	山田正人	山本三男	山口一元	富沢久好	中村義司	氏名

事務局

4	3	2	1
主事補	主任	係長	企画課長
山本誠	山本俊之	市川永二	富澤和吉

部 会 員						
7	6	5	4	3	2	1
議会事務局長	教育課長	事業課長	土木課長	農林課長	住民課長	総務課長
山口義之	関常男	中村富雄	篠原秀美	茂木真一	中澤宏衛	山田武俊

新自治体の構築と市町村合併

一 市町村合併の背景と推進

国は行財政改革推進、少子化進展の状況下で近い将来、人的・財政的に小規模自治体単独での自治体運営は厳しいものとなつてきている。六合村は、財政力に乏しく財源の殆どが地方交付税で賄われており、人口も一、七三六人と小規模である。

地方公共団体が自主性に基づいて地域間で競争し、個性ある多様な行政施策を展開する方向に向けられたが、そのためには、自治体である市町村の行財政基盤（権限、財源、人材）を一定の規模・能力に強化する必要があることからその手段として市町村合併が進められた。

六合村でも昭和六十年九月に六合村行政改革大綱が策定され平成七年九月には推進本部が設置され推進を行つた。その後、六合村行政改革集中改革プランを策定し推進を図る。

平成十六年四月に設立された西吾妻四か町村合併協議会が設置されたが四か町村の人口合わせて二万七千人余りの新しい町を作るかどうかが本格的にスタートし法定合併協議会となる会長には、長野原町長の田村守氏、副会長に草津町議長の山田寅幸氏が選任された。合併の方式や合併後の町の名称、役場の位置など大きな事項から各町村において行つていた一、五〇〇項目に及ぶ事務事業について専門部会や分科会などで協議を行つた。

しかし、協議を重ねるも各町村間の不協和音が広がり、草津町議会において合併協議会離脱の議案が議決された。これに伴い協議会での幹事会、首長、議長会議を行い草津町からの離脱の説明があり、九月二十二

日の協議会において正式に解散することとなった。また同日、長野原町、草津町、六合村で構成されていた西吾妻地域合併協議会も解散となった。

○ 西吾妻地域における合併協議経過

- ④ 四か町村合併協議会（長野原町・嬭恋村・草津町・六合村）
- ③ 三か町村合併協議会（長野原町・草津町・六合村）

(任) 任意合併協議会

期 日	内 容
平成十四・十二・三	西部四か町村による任意合併協議会設置について草津町長三か町村に申し入れ
十五・一・九	第二回「吾妻郡の合併を考える会」で東西四か町村毎の枠組みで合意、任意合併協議会設立準備会開催
十五・一・二十九	(任) 西吾妻四か町村任意合併協議会設立総会
十五・四・十	(任) 第二回任意合併協議会
十五・五・十四	(任) 第三回任意合併協議会
十五・六・二十六	(任) 第四回任意合併協議会
十五・十・九	(任) 第五回任意合併協議会
十五・十一・二十八	(任) 第六回任意合併協議会 ③法定協議会設立準備会議
十五・十二・八	③西吾妻地域合併協議会規約議決 (三町村議会)
十五・十二・十	嬭恋村合併協議会設置の請求

十六・十・三十一	西吾妻四か町村（西吾妻地域）合併協議会廃止
十六・十・七	草津町議会④③合併協議会廃止議決 嬭恋村議会④③合併協議会廃止議決
十六・十・六	六合村議会④③合併協議会廃止議決
十六・九・二十四	長野原町議会④③合併協議会廃止議決
十六・九・二十二	③④第八回西吾妻四か町村合併協議会 ③④第六回西吾妻地域合併協議会
十六・九・十六	④町村長・議長会議 草津町議会④③合併協議会離脱議決
十六・九・十五	草津町の合併協議会離脱新聞報道
十六・九・八	④第七回西吾妻四か町村合併協議会
十六・八・二十	④第六回西吾妻四か町村合併協議会
十六・七・二十七	④第五回西吾妻四か町村合併協議会
十六・七・十五	④第四回西吾妻四か町村合併協議会
十六・六・二十八	④第三回西吾妻四か町村合併協議会
十六・五・三十一	④第二回西吾妻四か町村合併協議会
十六・四・二十七	③④第一回西吾妻四か町村合併協議会 ③第五回合併協議会
十六・四・十四	④西吾妻四か町村合併協議会設立準備会
十六・三・二十四	③第四回合併協議会
十六・三・二十一	嬭恋村住民投票（賛成三、三二七 反対三、〇二二）
十六・三・二	③第三回合併協議会
十六・二・二	③第二回合併協議会
十五・十二・十五	③第一回西吾妻地域合併協議会

二 中之条町への合併

西吾妻地域の枠組みの中で検討協議を重ねた結果、合併の成立は叶わなかったが、住民からの声や今日における日常生活や経済活動の広域化グレードの高い行政サービスの提供、将来の吾妻地域全体を見越したまちづくりの観点から中之条町と六合村の二町村による合併を目指すべきと判断し、議会と協議をすすめ議員全員の理解、支持を得て、平成二十一年六月十二日に中之条町に対し合併協議会の設置を申し入れた。

（合併協議会設置についての申入書）

六総住発第一〇〇号

平成二十一年六月十二日

中之条町長 入内島道隆 様

六合村長 山本三男

合併協議会設置についての申入書

初夏の候、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素は、本村行政運営の各般にわたり格別なるご高配を賜り深く感謝申し上げます。

さて、合併につきましては、少子、高齢化の進展、国、地方ともに厳

しい財政状況の中で、変化する社会経済情勢に適切かつ弾力的に対応するための有効な方策であるとして、西吾妻地域でも合併協議会を設置し検討したものの不調となり現在に至っております。

しかし、今後ますます進む地方分権や複雑多様化する行政を自主的、自立的に展開するためには、自治体としての適正な規模と行財政能力が求められ、本村では「合併」によつてこれらを強化する必要があると考え、昨年十二月村内各地において行政報告・町村合併懇談会を開催しました。

住民からの意見は、今日における日常生活や経済活動の広域化とグレートの高い行政サービスの提供、将来の吾妻地域全体を見越したまちづくりの観点から、貴町との合併に期待する声が多く、ここに平成二十二年三月末日までの合併を目指し、中之条町と六合村の二町村による合併協議会の設置を申し入れるものです。

なお、合併に向けての村としての基本姿勢、村民生活に深く関わりのある下記事項につきましては、協議上の重要事項として位置づけた上でご検討賜りますようお願い申し上げます。

記

の存続

- 五 議員等の在任特例適用
- 六 住居表示への「六合」の使用
- 七 主要な行政サービスに対する住民負担への配慮
- 八 地域特性に関わる事業の継続

一 合併の形態に拘らない

二 村民生活に支障を及ぼさない規模の支所の設置

三 路線バス、過疎地有償運送事業（やまどり）、スクールバス等の地域公共交通の存続

四 医療センター・小中学校・こども園などの保健福祉・教育施設環境

四 医療センター・小中学校・こども園などの保健福祉・教育施設環境

○ 中之条町・六合村合併協議会委員名簿

役員名		委員区分	氏名	職(選出町村名)
会長		一号委員 (会長を除く町村長)	入内島道隆	中之条町長
副会長		二号委員 (両町村の教育長)	山本三男	六合村長
委員				
		三号委員 (議会議員)	唐澤正明	中之条町教育長
			茂木真一	六合村教育長
			生須秀彦	中之条町議会議長
			劔持秀喜	中之条町議会議長
			安原賢一	中之条町議会議総務福祉 常任委員長
			小栗芳雄	中之条町議会議経済教育 常任委員長
			田中孝宜	中之条町議会議選出監 査委員
			山口悦行	六合村議会議長
			山本日出男	六合村議会議副議長
			中澤宏衛	六合村議会議総務文教 厚生常任委員長
			山本貞雄	六合村議会議産業建設 常任委員長
			篠原 巖	六合村議会議会運営 委員長
			瀬山 巖	中之条町区長会長
		四号委員 (両町村の長が指名する 学識経験者)	塩原喜好	中之条町農業委員 会長

監査委員	委員														
	五号委員 (両町村の長が協議して 定めた学識経験者)					四号委員 (両町村の長が指名する 学識経験者)									
黒岩春夫	水野信幸	友岡邦之	荒井道明	小阿瀬義孝	山口 章	市川孫好	茂木栄子	清水博巳	篠原梅男	黒岩正善	富沢一二	安原和臣	平田芳子	田村亮一	吉田幸雄
六合村監査委員	中之条町監査委員	高崎経済大学准教授	群馬県吾妻県民局長	群馬県県土整備部技監	群馬県産業経済部観光局長	六合村消防団長	六合村婦人会長	六合村観光協会长	六合村商工会長	六合村農業委員会会長	六合村社会福祉協議会会長	中之条町消防団長	中之条町民生委員児童委員 協議会長	中之条町観光協会长	中之条町商工会長

中之条町・六合村合併協定調印までの主な経緯

平成二十一年九月十八日

第二回中之条町・六合村合併協議会開催

平成二十年十二月二日～平成二十年十二月二十六日

合併の方式、新町の名称、事務所の位置等四項目を協議、確認

六合村で町村合併懇談会を開催

平成二十一年十月八日

村内一七ヶ所、町村合併に関する意見交換等

第三回中之条町・六合村合併協議会開催

六合村で町村合併アンケート実施

地方税の取扱い、特別職の取扱い等二〇項を協議、確認

二〇歳以上全員を対象、回答率八〇%

平成二十一年十月二十三日

平成二十一年六月十一日

第四回中之条町・六合村合併協議会開催

六合村議会全員協議会を開催

新町基本計画等一五項目を協議、確認

中之条町への合併協議会設置申し入れを確認

平成二十一年十一月六日

平成二十一年六月十二日

第五回中之条町・六合村合併協議会開催

六合村から中之条町へ合併協議会設置申し入れ

合併の期日、事務組織及び機構の取扱い等一九項目を協議、確認

平成二十一年六月十九日

平成二十一年十一月十日～平成二十一年十一月十四日

中之条町議会全員協議会を開催

合併協定調印式挙行

合併協議会設置について前向きに検討することを確認

中之条町で合併協議会説明会を開催

平成二十一年七月二十七日～平成二十一年七月三十一日

町内五ヶ所、協議事項説明及び質疑

中之条町で住民説明会を開催

平成二十一年十一月十日～平成二十一年十一月十六日

町内五ヶ所、合併協議会設置に関する説明及び質疑

六合村で合併懇談会を開催

平成二十一年八月二十日

村内五ヶ所、協議事項説明及び質疑

中之条町議会臨時会で合併協議会設置を議決

平成二十一年十一月二十七日

六合村議会臨時会で合併協議会設置を議決

第六回中之条町・六合村合併協議会開催

平成二十一年八月二十七日

町名字名の取扱い、一部事務組合等の取扱いの二項目を

第一回中之条町・六合村合併協議会開催

協議、確認

各種規程、事業計画及び予算等を協議、決定

合併協定調印式挙行

中之条町・六合村合併協定調印式

群馬県議会議員 萩原 渉

日時 平成二十一年十一月二十七日(金) 午後二時

場所 中之条町役場 大会議室

一〇、記念講演

「新しい時代のコミュニティ形成」

高崎経済大学准教授 友岡邦之先生

一、開会

二、来賓紹介

一一、閉式

三、調印までの主な経緯

四、合併協定書説明

五、両町村長署名

中之条町長 入内島道隆

六合村長 山本 三男

六、立会人署名

中之条町議会議長 生須秀彦

六合村議会議長 山口悦行

七、主催者あいさつ

中之条町長 入内島道隆

六合村長 山本 三男

八、議会代表あいさつ

中之条町議会議長 生須秀彦

六合村議会議長 山口悦行

九、来賓祝辞

群馬県知事 大澤正明

群馬県議会議長 金田克次

群馬県議会議員 南波和憲

○ 中之条町・六合村合併協定書

吾妻郡中之条町及び同六合村は、地方自治法（昭和二十二年法律第六十七号）第二五二条の二第一項及び市町村の合併の特例等に関する法律（平成十六年法律第五十九号）第三条第一項の規程に基づく中之条町・六合村合併協議会における協議結果を基本とし、合併協定内容のとおり協定する。

平成二十一年十一月二十七日

中之条町長 入内島道隆

六合村長 山本 三男

立会人

中之条町議会議長 生須 秀彦

六合村議会議長 山口 悦行

合併協定内容

一 合併の方式

合併の方式は編入合併とし、吾妻郡六合村の区域のすべてを吾妻郡中之条町に編入する。

二 合併の期日

合併の期日は、平成二十二年三月二十八日とする。

三 新町の名称

新町の名称は、「中之条町」とする。

四 新町の事務所の位置

新町の事務所の位置は、吾妻郡中之条町大字中之条町一〇九一番地とする。

五 財産の取扱い

吾妻郡六合村の財産（権利及び義務を含む。）は、すべて吾妻郡中之条町に引き継ぐものとする。

六 議会の議員の定数及び任期の取扱い

(一) 六合村の議会の議員は、市町村の合併の特例等に関する法律第九条第一項第二号の規定を適用し、中之条町の議会の議員の残任期間に相当する期間に限り、引き続き中之条町の議会の議員として在任する。

なお、当該中之条町の議会の議員として在任することとなる議員の議員報酬の額は、合併時までに調整するものとする。

(二) 合併後最初に行われる一般選挙により選出される議会の任期に相当する期間に限り、市町村の合併の特例等に関する法律第九条第三項の規定を適用し、合併前の六合村の区域に選挙区を設ける。六合選挙区における議会の議員の定数は二人とし、合併前中之条町の議会の議員の定数一六人に六合選挙区の定数を加えた数一八人をもって中之条町の議会の議員の定数とする。

選挙区		選挙すべき議会の議員の数
合併前中之条町を区域とする選挙区		
合併前の六合村を区域とする選挙区		二人

七 農業委員会の委員の定数及び任期の取扱い

六合村の農業委員会の選挙による委員は、市町村の合併の特例等に関する法律第十一条第一項の規定を適用し、中之条町の農業委員会の選挙による委員の残任期間に限り、中之条町の農業委員会の選挙による委員として在任する。

八 地方税の取扱い

地方税の取扱いについては、中之条町の制度に統一する。

なお、国民健康保険税については、別途定める。

九 一般職の身分の取扱い

六合村の一般職員は、すべて中之条町の職員として引き継ぐものとする。

なお、職員の任免、給与その他の身分の取扱いについては、中之条町の職員と不均衡が生じないよう公正に取り扱うものとする。

一〇 特別職の身分の取扱い

六合村の特別職の職員及び教育長は、合併期日の前日をもって失職する。

一一 条例、例規等の取扱い

中之条町の条例、規則等を適用する。ただし、事務事業の取扱い等の協議結果を踏まえ、合併と同時に所要の改正等を行うものとする。

一二 事務組織及び機構の取扱い

(一) 事務組織及び機構の取扱い

新町の組織機構は、地域自治の推進及び総合的な町民サービスの向上に十分配慮し、整備する。

ア 新町基本計画を円滑に遂行できる組織機構

イ 町民サービスの向上に向けた組織機構

ウ 地方分権や新たな行政課題に柔軟に対応できる組織機構

エ 効率的・効果的な行政を推進する組織機構

(二) 支所の取扱い

ア 六合村役場を、現在の六合村の区域を所管区域とする支所として整備する。

イ 支所は、本庁で処理すべき事務及び一体的に処理することが効率的な事務を除いた町民サービスを提供するとともに、所管区域を対象とした地域振興を図ることを所掌事務とする。

ウ 支所に置く機能は、申請、届出の受付や証明書発行などの住民にとつて利便性の高い町民サービス業務、地域防災活動の推進や地域活動の支援などの地域協働業務、地域産業の振興や地域おこしなど地域の特定課題・需要に関する地域振興業務、簡易水道等や道路河川の維持管理などの現地解決型業務を基本とする。

エ 支所と本庁間の通信回線を整備し、本庁が支所を適切に支援できる体制を整備する。

オ 支所の組織機構は、住民生活に急激な変化を来すことのないよう十分配慮するとともに、住民サービスの向上と行政の効率化を推進するため、常に組織機構の改善に努めるものとする。

一三 一部事務組合等の取扱い

六合村の中之条町への編入合併に伴う一部事務組合等の取扱いについては、次のとおりとする。

(一) 群馬県市町村総合事務組合

六合村は、合併の日の前日をもって脱退する。

(二) 群馬県市町村会館管理組合

六合村は、合併の日の前日をもって脱退する。

(三) 吾妻広域町村圏振興整備組合

六合村は、合併の日の前日をもって脱退する。

(四) 西吾妻環境衛生施設組合

六合村は、合併の日の前日をもって脱退する。

(五) 西吾妻衛生施設組合

六合村は、合併の日の前日をもって脱退する。

(六) 西吾妻福祉病院組合

六合村の区域に限り、中之条町が西吾妻福祉病院組合に加入する。

なお、六合村の区域における同組合加入のあり方については、合併後も関係町村と継続して協議を行うものとする。

(七) 群馬県後期高齢者医療広域連合

六合村は、合併の日の前日をもって脱退する。

一四 使用料、手数料等の取扱い

(一) 施設等の使用料については、原則として現行のまま新町に引き継ぎ、段階的に基準を見直す。

(二) 手数料については、中之条町の制度に統一する。

(三) 公共物の使用料及び占用料については、中之条町の制度に統一する。ただし、公共物の使用料及び道路占用料は、経過措置により段階的に調整する。

(四) 協議項目二二「各種事務事業の取扱いに関すること」で提案する

使用料、手数料等の取扱いについては、別途定める。

一五 公共的団体等の取扱い

公共的団体等については、新町の速やかな一体性を確立するため、各種団体の実情を尊重しながら、次のとおり調整に努めるものとする。

(一) 両町村に共通している団体は、合併時に統合するよう調整に努めるものとする。

(二) 統合に時間を要する団体は、将来統合するよう調整に努めるものとする。

一六 補助金、交付金等の取扱い

補助金、交付金等については、その事業目的、効果を統合的に勘案し、公共的必要性、有効性及び公平性の観点から合併後速やかに調整を図るものとする。

一七 町名、字名の取扱い

六合村の字の区域及び名称は現行のとおりとし、「大字赤岩」、「大字日影」、「大字小雨」、「大字生須」、「大字太子」、及び「大字入山」とする。

一八 慣行の取扱い

(一) 町章

中之条町の制度に統一する。

(二) 町民憲章

中之条町の制度に統一する。

(三) 町の木、花及び鳥

中之条町の制度に統一する。

(四) 名誉町民制度及び町功労者制度

中之条町の制度に統一する。

ただし、六合村の木・花・鳥については、住民の意向により、地域の慣行として伝承していくことも検討するものとする。また、名誉町民制度及び町功労者制度については、制度の移行にあたり必要な措置を講じるものとする。

一九 国民健康保険事業の取扱い

(一) 国民健康保険税の税率等については、市町村の合併の特例等に関する法律第十六条第一項の規定により、六合村において合併年度の平成二十一年度及びこれに続く平成二十二年度から平成二十四年度までは不均一課税を実施し、賦課方式の相違等を検討しながら段階的に調整を行い、平成二十五年度に中之条町の税率等に統一する。

国民健康保険税の納期については、平成二十二年度から中之条町の制度等に統一する。

(二) 国民健康保険運営協議会については、地域性を反映できる委員構成に配慮し、合併時に統合する。

(三) 出産育児一時金及び葬祭費の支給については、原稿のまま中之条町に引き継ぐ。

(四) 保健事業（国民健康保険人間ドック助成・後期高齢者医療制度人間ドック助成）については、平成二十二年度から中之条町の制度等に統一する。

(五) 後期高齢者医療制度の保険料の納期については、平成二十二年度から中之条町の制度等に統一する。

二〇 介護保険事業の取扱い

(一) 老人福祉計画及び介護保険事業計画については、合併時において中之条町及び六合村の計画の集合をもって新町の計画とする。

第一号被保険者（六五歳以上の被保険者）の介護保険料については、平成二十三年度までの介護保険事業計画期間中は、それぞれの計画をもとに算出され、条例に定められたものを新町に引き継ぎ、不均一賦課を実施する。

介護保険料の納期については、平成二十二年度から中之条町の制度に統一する。

(二) 保険料の減免、利用料助成の低所得者対策については、合併時から中之条町の制度に統一する。

(三) 地域密着型サービス事業者の指定については、中之条町の制度に統一する。

(四) 六合村地域包括支援センターについては、合併時に中之条町地域包括支援センターの支所（サブセンター）とし、運営形態等は現行のまま新町に引き継ぎ、六合村の日常生活圏域内での必要な業務を行う。

(五) 町（村）営の介護保険施設については、運営形態等そのまま新町に引き継ぐ。

二一 消防団の取扱い

六合村の消防団は、現行のまま新町に引き継ぎ、組織・形態については、合併時に再編等を行うものとする。

六合村の消防団員の待遇等については、中之条町の制度に統一するものとする。

二三 各種事務事業の取扱い

二二・一 男女共同参画事業の取扱い

男女共同参画事業については、合併後に男女共同参画に関する計画を早急に策定するものとする。

二二・二 姉妹友好都市交流事業の取扱い

姉妹友好都市交流事業については、中之条町において提携している姉妹友好都市と合併時までに協議し、その意向により新町に引き継ぐ。

二二・三 電算システムの取扱い

電算システムの統合については、中之条町の電算システムを基本として調整し、統合する。

二二・四 広報広聴関係事業の取扱い

(一) 広報紙については統合し、毎月一日に発行する。配布の方法は、中之条町の例により統一して実施する。

(二) ホームページについては、合併時に中之条町のホームページに統一する。

(三) 「聞く耳」や「住民アンケート調査」等の広聴事業については、中之条町の例により統一して実施する。

二二・五 納税等関係事業の取扱い

納税等関係事業については、現行のまま新町に引き継ぐ。ただし、合併時に両町村の取扱い金融機関がすべて利用できるように調整する。

二二・六 消防防災関係事業の取扱い

(一) 地域防災計画については、新町において速やかに策定する。

(二) 防災対策本部については、中之条町役場に本部を設置し、六合村役場については、被災状況に応じて本部の機能を補助するため、

現地災害対策本部を設置する。

(三) 災害時応援協定等については、新町の規模を勘案し合併後速やかに調整する。

(四) 防災行政無線については、同報系、移動系とも現有施設の有効利用を図るとともに、新町において、早い時期に設備整備に向けての検討を行い、統一的な地域防災行政無線の整備を図る。

二二・七 交通関係事業の取扱い

六合村地域公共交通バス運行事業及び六合村過疎地有償運送事業(やまどり)については、当面現行どおりとし、中之条町全域の交通体系の見直しに合わせ五年以内に一体的な見直しをするものとする。

二二・八 窓口業務の取扱い

窓口業務については、中之条町の例により新町に引き継ぐ。窓口業務の延長については、合併時までに調整する。

二二・九 健康づくり事業の取扱い

(一) 健康づくり事業については、段階的に調整し統一を図るとともに、地域の実情に合わせて内容・方法を調整し実施する。

(二) 健康日本二二地方計画については、国の計画改定基準年に合わせ、中之条町において新たに策定する。

(三) 健康づくり推進協議会については、合併後関係団体との調整により平成二十三年度を目途に統一する。

二二・一〇 保健衛生関係事業の取扱い

(一) 予防接種については、基本的に中之条町の制度に統一する。

(二) 母子保健事業については、基本的に中之条町の制度に統一する。

(三) 成人の健康診査・がん検診等については、平成二十三年度を目途に調整し統一する。

(四) 健康増進事業については、同一目的・内容の事業については事業名称等を統一し、地域の実情に合わせて内容・方法を調整し実施するとともに、段階的に調整し統一を図る。

二二・一一 環境対策関係事業の取扱い

(一) 環境基本計画については、中之条町の計画を現行のまま引き継ぎ、中之条町において改定する。

(二) 騒音、振動の規制地域などについては、現行のまま中之条町に引き継ぐ。

(三) 環境対策関係事業並びに補助金等については、中之条町の制度に統一する。

二二・一二 清掃関係事業の取扱い

清掃関係事業並びに補助金等については、中之条町の制度に統一する。

二二・一三 障害者福祉事業の取扱い

障害者福祉事業については、原則として中之条町の制度に統一する。ただし、両町村における障害者の実態や地域特性等に十分配慮して調整するものとする。

(一) 障害者計画及び障害福祉計画については、合併時に中之条町に統一し、平成二十三年度に中之条町の次期計画を策定する。

(二) 障害者福祉事業サービス

ア 地域生活支援事業のうち手話奉仕員養成事業及び手話通訳者設置事業等については、合併時に中之条町の制度等に統一する。

イ 障害者福祉タクシー事業については、合併時に中之条町の制度等に統一する。

二二・一四 高齢者福祉事業の取扱い

高齢者福祉事業については、原則として中之条町の制度に統一する。ただし、高齢者の実態や地域の特性等により両町村において制度に大きな差異があるものについては、地域の実情等に十分配慮して調整するものとする。

(一) 生活支援サービス

ア 自立者ホームヘルプサービスについては、合併時に中之条町に統一する。

イ 在宅介護慰労手当支給事業については、合併時に中之条町に統一する。

(二) 生きがい活動支援

ア 敬老祝金支給事業については、合併時に中之条町に統一する。

イ 六合村高齢者センターについては、合併時に現行のとおり中之条町に引き継ぐ。

二二・一五 児童福祉事業の取扱い

(一) 放課後児童健全育成事業については、現行のまま新町に引き継ぐ。

(二) 次世代育成支援行動計画については、現行のまま新町に引き継ぎ、地域の行動計画として実施する。また、合併後、平成二十二年度中に中之条町全体を視野に入れた後期五か年計画を策定する。

二二・一六 その他の福祉の取扱い

その他福祉については、原則として中之条町の制度に統一する。ただし、地域の特性等により両町村において制度に大きな差異があるものについては、地域の実情等に十分配慮して調整するものとする。

(一) 福祉医療費給付事業

福祉医療費給付事業については、合併時に中之条町に統一する。

(二) 民生委員・児童委員会

ア 民生委員・児童委員会推薦会については、合併時に中之条町に統一する。なお、委員の選任については、地域性に配慮する。

イ 民生委員・児童委員の委員数については、合併時に中之条町に引き継ぎ、以降の定員については一斉改選時に県と協議する。

(三) 行旅病人及び行旅死亡人取扱い

行旅病人及び行旅死亡人取扱いは、合併時に中之条町に統一する。

二二・一七 保育事業の取扱い

(一) 保育所並びにこども園の保育料については、現行のまま新町に引き継ぎ、平成二十三年度に調整を行う。

(二) 保育料の同時三子入所無料化事業並びに第三子入所減額については、平成二十三年度に中之条町の制度に統一する。

二二・一八 学校教育事業の取扱い

(一) 奨学資金貸与制度については、平成二十二年度から中之条町の制度に統一する。

(二) 学校給食の方式については、現行のまま新町に引き継ぐ。ただし、給食費については、平成二十三年度から統一した方式に調整する。

(三) 六合村が実施しているスクールバス等運行事業及び通学費等補助金交付事業については、現行のまま新町に引き継ぎ、五年を目的に調整する。

二二・一九 学校・幼稚園の通学区域の取扱い

学校、幼稚園の通学区域については、現行のまま新町に引き継ぐ。

二二・二〇 コミュニティ施策の取扱い

(一) 行政区の設置については、六合地区の現状を参酌しつつ合併時までに調整する。

(二) 区長会の設置、運営費補助等の事務については新町移行後は中之条町の制度を適用する。

(三) 集会所建設・増改築等補助事務については、新町移行後は中之条町の制度を適用する。

二二・二一 社会教育事業の取扱い

(一) 各種スポーツ大会については、現行のまま新町に引き継ぎ、合併後に地域性を考慮し新たな制度に再編する。

(二) 青少年教育関係事業のうち、目的が同一又は類似している事業については合併時に統一するよう調整し、地域性のある事業については新町に引き継ぎ、平成二十三年度を目的に調整する。

(三) 六合村公民館については、六合地域の公民館として、中之条町の各公民館との連携を図る。

なお、管理・運営については、合併時までに調整するものとする。

二二・二二 文化振興事業の取扱い

(一) 中之条町及び六合村が実施する芸術文化関係事業の取扱いについては、現行のとおり新町に引き継ぎ、これまでの経緯や地域の特徴、地域性に配慮し、平成二十三年度を目的に調整検討する。

(二) 両町村が支援する芸術文化関係事業の取扱いについては、住民の芸術文化活動の振興や地域文化を継承する視点に立ち、引き続き実施する。

二二・二三 農林水産関係事業の取扱い

(一) 農業振興地域整備計画については、現行のまま新町に引き継ぎ、

新町において検討し、新たな計画を策定する。

(二) 森林整備計画については、両町村とも平成二十六年までの計画であるため、現行のまま新町に引き継ぐ。

(三) 中之条町及び六合村で独自に実施している農林水産業施策については、地域の実情等を考慮して継続する。

二二・二四 商工・観光関係事業の取扱い

商工・観光関係事業については、新町において商工団体・観光協会等と連携を図り、商工業及び観光の振興と地場産業の活性化に努める。

(一) 祭り・イベント等の観光事業については、地域の特性を活かし、新町の事業として引き継ぐ。

(二) 商工業関連の金融制度については、合併時に中之条町の制度に統一する。

二二・二五 勤労者、消費者事業の取扱い

勤労者、消費者事業については、中之条町の制度に統一する。

二二・二六 建設関係事業の取扱い

(一) 道路事業については、現行の整備計画を新町に引き継ぎ、平成二十二年度を目途に整備計画の見直しを行う。

(二) 公営住宅事業については、合併時に中之条町の制度に統一する。ただし、住宅家賃については、中之条町が定める家賃設定基準とする。

(三) 建設工事に係る業者選定については、合併時に中之条町の制度に統一し、業者の格付け及び工事規模に応じ、地域性を配慮して行う。

(四) 六合村宅地分譲事業については、特別会計を廃止し、事業は、中之条町土地開発公社に引き継ぐ。

(五) 六合村の土木機械使用料については、合併時に廃止する。

二二・二七 上・下水道事業の取扱い

(一) 上・下水道事業に関する財務、組織等については、合併時に中之条町の制度等に統合する。

(二) 六合村の簡易水道事業については、六合地区簡易水道事業特別会計として事業を行い、平成二十七年において水道事業は企業会計に統一する。

(三) 六合村の小水道については、許可変更等で簡易水道に統合する手続きを平成二十七年までに行い、統合できない小水道は特別会計として事業を行う。

(四) 六合村の水道料金については、激変緩和措置として段階的に調整し、平成二十七年度に中之条町の料金に統一する。

(五) 六合村の水道使用量の検針、水道料金の徴収は平成二十四年度まで現行のとおりとし、平成二十五年度から統一する。

(六) 水道加入金については、合併時に中之条町の制度に統一する。

(七) 京塚簡易水道、パイロット暮坂小水道については、平成二十二年度において維持管理等を調整する。

(八) 大原専用自家水道、暮坂専用自家水道については、合併時に廃止し新しく熊倉小水道を加える。

(九) 六合村合併処理浄化槽設置補助金については、合併時に中之条町の制度に統一する。

二二・二八 その他の事業の取扱い

(一) 指定金融機関等については、現行のまま新町に引き継ぐ。また、収納代理金融機関についても速やかに調整する。

(二) くまのこチャンネルについては、現行のまま新町に引き継ぐ。

二三 新町基本計画

中之条町・六合村 合併まちづくり事業計画

―新町基本計画―

計画の趣旨

新町基本計画は、中之条町と六合村の総合計画を踏まえて作成するもので、合併による財政支援措置を有効に活用した新町における「まちづくりの主要事業」を、行財政の効率的な運営体制を確立しながら実施し、合併後の速やかな一体性を促進するとともに、住民福祉の向上を図るための具体的な施策の方向を示すものです。

計画の構成

一 計画の構成

二 合併の必要性と効果

三 新町の概要

四 まちづくりの基本方針

五 まちづくりの計画・新町の施策

六 公共的施設の統合整備

七 財政計画

八 計画推進のために

計画の期間 平成二十二年度から平成三十一年度までの十か年とする。

一 快適で住みよいまちづくり

(一) 総合的な交通体系の整備

【主要事業】 ○町道（村道）の整備

・待避所の設置や見通しを確保するための部分的な改良、未改良区間の整備

○道路環境の整備

・交通安全に配慮した道づくりの促進

・景観に配慮した道づくり

・日本ロマンチック街道との連携をはかった

道路景観整備

・公共交通機関の利用促進

・路線バスの確保、鉄道の運行強化

【県事業】 ○国道・県道の整備

・新町の地域間の連携・道路の強化及び均衡ある発展のため、県に要望する道路整備

・（国道三五三号、国道一九二号、国道四〇五号、（主）中之条湯河原線、県道下沢渡原町線の整備など）

(二) ゆとりある生活環境の整備

【主要事業】 ○安全・安定・良質な水の供給

・計画的な施設の更新、浄水施設の整備

○汚水処理施設の整備

・集合処理施設の整備、浄化槽設置の推進

○循環型社会づくりの推進

・ごみ等廃棄物の適正処理等

(三) 安全な生活環境の整備

【主要事業】

○防災対策の充実

- ・ 消防団との連携強化、地域の自主防災組織の設置・育成、防災意識の啓発
- ・ 避難場所の整備と周知、学校体育館等の防災拠点施設における耐震性の強化
- ・ 防災備蓄倉庫・防災機材・防災無線などの整備充実

○消防体制の充実

- ・ 消防団員の人材確保と資質の向上
- ・ 防火水槽・消火栓・消防進入路の整備・点検、機械器具等の計画的な整備・更新
- ・ 広域消防や救急医療機関との連携を強化した救急救命対策の充実

○防犯対策の強化

- ・ 学校や家庭などでの防犯教育、地域での出前講座の開催
- ・ 防犯協会や生活安全推進委員との連携強化・防犯灯の設置推進

○交通安全対策の推進

- ・ 子供や高齢者・障害者への交通安全教室や講習会の開催
- ・ バリアフリー化等歩行空間の整備
- ・ 交通事故等の発生した危険箇所の改良、カーブミラーや防護柵・標識などの交通安全施設の整備

【県事業】

備

○道路・砂防の整備

- ・ 安全性の確保のため、県に要望する事業（道路災害防（主）中之条草津線）、地すべり対策（四万地区・泰峰地区）

二 豊かで活力あるまちづくり

(一) 地域産業の振興

【主要事業】

○農業の振興

- ・ 農業生産基盤の整備
- ・ 地域の実情に応じた基盤整備の推進、農地・農道・農業用水路の整備
- ・ 農業担い手の育成・確保
- ・ 農村地域や農業団体の活動を強化した農業後継者の育成・確保
- ・ 農業生産対策
- ・ 農産物の付加価値化・ブランド化の推進
- ・ 地域に合った生産性や収益性の高い特産物の開発と普及の推進
- ・ 地産地消の推進
- ・ 有害鳥獣対策
- ・ 観光農業の推進
- ・ ふるさとの自然景観や農村風景の保全と併せて観光と農業の連携による体験農業の推進

○林業の振興

- ・ 森林の保全と林業基盤の整備
- ・ 長期的な視点での造林や保育の推進
- ・ 林道や作業道などの林業基盤整備
- ・ 特用林産物の推進
- ・ 特産品の開発と産地化の推進
- ・ 観光業との連携
- ・ 森林機能（森林浴・森林体験）を活用した「見せる林業」「体験できる林業」の実施

○商業の振興

- ・ 街並み景観整備
- ・ 街並み景観に配慮した歴史的な施設の保全景観に配慮した名所・史跡等の誘導看板の設置
- ・ 業種間の連携・新商品の開発
- ・ 観光・農業など他の業種との連携の推進地域特産物など新しい商品の開発
- ・ 融資制度の有効利用の促進

○工業の振興

- ・ 経営の安定化
- ・ 企業の経営診断の実施、経営健全化への支援
- ・ 融資制度の有効利用の促進
- ・ 商工会組織の充実
- ・ 企業誘致対策
- ・ 中之条町の美しい自然環境や景観に配慮した地

○観光業の振興

域に適した企業誘致の推進

- ・ 観光施設の整備
- ・ 既存観光施設の修繕・整備
- ・ 景観や国際的な交流に配慮した観光案内標識の整備
- ・ 観光資源の活用と連携
- ・ 観光資源と自然環境を発掘・活用した町内外の人々がふるさとを感じることが出来る景観づくり農業や林業などとの連携及び文化財などの歴史的地物を活用した町内全体の周遊化
- ・ 歴史や景観上、重要な建造物の積極的な保全・活用
- ・ 観光宣伝の充実
- ・ 伝統行事やイベントの情報発信
- ・ 首都圏を中心としたキャンペーンの実施
- ・ 観光団体・観光関連団体との連携強化
- ・ 観光ボランティアの充実
- ・ 農産物直売所など観光の資質向上
- ・ 町外観光団体との連携を密にした周遊ルートの検討や情報収集
- ・ 地域産業の連携体制
- ・ 地域内製造、地域内販売、地域内消費の推進
- ・ 各業種が連携した地域内流通体制の整備推進

【県事業】

○自然景観の保全と活用

- ・自然に配慮した自然景観の整備のため、県に要望する事業（野反湖周辺遊歩道等の整備）

○千客万来支援事業による支援

- ・ハード・ソフト両面の事業展開により、観光客が長時間滞在し、また訪れたいと思えるような観光のまちづくりのための支援事業

(二) 就業環境の充実

【主要事業】 ○就業機会の拡充

- ・地元産業の支援、地元就業の促進、新規事業者の招致の促進

三 人と文化をはぐくむまちづくり

(二) 学校教育の振興

【主要事業】 ○幼児教育の充実

- ・施設・設備の整備など、より良い教育環境の整備

- ・家庭・地域と幼稚園の連携を強化した教育体制の充実

○小・中学校教育の充実

- ・教育内容の充実
- ・基礎基本習得のため学校内の指導体制の充実や指導内容の工夫
- ・家庭・地域教育力の向上

- ・家庭・地域社会と密接に連携した教育力の向上
- ・教育体制の充実

- ・補充・発展的な学習の強化、学ぶ機会の充実と学びの習慣化

教職員の資質向上のための研修の充実

- ・長期的視点に立った学校の適正規模の検討
- ・いじめ、不登校、非行防止のための相談体制の充実

・小規模校対策

・教育環境の整備

- ・施設、設備、教材などの計画的な整備充実
- ・耐震基準に適合した校舎や体育館などの整備
- ・ふるさとの自然を活用した環境学習・体験学習の実施

・通学対策の充実

- ・学校内と通学の安全確保
- ・スクールバスなど遠距離通学対策の実施

(二) 社会教育の推進

【主要事業】 ○社会教育の充実

・学習活動の推進

- ・高齢者への学習機会や情報提供の充実
- ・ふるさとの文化・風習を培うため、また、町民の多様な学習ニーズに応えるため、公民館事業などによる各種学級・講座の充実

農業との連携も含めた自然体験を通じた環境学習の実施

・社会教育関係団体の育成支援

・青少年の健全育成

各行政区の青少年育成推進員研修会等の実施

県内外の情報や対策の収集による健全育成体制の拡充強化

○社会教育環境の充実

・学習センターの充実、図書館の充実

(三) スポーツの振興

【主要事業】 ○スポーツ活動・環境の充実

・スポーツ活動の推進

競技スポーツから生涯スポーツまで多様なス

ポーツ活動の推進

体育協会や各種スポーツ団体の活動支援体育指

導委員の確保と資質の向上、各種団体の指導者

の育成

保健・福祉分野と連携した高齢者のスポーツ活

動の推進

・施設・設備の充実

学校体育施設の町民への開放

・管理運営体制の充実

利用時間帯の柔軟化など利用しやすい施設運営

施設の利用促進のため管理運営体制の改善

(四) 地域文化の振興

【主要事業】

○芸術・文化活動の振興

・芸術・文化活動の推進、文化施設の充実

○文化財等の保護・活用

・文化財等の保護

ふるさととの文化財絵画展やふるさと講座の継続実施、広報活動や学習機会の充実、指定文化財や歴史民俗資料館収蔵資料の防災対策や修理などの適切な保護

・文化財等の伝承

郷土芸能や伝統行事の保存団体への活動支援

学校教育や生涯学習で風習・習慣を含めた文化に対する学習を深め、ふるさとへの愛着の涵養

・文化財等の活用

風習、習慣、施設、周辺景観の一体的な景観形

成の整備・保全

観光スポットも含めた地区別文化財マップの作

成及び説明板・案内板の設置

・世界遺産登録を目指した保存と活用

県内初の伝統的建造物群保存地区である赤岩地区及び富沢家住宅、栃窪風穴の保存整備の推進並びに世界遺産登録を視野に入れた活用促進

四 健やかで生き生きとしたまちづくり

(一) 健康づくりの推進

【主要事業】

○健康づくり体制の充実

・母子保健事業

乳幼児の健康診査及び相談の継続・充実
安心して子どもを産み育てることができるとして体制の整備

乳幼児期から学齢期まで一貫した生活習慣病の予防教育の推進

適切な予防接種実施のための医療機関との連携

・健康増進事業

健康診査・各種がん検診等の充実

疾病の早期発見と早期治療及び適切な保健指導
生活習慣病予防教育体制の充実に努め、健康な高齢期を迎えることができるよう健康づくり事業の推進

・高齢期保険事業

自立した高齢者になるよう健康づくり事業や介護

予防事業の推進

○健康づくり環境の整備

・健康づくり環境の整備充実

・地区組織活動の推進

・健康づくり活動の推進

行政区や地域のグループなどを対象にした健康相談の実施

地域ぐるみでの健康づくり活動の推進

(二) 医療環境の充実

【主要事業】

○医療給付制度の充実

・医療機関の重複受診や多受診者などへ適切な受診を推進するための訪問指導の実施

・疾病の早期発見・早期治療のための事業の充実

・生活習慣病の予防事業の実施

○医療体制の充実・確保

・生み育てる環境づくり

産科・小児科等の適切な医療サービスが受けられるよう関係機関への働きかけ

・かかりつけ医師・歯科医師等の定着

・保健・医療・福祉の連携の強化

・保健・医療・福祉の情報ネットワークの構築

予防から治療・リハビリテーションに至る総合的なサービスを提供できる体制の整備

救急医療や災害時医療の充実・整備

高度医療等の適切な医療サービスを受けられる

よう関係機関への働きかけ

(三) 福祉の充実

【主要事業】

○地域福祉の充実

・福祉意識の高揚

研修会の開催や広報などによる啓発活動の推進
学校教育や社会教育の場など、あらゆる機会を活用した福祉教育の推進

・地域福祉活動の推進

社会福祉協議会の機能の充実強化

民生委員児童委員との連携強化

幅広い福祉ボランティア活動の推進

・福祉のまちづくり推進

公共施設のバリアフリー化などの促進

○高齢者福祉の充実

・生きがいと健康づくりの推進

老人クラブへの助成やボランティア活動への支援

シルバー人材センターの充実

文化・スポーツ活動の推進

在宅生活支援体制の強化

・介護保険制度の充実

介護サービスの確保と介護予防等の健康づくり

事業の推進

地域包括支援センター活動事業の推進

○児童福祉の充実

・保育所の充実

延長保育、一時保育、特定保育など特別保育事業

業の拡充

子ども同士のふれあいや遊び場の提供、子育て

に関する相談など、地域子育て支援センターの

機能の充実

・児童の健全育成

小学生までを対象とした学童保育所の充実

・地域における子育て支援の推進

ゆびぎりなどの公共の施設等における対応

保育ママやファミリーサポートセンターなど民間事業の活用

・子育て家庭への支援

福祉医療費や出産奨励手当金給付事業をはじめ、保育料の軽減措置などの施策の継続

○障害者福祉の充実

・自立と社会参加の促進

ハローワークなどの関係機関と連携による就業

情報の提供

授産施設などの運営強化支援

福祉サービスの充実

居宅支援事業者や社会福祉法人などと協力した

サービスの拡充

障害者の自立支援のための施策の推進

生活環境の整備

・デイサービスセンターや地域活動支援センター

の充実

五 自主自立のまちづくり

(一) 協働のまちづくり

【主要事業】

○住民参加の推進

・住民参加体制の推進

町民の手による多彩なまちづくり活動の推進

町民からの意見・提案などを考慮した町民と行政が一体となった事業の執行

各種委員会や審議会等の委員の幅広い分野から
の人選や公募を行う住民参加の拡充

・情報の共有化の推進

情報公開制度やICT（情報通信技術）を活用
した町民と行政の情報の共有化

○広報広聴活動の充実

・広報活動の充実

常に読者の立場を考慮し、充実した情報を分か
りやすく、読みやすく「ふるさと」を感じる広
報活動の推進

・広聴活動の充実

広聴活動の改善や充実を図り、より公平、公正
な意見等を聴ける体制づくり

(二) 行財政改革の推進

【主要事業】

○行政運営の効率化

・行政機構の改善

課の統廃合など機構改革によるスリムな組織体
制の整備

町民から見て分かりやすい「まちづくり指標」

を定め、事業の透明性の確保

・職員の資質の向上

各階層別・職種別研修制度の充実

適切な人事運営と計画的な定員管理の実施

○財政運営の健全化

・効率的な財政運営

積極的な事務事業の見直し・合理化による一般
財源の削減

投資的効果を考慮した事業執行

・自主財源の確保

課税客体の的確な把握と適正な課税

適正な受益者負担制度の確立

・優良な依存財源の確保

長期的視野に立った地方債の発行と優良資金の
確保

民間の活力や資金を導入した効果的な事業展開
の推進

○ 閉村式

期日 平成二十二年三月二十五日

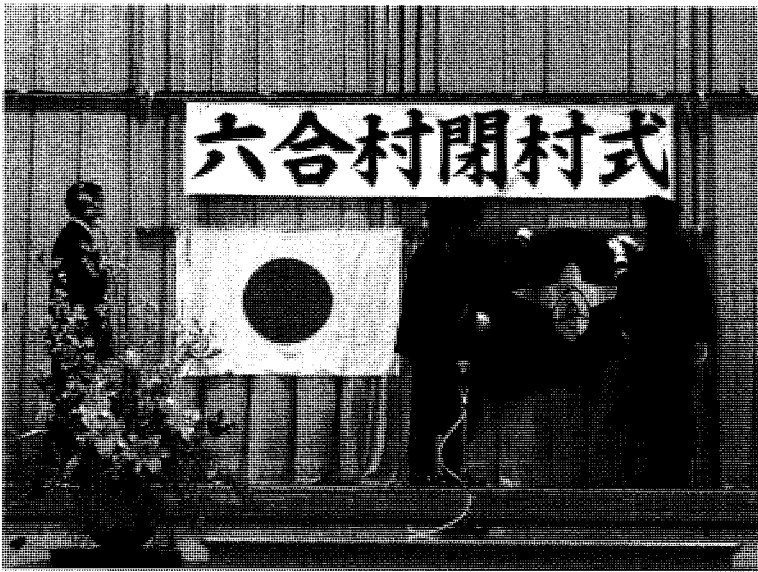
場所 六合村総合体育館

式次第

- 1 開式のことば
- 2 国歌斉唱
- 3 式辞
- 4 議長あいさつ
- 5 表彰

村政功労受賞者名簿

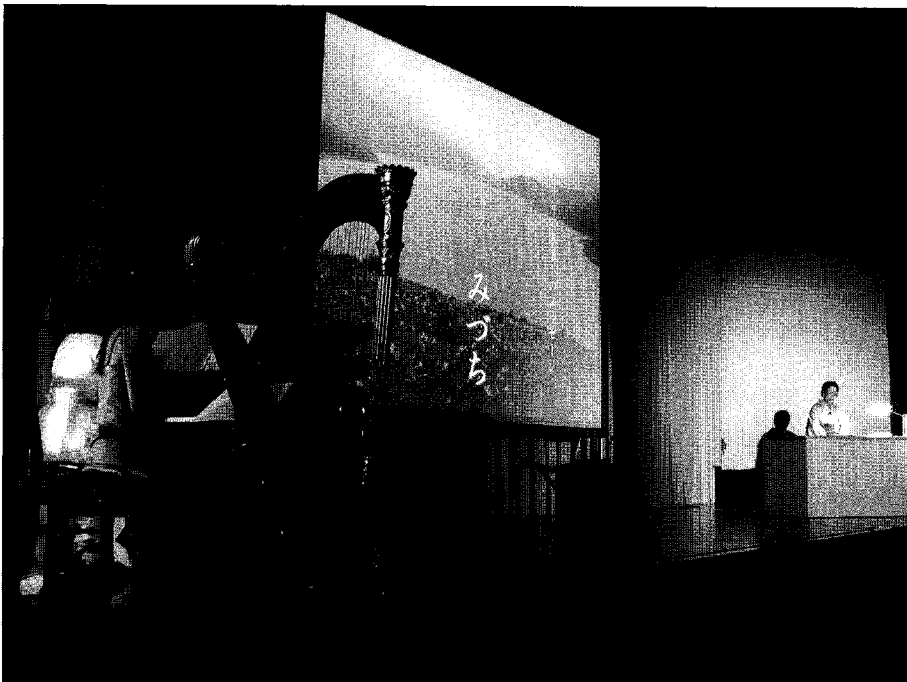
- | | |
|--------|-----|
| 本多秀里 | 元村長 |
| 湯本喜太郎 | 元議長 |
| 富沢久幸 | 元議長 |
| 山本由平 | 元議長 |
| 本多秀次 | 元議長 |
| 中村義司 | 元議長 |
| 富沢久好 | 元議長 |
| 山口國次 | 元議長 |
| 星野次雄 | 元議長 |
| 来賓あいさつ | |
| 村旗降納 | |
| 閉式のことば | |



閉村式（村旗降納）

記念事業

創作オペラ「みづち」 丹治富美子 村民体育館

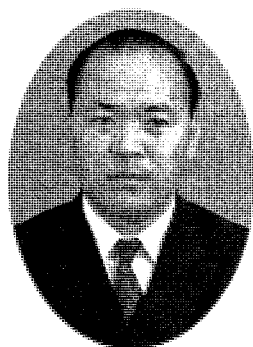


記念事業（創作オペラ「みづち」丹治富美子先生講演）

三 歴代三役

六合村長

篠原 秀雄 (しのはら・ひでお) 昭和三年十月七日生



六合村大字赤岩九五九の一

第二十七代・第二十九代

任期 自 昭和四十四年四月三十日

至 昭和四十八年四月二十九日

自 昭和五十二年四月三十日

至 昭和五十六年四月二十九日

赤岩字広池に生まれ、学校卒業後、一時六合村農業会に勤めたが家庭の都合でやめ、家業の農林業に従事すること十年、昭和三十一年十二月六合林産興業を設立して木材業を開始した。

戦後農地法が改正され、農業委員会が発足すると推されて農業委員に当選、若冠二十五歳で農政に参加することとなった。三年の任期が充ちて退任したが、この時の手腕が認められて、昭和四十年五月には六合村森林組合の理事に迎えられ、昭和四十二年四月には六合村商工会長に選

任されている。

村長に就任したのは昭和四十四年四月で、昭和生まれの新進気鋭の若い村長が誕生した。県内屈指の名村長として五たび村長の座についた福嶋前村長の後任として、この若い村長に寄せる村民の期待は大きかった。

一期目の功績は眼を見張るものがあつた、まず、南大橋の架橋がある。村の中央を流れる白砂川の溪谷は、すばらしい溪谷美を作るが一面、兩岸の交通を困難にし、そのためややもすると人心の融和を欠きやすい。この不便と欠点を除くために架けられたのが南大橋である。

次に入山小中学校のプール新設や、林道小雨草津線の改修、暮坂及田代原パイロット事業、野反湖ロッジ新築、総合運動場用地取得、各部落間車道新設、公民館入山分館新築、日影幼稚園新築、青年・婦人会集会場及び部落公民館を建設した。六合村誌の発刊についても熱望し昭和四十八年に発刊となった。一期目最終年では、総合運動場整備と総合庁舎建設について企画した。

昭和四十八年四月二期目を目指し出馬するが、激戦の末落選するも再度、昭和五十二年四月の選挙に出馬し見事返咲きを達成し二期目の篠原村政が始まった。

二期目の功績は、一期での経験を活かし精力的に新しい村づくりに取り組んだ。まず、入山小学校特別教室新築、六合小学校体育館新築、山村広場整備、国鉄六合山荘開業、ジーンギスカンを活用した六合山荘センター整備、村民体育館建設、六合村制施行八十周年記念式典を開催した。二期八年間、村の発展のために尽力した。

山口 助 (やまぐち・たすけ) 大正三年十月二十四日生



六合村大字入山甲一五一一

第二十八代・第三十代・第三十二代

任期 自 昭和四十八年四月三十日

至 昭和五十二年四月二十九日

自 昭和五十六年四月三十日

至 昭和六十年四月二十九日

自 昭和六十年四月三十日

至 平成 元年四月二十九日

自 平成 元年四月三十日

至 平成 五年四月二十九日

大正三年(一九一四)十月二十四日、六合村入山の篤農家の長男として生まれる。

六合実業補習学校を卒業後、青年団に入団。昭和十三年、六合青年団長に就任し、戦時下の青少年の健全育成に情熱を傾けた。

昭和十四年に吾妻連合会長から表彰を受けた。同十四年十一月、招集により近衛輜重兵連隊に入隊し、翌十五年四月に勲八等白色桐葉章を受け、太平洋戦争中の十九年六月、勲七等瑞宝章を受賞した。

終戦後、復員して家業の農業に従事する傍ら、民生委員、入山農協組合長理事を務めた。

昭和二十六年に村議に当選以来、四期一六年間「住民本位の政治」を信条に明るい郷土づくりに貢献、同三十年五月から四年間は議長として

円滑な議会運営に尽力した。

昭和四十八年四月、村長として当選、一期を務め退任し、同五十六年四月に再び村長選に出馬して当選。以後平成五年四月まで、時代の流れが大きく変わろうとするとき、明日の新しい村づくりに精力的に活動を続け、新しい時代感覚の業績を残した。

そのほか、昭和二十九年に農業委員に就任。六年間会長を務め、まとめ役としてその役割を果たした。

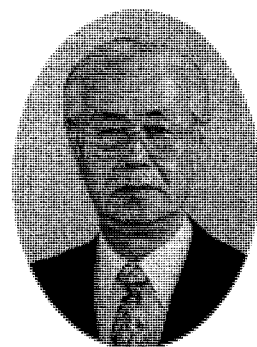
また、森林組合では、理事、監事となり、組合長も務めた。

なお、品本ダムの建設に関しては、国家的公共事業とはいえ、地区の苦衷多大の折、大局的な見地に立って善導した。

これらの功績により、昭和三十四年六月に郡町村議会議長会感謝状、昭和三十六年二月に県町村議会議長会長表彰、四十二年三月に全国町村会長長表彰、六十年二月に県町村会長表彰、六十一年一月に全国町村会長表彰、六十二年十月に県知事表彰を受けた。

また、平成六年二月には、勲四等瑞宝章を受章した。それに、県特別功労賞、村特別功労賞を受賞している。

本多 秀里（ほんだ・ひでさと） 大正十四年十二月二十五日生



六合村大字入山三八四

第三十三代、第三十四代

任期 自 平成 五年四月三十日

至 平成 九年四月二十九日

自 平成 九年四月三十日

至 平成十三年四月二十九日

大正十四年（一九二五）十二月二十五日、入山で父春長、母みなの長男として生まれる。

小中学校を六合村で過ごし、向学心に燃え東京に出て、明治大学政治経済学部で学ぶ。昭和二十年六月東部三十八部隊に入隊。昭和二十九年九月、終戦により除隊となった。

その後、東京荷役管理（株）に三八年長きにわたり勤務し、会社の企画、管理、運営にあたり、その中心となり、会社発展に大きく寄与した。

また退職後は、会社運営の実績を生かして、六合村農業協同組合理事に就任したのをはじめ、村議会議員に当選。その後、平成五年四月には、六合村長に就任して二期八年間、村の発展のために尽力した。

その間、利根川砂防工事期成同盟会長を二期務め、会のまとめと砂防のための施策について大きく寄与した。

現在は、公職から離れたが、生来の奉仕精神から、地区の役や村の役を積極的に受け、郷土の発展に心を注いでいる。

また、晴耕雨読に徹し寸暇を惜しんで山や畑を友とし、読書も欠かすことがない。

平成十年に県知事から、地方自治の確率と住民福祉の増進に寄与した。そして、群馬県総合表彰を受ける。平成十三年に吾妻郡町村会から、地方自治の振興の功績により、感謝状を受ける。平成十四年に群馬県知事から、地域発展と住民の福祉に貢献したことにより感謝状を受ける。また、同年に六合村長から、地方自治の確率と住民福祉の功績により、六合村二号功労賞を受けた。

山本 三男 (やまもと・みつお)

第三十五代〜三十七代

任期 自 平成十三年四月三十日

至 平成十七年四月二十九日

自 平成十七年四月三十日

至 平成二十一年四月二十九日

自 平成二十一年四月三十日

至 平成二十二年三月二十七日



昭和二十二年（一九四七）十月九日、六合村入山に生まれる。

村立入山中学校に学び、昭和四十一年に群馬県立吾妻高等学校（長野原分校）を卒業した。都会に職を求めて、国土計画（株）、日本国有鉄道に勤務するが、愛郷心が強く故郷に帰った。

建築業に従事して、商工会役員として地域活性化のため活動した。また商工会が進めていた一村一品運動では、地場産業の創出に協力し、花インゲンの缶詰、自然生山いも粉のアイデアを提案し特産品開発など、地域おこしに成果をあげた。

平成三年から平成十三年まで村議会議員を三期一〇年間務め、その間に村監査委員、産業建設常任委員長、総務文教常任委員長を歴任した。

平成十三年四月、村長に就任以来、行財政の改革、観光産業の振興、少子化の進行する教育問題にも取り組んだ。

教育振興では、村内の幼児教育三年保育を目指して統合を検討、要望の多かった保育所の設置については、幼児教育、子育て支援の充実を計るため、国の構造改革特区第一弾の認定を受けて、幼保一体化施設「六

合こども園」を建設、平成十六年四月に開園した。

国地方共に厳しい財政状況の中、村の将来を考え町村合併を決断しあらゆる選択肢を検討した結果、平成二十二年三月二十八日中之条町と合併した。

歴代村長

氏名	就任年月日	退任年月日
27代 篠原 秀雄	昭和四十四・四・三十	昭和四十八・四・二十九
28代 山口 助	昭和四十八・四・三十	昭和五十二・四・二十九
29代 篠原 秀雄	昭和五十二・四・三十	昭和五十六・四・二十九
30代 山口 助	昭和五十六・四・三十	昭和六十・四・二十九
31代 同人	昭和六十・四・三十	昭和元・四・二十九
32代 同人	平成元・四・三十	昭和五・四・二十九
33代 本多 秀里	平成五・四・三十	昭和九・四・二十九
34代 同人	平成九・四・三十	昭和十三・四・二十九
35代 山本 三男	平成十三・四・三十	昭和十七・四・二十九
36代 同人	平成十七・四・三十	昭和二十一・四・二十九
37代 同人	平成二十一・四・三十	昭和二十二・三・二十七

助役

氏名	就任年月日	退任年月日	備考
山田 達治	昭和四十六・九・一	昭和五十・八・三十一	満期
同人	昭和五十・九・一	昭和五十四・三・三十一	〃
山本 栗岡	昭和五十五・四・一	昭和五十九・三・三十一	〃
安原 義治	昭和六十・一・十	平成元・一・九	〃
同人	平成元・一・十	平成五・一・九	〃
中沢 富一	平成五・五・十八	平成九・五・十七	〃
同人	平成九・五・十八	平成十三・五・十七	〃
茂木 真一	平成十三・五・十八	平成十七・五・十七	〃

収入役

氏名	就任年月日	退任年月日	備考
山口宮治郎	昭和四十八・十・一	昭和五十二・九・三十	満期
湯本 省三	昭和五十二・十・一	昭和五十六・九・三十	〃
富沢虎四郎	昭和五十八・八・一	昭和六十二・七・三十一	〃
同人	昭和六十二・八・一	平成三・七・三十一	〃
同人	平成三・八・一	平成五・四・二十九	〃
篠原 正忠	平成五・五・十八	平成九・五・十七	満期
富沢 一二	平成九・五・十八	平成十三・五・十七	〃

四 議 会

歴代村議会議長

代	氏 名	就任年月日	退任年月日
11	山田 松雄	昭和四十六・五・十四	昭和五十・四・二十九
12	湯本喜太郎	昭和五十・五・十三	昭和五十四・四・二十九
13	富沢 恵秋	昭和五十四・五・九	昭和五十六・五・二十九
14	黒岩 善一	昭和五十六・五・二十九	昭和五十六・七・二十七
15	湯本喜太郎	昭和五十六・七・二十七	昭和五十六・八・十四
16	山本 勲	昭和五十六・八・十四	昭和五十七・二・二十
17	田中 金蔵	昭和五十七・二・二十	昭和五十八・四・二十九
18	富沢 恵秋	昭和五十八・五・十	昭和五十八・十二・二十三
19	萩原 与吉	昭和五十九・一・二十	昭和六十二・四・二十九
20	富沢 久幸	昭和六十二・五・七	平成 元・一・二十三
21	山本 由平	平成 元・一・二十三	平成 三・四・二十九
22	本多 秀次	平成 三・五・八	平成 七・四・二十九
23	中村 義司	平成 七・五・九	平成 十一・四・二十九
24	富沢 久好	平成 十一・五・六	平成 十五・四・二十九
25	山口 国次	平成 十五・五・八	平成 十七・五・八
26	星野 次雄	平成 十七・五・九	平成 十九・四・二十九
27	篠原 辰夫	平成 十九・五・九	平成 二十一・五・八
28	山口 悦行	平成 二十一・五・八	平成 二十二・三・二十七

歴代村議会議副議長

代	氏 名	就任年月日	退任年月日
11	富沢 恵秋	昭和四十六・五・十四	昭和五十・四・二十九
12	田中 金蔵	昭和五十・五・十三	昭和五十四・四・二十九
13	黒岩 善一	昭和五十四・五・九	昭和五十六・五・二十九
14	田中 金蔵	昭和五十六・五・二十九	昭和五十六・八・十四
15	富沢 恵秋	昭和五十六・八・十四	昭和五十八・四・二十九
16	黒岩 善一	昭和五十八・五・十	昭和六十二・四・二十九
17	山本 由平	昭和六十二・四・二十九	平成 元・一・二十三
18	山本昭五郎	平成 元・一・二十三	平成 三・四・二十九
19	富沢 久好	平成 三・五・八	平成 七・四・二十九
20	富沢 久好	平成 七・五・九	平成 十一・四・二十九
21	山口 国次	平成 十一・五・六	平成 十五・四・二十九
22	星野 次雄	平成 十五・五・八	平成 十七・五・八
23	山口 悦行	平成 十七・五・九	平成 十九・四・二十九
24	山口 悦行	平成 十九・五・九	平成 二十一・五・八
25	山本日出男	平成 二十一・五・九	平成 二十二・三・二十七

歴代の村会議員

氏名	就任年月日	退任年月日
山田 隆太郎	昭和五十・四・三十	昭和五十四・四・二十九
加辺 秀市	”	”
湯本 喜太郎	”	”
田中 金蔵	”	”
萩原 与吉	”	”
山本 勲	”	”
山口 國次	”	”
市川 浪二	”	”
黒岩 善一	”	”
富澤 恵秋	”	”
山本 善次	”	”
篠原 恒司	”	”
富澤 恵秋	昭和五十四・四・三十	昭和五十八・四・二十九
黒岩 善一	”	”
山本 由平	”	”
山口 雄平	”	”
加辺 秀市	”	”
山本 昭五郎	”	”
山口 國次	”	”
山田 隆太郎	”	”
湯本 喜太郎	”	”
湯本 栄次郎	”	”
山本 勲	”	”
田中 金蔵	”	”

富澤 恵秋	昭和五十八・四・三十	昭和五十八・十二・二十四
黒岩 善一	”	昭和六十二・四・二十九
山本 由平	”	”
湯本 貞二	”	昭和六十一・八・十五
星野 捨吉	”	昭和六十二・四・二十九
加辺 秀市	”	昭和五十八・七・二十六
田中 金蔵	”	昭和六十二・四・二十九
山本 昭五郎	”	”
山口 雄平	”	”
山本 敏明	”	”
本多 秀次	”	”
萩原 与吉	”	”
富沢 久幸	昭和六十・四・十四	昭和六十二・四・二十九
富沢 久好	”	”
富沢 久幸	昭和六十二・四・三十	平成 一・三・十四
山本 由平	”	平成 三・四・二十九
富沢 久好	”	”
山本 昭五郎	”	”
本多 秀次	”	”
福嶋 貞夫	”	”
安原 繁安	”	”
山口 一元	”	”
中村 義司	”	”
山口 國次	”	”
湯本 栄次郎	”	”
山本 敏明	”	”
市川 昭次郎	平成 一・四・十六	”

山口 國次	富沢 久好	篠原 松次	黒岩 勇	山本 好一	高原 秀雄	本多 佐京	山本 三男	湯本 榮次郎	安原 繁安	山口 一元	町田 喜彦	富沢 久好	中村 義司	湯本 榮次郎	本多 秀里	篠原 幸夫	中村 義司	山本 照雄	山本 三男	福嶋 貞夫	安原 繁安	市川 昭次郎	山口 一元	町田 喜彦	富沢 久好	本多 秀次
”	平成 十一・四・三十	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 七・四・三十	平成 五・四・十八	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 三・四・三十
”	平成 十五・四・二十九	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十一・四・二十九	平成 七・四・二十九	平成 五・三・三十一	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 七・四・二十九

篠原 巖	山口 榮蔵	富沢 昭司	篠原 辰夫	中澤 宏衛	山本 貞雄	中澤 宏衛	篠原 巖	山本 日出男	山口 悦行	篠原 辰夫	山田 正人	富沢 久好	星野 次雄	山口 國次	篠原 巖	山本 日出男	中村 義司	中沢 久吉	篠原 辰夫	星野 次雄	山口 悦行	篠原 茂夫	浅見 行雄	山田 正人	山本 好一	山本 三男	
”	”	”	”	平成 十九・四・三十	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十五・四・三十	”	平成 十三・四・二十二	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十一・四・三十
”	”	”	”	平成 二十二・三・二十七	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十九・四・二十九	”	平成 十五・四・二十九	”	”	”	”	”	平成 十五・四・二十九	平成 十二・十二・二十六	”	”	平成 十五・四・二十九	平成 十三・三・六

五 財政

歳入歳出の変遷

財政(予算の推移)

年度	金額	備考
明治三十三年度	一、七二一円	分村
大正 五年度	五、七〇九円	
大正 七年度	九、六三九円	(臨時部) 二〇七円
大正 九年度	一七、〇七七円	
大正 十五年度	二二、八四二円	(臨時部) 六、五二四円
昭和 六年度	二二、二八六円	
昭和 十九年度	四一、〇七八円	
二十一年度	四七六、四六六円	
三十年度	二二、五六六、三三八円	
四十年度	五九、三四二、〇〇〇円	
五十年度	五〇五、〇〇〇、〇〇〇円	
六十年度	一、三四四、七〇〇、〇〇〇円	
平成 元年度	一、四二二、二〇〇、〇〇〇円	
平成 二年度	一、五八六、〇〇〇、〇〇〇円	
平成 三年度	一、六八五、〇〇〇、〇〇〇円	
平成 四年度	二、七六七、〇〇〇、〇〇〇円	
平成 五年度	二、一一〇、〇〇〇、〇〇〇円	

六年度	二、一六〇、〇〇〇、〇〇〇円
七年度	二、二二三、〇〇〇、〇〇〇円
八年度	二、三三〇、〇〇〇、〇〇〇円
九年度	二、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇円
十年度	二、八二一、〇〇〇、〇〇〇円
十一年度	二、七六五、〇〇〇、〇〇〇円
十二年度	二、三二九、〇〇〇、〇〇〇円
十三年度	二、一三九、〇〇〇、〇〇〇円
十四年度	二、一二四、〇〇〇、〇〇〇円
十五年度	二、二二六、〇〇〇、〇〇〇円
十六年度	二、一五三、〇〇〇、〇〇〇円
十七年度	二、〇〇四、〇〇〇、〇〇〇円
十八年度	二、〇〇八、〇〇〇、〇〇〇円
十九年度	一、九四一、〇〇〇、〇〇〇円
二十年度	一、七三五、〇〇〇、〇〇〇円
二十一年度	一、六六一、〇〇〇、〇〇〇円

一般会計・歳入総額（昭和48年度以降）

単位：千円

昭和56年度	昭和54年度	昭和52年度	昭和50年度	昭和48年度	年度 科目
105,997	87,370	75,650	78,416	48,478	1 地方税
17,685	16,143	10,769	5,262	2,073	2 地方贈与税
					3 利子割交付金
					4 配当割交付金
					5 株式等譲渡所得割交付金
					6 地方消費税交付金
					7 特別地方消費税交付金
13,338	13,026	9,416	7,277	3,468	8 自動車取得税交付金
					9 地方特別交付金
603,714	506,966	383,473	268,216	203,328	10 地方交付税
					11 交通安全対策特別交付金
1,905	1,163	910	1,356	1,164	12 分担金及び負担金
12,030	8,513	8,668	7,478	7,115	13 使用料
947	559	578	301	309	14 手数料
167,247	106,134	59,498	53,093	24,850	15 国庫支出金
87,846	70,818	72,374	49,501	29,685	16 県支出金
12,303	8,154	8,499	3,783	31,889	17 財産収入
3,500	10,620	2,061	17,725	1,000	18 寄附金
20,000	4,000	22,400	13,000		19 繰入金
45,388	86,116	40,069	14,622	52,624	20 繰越金
11,244	18,372	5,409	6,038	6,705	21 諸収入
191,100	223,800	129,900	134,200	76,400	22 地方債
1,294,244	1,161,754	829,674	660,268	489,088	歳入合計

単位：千円

平成 3 年度	平成 1 年度	昭和 62 年度	昭和 60 年度	昭和 58 年度	年度 科目
269,897	275,408	219,884	222,225	124,685	1 地方税
30,370	26,122	16,121	15,712	12,257	2 地方贈与税
7,036	2,810				3 利子割交付金
					4 配当割交付金
					5 株式等譲渡所得割交付金
					6 地方消費税交付金
					7 特別地方消費税交付金
27,404	23,624	16,054	14,764	9,877	8 自動車取得税交付金
					9 地方特別交付金
1,129,556	986,551	738,252	661,815	648,019	1 0 地方交付税
954	639	728			1 1 交通安全対策特別交付金
151	47	1,183	446	1,075	1 2 分担金及び負担金
93,449	78,905	25,709	14,984	10,278	1 3 使用料
1,040	1,063	955	1,045	965	1 4 手数料
142,152	137,257	87,835	136,638	269,067	1 5 国庫支出金
102,408	92,193	86,153	121,609	176,078	1 6 県支出金
53,213	14,472	13,473	10,699	11,815	1 7 財産収入
150	260	1,000	9,516	8,250	1 8 寄附金
1,900	104	800	30,700	30,027	1 9 繰入金
62,651	57,400	50,303	60,393	109,175	2 0 繰越金
58,938	36,709	24,641	27,045	17,656	2 1 諸収入
261,500	136,600	160,900	175,800	194,100	2 2 地方債
2,242,769	1,870,164	1,443,991	1,503,391	1,623,324	歳入合計

単位：千円

平成 13 年度	平成 11 年度	平成 9 年度	平成 7 年度	平成 5 年度	年度 科目
273,293	286,258	317,214	284,794	279,285	1 地方税
35,648	31,649	33,154	38,588	34,698	2 地方贈与税
7,798	2,193	2,890	4,565	5,373	3 利子割交付金
					4 配当割交付金
					5 株式等譲渡所得割交付金
15,508	16,428	3,912			6 地方消費税交付金
					7 特別地方消費税交付金
23,177	19,736	26,213	28,628	23,865	8 自動車取得税交付金
4,883	4,774				9 地方特別交付金
1,342,977	1,414,625	1,393,851	1,317,577	1,266,795	1 0 地方交付税
770	804	849	851	854	1 1 交通安全対策特別交付金
105,593	10,188	4,516	3,578	2,647	1 2 分担金及び負担金
26,042	22,772	16,795	13,635	56,941	1 3 使用料
1,127	939	1,215	1,347	889	1 4 手数料
198,450	141,558	143,557	215,330	181,267	1 5 国庫支出金
132,445	473,072	228,258	158,469	221,696	1 6 県支出金
6,213	11,958	17,661	35,227	53,233	1 7 財産収入
	1,075		5,000	5,000	1 8 寄附金
	203,500	253,156	109,000	117,916	1 9 繰入金
109,274	113,467	65,853	93,512	305,007	2 0 繰越金
43,270	33,079	44,381	54,957	61,082	2 1 諸収入
240,600	561,600	269,942	351,500	626,308	2 2 地方債
2,567,068	3,349,675	2823417	2,716,558	3,242,856	歳入合計

単位：千円

平成 21 年度	平成 19 年度	平成 17 年度	平成 15 年度	年度 科目
218,185	240,200	234,527	240,698	1 地方税
23,367	37,703	46,131	36,910	2 地方贈与税
426	695	739	1,485	3 利子割交付金
123	662	356		4 配当割交付金
	294	442		5 株式等譲渡所得割交付金
14,329	15,598	16,276	15,646	6 地方消費税交付金
				7 特別地方消費税交付金
6,652	19,823	21,317	20,991	8 自動車取得税交付金
4,414	1,036	3,684	4,202	9 地方特別交付金
1,129,474	1,003,551	1,031,132	1,134,307	1 0 地方交付税
415	864	883	782	1 1 交通安全対策特別交付金
5,997	4,517	11,017	7,308	1 2 分担金及び負担金
20,988	74,000	27,517	28,670	1 3 使用料
1,016	954	1,045	1,154	1 4 手数料
71,717	30,858	20,458	185,847	1 5 国庫支出金
38,320	152,364	262,951	155,134	1 6 県支出金
17,334	3,949	4,814	4,826	1 7 財産収入
1,389	150	140,000		1 8 寄附金
116,486	76,536	93,427	120,000	1 9 繰入金
72,718	62,804	52,539	71,622	2 0 繰越金
59,766	69,888	50,955	54,818	2 1 諸収入
170,857	139,965	185,800	298,800	2 2 地方債
1,973,973	1,936,411	2,206,010	2,383,200	歳入合計

一般会計・歳出総額（昭和48年度以降）

単位：千円

昭和56年度	昭和54年度	昭和52年度	昭和50年度	昭和48年度	年度
					科目
27,817	22,464	20,307	16,394	7,278	1 議会費
234,241	123,037	141,407	116,457	137,215	2 総務費
211,870	105,814	125,087	100,932	130,266	(1) 総務管理費
12,944	9,878	11,070	10,735	4,303	(2) 徴税費
4,320	3,619	3,090	2,537	1,774	(3) 戸籍住民費
894	2,496	1,769	1,459	306	(4) 選挙費
3,957	973	272	709	467	(5) 統計調査費
256	257	119	85	99	(6) 監査委員費
46,819	39,276	39,141	31,891	19,975	3 民生費
21,385	18,457	19,695	14,378	7,503	(1) 社会福祉費
16,347	13,310	11,143	8,942	6,494	(2) 老人福祉費
9,078	7,504	8,295	8,565	5,978	(3) 児童福祉費
9	5	8	6		(4) 災害救助費
56,601	52,954	38,443	31,590	20,364	4 衛生費
46,652	46,125	31,282	24,144	15,930	(1) 保健衛生費
691	469	352	287	230	(2) 結核対策費
9,258	6,360	6,809	7,159	4,204	(3) 清掃費
134,893	128,909	107,080	71,475	45,356	5 農林水産業費
21,328	21,589	16,145	37,074	10,193	(1) 農業費
5,120	10,260	2,335	521	2,953	(2) 畜産業費
37,384	33,056	10,703	116	9,057	(3) 農地費
62,090	63,974	77,887	33,754	22,509	(4) 林業費
8,971	30	10	10	644	(5) 水産業費
69,015	103,035	10,309	35,053	6,405	6 商工費
289,611	195,537	132,408	160,845	84,273	7 土木費
23,166	36,336	14,283	31,600	18,989	(1) 土木管理費
240,218	132,991	117,484	128,754	64,868	(2) 道路橋梁費
257	407	641	491	416	(3) 河川費
25,970	25,803				(4) 住宅費
32,255	33,668	29,335	23,583	13,297	8 消防費
163,710	290,692	201,634	111,832	121,826	9 教育費
41,597	24,437	22,083	16,712	9,663	(1) 教育総務費
27,815	26,770	94,433	17,950	14,273	(2) 小学校費
35,870	27,784	27,808	46,417	29,700	(3) 中学校費
14,609	12,972	11,902	8,093	17,531	(4) 幼稚園費
9,435	5,473	5,851	5,014	9,132	(5) 社会教育費
20,854	179,642	16,128	9,162	35,114	(6) 体育施設費等
13,530	13,614	23,429	8,484	6,413	(7) 学校給食費
23,977			1,160	1,630	10 災害復旧費
1,545				1,630	(1) 農林水産施設
22,432			1,160		(2) 公共土木施設
					(3) その他
147,263	128,135	68,128	40,158	18,761	11 公債費
1,226,202	1,117,707	788,192	640,438	476,380	歳入合計

平成 3 年度	平成 1 年度	昭和 62 年度	昭和 60 年度	昭和 58 年度	年度 科目
41,930	37,031	33,474	30,943	26,960	1 議会費
538,145	445,547	220,688	222,923	163,463	2 総務費
509,825	412,319	193,968	197,881	136,453	(1) 総務管理費
22,752	23,535	18,859	14,403	12,735	(2) 徴税費
827	2,919	3,214	5,979	4,691	(3) 戸籍住民費
3,740	4,394	1,589	899	3,963	(4) 選挙費
480	1,927	2,749	3,464	5,414	(5) 統計調査費
521	453	309	297	207	(6) 監査委員費
65,920	51,998	48,777	48,778	58,012	3 民生費
32,706	29,508	24,794	25,161	26,206	(1) 社会福祉費
23,465	12,840	12,920	12,997	23,078	(2) 老人福祉費
9,745	9,646	11,059	10,400	8,728	(3) 児童福祉費
4	4	4	220		(4) 災害救助費
306,420	158,368	83,139	101,729	55,118	4 衛生費
264,540	136,313	68,125	88,380	44,689	(1) 保健衛生費
427	460	446	398	458	(2) 結核対策費
41,453	21,595	14,568	12,951	9,971	(3) 清掃費
205,964	146,464	128,332	197,516	280,772	5 農林水産業費
83,774	35,085	24,252	87,371	148,615	(1) 農業費
4,497	6,027	4,899	7,308	4,352	(2) 畜産業費
36,850	33,950	48,948	30,371	47,993	(3) 農地費
80,812	71,372	50,203	72,436	79,781	(4) 林業費
31	30	30	30	31	(5) 水産業費
44,527	59,180	82,215	22,399	23,731	6 商工費
275,027	284,028	298,944	215,734	199,384	7 土木費
40,988	27,715	43,578	28,237	18,347	(1) 土木管理費
229,156	251,103	251,114	184,039	179,704	(2) 道路橋梁費
1,502	3,961	3,406	2,936	169	(3) 河川費
3,381	1,249	846	522	1,164	(4) 住宅費
49,686	45,263	38,975	32,583	28,574	8 消防費
271,551	211,262	189,849	298,341	284,409	9 教育費
45,870	38,005	35,809	32,541	27,151	(1) 教育総務費
28,179	33,904	29,294	163,316	49,799	(2) 小学校費
52,187	46,518	35,702	28,457	131,759	(3) 中学校費
31,650	22,927	20,092	17,017	16,705	(4) 幼稚園費
21,787	16,685	21,243	13,114	13,861	(5) 社会教育費
54,621	19,685	16,216	12,026	31,065	(6) 体育施設費等
37,257	33,538	31,493	31,870	14,069	(7) 学校給食費
59,626	68,859	6,796	8,380	234,942	10 災害復旧費
	10,635	5,104			(1) 農林水産施設
59,626	58,224	1,692	8,380	234,278	(2) 公共土木施設
				664	(3) その他
280,975	261,221	253,544	240,912	196,004	11 公債費
2,139,771	1,769,221	1,384,733	1,420,238	1,551,369	歳 入 合 計

単位：千円

平成 13 年度	平成 11 年度	平成 9 年度	平成 7 年度	平成 5 年度	年度 科目
48,047	47,326	47,985	47,062	44,288	1 議会費
334,770	305,604	354,787	431,689	471,513	2 総務費
289,327	265,642	321,732	393,272	441,769	(1) 総務管理費
28,829	30,519	28,227	29,791	23,604	(2) 徴税費
11,319	4,037	1,841	806	886	(3) 戸籍住民費
4,512	3,867	2,146	5,829	4,157	(4) 選挙費
423	1,136	348	1,469	631	(5) 統計調査費
360	403	493	522	466	(6) 監査委員費
157,396	203,553	330,140	117,617	142,712	3 民生費
48,278	67,916	96,503	55,131	90,020	(1) 社会福祉費
86,466	106,295	224,607	53,693	41,146	(2) 老人福祉費
22,365	29,338	9,030	8,789	11,542	(3) 児童福祉費
287	4		4	4	(4) 災害救助費
198,802	232,112	180,929	283,870	850,548	4 衛生費
143,702	170,618	120,309	226,672	803,499	(1) 保健衛生費
439	443		443	490	(2) 結核対策費
54,661	61,051	60,620	56,755	46,559	(3) 清掃費
355,954	894,483	411,539	409,594	352,026	5 農林水産業費
56,441	398,635	88,930	142,901	80,431	(1) 農業費
113,688	8,910	3,766	12,454	5,756	(2) 畜産業費
113,682	309,416	95,687	197,064	98,384	(3) 農地費
72,113	177,492	223,126	57,145	167,425	(4) 林業費
30	30	30	30	30	(5) 水産業費
61,539	179,006	102,848	146,205	191,316	6 商工費
309,096	439,838	483,515	420,480	477,679	7 土木費
30,426	29,498	20,764	62,176	36,019	(1) 土木管理費
273,797	341,974	434,645	334,839	350,654	(2) 道路橋梁費
2,097	1,962	2,435	1,786	3,233	(3) 河川費
2,776	66,404	25,671	21,679	87,773	(4) 住宅費
65,367	66,677	56,993	84,447	58,336	8 消防費
282,623	402,170	279,839	244,608	237,628	9 教育費
61,926	49,191	46,751	42,769	42,460	(1) 教育総務費
44,502	38,656	34,034	47,203	37,287	(2) 小学校費
61,345	59,888	55,473	45,718	50,773	(3) 中学校費
37,271	37,030	38,515	36,081	30,552	(4) 幼稚園費
22,163	25,892	33,745	24,519	19,588	(5) 社会教育費
20,322	153,186	34,563	14,060	20,807	(6) 体育施設費等
35,094	38,327	36,758	34,258	36,161	(7) 学校給食費
167,535	41,941	39,460	78,685		10 災害復旧費
1,437					(1) 農林水産施設
165,721	19,422	39,460	78,685		(2) 公共土木施設
377	22,519				(3) その他
412,927	407,816	385,102	321,989	293,736	11 公債費
2,394,056	3,220,526	2,673,137	2,586,246	3,119,782	歳入合計

単位：千円

平成 21 年度	平成 19 年度	平成 17 年度	平成 15 年度	年度 科目
36,992	34,990	37,885	40,655	1 議会費
343,920	219,731	232,742	292,788	2 総務費
310,870	180,107	198,220	257,550	(1) 総務管理費
25,340	29,099	22,985	21,646	(2) 徴税費
4,111	3,271	6,555	6,538	(3) 戸籍住民費
2,931	6,684	2,941	6,379	(4) 選挙費
665	282	1,708	319	(5) 統計調査費
3	288	333	356	(6) 監査委員費
150,238	204,542	198,530	276,005	3 民生費
104,860	62,437	73,496	52,163	(1) 社会福祉費
33,527	106,292	84,919	73,076	(2) 老人福祉費
11,851	35,813	40,061	150,662	(3) 児童福祉費
		54	104	(4) 災害救助費
225,362	189,056	201,113	195,927	4 衛生費
182,954	145,245	143,303	140,087	(1) 保健衛生費
317	352	776	395	(2) 結核対策費
42,091	43,459	57,034	55,445	(3) 清掃費
217,739	320,594	592,011	192,704	5 農林水産業費
96,113	98,390	364,648	51,169	(1) 農業費
37,134	37,117	40,174	37,799	(2) 畜産業費
65,888	161,688	148,262	44,773	(3) 農地費
18,594	23,389	38,899	58,933	(4) 林業費
10	10	28	30	(5) 水産業費
135,225	59,461	84,637	107,068	6 商工費
138,122	125,887	99,146	288,437	7 土木費
12,359	17,082	18,273	16,486	(1) 土木管理費
122,152	100,304	76,823	268,571	(2) 道路橋梁費
307	258	405	533	(3) 河川費
3,304	8,243	3,645	2,847	(4) 住宅費
51,159	71,292	55,846	63,360	8 消防費
275,202	247,700	228,830	350,222	9 教育費
47,671	48,123	56,518	52,103	(1) 教育総務費
39,743	57,618	27,215	33,131	(2) 小学校費
32,900	41,963	42,338	42,076	(3) 中学校費
40,943	20,200	30,916	149,865	(4) 幼稚園費
42,300	29,013	23,313	22,563	(5) 社会教育費
40,139	13,735	14,375	16,880	(6) 体育施設費等
31,506	37,048	34,155	33,604	(7) 学校給食費
				10 災害復旧費
				(1) 農林水産施設
				(2) 公共土木施設
				(3) その他
303,831	353,312	383,425	455,896	11 公債費
1,877,791	1,826,565	2,114,165	2,263,062	歳入合計

六 消防団

○ 六合村消防団の設置等に関する条例

昭和五十一年三月二十五日

六合村条例第十五号

(趣旨)

第一条 この条例は、消防組織法（昭和二十二年法律第二二六号。以下「法」という。）第十五条第一項に規定する消防団の設置、名称及び区域については、この条例の定めるところによる。

(消防団の設置、名称及び組織)

第二条 法第九条第三号の規定に基づき、次の消防団を設置する。

六合村消防団

2 前項の消防団の名称及び区域は、別表のとおりとする。

附 則

1 この条例は、公布の日から施行する。

2 この条例施行の際、現に在する消防団は、この条例により設置されたものとみなす。

別表（第二条関係）

名 称	1	六合村一円
六 合 村 消 防 団	設 置	管 轄 区 域

○ 六合村消防団の組織等に関する規則

昭和五十一年三月二十九日

六合村規則第一号

(趣旨)

第一条 この規則は、消防組織法（昭和二十二年法律第二二六号）第十五条第二項の規定に基づき、消防団の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。

(内部組織等)

第二条 消防団の内部組織及び所掌事務は、法令及び条例の定めるところを除くほか、この規則に定めるところによるものとする。

(組織)

第三条 消防団に団本部（以下「本部」という。）及び分団を置く。

2 分団には、必要に応じ部を置くことができる。

3 分団の担当区域は、別表第一のとおりとする。

4 本部及び分団の定数は、別表第二のとおりとする。

(本部)

第四条 本部に団長、副団長及びラッパ長を置く。

2 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき、又は団長が欠けたときは、あらかじめ指名する順序に従いその職務を代理する。

3 ラッパ長は、上司の命を受け分団事務を処理する。

(分団)

第五条 分団に分団長、副分団長、班長及び団員を置く。

2 分団長は、上司の命を受け分団の事務を掌理し、所属団員を指揮監

督する。

3 副分団長は、分団長を補佐し分団長に事故あるときは、その職務を代理する。

4 班長及び団員は、上司の命を受け分担事務を処理する。

(団長及び副団長推薦)

第六条 消防団が団長及び副団長を推薦する場合は、ラッパ長及び分団長の三分の二以上の同意のあることを要する。

(任期)

第七条 団長、副団長、ラッパ長、分団長、副分団長及び班長の任期は、四年とする。ただし、再任は妨げない。

(表彰)

第八条 村長は、分団又は団員がその任務遂行にあたって、その功労が特に顕著である場合は、これを表彰することができる。

2 前項の規定により団員を表彰する場合は、団長が行うことができる。

3 表彰は、表彰状又は賞状及び記念品を授与して行う。

4 消防団員が勤続十年以上在職し、職務に勉勵して功労顕著と認められるときは、勤続章を贈りこれを表彰することができる。

(退職団員表彰)

第九条 退職した消防団員に対し、在職期間に応じ記念品を贈り、感謝の意を表すことができる。

(感謝状の贈呈)

第一〇条 村長は、消防団員以外の個人又は団体で次の各号の一に該当する事項につき、その功績顕著な者に対し、感謝状及び記念品を贈呈することができる。

(1) 水、火災の予防又は鎮圧

(2) 消防設備強化拡充についての協力

(3) 水、火災現場における人命救助

(4) 火災その他の災害時における警戒防ぎよ

(5) 救助に関し消防団への協力

(表彰の時期)

第一二条 表彰等は、毎年秋季消防点検の際行う。ただし、特に必要あるときは、この限りでない。

(補則)

第一二条 この規則の施行について必要な事項は、別に定める。

附則

この規則は、昭和五十一年四月一日から施行する。

附則 (平成四年規則第四号)

この規則は、平成四年四月一日から施行する。

附則 (平成十年規則第五号)

この規則は、平成十年四月一日から施行する。

附則 (平成十五年規則第二号)

この規則は、平成十五年四月一日から施行する。

附則 (平成十八年規則第二十三号)

この規則は、平成十九年四月一日から施行する。

○ 六合村消防支援隊規約

平成十五年三月三十一日

告示第五十六号

(目的)

第一条 過疎、少子高齢化の進展に伴い、自治体消防である六合村消防団の団員確保が困難な状況と、勤務の広域化による昼間の団員在村率の低下に鑑み、消防団員経験者によるボランティア組織を結成し、災害発生時における迅速な対応を図ることを目的とする。

(名称)

第二条 この組織は、六合村消防支援隊（以下「支援隊」という。）

(支援隊を組織する範囲)

第三条 支援隊は、六合村消防団の各分団区域の、退職消防団員をもつて組織する。

(支援隊の業務)

第四条 支援隊は、村長の出動要請を受けて、次に掲げる業務を行う。

- (1) 災害発生時における分団活動の後方支援業務
- (2) 消防団各分団が必要とする消防支援業務
- (3) 消防に関する研修、訓練業務
- (4) その他、村長が要請する業務

(支援隊の定員)

第五条 支援隊の定員は、九十人以下とする。

(組織)

第六条 支援隊は、分団の区域に分隊を置く。

2 分隊の定数は、概ね十五人とする。

(任用)

第七条 隊員は、六合村に住所を有する退職消防団員の中から心身健康な者を村長が任命する。

(任期)

第八条 任期は、一年再任を妨げない。

(分隊役員)

第九条 分隊に、分隊長一人、副分隊長一人を置くものとする。

(分隊の職務権限)

第十条 分隊長は、分隊を統括し分隊の業務を管理執行する。

2 副分隊長は、分隊長を補佐し、分隊長に事故あるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。

3 分隊員は、上司の命を受けて業務を行う。

(服務規律)

第十一条 支援隊員は、村長の要請に基づいて出動し、業務に従事しなければならぬ。ただし、要請を受けない場合であっても、

災害の発生を知ったときは、予め指定する行動計画に従い、業務に従事しなければならない。

(支援隊員役員及び会議)

第十二条 支援隊の役員は、分隊長六名があたり、会議は分隊長会議並びに消防団役員合同会議とする。

(事務局)

第十三条 支援隊に事務局を置く。

2 事務局は六合村企画課に置き、事務局長に企画課長、事務局員に消

防主任があたる。

(災害補償)

第十四条 支援隊員が、業務により損害を受けた場合においては、その隊員又はその者の遺族若しくは被扶養者に対して、村長は損害を補償する。

2 災害補償の額及び支給方法については、民間保険会社の定める約款によるものとする。

(分隊経費の支弁の方法)

第十五条 分隊の経費は、村からの活動助成金収入、分隊員の負担金、その他の収入をもつて充てる。

(村長が定める内規)

第十六条 この規約に定めるもののほか、支援隊に必要な事項は、村長が別に定める。

附則

この規約は、平成十五年四月一日から施行する。

附則 (平成十七年告示第二十五号)

この告示は、平成十七年六月一日から施行する。

附則 (平成二十一年告示第二十号)

この告示は、平成二十一年七月一日から施行する。

歴代六合村消防団長

安原 義雄	昭和二十二年 十一月 一日	昭和二十六年十月 三十日
小林 直之	昭和二十六年 十一月 一日	昭和二十八年十月 七日
山本 弟蔵	昭和二十八年 十月 八日	昭和三十年 三月三十一日
中沢福一郎	昭和三十年 四月 一日	昭和三十二年 八月二十五日
関 昌十郎	昭和三十二年 八月二十六日	昭和三十四年 九月 十九日
篠原六三郎	昭和三十四年 九月二十日	昭和三十七年 四月三十日
黒岩 鶴松	昭和三十七年 五月 一日	昭和四十年 一月 十九日
富沢 久幸	昭和四十年 一月二十日	昭和四十四年 二月二十一日
湯本喜太郎	昭和四十四年 二月二十二日	昭和四十六年 三月三十一日
市川 浪二	昭和四十六年 四月十日	昭和五十年 五月 九日
山口 種雄	昭和五十年 五月十日	昭和五十二年 五月三十一日
本多 秀次	昭和五十二年 六月 一日	昭和五十六年 五月三十一日
関 千代衛	昭和五十六年 六月 一日	昭和六十年 五月三十一日
高原 秀雄	昭和六十年 六月 一日	平成 二年 三月三十一日
関 幸一	平成 二年 四月 一日	平成 六年 三月三十一日
市川 伸夫	平成 六年 四月 一日	平成 十年 三月三十一日
山本八十二	平成 十年 四月 一日	平成 十三年 六月三十日
黒岩 正善	平成 十三年 七月 一日	平成 十七年 六月三十日
篠原 文雄	平成 十七年 七月 一日	平成二十一年 六月三十日
市川 孫好	平成二十一年 七月 一日	平成二十二年 三月二十七日

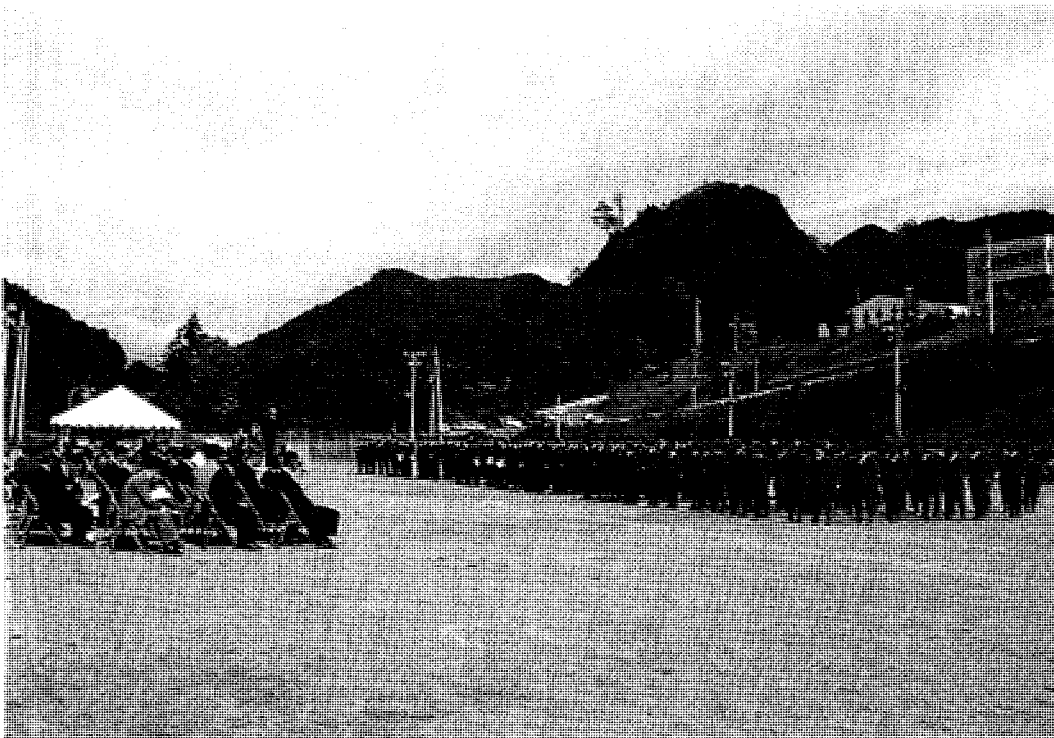
○ 六合村消防団機械器具設備一覧

NO	配備所属等	配備先	車名及び登録番号
1	指令車	本部（役場）	トヨタ・カリブ 群馬 88 そ 1439
2	本部分団	役場	イスズ 群馬 88 め 2602
3	第1分団	小雨	日産 群馬 800 さ 7687
4	第2分団	根広	日産 群馬 800 さ 1275
5	第2分団	和光原	日産 群馬 88 す 9521
6	第3分団	赤岩	日産 群馬 800 さ 4530
7	第4分団	八幡	日産 群馬 88 ね 682
8	第4分団	湯久保	日産 群馬 88 に 948
9	第5分団	引沼	日産 群馬 800 せ 1900
10	第5分団	田代原	日産 群馬 88 に 6633

六合村消防団秋季点検

- 1 集合
- 2 点検者・来賓入場
- 3 団旗入場
- 4 団旗・村旗掲揚
- 5 点検宣言
- 6 人員報告
- 7 姿勢・服装点検
- 8 機械器具点検
- 9 小隊訓練
- 10 ラッパ吹奏
- 11 消防操法
- 12 放水
- 13 分列行進
- 14 表彰
- 15 点検者講評
- 16 来賓祝辞
- 17 団長答辞
- 18 点検終了宣言
- 19 団旗・村旗降納
- 20 団旗退場
- 21 点検者・来賓退場

- 22 団長訓示
- 23 解散



秋季点検（平成5年度）

七 福祉と厚生

六合温泉医療センター

太平洋戦争における敗戦によって、混乱した世情も安定に向かうにつれて、無医村の状況を一刻も早く解消してもらいたいという村民の要望を受けて、時の村長福嶋松次は、村議会の一致した賛同を得て、僻地診療所を設置した。

開設日 昭和三十七年五月十日

場所 大字入山字引沼地内

規模 二六坪、医師住宅一五坪

工事費 一八六万円

機械器具 五〇万円

職員数 医師一名、看護婦一名、事務員一名、用務員一名

待望の診療所は開設されたものの、医師確保が容易ではなく、対策に村長は東奔西走の有様、中国や台湾から医師を招聘しても二年程で退職されてしまつて、無医村に戻つてしまう。原町日赤病院から医師を派遣してもらつて運営を続けたこともあつた。

昭和四十五年四月から、入山僻地診療所の出張診療所を開設している。

出張日は、毎週二回、火曜日、金曜日の二日、

小雨出張診療所（小雨公民館）、午後一時～三時、

広池出張診療所（広池公民館）、午後三時十五分～五時十五分、

診療科目、内科一般、

このような診療体制の中で、医師確保は常に重要な課題であつた。医師が常駐するようになったのは、僻地医療における医師安定確保のためにつくられた自治医科大学の卒業生が赴任するようになってからである。この医大卒業生には、数年間僻地医療に従事する義務が課せられていた。昭和六十年に初代自治医大卒の医師として着任したのが齊藤昌昭医師、二代目の医師として、昭和六十三年、六月一日に赴任してきたのが折茂賢一郎医師（二九歳）である。

この頃、無医村から脱却したばかりで、一日に来訪する患者の数は一〇人前後、診療所特別会計は年間三、〇〇〇万円もの赤字を出し、一般会計から補填を受けていた。

新任の折茂医師は、零細診療所と思つていたのに、設備面の充実と、従業員三名が若くてやる気に満ちている。機器においては小病院に比べて遜色ない。最先端の医療機器に対応している遠くの病院まで出向かなくても、診療所に対応できる状況にあつた。看板は診療所であるが病院のようだと驚いた。初代自治医大卒の齊藤昌昭医師の努力の跡を見た。

それから、実績を挙げるには地域の人の信頼を得ることが重要と思ひ村民との交流を大切にし、懇親の機会には積極的に顔を出すようにした。多くの酒豪に閉口しながらも、熱心に人との交流を深めていった。

若い折茂医師には不安があつた。一人でちゃんと診療できるだろうか、信頼される医師になれるだろうか、家族は村の生活に馴染むことができるだろうか、診療所の運営はできるだろうか、行政側とうまく連携できるだろうか、また医療に遅れをとるのではないか、等々自問自答しては責任の重さを痛感していった。

「自分なりの地域医療を目指そう」と決めて、診療所だよりを執筆し、

村報に掲載して、毎回村民に呼びかけた。何でもよいから相談に来てほしいこと、皮膚科、眼科、耳鼻科、整形外科、外科、何でもよい、処置の上専門医を紹介すること、健康相談にも応じること、気づいた点ほどしどし言ってもらいたいことなど、診療所に愛着を持って信頼を寄せてもらいたいという一心であった。

往診や夜間診療を進んで展開した。夜間連絡用に医師住宅に直接電話を導入して二四時間体制を引き、FAXで中央との連携を図る一方、内視鏡室を増築、トイレの水洗化など、設備面の充実にも努めた。また、保健婦、役場職員とともに昼夜の別なく、全集落での健康相談と、六合村独自の消化器集団健診を実施した。留守がちな夜は、妻の信子さんが留守番役を果たした。内助の功に支えられて、獅子奮迅の活躍が続いた。

日々の努力の積み重ねが功を奏して、一日に訪れる患者数は、六〇〇七〇人と増加し、レセプト件数は六倍に達し、わずか三年で赤字を解消した。これには、村はもとより、県庁でも驚き、目をみはった。

こうして、否応なく診療所の存在は大きくなり、重みを増していったが、依然として医師は一人である。医師の休日や研修のため不在の時は「無医村」となる。「先生が居ない時に限って病人が出る。本当に困る。何とかならないか。」悲鳴にも似た住民の声が聞えてくる。

「赤ひげ先生」的な自己犠牲の上に過疎地の医療を考えたのでは僻地における医療、保健、福祉、の包括的な取り組みによる住民の安心、安全は確立できない。複数の医師が常駐するしかないが採算的に無理がある。折茂医師は思案に暮れながらも、住民と、或いは議会人と、または行政と折に触れ、機に臨んで問題点の提起と対策を話し合ったが、それは、酒酣の内に在っても忘れることはなかった。このような話し合いや

討論を交わす中から生まれてきたのが「六合温泉医療センター」の構想であった。

世は正に景気の絶頂期にあり、政府は平成元年に「ふるさと創生資金」なるものを用意し、全国の自治体に対し、地域の知恵を結集して、独自の地域振興策を講じ、特色あるふるさとを創生するよう推奨した。

これを好機と捉えた折茂医師は、医療センターが村の医療、保健、福祉に果たす役割の重要性と地域振興の核となり得る施設であり、経済的な効果についても期待できる点など熱心に説いて、村内に、理解者、賛同者の輪を広げていった。

構想は、六合村ふるさと創生事業検討委員会に提案され、集められた多くの提案の中から、六合村に合った仕組みを冷静に考え抜いた温泉医療センター案が選定された。

六合村は、山間僻地で、群馬のチベットといわれ、高齢化率二四%を超す典型的な過疎地であるが、優れた景観と随所に温泉が湧出している。これは貴重な資源である。問題の解決は我々自身の手で、率先して解決させるような努力をすべきである。民意を行政側が深く認識し、「民」「官」「医」「学」がしつかり手を組んでゆかねばならないと考える折茂医師は「半無医村」の解消を合い言葉に、村おこし事業と合体して、村全体の医療、保健、福祉、の計画を見直して、抜本的な改革を試みよう。そして、豊かな自然環境の中で、温泉を利用して心身を癒やし、医療センターで充実したケアを提供するという「福祉リゾート」構想が実現すれば地域振興に貢献するであろうと考えた。

村は動いた。診療所の有床化、天然温泉を利用した老人保健施設「つじ荘」の併設、さらに子供から大人まで楽しく利用できる温泉を核に

した健康増進施設「クアハウス」を組み合わせて、複数医師の常駐する新しい形の僻地医療を展開し、プライマリーケアの原点をなす地域医療を目指す。全国と同じような問題に困っている町村のモデルとして、また発展途上国のモデルとしても、成功させようと、構想実現のため、折茂賢一郎医師を、六合村老人保健施設建設室嘱託医に委嘱した。

老人保健施設は、老人医療で最も大切な付き添いや介護の問題が、核家族化や家族の小規模化の進行で、病気で倒れ、後遺症から社会復帰ができず、家族の円満性をも損ねかねない状況から、大きな社会問題として、リハビリのこと、家庭復帰してからの介護のこと等解決のため厚生省が考えている施策であった。

これは、病気から立ち直った高齢者を社会復帰させ、それを支援する若い世代のためにも、リハビリを中心とする療養を主体に行うもので、デイケアやショートステイの施策も、この施設が重要な役割を担うこととなる。

折茂医師が常々口にするのは、従来の医師主導型の体制の意識を改革して、医療における看護の位置づけを重視し、医療をチームとして見つめ直す。看護師さん、薬剤師さん、技師さん、それぞれにしかできない仕事があり、医師を支える様々な職種の人が、協力し合うことが大切、医師はその中核で、キャプテンとしての存在が望ましいというものであった。

施設は、一九床の有床診療所、老人保健施設、健康増進施設の三施設を統合的に合築し、コンパクト化によって、建築経費とランニング経費を節減し、人の動きを省力化するという方針で、温泉医療センターの細部の詰めが進んでいった。

事業費総額は、年の年間予算に匹敵する一八億円に迫るものとなった。村の浮沈を懸けた事業である。役場一丸となって、それぞれが持場、立場に依りて、全力を尽くす総力戦となった。

センターの運営は、自治医科大学卒業の医師を構成員とする地域医療振興協会に委託することとした。医療における公設民営という先駆的な方式を考えていた。

懸案は、経営的な見通しは立つか、人員が確保できるか、財源確保の裏付けは大丈夫か、どれも大きな問題であった。とりわけ重要なのは、資金の調達である。ふるさと創生事業の資金二億四、〇〇〇万円のほか、資金の半額に及ぶ額を地方債（自治省の過疎対策事業債）を見込むこととした。

通称「過疎債」といわれる地方債は、償還時に必要な元利金の七割相当額を国が交付税措置をしてくれるので大変有利な起債である。

ところが、この事業案件は、行政の公的施設を民間団体である地域医療振興協会に委託する点、学校や道路と異なって収益を見込む点、診療所、老健、健康増進施設の三つを合体するのは、官庁の所管区分が異なり補助要綱に合わない。三つの施設は別々に設置しなければならない点、等々を並べ上げて「過疎債」の趣旨に馴染まずとして問題視された。

この時、事業の成否に係る重要案件として、国や県との折衝にあたったのは老人保健施設建設室次長の山本清司であった。

山本は、老健と健康増進施設の委託は、技量の蓄積が村にない、センター全体で五〇名以上の雇用が創出できること、三つの施設を一体として合築するのは、医療、保健、福祉の連携充実を図る上で最も大切であること、村外からの利用を見込め、六合村にとって最大の振興策であり、

包括医療実現の拠点施設であること等、根気強く訴えた。

六合村が前例のない先駆的な取り組みをするものであり、このケースがどうなるかを見て、今後の参考にする上からも今回の村の案は、例外的に認めたらどうか」と理解を示す意見が上級官庁から出始め、最終的には、指摘された懸案のすべてが、前例の無いものであったにもかかわらず、認められた。こうして、三施設合築と資金繰りの目途が立った。

一方、老人保健施設と健康増進施設で使う予定の尻焼温泉の引湯計画は、「福祉リゾート」と銘打った「六合温泉医療センター」という名称からしても、最大の特徴付けとなるものである。

予定した泉源は、一級河川長笹川の尻焼温泉地内にある。ここだけ、川全体が温泉であり、河床からまんべんなく温泉が湧き出ている。露天風呂で有名である。左岸側に接する山林は根広集落の人たちの共有林で、この中に通称、根広共有泉といわれる泉源がある。これを引湯しようとする計画である。泉源は、共有財産の山林が川に接する所にあり、山林の斜面に村道があり、度々の気象災害で崖が崩れ、共有泉は岩石で埋まっていた。

計画は、共有泉の泉源を浚渫して、根広集落までポンプアップし、この湯量の半分を権利者である根広の人たちへ、持分登記の割合に応じて毎戸に配湯し、残り半分を温泉医療センターで利用するという案であった。

ところが、河川全体の露天風呂の湯と、既に旅館営業で使用中の湯を一括して開発し、無駄の湯がないよう引湯利用しようという計画を村が関わって作り、一部の利害関係者との間に村が契約を交わしたが、全員の合意が得られず県の許可も出ないまま、頓挫して二〇年が経過していた。他にも民事係争中の事案も含まれていて、難問であることは容易に

想像できた。温泉の活用は不可能ではないかと思えるむきが多かった。

しかし、諦めることのできない案件であった。利用泉源の権利調整の主管を任せられ、折衝の任に当たったのは、役場の企画課長であった。

課長は、共有泉の代表者である黒岩善一、地元の村議会議員中村義司の二氏と呼応して、発生してくる大小の案件に関し、協力して対処した。足かけ三年に及ぶ折衝の中で、頓挫して二〇年が経過している尻焼温泉の開発利用計画を白紙に戻し、これに関して存在する契約を合意解約とした。一方、民事係争中の案件は、双方の卓見によって、医療センターの事業計画に賛同を得ることができ、訴状を取り下げただけだ。遂に利害関係者全員の合意が形成されたのである。

平成四年六月十九日、権利者全員が、実印を持って、集会所に集まり、温泉医療センターへの引湯に関する契約書に調印した。

その晩は、権利者の振る舞いで、関係者一同安堵の祝盃を挙げていた。

漸く引湯工事も発注でき、センターの本体工事が後半にさしかかる頃から、六合村が進める地域包括医療の先進的な目録見が広く知れ渡って、介護保健制度の発足をひかえている時期でもあり、北海道から沖縄まで、全国各地の自治体から、視察団が引きも切らずに訪れた。問い合わせの電話もしきりに入り、対応に翻弄されどろしであった。

開業前後の五年間で、村内団体の見学も含めると、一、七〇〇組もの団体を受け入れている。中には、中国や中米のホンジュラス共和国からの視察もあった。

手に手を尽くし、集め集めた一八億円が、衆目を浴びて姿を成して、目前に現れた。平成五年八月三十一日、現地において竣工式が執り行われ、

群馬県知事、国会議員、県議会議員、自治医科大学の中尾喜久学長をはじめ、内外のたくさんの方に来ていただいて、テープカット、くす玉割り、祝宴と盛大な竣工式が行なわれた。自治医大の地域医療研修関連施設という位置付けをいただいて、翌日の九月一日から営業開始となった。

六合村が企画立案し、建設した公の施設で、地方自治法上の行政財産である。これの管理運営を（社）地域医療振興協会（同法という公共的団体）に委託するのであるが、その際、村から管理委託費を支払うのではなく、協会が行うサービス（診療、在宅介護等）の対価として、利用者から入る利用料金を同協会に入れ、運営費に充当する形である。利用料金型公設民営方式という位置付けである。

医療センターの運営に対し、国から村に交付される地方交付税のうち概ね四分の一を限度として、村が「六合村診療所財政基金」として積み立て、同協会の運営に赤字が生じた場合には、年三、〇〇〇万円を限度に、この基金から補填する仕組みを備えた。

初年度の営業期間は半年であったが収益を上げて、その一部を協会から村の診療所特別会計に提供している。

次年度以降も順調に実績を伸ばし、好調な運営が続いた。

診療所は、村外の来患者も多く、一日八〇人から一〇〇人、老健施設には入所者と、デイケアで六〇人、健康増進施設には、野良仕事を終えた地元の人たちが草鞋がけで入浴に來たり、観光客など、健康な若い人も一風呂浴びて帰る人、一日の利用人数は百数十人を超える程であった。

歯科診療所は、小雨出張診療所内に昭和四十七年八月三日、台湾から施東雄医師を招聘して、昭和四十九年三月まで続いたが、以後閉鎖のままになって二一年が経過していた。

平成七年七月に林豊歯科医師を迎えて、歯科開設の準備に入り、医療センター内に歯科部門ができて、九月一日に診療が開始となった。

平成九年三月には、「出て行く医療」を広げる一環として、田代原集落と湯久保集落にも各公民館の中に出張診療所を開設した。

田代原出張診療所

診療日、平成九年四月一日から（以後一週間おきの金曜日）

受付時間、午後二時から二時三十分まで

湯久保出張診療所

診療日、平成九年四月十一日から（以後一週間おきの金曜日）

受付時間、午後二時から二時三十分まで

平成十年、五床の人間ドック棟を増築し、素晴らしい景観の中で、検診を受け、温泉を楽しんで帰るといふ福祉リゾートの構想を形の上でも更に充実したものとした。

平成十年四月には、センター内に在宅介護支援センターを併設し、村内の在宅介護者の情報をセンターの医師や看護婦と社会福祉協議会のヘルパー、役場の保健婦だけが閲覧できるクローズドネットワーク「KUCARE」で一括管理できるようにした。その日の介護者の容体と注意点を入力し、一人の様子を全員が把握できて、一貫したケアを実現して、二四時間体制を引いた。

このようにセンターの内容が充実に向かったのは、包括的な地域医療と地域の振興という観点から、住民が安心して、健康で暮らせる村をつくるために努力を続けた結果であるといえる。

その後、色々出てくる高齢者対策は、何やら六合村が通った跡をなぞっているようである。折茂医師を芯として進めてきた福祉に満ちた村づく

りが、村民叡知の結集であり、如何に進取の気性に富むものであったかをうかがい知ることができる。

六合温泉医療センター施設概要

六合村診療所

構造、鉄筋造二階建て、延床面積、一、二四四㎡

一階、診察室、処置室、X線室、電視内視鏡室、

検査室、理学療法室、事務室、待合室、

主な設備、自動錠剤分包機、低周波治療機、超音波

診断装置、無散瞳眼撮影装置、血液ガス分析

装置、等、

二階、病室（一人部屋三室、二人部屋一室、

六人部屋二室、重症室一室）、ナースステ

ション、デイルーム、厨房等、

老人保健施設「つつじ荘」

構造、鉄筋造一階建、延床面積、一、二八九㎡

入所定員五〇名（ショートステイ五名）

通所定員一五名

療養室（一人部屋四室、二人部屋三室、四人部屋一〇室）、

特殊浴室（尻焼温泉引湯）、機能訓練室。

レクリエーションルーム、食堂、談話室、家族介護訓練

室、理美容室、診察室

サービスステーション、リネン室等、

健康増進施設「バーデ六合」

構造、鉄筋造一階建、延床面積、三九五㎡

主な設備、運動フロア、一般浴室（尻焼温泉引湯）、

水中運動浴室（温泉プール、寝湯、かぶり湯

等）、サウナ、健康運動器具（レッグプレス、

テストプレス、ラットプルダウン、ベアサーウル

トラミル、エルゴメーター）

尻焼温泉の効能、神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、

運動麻痺、関節のこわばり、うちみ、くじき、

慢性消化器病、痔疾、等、

人員体制

常勤四一人、非常勤一四人、計五五人

医師、四人（内歯科医一人）

看護婦、一三人

放射線技師、一人

歯科衛生士、二人

介護士、一七人

理学療法士、一人

歯科補助、一人

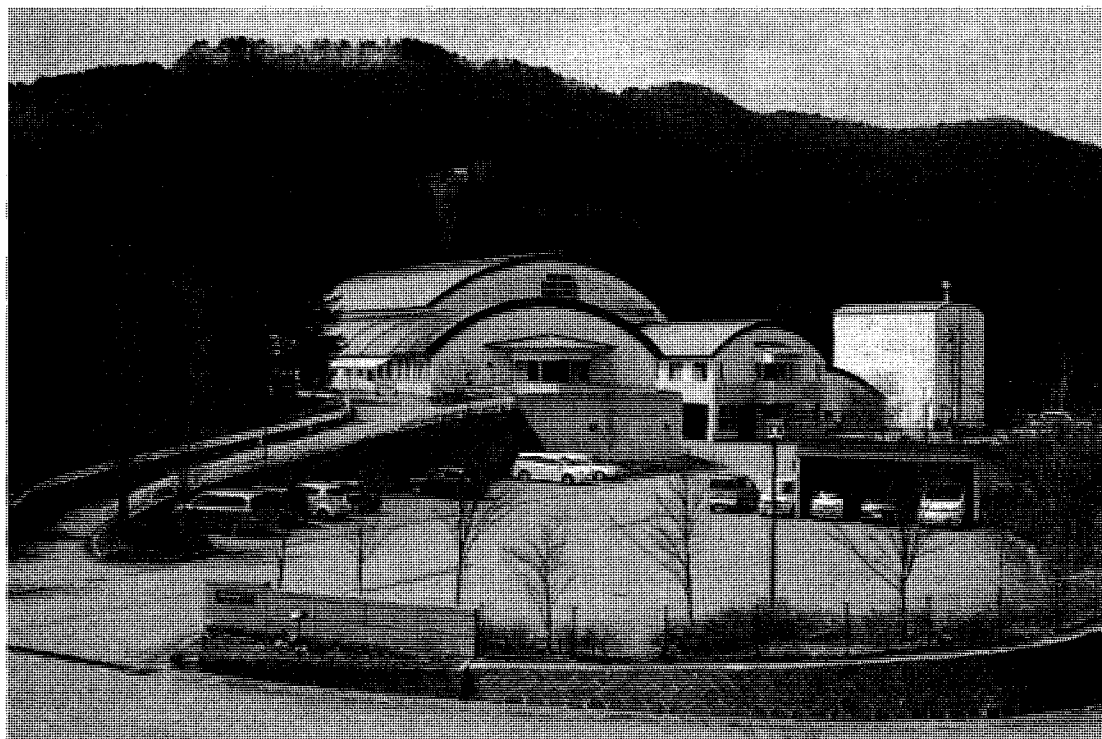
事務職員、八人

相談指導員、一人

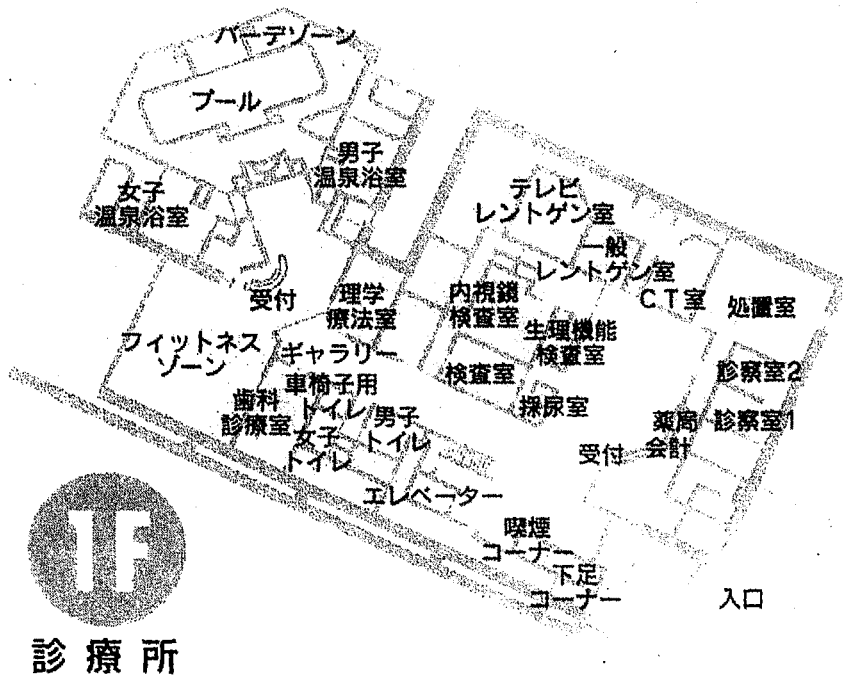
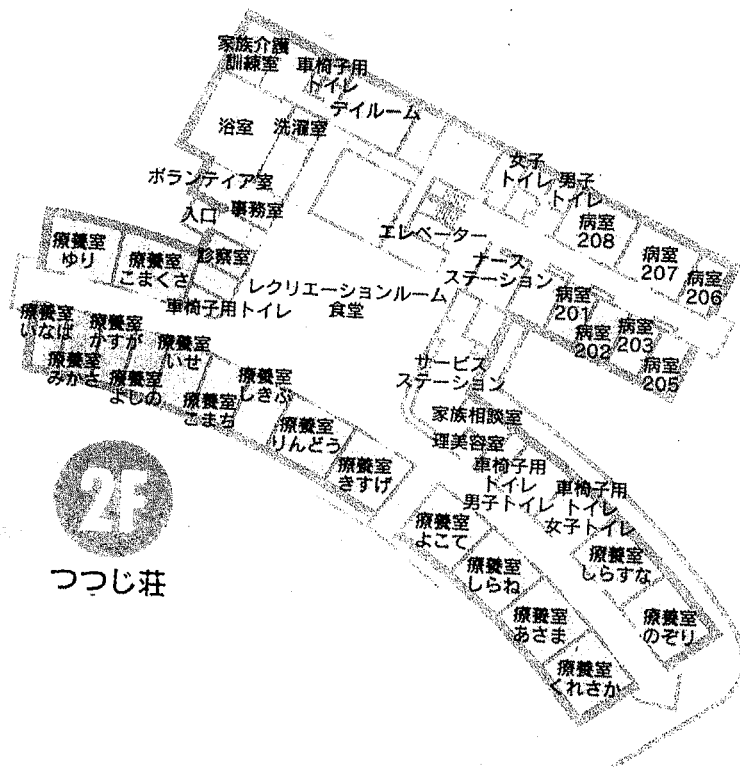
用務員、五人

薬剤師、一人

臨床検査技師、一人



六合温泉医療センター



区分	事業費	財源内訳				
		国庫支出金	県支出金	地方債	その他	一般財源
設計測量監理委託	七五、三六一	四、二六五	二、二二五	三一、五六一	〇	三七、三二〇
工事費	一、五〇一、二五四	一七八、七五五	八五、六七七	六九六、三八四	〇	五四〇、四三八
備品購入費	一四七、九四六	〇	六、三五〇	八三、二二五	〇	五八、三八一
用地関係費	二二、七六〇	〇	〇	一三、四六二	〇	一〇、二九八
看板・パンフレット	三、三六一	〇	五〇〇	〇	〇	二、八六一
その他物件費	三〇、二二三	〇	〇	〇	四、七〇七	二五、五一六
合計	一、七八一、九〇五	一八三、〇二〇	九四、七四二	八二四、六一三	四、七〇七	六七四、八一四

参考資料

○縮刷六合村報

○季刊ユニバーサルデザイン

平成十年二月

○メデイカルマネジメントパートナー

平成八年十二月

(株) 日本医療企画

六合村高齢者センター

国は、農業振興について、従来から各種の事業に対して、一般助成の形で補助金を交付していた。

振興計画の樹立と事業実施を一段と促進するために、新たに「新農村建設総合対策事業」という施策を打ち出し、「新しい農村づくり」を推進するため、新たに特別助成措置を講じて、農民の創意と工夫を生かして、自主性を基本とし、適地適作による農業の近代化を進めて、農家所得の向上と生活文化の向上を図るという方針を出した。

昭和三十一年度を初年度として、全国の市町村を対象に、五箇年で順次地域指定を行った。

六合村は、最終年度の昭和三十五年度の指定を受け、三ヶ年の事業実施計画でこれに取り組んだ。人口及び戸数の関係から草津町を含めて、一帯の地域であるとして、「須川地域」の名称で、草津町と共同しての計画づくりを行った。

助成の対象としては、農村住民の役に立つものであれば、何でもできる総合助成方式を特徴としたが、補助を呼び水として、自助努力によって、助成効果の発現が期待されていた。

事業主体は、市町村、農協、森林組合のように法定資格を備えているものから、任意団体の集落団体、婦人青年組織などとされていた。

事業種目は、土地改良、樹園地造成、草資源開発、林野整備、農業機械化、農事放送、給水、生活改善等々の事業であり、ありとあらゆる共同のものが実施可能であった。一方、融資による施設整備は、長期低利の農林漁業金融公庫資金が用意され、補助金と融資の二方面からの支援

策であった。

また、新農村建設総合対策の指定地域にあつては、農林省所管の他の一般補助事業についても優先採択するという優遇方針がとられていた。この後、国が打ち出す山村の振興策は、社会状況の変化に応じて、色々な助成項目を取り入れたものとなつていった。地域総合助成事業として、続いて出されたのが、山村振興農林漁業対策事業であった。

これは、山村振興法を作つて、一〇年間で順次地域指定をし、指定を受けた山村振興指定地域は四年乃至五年間に亘る年度別事業実施計画を立て、承認を得て、計画を実施するというものであった。地域指定が、全国一巡する頃には、第二次、或いは第三期という呼称が付されて同様の山村振興対策事業が続けられた。なお、計画達成済みの地域に対しては、山村振興緊急補足整備事業が用意された。また、山村振興法の期限を一〇年間（平成二十七年三月まで）延長し、使い易い法律とするための配慮規定の追加・拡充が図られ、切れ目のない振興策で支援が講ぜられた。

六合村は、昭和四十一年度に地域指定を受け、第二次、第三期とその都度、山村振興計画を立て、補助事業の導入を図つてきた。これは、村が進める重要な振興策を制度面から支える仕組であつた。

高齢者センターは、第二期の山村振興対策事業で導入した施設である。山村における人口の高齢化は急速に進み、山村地域の中にも高齢者を視野に入れた施設整備が構想されるようになって、六合村の第三期山村振興対策事業の最終年次の計画にあたる昭和五十四年度に建設した。

高齢者の文化的な生きがい活動や福祉増進の施設として、設置が認められたのであつた。

この施設で使われている温泉は、白砂川左岸の大字入山字応徳地内の川岸に湧き出ている応徳温泉で、沼尾の山田覚治氏所有である。

国鉄太子線の鉄道廃止に絡む地域対策の一つとして、昭和五十八年国鉄が建設して、六合村が運営する宿泊施設「国鉄六合山荘」が建設されるに際して、応徳温泉を六合村が借り受け、小雨の遠北地内の「国鉄六合山荘」の貯湯槽までポンプアップして使用することとなっていた。

高齢者センターの建設にあたっては、応徳温泉の利用が考えられ、泉源地の湯を極力まとめ、揚湯ポンプの集湯槽に入れ、ポンプ性能の余力に応じて、揚湯量を増し、貯湯槽に送って、隣接して建てる高齢者センターへも流すというものであった。

これについても、温泉所有者の理解と協力を得ることができ、温泉資源を活かした施設整備ができたのである。

施設の所在地、六合村大字小雨字遠北乙二二番一

施設の規模、鉄筋二階建、六六四、一九㎡(約二〇二坪)

事業費 建物本体工事費、一億二、〇五二万円

国庫補助金 六、〇二六万円

県費補助金 二、四一〇万四、〇〇〇円

村費 三、六一五万六、〇〇〇円

備品費 三六〇万円

設計監理委託料 四一〇万円

施設内容 一、創作室、二、休憩室 三、展示室 四、浴室

五、事務室、六、和室 七、玄関ホール

八、便所 九、機械室 十、研修室兼娯楽室

十一、会議室 十二、湯沸室 十三、廊下、階段
完成年月日、昭和五十九年三月十日

請負業者、吾妻郡吾妻町大字原町四四七、南波建設株式会社
請負代金額、一億一、四四二万円

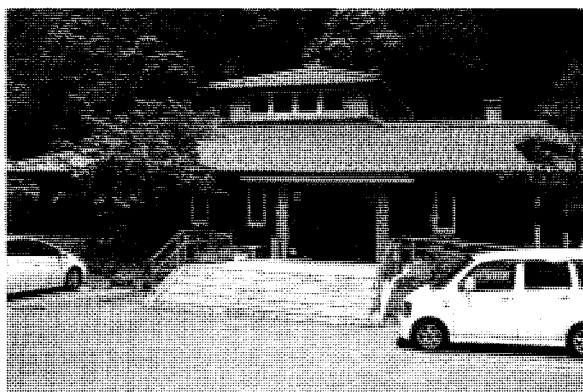


応徳温泉の高齢者センター

六合村保健センター・赤岩温泉長英の隠れ湯

村域の南部地域と称される所は、赤岩、日影、太子の三つの大字である。ここは、観光的な施設に乏しく、差したる公共施設もない。

この南部の地域をどう整備するか、村政の課題として、常に議論されていた。その中から、六合村に五箇所目の温泉を掘削して、「南部開発」のきっかけにしようという構想が浮上し、機が熟すにつれて、温泉掘削事業の実施に向けた取組が進められた。



長英の隠れ湯

平成三年度に茨城県牛久市、テラフライドシステムの中野氏に探査事業を依頼し、既存の地質資料を集めるかたわら、目視踏査を行い、続いて電磁探査を掛けて、有望地点が絞り込まれた。データ解析の結果、掘削地点は大字赤岩字中野地内、安原繁安氏所有の畑地に決まった。

地権者をはじめ、地区住民の全面的な協力を得て、平成四年三月、掘削工事が開始された。六月には、深さ七六〇mで四六度の温泉を掘り当て、温泉ボーリングは成功した。揚湯試験の結果、安定汲み上げ量が毎分一〇ℓとなった。

平成五年に揚湯ポンプを設置し、六月二十三日、掘削工事の竣工式と

入湯式を行っている。

村は、南部開発整備について、委員会をつくり、赤岩温泉の利用を含む整備内容を諮問している。その最終答申にそってまとめた構想は、住民の保健、福祉の向上が効果的に促進される拠点施設として、「六合村保健センター」と、温泉利用の施設として、村民をはじめ、訪れる観光客にも提供して、都市住民との交流促進に役立つ「赤岩温泉長英の隠れ湯」との名称で呼ぶ共同浴場で、この二つの施設を合築して、誇れる地域づくりの中心的施設と位置付け、群馬県農政部が所管する「美しい農村景観保全活用モデル調査事業」がもたらす具体的な整備プログラムと調和融合した方向を目指すこととなった。

平成六、七年度には計画検討委員会を置き、計画の総合的な協議が重ねられた。平成八年には、上級行政庁、村政機関、地権者及び地区住民との調整を経て、平成九年度に用地造成工事と施設の基本設計を済ませ、平成十年度には、保健センターと共同浴場の合築工事の詳細設計を組んで、着工となった。

平成七年度から群馬県農政部は「美しい農村景観保全活用モデル調査事業」の二地域の指定に赤岩地区を入れて、地域の現状、特性、課題を分析して、景観の維持及び保全を図り、地域経済の活性化策や生活環境、住宅整備の方針を検討して、地域をデザインし、振興の具体的プログラムを取りまとめていった。

このように六合と、群馬県が連帯して進める振興策に、地元赤岩地区では、平成八年四月から、「赤岩ふれあいの里委員会」を作つてこれに呼応し、諸々の案件についての地元調整に、大きな役割を担っている。

六合村は、出てくる事業要望と、美しい農村景観保全活用モデル事業

とを具体的事業によって有機的に結びつけて振興策を立てることとした。群馬県が進める農村景観保全活用モデル事業が基をなし、赤岩集落の養蚕農家群が国指定の「重要伝統的建造物群」となるのを視野に、まず、平成十八年二月八日、六合村指定とし、住民と共に一体活動して、平成十八年七月五日、期待のとおり、国の指定となることができた。平成十八年四月一日に赤岩住民は「赤岩重要伝統的建造物群保存活性化委員会」を発足させ、行政と一丸をなして、地域づくりに取り組み活動が展開されていった。

六合村は、保健センターと長英の隠れ湯の建設をはじめ、水道、道路橋梁など附帯する施設を整えて、六月三日、国会議員、県議員、郡内町村長、議会議長等々来賓二〇余名の参加を頂いて竣工式を挙げている。

美しい農村景観保全活用モデル事業は計画に沿って具体的事業が併行して進められ、赤岩地区に集中的な投資が行われた。

保健センター・長英の隠れ湯施設概要

主体構造／鉄筋コンクリート造一部鉄骨造、日本瓦葺

総面積／保健センター、六一二・九七㎡

長英の隠れ湯、四四一・六六㎡

延床面積、一、〇五四・六三㎡

施設内容

保健センター

診察室、集団健診室、研修室、運動指導室、相談室

栄養指導室、事務室、待合室

長英の隠れ湯

男女各浴室、脱衣室、広間、受付

赤岩地区で実施した振興策の総額は、平成三年度から平成十八年度までの間で、七億八、八七二万円であった。

平成三〜六年度、南部開発事業、温泉探査、掘削、揚湯

八、七〇〇万円

平成七年度、美しい農村景観保全活用調査（群馬県農政部）調査事業

群馬県農政課

平成八年度、群馬県農村活性化総合支援事業、（美しい農村景観保全活用調査補完事業）

活用調査補完事業

ごみ集積小屋五棟、集落入口看板二基、集落内案内看板

八基、五〇万円

平成九年度、八年度の事業名によるもの、水車小屋一棟、製粉機一式

二、〇四五万円

平成九〜十年度、南部開発事業、（保健センター、長英の隠れ湯）

土地造成、自家水道、引湯施設、保健センター、長英の

隠れ湯 四億七、〇四五万円

平成十年度、ふるさと総合整備事業、農道整備、二七九・八㎡

一、五〇〇万円

平成十一〜十三年度、ふるさと水と土ふれあい事業（土地改良）

親水公園・ランドリー施設（保健センター周辺）

コミュニティ施設（水車小屋周辺）、水路整備、遊歩道

（上の観音堂）一億四、〇〇〇万円

平成十五年度、赤岩伝統的建造物群保存地区指定調査、報償費、旅費

需用費

一三〇万円

平成十六年度、前年度と同様の調査事業名、報償費、旅費、需用費、
使用料 九一五万円

平成十七年度、前年度と同様の調査事業名、報償費、報酬、旅費、需
用費、委託料、使用料 四五六万円

平成十七年度、地域資源活用ふるさとづくり支援事業、養蚕の家整備
六一六万円

平成十二～十七年度、中山間地域等直接支払交付金事業

一八五万円

平成十八年度、棚田（畑）保全活動事業、運営、共同作業、都市交流

五〇万円

中山間地域等直接支払交付金事業

二二万円

中山間地域総合整備事業、営農飲雑用水工事、導水管

二、〇〇〇m

一、八〇〇万円

国道二九二号赤岩入口村道改良事業、交差点改良、

七五〇万円

平成十四～十八年度、森林整備地域活動支援交付金事業、森林一〇鈔



保健センター（長英の隠れ湯と併設）

○ 歴代民生児童委員（昭和四十六年以降）

(氏名)	(就職)	(退職)
小林 直之	昭和四十六・十二・一	昭和四十九・十一・三十
福島ハルエ	〃	〃
中沢みさを	〃	〃
富沢 茂邦	〃	〃
篠原 酉蔵	〃	〃
茂木 和	〃	〃
明田川三代	〃	〃
中沢市郎衛	〃	〃
山本 つる	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
関 学	〃	〃
中村 正雄	〃	〃
山崎 正次	〃	〃
福島ハルエ	昭和四十九・十二・一	昭和五十二・十一・三十
中沢みさを	〃	〃
富沢 茂邦	〃	〃
茂木 和	〃	〃
明田川三代	〃	〃
富沢 英治	〃	〃
中沢市郎衛	〃	〃
山本 つる	〃	〃
山崎 忠一	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
黒岩 善一	昭和五十一・三・二十二	〃
篠原六三郎	〃	昭和五十二・十一・三十

関 学	昭和四十九・十二・一	昭和五十二・十一・三十
中村 義司	昭和五十一・三・二十九	〃
福島ハルエ	昭和五十二・十二・一	昭和五十五・十一・三十
中沢みさを	〃	〃
富沢 茂邦	〃	〃
茂木 和	〃	〃
明田川三代	〃	〃
富沢 英治	〃	〃
中沢 一孝	〃	〃
山口 一元	〃	〃
山崎 忠一	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
中村 義司	〃	〃
市川 安江	昭和五十五・十二・一	昭和五十八・十一・三十
関 学	〃	〃
篠原六三郎	〃	〃
中村 義司	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
山崎 忠一	〃	〃
山口 一元	〃	〃
中沢 一孝	〃	〃
富沢 英治	〃	〃
明田川三代	〃	〃
富沢 英治	〃	〃
中沢 一孝	〃	〃
山口 一元	〃	〃
山崎 忠一	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
中村 義司	〃	〃
富沢 葉子	〃	昭和五十七・六・三十
富沢 久好	〃	昭和五十七・十・二十二
富沢 茂邦	〃	昭和五十八・十一・三十
中沢みさを	〃	〃
市川 安江	昭和五十五・十二・一	昭和五十八・十一・三十
関 学	〃	〃
篠原六三郎	〃	〃
中村 義司	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
山崎 忠一	〃	〃
山口 一元	〃	〃
中沢 一孝	〃	〃
富沢 英治	〃	〃
明田川三代	〃	〃
富沢 英治	〃	〃
中沢 一孝	〃	〃
山口 一元	〃	〃
山崎 忠一	〃	〃
山本 仲治	〃	〃
中村 義司	〃	〃

福祉と厚生

本多 佐京	山本 保平	山口 一元	中沢 一孝	町田 喜彦	安力川正一	小池 孝三	関 駒三郎	市川 トヨ	市川 安江	小池 孝三	関 君代	篠原はつみ	中村 義司	山本 保平	山口 松次	山口 一元	中沢 一孝	町田 喜彦	富沢 葉子	富沢 久好	篠原 昭一	市川 トヨ	市川 安江	町田 喜彦	篠原 昭一	関 学	篠原六三郎
”	”	”	”	”	”	”	”	”	昭和六十一・十二・一	昭和六十・六・二十六	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	昭和五十八・十二・一	昭和五十七・七・十	昭和五十七・十二・十五	”	”
平成 一・十一・三十	昭和六十二・九・二十一	昭和六十二・六・三十	”	”	”	”	”	”	平成 一・十一・三十	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	昭和六十一・十一・三十	昭和六十・六・三	”	”	昭和六十一・十一・三十	”	”	”

関 真	山口 松次	山口 増雄	中沢 一孝	富沢 正幸	山本 友八	富沢 初男	関 駒三郎	市川 トヨ	市川 安江	篠原 巖	関 君代	篠原はつみ	本多 佐京	山本 官治	山口 松次	山口 増雄	中沢 一孝	町田 喜彦	安力川正一	小池 孝三	関 駒三郎	市川 トヨ	市川 安江	山本 官治	山口 増雄	関 君代	篠原はつみ	
”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 四・十二・一	平成 二・五・三十	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 一・十二・一	昭和六十二・十・二十九	昭和六十二・七・八	”	”	
”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 七・十一・三十	”	平成 二・三・三十一	平成 四・十一・三十	”	”	平成 四・十一・三十	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 四・十一・三十	”	”	”	”

本多 辰雄	山本 茂	山口 政勝	山本 房勝	中沢 一孝	富沢 正幸	湯本 一好	安カ川 治八	関口今 朝好	市川 トヨ	市川 義夫	山本 貞雄	篠原や す子	本多 辰雄	関 真	山口 政勝	山口 増雄	中沢 一孝	富沢 正幸	山本 友八	富沢 初男	関口今 朝好	市川 トヨ	市川 義夫	本多 辰雄	山本 貞雄	篠原 巖	本多 佐京
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十・十二・ 一	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 七・四・ 六	”	”	”	”
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十三・十一・三十	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十一・十一・三十	”	”	”	平成 十一・十一・三十	”	”	平成 七・十一・三十	平成 七・四・ 六

山本 茂	伊藤千 代子	山本 房勝	中澤總 一郎	富沢 一二	山本多 津子	萩原 幸一	関 克子	山本 隆男	市川 泉	関 好仁	山本 隆男	山本 一雄	山本 貞雄	篠原や す子	本多 辰雄	山本 茂	山口 政勝	山本 房勝	中澤總 一郎	富沢 一二	湯本 一好	萩原 幸一	関 克子	中澤 宏衛	市川 泉	山本 貞雄	篠原や す子	
”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十六・十二・ 一	”	平成 十五・四・ 十八	平成 十四・十一・ 六	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十三・十二・ 一	”	”	
”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十九・十一・三十	”	”	平成 十六・十一・三十	平成 十五・四・ 十七	平成 十六・十一・三十	平成 十四・十一・ 五	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 十六・十一・三十	”	”

○ 主任児童委員

関 ますみ	平成 七・十二・一	平成 十三・十一・三十
篠原しづ子	平成 十三・十二・一	”
中村百合子	”	”

山本 一雄	”	平成 十九・十一・三
篠原やす子	”	”
関 好仁	”	”
市川 泉	平成 十九・十二・一	”
山本 隆男	”	”
関 克子	”	”
萩原 幸一	”	”
山本多津子	”	”
富沢 一二	”	”
中澤總一郎	”	”
山本 房勝	”	”
伊藤千代子	”	”
山本 茂	”	”
山本 一雄	”	”
篠原やす子	”	”
関 好仁	”	”

○ 六合つ子養育手当支給条例

平成九年三月十二日

六合村条例第十八号

(支給対象者)

第四条

六合つ子養育手当は、認定基準日において引続き六箇月以上本村に居住し、住民登録又は外国人登録がなされ、申請時において、本村が課税する村税を滞納していない者で、次の各号のいずれか一つに掲げる児童のうち第三子又は第四子以上の者(以下「支給対象児童」という。)の保護者(以下「受給権者」という。)に支給する。

(1) 新生児

(2) 本村に住所を有し、かつ、四歳に達した日以後最初の四月に六合村立六合こども園設置条例(平成十五年六合村条例第三十一号)第二条に規定することも園に入園した児童(以下「新入園児」という。)

(3) 本村に住所を有し、かつ、六歳に達した日以後最初の四月に六合村に所在する小学校に就学した児童(病弱、発育不完全その他やむを得ない事由のため就学困難と認められる児童にあつては、六歳に達した日以後最初の四月一日に六合村に所在する小学校に就学したものとみなす。)(以下「新入学児童等」という。)

(4) 本村に住所を有し、かつ、十二歳に達した日以後最初の四月に六合村に所在する中学校に入学した児童(病弱、発育不完全その他やむを得ない事由のため就学困難と認められる児童にあつては、十二歳に達した日以後最初の四月一日に六合村に所在する中学校に就学したものとみなす。)(以下「新入学生徒等」という。)

(5) 本村に住所を有し、かつ、六合村に所在する中学校の課程を終了した児童(以下「中学校卒業生」という。)

(目的)

第一条 この条例は、六合村の人口減少を防止して増加と定着化を図るための手当(以下「六合つ子養育手当」という。)を支給することにより、過疎化の防止と次代の社会を担う児童の健全な育成を図ることを目的とする。

(受給者の義務)

第二条 六合つ子養育手当の受給者は、前条の目的の趣旨に従つてこれを用いなければならない。

(定義)

第三条 この条例において次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

(1) 保護者とは、児童の親権者又は後見人等であつて、現に児童を養育し、生計を一にしていると村長が認定した者をいう。

(2) 新生児とは、出生後引き続き三箇月以上本村に住所を有している者をいう。

(3) 第三子、第四子以上とは、十五歳に達する日以後の最初の三月三十一日までの間にある者を含む、三人以上の兄弟姉妹又は兄弟姉妹と同程度の関係にあると村長が認めた者(以下「支給要件者」という。)があり、その生存者のうち最長年齢順の三人目を第三子、四人目以上を第四子以上という。

2 六合つ子養育手当の支給対象児童別の認定基準日は、次の表のとおりとする。

中学校卒業生	中学校の課程を終了した日の属する月の一日
新入学生徒等	十二歳に達した日以後最初の四月一日
新入学児童等	六歳に達した日以後最初の四月一日
新入園児	四歳に達した日以後最初の四月一日
新生児	三月に達した日

(手当の額)
 第五条 六合つ子養育手当の額は、次の表のとおりとする。

支給区分		支給金額
第三子	中学校卒業生	一人につき、二〇〇,〇〇〇円
	新入学生徒等	一人につき、一〇〇,〇〇〇円
	新入学児童等	一人につき、五〇,〇〇〇円
	新入園児	一人につき、五〇,〇〇〇円
	新生児	一人につき、一〇〇,〇〇〇円
	中学校卒業生	一人につき、三〇〇,〇〇〇円
	新入学生徒等	一人につき、一五〇,〇〇〇円
	新入学児童等	一人につき、七五,〇〇〇円
第四子以上	新入園児	一人につき、七五,〇〇〇円
	新生児	一人につき、一五〇,〇〇〇円

(申請手続)

第六条 六合つ子養育手当支給を受けようとする受給権者は、認定基準日の属する月の翌月末日までに六合つ子養育手当支給申請書(別記様式)を村長に提出しなければならない。

(支給手続)

第七条 村長は前条の申請があつた場合、その内容を審査し、支給対象者であると確認したときは、遅滞なく支給手続きを行う。

2 審査の結果、受給することができない場合は、その旨を通知するものとする。

(不正利得の徴収)

第八条 偽りその他不正の手段により六合つ子養育手当の支給を受けた者があるときは、村長、受給額に相当する金額の全部又は一部をその者から徴収することができる。

(譲渡または担保の禁止)

第九条 六合つ子養育手当の支給を受ける権利は、譲り渡し又は担保に供してはならない。

(委任)

第十条 この条例に定めるもののほか、この条例の施行に必要なる事項は規則で定める。

附 則

この条例は、平成九年四月一日から施行する。ただし、認定基準日がこの条例の施行日前の場合には、六合つ子養育手当は支給しない。

附 則 (平成十年条例第二十号)

この条例は、公布の日から施行する。

附 則（平成十六年条例第四号）

この条例は、平成十六年四月一日から施行する。

附 則（平成十八年条例第二十七号）

この条例は、平成十八年十月一日から施行する。

六合村社会福祉協議会

六合村社会福祉協議会は、昭和二十六年十月三十一日に設立された。

目的として、村内の社会事業関係者、団体及び社会福祉に関する地域居住者が相協力して、地域住民の福祉増進を図ることとした。

役員として、会長一名、副会長三名、常務理事一名、幹事若干名として、六合村役場の福祉課長が常務理事として事務の執行を行い、会長には歴代村議会議長、副会長には村議会副議長、教育委員長、村議会民生委員長があつた。

業務としては、臨時職員の家庭奉仕員を置き、高齢者宅の掃除や家事の援助や移動入浴サービス、手話講習会等を行っていた。

任意団体として設立された六合村社会福祉協議会も、昭和五十八年十月に市町村社会福祉協議会の法制化が施行され、六合村では、平成五年度より地区説明会等を開催し、平成六年四月一日、県内七〇市町村中六六番目に社会福祉法人六合村社会福祉協議会として発足し、事務局を役場庁舎内に置き、事務局長を住民課長が兼務し、福祉専門員一人、ホームヘルパー二人を配置して福祉サービス業務を開始した。

社会福祉法人六合村社会福祉協議会の変遷

一、事務所

・平成六年四月一日～平成八年三月三十一日

六合村役場一階小会議室

・平成八年四月一日～平成二十一年三月三十一日
高齢者センター

・平成二十一年四月一日～
六合村保健センター

二、役員

会長 山本由平 平成六年度～平成十三年度

中沢富一 平成十四年度～平成十九年度

富沢一二 平成二十年度～平成二十一年度

三、職員

・事務局長

山田武俊 平成六年度～平成九年度

中澤宏衛 平成十年～平成十一年度

山本 茂 平成十一年度～平成十五年度

富沢一二 平成十五年～平成十九年度

富澤和吉 平成二十年～平成二十一年度

・専門員

富沢 洋 平成六年度～平成十三年度

山口隆志 平成十四年度～平成二十年度

山田秀隆 平成二十一年度～平成二十二年度

・ヘルパー

山田道子 平成五年四月一日～平成十三年六月三十日

黒岩睦子 平成五年四月一日～平成八年九月三十日

篠原敏江 平成八年九月一日～平成二十二年三月二十七日

山本典世 平成九年四月一日～平成十四年三月三十一日

山本 牧 平成十四年四月一日～平成二十二年三月二十七日

関久美子 平成十五年一月一日～平成二十二年三月二十七日

・温泉管理

富澤はま子 平成二十一年四月一日～平成二十二年三月二十七日

安原ます 平成二十一年四月一日～平成二十二年三月二十七日

道澤夜代井 平成二十一年四月一日～平成二十二年三月二十七日

四、理事、評議員

・別紙

五、主な業務

①配食サービス事業

・開始年度 平成十二年度

・目的 独り暮らし高齢者及び高齢者のみの世帯の健康保持、

孤独感解消及び地域社会との交流促進を目的に、六合村から委託を受け、六合温泉医療センターの調理による弁当を届ける。

②軽度生活援助事業

・開始年度 平成三年度

・目的 要介護者等の認定外となった高齢者で、生活支援が必要

な者に対する軽度生活支援を行うもので、六合村から委託を受けてサービスの提供を実施する。

③過疎地有償運送事業（やまどり）

・開始年度 平成十二年度（家用自動車有償運送）

平成二十年十月一日（過疎地有償運送）

・目的 全国初の陸運局認可による交通弱者、高齢、身障者、

療育、精神手帳交付者、生活保護者等を対象とした生活支援を行う。村内に限り、年会費二千円で登録し、完全予約制として一回の利用料四百円で利動サービスを受けることができる。

④介護保険業務

・開始年度 平成十二年度

・目的 介護保険法の制定に伴い、訪問介護、訪問入浴介護、予防訪問介護、予防訪問入浴介護等のサービスを提供する。

⑤障害者自立支援法業務

・開始年度 平成十五年度

・目的 これまでの支援費制度から、身体障害者自立支援法の制定に伴い、身体、知的、児童居宅介護等のサービスを提供する。

⑥日常生活自立支援事業

・開始年度 平成十一年

・目的 通常の日常生活は可能であるが、金融機関、介護施設等への金銭の出し入れが困難な者に対し、福祉サービスの利用援助、日常的金銭管理サービスを行う。

⑦六合ふれあい切符

・開始年度 平成十四年度～平成二十一年度

・目的 介護保険、過疎地有償運送事業「やまどり」で補完で

きない部分を地域通貨の「六合ふれあい切符」により、地域でお互いに支え合うサービスを提供する。

中之条町との合併により廃止となる。

⑧地域福祉サービス

・共同募金事業、社会福祉校の育成、福祉機器の貸出し事業、福祉映画会の開催、福祉啓発活動

⑨福祉団体の育成

・長寿会連合会、遺族会、手をつなぐ育成会、身体障害者更生会
・くつろぎの会

⑩社会福祉法人中之条町社会福祉協議会へ編入合併

・合併の方式 社会福祉法人六合村社会福祉協議会を解散し、社会福祉法人中之条町社会福祉協議会に編入する。

・合併期日 平成二十二年三月二十八日

・六合支所を六合保健センターに置く。

顧問	本多 秀里	黒岩 勇	富沢 一二	中村 春枝	田村 修一	本吉 修二	町田 喜彦	富沢 久好	安原キヌエ	山本 誠	市川 伸夫	篠原六三郎	黒岩 春夫	山本 善繁	平成六年
顧問	本多 秀里	黒岩 勇	富沢 一二	中村 春枝	河野 和男	本吉 修二	山本 三男	富沢 久好	市川けさ江	山本 誠	市川 伸夫	篠原六三郎	黒岩 春夫	山本 善繁	平成七年
顧問	本多 秀里	黒岩 勇	富沢 一二	中村 春枝	安原十三四	本吉 修二	山本 三男	富沢 久好	黒岩てる子	山本 誠	市川 伸夫	山田 正人	町田 文雄	茂木 孝一	平成八年
顧問	本多 秀里	黒岩 勇	富沢 一二	中村 春枝	安原十三四	本吉 修二	山本 三男	富沢 久好	関 フサ子	山本 祐二	市川 伸夫	山田 正人	町田 文雄	山本 善繁	平成九年
顧問	本多 秀里	篠原 啓吾	山本 仁子	黒岩 勇	関 千代衛	本吉 修二	山口 一元	富沢 久好	本多 静枝	山本 祐二	市川 伸夫	山田 正人	湯本 尚好	山本今朝好	平成十年
顧問	本多 秀里	山本ひとみ	清水 照美	山本志げ代	黒岩 勇	関 千代衛	山本 三男	山口 国次	中沢アキエ	山本八十二	富沢 実	山田 正人	篠原 啓吾	佐藤 英子	平成十一年
顧問	本多 秀里	山本ひとみ	清水 照美	山本志げ代	黒岩 勇	関 千代衛	山本 三男	山口 国次	中沢アキエ	山本八十二	富沢 実	山田 正人	篠原 啓吾	佐藤 英子	平成十二年
顧問	山本 三男			篠原 啓吾	山本 仁子	黒岩 勇	山本志げ代	関 千代衛	山本 好一	山口 国次	黒岩 正善	関 守	富沢 実	山本 峯松	平成十三年
顧問	山本 三男	山本てる子	山本 文子	関 カヅ江	黒岩 勇	関 千代衛	山本 好一	市川ひろ子	黒岩 正善	関 守	富沢 実	篠原 正忠	西山 昇	山口 一元	平成十四年
顧問	山本 三男	山本 敏子	山本 文子	関 カヅ江	黒岩 勇	関 千代衛	山口 悦行	市川 章子	黒岩 正善	関 守	富沢 実	篠原 正忠	西山 昇	山口 一元	平成十五年

交通

一 長塚 節、暮坂峠から

大倉峠を越え秋山郷へ

長塚節は、明治十二年（二八七九）四月三日に茨城県岡田郡国生村（現常総市新石下町）の子どものない長塚家の父母両養子の長男として生まれた。

一八歳の時に脳神経衰弱のため不眠症となり、尋常中学校を退学し、明治三十年（二八九七）一九歳の時、草津温泉で一週間の療養している。

長塚節は正岡子規や夏目漱石に師事し、明治四十三年に漱石に勧められて朝日新聞に連載長編小説「土」を発表したことで、歌人、小説家として世に知られるようになった。

節が六合村を訪れたのは、明治四十一年八月のことで、二十日に家を出て二十一日に前橋駅で下車し、渋川から中之条を経て二十二日に沢渡温泉から暮坂峠を越えて入山に入り三泊した。

しかし、溪流の川音と蚤とのために三夜眠らず、二十五日は雨の中長平の四〇前後の壮健な角蔵（現角一宅）を案内人として雇い、長野の秋山を目指した。

大倉峠を越える途中案内人の小屋に仮泊する。

角蔵は夏は岩魚を釣り、冬は野獣を狩猟としていたので夜は角蔵がとった岩魚を食べた。

小屋はカワグルミの皮で作ったむしろ二枚を敷いたものだった。

翌二十六日に信州秋山の切明温泉に泊り、九月二日まで滞在する。そして秋山郷の風俗習慣を次のように記している。

『秋山はこの溪谷総称にして信越二州に跨る。時に陰曆八月のはじめとて溪谷の村落皆山神を祭る。為に是に其の風俗習慣を觀察するを得たり。

切明の地に銅鉞あり。既に十八年間この銅鉞を開いて去らざる老坑夫あり。坑夫の娘年二十五、頗る謡を好む。凡そ溪谷の民皆雪中熊を捕るを以て業とす。彼らは手に槍を提げて格闘するなり。七十に及びてなおも業を棄てず』

その後、切明温泉、越後（現津南町）から信州野沢温泉、渋温泉を通り渋峠の険しい所を越えて草津温泉に宿泊、入浴した。

七日に浅間山麓応桑の開墾地を訪ねて二六年間の辛苦の経歴を聞き浅間山には雲りのため登山をやめ、十日に碓氷の新道を辿り十一日に松井田より榛名へ越えた。

榛名湖では濃霧に遭い、伊香保を通って渋川に泊まり十五日に帰郷した。

六合村の入山で詠んだ歌碑は浅間、白根を眺望する上世立の県の天然記念物技垂れ栗近くの丘に建っている。

『唐黍とうびきの花の梢にひとつづつ蜻蛉（あきつ）をとめて夕さりにけり』（山の畑に並んだ丈の高いトウモロコシが、上の方に花穂をつけている。その一本毎にトンボを止まらせ、ひっそりと羽を休ませたまま夕方になつてしまったよ。）

この歌は大正三年（一九一四）に発表され、歌碑は昭和五十三年十月に建てられた。

碑の大きさは、高さ一二〇センチの台座の上にあり、一一〇センチ、巾一一〇センチである。

二 明治以後の交通

六合への歴史の道

はじめに

昭和十二年に小雨く入山間を結ぶ県道が開通し、歩く時代から車利用時代が変わる大きな契機になった。それ以前の長い間は、人の足に頼る歩く時代が長く続き、道筋も本質的な変化はなかった。

六合地内を走る道筋をみると、中世以前の紀行等を見ても、道が何処を通ったか分かる具体的な記述は見られない。江戸時代の『加沢記』に、戦国末の軍略の道として高間越えや暮坂道が登場する程度である。本稿で扱う道は、我々が知る近世以降の徒歩に頼る道である。当時、六合地内の道は草津温泉に通じる草津街道と考えても過言でなかった。集落からの道も、草津温泉に通じる支線網で結ばれていた。

歩く時代には入山から国境の峠を越えて、信州や越後に通じる道があった。峠を越え双方の物資を運び、入湯客も往来する重要な道だった。だが、国境越えの道も今では六合地内から直接連絡する車道はなくなり、生活道路としての役割は消滅している。

近世以降、六合へ通じる道の大幹線は中之条から暮坂峠を越え、地内を東西に走る道だった。道筋には暮坂峠、白砂川渡河の小雨橋、大坂と難所越えがあり草津へ通じていた。この東西を結ぶ道は、平坦な高原状の地形が続く暮坂から生須までの東側の道筋は、ほぼ今の道沿いに走っていた。草津道の西側には白砂川渡河や、大坂越えの地形的な難所が続

き、その後の道路開削は別ルートを選び旧道筋は廃道状態になってしまった。

白砂川沿いに長野原から入る南北を結ぶ道は、距離的には短いが、何ヶ所かの地形的な難所が点在し、それを大きく迂回して起伏の大きな山道を通ることになり、道路の主流にはなれなかった。この南北交通の宿命ともいえた制約を克服したのが、昭和初期に開通した小雨く花敷間の県道開通だった。道路開削の背景には村内一体化を願った先人の努力と、川中発電所開業という時代的な要請もあったが、結果として人や物の流れが川沿いの道に移り、現在の道に通じる契機になった。

吾妻川沿いに走る吾妻線開通で、村への玄関口は、南の長野原町側と駄目押しされた。吾妻溪谷の難所に明治中期、野口茂四郎の尽力で道路が開削、中之条く草津間の東西を連絡する道の賑わいにも衰微の気配が見られた。鉄道開通の結果、車道未開通のこの道筋は壊滅的な状況になり、峠道は荒れ放題になってしまった。

白砂川沿い道は昭和初期に開通はしたが、狭い部分や危険な橋梁も多く快適な車道とは言えなかった。戦後、日本経済の高度成長の恩恵もあって、徐々に快適な道に改修され、不安定な橋梁も永久橋が架設され、紅葉情報を白砂溪谷ラインの名で報じるように、今日の車社会を加速させる原動力になった。

車道開通が遅れた東西の道も、昭和三十年代に中之条町から暮坂峠を越える車道が開削、荷付場く草津間も同じ頃に車道が開通し、衰微一方だった東西の道も、以後観光道路として役割が向上する。平成になり、入山から中之条町を結ぶ新たな車道が開削され、暮坂峠道の改修も進み、短時間で中之条町の中心部と結ぶ動脈になり、地内の生活環境を大きく

変えつつある。

歩く時代の道には入山から国境の峠を越えて、信州や越後に通じる道もあった。特に信州への道は、双方の物資を運び交易道路であり、草津への入湯客や、善光寺詣りの人々も往来する重要な観光の道でもあった。だが、国境越えの道も今では六合地内から直接連絡する車道はなくなり、生活道路としての役割は消滅している。

メインの通りではないが、入山から高間峠越え岩島道や、大原経由の四万温泉道も外部に通じる道として紹介してみる。他に現金収入をもたらす重要な生活道路には、今も古老が草津商いの言葉を使うように、近年まで集落と草津を結ぶ道があったので紹介する。

本稿作成の第一の目標は、今では廃道状態になった歴史の道を、歩いてみた調査報告であり、道筋に点在する道標等の遺物の紹介である。第二に、今の車道になるまでの道路開削の歩みを新聞等から紹介することである。最後に、六合に生まれ、六合で生活し、六合を安住の地にした先人が、馬を牽き、荷物を背負って、家族を養うために歩いた道を、多少とも後世に伝えることが出来れば本望である。なお、この稿作成に際して、入山中学校生の労作『入山研究』は貴重な資料になり、励みになったことを、お礼と共に申し伝えたい。

一、東西を結ぶ草津道

(一) 暮坂峠道の三遷

六合村へ東から来る道は暮坂峠を越えて入る。戦国以前の峠越え道が何処を通ったかは不詳のため、本稿では江戸時代以降の道とする。近世以降の道は記録や道筋に石仏等の遺物もあり、道筋の特定は比較的容易

である。江戸時代以降、この峠越え道は三遷している。江戸時代と明治初期の旧暮坂峠經由の道は、峠の位置も、峠への道筋も今とは異なる。二代目の暮坂峠道は明治三十一年に開削された通称広作新道に始まり、牧水の通った道になる。現在の道は昭和三十七年に自衛隊が開削した道で、二代目とは途中の道筋は異なるが、峠では一緒になる。

現在の峠の北に位置する旧峠道は、上沢渡大岩集落の西、麓橋を渡って林道に入り、ゲート前付近が山中への入口になる。ゲート手前山際には、江戸時代の道を教える重要な道標がある。信仰塔と関係しない純粹な道標で、年号はないが「右ハ山みち／左ハくさつみち」とあり、付近が旧道入口と分かる。人に会うこともない山中の寂しい峠道は、往事は草津への浴客や物資移動で賑わい、東西に結ぶ表街道だったとは想像出来ない閑寂な世界である。沢沿いに入った旧道は、作業道の開削等で当時の道幅や分かりにくい箇所もあるが、次第に山腹に移り峠に至る。細尾集落からの道が合流して、中峠を越えると、凹状の趣を感じる坂道になって、長い道の歴史を物語る場所になる。道の右脇に文政二年の馬頭観音があるが、峠道に遺る唯一の石造物である。以前は旧峠道筋に、幾つかの石造物があったが、今は道標と馬頭観音のみである。細尾集落の西、山へ入る道脇に石造物が並ぶが、旧峠道から移ったものもある。

南側の山腹を通ると旧峠になる。ここには大岩と小雨から出た二軒の茶屋があつて、今も茶跡に付近に若干の平地がある。以前は茶屋跡付近の崩れた斜面で、茶屋で使ったと思える茶碗の破片等も見つけることが出来た。十返舎一九は『諸国道中金草鞋』で、当地を「呉坂を降りて大岩の町なり」と記している。旧峠の西は、暮坂高原に続き勾配も緩やかで、僅か歩けば県道を横断する。この場所は生須側から車道を来て、峠

手前カーブ手前で橋を渡り、すぐ左の鎖が張られた道跡の所になる。だが、作業道で利用し道幅も広くなり古道の趣はない。

二代目の道は、山田の角田広作の尽力で明治三十一（一八九八）年に開通した大岩新道で、麓橋を渡った林道入口の先で山中に入る。細尾集落裏に続く尾根の北山腹を通って上の平にでる。右は前記の旧道に通じるが、この新道は左へ下り南斜面の山腹を通る。沢を渡る所には橋を架けた跡もある。その場所は県道脇から川中発電所への隧道入口道に入り、小平な所から右の沢を見ると慶雲橋跡がある。右岸には橋場の石積が残存し、谷間を跨いだ橋の規模を偲べる。慶雲橋跡の先、今の県道が右に大カーブする窪に藤井橋が架けられたが、確たる遺構は見られない。

歌人若山牧水は大正十一（一九二二）年の旅でここを通り、これらの橋を渡ったのであろう。大岩新道は北を江戸時代の道が、対岸の南を今の車道が走り、新旧二つの道に挟まれた所を通っている。藤井橋を過ぎた峠道は、今の県道沿いに進み、右に木製堰堤が見える所で右の窪に入る。この道は牧水時代の雰囲気が残り峠の牧水像前にでる。

田山花袋の紀行随想集『椿』（大正二年）には、草津から伊香保に向かう途次に峠付近を、「今朝早く草津の旅館を発つて来た。暮阪の峠の上に瀟洒な茶店があつて、其処では老婆がラムネを冷たい水に浸して客を待っていた」と記し、新峠にも茶屋があつたと分かる。『郡誌』には、当時の県道中之條草津線は、中之条町にあつた郡役所前、道路元標が起点で、暮坂峠を越え六合村經由草津町まで八里一八丁四間とある。

角田広作が開削に尽力した大岩新道も、難所吾妻峽の開削で吾妻川沿いに郡内を東西に貫く道として開通し、起伏のある暮坂峠經由道の役割は変わった。吾妻峽の難所は明治中期に川原畑出身の県議野口茂四郎の

尽力で開通し、今の車道に発展した。蛇足だが川原畑といえば、江戸時代の僧野口円心も道路開削の恩人として忘れられない。円心も吾妻峽の道陸神峠や久森峠越えの道の開削のため勸進したといい、二人の野口の恩は郡内の道路開削では忘れられない。吾妻峽經由の道の開削以後、暮坂道も徐々に寂れていった。昭和初期のバス運行、特に戦後の鉄道開通により、決定的な打撃を受けた。同三十年頃の峠道は、長年の放置で橋も朽ちて落下し、名だけの県道で安全な歩行も出来ないほどの荒廃状態こうはいだったという。

このような状況を憂い、同三十一年に中之条町、六合村、草津町主催で県道草津中之條線改修促進期成同盟を結成し県道の改修を訴えたが、当初県の反応は今一つであった。同三十四年、重い病状の身ながら中之条町の伊能町長は、峠越え道の改修への強い要望を記す書状を県に認め、一週間後に逝去する出来事もあった。こんな経由をへて、翌年の第一回路線改修推進協議会で、県は峠越え道開削を約束している。全体計画は改修延長一二キロ、概算工事費一億一、五〇〇万円で、大岩く生須間の測量も終了し、同三十六年三月十八日に中之条町側から工事が始まった。白砂川には利根川の旧坂束橋の一部を移築した吾嬬橋を架け、同三十七年十一月十三日に竣工し、待望の道が貫通したのである。

暮坂峠（標高一、〇八六メートル）の牧水詩碑手前に、「暮坂峠開鑿記念碑」がある。裏面を見ると「県道草津中之條線吾妻郡中之條町上沢渡地内道路開鑿に当り相馬ヶ原陸上自衛隊第三二二地区施設隊に於て延長一、一四〇米を施工せる事を記念する 昭和三十六年十月 群馬県」と刻まれる。碑から、峠道の開削は県の要請で工事に協力した自衛隊の支援と分かる。

(二) 暮坂峠から白砂川渡河

暮坂峠を越えた県道は広大な高原を走り、道脇に点在する牧水歌碑を樂しみながら進む。旧峠を越えた道は県道に出合うが、道を横切ると小沢に挟まれた間を通るが、笹に覆われ道跡は定かではない。唯一、枯れた古木がある塚状の所が御師ごしの宮跡で、当時の道沿いの遺構である。現暮坂峠から西は、車道下の谷地状の林内に道跡が続き、やがて沢を渡る。沢の左岸には当時の橋場石積があるが、ここが当時の御師ごしケ橋跡である。この先で二つの旧道は合流し、今の車道沿いに進む。今は橋がないが、旧県道には夫婦橋、蕨橋が小沢に架けられていた。旧県道はせまい微橋で駒ヶ沢を渡り左岸に移り、町道暮坂引沼線の分岐の対岸を通った。



旧暮坂峠遠望



峠道脇御師宮

古老は町道引沼暮坂線分岐付近、駒ヶ沢左岸で、高間峠越え道と新道が分岐し岩島側へ通じたと教えてくれた。町道分岐対岸で高間峠越えの道が分かれ、峠を越え高間大黒の尾根を下っている。もう一本の通称高

間新道は、高間峠越え道分岐の少し東で分かれ、小沢沿いに上った。暮坂峠と高間峠の間付近で尾根を越え、最短距離で川中方面と結んだという。新道には人の名が付いたと古老が語るが、これが『中之条町の地名』に載る「弥五兵衛新道」であろう。同書には「詳細は不明だが、暮坂峠の道に対抗するため、松谷の弥五兵衛と言う人が、川中方面から高間の大黒の近くを経て暮坂方面を結ぶ最短の道を作る。道筋の番号入りの観音像は道標か」と説明する。歩いてみると、高間牧場跡に通じる道筋には、標柱に「湧水」とある湧水地があり、『加沢記』に記す岩櫃攻めの真田勢が通った湧水經由の古道と思える。一方、新道は高間牧場跡の縁沿い山腹を通り、緩斜面で道幅も広く、道標役の観音像が点在する道である。この二つの道の分岐する付近は、神代牧場の整備等で旧道跡は消滅してしまった。

この岩島への道を知るには小池善吉氏の『山村社会の人と暮らし』上州吾妻の入山村』が格好な資料である。同書に、入山の古老が明治く大正頃に盛んに往来した道と語った話しが載る。古老は高間峠越え道は嘉永年間く明治初期まで栄えた道というが、詳細は不明である。入山から岩島村松谷まで馬で物資を運搬し、その先は大戸村を経て高崎、遠くは江戸方面まで出荷していたという。この道は明治初年まで頻繁に往来とあり、当時は入山から東へ連絡する道の主流ではと語る。その後、他コース整備で次第に衰え、明治四十年近くまで継続したが、暮坂道の県道指定後は沢渡コースが中心になったとある。

高間コースの道は松谷まで五里で、日帰りの場合は朝の暗いうち入山を出て、昼頃松谷に着いた。午後一時には松谷を出て、入山へは六時から七時頃に帰ったとある。往路は入山の産物、木工製品の曲げ物や杓子

等を出荷し、帰路は日常品の衣料、茶や酒を運び帰った。

高間越え分岐を過ぎると、旧道は暮坂集落東外れの廃屋付近で駒ヶ沢を渡って車道と合流する。旧県道時代、この橋は暮坂牧場の存在を物語るように駒寄橋と呼ばれていた。西に進んだ旧県道は後坂橋を渡り、直売所付近の辻に出る。辻は入山への道の分岐になるが、付近の道標類は省き、後の入山道で説明する。

西へ続く道は開拓等で地形も改変、旧県道や江戸時代の古道の区別は困難になる。旧県道は花楽の里駐車場手前で屋敷橋で沢を渡るが、袂付近に旧道の遺構が見られる。その先で旧道は駒ヶ沢に架かった暮坂橋を渡って左岸に移った。旧県道は左岸沿いに移って進み、布袋沢橋を渡り、十二の森脇にでる。ここで吾嬭山林道を横切り、やがて駒ヶ沢が見えて来る。駒ヶ沢には大橋が架かり、橋を渡れば道は右岸に渡った。『郡誌』を開くと、大正九年頃の大橋を、「大橋／木橋／長さ六十六尺／幅九尺／入山地内／中之条・草津線」と記し、当時の六合には長さ一〇間（一八メートル）以上の橋は、大橋と白砂川の吾嬭橋しかない。

湯の平温泉口付近から上流の駒ヶ沢右岸沿い山腹を歩いたが、今の県道以外には顕著な道跡がみられない。県道以前も旧県道と同じく左岸を走り、温泉口付近から右岸沿いになったと思える。

温泉口から湯の平温泉へのハイキングコースは、ヒノマエ峠を過ぎ、その先のマラ石峠を越えると湯の平温泉側の斜面に移る。珍しい峠名の由来は、温泉側斜面の道際に突き出た男根状の石というが、今は谷に落ちたか見られない。一人歩きには少し寂しい山道だが、紅葉の頃は周囲に目を奪われる。

温泉口から駒ヶ沢右岸に進むと、県道上に顕著な旧道跡が続いている。

道脇に疣石いぼや旧道に遺る数少ない石造物、天明元年の馬頭観音がある。

疣石は子供の手に疣が出来ると、この石の窪に溜まった水を疣に点ければ治癒するという素朴な民間信仰に因む石である。馬頭観音付近の県道脇には、近年命名された牧水清水が湧いている。この先で旧県道は崩落や工事で消え、やがて今の県道下に移る。駒ヶ沢ダム堰堤道に入り、三〇メートルも下ると道脇の石に馬頭観音が祀られる。ここはカワギで、旧暮坂道と鍛冶屋敷方面への道が分岐する所である。堰堤道入口先の車道下に旧道跡があり、山中を通り生須集落に向かっている。途中で降跡採草地からの道と合流し、十二坂を下るが、この坂をハッコウ（郭公）坂という方もいる。左に水道施設を見て、右に墓地を見ると旧道は県道に合流する。道沿いには生須歌碑苑があり、文化十四（一八一七）年に生須村で建てた高さ四メートル程の町文化財庚申塔がある。文字は実に雄渾で、一字に米が一升入ると聞いている。当地は道の分岐で、昭和三年に青年団が建てた道標があり、「向右 さはたり／左 久さ津」、側面には「↑湯の平 応徳温泉二至ル一軒」と記し、中学校裏から白砂川左岸山中を通り湯の平温泉や、白砂川河床に湧いた応徳温泉へ通じる温泉道を教えている。

草津道は生須集落に入り、上の茶屋脇を通り、次に下の茶屋を右に見る地点で県道から離れ、旧道時代の趣を伝える狭い坂道を下る。十返舎一九は『諸国道中金草鞋』で、草津の帰途に茶屋に立ち寄り、「ぢぢばばのつふりは白髪大根なり、さればなますの茶屋のしるしか」と詠むが、白髪を脛なますに例えた地名入りの狂歌である。狭い家並みを下る坂道が終わると、通水記念碑の所にでる。記念碑台石は下の茶屋（山市屋）脇に置かれた駒繋ぎ石を利用した石で、草津街道の往事を偲ぶ遺物といえる。

旧道は白砂川方向に向かい、左に道祖神を見て下れば、赤岩方面と白砂川の小雨橋が分岐する二本辻になる。



旧道と下の茶屋



小雨橋橋柱穴

辻は村の出入り口を固める場で道祖神が置かれ、古くは質素な萱作りの御飯屋を祀り伊勢参りの道中の無事を祈った所である。傍らにある碑は、白砂川左岸沿いに走り生須と赤岩を連絡した明治の里道改修碑で、基部に「片益里道改修寄附人名碑」とある。正面は「紀念」で、下は「一金十円 桜井傳三郎」で始まり、六合地内の大字別に寄附人の名前と金額が記される。石が傷み不明な所もあるが、寄附人は地元の赤岩村五〇人、生須村一八人と多くある。左側は欠けて、「明治四十」以下は見えない。『村誌』に欠けた部分を「明治四十二年竣工」と記し、この年に碑も建てたと思える。

この辻を右に下ると白砂川の渡河地点がある。橋は小雨橋と呼び、天和元（一六八一）年の『沼田領郷村品々記録』には、「同（吾妻）郡生須・小雨ノ間 小雨ノ橋 長八間程 幅一間半程 是八四、五年以前

落申候 今程ハ渡リ無之候」とあり、長さ約一四・四メートル、幅が約二・七メートルの橋と分かる。だが、大水のためか橋が落ちてない状態とある。明治十年頃の『郡村誌』には、「小雨橋 入山道ニ属ス 須川ニ架ス村ノ西方五町三十二間ニアリ 長十二間中五尺 圮橋」とあり、圮橋＝土橋だった。明治四十三年の『六合村誌』も同様に土橋だが、「長式拾壹間 幅八尺」とあり、橋の長さが九間（二六・二メートル）も長くなり、橋場の変更も考えられる。『吾妻郡誌』に載る大正九年頃は、「吾嬭橋／木橋／長さ一八一尺／幅九間／生須・小雨間／中之条草津線」とあり、橋は吾嬭橋と呼ぶ木橋と分かる。小雨橋は草津道の交通の要衝で、橋本の小雨村、生須村は勿論、温泉客の往来に差し支えないことを願う草津温泉も、公儀（領主側）が費用を負担し、西吾妻二九ヶ村による御普請橋で維持することを願っていた。一方、日頃は橋を利用する機会の少ない遠方の村は、人足等の負担を嫌った。そこで、公儀筋が通らない道だから土橋でと負担軽減を願い、恒久的な刎橋架設を望む橋本村と訴訟を繰り返してきた。結局、明治四年に小雨橋架け替えのため、二一ヶ村で二二五両を用意し、橋本の小雨、生須両村に渡すことで和解した。以後、橋の流失等の際も、他の村々に負担を願わず、両村が掛け替え工事を行うことで示談している。だが、それ以降も洪水等で橋が流れ、大きく迂回することも度々で、地元では難儀していた。

現在、町文化財吾嬭橋（旧坂東橋）上から、白砂川河床の大石を見ると、多くの穴が穿つてある。石は広い川幅の中程にあり、橋脚を建てるため穿つた穴で、長い架橋の歴史を物語る貴重な遺構である。刎橋時代もあつたが、土橋よりも建造費が嵩み、他村の負担が多くなり、仮橋程度の状態が長かったようだ。事実、古老は河床に設けた、簡単な造りの

橋を渡つたと語っている。その後、吊り橋になり、長年苦しんだ橋の流失から解放され、さらに利根川の坂東橋を利用した鉄橋吾嬭橋は文化財に指定される。今は高い所を通る新しい吾嬭橋になり、河床の大石付近は、下流から上流へ四代にわたる橋の変遷が一目で分かる貴重な歴史スポットになっている。

(三) 小雨から草津境への道

小雨橋を渡つて右岸に移ると小雨で、急坂を上ると六合役場(現六合支所)裏に通じる。ここの旧道脇にある、天保十二(一八四一)年の馬頭観音は町文化財で、生須側の馬頭観音像と向き合う配置である。石工は生須側同様に当地に縁がある高遠石工小森吉蔵作だが、今は石材が劣化し剥落のため銘文も不鮮明である。

白砂川を挟む小雨、生須の両集落は草津道沿いの村で、馬や駕籠で荷物や浴客を運ぶ駄賃稼ぎが生活を支えていた。元禄十二(一六九九)年の『生須村小雨村駄賃詫之事』に記すように、浴客や荷物継ぎ立てをめぐり利害対立も多くあつた。両集落の馬頭観音は、長年の対立を解消する象徴のように、お互いに向き合う場所に建っている。

小雨は冬の寒さが厳しい草津の冬住み集落でも知られる。大坂への道筋にも往事を偲ぶように立派な石積の屋敷跡が見られる。草津へ通じる大坂入口の分岐には、明和二(一七六五)年の双体道祖神がある。道祖神には「左りくきつ」とあり、右は欠落するが入山道と思える。ここから急坂が始まるが、道脇の牧水の歌碑付近の石垣も冬住み屋敷の名残と聞いた。歌碑の一つに、「九十九折りけはしき坂を降り来れば 橋ありてかかる溪の深みに」と、大坂から小雨橋付近の道を詠んでいる。歌

碑を過ぎると、道脇の自然石に「大乘妙典廻国百人供養所」や「奉納百八十八番供養塔」と刻み、付近には観音等の石造物が散乱し、お堂か社地の跡であろう。左上に墓地を見る地点の道下は平な屋敷跡で、石造物からお堂跡であろう。延命地藏菩薩像を中心に、一〇基余りの馬頭観音像や西国二番の聖観音像が一行に並んでいる。この先の大坂く草津の旧道沿いを歩いてみたが、難所とされる峠越道には二基程の石造物しかなく、道筋に置かれた馬頭観音等をここに集めたのであろう。墓地入口に、草津から帰路の浴客の便宜を図つた「右 さわたり」の自然石の道標がある。墓地脇を過ぎると旧道は大きなカーブを描きながら杉林内に続いて行くが、古道の雰囲気を感じさせる。カーブを二、三回曲がれば、道の左に苔むす石がある。見れば上部に観音の梵字(サ)が、下には浮き彫り合掌像を刻み、通称鼻観音と呼ばれる。観音の先も曲折道が続き、左カーブに朽ちた木柱がある。見れば「→ 姫仙の滝(約三軒)を経て三ツ風呂草津に至る」と僅かに見え、このヒラ(斜面)を通る草津への道があつたと分かる。

若山牧水は『みなかみ紀行』で、付近の坂道を「とりどりに紅葉した雑木林の山を一里半も下ると、急にけわしい坂に出あつた。見おろす坂下には大きな谷が流れ、その対岸に同じように切り立った崖のなかほどには、家の数、十戸か二十戸か、一握りにした村が見えていた」と的確に著している。山腹を通る坂道が向きを変える付近は特に急坂で、馬に乗った客も暫し降りて歩くほどの所だったと古者から聞いた。生須側から付近を見ると、尾根に鉄塔が見える所になる。山腹の坂道を上つた道は、鉄塔下付近で東西方向に進路を変える。付近の窪には岩の隙間から風が吹き出す風穴があつた、ここを過ぎ、左に進路を変えると、朽ちた

木柱に「牧水清水」と記す場所になる。今は道がジメジメする程度のもだが、以前、住吉屋の茶店があったという。旧道脇には大石が落ちて道を塞ぎ、往事のメインストリートも荒れてしまい、寂寥たる気持ちになる。原地内にはいると、左から諏訪神社方面から来る道が合わる。この神社方面から来る道も十二坂の坂道を曲折して上る尾根道だが、古道らしい雰囲気をよく伝えている。合流付近から先は、以前は耕地だったが、今は一枚の畑もない落葉松林内の明るい道で、地表面は笹に覆われる。道幅も作業車が利用したのか広くなり、四〇〇メートル程で行くと中間産廃物処分施設脇で小雨林道に合流する。



牧水清水付近



一里地藏

小雨林道と合流後、旧草津道は徐々に林道上の尾根沿い山腹を通る。途中には字廻石の由来になった石が旧道の真ん中にあり、往來の人は石の廻りを通ったと古老が教えてくれた。やがて、林道上を送電線が横断する地点になるが、この付近が草津町境である。天明四年に松代藩土某の著『夢中三湯』に、「小雨村 此村ハ草津冬住村といふ、一里アリ、

大峯有り」と著す、小雨と草津間二里の中間地点である。中間地点の旧道脇には通称一里地藏と呼ぶ小さな地藏があり、背に「地藏菩薩 施主海西」と刻み、施主名から信仰関係者の建立と思える。この先、一里程で草津温泉へ到着する。

二、草津へ入山道

この道を歩いた松代藩土佐久間象山は、『杳野日記』に草津出立後を「松原を過ぎ草野を経て一の沢といふを渡り、山を登り、又二の沢といふを経て萱野を通り、山を下り三の沢と云うふ処を過ぎて路左に古松数株あり。其梢をこして瀑布を見る景光奇絶なり。沢に長さ十間許なる橋あり。橋下の水巖石に触れて怒号する事雷の如し。夫より小倉村といふ所を経て、昼過ぐる頃長平村に著く」と小倉、長平への道筋を記している。車道もほぼこの道沿いに進むが、一の沢は谷沢川で、山を登った先の母狸沢は記さず、二の沢が大沢川で、萱野が田代原だろう。旧道は大沢集落裏、車道と離れた所を上り分岐の松にでる。草津から来る道を『入山小百年』に、「草津町へ田代間の道は牛馬車が通れる程度の九十九折りの杣道だけで、トラックが通れる道にするため、幅員拡張や橋梁の改修が行われた」と記している。難工事場所にはガードレールを設置し、昭和十九年十一月一日に初めてトラック試乗が行われた回顧談が載っており、改修前後の道の様子が分かる。

分岐の松は、古くは信州道、草津道の分岐で、小倉、品木や京塚へ通じる要衝だった。小倉方面への旧道は開拓された耕地内を進み、一本松に至る。一本松には山神の石祠があり、側面には「右ハ京ツカ／中之条」、左ハ小倉／エチゴ」とあり道標を兼ねる。右の道は京塚から市場町中

之条を教え、左は小倉を通り秋山經由の越後道を教える道標である。六合では唯一の越後道の道標で貴重な交通資料である。



田代原の一本杉



山神の祠 右は京塚中之条

象山は大久保を経て尾根を越え、沢沿いに山を下った。道脇のヒビ石は、戦時中はこのまで出征兵士を見送り、往來を通る旅人も一休みする場だったという。長笹川が木の間に見える付近に、天保十三年の馬頭観音がある。正面は「馬頭大士」の文字で、下に「右 くさつ道」、「左 小雨道」とある道標で、ここが道の分岐と分かる。左の道は日曹鋳業の硫黄山跡を通り、田代原の東を通って梨木經由で小雨に通じる道になる。象山の日記の三の沢は長笹川で、左に見える瀑布は枝沢に落ちる石尊の滝でなく、長笹沢川からガラン沢本流に落ちる弁天の滝だろう。右岸に突き出す一つ石で川を渡るが、今は発電所に水を取られ水量の少ない滝だが、壮観な当時の姿を想像させる描写である。長さ一〇間の橋は小倉橋で、地形的制約や、旧道が対岸に続き、橋場は昔も同じ場所であろう。左岸袂付近の道上に馬頭観音があり、その上に旧道が続きキパン坂を上

り、横道を通れば小倉集落が見えてくる。

集落内を通り、集落の北尾根に長平に通じる道が走り、番屋平を過ぎ、庚申塔を左に見ると長坂の下り坂になる。大笹や猿ヶ京に関所が設置で、上信国境が要害地として通行が禁じられ、番屋は寛永年間に閉鎖されたという。番屋閉鎖前の古道は小倉を経て廃村枋洞く熊倉開拓く上長笹のハギワく信州古道く呉服平に通じたと思われる。『村誌』に載る中之条町山田の角田広作が開削した広作新道は旧信州古道跡を利用した道と思えるが、早々に廃道になったようだ。

金山沢川の橋を渡り、左に天保十年の馬頭観音を見ると、この先はヒラクチ坂になり、小倉集落で使用する水道施設脇を上がると長平分校跡になり、集落が見えて来る。村木沢付近の旧道は車道より上方を通り、優美な姿の双体道祖神へ通じる道を見て、姥神様への道を横切り姥沢を渡り、アレエタ沢を渡る道だが付近の道跡は不鮮明である。道は山中に続き、権現沢を通ってお経尾根を越えれば、山中を抜け根広集落へ入る車道のカーブに旧道が出る。昭和十五年、お経尾根崩落で長笹川を塞ぎ止め、今では尾根の形状を失っている。根広集落を抜けると、道祖神のある赤土で道が分岐する。右は湯坂を下る花敷への道で、左は矢倉への道になる。道沿いの左上には笹岩があり、続いて鉄塔が立つ尾根の先端崖上に天狗様を祀る天狗尾根がある。矢倉発電所の鉄管を過ぎれば矢倉集落墓地が左にあり、林道入口には岩室に安置の双体道祖神がある。墓地付近で旧道は道下の斜面を下る前坂になり、車道の下方で矢倉川を渡った。和光原方向へ行き、道脇にある天保十三年の文字道祖神を見て、神社へ通じる尾根道を進むと和光原集落が見える。この道が本通りだが、他に枝道を利用し最短距離で白砂川の橋に通じる道筋もあるが、そ

れが古老が炭を運ぶのに利用したと語る道である。草津への道はこの逆コースになるが、大槻文彦はこの道を通らず和光原から白砂川を渡る道を通っている。

三、沢渡温泉への道

この道は草津温泉で傷んだ肌を癒す上りの湯で沢渡温泉に立ち寄る方が利用したり、入山周辺の炭や曲げ物等の物産を沢渡に運び、帰り荷で衣類や各種必需品等の物資を運ぶ生業の道の機能もあつた。この項では暮坂で本通りの草津道に合流するまでの旧道を紹介する。

入山に行くとき沢渡道や沢渡通いの言葉を古老が自然に使うほど沢渡温泉とは強く結びれていた。和光原の方が小さい頃、中之条の市に行った父の帰りが遅くなると心配し、兄弟で暮坂峠まで迎えに行つたと語るのを聞き、今の県道が開通する前は、入山から沢渡や中之条へ通う姿は戦後まで続いた日常の景色の一つと思つた。

入山道は大岩不動の祭典には八石沢上流からサツサムキの尾根を越えて行く山道や、町道引沼暮坂線のオウチク峠越え道もあつたが本格的な道でなく利用は限られていた。一番利用された入山道は、暮坂の後坂沢の辻で草津道と分かれる道だつた。近くの小林宅東、県道に一見墓石に見える名号塔がある。塔は正徳二（一七一二）年の古碑で、正面に南無阿弥陀仏とあり名号塔と分かる。よく見ると、不鮮明だが下方に「右ハ入山村道」、「左ハくさつ道」と記す道標で、当地が古くからの入山道の分岐を裏付けている。牧水が花敷温泉の名を見て引き返した辻は、直売所東で当時は木製の道標だつた。今ある石の道標は昭和三年に青年団が建て、「左 草津温泉ニ通ズ 十軒^キ三九 二里廿三丁」とあり、他に「右

沢渡温泉ニ通ズ 十一軒^キ四七 二里三十三丁、



右は入山村の道標



左は見寄 右は牧水の道

「花敷温泉ニ通ズ 六軒^キ八一 一里廿六丁」と記し、入山と沢渡の結びつきを裏付け、メートル制と尺貫制を併用した距離まで正確に記している。沢渡通いの道は入山花敷く沢渡間が四里二三丁、約一八・三キロで、世立は少し近く、根広や和光原はやや遠くなる。

後坂へ向かう旧道は牧水コースのハイキングコースで、地形的に危険な所はないが、人里離れた山中で一人では少々恐く感じる道である。沢沿いに北へ進み山に入り、山腹の道を上り上げれば後坂峠になる。昔、この道を通つた方が後坂峠く暮坂峠付近の道沿いに提灯を置き、一帯は通称提灯坂と呼ばれる。提灯を置く所は季節や出発地、目的地の違いもあつて一ヶ所に特定出来ない。遠方の和光原から中之条等の遠い場所に行く時は未明に馬と家を出て、後坂付近で明るくなると、提灯を消して道脇の大木の洞等に置き、帰り道が暗くなると提灯を洞から取り出し火を点して家路をたどつた生活感のある地名である。長野原方面の道筋に

も提灯坂があつたと古老が語る。

地形図の標高一、一四三メートル付近から、平らな山腹を通る横手の道になる。この道下一帯は見寄集落の採草地の灰川で、下端は白砂川に落ちる斜面になる。ここの小字は灰川だが、古老は訛つたヘイガツパの名で呼んでいる。以前、この後坂道には馬頭観音や、見寄分岐には石の道標があつたが、馬や作業車による運材作業の邪魔になつたのか消えてしまつたという。現存する唯一の石造物が、見寄分岐手前の年代不詳の馬頭観音である。分岐から右への道が牧水を通つた新道で、見寄と新道間の尾根を進むのがオツウ坂を通る古道になる。

この古道は分岐を見寄側に五〇メートル程下つた付近から尾根に上るが、尾根は平で顕著な道跡はない。尾根の南沿いに僅かに道があるように見える。南沿いから尾根の北に移る所は、道を切つた凹があり道跡と分かる。この先の道は五〇メートル程だが尾根の北に移り、すぐに雪が多い北側を避けて南に移る。この先は土橋状の所で、前方は小ピークになるが、古道は左の南側斜面を下つて進む。この斜面を通る道は、土砂が落ちて埋まり消滅寸前で、注意をしないと気付かないほどである。斜面を下る道は、尾根の先端で右に向きを変え、下方に沢が流れる山腹を通り、八石沢が見える付近から斜面を曲折しながら下る。この折れ曲がつた坂がオツウ坂と古老が呼ぶ所である。八石沢を渡り、キャニオン裏を通り諏訪神社のある尾根に出て、金比羅山手前の豎堀状の凹付近から依田尾川へ下り世立に向かう急な道だが現在は危険で通れない。川まで下り、同様な急斜面を上ると牧水を通つた道と義仲伝説があるコモチゲイで合流し、庚申塔脇を通り世立集落に入る。

牧水の歩いた新道と古道のオツウ坂經由道をくらべて、古道は三角形

の一边のために短い。依田川河床へ下る道等の急勾配なヒラ(斜面)が多く、荷馬が通るのは大変と感じた。新道開削は何時かは不詳だが、古道より距離は遠いが緩やかな山腹を通る道が多くて、荷馬の往来も無理がなくて開削されたと思われる。根広の方が嘉永五年(一八五二)十二月、馬を牽き岩島からの帰りに大雪のため、世立集落近く揚場橋と天龍橋間の旧道で二人が遭難死した事件があつた。この遭難事件も、遠くても安全な新道に移行を加速する契機になつたと思える。

和光原方面から来る沢渡道は、大霜の靑面金剛脇を下り、白砂川を渡河し、牛岩付近を上つた。当時の橋場は、川中発電所取り入れ口の堰堤で川幅も広くなり消えたが、白砂大橋の一〇〇メートル程上流には吊り橋のコンクリート製橋場が遺つている。堰堤以前の時代は、両岸が迫り狭く、古くは刎橋が架けられた所である。旧道は医療センター南西隅の先である。当地は小字名の花敷に属し、花敷温泉がある白砂川右岸は小字が湯ノ上で、最初は間違ひではと思つた所である。旧道に入ると左の山際に馬頭観音があり、ここを二〇〇メートル程行くと山道の分岐になる。分岐には嘉永七年の大日如来塔があり、下に「右ハ山道」、「左ハ和光原道」と記す道標を兼ねた塔である。初めての人は和光原への道はと悩む所で、遠来の方には有り難い道標である。馬糞沢の源流付近を過ぎると、道は北側山腹から南側に向きを変え、引沼への道が右に分かれる。平坦な清水横手を通ると、旧道の引沼入口の七五三である。よそ者が村に入るのを牽制し守るように、今も木製の祈禱札が置かれている。ここは五本辻とも呼び、和光原道、引沼集落への二本の道、沢渡道、採草地道が交差する所である。辻には「南無阿弥陀仏」と刻む嘉永七年の名号塔があり、「左山」、「右 さわたり」で、下に「道」とあり、沢渡への

道標である。入山には信仰塔を兼ねた嘉永七年の道標が数基あり、『入山研究』を開き信州側と入山側で渋峠に通じる道筋の道を改修した年と知った。中学生が郷土学習で取り組み、古老から聞き取った貴重な交通資料である。

沢渡道は引沼方面へ車道を少し下り左の山中に入る。旧道を歩いたが、カーブを過ぎると、ほどなくジメジメした湿地状の赤渋を通るが、左上には観音堂や辛夷の大木の周辺に世立の墓地がある。墓地の先で車道と林道日ヶ闇線に合流する。よつてがねえ館裏の道脇に、忿怒姿の青面金剛像と思える石仏や、村の安全を願った祈祷札が置かれ、活性化センター前には、今も衣装を着せる方がいて厚着姿の子安地藏が祀られる。この先は車道沿いに進み、右に県天然枝垂れ栗の古木を見て進み、門松手前で引沼側から世立坂を経て来る道と合流する。一方、世立坂を上った道は、尾根の双体道祖神を見て、集落下方を通り、アラヤの沢を渡り、庚申塔前を過ぎ、右にオツウ坂の古道を分ける地点を過ぎ、程なく和光原からの道に合わさる。天龍橋右岸袂の門松にある馬頭観音像等の石造物には、暮坂への道筋から移った石仏もあるようだ。新道は天龍橋下に下り、朽ちた丸木橋跡で依田尾川を渡るが、橋跡の下流右岸には龍のケンズリ穴がある。付近の道跡は両岸によく遺っている。左岸に渡った道は曲折しながら上り、町道に合流手前に馬頭観音があり、銘は「嘉永五年子十二月日」と刻まれる。これは、岩島の松谷からの帰りに大雪に遭い、遭難死した二人の根広の方が連れていた馬の供養塔である。馬頭観音の本来の場所は天龍橋と揚場橋間の車道下だが、町道開削で埋まるため移されたという。揚場橋の下、木の葉沢を渡る付近には旧道跡や朽ちた丸太橋跡が見られる。見寄分岐までの新道は、今も牧水コースで道跡は良

好に遺っている。町道脇の牧水コース表示から八石沢沿いに歩き、下に琵琶の滝が落ちる所を通って沢を渡る。この先は多くの方が歩き凹状になった旧道が落葉松林に曲折して続き、三〇分足らずで見寄分岐になり、道は南側斜面沿いに変わる。

見寄集落は周囲を白砂川や深山に囲まれ耕地が狭く、古くから見寄七軒と呼ばれていた。南、西は白砂川で、北は大日堂脇から大ドイ、小ドイの崖を越え他集落へ通じる険しい道である。外部に通じた道は、明治の『郡村誌』に、中の条口とある道だろう。この道は採草地へ通う道でもあった。道は集落の東端、道脇に伝説の力持ち弥藤五郎が抱いて運び、洗濯板で使用した抱き石付近から始まる。道上の民家脇を山側に上るのが旧道で、道は山に挟まれた窪を上る道で、荒れた歩きにくい道だが、道形はしっかりと残っている。右に天狗を祀った尾根が見える付近の道脇に安永三年の馬頭観音があり、古くは馬が往来したと分かる。曲折する坂を上り、窪が終わると、尾根に古木が茂り、信仰の場に相応しい雰囲気のある所がある。ここが下の十二で、今の石祠は昭和五十七年に見寄集落で建てた。更に次の尾根を越えた道脇に明治三十九年に建てた傷んだ石祠があり、ここが上の十二である。付近の斜面は見寄の採草地で、緩やかなヒラの窪を過ぎ坂を上ると世立からの新道と合流する。以前、分岐に石の道標があつたが現在は見られない。

入山以外から沢渡へ通じる道の一つに、赤岩集落からの道がある。この道は鍛冶屋敷方面に通じる旧道で、以前は採草地に通う道でもあった。道筋を見ると、赤岩集落の火の見櫓脇から入り、集落が終わる付近に修験院跡や立派な石積上に神社石造物断片がある。林に入ると道脇には数基の馬頭観音があり、間もなく林道寺社木線を横切る。林道上

の山際は水道施設で、その右側に旧道入口がある。以前は鍛冶屋敷方面に行く郵便配達の方も利用した道で、私も若い頃にバイクで通った道である。だが、廃道になり時間も経過し、今は倒木等で道も荒れて歩くのも大変である。林道から少し入ったコサカバの道脇や、その先の又口にも樺の根元に馬頭観音があつて、往事の道が偲ばれる。山に入る方が一服する休み場の石を通り、この付近までは耕地があつたという白石になる。白い岩が点在する間を進み、曲折する坂が終わった所が上り上げになる。この先からは尾根の北沿いを通る緩やかな上り道で、道が南斜面に変わった付近がホド窪と呼ばれる。

ホド窪を過ぎれば一本木で、寺社木林道やツツジ沢沿いの上る道と合流する。林道上には十二山神の石祠があり、鍛冶屋敷への旧道は右の山中に続いている。旧道に入り四〇〇メートルも行くと深山口で、道脇に開拓農家跡がある。ここに文化八（一八一）年の馬頭観音があり、「右山ミち／左 沢たりミち」と道標も兼ね、沢渡へ通じる道を教えている。付近で中室から潜り石を経由し生須に行く古道が交差する。坂道を上り、左に馬頭観音を見ると鍛冶屋敷も近くなる。

至球沢源流の窪や天理教のキャンプ場跡の建物が右下に見えると、少し先で林道吾嬬山線と交差する。芸術区く中室一帯は、以前は赤岩の家畜飼料用の採草地（約六〇町歩）で、小林家く天狗山付近は屋根葺き用の萱刈り場（約一〇町歩）だった。旧道は芸術区内に入り、右の尾根には明治の寺社合併まで天狗山で祭祀していた石祠がある。毎年春になると山独活を肴に飲み歓談した山独活祭も昔話になった。石祠の西で中室から来る旧道と合流する。



左は沢渡道の道標



付近の旧道

江戸時代の山論で赤岩に勝訴した入山が、入山境を梨ノ木沢から四人沢まで延ばしたと古老が語る、四人沢、梨ノ木沢を過ぎると釣り堀が見える。右に町天然記念物十二の森の大榎付近で草津道と合流、東へ行く道が沢渡道で、その先で後坂経由の道を合わせて暮坂峠を越える。

小池善吉書『山村社会の人と暮らし』を開くと、入山の物産を運搬した古老からの聞き書きが載る。この道は草津や沢渡の入湯客が利用する湯の道のイメージが先行するが、沢渡へ通じる道が地元の方が駄賃稼ぎで利用した重要な生活道路だったこともよく分かる。同書は当時を知る古老からの貴重な証言なので一部を紹介してみる。岩島の松谷方面に通じる高間コースが衰微した後、明治末く大正期に暮坂峠を越える沢渡コースが盛んになったとある。古老は入山物産を馬の背に付けて、沢渡の間屋関奥平方の倉庫に搬入したという。明治期には木工品を出荷し、盛時の大正期には主に炭が運ばれたとある。当時、このコースで駄賃稼ぎに従事者は、和光原で一六人、根廣で五人、世立で二〇人、引沼で七

八人、入山全体で計七〇人位と同書にあり、信州コース最盛期の四〇人余より多かつた。参考までに、駄賃は炭一俵四〇銭、馬一頭に六俵をつけ、片道二円四〇銭だった。帰り荷は、中之条町の関野屋、チギリイチ、カネブン等の荷で、米や肥料、酒である。米は一俵一円五〇銭、二俵で三円、一往復で稼ぎは五円四〇銭以上である。

このコースも草軽鉄道や吾妻溪谷（耶馬溪）を通る道の開削で、物資輸送が徐々に変化した。特に昭和十二年に開削された白砂川沿いの県道が大きな変化を与えた。物産を運ぶのにも、県道を利用して長野原に出るコースが中心になったという。私が話しを聞いた古老も、県道開削前は後坂から暮坂を経由して長野原に通う方がいたが、県道開削後は入山からの人通りも途絶えたと語った事実が裏付ける。

四、四万温泉への道

四万と入山を結ぶ林道万沢線が相ノ倉山続きの鞍部を走るが、時々は不通になる道である。林道の前身は明治十二年に開かれたが、新道開削直後に四万から入山に抜けた国語辞典『大言海』の著者、大槻文彦の紀行を柱にみてる。文彦は四万から入山へ戻る牛の背に揺られて峠を越えたが、紀行『上毛温泉記』から旧道筋を紹介するが、当時の道や入山を知るための格好の資料といえる。

四万と入山境の様子を同書では、「大峠にかかる、間の倉山と云、四万入山の村界の高山なり」と記している。古老は峠の名を四万切目（標高約一、三五〇メートル）や躑躅が原ともいう。文彦の通過は新道開通早々で、境から西の入山側を、「峠の坂路紆曲回旋して息もつきえぬ程

の難所なり。・下り坂より入山分に入るに路未落成せず。只萱隈笹を刈り払ひたる許」と記し、急坂でカーブが連続する道で、入山側は未完成的の状態と分かる。和光原の古老は、青年時代に旧道の草刈りで四万切目まで行つたと語り、四万境までの道普請は入山側の担当だったという。入山特産の蕨を背負って未明に家を出て、この峠を越えて四万の温泉客の土産用に売りに行つた記憶を語る方もいる。手にした貴重な売上金を手にして、帰り道はバスに乗って家に帰つたと当時を思い出し語る方もおり、道を歩いた方の話しは戦前のことではない。

白砂川側への下る道を、同書は「少し下りて溪水あり、辛うじて喉を潤す」とあり、この水場は古老が言つた源四郎清水であろう。『風雪三十年』には、昭和七年の記録「野反湖」がある。白砂川までの道を、「尾根歩きから白砂溪谷へまっ降りだ。スネをがくがくいわせるきつき。白砂川の丸木橋を渡たつて対岸に移ると大原だ」と記し、きつい下り坂と分かる。昭和十二年刊『上越の山』の付録地図に、峠はツツジが岡の地名で、その下の道筋にケンダキ坂とある。これは、古老が語る下駄木坂（尾根下を流れる下駄木沢に由来）の誤りだろう。道筋の北側にダゴノ沢の名があるが、肘曲がり沢の支流だろう。その下方、道脇に十二社があるが、地名調査ではその名を知る古老はいない。この道が白砂川を渡る場所は、肘曲がり沢が本流に入るすぐ下方である。地図には本流を渡る橋の名が笠松橋と記すが、多分丸木橋であろう。その先、大原へは尾根を上り、三角点の北を通っている。

白砂川を渡り大原と和光原への道を、大槻の書は「山を下り、溪川あり、白砂川と云。渡りて又山に登れば大なる高き原に出づ、京が原と云。・原路二十町許過ぎ又降りて水を渡り、又登れば初めて畑あるを見て、や

うやうにして和光原といへる処に着きぬ」と書いてある。大原を京が原と記すが、明治の十四年の群馬県の地名調査には大原とあり、牛方が教えた地名の聞き違いだろうか。約二、〇〇〇メートルと記す大原の台地を横断すると下り坂になる。この坂が十二坂で、坂の下り口付近に山神十二の石祠がある。明治三十二年に建てた祠で、文彦通過後二十年経過している。祠には「和光原／引沼／世立／京塚組中」とあり、萱場の集落と異なるので、付近の山中で曲げ物材料を採る仲間の組で建てたと思われる。付近は荷場で、ここまで人の背で運んだ萱や曲げ物材料を、集落から来た馬の背に付け替える場所でもあった。『風雪三十年』には、大原横断から坂を下り白味田川までの道を、「草原を横切りガケを下ると清水にたどりつく。佐久間清水という。佐久間象山がこの辺で金鉢を掘ったとき発見して、世人に飲用できることを教えた伝説がこのついで」と興味深い記述がある。若い頃、白砂川を遡行した際、左岸の川縁の岩に横穴があり、リーダーの宮田氏が象山の金鉢試掘跡と語ったことを思い出した。同名の清水は野反道の、小栗清水の先にもある。

白味田沢を右岸に渡り、斜面を上れば畑があるの記述は、沢に下る国道下の地名葛の下と考える。この先で旧道は、野反方面の道と合流する。ここは官林の入口で、官林を利用する鑑札を渡す場所で、御判形の地名がある。ここを過ぎ、旧道は国道から外れ右に入り、和光原のお堂の下を通り集落に入る。文彦一行は根広く小倉く草津の道を通らずに、白砂川を渡る道を選んでいく。文彦一行は夕暮れの道を草津へ向かうが、白砂川の橋を「谷川に橋二ヶ所あつて彼方へ渡る」と記し、続いて「下に橋柱なく巧に架けたりと覚えたり」とあり、芻橋と分かる。明治四十三年の『六合村誌』は、白砂川の橋を「榎橋 所在入山村和光原 長拾間

幅六尺 構造木造ニテ板橋 架設年月明治十八年五月 雜項芻橋ニシテ入山村字日ヶ間ヨリ同村和光原ニ達スル里道 須川ノ上流ニ架ス」とあり、橋は長さが一八メートルで、大水に強い芻橋構造とあり、文彦が渡った所だろう。今はダム堰堤で水が溜まり川幅も広くなり、当時の姿は想像できない。対岸の牛岩を上り、今の医療センター付近から引沼への道は大日如来の道標脇を通り、沼坂を下れば引沼集落に通じる。

古老が今の永久橋が出来る前は、白砂川増水時には目の先にある対岸に行くのにも橋が流れて、大きく和光原へ迂回して行つたと聞いた。その方は花敷温泉と薬師堂間の花敷橋は通れたが、開運橋が渡れず、湯坂を上り矢倉から前坂を下り、和光原を通り引沼へ行つたという。この橋は、今の白砂大橋より二〇〇メートル程上流で、両岸には吊り橋用コンクリート支柱が立つ所だろう。

文彦は「引沼より程歴て京塚といへる処に」と記すが、道は前坂を下り、虎石脇を通り川端に出て、今の京塚橋付近で川を渡った。古老は昔の白砂川は水量が多く、大水の時は橋は簡単に流れ、その時は集落の方の人足で架けたと語り、仕方ないと諦めた言い方だった。橋が流れた時、京塚の方の学校道は薬師堂まで右岸の湯ノ上の崖道を通つて行つた。京塚から品木への道筋を、文彦は「すべて険しき坂にて登りつむれば直ちに降り、谷に降りつむれば直ちに登り、凡登り降りする事三、四度にして最後の谷に人家ある処を品木という」と、暗闇迫る京塚を出てからは昇降が激しい難路と書いている。京塚からの旧道は子守神社付近から、今の林道上を通る道で、小沢尾根や観音尾根を越え、京塚横手を通り、林道大カーブ付近が峠になる。急な坂を下れば鍋割沢で、沢を渡り上り終えた所が京塚分岐の三方辻で、その先は湯川左岸山腹を通り、須立分岐

から馬頭観音の所までの急坂を上ると、横手の道だが、最後に百八十八番観音像脇を下り谷底の品木集落へ通じる。私もこの道を歩き、特に鍋割沢や須立分岐、品木集落間は急な昇降の道で、この言葉通りと実感する。

品木集落はダムの水底に沈んだが、以前は集落内を旧道が通った。天狗山と湯川に挟まれた山腹を旧道の坂が通り、旧道の左（砂防ダム付近）に、諏訪ノ原から滝が落ちる仙下を見ながらクラガ坂を上った。古老は草津へ向かう入山衆が、「急なクララ（下り坂）で大変だ」と言いながら通った道である。坂が終わった所が上がり上げて草津原になる。急坂の迂回道は中沢富士氏が整備した道で新廻しと呼ばれた。

『山村社会の人と暮らし』に、前記の道を利用して草津へ駄賃稼ぎに行った古老の話が載るので紹介する。昭和になり草軽電鉄が開通すると、入山物産は草津から長野原経由で各地に出荷された。物産は炭や木工品が八割と大半だった。自分で焼いた炭は、運賃を含み一俵一円八〇銭の収入だが、駄賃稼ぎの場合は一俵一〇〇一五銭で、六俵で九〇銭、自分で炭を焼いた場合の稼ぎが格段に好かったとある。当時、この仕事に従事した者は、引沼で一五戸、入山全体で一〇〇人近かったという。炭以外の駄賃稼ぎは、蕨、ゼンマイ、蒨、粗朶（ボヤ）、薪、野菜、花など季節の品物を出荷した。字別の出荷産物を見ると、小倉や長平は蕨やゼンマイという山の産物、根廣は卵や野菜、梨木は野菜、引沼は炭が中心と、地域の特色がうかがえる。

だが、昭和十二年に入山に通じる県道開通で、草津への駄賃稼ぎは一時程の賑わいはなくなった。県道利用のトラック輸送に変わったが、古老が馬が牽く運送も多かったという。

五、長野原と六合への道

長野原から六合への旧道では、長野原役場裏から十二坂を上る道がメインであろう。この道には長野原城址手前で左に分岐する道跡があるが、これは吾妻川沿いの難所の迂回道で利用されることもあった。長野原高校対岸の岩場には、三原三十四番観音札所一番の作道観音堂があった。浅間焼け直後、天明四年に当地を歩いた松代藩士某は『夢中三湯』に、「此所に坂あり甚危急の場所也。道幅四、五尺又ハ三尺二て」とあり、さらに「旅人の通ル上に岩石覆ひ、上も下も見て通れハ瞑眩事けんのもハ通る事なり難き所なり」と、険路の状況を具体的に記している。この道が大雨や崩落の際は、前記の迂回道が利用された。今も左の山中に入ると、微かに道跡が続ぎ、大津の小学校方面へ向かっている。雲林寺参道の地藏は道標を刻むが、この分岐にあつたと思える。地藏側面、右に「入山赤岩」とあり六合への道を教え、左は「大きさ」で、信州街道の大笹宿を教えている。『長野原町の民俗』には、「六合村へ向かう伊勢の谷津を上りきつた所に、石地藏の道しるべがあつた」と記される。伊勢の谷津の地名は、長野原町刊の地名調査地図にないが、石造物が村の範圍を越え他地域に移る例も少なく、然も六合へ向かつて上りきつた所の表現からも、当地と考えるのが自然だろう。町境を越えると六合の吹久保集落だが、伊勢の大神宮を祀り、谷津地形でもあり、当地も候補で考えられる。吹久保から下沢への道は、白砂川上方の崖際の道は通らず、集落北端から吹久保坂を下り、窪地を抜けると下沢集落に近くなる。この先、道標に記す赤岩への道はドウミョウからヒロヤ坂を下って白砂川の狭隘部に架けた刎橋を渡り、出立から境沢を過ぎ秀英法印が開削に尽

力したタカヤの難所を越えると赤岩集落になる。



雲林寺の道標 入山赤岩



難所タカヤの崖

天和元（一六八一）年の『沼田領郷村品々記録』に出立橋の前身を、「同郡日影と赤岩ノ間 赤岩ノ橋 長八間程幅一間半程」と記し、小雨橋と同様四、五年前に落ち橋がない状態とある赤岩の橋が出立橋の前身であろう。明治十年の『郡村誌』の赤岩村に、出立橋は「板橋長サ九間三尺 中九尺 水深キ事壹丈壹尺 橋ノ高サ水面ヨリ二丈九尺（八・七メートル）」とある。古老は出立大橋と出立橋の間の岩場が古い時代の橋場と語る。その後、昭和初期の県道開削時は出立橋のやや流に橋場が移動し、車も通ったという。古い刎橋時代の橋場を偲ぶ遺構は、若い頃水浴びで通った岩場には見られなかったという。出立橋上方の県道時代の橋は両岸に遺構があり、特に右岸には立派な石積もあり白砂川沿いを走る道の魁を感じさせる。

歴史的な地名として興味深いのは、出立橋左岸上方の「橋山」である。林道至球線のサカヤノ（境）沢から右に行き最初のカーブ付近右下の雑

木林が橋山という。日常は集落の人が刈敷等に利用していたが、橋の掛け替えや修理の際には、この山の木を切り出し利用した所である。境沢の林道至球線分岐に地藏立像があり、「右ハ長ノ原ノ左ハ山みち」と刻む道標である。本来の位置は林道を橋山側に少し行つた尾根下という。この場所が秀英開削のタカヤ道前の尾根越えの道で、雪の季節には尾根に道跡が見えると古老が語つたが、地藏が秀英以前の像か不詳である。難所タカヤの崖沿いに秀英法印のタカヤ道開削碑があり、「當所平治嶮路告成碑」と刻み、寛延四（一七五二）年に建てられる。秀英のひたむきな気持ちと、その志に共鳴した村人の気持ちが一つになって難路を開削した貴重な記念碑である。

長野原町大津二軒屋は草津街道表通りで茶屋もあった。『群馬のみちしるべ』には、「そのT字路に高さ四十五センチ、幅に四センチ、厚さ二十一センチの四角な石に右ハ小雨、左ハ草津とあり、右は峠をこえて六合村小雨へぬけられる。」の道標は今はないが、小雨方面に通じる分岐だった。この先、大津赤羽根の一里松で草津道と六合への道が分岐する。車道下に歴史を感じさせる大松があり、根元には自然石を穿ち浮き彫りの地藏があり、寛政八（一七九六）年の銘がある。地藏の左右に「右入山道ノ左ハくさつ□」と記す道標で、この場所が旧道分岐と分かる。左は草津道で、天保三年の立石坂事件の調査で以前歩いた道だが、今は囲い込まれ旧道を歩けない。右の六合側の道は、その後の車道等が入り組み、旧道は分かりにくい。二軒屋にあった道標の小雨道や、一本松の入山への道標が教える道が、六道の辻や日影平沢に通じる道であろう。今も分かる道跡は赤羽根坂を上り、採草地内を上つて一本木に出て、林道中沢線に合う道である。林道交差付近で、右は平沢へ、左は湯久保方

面に分かれた。平沢へ通じるメインの道は長野原と六合境が有刺鉄線で閉鎖されて通れない。



一里松の分岐



旧道の切通しと馬頭観音

六合境から平沢への旧道を歩くと、六合側の旧道は窪沿いに進み、小尾根に残る切り通しは旧道の雰囲気がある。中沢林道と権現の上方で交差し、林道を横切った道は下り勾配になり、窪を経て山腹を巻くように進み、湯久保、一本木から来る道と合流する。合流付近を下ると、右は中沢方面からの道で、左へ行くと中ノ棚の小平らな所で、下からは蟹沢の簡易水道取水場から水音が聞こえてくる。棚の平地が終わり、下ると古道の雰囲気をよく伝える切り通し状の所になる。道上には馬頭観音の蓮華座が残るが、本体は道に落ちていた。優しい表情の馬頭観音像が大部分だが、この像は本来の恐くて厳めしい表情で強く印象に残る。

坂を下ると右の分岐は山道で、本通りは左を下り尾根をカーブすると耕地が見えてくる。右の山際には耳垂れの神と民間信仰の対象になる双体道祖神があり、マブネの墓地を左に見ながら下ると国道と交差する。

この付近から東を見ると、旧道筋の輪郭が分かる。国道を横断し、公民館脇を通り、白砂川斜面を下ると中ノ瀬橋へ通じる。この橋は南大橋架橋前は、出立橋経由よりも短距離で赤岩集落へ通じた橋だった。赤岩側の左岸は、南に爺崖、北が婆崖（バンバサキ）と呼ばれる断崖に近い急斜面である。湯本医者と河童伝説に縁の橋と聞くと、左岸の急で狭い坂道はとても馬は通れないと古老は語り、河童伝説は下流の出立橋が本来の場所と言う。河床に下りたが、川幅が広くて大水に強い刎橋は困難な所と感じた。明治初期の『郡村誌』に、「中野瀬橋 土橋長サ十五間 巾三尺ニシテ牛馬通行ナラズ且洪水ニ流失スルヲ以テ年々春冬ノミ之ヲ架ス」とある。この記述から、橋は簡単な土橋で、出水時には流失し、湯水期のみにかけて、牛馬通行も出来ない橋と分かる。水面から高さが九メートル近い下流の出立橋の恒久性に比べ、湯水期のみを利用する安定性に欠けた橋だった。戦後、中ノ瀬橋を撮った貴重な写真を見たが、姿は仮橋程度で、この状況は明治初期も同じと思える。今、河床に立つと橋脚を立て穴を刻む大石や、橋のコンクリート製橋脚が酸性水で溶けたのか無惨な姿で横たわっている。

大津の赤羽根一里松の道標にある入山道は、中ノ瀬橋利用が自然だが、橋が流れ不通になる不安定な面もあった。不通の際には、白砂川上流に進み、急な山道越え道を利用するか、小雨橋利用が考えられる。枝道の六道の辻を利用する道は尾根の辻から中沢に下れば出立橋を利用し、入山へ行くことも出来た。

長野原に通じる枝道で道標類もないが、印象的な地名の六道の辻を簡単に紹介する。六道の名は旧赤城登山道等にもある地名だが、当地の六道に辻は長野原境の尾根で、各地からの道が交差する所である。辻へ行

くのは中沢林道が簡易水道施設の先、南に大きくカーブする所の窪に道跡が続いている。ここを入ると不明瞭な所もあるが、上り上げた尾根が六道の辻になる。この尾根道は西北が湯久保へ、東南が吹久保に通じる。中沢集落からはカリマタを過ぎて、沢の右岸に移り進む。トノバタケの畑跡を見て、尾根近くなると山腹を曲折しながら上り、六道の辻になる。平沢からは、中ノ棚を過ぎて左へ進み中沢林道と交差を過ぎ前記の窪に入る。長野原側には二軒屋や坪井方向に下る道があったが、近年の山林伐採や作業車の往来で、古い道跡は消滅状態である。日影の古老が、青年団時代に吹久保集落で獅子舞を演じるため、この道が近いので歩いたと語った道である。

今の国道が走る白砂川沿いの車道開通前後を、古老の記憶や道跡、明治大正の地形図、小字図を参考に復元してみよう。戦国の戦略道路や近年まで採草地へ通った道は、貝瀬集落手前で沢沿いの道に入り、火打花集落を経て仏坂を上る道だった。六合境付近の尾根の山道際に、古い時代からの道を想像させる五輪塔が近年まであり、字名も五輪平である。採草地は高間開拓地周辺で、この先に数軒の家が点在する中室を通るが、ここは中室千軒と賑わう時代もあった。この先で、高間や暮坂の尾根を越え岩島や中之条に通じる道があった。『加沢記』には岩櫃城攻略の軍勢が高間越え道を通り、暮坂を越えて嵩山城の前衛、内山城攻めの兵が通った道筋と記される。

現在の六合の道の幹線は、白砂川沿いの南北に走る道である。入口の丸谷峠付近は、近年の国道改修で峠付近の地形まで一変した。以前は道が大きく曲がり、日陰側は冬には凍結する嫌な道だったが、今は終日明るい真つ直ぐで快適な車道に変化し、六合入口のイメージアップに貢献

している。国道は広池発電所付近から矢ノ下沢付近まで急崖を開削して通るが、開削前の本通りは広池集落方向に進み、途中から左に分かれ崖縁のハケを通り前坂に至る道だった。前坂下り口分岐道は、山で焼いた炭を運び出荷まで一時保管した小屋があり、今でも地名は炭荷小屋と呼ばれる。分岐に立つ道標（高さ一一五センチ）は、か細い字で、村人の人柄を示す素朴な言葉で、「右ハむま道／左ハかち道」とある道標である。右の「むま」は馬の古語表現で、坂道に弱い馬のため迂回する緩やかな道である。左の「かち」は歩きの道で、歩行者用に少々急坂だが距離の短い道を教える。双方の道は崖下、矢ノ下沢沿いで一緒になる。

この先、矢ノ下集落から出立入口の清水屋商店裏付近まで白砂川沿いに旧道が残る。県道開削前の旧道は、清水屋前から坂を上り国道上方を通る道だったが、開削工事で切られ消滅する。旧道は国道上に若干残り、付近の地名は坂と呼び、旧道脇には馬頭観音がある。道路開削前は、観音の隣に出立入口に移転した道祖神があり、向かいには珍しい雷神像入りの石碑があったが、工事後は不明と古老が語る。旧道は民家脇を通り三階の篠原家裏に出て、出立橋に通じたという。旧出立橋の左岸上方に続く山林は、前述したが橋山と呼ぶ歴史的地名である。架橋や修復時に必要な材木は、この山から木を切り利用したという。日常は肥料用の刈敷を採る集落共有の山だった。

矢ノ下の大正九年生まれの古老は、小学校卒業頃、新道を工事する方が働いていたと話している。この話から昭和五く六年頃には丸谷峠く矢ノ下へ通じる新道開削工事が進行中と思える。

この道の歴史を見ると、大正九年一月二十九日の郡道認定に関する諮問案線路にある長野原花敷線が、長野原町から赤岩、日影、小雨経由で

入山花敷に至る道で、現在の道の前身になる。



前橋の道標 右はむま 左はから



難所だった発電所付近

前述の出立橋は略すが、その先の道は右岸沿いに、ほぼ今の道に沿って北上する。平沢では集落内に道が入り、左に地藏を見て、この先で二軒家方面から来る中ノ瀬橋を渡る道と交差する。八幡では八幡坂を上る湯久保道が、花園では潜り石を通る湯久保道が分岐している。

水戸沢は花園大橋西下の花園橋上方水当^{すずた}で旧道が渡河し下太子に渡った。ハナワ坂を上ると下太子集落で、行人塚脇を通ると旧道は国道に出てズウズウ沢を渡った。小雨地内の旧道は、ほぼ今の道沿いに進み、集落内で右に小雨橋への道を、左に草津への大坂道を分け、今の吾嬭橋の先で白砂川に下る道だった。

県道開削前の旧道を沼尾から小雨の学校へ通った福島仁一氏の回顧談は、当時の道をリアルに語る貴重な証言である。学校の帰り道は、小雨のげんき館付近から白砂川右岸の急斜面を下った。この急な坂道沿いをサルッコウゼと呼び、凍った冬は滑りやすく、持参の灰を撒いてスリッ

プ予防をして通ったと語る。仁一氏の親は馬の背に繭を乗せて、この坂を上り長野原へ運んだという。だが、狭い岩場のために大きな繭袋が不安定で、坂になると馬の背から袋を下ろし、人が背負って上った場所だったと語る。サルッコウゼの先には、小雨川が白砂川に落ちる所のオオゼンの滝を見ながら通るが、道上には天狗岩が屹立していた。この先で道は湯川発電所上を通るが、道上の岩場には発電所工事で消滅した道心穴が見えた。旧道は姥が滝方向に上ったが、付近の崖道は木を柵状に出した棧掛橋になっていた。姥が滝から先は、ほぼ今の道沿いに進み、鍾馗落ちの崖下を通った。陰ノ沢を渡ると、右には冬住時代の草津の旅館の方の墓地が見え、沼尾集落近くになる。

墓地入口先の旧道は、古くは草津の日新館の冬住屋敷跡の商工会館方面に下る坂道になった。この坂は墓地付近にあった無縁堂が転訛しメンドウ坂になったという。坂を終わると、石仏がある弘法岩脇を左折する。以前、弘法岩には常夜灯の灯籠があり、地元で毎晩明かりを灯し、夜道を照らす灯台、道標であったと語る。今は灯籠の残片があり、基部に「施主 沼尾組中」とあり、村で建てたと分かる。弘法岩を過ぎ、左に見える大きな三階屋は、六合村初代村長等で活躍し、応徳温泉を開発した山田弥惣治旧宅である。この先は道路拡幅工事で消えたが、曲折した坂道がハナン坂(岩が突き出た先端ハナ)で、道上に突き出た岩の下を通る。次のミトウ(御堂)坂を上ると、中学校く暮坂峠に通じる竜宮橋袂付近になる。古い時代の旧道は、今の国道の東側、白砂川の段丘縁を進んだ。この道は大部分が崩落したが、今の道の駅付近に出たという。崩落が進み通行が困難になり、作場道が本通りに昇格したという。県道開削直前の旧道は、国道西側の畑内の道で、道の駅付近で道心沢を渡り、左の山

側に入った。この先で旧道は山腹を荷付場に向かうが、今も道跡がはつきりと残っている。山腹の旧道は楽泉園方面に通じる道を左に分け、湯の平温泉が下方に見える断崖になる。今の国道上方の吹き付け上を通るが、この難所で遭難した入山の方の名に因み勘助落としと呼ばれる。この難所が終われば足倉地内で、桜沢を渡り、自動車修理工場裏の毒水ノ沢を越えれば大木平に入り、国道分岐を草津側に少し行つた墓地付近に出て来る。

荷付場では七兵衛屋敷付近で通称車沢沿いに下り、荷付場橋袂の消防小屋跡裏に道跡が続いている。車沢を渡つて観音堂下に出るが、旧道はお堂右手を通り国道上の耕地、田ノ尻を通り湯川に至る。湯川橋上流で湯川を渡り、梨木の地蔵堂前の庚申塔脇にでる。古老から昭和十年、君嶋県知事一行が福島松次村長の案内で野反等入山視察に訪れたが、子供の頃に地蔵堂脇を馬に乗り通つた姿を見たと言った。だが、その道も川寄りが崩落し、転落事故もおきたという状態である。

地蔵堂の先で耕地が終わると山中の坂道になるが、古道の趣を感じさせる道である。坂が終わる手前、右上に大神宮が祭祀される。大神宮裏は県道開削時の難所の一つで、付近には隧道も掘られた。大神宮の下を過ぎれば旧道は尾根の緩やかな道になり、右に下る見寄分岐があった。見寄への旧道は崩落で通れないが、字／川向に下り、吾妻石材付近裏から白砂川に架けた丸木橋を渡り見寄集落に通じていた。明治十四年の「地理雑件」には、字／川向に小雨道の名が載り、小雨へ通じる旧道を裏付ける。

この先も平らな尾根道が続き、冬の冷たい西風を避けるように道は尾根東側を通り、やがて京塚分岐である。ここは三方の道の分岐で、最近まで宝暦十三（一七六三）年の馬頭観音があった。石が傷み不鮮明だが、

「右ハ京塚 はなし記ゆ／中ハ小倉／左ハ品□□」と三方面を教える道標だった。□は品木、草津であろう。長年、ここを通る人々に道を教えた道標の馬頭観音が不明なのは残念である。

右の京塚への道は梨木採草地があつた山腹を下るが、分岐から鍋割沢間は道の使命を終えて今は荒廃状態である。鍋割沢川を渡つた道は、急坂を上つて品木原方面と結ぶ林道と交差する。ここは峠状の場所で、京塚側への旧道は道路で取り付け部分が削られ消えたが、尾根に上つて下ると旧道が林道上に残っている。旧道は東側山腹を京塚に向かう緩やかな下り道である。付近を通称京塚横手と呼び、東にある世立集落が一望できる。道が左に曲がる観音尾根に老松があり、根元に今から二六〇年程前、宝暦年間の馬頭観音がある。



今はない京塚分岐の道標



旧道京塚横手

ここを曲がると、木間越しに京塚集落も見える。この先、小沢尾根を越え、崩落部分もある旧道は、やがて子守り神社付近で車道にでる。昭和十年八月、入山視察に來た君嶋県知事も馬に揺られこの道を通り京塚集

蕩に入った。

白砂川を渡る橋は前述のように、台風等の増水時には流れることが多かった。京塚は対岸引沼にある学校に行くにも、増水時には湯ノ上經由の道に迂回する陸の孤島状態になった。京塚と引沼間に架かる橋は仮橋程度で、流失の時は両集落の方が出て架けたと聞いた。だが、明治四十三年の『六合村村誌』に、「界橋 所在入山村字川端 長拾二間 幅八尺 構造木造ニシテ板橋 架設年月明治十九年八月 雜項刎橋ニシテ入山村京塚ヨリ同村引沼ニ達スル里道 須川上流ニ架ス」の記述がある。刎橋は両岸が高く狭い岩場等に適す構造だが、今の白砂川は川幅が広く、古老の話からも刎橋が常時あったと思えず、川瀬の変更や今はない烏石を利用した刎橋だったかは不明である。

『入山小学校百年のあゆみ』に、大正十二年まで長平分校に勤務した小雨の市川正五郎先生の文が載る。先生は月曜の早朝に、小雨の実家を出て長平の学校向かった時の道筋で、県道開削前の道が分かる。小雨の家を出て、暗いサルッコウゼを白砂川まで下り、梨木付近までは夜が明けなかった。梨木の裏山の尾根に上り、鍋割沢付近で雪道になり、京塚横手を通っている。京塚で白砂川を渡り、引沼を経て花敷温泉から湯坂を上り根広に着いた。根広からお経尾根を越えるが、吹雪の日は腰まで雪、長平に到着した時は汗でグッショリとある。昭和十二年の車道開通までは、先生が通った道が長い間の主流だった。

参考までに、京塚に最初に車道が通じたのは、見寄口付近の今の国道際から入り、小沢を通り集落に入る道で、昭和四十三年三月だった。対岸引沼との間、今の京塚橋上流に鉄骨部材が遺る橋は、巾が一メートル程で車は通れない橋だった。京塚と引沼間の車道、永久橋は昭和五十七

年に竣工する。この結果、白砂川右岸、湯ノ上の崖沿いの道を通る通学路から開放され、子供は安全な永久橋を学校まで通えるようになった。

梨木集落上の尾根に戻り、京塚分岐以外の道を紹介する。直進の道は原坂を上る道ははつきりした道で梨木原採草地を通り品木原に通じた。旧道は品木からの道を合わせて小倉へ向かっている。

京塚分岐から左へ行く旧道は、湯川左岸山腹を通り、須立分岐を過ぎると急な上り坂になる。坂を上り終えた先、道脇の岩下に天保四年の馬頭観音がある。木の間越しに品木の湯の湖が見えると、程なく車道と交差する。田代原方面への車道分岐に、「馬頭大子」と刻む馬頭観音があり、下に「右ハ京塚／左ハ□□ら」と記す道標で、□は「こくら」であろう。左へ下る道は谷底の品木集落を経て草津へ通じる道だった。右の小倉道は、田代原への車道に入り、右上の民家裏を通り、やがて山林と耕地境を歩いて京塚からの車道を横断する。この先は広大な萱場で、旧道跡は見えにくい。田代原から流れる小沢、姥石沢左岸に平らな姥石が横たわる。この石は、名称からも古い時代の白根信仰の女人結界をイメージさせる石と思える。旧道は牧草地に出て、大久保を流れる小沢を渡るが、道跡は尾根に向かっている。尾根の北側を下れば昭和十六年に閉山した日曹の硫黄山跡へ通じる。当時、硫黄を草津へ運ぶ索道用電気が草津から引かれていた。この電気が、引沼にあった官行の製材所まで延長された。電線は小倉と根広を経由で引かれ、沿線の集落に昭和十四年大晦日に電灯が点る契機になった。

硫黄鉱山跡から、山中を西へ進むと田代原・小倉間の車道を横切り、林内にある草津道との分岐に到着する。分岐にある天保十三（一八四二）年の馬頭観音には、馬頭大士と刻まれる。下に「右 くさつ／左 こさ

め」と記し、重要な分岐だった。明治以降は小雨の役場に通う道でもあった。その先は、入山から草津、信州への道で紹介する。

六、入山く渋峠越えの信州道

入山から渋峠越えの信州道は、草津からの道と合流までは比較的起伏差の少ない道で入山馬道と呼ばれていた。この道は信州街道鳥居峠越え道より、北信や善光寺から草津温泉への道では距離が短かった。上杉謙信の軍勢が通り謙信道の別名もあつた。若い頃、入山の古老が仕事後に峠を越え湯田中の温泉街に遊びに行き、朝帰りをしたと語った話が大法螺でもない近い距離にある。

十九世紀、文化・文政頃は旅人や物資の移動で峠道は賑わい、信州街道大笹宿等も看過出来なくなった。文政九（一八二六）年、関所の要害地を理由に、渋峠道を利用する上信五ヶ村を訴えている。翌年、上州側の入山村、草津村、信州側の三ヶ村に限って地元物産や自家用の酒や油の交易は認められたが、他の商品や湯治客往来は不可の採決が出た。だが、経済的利便を無視したため有効に機能せず終わっている。

花敷から入る入山馬道は、薬師堂裏を通り、体育館の対岸サンタ岩下を過ぎ、キッコ沢沿いに七曲がりの坂を上り、一休みをする二ツ石や正面に屏風岩を見ながら上った。坂が終わるとキッコ沢の峯になり、京塚からの道と合流、鍋割沢上流の沢沿いに西に進む。京塚から来る道は、集落上方の簡易水道施設脇、祠付近から小さな曲折が続く山道になる。左下には堰堤が見える付近の道には馬乗り石と呼ぶ石がある。最初的小刻に曲折する坂がアトミ坂で、その先は緩やかな勾配の大カーブの道に

なる。薄暗い針葉樹林内を通る新田坂を過ぎると、周囲には株類を保管した小屋跡が幾つかあり、付近で右へ分岐の道が花敷道である。道祖神手前にある分岐は後に開かれた道で、左は堀割から林道に出る。旧道の分岐は掘割へ行かずに進むと次の分岐に合う。ここに大日如来があり、年号は嘉永七（一八五四）年で、山本長右衛門が建てたものである。道標も兼ねた碑で、「右ハ信州道／左ハ草津道」と記される。この分岐上の京塚峯には宝暦年間の道祖神があり、草津への旧道は左に下るが、林道工事で道跡は消える。草津へ行く旧道は鍋割沢を渡って、常徳原を通り品木へ下るが、梨木から来る小倉道と交差し、梨木からの草津道と合流し、百八十八番観音下を下ると、今は湖底に沈んだ品木集落に到着した。大日如来の分岐を右に行くのが信州道で、左下に林道を見て進むと日当たり良い赤ゾロになる。地名の由来は赤土の所で、京塚の方は穴を掘り、冬場には芋や大根等の野菜を貯蔵する場所で利用したという。

鍋割沢沿いの道になると、右下の窪に下る坂道が分岐する。ここがキッコ沢峯で、薬師堂裏から来る道と合流する。田代原の子供はこの坂を下り、花敷経由で学校への通学路だった。

双方の道が合流後、岩場を削った道が狭いアナンタを過ぎ、ミズクンバ（水汲み場）の分岐になる。左は採草地内へ通じる道で、水汲み場は少し先である。付近は京塚の方が出作りに来た所で、農繁期には小屋を建て、寝泊まりしたという。今は牧草地になり、沢沿いに道が進む。小沢が曲がる付近で、南から品木や梨木からの旧道が交差し、尾根越えで硫黄山跡を通り小倉に通じた。南斜面の古道は部分的で不鮮明、尾根で作業道と交差するが、北斜面の古道跡は明瞭である。信州道は大久保を沢沿いに西に進み肥料置き場を右に見ると車道と合流し、西には目印の

一本松が見えてくる。一本松付近で北の尾根を見ると廃バスがある。バス裏手の鉄塔熊倉緑巡視路東下で、窪沿いに北へ進む道が小倉／草津を結ぶ旧道である。

一本松の根元に小さな山神十二の石祠がある。石祠側面には「右ハ京ツカ／中ノ条」、「左ハ小倉／エチコ」と記し、遠く秋山郷への道や中之条を教える道標である。その先で旧道は開拓地に消え、以前の元山道脇に出る。ここは分岐の松で、今は二代目の松が生えている。交通要衝の四本辻で、南は草津に、西は信州へ、北は越後で、東は品木や梨木方面へ通じていた。昔、行き倒れ人等があれば、分岐の松を境に、関係集落で埋葬をするなど目印の場所だったと古老から聞いた。由緒ある松だが、村人の保存を願う声も叶わず某製材が買って伐採した。分岐の松の辻には山神と刻む信仰塔と古い角柱型道標がある。道標は正面が「大日如来」で、側面は「右ハシナノみち／左ハくさつみち」とあり、願主小倉村が享保十三（一七二八）年に建てた古い道標である。当時、上信国境越え道は、大笹や猿ヶ京関所の要害地域で通行禁止が建前だった。この立派な道標の存在は、経済論理を無視したルールが機能しないことを雄弁に物語っている。残念にも二〇年程前の道標は、石や文字に傷みを感じなかったが、僅かの間に石材劣化が進んで無惨な姿になり、何とも寂しく感じる。

分岐の松の道標を右に行くと、旧道は林道沿いに進み、木戸幅の十二神の石祠を過ぎると、西山林道ゲートがあり、手前で元山鉄山跡や熊倉へ道が右に分岐している。入山馬道はゲートの先に進み、三の倉の緩斜面を過ぎ、人気のない寂しい山中の道になる。落としのヒラ付近の道沿い斜面は屋根葺きに使う萱を切る萱場だった。一キロ余り進み、坂が終



分岐の松の道標



入山馬道と草津道分岐

われば山中の道は四本辻になる。右は大池などを見て、チャツボミゴケで話題の穴地獄への道を通り元山鉄山跡に到着する。左の道を下れば窪地に神秘的で伝説もある平兵衛池である。付近の道際には、下荷場や上荷場の地名が遺る。ここは曲げ物材料や刈った萱を集め、馬の背に荷を付け替える場所だった。この辻を過ぎて、緩斜面になった所が大平湿原である。以前、道脇に石仏があつたが不明である。今は湿原のイメージは少ないが、付近から曲折した尾根を上げれば芳ヶ平のヒュッテ脇の道標に通じる道があり、距離も短かった。この道筋を以前歩いた方が背丈ほどの根曲がり竹が繁茂して歩くのが困難だったと話す状況である。入山馬道は大平を西に進み沢を渡ると、『村誌』に入山馬道の終点とある草津からの渋峠越え道と合流する。合流地点には、明治三十三年の馬頭観音像があり、「右 草津道／左 入山道」と記し、入山への分岐を教えている。入山道と合流後、草津道は高野長英に縁の長英坂を上り、旅人が喉を潤した桜清水を過ぎる。荒涼たる白根山が左に見えると、間もな

く山田温泉方面への山田峠越え道を分ける。今、この道は廃道で、然も有毒ガス云々で通行禁止になる。小沢を渡ると芳ヶ平ヒュッテになり、ヒュッテ小屋の東が大平湿原から来る道を合わせた所である。ここに火山の噴出物と思える三角形の自然石があり、正面は「大日如来」で、下に「右はくさつ／左は入山村 中の条 花しき湯 しれ昭」と刻む道標である。喜永と間違えたが、嘉永七（一八五四）年の碑で、「入山峠山本藤左衛門」等の名がある。嘉永七年に行つた道路修復の記念で建てたと思える道標で、他にも同年の道標が幾つかあり、『入山研究』の記述を裏付けている。『入山研究』を見ると、嘉永七年に「京塚のみちしるべは、入山村と信州側で道を整備しあつた時に造られたと聞いています」の記載があり、この時にこの道標を建てたと考えても不自然ではなからう。今は廃道になつたが、最短の距離で入山への道を教え、地内にある温泉への案内や、遠く離れた市場町中之条を教える貴重な交通資料といえる。

ヒュッテ裏側で分岐する道跡は草津峠越えの信州道で、以前は笹の中歩けそうな道が続いていた。最近訪れると道跡が見えず、聞けば遭難予防のため閉鎖されという。渋峠道越えの道はノゾキ等の難所があつたが、草津峠経由は起伏の少ない緩斜面を通る新道として、明治になり開削された。だが、北斜面は春遅くまで雪が残り、道の維持管理も大変で、長く続かず廃道になつてしまった。

渋峠への道は、左にミニ尾瀬ヶ原的な高層湿原を見ながら進む。ワタスゲ等の花が咲く三ツ池脇を通り、湿原から赤色の河水が流れる南ゼン沢を渡ると上り道になる。多くは緩やかな木道に整備されて、歩きやすい道になる。峠まで半道中付近が、笹類が緩斜面を覆うダマシ

平で、南には榛名や浅間隠等の山々が見える。不穏なダマシ地名を説明板で見ると、ここを通過するスキー客が、視界不良の際は草津方向と勘違いをしてガラン沢の谷へ迷い込み遭難騒ぎがおきたのが地名の由来とある。



嘉永七年の道標



だまし平付近敷石道

だが、嘉永元年、当地を歩いた佐久間象山の『杳野日記』に「だまし平」と記し、スキー以前からの地名と分かる。事実、私も入山の古者にダマシの由来を話すと、違つて即座に却下されたことがあつた。浅間登山でも、歩き疲れると前方の小ピークが山頂と期待して騙され、本当の山頂はその先ということがある。これも長い上り坂で疲れた旅人が峠だと期待し騙された所であろう。象山は渋峠から芳ヶ平への道を「池の塔といふ所に至る。嶺の極所にて上州との境なり、道の右に径十間もあるらむと見ゆる池あり。又旅人の息ふ所也。是よりだましの平といふ所を過ぎて、蘆の平といふ所に下る。池数所あり。池を繞りて小丘多し、縦梅是に生じ、往々石楠花開く。甚だ人家庭園の趣あり」と記している。

池の塔は入山の小字名で、池のあるタワ（撓んだ所＝峠）の意味で、この水は今も飲料水で使われている。だまし平は前記通りである。蘆の平は標高一、八〇〇メートル余の高層湿原の芳ヶ平で、池塘のある風景を庭園の趣と例えている。

だまし平を上り過ぎると、石が道に多くなる。カーブ付近、左の石の上に文化二（一八〇五）年に吉兵衛が建てた独鈷を手にする僧形の石仏がある。基部を見ると、一部欠けるが「イシノリソウ（石乗り僧）」と読め、凸凹の石の道を独鈷で通りやすく開削した僧と私には思える。この先、「足工」等の落書とも思える文字を刻む滑り台状の石があり、前後の道は往来する人や牛馬が歩きやすいように、意図的に石を並べ整えたと思える所が何ヶ所かある。この道を敷石状に整備したのが、嘉永七年に入山と信州側で道を改修した当時の道の名残とも感じる。

平らな歩きやすい土の道になると、車の音も近くに聞こえ渋峠に到着する。古くは峠は池のタワ（峠）と呼ばれたが、今は渋温泉に通じる峠から渋峠と記される。峠のホテルの壁には群馬県、長野県とあり、上信国境の実感がある。峠は標高二、一七二メートルで、観測所以外の日常生活の場で、住民が通年居住する所では日本最高地点と覚えた記憶があり、付近には日本の国道最高地点の石標が建っている。今、昔の峠道を感じさせるには二基の地蔵像のみである。小さな地蔵には、文化二（一八〇六）年の銘があるが、石室内で裏側は見られない。

江戸時代、渋峠越え道は善光寺と草津温泉を結ぶ最短コースだった。江戸時代後期になると旅人や物資の往来で賑わい、継ぎ場の仕事が減った信州街道大笹宿等は、宿場の死活問題と考えて渋峠越え道を関所の手害地域と通行停止と訴えて争いになった。文政十（一八二七）年の裁定で、

峠の麓五ヶ村の手作穀物や産物、六合特産の木具類の商い、草津、入山で使う自家用の酒や油等に限定し移動を認めた。それ以外の売り荷や旅人の往来は一切通さない形で示談している。だが、経済性を無視した裁定のため有効に機能せず、相変わらず峠道を利用して商品が運ばれ、旅人往来は続いた。

『山村社会の人と暮らし』に、この峠道を往来し、馬での駄賃稼ぎで働いた貴重な古老の話が載るので紹介してみる。渋峠道の全盛期は明治三十七年頃、大正初期で、当時は沓野で入山物産と長野方面から搬入の物産が交換されたという。信州への物資運搬は、昔から牛馬、特に馬を多く使い、人の背にも担がれて運ばれた。全盛期の信州コースは、入山から四〇人余りが物資運搬に従事していた。駄賃稼ぎ専門の人は、この道筋を月に七、八回は往復し、兼業の人は月二、三回の往復とある。引沼組では駄賃稼ぎ専門が三人、兼業が七人である。荷物は一人一回三こま甲（一甲一二〇個詰）が本荷で、二甲は七部荷と呼ばれていた。大正七、八年頃の駄賃は、往路本荷で七円、復路は大体四、五円の稼ぎで、帰り荷は酒二斗五升入りが一樽五円、一斗五升入りが一樽三円の相場で、普通の人は二斗の積荷で四円の稼ぎだった。信州へ運んだ物産は曲げ物等の木工品、蕨、繭があつた。信州からの搬入物資は米、酒、菓子、蓑笠、竹細工、藁はばき等で、一泊、二泊の日程とある。春の雪解け頃から始まり、秋は十月頃迄である。昭和初年に草津まで来る草軽鉄道が開通し衰微したという。

入山独特の借り馬制度も渋峠を越えた信州とのつながりだった。信州側で田植えが終わる季節、博労が湯田中周辺の村から馬を引き峠を越え入山に貸しに来た。馬に草を踏ませて良い肥料を作ることが主目的だっ

たという。春になり、信州で田植えが始まる季節の前に馬を迎えに来る。その際、入山の馬持ちは、信州への貸し馬をする方もいたという。雪の多い時は、大笹から菅平經由の道で信州へ行つたという。博労と一緒に馬を引き波峠を越えた古老が、波峠を越えた横手中腹のノゾキの通過が一番恐かったと語る。今は快適な観光道路になったノゾキだが、当時は馬を引き命がけて通つた難所の道だった。

七、入山く地蔵峠越え秋山道

地蔵峠を越える秋山郷（長野県・新潟県）への道は、和光原を通る道が主流だった。野反湖く和光原までの旧道を四〇年程前に歩いた時は荒れていなかったが、今は廃道状態なつて時間も経過した。

この道は採草地通いや曲げ物材料を運ぶ生活の道であり、秋山から当地を通り牛の背で越後の物産を草津に運ぶ道と共に、佐久間象山が資源調査の名目で通り、小栗上野介夫人が和光原を経て会津へ落ちた道でも知られる。野反方面へ向かう旧道は、和光原集落東北のお堂下を通り、今の国道方向に向かう。御判形を過ぎると右に大原く四万への道を分岐し、野反方面は左の坂道を上る道である。尾根道になった道沿いに秋山から当地に入った山田姓縁の門松の十二さん（山神）を祀る石宮がある。その先には右に拌み石と呼ばれる岩が見える。名前は信仰対象に感じるが、名前を裏付ける石祠等はない。旧道は国道西側の尾根筋を通り、峠まで四キロ程付近で、小栗上野介奥方一行が休息したと伝わる小栗清水がある。国道沿いにも案内板が出ており、二〇〇メートル程で歩き左に入れば木製井戸枠がある。整備から時間も経過し、清水に相応しくない

水が底に少々見える。小栗清水を過ぎて、旧道を右に下れば水が湧いている。当地に赴いた佐久間象山が飲んだという佐久間清水だが、地元でも古老以外には余り知られていない。峠まで約二キロ、地名の大榎はない大榎に由来する。旧道を進むと植生が少なく禿と呼ばれた野反（富士見）峠に到着する。峠から八間山方向を見ると、西斜面に植物が生えない裸地が見える。これが通称烏賊禿^{いかはげ}で、佐久間象山は『沓野日記』に「山に赤き崩れあり、状烏賊を倒にしたるが如し。故に土人この処をいか岩といふとぞ」と記し、いか岩の嶺が上信国境と主張している。



小栗清水跡



いか禿と八間山

野反池周辺一帯は、岩菅を刈り、炭を焼き、薪を採り、奥では曲げ物細工材料を採るなど入山住民には大切な生活の場所だった。

旧道は左に野反池を見ながら進み、池尻付近から右斜面を上り、八間山の西北に連なる萱ノ尾根を越えた。野反池畔が下荷場、尾根越えの鞍部は上荷場と呼ばれた場所だった。一〇日毎に里から妻等の家族が馬を引き荷場に來て、夫は奥山で切つた曲げ物材料を背で荷場に運び、ここ

で渡したという。秋山方面から来る物産もこの地で引き継ぐこともあつたろう。

白砂山登山口近い標高一、六九八メートル余の三角点付近を、近年池の峠と呼ぶようになった。本来の旧道は少し手前で萱の尾根の鞍部を越え、榛の木沢側に下り、取水口付近で沢を渡ったという。その先は、今の地蔵峠道の右手の山腹を上り、地蔵峠で登山道と合流する。だが、この区間の旧道は利用されず、深い藪や笹に道跡は消えてしまった。等高線を見ても、旧道筋は急斜面の道のため、秋山から来る荷も馬背で運ぶより牛で運ぶのに適していたと感ずる。

地蔵峠は標高一、六二〇メートルで、左が切明、和山、右が二百名山白砂山を教える標柱がある。峠の石仏は螺髪姿の座像で、年号は不明である。よく見ると、中央に「歆普妙円禅尼」、右は「頓普浄光禅門」。左は「法普真性信女」と、三名の法名があり、下に「為菩提」と刻まれる。法名は浄土宗系に多い「普」の字があり、「為菩提」の銘で三人の供養碑といえる。像は印相、浄土宗系の法名等から、地蔵でなく阿弥陀如来像と思える。長野原の人が岩菅山に座像を納めるため背負いここまで来たが、峠で足が前に進まなくなつて、この峠に納めたという話を聞いたが、詳細は不詳である。秋山への道は大倉山西中腹を通るが、この道は左京横手と呼ばれる。大倉山から流れる左京沢、荒砥沢、虎杖沢を越えると大倉平になる。明治四十一年八月二十五日、長塚節は長平の猟師山崎角蔵の案内で秋山に向かったが、藤沢周平は小説『長塚節 白き瓶』に、「県境を越えたその夜は、標高二千五十四メートルの大倉山中にある覚蔵の小屋に一泊した」と記している。リンベイ茶屋は大倉山腹のこの付近にあったか。その先は百八十曲がりや大倉坂とも呼ぶ長い急坂に

なる。坂を下ると、今の道は渋沢を渡り、程なく魚野川左岸に移り、ダム工事専用だった道を歩くことになる。幾つかのトンネルを潜り、急坂を下ると切明温泉にでる。草津道は渋沢を渡り、魚野川右岸沿いに進む道である。昭和中期まで、魚野川左岸の道を歩くと、対岸に旧道筋が見えたという。



地蔵峠の石仏



草津道の起点道供養

古い山岳関係の本には、旧道は障子岩の西下を通り、佐武流川を渡り、九十九曲がりの坂を過ぎて、檜俣川を渡り、尾根を下り、今の車道を横切れば、和山と切明間の旧道沿いの馬頭観音がある分岐にでると記される。私も二〇年前、この道を歩いたが疲れ過ぎたのか、メモもせずにと終わってしまった。近年訪れて古老に旧道を聞くと、和山温泉上流の川沿い道を進み、馬頭観音の分岐から左に上り、車道を横切つて鉄塔下を通り山中の道になるが、この先は廃道同然と教えてくれる。

津南町の草津道起点付近に、草津道開削を偲ぶ石碑がある。この碑は草津道起点の反里口から切明側に少し行き、反里口の廃校跡（今は工場）

前を西に二〇〇メートルも行くと草津道にでる。この道を右に下れば日本回国供養塔や「右八山道／左八見玉道」の道標があり、草津道沿いの見玉不動尊を教える。左に少し上つて湯殿山等の石碑を見て、その先に開削の碑がある。碑（高さ一二九センチ・幅四五センチ）は「道供養」と記し、裏に「安政四巳年」とあり、一八五七年に建てた碑と分かる。台座には「十方他方／願主 反口村 中屋仁左衛門／古町□蔵／昔□□□／□□□」と不鮮明だが僅かに見える。□部分は、『栄村史』には芦ヶ崎村、堀子喜左エ門と記される。道供養碑の先の上り道には、僅かな距離だが、当時の石畳が見られる。

古者は草津温泉までの一六里を、一年で一里の計算で工事を進めたと語る。民俗調査報告書『秋山郷』には、根津仁右衛門が私財を使い、一年一里の原則で、天保十一（一八四〇）年、安政四年まで一八年間を要し開削したとある。『秋山記行』には秋田マタギからの聞き書きだが、当時の道は「草津への往来は、永々獵師仲間のみ通路」と記している。象山の『杳野日記』は嘉永元年の記録だが、野反池よりの道は、「一里余来つらむと思ふ所より溪に激湍多く、水に従つて行く事能はず。仍て其行くべき所を択みて山に上り、谷に下る幾度といふ事をしらず」と記し、多難な道を感じさせる。このように新道開削前は千沢沿いの難所を通り、交易や輸送には不適な道だった。待望の安政四年竣工の道は、川沿いから大倉山中腹を通る道に移り、越後から来る牛荷も通れるようになった。

『秋山郷』は、草津街道は津南町反里口の根津仁右衛門が天保十一（一八四〇）年に起工し、一年に一里と考え、冬は金策に走り、不足分は私財を投じ一八年間を要して開いたとある。『草津温泉誌』には、嘉

永五年の草津道修復約定書が載る。これは入山側と秋山側の双方で、嘉永五年六月の契約文書で、「上州入山村和光原より越後迄秋山通り山稼道、往古より有之」で始まり、「双方相談の上、右山道修復仕度候処実正也」と続き、「入山世話人中より、金四拾両出金可仕候、然る上は越後にて世話人見込み通り出精仕、当八月中迄に修復可致候」と記し、そして「出来の上は、右人夫手当・入山世話人中より出金致可候」とある。山道修復に際し、人足は越後側で負担し、入山側では四〇両を人足手当分として負担という契約文書で、双方が協力し道を維持したと分かる。

八、六合中部・南部からの草津道

東西を走る草津道や、草津へ入山への道は前述した。今回歩いてみて、改めて六合中部、南部から地域住民が利用する草津への道は地味な存在だが、地域住民の生活には重要な道だったことを知り、概要を紹介してみる。前述した草津道は遠方からの旅人が多い観光的な色彩が強い道だった。ここで紹介する道は地元農家で生産した野菜等を草津に売りに行く草津商い、つまり生業のための道である。

沼尾からは毘沙門堂脇を通り、小沢を渡ると道脇に富蔵観音（長野県の馬頭観音で有名な富蔵観音を勧請）や三夜塔等の石造物を見ると、やがて大坂道になる。名前のように長い坂道で、大カーブの右に大正二年の馬頭観世音を見て、大坂を上り上がれば、峠に宝暦十二年の聖観音像があつたが、今は麓の三原三十四番札所沼尾寺跡に移っている。大坂平を横断し、楽泉園内を通り国道脇に出る。楽泉園入口に馬頭観音があり、左は入山、右は沼尾と道標になっている。小雨からの草津街道は前に記

したので省略する。

太子からの草津道は、上太子集落入口の双体道祖神脇から山に上り、集落の裏山を通り、大きな溝状の樋ノ口を過ぎ、西へ進む。もう一つの道は、太子不動尊の先、水戸沢を渡る手前で右の山路地内に入る。山路は太子地内の採草地で、道心原を過ぎ、草津道の目印になる笠松を通り、前記の道祖神脇から入った道と合流し、右に楽泉園方面を見ながら、草津街道の一里地藏方向に向かって進む道があった。

太子の花園からの道は、国道脇から入り湯窪道を上ると、送電線の鉄塔付近で平になる。途中には湯窪の畑に肥料など運ぶ際に一休みをするデッキ石もあった。この道の難所は岩の多い所を上るが、その付近が潜り石である。この石は上下が道に挟まれた斜面にあり、妙義山の石門のミニ版である。弱い路肩の道を重い荷を背負って畑仕事に通った方が、頼りに握って上った太い針金が左の岩に残っている。岩場が終われば、右に美し山を見ながら湯坂へ通じる道もあった。

日影の八幡、田端、榆木等から八幡神社脇を通り八幡坂を上る道が主流だが、田端から日向道を上り合流する道もあった。八幡神社下の一貫地峠付近から、国道を離れて堰堤のある沢沿いの道になる。アンバの右斜面には集落の墓地が見え、堰堤が終わる付近で道は林内に入る。少し行った先、杉林内に右に分岐する道跡がある。この道は堰堤が出来る前に利用した旧道跡である。この分岐を左に行く道はその後に出来た道で、尾根にでると田端から来る日向道が合流する。付近は比較的広い道が続くが、今は荒れてしまった。その先に人気ない山道に似合わないガードレールが見えてくる。古老に聞くと、児童の安全通学を考えて、集落で要望し出来たと語る。この岩の多い斜面を刎ね石と呼び、ガードレール

や昔の石垣もある。この付近は道の分岐だが、左の岩下を通る道が古道であろう。古道上の斜面には端正な表情の馬頭観音が見える。その上の



難所は石の観音像



湯久保への旧道

岩根には三基の馬頭観音があり、村中で建てた観音像もある。一ヶ所に四基もの馬頭観音があり、この難所で何頭かの馬が遭難した現場と思われる。この先で道は再度合流し、大きな凹状の坂を上るが、古道の趣を感じさせる道を楽しみ湯久保へ向かう。徐々に平になるが、最初の平付近の地名をヤシャールクと古老が教えたが、意味は不詳である。秋葉尾根分岐手前の平らが柳窪と呼ばれる。右の秋葉尾根の山頂には、地名になった秋葉の石祠が祀られる。石祠は安永十(一七八一)年に建て、願主は榆木・八幡・田端村中と麓の集落が記され、古い時代から湯久保との強い関係がうかがえる。尾根を抜ければ湯久保集落が見え、旧道は土橋を過ぎて安ヶ川宅裏で二軒屋から来る道と合流する。合流地点には、右は長野原、左部分が欠けた馬頭観音道標があったが、今は所在が不明である。

この通りが日影や太子、赤岩の方が、夜が明けぬ未明に野菜を背負い家を出て、提灯の明かりを頼りに草津商いに向かった道になる。空が白み始めると、持参の提灯を道脇に置いて草津へ向かったと古老が語った。入山から暮坂に出て、沢渡や中之条、長野原へ向かう道筋にも提灯を置く所があり、その付近を提灯坂と呼んだのと同様である。

湯坂の入口、道祖神付近で草津の本通りの湯坂道と、右は榎木、左は堀口方面への三方の道が分かれたが、古くは付近に茶屋があったという。この通りでは、提灯を置く所は、道禄神の道脇か、早く家を出た足早の人は湯坂が終わった草軽電鉄線路付近だったと聞いた。

草津まで歩き、旅館の通用口から野菜は如何と商談を進めたが、馴染みでないが大変だったという。一日の商売を終えた帰り道、暗くなるのと、往路で置いた自分の提灯を持ち家に帰った。この道は信州街道筋や中山道から草津温泉への本通りだが、地元の方が野菜類を背負い草津に向かった生活の道でもあった。古老は昭和三十年代頃まで、湯坂を野菜を背負った方の往来姿は日常風景だったと語る。湯坂途中の土手状の所で、荷を置き一服したと聞いた。この湯坂道入口に、大正頃と思える馬頭観音が二基ある以外に、往事の賑わいをしのべる石造物類や地名は見あたらない。

九、入山への車道開通

白砂川沿いを通る入山への車道開削は、先人の熱意と川中発電所隧道工事が両輪となつて実現した。入山への道路開削に貢献した先人では、私財も投じて尽力した福嶋松次村長の存在を忘れることは出来ない。そ

の取り組みを『吾妻郡歴代町村長名鑑』に「昭和八年本多村長の後を継ぎ六合村長野原の新道を開通し、これを県道編入に成功し、又東京営林局、群馬県庁、群馬水電会社と六合村の協力の下に、六合村役場Ⅱ花敷間の新道開鑿を計画し、君島県知事再度の踏査を仰ぎ各方面の協力と臣民の努力により昭和十二年之が完成され吾妻郡西北部の奥地も開発されて行く道が開かれた」と記している。村財政も苦しい時、福島村長自らの懐を痛め、工事開始までの段取りを勧めたといわれ、道路開通の恩人の一人といえる。

県道認定から開通までの経緯をしてみる。『吾妻郡誌』に、大正九年一月二十九日の郡道認定に関する諮問案線路に長野原花敷線が載る。この道は長野原町から赤岩、日影、小雨経由の入山花敷に至る道筋で、昭和十二年に竣工した県道、今の国道の前身といえる。

県道に認定された昭和初期の『群馬議事史(昭和元年〜同二十二年)』を見たが、六合地区の道路関係記録は少なかつた。山間部の道路について岩城議員が「知事は山間部の県道を改修し賽廬を開発する意志ありや」と知事に質問をし、岡田知事は「山間部の道路状態はよく知らないが、想像は出来るので改修のため努力する」と答弁する。知事は正直に、山地の実情は知らないが、不十分なことは想像出来るから努力をしたいと答弁した議事記録が載る。

昭和六年には「中之条上田線ノ中、長野原町ヨリ分岐シ六合村字日影同小雨同入山ヲ経テ草津町国立療養所ニ連絡スル路線」が、他の県道建設と共に建議される。翌七年、県道認定諮問原案諮第一号に「長野原花敷線：吾妻郡長野原町ヨリ六合村花敷温泉ニ達スル路線」が諮問され、県道認定が実現している。

同十年の十五番建議の「道路が都市を中心に集まり、都市平坦部に比べて山間部が恵まれていない」に対し、松沢龍大は「将来出来るだけの予算を計上してご希望に沿いたい。殊に山間部道路開発は人口物資文化名所旧蹟等種々の事情を考え、重要なものから順次やってゆきたい」と答弁し、山間部の県道工事が前向きな方針を示している。同十年十二月二十一日に、君島清吉知事が「草津渋線 吾妻郡草津町ヨリ草津峠ヲ経テ長野県下高井郡渋温泉ニ達スル路線」等を県議会で諮り、異議なく草津温泉から六合西北部の草津峠経由の渋温泉道が県道に認定されている。草津峠経由の道がこの年県道に認定されたが、この道は本格的に利用に至らず、今は通行禁止の荒廃状態である。

小雨から花敷温泉への県道改修工事の進捗状況の詳細は不明である。当時の新聞を見ても、中国での戦況記事が中心で、民政に関する一般ニュースは紙面の片隅に僅かにある程度で、多くは紹介されず終わつたようだ。赤ちゃん写真のコーナーがあり、クラス会写真まで載る今では信じられない時代だった。山深く交通不便な当地の道路開削に関心をもつ記者はいないと諦めた頃、左記の記事を発見した。

記事は昭和十二年七月十五日刊の上毛新聞に載っていた。見出しは「風光に恵まれた長野原花敷線改修工事完成す」であった。然も湯川発電所付近に貫通した天狗隧道の写真入りと大きな扱いだつた。

六合を扱った数少ない新聞記事なので、見出しに続く記事（若干の旧漢字を新漢字に変更、句読点を追加）全文を紹介する。「県道長野原―花敷線の道路改修工事については、昭和七年以降―道路改良、災害復旧、道路改築の三大事業に依り、全延長約十六キロの内、吊り橋八十米二橋、隧道八十米一箇所、法仗橋二橋等十四キロが完成したので、十一、十二

日の両日、平川土木課長は松岡技師を伴ふて全線を視察した。平川課長は語る。この長野原―花敷線は長野原から六合村小雨を経て花敷温泉に至る道路で全延長は約十六キロあり、これがために六合村は県下一の貧弱町村であつたものが、この産業道路の完成に依り更正の一路を辿つてゐる。等、この外湯の平、花敷、尻明、応徳の四温泉を控へ、沿線には高さ百米（幅一米）の九重の瀧、高さ二十五米（幅一米）の鍋の瀧、或は野反湖風光と温泉にめぐまれ、林産物（木炭八万俵）の紹介等に依り躍進的な発達を約束されてゐる。なほ営林署でも終点より国有林の薪炭伐採搬出のために花敷温泉に連絡する道路改修に二三方圓を投じて工事中なので、この工事が十月頃に完成され、ば、長野原から花敷温泉迄は立派なドライブウェイが完成される訳である」という内容である。

記事を読み、①改修工事の開始時期や具体的な内容が分かる。②県下一の貧弱町村が産業道路開通で更正一路とあり、当地に対する心ない見方と共に、道路開通により今後への楽観的展望の記事でもある。③六合地内の観光や産業開発の目玉が分かる。高さ一〇〇メートルの九重の滝や鍋の滝は今のどの滝に該当か興味がある。④車社会の現在の記事と感ずるドラ

上毛新聞 日 水 日 新 毛 上

風光に恵まれた 長野原花敷線 改修工事完成す



この工事の目的は、この地域の交通を便利にし、観光客の増加を促すことにある。この道路は、長野原から六合村小雨を経て花敷温泉に至る。この道路は、昭和七年以降、道路改良、災害復旧、道路改築の三大事業に依り、全延長約十六キロの内、吊り橋八十米二橋、隧道八十米一箇所、法仗橋二橋等十四キロが完成したので、十一、十二日の両日、平川土木課長は松岡技師を伴ふて全線を視察した。平川課長は語る。この長野原―花敷線は長野原から六合村小雨を経て花敷温泉に至る道路で全延長は約十六キロあり、これがために六合村は県下一の貧弱町村であつたものが、この産業道路の完成に依り更正の一路を辿つてゐる。等、この外湯の平、花敷、尻明、応徳の四温泉を控へ、沿線には高さ百米（幅一米）の九重の瀧、高さ二十五米（幅一米）の鍋の瀧、或は野反湖風光と温泉にめぐまれ、林産物（木炭八万俵）の紹介等に依り躍進的な発達を約束されてゐる。なほ営林署でも終点より国有林の薪炭伐採搬出のために花敷温泉に連絡する道路改修に二三方圓を投じて工事中なので、この工事が十月頃に完成され、ば、長野原から花敷温泉迄は立派なドライブウェイが完成される訳である」という内容である。

上毛新聞のコピー

イブウェイ完成と、大げさな表現である。

この道は戦後、県道から国道に昇格し、村を南北に縦貫する基幹道路になった。夏は高原の野反湖へ涼しさを求める観光客で、秋はテレビや新聞で白砂溪谷ラインの紅葉状況を聞き訪れた多くの車で賑わい、文字通り新聞記事に載る立派なドライブウェイになっている。

一〇、広報に見る交通関係記事年表（昭和二十八年以降）

（同二十八年十一月号）同年八月末より、長野原く花敷間に路線バスの運行開始とある。

（同三十年一月号）村長の年頭挨拶に、同二十五年の洪水で流された開運橋工事竣工、花敷温泉バスが全通、太子駅より四十八分で運行とある。

（同三十一年一月号）年頭挨拶に、昨年六月に太子駅開業。昨年十二月十六日、国鉄バス開通とある。花敷へのバスは、昭和十二年より陳情、小沢代議士の紹介による衆議院運輸委員の野反湖視察により、国鉄バス乗り入れは適切な判断とある。

（同三十二年一月号）年頭挨拶で、村長は道路開削に熱意を述べる。
（同三十四年一月号）年頭挨拶に、荷付場く草津間の道路や出立橋完成の挨拶。本年三月までに京塚橋架橋予定とある。

（同三十六年一月号）年頭挨拶に、県道草津中之条線は、沢渡方面より暮坂峠にかけて東武バスと自衛隊の協力で着工の運びとある。
（同三十七年一月号）年頭挨拶に、吾嬭橋が完成、従来の木橋を車道に改修のため、旧坂東橋の一部（全長七〇メートル）を移したとある。

（同三十七年十一月号）年頭挨拶に、自衛隊の手で暮坂峠道路が改修

され、県への引き渡し式を峠で実施される。この改修工事は同三十五年に始まり、総工費六、三〇〇万円とある。

（同三十八年一月号）年頭挨拶に、待望の暮坂峠道、延長七キロの工事完成し、草津中之条線は全線開通とある。草津花敷線のうち、小倉長平間の営林局林道延長工事完成。尻焼長平間は建設省ダム工事用道路完成とある。

（同四十一年一月号）年頭挨拶に、昨年四月、県道野反長野原線は建設省認可の県内五路線の一つの産業観光開発重要路線として指定。初年度は梨木大神宮裏岩盤個所より改良工事起工、現在も工事中とある。四十一年度は制限橋梁解消を重点に改良し、五ヶ年で全線改良の見通しとある。車の通行が出来ない村道は部落連絡路線を重点に、湯久保根広を完成し、現在は鍛冶屋敷線を施工中とある。本年は京塚線の実施計画とある。

（同四十二年一月号）年頭挨拶に、県道野反長野原線は奥地産業開発道路の指定を受け、昨年度より五ヶ年間に準国道改良工事計画実施中。草津中之条線は昨年六月東武バス開通以来局部改良工事進捗中。村道花敷草津線の根広く小倉間は車道になり本年二月開通予定。同時に小倉ガラン沢温泉方面道路も第一期工事完了。広池中室経由かじやしき線も営林署の道路として新設完成、村単工事の暮坂かじやしき線と接続。村道京塚部落線は辺地特別措置法で財源起債と県振興資金等で第一期工事が着工、第二工区は本年五月までに完成予定とある。

（同四十四年一月号）年頭挨拶で、県道野反長野原線は奥地産業開発道路で、国の指定線として公共事業を導入、橋梁、道路改良工事が進捗中とある。町村道改良工事では、花敷・草津線は山振法の適用で、特別

開発補助工事として昨年度より引き続き工事中とある。

(同四十六年十一月号) 切明野反湖間車道新設期成同盟会結成の記事。

(同四十七年六月号) 知事視察、小雨草津線林道起工式とある。

(同四十七年九月号) 高崎・長野原・津南間の国道昇格促進期成同盟

会結成。高崎市・榛名町、倉渕村・吾妻町須賀尾峠越え、長野原町・六

合村野反湖・長野県栄村・新潟県津南町に至る道を国道に昇格、整備

改良し、群馬県の西毛から裏日本への直結道路開設をめざし準備、八月

十七日に関係市町村が集まり同盟会が結成された。関係市町村は一市、

五町、三ヶ村である。会長は長野原町長桜井武で、六合村長篠原秀雄は

理事に、同議長山田松雄は監事に選ばれる。

(同四十八年一月号) 年頭挨拶で、完成が待たれる南大橋。村道日影

赤岩線の南大橋は四月十三日に竣工式。従来の道は白砂川谷底を通る丸

木の中の瀬橋利用で、対岸に車で行く道は出立經由で南大橋より二、五

〇メートルも遠回りの道だったと橋の利便性が載る。

(同四十九年一月号) 高崎市・野反湖經由長岡市までの国道昇格を目

指し、期成同盟会長高島修氏とある。

(同四十九年二月号) 林道中沢線開設事業。受益者分担金として事業

費の百分の十五以内の率で徴収する条例を制定。品木・田代原へ通じ

る尻焼から草津への草津二号線開設の計画が提案される。

(同五十年一月号) 年頭挨拶に、長平花敷線の県代行決定、長平田代

原、元山間の林道併用実現で将来は県道昇格運動を行い、草津二号線と

接続した巡回道路計画。草津二号線は助成増額で短期間に完成予定とあ

る。龍宮橋も本年完成予定。県道中之条草津線小雨、生須間の橋新設、

長野原野反湖線の花敷までの舗装を関係機関に強く要請とある。

(同五十一年一月号) 年頭挨拶に、昨年末、龍宮橋完成。長野原秋山
間県道の主要地方道認定。長野原小雨間の舗装工事がほぼ完成、入山方
面へも進めるとある。

(同五十二年一月号) 年頭挨拶に、村内道路の整備予定線は軌道にの

り、今後は予算獲得や完成迄の期間短縮に努力。主に中沢線、小雨線、

草津二号線、引沼京塚線、長平花敷線、矢倉根広線の新設整備とある。

林道では大原、四万、新治村に通じる広域基幹道路や小倉ガラン沢方面

林道、根広金山林道等は関係機関に強く要請とある。

(同五十三年十一月号) 林道中沢線完成。民有林林道開設事業

で、日影の強い要望で昭和四十八年度工着手、六ヶ年の歳月と、

一億四、六一一百万円の事業費(補助率七五割)で、延長二、四〇四・五メー

トル(幅員四メートル)が完成。今後は林道の機能である森林管理、経

営合理化、生産性向上等農林業の進展に、地域の動脈として役割が大

ある。

(同五十四年一月号) 年頭挨拶で、七年余の協力により広域林道中沢

線が開通。吾嬭橋が完成し、竣工式は五十三年十二月十六日に行う。橋

は長さ一六三メートル、中一〇メートル、郡内第二の長大橋とある。旧

橋は下流五〇メートルで、昭和三十六年に架設、老朽化で六トンの重量

規制が行われていた。

(同五十四年十二月号) 併用林道長笹支線の長笹川橋完成。

(同五十五年一月号) 年頭挨拶で、長平分校地先より小倉を一直線で

結ぶ「オサクラ大橋」を計画、志賀高原方面からの来客を草津・田代原

・小倉・根広コースで野反湖へ誘致し、帰りは花敷・生須・暮坂峠にと、

点と点を結ぶ観光ルートを作り、「秘境くにむら」への観光客大誘致計

画をたてたいとある。六合にもこんなに大きな夢があった。

(同五十六年三月号) 国道昇格を国や県に陳情とある。

(同五十七年一月号) 年頭挨拶に、昭和四十二年以来長い年月を要した草津二号線と、引沼京塚線の京塚橋架設は本年完成の運びとある。

(同五十七年四月号) 高崎市、長野原町、野反、上越市間の国道昇格促進期成同盟会発足、陳情などの運動を行う。同五十五年度はハガキ一枚運動で村民の支援も受ける。四月一日から長野原町―小雨―梨木―草津町間の(主)津南秋山長野原線と(主)中之条・草津線の一部が一般国道二九二号として新たに認定される。六合村が望んでいた長野原町―野反湖経由―上越市間を結ぶ国道昇格は見送り、今後も梨木―野反―上越市間の国道昇格運動を継続する。主要地方道中之条草津線の一部が国道(二九二号)昇格にともない、引沼―花敷―長平―小倉―田代原―大沢―谷沢―草津町間の村道花敷長平線、長平小倉線、併用林道金山支線が主要地方道中之条草津線になった。

(同五十七年五月号) 引沼京塚線、完成まで二六八メートル。京塚橋が昭和五十七年三月三十日に完成、昭和五十一年から進めた引沼京塚間の道路改良工事も京塚側から二六八メートルを残すだけとある。今年度中に総延長八六八メートル(幅員五メートル)完成し、両集落がつながる。(同五十八年四月号) 京塚橋・花敷橋の渡り初めを行う。林道引沼京塚線の道路改良工事は、昭和五十一年度着工以来七年目で全線(総延長八六八メートル、幅員五メートル、京塚橋七七メートル)完成。花敷長平線第一期改良工事、花敷―尻焼まで延長九二〇メートル、花敷橋六六メートル)が県代行業業で行い、四月五日に両橋の渡り初めと竣工式を行ったとある。事業費は引沼京塚線が三億四〇〇万円、花敷長平線が

三億三、四八〇万円とある。

(同五十七年七月号) 林道小雨線全線開通。昭和四十七年着工、六合村分三、九二八・九メートル、草津町分三、二四九メートル、総工費三億七、七三四万円。工事は一年の歳月をかけて全線が開通。六月三十日に小雨公民館で知事、高島県議、他関係者二二〇余名により開通式を行う。林道の開通で森林経営向上、農産物の搬出、観光分野の開発に寄与大とある。

(同六十年一月号) 年頭挨拶に、新規工事は林道太子湯久保線、品木原田代原間、世立林道改良工事に着手。継続は村道白砂根広線、広池暮坂線、京塚線、小雨線の促進、中沢林道舗装完成、熊倉地区、湯久保地区農免農道等の促進とある。

(同六十年三月号) 六合村で最初の信号機が点灯する。

(同六十一年一月号) 年頭挨拶に、村道太子湯久保線改良工事着手、

京塚林道の全線開通とある。

(同六十二年一月号) 年頭挨拶に、昨年、二〇年間の継続事業で品木―京塚へ通じる路線完成とある。

(同六十二年四月号) 林道京塚線開通は、三月十七日。林道終点で開通式、鍋割沢沿いに品木―京塚への延長二、四九九・九メートル。起点側で村道花敷草津二号線に、終点側で林道引沼京塚線に接続する。工事は昭和五十一年度、国の補助を受け、民有地林道開設事業で着工。地形急峻の岩盤地帯で、施工困難箇所もあったが、総工費二億六、七六三万円。目的は林業振興、生産の担い手や労働力の定着促進、多面的機能の継続促進とある。

(同六十三年一月号) 年頭挨拶に、赤岩集落内の舗装が新しくなる。

舗装工事は延べ六七二メートルとある。

(平成元年四月号) 国道二九二の出立大橋、花園大橋竣工式。

(平成三年二月号) 農免林道舗装事業で京塚完成。

(平成三年十一月号) 村道沼尾大梨線龍宮橋は地滑り災害で、平成元年六月十六日より全面通行止めだった。復旧工事が完了し、平成三年十月二十日に開通。橋梁災害復旧工事総工費三億二、八〇〇万円。上路トラス橋で延長九一メートル、幅員五メートル。万一の地滑り時には、生須側の橋台と橋桁が切断出来る珍しい構造の橋。迂回道利用にくらべると距離も十分の一に短縮される。十二月二日～翌四月十八日まで、(主)津南秋山長野原線の野反湖和光原間一・四キロは冬季閉鎖とある。

(平成四年二月号) 国道二九二号、沼尾地内の盛土は、発泡スチロール地滑り防止区域で、大量の盛土工事は出来ない。県内で初、軽量盛土工法(E・P・S工法)土の代わりに発泡スチロールを積み上げる工法)を実施。発泡スチロールブロック(二個二〇kg)を約八、〇〇〇個使用。土の盛土なら一、二八〇〇トンだが、この工法だと一六〇トンと軽量で、急ピッチな工事が可能。

(平成四年四月号) 主要地方道津南秋山長野原線が国道に昇格。昭和四十七年から二〇年間、国道昇格整備促進期成同盟を結成し運動を続けた成果である。今までは部分昇格で、荷付場～津南町間六二キロは未昇格だった。三月二十五日の道路審議会で昇格残りを追加指定、荷付場を起点に上越市が終点の国道四〇五号にする答申を閣議で決定。施行日は平成四年四月一日。待望の全区間が国道に昇格し、今後の目標は未開通部分の解消である。

(平成四年八～九月合併号) 未開通部分一四km分の早期開通を願

チャレンジとある。

(平成五年三月号) 村道白砂根広線、村道太子湯久保線第一期改良事業完了とある。一つは主要地方道津南南秋山線(四月一日から国道四〇五号に昇格)白砂ダムの先から、矢倉経由で根広地区を結ぶ一、八〇〇メートルで、昭和五十五年着工、以来一三年間、補助事業費総額五億六、一〇〇万円を要し、平成四年十一月三十日に完成。この道は、行楽客で賑わう尻焼、花敷温泉のバイパスや、根広、長平、小倉集落への生活連絡道で、地域社会の文化、経済への効果が期待とある。

一方、太子湯久保線は国道から太子、湯久保地区を結ぶ全長五、一〇〇メートルの道だが、今回は中程の太子字山路～湯窪間の一、六〇〇メートル、昭和五十九年着工以来八年間、補助事業費総額四億七、一〇〇万円を要し、同四年十一月三十日に完成。今までは急坂や急カーブが連続、冬季は凍結し、苦勞する道だった。改良工事だが高さ二三メートルの山を切り取る等の大工事で、全線の約三分の一が完成する。今回の二路線は建設省所管の緊急地方道路整備事業で実施された。

(平成六年五月号) 花敷草津二号線が開通。品木ダム～草津原間で、昭和五十八年度に採択、県代行事業で完成まで一一年間、一〇億五、〇〇〇万円、約一・八キロ一億五〇〇万円。

(平成六年九月号) 広域林道吾嬬山線の起工式が、八月二十三日に赤岩で行われる。この事業は豊富な森林資源の総合整備、周辺集落の生活基盤活性化を図るのが目的である。総延長四四・四七km、幅員五m。六合村分は一〇・七九km、吾妻町分は二四・三二km、中之条町分は九・三七km、全体計画事業費は八九億六、七〇〇万円。本年度は六合村、吾妻町の約一・四kmの工事を予定。

(平成六年八月号)集落林道日ヶ間線(林業地域総合整備事業)が開通、開通式は十一月二十二日。事業は平成三年に採択、着工。花敷(医療センター前)を起点に世立(上世立)間、二、三、七二メートル、幅員四メートル、総事業費二億四、〇〇〇万円。完成まで四年の短期間だった。林道の役割は、森林資源の活用、集落間の交流、医療センターの利用拡大、災害時の迂回道路等多面的である。

(平成八年一月号)年頭挨拶で、太子湯久保線が、村道で初の二車線道路で完成。暮坂世立間の道路開設は平成十一年度までに開通の目途。広域基幹林道吾嬬山線の高間、暮坂地内の整備が着工。林道至球線の事業化、生須赤岩間の林道寺社木線は田代原西山線と共に群馬県の代行神代線で整備等がある。国道二九二号の丸谷峠改良の事業化目途。

(平成八年八月号)八月八日、中之条草津線の草津高原ゴルフ場く母狸間周辺の改良工事を実施。

(平成九年一月号)長野原町境丸谷峠の国道改良工事は実施測量段階へ。国道四〇五号は六合村の生命線で、野反く切明間の未開通部分開通をめざし沿線一八市町村と協力し粘り強く推進する。

(平成九年四月号)村道沼尾大梨線道路改良工事が完成。同七年く八年に国の補助で、改良工事三六〇メートル、幅員七メートルを実施とある。

(平成十年一月号)林道暮坂引沼線(道路改良工事)は、当初完成まで二〇年以上の予想が、早まって平成十二年に供用開始の運び。

(平成十年七月号)天龍橋、揚場橋完成。昭和五十九年度より、世立側から改良工事が施工、村道引沼暮坂線は七月八日の揚場橋完成で、世立く暮坂間五・七キロが開通する。この道は、平成七年度畜産基地建設

事業世立団地基幹道路として農用地整備公団が事業着手、改良工事を行い、平成八、九年度事業で天龍橋(長さ六四メートル)が、同九年度事業で揚場橋(長さ四五メートル)を建設する。当初、平成二十五年度完成予定が、畜産基地建設事業の幹線道路で改良工事を行い大幅に短縮された。

この結果、入山から中之条への距離短縮、今後は生活道、観光道路としての発展が期待とある。広報の地図には、世立集落く天龍橋袂付近まで「ふるさと農道緊急整備事業改良区間」で、その先が「農用地整備公団改良区間」で、次の村道改良区間を過ぎ、八石沢渡河地点く県道交差点まで二、六〇〇メートルが「農用地整備公団改良区間」とある。

(平成十一年一月号)年頭挨拶に、暮坂引沼線は平成十一年中に全線舗装。日影赤岩線、太子湯久保線の改良整備も促進。過疎代行の田代原西山線も旧元山分校まで一期工事は完了、熊倉までの二期工事着手も手続き中とある。

(平成十一年七月号)奥地開発のアクセス道路で、田代原く熊倉を結ぶ道路整備の一期事業は過疎・山村地域基幹道路整備事業で県が過疎代行事業として平成六年着工、同十年まで五ヶ年を要した。起点の田代原集落から工事延長一、二九〇(幅員八)メートルが完成し、六月三十日付けで県から六合村へ引き渡しが行われ、供用が開始される。

(平成十一年十月号)村道暮坂引沼線が開通。記事は「かつて山越えの山道であった暮坂道は生活にとって重要な街道でありました。車社会の到来により自動車道路は大きく生活に位置付けられるようになり、道路が経済を呼び、道路が文化を造り出し、経済文化の広範囲化と文化圏の共有が出来るようになりました。」と、この道路開削の意義を記して

いる。工事は、農用地整備公団営畜産基地建設事業で天龍橋、揚場橋の橋梁、改良・舗装の施工をはじめ、中山間地域総合整備事業、ふるさと農道緊急整備事業等により、完工まで二十数年の当初の予定が、多くの補助をいただき七年の短期間で完成し、入山地内と中之条を結ぶ幹線道路になった。

(平成二十一年四月号) ROSE QUEENにより、花敷温泉へのバスの運転開始とある。

参考／広報対象外の交通面の出来事

(平成二十二年十一月九日) 国道二九二号、長野原町境、丸谷峠付近道路改良工事竣工

(平成二十四年度) 町道太子・湯久保線、太子不動尊付近の道路改良工事竣工

産業・経済

農業

一 六合の花の始まり

豊かな自然の中で生涯現役と頑張る

「花づくり」「という名のむらづくり

地域の沿革と概要

六合村は、群馬県の北西部に位置し長野県と新潟県の県境に接する山間農業地域である。標高は六〇〇〜二、三〇〇メートルであり、年平均気温が一二度の山間高冷の積雪地帯で、特に冬の寒気は強く、山岳部では積雪三メートルに達する。

村の総面積の八八パーセントが山林で占められており、平坦部はわずかにしか存在せず、集落もこれらの地域に点在している。

狭小急峻な農地が多く、農家戸数二六〇戸、耕地面積七三ヘクタール、一戸当たりの耕地面積は〇・二八ヘクタールと営農規模は零細である。

かつては養蚕やこんにやく栽培が盛んであったが、現在は衰退してし

まった。六合村の特産品で古くから栽培されている紅花インゲン（地域では「花豆」と呼ぶ）と長芋は一部で栽培されているが、地域全体で取り組める新しい品目を探そうと、キャベツ、ジャガイモ、野沢菜など色々な物に取り組んだが、傾斜があり、狭小な畑であることや農業者の高齢化により定着しなかった。

むらづくりの概要

一 むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機背景

ア はじまり〜 山野草で村おこし

六合村は、かつてこんにやく栽培や養蚕業が盛んであったが、現在は衰退している。また、村の経済を支えていた唯一の産業であった鉄鉱山も閉山したことから、過疎化に拍車がかかり、一層の高齢化が進んだ。昭和六十年代のバブル景気時代に、ゴルフ場、スキー場といったリゾート開発計画をしていた民間企業から紹介された東京在住のフラワーデザイナーの中山氏が六合村の野山に咲く山野草に着目した。最初は、山に自生する山野草を採って出荷するだけであったが、次々と採れるほど自生はしていない。そこで世界の花卉（かき）産業の中心地であるオランダの気候と六合村の気候が似ていることを活かした山野草の栽培をアドバイスされ、既に産地化されているバラやキクのような品目でなく、野山に自生する「マツムシソウ」からスタートすることにした。都会から自然がなくなりつつある中、時代は「癒し」を求め始めていて、その風に乗ったのが「六合の花」である。

イ 共感と実行、花づくりへ

中山氏は、日常生活に「花」のある生活を提言しているフラワーデザイナーであった。当初は「よそ者」である中山氏に不信感を抱く人が多かったが、当時JA営農課長が、中山氏の指導を受けて花づくりを始め、JA営農課長が、花づくりを始めると中山氏への不信感は徐々に無くなり、花づくりへ興味を持つ者が増えた。そこで六合村活性化事業の一環として中山氏へ花卉栽培の指導を依頼し、栽培品目や出荷の方法、時期など各農家を廻り、指導を行った。

花卉栽培を本格的に始めた昭和六十三年は数名だった栽培者が平成四年には三三名となり、同年三月「六合村花卉生産者連絡協議会」が設立された。その後、平成六年三月に吾妻地域の農協の広域合併により現組織となった。協議会は、販売目標金額を一億円とし、出荷時期が限られる山野草以外の花も栽培を始めた。協議会設立当初から、中山氏と農家は情報収集を行っていたが、平成七年と九年にオランダへの視察を行うなどして花づくりに対して熱心に勉強を重ね、さらに第三回目のオランダへの研修を実施した。また、ハウス栽培者も大勢になったのでハウス部会を作り、毎月一回、定例の研修日を設けて研修を行っている。

ウ 生涯現役

村は「花づくり」をきっかけにどんどん元気を出した。花づくりに取り組む生産者の多くは女性や高齢者である。花づくりは軽作業で比較的手間がかからないので女性や高齢者でも生涯現役で働くことができ、収入の確保、遊休農地の解消にも役立つ。また、高齢者の経済的な自立が、家庭内における自立にもつながり、社会的に自分の居場所がで

きるという意味でも非常に役立つ。

エ 六合村農山漁村高齢者ビジョンの策定

村は、平成十一年「花いっぱい夢いっぱい健康なむらづくり」をスローガンに、農村高齢者がそれぞれの経験や知識を活かし、社会的役割を持ち続けながら活躍し、住み続けられるよう「六合村農山漁村高齢者ビジョン」を策定した。豊かで活力のある農村社会づくりに向け積極的に取り組み、花卉栽培を主要産業と位置づけ支援している。また、平成五年には村の歴史や文化などを取りまとめた「心のふるさと六合村」を作成し、これに基づき「六合村生涯学習推進協議会」を設置し、花いっぱいのむらづくりなど生涯学習の推進を行っている。

オ 花づくりからむらづくり

高齢者が花をつくることで、若い世代から期待され、生き生きとしている。花づくりで体を動かすことにより健康を実感している農家も多い。少くらしい腰が痛くても、花づくりをしているときは忘れてしまうという。珍しい花をつくり、買う人に喜んでもらいたいと思う気持ちで、この村の高齢者たちは常に花づくりを頑張っている。

平成十二年に、販売金額一億円に達したが、それに満足することなく「次は販売金額二億円」と新たな目標を立てた。「花づくりは生きがい」と健康な日々を送っている生産者が多く、近年では二〇〜三〇代の後継者も徐々に現れ始めて来た。これは、花づくりが若い人にとって魅力的なものとして認められたことの現れでもある。村での花卉栽培が盛んになった現在では「花」が共通話題になり、顔を合わせると天気の話をするよ

うに花づくりが話題になる。

支部会員が約九〇名で夫婦を合わせると一三〇名、七八戸が花卉栽培に取組んでいる。これは村の世帯の約一三パーセントにあたり、村内各所に住む生産者は、近隣住民に良い影響を与えていると考えられる。村には新しいものを受け入れ易い風土と気質があり「隣の家が花づくりをやっているからうちもやってみんべえ」と花卉栽培に入りやすい環境が整っているのも良い一因となっている。「生産者Ⅱ地域住民」という形は、JAの一組織を飛び越えて、村全体の組織といえる。

村で活動する赤岩ふれあいの里委員会（重要伝統的建造物群保存地区「赤岩集落」保存活動の主体組織）、ねどふみの里保存会、花楽（からく）の里、よつてがねえ館の指導員など、組織のメンバーには必ず花卉生産者が含まれ「花づくり」という名のむらづくりは、村の主要産業となるとともに村全体に活気を与えている。

二 むらづくりの推進体制

ア JAあがつま花卉生産部会六合支部

平成四年九月に行われた吾妻地域の農協合併に伴い、平成六年にJAあがつま花卉生産部会が設立され、六合村花卉生産者連絡協議会（平成四年三月設立）は、同部会の一支部となった。当該支部は、部長、副部長、監事、指導技師の七名で構成され、役員その他に各地区に連絡員を置いている。支部会員は現在九三名（農家戸数七八戸）で、そのうち女性が一五パーセント、六〇歳以上の生産者が四五パーセントを占めている。

イ 地域、行政との関係

① 学校指導員への協力

六合村教育委員会では、開かれた学校づくり、魅力ある学校づくりの推進と子どもたちへの教育支援の一環で「学校指導員」を設置している。当該支部会員も数名が指導者として活動し、自分たちの知識や技術を教材として、児童たちに花壇づくりを教えている。

② 地域・都市住民交流施設「花楽（からく）の里」

「花楽の里」は、平成十二年にオープンした村の花弁振興施設で、村で生産される山野草等を活用し、地域住民や都市住民にリフレッシュ・休養を提供するための交流施設として、フラワーアレンジメント体験や教室を開催している。

花卉生産者は、フラワーアレンジメント体験や教室に使用する花を無償で提供するほか、教室開催の手伝いや団体客への花卉栽培の取組等の説明にも協力をしている。また、施設の敷地内への宿根草植栽や除草作業等の支援も自主的に行っている。

③ 関係機関との連携

平成八年から、県農業改良普及センター長野出張所に花卉担当普及員が配置され、実態調査を行った。調査の結果、マツムシソウをはじめとした山野草など年間三〇〇種類の花を二万ケース出荷していることが判明したため、今後の振興方針について、生産者、JA、役場など関係機関で話し合い、栽培指針等の整備が行われた。また、販売額の目標

一億円を目前にして足踏み状態となった時期は、生産者、県普及センター、市町村、JAが集まって検討会を行い、対策を練った結果、平成十二年に当初目標を大きく上回る一億二、〇〇〇万円の販売を達成した。当初の目標を大きく上回ったことで、次は二億円に目標を定め、平成十三年四月、五カ年計画「六合村の花を二億円にするステップアップ計画」を策定し、六合村の花弁生産について生産者と連携しながら、産地の維持発展のため一層の花弁振興を図っている。

村は施設導入のための補助事業を整備し、栽培暦・出荷規格を冊子化して栽培農家に配布するなど、関係機関との調整役としての役割を果たしている。

むらづくりの特色と優秀性

一 農業生産面における特徴

(1) 農業生産・流通面の取組

平成元年ころから高齢者が栽培しやすい品種、他産地と競合しないなどの考えのもとに、切り花栽培を本格的に開始した。最初は、投資を極力抑えるため栽培しやすいマツムシソウなどの山野草を路地栽培からスタートした。

山野草栽培は、管理にも手間がかからず、野菜などに比べ軽量なことから取組む人が増加し、現在では三〇〇品種を栽培し、通年出荷を行っている。

花づくりが軌道に乗った現在でも、花卉の栽培に当って以下四つの鉄則を実践している。

◎「球根には手を出さない」 Ⅱ収益が上がらないため。

◎「きれいな花には手を出さない」 Ⅱバラ、菊などは既に産地化されているため栽培しない。

◎「お金をかけない花づくり」 Ⅱ花づくりの中心が高齢者であるため過剰投資は厳禁。

◎「少量多品目」 Ⅱいろいろな花を楽しみながら出荷時期を分散する栽培方法。

六合村の花弁栽培の特徴は、出荷品目が多く、出荷市場も六〇市場以上あり、高齢者が庭先で作った花を一ケースからでも出荷できる。特にJAのバックアップで多くの市場への出荷が可能であり、また、JAは自動車が運転できない高齢の組合員のために、庭先まで集荷に行くなどの支援も行っている。

花卉生産部会では、値崩れを防止するため、生産者ごとに個別の主力品目を割り当て栽培指導を徹底している。市場から長さの指定や基準があるものの、市場出荷の基本は個選共販で出荷市場も出荷者自身が決定し、出荷者自身の自主性、責任において出荷されるため、直接生産者個々に出荷注文が行われることも多く、生産者のやる気と責任感を引き出している。様々な種類と品質の花が出荷されるのも六合村の魅力であり、市場担当者からも「六合村の箱は玉手箱だ」「開けてみるまで何が入っているか分からない」などと評価を得ている。

(2) 生産力の向上、生産の組織化、流通基盤の整備

ア 組織化と生産力の向上

栽培農家の増加とともに協議会を結成し、JA合併に伴い、農協の一

部組織となった後も、新規品目の導入や出荷期の拡大のための技術開発に積極的に取り組んでいる。

初心者が多いことから、新規加入者のために栽培マニュアルの作成や部会員を講師とした講習会の開催などで全体のレベルアップを図っている。

また、花卉專業生産者を中心に部会内組織である「ハウス部会」を設立し、専門知識習得や技術習得を目指して活動し、通年出荷体制を確立しようとしている。

施設化による生産拡大を図るため、補助事業やJAリース事業などを積極的に利用し、パイプハウスや早期出荷のための予冷庫などを導入した結果、念願の販売金額一億円を突破するに至った。

イ 新品目の導入

協議会設立当初から、山野草のみでなく、海外の園芸品種等新しい品種への取組も積極的に行ってきた。高齢者でも管理しやすい花を選んだり、新しい花を求めオランダへ行くなどして、栽培品目は三〇〇種を超える。現在も新しい品種を求めて海外先進地視察を計画するなど、生産向上にかかる努力は惜しんでいない。

最近では、市場やフラワーデザインプロなどと連携し、新商品となる品目を見つげるための情報収集などに重点をおいて取り組んでいる。

ウ 担い手確保、育成と女性・高齢者の参画

高齢化が進む現在、高齢者や女性が重要な地域の担い手であり、生きがいを持って取組が行われている。六合村は二〇代・三〇代の若い世代が担い手になることを期待せず、退職帰農者や子育てが終わった女性を

担い手としてきた。

新規栽培者には、栽培開始時に部会を通じた既存の生産者からの余剰苗の無償提供や指導技師による重点指導など、定着のための支援が行われている。

販売金額が一千万円を超えるような專業農家が増えれば、二〇〜三〇代の若い後継者も増加していくと思われるので、今後は中核農家に対し重点的に支援を行う考えである。

高齢者が生きがいを持って花卉生産を行い、七〇歳を超えて初めてパソコンを習い、毎日インターネットで出荷した花の値段を確認し、出荷調整を行う男性や傾斜のきつい畑で農機を背負って上り下りする八〇歳の女性。また、親子三代に渡る生産者は、それぞれが各自の責任のもと、圃場も売り上げも管理しているが、相互に支え合いながら目標と生きがいをもって花づくりに取り組んでいる。

六合村で初の女性免許取得者である大正十二年生まれの女性も現役の生産者で車を運転して出荷に向かう。この女性の夫は、自分が免許を取ると妻に仕事のきつい部分をさせることになるから自分がきつい仕事をすればいいと、最後まで免許を取らなかった。何十年前前から女性の社会進出の手本になるような農業経営を実践している生産者がいるのである。さらに、田舎暮らしを夢見て村を訪れる人には、花づくりに元気がなった村が魅力的に映るのか、移住や新規就農を促す。花づくりに魅せられ移住してきたフラワーデザインプロもいる。

二 生活・環境整備面における特徴

学校指導員として地域住民が小学生と交流を深めながらいろいろな指導を行っている（年間約十回）。指導員は皆、ボランティアで半数以上が花卉生産者であり、山野草を含む花の苗を無償提供して学校の花壇の手入れなども行っている。

また、小学生に花の知識や花壇づくりを指導していることから、男女を問わず花が好きなお子が多いようである。

部会員は、村内小中学校や道の駅などの敷地内へ花卉の植栽をボランティアで行い、地域の景観形成を住民と連携して行うなど、地域の美化活動に積極的に取り組んでいる。

(1) コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与

ア 全国都市緑化群馬フェアの貢献

平成二十年に開催された全国都市緑化フェアのサテライト会場へ立候補した結果、「花楽の里」が選定され、会場づくりについてワークショップを開催、その際に花卉生産者が中心となって立ち上げた「花楽の里おてんま会」のボランティア組織で花苗植栽等を実施、その後の維持管理についても「花楽の里おてんま会」と住民共働で実施する予定である。今後は、六合の花の理解を深めてもらうことを目的とした山野草企画展やボランティア解説員による山野草現地説明会を行うなどの都市農村交流を検討している。

イ 六合の赤岩から国の赤岩へ、重要伝統的建造物群保存地区・

赤岩集落

花卉栽培で地域に活力がついた結果、地域全体で村を守っていくという活動へも発展していった。村の農業の中心地区であり比較的良好な農地が広がっている赤岩地域では、明治中期を中心とする出梁・出桁形式の養蚕農家群等が残されていたが、長年の風雨にさらされて傷みが発生していた。集落ではこの遺産を保存しようと、赤岩ふれあいの里委員会を中心として自主的に保存活動を始めた。

保存活動を行っている赤岩集落の六二戸のうち花卉生産者は七戸で、花卉栽培による収入が地域の農業収入の大半を占める。中山間地域等直接支払制度等の補助事業も活用しながら、地域内にある神社、お堂等の歴史的建物の他、水車小屋等の施設を修理し、積極的な保存を集落で行っている。

それらの村の人々の活動は高く評価され、赤岩本道を中心として、周辺の農地、集落の周りにある墓地や御堂・神社、山林が含まれる六三ヘクタールもの土地が、平成十八年に重要伝統的建造物群保存地区として国から指定された。同地区については、建物や工作物の新築や改築・修繕などに許可が必要になるなど厳しい規制が設けられるが、地区住民の熱意と努力により守られている。現在は、ボランティアによるガイド活動も始まり、「六合の花」など地域性と併せて解説を行っている。

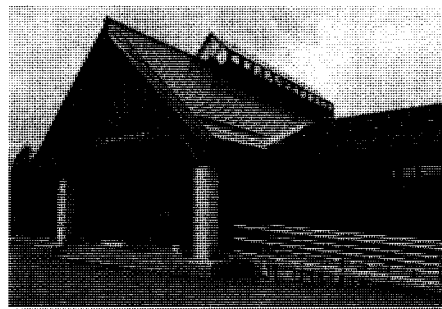
また、この保存活動によって守られている養蚕農家群は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」としてユネスコ世界遺産暫定一覧表へ追加記載提案されており、平成十九年六月にユネスコ世界委員会、世界遺産暫定一覧表に追加された。

ウ ねどふみの里保存会

六合村根広地区では、昔からわらの代用としてスゲを使い、むしろや草履などを作ってきた。刈り取ったスゲを湯の中で踏み込んで柔らかくする作業のことを「ねどふみ」といい、この保存会は技術伝承をしながら一般向けの体験指導も行っている。保存会員の中には花卉生産者があり、ねどふみ技術伝承のほか山採りしたぶどうツルを使ったかご作り体験を指導している。

エ よつてがねえ館

この施設では、かつて冬期収入源の一部として作られてきた「しゃもじ」「こね鉢」「めんば」の木工品と古くから村人の暮らしの中で使われてきた「こんこんぞうり」の手作り体験ができ、この施設の講師にも花卉生産者が含まれている。



ふるさと活性化センター（世立）

(2) 地域への定住促進、女性の社会参画の促進

ア 地域の定住促進

テレビ番組で六合村の花卉生産の取組が紹介されると、全国から注目を集め、全国各地から個人、団体の花卉生産部会への視察が増えた。その結果、平成十六年から始めた定住促進のための分譲地「湯久保（ゆくぼ）みどりタウン」では東京や千葉県からの定住者を迎えることができた。

神奈川県から村に移住した夫妻が「定年世代の勝ち組マネー・国内移住で手に入れた充実の暮らし」と、ある雑誌で紹介された。趣味と実益

を兼ねた花づくりに熱中、目を輝かせ夫婦仲良く充実した毎日を送っている姿は団塊の世代に活力と勇気を与えている。

また、他の雑誌でも「生きがいからの花づくりから始まった山野草の産地」や「山野草で生まれた山の上の花産地」として六合村が紹介された。こういった雑誌やテレビ番組で六合村に興味を持ち、花づくりをしたいと移住してくるＵターン者には、積極的に畑仕事の指導をしている。

イ 女性の社会参画

前述したとおり、花卉生産者の二五パーセントが女性で、夫が部会員でも生産は妻が中心という農家が多い。六合村教育委員会で設置している「学校指導員」にも女性が含まれており、現在は小中学校の卒業式に卒業生が胸につけるコサージュを六合村で栽培している花を使い、女性部員や花菜の里関係者が作成してプレゼントしている。村の文化祭には女性部で、六合村の花を使ったアレンジ等の展示発表を行い、文化活動にも積極的に参加している。

女性の花卉生産者の中には、県認定の農村生活アドバイザーとして県内各地の農村女性を指導し、活躍している者もいる。

また、平成八年に発足した花卉生産者を含む女性や高齢者が主体となった「世立八滝（よだてはつたき）の会」では、入山（いりやま）の名を用いた「入山かりんとう」や「入山きゅうり」などの特産物作りや民話の伝承など、地域ぐるみの活動が行われている。

(3) 元気な高齢者

過疎化や高齢化が進む村に住む高齢者が元気ということは、村そのも

のが元氣ということである。

高齢者が花卉栽培を続けられる要因として挙げられることは、仲間同士の支え合いと良い意味でのライバル意識である。苗の融通や技術交換が生産者同士で行われ、県普及センターが主催する講習会でも生産者の代表が講師となる。このような自主性が自立につながり、自信につながると思われる。また、鳥獣被害の点からいっても、花は野菜などの農作物と違いエサとなりにくく、被害が少ない。被害が少ないこともやる気を引き出す一因となっている。鳥獣害防除は、皆で協力し合って行っている。

特に、年金プラス花の収入で孫に小遣いをやり、また、家の修理等にも協力し、若い者からも喜ばれている。また、こんなおじいちゃんもいる。あと一〇年経つと孫が結婚するようになる。その時、家を建ててやると張り切っているおじいちゃんもいる。このように、夢と希望を持って充実した生活を送っている。

年金プラス花の収入で家庭には潤いと活力が生まれ「生涯現役」と頑張っている。



おてんま作業
(花楽の里)

オランダセダム
(花楽の里)



エキナセアと黒岩勇花卉部会長



アルケミラ

平成 21 年度 JA あがつま花き生産部会六合支部実績表

平成 22 年 3 月 1 日 資料作成

販売高

(単位：円)

切り花	3月	4月	5月	6月	7月	8月
H21 年度	3,916,173	5,818,300	13,275,032	9,544,116	10,083,552	10,312,217
H20 年度	4,333,322	6,410,889	15,282,868	9,457,611	13,903,634	11,155,554
対比 (%)	90,4%	90,8%	86,9%	100,9%	72,5%	92,4%
9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
16,608,241	12,287,647	2,543,225	2,951,820	2,331,970	2,964,490	92,636,783
21,233,614	13,268,983	2,616,241	2,303,092	2,540,542	3,244,810	105,751,160
78,2%	92,6%	97,2%	128,2%	91,8%	91,4%	87,6%
切り枝	3月	4月	5月	6月	7月	8月
H21 年度	343,188	462,120	278,688	182,930	209,640	183,730
H20 年度	369,085	306,900	272,511	321,355	198,100	221,470
対比 (%)	93,0%	150,6%	102,3%	56,9%	105,8%	83,0%
9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
902,395	2,400,974	1,813,591	2,562,485	191,777	196,048	9,727,566
1,010,675	2,342,641	1,923,735	1,583,375	103,882	128,080	8,781,809
89,3%	102,5%	94,3%	161,8%	184,6%	153,1%	110,8%

出荷数

(単位：梱包)

切り花	3月	4月	5月	6月	7月	8月
H21年度	768	1,026	3,003	2,812	3,791	4,594
H20年度	1,067	1,106	2,889	2,865	4,763	5,466
対比 (%)	72,0%	92,8%	103,9%	98,2%	79,6%	84,0%

9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
6,864	5,574	780	500	404	571	30,687
7,802	6,001	913	368	500	759	34,499
88,0%	92,9%	85,4%	135,9%	80,8%	75,2%	89,0%

切り枝	3月	4月	5月	6月	7月	8月
H21年度	164	258	143	98	69	73
H20年度	159	127	104	136	48	66
対比 (%)	103,1%	203,1%	137,5%	72,1%	143,8%	110,6%

9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
343	1,154	629	729	57	65	3,782
276	973	689	582	37	42	3,239
124,3%	118,6%	91,3%	125,3%	154,1%	154,8%	116,8%

注) H21年度=平成21年3月~平成22年2月

H20年度=平成20年3月~平成21年2月

切花・切枝合計

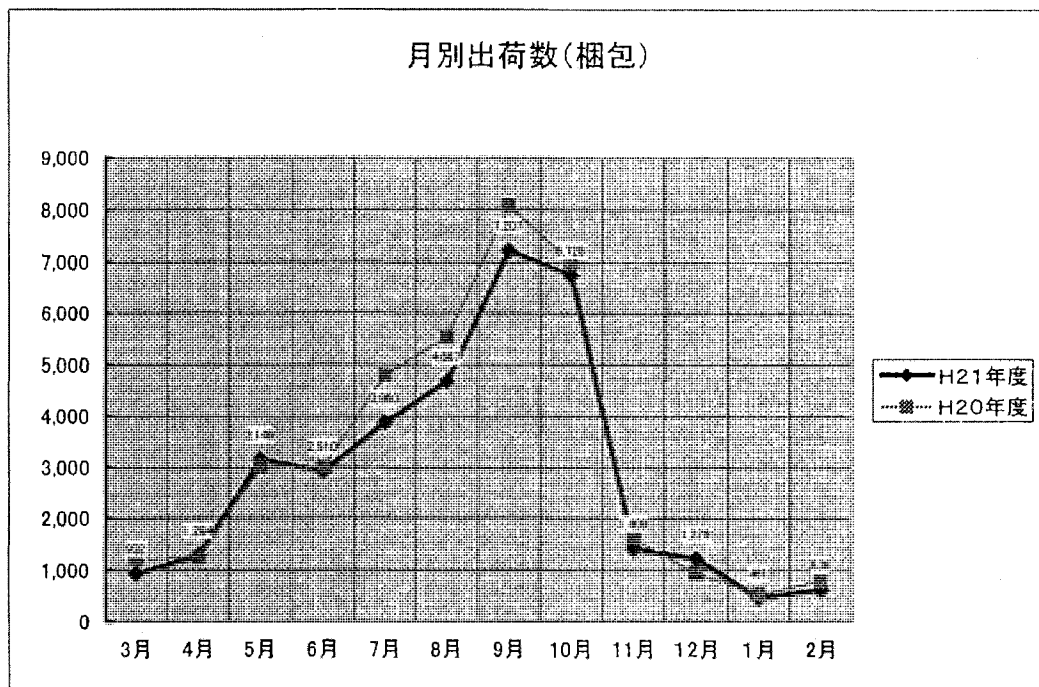
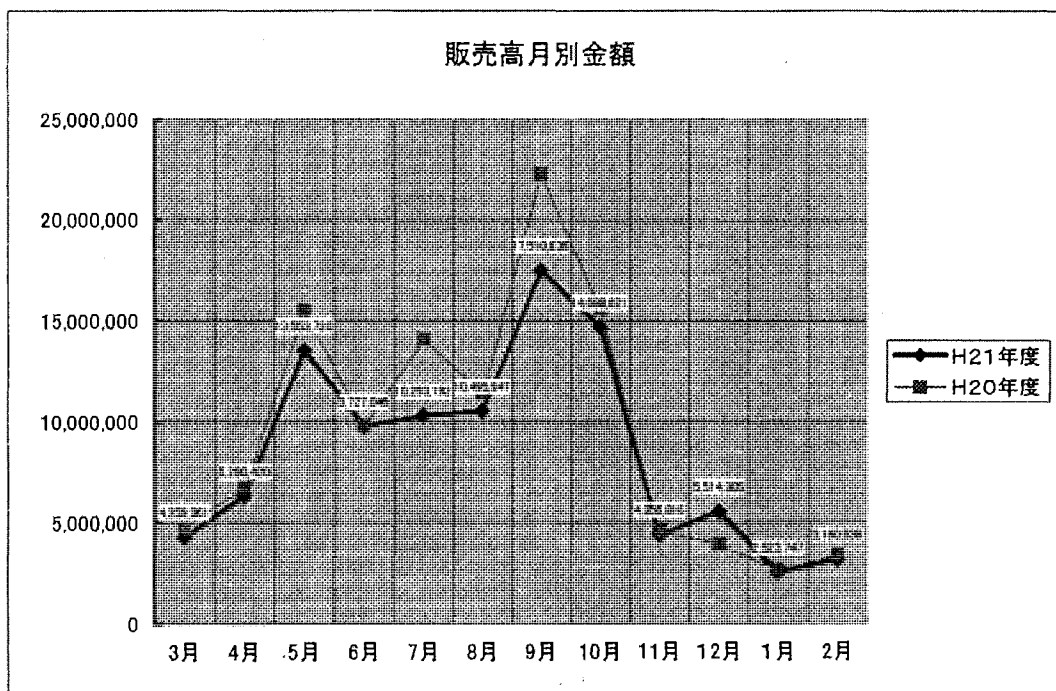
(単位：円)

販売高合計	3月	4月	5月	6月	7月	8月
H21年度	4,259,361	6,280,420	13,553,720	9,727,046	10,293,192	10,495,947
H20年度	4,702,407	6,717,789	15,555,379	9,778,966	14,101,734	11,377,024
対比 (%)	90,6%	93,5%	87,1%	99,5%	73,0%	92,3%

9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
17,510,636	14,688,621	4,356,816	5,514,305	2,523,747	3,160,538	102,364,349
22,244,289	15,611,624	4,539,976	3,886,467	2,644,424	3,372,890	114,532,969
78,7%	94,1%	96,0%	141,9%	95,4%	93,7%	89,4%

出荷数合計	3月	4月	5月	6月	7月	8月
H21年度	932	1,284	3,146	2,910	3,860	4,667
H20年度	1,226	1,233	2,993	3,001	4,811	5,532
対比 (%)	76,0%	104,1%	105,1%	97,0%	80,2%	84,4%

9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
7,207	6,728	1,409	1,229	461	636	34,469
8,078	6,974	1,602	950	537	801	37,738
89,2%	96,5%	88,0%	129,4%	85,8%	79,4%	91,3%

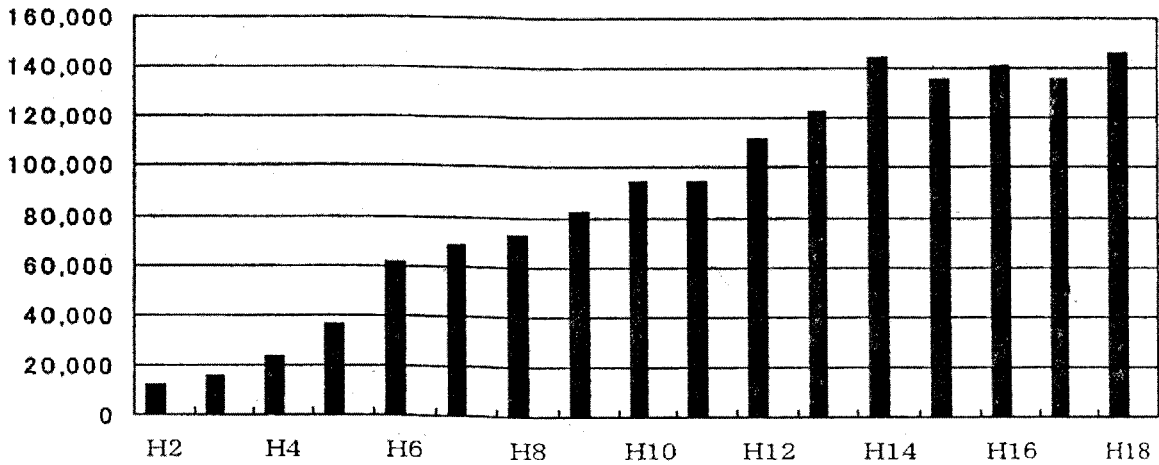


平成 21 年度主な出荷品目

(切り花)

品 名	出荷数	単 価	品 名	出荷数	単 価
センニチコウ	478	1,727	クレマチス	24	2,442
ハボタン	11	1,658	グリーンゴールド	3	1,020
レイシ	13	1,677	シャクヤク	3	2,387
ユリ	1	2,000	ソリダコ	64	2,134
アスター	119	2,439	ブプレウラム	134	2,337
クジャクソウ	4	2,175	ベニバナ	4	2,250
ニゲラ	44	2,626	オミナエシ	12	1,742
ノコギリソウ	1	1,500	オトコエシ	1	2,200
ヒマワリ	6	2,933	アストランチア	1,017	3,697
ワレモッコウ	1	990	アマランサス	274	1,798
スピードリオン	184	3,028	アルケミラ	3,426	3,881
トラノオ	273	2,518	カボチャ (クニマル)	4	1,400
フジバカマ	1,742	2,571	クリスマスローズ	694	5,637
ルドベキア	205	2,222	コスモス	7	3,006
レウカンサ	1	4,250	セダム	9,696	2,417
フロックス	619	2,561	セロシアシャロン	83	1,593
アスチルベ	955	4,689	トリカブト	354	3,394
モナルダ	23	2,584	ヒペリカム	799	2,459
ハンゲツショウ	10	3,350	ヒメヒマワリ	808	2,348
カシアバアジサイ	28	1,943	ヒオウギミ	335	4,027
トロリウス	56	3,884	ペロニカ	5	3,724
ムギ	58	1,398	マツムシソウ	34	2,529
シモツケ	26	1,311	ミズヒキソウ	162	2,256
クガイソウ	14	2,061	ルリダマアザミ	89	2,219
リアトリス	6	1,517	センニチコウバイカ	270	2,029
カライトソウ	29	1,193	センニチコウパープル	154	1,590
アゲラタム	57	2,578	センニチコウレッド	1	3,000
アイリッシュアイズ	1	100	センニチコウピンク	47	1,883
ヘレニューム	226	1,758	センニチコウホワイト	108	1,887
ケイトウ	27	2,140	センニチコウライラック	3	1,533
ホトトギス	415	3,521	センニチコウストロベリー	5	2,580
カンパニュラ	3	1,610	ピンピネラ	41	2,905
ベンケイソウ	1	800	バイカウツギ	4	1,425
アジサイ	137	2,737	エリンジュウム	2	1,200
キョウカノコ	8	2,106	ダスティーミラー	688	5,204
ユーホルビア	1	150	クリスマスローズ・F	228	3,921
トウガラシ	4	2,425	アゲラタムブルー	324	2,308
ラムズイヤー	107	2,734	アゲラタムホワイト	11	2,273
ベッチーズブルー	70	3,526	混合	1,035	3,339
キク	406	3,078	その他	2,312	3,113
ホオズキ	215	2,115			
フサスグリ	17	2,855	小 計	23,265	
マリーゴールド	1	1,750			
キンギョソウ	20	1,087			
キキョウ	8	3,088			
トクサ	1	2,400			
オダマ	24	4,903			
小 計	6,656		合 計	29,921	2,970

第2表 六合村の花き販売金額の推移



六合村花卉生産者連絡協議会役員

年 度 会 長 副会長 指導員

平成四年三月 湯本喜太郎 黒岩 勇 黒岩 正善

山田隆太郎 山本 久義

平成四年五月 湯本喜太郎 黒岩 勇 黒岩 正善

山田隆太郎 山本 久義

JAあがつま六合支店花卉生産部会役員

年 度 部 長 副部長 指導員

平成六年七月 湯本喜太郎 黒岩 勇 黒岩 正膳

平成八年九月 山田隆太郎 山本 久義

平成十年 黒岩 勇 安原 繁安 黒岩 正善

平成十一年 山田隆太郎 山本 久義

平成十二年 黒岩 勇 安原 繁安 黒岩 正善

平成十三年 山本 文雄 山本 久義

平成十四年 黒岩 勇 富沢 一二 黒岩 正善

平成十五年 篠原 敬吾 山本 久義

平成十六年 黒岩 勇 富沢 一二 黒岩 正善

平成十七年 篠原 敬吾 山本 久義

平成十八年 黒岩 勇 富沢 一二 黒岩 正善

平成十九年 篠原 敬吾 山本 久義

平成二十年 黒岩 勇 富沢 一二 黒岩 正善

平成二十一年 篠原 敬吾 山本 久義

平成二十二年 黒岩 勇 山田 作次 黒岩 正善

平成二十三年 山本 久義 山本 久義

二 六合の特産物

メンパ、シャモジ、ヒシヤク、木鉢

六合村は上信国境の奥深い溪谷の村で、村土の九〇パーセントが山林原野である。標高は六〇〇m〜二、〇〇〇m、地形急峻のきわめて自然条件の厳しい山村である。

文政三年（一八二〇年）、江戸時代後期の越後の文人鈴木牧之が秋山郷を訪れた際、六合村に立ち寄って、感想や風物について、「秋山記行」の中に記しているが、そこには「此の入山はこと更ら深山の奥なれば耕作も出来ず年中の業は細工物なり」とある。この「細工物」というのは、メンパ、シャモジ、（メシシャモジ、シルシャモジ）、ヒシヤク、木鉢が主なものであった。

農業だけでは暮らしが立たず、豊富な森林資源に活路を見出すしかなく、いろいろな木を活用した木工製品「細工物」が江戸時代から昭和十年ごろまで大量に生産された。「入山のメンパ、シャモジ」といわれ、その名は関東圏域を越えたところまで広まっていた。

昭和三十二年十月から七年間、入山引沼の山本茂平氏（昭和四十九年六月没、八三歳）が、農林業の傍ら、群馬県職員で北橋村の今井善一郎氏へ書き送った書簡文は、昔の子供の遊び、民俗行事、言語、習俗等こまかく知らせている。その数は九〇通に及ぶもので、貴重な内容である

ことから、六合村教育委員会は「入山たより」として、茂平氏の御子息山本俊久先生の文章整理のご協力を得て、書簡集を発行している。

それによると「細工物」の材料を求めて、岩管山、白砂山、四万川の上流の山々に、作業小屋を建てて七日〜一〇日間も泊まり込みで入り、山仕事に精を出している。

江戸時代には榧まきはの屋根板を作つて都会へ搬出した。まげ物の製作では、道中で一泊して、荷場へ出て、家から荷付けの者と出合った。遠くへ一泊して行くときは「ニジョウツキ」と言った。年寄りや子供は近い山で仕入れた。闊葉樹で作つた杓子は近い所で仕入れた。

杓子の原木が少なくなると、遠く利根郡、勢多郡、秩父の山、信州の伊那、雑魚山や戸隠山、遠州、福島県などと遠征したことが述べられている。山師の楽しみや、仕事の道具や泊まり込みの生活用具を入れた「箱入組品」の内容も詳述している。

春から十日夜まで農閑期に（山から）仕入れた材料で、年の暮まで作つた。夜なべ、朝なべ（三時頃から）仕事をして稼いでいる。

入山中学校は、昭和五十三年度から平成四年度まで一五年間、「入山研究」と呼んで全校挙げて郷土学習に取り組み、活動の内容と成果を発表会をおして地域社会へ報告している。

入山中学校は、「ふるさとの昔と今」と題し入山中学校郷土学習調査報告書としてまとめ、一〇年の節目で発行し、続く五年間の調査報告書をつづけることを余儀無くしたが惜しいことであった。

その第七号（昭和五十九年度）の調査活動において、ひとつの班が「入山のまげ物づくり」を主題に決めている。調査に取り組んだのは、

研究内容	班	氏名	六月	七月	八月	九月	十月
移り変わり(歴史)	一	竹淵和秀 関 恵美	計画設定	○文献で調べる	○文献で調べる ○聞きこみ ○整理	○整理 ○研究 ○清書 ○発表	○反省
種類 材料 道具 作り方	二	山本隆仁 山本安広	計画設定	○文献で調べる ○種類・材料の聞きこみ。まとめ	○文献で調べる ○聞きこみ ○整理	○整理・研究 ○清書 ○発表	○反省
生産量 単価 販売ルート	三	中村五月 山本直子	計画設定	○生産量、単価を調べる	○文献で調べる ○聞きこみ ○整理	○整理・研究 ○清書 ○発表	○反省
まげ物と生活	四	山本次男 山本秀幸	計画設定	○文献で調べる。 ○聞きこみ	○文献で調べる ○聞きこみ ○整理	○整理・研究 ○聞きこみ ○発表	○反省

○研究の計画、

調査のあらましは、
等を知る事ができると考えたからだという。

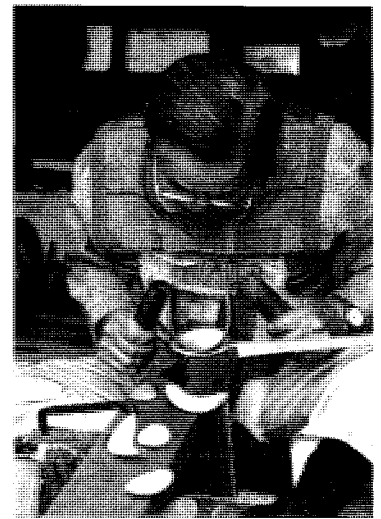
- 昔の人の知恵
- 昔の人の生活の様子
- 昔の人の生き抜く力強さ

「入山のまげ物づくりは、入山の男の生きる道であり、村中の男は、これを競争で作り、材料集めも必死であったという。そして家中の人もまげ物作りに協力して生きてきた。」との話を聞いて、今減じようとして、
いるこの産業を調査研究することによって、

一年生 山本秀幸

二年生 山本安広、関 恵美、山本直子

三年生 中村五月、山本隆仁、竹淵和秀、山本次男



しゃもじ作り



めんば作り

研究を進めたのは主に夏休み中であった。聞き取りは、班テーマだけではとてもできず、まげ物づくりと昔の生活の様子全体を聞くよりほかはなかったと反省点も見て来年に生かそうとしている。

研究方法

○研究とのかわり

入山のまげ物作りの研究は「入山地区工業調査」を大正八年と昭和九年ごろ行い、その結果を役所に残したり、県に報告したことがあるという老人の話から期待して役場に行つて調べようとしたが、大正九年の第一回国勢調査以前の記録はひとつもなかった。

○聞き取り

そこで、知っている人から聞き取るしか調べようがないので、地区全体にアンケートをとり、昔のことを知っている老人、研究者等をつかんだ。

まげ物づくりが入山で盛んだったのは、今八〇歳ぐらいの人達（明治末期生まれ）の親の代で今から一〇〇年位昔であったことがわかった。

どの老人も昔のことをはつきり覚えていてくれて、思いのほかすらすらと話してくれたが、話してくれる年代のことが、大正初期であったり、明治末期のことであったり、昔、親から聞いた話であったりして、内容に差のあることがわかった。

○聞きとりのポイント

そこで聞き取りのポイントを決め、どの人にも同じ質問をし、多くの人が同じ説明をしてくれた内容が真実に近い様子であろうと判断することにした。

①まげ物作りをしたことがあるか

②男とまげ物づくりの生活

③現金収入の道としてのまげ物づくり

④販売ルート

⑤生産の様子（もとじめ制度）

⑥どのくらいの人達がたずさわっていたか

⑦どのくらい手が掛かったか

⑧種類、材料、また材料あつめの様子

⑨技術輸出（削り職人としての発展）

⑩どのくらいの収入

⑪その頃の生活について

○より正確さをめざして

聞く人のいる地区に偏りがなくよう対象も入山全地区（田代原、世立、根広、引沼）の人に広く求めることにした。協力していただいて、話してくれた方は、

田代原 山本隆吉さん（七四）

根広 中村信太郎さん（七八）

世立 山本武男さん（七四）

引沼 山本リヤウさん（七五）

引沼 山本忠助さん（八三）

研究の内容

入山の木工の歴史

メンパ作りの元祖は、小倉部落であるという伝承がある。「なんでも

昔のこと、どこからか菅笠をかぶって来た男の人が泊まっていた教えてくれた。」と、いう。教えてもらったのは、『ヤナギボシ』という屋号を持つ、小倉の山口主計家であった。この家の製品には焼印がおしてあった。今残っている文献では、文政八年六月（一八二五年）の「上州吾妻郡入山村、指上申村柄様子書上帳」によると、一二六軒の家があり、八四六人の人々が生活していた。

一八二三	文政 六	○イギリス捕鯨船員、常陸（茨城）に上陸し乱暴する
一八二四	七	武家社会ゆきづまる
一八二五	八	外国船打払令
一八二七	十	シーボルト事件
一八二八	十一	○水戸斉昭、藩政改革をおこなう
一八三〇	天保 一	○薩摩藩、財政改革はじめ
一八三二	三	○天保の大ききん（一三七七）

男の人は四三五人、女の人が四〇九人、修験者という人が二人だった。馬は九四疋、牛はいない。さらに「農業之間二ハ男ハ下駄、柄杓稼仕候」とある。このことはすでに文政年間以前から入山地区に木工業があったことがわかる。その当時は全世帯が作っていたと聞いたので、一一〇軒ぐらい、又はそれ以上の家で木工業をしていたことが予想される。

天保十年（一八三九年）の「村差出明細帳」によると、男の人は農業の間に下駄や柄杓をつくっていたことがわかるが、「一女の人のカセ義何二而も無御座候」とある。このことから、この頃は女の人の稼ぎはなかつたことがわかる。育児や農業、または、一番山、二番山からの運

搬をやっていたと思われる。

一八三七	天保 八	○大塩平八郎の乱（大阪） ○モリソン号浦賀に入港、打払令により撃退する
一八三八	九	○二宮尊徳、小田原藩の財政改革
一八三九	十	○蚕社の獄 渡辺華山、高野長英ら、とらえられる
一八四一	十二	天保の改革

明治十年（一八七八年）の吾妻郡誌には、入山村の産物として、薇粉一五〇貫目、薇縄一〇駄、下駄下履一〇〇駄とある。一貫目は約三、七五キログラム、一駄は約八四キログラムであるから、下駄下履は八、四〇〇キログラム分、柄杓二五、二〇〇キログラム分、杓子四、二〇〇キログラム分という計算である。そして、民業男・農商工業及び猟師をするもの一七七戸（内商一五戸、工一七五戸、猟師二戸）とある。このことから当時工業をしていた人は一七五人以上はいた。中には猟師をやりにながら木工をしていた人、農業の傍ら冬仕事として作った人もいたらしい。

一八七七	明治十	○地祖を地価の二、五％に軽くする 西南戦争 西郷隆盛自刃（四八）
一八七八	十一	○大久保利通、暗殺される（四九）
一八七九	十二	○琉球、沖縄県となる ○教育令
一八八〇	十三	○国会期成同盟ができる

◎一駄のもともめ方

一駄Ⅱ一四〇斤、一斤Ⅱ一六〇もんめ

一もんめⅡ〇・〇〇・一貫目Ⅱ三・七五キログラム

原木は、野反周辺から越後にかけての広大な山々から自由に取ってきた。野反湖には大正十年頃には基地（小屋）がたくさん並んでいたという（引沼山本碧さんの話）、野反の奥、新潟県大倉山付近の岩の下や小屋がけをして基地があった。そこでは秋山郷で鳴く鶏の音が聞こえたという。良い材料を得ることは非常に困難で、一〇日間かけて、ひとしよに分集めるのがやっとだった。だからどのくらい苦労したか想像もつかないほど大変な仕事だったであろう。山を登るときにはわらじが履物であった。

入山メンパは、その昔「草津メンパ」、柄杓は「草津湯ビシヤク」として関東甲信越地方に知られていた。草津で知られていたということは、今から一〇〇年以上前のことであろう。その頃の入山は、今より耕地が少なかったろうから現金収入としては、メンパなどが大半を占めていたと思われる。

しかし、明治六年（一八七三年）の地租改正により、入山の山山は国有林となり、いままでのように自由に原木を伐採してやることができなくなり、原料不足が深刻な問題になってきた。そのころ日本の人口は増え続け、各家庭からの必要度はますますふえて、作っても作っても品不足であったという。

こうして原木が入手しづらくなると、問屋（元締）も手を引き、原木購入は生産者が自分でやらなければならなくなった。そうなるとメンパ

生産から離れる人が多くなり、雑木林での炭焼きを行うようになった。問屋（元締）も次第に炭焼きの方へ移っていった。

◎大正時代から昭和十六年頃までの入山の木工分布

根広	マルメモノ専門でヒシヤク
引沼	メンパとヒシヤク
世立	メンパ専門
和光原	シヤクシ
京塚	ヒシヤク
長平	シヤクシ

昭和十六、七年頃には、国家命令でほぼ強制的に炭焼きをやらされた。これは当時の日本では、木炭は重要なエネルギー源で、今の石油に相当するからであろう。この頃メンパは、作っても売れなかつた。それだけ人々の購買力が低下していたのだと思う。これは、戦争が終り、金属器のとぼしい時代だったからだと思う。

このブームがおわると入山の木工は、まずヒシヤクがなくなり、次に木鉢・メンパ・汁ジャクシと消えてゆき、昭和三十年頃には、生業としても生産はなくなった。

今では観光用に数人の人がつくっているが、昔ほどの生産量はない。

材料・種類・道具・作り方

一、材料

メンパ

○杉・松・もみ・サワラ・つが・とうひ・とど松・ひそ木
メンパの材料になる板

○柾目の板

○目づみである(何年もかけた木)

○節がないこと

○木のねばりがあること(曲げておくじけない)

シヤクシ

○ブナ・ミズブサ・ハンノ木

二、種類

①飯ジャクシ

六、七五寸・八寸・十寸・一、二尺・一、六尺・三尺・四尺

②汁ジャクシ

まめつこ・大まめ・小まめ・三、八(サンパチ)四寸

③その他・メンパ・ひしゃく・シヤクシ・シヤジ・たちうす・

木ばち・ワリゴなど

三、道具

メンパ

○ヨキ(斧)・ノコギリ・ナタ・ツチ・ワリナタ・ヤ(クサビ)・

スグセン・トギバサミ・マガリゼン・コガタナ・タチ・金槌・

底マワシ・ハサミ・キリ・メサシ・ヌイバサミ・尺棒・ケズ

リ台・カンナ・ケズリ台の足・胸アテ・デッコロ・キンマワ

シ台・曲げ板

汁ジャクシ

○エグリ台・のこぎり・砥石・胸当て・槌・キリマワシ台・

エグリゼン・ナタ・スグセン・大ナタ・マガリゼン
飯ジャクシ

○のこぎり・(玉切り・カタヒキ用)・ナタ(二丁)・マガリゼ

ンアラシコ(スグセン)・エコキゼン・スグセン・メンコロシ・

メエカキ・アナアキゼン・胸当て・切りまわし台・砥石三丁

四、作り方

メンパは、山から採ってきた厚板にヤを打ちこみ、皮をはぎながら小
さく作りやすいように切ります。センで削った板を湯の中に入れて、デッ
コロで曲げ、ハサミにはさみ乾かします。桜の木の皮など採っておいて
メンパに縫いつけます。一緒に底を作ります。底を入れてカンナで削つ
て仕上げ、その他も厚木を全部手で削って形をつくっていきます。

生産量・単価・販売ルート

一、生産量

定人夫(仕事がよくできる人)が夜の十二時頃まで起きて仕事をして
も、一日の仕事の量は、野ドリで削る板の量は約三〇〇枚、割るのは木
が良ければノコギリでコマに切って割るから二〇〇枚、デッコロで曲げ
てやるのは六〇組、カッパでとめるのが約六〇組、底を入れて仕上げる
のが約六〇組、これが、昔の人の一日のメンパの生産量でした。

タマジヤクシは二〜三日で一〇〇本、マンマジヤクシは八寸なら一日
二五〇本、六寸なら三〇〇本、という割合で作られていたそうです。

今では、一日メンパは二コ、シヤクシは一五本位しか作れないそうで
す。

生産量をつかむのは、大変難しいことです。それは生産されたものが、

役場や農協に集約されるのではなく、何人かいた「もとりめ」さんの所に集約されたからです。だから正式な記録が残りにくい訳です。また、正式に報告すると、税金の対象にもなるので、正しく数を知らせることを避けていたと考えられます。

また、昔は夜なべをして作ったので一日に作る量は、人によってちがいました。また腕のちがいもあつたでしょう。

二、単価

メンパは明治には一〇〇一五銭、大正では六銭、昭和初期では七銭位だつたそうです。

単価については、確かな資料がなくあまり良く分かりませんでした。

しかし、大正十年頃根広の中村さんが三ヶ月間まげ物を削りに行って、一〇〇円にしかならなかつたんですから、この頃もそんなに高い値段では、売らなかつたんだと思います。昔は一個いくらの計算は、しなかつたそうです。

※もとりめ制度について

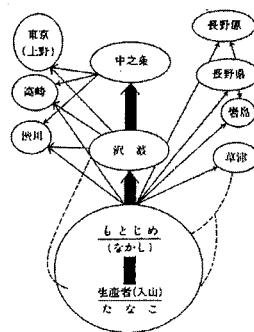
各部落に「もとりめ」さんという商いをする人がいて、その人に「タナコ」と呼ばれるまげ職人さんが五〜六人いて仕事をしていました。この「タナコ」の生活必需品は、全部「もとりめ」さんがだしてくれました。その品物を貰う代わりにまげ物を作って納める訳です。

その頃は、一日だけ作ればいくらになるという計算は、出来ないのどにかく量を「作れ」と言われました。だから「タナコ」の人たちは損をしているかとかくしているか分かりませんでした。精算は、盆・暮の勘定になり、それまでに「タナコ」の借りが多ければ、強制的に「も

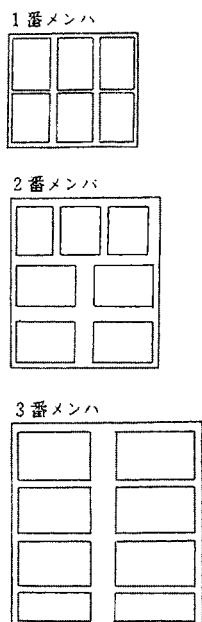
とりめ」さんが何月何日までにある一定の量を作れと命令したそうです。

販売ルート

まげ物の販売は「もとりめ」「ナカシ」と呼ばれる人が、村内の製品を集めて各地に出荷、販売をしていました。中には、直接入山に仕入れに来た人もいるそうです。この人は、庭先で一個いくらの勘定で取り引きし、次の日には馬に荷をつけて長野県や上野に行つたそうです。渋川、高崎、長野県、中之条、上野、東京などです。特に、中之条にはよく売りに行つたそうです。



メンパのまとめ方は、内と外を合わせて一組、これを一〇組まとめたものを一連という。まとめ方は、一〜五番までの種類がありました。例をあげれば、一番六〇組(六連)、二番七〇組(七連)、三番一一〇組(八連)、どの種類のメンパも四コウレというのは、一番ならその六〇組のものが四つあることを示します。



まげ物作りと生活

一、入山とまげ物作り

まげ物は、昔の入山地区の人々の収入源として、とても重要な工芸品だった。盛んだった頃には入山地区だけで、約二〇〇人の職人が競争で作っていた。ある老人は「まげ物作りは、男の生きがいというよりは、それができない人は一人前の腕がないという事だ」と言う。またある老人は「まげ物はイヤでも作らなければならなかった。」と言う。

昔はまげ物職人がたくさんいて、入山地区だけでもばく大な生産量だったが、昔の人の話を聞くと、作っても作っても売れたという。また、冬の間は一日中こもって、朝から晩まで、ねる間もおしんで作った。このことから、一人の職人が、たくさんを生産をしたことが分かるが、当時の人々の生活は、とても質素なものだった。

二、昔の人の食生活

昔の人達の暮らしはとても裕福なものではありませんでした。むしろ質素な貧しいものでした。

あわ・ひえを作り米を買ってその中にまぜて食べたりしました。今とちがってまずい物を食べて汗を流して働いたそうです。畑で麦やひえをとって、麦ばかりのご飯を食べたり、自分で大豆でみそを作ってみそ汁を作ったそうです。昔の人は、今の子供には、口に通らないだろうと言います。

三、昔の人の楽しみ

昔の人の楽しみを聞くと、なんとといっても、「ござさん」という目の

わるい旅芸人が、越後の方からやってくることだと言う。「ござさん」というのは、今で言う漫才師みたいなもので、三味線を持ち、中には、まいこさんもいて、五人ぐらいでやってきてどこかの家に行くと、部落の人達に連絡がまわり、その家にみんなが集まって「ござさん」が、いろいろな芸を見せて、見に来た人からお金をもらっていた。

ほかに、どどん焼き・お盆・正月などの村の年間行事をやる事や、年寄りからいろいろな話を聞かせてもらう事。

また、花敷にあつた露天風呂に、若い人達がたくさん入りに来て、いろんな話をしたりして、当時の人々のいこいの場でもあり、社交の場でもあつたと考えられる。

ほかに、むすめの家に遊びに行く事も楽しみの一つだったという。

四、まげ物作りと家族の協力

「わたしの父はまげ物作りをしていたので、子供の頃から、毎日、毎晩手伝わされた。父の作った物を夜、なわへつるべ、朝早くから干し、夕方はとり入れ作業である」(山本りやうさん)

そして、そのつるべ縄をなつたり、荷造りをする管むしろ編みをさせられたり、さらに、父が大倉の方まで材料を採りに行ったときは、野反まで馬を引いて、食料やお酒をもつて行き、帰りに材料を一つ背負い馬につけてくるのは、多くの家族の協力であった。また、荷物を積んで、沢渡まで買いに行くときは、朝、ちょうちんをつけ、出発するのを見送り、夕方は、また荷が多くあるので暮坂あたりまで迎えに行くのは、女、子供の仕事であつた。

何しろ、江戸時代よりもっと古くから、まげ物作りをしていたので、

もうこの近くには、ほとんど良い材料はなく、良い材料があれば良い製品ができ、うんとお金になるので、良い材料を集めることは必死の思いであった。

冬は雪が深く、材料はとりに行けない。だから、夏の間材料をとつて来て乾燥しておかなければならなかった。どうしても畑仕事は、年寄り・女・子供の仕事となった。

一つのまげ物を作るにも、家族全員の協力があつたものと思う。だれか一人さぼると、その分が他の家族の負担となるので、家中の人が一生懸命に協力し、仲よく力を合わせて、作っていたと考えられる。

というように「入山のまげ物作り」について、高齢者からの聞きとりを中心にとまめています。

入山中学校の全校生徒が、数班に分かれて、それぞれの班で毎年テーマを選んで進めてきた郷土学習の中で、ひとつの班が出した報告書であります。

長い歴史をもつ「まげ物」と言われる木工製品の調査は、入山の人たちの暮らしの様子や、地域の慣行、習俗などにも及んで、先人が生き抜いてきた知恵や歴史を知る上で有力な手掛かりを示すものとなっております。

昔のことを語れる人が、だんだんいなくなつてゆく今、「入山研究」と称するこの調査報告書は実に貴重な資料であります。見事なまでの学習成果であると言えます。

世立の関 千代衛氏(八一)は、平成に入つて「ふるさと伝統工芸士」として、群馬県から認定され、コネバチやタチュウスを作っている。先祖から受け継いだ技術を次の世代へ伝えようと心がけている。

明治になつて、国有林の管理がゆきとどいて、山に自由に入つて材料を伐り出せなくなるまでは、いくら作つても売れたという。近所に商店がある訳ではなし、現金も毎日必要な時代ではないので、木工品は、食うもの(雑穀・米)などの交換取引が頻繁に行なわれていた。世立だけを見ても、コネバチ作り七人、メンパ・ヒルシャモジ作り七人、シャモジ作り七人、炭を焼いたもの二三人で、ほとんどの人が木工職人であつた。

ミネバリ、ケヤキの大径木はタチュウスに使う。ケヤキは成長が遅く伐期が長いので植栽をする人はいなかった。ミネバリの太い材は希少材で、皆で分けてタチュウスにした。折れない丈夫な木だから細い棒状の枝は、カケヤの柄に適しているといわれる。

トチは、成長が早く、すぐ大木に太る。粘りのある材質で白色である。相撲のしこ名に使われるほど縁起の良い木とされている。使っているのは、コネバチ、コゾロツパチ(養蚕の飼育作業で蚕を拾つて入れる鉢)、ザッキ(正月神棚に供物をするときの器)などである。

世立の山本幹雄氏(七一)は、親から教えてもらった知識をもとに、定年後に、先輩の技術者から教えてもらつて、メンパと、ヒルシャモジの生産を行っている。

昭和十二年には、入山地区に自動車道が開設され、昭和二十年には群馬鉄山の鉱石が元山地区から太子地域まで索道で運ばれ、新設された鉄道(現吾妻線)で京浜地区の製鉄所へ輸送されるという太平洋戦争遂行のための大事業が完成した。しかし、送鉱開始からわずか半年で敗戦となる。鉱山は戦後復興に貢献することとなり、六合村の経済は大きく発展した。昭和三十一年には電源開発の野反ダムが完成し、車道は野反へ

至る道となった。季節運行の路線バスが走り、夏山観光の入り込み客が増加した。また、各集落への車道開通も相次いだ。

このように、経済社会の長足の進歩に伴って、大正末期から昭和初期にかけて「細工物」に従事する人は徐々に減少し、その後も減り続けた。戦後の高度経済成長期には、青年層は農外収入を求めて、村から転出する者が急増した。

木工細工は後継者がいない。収入が少ない。金属やプラスチック製品が大量に安く出回って需要が減った。等々により、時代の移り行く勢いに呑み込まれ、衰退を余儀なくされた。

昭和四十八年頃には、生産者は一、二名になり、技術の消滅が危惧された。

農村の人口過疎化が進み、山間地域の疲弊は深刻な様相を呈した。過疎対策につながる行政施策が次々に打ち出される世相にあつて、「細工物」の技術を絶やすまいとする熱心な技術者によって、細々とはあるが、今日まで命脈をつないでいる。

今では、天然素材の素朴な作風が評価され、民芸品として、特産品の地位を確実に行っている。

かつてのように、生活の道具として再び復活することはないであろうが、すぐれた技術者によって伝統的に行われてきた木工細工の技をいかに後世に継承していくかが大きな課題である。

技術伝承と文化財保護の観点から、昭和四十九年、六合村教育委員会発行の「六合村の手工業」と昭和六十年、群馬県教育委員会発行の「六合村の木工細工」は、製作の「道具」、「工程」、「技術」に関し、詳細に調査し、記録に留めて後の世代に備えている。

一、花インゲン（ベニバナインゲン）

六合村に花インゲンが導入されたのは、大正九年のことである。

入山の沢内地区に北海道から一二粒の種が持ちこまれ栽培され始めた。

村内で系統選抜される過程を経て、大粒、多収化し、戦後になって隣接する長野原や嬭恋村の高標高地帯にまで広く栽培されるようになった。

特に、田代原地区の豆は大粒で品質が良いとされ、村内外で種子用に珍重されている。

現在では、六合の最重要作物として位置づけられ、甘納豆や煮豆用、土産用として販売されている。

また、昭和五十九年からは、缶詰加工も行われ、調理しなくても開缶後直ぐに煮豆のうまさが味えるとして、土産品として喜ばれている。

平成二十二年からは、旧入山幼稚園に「六合の幸工房」でも缶詰が加工できるようになり、息の合った夫婦の手づくりのおんばあ煮豆の花インゲンが食べられるようになった。

花インゲンは、薄紫色の中に黒斑点があり、見た目にも花インゲンの名にふさわしい光沢のある豆である。

ビタミン、食物繊維が多く含まれ、健康食品としても注目されている。

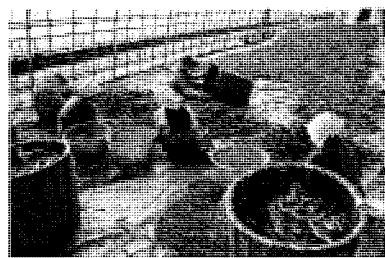
花インゲンの食べ方としては、煮豆として食べることが一番一般的である。煮方は各家庭により様々であるが一般的には、水に塩を一つまみ入れ一晩浸してから煮くずれないように弱火で煮る。

二、三回水を取り換えながら柔らかくなるまで煮るとあくも取れて、さっぱりしたうまさになる。

水を換える際は、熱いままふたを開けると豆の皮が破れてしまうので冷やしてから換えることがポイントである。

柔らかくなったら、豆の量と好みによつて砂糖と少量の塩で味付けをする。

そのほかに、まんじゅうのあんこにしたり、赤飯の小豆の代りに入れる家もある。また、近くの町村の菓子屋により、甘納豆、大福などにも加工され、おみやげとして販売されている。



花インゲンの産地 (田代原)



花インゲン (田代原)

二、入山キュウリ (六合キュウリ、満州キュウリ)

昔から入山地域のどの集落でも栽培されていたキュウリで、長さは一七〜一八センチと短く、「たねいっぱい ずんぐりむつくり 入山きゅうり」と六合かるたにも読まれている。

黒イボで果皮は薄い黄色味を帯び、外観は良くない。

また、品種改良された現代のキュウリと違って収量も少ないため絶滅の寸



六合キュウリ(入山キュウリ)

前だったが、なつかしさやキュウリ独特の香りが強く、果汁も多く、大きくなつても軟らく、生食、漬物にも味が良かったため評判が良くなり、最近、近隣の町村の農家でも作られるようになり伝統野菜として特産品となっている。

三、京塚カブ

明治から、凍らして、乾燥する冬の保存食として作られてきた。

地下部は直径一〇センチ程度で軟らかく、地上部は四〇センチ前後と長く大きくなる。

カブは煮物や漬物用に使われるが、生で食べても甘く、特に京塚で作られたものが甘いので評判となり、京塚カブと言われるようになったのだと思われる。

葉の部分は乾燥して保存食とし、味噌汁、油炒め、肉鍋等で使われている。

まだ対外的には販売されていないが、カブ、葉共に味が良かったため将来は有望な食材として活用されることが期待されている。

四、入山かりんとう

入山には、木曾義仲の落人伝説がある。

義仲の家臣がこの地に落ちてきた時は、大晦日であったが先に落ちてきて門松を立てて正月を迎えたものと明けて元日に落ちてきたものがあった。門松の用意ができたものを宵の山本と言ひ、明けて落ちて来た

ものを明の山本と言っているが、どちらも食うか食わずで落ちてきたため極度の空腹のため、台所にあった粉（稗、栗、ちようせん稗、トウモロコシ）等を丸めて、ほど（囲炉裏の中）の中で焼いてぶち（焼もち）にして食べた。

また、粉をこねて小さくちぎり、油であげて食べたそうである。

この油であげたものを「入山かりんとう」と言い、それ以来お祝い事や葬式などにこのかりんとうを出すようになったのだと言われている。

また、山仕事や畑仕事に行く時もこのかりんとうやぶちを持って行く習慣がある。

八滝の会

入山世立には、八石沢川と依田尾川沢に八つの滝がある。

昔から世立八滝と言われ、それぞれの景観から大仙の滝、段々の滝、箱の滝、久内の滝、不思議の滝、井戸の滝、殺人の滝、仙の滝と言われている。

この八つの滝にちなんで、世立地区の女性により「八滝の会」が平成八年に設立された。

一、会の歴史と活動

○平成八年四月十一日に設立され、初代会長に山本みつ子氏がなり、三三名の会員がいる。

○全員が衛生管理者の講習を受講し、かりん糖班、まんじゅう班、漬物班、惣菜班のいずれかに属して活動している。

○活動の場は、世立地区の祭り、六合地区のふるさと祭り、牧水祭り、文化祭、雪祭り等への出店。

県主催のイベントへの参加、東京代々木公園物産展、前橋グリーンドーム物産展等。

村の物産センターでの土、日、祝日の出店等。

○平成十三年五月一日には、世立活性化センターの開設にともない、うどん部が設立され、初代会長に滝澤しず江氏となり、一二名の会員がいる。

主な活動は、土、日、祝日に二名ずつの部員が当番制で当たり、てんぷらうどん、ざるうどん、ほうとう等を提供している。

手づくりの朝どり野菜、漬物、天ぷら、やくみ等で、お客さんの目の前で打つうどんは大好評である。

○活動の特徴と課題

どの部門の活動も地産による手づくりのものが大変人気があり、お客への販売はもとより、地域の利用が多いことが大きな特徴である。惣菜班の山椒のつくだに等はイベント毎に完売となり、生産が間に合わないのが現状である。

課題としては、会員の高齢化により、会の維持が困難になることである。

今後は、活動日、活動内容の縮小等により、無理の無い方向で、お客に喜ばれる活動を目指していきたい。

三 六合村農業協同組合

昭和二十二年十一月に公布された農業協同組合法により、六合村においても、農村を民主化し、農業生産力の増進と農民の社会的、経済的地位の向上を図ることを目的として、翌年の昭和二十三年三月に設立総会が開催され、六合村農業協同組合が誕生した。

その後、入山農業協同組合と一時的な分離もあったが、昭和三十三年になって時代の要請により両者の合併機運が盛り上がり、再度、六合村農業協同組合として発足した。

その後、国内経済の拡大とともに、時代と地域の変貌と要請に対応しつつ、六合村の特性を活かした農業生産力の増進と農民の社会的、経済的地位の向上のため、役職員一丸となって取り組んだ。

(一) 組合員数の推移 (昭和五十年年度末～隔年)

年 度	正組合員	准組合員	正・准合計
昭和五十一年末	三二六名	九五名	四二一名
昭和五十五年末	三四一名	一〇五名	四四六名
昭和六十年末	三八五名	五八名	四四三名
平成四年末	三六六名	五九名	四二五名
(この後、あがつま農業協同組合 六合支店)			
平成二十二年末	三〇一名	一一二名	四一三名
(JA全体)	五、三九八名	四、一一七名	九、五七五名

*時代の変遷や相続による加入により、正組合員が減少し、准組合員が増加しているが、村の総人口に占める割合は増加し、組合の地域における役割は増大したことがうかがえる。

(二) 事業実績推移及び比較 (昭和四十九年・平成三年) 総会議案より

(一) 昭和四十九年度事業報告および事業実績

(事業既況報告)

本年度は六合村の合同庁舎が完成し本組合の事務所もその一郭に加えていただき、組合員の生活の安定と福利増進に努めてきた。しかしながら農産物価格の低調により一部事業計画の未達成もあるが、組合員各位の理解と協力により組合の使命を発揮することが出来た。

① 指導事業

畜産、蔬菜、特産、その他経営部門の整備と強化、桑園の改植、省力養蚕の推進、うど根、ゴボウ種子の契約栽培、花インゲンの作付増加をはかり、生産の向上と所得の増加に努めた。

② 信用事業

昭和四十九年度のが国の経済金融情勢は、一昨年に続く総需要抑制政策と強い金利引締政策下におかれ景気は停滞の度を強め不況が深刻化する異常な局面に立たされた中であつたが基本計画に基づき努力した。

貯金総額 二億九、一〇〇万円 貸付金 一億三、九〇〇万円

③ 共済事業

大型保障時代に即応した「みのり共済」を主体に役職員一致協力して増進普及につとめた。

共済保有高 一八億四、二二七万円 自動車共済 六二件

④購買事業

支部長さん、組合員各位のご協力により、事業計画を大幅に上回る実績を上げることが出来た。

購買品供給高 一億二、一六六万円

(飼料、二、七九六万円・肥料、一、七五八万円、生活資材、二、二五〇万円・主要食糧、一、六八二万円・その他生産資材、二、四二二万円・包装資材、一、二六八万円)

⑤販売事業

四十九年度は繭糸代金の低迷により生産意欲が減退した。また、酪農も相次ぐ飼料の値上がりにより飼育頭数が減少し未達であった。野菜は東京都契約等により価格が安定し計画を上回った。

販売高 一億二、〇三五万円

(畜産物、四、二九八万円・青果物、四、五〇五万円・繭、一、六三二万円・特産物、一、五九九万円)

(2)平成三年度事業報告および事業実績

(事業概況報告)

前年を振り返って見ると日本の経済にとって、また農業にとって忘れることのできない激動の年であり、大きな転換の年であった。バブル

経済といわれ急成長を遂げた日本の経済も、アメリカの公定歩合の引き下げに端を発した金利引下げと株価の下落により景気が下降に転じ、金融界に大きな衝撃が走った。農業関係においても昨年四月の牛肉の自由化の影響により、酪農においてはスモール価格が五分の一、廃牛の価格も三分の一に下落し酪農経営に大きな影響を及ぼした。また、いまだかつて無い異常気象の年でもあった。この様な状況の中で経営強化の初年度として、計画に基づき組合員の協力と各指導機関の指導を得ながら各事業の推進を図った。

結果として経営計画初年度三、二〇〇万円の当期利益計画に対し、五、三〇〇万円の実績を上げ得たことは村当局、指導機関並びに組合員各位の協力の賜物と感謝する。次に農協の「二十一世紀への挑戦・改革」と題して「農業の基盤づくり」、「明るい地域づくり」、「頼りになる農協づくり」の目標を掲げ、その実現のために吾妻地区農協合併推進を進めてきたが、去る二月二十六日に八農協一酪連による合併予備調印も締結されいよいよ本年九月一日を以て合併するべく更に検討研究に努めた。

①指導事業

畜産経営においては補助事業の導入等で経営が安定する指導を実施した。野菜園芸でも栽培圃場の土づくりを推進し又病害虫防除の徹底をはかり生産物の品質向上に努めた。野菜、枝物についても補助事業によりハウス栽培を推進し出荷期間の延長指導を実施した。

②信用事業

組合員の生産規模拡大、生産向上のため必要とする資金については積

極的に対応し、利子補給の受けられる制度資金の活用とフリーローンの推進に努めるとともに、固定化債権の整理回収に努めた。

貯金総額 九億七、一三三万円 貸付金 二億五、八〇〇万円

③ 共済事業

本年度は班別推進をやめ、個別推進に変え、七月より役職員全員により取り組んだが及ばなかった。

共済保有高 一五六億八七〇万円 自動車共済 四一八件

④ 購買事業

農業を取り巻く環境は依然厳しく、その中であって組合員の営農と生活を守るため生産資材にあつては予約購買、共同購入運動等により提供に努め、生活資材にあつてはAコープを中心に組合員のニーズにこたえるため積極的に取り組んだ。

購買品供給高 二億三、九六八万円

(飼料七、六八五万円・肥料一、三三七万円・包装資材一、五七八万円・生活資材・Aコープ一億三、三六七万円)

⑤ 販売事業

畜産物、特産物を中心とした販売事業も野菜の価格低迷に影響を受けた。花卉については伸長著しく販売高に寄与した。

販売高 二億一、三八〇万円

(畜産物一億三、二六八万円・特産物四、九〇二万円・青果物一、七二〇万円・花卉花木、一、四一七万円・その他七五五万円)

(三) 六合村農業協同組合歴代役職員(昭和四十七年～平成四年八月)

組合長

氏名	就任年月	退任年月
篠原 恒司	昭和四十年六月	昭和五十三年五月
山本 虔一	昭和五十三年五月	昭和五十六年五月
中沢 定雄	昭和五十六年五月	昭和六十一年五月
山本昭五郎	昭和六十一年五月	平成四年八月

理事

氏名	就任年月	退任年月
中沢 富士	昭和五十年五月	昭和五十三年五月
富沢 英治	"	"
山本 仲治	"	"
山口 徳慧	"	"
黒岩 照雄	"	"
萩原 百平	"	"
市川 幸蔵	"	"
篠原陸太郎	"	"
中村 福美	"	"
山田桃太郎	"	"
山本 竹雄	"	"
山本 照雄	"	"
本多 春長	昭和五十三年五月	昭和五十六年五月

篠原 啓吾	富沢 末治	山本 録司	山本昭五郎	湯本喜太郎	山口 徳慧	中村 弘治	山本林八郎	山本谷五郎	田中 金蔵	福島 仁一	市川 伸夫	篠原 太郎	篠原 百平	小池 孝三	篠原 辰夫	篠原 松次	篠原 辰夫	山本 和男	山本 竹雄	市川 浪二	小林 頼男	篠原 松次	星野 賢寿	山本 定一	山本 正明	山口 徳慧	石山 金作	
"	"	"	"	昭和五十九年五月	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	昭和五十六年五月	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
"	"	"	"	昭和六十二年五月	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	昭和五十九年五月	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"

山本 正夫	田村 久一	中沢 良雄	星野 捨吉	富沢 九七	岡部 俊臣	山本 貴重	関 征一郎	本多 秀里	山口 国次	山口 松次	本多 秀次	山本 光義	関 秀司	中沢 正二	星野 捨吉	富沢 正幸	岡部 俊臣	橋爪喜美夫	安原 繁安	山本昭五郎	山口 国次	霜田日出男	本多 左京	山本 茂樹	山本 松次	山本 貴	市川彦一郎	
"	"	"	"	"	"	"	"	平成二年五月	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	昭和六十一年五月	"	"	"	"	"	"	"	"
"	"	"	"	"	"	"	"	平成四年八月	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	平成二年五月	"	"	"	"	"	"	"

氏名	就任年月	退任年月
富沢 茂邦	昭和五十年五月	昭和五十三年五月
高原 秀雄	" "	" "
佐藤 要治	" "	" "
富沢 恵秋	昭和五十三年五月	昭和五十六年五月
佐藤 要治	" "	" "
篠原 久男	" "	" "
富沢 恵秋	昭和五十六年五月	昭和五十九年五月
山本 仲治	" "	" "
市川 浪二	" "	" "
山本 正明	昭和五十九年五月	昭和六十二年五月
篠原 辰夫	" "	" "
中沢 正二	" "	" "
市川 莊次	昭和六十二年五月	平成二年五月
富沢 久好	" "	" "
関 庄太郎	" "	" "
霜田日出男	平成二年五月	平成四年八月
篠原 和夫	" "	" "
富沢 茂	" "	" "

監事

山本 二郎	" "	" "
霜田 勝蔵	" "	" "
山口 一元	" "	" "

役付職員（昭和五十年中央会届出〜平成四年八月）

氏名	就任報告	氏名	就任報告
安原武三郎	昭和五十年〜	山本善繁	昭和五十一年〜
黒岩 春夫	昭和五十年〜	黒岩正善	昭和五十四年〜
中沢 清	昭和五十年〜	湯本尚好	昭和六十三年〜

あがつま農業協同組合 六合支店

(平成四年九月一日)

平成の時代に入ると農業を取り巻く情勢は高度成長時代の歪みによる影響を大きく受けるとともに、経済のグローバル化の波にさらされ、それまでの一町一村の農業協同組合の規模では組合員の負託に応える体制の保持が困難となってきた。そのような中、全国的に二十一世紀の世界情勢等に対応し、将来の組合員の負託に応えるため、合併の必要性が説かれ、吾妻地域においても合併推進協議会が設置され、各階層、各地域にて協議を重ね、平成三年度中には各支部ごとに部落座談会が開催され、翌年の平成四年二月二十六日に郡内八農協(吾妻町・長野原・六合村・群馬高山村・中之条町・群馬東村・名久田・北軽井沢)と吾妻酪連による合併予備調印が行われた。

六合村農業協同組合においては平成四年四月十一日に役場総合庁舎大会議室にて開催された第三十四回通常総会において、合併に関する次の議案が上程され、承認された。

- (開会) 本多 秀里理事 (挨拶) 組合長理事 山本 昭五郎
- (議長) 黒岩 善一 (議事録著名人) 山本 由平・高原秀雄
- (書記) 黒岩 正善・湯本尚好 (議案説明) 黒岩 春夫
- (閉会) 山口 二元

第二号議案 合併および合併予備契約書承認の件

第三号議案 合併経営計画書承認の件

第四号議案 設立委員選任の件

第五号議案 吾妻郡酪農協同組合連合会の持分譲渡承認の件

その後、合併に向けて調整、会議を重ね、同年九月一日をもって合併し、「あがつま農業協同組合 六合支店」が誕生した。

(一) あがつま農業協同組合の経営理念

第一、組合員の営農と生活の向上をはかり、地域と協調しその発展につとめるJAであること

第二、時代の変化に対応した地域に必要な事業活動を専門的かつ効率的に実施できるJAであること

第三、組合員の意見がJA運営に十分反映される民主的なJAであること

第四、的確、迅速に経営判断ができる執行体制により、自己責任経営の自立したJAであること

第五、組合員の信頼に応えられる職員が、能力を發揮し、働きがいのある職場として誇りのもてるJAであること

(二) 平成二十二年度末事業実績(あがつま農協全体及び六合支店)

平成二十二年度は沢田農協との合併で事業規模が拡大した。

①信用事業

貯金(全体) 五七四億八、五五〇万円

(六合支店) 二〇億二、〇五六万円

貸付金 (全 体) 八八億二、七〇〇万円

(六合支店) 二億二、三三二万円

② 共済事業

長期共済保有高

(全 体) 二、八五七億三、二三三万円

(六合支店) 一〇八億三、五九三万円

自動車共済契約件数

(全 体) 一万四、一二四件 (六合支店) 五〇〇件

③ 購買事業

(全 体) 一〇三億五九五万円

(肥料、農薬、出荷資材、農機具等農産関係) 一二億三、〇〇〇万円

飼料等畜産関係) 三七億七、〇〇〇万円・Aコープ等店舗関係

二八億円

スタンド、葬祭センター、焼肉燻等生活関係) 二五億九、〇〇〇万円

Aコープ六合店) 供給高) 六、三二八万円

六合直売所) 供給高) 四、一九九万円

④ 販売事業

(全 体) 一〇八億六、九七三万円

(野菜、花卉、蒟蒻、米麦、菌茸類等農産関係) 二八億五、〇〇〇万円

(生乳、肉牛、肉豚、鶏卵、鶏卵等畜産関係) 八〇億一、〇〇〇万円

(三) JAあがつま花卉生産部会 六合支部

昭和六十三年頃より行政等の支援を受けて始まった花卉栽培は平成四年には栽培者三三名になり、「六合村花卉生産者連絡協議会」が設立され、JA合併後の平成六年三月には「JAあがつま花卉生産部会六合支部」として現組織となった。

山野に自生する「マツムシソウ」の出荷からスタートし、六合村の気候を活かした山野草の積極的導入と補助事業等を活用し、施設化による規模拡大、通年出荷体制を確立した。また、新規加入者のためには栽培マニュアルの作成や講習会の開催による栽培技術の向上を図った。

平成十九年には会員数九三名、販売高一億五、〇〇〇万円を突破し、村の産業及び地域づくりに大きく貢献した。

その活動は平成十六年には「日本農業賞(集団組織の部)」を受賞、平成十九年度農林水産祭むらづくり部門においては「農林水産大臣賞」を受賞し、「六合の花」の名と六合村の豊かな自然、および魅力的な村づくりの実践を全国に発信した。平成二十三年九月には部会発足二十周年を記念して、伊勢方面への研修旅行、及び「フラワーアレンジメント講習会」等を開催しさらなる発展を誓った。

歴代支部長

氏名	就任年月	退任年月
湯本喜太郎	平成六年三月	平成八年四月
黒岩 勇	平成八年四月	"

(四) あがつま農業協同組合歴代役員(六合支店関係)

理事長

氏名	就任年月	退任年月
萩原 久也	平成四年九月	平成五年五月
水野 真澄	平成五年五月	平成八年五月
奥木 功男	平成八年五月	平成十六年五月
綿貫喜太郎	平成十六年五月	平成十七年五月
唐澤脩一郎	平成十七年五月	平成二十三年五月

理事・監事 六合村選出

氏名	就任年月	退任年月
山本昭五郎(副理事長)	平成四年九月	平成五年五月
本多 秀里	"	"
関 征一郎	"	"
山本 貴重	"	"
岡部 俊臣	"	"
富沢 九七	"	"
星野 捨吉	"	"
中沢 良雄	"	"
田村 久一	"	"
山本 正夫	"	"
山本 二郎	"	"
霜田 勝蔵	"	"
山口 一元	"	"
霜田日出男(監事)	"	"
富沢 茂(監事)	"	"
篠原 和夫(監事)	"	"

山本昭五郎	平成五年五月	平成八年五月
市川昭次郎	"	"
山口 一元	"	"
市川 浪二(監事)	"	"
市川昭次郎	平成八年五月	平成十一年五月
山口 一元	"	"
市川 浪二(代表監事)	"	"
市川昭次郎	平成十一年五月	平成十四年五月
山口 一元	"	"
安原 義治	"	"
黒岩 春夫(監事)	"	"
山口 一元	平成十四年五月	平成十七年五月
安原 義治	"	"
市川 伸夫	"	"
黒岩 春夫(監事)	"	"
山口 一元	平成十七年五月	平成二十年五月
黒岩 春夫(監事)	"	"
黒岩 正善	平成二十年五月	平成二十三年五月

支店長

氏名	就任年月	退任年月
黒岩 春夫	平成四年九月	平成七年五月
町田 文雄	平成七年六月	平成九年四月
湯本 尚好	平成九年五月	平成十一年二月
富澤 実	平成十一年三月	平成十七年二月
一場 重雄	平成十七年三月	平成十八年二月
小林 昭一	平成十八年三月	平成十九年二月
生巢 浅則	平成十九年三月	平成二十二年二月
齊藤 和男	平成二十二年三月	平成二十三年二月
青木 隆	平成二十三年三月	

四 国鉄六合山荘

太平洋戦争の末期、日本鋼管株式会社は、国から軍需用鉄鉱石増産の要請を受けて、入山元山に群馬鉄山として、昭和十九年十二月二十五日営業を開始した。輸送は鉄道省により昭和十九年九月、渋川から長野原までの鉄道四二キロの新設が突貫工事で進められた。長野原・太子間は、日本鋼管鉱業の専門線として敷設された。翌昭和二十年一月二日には川崎製鉄所へ向け初出荷となったが、同年八月十五日終戦となりその後は平和的目的に存続する方針転換をした。

国鉄長野原線は、鉄鉱石の輸送と併せて旅客運行もされ、六合村の発展はもとより、吾妻郡にとっても大きな貢献をもたらした。

昭和二十七年十月、太子と長野原間の専用側線五、七キロは国鉄に無償寄付され、国鉄に編入され、昭和二十九年六月十九日には、太子まで旅客列車が運行開始となった。当時は蒸気機関車でトンネルに入ると真っ黒な煙で窓を開けて居られない状態と、煤煙によつて土手草が燃えたり、家屋火災も発生した。

昭和四十三年十二月十五日待望のディーゼルカーの運転開始、併せて国鉄バスも花敷線の運行が始まり、夏期は野反湖まで行く様になった。(草軽バスは、昭和二十八年九月長野原と花敷間に定期バスを運行)

国鉄は昭和三十八年婦恋線建設が始まり、太子線はディーゼルカーの運転を存続するか、太子から草津町への草津高原山岳鉄道によつて、花敷温泉、野反湖開発等が計画され、一部踏査もされたが、昭和四十年三

月戦前から二十数年続いた群馬鉄山の閉山によつて、人口は、昭和三十年四、三八四人、昭和四十年三、〇九一人、昭和四十五年にはついに二、五八〇人までに減少し、乗客数も少なくなつて、国鉄太子線はついに昭和四十五年九月廃止となつた。太子線を利用していた高校生は、長野原まで定期バスに乗車する事になり、差額運賃は国鉄との交渉に群馬県もかかわつて向う五年間支払うことになった。

その他にも国鉄との協定に、六合村の開発支援等があつて、当時の篠原秀雄村長は、地元の温泉を有効利用した宿泊施設の建設を求めて高崎鉄道管理局をはじめ、国、県に働きかけた。

昭和五十三年四月に、役場の機構改革によつて、「総合開発室」を新たに設置し、国鉄山の家(仮称)の建設を担当することとなった。温泉と土地は六合村が確保に努め、建物は国鉄が建設し、その管理運営は村が行うことになった。

温泉は、白砂川沿いを梨木から広池まで踏査し、幾つか温泉の湧出している所はあつたが、量が少なくボーリングし考えたが、たまたま昔から湧出している応徳温泉が利用されず休止状態にあり、地権者の山田寛治さんとの折衝の結果、賃貸契約がまとまつた。(但しその過程には、執行者と議会との間には、百条委員会も設置された)温泉確保はできたが、設置場所の折衝にあたり泉源の向き合い付近と思ひ、遠北の一部が候補地となり荷付場の皆さんにお願ひしたところ了解をもらひ、隣接する沼尾、小雨の方々にも了解を得て、土地の選定は決着した。

温泉・土地の見通しは付いたので、これから高崎鉄道管理局との建物について、具体的な話し合いが始まり、村として木造平屋建を望んでいたが、地形が傾斜のため、一部二階建、和室四室、洋間二室の三六人収

容の建物となった。

温泉は泉源応徳から白砂川の空中にワイヤを張ってパイプを添加し、道路に沿って七〇〇メートル余り揚湯ポンプ二台で引湯した。

水道は、生須簡易水道を増設し、併せて六合中学校にも供給出来る施設とした。

昭和五十三年四月から約一年半の短期間で完成し、高鉄からの管理を委託され、昭和五十四年十月十日「国鉄六合山荘」村直営事業として営業が始まった。

村も併設して六合山荘センターを建設し、一階大広間、二階を食堂、売店とし、昭和五十四年十二月に開業し、村の観光産業の拠点となり国鉄も時刻表に掲載するなど積極的に宣伝を行った。

村の長寿者を招待して、敬老会も各支部毎に開催されたり、村内各種団体、個人の利用者も年々増えてきた。

国鉄の民営化されJRとなったことから、施設を買い取ることを検討し、平成六年三月にJRより買受した。その後、集客は増えたものの社会変化や経済の低迷により徐々に集客減の打開から施設改修を検討し古民家を移築し「宿 花まめ」と改称しリニューアルオープンをした。その後、平成十八年度より経営改善から指定管理者制度による民間事業者「金井工業株式会社」に委託を開始した。



国鉄六合山荘

○ 野反湖の冬山開発構想の思い出

太子線の延長か、廃止となるかの先駆けとして、野反湖の開発調査が始まり、高崎鉄道管理局の神山鶴治さんが中心となり、昭和四十二年夏、野反湖から和山に入り、苗場山から湯沢温泉に行くのに同行した。

冬山調査では、東京電力野反ダム管理人の山本光義さん夫婦にお願いして、泊めてもらうことになり昭和四十二年十二月二十九日、役場の御用納めの翌日富沢静夫さんのジープを頼んで食糧を搬入した。(翌日からは吹雪となり交通止めとなった。)

翌年一月七日、中村司さんを案内に頼んで、役場職員四人で野反に初めて行くことになった。和光原から約三〇センチの積雪の中、スキーを背負い交代しながらのラッセルで大ナラまで行ったが、雪が深くどうにもならず、スキーにシールを付け登った。富士見峠で初めて見た冬山の野反湖、周りの山々の眺めは別世界だった。弁天山に登り、エビ沢に下って湖面の上を滑って行き、最後の東電事務所までの僅かな坂ではあったが、さすがに疲れようやく到着。

夜は山本さんご夫婦にお世話になって冬山の様子を色々聞かせてもらい風呂にも入って、美味しい夕食を頂きぐっすり寝込む。

翌朝窓には雪が吹き付け、外気はマイナス二〇度今まで経験したことのない寒さであった。この日は吹雪で、山本さんから「湖の上を右に寄るとエビ沢に入り危険だから左側を歩き最後は送電線に沿って行くように」と教えてもらう。湖面の水の上は風が強く、手を広げれば前に進む状態であった。富士見峠は強風でスキーのストックが真横になる程だった。峠から和光原までは、昨日と違って道路沿いにスキーで下がって来

る。

その後、三月になって、高鉄の神山さん、本社の小泉局長さん、草津営林署引沼担当区主任、高鉄スキー部の皆さん十人位で調査に入り、翌年と二冬調査に入った。八間山、三壁山、エビ山等に登った。夏は笹が深く周りが見えないが、雪山では素晴らしい風景が眺められる。三壁山頂から苗場山がよく見えたのは、今でも忘れられない。

このような調査をした野反湖の冬山開発も、むなししい夢物語となった。

五 六合への電気導入と県営発電所

一、小雨発電所建設と電灯

電気の明かりは、文明開化の象徴ともいえる。日本で最初の発電所は琵琶湖疎水を利用した京都の蹴上発電所で、送電開始は明治二十四（一八九二）年である。群馬県では明治二十七年、全国で五番目に天狗岩用水を利用した発電所（五〇kw）を建設し、今の前橋市に電灯を点した。吾妻郡で最初の発電所は、百名水の一つ鳴沢川の水源、不動の湧水を利用した箱島発電所で、明治四十三年に事業を開始する。

六合村で最初の発電所は、大正十（一九二一）年四月に事業開始の小雨発電所建設である。『吾妻郡誌』には、小雨電灯（株）小雨発電所とあり、俗称ズウズウ川の水を使用、発電馬力は四馬力で、六合村地内に電力供給とある。同発電所は、郡内で一二番目に建設されたが、水量が少ない沢のためか、規模は田村発電所（四万温泉の旅館用自家発電所）の五馬力よりも小規模である。

小雨発電所を知る資料は少ないが、六合村長寿会著の『おらが村のよもやま話』に、関係者（市川正三氏）の話があり貴重な証言である。市川氏は小雨地内では大正中頃まで松の根等を集め、鉄板の燭台に乗せて燃やした明かりや、石油ランプの明かりの下で生活をし、夜なべ仕事をしたと記すが、他集落も同様であろう。

小雨では他集落に先駆けて、大正九年十月に水力発電所工事を着工し、

翌年四月には事業を開始した。当時の社長は市川岩次郎氏で、電気は小

雨と対岸生須集落に売っている。

発電所は下平橋の上流約一五〇メートル程の川沿いにあった。電気器具類もない時代で、電気の利用は夜間の照明用だけだった。夕方になると発電所に行つて、水をかけて発電をし、翌朝には水を止める毎日で、この仕事は星元屋の星野勇太郎氏が主に担当とある。当時の電球は一〇ショック位、今の二〇ワット位の明るさである。



小雨発電所堰堤跡

現在の送水管は金属製だが、当時は大きな唐松を二つに割り、中を割り抜き、二つを合わせて木管をつくり針金で縛った木管を作った。木管を何本も繋ぎ合わせ、管の中に水を落としタービン水車を回し発電したとある。だが、繋ぎ目部分から水が洩れてしまい、十分な発電が出来なかつたのが難点だった。堰堤まで行く道もなかつたので、新たに約五〇メートルの道をつくり、発電機等の資材を運び建設した苦労もあったという。通路の入口には三寸五分（約一〇・五センチ）角程度の木柱に株式会社小雨水力発電所と書いた標柱があった。その後、東電に買取されて、今日の電気時代になった。

今、下平橋左岸袂から発電所跡方向に向かって沢を上るにも、道跡が崩落し進むのが大変である。現存する発電所関係の顕著な遺構は発電所

の堰堤跡で、沢の兩岸に遺っている。場所は林道小雨線の大カーブ地点、水道施設脇を進み、沢に出合ったら、沢沿いに下ると堰堤跡にでる。堰堤の下方は滝になる急斜面である。この斜面を利用し木管を下ろし、落差をつくり発電用タービンを回したのだろう。

古老がよく停電をしたと語るように、発電は不安定な状態だった。学校で映画会を行った夜は、小雨、生須の全世帯の電灯を消させて上映したと語る程で、供給余力がない小発電所だったと分かる。沼尾の福島仁一氏は電灯が点いたのは、中之条の農学校生徒だった昭和四、五年頃で、電線は白砂川対岸の生須側から入って来たと言語る。最短距離の湯川発電所付近の難所を避けて送電されたようである。

『ぐんまの電力史』を見ると、大正九（一九二〇）年十月、小雨電気（資本金七、五〇〇円）が設立、仙ノ沢に出力二キロワットの発電所を設け、翌十年四月、小雨・生須両地区の五七戸、一〇三灯に電気を供給し、後に小雨電灯と社名を変更等、前記冊子と若干異なるが記述は具体的である。

『関東の電気事業と東京電力』には、当時は発電と送電が別個だった時代で、東信電気は東京電灯に電力を卸売りしていた。同社は吾妻川電力が建設した大津・羽根尾・今井・田代の四発電所を取得し、工事を引き継いだ西窪発電所を昭和八（一九三三）年十一月に完成させる。さらに拡充路線は進み、吾妻川支流筋にある一般供給規模数百〜数千灯の小規模事業者である草津電気鉄道、深沢産業、小雨電灯を買収している。同著には小雨電灯は一九二一年三月に開業し、東信電気に一九三八年三月に譲渡とある。『郡誌追録』に、昭和九年十一月調査の水力電気事業に一七個所の発電所が載るが、小雨発電所の名は運転を休止したのか

見えない。赤岩一帯に電気を点した深沢産業の名も、前記追録には記されず、既に運転を中止していたと思われる。

二、六合南部への電気導入

六合南部には、長野原町貝瀬にあつた深沢産業から電気が引かれたが、赤岩地域以外の日影、太子の詳細は不明である。

『長野原町誌』から深沢発電所を紹介するが、発電所は六合村に隣接する長野原町貝瀬地内に所在とあり、名称は深沢産業（株）深沢発電所である。同書から沿革を見ると、大正十一年に発電事業を目的に、長野原町と六合村の一部有志が設立し、当時の役員は長野原町五名、六合村赤岩の篠原久作、篠原団次郎の二名である。



深沢産業発電所
送水管跡

発電所の特色は、昼間は長野原町の土木請負業者畠中雄平が製材事業の動力源で使用し、夜間になると電灯用に送電したとある。規模はタービン水車一台、送水管落差は二〇メートルだった。発電所の使用河川は深沢川の水で、発電所竣工は大正十二年、竣工式は雲林寺で行った。

その後、経営困難もあつて会社は解散し、施設は重役篠原団次郎が引き受けて、綿打工場を経営したが、火災で焼失し廃止している。

今も国道脇に当時の送水管の一部が遺り、その上方には水槽跡があり、当時の面影を僅かに偲べる。配電区域は地元の長野原町貝瀬と、六合村

赤岩の本村と広池である。古老は晩秋には水路や水槽の落ち葉拾いで苦勞したと語り、電灯はスイッチを入れると徐々に赤っぽくなり、やがて薄暗い電灯が点り、その姿を「焼け火箸」と形容し、懐かしそうに話している。

『ぐんまの電力史』の記述を見ると、深沢産業は深沢川の水を利用し、板葺き屋根の発電所で、昼間は電力を製材用動力で使用し、夜間は赤岩・日影・小雨に供給したと記すが、小雨でなく太子と考える。

『関東の電気事業と東京電力』に載る昭和初期の供給区域図には、六合村南部の三大字は深沢産業の供給区域に区分されている。

広池の篠原団次郎氏の子孫は、深沢橋左岸袂付近に小さな発電所を造り、団次郎氏が深沢産業の半分の株を所有し、社長だったと語る。当時の電灯は、赤いような小さな電球で、ランプみたいな明るさで、東電に権利譲渡後は、綿打ち工場用に電力を使用していたという。水路は駒倉沢から取り、トンネルで深沢側に落とし、発電で利用後は白砂川に落とした。今も貝瀬の下田宅付近の国道脇に水路管が一部見られる。取水槽では、秋が深まると落ち葉で詰まり、学校が休みの日にはよく拾いに行つたと語る。水質が良い水で、今は浅間酒造が駒ヶ沢の水を利用して酒造りをしている。

三、入山地内の点灯

入山地内に最初に電灯が点つたのは何時かと図書館等に通ってみた。だが、関係冊子に南部地域の情報が多少記される程度で、入山地内の電気導入に関する資料は存在しない。唯一、『関東の電気事業と東京電力』に、昭和初期の県内の電力供給区域図が載り、その地図には県内で電気

が入らない空白地域が二箇所記されていた。その一つが入山で、他は片品村東北部が県内の電気空白地域と分かった。この地図を見て、当地は県内でも最後に電気が導入された地域と知った。

何時、入山に電気が引かれたかを知るのには、入山中学生の郷土学習『入山研究』がある。だが、読み進めると研究年度や地域によつて電灯が点つた年に若干食い違いがある。無理もない、電灯が点つてから数十年も時間が経過し、当時の記憶も曖昧になっている。この微妙な時間のずれを補つたのが、古老からの聞き取り調査である。記憶に頼つた資料のため不詳箇所は多々あるが、現時点で確認出来た入山へ何時電灯が点つたかを記してみる。

『入山研究』四号の田代原開拓の歴史に、「小倉前の日曹鋹業で掘つた硫黄山の開発で、田代原の畑の上を索道が通るようになりました。それを動かすために電気を引いてきました。そこで、索道を通すための用地は無料で貸すという条件により、田代原にも電気を入れてもらいました。その際、一燈だけは無料で入れてもらい、一燈ますごとに五円を払うことになりました。入山では一番早く電気が入りました」と具体的な記述が載る。集落裏を通る硫黄山の索道用電線から補償的な形で各戸に支線を引かれ、入山地内では一番早く家庭に電灯が点つたと分かる。同三号には、索道は草津から来たが、工事の際は丸めた電線を各々が持つて一定間隔で並び、人力で長い電線を張つたとある。電線を運ぶ途中で、ある人が蜂の巣に触れ、刺されて顔が腫れてしまった。だが、途中で逃げ出せば、電線が切れ工事が中断して迷惑をかけると、痛みに絶え必死に持ち続けたという笑えないエピソードも紹介されている。

同号には入山は国有林が九〇%をしめる土地柄で、昭和十二年には入

山まで車が通れる県道が開通して材木等の搬出が可能になり、当地最大の資源である森林の有効活用が可能になったとある。草津営林署では奥山に眠る森林開発の大仕事に取り組み、主に松岩山北斜面の三浦（白砂川左岸山腹）に眠る森林を伐採して、森林軌道（トロッコ）で終点の引沼にある製材所まで運び出すことを考えた」と記される。

昭和十三年、草津営林署が引沼に官行事業の製材所（今のガソリンスタンドや豆腐店付近）建設、これが入山への電気導入の契機になったとある。製材所では、最初は大鋸屑等を燃やして蒸気機関の動力としてベルトや帯鋸は動かしたという。当時、製材所が休憩時間の合図に九時、十二時、三時に鳴らしたボーの音が当地の人々に時間を教えたものだと懐かしそうに語る古老もいる。

その後、製材所の動力を蒸気から電気に変更して、電気は小倉対岸の日本曹達硫黄山から電線を延長して引くことになった。製材所までの電線は小倉、長平、根広、花敷、引沼集落のルートで、昭和十五年早々には電気が引かれていたようである。

『研究』には、硫黄山に近い小倉集落では、昭和十四年十一月に配線を終え、翌年の正月には電気を見て過ごしたと記される。『研究』十号の「硫黄鉱山と入山」のなかに、「電気が入ったのは昭和十五年の正月で、十四年一月より工事が行われていました」と記し、これを裏付ける。日本曹達小倉鉱業所のお蔭で「小倉は寝ていて、電気が入った」と古老の話にも載る。個人負担もなく、共有財産の山の落ち葉を売ったお金一〇円と、労力奉仕で済み、残りの費用は鉱山で負担したと記される。

同書には、小倉に電気が入った後の生活の変化を、古老が①ラジオが聞こえ、世の中の動きが分かる、というプラス評価は考えられたが、②

夜更かしをする。③文化が進み、生活が忙しくなる。④平均的に人が怠け者になったとあり、全面的なプラス評価ばかりでなくて興味深く感じる。事実、自給的な経済だったが、月々の電気代支払い等で、日々の生活に追われ忙しくなったという感想は今の社会にも通じる。

①④の変化の次に、電気導入前は松の根を掘って燃やしたり、ランプのホヤを磨いたりしないと親から怒られた。草津の重原まで炭を三俵も背負って行って売り、帰りには石油を買って帰るのが仕事だったと記し、その負担から解放されて怠け者になったとあり、当時の子供の日常生活の一端と変化を知る貴重な話題も載っている。

根広の中村福美氏は当時一五才、近くの電柱工事で働く方に、電柱の「十四・十」と記す文字を見て、その意味を聞くと昭和十四年十月のことだ、今度のお正月には電気が入るよ言われたと、当時の記憶を話してくれた。事実、この年の大晦日には電灯が点つたという。官行の製材所から少し離れた引沼の古老は、昭和十五年一月十日に宇都宮へ入隊したが、その時点では家に電灯が入ってなかったと語る。当時を知る古老は、白砂川の水を川中発電所へ運ぶ隧道工事用の専用電線が群馬水電の松谷発電所から山を越えて引かれていたという。世立下の隧道横穴入口付近の労働者の飯場や幹部住宅には電灯が点っていたが、近くの一軒住宅には入っていなかったと語る。当初は製材所付近まで電線を引き、電線沿いの家は新年を電灯の下で迎えたが、その周辺地域の家への配線はやや遅れたのか不明である。

引沼に隣接の世立や京塚にも同年中には電気が入ったようである。『研究』には、世立の古老が電気の入った頃をふり返った話が載る。最初は裸電球で、測針器（メートル器）のある家は集落でも数軒で、測針器を

入れる条件は電灯設置個所が六〜七個所ないと許可されなかったとある。また、大風や大雪の時に電線が切れてもなかなか修理に来ず、電灯が点かない暗い夜が一週間〜一〇日間位も続いて、そんな時の挨拶は「今夜電気が点けばいいな」だったと語り合った回顧談が載っている。

電気Ⅱ電灯の時代が終わり、集落電化の話題も載る。同十七年にはラジオが入り、同二十二年には精米機が、同二十四年には農機具が、同二十七年には電気アイロンが、同三十五年には炊飯器が、同三十八年には電話と、新しい文明の利器が最初に集落に入った年が記されて興味深い。その後は未記載だが、翌年の東京オリンピック頃に白黒テレビも多くの家庭に入り、電気は文字通り生活の近代化と結びついている。

『研究』三号には、既設の電線から離れた和光原、矢倉、品木の各集落の歩みが載る。他の集落と離れており、戦争の影響もあるのか電線が引かれなかった。電気から見離された三集落は期成同盟を結成し、自力で電気を引く運動に取り組むことになった。

和光原では誘致運動の委員を任命し電気を引く取り組みをする。委員長山本太郎、委員は山田庄太郎で、委員には霜田長七、本多与市、霜田良平の五名である。貧しかった時代、電気を引く時には負担があつて大変という反対意見もあつた。だが、委員の説得や、資金不足の人には金持ちから資金を借り受け、何とかスタートをした。自己負担は一軒一五〇円位で、合計三、〇〇〇円位（昭和五十五年頃の価値で一五〇万円位）で、小諸市の小諸電気に相談し引いてもらうことになった。その結果、昭和十五年十月に完成し、待望の電気が引かれた。その結果、「家の中が明るくなると同時に、人々の心まで明るくなったようです。」と記される。

和光原の電化が地域の生活に与えた影響を『研究』から紹介する。同三十五年に洗濯機が入り、今までに比べて洗濯の時間も少しになり、洗濯物も綺麗になった。同三十六年頃、冷蔵庫を五万円程度で買ったが、従来は副食の中心は保存可能な漬け物類だったが、冷蔵庫の使用で副食の内容も多様化する。同二十八年にはテレビ放送が始まり、同三十八年頃には、当時五万円位の白黒テレビが入った。実物の映像を見られることが人気で、大晦日の晩等はテレビがある家に行つたとある。カラーテレビ放送の開始で、同四十四〜四十五年頃には九万円位で何軒かの家に入った。電気が引かれた当時は明かりの役割のみだったが、その後はニュースを聞き、食べ物を保存し、娯楽等に多様に使われ、暮らしが徐々に豊かになったとある。

品木も同じ十五年に電気が入った。品木集落の電気導入の歩みは、古老中沢富士氏が経験した事実の記憶が貴重である。氏は昭和十三年に軍の任期を終え故郷に戻つていた。だが、他集落には電気が入っているのに品木集落には引かれなかった。長老が相談し、和光原の方と孺恋村千俣にあつた発電所事務所まで電気導入の陳情をしたが、当初は相手にされなかったという。次の陳情には富士氏も若者代表で参加し、千俣に交渉に行つた。その席で、軍人生活の経験から電灯は文明社会の最低条件で、電灯がない生活は差別だと担当者を説得したという。相手に心情が通じたのか、電気を引くことを所長も了解した。だが、慈善事業ではないので、電柱（品木では一戸三本）と電線を用意し、工事現場まで運搬すると言う厳しい条件が示された。電線は草津の殿塚方面から引き、電灯は一戸で三灯の条件で、昭和十五年十二月十五日に品木地内に初めて電気の明かりが点つた日は忘れられないと語つた。以上の経過を経て、

入山地内の多くの家は電灯の下で、団欒の一時を過ごせるようになった。だが、既存集落と離れた小規模集落や見寄や暮坂に電灯が点つたのは戦後だった。暮坂の熊川寅吉氏は、戦前から松谷く暮坂峠く見寄を経て川中発電所取水隧道工事の電線が通っていたが、工事専用線のため引くことは出来なかったと語る。

戦後になり、電気が入る時代になったとアドバイスをされて配電工事を頼んだ。一戸で数灯、集落で合計何灯以上と割り当てられ、電柱、電線、工事も利用者負担で行った。今まで暗いランプ生活だったのに、何灯もの電灯が入り贅沢過ぎると感じたと言う。その結果、昭和二十三年九月に暮坂でも電気が四軒の家に点り、熊川宅では自己負担は電柱代を除き、二、〇〇〇円だったと語る。現在では、暮坂経由の電線は維持管理が大変になり、生須から送電されている。

湯の平温泉の自家発電所を紹介する。大正十一年に温泉が開発された湯の平温泉は、河床から温泉を宿まで汲み上げるのに電気が必要だった。暮坂の後坂入口、直売所前の駒ヶ沢の水を発電に利用するため取水することになった。花菜の里付近を通り、湯の平温泉へのハイキングコースの日の前峠下まで用水路を掘り、マラ石峠下を通る隧道を開削した。水は温泉側斜面の沢に落とし貯水池に溜め、川床までの落差を利用し発電を行ったという。だが、沼尾から荷付場、梨木に電気が引かれ、支線が温泉に延びて自家発電は役割を終えた。

集落近くを電線が通過していた見寄も、電灯の願いは長い間叶わなかった地域である。山の南、暮坂集落に電灯が入った話しを聞き本格的に取り組んだ。当地の山本新十郎氏は「昭和二十四年頃、小諸電気に頼み、束電から小売りをしてもらった」と語る。電柱は集落で用意し、近くの

電線から引き六軒の家々に電灯が点つた。だが、物不足の時代、電線の工面が出来ず、村当局を通じて県に特別配慮の陳情をしてもらい、やっと電線を確保出来たという。小諸電気は電灯数は集落全体で最低三〇灯が条件で、僅か六軒の小集落のため一軒で五個所に電灯を付けたという。入山でも遅くなって電灯が入った見寄の方は、「これでやっと人並みになった」と当時をふり返って語っている。

だが、既存の集落と離れた開拓地や小集落では、未だ電気の灯が点かない所が残った。長らく文明の恵みから見離され状態を強いられた集落に、戦後二〇年近く経過した頃にやっと電灯が点ることになった。

昭和三十八年の『六合村報』五一号に「無電燈部落解消に前進」という見出し記事が載る。臨時村議会では七件が議決され、その一つに電灯の件がある。村報に「二、辺地にかかわる公共的施設の総合事業費起債について熊倉、かじ屋敷、中室、湯久保等の無電灯部落解消のため、辺地事業の特典を生かして、実施することに決め、これに伴う財源措置として、三百二十万円の起債をすることを議決しました。」とあり、村の隅々まで待望の電気が引かれる目途がついたという内容である。この結果、六合村では事実上無電灯集落は解消していった。

六合村だけでなく、吾妻郡全体で見ると、無電灯家屋の解消には若干の時間を必要とした。事実、昭和四十年十月八日の上毛新聞に、「まだある電灯のない家 奥吾妻に三十四戸」の見出し記事が載る。束電中之条営業所調べの内訳は、吾妻町一四戸、中之条町一〇戸、高山村五戸、長野原町三戸、東村二戸とあり、六合村地域から無電灯家屋は解消している。無電灯地域は、既存集落と距離があり過ぎる高台や、小型自動車も入らない場所が共通点である。へき地農山漁村電気導入促進法では、

国と県負担を除き一戸五万円個人の負担が必要で、然も農協単位で五戸以上ないと事業化しないとある。五戸以上に該当する吾妻町日向、岩井、植栗、迦葉の各集落では、年内には待望の電灯が点るとある。それ以外の家は、現状では有効な解決策がないとある。最後に、「山のこどもたちにとってもことは、暗い読書の秋“がやってきそうだ”と記事は結び、心身共に伸び盛りの子供が無電灯の犠牲になっている。

四、県営発電所の建設

長い間、群馬県で発電事業と言えば東京電力(株)が独占するイメージが定着していた。この状態に風穴を開けたのが群馬県による県営発電事業への進出だった。

白根火山山麓から流れ出す河川は酸性河川が多く、当地の河川水は発電事業に不向きと考えられていた。だが、吾妻川総合開発で世界で最初の画期的な河川の中和事業が実現したことで、無用と思われた河川の利用価値が注目されるようになった。中和事業に関係ない他の酸性河川でも、酸性対策技術の進歩で河水の発電への利用が可能になった。海外からの輸入エネルギーに依存せず、環境への負荷が少ない自前エネルギーに関心がいく風潮も定着してきた。その中で、険しい地形の山間を流れる小渓流を集めて、小規模だが新たな発電所立地が注目されるようになった。その流れの中で、六合地内では現在四ヶ所の県営発電所が営業運転をしている。

県営発電所パンフレット等を参考に六合地内の公営発電事業を紹介しよう。地方公営事業というのは地方公共団体が設立する企業で、電気事業もその一つである。群馬県企業局が行う環境に優しい再生産可能エネ

ルギーの水力発電事業は、全国一位の発電量を誇っている。現在、県内では企業局が管理する水力発電所は三二ヶ所、火力発電所一ヶ所、風力発電所一ヶ所、合計三四ヶ所が運転している。吾妻川水系に県営発電所が一〇ヶ所あり、群馬県全体の三割弱をしめている。内訳は長野原町二ヶ所、中之条地区四ヶ所、六合地区四ヶ所である。

県営発電事業の特色は、発電した電力は全て一般電気事業者、群馬県なら東京電力に販売している。県営発電による一年間の供給量は県内の家庭等の消費電力の約五分の一を賄い、県民生活に不可欠な電力供給源になっている。

県営水力発電事業は群馬県の地形的特色による恵みで、豊富な水資源を有効活用した、文字通り上毛カルタの「理想の電化に電源群馬」に相応しい姿といえる。化石エネルギー資源に乏しい日本にとり、水力は再生産が可能で、環境に優しい純国産エネルギーである。従来の開発から見落とされていた水資源を、技術進歩等で見直し、再発見した好例であろう。その結果、県営発電所の規模は、従来の事業者が関心を示さなかった場所の開発で、規模は中小の水力発電所が主である。

財源面でも地方自治体に貢献する事業である。発電所の所在自治体から電源三法での交付金が、県の企業局からは所在市町村に交付金を交付されている。

六合地区に立地した四か所の県営発電所を、営業開始年順に、内容や特色を紹介してみる。

(一) 湯川発電所

総合開発事業の一環で、強酸性水を中和し、中和物沈殿が目的の品木

ダムから、二・五キロ下流側に圧力隧道で水を引き、小雨地内に建設の発電所で発電する。品木ダムと中和工場は当初、県企業局の運営だったが、後に国営に移管される。注目点は、品木ダムは中和物の沈殿が本来の機能だが、二点間の落差を利用して上澄み水を引いて発電を行い、電力販売で中和経費を生み出す一石二鳥の機能にある。



湯川発電所の外観

概要

河川名：湯川（谷沢川、大沢川も中和後に湯川に合流）
認可最大出力：八、二〇〇kW

年可能発電電力量：二、六九七万kWh

最大使用水量：四・五m³/s

有効落差：二・一三m

導水路：約二、四七六m

水圧鉄管：約四八四m

発電形式：ダム水路式

発電機：三相交流同期

水車：立軸フランシス型

運転開始年月日：昭和四十年十二月九日

総工事費：七億円

（参考）品木ダム（国土交通省管轄）

型式：直線重力式コンクリートダム

堤頂高：四三・五m

堤頂長：一〇六m

集水面積：三〇・九km²

総貯水容量：一六六・八万m³

有効容量：二二・八万m³

常時満水位：九〇九m

取水位：九〇八m

目的：水質改善・発電

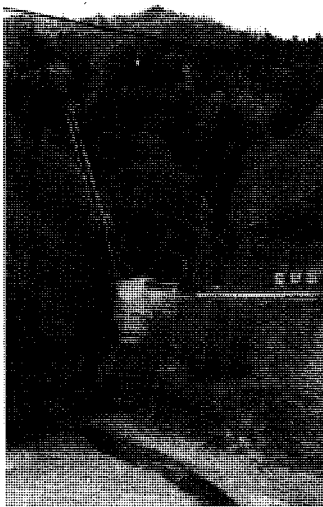
（二）矢倉発電所

取水は東は白砂川本流取水堰から隧道で運び、途中で矢倉川、小宿川の水を集め、西は長笹川から隧道で、途中のガラン沢川、白沢川の水を集め、発電所上方で東西の水路を合わせ発電をする。建設は昭和五十五年度に新設された中小水力発電開発補助金制度を利用している。

特色は強酸性水を利用するため、隧道や水車部分は耐腐食対策が施されている。無人発電所で中之条発電所から遠方制御されている。

概要

河川名：白砂川と前記五支流



矢倉発電所の外観

認可最大出力…七、八〇〇kW

年可能発電電力量…三、九八六万kWh

最大使用水量…七m³/s

有効落差…約一三八m

導水路…九、〇三八m

水圧鉄管…約二三六m

発電形式…水路式

発電機…三相交流同期

水車…立軸フランシス型

運転開始年月日…昭和五十八年十月一日

総工事費…六二億円

(三) 広池発電所

湯川発電所放水口付近にある白砂川取水堰で取水し、隧道で運び、途中で駒ヶ沢川、至球川、矢ノ下川の水を集めて利用する。



広池発電所の外観

概要

河川名…白砂川と前記三支流

認可最大出力…四、二〇〇kW

年可能発電電力量…約二、〇六〇万kWh

最大使用水量…六・五m³/s

有効落差…八〇・三m

導水路…約一、二五三m

水圧鉄管…約一五〇・六m

発電形式…水路式

発電機…三相交流同期

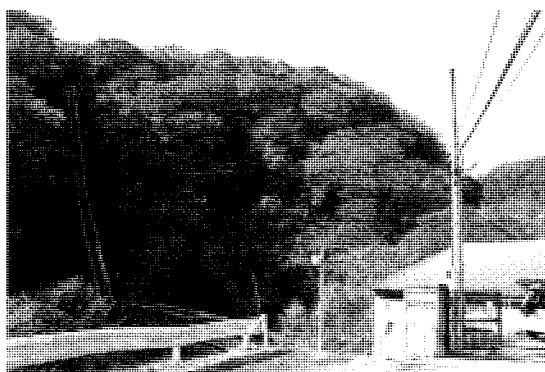
水車…立軸フランシス型

運転開始年月日…昭和六十一年七月一日

総工事費…四三億円

(四) 熊倉発電所

小倉集落の先で白根開善学校への道と左に分かれ、山中に一・五キロ程入った奥地にあり、白根山麓の小沢から取水した水を集め発電する典型的な小水力発電所。国立公園内に位置し、周辺環境との調和を配慮して建設される。



熊倉発電所の外観

概要

河川名…ガラン沢取水堰から隧道や開渠水路で導水し、長笹沢川、唐沢川の取水堰から暗渠で運ばれる。熊倉台地で合流後、小容量の水槽に溜め、ガラン沢に落とし発電する。発電所は地形的な制約で右岸で

なく、水管橋を架けて左岸側に建設される。

認可最大出力…二、九〇〇kW

年可能発電電力量…約一、一九七万kWh

最大使用水量…二、五六m³/s

有効落差…約一三九・八m

導水路…約四、五一四m

水圧鉄管…約三二五・七m

発電形式…水路式

発電機…三相交流同期

水車…横軸フランシス水車

運転開始年月日…平成六年七月十四日

総工事費…三四・四億円

五、結びに

従来の『六合村誌』では触れてなかった、村への電気導入の歩みと関連する話題を記してみた。入山への道路開削と共に村民の生活を一変させた電気導入に関する資料は極めて少なく、特に入山地区では皆無に近かった。不十分な内容で誤りも多々あると思うが、ミスを心配して何も残さないよりは、後世に何らかの資料を残し、先人の歩みの一端を伝えられればと思いまとめてみた。この項を作成するのに際し、中学生の『入山研究』と、古老からの聞き取りが大きな力になったことに、改めてお礼と感謝を申し上げ結びとする。

六 小倉の硫黄鉱山

小倉の硫黄鉱山は、六合村大字入山の小倉集落・長笹川の右岸、草津白根山の北東山麓崖にあった。言い伝えによれば、この硫黄鉱山は、大正時代の初期、個人採掘で始められた。当時は小倉集落から鉱山へ通ずる道もなく、山道を辿って採掘現場へ行く程の、ごく小さな鉱山であったという。昭和十年代になり、この鉱山が再開発された。民営企業の日曹鉱業株式会社が小倉鉱業所として本格的な硫黄鉱山を稼行するようになった。この時になり、小倉の集落から鉱山への道もでき、開発も進んだ。採鉱夫と精練夫は鉱山に経験をもつ、北九州や東北方面から特殊技術者として、鉱山労働に従事していた。この他に鉱山では選鉱夫、雑務者、事務員が居ったが、これらの係は小倉の人達が中心になり、これにあたった。高品位に精練された硫黄は、決められた形に整形され、人力や馬や牛の畜力で草津へ運ばれた、この任に当たったのは雑務者であった。運ばれた硫黄は草軽電鉄により、軽井沢経由で京浜工業地帯の工場に運ばれたのである。小倉集落の南の緩斜面に三〇軒余の鉱山住宅がつけられ、日用雑貨・食料品の店ができ賑わったといわれている。鉱山住宅には家族づれの世帯もあり、学童は入山小学校・長平分校に十数人程度が通学していた。

世界の硫黄鉱床を成因別に分けると次の三型になる

一、石油鉱床に関係してできた鉱床で、岩塩ドームの石灰岩中にある硫黄鉱床であり、アメリカ、メキシコ湾沿岸地方など産油地にみら

れる鉱床

二、石灰岩層中に石膏層をともなつて、層状鉱床をつくつてゐる鉱床であり、イタリア、シチリア島などにその鉱床の例がみられる。

三、火山作用に関係してできてゐる硫黄鉱床で、日本の硫黄鉱床は、この分類に属してゐる。

小倉の硫黄鉱床は、草津白根火山に起因する硫黄鉱床であり、典型的な火山作用に伴なう、正に日本的な硫黄鉱床の鉱山である。

日本の硫黄生産量の八割を占める岩手県の松尾鉱山は、日本最大の硫黄鉱床といわれ、最盛期には、日本の輸出硫黄産物の主位を占めていた。松尾鉱山は、茶臼火山の複輝石安山岩溶岩、火砕岩を母体とする鉱染交代鉱床であり、鉱石の品位は、平均品位で、硫黄含有二七%であつたといわれている。

小倉の硫黄鉱山についての詳細な調査や鉱石についての分析資料はないが、草津白根火山からの溶岩・火砕岩を母体とする鉱染交代鉱床であつたことは疑う余地がない。硫黄鉱石の品質は凡そ三〇%前後と考えられる。これらの鉱石をもつ硫黄鉱山では、一般的に抗道掘りで鉱石を採掘し、選鉱してから、精錬して、高品位の硫黄を生産し、出荷したのである。小倉の硫黄鉱山も、このような手法により硫黄生産をしたものと考えられる。

百数十人の鉱山従事者を擁してゐたと思われる小倉の硫黄鉱山は、昭和十七年九月三十日にすべての施設を整理して閉山した。この鉱山の閉山は、草津白根山で稼行されてゐた他の硫黄鉱山の中でも、最初の鉱山の閉山であつた。硫黄鉱山に限らず、一般的に鉱山の閉山という時には、資源の枯渇や需要の変化による事が考えられるが、小倉の硫黄鉱山の閉

山はこれらいずれにも当てはまらないものであつた。

日本の硫黄生産量で主位を占めていた松尾鉱山や草津白根火山に属する小串鉱山も一九七二年（昭和四十七年）には時期を同じくして、共に閉山してゐる。これら鉱山の閉山は、日本の硫黄鉱山の限界を示すものといえる。かつてはアメリカへも輸出してゐた日本の鉱山硫黄は、アメリカの採鉱の新技术・フラッシュ法の開発により、安価な硫黄が生産可能になつたため、硫黄輸出はなくなつた。一方、日本では一九七〇年ころから、近代工業の発展により、回収イオウの生産量が急増し、従来の鉱山硫黄は減少していったとされている。

小倉の硫黄鉱山の閉山は、これら日本の硫黄鉱山の閉山に先んずること三〇年も以前のことであり、この例には当てはまらない。小倉の硫黄鉱山の閉山には、他にその原因があつたものと考えられる。

文化

一 冬住みの里資料館

全国に知れ渡る名湯草津温泉は、近代的な山の温泉地である。新幹線が日本列島を縦横に走り、高速道路も全国に伸び、地方道は整備され、車社会の現代は津々浦々まで気軽に旅ができる社会となった。高地で標高一、二〇〇メートルの草津温泉も観光の客で賑わっている。

歴史をさかのぼってみると、全国でも珍しい、草津温泉だけの生活の知恵と思われる「冬住み」という制度があった。標高一、二〇〇メートルの高地に位置する草津温泉では、冬期間、暖房の施設も無く、また雪が多かったために客が途絶してしまうことから、温泉宿を休業とし、麓である標高八〇〇メートルの旧小雨村に移動して冬住みをしていた。旧小雨村は草津温泉の東側の麓にあり、谷間であるために比較的暖かく、管理もできる近い地である。旧前口村も冬住みの場所であるが、標高が一、〇〇〇メートルあり、旧小雨村の方が冬住みをする人の数が多かったようである。旧暦の四月八日に温泉開きをし、同歴十月八日に温泉じまいをする。したがって、六ヶ月の間に冬住みをする分まで稼ぐことが必要だった。街道筋の宿は一泊だけの客であるが、湯治に来る客は滞在をして療養をする。このため、建物も良くし、接待もしなければならぬ。こうしたことから、山奥にありながらも、古くから立派な温泉の町並みをなしていたことが温泉誌など

にも記されている。また、前田利家が入浴したことや戦国時代の武将が来浴していることなど、五・六〇〇年も前から立派な温泉町をなしていたことが知れる。「草津千軒江戸構」という言葉が残っているが、旅館業の人が冬住みの屋敷を構え、いろいろな業種の人たちが、冬の間酒造りや味噌、醤油、凍み豆腐といった、夏のための準備に忙しかつたと想像できる。

草津温泉への道は信州方面から、また上州方面からと多くの街道があるが、特に温泉街道となる暮坂道に冬住みの里はあった。古い地図では小雨村とも、冬住みとも記載されている。草津、沢渡、四万、伊香保と続く温泉街道であり、多くの文人墨客の通った道でもある。戦国時代には真田軍団にとつても、上田と沼田を結ぶ重要な道だった。

こうしたことを知って歴史に興味を持ったのか、平成六年ごろ、仲間が古文書部を初めたことをきっかけに、これに参加をした。定年退職をし、時間ができたため、先祖が「冬住みの家」として使っていた当家の蔵の片付けを始めた。歴史と文学が好きで二人で整理を始めたところ、古い多くの資料を発見した。古文書の解説を入山出身で前橋市在住の山本元治先生に、漢文の解説は草津町の須賀先生にお世話になった。資料が多いことや蔵があることなどから、展示公開をしては、ということになり、日々、整理に努め、平成七年の八月七日、三つの蔵を利用しての「資料館」を開館できた。

以来一五年、入館者の人たちには多くの資料と保存状態の良さに関心していたに違いない。母屋の半分も解放しているため、一階・二階と見ていただくのと、群馬一番という六二センチの太い大黒柱に驚かれる。長く続いた冬住みの制度が明治三十年に終わり寂しさも感じるが、今、囲炉裏のある部屋でお客様と語ることが、毎日を楽しめるものにしていくれている。



冬住みの里資料館



62センチの大黒柱（冬住みの里資料館）

文化財

一 指定文化財

日本カモシカ

昭和九年五月一日、国指定文化財、天然記念物（動物）

昭和三十年二月十五日、国指定文化財、特別天然記念物（動物）

所在地、六合村

日本カモシカは、わが国固有の哺乳動物で、ウシ科カモシカ属に属す。かつて、本州・四国・九州の山岳地帯に数多く生息していた。

容易に捕獲できるので貴重な蛋白質源として乱獲され、加えて森林の伐採が進み、奥へ奥へと林道網が整備され、拡大造林推進のもとに針葉樹林化が進む一方、開発行為の結果、自然破壊が加速した。

このため、カモシカの分布領域と個体数が急に減ってしまったので国は昭和九年に天然記念物に指定し保護したが、状況好転せず、昭和三十年特別天然記念物に指定して、一層の保護に力を入れた。

このような中でも六合村には数多く生息していた。六合地区は標高六〇〇m〜二、五〇〇mの間にある上信境の山並みの中で、急峻で岩場や沢すじが多く、積雪寒冷の峡谷型山村でカモシカの生息に最適の環境である。

カモシカの生息領域に開発の手が入るようになり、人里近くの植林地でスギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツの林齢五年ぐらいの林や農作物に食害が発生し、昭和五十四年文化庁、環境庁、林野庁では、保護と被害防止の両立を図る対策に着手した。

六合村でも被害の状況は次第に申深刻の度を増し、昭和五十九年から昭和六十二年までの四年間にわたって、国庫補助と県費補助事業を導入して、ポリネットやポットベール、ネットフェンス、また忌避剤などの資材で対策をし、防除効果を確認しながら生息調査を実施した。

昭和六十年と六十一年のカモシカ通常調査によると六合村に生息する数を一〇〇頭以上と推測している。

その後は、国産木材の価格低迷から造林面積はほとんどなくなり、造林地食害の問題は消滅し、農産物食害は、ニホンザルや猪による害がカモシカの害に比べてはるかに甚大で、被害対策の中心が変わり、今ではカモシカの食害は取り沙汰されていない。人里近くに出没し、しばしば目撃するがかつてのように害獣として恨まれることはなくなった。



ニホンカモシカ

赤岩地区重要伝統的建造物群保存地区

平成十八年七月五日 国伝統的建造物群保存地区選定

所在地 六合村大字赤岩字鍛冶谷戸、字中野及び字林檎ノ木の全域、
字水の窪及び字岩ノ上の一部

赤岩集落の紹介

赤岩は六一世帯、総計一七八人が居住する（二〇〇四年）小さな山村である。集落の西側には白砂川が流れ、斜面を丹念に耕した田畑があり、背後に山林が広がっている。地区内には赤岩神社や小さな御堂、水の神や山の神、馬頭観音像など村人の信仰と深く結びついた建物や石碑、墓地が点在している。各農家の屋敷構えを見ると、周囲に傾斜地を造成した古い石積みが残り、敷地内には主屋のほか、収穫した穀物の貯蔵や製麻に使った蔵、農機具をしまう小屋などが建っている。このよ



うに赤岩は、日本の典型的な農山村の姿をよくとどめていることから、平成十八年七月に農家〇〇戸と周囲六三平方メートルという広い区域が国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に群馬県では初めて選定された。

赤岩集落は背後に山を控え、手前に白砂川を臨む傾斜地の中腹に位置し、メインの通り沿いに屋敷地がコンパクトにまとまって形成されている。屋敷



重伝建赤岩

地の周囲には山側、谷側の双方に農地が広がる。農地はほとんどが畑で水田は極めて少ない。さらにその外縁には上の観音堂などの宗教施設が集落を守るように取り囲む。背後の山もまた、近年までは木材や茅など生活に必要な資源の供給地で、現在も山の神、水の神などが祀られている。

赤岩は集落の大半を山林が占め水利に恵まれず、古くから田畑からの収穫だけで生計が成り立つ家が少なく、生活は厳しいものであった。赤岩に残る天明八年（二七八八）の絵図には、農業のほかに男は山仕事、女は麻布を行うと書き添えられている。明治十年（一八七七）に作成された「上野国郡村誌」には、繭を前橋に、麻を東京へ出荷していることが記され、明治初期には既に養蚕が行われていたことがわかる。また大正十一年（一九二二）に作成された「所得申請調査帳赤岩」には、所得源の種類として、田、畑、麻、蚕、金銭貸付、柚木挽、大工、山林伐採、屋根屋、貸宅地、水車貸挽、物品小売、出稼など多様な職

種が書上げられている。この職種のうち農業と養蚕はほとんどの家で
行われていた。麻も三分の一の家で行われていた。大正期には農業と
養蚕を中心、その他各家によってそれぞれ何らかの副業をこなし生計
を立てていたようだ。養蚕は農家の貴重な現金収入源であったが、そ
の一方で桑畑を開墾するには土地に限りがあること、蚕がうまく育た
ず繭がまともに採れない年もあること、繭相場の変動が大きいことな
どから専業とすることが難しかった。そのため時様々な副業を行う必
要があったのだ。

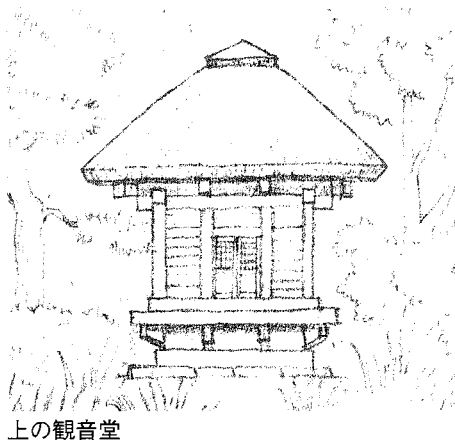
現在の赤岩の集落景観を特徴づける建物のほとんどは、近年に入っ
てから建設されたものである。次に代表的な建物について説明したい。

①上の観音堂(かみのかんのんどう)

赤岩地区の北端に位置する。正面扉上部の扁額の裏の改蔵から、
宝暦甲申年(一七六四)に関吉兵衛という人が願主となって創建し
たとみられる。

間口三間、奥行二間、平屋建、寄棟造、茅葺の小さな堂である。堂内の仏像には、中央に聖観音立

像、右に薬師寺如来立像、左に不動明王立像が安置されている。堂内壁
面の貫より上部には、前面に麒麟などが描かれている。仏壇上部の肘木
が丸みの少ない曲線であり、十八世紀特有の形状を有していることから、
扁額の年代の頃に建てられた可能性もあり、そうであれば赤岩地区で最



上の観音堂

も古い建築ということになる。

②毘沙門堂(びしゃもんどう)

赤岩地区の他の堂と異なり、この堂
だけ集落内の屋敷地が並ぶ通り沿いに
建つ。創建時期は不明であるが、天明
六年(一七八六)の「御料所 御私領
耕地絵図」に「びしゃもん堂」の名
前がみられることから、遅くともこの
時期には存在していたことがわかる。

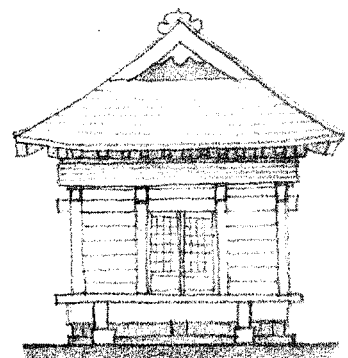
現在の堂は堂内に残る棟札より大正十年に、赤岩地区内の大工の湯本
茂十郎の手によって再建されたことがわかっている。規模は間口三間、
奥行三間、平屋建で、入母屋造妻入トタン葺である。

以前は四月十三日がこの堂の祭礼の日であったが、近年春祭(赤岩神
社の祭礼)前日の四月十一日にかわった。

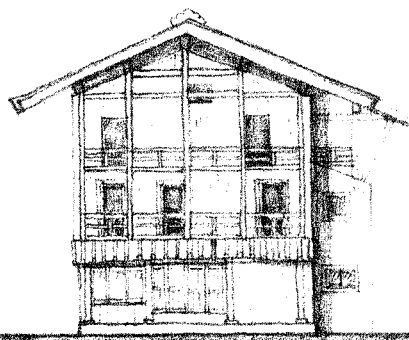
③湯本家の三階屋

地区中央部の山側に建つ。主屋は間
口五間半、奥行五間、他の主屋と異なり、
正方形に近い形状を有する。赤岩地内
には近年まで三階建の主屋は四棟あつ
たが現在二棟を残すのみである。この
主屋は、置屋根形式の切妻屋根をもち、
妻入、土蔵造という珍しい形態を有す。

現在の主屋は、享和三年(一八〇三)の赤岩の大火で類焼した後、文



毘沙門堂



湯本家の三階屋

化三年（一八〇六）頃に再建されたものといわれている。当初は平入の前兜型の二階建てであった可能性がある。棟札より明治三十年（一八九七）三階建てに増築されたことがわかっている。

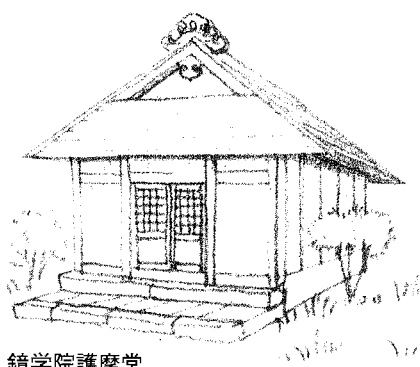
当家が近世において医者を、近代において教育長や村長を務めたからだろう、この主屋は農家的要素をもつと同時に通り側に面して趣向を凝らした座敷が設けられるなど町屋的な要素も兼ね備えている。主屋二階の北側の角の屋敷には、床柱に珍木が使われ地袋の引違戸に天使の飛ぶ絵柄の金唐紙が張られるなど、技巧を凝らしたつくりになっている。この座敷には幕末に高野長英を匿ったという言い伝えがあり、「長英の間」とも呼ばれる。三階は蚕室にするために増築されたものである。この主屋には、地階も設けられており、戦前まで当家で造っていた薬用酒造りに使用していたらしい。

④ 鏡学院護摩堂

この堂は集落中央部を東西に貫く中瀬木「ナカセギ」通りを山側に少し行ったところに建つ。鏡学院は修験の寺で、平成三年まで修験者が、加持祈祷を行っていた。

この堂は赤岩地区内の大工湯本茂十郎が昭和七年に建てたものである。間

口三間、奥行五間、平屋建てで、屋根は正面を入母屋構造、背面を切妻造りとし、鉄板で葺いている。壁は土壁であるが、現在は外周を金属板で覆っている。堂内の仏壇には、不動明王、役行者、妙見菩薩、蔵王権現



鏡学院護摩堂

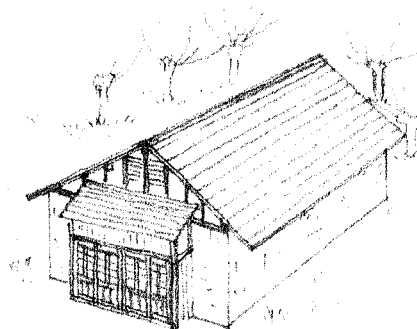
などの諸像が安置され、堂内中央には護摩が据えられている。

⑤ 稚蚕飼育所

飼育の難しい稚蚕を共同で飼育する目的で、昭和三十七年頃建てられた施設である。土室（ドムロ）とも呼ばれて居り、現在地区の婦人達により蚕から糸を取る座繰り作業や、糸加工による、くみ紐が体験されている。

間口四間、奥行一〇間、平屋建て、切妻

造妻入、トタン葺の建物である平面は、稚蚕設備のある空間と物置に分かれる。飼育室の下部には温湿度を調整するための電熱線が敷設され、上部に飼育柵が設置されている。物置部屋の下には糸を保管した地下室がある。

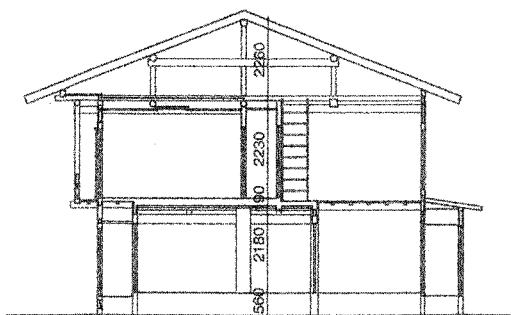


稚蚕飼育所

⑥ 安原義治家

主屋は大正七年に建築された。安原家の新宅で地元大工の湯本茂十郎氏が養蚕に適した建物として初めて建築した家屋といわれている。

尚二代目義雄氏は大正五年私立甲種高山社蚕業学校を卒業し、養蚕教師と



安原義治邸主屋梁行断面図

して永年養蚕飼育指導に従事した。

養蚕農家の造りには、「デバリ」と「セガイ」という特徴がある。デバリは一階と二階の境のところで外壁上も前に出された梁をいい、セガイは屋根の部分で、二階の梁を外壁より前に持ち出して桁をあえるところ。

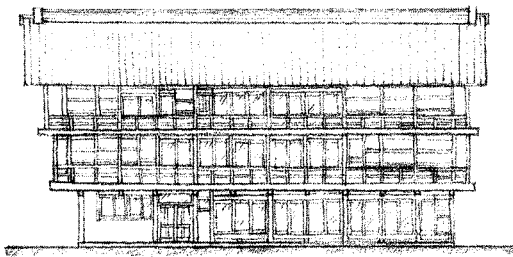
これらは、なるべく柱を設けずに広い空間を確保するためのもの。デバリの部分はテストとも言われ物を干したり通路にしたりと、養蚕や農作業のために工夫された建築工法といえる。

屋根の部分は軒が深く、屋根が張り出しており、屋根下の作業スペースを確保するための工夫か、更に軒天井には板を貼るなどの特徴が見られる。セガイや軒天井の板など、他の地域の一般的な養蚕農家に比べて豪勢な造りといえる。

⑦ 関家の三階屋

地区中央部、山側に位置する。主屋は間口一〇間、奥行四間半、総三階建の建物で、地区内の主屋の中で最も大きなものである。切妻造平入、昭和三十年頃までは栗板や杉皮を用いて葺いていたが、現在は瓦葺である。主屋は幕末から明治前期頃に建てられたと考えられ、当初は茅葺で前兜型の階建であったが、明治中後期に増築され、総三階建になったとみられる。

一階平面は、当初は土間と喰違い四間取り

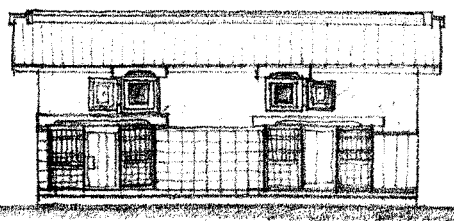


関家の三階屋

に板間が一室ついた五間取りで、土間端にウマヤがあった。二階平面は、間仕切りのない広い一室空間となっており、昭和三十年代まで養蚕が行なわれていた。稚蚕飼育が地区において共同で行なわれるようになる以前は、二階で稚蚕飼育も行っていたらしく柱や壁に間仕切りや目張りをした痕跡が残る。現在では冬季に蒟蒻芋を貯蔵する部屋として使用されている。三階もまた広い空間になっており養蚕に使われていた。現在は藁細工を行なう場として利用されている。三階右端には現当主の母が輿入れする際につくられたものという板戸で仕切られた座敷が設けられている。またかつては三階の上に間口四間半、奥行二間半の四階部分が上籾専用の部屋として使用されていたが屋根の改修により解体された。

⑧ 安原繁安家の土蔵

地区中央部川側に位置する。間口約六間半、奥行約二間、二階建てで地区内で最も大きい土蔵である。切妻造平入り、置屋根になっていて、現在は一棟の蔵であるが、もとあった「中の蔵」に「新蔵」を増築して一棟にまとめたものである。一階部分には穀物を貯蔵するための穀櫃が設置されている。なお当家の主屋は三階建の大きな建物（間口間、奥行間、年建築であったが老朽化がはげしく危険となった為年解体し新屋が建築された。



安原家の土蔵



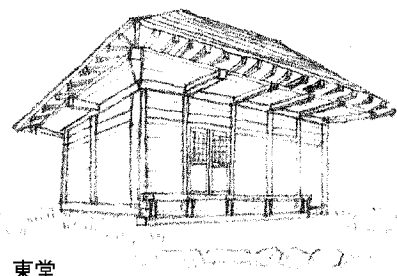
関家の三階から（赤岩）

⑨ 東堂

集落の南寄り、谷側斜面を石積みで造成した場所に建つ。間口三間、奥行二間、平屋建、寄棟造平入の小さな堂である。もとは茅葺であったが、昭和三十年の屋根替えの際にトタン葺に改められた。

堂内仏壇には、地藏菩薩を中心に十王などの像が安置されるほか、百万遍念仏のための数珠が木箱に納められ保管されている。建立年代については、正面の虹梁絵様

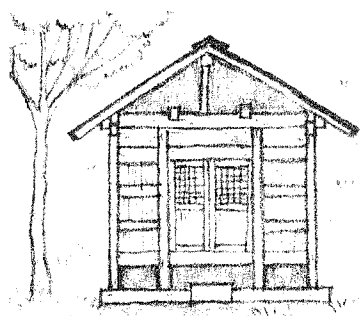
から十九世紀前半に建てられたものと考えられる。



東堂

⑩ 向城の観音堂

集落の南寄り、山側斜面に建つ小さな堂である。間口三間、奥行二間、ほぼ正方形の平面をもつ。平屋建、切妻造妻入、もとは茅葺きであったが現在は鉄板で葺かれている。堂内には吊り仏壇があり、本尊である聖観音立像を安置するほか、地藏菩薩像、位牌などを祀っている。



向城の観音堂

⑪ 養蚕博物館

この施設は、平成十八年に篠原一美家主屋の二階部分を改造し、地区内に残る養蚕道具を展示する目的で開設されたものである。建物は昭和七年に赤岩在住の木工、湯本茂十郎がつくったもので、二階ではかつて

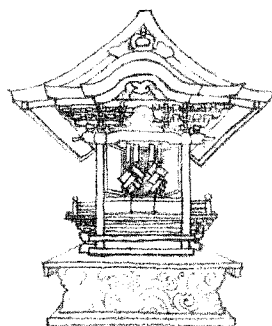
養蚕が行なわれており、間仕切りのない広い一室空間になっていた。

⑫ 赤岩神社

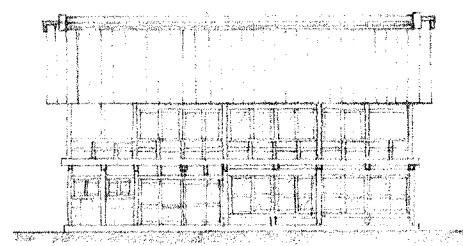
赤岩神社は、明治四十一年（一九〇八）に赤岩村内にあった五つの神社（諏訪神社・熊野神社・神明神社・飯綱神社・稲荷神社）を合祀してつくられた。境内は旧飯綱神社の敷地を引継いだものである。

赤岩地区の南端に位置し、鳥居から三〇〇メートルほどの参道をのぼったところに拝殿があり、その背後の石段をのぼると覆屋に納められた本殿がある。本殿の建築形式は、隅木入りの一間社春日造、柿葺で、彫刻が全体に施され、非常に華やかな、北関東特有の手法といえる。拝殿は間口三間、奥行五間、入母屋造妻入で、棟札より大正三年に建てられたことがわかっている。地区内の稲荷神社から不要になった建物を移築し、この場所に再建したという言い伝えがある。

赤岩神社では、毎年春と秋に二回祭礼が執り行われている。とりわけ四月十二日に行なわれる春祭は華やかである。祭礼の準備、執行、片付



赤岩神社本殿



養蚕博物館

けの一連の作業が四月十一日の朝から十三日の未明までかけて行われる。四月十一日の夜から十二日の夜には、各家の前庭に立てられたボンボリと呼ばれる灯籠に火が灯され、集落は幻想的で厳かな雰囲気にも包まれる。

赤岩集落を歩く 二〇〇六年度

制作 暮らしの建築舎

協力 東京大学大学院工学研究科 建築学専攻

藤井研究室

発行 六合村教育委員会



赤岩集落

赤岩散策まっぷ

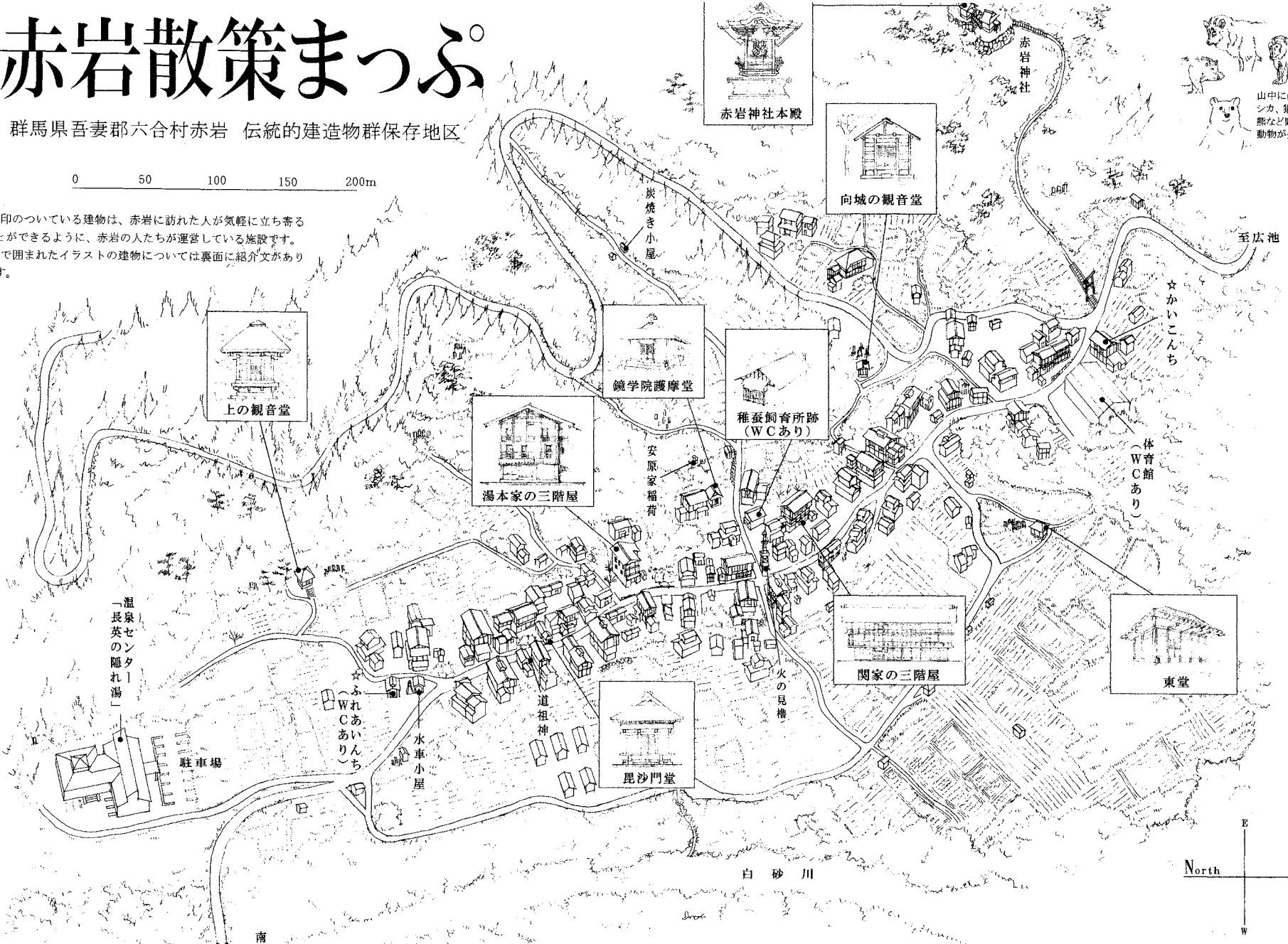
群馬県吾妻郡六合村赤岩 伝統的建造物群保存地区

0 50 100 150 200m

・☆印のついている建物は、赤岩を訪れた人が気軽に立ち寄ることができるように、赤岩の人たちが運営している施設です。
・□で囲まれたイラストの建物については裏面に紹介文があります。



山中にはカモシカ、猿、猪、熊など野生の動物が生息



「温泉センター」
「長英の隠れ湯」

至国道 292 南大橋

入山世立のシダレ栗

昭和三十七年八月二日、群馬県指定文化財、天然記念物（植物）

所在地、中之条町大字入山字上世立二三七四番地、

所有者、山本正夫

管理者、山本正夫

村の人たちはこの栗の木を天とう栗とも呼んでおてんとう様（太陽）が休む木であると語り伝えている。

道路を登り上がって高台の上世立に出るとすぐ、道の土手の上に姿を見せる。かたわらに建つ説明書きは次のようにいう「白根山と浅間山が一望できる上世立の高台にあるしだれ栗は、栗とは思えぬ奇態で、二五〇余年の長い歴史を刻んできました。東西五m、南北七mに大きく広がり、その枝は地面につかンばかりに悠然と垂れさがっています。このような珍しい姿がなぜ生じたのか、その原因を明らかにすることはできませんが、突然変異によって生まれたものでしょう。

群馬県内でも唯一のしだれ栗です。村人は、このしだれ栗は神々が山々に往来する折にこの木陰で泊まつたり休んだりした神の宿であると信じて大切に保護してきました。今でもこの木を切ると病気になるかといわれ、村人はおそれと愛情を抱いて、大切にしています。」

目通りまわり三・一m、根本まわり五・一m、樹高七・三m、形成層のみの幹で獅子頭が髪を振り乱したような樹冠を支えている。



熊倉遺跡

昭和五十九年十二月二十五日、県指定史跡、遺跡地

所在地、中之条町大字入山字松岩四〇五四番地の四一

所有者、中之条町

管理者、中之条町

熊倉遺跡は、昭和三十六年、群馬大学教授尾崎喜左雄博士によって発見された。尾崎博士は、散在する地面の窪みは住居跡であると直感し、古代の集落跡と判断した。

翌三十七年に第一回発掘調査を実施して、予想どおり次々と住居跡を調べ出し、石で組んだカマドの調査も成功した。三十九年の最終調査までに六軒の住居跡を発掘し、ほかに四〇か所に近い窪地を確認している。昭和五十六年に、群馬県教育委員会の協力を得て、二度目の発掘調査が行われ、多くの貴重な資料が収集された。この集落跡は平安時代の特殊な職人集団のものと推定されている。

入山の浄土信仰仏画（七幅）

平成八年三月二十九日、県指定重要有形民俗文化財

所在地、中之条町大字入山八九一番地

所有者、霜田かず子

管理者、霜田かず子

この仏画の作者や伝承経路は不詳であるが、室町時代後期から江戸時代初期に製作されたもので、現在も参詣されており、民俗学的にも大変貴重な資料である。毎年八月十五日（お盆）の一日だけ掛けられて一般に公開されている。

寸法及び材質並びに銘文

・紙本著色祖師像残欠 九八・五cm × 三六・〇cm

大永四年（二五二四）

（銘文） 弥陀 大永四年五月 日

旦那助右衛門 敬白

・紙本著色菩薩及び祖師像残欠 九三・五cm × 三七・三cm

室町時代

・紙本著色釈迦三尊・十六善神像 八二・六cm × 三四・九cm

室町時代

・紙本著色阿弥陀如来立像 八二・〇cm × 三四・三cm

永禄十三年（二五七〇）

（銘文） キリーク（梵字） 奉與立助右衛門

永録拾三歳極月拾三日敬白

・紙本著色阿弥陀如来立像 八七・八cm × 三六・五cm

慶長十四年（一六〇九）

（銘文） 真田御志可ん 慶長拾四歳五月三日 助右衛門

・紙本著色聖徳太子及び十祖師像 九七・三cm × 三七・二cm

慶長十五年（一六一〇）

（銘文） 下田助右衛門

慶長拾五〇〇〇〇〇之所也真田之 ぶち 御志可ん

・紙本著色阿弥陀三尊来迎図 七一・〇cm × 三二・七cm

江戸時代

製作時代

大永四年（一五二四）〜江戸時代

由来及び沿革

吾妻郡六合村入山の矢倉に所在する霜田かず子家には、七幅の仏画が保存されている。これらの仏画は、作者や伝来経路は不詳であるが、室町時代後期から江戸時代初期に製作されたもので、現在も信仰の対象として参詣されており、大変貴重な資料である。

これらの仏画は、現在では毎年お盆の八月十五日に掛けられ霜田一族が参詣する仏であり、岩手県のマイリノホトケや六合村に北接する秋山郷、滋賀県湖北地方の臨終仏の信仰形態と似たものと考えられる。

文化財の価値と指定の理由

本資料は、六合村の入山地区一帯で行われていたお盆行事の関連資料であり、県内はもとより全国的な視野からみても貴重な信仰形態を伝えるものといえる。

吾妻地域には、中世の善光寺三尊像や阿弥陀来迎図が分布しており、浄土信仰の興隆を物語っているが、本資料も浄土信仰を示す好資料といえる。

絵画としては、中央の作でなく地方の絵師が製作したものであるが、室町時代の作であり、貴重である。また、銘文によると元は真田家の臣の下田助右衛門が製作させた旨が記されており、在地武士の信仰を窺える資料である。

現在、仏画の有形民俗文化財の指定はなく、本資料を代表的な浄土信仰の民俗を伝える仏画として県指定し、保存・活用すべきである。

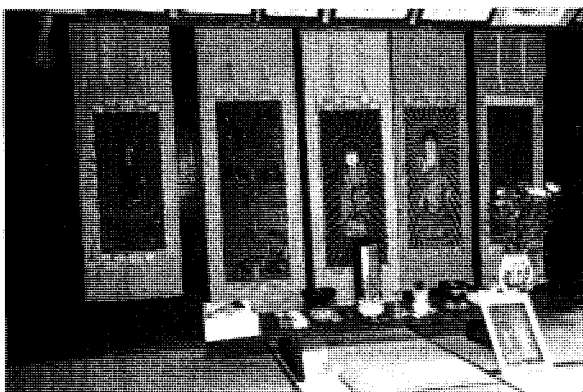
「群馬県保護条例施行規則第二八条の規定による指定等の基準」

（昭和五十二年、群馬県教育委員会告示第一号）第四号の一の（六）に該当する。

群馬県指定重要有形民俗文化財の指定基準

一、次に掲げる有形の民俗文化財のうちその形態、製作技法、用法等において群馬県民の基礎的な生活文化の特色を示すもので典型的なもの

（六）信仰に用いられるもの。



霜田家の掛軸

佛画にまつわる言い伝えと祭りのしきたり

佛画伝来の径路は不詳である。縁起めいた話は、入山のの人たちの間で、集落により、また語る人によつていくとおりかの話がある。引沼の山本茂平氏（昭和四十九年六月三日、八三歳没）が若い頃から聞いた話を書き留めておいたもの、茂平氏の炉辺話を記憶している人の話、この佛画を所有している霜田かず子氏が伝え聞いていること、また、その他の人たちが話すことなどである。：遺漏、落度の失を咎められる廉はあると思うのだが、ご諒願つた上で、これらの話のあらましを括ってみると、昔のこと、「シンラン」という人が始めた宗旨の坊さんが巡つてきて、引沼の日ヶ闇山の西の端、花敷芝という所に落ち着いた。先に住んでいた三軒の組の者と協力して畑を耕し、山林を撫育して何不自由なく暮らしていた。

和尚さんは、妻を持つてもよいという宗派で、尼さんだった人を奥さんにしていた。京都にほど近い大峰山を信仰してその御神体を請け、また、家宝として阿弥陀仏の掛軸を七幅持参して信仰した。そうして宗旨を弘めるため、拜んで回った。和尚さんには二人娘がいた。一人は阿弥陀仏の掛軸をもつて矢倉へ嫁ぎ、あと一人は、大日像を持って見寄へ嫁いだという。

別の話は、疫病に罹り和尚さんの家が絶えた。それについて、易者だか山伏かの者が神霊か物の怪の祟りだという。尊い神仏に關するものは、「お帰り下さい。」といつて焚き上げるか清い流れに流すという慣わしであったから、罰を怖れて、残った大日像は綺麗な箱を造つて納め、元の寺へ帰す心算で清き白砂川の流れに托して流された。それが見寄に漂着して、見寄の者が堂宇を建てて祀つたという。七幅の仏画は、矢倉に縁

付いていた娘が持つて行つて家宝にした。矢倉の家では代々崇拝しているので長く栄え、山や畑がきりもなく集まつて財産家となり、助右衛門さんと言われて幅を利かせた。その末孫が霜田かず子氏である。

世立方面には、仏像を矢倉から見寄へ移したとの話がある。そうだとすれば疫病で和尚さんの家が絶えたとき、見寄の親類の者が引き受けて祀つたものであろうという推測も語られる。

また、掛軸を守り続け、祭り続けることが億劫になつたとか、たたりがあつたとかで、見寄の前の川かそれともどこかの川に捨ててきたそれを矢倉の長三郎さんの父ユウ吉さんが拾つてきたとも言われる。

和尚さんが巡つて来て住みついた花敷芝に前々からいた三軒の百姓は、その後、日ヶ闇山に棲む狼の群が度々出没して怖くてたまらず、また、大雨で白砂川に面した急斜面にあつた墓地が川に滑り落ちたりといった事情が重なつたため、大勢が集まつて暮している本村の方に畑も山林もあつたから、引き墓をして移住した。それが今の引沼の中組といわれる組のもとなつていく。

昔から、霜田家のものが家じゅうで遠くの畑や山へ出ているとき、にわか雨が降ると白い法衣を着た坊さんが数人で庭に干してある穀類や衣類を雨に濡れないよう軒下に取り込んでいた。その様子を、矢倉川の対岸にある通称「ハラジ」という耕地で、野良仕事をしていた和光原の人たちが見て、誰が取り込んでいるのかと盛んに不思議にしていたという。掛軸の中の阿弥陀さんがしてくれているのであろうということになつた。掛軸の仏画はいよいよ靈驗あらたかといわれた。

昔、葬儀のときは、この軸を先頭に念佛を唱えながら葬送した。他にも仏画の軸があり、寺の代りに信心した。

阿弥陀様が矢倉に来た頃には、根広の瀧沢寺月州庵は建てて在ったといわれ、月州庵は葬儀など引導をすることとなっていたが、矢倉の阿弥陀様とは何の係りもなかったようである。

仏画の掛軸七幅は、矢倉と和光原の霜田家の人たちによって正月と盆の十六日に御開帳して祭られてきた。まわりの村や近郷からも参拝者があつて、霜田家は、赤飯を炊いて振る舞っていた。今は盆の十五日に御開帳して祭っているのであるが、今も参拝者には馳走している。御開帳の日以外は、誰にも見せてはならないとされ、霜田家の掟となつて守られている。大まかには以上のようなのである。

八月十五日の祭りのときは、阿弥陀仏の掛軸を飾り、その前に机を据えて、箱に入れられた理趣文(経)一巻が立てられる。山葡萄の葉五枚ほどを敷いて器として、その上に米の飯、赤飯、おかず類など、自分で食うものと同じ馳走を進せて、十四日を「仏の年取り」といつている。

浄土信仰の形態を類推できるものと思われるが、理趣文が一体何を意味するのか、またどう使われてきたのかも含めて、仏画を中心とする信仰実相が判明し、習俗の姿に対する詳しい評価が期待されるところである。

広池遺跡

昭和五十一年三月二十七日、六合村指定文化財、遺跡地

所在地、中之条町大字赤岩字広池一一二一番地

所有者、篠原好次

管理者、中之条町

この遺跡は、昭和四十四年群馬大学史学研究室が調査して発見したものである。遺構の中央に囲炉裏があり、地表から三五cm下がった所が床面である。比較的浅い竪穴式住居の跡である。

住居の規模は、直径3mの円形で、ほぼ中央にある炉は方形に石で囲われている。竪穴の周囲には一〇個の穴が見つかり、その内の四個が位置、大きさ、深さから主柱を組んだ柱の穴と考えられる。

床面からは炭化物が、炉の付近からは石器、土器破片が発見された。これらにより、この遺跡は縄文時代中期後半と考えられ、現在から約四、〇〇〇年前の竪穴式住居跡である。この時期に近い住居跡として、郡内に長野原町大津の勘場木、中之条町上沢渡の牧場の二つがある。敷石住居跡との関係において、また計画的発掘調査がなされた遺跡としてこの竪穴式住居跡は特に貴重である。遙かに遠い祖先の暮らしの息吹を感じることのできる文化財である。



広池遺跡

妙全杉（妙全尼の逆さ杉）

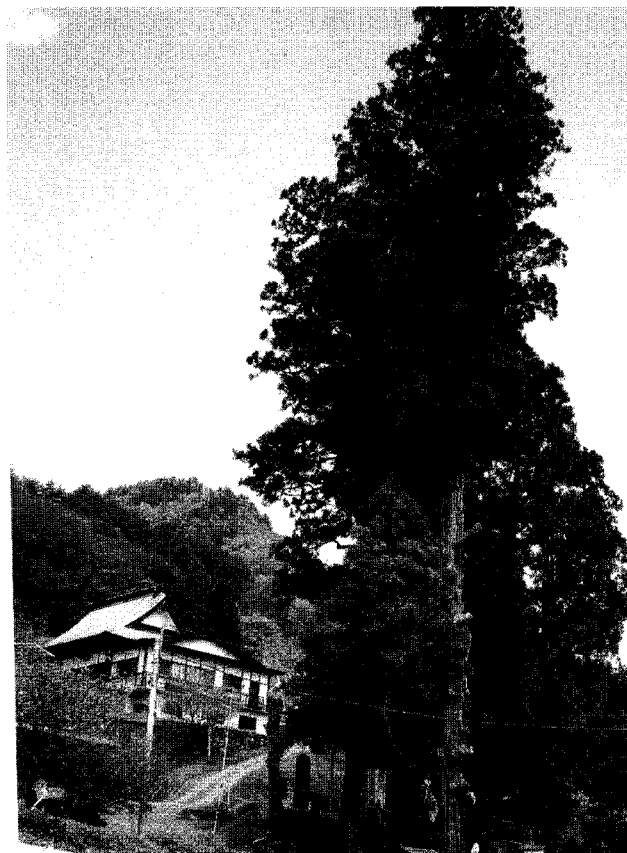
昭和五十六年十二月十二日、六合村指定文化財、天然記念物

所在地、中之条町大字日影一六〇番地、

所有者、宗教法人龍沢寺、

管理者、明田川道雄

妙全杉は、曹洞宗龍澤寺の境内地にあり、国道二九二号から寺の本堂へ登る石段の登り口の左側に聳えている。杉の根元にかかげてある説明



書きには、次のように書かれている。

「龍沢寺（りゅうたくじ）は天養元年（一一四五年）に、尼僧妙全によって建立されました。丸顔で慈悲深い妙全尼は、村人の尊敬と親愛の念を一身に集めていました。遠い集落へもお勤めに出ることが多かったようです。足に頼るしかなかった当時にあつては、今では想像もできぬほど、遠方でのお勤めは大変なことであつたでありましょう。妙全尼はいつも杖をついてお勤めに出たそうです。龍沢寺の境内にある樹齢八四〇余年・目通りおよそ三mという大杉は、この妙全尼がお勤め帰りに、寺の石段の下に挿しておいた杉の杖が、そのまま根付いて成長したものだと言われています。村人はいつからともなく、この杉を「妙全の逆さ杉」と呼び、いつくしんできました。」

逆さに挿した杉の枝で作った杖が不思議なことに活着したと言い伝わり、確かに妙全杉の枝は、いったん下を向いて伸び、それから曲がつて上向きに伸びている。逆さ杉のいわれに得心のゆく枝ぶりである。白砂川の溪谷に沿って暮らす人々と世上のうつり変わりを八六〇余年に亘って見つめてきた古木の姿は生命の神秘を漂わせている。

小倉のしだれ桜（ベニシダレ、エドヒガン）

昭和六十一年二月十三日、六合村指定文化財、天然記念物

所在地、中之条町大字入山小倉三八乙

所有者、小倉住民（代表山口政勝）

管理者、山口政勝

小倉はもと山口一家だけであった。白根山のふもとなので白根様をまつた。草津の白根様より小倉の白根様の方が古いので、小倉の方が本家本元だという。

この境内地にシダレザクラがある。小倉の人は白根桜と呼んで大切にしている。かつてこの桜を増やそうと何人かの者が取り木や挿し木を試みたが成功しなかった。

樹高、一〇・〇〇m、根まわり、五・三六m、胸高まわり、三・四〇m、枝下、五・一七m。境内地に建つ説明書きは次のようにいう。

「白根神社の境内に位置し、樹齢千年と推定される見事なしだれ桜であり、この桜は、遠く中国にその起源をたどることができる。エドヒガンという珍しい種類です。

樹高一〇m、根廻り、五mあり地面にまでその枝を垂らし、美しく咲き誇る姿はとても優雅であります。

五月上旬、境内が桜に埋まると、村人は長く厳しい冬からすつかり解放され、待ちに待ったうれしい春の生活に入ります。」



十二の杜（榎）

昭和六十一年三月十三日、六合村指定文化財、天然記念物

所在地、中之条町大字入山四〇四七番地

所有者、入山共有財産

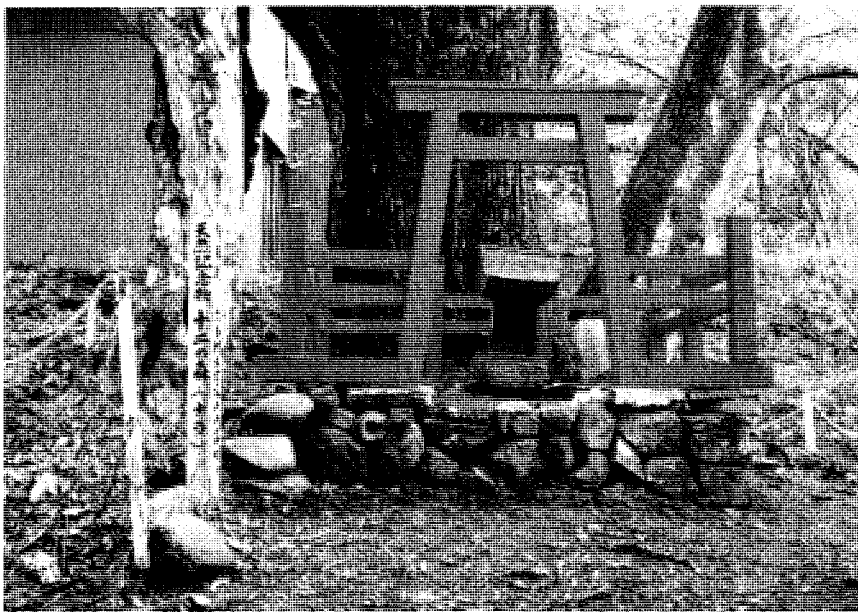
管理者、山本栗岡

山の神は十二様と言われ、女の神様で木の神でもある。山仕事をする人が祀る。毎月十二日は十二講といって祭日である。

山仕事は危険なので、山に入る時や木を伐る時など作業の度毎に十二様に無事であるよう念じてから取りかかるという信仰である。十二様の祠は方々に点在するが石宮が多い。この「十二の森」の名前の由来である十二様も石祠で、榎の大木の根本に祀つてある。

森の中に建つ説明書きによると、「暮坂峠に向かって足を進めると、ほどなく、三十mにも及ばんとする大きな榎（なら）の木が目にとまります。この大きな木の根元には、山の神様である「十二様」が祀られています。十二様の祭日は毎月十二日。この日は山の木がはらむ日なので、木を伐つてはならないとされ、お酒や赤飯を供えて、山に恵みを与えてくれるこの十二様へ感謝し、祈りを捧げます。炭を焼く人は、木を伐ることだけでなく、火入れや取り込みも十二日を選び、その日は一日中神に感謝するとともに、体を休めて日ごろの疲れをいやします。自然を大切にし、自然とともに生きてきた村人の心に、私たちは多くのことを教えられます。」

- 一、樹高二六・二四m、根まわり、四・一〇m、胸高まわり、四・一五m、枝下、二・四五m
- 二、樹高一九・六三m、根まわり、四・六〇m、胸高まわり、三・五六m、枝下、三・七〇m



百八十八観音

昭和六十二年四月二十二日、六合村指定文化財、史跡

所在地、中之条町大字入山字品木地内町道敷地、

所有者、中之条町

管理者、品木地区

中之条町大字入山字品木に、宝暦の頃（一七四九〜一七六三まで、三年間）に建立したと伝承されている百八十八体の観音像がある。

この石仏群は、入山四二九〇番地山本宗男さんの七代前の梅右衛門という人が西国三三番、四国八八番、阪東三三番、秩父三四番、合わせて一八八番の観音の霊地を一個所に集めて、地域別に横一列に順を追って並べて建てたものである。

これを一巡参拝すれば、遠国の霊地を巡礼した功德が積めるとして、山本家を初め、大勢の村人の助けになるであろうと彫らせた。

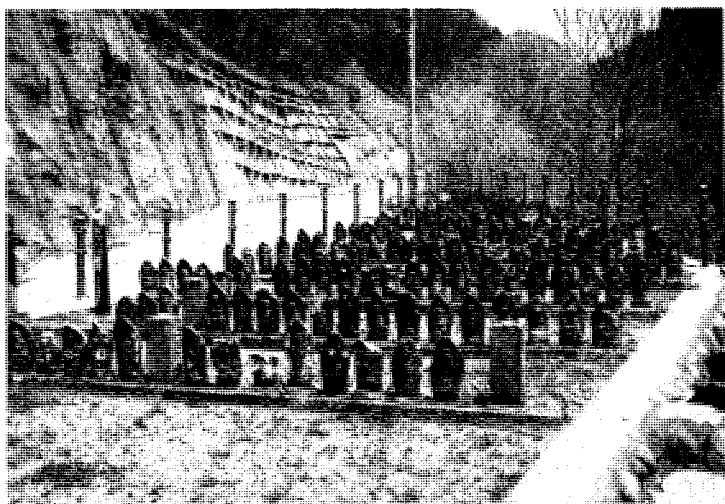
石工は、高遠か、越後か、或いは江戸か、はつきりしていない。鑿と鉄鎚を持って諸国を歩いて石像彫りする者であった。このような他国から渡って来る者を村人は「キタリモノ」或いは「キタリヤ」と称して、通り一遍の「よそ者」という見方をした。この石工は飯をもらって食うお礼として毎日観音像を彫り続けたと言われる。

石は品木集落のものより下流の須立の石が良いということから村人みんなんで協力して運び上げた。

弘法大師像には、奉建立西国、四国、阪東、秩父と刻まれ、宝暦□□歳次□□天次山本伝三郎と記してある。伝三郎は梅右衛門の嫡男である。石碑で霊場供養塔とあるのは多く見かけるが、霊場毎の観音を石像で祀った石仏群は県内に例がないといわれている。

六合村教育委員会は、昭和六十一年に注目の集まる石仏群の調査を開始して、現存基数一五五基、紛失基数三三基としたが、今は破損を修復して一七六体がある。

初めに建ててあった所は、入山乙三三三三番地の小高い山の斜面で、品木集落を見おろす草むらの中だった。ここを一旦整備したものの町道花敷草津二号線の改良工事のため、道路谷側の道路用地へ移転整備された。



小雨馬頭観音と生須馬頭観音

平成六年二月二十一日、六合村指定文化財、史跡

所在地、六合村大字小雨五四五番地、

六合村大字生須乙二八九番地、

所有者 小雨地区のものと小雨区长

生須地区のもの生須区长

この馬頭観音は、小雨地区と白砂川をはさんで対岸の生須地区に同型の石造物で祀られている。建立は天保十二年辛丑歳星十一月吉辰（一八四一）とあり、双方とも同じ日付である。

石像は三面八臂の本格的な像で三面の中央は菩薩、左右は忿怒面（ふんぬめん）頂上に馬頭を戴く。印相は中央が「明王馬口印」、右手に宝輪、宝棒、珠数、を持ち、左手に宝剣、斧、矛を持つ。

石像は石垣基礎の上に台石が二重に置かれ、反花（かえりばな）、敷茄子（しきなす）、蓮台を重ね、その上に三面観音が乗っている。台石からの全高は、二七〇cmある。「石工吉蔵」とあり、作風から相当な彫刻技量の職人であったと推測される。入山地区見寄地内の宝篋印塔（嘉永六年）も吉蔵の作であり、六合村谷における彫刻活動の全容解明が待たれる。

草津から小雨、生須、暮坂峠を越えて沢渡に通ずる旧道、草津中之条街道は、草津の湯治客で賑わっており、小雨、生須はその客の往来街道筋であった。馬頭観音は両地区の街道沿いに位置している。

客の輸送、物資運搬など馬を使って稼ぎ、生計を立てる者が多かった。

客引き事件が数多く発生し、宿屋、馬方との紛争記録もあるが、文化十二年の「小雨村馬方金右衛門事件」の発生で厳しい取締があった。また、小雨村と生須村で湯治客の送迎のやり方や両村の連絡調整の手違いなど、利害衝突から、しばしば悶着が起きた。今に残る古文書から当時の旅客や物資運搬の様子を伺い知ることができるが、馬は生活に欠かせない大変重要な存在であった。このような状況から両村の人たちは駄賃仕事の決まりを作り、共に講を結んで、共同して馬の無事息災と街道の安全を願い、同型の馬頭観音を二基彫り、両村の街道基点に祀ったと推測されている。

馬頭観音は、観世音菩薩の変化像で、転輪聖王の宝馬が四方を駆けて、威伏するように、生死の大海を渡って四魔を承服させる大威力や大精進を現し、無明の重障を喰い尽くすという意味で、馬頭を頭上に戴く像と説かれる。

人間のもつ多くの煩惱や諸悪を宝馬が喰ってしまうという本事の目的があった訳で、菩薩の一つで割と早い時期に説かれ、六観音などの一頁になっている。

一般に見る馬頭観音の造立の目的は、馬頭を頭上に戴く姿から牛馬の供養や無病息災を願うものであった。時代が下るにつれ、事故疾病死した馬の供養のため、建立したものが多く見られ、小規模で簡素な彫りである墓碑的な意味に変わって慈悲の相に彫られることが多い。

この観音のように忿怒相三面という経典にそった姿で彫られたものは稀である。



生須の馬頭観音



小雨の馬頭観音

吾孀（あずま）橋（旧坂東橋）

平成六年二月二十一日、六合村指定文化財、史跡

所在地、町道小雨生須線白砂川上、小雨側は大字小雨三九〇番地の

一生須側は大字生須三九六番地

所有者、中之条町

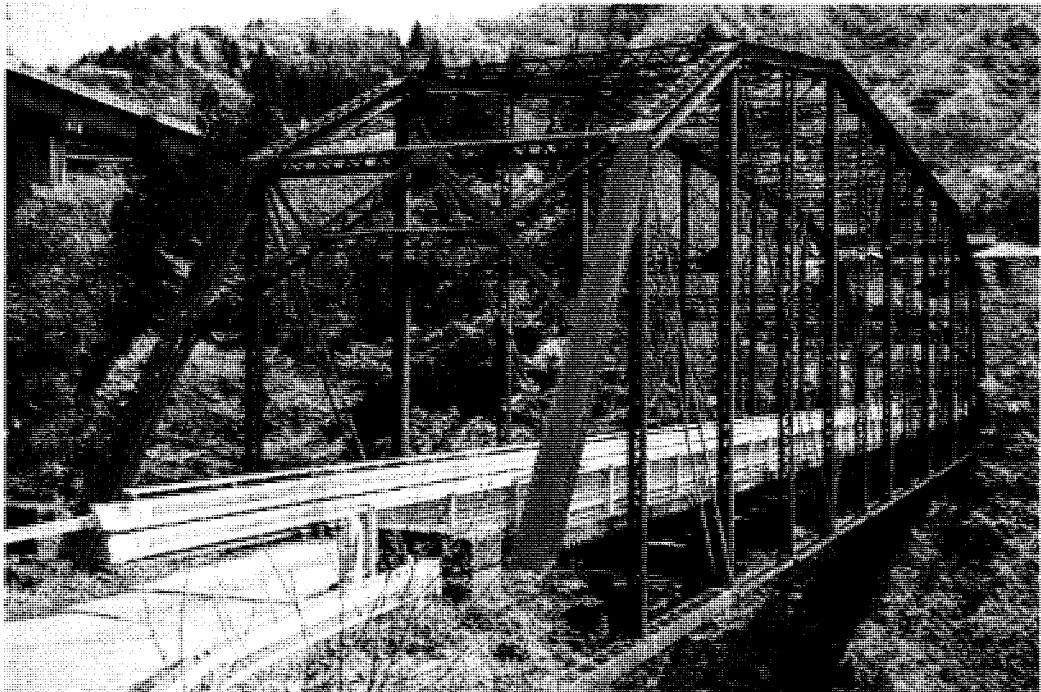
管理者、中之条町

橋の小雨側に建つ説明書きには選定理由が次のように書かれている。「当初、明治三十四年に前橋市と渋川市の境の利根川に「坂東橋」として架設された。県内初の道路鉄橋が明治三十二年の「利根橋」であり、現存する道路鉄橋としては最古の部類に属する。

坂東橋は昭和三十四年に架け替えられたが、三村（六合村、赤城村、子持村）で譲り受け移設再利用したが、唯一残っているのが吾孀橋であり明治三十四年以来九十年現在も現役で活躍している。

全長六九m、幅二・五m、鉄骨が斜めに組み合わされピンで結合されたペンシルバニヤ型トラス鉄橋、材料は全部アメリカ産輸入鋼材である。

県内唯一の明治時代の道路鉄橋で、当時の技術水準をよく伝える貴重な近代化遺産である。」



赤岩湯本家住宅

平成十一年八月二十五日、六合村指定文化財、建造物

所在地、六合村大字赤岩二八一

所有者 湯本 滋

建立年月日 一八〇六年（文化三年）頃

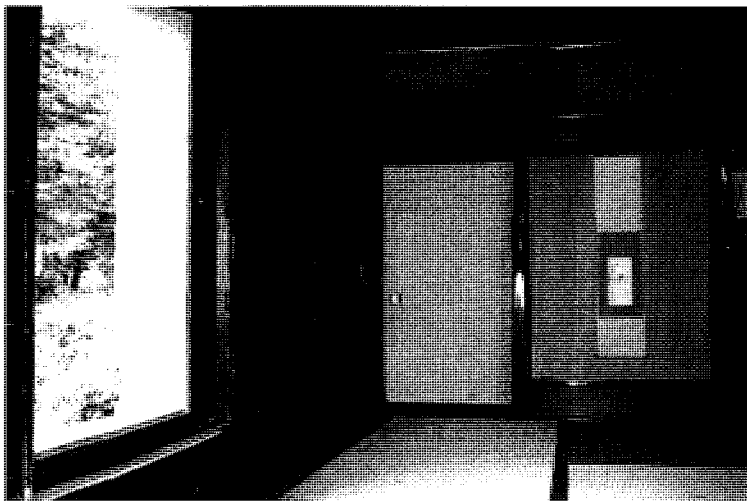
湯本家の主屋は、医業が約九〇年、売薬約五〇年、計一四〇年の間、また養蚕を約五〇年生業として営んできた。そして住宅として建築してから現在まで約二〇〇年弱を経過している。

地区の旧家である湯本家は、木曾義仲の末裔と伝えられ、戦国時代から江戸初期にかけて子孫がこの地に活躍し、繁栄の基礎を築いたといわれている。

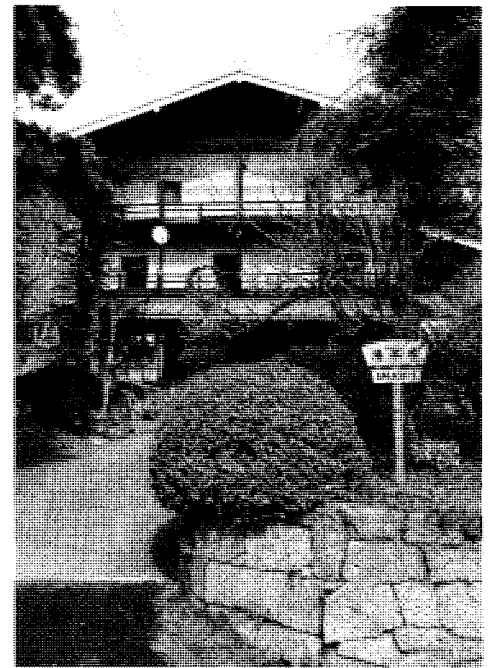
湯本家は木造三階建て土蔵造りの建物で、壁土を厚く塗り上げた防火造りで、比較的広い地下部分を備えている珍しい建物で、主屋に土蔵造りで置屋根形式を用いた民家は全国でも大変珍しい。また、二階北西隅に高野長英ゆかりの、「長英の間」と称する部屋を残し、歴史的人物に関わりある著名な建物である。



湯本家長英の間 前室



湯本家長英の間



湯本家

群馬の家伝薬

六合村湯本家の河童から伝授の家伝薬

私たちは幼少の頃から河童から薬の作り方を教わった話をよく聞いた。そして河童をいまだ見たことがなく、興味をもって想像した不気味な動物だった。

昭和初期、国民新聞と上州新報に掲載された伝説「河童の手」を紹介する。

上州吾妻郡赤岩に代々お医者の家があるが、この家の先祖の一人で評判の名医があつたので、あつちからも、こつちからも数知れず頼みに来て、毎日馬に乗っては病人を見に行つてやつた。

ある春の小糠雨なつかの降る日の事であつた。その日は病家が遠かつた上に、病人も大病であつたので自然と帰りが遅くなつた。

とある橋（中之瀬橋）にさしかかつた時にはもうたそがれ始めていた。その橋の真中まで来た時のことである。今まで元氣よく家路を急いでいた馬がにわかには止つて動かない。これはどうも尋常の事でない。昔から此の辺には河童小僧が出るという。今夜の薬も奴の悪戯いたづらではないか、それに違いあるまいと思案の胸を打つたが、やがて小脇の刀を抜き放ち馬上よりねらいを定めて此處ぞと思ふあたりを切り払つた。

さげぶような手応えはあつたと思ふ間もなく馬は平常の如く家路に向いようやくしてたどり着いた。

馬から下りてふと馬の尾を見れば驚いたことに馬の尾をつかんだまま生々しい河童の片腕がぶらさがっている。その腕を職業柄、珍しいので家にしまつておくと、翌朝夜も明けぬうちに、其の河童が来て昨夜の悪

戯の罪を詫びて是非片腕を返して貰いたいという。

返したところで仕方がないではないかと問えば、「片腕を元のように癒す薬がある」という。そこで片腕を返して貰った代りとして薬の製法を伝授すること、今後は決して河に出て悪戯をしないということ約束した。

片腕を返して貰い、門を出るや否や大声で、「この河に七年目には必らず出るぞ」と叫び姿をくりましたという。

小さい時分「大人から今年は七年目だよ」と川遊びをおどかさされ、又川で水死人が出たりすると、今年は七年目かと話しをしていた。

湯本家の家系と活躍

遠祖は清和天皇に発し、中世木曾義仲に属した武士であつたと伝えられる。義仲の敗北した後、その胤を宿した女性を守つて六合村（入山地方）に隠棲したのだということである。湯本家に伝わる系図によれば、永祿の頃真田家に属して活躍した湯本善太夫・三郎右衛門などの名も見え、中にも三郎右衛門は榛名山の三重塔寄進の際の大旦那であつたという事で、今でも同家に三重塔模型が現存している。その略系は次の通りである。

清和天皇（中略）自元祖三十七代目、湯本三郎右衛門幸綱（中略）六



刀できられた河童の手をもらいに薬の製法を伝授する

河童に馬の尾を引かれてしまった

合村赤岩世祖、湯本長左衛門幸常（因病身不嗣家—武士にならなかつた—退隠於赤岩始為医）（中略）湯本伝左衛門惠方（従多紀先生学為業）（以下略）。

月桂酒を製造した湯本家は、六合村の南端赤岩地域にあつて、海拔およそ七〇〇メートルに位する山紫水明にて四季の変化に富んだ山里である。

医家として継承し名医が代々出て居るが、天保五年湯本彦肅は筑前黒田侯の侍医に、俊達は高崎藩医、その他妙英、寿遷、俊斉、省斉は代々仁慈の名医であつた。

幕末の先覚者高野長英も以下の縁をもつて、一時湯本家に潜伏し幕吏の追跡を防ぎ、現在も「長英の間」がある。

こうした家系に示すように代々名医を輩出し、靈効「月桂酒」製造の秘宝が伝授された。

月桂酒の薬酒を仕込むには、毎年一月、二月の大寒小寒の期間だけに限る。

皇漢薬法から研究されたものであるから原料に各種の薬木、薬草が用いられた。第一にこの原料の薬草木を長時間煎じて仕込用の原液をつくり、又酒飯を炊いて醸造する。これを密封して自然化熟にまつと五月頃発酵し、六月には薬酒に熟成する。更に蝮蛇及び他の薬品を加える。

このまむしには毒腺、筋肉、骨の全てが家伝薬独特の操作によつて可溶性の水溶液に渾然融合させたものでアルコール分に対して可溶性の性質である。操作は秘方中の真髓であり、まむしの一部分のみでなく全てを薬酒に溶かすことは直正の蝮蛇酒にとっては絶対必要条件であつた。

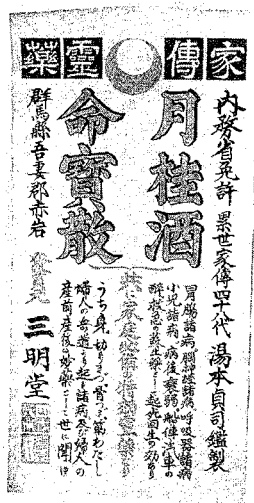
蝮蛇、その他の薬品の溶解完成をまつて薬酒をしぼると新種に類するもので薬効が荒くて身体に影響するので、大樽に密封して保存し、三年目位の時に需用者に供給した。

このようにして出来た月桂酒は、あらゆる病に対して靈効があるが主効とされるものをあげてみる。

- 食不進 （しよくすすまず） 消化不良 （こなれあしき） 癩 （はきけ） 嘔逆 （はきげ） 過食 （くいすぎ）
- 肺結核初期 （はいびょうのはじめ） 喘息 精力衰退
- 神経衰弱 健忘 （ちのわすれ） 小児疳病
- 婦人悪阻 （つわり） 船車酔

この外に家伝の「命寶散」があつた。主効は次のとおりである。

- 打身 切疵 筋肉のひつちがい
 - 骨接 道中のまめ 月経不順 （つきぎやく）
 - 血塊 （ちぶるい） しら血 血振
- 産前これを用いれば安産とされ、産後に用いれば肥立がよいとされていた。



家伝薬のポスター（昭和の初期）

薬酒の沿革

現存する月桂酒の版木は、年号がなく書体より推しておよそ二〇〇年

前のものに

「今迄は能禁等書遣し申候處衆病重療甚だ繁に相成り手廻りかね、此度版行仕り候、薬名のみ毎度の通り自筆書遣し申候」とある。

文化二年の版木には、まむし酒を嫌った人へのことわり書として、

「余が製する薬酒を世上にてへび酒と申し候につき、御婦人様方などに恐れ被成候御事も可有之哉、全くかようなる事にあらず、云々、以下略」

天保弘化には、

「近来處々に相似より紛敷酒数多有之候間御改求め可被成候、月桂酒は一子相伝何方にも類方決而無御座候為念如此御座候。」

又「此薬酒は何時の頃より傳來仕候事と相知不申、数百年來一子相傳にて製造仕候、右製し方は寒中薬木薬草の一番煎じにて酒飯を炊き二番煎じにて造り込み、固封し四〜五月頃熟し候時薬末を入れ熟し候、絞り澄し候ゆえ至而清潔にて高貴の御方御用被成候ても決而不浄の御氣遣無御座候。」

天明年間には

「月桂、命寶者累世之寶薬祖先之德澤也 云々 以下略」

昔交通不便の時代に長野県方面より月桂酒を需めに来るには途中、浅間山麓、六里ヶ原などの難所が多くて日数をかけて来た、その人たちが帰る時に次のような通行手形を出した。

差上申一札之事

一、此者壹人信州松本在之者ニ御座候此度拙者方月桂酒入用ニ付相調ニ参申候所紛無御座候依而何卒其御元御関所無相違御通被遊可被下置候為後日手形仍如件

文政二年卯八月拾貳日

赤岩村 傳左衛門

狩宿御関所御番衆中 様

品質、効能を評価し江

湖に名声をかかげた家伝

薬投票が昭和五年に群馬

県下において、上野毎日

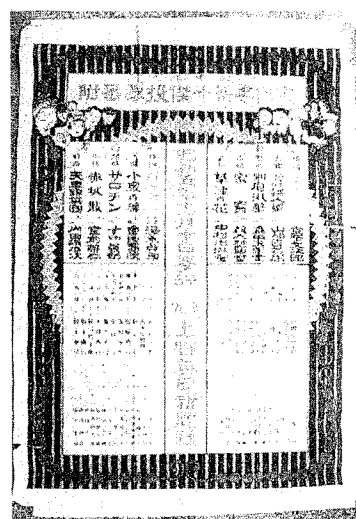
新聞社主催によりおこな

われ、参加薬酒六〇社を

東西に分けて投票した結

果、西方の横綱に月桂酒が卓絶せる効能を示し、医を以って約二十代に

わたり、名医を輩出した家伝薬は万全に換えられぬ真価を發揮した。



昭和五年家伝薬番付表 湯本家月桂酒は横綱

幸田露伴全集 月桂酒を珍重

文豪幸田露伴氏は、露伴全集第十二巻、「珍饌会」（ちんせんかい）中に月桂酒の効薬をあげました。

珍饌会 其七（本文の一部掲載）

「何様です無敵子。鍾齋、猪美庵が凄い事を発企したではござりませんか。」

「ナニサ天愚子、公は人が好いから驚くのだが、驚くにやあ足らないさ。高が鍾齋猪美庵ぢやあ無いか。向ふでも定めし妙なもの食はせて驚かせやうといふのだから、此方でも思ふさま変てこな物を持って

行つて驚かして遣るさ。」

「でも小生にやあ是という案じもつきませんから、貴下の御出品の御振合伺つて、其上で決めやうと思つて居ります。」

「其様公のやうに温順く出られちやあ仕方が無い。秘中の秘だけれども公だけにやあ僕の趣向を話すとする。僕は先づ酒を一種出すな。」

「ハハ、何様いう御酒で」

「名は月桂酒というのだがネ、産地は上州吾妻郡赤岩村という山の名で、一体は葉酒だから慰みに飲むべきものぢや無いが、原料と味が一寸可笑しいから、出して驚かすつもりさ。」

「ハハ、して何が異つて居りますので。」

「實は蝮蛇に香薬を加へて出来て居るので、何も仔細は無い補薬だけれども、蝮蛇ぢやあ誰れも驚かないからそれに少許ばかり硫黄の香を付けて蝮蛇の酒だと言つて驚かして遣るつもりだ。」

「ハハ、成程、硫黄臭く仕て置いて蝮蛇酒だというのは驚かしますネ。」

(以下略す)

家伝薬については湯本家の資料を参考にした。

家系については「家伝薬」に限定された都合でごく一部になったが、中世に活躍した武家時代の壮士、又真田家に属した史実も紹介することが出来なかつた。

医家を代々継承し立派な医者を出した家屋は現存し、昔ながらの土蔵造りとなつており医術、製薬の部屋を想像出来、加えて「長英の間」もあり珍重にして必見の値がある。

三〇〇年来休むことなく永々製造された霊薬酒は、昭和の初期まで続けられたと聞き及ぶが、今次の大戦に入るや徐々にその資源の不調等々

に要因を来たし製薬の中止を余儀なくしてしまった。誠に残念な結果としか申せない。(六合村会員) 明田川道雄 歴史散歩 掲載

小雨・生須の鳥追い

平成十二年六月二十九日、六合村指定文化財、無形民俗遺産

所在地、中之条町大字小雨・大字生須

所有者、小雨・生須鳥追い太鼓保存会

管理者、小雨・生須鳥追い太鼓保存会

正月十四日、ドンドン焼きの晩に小雨と生須の集落では、白砂川をはさんで向かい合って、同様の鳥追い行事が続けられています。

一、「長夜(ちようや)の夜食だんご集め」から行事の段取りに入る。長夜は、江戸時代初期に建てられ、古くは「ジョウヤ」とも言った。村の衆が集まって、秋冬の夜長に灯をともし、夜が明けるまで宴を続けた。また「社務所」、「斎場」「おこもり場」として使用し、集落の重要な精神的共同作業の交換の場でもあった。小雨・生須とも、建物は更新され、小雨公民館、生須公民館と名称が変わった。

此所で正月十四日の夜七時頃から、村の若い衆が「長夜の夜食だんご」を集めるために、一軒一軒、太鼓を叩いて廻り、厄年の人がいる家では厄落としのみかんを投げてもらったりして、だんごを集める。

集めただんごは、村中の人に分けてやり、残っただんごを食べながら、翌日(正月十五日)午前三時半ごろから行う「鳥追い」の準備をする。

「長夜の夜食だんご集め」の歌は次のような歌である。

チヨウヤノ、夜食ダンゴ、ダアシャレ ダシャレ
シイノダンゴイヤダ キミノダンゴイヤダ コメノダンゴ
ダアシャレ ダシャレ

長夜の夜食だんご太鼓

小雨生須鳥追い太鼓保存会

長夜の夜食だんごの歌

チヨウヤノ ヤシクダエ ダアア シャレ ダシャレ
シイノダンゴ イヤダ キミノ ダゴ イヤダ
コメノ ダゴ ダア シャレ ダシャレ



小雨・生須の鳥追い

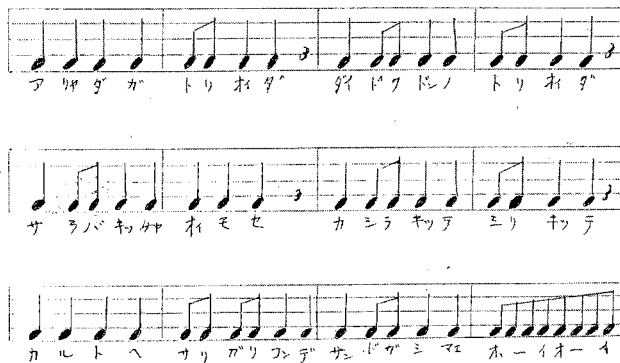
二、「鳥追い」の太鼓が始まるのは、「長夜の夜食だんご太鼓」が終わって、村の若い衆が、みんな「長夜」に集まって「夜食だんご」を食べ、「鳥追い」の準備を済ませて、夜明けを待たず、午前三時半頃より、お年寄りから子供まで、村中の人がちょうちんを持って勢揃いしてからである。

鳥追い太鼓の歌

アリアア ダガトリオイダ ダイドクドノノ トリオイダ
 サラバ キツチャ オイモウセ カシラキツテ シリキツテ
 カルトエ サラガリコンデ サンドガシマヘ ホーイ ホーイ

鳥 追 い 太 鼓

小雨・生須鳥追い太鼓保存会 黒岩 勇



この鳥追い太鼓は、江戸初期より始まったといわれている。「村中安全」、「家内安全」、「五穀豊穰」を願い、また今では「交通安全」も願って親から子へ、子から孫へと叩き継がれている。

現在は「小雨・生須鳥追い太鼓保存会」ができ、会員の黒岩勇氏が太鼓の調べを楽譜に起こして、盛大に行っている。

三、「ドンドン焼き」は、正月十五日「鳥追い」が終わって、午後三時半ごろになると始まる。ドンドン焼きでは、お正月の「松飾り」や「道祖神」「ダルマ」等を燃やす。その火で「繭玉」（ダンゴ）をあぶって食べると一年中風邪をひかないとか、また「ドンドン焼き」の煙がまっすぐに登って村中を取り巻くと、その年は村中が良い年になると言われ、煙がまっすぐ上空へ立ち登るように太鼓を叩く。

ドンドン焼きの歌

チャントタテ チャントタテ ドコドコドット
 チャントタテ チャントタテ ドコドコドット

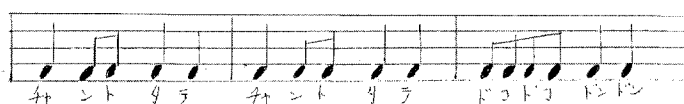
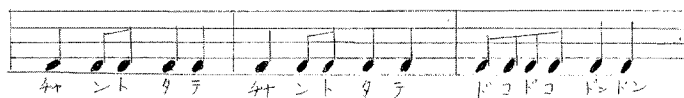


ドンドン焼き（和光原地区）

このような太鼓によって、村中が良い年であったと言ひ伝えられている。

ど ん ど ん 焼 き 太 鼓

小雨・生須島越い太鼓保存会 黒岩 勇



二 石造文化財

六合の石造物調査に際して

六合地区の石造物を知る資料といえば、文化財保護委員会と調査委員の尽力で刊行された『六合村の道祖神』と『六合村の庚申塔』がある。だが、この二冊は対象石造物が限定され、地内の石造物の全体像を知ることには出ない。『六合村誌』や『六合村の民俗』を開いても断片的な記述程度である。今回は原則として墓石や屋敷稻荷を除く石造物を対象に悉皆調査を行った。ただ、『村誌』に紹介の先人の墓誌や、信仰塔と複合した古い墓石類は、資料的な価値を考え何例かを調査対象に入れていた。

このような悉皆調査資料作成の場合は、他市町村の類書を見ても専門家と住民が協力して調査を行って、慎重に検討した後に発刊するのが通例である。今度の六合の石造物調査は、古文書知識もない私が、大部分は一人で碑文を読み、作成したものである。十分な検討も出来ず、多々誤りもあろう。『六合村誌続編』に載せるのには相応しくない面もあろうが許していただきたい。

思い返せば、調査に訪れたお堂の雑草をかき分け、放置状態の馬頭観音を計測し、片栗粉で銘文を読んだことも数多くあった。人里離れた山の頂に祀った十二山神を探しに、登山同様な姿で汗を流し探した時もあった。高間山の水無しの十二神様の調査では、二度登山したが、何も見つからず、むなししい気分を下した。一人で山に入る時は、熊除け鈴を鳴らし、大声で歌い、知らぬ方からは笑われそうな姿と思えるが、こんな時間も今では

楽しい思いでになっている。品木の天狗山の石祠、高間山水無し十二石祠は未発見のまま終わってしまい残念に思っている。

改めて思うに、これらの石造物造立には幾ばくかのお金が必要である。慎ましい生活を送る先人が、やりくりをし愛馬供養のために建てた馬頭観音も多くあった。厳しい現世の生活のなかで、来世での安楽を念じて女衆が小銭を寄せ建てた念仏塔もあった。だが、この石造物調査をやり、多くの石造物は本来の造立目的を忘れ、信仰の対象でなくなったことに気がついた。存在も忘れられ、草むらに横たわったまま、自然に戻っていく姿の石仏も多く、移ろいやすい人の世の無常も感じた。私は人々から忘れられたままで終わらずに、石に託した先人の信仰心や思いを冊子に紹介し残さねばと、たった一つの石造物でもあると聞けば探しに山に入った。この石造物調査報告を見て、六合の地に生きた先人に思いをやり、人々の歩みを次の世代に伝えられるならば幸いである。

この資料集作成に際し、地域の方から所在地や由来を教えてください、ご案内もいただいた。改めて深く感謝の言葉を述べたい。特に碑文解説と高間山の摩利支天調査では山田委員に、太子六郎谷の大日如来、入山の松岩山の十二神、惣吉地藏調査では山本委員の協力で無事に調査が終わり、感謝の言葉以外はありません。最後に不十分な資料集だが、この世に生を受け、縁があり機会をいただき、先人の心の一端を伝える仕事が出来たとに感謝をしたい。

凡例

一、この石造物調査は群馬県吾妻郡中之条町六合地区(旧六合村)に分布する石造物を対象にした悉皆調査資料である。墓石や屋敷稻荷等は

原則として除いた。だが、地域の歴史等の理解に必要と思える人物の墓誌や、他の信仰塔と複合した墓石の幾つかは含まれる。

二、整理の都合で六合地区南部の赤岩から、日影、太子、小雨、生須、北部の入山の各大字順に編集した。

三、本調査は『六合村誌(統)』の一部で、ページ数等が限定された。その結果、一目で石造物のイメージを俯瞰出来る編集は出来なかった。この調査資料を見る方に参考までに、左記に石造物の銘文配置、寸法等の記載の原則を紹介する。

「No」は各大字の石造物の写真番号である。「名称/種別」は、最初が碑正面の石造物建立主目的で、付随の石像や側面の銘等は副次的と考え(一)内にした。「所在地」は石造物所在場所の目安程度、「〃」は前記と同じ所である。「西暦」は石造物に刻む年号を西暦で表した。「高さ・幅・総高」は、調査者個人の判断に基づく寸法で、専門家の考える計測と一致しない例もあろう。「高さ」は本体より上の寸法で、「幅」は本体の最大幅で、「総高」は台石を含む地表からの高さの計測を原則とした。計測の単位はすべて「センチ」である。調査は単独での計測のため、高い塔等は正確でない面もあり、参考程度と考えてもらいたい。

「銘文」の〃は改行等の個所に入れた。無印は正面の銘で、(右)は右側面、(左)は左側面、(裏)は裏面、(台)は台座等、(基)は基部の銘文である。「※」印は特記等があれば参考として入れた。

参考までに次のような石造物の印刷イメージをみると、銘は正面中央、上段左右、下段左右の順で〃を入れて区切った。

日影下沢の阿弥陀堂境内にある巡拝塔の銘は、下部は埋まって不明である。

(表)

寛政三辛亥天 當□

奉巡礼四国八十八番供粮□

三月吉祥日 治良□

この場合、備考に「奉巡礼四国八十八番供粮□/寛政三辛亥天/三月吉祥日/當□/治良□」と印刷し、最後に「※下部埋没、□は塔、村(邑)、兵衛?」と表示した。

四、碑文の文字通りの印刷が原則だが、常用漢字で記した例もある。欠損や摩耗、埋没、達筆で判読困難の時は□か?にした。□部分は必ずしも字数とは一致しない。

大字/赤岩地内

名称/種別	場所	西暦	高さ・幅・総高	銘文/改行 ※備考
馬頭観音	国道/丸谷峠道脇	1829	65・35・78	(馬頭観音像)文政十二年/七月吉日
道標	広池/前坂旧道辻		75・66・75	左ハすじ道 ※自然石に薄く刻む、道は変体かな
道標	〃		114・35・114	右むま 道 左かち ※勾配が緩やかな道がうま(馬道、距離の短い急な下り道がかち(歩き)、日常の素朴な言葉遣いで表現し貴重

③				②	①							
石祠 (摩利支天)	馬頭観音	巡拝塔	道祖神	庚申塔	月待塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	無縫塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音
高間山中腹	〃	広池／前坂 手前墓脇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1762	1794	1842	1724			1845	1846		1852			
60・36・60	57・32・57	108・45・124	70・45・91	73・45・94	125・38・191	41・25・56	48・24・66	55・31・76	47・24・79	45・22・55	40・35・40	23・23・23
久で賑わった。今は参拝道も消滅 吉日(左) 赤岩郷 摩利支尊天／宝曆十二壬午七月 ※赤岩村で祀り、戦時には武運長	(馬頭観音像)／寛政六年 寅二月吉日	奉納百番供養塔／(右) 天保十三年壬寅十月吉日(左) 當所篠原富右衛門	(双体道祖像) 享保九辰天七月吉日 ※手を握りあう	(青面金剛像) ※像は六臂／日月と瑞雲／三猿あり。	二十三夜塔(台) 講中／坪井村 石屋伊勢松 世話人 山本栄吉・同忠蔵・篠原梅吉	(馬頭観音像) 弘化二年巳 十一月十二日	(馬頭観音像) 弘化三年午十二月吉日／山本忠左エ門	(馬頭観音像) 十一月四日	圓寂法宗沙弥靈位／嘉永五子年十月初日	(馬頭観音像)	※観音像の顔が二つある	(馬頭観音像)／篠原氏 ※以後、西／東の配置順で見る。

									⑤			④
地藏菩薩	灯籠	弁財天	石祠(弁天)	馬頭観音	馬頭観音	地藏菩薩	道祖神	石祠(山神十二神)	大日如来像	念仏塔／子安地藏像	大日塔	石祠(天狗)
高間開拓／民家裏道上	中室／弁天脇合流点上	中室／同所	中室／旧道脇の池	〃	〃	中室／薬師堂	中室／道下	広池／上ノ原山中尾根	広池／篠原巖宅東山道	〃	広池／大日堂内	芸術区南尾根／旧道脇
				1797	1797				1864	1820		
50・18・75	31・17・48	31・17・48	64・42・39	60・33・80	54・30・54	44・28・44	54・35・54	65・27・65	33・24・50	41・24・187	48・18・99	75・38・75
※開拓仲間て祭祀 (延命地藏立像)	宝曆四甲戌四月吉日／小山文右衛門 ※脇に欠損灯籠、童子墓等がある	(弁財天立像) ※頭部欠損	※中室の道祖神付近から集落への旧道を進み沢の手前、石垣の池内の石積上	(馬頭観音像) 寛政九年巳六月日	(馬頭観音像)／寛政九年巳六月日／富□三良／平六	(延命地藏立像)	(双体神像) ※手に蓮、沢沿い旧道脇	※通称上ノ原の十二さん。二代目の樅の木の下。近くに三角点	(大日如来像) (台) 文久四年子二月／當所 世話人衆八 ※通称おてんとうさん(太陽神)、頭部欠損、金剛界の手印	(子安地藏像) (台) 念仏□□□□／文政三辰年四月吉日 ※通称子安さん。床下で銘の一部不明。	※大日堂の本尊石造物。信者が付けた衣類で内部は確認できない。石の塔カ	※最初は天狗山頂付近に祭祀、神社合併で赤岩に移り、昭和十五年頃当地に遷宮。昔、祭は独活のよごしを食べた

					⑥			
名号塔 (墓石/巡拝塔)	馬頭観音	地藏菩薩	記念碑	道祖神	馬頭観音	信仰塔 (鎮宅霊)	庚申塔 (猿田彦)	
出立／ ”	出立／ ”	出立／兜石 脇道下	出立橋東／ 道祖神脇	出立橋東／ 新旧道の間	矢ノ下／川 沿い旧道脇	矢ノ下／ ”	矢ノ下／三 階家裏道脇	
1845		1895		1787		1892	1894	
122 ・ 96 ・ 122	43 ・ 28 ・ 61	38 ・ 18 ・ 20	77 ・ 92 ・ 90	48 ・ 34 ・ 72	39 ・ 30 ・ 39	80 ・ 32 ・ 80	88 ・ 35 ・ 118	
日月星辰 南 無 佛 授與自然天性信士二十一日	行者 當所 彦二郎 弘化二巳三月敬造立 万人施主 奉参拝百八十八番 天下泰平	(地藏菩薩立像) 明治廿八年／四月吉日	六合村の道祖神は長い年月風雨にさらされてたがずんでる像容には親しみやすい美しさがあり県下でも有数の双体道祖神の里の旅を味わつて下さい／六合村 六合村商工会	(双体道祖神像) 天明七丁末／十月吉日 ※男女女神が頬を寄せる	(馬頭観音像) ※下部埋没、現在の道開削前に利用した道、無縁墓十基余	鎮宅霊符尊 (左) 明治二十五年九月 ※字義通りならば家を鎮める神	猿田彦大神／碓氷嶺社掌 小澤三輪記謹書 (裏) 明治廿七年午十月吉日 ※書は碓氷峠、熊野神社の神主	

						⑦		
灯籠 (対右)	頌徳碑	” (左)	灯籠 (右)	信仰の塔 (大黒)	標石	記念碑	道標	馬頭観音
赤岩神社／ 参道	”	”	”	”	赤岩神社入 口付近	赤岩／たか やの道脇	出立／林道 至球線起点	出立／坂・ 旧道脇
	1933	1799		1864	1977	1751		1795
200 ・ 66 ・ 200	268 ・ 935 ・ 348	217 ・ 70 ・ 245	217 ・ 70 ・ 245	158 ・ 47 ・ 196	179 ・ 28 ・ 200	85 ・ 30 ・ 115	35 ・ 24 ・ 52	53 ・ 34 ・ 53
「態光受規 (右) 赤乎國岩 (左) 慈王慮新 (裏) 頭堅愉臻 ※竿四面の銘は未解読、読みは試案	※碑文は吾妻郡碑文集に掲載	頌徳／湯本貞治郎先生頌徳碑 (碑文略)／昭和八年一月／湯雲中村 熊太郎撰／青巖高橋惣太郎書 (裏) 湯本省齋／篠原平三郎／富澤源蔵／篠原伊太郎／篠原平五郎 (他略)／明治十一年戊寅四月吉日	献夜燈 (右) 惣氏子 (左) 日朗 龍村星明護縣／禹患除千祥鎮 闔？ 献夜燈 (右) 赤有屹岩上安寶殿 爲祝神靈短檠以薦 (左) 寛政 十一己未仲春吉日	大黒天／義豊書？ (右) 元治元甲子年九月吉日／惣村中	赤岩神社 (裏) 昭和五十二年四月十二日建／寄進 湯本友十郎 浦野峯松書／浦野一雄書	※白砂川右岸の難所たかや道を開いた秀英法印の道路開削碑。 歴史的遺物。	右ハ長ノ原 (地藏立像) 左ハ山みち ※長野原道は旧出立橋経由であろう	(馬頭観音像) 寛政七年／卯八月 ※清水屋北の道上、道祖神の元の場所

		⑧									
狛犬 (対右)	石段 (石柱)	石段 (石柱)	灯籠 (対右)	灯籠 (対左)	石段 (石柱)	水盤	馬頭観音?	馬頭観音	巡拝塔	灯籠 (対左)	
〃 / 拝殿前	〃 / 拝殿下	〃	〃	〃	〃	神社 / 拝殿 下石段付近	〃	〃	〃 / 中程左	〃 / 参道	
	1798	1705	1879	1879	1705	1937	1785	1855	1761		
63 ・ 61 ・ 189	40 ・ 15 ・ 40	40 ・ 16 ・ 40	175 ・ 57 ・ 220	175 ・ 57 ・ 220	29 ・ 15 ・ 29	42 ・ 82 ・ 60	39 ・ 20 ・ 39	48 ・ 30 ・ 48	59 ・ 21 ・ 109	240 ・ 66 ・ 240	
結婚 奉 / 奉祝第六十一回伊勢神宮式 年遷宮 / 皇太子徳仁親王殿下御	寛政十年八月日	奉寄進 / 宝永二年 / 西四月 富 沢安左エ門 ※前記石段同様、 宝永と古い	世話人篠原文七・同次平・同林平・ 石工師湯本安次郎※他の銘文は 左に同じ	御神燈 / 明治十二年辰ノ一月建 之 / 氏子中 / 世話人山本久蔵・ 同長作・篠原武平・同三十郎	奉寄進 / 宝永二年 / 〇月 篠原 ※石柱下部は埋まり、銘が見え ない	奉納(右) 坂上 高橋穂太郎・ 富沢八郎・富沢源蔵・関口周蔵・ 安原安十郎	(馬頭観音像)? (右) 天明五乙 巳天 (左) 二月大吉日 ※上は破風形	(馬頭観音像) / 安政二年卯十一 月日 / 篠原平五郎	奉納供養塔 / 四国・西国・板東・ 秩父 / 寶歴十一年辛巳十一月 篠原氏	「民願眷(右) 三國降神(左) 短 檠雨檐(裏) 祭奠金殿※読みは試案」	

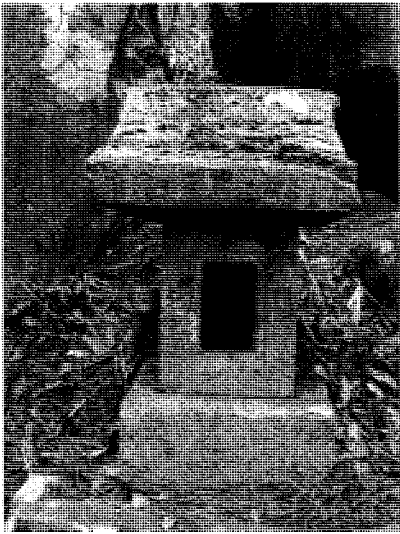
記念碑	南小学校跡		庚申塔?	庚申塔	無縫塔	灯籠	記念碑	狛犬 (対左)		
			〃	〃	〃	向城 / 観音 堂脇	〃 / 拝殿前	〃 / 拝殿前		
						1878	1993	1993		
60 ・ 64 ・ 160			80 ・ 20 ・ 80	115 ・ 57 ・ 15	65 ・ 20 ・ 65	157 ・ 64 ・ 75	49 ・ 15 ・ 72	63 ・ 61 ・ 89		
明治五年八月学制が公布され、明治七年一月赤岩村、日影村、太子村連合して 日影村八幡宮に日影小学として開校。これが本校の歴史の始まりである。明治 十一年五月現在地に赤岩小学校として分離したものの、日影小学校が本校の前身 であり、爾来今日まで近代日本と共に満百年の歩みを続けてきた。この機に創立 に夢をよせた先覚者の偉業に深く敬意を表すると共に、明治、大正、昭和と時代 の推移と教育の変遷の中で、常に本校の伝統と建学の精神を受継ぎ、今日このよ うな教育の隆盛発展に貢献された諸先輩やこれを支えた人々の努力の集積に深謝 し、この精神を子々孫々に伝え、教育の振興と地位社会の繁栄をねがい、地区住 民全ての人々の浄財によりこの碑を建て、尊い歴史を後世に託す。/ 昭和四十九 年三月 / 開校百年記念行事実行委員長 湯本喜太郎撰文 / 六合村立南小学校長一 場秀司謹書(裏) 記念碑建設委員 六合村立南小学校開校百年記念行事実行委員 会(台) 六合村立南小学校 / 開校百年記念碑 / 群馬県教育長 山川武正書 ※裏の関係者名等は略した	〇〇〇〇 施主版〇〇	梵字(青面金剛像) ※三面六臂、 手に日月、蛇、台に三猿	湯本省齋・篠原平三郎・富澤源蔵・ 篠原伊太郎 / 明治十一年戊寅四 月吉日	奉祝第六十一回伊勢神宮式年遷 宮 / 皇太子徳仁親王殿下御結婚 (裏) 平成五年十一月吉日 / 赤岩 神社氏子中	献 / 平成五年十一月吉日 / 寄進 六合村赤岩 安原義治					

馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	標石	灯籠	馬頭観音	弁財天?	弁財天	標石	信仰塔 (虚空蔵)
〃	〃	〃	鏡学院東奥 /旧道脇	〃	〃	諏訪神社跡	〃	鏡学院庭	鏡学院入口	向城/観音 堂下
	1830	1808	1860		1792					1695
60・33・70	47・28・58	47・28・65	50・21・63			59・28・59	24・21・35	38・27・47	30・50・30	153・33・173
(馬頭観音像) 同安原茂平	(馬頭観音像) 天保十歳十月吉日	(馬頭観音像) 文化五年/辰三月吉日	(馬頭観音) /万延元年/五月日 ※観音像は岩座上、道に落下	鎌原村/芦生田村/小宿村/袋倉村/与喜屋村(左) 横壁村/大柏木村/林村 ※灯籠基部?、鏡学院の霞村?	燈臺□(右) 寛政四□壬子十月□(左) 貞珉之村□/成懸燈衆□/以建之神時□/之峯破□ ※立派な石垣、灯籠残欠、他の銘略	馬頭観世音 銘は?	(弁財天座像?) ※頭部欠、持物は右の弁財天と同じ	(弁財天座像) ※頭上に鳥居	勘場木村/狩宿村/中居村/西久保村/門貝村/大前村/干俣村 ※石垣先端、信仰圏の村々の寄進か 男三十六人 ※タラークは虚空蔵菩薩	(梵字タラーク) 寶□/村□/大満願虚空蔵功/自然石摩尼宝塔/修三十六□月/福徳誦出長久攸/貴元禄八乙亥/十二月二日/願主密行沙門守一/施主 善男三十六人

⑩	念仏塔	大日如来	地藏菩薩	萬霊塔	蔵菩薩	地藏菩薩	馬頭観音	地藏菩薩	馬頭観音	馬頭観音	⑨	勝軍地藏	馬頭観音	巡拝塔	馬頭観音	馬頭観音
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東堂脇、西の順	〃	〃
1814	1844		1813						1774	1862		1845	1857	1833		
90・110・155	53・24・70	31・24・48	200・59・266	51・15・92	48・18・48	43・27・58	50・18・80	53・30・53	41・24・41	68・51・169	45・25・63	95・40・116	50・30・50	69・24・79		
※優しい表情の優れた作	(線刻観音像) 文化十一年甲戌九月建/女人講中	大日如来(右) 天保十五年辰二月十日(左) 願主 富沢氏 ※下部に二頭の牛の姿、信仰関係は?	(地藏菩薩座像)	三界萬霊塔(裏) 文化十癸酉九月建/十四童拜書 ※上部に日月、瑞雲	(地藏菩薩立像) ※敷茄子、蓮華座上	(地藏菩薩立像) ※頭部欠損	(馬頭観音像)	(地藏菩薩立像) ※頭部欠損	(馬頭観音像) ※蓮の花を手に持つ	(馬頭観音像) 安永三年/七月吉日	(馬口印乗馬像)(台) 施主村中/文久二□戊三月吉日建立/入山石工 安右衛門 ※頭部欠損	(馬頭観音像)(右) 嘉永二己酉十二月吉日(左) 富沢安右衛門	奉納百八十八番供養塔(右) 弘化二己三月吉日/富沢安右衛門	(馬頭観音像)(右) 安政六年(左) 己未十二月吉日 ※道に落下	※道に落下	(馬頭観音像) 天保四己九月日

道祖神 (双体)	馬頭観音	馬頭観音	巡拝塔	宝篋印塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	宝篋印塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	巡拝塔	大日如来
赤岩集落/ 毘沙門堂付 近道下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東堂墓地脇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1781			1844	1863	1810	1845	1856			1781	1866		1865	1864
46・30・72	40・30・40	42・30・42	63・24・63	214・60・317	53・27・53	51・33・69	50・29・65	55・32・55	未計測	50・27・71	50・33・65	46・27・46	140・20・157	78・54・78
風形 (双体道祖神像) 天明元年辛丑六月吉日(台) 施主 関久口衛門 ※男神は手に笏、女神は扇、破	(馬頭観音像)	(馬頭観音像)	奉納百番供養塔(右) 天保十五年(左) 甲辰秋八月 願主中澤氏	佛法寶/如来心陀羅尼塔寶篋印(右) 文久三癸亥年三月四日敬造立(左) 為先祖代々有縁無縁等(裏) 願以此功德/普及於一切/我善衆生/皆共成佛道	(馬頭観音像) 文化七年/午五月	(馬頭観音像) 弘化二年/十月吉日	(馬頭観音像) 安政三年/丙辰十月五日	(馬頭観音像)	前記馬頭観音の左右に残欠、	(馬頭観音像) 天明元丑/七月五日 ※牛の姿を彫った大日如来の後方	馬頭大士/慶応二丙寅/三月吉日	(馬頭観音像)	奉納百八十八番供養塔(右) 元治二乙丑三月吉日(左) 俗名富澤善蔵	(大日如来座像)(右) 元治元甲子十二月吉日/光□※個性的な表情

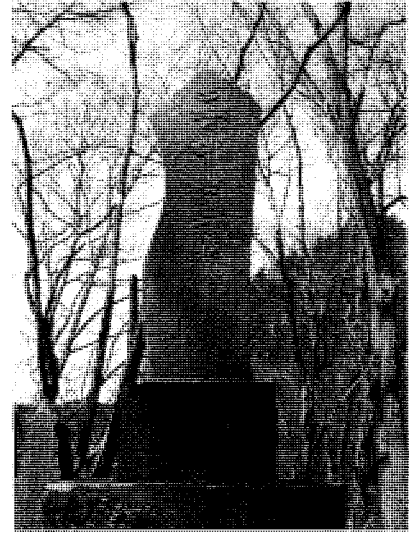
馬頭観音	馬頭観音	石祠(稻荷)	石祠(天狗)	馬頭観音	馬頭観音/ 道標	石祠(山神十二)	石祠(残片)	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	弁財天
〃	〃	湯本家屋敷	芸術村/東側旧道脇	〃/〃旧道約六百以脇	〃/鍛冶屋敷方向旧道約四百以脇	林道・旧道交差付近	〃/上り上げ西尾根	〃/旧道四百以先右	〃/旧道三百以先右	水源脇/旧道二百以先	寺社木線脇/水道水源
1846	1845			1851	1811				1798		
50・30・50	60・37・60	90・34・90	75・38・128	未計測	60・30・70	70・36・70	未計測	61・29・61	43・27・43	47・24・47	50・32・67
五月吉日 馬頭観世音/弘化三甲午歳/潤	馬頭観世音/弘化二年/五月吉日	※屋敷稲荷に刻む家訓、『村誌』掲載 (右) 和順齊家本(左) 勤儉治家要 孝順父母 尊敬長上 和睦郷里 教訓子孫 永安生理 母作非為	※形式から元禄前後、天狗山から赤岩に移動し、その後現在地に戻る	(馬頭観音像) 嘉永四年/亥九月十一日	文化八年 右 山ミチ (馬頭観音像) 未七月日 左 沢たりみち ※林道から鍛冶屋敷旧道六百以先道脇	※寺社木線とツツジ沢の旧道合流地、通称一本松の十二さん、形は元禄頃	※前記約三〇〇以先鞍部左、山神	(馬頭観音像) ※樺の根元	(馬頭観音像) /寛政十年/午九月日 ※林道から旧道に入り、三〇〇以	※水源脇から鍛冶屋敷へ向かう旧道筋	(弁財天座像) ※岩座、手に刀、宝珠、頭に鳥居。



③ 高間山中腹／武運長久の神
摩利支天石祠



② 広池前坂／弓や斧を持つ青面
金剛塔



① 広池前坂／女衆が集う二十三
夜の月待塔



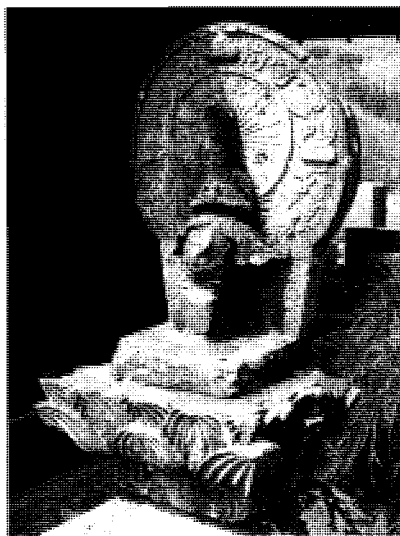
⑥ 出立入口／寄り添う道祖神



⑤ 広池旧道脇／通称おてんとう
さんの大日如来像



④ 芸術区付近／天狗山より移転の
天狗石祠



⑨ 東堂脇／痛々しい姿の勝軍
地藏



⑧ 赤岩神社／宝永年間整備の石
段銘



⑦ タカヤ道脇／秀英の難所開
削碑



⑫ 上の観音／周囲が六地藏の古い石幢



⑪ 湯本家東山際／山崩れで寺子と遭難死の秀英墓



⑩ 東堂脇／優美な観音像の念仏供養塔

番号	名称／種別	場所	西曆	高・幅・総	銘文／改行 ※備考
①	道祖神	下沢／集落の南車道脇	1726	45・30・45	(馬頭観音像) 天保十一年／五月吉日 山本氏 ※水源、自然石の信仰塔他
②	阿弥陀如来	下沢／阿弥陀堂内	1719	66・53・156	(阿弥陀如来座像) (台) 享保四年亥六月吉日／日影村 ※弥陀定印、請花・敷茄子上
	地藏菩薩	〃		108・48・151	(子安地藏座像)
	地藏菩薩	阿弥陀堂境内／右側		123・42・163	(宝性地蔵座像) ※合掌した姿
	巡拝塔		1823	108・48・151	奉納百番供養塔／山本栄次郎 (右) 文政六年癸未十二月吉日建
	巡拝塔		1783	123・42・163	百番供養塔／天明三癸卯年／五月吉祥日 (台) 當村 山本□□門・同久右エ門・同治郎兵衛・同藤五郎 ※台に梅や牡丹の彫り物
	石仏	〃		44・20・44	(顔欠／合掌立像) (左) 文化□□天二月十一日 ※文化は一八〇四〜同一四年迄
	馬頭観音	〃	1845	45・20・57	(馬頭観音像)／天保十二年丑九月／弘化二年巳五月廿九日 ※馬の顔が二頭分、年号は弘化で記入
	巡拝塔		1791	94・40・108	奉巡礼四国八十八番供養□□寛政三辛亥天／三月吉祥日／當□□治良□□※下部埋没、□は塔・村・兵衛か
	庚申塔	阿弥陀堂／墓地周辺	1973	86・63・101	庚申塔／寛政五癸丑年／四月大吉日 ※上方に日月

大字／日影地内

地蔵菩薩	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	鼠浮彫像	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	燈籠	馬頭観音
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	1839	1783		1819		1825	1801	1795	1813	1856		1862	1820	
56・36・56	46・27・62	30・27・30	50・28・50	51・28・69	22・36・22	46・16・54	54・36・59	54・34・67	35・25・41	52・32・57	52・33・64	35・24・43	160・84・208	50・28・55
(宝性地蔵菩薩立像) ※合掌像	(馬頭観音像) やまだ? 天保十年 / 亥九月十二日 ※ハタの文字	観世音菩薩 / 天明三歳 / 卯七月八日 ※上部欠損だが馬頭?、干支から天明三年、浅間山大爆發の日、関連は?	馬頭大士 ※文字の馬頭観音	(馬頭観音像) 文政二年 / 卯三月吉日	※加工石側面に鼠二匹を刻む、台座?	(馬頭観音像) 文政八年 / 今月今日	※干支が酉で享和元年に該当 (馬頭観音像) / 享〇元年 / 酉五月吉日	(馬頭観音像) 寛政七年 / 卯七月吉日	(馬頭観音像) 文化十年 / 十月吉日	(馬頭観音像) 安政三年 / 〇〇〇〇?	(馬頭観音像) / 〇〇〇 / 卯七月〇日	(馬頭観音像) 文久二〇十月吉日	普照燈 / 文政三庚辰稔 / 四月初八日 (基) 奉建立山本中	(三面馬頭観音像) / 卯九月二十五日 / 申十一月三十日 (台) 山本氏 ※一基に二頭分、近くの無縫塔未調査

道祖神	③ 大黒天	庚申塔	燈籠 (対左)	燈籠 (対右)	馬頭観音	馬頭観音	月待塔 (勢至菩薩)	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	如意輪観音	地蔵菩薩 / 名号塔
中沢 / 稻荷社境内	中沢 / 稻荷社境内	中沢 / 茂木墓地脇	下沢 / 愛宕神社	下沢 / 愛宕神社	〃	〃	〃	阿弥陀堂前 / 山本宅裏	〃	〃	〃 (阿弥陀堂石碑群西端)	〃
1756	1842	1817		1857		1793		1856	1731	1837	1724	1855
53・30・71	49・33・61	88・49・96	194・65・230	194・65・230	30・24・48	55・31・70	32・13・48	55・27・67	32・24・57	42・24・55	72・42・72	46・16・54
※反花座、握 卯月日 (双体道祖神像) 宝曆六子天	※反花座、俵上に座す、破風 瓜源兵衛行茂 寅十一月吉日 (左) 世話人 橋	庚申塔 / 文化十四年 / 丑十月吉日 / 願主	御神燈 / 施主當邑 / 世話人山本権右衛門・山本治郎左衛門・山本直藏・山本久左衛門	御神燈 / 安政四丁巳歳九月吉祥日 / 施主山本弥兵衛・山本長左衛門 (他三人) 世話人山本治郎左衛門 (他三人)	(馬頭観音像) ※上部欠損	(馬頭観音像) 寛政五年 / 丑六月吉日	(勢至菩薩座像) ※三夜様と呼ぶ、像は聖観音像に似る	(馬頭観音像) 安政三年 / 辰二月日	(馬頭観音像) 天保二年 / 九月吉日	(馬頭観音像) 天保八年 / 閏五月十六日 / 山本甚兵衛	※銘から女人信仰の対象と分かる (如意輪観音像) 享保九年 / 辰十月吉日 / 施主 女子十八人	(地蔵菩薩立像) (右) 南無阿弥陀仏 (左) ハ久 安政二年未二月日 ※側面に名号、ハ久、死者供養か

馬頭観音	庚申塔	⑥ 地藏菩薩	⑤ 石祠(愛宕)	石祠 (弁財天)	④ 石祠 (弁財天)	灯笼	灯笼	如意輪観音 (念仏塔)	供養塔 (念仏)	歌碑(芭蕉)
平沢／ 〃	平沢／ 〃	平沢集落／ 公民館南	平沢／国道 上山頂	〃	中沢／白砂 川弁天岩上	中沢／林道 入口国道際	中沢／篠原 モータース 前	中沢／橋爪 家墓脇	中沢／橋爪 家墓脇	中沢／ 橋爪家墓脇
		1762				1840	1867		1810	1893
52・ 35・ 64	56・ 35・ 74	166・ 45・ 277	62・ 37・ 62	77・ 45・ 77	84・ 40・ 84	190・ 75・ 213	210・ 75・ 240	51・ 30・ 96	76・ 46・ 84	115・ 102・ 177
(馬頭観音像)	(青面金剛像) ※持物は弓矢等、三猿	(延命地藏菩薩立像)(台) 寶曆十二年／壬午五月吉日／願主 當村 ※国道の東、集落内の道脇石造物群	※形は元禄前後、南を向く	※大石の中央付近、大石に梯子と鳥居	※対岸は難所タカヤの岩場、特大級大石(高八m、長七m)上、川側石祠	常夜□(右) 依□社□(左) 天保十一庚□□四月□□(裏) 當國嘗? 横壁村前秋原太郎右衛門廣明	常夜燈(左) 願主橋爪源兵衛行茂造之(裏) 慶應三丁卯年十一月吉日 ※林道入口国道脇と対? 建立目的は?	※観音像は石質劣化、願主女性 當村 願主 女人中	念仏供養／文化七子天／八月十三日／女人中※女性が主役の塔	蝶の飛ふはかり野中の日影哉／芭蕉翁(裏) 傳不朽云爾／吾妻郡日影村橋本源三郎琴雅建焉教正富澤我琴書／蕉翁之俳諧盛於世也久矣今年明治二十有六年癸巳從祖翁滅後二百年于茲聊為報德建句碑 ※土地の俳人が芭蕉翁没後二百年を記念で建てる、書は富澤我琴

灯笼(対)	五輪塔							⑦ 馬頭観音	道祖神	灯笼	馬頭観音	地藏菩薩
八幡／神社	田端／三原 観音札所跡							平沢／旧二 軒屋道際	平沢／ 二百メートル ル入る	平沢／ 段上社前	平沢／ 〃	平沢／ 〃
1961	1993								1851	1724		
	100・ 43・ 170							53・ 16・ 71	58・ 24・ 58	150・ 50・ 150	42・ 25・ 71	56・ 25・ 69
※灯笼は左右同銘、左は略す	献燈(裏) 昭和三十六年四月五日(台裏) 石工 中澤伊三郎(左) 奉納者 富澤諦策／富澤虎治郎	残欠あり	※三原三十四番札所跡、梵字は大日如来ア、脇に十基程五輪塔	※馬頭観音像 文政六年／十一月十九日※国道西、一軒家南から西に入る	(梵字) 供養塔(右) 二一十一番札所(三原郷三十四番中) たづねきてここで仏にあふみ堂二世あんらくの身こそたのもし／日影あふみ堂跡地(裏) 平成五年四月吉日 湯本一好建立	(馬頭観音像) 二十歳／□□	(馬頭観音像) 安□五申年／八月二十七日※干支から安永五年	(馬頭観音像) ※国道から十分、切り通しは古道の趣、恐い表情、蓮台道上	(双体道祖神像)(右) 嘉永四年亥十二月吉日※相手の肩を抱く擁肩形	享保九辰天十月吉日／願主橋爪宗兵衛	(馬頭観音像) ※手に蓮、台座に牡丹	(地藏菩薩立像) ※持物は宝珠

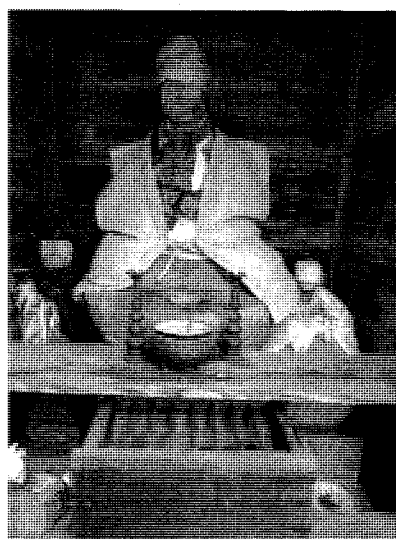
灯籠	灯籠(対)	灯籠(対)	灯籠(対)	(南) 如来心寶篋印陀羅尼(東) 佛頂尊勝陀羅尼(西) 全光明最勝王經全勝陀羅尼/奉納大乘妙典全部 寶曆五乙亥五月如来日(基部) 當寺八世千山叟/助力 草津山本重右衛門※「願以此功德普及一切」に始まる 偈文は略した	宝篋印塔	地藏菩薩	石祠 (猿田彦)	庚申塔	(延命地藏立像)(台) 萬靈(右) 慶應二年全焼失/明治四十三年八月水害流失/昭和七年仮本堂中澤部落より移転/昭和四十八年本堂屋根替/昭和五十四年石段改修(左) 天養元年尼僧妙全開闢/文禄三年明堂寶珠大和尚開山/鎌倉將軍源頼朝公の旗本湯本三郎右衛門開基(裏) 昭和三十四年八月吉辰/寄進齊木石材工業/二十六世道雄代※銘は台座	名号塔	地藏菩薩		
龍沢寺/石 段中程	龍沢寺/石 段中程	龍沢寺/石 段中程	龍沢寺境内		龍沢寺/石 段左脇	龍沢寺庭	龍沢寺参道	龍沢寺参道		龍沢寺参道	龍沢寺参道	龍沢寺参道	龍沢寺参道
2003	2004	2004	1996		1755	2007	1881			1959	1689		
200・68・218	200・68・218	200・70・228	185・40・185		未計測	200・48・250	77・38・77	75・26・75		56・27・122	80・40・90		
富雄・朝代建之	為先祖代々菩提 平成十五年十一月吉辰/施主 品木 山本	為先祖代々菩提 施主羽根尾 山本恵二・重子合掌/平成十六年春彼岸 二十六世道雄代	先祖代々菩薩 為山口政勝 平成八年四月吉日 二十六世道雄代		參詣者の安全、御開山四百回忌 報恩 平成十九丁亥春 二十六世道雄建立	(右) 猿田彦大神(左) 明治十四年十月六日/建之浅井群平 ※庚申塔の一種、石祠は珍しい	※地下から発見、傷み大、三猿や日月		南無阿弥陀佛/元禄二〇歳/十月吉日		※岩景山崩落時埋没、工事で発見		

五輪塔	五輪塔	⑧ 五輪塔	副碑	六地藏	忠霊塔	忠魂碑	地藏菩薩
龍沢寺/墓地	龍沢寺/墓地	龍沢寺/墓地	龍沢寺/参道脇	龍沢寺/参道脇	龍沢寺/参道脇	龍沢寺/参道脇	龍沢寺/石段上り口
	1647	1625	1990		1941	1935	1982
60・27・60	100・35・100	94・37・94	47・60・75	88・30・138	未計測	290・100・430	46・68・46
風※湯本三郎右衛門墓右、地輪埋没	地/休山宗知居士/于時正保四月廿一日※延宝元年の板碑状墓石の左	空/風/火/水/地 月洲乘江居士/于時寛永二乙丑十二月廿二日 ※当山開基湯本三郎右衛門墓	寄進/入山見寄 田中全蔵/入山京塚 山口好蔵/入山見寄 山本新十郎/草津 昭和区 西山義行/入山引沼 船津長二/入山見寄 高橋利男/入山引沼 山本 伸一/入山見寄 滝見建設(株) 平成二年十二月吉日 二十六世道雄代 ※六地藏寄進者名	(延命地藏立像・地持地藏立像・法印地藏立像・宝性地蔵立像・護讃地藏立像・法性地蔵立像) ※右々左	忠霊塔(裏) 陸軍大臣 東條英機謹書(裏) 忠霊塔建立誌/昭和十六年十月 小雨六百十二番地に建設 工事費六千円也/昭和十九年十月? 六合村立第一小学校建設に伴い 日影千五百五十九番地の九に移建 工事費八百三万円也六合村 ※額に戦没者名や階級を刻む	忠魂碑/陸軍大将 鈴木在六書(裏) 殉難芳名 明治十年之役 従軍歩兵一等卒 勲八等 富澤幸平(他九柱略)/昭和十年三月十日 帝國在郷軍人會六合村分會建之※明治十年は西南戦争	(地藏菩薩立像)(台) 昭和五十七年八月十三日/施主 中澤宏衛・いし子/二十六世道雄代※子供を慈しむ姿、像は金属製

		⑨		
馬頭観音	馬頭観音	石祠 (秋葉)	五輪塔	無縫塔
湯久保／ ”	湯久保／ 道祿神付近	湯久保／ 葉尾根頂上	龍沢寺／ 墓地	龍沢寺／ 墓地
		1781	1646	
43 ・ 23 ・ 61	46 ・ 27 ・ 58	80 ・ 42 ・ 80	97 ・ 70 ・ 113	45 ・ 21 ・ 71
近道上 (馬頭観音像) ※湯坂道入口付	近道上 (馬頭観音像) ※湯坂道入口付	用 <small>の</small> 村 願主 榎木・八幡・田端 村中 ※当時、この地を採草地等 <small>で</small> 利	(基)地／于時正保三〇五〇／ □※妙全尼墓前右側	(台) 當寺開闢妙全比丘尼／□ 癸巳年四月朔日／歴代比丘尼靈 ※妙全杉に名が残る、年号は承 応か？



③ 中沢／福々しい大黒様



② 下沢阿弥陀堂／中央がご本尊の阿弥陀如来



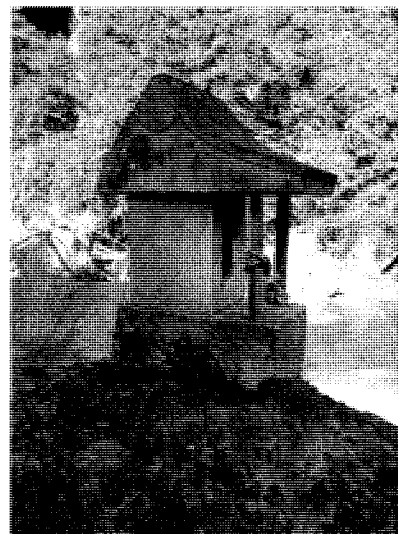
① 下沢路傍／手を握る道祖神



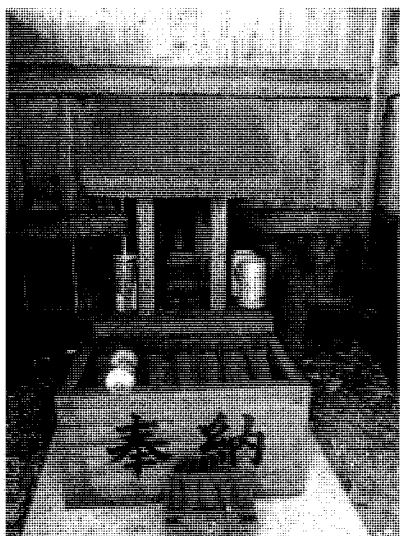
⑥ 平沢／集落内に大きな地藏様



⑤ 平沢／山頂に火伏せの愛宕石祠



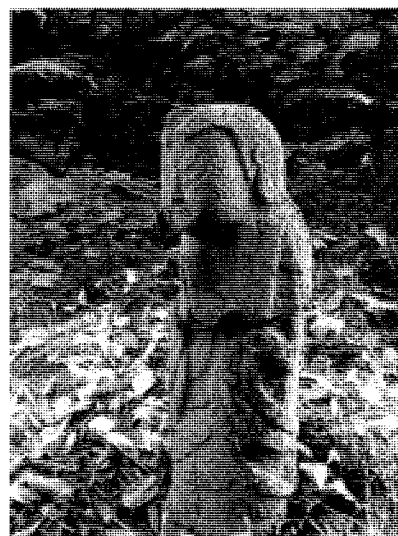
④ 中沢／大石上の弁天石祠



⑨ 湯久保／集落を見下ろす火伏せ神秋葉石祠



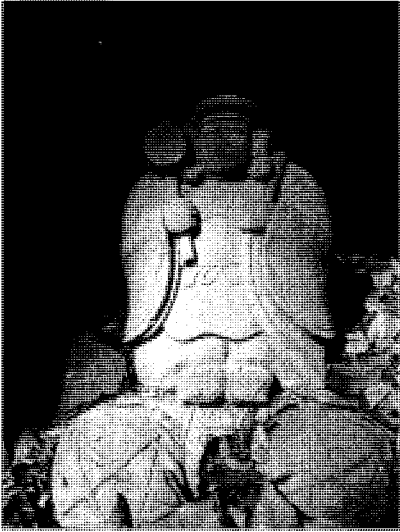
⑧ 龍沢寺／湯本三郎右衛門の五輪塔



⑦ 旧道切り通し／恐そうな馬頭観音

	⑥			⑥			⑤	⑤	④		
馬頭観音	信仰塔 (虫歯神)	馬頭観音	馬頭観音	庚申塔	馬頭観音	馬頭観音	月待塔 (如意輪観音)	念仏塔 (阿弥陀如来)	經典塔 (巡拝塔)	釈迦如来	大日如来
太子／ ”	太子／ ”	太子／ ”	太子／ ”	太子／前記 墓地西続き	” ”	” ”	” ”	” ”	” ”	” ”	” ”
1895	1854	1932	1817	1887	1808	1882	1836	1854			1800
40 ・ 24 ・ 73	36 ・ 20 ・ 63	49 ・ 27 ・ 49	50 ・ 27 ・ 50	107 ・ 29 ・ 131	54 ・ 28 ・ 67	56 ・ 30 ・ 64	52 ・ 33 ・ 117	42 ・ 31 ・ 109	156 ・ 46 ・ 178	84 ・ 23 ・ 145	83 ・ 34 ・ 101
(馬頭観音像)明治廿八年／□□ 日(台)篠原常八	虫歯地藏大土／安政二年／卯十 月吉日※虫歯治癒を地藏に託し た素朴な信仰	馬頭観世音(右)昭和七年七月拾 日／富沢米平※前記下方、墓地上	(馬頭観音像)文化十四□／八 月十八日※青面金剛王の西側	(種子)青面金剛王／明隨書 八十三歳(裏)明治二十年建之 丁亥十二月吉日(台)富沢五郎 治／同茂吉／同代太郎／同権平 ／篠原金六／小林秀吉 ※篠原家墓地上、種子はカウ?	(馬頭観音像)文化五辰年／二月 吉日 富澤氏	(馬頭観音像)□治十五□九月□ □□村※□は明、年、日、太子か	※□は塔、日、中か、高さ観音像 (如意輪観音像)十九夜供養□ (右)天保七丙申曆二月大吉□ (左)當邑 女人□	吉日(左)女人講中 (阿弥陀如来弥陀定印座像)念仏 供養塔(右)嘉永七年寅獵三月 吉日(左)女人講中	右エ門※銘は実践濃厚 奉讀誦法華經一千部／四國・西 國・秩父・坂東百八十八所巡礼 ／上州吾妻郡太子村 富沢安	(釈迦如来立像) ※手印は施無畏、与願印	(金剛界大日如来座像)寛政 十二年申十月吉日

		⑨				⑧					
石祠(残欠)	石祠(山神 十二神)	大日如来	石祠	灯笼	石祠(稲荷)	石祠(稲荷)	大日如来	馬頭観音	馬頭観音 (富蔵山)	如意輪観音	
”	太子／山路 採草地	太子六郎谷 ／水戸沢奥	” ”	” 太子不 動堂	太子／ ”	太子／集落 裏瘦せ尾根	太子／ ”	太子／ ”	太子／ ”	太子／ ”	
			1959	1819		1269	1746		1884		
25 ・ 24 ・ 25	75 ・ 37 ・ 75	45 ・ 33 ・ 75	72 ・ 33 ・ 72	158 ・ 70 ・ 179	79 ・ 50 ・ 79	70 ・ 58 ・ 70	45 ・ 30 ・ 57	45 ・ 20 ・ 45	54 ・ 23 ・ 69	40 ・ 24 ・ 73	
※室部のみ現存、前記より古そう	(左) □十二※旧草津道分岐、左 へ四百メートル老松の根元、十二 は素人の追刻か	(金剛界大日如来座像)(裏)宝 曆□□八月□□※町道と木戸沢 交差の沢上流、左岸赤崩れ約百 メートル先、尾根下岩場、岩下 の洞、行者の修行の場か不明	※岩棚上 (右)昭和三十四年十月吉日(左) 世話人 篠原太十・小林頼男	奉獻燈(右)文政二乙卯晩夏(左) 願主 惣氏子中	※富沢姓の稲荷、前記稲荷北約 三十メートル	※年号は郡内最古金石文、詳細不詳 文永六□七月吉日□	(左)文永六年己巳七月吉日(裏) は墓地に落下	馬頭尊 (金剛界大日如来座像)(裏)延 享三年□□□※岩上に台座、像	富蔵山馬頭大土／施主富沢五郎 治(裏)明治十七□二月吉日□※ 信州の富蔵山の馬頭観音信仰	(如意輪観音座像)※石材劣化 剥離、首を傾げる像容から推定	



③ 岩屋／静かな岩下の大黒様



② 上太子／摩滅した双体道祖神



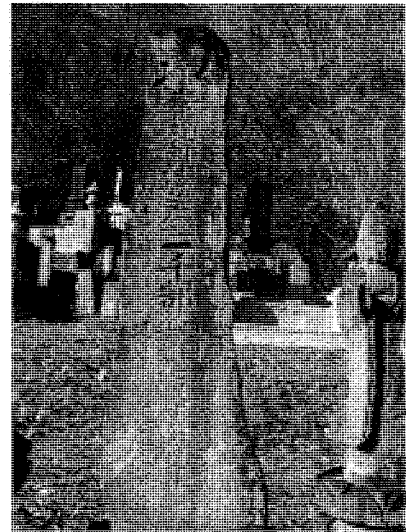
① 桑園堂跡／三原二十四番札所の子安地藏



⑥ 上太子／名前も巖つい青面金剛王



⑤ 上太子／仲良し阿弥陀と如意輪観音像



④ 上太子／百八十八霊場巡拝記念の経典塔



⑨ 六郎谷／崖下で瞑想の大日如来



⑧ 上太子／文永の年号の石祠



⑦ 上太子／民俗信仰的な虫歯地藏大士

大字／小雨地内

番号	名称／種別	場所	西暦	高・幅・総	銘文／改行 ※備考
	観音	下平橋袂		41・21・41	(観音座像) 十四番※顔欠、持物 ※以後、向南ノ北の順に移動
	楊柳観音?			33・21・33	(楊柳観音座像) 十一番 ※岩座、上欠
	白衣観音?			33・21・33	(白衣観音座像) 三十三番※上欠
	観音			43・21・43	(観音座像) 十九番※一部欠
	滝見観音			47・21・47	(滝見観音像) 八番※像に岩、滝
	観音			32・20・32	(観音像) 九番※上欠損
	観音			37・22・37	(観音座像) 一番※一番、上部欠損
	観音			46・23・46	(観音像) 七番
	白衣観音			43・21・58	(白衣観音像) 十番※台座あり
	観音			43・20・59	(観音像) 十五番
	観音			43・19・43	(観音座像) 二十二番
	馬頭観音		1830	48・25・48	(馬頭観音像) 文政十三年／寅八月日※顔面損傷で判定困難、隣接台石除く
	如意輪観音		1825	54・28・73	(如意輪観音像) 文政八四年六月三日
	観音		1888	68・30・68	奉瀉法華經一字一石供(右)明治二十一年四月四日(左)福嶋嘉平※六合では珍しい塔、「養塔」は欠損

②	馬頭観音(富倉)	灯籠(対右)	灯籠(対左)	灯籠(対左)	灯籠(対右)	水盤	記念碑	標石	観音	観音	
	神社東／体育館南下側	”	” 拜殿東	”	” 拜殿前	神社境内	諏訪神社付近／林道脇	”	”	”	
	1739	1739	1845	1845	1845	1934	1982	1867			
	70・52・70	154・51・165	155・52・207	190・66・265	190・66・265	46・85・74	162・76・222	76・24・76	42・20・42	40・21・40	
	富倉山／馬頭大土／明□□六□／星野七兵衛※明和か明治、信州富蔵山の馬頭信仰	奉寄進石燈籠／元文四己未十一月吉日／施主 小雨村中※火袋欠損	奉寄進石燈籠／元文四己未十一月吉日／施主 當村 星野七右□□※竿円柱	奉寄進石燈籠／元文四己未十一月建之(基)世話人／高原七左衛門／星野孫右衛門／全七右衛門／市川久右衛門／湯本十兵衛	清明燈／氏子中(左) 弘化二年乙巳十一月建之(基)世話人／高野本平兵衛／市川久右エ門／星野七右衛門／全藤右衛門／高原長右衛門	清泉(右) 奉獻創立二十周年記念／昭和九年五月 小雨青年會	清明燈／氏子中(右) 弘化二年乙巳十一月建之(基)世話人	林道開通記念碑／群馬縣知事清水一郎書(裏) 昭和四十七年二月十五日県陳情／昭和四十七年四月県代行政林道決定／昭和四十七年六月四日 起工式／昭和五十七年六月三十日 開通式／六合村長山口助・草津町長萩原亮／延長七、一四九米／総工費三三三、七三、四萬円／開通功勞者 前村長篠原秀雄・右同元県林産課長小林圭造／昭和五十七年十一月吉日之建(他関係者名略)	林道開通記念碑／群馬縣知事清水一郎書(裏) 昭和四十七年二月十五日県陳情／昭和四十七年四月県代行政林道決定／昭和四十七年六月四日 起工式／昭和五十七年六月三十日 開通式／六合村長山口助・草津町長萩原亮／延長七、一四九米／総工費三三三、七三、四萬円／開通功勞者 前村長篠原秀雄・右同元県林産課長小林圭造／昭和五十七年十一月吉日之建(他関係者名略)	観音立像(二十六番)	(観音座像) 三十番※膝を立てる ※隣接墓石四基は除く

馬頭観音	信仰塔 (北向観音)	月待塔	不動明王	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	信仰塔 (厄除け)	馬頭観音	地蔵菩薩 (二里地蔵)	馬頭観音	馬頭観音	不動明王
六合小裏 大石下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	六合小裏 大石上	町境／送電 線付近旧道	〃	〃	中沢林道脇
	1907	1865	1907	1805	1795	1864	1795	1896	1865	1865				1819	
39・27・39	60・20・60	94・30・94	47・24・47	61・30・61	40・35・40	55・15・55	54・26・54	36・22・36	75・18・75	49・15・49	45・18・45	計測困難	計測困難	59・33・59	
(馬頭観音像) □政四天／四月吉日※上欠損、石の下前列、左→右に移動	北向山観世音(右) 明治四拾年二月吉日(左) 施主市川庄作	二十三夜塔(右) 元治二年乙丑三月建之／施主星野七右エ門	動明王(右) 明治四十年二月吉日※「不」部分の石が欠損。	(馬頭観音像) 文化二年／丑十月吉日	(馬頭観音像) 寛政七年／乙卯十月日	馬頭大士(右) 元治元年□□(右) 施主□□	(馬頭観音像) 寛政七／乙卯年十一月吉日	(馬頭観音像) 明治廿九年三月吉日／施主市川右平治	厄除観世音／元治乙丑歳三月吉日	馬頭大士(右) 元治二年(左) 二□□日※大石上に石造仏十基、左→右の順	(地蔵菩薩立像)(裏) 地蔵菩薩／施主 海西※草津・小雨の間、双方に一里地点	(馬頭観音像) ※不動像の右、崖に二基	(馬頭観音像) 文政二〇年／三月吉日	(不動明王立像) ※道脇崖、銘不詳	

弘法大師	庚申塔	庚申塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	馬頭観音	馬頭観音	信仰塔(北向観音)	馬頭観音	石仏	石仏	馬頭観音	石仏	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音
天神道右上	〃／〃	小学裏／天神社道脇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
					1755	1864	1830	1932	1869	1802		1782		1815		
39・30・63	51・30・51	66・36・66	54・24・64	58・24・58	48・24・48	60・15・60	57・30・57	52・18・52	36・24・36	48・30・48	37・30・37	50・30・50	38・21・38	32・24・32	46・24・46	43・23・43
華座 (弘法大師座像) ※手に独鈷、蓮	庚申	庚申塔	(梵字サ) 随誓□門／四月五日	文學師之墓	圓寂是三沙弥位／宝曆五乙亥／十一月廿日	馬頭大士(右) 元治元甲子年九月吉日(左) 星埜七右エ門 ※二列、左→右	(馬頭観音像) 文政十三年／寅八月日	北向山厄除観世音(右) 昭和七年十一月吉日 市川武光(裏) 石工□□	(馬頭観音像)／明治二年／十一月□□後列右→左、無縫塔以外の墓石除く	(像) 享和二年／□□吉日※頭部欠損	(像) ※頭部欠損、蓮華座	(馬頭観音像) 天明二年／寅七月日	※合掌像、地蔵?	(馬頭観音座像) 文化十二／□□	(馬頭観音像)	(馬頭観音像) ※像は劣化

庚申塔	千手観音	如意輪観音	信仰塔	標石	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔
〃 〃 石段脇	〃 〃 石段脇	〃 〃 石段脇	〃 〃 石段脇	〃 〃 石段脇	千手 〃 石段脇 観音前	天神社 〃 石 段前左2 段	同 〃 上り口	同 〃 上り口	天神社 〃 石 段上り口	天神社 〃 石 段上り口	天神社 〃 道 脇前記の後	天神社 〃 石 段手前道脇
1865	1903				1867	1860			1892	1869	1864	1865
68 ・ 30 ・ 68	44 ・ 37 ・ 122	44 ・ 30 ・ 44	19 ・ 41 ・ 19	22 ・ 10 ・ 22	44 ・ 21 ・ 44	82 ・ 48 ・ 100			45 ・ 33 ・ 45	60 ・ 33 ・ 60	54 ・ 31 ・ 54	64 ・ 35 ・ 64
庚申(裏) 元治二丑年※千手後 方、日月、文字は隸書体	(千手観音像)(台) 千手観音/ 明治三十六年二月吉日建之 願 主福嶋太七※円柱に観音名と銘 文、四臂像で持物	(如意輪観音像) ※倒伏状態を復元	女人講/十六番(右) 癸卯歳六 月吉日※左欠損、癸卯は文化 十四年?	市川万エ門※右記と同人物、残欠?	庚申塔(右) 慶応三丁卯正月吉 祥日(左) 願主 市川萬右エ門	庚申(裏) 當山丁時万延元初而 開/願主市川久左衛門篤叙建之	庚申※残欠、前記の後斜面	庚申※残欠、前記の後斜面	申塔/明治二十五年五月吉日/ 施主市川太平	申供養塔(右) 二歳己巳十一月 吉日/與兵衛※上部欠損、『六合 村の庚申塔』では欠損前で、明 治二年作	庚申/文久四〇〇月/〇主 安 右エ門	庚申塔/元治二乙丑歳/如月吉 日建之

念仏塔	馬頭観音		歌碑		馬頭観音	石祠(山神)	石仏	庚申塔	庚申塔	燈籠	庚申塔	
〃 〃 旧道脇	支所裏/旧 道下り口		六合小入口		〃	十二坂道脇	〃 〃 観音堂	観音堂裏	天神社下/ 観音堂入口	〃 〃 天神社	天神社境内	
1782	1841		1975		1787			1865	1865	1807	1901	
130 ・ 38 ・ 159	90 ・ 85 ・ 364		140 ・ 50 ・ 140		54 ・ 30 ・ 54	24 ・ 55 ・ 24	44 ・ 33 ・ 44	58 ・ 22 ・ 58	66 ・ 47 ・ 66	175 ・ 56 ・ 175	205 ・ 70 ・ 230	
念仏供養塔(右) 天明二壬寅歳 (左) 三月吉祥日(台) 願主當 村中	馬頭観音座像(台) 小雨村・ 生須村口/天保十二辛巳歳星 十一月吉辰/世話人 山本口右 エ門・黒岩口エ門・星野七兵衛・ 口原口口・石工口口吉蔵※町文 化財、劣化、対岸生須に同じ物 対立和解の象徴か、高遠石工の 小森吉蔵作		(裏) 昭和五十年十月二十日建 之 六合村観光協会長 山口助		(馬頭観音像) 天明七未年/正 月吉日※草津道分岐した諏訪神 社への坂道	※台座のみ、本体は残片	(頭欠損座像)	庚申※観音堂裏急斜面	青面金剛/元治二年/丑二月吉 日建之※下部埋没	武右エ門	正一位稻荷五社大明神/于文化 四年/卯正月吉日/當所 市川 武右エ門	庚申塔(裏) 于時明治三十有四 歳三月吉祥日/施主 當村講中 ※日月

月待塔	馬頭観音	石仏	名号塔	〃	〃	〃	〃	〃	六地藏	石仏	巡拝塔	巡拝塔	巡拝塔	弘法大師像	如意輪観音
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	1815	1797									1850	1827	1826		1830
52・24・52	51・33・51	41・18・41	61・29・61	66・21・97	60・21・91	63・21・92	66・21・97	60・21・91	65・20・92	25・31・35	78・60・90	84・31・99	81・30・81	28・30・43	63・27・78
二十三夜(蓮) ※自然石、蓮の花	(馬頭観音像) 文化十二年/戊二月 吉日 角蔵	(石仏立像) (裏) 寛政九年七月 南無阿弥陀仏		(宝性地蔵菩薩立像) ※合掌像	(法性地蔵菩薩立像) ※持物は幡幡か	(地蔵菩薩立像) ※北列、持物は蓮か	(地蔵菩薩立像) ※持物は香炉	(地蔵菩薩立像) ※持物は宝珠	(延命地蔵立像) ※南列、手に錫杖・宝珠、何れも頭部欠損、劣化進む	(石仏座像) ※頭部欠落	奉納百八十八ヶ所供養塔(裏) 嘉永三年 高原十助	奉納百八十八ヶ所供養/文政十丁亥年二月日/施主宮寄小左衛門	奉納百八十八ヶ所(右) 文政九戌八月吉祥日(左) 願主黒岩庄五郎	(弘法大師座像) ※頭部欠落	(如意輪観音像) (右) 文政十三年寅三月日

石祠(稻荷)	⑧ 聖観音 (巡拝塔)	信仰の塔 (献灯/右)	信仰の塔 (献灯/左)	信仰の塔 (猿田彦)	墓誌 (山田弥惣治)	計測せず
沼尾/沼幡 神社東百駈	〃	〃	沼尾/二五 番沼尾寺跡	沼尾/豊田 宅脇	〃	
57・41・89	1761 100・33・125	1817 55・24・55	1817 54・22・54	1923 73・21・73		
※杉林内、石積み上、脇に石製狐	(聖観音立像) (右) 宝曆十一年辛巳十二月吉日(左) □奉巡礼秩父・坂東・西國百番供養塔※昭和五十五年、榮泉園付近から元来の場所に移したと本にある	敬献燈(右) 観音講中(裏) 文化十四年丁丑四月吉日※灯籠とは異なる角柱型 聖観音脇	敬献燈(右) 寒念仏講中(左) 當村中(裏) 文化十四年丁丑四月吉日※田村宅西約五〇駈右岸、国道杉林上斜面	猿田彦大神(左) 大正十二年四月吉日	君は嘉永元年拾月拾壹日大字入山に生じ、資性温厚にして人望あり、明治九年拾壹月元入山地主惣代人に当選、同拾貳年一月同村戸長、同四月花敷学校保護人役兼務、同拾四年三月入山村会議員、同拾五年一月郡第拾八学区学務委員、同年拾月郡教育委員、同拾七年拾二月赤岩村連合戸長、同拾八年三月入山村戸長兼務、同拾九年四月大笹村外三ヶ村戸長、同二十一年四月小雨村外五ヶ村戸長、同貳拾貳年三月草津村外一ヶ村戸長兼務草津村議員、草津村長、同二拾六年五月同上再選、同年拾月日本赤十字社社員、二拾九年八月郡会議員及郡三事會議員、三十三年九月六合村長、三十五年七月日本赤十字社郡委員部協賛委員、同三十六年四月同上六合村分区委員、同三十九年九月六合村會議員、同四十四年十月郡會議員、同年同月郡会副議長、大正二年十月草津町長、同四年十月郡會議員、同四年十月郡會議員満期退職、君の授賞枚挙するに違わず就中顯著なるは三十七八年日露戦争事件に依り勲八等、日色桐華章を授与された、其他教育産業交通及び有名な入山杖子製作方法奨励等熱心尽力せられたり、大正七年七月六合村長当選治績偉大なり、大正十年五月現職中他会の人になりて村会の協賛を得て六合村葬と為す、令嗣保平氏家督を嗣ぐ、茲に彫刻して伝徳矣 于時大正拾貳年四月辱知勲八等 本多佐平誌之(他略) ※初代六合村長、数々の公職歴任、読点追加、カタカナ↓平仮名、全↓同にする	

⑨												
庚申塔 (猿田彦?)	歌碑 (芭蕉)	灯籠	大日如来	馬頭観音	道祖神	經典塔	灯籠	馬頭観音	道祖神	月待塔	狐像	
〃	〃	沼尾／毘沙門 (多聞天)堂	〃	〃	〃	沼尾／山田 宅前		〃	〃	沼尾弘法岩	〃	
1871		1744		1876		1867						
55・24・72	99・27・99	170・54・170	45・33・76	46・24・55	44・29・44	57・23・57	未計測	50・28・50	63・40・63	51・24・51	18・7・18	
<p>(浮き彫り神像) (右) 明治四辛 歳末十月吉日 (左) 願主敬白※ 珍しい庚申塔、日輪、月輪、主神は瑞雲上、手に桑の枝?、下に神像二人</p> <p>十二山神／原中やものにもつかず 啼く雲雀／八十八歳 荒木老人</p> <p>奉寄進御寶前 村中(右) 延享元年 (左) 甲子六月吉日 (火袋) 奉納草津町湯本文十郎</p> <p>(大日如来座像) ※法界定印の胎藏界の如来像</p> <p>(三面六臂馬口印馬頭観音座像) (右) 明治九年子五月吉日 (左) 山田氏※頭部破損、馬頭観音の印を結ぶ</p> <p>(双体道祖神像) ※手に扇、徳利の祝言姿、上部は破風、応徳温泉から移す</p> <p>破の若者頭彰か</p> <p>奉讀誦高王白衣観音経一萬卷□ □塔(右) □應三丁卯歳十二月吉晨(左) □萬卷□目讀 同兵作十五才※左上部破損、経巻読破の若者頭彰か</p> <p>施主 沼尾組中(右) 発起人石工山口徳治郎／世話人霜田平八郎・山口直八※灯籠残片</p> <p>(馬頭観音像) ※石の摩耗進む</p> <p>(双体道祖神像) □己卯天※合掌</p> <p>二十三夜 ※蓮華座の上</p> <p>※稻荷様の眷属、小さな狐石像</p>												

馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音 (富蔵)	月待塔	庚申塔
	〃 〃	〃 〃	毘沙門堂先 ／旧草津道	毘沙門堂? ?
1913	1840			1749
65・25・65	48・27・72	74・30・95	26・24・26	77・49・?
馬頭観世音／大正二年十月建之山田氏※前記の先、大カীব右	馬頭観世音／天保十一年七月吉日／田村庄兵エ	富蔵観世音 ※長野県の富蔵観音を勧請	三夜塔※上が欠損、沢を渡った旧草津道脇	庚申塔(?) 寛延二己巳年正月吉日



③ 大黒屋／「原中や」の芭蕉句碑



② 諏訪神社東／信州富倉の馬頭観音



① 下平橋左岸袂／印象的な滝見観音



⑥ 大坂道脇／右は沢渡道の道標



⑤ 大坂旧道下／西国四番の聖観音



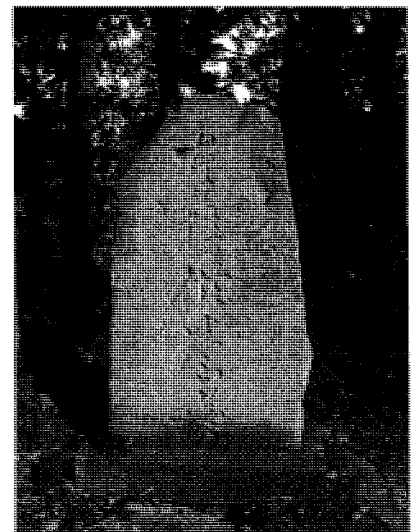
④ 大坂旧道脇／自然石利用の百八十八番巡拝塔



⑨ 毘沙門堂／庚申塔（猿田彦神？）



⑧ 沼尾寺跡／三原三十四番の聖観音



⑦ 沼尾墓地入口／達筆な巡拝塔

大字／生 須 地 内

番 号	名 称／種 別	場 所	西 曆	高 杉 幅 杉 総 杉	銘 文／改 行 ※備 考
①	灯籠(対右)	赤城神社	1872	265 90 388	赤城大明神(右)天神/地祇 八百萬神(左)八幡大神/八坂 大神(裏)明治五年壬申※多様 な神々に祈願※寸法は大凡、高 遠石工作?
①	灯籠(対左)	赤城神社 参道	1812	265 90 388	赤城大明神(右)伊勢大神宮/ 金毘羅大権現(左)石尊大権現 /秋葉台権現(裏)文化九年申 六月建十三重物作出(基)施主 村中/石工和吉※大灯籠
大日如来	石祠(稲荷)	赤城神社 参道蔵脇		46 21 121	(智拳印大日如来立像) ※蓮華、 敷茄子、反花等の台上
庚申塔 (猿田彦)	赤城神社 参道脇	1898	78 61 150	猿田彦大神/明治三十一年一月 十五日(基)氏子中	
灯籠 (対左)?	赤城神社 拝殿前		106 45 106	金毘羅大権現(右) 瑜伽大権現 (左)秋葉大権現(裏) 文政十二 年己丑二月吉日(基) 太々講中 /中澤安左衛門・同藤左衛門・ 同半右衛門/世話人 中澤藤右 衛門・市川仁兵衛・黒岩勘之丞・ 同喜三郎 ※瑜伽山は岡山県	
灯籠(対右)	赤城神社 拝殿前		106 45 106	(基) 太々講中/黒岩助左右エ門・ 同四郎兵衛・霜田政左エ衛門・同 善右エ門・同治兵衛・市川孫太郎・ 同文之丞 ※竿は前記と同銘	
石祠	赤城神社 本殿東側		56 30 56	※南く北の順	
石祠	赤城神社 "		52 32 52	(右)文化十二年亥四月	

石祠	石祠	石祠	石祠(伊勢)	不動明王	石祠 (ヒラキタさん)	記念碑
赤城神社/ "	赤城神社/ "	赤城神社/ "	大神宮境内	集落東方尾 根/辰ノ口	集落東方尾 根/ "	生須集落/ 旧道南入口
1824	1813	1824	2007	1939	1939	1978
55 31 55	68 36 68	63 31 63	51 31 51	49 27 59	57 33 157	81 49 161
(右) 文政七年八月吉日	(右) 村中(左) 文化十年	(右) 文政七年八月吉日	(右) 平成十九年十月吉日 村中 ※神社は集落東南山腹に祭祀	(不動明王立像) ※集落東尾根の凹部分の北、岩 下に祭祀、竜神伝説の場所	※石積上に祭祀、周囲も石で囲む、急 斜面の崩壊地形から村を守護する神?	記念/生須用水路補償工事/取水 堰(水叩・側壁付)/一・取水路 工(集水管・水木杵)一式/二・ 導水路(延長七六七M・擁壁)一 式/一・工事費三七〇〇万円/完 成昭和五十三年三月/建設省/ 施工東洋建設/管理者生須用水組 合/草津営林署長浅井敬三書

歌碑	道標	記念碑	記念碑	③	馬頭観音	道祖神	信仰塔
〃	〃	公民館脇	弓道場庭	道三本辻	集落南/旧	集落南/〃	集落南/旧 草津道上
61・61・90	2000	1988	1996	1909	36・21・36	52・33・52	25・26・41
〃	105・73・105	124・46・184	105・113・155	135・58・168	(馬頭観音像)	(双体道祖神像)※破風屋根、耳の神?	※自然石
草鞋に記す狂歌	右 草津へ二里/左 暮坂峠 沢渡へ四里/文化文政のころ/平成十二年山市屋建 ※草津街道の往事をしるのぶ	記念/合併処理浄化槽完成/昭和六十三年十二月三日/総工費一、四三九万円十八基/施工西原ネオ工業株式会社/管理者名生須/石輝刻 昭次郎書	射者則仁道/弓道場用地提供者市川昭次郎(裏)平成八年十月十日建之/錬土称号授与記念 中沢久吉	記念/一金十二円桜井傳三郎(他略)/大字赤岩村 一金十円安原安十郎(他略)/大字小雨村 一金五円市川久三郎(他略)/大字日影村 一金四円二十銭富沢〇〇(他略)/大字生須村 〇〇黒岩安三郎(他略)(左)明治四十〇〇〇(台)片益里道改修寄附人名※白砂川左岸の片益里道改修碑、左側欠損、『村誌』は明治四十二年竣工、碑も同年。寄附者は地元赤岩村五十人、生須村十八人と多い			

歌碑(牧水)	歌碑	記念碑	記念碑
〃	〃	〃	〃
1996	1991	2000	1994
129・45・184	68・46・85	68・46・85	78・41・100
上野と越後の国のさかいなる峰の高きに雪降りける 牧水/平成八年十月二十日 昭次郎建之	天たかき唇ついでし滝 蓼人/あさを社蓼人 山市屋にて/平成三年春昭次郎建之	暮坂道ゆかりの有名な/真田信綱、昌幸 永禄六年(一五六三) 岩櫃城攻めのため信州真田軍勢が通過する 加沢記/宗祇、宗長 文亀二年十一月(一五〇二) 文人/十返舎一九 文政二年(一八一九)さし絵師と一緒に茶屋に憩い当時の様子を一句書いていく/富田永世 文政十一年八月十二日(一八二八) 作家 茶屋に一泊 草津の冬住みの様子を書く/高野長英 天保七年(一八三六) 以後何回か赤岩の湯本家へ 高野長英伝高野長運著す/小栗上野介夫人みち子 慶応四年(一八六八) 広池一暮坂一世立一和光原(泊)一秋山一会津若松城/デンシャルム 明治六年八月(一八七三) 仏人 茶屋(泊) 別碑あり/ノルデンシヨルト 明治十二年(一八七九) スエーデン人 世界的な地理学者 ヴルガ号指揮大航海北方航路/長塚節 明治三十年七月(一八九七)(一九〇八) 農民作家 世立に碑/大槻文彦 明治十二年九月(一八七五) 国学者 茶屋に憩う 六合村入山民俗記は貴重な資料/田山花袋 大正中ごろ 生須に来る 紀行文/若山牧水 大正十一年(一九二二) みなかみ紀行 詩歌碑多数あり/田部重治 昭和十一年十一月(一九二七) 学者紀行文/平成十二年三月 民宿山市屋建之※昭和十一年(一九三六)、当地の歴史資料	デシヤルム大尉(仏人) 宿泊記念碑/明治六年(一八七三) 八月/ナポレオン三世派遣の将校 明治維新で幕軍敗北し 明治五年再来旧日本陸軍の近代化につきし少将となる 草津、伊香保を日本最初に紹介する/平成六年四月一日 市川昭次郎建之/ベルツ博士より七年 探検家ノルデンシヨルトより六年早い

		⑤				⑤					
(念仏) 信仰塔	馬頭観音	子安地藏		巡拝塔 (経典塔)	巡拝塔	庚申塔	無縫塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音
集落北／ ”	集落北／子 安地藏周辺	集落北／ ”		集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”
1781	1771	1834		1781	1782	1781	1772		1833	1810	
79・ 30・ 90	68・ 37・ 109	42・ 27・ 145		86・ 34・ 128	87・ 32・ 108	80・ 42・ 100	60・ 30・ 75	43・ 23・ 43	42・ 31・ 42	48・ 29・ 48	46・ 80・ 46
少ない 寒念佛供養塔(右)天明元年(左) 丑九月吉日 ※寒念仏塔は当地に 少ない	(馬頭観音像)明和八卯天／三月 吉日 ※以下は寺跡、子安地藏東側	(右)天保五年十二月十三日／ 世話人 永蔵・孫文エ門(左) 女人中／せい・いね・もよ・よし・ ちか・みな(裏)惣村中／世話 人 霜田市四郎・市川弥太郎・ 黒岩千吉・中澤亀蔵・山崎浅次 郎／石工 信州 木下好蔵・小 森吉蔵 ※豊満な姿の子安地藏、 高遠石工作		奉納秩父・西國・坂東供養塔(右) 奉讀誦大乘妙典六十六部六十六枚 御作(左)天明元辛丑八月吉祥日 寅歳(左)十一月吉日	奉納百番供養塔(右)天明二壬 寅歳(左)十一月吉日	庚申塔／天明年元 ※日月、台に 三猿	圓寂泰口仙上座品口／明和九辰 年七月十二日／山王儀右エ門 ※子安地藏道際	(馬頭観音像) ※脇の地藏は墓碑 で除く	(馬頭観音像) 天保四年／巳七月吉日	(馬頭観音像) 文化七天／三月吉日	(馬頭観音像) 八月／吉日

	⑦	⑥									
道標	庚申塔	月待塔 (勢至菩薩)	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	名号塔
分岐／ ”	分岐／中学・ 生須集落	集落北／道 上墓地北	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”	集落北／ ”
1928	1817	1846				1880	1834	1820	1853		1829
65・ 18・ 65	383・ 36・ 383	175・ 66・ 271	46・ 26・ 46	30・ 20・ 30	43・ 26・ 43	47・ 22・ 47	32・ 20・ 32	34・ 24・ 34	37・ 20・ 37	37・ 20・ 37	93・ 21・ 93
※白砂川左岸山中を通る旧温泉道道標	右きはたり(右)御大典記念／昭和三年十一月／六合青年團 第二支部生須支會 左久さ津(左) ←湯の平應徳温泉二 至ル九百四十七米	庚申供養塔(右) 岩文化十四丁 丑年(左) 九月吉日 講中 ※ 郡内最大級、伝承は一字に米一 升入る、日月と瑞雲	(馬頭観音像)	(馬頭観音像)	(馬頭観音像)	(馬頭観音像) 明治十三年／辰十月日／吉十	(馬頭観音像) 天保五年／午七月日	(馬頭観音像) 文政三年／七月	(馬頭観音像) 嘉永六年／丑七月日 ※下部埋没	(馬頭観音像)	南無阿弥陀佛(右) 文政十二年 丑八月 ※下部埋没、付近に馬頭 観音や無縁墓

歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑	歌碑
分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼
82・100・82	86・95・86	59・90・59	63・96・63	82・92・82	83・72・83	60・92・60	88・102・88	85・81・85	72・80・72	97・106・97	89・100・89
雑木林のトンネルの白根見ゆ牧水径は背に浅間山 昭次郎	暮坂の路傍に揺るる吾亦紅舅に供へむと夫と手折り来 いち	下草のすすきほうけて光りたる枯木が原の啄木鳥の声 若山牧水	牧水の触れし石らも牧水の踏みし土らも旧道を行く 春男	里雪の間近と知るや火の山はすでに三度雪装へり 貞子	※二列目 雪明かり月明かりして村囲む稜線の木々春まだ遠き アキエ	露霜のとくるがごとく天つ日の光をふくみにをうもみぢ葉 若山牧水	枯れし葉とおもふもみぢのふくみたるこの紅みをなんと申さむ 若山牧水	日を追ひつゝ紫式部の彩冴ゆる朝な夕ふに季ふかむなり トヨ	牧水の歩みし生須の旧道を行けば足元にこぼる紅萩 いし女	若き日の妻と牧水路歩みしは昨日の如し落葉鳴る音 宏衛	からまつの黄葉は詩碑にふりかかり暮坂峠の秋ふかくせる 富士子※歌碑群の西側前列、南へ北へ記録

経典塔	歌碑	歌碑	記念碑	歌碑	歌碑	歌碑
分岐東／旧道沿い墓脇	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼	分岐／＼
1856	76・34・127	103・100・103	95・130・95	110・92・110	1995	86・92・86
奉書寫法華一字一石塔(右)中澤藤右衛門 齢八十四歳建之(左)安政三丙辰歳冬十一月吉日	牧水の草鞋もて越えし暮坂路吾れは拓地へ此の路通ふ 久吉	野反湖は夏の賑はひすでに終へ紅葉映へしまゝに昏れてゆく てる子	生須歌碑苑 大正十一年(一九二二)十月十九日 草津から六合に入った牧水は自然の風光を数多の短歌と「枯野の旅」の詩と紀行文に残した。そこで土地つ子短歌愛好者相寄り牧水を偲びその偉業にあやかるべく生須歌碑苑を建立する 平成七年十一月吉日	もみぢ葉のいま照り匂ふ秋山の澄みぬるすがた寂しとぞ見し 若山牧水	勝磨書(裏)地主黒石秀光/昭和五十三年十月二十日/六合村観光協会/贈 伊勢崎市茂呂町二五八九ノ九 星野石材工業星野豊 ※後列県道側	つ津ら越りはる希き山路みる登て路に見てゆくりんどうの花紅み乃胸毛見せてうちつ希に啼くきつゝきの声のさびしき 中澤勝磨書(裏)地主黒石秀光/昭和五十三年十月二十日/六合村観光協会/贈 伊勢崎市茂呂町二五八九ノ九 星野石材工業星野豊 ※後列県道側

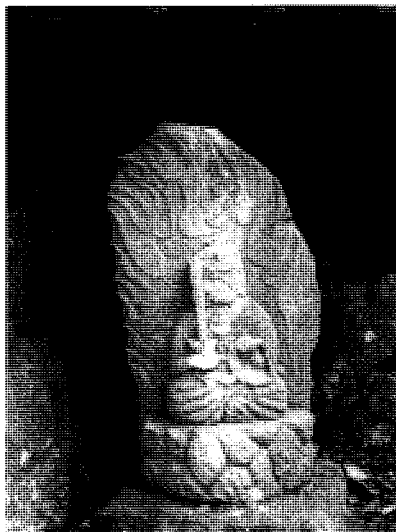
記念碑 降跡／県道 五百竝奥	歌碑 県道脇／分岐二百竝先	⑧ 高僧像 (弘法大師)	巡拝塔 (山岳信仰塔)	分岐／〃
				1835
				79・29・178
				奉納百八十八番供養塔(右)奉納湯殿山供養塔(左)宣天保六年乙未十月吉日※台座に花、亀、海波浮彫り
2007	43・37・130	(弘法大師座像)※手に鉢、数珠	みなかみ紀行「枯野の旅」より／さびしさよ落葉がくれに咲きてをる深山りんだうの濃いむらさきの花 若山牧水平成八年十月吉日 伊勢崎市星野石材店建之贈／市川昭次郎書	

降跡沼の由来碑 降跡沼は天明年間縦三十間横十五間の大きな沼があつた降跡山谷より溪流が入り、末流は西の須川に入る。すでに昭和初期(昭和二年)において沼の形状は失われたものと思われる(吾妻郡誌) 降跡沼近く共有の採草地有り昔ほどの家も馬を飼っていました。その馬の草刈りが日課になっていました。ある夏の日、村の古老が草刈りに行き帰りにふと振り向いて見ると数百年へた巨木のくぼ地が急に池になりその中心のようなところへそのような島が出ていました。はて不思議なこと、よく見るとうなぎのような物が泳いでいました。其の後は草刈りに行度に小さな島が続き、草を背負つて「どっこいしょ」と休んでかまえて帰るような日々が続きました。草を背負つて「どっこいしょ」と休んで振り向くと池の主のようなものが「さわさわ」と小さな波をたてるので真の地名になつています。その主のために池のまん中にあるへそのような島に石造りの弁天様の「ほこら」を作り主の安住を祈願しました。そして日照りが続いて困った時は村人達はこの弁天様を拝み雨ごいをしました。そうすると必ず雨が降つたのです。しかし、いつの頃か池の水がだんだんと少なくなり、降跡の主が村の東にある岩山のわれ目から引越して行きました。その大きなわれ目一帯の地を「辰の口」と呼び、石造りの不動尊を建立しました。例年五月五日、村中の人が集まつてお祭りをし、村の安全を祈願しました。さて降跡沼の主ですが、村の東にある辰の口より対岸沼尾の地に引越しました。だが、その池も水が少なくなり、入山引沼の池に引越しました。しかしその池の水も少なくなり、野反湖に行きました。そして生須の人が野反湖に行くこと必ず雨が降るといふので、日照り続きの時は雨ごいに頼まれて野反湖に行つたそうです。平成十九年八月吉日 黒岩勇・いち建之石輝刻

馬頭観音 牧水清水／旧道東百竝	文学碑 水清水	馬頭観音 降跡／駒ヶ沢ダム入口	歌碑 降跡入口先／県道脇	石祠 (弁財天)
				降跡／記念碑西丘上
				1808
				78・43・78
1781	88・61・88	1871	1996	(右)文化五年(左)辰三月吉日 (馬頭観音像) 天和八卯天／三月吉日※県道より三十竝道脇、昔の暮坂道と鍛冶屋敷道分岐点、十二神碑は台座のみ



③ 三本辻／赤岩と結ぶ里道改修記念碑



② シラキタさん／村を見下ろす尾根に祭祀の不動像



① 赤城神社／入口の大灯籠で多様な神々を祀る



⑥ 馬頭観音北／二十三夜塔の優品



⑤ 馬頭観音東／今も講がある子安地蔵



④ 県道脇／町文化財の馬頭観音



⑨ 降跡池／池の主を祀った弁天石祠



⑧ 庚申塔東、旧道沿い弘法大師



⑦ 県道の辻／県内有数の大庚申塔

大字／入山地内

①	番号	名称／種別	場所	西暦	高・幅・総	銘文／改行 ※備考
道祖神		名称／種別	場所	西暦	高・幅・総	銘文／改行 ※備考
道祖神		巡拝塔(經典塔／月待塔／弘法大子)	観音堂前左	1862	110・36・144	奉納百八拾八所(右)奉誦誦大乘妙典六拾六部 中沢浅右衛門(左)廿三夜勢至菩薩／文久二戌三月吉祥日※三面に庶民の多様な願いの信仰碑文、手に独鈷と数珠を持つ弘法大師座像
記念碑		巡拝塔	観音堂前右	1763	120・35・147	奉納西国秩父板東百番塔／宝曆十三年癸未十月日／願主中沢権六・同惣兵衛・湯本九兵衛
地蔵菩薩		馬頭観音	〃／〃	2000	42・18・57	馬頭観世音(裏)平成十二年十一月／中沢眞一建之
地蔵菩薩		馬頭観音	〃／〃		68・18・68	馬頭観世音
四方仏		地蔵菩薩	〃／〃	1912	47・16・60	(合掌立像)大正元年／十月吉日 ※坊主姿、背後に円光
馬頭観音		馬頭観音	〃／〃	1872	39・21・53	(馬頭観音像) 明治五〇〇年／〇〇
地蔵菩薩		馬頭観音	〃／石段右		40・21・100	(東は馬口印馬頭観音像)(南は阿弥陀如来像)(西は合掌観音像)(北は金剛印大日如来像)※この種の石仏は当地に少ない
記念碑		地蔵菩薩	〃	1982	78・18・78	延命地蔵、他の六地藏も同類
道祖神		記念碑	〃	1843	59・28・76	六地藏再建荷付場村／昭和五十七年九月／施工石輝
道祖神		道祖神	荷付場／観音堂下段	1843	40・30・54	(双体道祖神像)(左)天保十四年? ※有名な抱擁道祖神像、上部は破風

②	巡拝塔	地蔵菩薩	馬頭観音	庚申塔	馬頭観音	馬頭観音	供養塔(無縁)	石段(石柱)	信仰塔(天神)	馬頭観音／道標	信仰塔(山神十二)	庚申塔(猿田彦)	馬頭観音	道祖神	庚申塔?
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	子安様手前旧道脇	子安さん	荷付場／集落西中腹	旧草津道／鉄塔入口	〃／〃二百メートル先	梨木／集落入口井戸下	〃	梨木／集落入口	梨木／地蔵堂周辺
	1833	63・32・63	47・24・59	76・30・97	53・30・65	49・24・83	27・14・27	30・16・30	41・21・48	62・45・81	68・21・92	47・27・47	52・38・70	75・20・75	
	奉納西国・秩父・板東百番供養塔／天保四年癸歳／巳五月吉祥日 中沢浅右衛門	(合掌地藏立像)	(馬口印馬頭観音像)	(馬頭観音像) 寛延二己巳年九月吉日 ※梵字はウーン、上は破風形	(馬頭観音像) 寛政八己巳年七月吉日 中沢與助 ※千支と年号不一致	無縁供養塔(裏)平成十九年九月 中沢一孝建之	口務省 ※石段上柱、内務省? 不詳	天神様※荷付場集落を見下ろす山腹の祠内	(馬頭観音像) 右 山／左ハクさつ／天保十三年十月吉 ※鉄塔は右に	奉納十二山神／中沢氏※荷付場の人が奉納、国道下旧道脇	猿田彦大神／明治三十五年第六月吉日	(馬頭観音像) 大正十年／九月十八日建／願主 湯本氏	(双体道祖神像)	※瑞雲に浮き彫り像、下は庚申か?	

灯籠	灯籠	如意輪観音	庚申塔	記念碑	記念碑	馬頭観音	石祠	石祠	狛犬(対左)	狛犬(対右)
〃	〃	〃	品木公民館 上の尾根/ お堂前	〃	ダム事務所	県道・ダム間	〃/拝殿東	〃/拝殿東	〃/拝殿前	〃/拝殿前
1965	1847		1763		1966			1846		1987
150 ・ 55 ・ 150	182 ・ 66 ・ 200	55 ・ 40 ・ 115	77 ・ 29 ・ 77	100 ・ 70 ・ 120	145 ・ 97 ・ 205	45 ・ 23 ・ 58	43 ・ 28 ・ 43	30 ・ 23 ・ 30	62 ・ 25 ・ 207	62 ・ 25 ・ 207
奉納水没記念/昭和四十年※ダムで集落が水没した際に建てた	常照燈(右)弘化四丁未七月吉日(台)施主山本藤次郎/山口長口/施主村中	(如意輪観音像)※蓮華や六角基台上	庚申塔(右)寶曆十三年癸(左)未五月四日※日月あり※一帯の石造仏はダム建設で、品木集落から鎮守赤城神社やお堂に移る	慰霊之碑(裏)富山縣新川郡朝日町境水島喜一郎 四十六才 昭和三十九年七月七日歿/広島縣吳市吉浦松葉町土手明 二十五才 昭和四十年八月二十九日歿 ※遠方の方が工事で事故死	吾妻川総合開発記念碑/昭和四十一年三月/群馬縣	馬頭観世音/山口鶴吉※品木原旧道口		(右)弘化三丙午六月吉日 梨子木村	奉(裏)寄進者 黒岩輝雄/梨木 湯本忠吉/草津町 湯本武平/横浜市 湯本正男/厚木市 湯本辰雄	納(裏)施主一級技能士 黒岩輝雄/昭和六十二年五月吉日建之

無縫塔	石祠	灯籠(対右)	月待塔	巡拝塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	子安観音	弘法像?	
神社裏尾根	〃/神社脇	〃/神社前	〃/堂の東	〃/堂の東	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
1680		1774	1847												1843	
53 ・ 30 ・ 82	56 ・ 38 ・ 56	160 ・ 57 ・ 160	86 ・ 46 ・ 86	78 ・ 45 ・ 78	60 ・ 31 ・ 60	77 ・ 33 ・ 77	87 ・ 32 ・ 87	87 ・ 31 ・ 87	83 ・ 29 ・ 83	87 ・ 30 ・ 87	82 ・ 32 ・ 82	80 ・ 32 ・ 80	79 ・ 31 ・ 79	100 ・ 36 ・ 100	35 ・ 21 ・ 105	33 ・ 18 ・ 98
梵字/愁口優婆塞墓/延宝八年三月十日※品木の方がお行様と呼ぶ行人塚梵字は大日(アーンク)か?		奉納御宝前/村中/安永三甲午年九月吉祥日 ※竿は円柱形	十九(裏)弘化四丁午※下埋没、十九夜塔、干支不一致	奉納秩父/板東供※埋没部は養塔	ほぼ完全、水輪欠	ほぼ完全、水輪欠	完全な形、	完全な形	後列西、東、完全な形	完全な形	完全な形	完全な形	ほぼ完全、空輪欠	前列西、東の順、以下碑文未確認、上は相輪?	僧形座像(台)天保十四年/卯五月大吉日/二十七番 ※手に独鈷と数珠、二十七番と百八十八番観音の關係は?	

			③									
聖観音	観音	標石	巡拝塔 (弘法大師)	石祠	馬頭観音	灯籠	馬頭観音	馬頭観音	伯耆像	馬頭観音/ 道標	山神	馬頭観音
〃	〃	東隣 百八十八番	〃	東隣 百八十八番	〃	〃	〃	〃	ダム上/百 八十八番前	〃	〃	品木原/車 道分岐
				1931		1895		1804				1955
39・ 28・ 39	39・ 28・ 39	48・ 18・ 48	128・ 40・ 128	89・ 38・ 89	42・ 37・ 99	158・ 60・ 158	46・ 24・ 65	56・ 33・ 65	37・ 35・ 50	46・ 21・ 46	70・ 25・ 85	46・ 26・ 64
(聖観音立像) 六 ※左に蓮、秩父?	(合掌観音像) ※番は欠ける	奉造刻板東卅三番 ※最前列右↘左順	(弘法座像) (台) 奉建立四国・ 西国・板東・秩父百八拾〇〇〇 狼塔(右) □亥□吉日(左) 山 本傳三郎※手に独鈷、数珠。欠 落の□は八番供、年号欠損	(右) 品木世話人 山口吉良 (左) 昭和六年	(三面六臂馬頭観音像) (台) 富蔵 山/安政五星午三月吉日※優美 な作品、信州の富蔵観音を勧請	奉納/明治二十八年五月吉日 ※後列	(三面六臂馬頭観音像) ※持物 は右手に独鈷、斧、左手に宝輪、 数珠	(馬頭観音像) 文化元甲子年/ 七月吉日/村中	(伯耆像) ※馬の病等を癒す伯 耆? ※持物は剣と宝輪、前列右 ↘左の順	馬頭大士/右 京つか※左は欠 落、「左ハこくら」は欠損	大山祇神社	馬頭観世音/昭和三十年六月 二十八日/山口氏

聖観音	阿弥陀如来	大日如来	千手観音	千手観音	観音?	薬師如来	虚空蔵菩薩	釈迦如来	観音	阿弥陀如来	滝見観音	地藏菩薩	聖観音	標石	聖観音	観音	観音	聖観音	観音	聖観音	聖観音	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
44・ 20・ 44	40・ 20・ 40	41・ 20・ 41	40・ 21・ 40	40・ 20・ 40	41・ 20・ 41	40・ 21・ 40	37・ 21・ 37	40・ 20・ 40	40・ 20・ 40	33・ 20・ 33	40・ 19・ 40	41・ 21・ 41	46・ 20・ 46	47・ 18・ 47	41・ 21・ 41	23・ 20・ 23	23・ 20・ 23	47・ 20・ 47	40・ 20・ 40	36・ 18・ 36	36・ 18・ 36	
(聖観音立像)	(阿弥陀如来像) 四十七※四国 の本尊	(大日如来像) 四十二 ※四国 の本尊	(千手観音座像) 六十六※四国の本尊	(千手観音立像)	(観音座像) 十三※螺髪?如来	(薬師如来座像) 四十六※螺髪 薬壺	(虚空蔵菩薩座像) 十二※二列 目右↘左、右手に剣、四国十二 番の本尊	(釈迦如来座像) 五十一※四国の本尊	(観音合掌座像) 四	(阿弥陀座像) 五十三※四国の本尊	(滝見観音座像) 八※岩座、膝を組む	(勝軍地藏座像) 五 ※錫杖、四国?	(聖観音立像) 二十二※手に蓮、秩父	奉造彫西国三十三番	(聖観音立像) 三 ※手に蓮、秩父?	(観音座像) ※番号なし	(観音座像) 六 ※上部欠損	(聖観音立像) 四 ※蓮を持つ	(観音座像) 二※四国二番は阿弥陀	(聖観音立像) 四 ※蓮を持つ	(聖観音像) 三十二※上部欠損	(聖観音像) 三十二※上部欠損

十一面観音	観音	薬師如来	観音	虚空蔵菩薩	観音	魚籃観音	薬師如来	大日如来	観音	聖観音	観音	観音	聖観音	千手観音	千手観音	観音	標石	十一面観音	観音？	釈迦如来	観音	観音	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
40・23・40	40・21・40	32・19・32	34・21・34	39・21・39	44・20・44	44・20・44	45・23・45	36・19・36	42・20・42	43・21・43	40・20・40	38・20・38	42・20・42	28・22・28	34・20・34	43・21・43	45・18・45	44・21・44	41・18・41	41・21・41	41・21・41	38・21・38	
(十一面観音座像)五十二※四国本尊	(観音座像)※膝の手に宝珠	(薬師如来座像)十一※与願、施無畏	(観音座像)十四※蓮華上	(虚空蔵菩薩座像)十二※右に剣、四国	(観音立像)二十三	(魚籃観音立像)十※魚の上に乗る	(薬師如来座像)三十九※四国の本尊	(大日如来座像)四※四国の本尊	(観音合掌座像)三十三	(聖観音立像)五※手に蓮	(観音座像)二※岩座上	(観音座像)一	(聖観音立像)二※三列目、秩父	(千手観音像)※上部欠損	(千手観音座像)	(観音座像)二十三	秩父三拾四番	(十一面観音座像)八十六※四国	(観音座像)二十※与願、施無畏印	(釈迦如来座像)九※与願、施無畏印	(観音座像)十三	(観音座像)七	※定印、四国？

聖観音	観音？	千手観音	十一面観音	千手観音	薬師如来	十一面観音	不動明王	不動明王	聖観音	大日如来	釈迦如来	威徳観音	観音？	薬師如来	阿弥陀如来	不動明王	釈迦如来	観音	観音	聖観音	観音
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
41・20・41	39・21・39	47・23・47	36・21・36	37・16・37	33・21・33	43・23・43	40・16・40	44・22・44	93・23・93	30・20・30	42・21・42	43・19・43	48・28・48	41・22・41	41・21・41	35・21・35	28・20・28	40・19・40	8・15・8	40・18・40	42・20・42
(聖観音立像)二十六※手に蓮	(観音座像)十八※岩座上、定印	(千手観音座像)十二※四国の本尊	(十一面観音座像)四十一※四国本尊	(千手観音座像)五十八※四国の本尊	(薬師如来座像)四十※四国の本尊	(十一面観音座像)六十二※四国の本尊	(不動明王座像)六十三※顔欠、手に剣、背に火炎、四国六十三は毘沙門天	(不動明王座像)四十五※岩座、剣と繩	(聖観音立像)十二※秩父	(大日如来像)六十※破損、四国本尊	(釈迦如来座像)三※与願、施無畏印	(威徳観音座像)十五※四列、手に蓮	(合掌座像)十一※大日如来に似る	(薬師如来座像)五十※四国、定印	(阿弥陀如来座像)五十七※四国本尊	(不動明王座像)五十四※四国の本尊	(釈迦如来座像)四十九※定印、四国	(観音座像)	十九※像欠損	(聖観音立像)八十七※四国の本尊	(観音合掌座像)四十三※四国

観音	観音	聖観音	観音	千手観音	地藏菩薩	聖観音	聖観音?	聖観音?	聖観音	千手観音	聖観音	観音?	観音?	聖観音	千手観音	千手観音	千手観音	観音	観音	阿耨観音	阿弥陀如来
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
36・21・36	35・18・35	30・15・30	42・20・42	41・21・41	38・20・38	29・19・29	39・21・39	40・20・40	39・18・39	42・18・42	40・19・40	41・19・41	36・18・36	41・19・41	40・22・40	41・20・41	50・24・50	42・18・42	42・18・42	43・21・43	42・22・42
(観音立像) □四 ※欠損あり	(観音立像) 二十七※欠損あり	(聖観音立像)	(観音座像) ※岩座、三十三観音?	(千手観音立像) 十六※十臂	(延命地藏菩薩座像) 十九※手に錫杖	(聖観音座像) 八十三※上部欠、四国	(聖観音座像) 九	(聖観音立像) 二十四※与願、施無畏	(聖観音立像) 二十七	(千手観音座像) 二十七※十二臂	(聖観音立像) 二十七※五列目、蓮華	(観音立像) 二十六※定印	は千手観音 (観音座像) 廿七※五列目右、左、施無畏、与願印、四国本尊	(聖観音立像) 廿三 ※秩父の本尊	(千手観音座像) 九※十臂、持物多様	(千手観音座像) □十五※十二臂、	(千手観音座像) 二十六※十臂、手に戟	(観音立像) 三十一	(観音座像) 六? ※川流、白衣?	(阿耨観音座像) 二十 ※滝や岩	(弥陀如来座像) 六十八※四国、定印

聖観音	千手観音	一葉観音	観音	観音	観音	聖観音	不動明王?	聖観音	観音	観音	聖観音	観音	聖観音	観音	聖観音	観音	観音	観音	千手観音	観音
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
27・27・27	37・20・37	43・21・43	35・21・35	43・21・43	43・20・43	41・20・41	38・20・38	37・20・37	40・20・40	44・20・44	43・19・43	15・17・15	41・20・41	37・12・37	44・21・44	40・20・40	17・20・17	40・20・40	42・20・42	25・16・25
(聖観音立像) ※下部欠損	(千手観音座像) 三十※十臂、西国	(一葉観音座像) 十三※左膝立て	(観音座像) 五	(観音座像) 二十一※三十三観音?	(観音像) 十七 ※左膝立て	(聖観音立像) 十八	(不動明王座像) 三十六※四国、本尊は波切不動明王、姿は地藏に似る	(聖観音座像) 三十※坂東の本尊	(観音座像) 九	(観音座像) 三十八 ※四国	(聖観音立像) □十□※一部欠損	三十二 ※欠損、下部のみ	(聖観音立像) ※欠損あり	(観音像) 二十※六列目、左欠損	(聖観音立像) 二十九※秩父の本尊	(観音立像) ※左側欠損	(観音立像) ※上部欠損	(観音像) ※蓮華座	(千手観音座像) 二十九※十四臂、四国	(観音) ※欠損、顔のみ

観音	観音	観音	観音	聖観音	聖観音	聖観音	聖観音	聖観音	観音?	観音?	千手観音	聖観音	聖観音	観音	観音	聖観音	聖観音	聖観音	観音	聖観音	
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
45・22・45	41・20・41	32・24・32	24・15・24	42・20・42	39・19・39	45・21・45	42・19・42	42・20・42	38・20・38	41・21・41	45・21・45	41・19・41	45・20・45	20・18・20	32・20・32	37・21・37	40・20・40	35・19・35	36・20・36	45・19・45	
(観音立像) 十四 ※八列目	(観音立像) 三十三	(観音立像) 二十八	(観音像) 十六 ※上部欠、延命観音?	(聖観音座像) 卅三 ※秩父の本尊	(聖観音立像) 十 ※秩父の本尊	(聖観音立像) 三 ※秩父の本尊	(聖観音立像) 卅五 ※秩父の本尊	(聖観音座像) 十五	(観音像) 七 ※上部欠損	(観音座像) 卅二 ※与願、施無畏印	(千手観音座像) 十六	(聖観音立像) 三十一 ※秩父の本尊	(聖観音立像) 二十九 ※秩父の本尊	(観音立像) 三十一 ※上部欠損	(観音合掌座像) 二十三	(聖観音座像) ※七列目右、左	(聖観音立像)	(聖観音座像) 十 ※蓮華座、秩父本尊	(観音立像) 八	(聖観音立像) 二十四、秩父の本尊	

馬頭観音	石祠(天神)	千手観音	聖観音	十一面観音	薬師如来	十一面観音	十一面観音	薬師如来	千手観音	観音?	観音?	如意輪観音	観音?	観音?	観音	聖観音	聖観音	聖観音	観音	観音	
旧道	品木、梨木	品木原道脇	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
1853																					
41・27・51	84・38・84	42・21・42	40・18・40	40・21・40	42・20・42	42・21・42	42・21・42	41・22・41	36・20・36	39・19・39	39・20・39	35・20・35	41・21・41	38・21・38	41・19・41	41・19・41	40・18・40	42・20・42	25・18・25	44・24・44	
り約二百片 (馬頭観音像) 天保四巳/五月 吉日/清之丞 ※品木原車道よ	※品木京塚田代原分岐手前、品木寄り	(千手観音座像) 八十 ※四国	(聖観音座像) 八十五 ※十一列、四国	(十一面千手観音座像) 八十四 ※四国	(薬師如来座像) 八十八 ※四国、手印	(十一面観音座像) 四十四 ※四国本尊	(十一面観音座像) 七十九 ※四国本尊	(薬師如来座像) 七十五 ※十一列目、四国	(千手観音座像) 八十二 ※四国、六臂	(観音座像) ※定印	(観音座像) 十八 ※与願施無畏、薬師?	(如意輪観音像) 三十 ※秩父の本尊	(観音座像) 六 ※与願施無畏、薬師?	(観音座像) ※	(聖観音座像) 四 ※七列目	(聖観音立像) 一	(聖観音立像) 二十口 ※左右欠損	(聖観音座像) 十	(聖観音像) ※下部欠損	(観音座像) 二十六	

												④
馬頭観音	庚申塔	道祖神	丸石	大黒天	馬頭観音	馬頭観音	聖観音	地藏菩薩	地藏菩薩	観音	燈籠(対)	宝篋印塔 (巡拝塔) 供養塔)
〃 〃 岩下	〃 〃	〃 〃	〃 〃	見寄/ 大日 堂脇	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	見寄/ 大日 堂境内	見寄/ ドン ガラ松墓地
1904	1806			1850		1806	1777		1806		1989	1853
86 ・ 40 ・ 86	64 ・ 25 ・ 84	47 ・ 55 ・ 47	57 ・ 32 ・ 81	47 ・ 27 ・ 47	36 ・ 20 ・ 36	37 ・ 30 ・ 37	50 ・ 27 ・ 50	50 ・ 32 ・ 50	40 ・ 15 ・ 52	55 ・ 34 ・ 55	210 ・ 70 ・ 210	210 ・ 67 ・ 210
馬頭観世音(右) 明治三十七年 八月十五日(左) 山本伊作/山 本勘助※角柱	庚申塔/文化三丙寅年/六月十五日 /見寄村/施主山本新石工門	奉納道祖神/山本氏	※無銘自然石	(大黒天座像)(裏) 嘉永三戌年 八月吉日 ※俵上、手に小槌、袋を背負う	(馬頭観音像) 吉右エ門 ※後は墓石	(馬頭観音像) 文化三丙天六月 十五日	(聖観音像) 安永六酉天十一月 廿日	(護讃地藏立像) ※両手で念珠 を持つ	(地藏菩薩合掌像) 文化三年丙六月 十五日	(如意輪観音像) □貞秋禪定尼 ※墓石	奉獻/平成元年四月吉日 ※対の左右銘同文	(金剛五仏梵字) 宝篋尼塔印陀羅 /大乘妙典六十六部/先祖代々 諸尊靈(台) 嘉永六年歳在癸丑 二月日/施主山本元右衛門 ※剥落前は高遠石工吉蔵の名が 見えた

歌碑	道標	石祠 (十二山神)	歌碑	石祠(山神)	石祠(山神)	馬頭観音						
〃	暮坂直売所 脇旧道入口	小森口釣堀 脇/大榎脇	県道/湯の 平温泉口	見寄旧道脇 /尾根越え	見寄旧道脇 /古木根元	見寄旧道/ 天狗様北方						
1978	1928	1897	1977	1906	1982	1774						
134 ・ 151 ・ 134	60 ・ 17 ・ 60	66 ・ 40 ・ 66	122 ・ 155 ・ 145	36 ・ 20 ・ 36	69 ・ 32 ・ 69	36 ・ 21 ・ 50						
九 星野石材工業星野豊	夕日さす枯野が原のひとつ路わ が急ぐ路に散れる栗の実/音さ やぐ落葉が下に散りてをるこの 栗の実の色よろしき 中澤勝 麿書(裏)地主/昭和五十三年 十月二十日/六合村観光協会/ 贈 伊勢崎市茂呂町二五九八ノ 九	(右)明治三十年酉年九月吉日建之 (左)施主入山村/世話人熊川西次郎	枯れし葉とおもふもみぢのふく みたるこの紅をなんと申さむ /溪川の真白川原にわれ等あて うちたたへたり山の紅葉を 若 山牧水(裏) 昭和五十二年十月 十九日/六合村観光協会建之/ 石匠齊木市太郎	(右) 明治三十九年八月一日/ 山本健作 ※屋根破損、仮復元	(右) 昭和五十七年三月吉日/ 見寄部落建之※杉松等の古木が 祭祀場を演出	(馬頭観音像) 安永三年/山本 善四良※採草地や暮坂へ向かう 旧道沿い						

馬頭観音	道祖神	馬頭観音	石祠 (金比羅)	灯籠(対)	開通記念碑/林道暮坂引沼線/農用地整備公団営農畜産基地建設事業/県営中山間地域総合整備事業世立地区/県営ふるさと農道緊急整備事業入山地区(裏)事業概況/完成総延長7,266m総事業費3,415百万円/工期昭和59年度/平成11年度事業内容 林道暮坂引沼線道路改良工事 昭和60年/平成11年度施工 改良1,728m 舗装320m 事業費562百万円/農用地整備公団営農畜産基地建設事業 平成6年度/11年度施工 天龍橋(64m)平成8/9年度施工 揚場橋(45m)平成9年度施工 改良舗装3,579m 事業費2,282百万円/県営中山間地域総合整備事業世立地区 平成5年度/10年度施工 改良舗装1,288m 事業費429百万円/県営ふるさと農道緊急整備事業入山地区 平成10年度改良770m 舗装1,970m 事業費129百万円 林道世立線改良工事 昭和59年度施工 改良460m 事業費13百万円/竣工 平成11年9月吉日 六合村 ※入山と中之条町間最短道路完成記念碑、入山と中之条町中心部を結ぶ大動脈	記念碑	馬頭観音
〃	〃	世立/天龍 橋右岸門松	諏訪神社西 /金比羅山	世立/諏訪 神社		世立/天龍 橋袂旧道脇	馬頭観音
71・24・71	1779	1855	90・40・145	160・67・185		1999	1852
兵衛・乃口	祝言型	を右/左へ記述	や堅堀遺構	両基同銘		147・211・281	60・33・60
(馬頭観音像)(右) 山本武兵衛 /同善兵衛・同口口(左) 関七	(双体道祖神像) 安永八亥年/十月吉日 ※手に徳利と盃を持つ	(馬頭観音像) 安政二年/卯五月吉日/世立村中※村で建てた立派な像、場所は集落入口、七基を右/左へ記述	※一帯は世立を一望、村入口の見張り場か、周囲に曲輪状地形や堅堀遺構	清明燈(右) 元治二乙丑年七月廿五日造之(基) 當村氏子中※	(馬頭観音像) 嘉永五年/子十二月日※移動、根広の方が遭難、馬を供養		

歌碑(牧水)	歌碑 (長塚節)	馬頭観音	經典塔 (巡拝塔)	經典塔	庚申塔	石祠 (十二山神)	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音
道脇	栗東南百	杉菜/道脇	〃	〃	館東旧道脇	世立上の棚	〃	〃	〃	〃
105・124・105	1978	43・24・43	1902	1856	1830	1806	1917	1911		
	110・120・110		140・44・140	110・45・130	143・35・163	39・30・39	53・35・53	32・18・32	43・24・43	49・18・49
丁目黒石材工業/河村芳子書	わが急ぐ山より見ればむかう山夕日にもゆるもみぢなりけり 牧水(裏) 寄贈伊勢崎市茂呂町二	(馬頭観音像) ※左側欠損	□ ※自然石	奉恭讀普門品一千卷大乘妙典六十六部/順禮秩父三十四番供養塔(右) 明治三十五年壬寅旧四月二十五日建之/願主山本芳	奉願大乘妙典/六十六供養塔(右) 安政三年辰九月吉日(左) 願主山本善兵衛※經典六六部書写、六六国を廻り納める	弥五兵衛・平蔵	※集落/採草地への旧道脇、松の根元	欠損	(馬頭観音像) 大正六年/十月日/山本兼太郎	(馬頭観音像) 明治四十四年/二月吉日

信仰塔	燈籠(対右)	石祠(大峰)	石祠(金比羅)	地蔵菩薩	道祖神	庚申塔	巡拝塔	標石	歌碑(牧水)	⑦ 子安地蔵	經典塔/名号塔/石仏
引沼/皇大神宮西斜面	〃/石段	〃/鳥居右	引沼/弁天社前	滝見ドライブイン庭	旧道世立坂村境尾根	〃	よつてかねえ館百以北道脇	世立/大神宮前	〃	世立/よつてかねえ館東	枝垂栗北/道脇
	1847	1979			1832		1821	1857			1848
55・29・77	185・70・205	78・40・190	60・36・60	81・25・81	52・40・64	110・30・170	110・3・135	30・20・30	85・42・103	54・42・31	133・42・151
日向大明神(台)兵士安全※自然石、武運長久を叶える神か、上々下へ	御神燈(右)于時弘化四年歳三月吉辰建之 ※左側の燈籠も同じ	(右)昭和五十四年四月吉日建之/引沼氏子中	※自然石の上	(地蔵菩薩立像)※昔は寂しい所、伝間引きの子を供養	(双体道祖神像)天保三子辰天/三月吉日/村中※破風、杯・徳利の祝言型	(青面金剛像)奉攸村中/安全祈攸※忿怒像、三股叉、輪宝、独鈷、絹索	(観音座像)奉納百番供養(右)文政四歳巳三月日(左)世立邑関衆次良	安政四年巳三月吉日 ※神社石段の設置年号か?	上野と越後の国のさかひなる峰の高きに雪降りにつけり 牧水(裏)寄贈伊勢崎市茂呂町二丁目黒岩石材工業/河村芳子書	(子安地蔵座像)(台)當□ ※信者奉納の衣類で銘不明。台一部欠損	奉讀大乘妙典(右)南無阿弥陀仏(左)六十六部供養(裏)于時嘉永□年申四□日

歌碑(牧水)	引沼/公民館庭	105・124・105	星野石材工業/河村芳子書	巡拝塔	道祖神	如意輪観音	地蔵菩薩	庚申塔	信仰塔(聖徳太子)	月待塔
				引沼/〃	引沼/〃	引沼/〃	引沼/〃	引沼/〃	引沼/〃	引沼/〃
				1978	1844			1842	1937	1909
				135・150・161	47・32・68	62・37・62	55・21・55	97・33・142	73・40・73	72・25・97
					(双体道祖神像)(右)天保十五年(左)五月吉日※破風、肩抱き手握る	(如意輪観音像)※下顎押さえる姿から歯痛を癒す顎無し地蔵の俗称がある。	(延命地蔵菩薩立像)※左手に錫杖、右手に宝珠を持つ姿	庚申塔/講中(右)天保十三寅年一月吉日	聖徳太子(右)昭和十三年一月二日建之 ※大工や左官等の職人の神で信仰	二十三夜塔/明治四十二年二月吉日/村中安全

歌碑(牧水)	巡拝塔 (大日如来)	不動明王	石仏	歌碑(牧水)	經典塔	供養塔 (如意輪観音)	六地藏 (文字)	五輪塔(無 名墓供養)
引沼／公民 館庭	引沼／公民 館庭	引沼／ "	引沼／ "	引沼／公民 館下道脇	引沼／十王 堂東脇	"	引沼／十王 堂西脇	引沼／十王 堂・国道間
103 ・ 122 ・ 103	112 ・ 45 ・ 112	107 ・ 59 ・ 130	35 ・ 27 ・ 35	93 ・ 120 ・ 106	99 ・ 21 ・ 122	112 ・ 28 ・ 112	62 ・ 33 ・ 62	2012 93 ・ 36 ・ 177
先生の頭の禿もたふとけれ此処 に死なむと教ふるならめ 牧水 (裏) 寄贈伊勢崎市茂呂町二丁目 星野石材工業／河村芳子書	(大日如来座像?) 奉順禮百番供 養塔／文化十三子歳／七月吉日 ／山本長右エ門・同妻 ※合掌 像、夫婦で建立	(不動明王座像) ※「平成二十四 年九月吉日 引沼墓地管理組合 建立」の銘	(布袋像?) ※丸い肥満な姿、劣 化	先生の一途なるさまもなみだな れ家十ばかりなる村の学校に 牧水(裏) 寄贈伊勢崎市茂呂町 二丁目星野石材工業／河村芳子 書	(地藏菩薩座像) 奉読誦大乘妙典 六十六部(右) 嘉永三庚戌季(左) 九月吉日 山本勝右衛門	(如意輪観音像) 供養塔(右) 宝 曆十二歳(左) 壬午七月吉日	南無六／地藏尊／地藏尊／地藏 尊／地藏尊／地藏尊／地藏尊 ※上に南無六	(バク) 南無釋迦牟尼佛(裏) 単 独道路改築事業により二十一の 墓石の移動をする。内丸墓石は 無名。ここに諸人の墓を建立す る。平成二十四年九月吉日／引 沼墓地管理組合

地蔵菩薩	観音菩薩	釈迦如来	庚申塔(猿 田彦)	地蔵菩薩	五輪塔	大日如来	巡拝塔 (観音像)	観音(子安)	無縫塔 (廻国塔)	馬頭観音 (記念碑)
引沼／ "	引沼／中組 墓地	引沼／組境 尾根墓地	引沼／消防 5部前道脇	引沼／前坂	花敷温泉 薬師堂境内	"／ "	"／ "	"／ "	"／ "	"／ "
123 ・ 40 ・ 161	121 ・ 40 ・ 140	162 ・ 48 ・ 160	72 ・ 24 ・ 79	35 ・ 24 ・ 35	55 ・ 22 ・ 55	72 ・ 24 ・ 79	87 ・ 50 ・ 125	51 ・ 30 ・ 84	45 ・ 22 ・ 60	84 ・ 30 ・ 98
(延命地藏菩薩立像) ※右記、国 道拡幅工事で引沼地内の墓地に 計四基の石仏を建立する	(聖観音像) ※「平成二十四年九月 吉日 引沼墓地管理組合建立」の銘	(釈迦如来座像) ※「平成二十四 年九月吉日 引沼墓地管理組合 建立」の銘	猿田彦大神(裏) 大正二年二月 大吉日	(地藏菩薩立像) 明和八〇〇／早 世□木童子□ ※合掌、道脇の 無縁墓	※近年の建立	(ア) 供養塔※前列左／右	(観音合掌座像) 奉納順禮板東 三十三所立安□之攸／時享保 九年甲辰四月吉祥日 ※板東 三十三番の巡拝塔	(子安観音像) 嘉永四亥年／五月 六日長平村 ※子安地藏か、長平村の地名	心入道心者／安永三年／午十月 建之／笈返礼回国 願主信□／※ 笈を背に行脚の道心を供養か、 後列左／右	馬頭観世音(右) 大正二年三月三十日寄附芳名 一金二円也 山本□・一金全也中村□・ 一金全也関弥五郎(他2略)(左) 心機力発心カ・當地ノ地勢関東ノ耶馬溪二比シカ 羊腸タル坂路千尋ノ峡谷臨ミ一歩ヲ誤ランカ(略) 運搬ノ難キ(略) 畏友関弥五郎氏 アリ(裏面石垣で不明) ※一部解説、当地の多難な道路状況を記し打開を計る銘?

歌碑 (牧水)	歌碑 (牧水)	歌碑 (牧水)	歌碑 (牧水)	歌碑 (牧水)	観音	巡拝塔 (観音立像)
花敷温泉 集会所裏	花敷温泉 〃	花敷温泉 集会所裏	花敷温泉 集会所前	花敷温泉 バス停前	〃 〃	〃 〃
1999		1978				1721
73 ・ 100 ・ 103	103 ・ 116 ・ 103	154 ・ 65 ・ 228	104 ・ 120 ・ 104	102 ・ 116 ・ 102	78 ・ 42 ・ 99	89 ・ 50 ・ 131
<p>ひと夜寝てわかち出づる山陰の温泉の村に雪降りにけり 牧水／大正十一年十月十九日 関晴館に泊る(裏) 平成十一年正月 関真建之・中沢溪雲書・石照刻 ※牧水宿泊の旅館で建てる</p> <p>折りからや風吹きたちつはらはらと紅葉は散り来いで湯の中に稿を刻</p> <p>※牧水が来た日に披露、肉筆原稿を刻</p> <p>石工中之条下町 齊木市太郎</p> <p>代表山口仙十郎(他5旅館略)／昭和五十三年十月十九日建之／入山小学校長 田中榮謹書</p> <p>設者／一金拾五万也 六合村長山口助・一金拾万也発起人</p> <p>大正十一年十月十九日上野國吾妻郡花敷温泉といふに宿り翌朝出立す(歌はペン書きの原稿から)／ひと夜寝てわれたち出づる山陰の温泉の村に雪降りにけり 牧水(裏) 若山牧水歌碑建</p> <p>真裸体になるとはしつづ覚束な此処の温泉に屋根なければ 牧水(裏) 寄贈伊勢崎市長呂町二丁目黒岩石材工業／河村芳子書</p> <p>名 聖観音立像) ※蓮華座に寄進者</p> <p>名 櫻鳥が踏みこぼす紅葉くれなゐに透きてぞ散り来わが見てあれば 牧水(裏) 寄贈伊勢崎市長呂町二丁目黒岩石材工業／河村芳子書</p> <p>(観音台掌像) 天下泰平 二世安楽／奉順禮西國三十三ヶ所／日月清明 于時享保六年甲辰四月吉祥日※四臂</p>						

馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	大日如来塔 (道標)	⑨ 名号塔 (道標)	道祖神	馬頭観音	記念碑
引沼の森 奥観音尾根	引沼／絆の森 先休み堂	旧道／病院 手前二百餘	引沼旧道脇 温泉病院 手前二百餘	引沼／旧道 入口三本辻	尻焼温泉 露天風呂上 車道百餘先	露天風呂上 車道百餘先	引沼 学校跡
1888	1910	1802	1854	1845		1968	1975
38 ・ 20 ・ 38	48 ・ 24 ・ 48	53 ・ 30 ・ 66	55 ・ 24 ・ 67	56 ・ 24 ・ 71	67 ・ 64 ・ 125	計測困難	175 ・ 79 ・ 230
三月吉日／山本弥十郎 (馬頭観音像) 明治廿一年／子ノ	月吉日／山本傳作 (馬頭観音像) 明治四十三年／二	吉日 (馬頭観音像) 享和二癸年／八月	※口は花敷 大日如来／右八山／左八和光原 道(右) 嘉永七年寅七月吉日 (左) 花口山本性長右エ門	南無阿弥陀仏／右 さわたり／ 左 山／道(右) 花敷 山本長 右エ門(左) 嘉永七年寅七月吉 日 ※沢渡道を教える	(双体道祖神像) ※手に扇子、新 しい?	馬頭観世音／昭和四十三年／八 月二日※土挽き中の馬が転落死 した所	開校百年記念／群馬県教育長山川竹武正書／邑に不学の戸なく家に不学の人なから しめん事を期するとの学制の発布は我が村にとつてもまさに文化の黎明を告げる 鐘であった 教育の重要性を喝破した先覚者相図り明治九年八月二十四日入山村 一五三番地に群馬県第十八番中学区第九十七番花敷小学校を開設した その後 幾多の経緯をもつて同二十六年入山尋常小学校となり同三十四年引沼部落共有地 一七三〇番地に新築移転同十三年六合尋常高等小学校入山校場となる 昭和十六年 引沼部落大火に際し焼失した時恰も太平洋戦争勃発の物資窮乏の中で六合復旧への 住民の努力は筆舌尽し難く同十八年現在地に新校舎を竣工 同二十九年激動つづく 時代の要請と住民の総意と熱情によつて昇格独立し六合村入山小学校となる 開校 百年を迎えて往時を偲び先人の偉業を称えて入山地区教育の振興を期し記念事業を 行ない万感の中に之を建立する／昭和五十年八月二十四日／開校百年事業実行委員 長山本栗岡撰文／吾妻郡六合村立入山小学校校長田中榮謹書

							⑩				
庚申塔	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	聖観音	念仏塔(如意輪観音)	馬頭観音	大日如来塔(道標)	道祖神	馬頭観音	馬頭観音	山神(十二)
〃 〃	〃 〃	〃 〃	京塚/観音堂裏	〃 〃	〃 〃	京塚/観音堂境内	〃 〃付近	京塚/旧道草津分岐脇	京塚/京塚橋西50 ^以	京塚/京塚橋袂付近	引沼/松岩山頂
1708					1790		1854	1754			1923
61 21 96	56 34 71	49 32 64	51 47 36	51 47 36	51 47 136	90 23 90	51 21 67	48 32 48	45 22 57	51 21 63	40 30 55
像庚申の名	(馬頭観音像) (日・月/三面石仏各一浮彫)(右) □□□(左)宝永五□天六月吉 祥日※「六合村の庚申塔」は仏	(馬頭観音像)	(三面六臂馬頭観音像) / □□□ ※数珠、矢羽根の持物、前列左 右	(聖観音立像) ※手に蓮、無縫塔除く	(如意輪観音像) / 念佛供養塔/ 當村 女人(右)寛政二年酉六 月吉日 ※干支と年号不一致	馬頭大士/巳年七月吉日/當村 久之丞	大日如来/右八信 州/左八く さつ/道(右)嘉永七年寅七月 吉日(左)□本□右エ門※□は 花敷の山本長右エ門?	道と信州道分岐上	(馬頭観音像) □□十二年/三月 吉日	(馬頭観音像)	十二山神(裏)大正十二年七月 建之/建設者/山田郡大間々町 大字相生 岡部□□・吾妻郡六 合村大字入山 福島貞次郎・同 所 山本竹次郎(台) 松岩山 ※自然石、地形図の松岩山と相違

馬頭観音	地藏菩薩	石祠	月待塔/ 石祠	灯笼(対)	庚申塔	庚申塔	庚申塔	遭難碑?	馬頭観音	庚申塔	庚申塔	信仰塔(大 黒天)
京塚/子守 神社下道上	京塚/大神 宮西	京塚/ 大神宮前	京塚/ 大神宮前	京塚/大神 宮参道	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃
1907		1940	1899	1895				1906		1839		1820
36 18 36	42 15 42	89 42 135	156 76 217	101 74 184	97 18 97	90 18 90		55 46 76	50 28 65	94 49 108	60 22 60	78 34 106
吉日(馬頭観音像) 明治四十年/八月 吉日※道脇上擁壁	(合掌地藏立像) ※神社西側山中	(台) 昭和十五年三月二十三日/ 二十三夜塔/願主山口繁好	御神燈/氏子中(右) 明治三拾 二年十二月建之(左) 石工湯本 惣治郎・湯本□吉	庚申塔/明治二十八年/未七月 吉日	庚申塔	庚申塔	山本千代・同忠吉霊/奇蹟年矣 疾風暴風雨連日二童来于溪下将 汲層俄然湿気泥石矣保得屍□中 葬其状卅九丙午八月日并日 毫 厘欽吊祭也可以祭二霊云爾□次 洗 ※干支は明治三十九年、子 供二人が白砂川で遭難死、読み は一部推測。	(馬頭観音像) ※後列左/右	庚申/天保十年/亥九月吉日※ 上部に日・月線彫	庚申 ※下部欠損		(線彫大黒天像) 文政三年/辰七 月吉日

燈籠(対)	京塚／子守神社	1938	137・52・155	御神燈(右)奉納子守大明神(裏)昭和十三年四月一日(台) 発願人山田彌兵二・関弥五郎・山口新十郎／世話人山本金一郎・山口幸二郎・山本久五郎・山本金三郎 ※向つて左の灯籠
燈籠(対)	〃／〃	1868	欠損	御神燈(左)奉納子守大明神(裏)慶應四年四月吉日(基) 山口傳兵衛※当地の傳兵衛が子守神社を勧請祭祀
馬頭観音	京塚／横手観音尾根道		49・28・62	(馬頭観音像) 宝曆〇〇／〇月〇日※宝曆は一七五一〜六一まで
道祖神	和光原／白砂川沿旧道	1856	43・30・43	(双体道祖神像) 安政三辰正月吉日※傷みが進む、破風、合掌像
馬頭観音	〃／〃		44・25・44	(馬頭観音像)
庚申塔(文字青面)	和光原／国道下旧道辻	1833	157・66・237	青面金剛塔(裏) 天保四癸巳歲五月吉祥日建之 ※上に日・月、独特の書体
馬頭観音	〃／〃		52・27・62	(馬頭観音像) ※前記の向側
巡拝塔	〃／〃	1839	50・27・59	百番供養塔／天保十年／〇月〇日
馬頭観音	〃／〃	1816	44・21・132	

(馬頭観音座像)／見我身者〇発菩提心聞我行苦聞惑〇〇聽体説有得大智也智我心也者〇身我(右) 文化十三丙子六月吉日(左) 施主 和光原村中(裏) 如是畜生帰為〇〇菩提心※馬(畜生)を菩提心により観音で祀る偈文、馬に感謝し和光原で建立した

昭和十年八月群馬縣知事從四位勲二等君嶋清吉閣下六合村の情勢視察にて御米村の砌り／殉国の勇士を祀る丘のみぞ夕陽にしろき山峡の村／野反湖を途次墓参を其時に詠まれ茲に彫す／石工湯本清吉※県知事が野反湖訪問の際、当地を訪れ山田庄平(報国院忠烈昌光居士)氏の墓、墓参時の歌。入山の道路事情等を視察し、昭和十二年の県道開通を促進した。

墓誌銘(山田庄平)	和光原／ナカゴ墓地	1934	102・31・216	陸軍砲兵上等兵山田庄平ノ墓誌ノ君は明治四十五年四月十二日山田庄太郎二男に生まる幼にして母に死別し分家要平の嗣子となり居村の小学校に学び高等課の課程を修了青訓充用実業講習を了す 昭和八年一月廿日現役として野砲兵第廿連隊留守隊に入営し満州派遣のため大阪港出発二月一日釜山港に上陸同日三関東州通過同日同日第二隊に編入同日四日教育地海城着四月一日海城出発同日二日駐屯地齊々哈爾濱同日廿六日第一期終了 三月五日平賀支隊に属し来た北支那出動同日八日撫甯附近の戦闘に参加同日九日より十二日迄永平附近の戦闘に参加同日十二日水營及築河渡河戦に参加同日十二日蚕姑廟附近の戦闘に参加同日十四日馬舖營路の戦闘に参加同日十五日鄭家庄附近の戦闘に参加 同月十六日より六月二日迄豊潤及豊台附近の守備勤務中細菌性赤痢に罹り平賀支隊衛生班に入班同月九日錦州衛戎病院にて加療同月十二日遂に没す同日上等兵に昇級せらるる年廿二 少時より忠孝の念厚く其の好學勤耕にして郷營の模範と推奨せらるる将来有為の志を抱きて中道にして夭折せば痛一奇なり 畏くも上天皇皇后陛下より恩賜祭料を下賜せらるる又參謀總長陸軍大臣教育總監滿鉄總裁以下数有名の高地位高官より多大な弔慰金品を賜る 同年九月廿三日六合村村葬を挙行せらるるにあたり県知事及第十四師團長以下各種国体公職者多数の会葬あり法号を報国院忠烈昌光居士とす 特別賜金千円並に扶助料年額百八拾八円但し昭和八年十月より五ヶ年後に年額金百四拾四円を下賜せらるる仍て茲に其の功績を誌す／昭和九年十月廿七日 正七位勲五等功七級中西太四郎撰並書
道祖神	和光原／集落東端道脇		75・50・75	(双体道祖神握手像) ※昭和60年頃造立
馬頭観音	〃／火の見鉄塔付近墓		63・33・63	(馬頭観音像)
巡拝塔(廻国塔／墓石／聖観音)	〃／〃墓前	1802	140・45・164	(聖観音座像) 百番供養塔／當國中〇〇禪定門／實山春相禪定尼(右) 享和二戊歲七月吉日／山田弥七・同人妻(左) 六十六部供養塔 ※上に聖観音座像
巡拝塔(墓石／観音)	〃／〃墓前	1738	153・60・153	(合掌観音座像) 奉納百番供養(右) 全參禪定門(左) 元文三年天十二月二十九日

馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	石祠(清王)	子安観音	如意輪観音	經典塔 (巡拝塔/聖観音)	廻国塔/巡拝塔/聖観音	馬頭観音	巡拝塔(墓石/観音)
〃/山二前	〃/山二前	〃/山二前	〃/山二前	〃/山二前	観音堂裏山	〃/〃	〃/〃	〃/〃	和光原東北/観音堂	和光原/集会所前道上	〃/〃墓前
	1839	1844	1854	1844				1754	1789	1844	1776
35・26・41	41・26・41	41・26・41	53・21・53	44・24・44	石祠残片	39・36・64	41・31・69	150・52・150	43・32・43	43・36・43	53・40・53
吉日 (馬頭観音像) □□十一年/三月	日/山田弥平治 ※手に蓮 (馬頭観音像) 天保十年/三月吉日	月吉日 (馬頭観音像) 天保十五年/辰三月吉日	吉日/施主山田弥平 ※寅は七年/手に宝珠 (馬頭観音像) 嘉永□年/寅八月吉日	月吉日 (馬頭観音像) 天保十五年/辰三月吉日	苔蒸す石祠屋根、新設セメント祠あり	※他首欠地藏四基略 (子安観音座像)	(如意輪観音像)	(聖観音座像) 奉讀大乘妙典六十六部供養塔/奉順禮百(除去跡) (右) 宝曆四戌天吉日 (左) 天下泰平國土安全/皆令離苦行安穩樂/山本権助・下田弥助・下田助七 ※二基側面は多様な願望	(聖観音座像) 奉納 供養 順禮百番 (右) 寛政元酉八月吉日/山本平右口・霜田平次口・同与七 (左) 天下泰平國土安全/山田口内・山田弥平・山本久エ門	吉日/弥平治 (馬頭観音像) 天保十五年/三月吉日	(合掌観音立像) (右) 奉巡禮百八十八番供養/安永五申天/十月十八日 (左) 坂元観妙善女

三面供養塔 (地藏/? /聖観音)	馬頭観音	名号塔	⑪ 子安地藏 (念仏塔)	石祠(稲荷)	道祖神	石祠(伝山 本氏先祖)	庚申塔 (青面金剛)	馬頭観音	巡拝塔 (經典塔/ 聖観音)
墓脇 〃/〃 無縁	〃/〃	〃/〃	〃/お堂脇	和光原/集落東南下組	〃/旧神社 参道右分岐	〃/旧神社 参道入口脇	和光原/〃	和光原/巡拝塔西道脇	〃/山二西 百道脇
1789	1800		1821		1842	1614	1858	1911	1833
60・21・106	46・24・61	36・32・24	36・32・124	70・40・70	66・30・96	42・22・92	48・27・93	46・27・46	176・50・176
八月吉日 ※右は坊主、手に繩と宝珠	日/清三郎 (馬頭観音像) 寛政十二年/九月	南無阿弥陀仏 ※自然石	(子安地藏座像) 子安地藏大菩薩 (右) 念佛供養塔 (左) 文政四年巳六月吉日 ※子を抱く地藏菩薩、念仏塔も兼ねる	※能野神社脇	道祖神 (右) 天保十三年 (左) 寅五月吉日 ※和光原西端旧道脇	(右) 祭慶長十九年霜月九日 ※伝当地山本姓祖祠、前記西神社道脇	(青面金剛像) (右) 安政五歳 (左) 午三月吉日 (台) 同市 □/本多兵 □/霜田彌之助/同助 □/山田喜作/山本嘉右エ門/同 □/和光院 □ □ ※「六合村の庚申塔」四十二番で位置誤記入、石材劣化剥落、足下に二鬼を踏む、円柱状台座の名は右へ、セメントで一部銘不明	(馬頭観音像) 明治四十四年/十二月日/山田喜正	(聖観音座像) 奉順禮/秩父/西国/坂東百番供養塔 (右) 于時天保四癸巳歳五月吉祥日 (左) 奉讀誦大乘妙典六十六部供養塔 (台) 施主 山田平七

阿弥陀如来 地藏峠	石祠(十二) 野反湖 十二山頂	石祠(弁天) 野反湖 天山頂	石祠 八間山道 烏賊禿上	記念碑 白砂山登山 口	標石 野反峠 〃	歌碑 野反峠 駐 車場	石祠 (山神十二) 大原 旧道 上がり上げ	石祠 (山神十二) 旧野反道 門松道脇	信仰塔 (山神) 旧野反道入 口前国道脇	石祠(三峰) 和光原集落 東 向山頂
		1842	1899	1993	1976	1978	1899	1985		1978
80 ・ 28 ・ 80	50 ・ 40 ・ 50	未計測	43 ・ 32 ・ 43	43 ・ 32 ・ 43	234 ・ 235 ・ 234	120 ・ 225 ・ 220	40 ・ 25 ・ 40	45 ・ 26 ・ 55	64 ・ 30 ・ 64	67 ・ 32 ・ 67
墓石 ※阿弥陀像は銘から浄土宗系の 来座像) 法善真性信女 (阿弥陀如 頓普浄光禪門 歎普妙円禅尼 為菩提 来座像)	※地形図に弁天山と記載の場所 はご記入で、十二山である 西側山頂ピーク	(右) 天保十三年寅年七月二日 (左) 入山邑 武口 〃 ※野反峠 はご記入で、十二山である	所、周囲ケルン状 石祠を再建、象山主張の問題の 光院※和光院(法印)が世話で 年再/建之入山村中/世話人和 (右) 三百年前建立/明治三十二 本多秀里書	皇太子殿下白砂山行啓登山/平 成四年八月二十日/平成五年六 月八日御成婚記念/六合村村長	野反自然休養林/草津営林署 六合村(裏) 昭和五十一年十月 建立/前橋営林局長小原聡書	清水基美歌碑建設賛助者一同建之 (裏) 昭和五十三年八月二十日/ 映して湖は静かなり希里 基美 波ろばろと澄みたる空のちぎれ雲	(右) 明治三十二年四月吉日/和 光原・引沼・世立・京塚組中※曲 げ物用材を採った山仕事仲間建立 八月吉日	(右) 山田安治・山本太重郎・大 島稔/建之(左) 昭和三十三年 八月吉日	山神 ※自然石、十二神だらう	(右) 昭和五十三年十二月吉日/ 奉納 山田正人

石祠 (山神十二)	石祠	信仰塔 (天神)	信仰塔 (地神)	記念碑	灯籠(対)	石祠(天狗)	聖観音	經典塔	道祖神	馬頭観音	聖観音	如意輪観音
根広 〃	根広 〃	根広 〃	根広 宮境内	根広 〃	根広 宮参道	矢倉 山頂	〃 〃	地前 〃/集落墓	入口 矢倉 林道	矢倉 〃	矢倉 〃	矢倉 お堂 屋敷下
1899	1861	1861	1849	1962	1885	1892	1753	1848		1779		
45 ・ 35 ・ 45	40 ・ 22 ・ 49	63 ・ 26 ・ 63	42 ・ 18 ・ 64	90 ・ 18 ・ 90	190 ・ 76 ・ 205	61 ・ 36 ・ 61	27 ・ 18 ・ 39	62 ・ 25 ・ 62	66 ・ 35 ・ 66	未計測	65 ・ 35 ・ 83	52 ・ 33 ・ 67
移動 (右) 明治三十拾貳年卅月二四日※ 戦後、北の二二〇八の山より	(右) 文久元年(左) 西七月吉日	天神宮	吉日	祝喜寿之植樹中村作蔵(右) 昭 和三十七年春(左) 石段脇赤松 二十本	御神燈/氏子中(左) 湯本安治郎・ 湯本梅吉・中澤昭治郎/世話人 中村四郎・中村宇平・中村権 十郎(裏) 明治十八年六月十八 日建立 ※向左灯籠銘略	※矢倉発電所の西、川に出た岩 尾根先端に祭祀、組中の名前は 矢倉集落の方	(聖観音立像)(裏) 宝曆三天八 月吉日	奉讀誦大乘妙典六十六部(右) 嘉永元申八月吉日	※石室、擁肩 若干位置が移動 (双体道祖神像)	(馬頭観音像) 安永八亥天/八月 吉日	(聖観音像)	(如意輪観音像) 村中 女人

⑬	記念碑	根広／ねど ふみの里	庚申塔 根広／ ”	月待塔 根広／ ”	道祖神 根広／赤土	六合村の昔記念碑／深山幽谷と言われる六合村は、トント昔からお蚕様と暮らし、辻に仲良く寄り添う道祖神様に守られ、むかし語りが家族の絆を結んできたんだと。明治三十三年に草津村から分かれ、六つの大字を合わせて六合村が生まれたのだと。「六合」をくにと読むのはな、古事記・日本書紀からだ。だがな、平成二十二年三月二十八日、中之条町と合併、六合村は百年もの長い歴史をトント閉じて新しく歩き始めるのだと。トントトント「六合の昔」を歌い続けて、六合村の昔々を伝えていくべえむし。六合の昔／詞・極篠崎洋子／一、トントトント六合村のトントトントおん爺の昔を聞いとくれ白砂川の山奥に小つちえ六つの村がほれ合わさってほれあつたげな赤岩日影小雨生須太子入山六合村がほれあつたげな／二、トントトント何の音トントトント昔々の六合の音困炉裏端でおん婆が昔の話だけだむしえおもしろいつちやむしえ聞とくれこんぞうりすげむしろねどふみ織ってトントカラコンコン聞いてくだれトントトントトントカラコン／六合村を愛する会一同／平成二十二年三月二十八日（前）赤岩／日影／太子／小雨／生須／入山※中之条町に合併の際、ありし日の六合村の絆を偲ぶ有志が建てた記念碑、繭形と蚕、大字名○形
⑭	地蔵菩薩	根広／集会所 所一帯は龍 沢寺隠居寺 月洲庵跡	1806	168 ・ 68 ・ 211	道祖神 ※上は笠形、身部は四角錐	奉造立庚申供養塔（右）享保十五（左）庚戌八月吉日 講中 ※上部に日輪月輪、相輪、笠付き
<p>（延命地蔵立像）地蔵尊／御手判（右）造作五道罪常念地蔵尊／遊戯諸地獄決定代受苦（左）真言日庵訶訶尾娑摩曳娑娑賀／為別峯即傳上座菩提之建立者也（裏）願以此功德／普及於一切／我等與衆生／皆其成佛道／文化三丙寅歲七月十五日／願主 常陽之座 一乘了機叟※地蔵像は穿った身部に浮き彫り、願主は茨城の人、卍や花の紋も刻む</p>						

如意輪観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	六地藏	六地藏	六地藏	六地藏	六地藏	六地藏	六地藏	地蔵菩薩	無縫塔 （比丘尼墓）
同／集会所庭 灯笼	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭	同／集会所庭
	1825	1825	1825	1844								1737	1842
41・28・58	60・30・72	63・27・70	63・28・71	45・24・57	38・21・38	36・15・36	38・15・38	38・16・38	37・16・37	37・15・37	65・39・78	51・18・81	
（如意輪観音像）	（馬頭観音像） 文政八〇年／七月二十二日	（馬頭観音像） 文政八酉〇／七月吉日※政を正と文に分割	（馬頭観音像）	（馬頭観音像） 弘化元年／辰十二日	（法印地蔵菩薩立像）（裏）施主為菩提※手に幢幡を持つ	（鶏龜地蔵菩薩立像）（裏）世話人村中※右手に錫杖、左手に宝珠、延命地蔵	（法性地蔵立像）（裏）為願主菩提重部也※手に柄香炉を持つ姿	（地蔵菩薩立像）（裏）施主 為菩提※手に蓮を持つ儀軌以外の姿	（地持地蔵立像）（裏）施主山本□衛門※手に数珠を持つ	（宝性地蔵立像）（裏）施主□□弥平治※合掌像、持物は一体以外儀軌と同じ	（延命地蔵菩薩立像） 元文二丁巳天／五月吉日／施主 中村氏	※墓の主は埼玉県秩父の女性	智万比丘尼位／天保十三年／寅四月十二日／武陽秩父□□村 俗名ミト

灯笼(対)	観音 巡拝塔/聖	經典塔	馬頭観音	馬頭観音	石仏	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	灯笼	石標
根広/熊野 神社	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/〃	根広/観音 堂周辺	根広/集会 所裏堰堤脇	同/集会所庭
1986	1754	1754	1832	1915			1927	1891	1933	1898	1762	
100 ・ 46 ・ 110	160 ・ 45 ・ 160	130 ・ 53 ・ 166	49 ・ 30 ・ 49	42 ・ 22 ・ 72	56 ・ 16 ・ 76	32 ・ 13 ・ 32	45 ・ 19 ・ 45	46 ・ 20 ・ 46	39 ・ 20 ・ 39	107 ・ 52 ・ 149	29 ・ 16 ・ 29	
御神燈(裏) 昭和六十一年四月 廿八日遷曆 中村福美※左の灯 籠銘「献中村」とある	山口左兵衛・中村伊右エ門・下 田助右エ門・同苗□右エ門・同 苗六右エ門(左)根広村 施主 山口弥右エ門	(左)上州吾妻郡入山村之内中村 清兵衛	奉読誦大乘妙典六十六部為二世 安楽/天下泰平/國土安全(右) 皆宝曆四甲戌五月吉日 □□□	(馬頭観音像)天保三年/辰六月 日※前列終了、次は後列	(馬頭観音像)大正四年/一月二十五 日/中村作造 ※蓮華、台上	(立像)※頭部欠損、馬頭観音?	(馬頭観音像)※下部欠損	馬頭観世音/昭和二年/三月 施 主中村氏	(馬頭観音像)明治廿四年/三月 十七日	御神燈(右) 明治卅一戊戌年五月 三日建立(基) 氏子中※火袋欠損	念佛供養講中(右) 施主 村中 女人(左) 寶曆□□午年一月 日※文化三年の地藏菩薩前、女 人信仰の塔、銘や無銘の如意輪 観音の台か?	

經典塔	馬頭観音	念仏塔 (石仏)	如意輪観音	月待塔	馬頭観音	石祠	聖観音	子安地藏	石祠(姥神)	層塔(残片)	地藏菩薩	無縫塔	馬頭観音	馬頭観音	石祠(熊野)	石祠(稻荷)
長平/道祖 神道沿い上	長平/〃	長平/〃	長平/〃	長平/〃	長平/〃	長平/〃	長平/〃	長平/観音 堂境内	長平/姥神 様祠内	長平/〃	長平/〃	長平/集落 手前道脇	旧花敷道際	〃	〃	根広/熊野 神社
1853		1753		1851	1924	1848	1844				1842					1874
70 ・ 30 ・ 133	55 ・ 21 ・ 73	73 ・ 38 ・ 94	60 ・ 27 ・ 60	28 ・ 23 ・ 51	43 ・ 24 ・ 61	33 ・ 22 ・ 33	41 ・ 29 ・ 113	20 ・ 18 ・ 35	55 ・ 30 ・ 55	未計測	43 ・ 23 ・ 55	38 ・ 18 ・ 47	57 ・ 30 ・ 67	46 ・ 21 ・ 61	51 ・ 27 ・ 51	54 ・ 28 ・ 54
所本多□エ衛	(馬頭観音像)	(石仏) / 念佛供養塔/寶曆三癸 天七月吉日 村中	(如意輪観音像)	二十三夜供養(右) 嘉永四年辛亥 九月吉日(左) 當村女人講中	(馬頭観音像) 大正十三年/五月 二十五日(台) 寛政□□六月※像 と円柱台は別	(右) 嘉永元八月日	(聖観音立像) 北向(台) 天保十五 年/辰五月吉日/當村	※頭部欠損、子を抱く、東く西の順	(子安地藏座像) 戌十月十日? ※頭部欠損、子を抱く、東く西の順	※五輪塔なら水輪等が欠損	(延命地藏菩薩立像) (右) 天保 十三年(左) 寅六月吉日	※銘文不明	(馬頭観音像) ※権現堂跡にあった	(馬頭観音像) ※尻焼分岐付近	(左) 氏子中	(右) 明治七甲戌(左) 十一月 吉日建之 ※向かつて左側石祠

												⑮
墓碑	石祠(十二山神)	石祠(十二山神)	庚申塔	馬頭観音	地蔵菩薩	馬頭観音	石段	月待塔	庚申塔	馬頭観音	道祖神	
小倉/白根 神社入口	小倉/旧道	小倉/町宮 住宅北尾根	小倉/番屋 平旧道脇	長平/旧道 小倉渡河前	長平/山崎 宅入口道脇	長平/山崎 宅入口道脇	長平/稻荷	長平/〃	長平/〃	長平/墓地 上山際	長平/墓地 上	
96・30・186	42・54・42	70・34・85	1728	1840		1847				1803	1846	
			90・46・108	45・27・57	61・22・77	41・21・52	24・14・24	73・20・91	77・20・77	54・26・54	49・38・67	
		(右) 明治三年壬子十月日 ※十二原の十二山神、若干移動	奉彫刻庚申供養塔(右) 享保十三歳六月吉日(左) 講中 敬白※笠、日月、三猿、長平へ通じる、寛永頃まで番所設置	(馬頭観音像) 天保十一年/辰三月吉日/山田武平治	(地蔵菩薩立像) ※右の錫杖、左の蓮二輪が交差、扁平	(馬頭観音像) 弘化四丁未年/十一月十八日(台) 施主 山田角ノ丞※前は小倉水道施設下付近旧道沿い。	(左) 同 古池氏 ※本多稻荷石段柱銘	二十三夜杵※杵は塔の異体字?	庚申塔	(馬頭観音像) 享和三年/九月	(双体道祖神座像)(台) 弘化三丙午 當村中※破風 手に扇子、擁肩の優品	

陸軍歩兵山口小源太墓(左)帝國在郷軍人会六合村分會建設(右)明治卅五年十二月一日第七師團歩兵第六連隊入營全卅七年日露戰役二際シ八月四日動員下令ニテ出兵全月青泥窪上陸全年二月十一日第三軍編入シ全月十六日ヨリ旅順口總攻撃ニ參シ全月三十日二〇三高地於テ名譽ノ戰死ヲ遂ゲ時二十三歳ナリ全年宮ヨリ勲六等功士級金鷄勲章ヲ授与サレタリ※戰死軍人墓碑の代表例で紹介、周囲の他の墓碑は略した。

												⑯
庚申塔	燈籠(対右)	歌碑	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	巡拝塔	馬頭観音(石殿)	巡拝塔	經典塔	如意輪観音	馬頭観音	
小倉/お堂 西二〇路	小倉/〃	小倉/白根 神社前	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	小倉/〃	
	1844	1995	1775		1821	1749	1706	1780	1749			
71・36・71	165・65・245	61・77・76	52・30・52	48・33・48	45・25・60	67・40・79	70・45・70	60・27・78	90・47・108	54・34・69	57・20・57	
庚申 ※下部に三猿陰刻、新しい?	袋欠	御神燈(右) 天保十五甲辰八月吉日(裏) 惣氏子中 ※共に火	千年の樹下に吾ゐて落花浴ぶ/金子晃天作・六合村長本多秀里書(裏) 平成七年十一月吉日	金子晃典建之・石輝刻	御神燈(右) 天保十五甲辰八月吉日(裏) 惣氏子中 ※共に火袋欠	奉納百番供養塔(左) 為二世安楽(裏) 寛延二〇八月吉日/天下泰平/二世安楽/山口口・山口口※經典塔と同時期	馬頭観音堂/宝永三戌天/九月九日/施主 山口口兵衛※馬頭観音堂と記す石殿、年号も古い、右側に馬の陽刻	奉納百番供養塔(右) 安永九年子(左) 八月吉日 願主西圓・山口仙之助	奉再讀六十六部供養塔(右) 寛延二〇八月吉日/天下泰平/國土安全/〇〇※笠付き、左は蓮の陽刻、不鮮明	(如意輪観音像) ※頭部接合、蓮華座	馬頭観世音 施主山口太口口※前記裏	

道祖神	小倉／＼									
地蔵(惣吉地蔵)	ガラン沢道 ／シロザサ	1924	42・33・42	(地蔵菩薩座像)宗吉地蔵尊(裏) 大正十三年六月吉日／中之条町 建之浅川源三※大正五年冬、 ガラン沢で事故死の獵師惣吉靈 供養で浅川氏が建立						
忠犬像	ガラン沢道 ／シロザサ	1993	60・24・60	(忠犬座像)(左)寄贈平成5年 11月吉日浅川弘(裏)真壁町 荒山忠昭作						
石祠(山神)	赤石山山頂	1920	80・55・80	(右)平穩村登山者案内人組合 建立(左)大正九年八月廿四日						
馬頭観音	小倉橋左岸 ／旧道入口		45・24・54	(馬頭観音像)(台)施主 村中						
馬頭観音	石尊滝付近 ／旧道分岐		50・50・50	馬頭観世音 施主山口与右エ門						
馬頭観音(道標)	石尊滝付近 ／旧道分岐	1842	81・43・99	天保十三年 右 くさつ 馬頭大土 道 九月吉祥日 左 こさめ 願主 市良次※車道上、追刻、 転倒、貴重な道標						
石祠(十二山神)	田代原東/ 土捨場入口	1775	60・47・60	(右)安永四年末九月吉日／施主村 中※品木からの旧道脇、村名剥落						
庚申塔(記念碑)	田代原／集 落東北道脇	1985	108・82・53	庚申塔／田代原開地七十年記念 ／昭和六十年八月吉日建之※開 拓七十年記念						
石祠(十二山神)道標	田代原／ 本松		37・18・37	(右)京ツカ(左)小倉 右ハ 中ノ条 エチコ (裏)セハ人 本多□平※松は道 標の代替、秋山經由越後道						
大日如来塔(道標)	田代原／分 岐の松跡	1728	75・22・84	(右)右ハシナノみち 享保十三年 大日如来 小倉村 申五月日 武右エ門 (左)左ハくさつみち ※重要 な四本辻、文政前から信濃道利 用を裏付ける道標、石質劣化						

信仰塔(山神)	田代原／＼		75・22・84	山神 ※分岐の松は伐採、今は二代目
石祠(十二山神)	田代原／木 戸中の十二	1961	100・37・100	(右)昭和三十六年十一月吉日
霊神碑(御嶽)	大沢／人家 裏岩上	1938	未計測	御嶽／紅岳霊神(裏)施主 大家／昭和三年十月二十三日 ※当地の信者建立
歌碑(榎田久生)	ちやつばみ 苔公園／駐 車場北側	1991	90・150・135	半才振りに／又帰来／何日も乍 ら／故郷の如し／初秋始まる／ 昭和四年九月二十二日 榎田 久生※日本鋼管社長、謙虚な人 柄で飾らず、人情味があり地域 でも尊敬された
副碑	＼／歌碑脇	2000	99・101・99	
歌碑	ちやつばみ 苔道脇	2000	138・16・138	億方の秋ぞ化石の笹ねむり 有流 地吹雪に背曲りの列黙と行く 翠石
副碑				ここは群馬鉄山の跡地なり戦前、戦後を通じ日本の鉄鋼業界の発展に多大な貢献 をしたこの地もいまは日本鋼管休暇村として生まれ変わり今日に及んでいる鋼 管鉱業 日本鋼管 鋼管開発と夫々の社長を歴任され素朴な風土と厳しい自然に恵 まれたこの地をこよなく愛し限りなく情熱を注がれた榎田さんの遺徳を偲びこの 碑を建つ／平成三年五月 日本鋼管(株)会長・鋼管開発(株)社長 金尾實 ※歌碑の副碑、釜石に次ぐ日本二位の鉱山、戦後の日本発展の礎になった。地理 教科書にも記された鉄山とその後を歩みを簡単だが記した唯一の碑

	⑬	⑭		⑰			
記念碑	地藏菩薩	地藏菩薩	標石	僧形像	記念碑	記念碑	(道標) 大日如来塔
側 七百餘群馬 渋峠／約	渋峠	渋峠	渋峠	渋峠旧道／ だまし平	近 芳ヶ平／ ヒユッテ付	近 芳ヶ平／ ヒユッテ付	芳ヶ平／ ヒユッテ東
	1812		1975	1805	1975	1975	1854
270 ・ 46 ・ 270	34 ・ 17 ・ 44	60 ・ 20 ・ 60	45 ・ 92 ・ 45	38 ・ 24 ・ 38	未計測	未計測	77 ・ 56 ・ 77
日本国道最高地点／標高 二二七二m (左) 草津町・山ノ内町広域宣 伝協議会	(地藏菩薩立像)(裏)文化九壬 申七月吉日 ※石室内、銘は入山研究より	(地藏菩薩立像)	芳ヶ平自然休養林／昭和五十年 十月／前橋営林局 ※額石の大きさ	(高僧立像)文化二五九月吉日／ 施主吉兵衛／イシノ□□ ※手に独鈷	慕標／昭和五十年	芳ヶ平開拓の碑／才吉翁／昭和 五十年	大日如来／右ハくさつ／左ハ入 山村・はなし湯・しれ昭・中 之条(右)喜永七寅年八月吉日 (左)入山邨 山本藤左衛門・本 多□良工建之 ※左は大平直行 道、嘉永を喜永とミス



③ 品木／百八十八番観音の弘法太子



② 梨木／二猿を刻む六合最古の庚申塔？



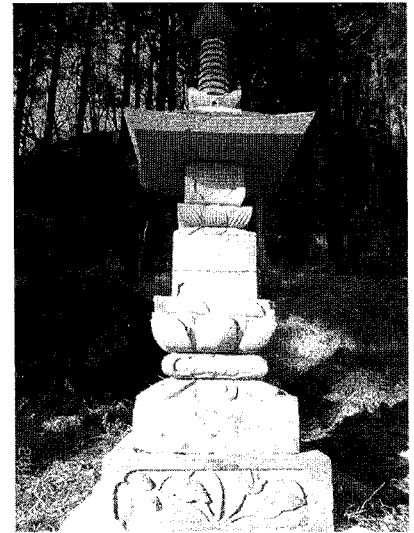
① 荷付場／知名度抜群の道祖神



⑥ 高間峠／峠道の道標役の百番観音



⑤ 暮坂峠／自衛隊の支援で開通した県道開鑿記念碑



④ 見寄／ドンガラ松脇の宝篋印塔



⑨ 引沼七五三／名号塔兼道標沢渡道



⑧ 引沼／木の道祖神を供えた道祖神



⑦ 世立／本来は厚着の子安地藏さん



⑫ 矢倉／石室内の双体道祖神



⑪ 和光原／銘は子安地藏大菩薩



⑩ 京塚旧道分岐／信州道と草津道の道標



⑮ 長平／雅な姿で評判の双体道祖神



⑭ 根広／月洲庵跡の延命地藏尊



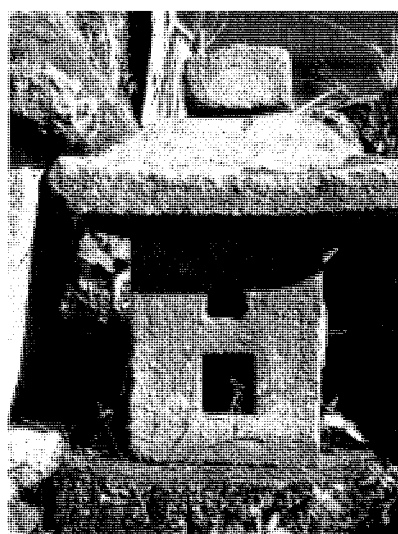
⑬ 根広集会所／在りし日の六合村昔記念碑



⑱ 渋峠／旅人を見守った地藏様



⑰ 信州道／ダマシ坂の旧道脇に佇む石仏



⑯ 小倉／六合最古の馬頭観音石殿

六合の石造物と若干の考察

一、道しるべ

六合地内で確認された道標は一八基ある。他にも近年建てた趣味的道標もあつたが除いた。江戸く明治期の道標は一六基で、純粹な道標は二基、他は信仰対象物と複合している。馬頭観音に記すのが六基、大日如来が三基、名号塔（南無阿弥陀仏）が二基、双体道祖神と山神十二石祠が各一基ある。他に昭和三年の御大典記念の時に、青年団で建てた純粹な道標が二基ある。大字別にみると、入山に一一基、赤岩に四基、小雨に二基、生須に一基である。

道標は土地に不慣れな外部の旅人等の便宜を図つたもので、草津等の温泉に足を運ぶ遠方の人が利用する道や、他国へ通じる道の分岐地点に立てられる。当然、道標に記された目的地は主に温泉、他に山深い入山への道や、信州や越後へ通じる道に見られる。道標の目的地を見ると、温泉番付の最高位東の大関草津が九、目的地でない山道が五、沢渡が四、入山や花敷が各三、小倉、京塚が各二、遠方中之条、信州が各二、長野原、小雨、応徳、湯の平、品木、遠く越後が各一である。

設置年代では嘉永七年の道標が四基もあり、然も大日如来と複合三基、名号塔との複合が一基ある。これらの道標は地元の本姓の方が施主である。入山中学校生徒の郷土学習の成果『入山研究』に、古老からの聞き取りで嘉永七年に信州側と入山側で道筋整備のために人足が出て修復したと言う記事が載っている。この記事から、道普請の記念で同じ年に

道標を建てたと思われる。渋峠からダマシ平の間、牛馬や人が歩きやすいよう所々に石を敷いたと思える所があるが、これも普請の際の仕事と感ずる。

他に入山田代原の西、分岐の松には享保十三年の道標がある。大日如来の側面に、右は信州、左は草津とある。文政頃、渋峠越の道筋の賑わいに対して、信州街道の大笹宿等が関所の要害地内を理由に差し止めを訴え、結局は地元の生活物資に限り許すと裁定した経緯がある。この道標からも山越えの信州道はそれ以前から利用されていたと分かる。野反越え秋山郷の道筋には道標がないが、田代原一本松の山神十二様石祠の側面にエチゴと記し、唯一の越後道の道標である。素朴な方言を使い、目的地を示さない珍しい道標が広池前坂の旧道にある。一つは細長い板状の石に、「右むま／左かち」とあり、ムマは馬の転訛で、カチは徒歩の意味である。馬道は緩やかな迂回路で、徒歩道は急坂の下り道で距離も短い道である。この左下には萩原進の『群馬のみちしるべ』に紹介された道標がある。僅かに薄い線があり、「左ハすぐじ道」と見える。石工の彫りでなく、器用な土地の方が彫つた道標と思える。これも目的地でなく、迂回しない短距離の道をスグジと表現した面白い道標である。他に暮坂の旧後坂道入口にある名号塔の道標は、町内で銘がある道標では正徳二（一七一一）年と最も古く、然も高遠石工作品としても町内では古いものである。この石工が建てたと思える同年代の作が、大岩不動尊参道の名号塔の丁石で、丁石に年代はないが、他の資料からも正徳と思われ、県内で最古級の丁石である。

二、馬頭観音

当地の人々は草津街道の入湯客や物資を運ぶ駄賃稼ぎに、入山等から

の沢渡通いや草津商いで地場の物産を運ぶのに馬を利用していた。入山では信州の田植えが済むと信州の馬を借り、当地で堆肥作り等に利用し、翌年春の田植え季節には馬を返す独特の借り馬制度が戦後まで行われたなど、生活面でも馬と密接に結びついていた。

明治十年頃の『郡村誌』に載る戸数と馬の飼育は、日影村は寺社以外戸数五〇戸、牝馬五三頭、赤岩村は同六一戸、牝馬四〇頭、生須村は同一八戸、牝馬一五頭、小雨村は同二八戸、牝馬二八頭、太子村は戸数二二戸、牝馬一八頭、入山村は一七七戸、牝馬八五頭とある。当時の六合は寺社以外戸数三五六戸、牝馬二二九頭を飼育、単純平均で戸数の六七％が飼育する。だが、全戸数の約半分の入山では戸数の四八％、約半数の家で馬を飼育していない。馬は半身上というが、家の大きな財産である。入山には戦後まで借り馬制度があつたが、背景には馬を持てなかつた農家があつたことがある。

死馬は馬墓地に埋葬し損馬落とし地名もあり、事故死の現場には馬頭観音を造り供養される例も多い。調査石造物千基余りで、馬頭観音は約二三％を占めている。年代を刻む馬頭観音を見ると、石殿（石祠）形の一基を除けば、古いのは江戸中期の宝暦（一五五一〜六三）年間の二基である。その後増加し、寛政、文化、文政、天保年間は一五基余り、明治期にも二〇基余りある。死馬供養の墓標ともいえる馬頭観音像は、事故死現場の道脇に残る例もあるが、多くは道脇からお堂境内に集められ忘れられた無縁墓的な存在になっている。

『入山研究』八号に大正頃まで行つた戸倉講の記事がある。この戸倉さんは、長野県筑北村の天台宗富蔵山岩殿寺で、馬の守り本尊で知られる富蔵講である。馬の守り本尊では富蔵山と、埼玉県東松山市にある上

岡馬頭観音（妙安寺）が関東一円に知られる。戸倉講は当地独特の行事で、毎月十六日が戸倉さんの日で、五人一組で戸倉講をつくり、お金を積み、五年に一度、代参で一人が戸倉さんに行つたという。講の日には、分身でいただいた戸倉さんの馬頭観音の掛け軸前で、念仏を唱え馬の安全や家内安全を祈願したとある。武田の勢力圏内に富蔵山信仰が広まり、「昭和三十五、六年頃六合村の人がお参りに来た」という岩殿寺住職の話が『研究』にも載る。

東毛には上岡馬頭観音の銘の碑が目立つが、当地は地理的に近い富蔵馬頭観音の信仰圏で、それを裏付ける碑を三基確認出来た。太子の墓地脇石仏群に、明治十七年の「富蔵山馬頭大士」塔と、小雨の諏訪神社東に、「富蔵山馬頭大士」塔は古びているが年号は不詳である。小雨沼尾の毘沙門堂から旧草津道を三〇〇〇程行つた道脇にも、「富蔵観世音」と記す塔がある。

儀軌には馬頭観音の像容は忿怒相とある。だが、忿怒の相の像は数基のみで、多くは一面二臂の温和な像である。家計の柱になり、苦勞を共にした愛馬の死は忿怒相より、感謝、供養の気持ちが強く慈悲相が人々の心情と思われる。

当地で馬頭観音といえ、白砂川を挟み向き合う生須と小雨の町重文三面六臂の馬頭観音像が知られる。草津街道の馬継等で両村は利害が対立したが、この馬頭観音は和解の象徴のように向き合っている。日影平沢く湯久保や長野原へ通じる旧道切り通しの馬頭観音像は、見慣れた温和な表情の像でなく、儀軌のような忿怒相で印象に残る。

前記のように、馬頭観音像の多くは道筋にあつたが、明治初期に文明開化に相応しくないと路傍から集められたようだ。一個所に集められた

所を見ると、小雨の大坂上り口、生須の町重文馬頭観音周辺、赤岩の東堂、日影下沢の阿弥陀堂、入山天龍橋右岸袂、根広の観音堂周辺等、多くが信仰の場である。一個所に集められ、当初は愛馬の供養で建てたが、今では半ば土に埋まり、忘れられ草むらに眠る姿を見ると一抹の寂しさを感じた。反面、旧道を歩き道脇の馬頭観音に出合うと、今は訪れる人もないが本来の居場所に安堵する姿にホッとす。

六合の馬頭観音像の多くは愛馬の墓標だが、古い石殿形の馬頭観音信仰塔が入山小倉の白根神社前のお堂境内にある。祠の正面上部に「馬頭観音堂」とあり、下方に「宝永三戊辰九月九日」の年号と「施主山口□兵衛」と刻まれる。右側面には陽刻の馬の姿がある。一七〇六年と古く、船底状の石に馬の頭を刻む通常の形とは異なる石殿である。石殿形の馬頭観音の例を『日本石仏図典』や『日本石仏事典』等何冊かの石仏調査報告書を開いたが見あたらず貴重と思われる。同境内には栃木県那須周辺に多くある、一基の馬頭観音に二頭分の頭を刻む観音像があり、同様な像は日影下沢阿弥陀堂境内にもある。

損馬の墓場に、愛馬の成仏を願った銘を刻む馬頭観音が入山和光原の旧道脇、大霜の青面金剛塔の向かいにある。馬頭観音付近は損馬ヶ原の地名があり、古い馬捨て場跡という。馬頭観音の座像で、正面には仏の功德を説く偈文を刻み、裏には「如是畜生帰為□□菩提心」とある。側面に「文化十三丙子六月吉日」、「施主和光原村中」とあり一八一六年に村で馬の墓場に建てたものである。

三、經典塔や巡拝塔にみる信仰心

六合の石造物調査の結果、予想外に經典塔と巡拝塔が多かった。歩く

時代は、当地は地形的な制約もあり外部との交流機会も少なく、肥沃な田畑にも恵まれず、日々の生活に追われ生きるのに精一杯の毎日だったろう。仏教の經典を開き、唱えて、遠方の靈場に足を運び功德や救いを求める経済的ゆとりや時間もなかったと思われる。精神生活でも、高邁な教えより、日々の生活に結びついた民間信仰的な俗信が中心と考えていた。だが、調査の結果、予想外にも遠い未来の救いや、遠方の靈場に精神の抛り所や功德を求める等、内省的で心豊かな精神生活を送っていたと感じる結果になった。六合の先人が心の抛り所で建てた信仰の石造物を、『日本石仏事典』や『石仏調査ハンドブック』を参考に、簡単に説明してみる。

經文を読み唱え功德をえることは仏教修行の一つである。自分が信ずる經文の誦誦や書写（写經）を行つた事実を後世に伝えるため石に刻む行為も信仰心の表れと考え、建てた塔が「經典塔」である。經典塔造立の背景は、釈迦の死（入滅）後五六億七、〇〇〇万年後に弥勒菩薩がこの世に下り人々（衆生）を救うと考える信仰があった。弥勒菩薩の世が来るまで、經典を容器に納めたり、石に經文を書いて埋めたのが経塚で、入山の京塚集落の地名由来である。元来の目的は後世に經典を伝えることだったが、その後は特定目的を果たす供養としての埋經（納經）に変化した。現存の経塚や埋經の多くはこの例である。弥勒がこの世に来るまでの間、諸国の靈場に保管する目的で大乗妙典（法華經）を、国内にあった国の数と同じ六六部書写し、これらの国々を廻り納經する六六部（六部は略称）信仰が生まれた。強い信仰心により、六六部の法華經書写や、六六ヶ国を廻国する多難な事業を達成した記念に建てたのが「廻国塔」とされる。

「巡拝塔」は、近畿地方の観音札所を巡る西国三十三番、関東の観音札所を巡る坂東三十三番、秩父（埼玉県）周辺の観音札所を巡る秩父三十四番があり、合わせて百番観音札所と呼ばれる。四国には弘法大師空海に縁の四国八十八ヶ所霊場がある。四国四県、徳島に始まり、高知、愛媛を経て、香川県で満願の、総計一、四〇〇キロ程、徒歩で四〇日程を要する霊場である。霊場の本尊は薬師如来が一番多く、釈迦如来や大日如来等各種の仏が本尊である。西国、坂東、秩父の百番観音霊場と、四国八十八ヶ所を合わせ百八十八番札所と呼び、当地にも百八十八番巡拝塔が見られる。

遠方の西国や四国等の巡拝は困難なため、地元の札所を巡るミニ観音札所が吾妻郡にもある。吾妻三十三番観音札所は起源は中世と思え、東吾妻町、中之条町を巡る札所である。西吾妻には三原三十四番観音札所があり、長野原町、嬭恋村、草津町、六合村を巡る。「巡拝塔」を見ると、百番や百八十八番、三十三番又は三十四番等がある。巡拝塔建立は札所を巡拝し本願達成の暁に建てるのが原則だろう。だが、当地から歩いて百番や百八十八番の札所を巡るには篤い信仰心と共に、経済的な裏付けも必要であろう。巡拝成就を感じさせる塔もあるが、遠方の観音様の功德を願って建てた塔もあるように感じる。巡拝の主流は観音霊場だが、これは「観音経」に観音菩薩が人々を救済するため三十三の姿に変わり現れるという記述に由来し、この功德を得るために観音を祀る三十三の霊場を巡拝する信仰に発展したという。

当地には単独の「山岳信仰塔」はないが、他と複合した山岳霊場巡拝碑が二基ある。双方の塔に湯殿山が、一基に立山と大峯が記される。

六合地区の人口は現在、町全体の二割程度である。『中之条町の石造

物』を開くと、旧中之条町では約三、五〇〇基の石造物が報告されており、今回の六合地区の調査では約一、〇〇〇基が確認された。旧中之条町の石造物では、数ヶ所ある百庚申群は部分紹介のため、未紹介を含めた旧中之条町の石造物は約四、〇〇〇基である。六合地区の石造物数約一、〇〇〇基は旧中之条町の二五％程で、六合の人口数から換算すれば相当高い比率と考えられる。六合は山間地で耕地は狭く、山からの恵みと街道筋は駄賃稼ぎが生計の柱で、決して豊かとはいえなかった。だが、意外にも精神的な欲求による信仰心は強く、大切なお金を信仰塔等を建てるのに工面している。この背景は今の我々には考えが及ばないが、苦しい生活の日々だが、心の抛り所を求め、願いを石に刻み後世に伝えたいように思える。

その一例として、複合碑も含むが旧中之条町では經典塔が一九基、巡拝塔が六七基、廻国塔が一九基が報告される。六合地区では、經典塔が二二基、巡拝塔が三九基、廻国塔が二基確認された。經典塔は六合の石造物の約二％、巡拝塔は同約四％と高い比率である。特に經典塔類は絶対数でも旧中之条町よりも多く存在する。この塔の造立背景を考えると、庶民に身近な民俗的な信仰塔とは異なり、相当程度の教養、知識に基づく信仰心があつたと思われる。

經典塔の多くは奉読誦大乘妙典供養塔という表現である。だが、施主の心根を映すような「奉恭読」や「奉再読」と刻む塔もある。太子には「奉寝読」と謙虚な表現の塔もあつた。一番古いのが享保十五（一七三〇）年、次ぎに寛延二（一七四九）年がある。巡拝塔では享保六（一七二一）年が古く、次に同九年、さらに寛延、宝暦と続いている。特色は百番巡拝塔が一六基で、四国八十八番を含む百八十八番巡拝塔が一四基と拮抗

する。旧中之条町では百番巡拝塔五九基に比し、百八十八番巡拝塔が七基と少ない。六合では百番観音霊場以外に、弘法太子に縁の四国霊場への信仰が盛んだったようだ。碑文から巡拝が成就したと思える塔は、花敷温泉の薬師堂の観音像に刻む「奉順礼西国三十三ヶ所」と、同九年の「奉納順礼坂東三十三所」がある。生須には吾妻郡西部の観音札所を巡る「三原三十四ヶ所観世音」と刻むミニ札所の巡拝塔がある。

四、品木の百八十八番観音

町史跡に指定されているが、詳細は不詳である。史跡説明には、観音群は江戸時代に品木の山本梅右衛門が建立し、西国三十三番、坂東三十三番、秩父三十四番の観音霊場と、四国の八十八ヶ所を勧請し祀ったとある。石仏群入口手前にある弘法大師座像台座銘は「奉建立四国・西国・坂東・秩父百八拾□□狼塔」と記し、□は「八番（または所）供」だろう。右側は剥落で「□亥吉日」のみで、建立年代は特定出来ない。左側面は「山本傳三郎」とあり、建立者山本梅右衛門の名と異なる。大師像と同時期に百八十八所の石仏を祀ったことは、この銘文が裏付ける。

厳密に考えると指定名称「百八十八番観音」は間違いである。四国八十八ヶ所の本尊は寺々で異なり、観音が本尊は全体から見れば少数である。本尊は薬師如来が二十三ヶ寺、十一面観音が十三ヶ寺、千手観音が十一ヶ寺である。他に阿弥陀八ヶ寺、釈迦如来と大日如来は六ヶ寺、各種の地藏菩薩五ヶ寺である。さらに聖観音、不動明王、虚空蔵菩薩、弥勒菩薩、文殊菩薩、等に及んでいる。

配置は坂東、西国、秩父の順に並ぶが、坂東の標柱個所は観音が大部分だが、西国や秩父の所に観音以外の石仏が多くあり、「観音群」の名

に相応しくなく、百八十八霊場石仏群が妥当であろう。石仏を見ると三十五番以降は四国の本尊と分かるが、三十三番までは四ヶ所が重複する。該当番号の本尊を見たが、小さな石仏で印相等も分ならず、儀軌と一致しない石仏もあり、更に調査者が未熟で正確な判定は困難で、調査資料には？印が多くなった。

『ふるさとの昔と今』に観音群の特別研究が載るが、山口村長からの聞き取りでは、梅右衛門が建立し、信州の石工作と記すが、時代は不詳とある。移転前の観音等石仏数は一七六体で、苔むしたり石が割れ劣化が進み、早めの対応を求めている。当地生まれの古老が、梅右衛門宅に寄留の石工が、一宿一飯のお礼で刻んだという話から、地元入山系の石工より高遠系石工の作を連想させる。なお、石材は品木ダムサイト下方、須立から運んだ石を利用したと教えてもらった。

今回の調査では、欠損破片を含み石像は一四九基あり、移転前より二〇基程少なくなった。石仏には番号以外の銘はなく、信州の石工作を裏付ける証拠は見つからなかった。素朴な作風の石仏が多く、沢渡の北向観音三十三番を建てた入山石工に近いと感じた。岩島の川中温泉から高間峠に至る道筋の百番観音にも似ている。

調査の結果、三十三番観音の儀軌に従った石仏など、百八十八ヶ所本尊以外の石仏もあった。百八十八所の石仏では、岩座は不動像以外になが、不動像以外にも岩座を刻む像があり、滝見観音の八番、魚に乗る魚藍観音の十番、背に滝や岩みら阿耨観音の二十番は儀軌の三十三番観音像である。この儀軌通り観音像は数基で、百八十八ヶ所の石仏との関連や造立の経緯は不明である。

何れにしても、山深い土地で慎ましい生活を送る庶民が、救いや仏の

功德を求めて遠方の霊場に足を運ぶことは至難である。現世の生活に追われ、特別な喜捨や善行、修行を行う機会はないが、ありがたい遠方の霊場の仏達に救いを求め建てた石仏である。ここだけで調査した六合の石造物の約二〇%が集まり、当地に住んだ先人の心情と信仰心の篤さを感じ、心洗われる思いがする。

五、子安地藏と女人信仰塔

江戸時代の武士には苗字帯刀の特権があり、農民等の身分には苗字がない存在と思っていた。その後、石造物調査をする機会があり、名前に外に苗字も記す例が相当数あると気がついた。公的文書等は名のみだが、碑文等には従来の苗字使用は許されていたようである。だが、女性名を刻む石造物は少なく、苗字がつくのは皆無に近いと知った。お寺や神社に檀家や氏子が信仰や感謝の証で寄進した近年の石造物が多くあるが、相当数はご夫婦名を連記し、時代の変遷を改めて実感する。

封建的な色彩の強い時代には、女性が公的な表に出る機会が少なかったのは事実だろう。だが、じっくり石造物を見ると、施主を善男と断る例も少数あったが、女人又は女が信仰の主役で建てた石造物が意外にあることに気がついた。石造物調査から、女性が主役と感じた数例を紹介してみる。

六合地区調査で、当地には子安地藏信仰が他町村より篤いと感じた。若い母親中心の講が子安講で、子授けや安産、子供の健やかな成長を祈念し、死産の時は供養のために集まる講である。確認した石造物は一四基で、入山の各集落にはほぼあった。子安地藏の名称だが、お姿は子育て地藏様のイメージより、子を慈しみ抱く子安観音＝慈母観音に近いよ

うに感じる。当地の子育て地藏＝子安地藏は、子供を抱く地藏は見られない。像容は両手で幼児を抱く姿、片手に乳房を持ち、一方の手で幼児を抱く像等、様々な姿の丸彫りの座像である。

子安地藏造立の背景に、入山の各集落に残る病人籠に象徴される医療施設不備の状況もあつたらう。重病時には隣組の手を煩わし、籠に揺られ生涯に一度の草津の病院に運ばれ、死の時を迎えたような厳しい現実を反映していると感じる。仕事に追われ出産前日まで働き、早々に仕事に復帰する状況にあり、母親が育児に時間を割くゆとりもないのが生活の実態だつたらう。成人前に亡くなる子供が多くいる厳しい現実のなか、安産や子の健やかな成長のために、神仏の加護にすがるのは母親の自然の心情だろう。

主な子安地藏を紹介すると、生須の子安地藏は豊満な乳房を子に含ませる観音様のイメージの像である。天保年間に高遠石工が刻んだ石像で、側面に「女人中 せい、いね、もよ、よし、ちか、みな」と六人の女性の名が記される。世立の子安地藏も、今も安産等を願ってか衣類を寄進し着せる方がいる。像に銘はないが、右手に蓮を持ち、左手で子を抱く姿である。和光原下組の子安地藏は文政年間に建て、正面は「子安地藏大菩薩」、側面には「念佛供養塔」とあり念仏塔も兼ねる。太子の花園(桑園)堂跡にある天保年間の子安地藏は「念仏供養塔」と正面にあり、側面は「女人講中」で、女人念仏講の塔である。赤岩広池大日堂の通称子安さんは一部見えないが、文政三年や念仏の銘が分かる。日影下沢阿弥陀堂の子安地藏も裏側の銘が確認出来ない。入山品木の天保年間の子安地藏には「當所女人講中」の銘がある。入山花敷薬師堂にある嘉永年間の子安地藏には「長平村」の銘がある。和光原上村のお堂境内と、長平

の観音堂境内の子安地藏は頭部が欠けて、今では忘れられた感じである。子安地藏の石像はないが、荷付場には子安さんのお堂があり、京塚には子守り神社を祀り、地内の子安信仰の場になっていた。他に長平集落の姥神様は恐い老婆の像はなく、石祠という珍しいものである。

主役が女性だった民間信仰的な行事に月待ちがある。月待ちは特定の月齢の夜に講仲間が集まって、飲食や念仏等の勤行を行い、月の出を待つたり月齢の本尊（二十三夜は勢至菩薩）を祀る行事で、女性のみの講も多かった。月待ちの夜は、女性も家事からも解放され、飲み食いを共にし、お喋りを楽しむ夜の夜だったろう。月待を共にする仲間が、一定期間の月待ちを終えた際などに建てたのが月待塔である。月待ちと言えは通称三夜様と呼ぶ二十三夜が思い浮かぶ程で、全国各地で行われた行事だった。六合地区では九基確認されたが、二十三夜塔が七基、三夜様と呼ぶ石仏（像は聖観音にも似る）が一基ある。月齢が二十三夜以外の塔は二基で、太子の天保年間の如意輪観音に「十九夜供養塔」、「當邑女人□」と、品木の赤城神社下に「十九」とある塔も埋没で見えないが月齢だろう。『中之条町の石造物』を見て、十六夜塔が多い地域と感じたが、六合では二十三夜塔が大多数を占め地域的特色はなかった。

当地の二十三夜塔の代表ともいえる大きな塔で、石工技能が冴えた優品が生須にある。町文化財馬頭観音付近の道上に祀られた弘化三年の塔で、像高一七五センチで中央に勢至菩薩合掌像が彫られ、台に「三夜待講中」とある。三日月、飛雲や牡丹花や台座前の兎像と石工の技が十分に発揮された塔である。

如意輪観音像は女性の墓石にも多く、産婦の墓標で立てた地域もあるなど、女性からの篤い信仰を受けた仏である。像容は右膝を立て、右手

を頬に添える姿でなじみ深い像だが、頬に手を添える姿から、歯痛から守る神という素朴な民間信仰の対象例もある。普通は左手に如意宝珠があり、仏の名の由来になる。この宝珠がどこにでも転がるように意のまま現れ、衆生の苦しみを取り去って利益を与える仏とされる。前述以外に「女人」銘のある当地の如意輪観音像を見てみる。日影中沢の橋爪家墓地脇に文化七年の如意輪観音像があり、「念仏供養」、「當村願主女人中」の銘がある。京塚観音堂境内にある寛政二年の如意輪観音像には「念佛供養塔」や「當村女人」の銘がある。矢倉のお堂屋敷の如意輪観音には、「村中女人」の銘がある。根広集会所（月洲庵跡）、宝曆の如意輪観音像で、台座に、「念仏供養講中施主村女人」の銘がある。

前記以外に「女人」と刻む塔を紹介する。

①小雨、支所裏の市川家墓地脇の文政十一年の灯籠の台に「女念仏講中」の銘。

②小雨天神社石段脇に祀る「癸卯歳」の信仰塔は、「女人講／十六番」の銘。

③小雨、大坂旧道沿いにある、寛政四年の千手観音に「西国□川／第三番／草津女人／念仏講中」の銘がある。

④太子集落に嘉永七年の阿弥陀如来座像、「念仏供養塔」や「女人講中」の銘。

⑤龍沢寺参道、明治二十七年の二十三夜塔に「女人講中」の銘。

⑥赤岩東堂石仏群、文化十一年の線彫りの美しい観音像に「女人講中」の銘。

以上、雑駁な整理だが、女性の信仰を裏付ける石造物類を紹介すると共に、簡単な説明だがまとめにしたい。

六、神社の石造物や石祠の神々

神社境内や参道には灯籠等、各種の石造物があるが、この中から幾つかの興味深い石造物を紹介する。

一つは地味で気がつかない石造物に石段銘がある。赤岩神社入口から急坂を上り汗が出る頃、上に赤岩神社が見える所に到着、そこから石段が始まる。最初の石段脇石柱に、下部は見えないが「奉寄進／宝永二年／□月篠原」とある。一七〇五年と時代も古い石段で、篠原氏の寄進で出来たと分かる。その上の石段脇石柱は「奉寄進／宝永二年／酉四月富沢安左エ衛門」とあり、前記と同年に出来たと分かる。拝殿近くの石段柱には「寛政十年八月日」とあり、一七九八年に出来た石段である。当社参道の整備が、石段の石柱に刻む宝永二年や寛政十年の年号から、当社参道の整備の時代が分かる貴重な銘である。

六合には赤城神社が生須と品木に祭祀される。赤城神社は赤城山と山頂付近の沼をご神体とするが、当地の集落からは東が山並みに遮られて赤城山は見えない。赤城神社の御神幸神事には、田畑の仕事が始まる春に神を里に迎えるサオリや、農作業が終わる秋に神を山にお送りするサノボリ神事がある。農神としての側面が、近世には赤城南面を中心に庶民が赤城講を組織し信仰圏が広がったと言われる。赤城山も見えず、遙か西に位置する当地に祀るのも農神としての信仰だろう。

生須の赤城神社入口の大灯籠の銘文は興味深い。文化九年の優美な灯籠で、向かって右の灯籠の竿石に「赤城大明神／天神／地祇八百萬神／八幡大神／八坂大神」とあり、左の灯籠の竿石には「赤城大明神／伊勢大神宮／石尊大権現／秋葉大権現」と、見知らぬ土地の名神大社や

八百万の神々のご加護を期待した、庶民の少々欲張った神頼みや願いを反映させる灯籠である。当地以外も含め、これほど多数の神々を記す石造物も珍しい。同社拝殿前の文政十一年の灯籠も多く神々の名がある。この竿石には「瑜伽大権現／金毘羅大権現／秋葉大権現」とあり、今の岡山県、香川県、静岡県にある著名な神社の名である。特に遠く岡山県にある瑜伽大権現と記す石造物は初見である。

品木の赤城神社はダム湖に埋まり、今は公民館上の尾根に移った。神社へ行く尾根には、中世の石造物である五輪塔が多数ある。六合地内で古い五輪塔や残欠は、日影田端の三原三十四番観音札所二十一番あふみ堂跡の一〇基程と並ぶ数である。品木にも一〇基あり、ほぼ完全な塔が過半を占める。銘文は未確認だが、専門の方に見てもらい時代が特定出来れば当地の歴史の一端が分かると思える。

山深い当地は、面積の約八〇%を山地が占めている。山仕事が生活の柱だった時代は山の神十二神に仕事の無事を祈った祠も祀られた。また、天狗様は畏敬する神の一面もあり、安易に近づけない岩場等に祀られることが多い。他に火伏せの神秋葉や愛宕さんの石祠も山中に祀られる例が多くある。

当地の山岳に祀る神で類例が少ないのが高間山中腹にある摩利支天の石祠であろう。摩利支天は亥年の守り本尊で知られ、猪に乗る像が多くあるが、高間山腹では石祠である。摩利支天は陽炎を神格化し、自在の通力を有し、武士の信仰が篤く、庶民信仰では護身、勝利、蓄財には効験大と書籍に載る。当地の摩利支天は武運長久の願いを叶えるときれ、戦時中は出征兵士や家族からの篤い信仰を受けた。以前は道もあつたが、今では道は笹藪に消えて、行くのも大変だった。石祠正面に「摩利支尊

天」とあり、側面には宝曆十二年や「赤岩郷」の銘があり、村で祀った神と分かる。

山神十二様を祀る信仰塔は、世立や引沼の奥、山名と同じく山頂には松と岩が見える松岩山にある。この山は途中まで地形図の松岩山登山道を進み、天狗平、天狗岩の案内を過ぎ、左奥に松と岩の山頂が見える付近で左の細道を進む。道は北に続く尾根を下る感じで、密生した石楠花林を抜けると山頂になる。山頂に「十二山神」と刻む自然石があり、台に「松岩山」と記される。裏には大正十二年、建設者に山田郡大間々町の岡部某と地元二人の名がある。当地に眠る山林資源開発を企てた関係者だろう。十二神の祠では、大原の別荘地西端、大原の採草地へ上る旧道十二坂が終わった地点の十二様の石祠銘が興味深い。祠は傷み自然に帰る寸前だが、同行の方と往事を偲び復元する。銘文から明治三十一年の祠で、「和光原／引沼／世立／京塚組中」とある。大原は和光原と引沼の採草地だが、他の村名もあり、曲げ物細工の木々を求めた山仲間が無事を願って建てた祠ではと古老が語る。

天狗は山の神の異形と思える神で、山中での怪異現象も天狗の仕業と畏れられ、祀る所も気軽に参拝するのも困難な岩場等が多かった。天狗を祀る場所が何ヶ所かあるが、険しい所に祀った好例が矢倉発電所鉄管路西南に突き出た岩場、天狗山先端である。痩せ尾根の岩場で、如何にも天狗の棲む場所に相応しい所である。付近で茸採りの方が滑落したと聞き心配し、ユルユルとヘッピリ腰で歩き無事参拝出来た。天狗の石祠は明治二十五年に建て、側面は「組中」で、矢倉の神らしく霜田姓の三人の名がある。

水の神弁天様も人里離れた水辺に祀る例が多い。当地には地名に水に

縁がある所を水神が移り住むという伝説があり、その場所に祀られた弁天石祠を紹介する。伝説のスタートは生須山中の降跡の沼で、やがて水神は辰ノ口から沼尾へ移り、その後は引沼へ移動し、今は野反の池が安住の地という伝説である。

暮坂から生須集落手前、県道から北に入った山中に降跡沼跡がある。近年、跡地には降り跡沼の由来碑が建立され、傍らの小高い所に文化五年の弁天石祠が祀られる。水神の安住の地、野反にも弁天石祠が祀られる。一つは野反峠の西、弁天山頂の天保十三年の石祠で、祠には「入山邑」と記し、村で建てたと分かる。野反峠の東、八間山登山道中程。植生が乏しい鳥賊禿上の尾根に、石積みに囲まれた祠がある。祠の銘は「三百年前建立／明治三十二年再建／建之入山村中／世話人 和光院」である。野反の帰属を巡る交渉で、長野県側は野反は分水嶺北側に位置し信州に帰属と主張、入山の和光院法印は古くから付近一帯は入山の方の生活の場で利用し、当地から切り離すことは認められないと主張した。その結果、入山に属したという背景があつた。弁天石祠の銘は、三〇〇年前から当地の水神で祀り、再建したという主張の論拠とも思える。石祠は岩菅山の前宮説もあるが、地元では弁天石祠と言われる。今も千天の年には野反の池に水乞いに行つたと語る古老がいるように、そんなにも古い時代の話ではない。

七、高遠石工と石造物

高遠石工が農閑期の冬場、生須に寝泊まりをして、客の注文を受け稼業に従事したという話を聞いた。鍛冶屋敷へ通じる旧道脇の夫婦石と呼ぶ大石は、高遠石工と当地の娘が悲恋の結果に命を絶ち、この石になつ

たという伝説もある。品木の町文化財百八十八番観音は高遠石工と語る方もいるが、石工銘は見られない。これらは高遠石工が六合へ足を運び、石を刻んでいた足跡を裏付ける一面ともいえる。

以上のように高遠石工の活動に因む話は伝わるが、石造物調査では高遠石工銘を刻む新たな作品は発見されなかった。彼等は墓石等を刻んでも、名前を表に出さない暗黙の約束があつたのだろう。この点、今の石工は自らを石匠某と刻む姿勢とは異なるようだ。農閑期の一定期間は当地に滞在したのだから、石工銘を刻む現存の石造物以外にも相当数の仕事を請け負い、その仕送りが国元に住む家族を養い、貧しい高遠藩を支える力になつたのだろう。

若い頃の調査では高遠石工銘が確認できた石造物が五基あつた。だが、石材の劣化が進み剥離のため、石工名が消滅したのが三基もある。今も銘文が確認出来る石造物は、天保五年の生須の子安地蔵で、裏面に「石工信州木下好蔵／小森吉蔵」とある。もう一つが入山品木原の諏訪神社の石燈籠である。拝殿前左の文政二年の灯籠に「石工信州高遠 新蔵／吉蔵／要蔵」とあり、吉蔵は小森吉蔵であろう。

他に小雨と生須に對で町文化財馬頭観音がある。小雨支所裏の観音は天保十二年に建て、地元世話人の名もある。その後は石材劣化で剥落したが、僅かに「石工□□吉蔵」と見え、小森吉蔵作と分かる。小雨と向きあう生須の馬頭観音も、同様に劣化が進み、天保十二年以外の銘は見えないが、以前は吉蔵の名が刻まれていた。入山見寄のドンガラ（雷）松脇の墓地に宝篋印塔がある。台座には嘉永六年や、施主山本元右衛門の銘が見え、続いて「石工吉蔵」と刻まれていた。だが、現在は剥落して確認出来ない。

他に石工の名を刻む江戸時代の石造物は、生須の赤城神社参道入口の大灯籠にある。前述した文化九年の灯籠で、「石工和吉」のみだが、優美な姿と当地との縁から高遠石工の作と思える。

草津町光泉寺境内に弘化三年の灯籠がある。その銘に「石工生須中沢吉蔵／信州伊那郡小町屋福沢音吉／梨木宮崎平三郎」とあり、吉蔵は小森姓だったが、生須の寄留先の中沢姓を名乗ったとも考えられる。入山梨木の宮崎平三郎は技術を地元へ伝えて、明治以降活躍した梨木の湯本姓石工の先駆者になつたとも考えられる。

赤岩東堂に当地では珍しい馬に乗った姿の勝軍地蔵がある。幕末の文久二年に建て、傷みが進むが「入山石工安右衛門」とあるが、梨木に拠つたのかは不明である。

明治以降の入山の石工の作品は、中之条町上沢渡の北向観音の観音群が知られる。北向観音の高い所に、「明治三十五年三月／吾妻郡六合村大字入山村／石工湯本乙吉・同愛三郎」と刻むのが知られる。六合地内では大正十二年と新しい碑だが沼尾入口の墓地にある。六合村初代村長山田弥惣治の墓に「石工梨木湯本清吉」の名がある。和光原の山田庄平墓前に昭和十年、君嶋知事が当地視察の際に墓参に訪れ、知事の詠んだ歌碑に「石工湯本清吉」の名がある。墓石は未調査だが、それ以外の当地の石造物には入山石工の名が見えない。

八、忘れられた歌碑

当地で歌碑といえ、道脇に多くある牧水歌碑である。歌人若山牧水は大正十一年十月、紅葉の頃に旅し、多くの歌を詠み、彼の歩いた道沿いに多くの歌碑が見られる。また、生須の庚申塔脇には、地元の短歌を

愛する方々の碑が集まる生須歌碑苑もある。ここでは牧水以外の歌碑で、余り知られない四人の方の歌碑を紹介する。

世立には正岡子規門下の歌人で、貧しい小作農民の生活を書いた小説『土』の作家、長塚節が明治四十一年に当地を通った際に詠んだ歌の歌碑がある。碑は枝垂れ栗の東にあり、「長塚節／唐黍の花の梢にひと徒づ、蜻蛉をとめて夕さり尔け里」と刻まれ、昭和五十三年の建立である。碑を見て、高名な歌人が当地に遊んだことを初めて知った。その後、藤沢周平の『小説白き瓶』を読み、当地から秋山郷へ旅した長塚節の旅の一端を知った。秋山への道は、長平の獵師角蔵（覚蔵）の案内だったことも分かった。

次は群馬県知事君嶋清吉が、馬以外の交通手段もない僻遠な当地に二度も足を運んだことを裏付ける歌碑である。最初は昭和八年、戦死した和光原の山田庄平の葬儀参列のためである。当時は戦死者も少なく、故郷和光原での葬儀を家族も望み、県知事が山深い当地の葬儀に足を運んでいる。氏の墓誌に「同年九月廿三日六合村葬ヲ挙行セラルルニアタリ県知事」他、高名な諸氏参列が記される。二度目の入山訪問は福嶋松次村長の時で、陸の孤島入山への車道開削に情熱を捧げた村長は、私財まで投じて熱心に誘致活動続けた。子供の頃、梨木の地藏堂前で偉そうな人が馬に乗って通ったのを迎えたと言る古老もいる。庄平の墓付近に、「昭和十年八月・君嶋清吉閣下六合村の情勢視察にて御来村の砌りと刻む塔があり、次に「殉国の勇士を祀る丘のみぞ夕日にしるき山峽の村／野反湖の途次墓参を其時に詠まれ茲に彫す」の歌がある。知事は二度の当地訪問で、遅れた道路事情を痛感し、道路開削の必要性と村長の熱意に心を動かされたと思える。当時、白砂川の水を隧道で川中発電

所に落とす計画があり、重い工事資材を運ぶのに車道開削は必須だった。群馬水電側が工事費の大部分を負担し、昭和十二年に念願の車道が入山まで通じた。当時の『上毛新聞』を開いたが六合関係の記事は皆無に近く、唯一、昭和十二年七月の開通関連の記事が存在した。入山の文明開化の契機と大きな扱いの記事だった。県知事が村の情勢視察で足を運んだことが分かる貴重な歌碑である。

敗戦後の日本再建に貢献し、釜石鉄山に次ぐ日本で二番目の採掘量を誇り、教科書に載った群馬鉄山跡にも歌碑がある。歌碑はチャップミゴケ公園を訪れる方々の駐車場脇に忘れられたようにある。碑には「半才振り尔又帰来何日もながら故郷の如し初秋始まる／昭和五十四年九月二十二日／榎田久生」の歌が刻まれる。傍らには「ここは群馬鉄山跡地なり」と始まる副碑があり、「素朴は風土と厳しい自然に恵まれたこの地をこよなく愛し限りなき情熱を注がれた榎田さんの遺徳を偲びこの碑を建つ」と結んでいる。氏は日本鋼管（JFE）社長等を歴任した実業家だが、謙虚な人柄の苦労人で、碑は氏を慕う方々の思いで死後建てられた。氏は「当地に来た時は田代原に立ち寄って、気さくに話しかけてくれた」と人柄を偲んで語る古老もいる。

最後に赤岩の医家湯本家墓地に、五十万石余の大藩、福岡藩黒田侯の侍医彦肅（徳潜）が、一〇才の豹作時代に祖父の辞世を書写し、石に刻んだ碑がある。一〇歳と思えない立派な書で表裏に続き、非凡な才能を思わせ興味深い。因みに祖父の詠んだ辞世の歌は「蓮葉の濁にすみし露ほどはひかりをのこせはなの台に」である。

九、記憶に残った石造物

石造物調査を終えて、前述した以外に幾つか紹介したい石造物がある。

①地蔵峠の石仏：長野県境の地蔵峠は、白砂山登山者が通る峠である。だが、古くは野反池經由で秋山郷へ通じる交易の道筋にある峠だった。地蔵峠の地名由来の石仏が峠にあるが、本当に地蔵だろうか。戦前の山岳雑誌に、長野原の方が、この石仏を背負って岩菅山に奉納しようと峠道を登って来たが、峠に来ると前に進めなくなつたとある。諦めて峠に置くと、身体も動くようになったという。冊子の記述通りだと、本来は岩菅山に納める目的の石仏が、この地に勧請されたことになる。地蔵と言うが、石仏の頭は螺髪で如来像と思われ、印相も地蔵とは異なる。よく見ると銘もあり、三人の法名に「誉」の一字が入り、浄土宗系に多い法名で、最後に「為菩提」とあり三人の供養塔である。地蔵より阿弥陀如来の可能性が高い石仏である。

②民俗信仰の塔：太子集落の外れ、道沿いに石仏群がある。その端にある篠原家墓地裏に珍しい信仰塔がある。安政二年（一八五五）の塔で、表に「虫歯地蔵大士」と刻まれる。虫歯の痛みに悩み苦しみ地蔵様の力に頼った民俗信仰的な素朴な現世利益を求めた塔である。

素朴な民俗信仰的な塔が引沼のジョウドウ（十王堂）西脇の斜面にもある。昔、蛇に悪戯をして体調を崩した反省から蛇を敬い拝む塔を建てたと古者から聞いた。塔は高さ六五^{センチ}程の自然石に「奉納長虫神」とあり、右側面は「大正十五年二月吉日」とある。蛇を長虫と表現し、神として崇めた塔である。これは『県史』資料編にある一月二十日に行う二十日香煎に因む塔だろうか。この行事は香煎を煎り、家の周囲に撒く呪術的な行事で、「長虫除け」や「虫除け」とも呼ばれ、長野原町与喜屋では「長

虫来るな、蛇来るな」と長男が唱えながら家の周囲に稗の香煎を撒いたと載る。

如意輪観音像が右に頭を傾け、右頬に手をやる姿から歯痛を連想するが、顎無し地蔵と呼ばれる如意輪観音像が引沼の道祖神付近にある。観音像の姿態がイメージを膨らませ、本来の信仰意義とは別な信仰対象になつた例である。同様に生須の道祖神は、古者が耳垂れの神様として拝んだという。竹の一節を切つて、二つの竹筒を結び耳の両脇に吊して治癒を祈願したと語る。

③文永の稲荷石祠：郡内最古と思われる在銘の石造物は、沢渡温泉の画像板碑で、鎌倉時代の文永七（一二七〇）年とある。今回の石造物調査で、太子集落裏に続く瘦せ尾根に祭祀の石祠を調査してみた。石祠の身部裏面と、屋根側面に「文永六年」とあり、事実なら郡内最古の石造物になる。石祠裏面は「文永六〇七月吉□」で、摩耗で不明箇所もある。屋根側面は彫りが深く、「文永六年己巳七月吉日」と鮮明に見える。聞けば稲荷社として拝む家があるが、この家は当地に住み数代目で、鎌倉まで遡るとはいえない。形式からも元禄頃に多い石祠で、裏面に最初に刻み、後に追刻で屋根に同じ銘を刻んだと思える。

④六郎谷の大日如来像：人里離れた所で修験者や行者が心身を錬磨する修行の場に相応しい所が六郎谷の屏風状の岩下の洞である。ここに修験者の信仰する大日如来が祀られる。六合地内の大日如来の碑は、墓地を除くと、入山の古道に大日如来碑と複合した道標が三基ある。

太子の六郎谷は水戸沢上流で、町道と水戸沢が交差する付近から沢に入り、沢沿いに道跡をたどり三〇分程上流に向かうと左岸に赤崩箇所がある。崩落地点が終わつた左岸上方に帯状に岩場が続いている。この一

帯が御行平で、行者の修行の場に相応しい地名である。岩壁の左外れ付近、岩下に背中を曲げれば雨を凌げる程の高さの洞がある。洞内には大日如来座像を祀り、像は御行さんと呼ばれる。智賢印の金剛界大日如来像で、蓮華座もある。像の背面には僅かに「宝曆□□」と見えるが、年号は判定出来ない。

⑤ 梨木地藏堂境内の庚申塔・六合地区の庚申塔は、『六合村の庚申塔』に四六基が報告されており、改めて述べることはない。ただ、今回の調査で、梨木の地藏堂境内に、未紹介の庚申塔と思われる古塔があり、事実ならば地区で最古といえるので追加報告をする。高さ六一寸、幅二七寸の墓石状の碑である。銘文の摩耗が進み確認は困難だが、「貞享五年□五月」と思え、下部には二猿像を刻み庚申塔と思われる。事実なら冊子に載る京塚の観音堂裏の宝永五年の塔より古くなる。

⑥ ミニ札所か？・小雨の旧大坂道沿いに、西国や西国須川と記す塔が二基ある。須川は当地の白砂川で、銘から川筋を巡る西国観音信仰を思わせる。一基は大坂道の最後の家が終わった先、道の左に千手観音の立像に「西国□川／第三番／草津女人／念仏講中」の銘が、台には「寛政四子年二月吉日」とある。もう一基は、大坂道が山中に入る手前の墓地下にある。小平な場所は堂跡を思わせ、馬頭観音像を中心に多くの石仏が集まる。その一つに聖観音像があり、「西国二番／寛政四子天／二月吉日」と同年である。以上は須川沿いにミニ観音札所の存在を思わせるが、他に地内には同類の西国の観音像は確認出来なかった。関連を思わせる塔が、大坂入り口の墓地にある「奉順礼西國観世音」と記す塔である。左右は「千山嶺居士」、「年叟了窮信士」の法名で、墓石でもある。側面には「掟禪定門／天保九戌年／五月十六日」等計一〇名の法名を刻

む。何れも信仰関係者をイメージする法名である。裏面に「西音沙弥／有縁無縁」とあり、当地に拠った西国観音札所を信仰する関係者と思える。唯一、法名に天保の年号があり、造塔は江戸時代末であろう。同じく小雨の天神社石段東脇に、「女人講／十六番」と刻み、「癸卯歳」とあり文化十四年と思える石碑断片がある。

太子の岩屋にも幾つか興味深い石造物がある。その一つに、ミニ札所の存在を思わせる標石がある。標石は高さ三三寸で「新四国二十五番」とあり、側面に「文政十一戊子年」、「當村中」とあり、一八二八年に太子村で建てたと分かる。草津温泉にある新四国八十八ヶ所が大正九年の開山で、それより九〇年余りさかのぼる。六合地内の四国八十八番霊場の石造物は品木百八十八番観音以外に見られない。標石の四国二十五番は、高知県にある津照寺で本尊は珍しい楯取地藏菩薩である。岩屋を二十五番に見立てるなら、本尊である地藏菩薩像は存在しない。新四国は六合地区以外にも含めたミニ札所か、私の調査範囲には新四国を刻む石造物は見られず不明である。

ダム湖に水没した品木集落の石造物は赤城神社に続く尾根に移った。五輪塔付近に天保十四年の弘法大師像と思える僧形座像がある。台に「二十七番」とあり、小雨大坂道脇の千手観音の第三番や、小雨天神社石段脇の十六番と関係するミニ札所の存在を示す石造物かは現段階では不明である。

教育

一 教育委員会

1. 教育長

氏名	就任年月日	退任年月日
本多 春長	昭和四十七年十月九日	昭和四十八年九月三十日
中沢 定雄	昭和四十八年十月一日	昭和五十二年九月三十日
萩原 與吉	昭和五十三年二月二十五日	昭和五十七年二月二十四日
中沢 要平	昭和五十七年四月二十六日	昭和六十一年四月二十五日
中沢 要平	昭和六十一年四月二十六日	平成二年四月二十五日
中沢 久吉	平成二年八月一日	平成六年七月三十一日
市川 春男	平成六年八月一日	平成十年七月三十一日
市川 春男	平成十年八月一日	平成十三年二月二十八日
関 常男	平成十三年六月十五日	平成十四年七月三十一日
関 常男	平成十四年八月一日	平成十八年七月三十一日
茂木 真一	平成十八年九月五日	平成二十二年三月二十七日

2. 歴代教育委員(昭和四十七年以降)

氏名	就任年月日	退任年月日
篠原六三郎	昭和四十七・十・一	昭和四十八・九・三十
山本 茂樹	〃	昭和五十一・九・三十
山本昭五郎	〃	〃
山田隆太郎	昭和四十八・十・一	昭和五十・四・三十
中沢 貞雄	〃	昭和五十二・九・三十
萩原 長一	昭和四十九・十二・十七	昭和五十三・十二・十六
山本 貞成	〃	昭和五十一・九・三十
中村 福美	昭和五十・五・十三	昭和五十・九・三十
中村 福美	昭和五十・十・一	昭和五十四・九・三十
山本昭五郎	昭和五十一・十・一	昭和五十四・三・三十一
山本 由平	〃	〃
萩原 與吉	昭和五十三・二・二十五	昭和五十七・二・二十四
湯本 貞二	昭和五十四・四・一	昭和五十五・九・三十
関 庄太郎	〃	〃
萩原 長一	昭和五十三・十二・十七	昭和五十七・十二・十六
中村 福美	昭和五十四・十・一	昭和五十八・九・三十
湯本 貞二	昭和五十五・十・一	昭和五十六・八・八
関 庄太郎	〃	昭和五十九・九・三十
中沢 要平	昭和五十七・四・二十六	昭和六十一・四・二十五
関 勘三郎	昭和五十七・十二・十七	昭和五十九・九・三十
田村 尊	〃	昭和六十一・十二・十六
中村 福美	昭和五十八・十・一	昭和六十二・九・三十
山本 善繁	昭和五十九・十・一	昭和六十三・九・三十
関 勘三郎	〃	〃

中沢 要平	昭和六十一年・四・二十六	平成	二・四・二十五
田村 尊	昭和六十一年・十二・十七	平成	二・二十二・十六
山田 正人	昭和六十二年・	平成	三・九・三十
山本 善繁	昭和六十三年・	平成	四・九・三十
関 勘三郎	〃	〃	〃
中沢 久吉	平成 二・八・	平成	六・七・三十一
茂木 孝一	平成 三・三・十五	平成	七・三・十四
山田 正人	平成 三・三・	平成	七・一・三十
山本 善繁	平成 四・十・	平成	八・九・三十
山本今朝好	〃	〃	〃
市川 春男	平成 六・八・	平成	十・七・三十
山本 峯松	平成 七・二・十三	平成	七・九・三十
茂木 孝一	平成 七・三・十五	平成	九・十一・二十八
山本 峯松	平成 七・十・	平成	十一・九・三十
山本 秀雄	平成 八・十・	平成	十六・九・三十
山本今朝好	〃	平成	十二・九・三十
富沢みち代	平成 九・十二・十二	平成	十一・三・十四
市川 春男	平成 十・八・	平成	十三・二・二十八
市川 安江	平成 十一・三・十五	平成	十五・三・十四
山本 峯松	平成 十一・十・	平成	十五・九・三十
篠原 巖	平成 十二・十二・十四	平成	十三・三・三十一
関 常男	平成 十三・六・十五	平成	十四・七・三十一
富沢 春雄	平成 十三・六・十五	平成	十六・十二・十三
関 常男	平成 十四・八・	平成	十八・七・三十一
市川 安江	平成 十五・三・十五	平成	十五・九・三十
中村 喜一	平成 十五・十・	平成	十九・九・三十
安原十三四	平成 十五・十・十五	平成	十九・三・三十

山本 好一	平成 十六・十・	平成	十七・十二・十三
富澤賀津夫	平成 十六・十二・十四	平成	二十・十二・十三
山本 幹雄	平成 十七・十二・十四	平成	二十・九・三十
茂木 真一	平成 十八・九・	平成	二十一・三・二十八
安原十三四	平成 十九・三・十五	〃	〃
中村 喜一	平成 十九・十・	〃	〃
山本 幹雄	平成 二十・十・	〃	〃
篠原 直巳	平成 二十・十二・十四	〃	〃

二 幼保一体事業の導入

1. 幼保一体の「六合こども園」の誕生

六合村には、平成十五年度まで、昭和四十七年に設立した日影幼稚園と昭和四十八年に設立した入山幼稚園の二園があり、四、五歳児を受け入れてきた。しかし、保育園は無いため、他町村に広域委託をしていた。

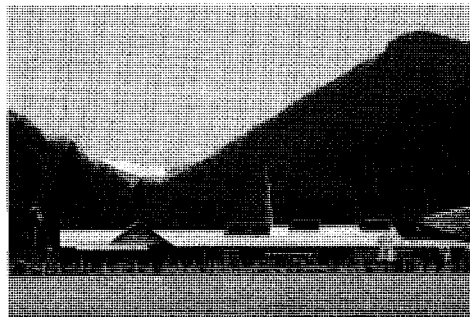
また、近年の少子化の影響から年々園児数が減少し、両園、各クラス共集団による豊かな生活体験の保育が不可能になった。

さらに、女性の社会参加、女性の就労形態の傾向等により、保育園の必要性の声も高まってきた。

そこで、村では、平成十三年に全村民を対象に「幼児教育を考える集い」を開催し、アンケート調査等を行い、住民の意見を集約した。

その後、平成十四年七月に「幼児教育検討委員会」を設置し、二幼稚園の統合と財政的見地から幼稚園、保育園のどちらか一園ということまで話し合いを行ってきた。

しかし、委員会の意見は「幼稚園がほしい」「保育園がほしい」との声が拮抗し、結論を得ることができなかった。



六合こども園

そのような中、平成十四年十二月に国による構造改革特別区域法が成立し、幼保一体による両園児の合同活動が認められることになった。そこで、村はこの特区の認定を受け、幼保両園のニーズに対応するというところで村民の合意を得て「六合こども園」開園に向けて動き出した。そして、平成十五年四月に「幼保一体化特区」の認定を受け、平成十六年四月に「六合こども園」が開園となった。

(1) 幼保一体化特区について

① 八〇七特区 平成十五年四月二十一日認定

- 特定事業 幼稚園における幼稚園児及び保育園児等の合同活動
- 特区の概要 幼稚園と保育園の合築施設「六合こども園」において、一緒に教育・保育活動を行う

② 九一四特区 平成十五年十一月二十一日認定

- 規制の特例措置 保育所における保育所児及び幼稚園児の合同活動事業
- 特区の概要 「六合こども園」において、両園児が一緒に保育活動を行う

③ 九一六特区 平成十五年十一月二十一日認定

- 規制の特例措置 保育の実施に係る事務の教育委員会への委任事業
- 特区の概要 教育委員会にて幼稚園事務と保育所事務を行う。

④ くにつくまにこ給食特区 平成十八年

- 規制の特例措置 保育に関わる調理を給食センターで行う
- 特区の概要 開園以来「こども園」で行っていた給食・おやつ等を給食センターの事業として行う

(2) 幼保一体化を目指す「六合こども園」の基本方針

従来、厚生労働省管轄による保育所保育指針と文部科学省管轄の幼稚園教育要領に基づいた「六合つ子乳幼児教育カリキュラム」にのっとり「六合こども園指導計画」を作成し、ゼロ歳児から就学前までの心身の発達に合わせた一貫した方針で保育を行う。

また、家庭、地域、こども園の連携をはじめ、小・中学校との連携も強め、地域が一体となって子育てを行う。

また、保育にあたっては、就学前の幼児に幼稚園、保育園の区別は無く、両園のメリットを充分に生かして「六合こども園の園児」として、同じカリキュラムに従い、豊かな社会性、創造性を涵養したふるさと六合村を愛する「六合つ子」を育てる。

さらに、施設面においても、各施設の利点を生かして幼保の区別の無い運用を行う。

また、職員の組織と任務についても幼保の両免許を基本とし、幼稚園、保育園の区別、枠を外し、それぞれの職員の特性を生かした組織で任務を遂行する。

(3) 教育課程

① 保育目標

1 基本目標

健やかに 心豊かに たくましく

2 具体目標

仲良く元気に遊べる子

元気でたくましい子

進んで取り組み 豊かに表現し 作り出す子

② 保育方針と努力点

※個々の幼児の個性を尊重し、発達段階に応じた保育に努める

※豊かな自然環境と様々な人とのふれあいを通して、心豊かな幼児の育成に努める

※生活リズムや食育を重視し、基本的な生活習慣を身につけ、健康な生活ができる幼児の育成に努める

※家庭・地域・学校等との連携を図り、共通理解のもとに一貫性のある保育に努める

(4) 職員組織

H 17	山本 茂 萩原 豊子	市川 章子	山本 健一	山本 ゆき子
H 16	山本 茂 萩原 豊子	関 とし江 本多 英子 山本ひとみ	山本 浩	山口 善憲 山本 健一 千川 のぶ子
	園長	副園長	職員	P T A 会長
				副会長

H 20	H 19	H 18
山本	山本	山本
茂本多	茂本多	茂本多
英子	英子	英子
山本ひとみ 山本佳代子 山本かなえ 山口明日香 萩原 愛 山本 奈未 笹崎さゆり 山本さとみ	山本ひとみ 山本佳代子 山本かなえ 山口明日香 萩原 愛 西山 結花 笹崎さゆり 山本さとみ	山本ひとみ 山本佳代子 中山真紀子 山本かなえ 山口明日香 萩原 愛 千川百合香 西山 結花 笹崎さゆり
山本 俊雄	山口 隆志	関 勝雄
山本 幸江 山本 誠	山本 俊雄 油井 佳子	山口 隆志

H 22	H 21
山本	茂木
三男	真一
本多	本多
英子	英子
山本ひとみ 山本佳代子 山本かなえ 山口明日香 萩原 愛 山本 奈未 笹崎さゆり 山本さとみ	山本ひとみ 篠原みどり 山本佳代子 山本かなえ 山口明日香 萩原 愛 山本 奈未 笹崎さゆり 山本さとみ
山田 秀隆	山本 誠
武藤 勝年 黒岩 千明	山田 秀隆

(5) 園児数

							幼稚園児
							保育園児
							合計
H 22	一二	一七	二九	H 21	一二	二五	三七
H 20	一一	二九	四〇	H 19	一六	三二	四八
H 18	一三	二九	四二	H 17	一四	三二	四六
H 16	二四	三七	六一				

(6) 沿革

平成十六年

・日影幼稚園及び入山幼稚園の二園を統合し、幼保一体の「六合こども園」として開園

特区八〇七を受け、幼稚園で保育園児を保育する

特区九一四を受け、保育園で幼稚園児を保育する

特区九一六を受け、保育の権限を教育委員会で管轄する

平成十七年

駐車場に東屋完成

小鳥小屋、うさぎ小屋整備

平成十八年

・くにっこニコニコ給食特区を受け、保育園児の給食も給食センターにて調理する

・園庭整備 P T A 奉仕作業にてトンネル山、一、二歳児砂場完成

・吾妻郡保育研究大会の発表園として発表する

・第十七回群馬大学学校教育臨床総合センターシンポジウムにおいて「

幼保一体について発表

・物置整備

平成十九年

・園庭整備 P T A 奉仕作業にて園庭に畑、ブランコの囲い完成

・第五十四回全国国公立幼稚園教育研究協議会奈良大会にてポスター

セッション部内で発表

・全幼研群馬大会において幼保一体について発表

・第五十四回日本小児保健学会「育児の環境整備保育園と幼稚園の一

元化、認定こども園を考える」において発表

・群馬県保育研究会第三分科会（地域との連携について）にて発表

平成二十年

・園舎テラス前を舗装

平成二十一年

・プールをビニールハウスで囲い整備

・園庭整備 P T A 奉仕作業にて「園庭にニケ所目の畑を作る

・三月二十八日町村合併により「中之条町立六合こども園」となる。

(7) 資料1

第十七回学校教育臨床総合センターシンポジウム

第二回 群馬大学・国立台北教育大学 国際交流シンポジウム

「就学前教育の新世纪」

〔抜粋〕

続きまして、群馬県の実情ということで、六合こども園の園長先生、主任の先生お願いします。

所澤 先に六合こども園の画像を出しましょう。

司会 そうですね。まず、初めに六合こども園の建物等、実際に見ていただいてから、お話しの方をお願いしますと思います。

所澤 先日、六合こども園に伺った時に、六合村教育委員会を訪問したところ、説明用につくっていたパワーポイントのファイルを提供してくださいました。それを全部見ていくことはできないのですが、その中に六合こども園の写真の画像が入っているので、いくつか紹介したいと思います。それから、我々も見に行つた時にいくつか写真を撮つたのでそれも合わせ見ていただきたいと思います。

六合村というのは野反湖というのでしょうか。地域はあの上にあります。重点施策として六合こども園の運営というのが入つていのだそうです。入山幼稚園と日影幼稚園を合併して六合こども園が作られたという事です。地域はそういう地域です。

そこに見えているのが六合こども園舎、玄関など。

「六合っ子ちゃん」というマークがあります。

雪が降つた後だったのですが、園庭がこのようになっていました。

「運営費の比較（パワーポイント画面）とかありますが、この話は後で出てくると思います。一言だけ言うと、六合こども園ができてから一人当たりの運営費が減つたということなのです。

そういう改革の結果、そういうことが起こつたということです。

これは入園式です。こどもが寝ているところです。

これはプールがありました。それから、給食の場面です。

子どもが給食の道具、器具を片付けています。こんなイメージです。

財源内訳ということで、一般財源が青い部分で、それ以外が色々残金などを含む。また、最初の頁に戻るのので、これで、このパワーポイントは終わりです。だいたいこのようなイメージです。

司会 それでは、引き続き、山本先生、本多先生お願いします。

山本茂（六合こども園園長）

六合こども園の山本ですけど、よろしく申し上げます。座つたままで失礼いたします。この中で、六合（ろくごう）と書いて「くに」と読める方はあまりいないのではないかと思いますけど、せつかくの機会ですので、六合村の宣伝も兼ねて案内したいと思えますけれども。

六合村は御存じのように鶴舞う形の群馬県の一番尻尾の方、草津の東隣りと考えていただけると大体位置がわかると思います。

長野原草津駅から車で五分くらい入ると六合村に入れますけど、それから一番奥まで行くには、一時間くらい・・・先ほど出ました野反湖というのには、一時間くらいかかります。

そういう群馬県でも一番辺鄙な過疎の村ですね。

先ほどの紹介では一、九〇〇名いましたけど、もう現在、一、八〇〇名になっています。年々出生する子どもは五名くらいで、亡くなられる方

が一〇名近くいるので、年々人口が減っていくのかなと。それに従って、六合こども園の子どもも減っていくのが目に見えています。

そんなことで、今日お話しする六合こども園ができる経緯については、私の方からお話しして、その後、本多の方から実際の子どもの様子を話しまして、最後にまた今後の課題について、私の方から少しお話しをしていきたいと思えます。

先ほど地図にも出ていましたけど、日影、入山というところに二つの幼稚園がありました。四歳から五歳までの子どもを保育する幼稚園が二か所ありました。

それぞれ二〇名を欠きまして、二クラスあった訳ですけども、先を見ていくと一〇名を欠くのかなという現状でした。やはり、子どもたちがそうやって、少子化の中で減っていく中で二園を統合しなければならぬ、そういう状況になってきました。

皆さんの所に「六合こども園とは」という資料があると思いますが、そういう中で二つの園を一つの園にしなければいけない。

それから、そういう中で、働くお母さん方が増えてきまして「保育園もほしい」という状況が出てきました。

ここにありますように、具体的には平成十三年から「幼児教育を考える集い」などをもちまして、村の中で、色々話し合いをしてきました。その中で、私も委員として出ていたのですが、とにかく幼稚園の教育がいいと、だけど保育園もほしいと、そういうことで話し合いが平行線状態で全くまとまりませんでした。

たまたま、その時期に、国の幼保一元化、先ほどの先生のお話してから、一元化の方になると思うのですが、そういう話しが生まれて、それ

にすぐ行政の方で飛びつきまして特区を受けることになりました。

それがここにありますように平成十五年二月頃でしたかね。もう年度末の大変忙しい時期だったのですけれども、そういう中で行政の方で速やかに対応して、申請をすることができました。

そういう中で、幼稚園、保育園を一体化する施設があれば、何とか今までの平行線状態の保護者のニーズに両方応えられるのではないかといいことで、村の地域の説明会、議会への説明会等を行って了解を得ました。

そして、ここにありますように、六合村で最終的には三つの特区をとりました。

一つは、午前の幼稚園の中で保育園の子どもを保育できるという特区。それから、午後になると、保育園で幼稚園の子が保育を受けることができる特区、それからもう一つが、先ほど言っていました縦の管理の関係で、教育委員会の方で一括して事務の取り扱いをするという三つの特区をとりました。

給食については、たまたま今年、具体的になつてきたことをお話ししますけれども、三・四・五歳児の幼稚園の子（保育園児も含む）は給食センターで、小中学校と同じ給食を作ってもらって食べています。

それから、一・二歳の保育園児だけは、国の方の指導で「保育園で作りなさい」ということで、こども園の調理室で作っております。

これがまた、今年新たに特区をとりまして、この四月からは、保育園の子どもの給食も給食センターで作っていいですよという特区で、すべての園児の給食が給食センターで作ることになりました。

このようにして、六合こども園は運営されている訳ですが、何分にも

全国で初めてのことでしたので、大変心配の中でスタートした訳です。しかし、これが幸いしたのかどうか、六合村は幼稚園しかありませんでしたので、幼稚園の先生がそのままこども園の職員になりました。

ですから、実際はこの資料にはありますけど三・四・五歳児の中には保育園児、幼稚園児が混在している訳です。午前中は全く保育園、幼稚園児の子どもに関係なく、同じカリキュラムで保育すると、午後は、幼稚園児（延長保育の園児）も同じカリキュラムと一緒に保育をするということ、同じ職員が保育をするので、保育園の先生と幼稚園の先生とのいわゆる摩擦というのは、皆無ということではないが、無い訳です。しかし、今までの幼稚園では考えられない大きな負担がありました。

職員は、書類上は幼保に分かれています。仕事は全員が兼務で、両園（幼保）の仕事を行う訳ですから、簡単に言いますと、一人二役ですので負担は計り知れないものがあると思います。

このことについては、この後、本多から詳しく話されると思いますので、私の話はこれまでにしておきます。

司会 では、本多先生お願いします。

本多英子（六合こども園主任）はい。具体的な保育内容について説明をしたいと思います。まずカリキュラムの作成にあたっては、先ほどもお話しがあったように統合前は四・五歳児の二年保育でしたから、全て幼稚園教諭で、開園前の夏季休業中に全職員が保育上の実習を一週間行いました。それを経て四・五歳児二年保育のほかに、〇歳から三歳児までの保育に加わってきた訳ですから、すでに全国で数か所、様々な形で幼保一体化施設のカリキュラムを取り寄せていただき、学ばせていただきました。手探りの状態でまず作り上げました。

そのカリキュラムについては一年ごとに見直しをして、現状に合ったものになっています。

具体的な保育内容は〇歳から二歳児、今扱っているのは一歳五か月の幼児からですが、〇歳児から二歳児については、保育所の保育方針に基づいた内容になっています。

三歳児から五歳児については幼稚園教育要領に沿った午前中の保育内容と長時間保育の配慮を含めた内容になっています。

園行事については、年齢の区別無く一緒に実施しています。

具体的な一日の流れについては、園要領の三ページ目の所に日課表として書いてありますけれども、七時四十五分から園児の受け入れを行って、全園児がそろるのが八時十五分。その後、午前中の保育が行われ、一・二歳児については十時におやつの時間。給食を食べてからは一・二歳児がお昼寝に入りますが、三歳児から五歳児はその間、降園活動を行い、幼稚園児は一時三十分には降園していきます。

保育園児は遊戯室に行って、三歳児から五歳児まで一緒にすけれども、午睡や休息のため昼寝に入ります。眠れない幼児については布団の上で体を休めるようにしていますけれども、ほとんどの幼児が眠りに入る事ができます。約一時間から一時間半の昼寝タイムから目覚めるとおやつを食べて、お迎えの人が来るまで自由に遊んで遅くても六時までは全員が降園していくような流れになっています。

そのため職員は「早出」「平常」「遅番」といった三交代制になっています。幼稚園単独だった時と比べてのメリットですが、二園が一園に統合されたことよって、四・五歳児だった園児が一歳児から三歳児が加わり増えたことで活気が出たり、年齢の幅も生まれたことから、遊びや

活動にも段階を追ってみることができるようになりました。

平成十五年度に両幼稚園が閉園した時には、一二名、一六名といった少人数でしたけれども、開園した平成十六年度には、幼稚園児二四名、保育園児三七名、計六一名でスタートしました。

今年度は、現時点で幼稚園児一三名、保育園児三六名、計四九名です。

来年度は、幼稚園児一三名、保育園児二九名、計四十二名の予定であります。この数と幅が増えたことでもたらず力というのは、想像以上に大きく感じました。幼児にとつても互いに影響を与えることが多かつたと感じています。以前、目が届きすぎた園舎、園庭であつたのに関わらず、今度は、広い園舎、園庭、隣りにある村のグラウンドもほぼ毎日自由に使うことができます。職員も幼児の活動に合わせて動きを配置するくらい分散してしまいます。

身近な自然がもたらす環境も大きいと感じました。

また、幼児が歩いて十分とわからない距離に中学校があり、互いに保育実習や園児の散歩、マラソンの応援など交流が多くあります。

まず、園児数が増えたことにより、活気ある遊び、活動、生活全体での育ち合いがたくさんあるということです。

遊びでも友だち関係でも、幼児の選択の幅が広がったことはとても大きな変化でした。年齢幅が増えたことについても同様なことが言えます。

以前は、四歳児が年下という環境にいましたけれども、一歳児から五歳児まで通してみると四歳児は立派なお兄さん、お姉さんになりました。

また、その下の三歳児、二歳児さえも同様のことが言えます。

これは幼児の精神面での発達に大きく作用しているのではないかと感じています。社会のニーズ、保護者のニーズに応えられるような幼稚園、

保育園対応になっている。また、他町村から現在五名を受け入れています。一時預かりも必要に応じて受け入れることはできます。

その反面、課題（デメリット）としてあげられることを具体的にお話しします。前にお話ししたメリットの中の園舎の園庭、隣りのグラウンドが自由に使える空間、自然があると言いますが、逆に言えば人数の割合から見ると、遊びが分散してしまい、互いの遊びが孤立してしまつて影響し合わないということも感じています。

また、その遊びの状況に応じて職員も当然そこにおりますけれども、連携をとつていかなければなりません。そのため、今年度は園内研修の中でも、チーム保育のあり方を探っていくこと、幼児の遊びや活動、人との関わりの育成につなげていこうと考えて進めてまいりました。

まだ残された課題は大きいと思います。保育園児と幼稚園児の違いがはつきりしているのは、こども園の中では降園時間だけです、この差が子どもたちの精神面でも大きく、決定的な違いを生んでいるように思います。それは、保育園児が早く帰りたいと思う気持ちが大きい時、昼寝に気持ちが向かない時、幼稚園児の姿をうらやましく思う、そういう姿に接する時です。

開園当初も今年度も保育園児が圧倒的に六割、七割と多かつたにもかかわらずこのような状況があります。幼児にとつてみれば園生活に慣れていく段階を追つていくと、先ずその環境を知ることや見ることから先ず受け入れていきます。それから、少しずつ自分のできそうなことから遊びを始めます。遊びの中から友だちと関わっていく、少しずつ自分を出してくる。一緒に行動や給食もとれるようになる。

それぞれの段階で保育士がもちろん援助していく、それは当たり前の

ことですが、それ以上に眠るといふことはその場に身を任せる、身を委ねていかなければならないことなのです。

だから、当然その幼児の思いを受け止め、できる限りの手だてをとり、親との連携をしながら最善の方法を求めていきます。

それでも、どうしてもこのような思いが出てくるのは仕方がないことなのかもしれません。親にしてみれば働いているのだから昼寝をするのは仕方がないと思えることでも、幼児にとってみると何故昼寝しなければいけないのかと感じてしまうのです。

親にはその思いを聞いてもらえるだけでもいいですからと話します。それが保育園に預けて、責任を果たしていく心構えになっていつてほしいと考えているからです。

保育園の充実、社会のニーズ、親のニーズから子育て支援や様々な手当と色々ありますけれども、母親が働くか働かないかあくまでも自分自身の選択なのだという認識がどうかと問いたいところでは。

長時間保育のもたらす友だち関係にも、保育園児として同じ友だちと過ごすその翌日、保育園児も含めた午前中の遊びがあるというところは少なからず支障が見られます。

また就学前の現段階では、本年度の園児たちは二年保育を経過して卒園していくのですけれども、進学先が第一小学校と入山小学校の二校に分かれてしまいます。現在、統合問題については審議を継続していますけれども、今後、三・四・五年と同じ園で生活しても進学先が違ってくる。このことで友だち関係に変化が見られることは間違いありません。

保育士として働く今、今までの幼稚園での幼児教育に対するこだわりはやはりありました。

長時間保育が幼児に与える負担も感じ、同時にミーティングや職員会議、園内研修を行う時間の確保がとてむずかしいということ。

チーム保育を進める上で連携をとることがなかなかできない。そのことに対しての職員間の葛藤もありました。

話し合えば分かることはたくさんあるのにその時間が持てない。

そこで、保育に携わる保育士の職場環境のあり方も充実していく必要があると強く感じています。以上です。

山本 それでは引き続き、今後の課題、今もいくつか出ていましたけれどもお話しをしたいと思います。

最終的には、六合村には一園しかありませんので、六合村の子どもは六合こども園で責任をもって保育していくという。幼児教育センターとしての役割を目指していきたいのですけれども、色々なネットワークはあります。

先ず一番感じるのは、幼稚園、保育園の二つの園の機能をいかにうまくやっていくか。それについての縦のつながりで文部科学省と厚生労働省との両方の付き合い。

それから、PTAとか色々な保育園関係の協議会での公立幼稚園との付き合いとか、色々な縦のつながりが二つの組織に関わっていく。そういうようなところで、これは避けて通れない縦のつながりでの煩雑さがあります。

特区の目的というのが、今、盛んに言われている小さな政府、小さな国、なるべくお金をかけないで保育や幼児教育をしていこうというか、そういう目的がある訳ですね。ですから、私たちとすれば六合村の子どもたちを豊かに育てたい。そういう願いからすると、時間的余裕とか色んな

先ほども出ましたけれども研修する時間はほとんどない訳ですね。全員が顔を合わせて子どものことを話し合う時間は、午後の二時過ぎから三時半くらいまでの子どもが完全に寝入ったお昼寝の時間に行うしかありません。その日によってなかなか寝なかつたり、早く起きたり、ちよつと具合が悪い子がいたりすると全員が顔を合わせられないということになります。

現在は週に一日英語の先生が来てくれたり、臨時の先生が三月までいてくれたりするので少し時間が取りやすいところがありますが、暫定的で不安定な時間しか取れないのが現状です。

そんな訳で、やはり財政的な裏付けがないと良い保育をしたいという願いはあつても実際にはかなわないということになります。

たまたま、六合村は一園ですから、その中で私立、公立の摩擦、幼稚園、保育園の摩擦は無い訳ですけれども、やはり財政的な面では大変なところ、窮屈なところがあります。

それから、やはり先ほどもお話ししましたように縦のつながりでの国、県などの管理機関が、たとえば、就学前の子どもの子育て、教育は国で無償で全て面倒をみるというような「子ども教育省」などができたらと考えています。

そうでないと、小手先の幼保一体や「認定こども園」などでは根本的な解決にはならないのではないかと思います。

資料2

全国津々浦々からの視察を迎えて

全国初の幼保一体の園ということで、幼保一元化を求める園、機関、自治体等あらゆる所からの視察が連日のように訪れることとなった。

三年間に、北は北海道、秋田、福島から、南は熊本、徳島、京都、静岡、そして関東各県等から六十数団体、個人から延べ七三〇人の来園があつた。

来園の目的は、ほとんどが幼保一元化の取り組みについてであつた。こども園としての取り組みと課題等については、前述の群大のシンポジウムで発表した内容であつた。

そして、来園者ともかみ合う面が多いことは、六合こども園の目指した保育の指針は、幼保一体の中で大きく脱線することなく進めることができたのかと思う。



こども園初田植え

三 学校教育

1. 小中学校の沿革

(1) 六合村立六合小学校

沿革の概要

○昭和四十八年度

・県指定学力向上指定地区となり

・暖房に石油ストーブ使用始まりストーブ七台購入

八月十一日 本校舎屋根替え工事始まる。

八月二十八日 移動音楽教室

群馬フィルハーモニー公演

十一月六・七日 かぜの為六学年学級閉鎖を行う。

○昭和四十九年度

六月十六日 西吾妻自転車安全乗り方コンテスト(本校)

十一月十二日 校舎南側石積み工事着工

一月三十一日 都丸十九一先生講演会「六合村の民俗について」

○昭和五十年

五月二十九日 植樹祭(暮坂) 児童代表二名参加作文発表をする。

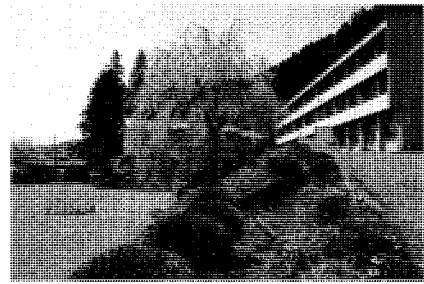
六月十一日 交通教室 指導者長野原警察署小池係長

八月二十六日 群響移動音楽教室

○昭和五十一年度

・五十一・五十二年度県同和教育推進指定校

・創立百周年記念事業実行委員会組織



六合小学校

四月二十七日 耐火書庫校長室に設置

七月二十七日 東京ボーイスカウト約四〇名六合小学校を宿舍として

集団訓練七月三十一日まで

十月十五日 開校百年記念事業実行委員会

十一月二日 同和教育研究協議会開催 本校の同和教育について中間発表と授業公開

十一月十日 天皇陛下在位五十周年記念のため午前中放課

二月十日 初めての父親の授業参観日実施 盛会であった

○昭和五十二年

九月十七日 六合小学校開校百年記念式典・祝賀会

十二月九日 県同和教育指定校研究発表会・授業公開

○昭和五十三年

・屋内運動場新設工事

十月十九日 屋内運動場新設に伴う地鎮祭

○昭和五十四年度

・教室等床面張替工事

四月三日 体育館新築に伴う解体作業始まる

七月二十三〜二十五日 臨海学校(寺泊)

八月八・九日 六年生野反湖畔キャンプ

○昭和五十五年

十一月十一日 県農協小中学生交通安全ポスターコンクール

学校賞受賞 県教育長賞 一年中村宏行

十一月二十八日 村制施行八十周年記念式典全職員・児童参列

○昭和五十六年度

十一月五日 五十五・五十六年度県指定親子二〇分間読書実践発表会

県内一五〇名参加

○昭和五十七年度

・給食室改造工事

○昭和五十八年度

六月三日 植樹祭(野反湖畔) 緑の少年団五・六年生参加

三月三十日 六合村立六合小学校閉校

六合村立第一小学校(校名変更)

○昭和五十九年度

四月一日 六合村立六合小学校と南小学校が統合し、六合村立第一小学校として開校する。

三月二十日 新校舎落成式校章・校歌発表会を行う

○昭和六十年年度

四月 旧校舎より引越し作業

七月 緑の少年団団旗授与式

○昭和六十一年度

四月八日 新校舎での授業始まる。

四月 群馬県体力づくり実践推進校に指定される。

○昭和六十二年年度

十月二十日 体力づくり実践研究発表会を行う。一二〇名参加

十一月二十七日 群馬県よい歯のコンクールで学校表彰を受ける。

十一月三十日 群馬県体育研究連合会から表彰される。

○昭和六十三年年度

十一月 体力づくり実践推進校表彰

○平成元年度

五月二十五日 みどりの少年団優良表彰受賞

十一月三十日 群馬県体育研究連合会から表彰される

○平成二年度

七月 野反湖マラソンに五・六年生参加

十月 県教委指定教育課程(福祉教育)研究発表会開催

○平成三年度

・県教委より統計教育実践推進校の指定を受ける。

○平成四年度

・少年野球アルバトロス郡優勝

九月 関東ユニホック大会優勝

○平成五年度

一月 県優良PTAとして表彰される。

一月 県ユニホック大会で低学年・高学年共に優勝

○平成六年度

・社会福祉協力校の指定を受ける。(三年間)

○平成七年度

十一月 吾妻・利根地区初任者研修会行われる。

二月 県ユニホック大会で低学年優勝

○平成八年度

・群馬県学力向上実践推進地区指定を受ける。

○平成九年度

十一月 ガラン沢ダム碑除幕式(平石歩さん書)

○平成十年度

- 五月十日 全国植樹祭に六年生全員参加
- 七月 県ユニホック大会で低学年優勝

○平成十一年度

- 七月 屋根塗装工事
- 二月 県ユニホック大会で高学年優勝

○平成十二年度

- ・県教委より「地域に根ざしたPTA活動」として指定を受ける。
- 七月 村制百周年記念式典 記念音楽会に全員参加

○平成十三年度

- ・県教委新規事業「学校指導員」制度始まる。
- 四月 「学校・家庭・地域社会の連携推進」の指定を受ける。

八月九日 NHK全国学校コンクール群馬大会において銅賞受賞

十一月二十二日 群馬県健康推進学校小規模校の部入選

一月 アジア留学生交流会

○平成十四年度

- ・「学校指導員」制度がNHK・群馬テレビ・外務省ジャパントピックスで紹介

十月十日 全国学校歯科保健研究大会において優良校表彰

十月 県小学校陸上記録会で山本優二君五〇mH優勝

○平成十五年度

- 八月 全国小学校陸上記録会で篠原明人君八〇mH第一二位
- 十月 六合村立学校統合問題審議会の設置

十二月 学校評価システム試行 保護者・児童による外部評価を実施

し公表(二月)

○平成十六年度

- ・ソプラノコンサート参加
- 十月 第五十三回群馬県へき地教育研究大会(台風接近の為中止)
- 七月 学校評価システム年二回完全実施・公表

○平成十七年度

- ・四月 複式学級(三・四年)開始
- 〃 マイタウンティーチャー配置

・十月

○平成十八年度

- 平成十九年度
- 十月 特別支援学級教室完成 図工教室改修完了

三月三十一日 六合村立第一小学校が閉校

〃 六合村立入山小学校・六合村第一小学校閉校記念誌「あゆみ」が発行される。

六合村立六合小学校(校名変更)

○平成二十年

- ・四月一日 六合村立入山小学校と六合村立第一小学校が統合し、六合村立六合小学校が開校する。

○平成二十一年度

- 三月二十五日 六合村閉村式四・五年参加
- 三月二十八日 中之条町合併式

中之条町立六合小学校（校名変更）

○平成二十二年度

三月 中之条町と六合村が合併し中之条町となり、中之条町立六合小学校となる。

在籍数・卒業生数年別一覧表

年度	在籍数		卒業生数	
	男	女	男	女
昭和四十七	五三	四七	一〇	一七
〃 四十八	五〇	四九	一三	二三
〃 四十九	四五	四六	一三	二三
〃 五十	三六	四二	九	一一
〃 五十一	三一	四七	四	一六
〃 五十二	三〇	四四	五	一〇
〃 五十三	三四	四四	七	一九
〃 五十四	三二	四〇	七	一五
〃 五十五	三一	三四	七	一一
〃 五十六	三三	三八	三	一一
〃 五十七	三八	三四	三	一三
〃 五十八	三七	三一	一	一六

（南小と統合して六合第一小学校となる）

〃 五十九	四三	四七	四	一六
〃 六十	四五	四一	七	一九
〃 六十一	四一	四四	〇	一六
〃 六十二	三七	三九	一三	一六
〃 六十三	三一	四〇	四	一五
平成 元	二九	三五	四	一二
〃 二	三五	三二	六	一三

”	”	教	校	”	”	教	教	養	教	校	”	教	養	”	教	校	”	”	”	教	教	”	”
小林久美子	荒木孝史	中澤尚子	樋口守	長坂勉	山崎徹	唐澤静江	西脇進	大坪智子	熊谷崇久	篠原洋輔	片貝清美	後藤弥生	五十嵐弓子	山本政行	中澤幹夫	田村修一	上田淳一	山口あけみ	天田真弓	山宮茂樹	安原十三四	安原由紀	樋口猛
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成
九・四・一	九・四・一	九・四・一	九・四・一	八・四・一	八・四・一	八・四・一	八・四・一	七・四・一	七・四・一	七・四・一	六・四・一	六・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	四・四・一	四・四・一	四・四・一	四・四・一	四・四・一	三・四・一	三・四・一
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成
十三・三・三十一	十・三・三十一	十・三・三十一	十・三・三十一	十四・三・三十一	十一・三・三十一	十・三・三十一	十二・三・三十一	十・三・三十一	十・三・三十一	九・三・三十一	九・三・三十一	九・三・三十一	七・三・三十一	十一・三・三十一	八・三・三十一	七・三・三十一	五・三・三十一	八・三・三十一	八・三・三十一	八・三・三十一	八・三・三十一	七・三・三十一	五・三・三十一

”	”	”	”	教	教	養	養	校	”	教	教	”	養	”	教	教	講	”	教	校	”	”	”
柳澤弘	黒岩洋一	青木麻美	小林洋一	田中宏尚	篠原智彦	山田亜希	浅香奈緒子	坂井宏治	小山和久	和地紀子	安済博明	高橋詠子	金子聡子	宮崎直子	篠原久仁子	富澤辰男	竹和由美子	関幹彦	山田浩昭	佐藤英子	市村さくら	小林真美子	山本三喜子
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成
十八・四・一	十八・四・一	十七・四・一	十七・四・一	十七・四・一	十七・四・一	十六・四・一	十五・四・一	十五・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十三・四・一	十二・四・一	十二・四・一	十二・四・一	十二・四・一	十一・四・一	十一・四・一	十一・四・一	十一・四・一	十・四・一	十・四・一	十・四・一
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成
十九・三・三十一	二十四・三・三十一	十八・三・三十一	二十・三・三十一	十九・三・三十一	二十・三・三十一	十九・三・三十一	十八・三・三十一	十九・三・三十一	二十・三・三十一	十九・三・三十一	十七・三・三十一	十六・三・三十一	十五・三・三十一	十三・三・三十一	十七・三・三十一	十四・三・三十一	十二・三・三十一	十六・三・三十一	十八・三・三十一	十五・三・三十一	十二・三・三十一	十四・三・三十一	十六・三・三十一

養教	富澤奈保子	平成十八・四・一	平成二十二・三・三十一
校長	中山 邦男	十九・四・一	二十一・三・三十一
教諭	須賀 紀江	十九・四・一	二十三・三・三十一
〃	小熊 祥恵	十九・四・一	二十・三・三十一
〃	高橋 春寿	十九・四・一	
〃	山口 祐子	十九・四・一	

(入山小学校と統合し六合村立六合小学校となる)

教頭	山本 政行	二十・四・一	二十三・三・三十一
教諭	黒岩 晃	二十・四・一	二十三・三・三十一
〃	武井 浩美	二十・四・一	二十一・三・三十一
〃	市村 宏美	二十・四・一	二十三・三・三十一
〃	高橋 秀典	二十・四・一	二十一・三・三十一

(中之条町立六合小学校となる)

校長	高橋 俊昭	二十一・四・一	二十四・三・三十一
教諭	小池 隆也	二十一・四・一	二十二・三・三十一
〃	福田 裕紀	二十一・四・一	二十四・三・三十一
教諭	嶋村 梢	二十一・四・一	二十二・三・三十一

(2)六合村立南小学校

沿革の概要

○昭和四十八年度

全校複式の三学級、教員定数五人なるも

四月十三日 南大橋竣工記念祝賀会

於本校講堂

六月十六日 開校百年記念事業準備会

七月十四日 NHK 民間行事「おかまのふた」録画児童参加

九月二十日 開校百年記念大運動会

十一月 「南小学校百年のあゆみ」

刊行される

十一月十七日 全教室に石油ストーブ設置

三月九日 開校百年記念式典 祝賀会

○昭和四十九年度

七月二十二・二十三日 五・六年生海水浴(新潟県鯨波海岸)

十一月二十六日 学力向上指定地区研究発表会 於本校

○昭和五十年

七月 五・六年生鯨波海岸で海水浴をする。

十一月 貯蓄ポスター優良校として表彰を受ける。

○昭和五十一年度

十月 校舎側面塗装工事

○昭和五十二年

○昭和五十三年



旧六合村立南小学校

・体育館床張り替え

五月六日 一年生との別れの式を行う。二名の一年生は五月八日より

六合小学校に通うこととなる。

○昭和五十四年度

・プレハブ教室（理科室・音楽室）増築

七月 五・六年生臨海学校実施

○昭和五十五年度

・児童用ロッカー各教室に配置す

七月二十三日 第二回学校統合問題審議会開催される。

○昭和五十六年度

○昭和五十七年度

八月一日 暴風雨の為校舎の屋根半分はがれる。校舎内に土砂流入

八月九日 校舎屋根修理終わる。

○昭和五十八年度

十一月 臨時村会議で六合小・南小の学校統合議決

三月三十一日 六合南小学校閉校式を挙行 閉校祝宴会

創立一一〇年 独立後二八年

在籍数・卒業生数年別一覽表

年度	在籍数			卒業生数		
	男	女	計	男	女	計
昭和四十八	二四	三三	五六	三	六	九
〃 四十九	二七	三三	五九	五	六	一一
〃 五十	二八	三三	六〇	九	六	一五
〃 五十一	二〇	三三	五二	三	五	八
〃 五十二	一八	三三	五〇	三	六	九
〃 五十三	一五	二六	四一	二	六	八
〃 五十四	一四	二一	三五	四	三	七
〃 五十五	一二	一九	三一	五	五	一〇
〃 五十六	九	一五	二四	一	四	五
〃 五十七	一三	二四	二七	二	六	八
〃 五十八	一四	一一	二五	〇	〇	〇

(閉校)

教職員

職名	氏名	就任年月日	転退年月日
教諭	篠原ミキエ	昭和三十一年・四・	昭和五十一年・三・三十一
教諭	福田庚午郎	四十五・四・	四十八・三・三十一
〃	市川 旦	四十五・四・	五十二・三・三十一
〃	安原十三四	四十五・四・	四十八・三・三十一
教頭	宮崎 守	四十六・四・	四十八・三・三十一
教諭	堀込 隆	四十六・四・	四十七・三・三十一
校長	一場 秀司	四十七・四・	五十一・三・三十一
教諭	関 邦一	四十七・四・	五十・三・三十一
〃	黒岩篤太郎	四十七・四・	四十八・三・三十一
教頭	土屋 次男	四十八・四・	五十二・三・三十一
教諭	湯本 寿枝	四十八・四・	五十四・三・三十一
〃	劍持 千秋	四十八・四・	五十一・三・三十一
〃	水出 修司	五十・四・	五十三・三・三十一
校長	大塚 寅雄	五十一・四・	五十四・三・三十一
教諭	古塩 實	五十一・四・	五十五・三・三十一
〃	浅沼 俊子	五十一・四・	五十九・三・三十一
教頭	黒岩 勉	五十二・四・	五十四・三・三十一
教諭	岩崎 龍夫	五十三・四・	五十七・三・三十一
〃	高草木玉代	五十三・四・	五十六・三・三十一
校長	小山 誠	五十四・四・	五十七・三・三十一
教頭	岩田 芳明	五十四・四・	五十八・三・三十一
教諭	西山とし江	五十四・四・	五十六・三・三十一

(閉校)

〃	丸橋 祐男	昭和五十五・四・	昭和五十八・三・三十一
〃	牛木しづ子	五十六・四・	五十九・三・三十一
校長	小田島達男	五十七・四・	五十九・三・三十一
教諭	青木久三郎	五十七・四・	五十九・三・三十一
教頭	小菅昭三郎	五十八・四・	五十九・三・三十一
教諭	湯本みち子	五十八・四・	五十九・三・三十一

(3)六合村立入山小学校

沿革の概要

○昭和四十八年度

・四月 県教育委員会から六合村教育委員会が学力向上指定地区の指定を受け、本校では「算数・理科を中心とした主体的な学習態度の育成」について研究を進めることにした。

・七月五日 県教育委員会がへき地

学校視察で、本校及び元山、長平分校を視察。

・七月十七日 本村初のプールが建設されプール開きを行う。

・九月十日

○昭和四十九年度

○昭和五十年年度



旧六合村立入山小学校

- ・十月五日 開校百周年記念行事並びに式典を行う
- 昭和五十一年度
- 昭和五十二年度
- ・親子二〇分間読書運動の指定(三ヶ年)を受ける。
- ・二月二十日 特別教室、鉄筋コンクリート二階建てに改築する。
- 昭和五十三年度
- ・三月二十日 新校舎 鉄筋コンクリート三階建てに新築する。
新校舎完成記念学校祭を開催
- 昭和五十四年度
- 昭和五十五年度
- ・統計教育実践推進校(二ヶ年)の指定を受ける。
- 昭和五十六年度
- 昭和五十七年度
- ・統計教育実践協力校(二ヶ年)の指定を受ける。
- 昭和五十八年度
- 昭和五十九年度
- ・八月 学校安全実践推進校(二ヶ年)の指定を受ける。
- 昭和六十年度
- ・十二月十七日 体育館竣工
- 昭和六十一年度
- ・同和教育推進の地区指定(二ヶ年)を受ける。
- 昭和六十二年度
- ・四月一日 長平分校休校となる。
- 昭和六十三年度
- ・福祉教育研究開発校(三ヶ年)の指定を受ける。
- 平成元年度
- 平成二年度
- ・十月十七日 福祉教育研究開発校発表会開催
- ・二月一日 元山分校坂口秀夫先生退校時に元山地内に於いて大動脈瘤破裂のため死亡
葬儀は家・学校合同葬として草津光泉寺にて行い児童五・六年と全職員参列 後任高橋基先生
- 平成三年度
- 平成四年度
- ・四月一日 元山分校休校となる。
- ・九月より学校週五日制始まる
- ・三月三十一日 長平分校閉校となる
- 平成五年度
- ・吾妻マラソン大会で山口明日香さん優勝する。
- 平成六年度
- ・同和教育実践推進地区の指定を受ける。
- 平成七年度
- ・十月二十六日 同和教育の研究発表会を開催する。
- ・郡陸上記録会で山本千恵子さん八〇〇メートルで優勝する。
- 平成八年度
- ・県学力向上実践推進地区の指定を受ける。
- ・六月 郡陸上記録会で黒岩修一君一〇〇メートルで優勝する。
- 平成九年度

三月三十一日 元山分校閉校となる。解体工事を行う。

○平成十年度

・ふれあい体験実践推進校となる。(二カ年指定)

・三月三十一日 元山分校閉校となる。

○平成十一年度

○平成十二年度

・社会福祉協力校となる(三ヶ年指定)

○平成十三年度

・九月 群馬交響楽団 移動音楽教室

○平成十四年度

○平成十五年度

○平成十六年度

○平成十七年度

・食農教育モデル校(三ヶ年)となる。

○平成十八年度

二月十三日 臨時議会で小学校統合が議決される。

○平成十九年度

・平成二十年三月二十六日 六合村主催入山小学校閉校記念式典

・平成二十年三月三十一日六合村立入山小学校 閉校

” 六合村立入山小学校・六合村立第一小学校記念誌「あゆみ」が発行される。

在籍数・卒業生数年別一覧表

年度	在校生			卒業生		
	男	女	計	男	女	計
昭和四十八 四十九	五二 六一	四六 四八	九八 一〇九	一〇 一四	九 四	一九 一八
” 五十	(長平) 五六 男三	四九 女五	一〇五 元山	一〇 男四	一三 女二	二三
” 五十一	(長平) 四九 男二	四九 女六	九八 元山	八 男二	八 女二	一六
” 五十二	四七 女四	五一 元山	九八 男二	一〇 女二	七	一七
” 五十三	(長平) 四七 男一	四七 女四	九四 元山	六 男一	八 女二	一四
” 五十四	(長平) 四七 男二	四六 女二	九三 元山	一二 男一	九 女二	二一
” 五十五	三八 男二	四八 女二	八六 元山	八 男一	五 女二	一三
” 五十六	(長平) 三九 男二	四九 女二	八八 元山	五 男一	二 女二	一七
” 五十七	(長平) 四三 男一	四六 女一	八九 元山	六 女二	一〇	一六
” 五十八	(長平) 四三 男二	四〇 元山	八三 女三	一〇 女二	四	一四

”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成	”	”	”	”	昭
十	九	八	七	六	五	四	三	二	元	六十三	六十二	六十一	六十	和五十九
二三	二二	一六	一八	一九	二〇	(元山分校)	(元山)	(元山)	(元山)	三三	三六	(長平)	三六	三六
二六	二二	二二	二七	二七	二六	休校)	(二)	(二)	(二)	二七	三〇	男一	三四	三九
四九	四二	三七	四五	四六	四六		五九	六三	五八	六〇	六六	女一	七〇	七五
四	四	二	四	四	七		七	六	三	七	八	元山	五	六
四	一	四	七	四	五		五	二	四	四	七	女四)	一〇	七
八	五	六	一	八	二		二	八	七	一	一五		一五	一三

(閉校)

”	”	”	”	”	”	”	”	平成
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一
二〇	三二	三二	三三	三八	三六	三〇	二六	二六
二〇	二七	三三	三四	三〇	二七	二九	二八	二五
四〇	五八	六四	六七	六八	六三	五九	五四	五一
八	八	四	五	六	四	二	五	四
二	六	九	七	六	三	三	六	四
一〇	一四	一三	一三	一三	七	五	二	八

教職員

職名	氏名	就任年月日	転退年月日
教諭	安原 正和	昭和四十五・四・一	昭和五十三・七・二
〃	山本 茂	〃 四十六・四・一	〃 五十二・三・三十一
〃	関 栄	〃 四十六・十・一	〃 五十四・三・三十一
〃	坂口 秀夫	〃 四十七・四・一	〃 五十七・三・三十一
〃	高橋 基	〃 四十七・四・一	〃 六十一・三・三十一
〃	小池 邦利	〃 四十九・四・一	〃 五十二・三・三十一
〃	中山 邦夫	〃 四十九・四・一	〃 五十二・三・三十一
教頭	山口 令一	〃 四十九・四・一	〃 五十三・三・三十一
教諭	高橋 勤	〃 四十九・四・一	〃 五十三・三・三十一
校長	田中 栄	〃 五十・四・一	〃 五十四・三・三十一
教諭	坂井 宏治	〃 五十・四・一	〃 五十三・三・三十一
〃	星野 治子	〃 五十・四・一	〃 五十三・三・三十一
〃	湯本 愛子	〃 五十・九・一	〃 五十二・三・三十一
〃	田村 悦司	〃 五十・四・一	〃 五十三・三・三十一
〃	金子 斐巳	〃 五十二・四・一	〃 五十四・三・三十一
〃	劔持 直樹	〃 五十二・四・一	〃 五十五・三・三十一
〃	岩上 美芳	〃 五十二・四・一	〃 五十四・三・三十一
〃	原澤由美子	〃 五十二・四・一	〃 五十五・三・三十一
教頭	劔持 久雄	〃 五十三・四・一	〃 五十六・三・三十一
教諭	土屋 品子	〃 五十三・四・一	〃 五十五・三・三十一
〃	石坂 好夫	〃 五十三・四・一	〃 五十八・三・三十一
養護教諭	荒川 恵子	〃 五十三・四・一	〃 六十三・三・三十一

職名	氏名	就任年月日	転退年月日
校長	青木 勝	昭和五十四・四・一	昭和五十八・三・三十一
教諭	黒岩 由市	〃 五十四・四・一	〃 五十六・三・三十一
教諭	宮崎 光男	〃 五十四・四・一	〃 五十七・三・三十一
教頭	下谷由紀江	〃 五十四・四・一	〃 五十六・三・三十一
教諭	宮崎 謙一	〃 五十五・四・一	〃 五十六・三・三十一
〃	小海 義明	〃 五十五・四・一	〃 五十八・三・三十一
〃	六本木孝枝	〃 五十五・四・一	〃 五十八・三・三十一
〃	平形 祥介	〃 五十六・四・一	〃 五十九・三・三十一
〃	中沢 則子	〃 五十六・四・一	〃 六十・三・三十一
〃	小野塚則幸	〃 五十六・四・一	〃 五十七・三・三十一
代替	下谷 幸康	〃 五十六・九・一	〃 五十七・三・三十一
教諭	広瀬 栄光	〃 五十七・四・一	〃 六十・三・三十一
講師	小柏 哲也	〃 五十七・四・一	〃 五十八・三・三十一
産休補助	品川三重子	〃 五十八・三・二十二	〃 五十九・三・三十一
校長	山田 辰治	〃 五十八・四・一	〃 六十一・三・三十一
教諭	坂口 秀夫	〃 五十八・四・一	平成 四・二・一
〃	牛久保穂吉	〃 五十八・四・一	昭和六十一・三・三十一
〃	堀込 紀夫	〃 五十八・四・一	〃 五十九・三・三十一
〃	小池 勝彦	〃 五十八・四・一	〃 六十一・三・三十一
〃	山田 輝美	〃 五十八・四・一	〃 六十二・三・三十一
〃	塚田久美子	〃 五十八・四・一	〃 六十一・三・三十一
〃	高橋 篤	〃 五十九・四・一	〃 六十二・三・三十一
〃	堀込 要	〃 五十九・四・一	〃 六十三・三・三十一
〃	市川 旦	〃 六十・四・一	平成 五・三・三十一

教頭	教諭	養護教諭	教諭	校長	〃	〃	教諭	教頭	産休補助	養護教諭	講師	教諭	校長	〃	教諭	教頭	〃	教諭	校長	講師	〃	産休補助	教諭
水野 守雄	高橋 基	浅田 陽子	木村 正臣	桑原 賢一	中澤久美子	湯本 真理	山崎 克彦	安原十三四	高橋 基	遠谷 幸子	田中 真浩	小林 知子	福田庚午郎	小池 敏子	湯田 晶子	市村 勝美	佐々木邦彦	樋口 芳一	市川 春男	高橋 克美	土屋 品子	浅見 豊子	小林 成子
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成 元 四	〃 六十三 十一 二十八	〃 六十三 四	〃 六十三 四	〃 六十三 四	〃 六十三 四	〃 六十二 四	〃 六十二 四	〃 六十二 四	〃 六十一 四	〃 六十一 四	〃 六十一 四	〃 六十 八 二十四	〃 六十 七 二	〃 六十 四 五	昭和六十 四 一
八 三 三十一	四 三 三十一	七 三 三十一	十一 三 三十一	六 三 三十一	四 三 三十一	四 三 三十一	四 三 三十一	四 三 三十一	元 一 三十	三 三 三十一	六 三 三十一	三 三 三十一	三 三 三十一	二 三 三十一	六 三 三十一	平成 元 三 三十一	昭和六十 二 三 三十一	平成 元 四 三十一	〃 六十 三 三十一	〃 六十 九 十四	〃 六十 八 一十三	〃 六十 一 三 三十一	昭和六十 三 三 三十一

〃	〃	教諭	教諭	校長	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教諭	教頭	校長	講師	養護教諭	〃	〃	教諭	校長	村費補助	教諭	村費補助	教諭	
千川 和規	安原 由紀	黒崎 文子	奥木 芳明	今井 孝史	木暮みさ子	宮原真祐子	荒木 孝史	唐澤 昭子	水出あゆみ	佐藤 全	篠原久仁子	中山 邦男	安原十三四	小林 克典	中澤 恵美	佐藤三枝子	浅沼 俊子	高橋 春寿	桑原 正行	中沢佳代子	関本 和秀	安西 紀明	西山菜穂美	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成 四 四 一
十一 四 一	十一 四 一	十一 四 一	十一 四 一	十 四 一	十一 一 八	十 四 一	十 四 一	九 四 一	八 四 一	八 四 一	八 四 一	八 四 一	八 四 一	七 四 一	七 四 一	七 四 一	六 四 一	六 四 一	六 四 一	六 四 一	五 四 一	五 四 一	四 四 一	四 四 一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成 八 三 三十一
十四 三 三十一	十三 三 三十一	十四 三 三十一	十九 三 三十一	十四 三 三十一	十一 三 三十一	十四 三 三十一	十八 三 三十一	十一 三 三十一	九 三 三十一	十一 三 三十一	十二 三 三十一	十三 三 三十一	十一 三 三十一	八 三 三十一	十一 三 三十一	十一 三 三十一	十二 三 三十一	十 三 三十一	八 三 三十一	七 三 三十一	八 三 三十一	八 三 三十一	八 三 三十一	八 三 三十一

(閉校)	養護	教諭	校長	教頭	〃	〃	〃	〃	教諭	校長	〃	〃	教諭	教頭	病休補助	〃	
	山上 恵美	高橋 秀典	市村 宏美	西脇 進	茂木 俊子	戸部 真一	遠藤 弘美	林 和弘	山口 瑞恵	須賀 紀江	福原 敏秀	山口 和克	高橋 清一	武井 浩美	熊川 貞司	唐澤 昭子	山口 恵子
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成 十一・四・一
	十七・四・一	十七・四・一	十七・四・一	十七・四・一	十六・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十一・八・三十一	
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成 十七・三・三十一
	二十・三・三十一	二十・三・三十一	二十・三・三十一	二十・三・三十一	十八・三・三十一	十九・三・三十一	十七・三・三十一	十八・三・三十一	十九・三・三十一	十九・三・三十一	十七・三・三十一	十四・三・三十一	十六・三・三十一	二十・三・三十一	十六・三・三十一	十二・三・三十一	

(4) 六合村立入山中学校

沿革の概要

○昭和四十八年度

・西吾妻交通安全総ぐるみ大会に於いて交通功労者として表彰される

○昭和四十九年度

・本年より郡中学駅伝大会に参加する。

○昭和五十年年度

・六月三日 二・三年生合併修学旅行実施。

○昭和五十二年年度

・宿日直廃止 学校無人化となる
・職員室拡張工事

八月七・八日 全校野反湖キャンプ実施

○昭和五十三年年度

・危険校舎改築工事

・十月二十三日 第一回郷土学習発表会を開催、住民六〇名入山小学校
六年生一五名参加

○昭和五十四年度

・県指定体力づくり実践推進校となる。

三月四日 第一回校内漢字大会実施



六合村立入山中学校

○昭和五十六年度

・家庭科教室改造

一月二十八日 群馬県小中学校PTA大会で表彰される。

二月十八日 体力づくり実践推進校として県教育長より感謝状

○昭和五十七年度

・群馬県学校体育研究発表会で体力づくりの実践発表

○昭和五十八年度

・体育館新築工事 起工式

七月二十五日 榛名高原学校全校生徒参加

七月二十五～二十七日 榛名高原学校全校生徒参加

○昭和五十九年度

三月三十一日 入山中学校校庭完成

○昭和六十年

八月八日～十日 臨海学校全校生徒参加

○昭和六十一年度

○昭和六十二年

○昭和六十三年

○平成元年度

○平成二年度

○平成三年度

一月九日 六合中入山中合同百人一首大会

○平成四年度

四月八日 通学バス開始

四月三十日 六合中・入山中校史編纂委員会設置

七月二十四日 六合中入山中一年交流キャンプ

・平成五年三月二日 続ふるさとの昔と今発行

〃 三月二十九日 六合中学校への移転作業

・ 〃 三月三十一日 六合村立入山中学校閉校

・ 〃 三月三十一日 六合中・入山中閉校 新六合中学校開校記念誌「六

合中入山中のあゆみ」発行

在校生・卒業生数年別一覽表

年度	在籍数			卒業生数		
	男	女	計	男	女	計
昭和四十八	三五	四〇	七五	一二	一一	二三
” 四十九	三三	三九	七二	八	一五	二三
” 五十	三八	二八	六六	一四	一四	二八
” 五十一	三五	二八	六三	一〇	一四	二四
” 五十二	三三	二七	六〇	一四	一〇	二四
” 五十三	二八	三〇	五八	一	一四	一五
” 五十四	二二	二四	四七	八	九	一七
” 五十五	二七	二四	五一	九	七	一六
” 五十六	二五	二二	四七	六	八	一四
” 五十七	二四	二五	四九	二	九	一一
” 五十八	八	二六	四四	七	五	一二
” 五十九	二一	二五	四六	五	一	一六
” 六十	二二	二二	四三	六	〇	一六
” 六十一	二〇	二二	四二	〇	四	一四
” 六十二	一八	二四	四二	六	七	一三
” 六十三	二〇	二四	四四	四	一	一五
平成元	二三	一八	四一	八	六	一四
” 二	一七	一六	三三	八	七	一五
” 三	一六	一一	二七	七	五	一二
” 四	一六	一一	二七	七	四	一一

(閉校)

教職員

職名	氏名	就任年月日	転退任年月日
教頭	小林 資治	昭和四十四・四・一	昭和四十九・三・三十一
校長	宮崎 康	” 四十七・四・一	五十・三・三十一
教諭	霞 芳伸	” 四十六・四・一	四十八・三・三十一
教諭	齋藤民一郎	” 四十七・四・一	四十九・三・三十一
”	原田 和子	” 四十七・四・一	四十九・三・三十一
”	野村みさ子	” 四十七・四・一	四十八・三・三十一
”	林 節子	” 四十八・四・一	五十・三・三十一
”	前田 勝弘	” 四十八・四・一	五十・三・三十一
”	黒岩 貴	” 四十九・四・一	四十九・三・三十一
”	福島 有子	” 四十九・四・一	五十九・三・三十一
”	富沢 恒雄	” 四十九・四・一	五十三・三・三十一
”	福田 健二	” 四十九・四・一	五十一・三・三十一
教頭	黒岩 勇	” 五十・四・一	五十六・三・三十一
教諭	河野 廣徳	” 五十・四・一	五十四・三・三十一
”	足立 恒雄	” 五十・四・一	五十三・三・三十一
校長	塩野 松衛	” 五十一・四・一	五十四・三・三十一
教諭	関 暢	” 五十一・四・一	五十四・三・三十一
”	河原田礼子	” 五十一・四・一	五十三・三・三十一
”	梶島 正明	” 五十一・四・一	五十三・三・三十一
”	有坂 俊人	” 五十二・四・一	五十四・三・三十一
”	大淵 廣司	” 五十四・四・一	五十九・三・三十一
”	篠原 茂	” 五十四・四・一	五十六・三・三十一

”	”	”	”	”	教諭	校長	教頭	”	”	”	教諭	校長	”	”	”	”	”	”	”	教諭	校長	”	
山本ちよ子	宮崎 一子	小林 一夫	山野 悟	山田 忠男	依田たつ子	土屋 次男	福島 幸夫	田村久美子	割田 久彦	後藤 金弥	宮崎千代子	黒岩 貴	山本 美幸	中沢 和則	宮原 泰三	田村ふじ子	福田 武	松本 幸男	小林 一三	市村 勝美	茂木 隆	星河 福司	戸塚 博子
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	昭和五十四・四
六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十一・四	六十一・四	六十一・四	六十一・四	六十・四	五十九・四	五十九・四	五十九・四	五十八・四	五十八・四	五十七・四	五十七・四	五十七・四	五十六・四	五十六・四	五十六・四	五十五・四	五十五・四	五十五・四	五十五・四	五十五・四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭和六十二・三・三十一	”	”	平成 元	昭和六十三・三・三十一	平成 三	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	昭和五十七・三・三十一
三・三十一	三・三十一	三・三十一	三・三十一	三・三十一	三・三十一	六十二・三・三十一	六十三・三・三十一	六十一・三・三十一	六十一・三・三十一	六十・三・三十一	五十八・三・三十一	六十・三・三十一	六十一・三・三十一	六十・三・三十一	六十一・三・三十一	六十二・三・三十一	五十八・三・三十一	五十八・三・三十一	五十八・三・三十一	五十五・三・三十一	五十八・三・三十一	五十七・三・三十一	五十七・三・三十一

(閉校)

”	”	”	教諭	教頭	校長	”	”	教諭	校長	教諭	教頭	”	教諭	校長	”	”	”	”	”	”	”	”	”
佐久間晴美	宮崎由香理	増田 和明	市村 一美	木暮 力	宮原 泰三	安齊 紀明	塩野 英介	富澤 祐司	高橋 篤	佐藤 健二	篠原 功	須賀 道郎	小林 英次	市川 春男	星野 俊夫	”	”	”	”	”	”	”	”
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 元	”	”	”	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四	昭和六十二・四
四・四	四・四	四・四	四・四	四・四	四・四	三・四	三・四	二・四	二・四	元・四	元・四	六十三・四	六十三・四	六十三・四	六十三・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	平成 元	平成 二	平成 二	平成 二	平成 二	平成 二	平成 二	平成 二	平成 二
四・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	三・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	三・三・三十一	三・三・三十一	三・三・三十一	二・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	元・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一	二・三・三十一

(5)六合村立六合中学校

沿革の概要

○昭和四十八年度

四月 学力向上指定地区の指定を受け

二ヶ年の研究を始める

十一月二十二日～二十三日 インフルエ

ンザのため学校閉鎖

○昭和四十九年度

・放送施設設置

六月十六日 県中学校陸上記録会において留場 勇一、五〇〇メートル

一年生の部で優勝

十一月二十六日 学力向上指定地区発表会

○昭和五十年年度

八月二十六日 群馬交響楽団による音楽教室実施

○昭和五十一年年度

・五十一・五十二年年度 健康安全教育県指定校となる。

・教室廊下塗装

十一月六日 生徒会文化祭 弁論大会、ギター部・演劇部発表、学年

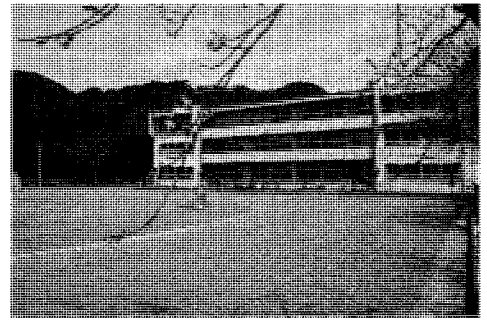
コーラス

○昭和五十二年年度

七月十四日 郡中体連庭球準優勝 卓球三位

十月二十五日 健康安全教育指定校発表会を行う。

十一月二日 生徒会球技大会



六合中学校

○昭和五十三年度

十一月九日 六合小中合同交通教室

・二月 放送室新築 理科室改築

○昭和五十四年度

・四月 群馬県同和教育実践推進校の指定を受け二カ年にわたる研究を

始める。

八月二十一日 三年生NHK合唱コンクール県大会初出場

○昭和五十五年度

十一月二十八日 六合村政八十周年記念式典

○昭和五十六年度

七月九日 全校草刈作業

十月五日 米飯給食開始

○昭和五十七年度

六月九日 六合中学校移転に伴う文部省現地視察

八月九日 新校舎建築地鎮祭

三月二十七日 新校舎移転作業PTA並びに全生徒奉仕

三月三十日 校舎新築落成式を行う。

○昭和五十八年度

・社会福祉教育協力校となる。

四月三十日 校庭整地始まる。

八月十日 少年の主張郡大会中沢やす子最優秀賞

八月十六日 台風五号の被害大、吹きつけた土手流される、六合村への

の道交通止め。

十月二十九日 愛のあかぎ国体を全生徒見学、各県の団長に千羽鶴の

レイを贈る。

○昭和五十九年度

八月二十六日 第四回野反湖マラソン大会全員参加、加辺あゆみ三位
入賞。

十二月二十四日 群馬県教育長より「ヤドリギの研究」田村佳子 篠

原紀子 橋爪一男優秀賞受賞

二月四日 一・二年生スキー教室 草津スキー場

○昭和六十年

二月四日 スケート教室（一・二年生）照月湖にて実施。

○昭和六十一年度

・地域活動推進モデル地区の指定・同和教育地域指定を受ける

八月二十五日 世代間交流学習会始まる。

二月四日 群馬県花いっぱい運動コンクールにおいて優秀校表彰

○昭和六十二年

○昭和六十三年

・九月一日 六合村立学校統合問題審議会設置

○平成元年度

○平成二年度

○平成三年度

○平成四年度

四月八日 スクールバス運行開始

九月十二日 学校週五日制実施

九月十四日 優良道路愛護団体表彰受賞

三月二十七日 六合中学校閉校式

三月 校歌・校章を公募により決定 制服・運動着等制定

三月二十九日 移転作業

○平成五年度

四月 新六合中学校開校

八月 第一回地域ふれあい学習を実施する。

三月十一日 第一回六合中学校卒業式

・六合中学校と入山中学校が統合して統合六合中学校発足

○平成六年度

六月九日 地域ふれあい学習コマクサ植え

十月十二日 全校登山（芳ヶ平）

○平成七年度

十月十二日 全校登山 湯の丸高原（東麓ノ登山）

○平成八年度

十月十六日 全校登山 野反高沢山エビ山

○平成九年度

十月十四日 全校登山

・プレハブ物置（教材・教具入れ）設置

○平成十年度

○平成十一年度

○平成十二年

・パソコン教室工事（パソコン設置）

・群馬県青少年赤十字実践推進校（県指定十四年度まで）

○平成十三年

○平成十四年度

一月 美術教室等竣工

○平成十五年度

○平成十六年度

・福祉協力校（群馬県社会福祉協議会指定）十九年三月迄

三月 第二回二十一世紀ぐんま教育賞あすなろ賞優秀賞受賞

○平成十七年度

○平成十八年度

一月 第四回群馬県人権教育奨励賞受賞

○平成十九年度

・人権教育研究指定校（文部科学省指定）二十一年三月まで

○平成二十年度

十一月 県教委主催「特色ある教育活動」で「野反湖シラネアオイ植

え」が表彰される。

○平成二十一年度

三月 町村合併により中之条町立六合中学校となる。

在籍数・卒業生数年別一覽表

年度	在籍数		計	卒業生数		計
	男	女		男	女	
昭和四十八	五七	六一	一一八	一八	三六	四四
〃 四十九	五六	五〇	一〇八	一八	二一	三九
〃 五十	五六	四六	一〇二	二一	一五	三六
〃 五十一	五三	三九	九二	一七	一六	三三
〃 五十二	四三	四〇	八三	一八	一五	三三
〃 五十三	三三	三七	六九	一八	八	二六
〃 五十四	二三	四七	七〇	七	一七	二四
〃 五十五	二七	四一	六八	七	一二	一九
〃 五十六	三一	三八	六九	九	一八	二七
〃 五十七	二六	三三	五八	一一	一一	二二
〃 五十八	二〇	三七	五七	一一	九	二〇
〃 五十九	二一	三三	五四	四	一二	一六
〃 六十	二一	三二	五三	五	一五	二〇
〃 六十一	二四	一九	四三	二	五	一七
〃 六十二	二一	二三	四四	三	一二	一五
〃 六十三	三一	一四	四五	八	二	一〇
平成 元	二八	一三	五一	〇	九	一九
〃 二	二三	二一	四三	一三	三	一六
〃 三	一五	二四	三九	五	一一	一六
〃 四	一二	一八	三〇	四	七	一一

（入山中と統合）

” ” ”	” ” ” ” ” ” ” ” ” ” ” ” ” ” ” ”	平成
二十四 二十三 二十二	二十一 二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五	三五 三八 三五 二九 六四
一六 一七 二七	三七 三四 三三 三三 三五 三四 二八 三六 三五 三五 二五 二二 二八 三五 三六 三八 三五	二九 二九 六四
二五 二五 二一	二〇 二八 三五 三五 二八 三四 三〇 三五 三四 三一 三二 二七 三五 三〇 三一 二九	六四 六四 六四
四一 四二 四八	五七 六三 六八 六八 六三 六八 五八 七一 六九 六六 五七 五九 六三 六六 六七 六七 六四	一三 一三 一三 九 二 七 一 六 九 八 八 四 五 五 四 九 一三
二 〇 一五	一三 七 一三 一三 九 二 七 一 六 九 八 八 四 五 五 四 九 一三	一〇 一〇 八
一二 六 三	一二 四 九 一 八 一五 七 二 四 五 二 〇 一 八 一 〇 八	二一 二一 二一 二四 一七 二七 一四 二八 二二 一三 二〇 二四 一六 二二 二五 一九 二一
一四 一六 一八	二四 二一 二二 二四 一七 二七 一四 二八 二二 一三 二〇 二四 一六 二二 二五 一九 二一	

(校名変更中之条町立六合中学校となる)

職名	氏名	就任年月日	転退任年月日
教諭	都所 功	昭和四十一年四月	昭和四十八年三月三十一
教頭	竹内 節	四十五年四月	五十二年三月三十一
教諭	加藤 昭二	四十六年四月	四十八年三月三十一
”	河野 和男	四十六年四月	四十八年三月三十一
”	依田 たつ子	四十六年四月	五十三年三月三十一
”	山田 晶子	四十六年四月	四十八年三月三十一
校長	後藤 永司	四十七年四月	四十八年三月三十一
養護	須田 さき江	四十八年四月	四十九年三月三十一
”	中村 久美子	四十八年四月	四十九年三月三十一
”	谷川 猛	四十八年四月	五十一年三月三十一
校長	黒岩 九蔵	四十九年四月	五十二年三月三十一
教諭	水野 仲徳	四十九年四月	五十一年三月三十一
”	戸谷 啓一朗	四十九年四月	五十一年三月三十一
”	茂木 信也	四十九年四月	五十一年三月三十一
”	小池 佳夫	四十九年四月	五十二年三月三十一
”	荒川 恵子	五十一年四月	五十二年三月三十一
”	森田 政子	四十九年四月	三十九年三月三十一
教諭	富沢 光男	五十一年四月	五十六年三月三十一
”	斉藤 裕美	五十一年四月	五十四年三月三十一
”	佐藤 弘	五十二年四月	五十四年三月三十一
”	割田 榮一郎	五十二年四月	五十四年三月三十一

教職員

”	”	”	”	”	教諭	教頭	”	”	”	”	”	”	教諭	校長	”	”	”	”	”	教諭	教頭	校長	”
大沢 精一	狩野 みゆき	丸橋 祐子	湯本 みち子	斎藤 靖明	丸山 博司	宮崎 謙一	伊能 隆則	西山 茂	牛木 しづ子	岩崎 道子	福原 洋	山口 米三郎	小林 勉	篠原 茂	櫻井 裕美	富沢 敏弘	高橋 詠子	高橋 治男	篠原 晴美	小山 佐登志	劍持 和夫	安齋 豊	黒崎 和夫
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
五十九・四	五十八・四	五十八・四	五十八・四	五十八・四	五十八・四	五十八・四	五十七・四	五十六・四	五十六・四	五十六・四	五十六・四	五十六・四	五十五・四	五十六・四	五十五・四	五十五・四	五十四・四	五十四・四	五十三・四	五十三・四	五十三・四	五十三・四	五十二・四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
六十一・三・三十一	五十八・三・三十一	五十八・三・三十一	六十・三・三十一	六十二・三・三十一	六十二・三・三十一	六十一・三・三十一	五十九・三・三十一	五十八・三・三十一	五十七・三・三十一	五十七・三・三十一	五十九・三・三十一	五十九・三・三十一	五十八・三・三十一	六十・三・三十一	五十八・三・三十一	五十七・三・三十一	六十・三・三十一	五十六・三・三十一	五十五・三・三十一	五十六・三・三十一	五十八・三・三十一	五十六・三・三十一	五十八・三・三十一

校長	”	教諭	校長	教諭	教頭	”	”	”	”	”	”	”	”	”	教諭	教頭	”	教諭	校長	”	”	”	”
山口 米三郎	長坂 勉	阿部 克博	市川 春男	後藤 雅子	小林 勉	塩野 通子	伊能 次男	丸橋 礼子	上田 淳一	下谷 幸康	宮崎 晃一	湯本 武	朝比奈 節子	轟 紀久	宮崎 裕輔	戸谷 啓一朗	山本 ちよ子	金子 くみ子	黒岩 勇	中村 英子	清水 美佐	高橋 俊昭	中沢 章文
”	”	”	”	”	平成	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
三・四	二・四	元・四	二・四	元・四	元・四	六十三・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十二・四	六十一・四	六十一・四	六十一・四	六十一・四	六十一・四	六十・四	六十・四	六十・四	六十・四	五十九・四	五十九・四	五十九・四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
”	”	”	”	”	”	平成	”	昭和六十三	”	”	”	平成	”	昭和六十三	”	平成	昭和六十	”	平成	”	”	”	昭和六十二
四・三・三十一	四・三・三十一	九・三・三十一	二・三・三十一(退)	四・三・三十一	三・三十一	四・三・三十一	六十二・三・三十一	六十三・三・三十一	三・三十一	二・三・三十一	四・三・三十一	二・三・三十一	六十三・三・三十一	六十三・三・三十一	元・三・三十一	元・三・三十一	六十・三・三十一	元・三・三十一	二・三・三十一	五十九・三・三十一	六十・三・三十一	六十一・三・三十一	六十二・三・三十一

校長	教諭	養護	校長	養護	齋藤	宮崎	高橋	冨澤	小林	市村	塩野	宮原	
横沢 彰	飯塚 寿夫	新井 正	森田ふじみ	河野 和男	宮崎由香理	齋藤 章	宮崎 和子	高橋 礼子	冨澤 祐司	小林 英次	市村 一美	塩野 英介	宮原 泰三
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成
八・四・一	七・四・一	七・四・一	六・四・一	六・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一	五・四・一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成
十一・三・三十一	十一・三・三十一	十二・三・三十一	九・三・三十一	八・三・三十一	八・三・三十一	八・三・三十一	八・三・三十一	七・三・三十一	十二・三・三十一	六・三・三十一	十・三・三十一	十二・三・三十一	六・三・三十一

(六合中学校入山中学校閉校 新六合中学校開校)

教諭	養護	教諭	校長	養護	齋藤	宮崎	高橋	本間	高橋	齋藤	高橋	宮下	樋口	土屋	黒岩
高橋 礼子	齋藤 章	高橋 直樹	宮下あゆみ	樋口 猛	土屋 学	黒岩 文夫	本間 章	高橋 礼子	齋藤 章	高橋 直樹	宮下あゆみ	樋口 猛	土屋 学	黒岩 文夫	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成
四・四・一	四・四・一	四・四・一	三・四・一	三・三・三十一	三・四・一	三・三・三十一	四・四・一	四・四・一	四・四・一	三・四・一	三・三・三十一	三・三・三十一	三・四・一	三・四・一	平成
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成
五・三・三十一	七・三・三十一	八・三・三十一	四・三・三十一	五・三・三十一	四・三・三十一	四・三・三十一	五・三・三十一	七・三・三十一	八・三・三十一	四・三・三十一	五・三・三十一	四・三・三十一	三・三・三十一	七・三・三十一	平成

校長	教諭	養護	校長	養護	教諭	教頭	春田	小淵	岸	大前	矢嶋	高草	篠原	黒岩	木檜	青木	寺崎	宮崎	篠原	小林	竹淵	春田	阿部	
伊能 隆則	小海 義明	林 裕香	山崎 克彦	林 晶子	水出 宣広	加藤 利明	春田 美穂	小淵 邦夫	岸 顕司	大前 弥生	矢嶋 将之	高草 木元浩	篠原 勝雄	黒岩 俊明	木檜 康則	青木 博美	寺崎 暢恵	宮崎 信	篠原 久美子	小林 一夫	竹淵 和美	春田 晋	阿部 克博	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成
十六・四・一	十五・四・一	十五・四・一	十五・四・一	十五・四・一	十五・四・一	十五・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十四・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十三・四・一	十二・四・一	十二・四・一	十二・四・一	十一・四・一	九・四・一	九・四・一	八・四・一	八・四・一	八・四・一	八・四・一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成
十八・三・三十一	十七・三・三十一	十六・三・三十一	十五・三・三十一	十六・三・三十一	十九・三・三十一	十六・三・三十一	十五・三・三十一	十六・三・三十一	十五・三・三十一	十五・三・三十一	十五・三・三十一	十五・三・三十一	十五・三・三十一	十六・三・三十一	十四・三・三十一	十五・三・三十一	十三・三・三十一	十三・三・三十一	十三・三・三十一	十三・三・三十一	十五・三・三十一	十三・三・三十一	九・三・三十一	平成

このため六合村教育委員会は次の計画により中学校の統合を推進することが望ましいと考えています。

六合村立中学校統合計画

一、統合の時期 平成五年四月

P T A・一般村民の同意と施設、設備の改善等に三カ年の準備期間を置きます。

二、統合校舎について

六合中学校の校舎を改修して、統合校舎とします。

三、施設設備の改善について

(一) 校舎内外の改修

(二) 教材、教具の整備

(三) 食堂の新築

(四) プールの改築

四、通学対策について

(一) 路線バス(JR)を利用します。

(二) 路線バスのない地域については、通学バスの導入を図ります

(バス停からの距離等による)

(三) 通学路の安全対策に努めます。

五、入山中学校の跡地の整備について

入山中学校の跡地は、地域の要望を尊重して整備活用を図ります。

・平成二年八月二十八日 委員長から村長へ答申書提出

六合中学校と入山中学校の統合に関する諮問についての答申書

一、統合についての総括的意見

当審議会は、昭和六十三年九月より二年間に亘つての審議と、各地区

の懇談会等の意見を参考に慎重審議の結果、統合が適切であるという結論に達しました。

統合の場所は六合中学校とし、統合の時期は平成五年度からが望ましいと考えます。

付記

当審議会の審議の過程における意見

(一) 通学対策には万全の施策を講ずること。

(二) 入山地区に代替施設(生涯学習施設等)を計画すること。

(三) いまだに統合に反対の意見もあるので、統合の時期までに合意の得られるよう努力すること。

審議会(答申)以降の経過

平成二年九月十八日 六合村立学校設置条例改正(五・四・一より中学校

統合)

平成三年八月 通学対策等説明会

平成四年四月 スクールバス運行開始

平成四年四月三十日 校史委員会設置

委員長 宮原 泰三 入山中学校長

六合中学校史編集委員会

委員長 黒岩 勇

入山中学校史編集委員会

委員長 山口 利雄

平成五年二月「六合中入山中のあゆみ」発行

(2)六合南小学校の閉校と六合小学校への統合

六合小学校、南小学校統合記

昭和五十九年三月三十一日、六合小学校一〇六年、南小学校一一〇年の長い歴史の幕がおり閉校となった。

両校が統合され、六合村立第一小学校と命名され発足したのである。統合初年度は旧南小学校を仮校舎として使用し四月八日開校式を行った。新校舎は旧六合小跡地を拡張して、造成、鉄筋三階建、普通教室主六、特別教室四、図書館、多目的ホール他などで、六十年二月末を工期として建築した。

六合村は郡の西北部に位置し、白砂川系に源を発する白砂川及び支流である白砂山系より源を発する長笹川とガラン沢とが村を貫通している。東西二〇キロメートル南北二三キロメートル、総面積二〇・二、三八平方キロメートルと広がりが九〇パーセントは山林・原野で占められ（内国有林約九〇パーセント）地勢は急峻で、標高六〇〇メートル〜二、〇〇〇メートルに及び、平均気温摂氏一二度という積雪地帯である。平地は極めて少なく、しかも地元の産業として取り上げるものも特になく、年々過疎の波にさらされ、昭和三十年度の四、三八三人を頂点として毎年減少の一途をたどり、昭和五十年には二、三五三人となり、その後、一進一退の横ばいの状態となり、減少傾向にやや沈静化が見られる現状である。

したがって児童数も人口の推移と共に年々減少してきた。ちなみに、昭和三十一年度、六合小二〇一人、南小（分校より独立した年）一〇四人、昭和四十九年度六合小七八人南小（開校一〇〇年）五九人、そして昭和

五十八年度末では六合小六八人南小二五人となり両校の統合は地域の長い懸案であったのである。昭和五十年六合村立学校統合問題審議会が発足してから、様々な視点から慎重な審議がなされた結果、昭和五十八年十一月二十八日村議会で昭和五十九年度より両校の統合が決定されたのである。

統合は六合村の将来を展望したものであり、しかも地域住民の理解と期待にこたえるものである。それは学校規模の適正化、教育施設設備の充実、教育活動の効率的な運用によって子供たちの能力を増強するものでなくてはならない。しかしながら、統合初年度は仮住まいという限られた環境、施設の中での教育活動、そこには当時者でなくてはわからない難しい課題があり、様々なあい路があった。その一つ一つをみんな話し合い、考え、理解し合いながら素晴らしい学校への基礎づくりという共通の目標のもと、児童、教師、父母そして地域の人々の協力でなんとか克服してきた。三学期、一年の総まとめ、校舎の完成、移転など手を抜く暇もない。とにかく、子供たちにマイナスになるものをいかにいとめ、どう工夫してプラスに変えていくかが最大の課題であったし、また教職員の連帯の最も高揚した年であったと思う。

六学統 第七号 昭和五十八年十月二十八日

六合村長 山口 助 殿

六合村立学校統合問題審議会 委員長 山田 松雄

六合村立六合小学校と六合村立南小学校の統合に関する諮問に関する
答申書

昭和五十八年五月二十八日付の諮問に就いて五回にわたる慎重審議の

結果、満場一致で統合することに決定いたしましたので下記の通り答申いたします。

記

一、統合の場所 六合小学校の位置

二、統合の時期 昭和五十九年四月一日

三、統合校舎の新築は統合にふさわしい校舎とし、昭和五十九年度中には建設せられたい。

付記 南小学校跡地は、教育文化にふさわしい施設を建設せられたい。その他関係地区にも教育文化施設を考慮せられたい。

(昭和五十九年度六合村立六合第一小学校沿革誌より)

三月三十一日 六合村立南小学校本日を以て閉校となる。創立一一〇年、独立後二十八年、午前十時より教育委員会を始め、村当局の主催で閉校式を挙行。

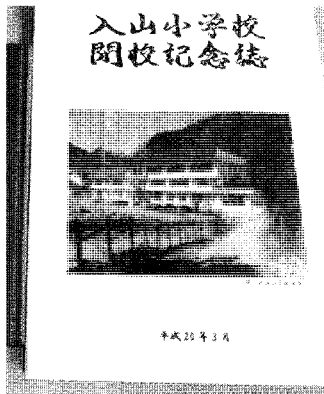
十一時三十分閉校祝宴会を開催、内外百名以上参列盛大に行う。

(昭和五十九年度 六合村立南小学校沿革誌より)

(3)入山小学校の閉校と六合村第一小学校への統合

北にそびえる八間山、南滑らかな

白砂の川を見下ろす学びやは と校歌に歌われた六合村立入山小学校は 明治九年八月二十四日花敷小学校として入山村一五三二番地に群馬県第一八番中学区第一九七番小学校とし



入山小学校閉校記念誌

て開校した。その後同二十六年入山尋常小学校となり、同三十四年引沼一七三〇番地に新築移転、同四十三年六合尋常高等学小学校入山分教場となった。昭和十六年引沼大火の際焼失、校舎復旧への住民の努力が実を結び、同十八年現在地に新校舎を竣工、同二十九年昇格六合村立六合小学校入山分校から独立し六合村立入山小学校となった。昭和五十年開校百周年を経て、平成二十年三月三十一日をもって一三二年の歴史に幕を閉じることとなった。

一方六合小学校は、明治十一年九月十五日小雨光泉寺に草津支校を設け開校した。同十四年草津小学校から分離し、上大阪学校と改称し小雨四一〇番地に設置され、以来明治十八年吾妻第一五番小学校第二分校、同二十六年小雨尋常小学校、同四十二年小雨尋常高等小学校、同四十三年六合尋常高等小学校、昭和十六年六合村国民学校、昭和二十二年六合村立六合小学校とその名称を変えて一三〇年余の歴史を刻んできた。

統合の経緯

時代の経過に従って山間地域の過疎化が進み、六合村も少子化による児童数の減少が顕著になってきた。複式学級の増加は学校の教育活動、児童の学習活動に様々な支障をもたらすようになった。

そのような中で平成十五年六月に小学校教育検討委員会が発足した。学校ごとの検討委員会の協議を経て、十月には学校統合問題協議会が四五名の委員を以て発足した。同時に六合村長より審議に対し、入山小学校と第一小学校の統合について諮問書が提出された。同十一月十三日第三回審議会に於いて、各地区と村とで統合問題についての地区懇談会を開催する要請が提出され、五地区に於いて懇談会が開かれ、審議が重ねられた。

十二月八日に開かれた第五回審議会に於いて、統合に関する諮問についての答申書が出され、統合校の位置については、六合村立入山小学校の位置。統合の時期については平成十七年度四月一日と決められた。

平成十六年 六月十四日 議会定例会に学校設置条例の一部改正案が提出され、入山小学校に統合の議案が否決された。

その後一年が経過した平成十七年六月二十四日の教育委員会定例会に於いて、平成十九年四月第一小学校での統合という意見統一がなされた。

これに対して、八月十日には入山小学校 P T A より学校統合問題説明会の内容「平成十九年度第一小学校に統合する」に対する反対の要望書が提出された。

平成十七年十月二十五日入山小学校 P T A に対して第一小学校の校舎を使つての統合を決断した旨の回答書が送付された。

平成十八年には一月から七月にかけて二回にわたる学校総合代表委員会と話し合いがもたれ、十月には、入山小・第一小を始め一四か所で説明会が実施された。主な内容は、○統合の時期は平成二十年四月とし、場所は第一小学校の校舎とする。○第一小学校の改修工事は、平成十九年度中に実施する。○跡地の利用について。○スクールバス運行について。平成十九年一月三十日 小学校統合問題検討委員会に於いて教育委員会の意見が提示され、更に二月十三日 六合村立学校設置条例改正が行われ、平成二十年四月一日より小学校統合が決められた。

・六合村立入山小学校・六合村立第一小学校閉校記念誌「あゆみ」が発行される。

発 行 吾妻郡六合村教育委員会

発行日 平成二十年三月三十一日

・入山小学校閉校記念誌の発行

編集・印刷 入山小学校 P T A 本部役員・地区運営委員

入山小学校教職員

発行日 平成二十年三月

(4)元山・品木・長平分校の統合

昭和二十二年四月一日から六三制による新学制に基づき六合村立六合小学校が設立された。元山分校の開校は戦後の産業復興の資源生産としての群馬鉱山の再開発と共に始まった。昭和二十二年日本鋼管鉱業株式会社群馬鉱業所は従業員の子弟教育の為、教育施設の建設、教育行政について村当局に誓約書を入れて準備を進め、新たに児童数二二名の元山分校を設置し、六月十九日元山分校開校式を行った。中学生は元山から八キロも離れた草津中学校に通った。

その後、同二十九年入山小学校の独立によつて六合小学校の管轄であった元山分校も入山小中学校に帰属することになった。同三十二年に給食室が落成し給食を開始した。

昭和四十三年中学校生徒数減少（五名）のため毎週火・木は本校通学となった。

一方、昭和二十二年四月一日から六合小学校入山分校に品木・長平の分室を設置した。同二十九年両分室も分校に昇格した。児童数は品木八名、長平が一二名であった。昭和四十年湯の湖ダム建設により、品木分校が閉校と決定し、四月三日地元で閉校式を行った。

長平分校は昭和十年現在地に新築された。

3・入山中学校郷土学習

(1)「ふるさとの昔と今」 六合村立入山中学校

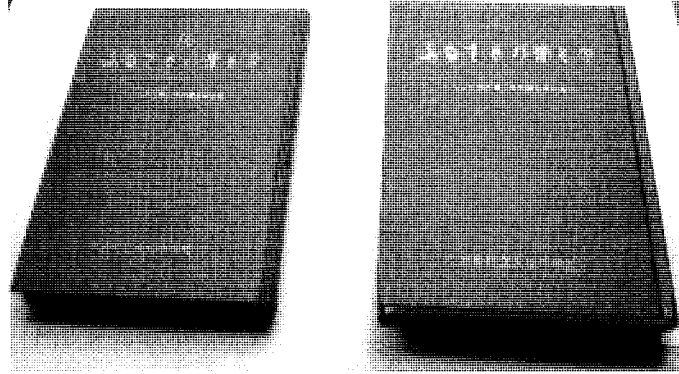
昭和五十三年の秋、十月二十三日に、入山中学校の生徒が夏休みのほとんどもを費やして、地域のお年寄りや役場をはじめ、先生の指導助言を得てたくさんの資料を参考にして作らせた郷土学習「入山研究」の発表会が、すがすがしい気持ちの中で、地域や関係するたくさんのお客様を迎えて行われた。

発表する中学生の表情は、明るく自信に満ちた顔で堂々と発表していた。発表を聞く関係者も、地域の人々も満足と充実した顔で生徒の発表に聞き入っていた。

これは、中学生、職員、地域が一体となって自分たちが生まれ、育った地域が長い歴史の中で先輩たちがどのようにしてつくり上げてきたかを解き明かす出発の日であった。

そして、学校と地域が一体となって自分たちの地域の真価を確認する日でもあった。

こうして出発した入山中学校の郷土学習「入山研究」が、学校と地域が一元となって第十五回の発表会まで行われ、郷土を知り、愛する心が



ふるさとの昔と今

培われたのである。

そして、昭和六十三年九月に生徒の手作りによる「入山研究」のまとめが、立派な活字印刷の十周年記念誌「ふるさとの昔と今」として発刊され、さらに平成五年三月には、六合中学校との統合による入山中学校の廃校のために、続「ふるさとの昔と今」として発刊されたのである。では、このような「入山研究」は、どのようにして始められたのかをこの研究の創設者である当時の学校長塩野松衛先生の創刊号に記された「郷土学習創設の辞」より転載する。

郷土学習創設の辞 六合村立入山中学校長 塩野松衛

一、人格を発達させる郷土学習

入山中の生徒のみならず、自分たちが生きていくその社会と、その社会を支えている自然とについて、お互いに、深い関心と正しい認識とを持つことは、自分たちが人間である以上、あまりにも当然なことではないでしょうか。

人間は基本的に社会的な存在だと考えられるからです。

ところで、そういう郷土学習は皆さんいつたい何をもちたらずと思いませんか。

(一) みなさんが日々学校で学んで身につけてきたことをもとにして、この入山にある諸問題について調査研究を行い、それら諸問題の解決の方向を探り、それらを通して郷土入山の発展を願う時、みなさんは、

おのずから学問の素晴らしさを知り、人生の素晴らしさに気付き、学問研究への意欲や生きる喜びなどを味わい、これまで知らなかった新しい世界を発見し、これまであこがれてきたことがつまらないことだとわかり、これまでつまらなかったことが素晴らしいことだと思えるような価値観の転換が行われて、理想に燃えた積極的、建設的、道徳的な素晴らしい人間になると信じています。

(二) 夏休みを利用して、また、夏休みが終わってから時々皆さんは、部落生徒班ごとにこの郷土研究に取り組んできました。

そこでみなさんは何を体験したでしょうか。あるひとは友だちの頼りがいを感じたかも知れません。

ある人は、一緒に行動するのがいやになるほど、仲間に腹をたてたかも知れません。でもそれによつて、ただひとり家に閉じこもっていたのでは得られない何かによつて、みなさんの部落での生活が充実したのには確かだと思います。

あなた方の人格はいいことだけによつて向上するわけではありません。嫌なことによつてだつて向上するのです。

(三) さらに、この調査研究で、みなさんは誰と話しましたか。

父母と話したでしょう。或るいは、このことがなければ、一生、無関係であったかも知れないある老人と話したでしょう。

また、六合村役場へまで出かけて行つて、役場の方にお世話になったかも知れません。それに、十月二十三日の郷土学習発表会の日には、きっと、地域の多数の住民が、みなさんの発表に耳を傾けてくれるに違いあ

りません。こういうことは、皆さんにとってどういう意味があるのでしょうか。

皆さんの発表の内容や態度が良かったなら、住民の方々は皆さんの人格について評価してくれるに決まっています。「今の若い者はだめだと思つていたが、どうして、どうして、実にすっかりしている。入山のことを深く考えようとしてくれている。」とほめてくれることでしょう。つまり、入山の社会の中での入山の中学生の社会的な位置が、これまでよりも高い所に位置づけられることになるのです。このことが、また、あなた方の人格を高めるのに役立つのです。だからこそ、地域の方に大勢来校してもらつて学習会を開いたのです。決して宣伝のためではないのです。ここの所は、絶対誤解があつてはなりません。

二、入山の未来をどうする？

これは郷土学習に取り組む最終の目標です。問題は大きく、複雑で、困難に見えます。しかし、私たちはたじろいではなりません。現実から目をそらしてはなりません。

また、性急な結論も危険です。じっくり腰を落としてお互いに手をつないで探つていこうではありませんか。

三、感謝と敬意

終わりに、まったく多忙を極めた毎日の中におけるあなた方の努力と、先生のご指導と、PTA、講演会をはじめ、地域の方々のご指導、「入山研究」への発展を念じつつ。

(2) 研究内容一覧と研究員

第一号 昭和五十三年度

一、田代原の機械化農業の発達(田代原・熊倉)

- 一年 山口 豊幸、山口 昇芳、山口由起江
- 二年 山本 博、山本佳代子、津川美雪、大塚 孝子
- 三年 山本 邦幸

二、熊倉の機械化農業の進展

- 一年 山村 博之、佐藤 信弘
- 三年 佐藤 裕美

三、小倉部落の水道の歴史と問題

- 一年 伊藤れい子
- 二年 山口 一久、山口 春好
- 三年 山口 勝代

四、根広林道と村の開発(根広)

- 一年 中村英一郎、中村 秋男、中村 弘美
- 二年 黒岩 瑞穂
- 三年 中村とめ子、中村まり子、中村幸子

五、道路変化と地域の人々の生活(矢倉)

- 二年 霜田 文男、霜田 浩子
- 三年 霜田 満理

六、和光原の昔の人々の生活様式

- 一年 山本 厚子
- 二年 山本今朝生、本多 君江、本多ひろみ
- 一年 本多 宏幸

七、入山保育園について

- 一年 山本 明
- 二年 山本 広樹、上関 恵滋、関 孝志
- 三年 山本俊之、山本 浩、山本 松広、山本ゆり子、山本マチ子、山本由美子、竹渕久美子

八、世立の地理・歴史・行事

- 一年 山本喜美枝、野村みどり、山本 結花
- 二年 山本 光一、滝沢 幸恵、高橋 淳子
- 三年 山本 長男、高橋 克巳、山本 勇人、関 勝寿、野村 一郎、山本 博幸、山本 孝子、関 松美

九、京塚・品木の歴史とその将来について

- 一年 山口 浩輝、山本ひろ子
- 三年 山口 実、山口たつみ

第二号 昭和五十四年度

一、京塚・品木・熊倉の主な動物・遺跡・農産物

- 二年 山村 博之、山口 浩輝、佐藤 信弘、山本ひろ子

二、田代原の酪農と農業

- 一年 山口とも江

- 二年 山口由起江、山口 豊幸、山口 昇芳

- 三年 山本 博、山本佳代子、大塚 孝子

三、小倉の歴史

- 一年 山口 博之、山口美由紀

- 二年 伊藤れい子

- 三年 山口 春好、山口 一久

四、根広の歴史

- 一年 霜田 晴雄、黒岩志津穂

- 二年 中村英一郎、中村 秋男、中村 弘美

- 三年 霜田 文男、黒岩 瑞穂、霜田 浩子

五、津南秋山長野原線と野反湖のつながり（和光原）

- 一年 山本 卓也

- 二年 本多 宏幸

- 三年 本多ひろみ、本多 君江、山本今朝生

六、学校周辺の草花（引沼）

- 一年 山本 嘉光、鈴木 宗仁、山本 幸人、山本真知子、

- 上関 絹子

- 山本久美子、山本 和代

- 二年 山本 明

- 三年 関 孝志、上関 恵滋、山本 広樹

七、メンパ、子泣き地蔵（世立・見寄）

- 一年 山本まき子、山本 照二

- 二年 山本貴美枝、野村みどり、山本 結花

- 三年 滝沢 幸恵、高橋 淳子、山本 光一

第三号 昭和五十五年

一、電気と和光原の人々の生活

- 一年 本多 博美、山本 智子

- 二年 山本 卓也

- 三年 本多 宏幸

二、田代原の農業（野菜栽培の歴史・生活様式の変化）

- 一年 山本 照美

- 二年 山口とも江

- 三年 山口 豊幸、山口 昇芳、山口由紀江

三、京塚・品木・熊倉の主な遺跡・炭焼・昔からの行事

- 一年 山口 和好、山口 勝
- 三年 山村 博之、山口 浩輝

四、根広の歴史II 行事・石仏

- 一年 黒岩 貴、中村 恵子、霜田 順子
- 二年 黒岩志津穂、霜田 晴雄
- 三年 中村英一郎、中村 弘美、中村秋男

五、小倉の歴史II

- 一年 山口 光博、山口 好三、山口 良江、伊藤佳代子、
中村 晴美
- 二年 山口 博之、山口美由紀
- 三年 伊藤れい子

六、引沼・花敷の道祖神

- 一年 山本 誠、山本まゆみ
- 二年 山本 嘉光、鈴木 宗仁、山本真知子
- 三年 山本 明

七、僻地診療所

- 一年 山本 健司、山本 伸一
- 二年 山本 幸人、上関 絹子、山本 和代、山本久美子
- 三年 山本 明

八、二十五年間の移り変わり(人口・車・行事) 世立

- 一年 山本 次男、滝沢 秀男、山本 永義、関 寿美恵
- 二年 山本 照二、山本まき子
- 三年 山本貴美枝、山本 結花

第四号 昭和五十六年

一、郷土芸能の由来

- 一年 山田 真次、山田 里美、本多 栄子
- 二年 本多 博英、山本 智子
- 三年 山本 卓也

二、花敷・尻焼について(引沼・花敷)

- 一年 山本 敬、関 郁江
- 二年 山本 健司、山本 伸一
- 三年 山本久美子、山本 和代、山本 幸人

三、引沼の地名・屋号・入口について(引沼・花敷)

- 一年 山本 正
- 二年 山本 誠、山本まゆみ
- 三年 山本 嘉光、山本真知子、上関 絹子

四、世立の名所と道祖神

- 一年 山本 勉
- 二年 滝沢 秀男、山本 永義、山本 次男、関 寿美恵

三年 山本 照二、山本まき子

五、田代原開拓の歴史

一年 山口 英義、山本真理子

二年 山本 照美

三年 山口とも江

六、小倉の行事今、昔

一年 山崎 幸子

二年 山口 好三、山口 光博、山口 良江、伊藤佳代子、

中村 晴美

三年 山口美由紀、山口博之

七、農産物と耕地面積（京塚・熊倉）

一年 佐藤 正明

二年 山口 和好

三年 山口 勝

八、根広の歴史Ⅲ

一年 黒岩 浩

二年 霜田 順子、中村 恵子、黒岩 貴

三年 黒岩志津穂、霜田 晴雄

第五号 昭和五十七年

一、引沼・花敷の大正からのあゆみ

一年 山本 次男、竹淵 和秀、山本 隆仁、中村 五月

二年 山本 正、山本 敬、関 郁江

三年 山本 伸一、山本 誠、山本 健司、山本まゆみ

二、水道について（京塚・品木・熊倉）

一年 山本 恵子

二年 佐藤 正明

三年 山口 勝、山口 和好

三、農業技術の変遷（田代原）

一年 山口 牧代、山口真由美

二年 山口 英義、山本真理子

三年 山本 照美

四、世立の屋号について

一年 山本 義久、野村 和子

二年 山本 勉

三年 滝沢 秀男、山本 永義、山本 次男、関 寿美恵

五、戦争当時の生活と今の私たちの生活（根広・矢倉）

一年 黒岩ゆきえ、黒岩 智美、霜田 直美

二年 黒岩 浩

三年 黒岩 貴、霜田 順子、中村 恵子

三、家紋について(根広・矢倉)

一年 中村 紀子

六、入山鉾山について(小倉)

一年 山口久美子、中村登志子

二年 霜田 直美、黒岩 智美、黒岩ゆきえ

二年 山崎 幸子

三年 山口 好三、山口 光博、伊藤佳代子、山口 良江、

四、学校の歴史(引沼・花敷)

中村 晴美

一年 山本 安広、山本 直子、関 恵美

七、小栗上野介について(和光原)

一年 山田 英利、山本 悦子

五、地すべりについて(世立・京塚)

二年 山田 真次、本多 栄子、山田 悦子

一年 山本美恵子、山本 裕子、山本 裕二、山口 敏弘、

三年 本多 博英、山本 智子

飯塚 博士

第六号 昭和五十八年

一、昔の子どもたちの生活(小倉・品木)

一年 山口 陽子

二年 山本 恵子、山口久美子、中村登志子

六、お堂と石仏(和光原)

三年 山崎 幸子

一年 本多 和広、山本 明美、山本 美可、本多美奈子

二、信濃街道と入山(田代原・熊倉)

一年 山口 玲子、山本 雄吉

二年 山口 牧代、山口真由美

三年 山本真理子、山口 英義、佐藤 正明

第七号 昭和五十九年

一、信濃街道と入山その二(田代原・品木)

一年 山本 徳重、山口 治男

二年 山口 玲子、山本 雄吉
 三年 山本 恵子、山口 牧代、山口真由美

二、入山のまげ物づくり（引沼・花敷・尻焼）

一年 山本 秀幸
 二年 山本 安広、関 恵美、山本 直子
 三年 中村 五月、山本 隆仁、竹淵 和秀、山本 次男

三、昔の行事と道具（根広・矢倉）

一年 山口 英之、黒岩 睦子
 二年 中村 紀子
 三年 黒岩 智美、黒岩ゆきえ、霜田 直美

四、和光原の生活と交通の移り変わり

一年 山田 栄一、山本 健一、山本 善寛
 二年 本多 和広、本多美奈子、山本 明美、山本 美可
 三年 山田 英利、山本 悦子

五、世立しだれ栗の歴史（世立・京塚）

一年 山本 和広、山本 克明、山本 幸枝、山口 裕子
 二年 山本 裕二、飯塚 博士、山口 敏弘、山本 裕子、山本美恵子
 三年 山本 義久、野村 和子

六、白根神社とその歴史（小倉）

一年 山崎 英之、山口 直美
 二年 山口 陽子
 三年 中村登志子、山口久美子

第八号 昭和六十年

一、草津と入山の人々の関わり（小倉）

一年 山口 隆志
 二年 山口 直美、山崎 英之
 三年 山口 陽子

二、京塚の行事と生活について

一年 山本 英樹、山口 みほ
 二年 山口 裕子
 三年 山口 敏弘、山本美恵子

三、野反の歴史（根広）

一年 中村江里子
 二年 山口 英之、黒岩 睦子
 三年 中村 紀子

四、世立の名所と民話

一年 山本 勝、山本 智子
 二年 山本 和広、山本 克明、山本 幸枝

三年 山本 裕二、飯塚 博士、山本 裕子

二、弁天様とトロッコ(引沼)

一年 山口 敦美、山本 友恵

五、昔の結婚式(引沼)

一年 山本 考二、山本恵理子

二年 山本恵理子、山本 考二

二年 山本 秀幸

三年 山本 安広、関 恵美、山本 直子

三、田代原の庚申講について(田代原・熊倉)

一年 山口 幸男、川口 恵子

六、和光原の戸倉さん行事について

一年 山本 俊幸、山本 知子、霜田 崇、山本 美保

二年 山本 玉枝

二年 山田 栄一、山本 健一、山本 善寛

三年 本多 和広、本多美奈子、山本 明美、山本 美可

四、野反の歴史II(根広)

一年 中村 直樹

七、信濃街道と入山 完結編(田代原)

一年 山本 玉枝

二年 中村江里子

二年 山口 治男、山本 徳重

三年 山本 雄吉、山口 玲子

五、昔の遊びと今の遊びについて(京塚)

一年 山本 宏、山口 充孝

二年 山本 英樹、山口 みほ

第九号 昭和六十一年

一、和光原の諏訪神社について

一年 本多なつえ、本多 美紀、山田日登美、山田まゆ美、

山本 文子

二年 山本 知子、山本 美保、山本 俊幸、霜田 崇

三年 山本 善寛、山田 栄一、山本 健一

六、世立の農業と土地利用

一年 高橋 和枝

二年 山本 勝、山本 智子

三年 山本 和弘、山本 克明、山本 幸枝

七、群馬鉄山と入山（小倉）

- 一年 山口 順子
- 二年 山口 隆志
- 三年 山崎 英之、山口 直美

第十号 昭和六十二年

一、田代原・熊倉に伝わる藁草

- 一年 山口 美穂、山本由香里
- 二年 山口 幸男、川口 恵子
- 三年 山本 玉枝

二、水道の歴史（引沼）

- 一年 山本 和美、平形 樹男
- 二年 山口 敦美、山本 友恵
- 三年 山本恵理子、山本 考二

三、世立八滝とそれまつわる伝説

- 一年 飯塚 慎一、山本 修、山本明子
- 二年 高橋 和枝
- 三年 山本 勝、山本 智子

四、交通機関と産業の移り変わり（京塚）

- 二年 山本 宏、山口 充孝
- 三年 山本 英樹、山口 みほ

五、和光原の成り立ちとその歩み

- 一年 山本 正、山本 陽子、本多 純一、霜田 昌子
- 二年 本多なつえ、本多 美紀、山田日登美、山田まゆ美、山本 文子
- 三年 山本 美保、山本 知子、山本 俊幸、霜田 崇

六、戦後の根広の移り変わりと将来について

- 一年 黒岩 誠、中村 淳史
- 二年 中村 直樹
- 三年 中村江里子

七、硫黄鉱山と入山

- 一年 伊藤 良一
- 二年 山口 順子
- 三年 山口 隆志

〔特別研究〕

品木ダムと百八十八観音について

- 山口 充孝、中村 淳志
- 山口 敦美、川口 恵子
- 山本由香理、山口 順子
- 飯塚 慎一

第十一号 一九八八年

一、熊倉遺跡について(熊倉・田代原)

- 一年 清水 紫織
- 二年 山口 美穂、山本由香里
- 三年 山口 恵子、山口 幸男

二、根広・小倉・長平のなぞ(根広・小倉)

- 一年 山口 光俊、中村 好美、黒岩紀美子、中村みゆき
- 二年 中村 淳史、黒岩 誠、伊藤 良一
- 三年 中村 直樹、山口 順子

三、生活の移り変わり(京塚)

- 一年 山口 英利、山本 政史
- 三年 山本 宏、山口 充孝

四、世立く暮坂線の研究(世立)

- 一年 山本 隆行
- 二年 山本 修、山本 明子、飯塚 慎一
- 三年 高橋 和枝

五、昔と今の学校の比較(和光原)

- 一年 山本 幸男、山本 克彦、山本 理江
- 二年 山本 正、本多 純一、山本 陽子、霜田 昌子
- 三年 本多 美紀、本多なつえ、山本 文子、山田日登美

山田まゆ美

六、住居の移り変わり(引沼・尻焼)

- 一年 山本 琢馬、関 安典、山本 藤代、山本めぐみ
- 二年 平形 樹男、山本 和美
- 三年 山田 織江、山口 敦美、山本 友恵

第十二号 一九八九年

一、世立の水道の歴史(世立)

- 一年 田中 英人、飯塚 豪紀、山本 茂樹、関 満、山本 美穂
- 二年 山本 隆行
- 三年 飯塚 慎一、山本 修、山本 明子

二、引沼・尻焼温泉の歴史(引沼・尻焼)

- 一年 山口佳代子、霜田 健一
- 二年 山本めぐみ、山本 藤代、山本 琢馬、関 安典
- 三年 平形 樹男、山本 和美

三、子安さんの歴史と村の信仰(京塚)

- 一年 山口あゆみ、山口 理恵
- 二年 山口 英利、山本 政史

四、歌舞伎(和光原)

- 一年 霜田 慎

- 二年 山本 幸男、山本 克彦、山本 理江
- 三年 山本 正、本多 純一、山本 陽子、霜田 昌子

五、とちぼらとしだれ桜(根広・小倉)

- 一年 山口 信也
- 二年 山口 光俊、中村 好美、黒岩紀美子、中村みゆき
- 三年 黒岩 誠、中村 淳史、伊藤 良一

六、元山分校の歴史(田代原・熊倉・大沢)

- 一年 川口 彰子
- 二年 清水 紫織
- 三年 山本由香里、山口 美穂

第十三号 一九九〇年

一、穴地獄と植物(田代原・熊倉・大沢)

- 一年 山口 栄子、清水 愛加
- 二年 川口 彰子
- 三年 清水 紫織

二、野反湖の植物大探検(和光原)

- 二年 霜田 慎
- 三年 山本 幸男、山本 理江、山本 克彦

三、入山小・中学校の歴史(引沼・尻焼)

- 二年 霜田 健一、山口佳代子
- 三年 関 安典、山本 琢馬、山本 藤代、山本めぐみ

四、生活用水の歴史(京塚)

- 二年 山口あゆみ、山口 理恵
- 三年 山口 英利、山本 政史

五、根広・小倉部落の神社・仏閣

- 一年 中村 卓也、山口 知子
- 二年 山口 信也
- 三年 中村 好美、黒岩紀美子、中村みゆき、山口 光俊

六、世立に伝わる昔話と伝説(世立・見寄)

- 一年 関 弘毅、山本いくえ
- 二年 飯塚 豪紀、山本 茂樹、関 満、田中 英人、山本 美穂
- 三年 山本 隆行

第十四号 一九九一年

一、ダム計画から今日まで(田代原・熊倉・大沢)

- 一年 山本 償美
- 二年 清水 愛加、山口 栄子
- 三年 川口 彰子

二、地名の由来と玄関の位置の言い伝え（引沼・尻焼・京塚）

- 一年 関 綾子、霜田 邦利
- 三年 霜田 健一、山口あゆみ、山口 理恵、山口佳代子

三、トイレの歴史（尻焼・引沼・京塚）

- 一年 山本 栄治、山口 貴弘、福島 真紀、山本 妙子
- 二年 関 綾子、霜田 邦利

三、入山の山菜（根広・小倉・和光原）

- 一年 黒岩 勝男、霜田 秀光、中村 晃一
- 二年 中村 卓也、山口 知子
- 三年 霜田 慎、山口 信也

四、入山中と郷土学習の歴史（和光原）

- 一年 本多 雄二、山本なつみ、山本富貴美
- 二年 霜田 秀光

四、生活の移り変わり（世立・見寄）

- 一年 山本 憲史、山本 幸司
- 二年 関 弘毅、山本いくえ
- 三年 飯塚 豪紀、山本 茂樹、関 満、田中 英人、山本 美穂

五、一本松と草津とのつながり（田代原・大沢）

- 一年 山本 秀憲、大塚 雅直、山口めぐみ
- 二年 山本 償美
- 三年 山口 栄子、清水 愛加

第十五号 一九九二年

一、根広、小倉の旧道

- 二年 中村 晃一、黒岩 勝男
- 三年 中村 卓也、山口 知子

二、結婚式の今と昔（世立・見寄）

- 一年 山本 尊徳、関 知大
- 二年 山本 幸司、山本 憲史、山本 一哉
- 三年 山本いくえ、関 弘毅

4・開校百年記念事業

(1)六合小学校

○趣意書

明治十一年草津支校として開校されました六合小学校は、昭和五十二年に創立百周年を迎えることになりました。

この間に草津町との分村、学校制度の改革、校名の変更、分校の独立、校舎の新築・改築等幾多の変遷を経て今日の六合小学校の発展を見るに至りました。

創立以来の卒業生は幾千の多きに

達し、そしてここに学んだ者、育み育ててくださった方々にとつて

○組織並びに経過

昭和五十三年九月十七日本校創立百周年を迎えるに当り記念事業を実施すべく実行委員会を組織、次の事業を計画す。

一、実行委員会組織

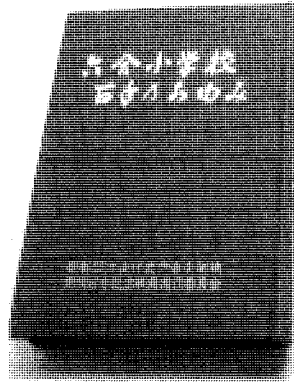
委員長 福島仁一

副委員長 中沢要平、萩原与吉、富沢恵秋、中沢 清、

湯本栄次郎

書記 池沢忠五郎、蜂須賀昌義

会計 市川春子、塩谷春男



六合小学校 百年のあゆみ



入山小学校 百年の歩み

監査 中沢総一郎、明田川道雄、高原秀雄、
顧問 山口 助、湯本喜太郎、福島松次、山本弟蔵

小林直之、山田達治、富沢虎次郎、市川照太郎
富沢虎之輔、富沢はな

専門部委員

総務委員長 萩原長一、副委員長、山田武俊、市川彦一郎

総務委員 中沢友治、中沢種一郎、中沢三三郎、中沢 清

富沢米治、篠原久男、金子×治、萩原与吉

木村義治、中沢総一郎、田村久一、熊川寅吉

中沢良雄、篠原太郎、府川金治、中沢幸市

富沢清次、橋爪喜美雄、黒岩ふみ子

事業委員長 市川浪二、副委員長 富沢久幸、富沢英治

委員 山田覚治、富沢虎四郎、富沢静夫、市川伸夫

中沢一孝 富沢義高、高原良之助、黒岩鶴松

湯本栄次郎

編集委員長 中沢要平、副委員長 黒岩九蔵、一場秀司、

委員 市川正五郎、市川 貞、黒岩 勇、市川昭次郎

明田川道雄、竹内 節、市川義夫、星野光儀

行事委員長 加辺秀市、副委員長 橋爪 豊、中沢久吉

委員 富沢かん、武藤宏子、中沢定雄、富沢隆子

黒岩てる子、高原秀雄、富沢一二、富沢容司

篠原忠吉、留場米吉、富沢恵秋

○記念事業

一、記念碑建立

二、百年誌編集

三、優勝旗

四、小中学生に対する記念品

五、創立百年記念式典並びに祝賀会

(2)六合南小学校

○趣意書

明治五年八月二日太政官から学制がしかれ、翌三日文部省からこれが発布されてから今年は一〇一年目に当ります。吾妻郡では群馬県で第三番目の小学校として明治六年三月五日原町小学校が開設されました。

当南小学校も明治七年一月、地域の多数の方々の熱意と協力によって旧第十一小区（日影村、赤岩村、太子村）内聯合して当時の日影村八幡宮に開校した日影小学校が本校の前身であり、来年一月を以て満一〇〇年の記念すべき年に当ります。

地域づくりは先ず教育にありとした先覚者の先見の明と郷土愛や熱意に深く感謝しなければなりません。この先覚者の偉業があればこそ今日このような教育の隆盛を見るに至ったものでこの事実を子々孫々に伝える未来の発展に結び付けるのは現在に生きる私たち地域住民の責務であるとともに郷土に対する誇りであり、又郷土愛につながるものであります。



南小学校 教育百年の歩み

この記念すべき創立百年を迎えるに当り P T A をはじめ地域の関係者が集い協議の結果下記により記念事業を実施することになりました。しかもこの事業を実施するにあたっての主な財源は地域住民の浄財に求める以外にはありません。つきましては地域住民一人一人のご理解とご協賛を頂き応分の募金をお願いしたいと思います。何かと出費の多い当今ではございますが、この趣旨にご賛同頂き格別のご芳志を下さいますようお願いいたします。

○記念事業の概要

- 一、南小学校教育百年のあゆみの刊行
- 二、記念碑と国旗掲揚塔の建設
- 三、創立百年記念式典

○組織並びに経過

一、記念事業実行委員会

- 委員長 湯本喜太郎
- 副委員長 茂木 賢、篠原好次、橋詰 登、篠原伝七、小山せつ子
- 顧問 湯本貞司、湯本友十郎、山本鉄三郎、篠原秀雄
- 委員 湯本貞二、篠原恒雄、篠原六三郎、山本昭五郎
- 篠原陸太郎、関昌十郎、富沢定吉、篠原宗平
- 富沢竹次、富沢茂邦、篠原梅次郎、関勘三郎
- 安原竹三郎、茂木 和、湯本省三、安原義治
- 篠原昭一、山本富美雄、篠原朝吉、倉林省三
- 宮崎坂喜、一場秀司

書 記 土屋次男
 会 計 篠原信次、市川 旦

二、事業経過

昭和四十八年六月十五日 開校百年記念事業実施準備会

記念事業実行委員会結成 委員の委嘱

〃 八月 五日 第一回実行委員会開催

委員長の選任と事業の大綱を協議

〃 十月 四日 第二回実行委員会

〃 十月三十一日 第三回実行委員会 事業の大綱を決定

〃 四十九年一月十一日 第四回実行委員会

〃 三月 四日 国旗掲揚塔建立する

〃 三月 六日 記念碑建立

〃 三月 九日 開校百年記念式典挙行

〃 三月二十六日 開校百年のあゆみ編集会議開催

資料蒐集について

〃 十月三十一日 編集会議開催

〃 十一月 五日 記念誌の原稿脱稿 印刷所に送付

(3)入山小学校

○趣旨（開校百年記念碑 碑文）

邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期すとの学制の発布は、我が村にとつてもまさに文化の黎明を告げる鐘であった。教育の重要性を喝破した先覚者相図り明治九年八月二十四日入山村一五三二番地

に群馬県第十八番中学区第一九七番花敷学校を開設した。その後幾多の経緯を以て同二十六年入山尋常小学校となり同三十四年引沼部落共有地一七三〇番地に新築移転同四十三年六合尋常高等小学校入山分教場となる。昭和十六年引沼部落大火の際焼失した。時恰も太平洋戦争勃発の年物資窮乏の事態の中で校舎復旧への住民の努力は筆舌に尽し難く同十八年現在地に新校舎を竣工同二十九年激動続く時代の要請と住民の総意と熱情によつて昇格独立し、六合村立入山小学校となる。開校百年を迎えて任時を偲び先人の偉業を称え入山地区教育の振興を期し記念事業を行ない万感の中に之を建立する。

昭和五十四年八月十四日

開校百年記念事業実行委員長 山本栗岡 撰文
 吾妻郡六合村立入山小学校長 田中 栄 謹書

○実行委員会組織

本部役員

委員長 山本栗岡

副委員長 本多春長、山本虔一

書記 中村福美、山口令一

専門部委員

事業部

部長 山田松雄 副部長 山本 勲

委員 田中金蔵、山本鉄雄、山本善次、山本松次

山本正夫、山本和男、山本増雄、山田勝三郎

本多秀次、黒岩善一、中村福美、伊藤俊勝

編集部

山口徳慧、関 栄

部長 本多春長 副部長 田中 栄

顧問（賛助員） 山田泰三

委員 山本善太郎、山本由平、山口盛雄、関 久男

中村弘治、山田隆太郎、山口種雄、山口庄平

山口雄平、宮崎 康、黒岩 勇、小池邦利

安原政和、山口令一、関 栄

行事部

部長 山本虔一 副部長 本多左京

委員 山本岩男、山本常司、関 秀司、山本栗岡

山本千代春、山本重義、山本茂樹、山本政繁

山口昌衛、山本 一、関 真、中沢信治

霜田 泉、山本泰平、中村義司、霜田日出男

山口源次、山口政勝、山本仁一、佐藤要治

山口令一

5. 社会科副読本編纂事業

昭和四十三年七月に示された文部省の小学校学習指導要領第二節社会
第一 目標 二には、さまざまな地域にみられる人間生活と自然環境
との密接な関係、自然に対する積極的な働きかけの重要性などについて
理解させ郷土や国土に対する愛情、国際理解の基礎などを養う。と示さ
れてあり、そのための学習に供するための社会科副読本が各地で編纂さ
れた。六合村では昭和四十一年・四十二年の継続事業として社会科副読
本編纂事業が始められた。

(1) 「わたくしたちの六合村」

昭和四十二年三月 日印刷

昭和四十二年四月 日発行

発行者 六合村教職員研修会

印刷所 小池印刷所

「わたしたちの六合村」刊行によせて

昭和四十年年度の六合村教職員研究会事業の一つとして、小学校の教頭、
社会科主任の先生を中心にそれぞれの研究分担を決めた「わたしたちの
六合村」の編集に着手し、年度末には一応その成果をまとめましたが、
翌四十一年度には更に内容の検討と全体の調整を図るため、中学校社会
科主任の先生方のご協力を得てここに冊子といたしました。

この「わたしたちの六合村」の刊行は、小学校社会科学習（特に三・
四年生の郷土学習）資料として、学習指導要領に示された郷土学習の内
容を網羅するよう努め、児童に「郷土」に対する具体的な現象や歴史的
な事業に触れさせ、郷土に対する愛情と理解、郷土発展への意欲的態度

を培い社会科学学習の一助として活用いたしたい所存で出発いたしました。

したがって三、四年生でも読めるようなやさしい文章にし直接児童が授業に使用できるようにいたしました。利用する学年は、小学校三、四年生を中心としますが、小学校高学年、更には中学生にも参考になる資料等もせてありますので、村内各小中学校とも充分ご活用頂きたいと存じます。

なお、編集に当たられました諸先生方は、校務ご多忙の余暇を利用しての作業でございましたので、内容の不十分なところ、或いはまちがい等あろうかと存じますが、昭和四十一年度末をもって一応刊行に踏み切り、この冊子をもとにして近い将来に「郷土副読本」としての内容をそなえたものを編集いたしたいと存じますので、皆様方の積極的な御指導をお願い申し上げます。

おわりに、この「わたしたちの六合村」の編集に直接御指導いただき、貴重な「六合村の年表」まで御執筆下さいました湯本教育委員長をはじめ数多くの資料の提供とご指導頂きました方々に厚く御礼を申し上げます

昭和四十二年二月

昭和四十一年度

六合村教職員研究会長 高橋 善衛

編集にたずさわった人

執筆編集指導 教育委員長 湯本 貞司

執筆編集委員 入山小教頭 黒岩 勇

入山小教諭 高平 秀三

六合小教諭 蟻川 貞美

六合小教諭 星野 光儀

六合小教諭 片貝 俊郎

南小 教頭 後藤 永司

南小 教諭 黒岩 文夫

入山中教諭 市川昭次郎

六合中教諭 福田 具可

(2)「のびゆく六合村」

昭和五十三年三月三十日 印刷

昭和五十三年四月一日 発行

編集者 六合村社会科学副読本編集委員会

発行者 六合村教育委員会

印刷所 朝日印刷工業株式会社

社会科学副読本の改訂にあたって

六合村教育委員会教育長 萩原 興吉

このたび小学校三年生の使用する社会科学副読本「のびゆく六合村」が村の教職員研修会の先生方をはじめ関係各位の二カ年の骨折りにより改訂発行の運びとなりました。

この副読本は昭和四十一年度に当時の先生方のご協力により発行された「わたしたちの六合村」を、さらに検討を加え、より充実し改訂されたものであります。

小学校三年生の社会科学は自分たちの住んでいる地域（郷土）が学習の

対象となっており、身近な地域で働く人々の姿や村の生活全体がどう組織づけられているかを理解させ、これをもとにわたしたちの村の現状を考えてその発展を願う気持ちを高めるのがねらいとなっています。ところが教科書は全国的規模で編集されており、このねらいを達成することは困難なことであります。

そこで、副読本は文部省学習指導要領に準拠し教科書との関連をもたせ内容も身近なものの中から理解できるものを取り上げています。文字や文章についても三年生に応じたもので、さしえ、写真、図表、を多くして興味深く学べるように編集致しました。このようにして社会科学学習の基礎を培い先人に感謝し郷土愛の心を養うことを意図しています。

本書は村当局のご配慮によって三年生全児童に無償で給与されます。皆様のご理解のもとで有効に活用されますことを願っております。おわりに本書の作成にあたってご協力くださった編集委員の先生方ご指導賜った関係方面の先生方並びに写真資料など提供頂いた各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表するものであります。

昭和五十三年三月十一日

編集指導

吾妻教育事務所 指導主事 青木 勝
 六合村教育委員会 教育長 萩原 與吉
 六合村教育委員会 事務局次長 安原 義治

六合村教育委員会 前教育長 中沢 定雄

編集委員

六合村立入山小学校長 (委員長)	田中 栄
六合村立南小学校長 (副委員長)	大塚 寅雄
六合村立六合小学校長 (副委員長)	樋田淳一郎
六合村立六合中学校長 (副委員長)	黒岩 九蔵
六合村立入山中学校長 (副委員長)	塩野 松衛
六合村立六合小学校教頭 (委員)	蜂須賀昌義
六合村立六合小学校教諭 (委員)	土屋 品子
六合村立南小学校教諭 (委員)	水出 修司
六合村立入山小学校教諭 (委員)	関 栄
六合村立入山中学校教頭 (委員)	黒岩 勇
六合村立入山中学校教諭 (委員)	河野 廣徳
六合村教育委員会教育課長 (委員)	中沢 富一
六合村教育委員会社教主事 (委員)	茂木 真一
昭和五十一年度委員長六合小学校校長	一場 秀司
昭和五十一年度委員六合中学校教諭	水野 仲徳
昭和五十一年度委員入山小学校教諭	山本 茂

(3)「のびゆく六合村」

平成五年三月二十五日 印刷

平成五年三月三十一日 発行

編集責任者 六合村教育委員会教育長 中沢 久吉
 発行責任者 六合村教育委員会教育長 中沢 久吉

印刷社 株式会社 ぎょうせい

社会科副読本の改訂にあたって

六合村教育委員会教育長 中沢 久吉

六合村教育委員会では、小学校社会科副読本「私たちの六合村」以来第三回目の改訂を行い「のびゆく六合村」として発刊することになりました。

時代の推移は早く、村の様子も変わり改訂の必要が生じてきました。

三年生・四年生の児童を対象としておりますが、お父さんやお母さんにとっても村の様子を知る上により副読本ですので子供たちと共においに活用されますようお願いいたします。

副読本改訂にあたり終始熱心にご尽力くださいました編集員の先生方また貴重な資料等提供して下さった方々に厚く感謝申し上げます。

社会科副読本改訂委員

平成三年度

第一小校長 小林 勉
 第一小教頭 内海昭太郎
 第一小教諭 山本 茂
 第一小教諭 黒岩 洋一
 第一小教諭 安原 由紀
 第一小教諭 樋口 猛

平成四年度

入山小校長 桑原 賢一
 入山小教頭 安原十三四
 入山小教諭 市川 旦
 入山小教諭 山崎 克彦
 入山小教諭 木村 正臣
 入山小教諭 田中 真浩
 六合中教頭 黒岩 文夫
 入山中教諭 塩野 英介
 第一小校長 小林 勉
 第一小教頭 安原十三四
 第一小教諭 山本 茂
 第一小教諭 山宮 茂樹
 第一小教諭 安原 由紀
 第一小教諭 樋口 猛
 入山小校長 桑原 賢一
 入山小教頭 水野 守雄
 入山小教諭 市川 旦
 入山小教諭 木村 正臣
 入山小教諭 安西 紀明
 六合中教頭 黒岩 文夫
 入山中教諭 塩野 英介
 六合村教委教育長 中沢 久吉
 六合村教委課長 茂木 良一

(4) 「のびゆく六合村」

平成十六年三月三十一日 初版発行

編集責任者 六合村教育委員会教育長 関 常男

発行責任者 六合村教育委員会教育長 関 常男

印刷所 株式会社 ぎょうせい

社会科副読本全面改訂にあたって

六合村教育委員会教育長 関 常男

六合村教育委員会では、小学校社会科副読本「わたしたちの六合村」を過去三回にわたり改訂を行ない「のびゆく六合村」として発行してきましたが、新学習指導要領の実施に伴い、今回全面改訂を行い新装版「のびゆく六合村」として発行することとなりました。国際化の今日、外国を理解するにはまず郷土を理解することから始まります。

三年生・四年生の児童を対象としていますが、保護者の皆様方におかれましても、村の姿を知る上で参考となります。児童たちと共に活用されますようお願い申し上げます。

副読本全面改訂にあたり、お忙しい中終始熱心に研究され、御尽力賜りました編集委員の先生方また貴重な資料等提供していただきました皆様に心より感謝申し上げます。

社会科副読本改訂委員
平成十四年度

第一小学校校長 佐藤 英子

第一小学校教頭 安済 博明

第一小学校教諭 山田 浩昭

第一小学校教諭 篠原久仁子

入山小学校校長 福原 敏秀

入山小学校教頭 熊川 貞司

入山小学校教諭 荒木 孝史

入山小学校教諭 干川 和規

入山中学校教諭 岸 顕司

平成十五年度

第一小学校校長 坂井 宏治

第一小学校教頭 安済 博明

第一小学校教諭 篠原久仁子

第一小学校教諭 関 幹彦

入山小学校校長 福原 敏秀

入山小学校教頭 熊川 貞司

入山小学校教諭 荒木 孝史

入山小学校教諭 奥木 芳明

(5) 「わたしたちの中の条町」

平成二十三年 印刷 発行

編集責任者 中之条町教育研究所長 唐澤 正明

発行責任者 中之条町 教育長 唐澤 正明

印刷所 荒瀬印刷株式会社

副読本改訂にあたって

中之条町教育委員会 教育長 唐澤 正明

この「わたしたちの中之条町」は昭和四十六年に作成されました。

それ以来今日まで十一回の改訂を行い、その時々々の小学校の三・四年生が社会科の副読本として使用してきました。

このたび、学習指導要領の改訂で教科書が新しくなることと六合村と中之条町が合併したことから、この副読本も全面的に改訂をする運びとなりました。

三・四年生の社会科では、中之条町と群馬県について学習することになっております。そして、この学習を通して、ふるさとに対する理解と愛情、協力し合う心を育て、子供たちの公民的資質の基礎を養うことを目標としています。

この副読本の内容は、自分たちの学校のまわりの様子から学習を始め、中之条町全体の様子、中之条町で働く人々、暮らしを守り、健康で住みよいくらしを実現するための人々の工夫や努力、中之条町の歴史の学習を展開し、群馬県の様子にまで学習が発展できるように内容を構成しています。

今回の改訂では、学習内容を新学習指導要領に準じたものに書き換えるとともに、新しく六合地区の内容を付け加えることにより、内容を全面的に改訂いたしました。

保護者の皆様も、この新しい副読本に関心を寄せて頂き子どもたちと一緒に新しい中之条町について学ぶ機会をもつただければ刊行の意義も一層深まるものと思います。

結びに本副読本の作成にご尽力いただきました各小学校の先生方をはじめ、御指導御協力いただきました皆様方に厚く感謝を申し上げます。

社会科副読本作成委員 平成二十三年度

校長 高橋 直幸 高橋 俊昭

教頭 鈴木 秀一 山本 政行

中之条小学校 山田 久次

沢田小学校 関 幹彦

伊参小学校 高橋 清一

名久田小学校 初見 綾子

六合小学校 高橋 春寿



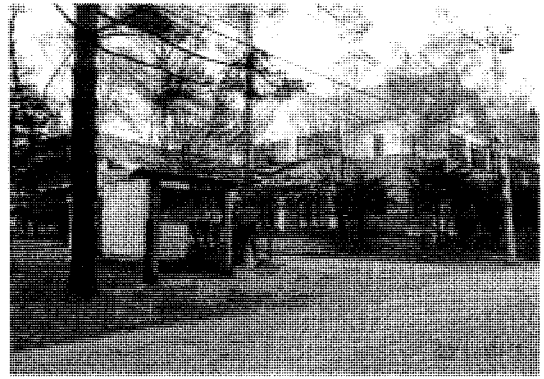
社会科副読本

6. 白根開善学校

白根開善学校は、本吉修二校長の「人間は善くなろうとしている」という強い信念のもとに、群馬県吾妻郡中之条町（旧六合村）の人里離れた白根山の山中に開かれた豊かな自然に包まれた学校である。

新緑が萌黄色に山肌を染めた平成二十三年五月十七日午前十時、山本・劍持の二人で白根開善学校を訪問した。私にとっては六合南小学校在職

当時以来ほぼ三〇年ぶり二度目の訪問であった。玄関には中等部部長の麻野忠彦先生が出迎えてくれ、応接室でお話をうかがうことができた。



白根開善学校

(1) 学校の開設と沿革の概要

「人はみな善くなろうとしている」——どんな子どもも心の中では善くなりたいと願っている、どんな子も善くなる可能性を持っている。だから何かを教え込んだり、どこかへ引っ張って行ったりするのではなく、厳しい自然、孤独、空腹などと闘い、共同生活での人間関係などを通して子どもたち自らが自立の心、連携の心を学び、二十一世紀を悠々と生きていく力を身に付けていくのを見守ってやれば——を教育の基本に据えて、昭和五十三年創立者本吉修二先生を中心に、別荘地として開発されたままに残されていた吾妻郡六合村入山小倉地区を設置場所に決めて開校した。

昭和五十二・十一・二十五	財団法人白根開善学校設立準備財団設立認可
” 十二・二十五	校地三三〇五九㎡取得 校地四、三一四㎡借用
”	生徒寮 旧食堂取得
昭和五十三・四・十三	中等部校舎新築 二十八 生徒全員が山へ
” 五・十	授業開始 二十 教職員宿舍新築
” 七・一	学校法人白根開善学校 中等部設置認可
” ”	開校式及び第一回入学式 中等部一年二〇名入学
” ”	中等部二年二名転入 中等部三年一八名転入
昭和五十四・三・二十五	中等部第一回卒業式 卒業生一八名
” 四・十	生徒寮新築
” ” 十五	高等部用校舎新築
” 六・二十二	白根開善学校高等部設置認可高等部第一回入学式
昭和五十五・九・十	生徒寮新築
昭和五十六・七・六	浴場新築 三十 工芸技術校舎新築
昭和五十七・三・七	高等部第一回卒業式 卒業生二二名
” 八・二十九	中等部用校舎新築
” 九・十五	体育館及び生徒寮新築
昭和五十八・七・十	男性浴場 及び教職員住宅新築
” 十・七	美術工芸校舎新築
” 十二・二十二	校地四、三七六㎡取得
昭和五十九・一・二十三	教員在宅二棟新築
” 五・二十五	食堂及び教職員在宅新築
” 十一・六	テニスコート完成

昭和六十	二	五	陶芸織染校舎新築
昭和六十	六	十	生徒寮新築
昭和六十	九	二十五	総合運動場一次造成完了
昭和六十	十二	十二	学校林用一三五三〇㎡借用
昭和六十	十二	二十	中等部校舎増築
昭和六十	十二	二十四	初心者スキー練習場二、〇四九㎡造成
昭和六十	十二	二十五	生徒寮新築
昭和六十	六	三十	弓道場造成
昭和六十	十	二十一	総合運動場第二次造成完了
昭和六十	十二	三十一	白根開善学校初等部設置認可
昭和六十	十二	二十五	ゲストハウス新築
昭和六十	四	一	初等部（小学校）開校 初等部第一回入学式
昭和六十	七	一	創立十周年記念式典挙行
昭和六十	十二	七	スキー練習場三、九五五㎡造成
平成	元	二	二十二 教員住宅新築
平成	四	十四	生産技術センター新築 二十四日開所
平成	二	五	二十二 教育用無線局開設免許 開局
平成	六	七	自家用予備発電装置設置
平成	三	七	二十四 中等部運動場拡張工事及び夜間照明六基設置
平成	八	九	教育用無線局増設・免許
平成	十一	十九	下水処理集中合併浄化槽完成
平成	四	十一	十六 新美術木工家庭科校舎新築 新初等部校舎改装
平成	五	十二	十九 情報教育校舎新築

平成	八	十	七	NTTインターネット事業「こねつと・プラン」
平成	十二	一	本校ホームページ開設	
平成	九	三	十九	群馬県同和教育研究指定校指定
平成	十	七	一	創立二十周年記念式典挙行
平成	十三	四	一	白根開善学校物語・山の学校からのメッセージ 「白根開善学校物語・山の学校からのメッセージ」窪井新次郎著 東洋館出版社より刊行
平成	十六	三	三十	「子どもたちと生きる」語る 本吉修二 編著 極限の百キロメートル強歩―煥平堂より発行 内山 充 上毛新聞社出版局より発行される
平成	十六	三	三十	「子どもたちと生きる」語る 本吉修二 編著

学校創設者で校長の本吉修二先生は、昭和六年に大阪市で生まれた。一歳の時母親が結核で亡くなったため、父親の故郷鹿児島県川内市に帰り祖母のもとで育てられた。昭和二十六年慶応大学に入学して教育学を学び、教育者への第一歩を踏み出した、

昭和五十二年三月 人里離れた厳しい自然の中で心身を鍛えたい。現代文明に害されている子供たちを蘇えらせるには、なるべく文明から離れたところがよいという建学の信念に基づいて、旧六合村小倉の奥地の現在地を訪れ、学校の建設地に決め、理想の学校建設に取りかかった。

(2)教育理念

学校設立当初から、入学してくる子どもたち、卒業していく子どもたち、そして教師や親たちをじっと見守ってきた学校の門標の下に刻まれ

ている言葉―「人はみな善くなるうとしている」―本校はまさにこの一言の上に築きあげられてきました。本校は子どもたちが持つ豊かで人間的な個性を大切に伸ばし、善くなるうとする力を十分に培い、どんな社会の中でも力強く生きる力を身につけるように援助し、指導するため、まず可能な限り一人一人を正確に把握する事が大事なことだと考えます。また無理な目標を設定して子どもたちを強引に引っ張っていくのではなく一人一人を尊重した上で教育をスタートし、彼らの歩みを見つめ、ゆつくりと将来を見すえながら一緒に前進していくことを大切にしています。さらに生徒とあゆむためには教師も、父母も善くなるうとする姿勢が重要であるという考えから、父母研修という二泊三日で学校内での子どもたちの生活ぶりを見ながら、教師と対話する機会を必須として設けています。

(3)百キロメートル強歩

開善学校の強歩が始まったのは、開校三年目の昭和五十五年十月、四万温泉から暮坂峠を経て学校まで四七キロ。翌年は榛名―須賀尾―学校から五五キロ、翌々年は軽井沢―学校六四キロ、次の年は田沢温泉―鳥居峠―学校八四キロとだんだん距離を延ばして五回目の赤城コースから初めて百キロになった。その後も、何度かコースを変え、試行錯誤を重ねたが、平成二年からは現在の西吾妻コース（学校―花敷温泉―北軽井沢―花敷温泉―学校）に固定されている。

中止は台風一九号に直撃された六十二年の第八回だけ。幸いなことに事故は一度もない。



白根開善学校全景

四 社会教育

文化協会の設立までのあらましとあゆみ

物質的な豊かさのなかで、物質的文明の弊害が強く現れると、人々の関心は精神的文明を強く求めるようになってきた。

このような状況の中で本村においても、早くは昭和三十九年頃より始まった。俳句愛好会をはじめとして、年を経るごとに各種の愛好会や同好会、サークル等が結成され、地域に根ざした文化活動である。

このようにして、心の豊かさを求める気持ちの人々の中に広がって、文化活動は私たちの生活になくはならないものとなってきた。

各種の愛好会や同好会、サークル等の独自の活動だけでは、より以上の発展が望まれない面があり、その対応策として、文化活動の核となるべきものの必要性が広く認識されるようになってきた。その結果、本村の文化協会が設立されたのである。

六合村文化協会のあゆみ

	昭和	
	五十四年十二月二十日	文化協会設立のための公聴会
	五十六年 四月二十八日	文化的サークル・各部会開催
	〃 六月二十七日	文化協会設立理事総会
	〃 十一月 二日	第七回 文化祭
	〃 十一月 三日	芸能発表会
	五十七年 三月 六日	村民教養講座(青木一雄)
	〃 十一月 三日	第八回 文化祭
	五十八年十一月 三日	第九回 文化祭
	〃 十一月 四日	芸能発表会
	五十九年十一月 三日	第十回 文化祭
	六十年 十月 三日	第十一回 文化祭
	六十一年 三月二十九日	文化講演会(藤原てい)
	〃 十一月 三日	第十二回 文化祭
	六十二年 三月 十五日	第一回 芸能発表会
	〃 十月三十日	文化財めぐり(歴史博物館)
	〃 十一月 三日	第十三回 文化祭
	六十三年 二月二十日	村民教養講座(近江俊郎)
	〃 十月二十八日	文化財めぐり(吉井町)
	〃 十月 三日	第十四回 文化祭
平成		
元年 二月二十五日		村民教養講座(小栗康平)

〃	三月 十二日	第二回 芸能発表会
〃	十月二十八日	文化財めぐり(尾島町)
〃	十二月 三日	第十五回 文化祭
〃	二年 三月 十一日	第三回 芸能発表会
〃	十月三十日	高齢者研修(歴史博物館)
〃	十一月 三日	第十六回 文化祭
〃	三年 三月二十一日	第四回 芸能発表会
〃	十月二十一日	文化財めぐり(太平記の里をたずねて)
〃	十一月 三日	第十七回 文化祭
〃	十二月二十一日	十周年記念誌発行第1回編集委員会
〃	四年 一月 十七日	文化協会理事会(十周年記念誌発行について)
〃	三月 十五日	第五回 芸能発表会
〃	四月 一日	十周年記念誌発行
〃	十一月 三日	第十八回 文化祭
〃	五年 三月 十四日	第六回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第十九回 文化祭
〃	十一月二十三日	「大山のぶ代」講演会
〃	十一月三十日	理事研修視察(藤岡市・鬼石町)
〃	六年 三月 六日	第七回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十回 文化祭
〃	十一月 十九日	「今井通子」講演会
〃	十二月 十三日	理事研修視察(富弘美術館等)
〃	七年 三月 十二日	第八回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十一回 文化祭

〃	十一月二十四日	研修視察(妙義町・下仁田町・富岡市・甘楽町)
〃	八年 三月 十四日	第九回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十二回 文化祭
〃	十一月 十四日	研修視察(上田塩田平等)
〃	九年 三月 九日	第十回 芸能発表会
〃	十月二十四日	研修視察(富岡市)
〃	十一月 三日	第二十三回 文化祭
〃	十年 三月 八日	第十一回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十四回 文化祭
〃	十一月二十三日	研修視察(上田市)
〃	十一月 十四日	第十二回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十五回 文化祭
〃	十一月 九日	研修視察(松本市)
〃	十二月 十二日	第十三回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十六回 文化祭
〃	十一月二十八日	研修視察(小川町等)
〃	十三年 三月 十一日	第十四回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十七回 文化祭
〃	十一月 九日	研修視察(藪塚・黒保根)
〃	十四年 三月 十日	第十五回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十八回 文化祭
〃	十五年 三月 九日	第十六回 芸能発表会
〃	十一月 三日	第二十九回 文化祭
〃	十一月 十四日	研修視察(村内文化財めぐり)

十六年	三月 十四日	第十七回 芸能発表会
”	十一月 三日	第三十回 文化祭
十七年	三月 十三日	第十八回 芸能発表会
”	十一月 三日	第三十一回 文化祭
十八年	三月 十二日	第十九回 芸能発表会
”	十一月 三日	第三十二回 文化祭
十九年	三月 四日	第二十回 芸能発表会
”	十月二十八日	六合村ハーモニカクラブ五周年記念コンサート
”	十一月 三日	第三十三回 文化祭
”	十一月 十六日	研修視察（富岡製糸場等）
二十年	三月 九日	第二十一回 芸能発表会
”	十一月 三日	第三十四回 文化祭
”	十一月 十七日	第一回研修視察（海野宿・無言館）
”	二月二十五日	第二回研修視察（美術館・絹の里）
二十一年	三月 八日	第二十二回 芸能発表会
”	十一月 三日	第三十五回 文化祭
”	十一月 十四日	第二十三回 芸能発表会
”	三月二十四日	六合村文化協会合併により解散

各部の活動

茶道部

○活動状況

- ・ 茶道愛好者集い
- ・ 文化祭に参加（茶道体験）
- ・ 小学校訪問

華道部

○活動状況

- ・ 花展視察
- ・ 文化祭に参加（作品展示）
- ・ 花材採集研究会参加

俳句部

○活動状況

- ・ 一人三句提出した俳句の詠草を紙面、添削、指導してもらっている
- ・ 文化祭に参加（作品展示）

書道部

○活動状況

- ・ 月例会
- ・ 文化祭参加（作品展示）

手工芸部

○活動状況

- ・農閑期に活動
- ・文化祭に参加(作品展示)

○学習内容

- ・初回は全員で作品作りを行う
- ・各自仕上げを行い、分からない部分は個々にアドバイスをを行う
- ・長年作りためた型紙・見本をまわし作品作りを行う

日本舞踊部

○活動状況

- ・年三回程度練習や反省会を行う
- ・発表会に備え練習や自主練習を行う
- ・芸能発表会参加(六合・郡老連等)

囲碁部

○活動状況

- ・毎月第二土曜日 午後一時より研修
- ・吾妻老連囲碁大会に参加

大正琴

○指導者

- ・荒川 利一
- ・中沢とみえ

・黒岩 いち

・中澤 いし

・茂木 栄子

○活動状況

- ・毎月二回午後七時より研修
- ・芸能発表会参加
- ・琴荒会員の集い参加
- ・研修旅行参加

詩吟部

○指導者

- ・名誉会長 本多岳江
- ・常任顧問 黒岩岳勇

○活動状況

- ・毎月第二土曜日、第四土曜日
- ・芸能発表会参加

三味線クラブ

○指導者

- ・関 定夫
- ・町田 柳水

○活動状況

- ・毎月第一月曜日、第三月曜日午後三時より研修
- ・芸能発表会参加

鎌倉彫り部

○指導者

- ・ 矢島みさほ

○活動状況

- ・ 毎月一回午前十時より研修
- ・ 文化祭参加（作品展示）

民謡踊り

○活動状況

- ・ 毎月二回、会員の都合の良い日に二時間
- ・ 芸能発表会参加

短歌部

○指導者

- ・ 市川 春男

○活動状況

- ・ 毎月第三水曜日午後二時より月例歌会
- ・ 文化祭参加（作品展示）

古文書部

○活動状況

- ・ 毎月一～二回、午後七時～午後十時
- ・ 文化祭参加（資料展示）
- ・ 県内歴史文化施設視察研修

文化を守る会

○活動状況

- ・ 語りの会（年に数回）
- ・ 六合巡り（自然・文化・歴史）
- ・ 文化祭参加（体験コーナー、おもちゃ作り）

陶芸部

○指導者

- ・ 中山 穰

○活動状況

- ・ 毎月第二火曜日午後一時三十分～
- ・ 陶芸作品作り
- ・ 文化祭参加（作品展示）

絵画部

○活動状況

- ・ 毎月第三金曜日午前十時～午後三時
- ・ 屋外教室一回
- ・ 中学生とのふれあい体験
- ・ 文化祭参加（作品展示）

切り絵同好会

○指導者

- ・ 後藤伸行

○活動状況

- ・実技例会
- ・町内研修
- ・町外研修
- ・文化祭参加（作品展示）

俳画部

○指導者

- ・安齋洋信

○活動状況

- ・毎月第四金曜日午後一時三十分～三時三十分
- ・文化祭参加（作品展示）
- ・長野県上田市リヴィン百貨店ギャラリー
展示参加
- ・六合郵便局・花楽の里、くつろぎの湯展示（年間を通して）
- ・花楽の里、牧水ギャラリーにて、安齋先生門下生総参加の大展示会で展示
- ・六合中学校ふれあい体験参加
- ・四ヶ町村ふるさと再発見学習会参加

編物部

○指導者

- ・藤江悦子

○活動状況

- ・毎月第二木曜日、第四木曜日午後一時三十分～
- ・文化祭参加（作品展示）

ハーモニカクラブ

○指導者

- ・柳田 二郎

○活動状況

- ・平成十四年六月二十九日設立
- ・毎月第二木曜日・第四木曜日午後七時より講習会を開催
- ・六合温泉医療センター、西吾妻福祉病院、草津そよ風、メデス草津、セラヴィ草津、六合こども園などの地域の病院や福祉施設などに慰問演奏
- ・村の敬老会や芸能発表会などの行事に参加
- ・吾妻ハーモニカクラブなどの郡内外のコンサートに賛助出演
- ・群馬トレモロハーモニカクラブ定期コンサートに出演

歴代役員名簿

短歌	鎌倉彫り	陶芸	大正琴	民謡	詩剣舞	詩吟	アマチユア 無線	写真	将棋	囲碁	舞踊	手工芸	書道	詩歌俳句	花木盆栽	茶雑道	フォークソング	婦人会長	文化財調査委員	管内校長会長	総文庫副委員長	青年団 常任理事	副会長	会長	顧問	役職部門	
			中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山口 市郎	山本 勝一	篠原 文夫	富沢 昇	加辺千鶴江	篠原きくの	茂木 賢	富沢 かん	山本 国雄	安原 みか	山本 光也					田中 金蔵	中沢 要平	萩原 長一	黒岩 善一	山口 助	昭和五十六年
			中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山口 市郎	山本 勝一	篠原 文夫	富沢 昇	加辺千鶴江	篠原きくの	茂木 賢	富沢 かん	山本 国雄	安原 みか	山本 光也					富澤 恵秋	中沢 要平	萩原 長一	田中 金蔵	山口 助	昭和五十七年
			中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	関 福次	山本 勝一	篠原 文夫	中沢 要平	加辺千鶴江	富沢 葉子	茂木 賢	富沢 かん	山本 敏一郎	安原 みか	山本 光也					中沢 要平	田中 金蔵	萩原 長一	富沢 恵秋	山口 助	昭和五十八年
		富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山本 好一	山本 勝一	篠原 文夫	中沢 要平	加辺千鶴江	武藤 宏子	茂木 賢	富沢 かん	山田桃太郎	安原 みか	山本 光也					中沢 要平	田中 金蔵	萩原 長一	萩原 与吉	山口 助	昭和五十九年
		富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山本 好一	山本 勝一	篠原 文夫	中沢 要平	加辺千鶴江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん	山本 貞雄	安原 みか	山本 光也					中沢 要平	黒岩 善一	萩原 長一	萩原 与吉	山口 助	昭和六十年
	山田 達治	富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山本 好一	山本 勝一	篠原 文夫	中沢 要平	加辺千鶴江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん	関 秀司	安原 みか	山本 光也					中沢 要平	黒岩 善一	萩原 長一	萩原 与吉	山口 助	昭和六十一年
	富沢 葉子	富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山本 栄一	山本 勝一		中沢 要平	市川 安江	中沢 貞子	武藤 宏子	中沢 一孝	山本 文雄	関 庄太郎	山本 光也					中沢 要平	山本 由平	萩原 長一	富沢 久幸	山口 助	昭和六十二年
	富沢 葉子	富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作	黒岩 いち	黒岩 勇	山本 栄一	山本 勝一		中沢 要平	市川 安江	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん	関 庄太郎	山本 光也					中沢 要平	山本 由平	萩原 長一	富沢 久幸	山口 助	昭和六十三年
市川 春男	山田 達治	富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作		黒岩 勇	山本 栄一	山本 勝一		中沢 要平	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん (俳句)		安原 みか	山本 光也					中沢 要平	山本昭五郎	萩原 長一	山本 由平	山口 助	平成元年
市川 春男	山田 達治		中沢とみえ	石山 金作	市川トヨ (民舞)	黒岩 勇	山口 清	山本 勝一		中沢 要平	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん		安原 みか	山本 光也						山本昭五郎	萩原 長一	山本 由平	山口 助	平成二年度
市川 春男	山田 達治	富沢 一二	中沢とみえ	石山 金作	市川 トヨ	黒岩 勇	山口 清	山本 勝一		富沢 昇	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん	萩原 好子	安原 みか	山本 光也					中沢 久吉	富沢 久好	萩原 長一	本多 秀次	山口 助	平成三年度
市川 春男	山田 達治		中沢とみえ	石山 金作	市川 トヨ	黒岩 勇	本多 昭仁	山口 盛雄		中沢 要平	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	富沢 かん	萩原 好子	安原 みか	山本 光也					中沢 久吉	富沢 久好	萩原 長一	本多 秀次	山口 助	平成四年度
市川 春男	山田 達治		中沢とみえ	石山 金作	市川 トヨ	黒岩 勇	本多 昭仁	山口 盛雄		富沢 昇	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	山本 国子	萩原 好子	安原 みか	山本 光也					中沢 久吉	富沢 久好	萩原 長一	本多 秀次	本多 秀里	平成五年度
市川 春男	山田 達治		中沢とみえ	石山 金作	市川 トヨ	黒岩 勇	本多 昭仁	山口 盛雄		富沢 昇	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	山本 国子	萩原 好子	安原 みか	山本 光也					中沢 久吉	富沢 久好	萩原 長一	本多 秀次	本多 秀里	平成六年度
市川 春男	富沢 葉子	黒岩 勇	中沢とみえ	安原 義治	山本 岩男	山本 鉄雄	萩原 克巳	山本 良市		富沢 昇	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	黒岩てる子	加辺千鶴江	安原 みか	山本 光也	市川けさ江	篠原六三郎	河野 和男 (六合中)	山本 三男	山本 誠	市川 春男	富沢 久好	萩原 長一	本多 秀里	平成七年度
市川 春男	富沢 葉子	黒岩 勇	中沢とみえ	安原 義治	山本 岩男	山本 鉄雄	萩原 克巳	津田 國松		富沢 昇	市川 安江	武藤 宏子	中沢 一孝	黒岩てる子	加辺千鶴江	安原 みか	山本 光也	黒岩てる子	篠原六三郎	篠原 洋輔 (六一小)	山本 三男	山本 誠	市川 春男	富沢 久好	萩原 長一	本多 秀里	平成八年度

事務局	事務局長	理事	監事	ハローワーク	編修教室ニテ委員会	フルタイム	レクレーションダンス	俳画	切り絵同好会	絵画	文化を守る会	古文書研究	役職部門
山本清司	市村勝美	安原義治	小山誠	富澤恵秋							山本文雄	明田川道雄	昭和五十六年
山本清司	市村勝美	安原義治	山田隆太郎	星河福司							山本三男	明田川道雄	昭和五十七年
富沢武雄	山本清司	中沢久吉	山本善繁	萩原与吉							山本三男	明田川道雄	昭和五十八年
富沢武雄	山本清司	中沢久吉	山本善繁	山本由平							山本三男	明田川道雄	昭和五十九年
小池邦利	山本清司	中沢久吉	山本善繁	山本由平							山本春好	明田川道雄	昭和六十年
小池邦利	山本清司	中沢久吉	山本善繁	山本由平							山本春好	明田川道雄	昭和六十一年
小池邦利	山本清司	明田川道雄	山本善繁	本多秀次							山本春好	明田川道雄	昭和六十二年
篠原茂	山本忠雄	茂木真一	山本善繁	本多秀次							山本春好	明田川道雄	昭和六十三年
篠原茂	山本忠雄	茂木真一	山本善繁	本多秀次							山本春好	明田川道雄	平成元年
市川富士子	山本忠雄	茂木真一	山本善繁	本多秀次							山本春好	明田川道雄	平成二年度
大淵廣司	山本今朝吉	茂木真一	山本善繁	中村義司							山本春好	明田川道雄	平成三年度
大淵廣司	山本今朝吉	茂木真一	山本善繁	中村義司							山本照雄	明田川道雄	平成四年度
依田たつ子	山本今朝吉	茂木真一	山本善繁	中村義司	明田川知代						山本照雄	明田川道雄	平成五年度
依田たつ子	山本今朝吉	茂木真一	山本善繁	中村義司	明田川知代						山本照雄	明田川道雄	平成六年度
櫻井運三	山本今朝吉	山口義之	湯本栄次郎	山本善繁	明田川知代						山本照雄	明田川道雄	平成七年度
櫻井運三	山本今朝吉	山口義之	湯本栄次郎	山本善繁	明田川知代					富沢葉子	山本照雄	明田川道雄	平成八年度

役職部門	平成九年度	平成十年度	平成十一年度	平成十二年度	平成十三年度	平成十四年度	平成十五年度	平成十六年度	平成十七年度	平成十八年度	平成十九年度	平成二十年度	平成二十一年度
役員	本多 秀里	本多 秀里	本多 秀里	本多 秀里	山本 三男	山本 三男	山本 三男	山本 三男	山本 三男	山本 三男	山本 三男	山本 三男	山本 三男
顧問	中村 義司	中村 義司	中村 義司	富沢 久好	富沢 久好	山口 國次	山口 國次	山口 國次	山口 國次	星野 次雄	篠原 辰夫	篠原 辰夫	山口 悦行
会長	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	萩原 長一	黒岩 勇
副会長	富沢 久好	富沢 久好	富沢 久好	山口 國次	山口 國次	山口 國次	星野 次雄	星野 次雄	山口 悦行	山口 悦行	山口 悦行	山口 悦行	山本日出男
常任理事	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	市川 春男
青年団	山本 誠	山本 裕二	山本 裕二	山本 裕二	山本 裕二	山本 裕二	中澤 宏衛	中澤 宏衛	中澤 宏衛	中澤 宏衛	山本 峯松	山本 峯松	篠原 巖
総務副委員長	町田 喜彦	町田 喜彦	町田 喜彦	山口 悦行	山口 悦行	山口 悦行	中澤 宏衛	中澤 宏衛	中澤 宏衛	中澤 宏衛	山本 峯松	山本 峯松	篠原 巖
警内校長	安原十三四 (入山小)	安原十三四 (入山小)	安原十三四 (入山小)	宮崎 信 (六合中)	佐藤 英子 (六一小)	佐藤 英子 (六一小)	黒岩 俊男 (六合中)	福原 敏秀 (入山小)	坂井 宏治 (六一小)	西脇 進 (入山小)	茂木 俊子 (六合中)	中山 邦男 (六合小)	小野塚則幸 (六合中)
文化財調査委員	市川 義夫	市川 義夫	市川 義夫	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇
婦人会長	関 フサ子	本多 静枝	本多 静枝	中沢 アキエ	茂木 栄子	市川 ひろ子	市川 章子	加辺千鶴江	中澤 いし	安原キヌエ	萩原 豊子	茂木 栄子	茂木 栄子
フォーラム	山本 光也												
茶道	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	安原 みか	山本美千代
華道	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江
俳句	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子
書道	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝	中沢 一孝
手工芸	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	武藤 宏子	湯本 寿枝
日本舞踊	市川 安江	市川 安江	市川 安江	市川 安江	市川 安江	市川 安江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	加辺千鶴江	黒岩てる子	黒岩てる子	黒岩てる子	安原キヌエ
囲碁	町田 喜彦	町田 喜彦	町田 喜彦	津田 國松	篠原 正忠	篠原 正忠	篠原 正忠	関 真	中沢 久吉	中沢 久吉	市川 義夫	市川 義夫	星野 次雄
将棋													
写真	津田 國松	浅見 行雄	浅見 行雄	富沢 敬	富沢 敬	中澤 宏衛	中澤 宏衛	安原 義治	安原 義治	黒岩 勇	黒岩 勇	津田 國松	
アマチュア無線	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	萩原 克巳	
詩吟	山本 鉄雄	山本 鉄雄	山本 鉄雄	山本 鉄雄	山本 鉄雄	山本 鉄雄	山本 鉄雄	山本 房勝	山本 房勝	山本 房勝	山本 房勝	山本 房勝	黒岩 勇
民謡踊り	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男	山本 岩男
民謡	安原 義治	小池たけ子	小池たけ子	小池たけ子	小池たけ子	小池たけ子	小池たけ子	伊藤千代子	伊藤千代子	伊藤千代子	伊藤千代子	伊藤千代子	伊藤千代子
大正琴	中沢とみえ	中沢とみえ	中沢とみえ	中沢とみえ	中沢とみえ	中沢とみえ	中沢とみえ	中沢とみえ	茂木 栄子	茂木 栄子	茂木 栄子	茂木 栄子	茂木 栄子
陶芸	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇	黒岩 勇
鎌倉彫り	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子	富沢 葉子
短歌	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男	市川 春男

役職部門	平成九年度	平成十年度	平成十一年度	平成十二年度	平成十三年度	平成十四年度	平成十五年度	平成十六年度	平成十七年度	平成十八年度	平成十九年度	平成二十年度	平成二十一年度
古文書研究	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄	明田川道雄
文化を守る会	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄	山本 照雄
絵画	富沢 葉子	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ	中沢アキエ
切り絵同好会		富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代	富沢みち代
俳句													
レクレーション ダンス													
ミュージック クラブ													
細物教室 マニキュア ハーモニカ	明田川知代	明田川知代											
監事	茂木 孝一	山口 一元	山口 一元	山口 一元	山口 一元	山本 三男	山本 好一	山本 好一	山本 好一	山口 悦行	山口 悦行	山田 正人	山田 正人
事務局長	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	関 常男	山本 光也	山本 光也	山本 光也	山本 光也	山本 光也	山本 忠雄
事務局	山本今朝吉	山本 章男	山本 章男	山本 章男	浅沼 俊子	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	中澤やす子	中澤やす子
	関 フサ子	中澤やす子	中澤やす子	中澤やす子	中澤やす子	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	山本 伸一	中澤やす子	中澤やす子	篠原千登世

六合村の文化を守る会

「六合村の文化を守る会」は、一九七〇年一月二十六日に「入山小民話研究会」として誕生した。

活動としては、六合村に残る様々な文化を発掘、収集し、調査、研究し、保存と発展のために村および村民の協力を得て運営していくものとした。

一、主な活動

- ① 「むかしかたり」採集、整理と保存
- ② 「むかしかたり」を広め、村民のものとする
- ③ あらゆる文化財の発掘、収集、調査と研究、保存、発展につとめる
- ④ 村外の文化団体との交流と文化の研究につとめる。

二、会の歴史

- 一九七〇年度
 - ・「入山小民話研究会」として、職員有志にて発足（二月二十六日）
 - ・「むかしかたり」第一、二集発行、各戸、各団体等に配布
 - ・「原話集」発行
- 一九七一年度
 - ・野外劇「ほりきり沢の竜」を運動会に全校で演じる
- 一九七二年度
 - ・「入山むかしかたりの会」と改称（八月三日）松谷みよ子氏来村

○一九七三年度

- ・「入山の文化を守る会」と改称（二月二十日）
- ・「六合村の文化を守る会」と改称（六月十七日）

○一九七六年度

- ・群馬県文化財総合調査協力
- ・富山県利賀村正月行事視察

○一九八〇年度

- ・上州路「山里に生きる人々」に六合村を紹介
- ・六合村芸術区と六合村シンポジウムに参加
- ・県教育委員会「六合の山里」中日映画社の制作に協力
- ・文化案内看板設置（花敷、荷付場）

○一九八一年度

- ・中之条町老人大学案内 宮川ひろ氏来村

○一九八五年度

- ・「四十束の畑ふみ」紙芝居制作

○一九九七年度

- ・「六合のむかし話」第一集発行協力

○一九九八年度

- ・「六合のむかし話」第二集発行協力

○二〇〇一年度

- ・日本民話の会「夏の小旅行六合の旅」実施 三五名参加
- ・国民文化祭に語り参加 黒岩、武藤、市川、山本、生巢

○二〇〇三年度

- ・語り部養成講座（六合村社会福祉協議会主催）

・遠野市へ民話の旅

○二〇〇五年度

・語りっこ 山の家、日本民話の会 岐阜夏季交流会参加

○二〇〇六年度

・日本民話の会 遠野夏季交流会参加

・「山の家」にて語りっこ

○二〇〇九年度

・トントソ昔の集い「語りとコンサート」、横浜開港一五〇年コンサートにて語り 六合伝説めぐり

○二〇一〇年度

・合併記念式典にて語り、中之条老人大学にて講演と語り ねどふみの里、「民話の家」にて語りとコンサート

三、歴代役員

初代会長	山本 善次	昭和四十七〜四十八年
中村 福美	昭和四十九〜五十一年	
山本 由平	昭和五十二〜五十四年	
山本 文雄	昭和五十五〜五十六年	
山本 三男	昭和五十七〜五十九年	
山本 春好	昭和六十〜平成三年	
山本 照雄	平成 四〜十一年	
篠原ゆき子	平成 十二〜十六年	
山口 恵子	平成 十七〜二十三年	

○ 六合村体育協会

一 六合村体育協会の沿革

(一) 六合村体育協会のあゆみ

かねてより村民の念願であった体育協会は、各関係者の努力により昭和四十四年七月十二日に発足した。発足当時は、「村民体育の健全なる発達を期し併せて村民相互の親睦を図る」ことを目的として、この目的を達成するため各種の体育行事が計画され、九つの部に分かれて活動を始めた。

△設立当時の役員▽

会長	篠原 秀雄
副会長	篠原 恒司 小林 直之 本多 春長
理事	山本 栗岡 市川正五郎 中沢 要平 山田 達治 福島ハルエ 山本 ふみ 中村 司 黒岩 勇 湯本 尚好 富沢 久 安原十三四 村田 敬吾 小林 資治 唐沢造酒雄 黒岩健一郎 関口 隆司 中村 義司
監事	市川 義夫 中沢 豊一
庶務	富沢 信義
会計	茂木 真一
顧問	湯本 貞司

その後、体育協会は「村民に健全な体育思想と技術を普及し、村民の健康と体力・資質の向上と融和を図り、明るく豊かで健康な地域社会づくり」に寄与する」ため、中之条町との町村合併までの約四二年間に渡り活動を続けてきた。

この間、本村の体育協会は他町村と比べると組織的な面を始め、様々な面において弱小ながらも、一步一步確実に発展を遂げてきた。

発足当時は、会長に村長、副会長に村議会議長と教育長を当て職とし、以降「会長・村長」の年月が平成二年まで続いた。その後、村民のスポーツへの関心の高まりやそれに応じられる組織体制が困難になり、体育協会自ら組織の充実と拡大に取り組み、会の活動を円滑なものにするため、「会長は民間で」の声が実現できたのが平成三年からである。この頃から村民のスポーツへの関心が高まり、多くの要望に応えるため、様々な体育行事が開催されていった。

平成三年に中村司氏が会長に就任。翌年には「第三十一回吾妻郡民体育祭」が本村で開催され、全種目開催・参加することができた。那体協の役員方をはじめとし、専門部、各町村体協の方々の協力とご理解により無事に大会を終了することができた。このことにより体育協会組織の強化と各専門部組織の拡充を図ることができた。

平成五年には、会長に黒岩勇氏が就任。さらなる組織の安定と事業の拡大を図ることができた。

平成七年からは、霜田清光氏が平成十三年三月までの六年間就任された。村民運動会は競技人口の減少などから平成十一年十月の第三十回を最後に中止となった。さらに、平成十二年の本村で三回目の開催になる「第三十九回吾妻郡民体育祭」では、競技種目数の増加などにより前回

開催時のように全種目開催・全種目参加を果たすことができなかつた。また、会場と係員の確保が難しく、開催日数も五日間と長くなり、近隣町村関係者の協力無しには開催することができなくなっていた。このような、人口の少ない村の課題に対し解決策を模索するなどご尽力された。

平成十三年からは山本好一氏が平成二十一年三月までの八年間就任された。この頃から、人口の減少や高齢化の進展により休部する専門部が目立ち始めてきた。平成二十年五月の「第二十五回県民スポーツ祭オーピング大会」では、全参加市町村の代表として「スポーツ県群馬」推進決意表明を行った。同年九月には、本村で四回目の開催となる「第四十七回吾妻郡民体育祭」を開催。競技年齢の増加と年々人口の減少する中、「生涯スポーツ」の考えを普及させようと長期にわたりご尽力された。

平成二十一年には山本秀明氏が中之条町との町村合併までの一年間を就任された。特に中之条町体育協会との統合を行うため、中之条町体育協会の役員との調整などにご尽力された。

中之条町体育協会への統合後は、「中之条町体育協会六合支部」として一三の専門部が六合地区民のスポーツ振興に努め、活動を続けている。

(二) 歴代会長

初代	篠原 秀雄 (村長)	昭和四十四・七	昭和四十八・四
二代	山口 助 (村長)	昭和四十八・五	昭和五十二・四
三代	篠原 秀雄 (村長)	昭和五十二・五	昭和五十六・四
四代	山口 助 (村長)	昭和五十六・五	平成 三・三
五代	中村 司	平成 三・四	平成 五・三

菅役員、係員の不足等、安全な大会運営に向けた取り組みが危ぶまれる状況にあるとの判断から第二十回大会を最後に大会が中止となった。

六代 黒岩 勇	平成	五・四	〳	平成	七・三
七代 霜田 清光	平成	七・四	〳	平成	十三・三
八代 山本 好一	平成	十三・四	〳	平成	二十一・三
九代 山本 秀明	平成	二十一・四	〳	平成	二十二・三

二 各種大会・教室について

専門部とも組織力や人数等はさまざまであるが、各専門部が工夫して自主運営してきた。

本村でも「生涯スポーツ」を推進させるために「地域住民に根ざしたスポーツ」をスローガンに「レクリエーションスポーツ」を導入段階で組み入れた。その結果、多くの住民がスポーツ行事に参加することができたことや競技を長く続けてもらうことができ、楽しくスポーツをできる環境づくりを行うことができた。

△主な体育事業▽

○ 野反湖つつじマラソン大会

本大会は地域の特色ある事業の一つであり、六合村を代表する観光地「野反湖」を大々的に広めることを目的に発足した。大会役員・係員そして選手の方々の努力と協力により、第二十回大会まで盛大に開催することができた。

この大会の特徴である高地でのレースであるが事故もなく開催できたことは村及び体育協会の誇りと考えている。

しかし、この大会の継続の是非について大会実行委員及び体育協会役員、理事等で検討を重ね村当局とも協議した結果、開催時期、大会運

野反湖つつじマラソン大会申込者数

60歳以上男子	40歳～59歳男女	40歳以上男子	50歳以上男子	40歳以上男子	高校生以上39歳男女	高校生以上39歳男子	高校生女子	高校生男子	中学生女子	中学生男子	小学生高学年女子	小学生高学年男子	小学生低学年女子	小学生低学年男子	小学生高学年男女	小学生低学年男女	小学生女子	小学生男子	小学生5・6年生女子	小学生5・6年生男子	期 間	回 数
				1				6	8	24											昭和56年8月16日	1
																					記 録 な し	2
			4	14				17	21	33											昭和58年8月21日	3
			5	10				1	82	71											昭和58年8月26日	4
			9	13				1	38	41											昭和60年7月28日	5
			12	16				1	25	48											昭和61年7月27日	6
			18	13				18	24	51											昭和62年7月26日	7
			26	20			14	14	49	64											昭和63年7月31日	8
			21	27			13	7	48	59											平成1年7月30日	9
			19	16			16	28	39	52									24	28	平成2年7月29日	10
			15	21				2	72	69							78	88			平成3年6月23日	11
			14	21					32	39							48	56			平成5年6月27日	12
			15	13					40	78							69	95			平成6年6月26日	13
																					記 録 な し	14
3	33				25			43	75						144	127					平成8年6月23日	15
4	32				38			52	77	86	109	69	85								平成9年6月22日	16
7	22				26			37	70	72	105	52	74								平成10年6月21日	17
	25				27			47	73	67	99	50	75								平成11年6月27日	18
	28				20			11	78	44	56	30	56								平成13年6月24日	19
	30				33			31	63	41	59	38	56								平成14年6月23日	20

合計	一般女子	一般男女	一般男子	60歳以上男女
54	4		11	
0				
104	1		14	
198	6		23	
145	9		34	
161	12		47	
175	16		35	
244	10		47	
233	6		52	
248	8		70	
264	16		69	
186	16		64	
220	18		56	
0				
405	23		59	
636	17		67	
549	12	72		
539	13	53		10
410	6	66		15
448	11	72		14

○ 村民ソフトボール大会

本大会は過去には参加チーム数の増加により、第三部にまで分かれて大会を行っていたこともあるほど、大変盛況な大会であった。

また、「マラソンソフトボール大会」も数回開催。ソフトボール部・野球部・審判部そして村内在住者・勤務者・出身者の子どもから大人の男女誰でも参加でき、スポーツチームに参加を呼びかけて実施している。村民スポーツの愛好者の親睦がこの大会の最大の目的である。大会はお盆頃に行い、帰省者等との交流も欠かせない大切な事業である。

現在ではこのような大会は実施していないものの、村民ソフトボール大会を毎年六月に六チームトーナメント戦で開催している。

〈村民ソフトボール大会歴代優勝チーム〉

回	年度	一部リーグ	二部リーグ	三部リーグ
一回大会	昭和五十一年	引沼バカボンズ		
二回大会	〃 五十二年	日影クラブ		
三回大会	〃 五十三年	引沼バカボンズ		
四回大会	〃 五十四年	日影Aチーム		
五回大会	〃 五十五年	小雨チーム		
六回大会	〃 五十六年	引沼バカボンズ	赤岩クラブ	
七回大会	〃 五十七年	引沼バカボンズ	オールスターズ	
八回大会	〃 五十八年	記録なし	記録なし	記録なし
九回大会	〃 五十九年	引沼バカボンズ	世立ヤンガーズ	
十回大会	〃 六十年	オールスターズ	太・須B	
十一回大会	〃 六十一年	白砂	日影クラブ	
十二回大会	〃 六十二年	オールスターズ	お久しぶりね	
十三回大会	〃 六十三年	オールスターズ	世立ヤンガーズ	
十四回大会	平成 一	太・須B	世立ヤンガーズ	クラブひきんた
十五回大会	〃 二	オールスターズ	クラブひきんた	京友会
十六回大会	〃 三	太・須B	白砂チーム	広池ホットスターズ
十七回大会	〃 四	太・須B	広池ホットスターズ	
十八回大会	〃 五	オールスターズ	クラブひきんた	
十九回大会	〃 六	オールスターズ	昭和二桁会	
二十回大会	〃 七	クラブひきんた	世立ホワイトトリカーズ	
二十一回大会	〃 八	根広クラブ	白砂チーム	
二十二回大会	〃 九	お久しぶりね	クラブどまんなか	
二十三回大会	〃 十	記録なし	クラブひきんた	
二十四回大会	〃 十一	クラブどまんなか	京友チーム	

三十四回大会	三十三回大会	三十二回大会	三十一回大会	三十回大会	二十九回大会	二十八回大会	二十七回大会	二十六回大会	二十五回大会
〃二十一	〃二十	〃十九	〃十八	〃十七	〃十六	〃十五	〃十四	〃十三	平成十二
日影ソフトクラブ	白砂	クラブひきんた	クラブどまんなか	クラブどまんなか	クラブどまんなか	クラブどまんなか	クラブどまんなか	お久しぶりね	お久しぶりね
									広池ホットスターズ

○ 六合村歩け歩け大会

本大会は「発見・ふれあい・健康づくり」をテーマに村内の古道などを歩きながら、地域の歴史・産業・文化などに触れ、先人がどのような暮らしをしていたかなどを知るもの。これまでに六合村から他町村へ通じる道はすべて踏破している。大会の催し物として行われてきた「お楽しみ抽選会」では六合村の特産品や伝統工芸品などを用意し、参加者から好評を得ている。また、第一回から参加者全員がもらえる「記念バッジ」や婦人会と食生活改善推進員の方々に作っていただく「なめこ汁サービス」も毎年参加者の楽しみの一つとなっている。

〈実施コース〉

回数	実施日	主会場	コース	参加者
一回	平成 二・二・二十八	六合村役場	暮坂コース	四六人
二回	三・三・二十七	高齢者センター	中部コース	一〇〇人
三回	四・四・二十五	入山小学校	入山世立コース	一五〇人
四回	五・五・三十一	六合村役場	小雨・太子・旧草津道	一二三人
五回	六・六・三十	太子グラウンド	南部コース	一四六人
六回	七・七・二十九	田代原ヘリポート	元山コース	一七〇人
七回	八・八・二十六	太子グラウンド	南部コース	一二三人
八回	九・九・二十五	入山小学校	根広・長平・小倉	一四〇人
九回	十・十・二十四	冬住みの里資料館	小雨・沼尾コース	八六人
十回	十一・十一・二十三	活性化センター	暮坂引沼線牧水コース	一三〇人
十一回	十二・十二・二十八	太子グラウンド	太子・湯久保コース	九六人
十二回	十三・十三・二十七	鋼管休暇村	田代原・熊倉コース	一〇七人
十三回	十四・十四・二十	六合村役場	暮坂コース	四一人
十四回	十五・十五・二十五	保健センター	赤岩コース	一三八人
十五回	十六・十六・二十三	活性化センター	入山コース	一一三人
十六回	十七・十七・二十二	六合村役場	生須・赤岩コース	九〇人
十七回	十八・十八・二十八	六合村役場	小雨・草津牧水コース	八〇人
十八回	十九・十九・二十七	野反湖	湖畔東側コース	五〇人
十九回	二十・二十・二十五	保健センター	赤岩・鍛冶坂・高間	七五人
二十回	二十一・二十一・二十四	六合中学校	梨木・品木・草津	一一七人

○ 村民野球大会

本大会は、毎年六月から七月にかけてチーム総当たりのナイターリーグ戦で行っている。リーグ戦は多くの試合ができるため、各チームが活性化してお互いに切磋琢磨している。過去には群馬県実業団軟式野球大会に参加し健闘したチームもある。

〈歴代優勝チーム〉

回	年度	優勝チーム
第一回	昭和五十五年	オールモンスターズ
第二回	昭和五十六年	六合ティーンチャーズ
第三回	昭和五十七年	モンスターズ
第四回	昭和五十八年	入山リバース
第五回	昭和五十九年	引沼野球クラブ
第六回	昭和六十年	引沼野球クラブ
第七回	昭和六十一年	引沼野球クラブ
第八回	昭和六十二年	開善ドジャース
第九回	昭和六十三年	入山リバース
第十回	平成一年	南部クラブ
第十一回	平成二年	ファミリーズ
第十二回	平成三年	ファミリーズ
第十三回	平成四年	ファミリーズ
第十四回	平成五年	ファミリーズ
第十五回	平成六年	ファミリーズ
第十六回	平成七年	ファミリーズ
第十七回	平成八年	弁天ズ
第十八回	平成九年	弁天ズ
第十九回	平成十年	弁天ズ
第二十回	平成十一年	入山リバース

回	年度	優勝チーム
第二十一回	平成十二年	南部クラブ
第二十二回	平成十三年	弁天ズ
第二十三回	平成十四年	弁天ズ
第二十四回	平成十五年	弁天ズ
第二十五回	平成十六年	オールチャンピオンズ
第二十六回	平成十七年	根倉くらぶ
第二十七回	平成十八年	オールチャンピオンズ
第二十八回	平成十九年	入山リバース
第二十九回	平成二十年	入山リバース
第三十回	平成二十一年	オールチャンピオンズ

○ グラウンドゴルフ大会

軽スポーツとして取り入れられたグラウンドゴルフ。吾妻郡では、平成四年九月の郡老連主催で開催された講習会が始まりである。本村では平成五年十一月に「第一回村民グラウンドゴルフ大会」を開催。簡単なルールと競技方法で、ゲートボールと同様に老人クラブの間で愛好者の拡大を図ることができた。その後、平成十四年には「議長杯グラウンドゴルフ大会」に主催を替え、毎年十一月に盛大に開催してきた。

○ 村民ユニホック大会

昭和六十二年に長野原町で開催された「巡回スポーツ指導者講習会」でユニホックの講習が行われ、本村から体育協会、スポーツ少年団の関係者が参加したことが発端である。

その後、体育指導委員が審判員資格を取得し、ユニホック協会を結成。昭和六十三年二月に「第一回村民ユニホック大会」を開催。子どもたちの冬の体力づくりとして取り入れたことで、特に小学校で普及した。過去には第一小学校児童が県大会・関東大会にも出場し素晴らしい成績を収めた。しかし、参加町村が少ないことから平成十五年度以降の県大会への参加は無くなった。

現在も、六合ユニホック大会として子どもから大人まで楽しめる地域の恒例行事となっている。

○ 元日走り初め

この事業は陸上部と体育指導委員が中心となり、元旦の早朝に一年の健康を祈念し元気よく走りきる恒例行事である。参加者は北部か南部の希望する会場に集合し、両コースとも二キロをそれぞれ自分のペースで走る。子どもからお年寄りまでが一同に会する交流行事である。

○ 村民ナイトスキー教室

この事業はスキー部と六合スキークラブが中心となり、毎年一月から三月までの間、草津国際スキー場において、スキーの普及と技術の向上を目的として教室を開催している。参加者は村内の小学生を中心に子どもから大人までのスキー愛好家たちが集まる。教室終了後に検定を実施することで、参加者に目標を持たせて



六合ナイトスキーレッスン

平成 七年	第三十四回大会	優勝
平成 八年	第三十五回大会	優勝
平成 十年	第三十七回大会	優勝
平成 十一年	第三十八回大会	第三位
平成 十二年	第三十九回大会	優勝
平成 十三年	第四十 回大会	優勝
平成 十八年	第四十五回大会	準優勝
平成 十九年	第四十六回大会	優勝
平成 二十年	第四十七回大会	優勝
平成二十一年	第四十八回大会	第三位

三 主な出来事

昭和四十四年 七月 「六合村体育協会」発足（九部）

陸上競技部・野球部・バレー部・庭球部・卓球部・剣道部・スキー部・山岳部・スポーツ少年団部

十一月「第一回村民体育祭」開催

昭和四十八年 四月 「村民プール」完成

昭和五十二年 三月 「第一回村民卓球大会」開催

昭和五十三年 三月 「弓道場 誠心館」完成

昭和五十四年 三月 「山村広場」完成

「第一回村民スケート教室」開催

四月 「六合村総合運動場」完成

十月 「第一回村民テニス大会」開催

十一月「第一回村民弓道大会」開催

昭和五十五年 三月 「村民体育館」完成

昭和五十六年 三月 「柔剣道場」完成

「陸上競技場」完成

八月「第一回野反湖つっじマラソン大会」開催

昭和五十七年 五月 「六合村体育協会会則」の全部改正

十月「第一回村民ゴルフ大会」開催

昭和五十八年 九月 「第二十二回吾妻郡民体育祭」が六合村で初開催

昭和五十九年 五月 「第一回県民スポーツ祭オープニング大会」参加

昭和六十二年 八月 「南部体育館」完成

昭和六十三年 二月 「第一回村民ユニホック大会」開催

平成 元年 八月 「第一回マラソンソフトボール大会」開催

平成 二年 十月 「第一回村民バドミントン大会」開催

平成 二年 一月 「第一回元旦走り初め」開催

平成 二年 四月 「ゴルフ部」加盟

平成 二年 十月 「第一回六合村歩け歩け大会」開催

平成 三年 十一月 「第一回家庭婦人バレーボール大会」開催

平成 三年 三月 「第一回村民綱引き大会」開催

平成 三年 四月 「会則」の全部改正

平成 三年 名譽会長、顧問、支部体育委員会を新設

平成 四年 表彰規程施行、支部体育委員会規約施行

平成 四年 十月 「第三五回関東高等学校登山大会」が野反湖で開催

平成 四年 八月 「国道四〇五号昇格記念ハイキング」開催

平成 四年 皇太子さま白砂山登山

九月「第三十一回吾妻郡民体育祭」が六合村で開催

十二月「軽スポーツ（グラウンドゴルフ）教室」開催

平成 五年 十一月「第一回グラウンドゴルフ大会」開催

平成 七年 三月「入山土間式体育館」完成

平成 九年 三月「六合ふれあい屋内プール」完成

平成 十年 五月「小雨・日影屋内ゲートボール場」完成

平成 十一年 十月「第三十回村民運動会」開催（この大会後中止）

平成 十二年 三月「ふれあい広場（野球場）」完成

十月「第三十九回吾妻郡民体育祭」が六合村で開催

平成 十五年 三月「野反湖つつじマラソン大会」中止を表明

四月「グラウンドゴルフ部」加盟

平成 十六年 四月「空手部」加盟

平成 十七年 四月「審判部」廃部

平成二十年 四月「支部体育委員会」廃止

「役員等報酬規程」施行

九月「第四十七回吾妻郡民体育祭」が六合村で開催

平成二十二年 三月「中之条町体育協会」へ統合

四 六合村体育協会会則

第一章 名称及び事務局

第一条 この会は、六合村体育協会（以下「本会」という。）と称し、事務局を六合村教育委員会事務局内に置く。

第二章 目的及び事業

第二条 本会は、村民に健全なる体育思想と技術を普及し、村民の健康と体力・資質の向上と融和を図り、明るく豊かで健康な地域社会づくりに寄与することを目的とする。

第三条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 村民の体育振興に関する施策の調査研究等
- (2) 体育に関する各種大会・講習会・研究会等の開催及び後援等
- (3) 体育の指導及び指導者の育成と奨励
- (4) 各種体育団体との連携及び強化のための奨励と助成
- (5) 体育施設・整備等の改善及び拡充の推進
- (6) その他、目的達成に必要な事業

第三章 組織と機関

第四条 本会は、本会の趣旨に賛同する村民及び村内に勤務先を有する者をもって組織する。

第五条 本会に次の機関を置く。

- (1) 総会
- (2) 理事会
- (3) 専門部会

第六条 本会に次の専門部を置く。但し、必要に応じ部を新設又は統合することができる。

- ・ 野球部・ソフトボール部・バスケットボール部・陸上競技部・卓球部・バレーボール部・ソフトテニス部・バドミントン部・柔道部・剣道部・弓道部・サッカー部・スキー部・ゴルフ部・山岳部・空手

部・ゲートボール部・グラウンドゴルフ部

第四章 役員

第七条 本会に次の役員を置く。

- ・名誉会長 一名
- ・会長 一名
- ・副会長 若干名
- ・理事長 一名
- ・理事 若干名
- ・事務局長 一名
- ・顧問 若干名
- ・監事 二名

第八条 会長・副会長・理事・監事は、総会において選出する。

二 理事は、次の者をもって充てる。

- (1) 学識経験者 若干名
- (2) 体育指導委員 若干名
- (3) 本会専門部長 若干名
- (4) 学校体育主任 全員
- (5) 関係団体の長 若干名

三 理事長は、理事の互選による。

四 名誉会長及び顧問と事務局長・事務員は、理事会で推薦し、会長が委嘱する。

第九条 役員は、二年とする。但し、再任を妨げない。

二 役員は、任期終了後においても、後任者が就任するまで引き続きその職務を行う。

三 補欠による役員は、前任者の残任期間とする。

第五章 会議

第十条 総会は、最高議決機関であり、毎年四月に会長が招集する。

二 総会は、役員・代議員をもって構成し、過半数（委任状を含む）をもって成立する。

第十一条 総会の審議事項は次のとおりとする。

- (1) 本会の事業に関する事
- (2) 予算及び決算に関する事
- (3) 役員を選任に関する事
- (4) 会則に関する事
- (5) その他必要と認められた事項

第十二条 本会の代議員は、次のとおりとする。

- (1) 本会専門部の副（各専門部の副部長）
- (2) スポーツクラブ長（本会主催事業に参加する各クラブの長） 全員
- (3) その他必要と認める代議員は、理事会において選出することができる。

第十三条 理事会は、必要に応じ理事長が招集し、次の事項を審議決定する。

- (1) 本会の事業執行に必要な事項の審議・規程等の制定に関する事
 - (2) その他日常業務の執行に必要な事項の審議又は、決定に関する事
- 二 理事会の議決は、出席理事の過半数の賛成により決定する。

第六章 会計

第十四条 本会の会計事務は、四月一日より翌年の三月三十一日までとする。

第七章 雑則

第十五条 この会則に定めない事項については、会則の精神に基づき理

事会で定めることができる。

附則

この会則は、平成三年四月五日から施行する。

(会則の経過)

- 一 この会則は、昭和四十四年七月十二日から実施する。
- 二 設立当初の役員の任期は、昭和四十六年三月三十一日までとする。
- 三 昭和五十年 六月 十一日 一部改正
- 四 昭和五十四年 七月 四日 一部改正
- 五 昭和五十五年 四月二十八日 一部改正
- 六 昭和五十七年 五月 一日 全部改正
- 七 昭和六十二年 五月 十二日 一部改正
- 八 平成 二年 五月 八日 一部改正
- 九 平成 三年 四月 五日 全部改正
- 十 平成 五年 四月 七日 一部改正
- 十一 平成 十五年 四月 十七日 一部改正
- 十二 平成 十六年 四月 十五日 一部改正
- 十三 平成 十七年 四月 十九日 一部改正
- 十四 平成二十年 四月二十四日 一部改正

五 六合村体育協会表彰規程

六合村体育協会表彰規程

(目的)

第一条 六合村体育協会は、村内在住者及び勤務者で社会体育の健全な

普及発展に貢献した功労者並びに他の模範となる功績を残した体育優秀選手及び団体に毎年表彰を行い、社会体育の資質向上と発展を図ることを目的とする。

(表彰者の規定)

第二条 選考委員会を設け、表彰基準に基づき厳正かつ公平な立場において審査し、選考委員会で決定する。

(選考委員会の構成)

第三条 選考委員会は、体育協会長・副会長・理事長・理事(専門部)をもって構成する。

(選考委員会の運営)

第四条 選考委員会は、体育協会長が招集し、運営等に関する事項を審議し決定する

(推薦方法)

第五条 一 表彰の推薦は、別紙「推薦書」をもって体育協会長に提出する。

二 推薦の基準日は、四月一日より翌年の三月三十一日までとする。

(表彰基準)

第六条 被表彰者は、下記の項目何れかに該当する者。

一 体育功労者

(一) 村民体育向上に十年以上の功労があり、かつその活動が顕著な者。

(但し、原則として五十歳以上であること。)

(二) 体育協会発展のために、多額の寄付金及び施設整備・物品等の援助や寄付をした者。

(三) その他特に選考委員会で認められた者。

二 体育優秀選手

(一) 個人・団体で村または体育協会長が認める団体を代表し、郡大会優勝・県大会入賞以上の成績を収めた者・団体。

(二) その他特に選考委員会で認められた者・団体。

三 体育優秀指導者

優秀選手の規程に準ずる。

(但し、同一種目については、一回限りの表彰とする。)

(授与方法)

第七条 表彰は、毎年度六合村体育協会総会の席上で行う。

但し、必要に応じて行うものとする。

附 則 この規程は、平成三年四月五日から施行する。

(会則の経過)

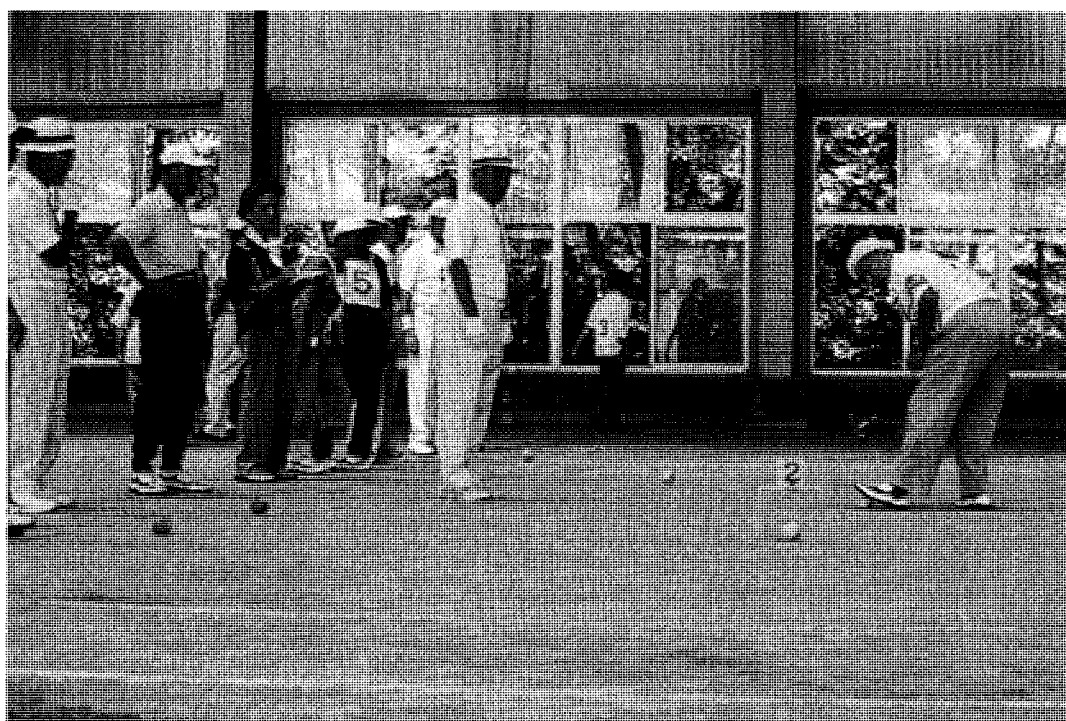
平成 五年 四月 七日 一部改正

平成 六年 四月十二日 一部改正

平成十一年十二月二十日 一部改正

(尚、平成十一年度の推薦の基準は、平成十一年一月一日から平成十一年度の生涯学習大会前日までとする。)

平成十七年 四月十九日 一部改正



ゲートボール大会

五 六合山岳会

六合山岳会は、昭和三十九年七月二〇日に会員三〇名で設立された。

会の名称は「六合山岳会」とし、事務所を会長宅に置くこととした。

会の目的は、六合地域の住民として、身近な山々を知り、自然を愛し、郷土の理解を深め、地域社会の発展に努め、歩くことにより心身の錬磨に務め、会員相互の共通意識と結びつきを深めることとした。

一、六合山岳会歴代会長

- 中村 弘治 昭和三十九年～昭和四十一年
- 山口 種雄 昭和四十一年～昭和四十三年
- 中村 義司 昭和四十四年～昭和四十六年
- 山本 善繁 昭和四十七年～昭和四十八年
- 中村 司 昭和四十九年～昭和五十年
- 山本 鉄雄 昭和五十一年～昭和五十二年
- 山口 清良 昭和五十三年～昭和五十四年
- 黒岩 竹松 昭和五十五年～昭和五十六年
- 山田 正人 昭和五十七年
- 山本 敏明 昭和五十八年
- 山本 峯松 昭和五十九年～昭和六十一年
- 山本 春好 昭和六十二年～昭和六十三年
- 霜田 清光 平成元年～平成十年
- 山本 宗晴 平成十一年～平成十二年
- 山田 宗俊 平成十三年～平成十五年

関 隆 平成十六年～平成十八年
山本 茂 平成十九年～

二、六合山岳会活動

昭和三十九年度

・ 会設立

・ 野反、大高、小倉間道標整備と実測

・ 野反、白砂山道標整備

昭和四十一年度

・ 四万歩道下刈りと調査

・ 小倉、元山、大池、平兵衛池、芳ヶ平下刈り

・ 白砂川、忠次郎沢遡行

・ ガラン溪谷、草津峠、赤石コース踏査

昭和四十四年度

・ 野反湖周辺道標整備

・ 妙義登山

昭和四十五年度

・ 野反湖焼却炉設置

昭和四十六年度

・ 野反和山、苗場登山

・ 魚野川遭難救助出動

昭和四十七年度

・ 富士登山

昭和四十八年度

・ 道標整備

・野反湖山開きと道標整備

・黒部登山

昭和四十九年度

・白砂溪谷遭難対策訓練

・ガラン沢踏査（役場と合同）

・冬山野反湖登山

昭和五十年年度

・野反湖山開き、白砂山頂道標設置と実測

・白砂、三壁下刈り

昭和五十一年度

・野反湖山開き、つつじ祭り

・ガラン沢遭難救助出動

・魚野川踏査

昭和五十二年年度

・野反湖山開き、つつじ祭り ・十五年誌発行

・谷川岳登山

・横手、熊倉ツアーカーコース笹刈り

昭和五十三年年度

・野反湖山開き

・白砂山道刈り

・苗場山登山

昭和五十四年度

・山開き、つつじ祭り

・ガラン沢縦走

・千沢遭難救助出動

・魚野川遭難救助出動

・ガラン沢高校生スキー遭難救助出動

昭和五十五年年度

・山開き、つつじ祭り

・富士山登山

・冬山野反湖合宿

昭和五十六年度

・大原、四万、法師縦走登山

昭和五十七年度

・魚野川釣人遭難救助出動

昭和五十八年度

・ガラン沢遡行

昭和六十年年度

・二十周年誌発行

平成二年度

・苗場山登山

・村民ハイク尾瀬へ

平成六年度

・大高山コース整備

平成七年度

・白砂川遡行と白砂山

・冬山野反湖合宿

平成八年度

・大高山コース整備

・冬山大高山から野反湖へ

平成十年年度

・冬山大高から野反湖へ

平成十一年度

・谷川岳縦走

・冬山大高から野反湖へ

平成十二年年度

・浅間、黒斑縦走

・冬山大高から野反湖へ

平成十三年度

・野反旧道整備

・冬山へりにて横手から元山

平成十四年度

・夏山八ヶ岳北岳へ

・野反旧道整備

平成十五年年度

・夏山白砂山へ

・冬山野反湖へ

平成十六年度

・夏山秋山郷へ

・夏山かもしか平へ

平成十七年度

・夏山鳥甲山へ

・本白根山から石津鉾山跡へ

・冬山野反湖へ

平成十八年度

・春山と総会野反湖へ

・冬山野反湖へ

平成十九年度

・夏山松岩山へ

・秋山郷へ

・冬山野反湖へ

平成二十年年度

・野反志賀トレイルレース協力

・夏山大高、野反縦走

・尾瀬至仏山へ

・冬山野反湖へ

・アイスクライミング協力

平成二十一年度

・トレイルレース協力

・夏山谷川岳へ

・夏山四阿山へ

・冬山野反湖へ

山岳会の記録

野反湖から秋山郷―苗場山へ

一九七一（昭和四十六年）七月二十五―二十六日 中村義司

三年間も会のリーダー役を預って、一つ位はまとまった行事をやってほしいと、叱咤激励があり動かざるを得ない羽目になった。

野反湖から秋山郷へ越えてみたいとの要望である。それをやったら、無罪放免してやるとの言質をとり付け、御指摘の通り目立った行事も出来なかつた罪悪感にもせめられて、かなりの参加者がありそうなので、実行することに決めた。このコースについては、前々からの懸案でもあったし、又、私の父が二〇歳の頃、杓子職人で出稼に行ったことのある場所でもあった。そんな関係で何となく気易く感じられ、父親の青春時代の楽しい思い出から訪ねてみたい気が前々からあった。

具体的な計画を立てるに当って、まず二、三の先輩の方々の話を聞きに全員集まって、最終的な打ち合わせの会合をもった。細かい所持品等を見て「これ程持たなくても良かんべー」との意見も出たが、一週間がかりで作った人の苦勞も知らないで寝言を言うな、怒りたい気持だが、全員の子供じみたはしやぎ様にその気持もおさまった。さて最後に心配なのは天候だ。翌日になって電話で問い合わせたが、二十五日は大体晴で夕立もない様子。翌六日は所により小雨との予報で大した心配はない。

いよいよ待ちこがれた二十五日がやって来た。野反の和山登山にまで車で送ってもらい、予定通り九時に出発する。大して重い荷物でもなかつたが地蔵峠までの坂道で汗びっしょりになる。予定時間より早く峠に着いた。前に準備しておいた標識をツガの樹につけて一休みする。カメラマンが記念に一枚撮る。この写真が傑作なものになるのだが。

これからは北沢まで下りでかなりのスピード、北沢をこしてからの登山ガイドブックと照合してみても、そんなに危険なコースでないことにまず安心する。野反湖から和山―小赤沢―苗場山頂―湯沢に出るまでの細かい区間の所要時間を調べて、コースの略図をまず作ってみた。次に装備と所持品を調べてみて慎重に確認する。これだけでも何か物足りないう感じで秋山郷の民謡と、北越雪譜の中から苗場の項を引用して書入れた。これでかなり肉付け出来て、魅力あるパンフレットが出来よう。宿は小赤沢の秋山館ときめて、電話で予約した結果が主人がマイクロバスで切明の本道終点まで迎えに来てくれるとのことである。それから、湯沢―祓川間のバス時間の確認を思いついて、湯沢町役場に連絡してみる。終バスの出発が早い様だが、苗場をこえてその時間までに祓川に着けるかどうか、やや心配だが油断しなければ何とか着けるだろう。落度のないことを確かめてから、コピーして出来上がったので二十三日には汗もうちばになって、荒砥沢に着いて水を飲んだり小休止。ツガの古木の中でヒンヤリする。道刈がしてあり、朝露にぬれることもなく全員はりきつてすすんで大倉の肩に着く。十一時十分だった。ここでの眺望は晴天に恵まれて、野反湖がツガ林の中にとけ込んで静かに見られ、魚野川の峡谷も黒々と見えた。ゆで卵とジュースの配給もすばやくこなして又、出かける。昼近くになったせいもあり、大倉坂の長いジグザグ下り

は皆早い。ブナの原生林をぬけ、しつかりした作りの渋沢の橋を渡ってダムに着いたのが十二時二十分。ここで昼食の予定だったが次の相沢まで行つて休むことにする。これからはダム工事の時の軌道敷ずたいで、平で管理の行き届いた道で気楽なコースである。まず第一番目の魚野川隧道をくぐりぬけて相沢に〇時四十分に着いてここで昼食。各々用意して来た弁当を賑やかに広げて、にぎり飯にかじりついたがそのうまいことと格別。もちろんアルコールも飲みました。度をこさない程度に加減しながら時間をかけて、これはあくまでも気付薬として飲んだそうです。やがて薬がきいてきて三〇分程ぐつすり休み、天気も良く天下泰平で罪はない。もつとも山の愛好者は善人ばかりで正にその通り。さて目が覚めると、これより先は誰も経験がなく早速出発することにする。昼食地点の石に参加者八名の名前書きつけたが、自然を汚す程ではありません。御勘弁願いたい。一時半に出発してぎり立った峡谷を見ながら平の道をすすむ。野反から秋山への車道計画はどの辺を通るようになるのか、いずれ右側の中腹だろうが難工事が予想される。渋沢ダムからは、水平に道が来ている為、魚野川がしだいに見下ろすようになって来た。一時間程歩いて佐武流沢を右に見乍ら、二番目の隊道に出た(馬の背隧道)狭く小さな隧道だが頭を打つ程でもなく、かなり長いがどれ位あるだろうか。トンネルを抜けても、まるつきり岩を切つて作つた道の上下に石楠花や榎の実生がいっぱいあるが、ただ見て通るのみ。しばらくして前方が見通せる様になった。V字形の峡谷の向こうに、人里に近い感じの景色が目に入った。足を止めて確かめると「確かに秋山だぞ」と言うことになりここで休憩する。誰もが疲れが目立って来て腰を下すにもドッコイショといった感じだ。桧俣川の上流に向かって中津川林道らしき道

が見えるがどの辺までのびているのか手前の屋根にかくれて見通せない。雲空になつて来て雨が心配になり、重い腰を上げて歩き出し、間もなく高橋のツリ橋上部に着いた。うんざりする程はるか下に橋が見え、これから一気に急降下するのだが、下りはじめてあまりに長いので閉口した。この高低差が二〇メートル程だが、二〇分以上かかつてツリ橋に着いた。三時四十五分だ。あとは、迎えの車を待つだけでゆつくり休むことにしたが、気がゆるんでひどい疲労感、最早、歩ける力はいくらも残つていなかった。三〇分程休んでいる内に迎えの車に來てもらったが、その時の有難さは筆舌に尽しがたし。丁重に礼をのべて乗せてもらう。道路の悪さもまた格別で乗り心地も世界最高、併せて感謝申上げる。と同時に物すごい大夕立になり宿に着くまでどしゃぶりで、悪口はいささかも言うものでもなしと深く反省しました。秋山館着が四時五十分、迎えてくれた。家族の人達も、言葉少ない中に暖かいものが感じられて本当に嬉しかった。部屋でゆつくりくつろぎ、夕食の時はさっきの疲れはどこへやら、全員すこぶる元気で賑やかにすごして床についた。その夜の夢は、どんなものであったか、皆々の御想像におまかせする。

明けて二十六日は雨で、テレビの予報も良くない。宿の主人もこれでは苗場の眺望もだめでやめた方が良くとのこと、残念乍ら中止に決定。こうなつた以上、バスで津南まで出て飯山線に乗つかるしか方法なしで、バスの時間を調べたが、一番のバスが十時五十分、さてそれまでどうしつてすこすか協議する。

現会長の鉄雄さんの発案で、熊捕りの名人の山田長吉さん宅を訪ねることになり、全員でおじゃました。幸い在宅で興味深い話を聞かせてもらい、色々と珍しい品々も拝見する。長い伝統とたくましい猟師振りや、

雪国独特の家作りの中で厳しい冬の生活がしのばれて、予想外の収穫に全員満足する。

一時間程おじやましてから、近所を見て廻ったが栃川の護岸工事が始まつており、農集電話工事等、かなり活気がみちていた。バス停には、民宿案内のキャンバンが大きく目について、夏のシーズン中はかなり客もあることだろう。バスを待つてはみたものの、夕べ秋山館で泊り合わせた玉川大学の一行が四〇人余り一緒に、とても乗りきれそうもない。そのうちに秋山館のはからいで、栄村森林組合のジープを見つけてもらい森宮の原まで便乗させてもらうことになって助かった。

数々の御好意に感謝して出発したのが十一時頃で、どしゃぶりの雨の中を一時間余りかかって森宮ノ原駅まで送ってもらった。またこれからが一大事、土砂崩れのため列車が不通で復旧の見通しはないとの駅員の話にがっかりする。やむなく、旅館で休んで待機することになった。四時間以上待つて駅から開通の連絡があり上越線まわりで帰宅したのだが、全く二日目はついていなかった。

しかし、今思っておこしてみても、雨の中を苗場へ強行しなくて良かったと思う。苗場山頂までは着けるだろうが、あの大雨では山頂ヒュッテで心配しながら泊りになっただろう。全員意気込んで計画実行したコースを中途半端で何とも残念で忘れられないが、いつか苗場行きを計画していただきたい。

あれ以来、七年間も待ち続けて居るのだが、何とかしてもらえないものか、今度は私が注文する番の様な気がする。

参加者 中村 司 山本鉄雄 本多友二郎 山口清良 山田正人 山本峯松 黒岩竹松 霜田清光

救命の洞

一九七三(昭和四十八年) 山本 鉄雄

十月十八日、ライトバンで野反湖へ出発した。八時三十分、野反の白砂山ハイキングコース入口で下車。雲一つない秋晴の日であった。心もはずみ、ハンノ木沢を渡り、地藏峠で一休み。目の前にそびえる岩菅山をカメラにおさめて、渋沢の道路に向かった。この日の目的は渋沢ダム採水であった。二リットル入りのポリビンを一本マジックペンと温度計一本に弁当にみかんが五個、予備食として菓子一袋、又鉈を一丁、リュックに入れて荒砥沢を経て、イタドリ沢を越えて、大倉の肩を過ぎ、大倉沢を下る途中、白ブナの林又、山ブドウの紅葉はひとときわ明るく、目のさめるような自然の美、「きれいだなあ」と思わず一人言を語り乍ら坂をおり、着く頃、一人の登山者に出会った。「今日は」の一言ですれちがった。渋沢ダムに着いたのが十一時十五分、ダムには工事の人が五人程見えた。ダムは放流されていたので、魚の川と渋沢の合流点で採水をした。秋晴の日であったが気温一六度、水温は六度であった。採水が無事終つて、時計を見ると、十二時少し前なので支度をして大倉坂を登り始め、途中、天然のナメコ茸や片刃の茸など取り乍ら坂を三分の一程登った頃、ブナの木の下の弁当を食べた。その時十二時二十分であった。ふと思ひ浮かんだ「今日はまだいつもより時間が早い」。仙沢のツバクロの滝を下流から写真に撮して行こうと思つた時、早々にリュックをせおつて白ブナの林を横へ横へと進んだ。この見場所は、過去長年、私の夢であった。熊笹の中を熊公がブナの実を食つかいたばかりのあと

が処々に見えた。川の音が聞こえ始めてきたなと思つたら、すごい岩壁にさしかかった。ふと右を振り向くと岩管山の山頂が大きなあぐらをかいてデンと座つて眼下を見下しているかのように見えた。カモシカの通り路が岩壁の中腹にずうつとついていたので、その道づたいに岩をぬけると小段があつた。そこではお猿の群が遊んだとみえて、笹の葉をすぐくちぎつたり、草をたおしたり、タラの木に登つたり、下りたりしたらしく、木の皮がスれていた。コメツガの大木に万年茸の大きなのが出ていたので、もぎ取つてみたがリュックに入らないのであきらめた。地すべりでもしたようなガラガラと、中形の乱石した場所をすずかに下ると、意外と足場の良い所で川に着いた。その時、自分の現在地点を考えて見た。過去一〇年程前に、野反湖のダムサイドより下流へ下流へと写真を取り乍ら下つて、最後になんとしても通る事の出来ない岩壁と滝にさしかかり、その時、写した滝が現在六合地誌にツバクロの滝と名付けて出ている。その滝より、現在地点は上流に居るものと思ひ込んでゆとりをもつて、リュックからみかんを取り出して食べて、川を登り始めた。ふとフチの底を見ると、三〇センチはらくに有る魚が二匹、並んで泳いでいた。その上にも又見えた。「よし今度はここへ魚取りに来るぞ」とつぶやき乍ら、野反湖へ三時頃までに家に帰れると思ひ乍ら、八〇メートル程登つたが、余り記憶にない場所にさしかかった。「おかしいな」と思ひ乍ら肩までもある岩の段をやつとこの思ひでケンスイをして登り、岩つつじのかぶに命をかけてしがみつき乍ら、上の段へようやく上つた。もしそのかぶが根こぎになつたら、底の見えない程深いフチへまつきかさまに落ちるかと思うと、ぞつとした。カモシカの骨が大きな石の上に乱れていた。そうとう古い物に見えて青く風化していた。たぶん雪のナ

ダレでつき落とされて死んだのではないかと思う。なんだかうす気味悪くなつた。ふと、進んでいる前を頭を上げて見ると目の前はまつくらやみになつた。ものすごい岩壁のとりでで、東京の千代田区へでも行つたようなビルの谷間ではなく岩の谷間、一回には、見上げられない程高い岩壁から流れ落ちる滝、でもそれは本流の滝ではなかつた。右岩から落ちる滝、思わずカメラを出して四、五枚シャッターを切つた。一度には入らないのでカメラを縦にして二回に写した。「大した記録写真が写せた」と一人言を語り乍らカメラをリュックに入れて立ち上り、左右の岩を見廻したが登れるような処にも見当たらなかつた。思わずため息をついた。

さて引き返す事も進む事も出来なく、一時は途方にくれた。こうした時はあせるべからずと自分に言いきかせて、じっくりと四方を見廻した。すると自分の立っているななめ後に、約二〇〇メートル有るかと思われ一線の洞がぬけて見えた。良く見ると頂上の方にちよつと笹が見えた時、思わず「しめた」とさげんだ。この洞を登りつめれば大倉の肩に通じるものと思ひ一歩一歩足をふみしめ、よつんばいになつて手に力を入れてのぼり始めた。足をすべらせたら、それこそいつきに谷底へ転落かと思うと、ヒヤ汗が出る。汗が目にしみて、手でふくことも出来ず、手袋の指先で目玉をかくく押さえて、もう一度岩の段から手をのぼして、コメツガの根っこに手を掛けて、又一足、ようやくして笹が手に届く頃、太陽は大分かたむいていた。カモシカが二匹声をそろえてシェシェと逃げていった。たぶん自分に気づいたのではなからうか。ようやく岩が終つて、笹に入った時、ほつとした。これで家に帰れるのだと思うと、急がつくりした。

腰を下して、みかんを食べて一休みした。予備食の菓子を口に入れたが口がかさかさで食べることは出来ない。又しばらく笹の山をななめ上へ上へと登りつめた。ようやくにして出た処が大倉坂の八合目処で有った。それから大倉の肩まで登り、今苦しんで登りつめた岩壁を反省して見た。さっきの高い滝はツバクロの滝を下流から見たのであった。大きな魚は命と引替えてはとも行く気になれないと反省した。もしこんな谷底で遭難したら、それこそどうしようもないと思うと、身ぶるいがした。

大自然の厳しさと恐ろしさをつくづく身を感じた。思いつきな計画と無理な冒険は山岳マナーに反する行為で、ぜつたいに今後つしまなければならぬと自覚した。そんな事を考えている内に、もう日はとつぷりと暮れていた。それからピッチを上げて急ぎ足に野反へと向った。

ハンノキ沢の登りを登る時には、疲れ果てた足を引きずり乍ら、やつとの思いで、車にたどり着いた頃、野反のキャンプ場は灯り一つ見えなかった。夏のシーズンになれば、町を思わせる程、灯りが限りなくあり、活気ある野反も、まさに夏山の変化を物語っている静けさと言うよりも、寂しさを感じた。

白砂溪谷遭難対策訓練記

一九七四（昭和四九年）八月三〜四日 山本 茂

心配した天候も快晴に恵まれ、みな予定の時刻に集合する。食料その他の荷物の点検後、宗太郎氏の新車にゆられ、期待と不安の入りまじった複雑な気持で初めての白砂山沢登りに出発する。林道終点にて荷物を

分担し、惜しみながら宗太郎氏とわかれ、いよいよ白砂川に挑む。沢にて再度身支度を整え出発する。

肩の荷もずつしり重く、これからの沢登りの困難さを予告するかのようだ。雨上りの川は意外に深く腰までの川は肌冷たく、すこし油断すると足をすくわれそうだ。

途中、水深があり、流れの強いところはロープの助けを借り、岩の腹をすいつくようにすりぬけ、大石をよじのぼり、文字どおり、水と石との戦いだ。竜の口にて四人の若者のパーティに出会う。地下タビにわらじの、見るからに山男らしい人たちだ。

滝の霧で涼をとりながら昼食をする。谷の上に黒い夕立雲がはり出したが、又すぐ晴れる。荷物を軽くして出発する。

すぐ竜の口の回り道にかかる回り道は四五度の坂道。道といつても道はなく、歩いたところが道になる。ところどころにくらんぼのふんと足跡があり、人の道のごとくふめている。尾根はしゃくなげにおおわれ、見事に育った純白の万年だけが頭上で見守っていた。

三俣沢と三段の滝の間で、左手の山の中にくらんぼをみる。危害を加えない我々に安心したのか、ゆつくりと山を登っていった。この辺は山の生き物にとっては、楽園なのだろうか、又そう願いつつ出発する。

大空堀のケルンに安全をねがい、三かかえもある天然の大から松を右手に見て、やがて四万川を過ぎると「さあ、もう少しだ。」という声がかかる。思わずスルスホテルの番頭さんの出迎えに胸をふくらませ、重たい足を早くした。「あれがスルス岩だ。」という声に、前方上の方を見ると、見上げる高いところによこつとつかった大岩が見えた。ホツとした気持で足を早めると、まもなく岩洞に到着した。

間口二間、奥行一間半ほどの立派な万年ホテルだ。安どと満足の気持ちで疲れも忘れ、休む間もなく夕げの仕度にとりかかる。

燃料、食事、ベッド各係に分かれ、手際よくすませる。すべての準備が終了したところで、食堂に集まり、ごはんのこげつきと、もつのおい、おかずにきょうの沢登りに花を咲かせる。下界のことも忘れ、山の話が最高潮になった頃、ホテルの外灯が沢の流れを照らし始める。沢の流れの音がかかる頃、そろそろ昼間の疲れと食べたものがからだに行きわたり、ねむけがさしてきた。みどりのふとんに横になった頃、外灯はすっかりホテルの屋上に登っていた。朝方の冷え込みは厳しく、ホテルの外灯の明るいことは朝ねぼうをさせてくれない。朝明けと共に起床する。荷物は軽くなったものの、からだの調子は出発の時より悪く、白砂への登りが心配だ。出発前に岩柱と本流の奥を見る。

沢登りにかかり、しばらくして清光さんが両足関節のいたみを訴える。これから最もきついコースなので先の大事をとって荷物を分担してせおう。沢の終わりまではあまり無理なく登ることができたが、沢が切れて熊笹にかかると、さすがに大変になった。笹は我々に逆らう様に下につき出て、やつとかきわけて一足出すと、水の上のようにスルツと足をさらう。やつと山の肌を足で踏みつけてよじ登るといふ状態だ。一步一步が大事な戦いだ。この困難なコースに清光さんは一步一步挑戦してくれただ。こめつがの枝の切れ目から上の間の岩肌がチラッと見えた時、みな安どの胸をなでおろした。さあもう少しだ。みんながむしやらにがんばった。熊笹が切れて最後の岩場にさしかかった時、もう大丈夫だと、ほつといきをはいた。

頂上に腰を下ろして、みなよろこびの顔をみあわせて、清光さんのが

んばりに敬服した。時間は予定どおりだった。

それからは、かみそりの刃のようなやせ尾根がつづいていた。白砂の一山手前、猟師の尾根の頭で食事をとり、目指す白砂に向かった。

うすい雲で太陽はさえぎられ、やけつく暑さからは免れることができた。苗場への分岐点を過ぎるとすぐ白砂の頂だ。疲れた顔にもよろこびを隠しきれず、登頂のよろこびを確認し合った。

記念写真をカメラに収めると、まだ長い野反をめざして出発する。堂岩山までは、はい松としゃくなげのなだらかなコースだ。しかし、意外と長く、まいりやすい。途中、赤湯に抜ける若者に会う。今夜は白砂泊りとのことだ。

堂岩からは最後の下りにかかる。下りがぎつくなり、清光さんもじつとがまんして、一步一步足をかばうようにして下っていく。休む時間も惜しんでひとりコツコツと下っていく姿がとても痛ましくもあり、力強く感じられた。地蔵峠で最後の休憩をとり、無事帰ったことを感謝して野反を目指す。

予定より三〇分遅れてバス停に着いた時、どの顔も自分の足で歩きとおしたという満足感に満ちていた。

参加者

リーダー 山本鉄雄 黒岩竹松

サブリーダー 中村 司 本多辰雄

カメラ 山本良市

衛生 霜田清光

カメラ 山口清良

記録 山本茂

第一日目 八月三日(土) 晴

- 八〇〇五 八〇〇五 花敷温泉口
- 九〇〇〇 九〇〇三 白砂林道終点
- 九〇〇五 一〇〇〇〇 白砂川
- 一〇〇三〇 一〇〇四〇 木戸沢
- 一一〇二五 三段滝
- 一一〇四〇 武衛門の沢
- 一二〇〇〇 一二〇三〇 竜の口
- 一三〇〇五 回り道尾根
- 一四〇一五 三段の滝
- 一四〇三〇 大空堀沢
- 一五〇〇五 四万川
- 一五〇四〇 スルスの岩洞

第二日目

- 七〇四〇 スルスの岩洞
- 七〇五〇 八〇二〇 岩柱
- 九〇〇〇 九〇一〇 中次郎沢
- 一〇〇一五 上ノ間山
- 一二〇〇〇 一三〇〇〇 獵師ノ尾根ノ頭
- 一三〇三五 一四〇〇〇 白砂山頂
- 一五〇三〇 堂岩山

- 一六〇五〇 一七〇〇〇 地藏峠
- 一七〇三五 一九〇一〇 野反湖
- 二〇〇二〇 花敷温泉口

野反湖、大高、赤石、大沼縦走記

一九七五(昭和五十年)七月二十〇、二十一日 山本茂

心配した天候も快晴に恵まれ、定刻に出発する。夏とはいえ、早朝、快走するトラックの上で受ける風は、肌に冷たく感じ、素早くシャツの袖を下ろすほどだ。

花敷温泉口にて六人乗車、和光原にて七人乗車、富士見峠にて一人乗車し、総勢一四人となった。きょうの山登りのさい先の良さを知らせるのか、富士見峠からは、くつきりと富士山が頭をのぞかせていたのが見えた。又、いつになく澄みきった空のもとには、きれいな雲海の上には秩父連山が見られた。ロッヂでお世話になった車にお別れして、キャンパーでにぎわう野反を後にした。

えび山への登りは、熊笹が深く、検なわでの実測は簡単にはいかなかった。それでも、先頭と後尾の意気があった、心良い掛声を聞いていると、自然と足も軽くなるようだった。

えび山では、すばらしい眺望と涼風に首をふっっている白山フウローに慰められ乍ら第一号の道標を打ちつけた。あちこちで心地よいシャッターの音がし、お花畑としてのえび山を満喫してから高沢へと出発した。

高沢では、三壁、高沢一周ハイクの大パーティーに会う。「こんにちは」「こんにちは」「実測ですか、ごくろうさん」と互いに交わす言葉にひと時疲れを忘れ、かもしか平への下りに元気に腰を上げる。左手に、長い

風雪に耐えて型づくられたドウダンツツジの見事な枝ぶりを見ながら、ニッコウキスゲが咲き競う。かもしか平へとかけ足で下った。小休止の後、いよいよ大高への厳しい登りに出発した。この登りは、予想どおり深い熊笹に悩まされ、倒木や根つこで足をとられ、転倒する人が続出した。陽も高くなり、暑さの厳しい中で熊笹こぎは、山男をいやというほど痛めつけた。ここで二人の遅れがあり、昼食予定地、小倉分岐点に一時遅れて到着した。

昼食には格別の木陰があり、それぞれ自慢の愛妻弁当？をひろげ、にぎやかな野外昼食会が始まった。牛缶が煮える心地いい蒸気の音の中、ウイスキーやビールの栓も抜かれ、にぎやかな会話の中に「歌まわしになるがな：」というほど盛り上がったものになった。しばらくして遅れた二人も無事到着した。

昼食後、避難小屋まで下つてみると、小屋は山を愛する登山者達の手により、きれいに片付けられ、山の安全を守るために、立派な姿をみせてくれた。そこでのどを刺すような冷たい水を補給し、分岐点に戻った。一時間の休憩の後、残る半道中のコースに出発した。熊笹は増々深く、一歩一歩笹をかき分けて進むところもあつた。暑さも増々厳しくなり、シャツの腕まくりをみると、熊笹は容赦なく腕を切りつけ、流れる汗でヒリヒリしてくる。止むなく、又袖は下ろされる。大高から一時間、小高を過ぎて間もなく、大木が茂る格好の休息所があり、一時休むことになった。ところが、下界には見られないようなマンモスが急襲し、あまり長居をさせてくれなかった。あまりのむさくるしさに「その辺に美人でも出て来ないかなあ。」としみじみと言う者があり、大笑いする。そこで気持を新たにして元気で出発する。左に魔のガラン谷、右に魚野

川を見ながら進む。深い熊笹は途切れることを知らず、どこまでも続いてきた。暑さと疲労で、気も滅入りそうである。ダン沢の頭、湯沢の頭を過ぎると、熊笹は増々深くなってきた。そんな厳しい行軍の中も実測は一時も休まず、ずっと続けられた。そこで滅入る気持に勇気と慰めを与えてくれるものがあつた。それは、高い熊笹の下に、ひっそりと咲いているゴゼンタチバナであつた。一日、ほとんど陽の恩恵を受けないような熊笹の陰でかわいい花をつけているゴゼンタチバナを見ると、花へのあこがれと勇気が湧いてくるようであつた。又、まだ数時間しか経っていないような熊らしいふんなどもあつた。人里離れた、奥深いところなんだなあとつくづく思いながら深い熊笹をわけて登る。

急な登りと深い熊笹も終り、たいの岩を過ぎると、こんな高い所にと驚くような所に、水ばしろうが群生する仙人池があつた。池の回りは、どこを歩いてもジグジグとしており、こんもりと繁つた原生林を水面に写しているところは、なるほど仙人池だなあとと思う。誰に見られるでもなく、誰にふまれるでもない水ばしろうは驚くほど大きく育っていた。間もなく、きょう目指す最高峰、赤石山に到着した。

赤石という名の山に合わず、切り立った岩には夕日に映えた青苔が一面についていた。裏側の真下には、やはり真青な水面を夕日に反射させて、大沼が静かな姿を見せていた。日没間近な夕日を受けたこれらの景色は、きょうの強行軍の疲れを忘れさせ、もうあと一息ということが気持ちほぐしてくれたのか、シャーターを切る音も一段と多くなる。

赤石からの下りは、きょう一日の登りを一気に取戻すかのような急な下りで、ほとんどが階段になっていた。これにはさすがの山男たちも悲鳴を上げたくなるほど足にこたえるものだった。足を引ずる思いで大沼

ロッジに着くと、健脚組はとつくに到着して、ゆうゆうと休んでいた。ロッジでの冷たいジュースと熱いお茶は、又格別な味わいだつた。投げ出したくなるようなまいった身体も、又どうにか回復し、いよいよ最後のコースに向けて出発した。

長かつた熊笹コースと階段コースから、石ころだらけのダラダラコースに変わり、皆、最後の力をふりしぼつて頑張つた。自動車の走り去る音と共に目の前に現れた清水橋の補装道路を見た時、ヤレヤレ着いたぞ!!と胸をなでおろした。この時ほど車の通過がうらめしく感じたことはなかつたらう。

しばらくして落着くと、遠く山の内温泉郷の空がきれいに夕焼しているのに気づき、あわててシャッターを切つた。

後続組を待ちながら路端パーティーが始まる。しばらくすると、ガラ空きの終バスが下つていった。「あれに乗れたらなあ」としみじみ思う。バスが下つて間もなく後続組が到着する。時すでに七時を回り、薄暗くなつていた。いつ来るかわからない迎えの車を待つよりは少しでも歩こうということで又出発する。何台かの車に会つた後、やっと先発隊が連絡してくれた迎えの車が来た。一同ほつとして車中の人となつた。蓮池からは、先発隊も合流し、二組に分かれてロッジに向かうことになつた。グロッキー組とシャキット組にわかれ、グロッキー組が先に出発した。シャキット組にはものすごい健脚の持主がおり、走る車をかけ足で追つてくる勢いであつた。「あの人たちは何を食つているんだんべえ。」という驚異の言葉が出るほどだつた。自分の身体を辛うじて車にまかせて乗っていると、快適に走る車窓からは冷たい夜風が心良く顔をなでていた。うつろな思いできよう一日のコースを思い出していると、高い所に一際

明るくなつた所が見えた。ロッジの主人に聞くと、それが今夜の宿である横手山々荘だということだ。渋峠にて長野原の二人の人とわかれる。間もなく宿に着くと、あたたかい雰囲気山の山荘と宿の人達の出迎えを受け、安堵の気持ちで玄関に入る。

シャキット組にすまないと思ひながら、先に休ませてもらった。縦走成功パーティーでは、ストーブがほしくなる冷たい夜、時の過ぎるのも忘れて、いつまでも談笑が絶えなかつた。

コースおよびタイム

第一日

七〇〇	花敷温泉口
七二〇	七五五 八二〇 和光原野反湖
九〇〇	九二〇 九三〇 えば山
九二五	一〇〇〇 一〇二五 一〇三〇 富沢山かもしか平
一一三〇	一一四五 大高山
一二一〇	(昼食) 一三二〇 避難小屋(小倉分岐点)
一三三〇	小高山
一四四五	一四五五 一六四〇 だん沢の頭仙人池
一六五〇	一七二〇 赤石山
一七四〇	一八〇〇 大沼池
一九〇〇	一九一五 清水橋
一九五五	渋峠(横手山々荘)

第二日

横手山 芳ヶ平 太平 兵衛池 大池 元山 小倉 長平

参加者

和光原 本多辰雄

山本敬一郎

山田正人

霜田清光

本多康雄

根広

中村 司

黒岩竹松

中村一雄

世立

山本良市

引沼

山本鉄雄

山本八十二

山本 茂

長野原

鈴木広義

酒井正躬

リーダー

中村 司

サブリーダー

山本鉄雄

黒岩竹松

記録

山本敬一郎

山田正人

山本 茂

撮影

本多辰雄

衛生

霜田清光

魚野川

一九七六（昭和五十一年） 黒岩 竹松

五十一年七月七日から二日間、魚野川を徒渉した。

会長をリーダーに二名で、朝早く涼しい内に歩こうという事で、花敷温泉口を六時半に出て、車で野反湖まで。霧が上って湖水がきれいだった。各自に荷物を分け合って七時四十分出発、秋山郷、和山への道を通り、地蔵峠で最初の小休止、リュックが肩にくい込み、汗をかく。裏岩菅山の稜線が見える。直上する白砂山への道と分かれて北沢へ下る。北沢から道は又登りになり、少し登ったあたりから根曲がり竹がある。朝露で濡れるが気持ち良かった。ダケカンバの林をすぎ、ツガの林をぬって荒戸沢、水がつめたくうまかった。佐京横手を少し行つて道は下りになつて左京沢へ出る。

二五分程登つて大倉の肩、すぐ目の前に岩菅山が、そして目的の魚野川が樹林の中に深くぼとぼとなつて見える。真下に千沢の滝がはるか下の方に見え、滝の音が聞える。カメラマンが忙しく動く。ふり返ると野反湖も見える。一五分程休んで大倉坂の百数十曲りを下る。いつ下つても上つても楽でない坂道だ。半分程下つた前方の樹林の中から渋沢ダムが見えた。疲れを忘れて一回元気づく。ペースが早くなつた為、この下りでスタミナをとられた。東電の千沢水位計の指導標にしたがつて、和山道と分かれて川に下る。川原で弁当、御茶をわかしたりして一時間休んで、遡行の準備をととのえ、徒渉をはじめ。早くもイワナの動くのが見えた。五分程で千沢の合流点、本流に入つて少して桂ゼン不動ゼンと

つづいて場所が悪い所だ。左岸尾根に釣師の踏跡をみつけて第一回の高捲き。石楠花などにつかまって、五分程で終り、すぐ又右岸へ回り道、滝場の捲き道は、釣師の踏跡で解るため助かった。中岩沢、十六沢を過ぎて高沢の出合について、徒渉をはじめ二時間かかった。カモシカ平のくぼを源とする高沢本流と合流するとき、すごい水量で驚いた。滝が段々に続いていった。

高沢より一〇分で大ゼンの滝、右捲きしてこのあたりから広川原になる。水がすんでいて、川の底まで見通せる。人にも合わず、ただ滝の音だけ。昔は多く魚影がみられたとか釣師が多く入る様になってから魚も減ったとか、幾度となく徒渉をくり返して、三時十五分に、やつこのことで目的のキャンプ地、黒沢の出合に着いた。(昔は釣師の小屋があったとか)水質の良い黒沢右より、なだらかに本流と合流していた。左岸の川より少しよった所へ天幕を張った。手分けで薪とりなどを済ませてから、晩酌の魚とりに出た。ベテランがいて結構間に合った。疲れたので誰も良く眠った。六時起床、朝の内、時雨があつたがすぐ止んで、日中暑くなる。八時半、荷まとめをして出発。

三〇分程徒渉して左岸を高捲き、そして少し行って、カギゼン、岩スゲゼン、スリ鉢ゼンとつづく、魚野川を代表する静かなでつかいふちだ。一時間半で、うしろ川原の小屋へ着いた。うしろ川原小屋より飛び石づたいに、二〇〇メートル程上ってツバクロゼン、高さ七メートル程の滝だ。左から小ゼン沢が合流している。右のがれ場を捲いてすぐ徒渉して、そのまま小尾根を越して小ゼン沢へ。残念ながら本流と分かれて、三〇〇メートル程上って弁当、味噌汁をたいていて、雷雨になったのであわててまとめて、段々のセンを登って広川原、水がくぐってなくなっ

ている。ふたたび水があらわれ二俣になる。右へ行くとオツタテ峰から小倉へ下る。今は荒道となつている。沢は悪いが左を登る。五三郎小屋が出来てから、このコースを通る人が多くなつた。途中、ロープが下つていて、それで登る所さえある。雨の為、視界がきかず夢中で登つた。五三郎小屋は汚れていて、雨の為よけいきたなかつた。三〇〇メートル程で野反―志賀、稜線徒歩路へ出てから、五三郎小屋を建てた時の作業道を通つて細野の池をすぎた頃から、深いクマザサにおおわれて道跡がわからなかつた。がらん沢分岐へ出た時はほつとした。

コースタイム 第一日

野反バス停(四〇分) 地藏峠(四〇分) 荒戸沢(二〇分) 佐京沢(二〇分) 大倉の肩(四五分) 大倉坂、水位計、指導標(一〇分) 本流(五分) 千沢出合(五分)、桂ゼン(五分) 高捲終り本流(二〇分) 中岩沢(一〇分) 十六沢(四〇分) 高沢(五〇分) 里沢出合

コースタイム 第二日

黒沢(三〇分) 高捲(一五分) 本流(二五分) 岩スゲゼン(二〇分) うしろ川原(五分) 燕ゼン、コゼン沢出合(六〇分) 広川原(六〇分) 五三郎小屋(一時間半) ガラン沢分岐(三〇分) 小倉

ガラン沢スキー遭難者救助活動

一九八〇（昭和五十五年）三月三十一日 六合山岳会

そろそろ山の雪も解け始める三月末、志賀高原に春スキーに来ていた高校生が、横手からガラン沢に入り遭難したので、救助を頼むという要請が山岳会に入る。

三月三十日夜のことである。少しかぜ気味でもあり、地区に四十九日の供養もあるのでどうしようかと一瞬考えたが、遭難救助という、人命に関わることなので、すぐに行くことに決断する。

八時に小倉広場に集合する。着くとすぐ遭難者の父親にあたる人が、寄ってきて、泣きながら次のようなことを話してきた。

「私が父親です。今日は救助に出たいて有難うございます。私の息子は芯の強い子で頑張り屋です。きのう長野の救助隊がスキーの跡をたどって来たが、夕方まで掛かって到々追いつかなかつた。一六歳という若さでありながら、一日救助隊が追いかけても、息子の足の方が早かつた。その位、私の息子は頑張りのある子です。だからきつと生きていると思います。どうぞ助けてください。」と泣きながら必死に頼んできた。

この父親の我が子を信じる姿と助けてやりたい、助けてもらいたいという必死の願いを聞いていて、自分のかげのこと、体の調子の悪いことなどすっかり忘れてしまった。

とにかく、できる限りの力を尽して助けてやりたいという気持ちになった。農協に保険を掛け、三つの班を組む。

惣吉地蔵の近くまで三十日の日に長野の救助隊が足跡を追跡して来て、日没のためへりで引返しているということが分かっていたので、一班は惣吉地蔵から川へ、二班はきのこ沢を、三班はダムの上から川をのぼることになった。

こうして三つの班で、上下からはさむようにして、捜索することになった。

三班は、原で車から下りるとそこで雪輪をつけた。そして原を横切ると、道なき道を真直ぐに川に下つた。川を右に左に横断しながら、川を登っていく内に、いつか長靴の中に水が入り、下半身はぬれぬずみになる。それでも、どこかに足跡はないかと目は雪の上から離れない。

一つ一つの曲がりや、高い所を越す度に、今度こそ足跡がないだろうか、遭難者がいないだろうか、と期待しながら足も早くながちである。それにしても昨夜は、かなりの雨だったので、果たして無事でいけるだろうか、それともだめだろうかと頭の中を色々な考が行ききする。父親が言っていたように、ねばり強く、最後まで頑張っていてくれるだろうか。今はただ、遭難者の生きようとする生命への執念と、天命を願うばかりであった。

しばらく進むと岩場の難所に出た。左右どちらも切り立った岩で、大変難な所である。止むなく、右を大きく巻いて登った。ところが、その尾根に足跡らしいものがあつた。ふみつけられて固く氷ついていた。

みんなで確かめたところ、鉄砲打ちの足跡だろうということになった。確かに普通の人では登れないけわしい所に足跡がついていた。

間もなく大きな滝壺の所に出た。左を巻いてやっと登ったが、下りるのに又大変である。正人さんが先頭をきつたが、危うく滝壺に入りそう

な所をうまくひざをつけて、はうようにして、やっと止った。

滝壺に落ちることは逃れたが、それこそ腰から下がずぶぬれになった。又運悪く、その後頭上からの落石があり、うまく逃げたが大きな水しぶきに、後ろから水をかけられ、ダブルパンチとなった。そこからは、もはや上には進むことは出来なかった。

ちょうどその時、無線で「新しい足跡発見」という連絡が二班より入った。それから間もなく「遭難者発見。」という連絡が入る。しかも無事だということだ。一同固く握手を交して「おめでとう、よかった。」と喜び合った。

一度に、今までの緊張が体から抜けたようだった。この危険な深い沢がパツと楽園のような明るい所となった。

その後遭難者は、惣吉地蔵に出す旨の連絡が入り、三班はタカノスの尾根からキノコ沢の方に回ることにする。

ところが引き返すのに、今登った滝壺が、なお難コースになった。

素手では到底登れないので、ザイルを使うことにした。運良く、上に木の枝が出ていたので、そこに掛ける。神戸の人が危うく壺に滑り落ちる所であったが、ザイルでどうにか免れる。

タカノス尾根を少し登った所で、昼食をとり、急な雪の山をラッセルしながら登る。ほとんど正人さんがラッセルをやってくれた。頂上間もない所で私に代り登る。腰ほどの雪が、ずっとあるので、ジグザグの大きい回りをして登る。

沢から、上の道まで、一時間くらいかかる。上の道に荷物を置き、一休みしてから、地蔵に向かう。

遭難者は地蔵に向かっているとところだ。本部の方にも救援を要請する。

地蔵までは、きのう役場の人達が捜索に入っているので道はかなりふめていた。キノコ沢まではスキーの跡もあつた。そこで、雪輪は外して行った。

途中無線で、そりについて救助班と連絡し、本部に要請する。木で担架を作り、搬出しているところだが、地蔵下は相当雪が深く、かなり難航している様子だ。

二時前に地蔵に着くと道まで三〇メートルほどの所まで登ってきていた。五・六メートル登って休み、五・六メートル登って休むということの繰り返しなので時間も掛かる。雪が腰まであり、足場も悪く、救出者の体力消耗も著しい。

とにかく人の手だけではだめだということになり、直ぐ本部にそりを確認する。大きいのがなく、子どもの物を二台持って来てもらうことにする。前の人が、道の両脇を踏みしめ、その後を担架を持った人が歩くようにして、五・六人ずつ交替で搬出する。

キノコ沢ですでに四時を回り、発見から五時間近く経過していた。発見した時は、全身ずぶぬれで、深い雪の中で意識がもうろうとした状態でうずくまっていたそうであるが、その後すぐ着替えをし、たき火をたいて、身体を暖ため、三〇分ほど、体力の回復を待つて搬出を始めたそうである。

キノコ沢で小便を訴えたが、あとわずかで到着するということがまんしてもらう。

「寒くないか」との問いに「寒くない」とはつきり言える。

丸二日、何も食べないで雪の中、雨に打たれながら二晩を過ぎた子と思われない、しつかりした態度である。

父親が言っていた通り、大変気持のしつかりした子であったと感心させられた。

キノコ沢で休んで居ると、小倉からの救援隊が到着し、そりを持って来てくれた。さつそくそりを担架の下につけて、ザイルで引き出すことにする。救急車の手配の確認をする。既に手配済みとのこと。

それでもかなり大変であったが、手で支えて運び出すよりは楽だった。しかも時間も相当早かった。

キノコ沢からは、最大の難所であったが、その威力で、予想以上に早く登れた。

タカノス尾根で、五時を大分回っていた。最後の休憩をとり、燃料の補給をする。ここからは、下りのコースなので楽である。時間も一〇分ほどで下れそうである。

みんなの声も明るく、元気になり、出発の合図で一斉に腰を上げる。滑りが良いので、後ろでブレーキをかけながら下る。道が狭く、そりが良く滑るので、下側は、雪の深みにはまってひっくり返る人もある。

いよいよ馬止に到着である。

家族、救急隊、報道人、本部、地区の人などたくさんの方が待ち構えていた。父親の嬉しそうな「ありがとうございます」が印象的であった。そりからすぐ下し、早速小便をささえながらさせてやる。長い恐怖の後のためか、小便もしばらく出ないようであった。

父親と救助隊の人と車に乗ると、一同ホツとした顔で車を見送つてた。

この遭難救助を通して、人の命の強さと、はかなさを強烈に知らされた感じだ。

そりを引きながらも、担架を待ちながらも「死人を運ぶんじゃない張り合いがねえぞ」という声を聞いた。ほんとうにその通りである。まかりまちがえば、死人を運ぶことになる。たまたま、若さいっぱい、頑張りのきく子であったため、生還できたのだと思う。

山本 茂 記

謹 啓

草木も花咲く頃となり、皆様方には、益々御健勝のことと存じます。この度、スキーに参加して、子供が道に迷うという不慮の事故を起し皆様方に大変な御迷惑をおかけしました。

幸い、皆様方の昼夜をいとわぬ救助活動や励ましで、無事元気に生還することができました。

私達家族は、この不慮の事故を通して、人の心の暖かさに感動し、又私達は、この感激を大切に役立てたいと思っています。

お訪ねして御礼を申すのが本意でございますが、略儀ながら、書面をもつて御礼にかえさせていただきます。

大変お世話になり、ありがとうございます。

末筆ながら、皆様の御健康と御多幸を心より御祈り申し上げます。

一九八〇年四月

野村光正 和代

高志 いづみ

ガラン沢遡行記

一九八三（昭和五十八年）七月三十～三十一日（土・日）六合山岳会

参加者

リーダー 山本敏明 班長 山本春好

サブ 山本 茂 山本宗晴

一人名 記録 本多友二郎

安ヶ川幸好

山本辰治

衛生 山本今朝幸

山本昭夫

山口一久

植物 山本 機

コースとタイム

第一日目 七月三十日（土）

七：三〇 引沼

八：〇〇 馬止

九：〇〇 惣吉地藏着

九：二五 惣吉地藏発

九：四〇 広河原

一〇：〇〇 日陰ガラン

一一：三〇 日陰ガラン発

一二：一〇 ガラン上着（昼食）

一三：〇〇 ガラン上発

一三：三〇 白沢

一四：〇〇 千十滝

一四：三〇 白水沢

一五：〇〇 フサ沢

一六：三〇 鉢山沢（テント）

第二日目 七月三十一日（日）

八：三〇 鉢山沢

九：〇〇 湯の花沢

九：三〇 鉄山あと

九：四五 水路

一〇：〇〇 草津峠

一〇：四五 横手下道（スキーコース）

一一：〇〇 横手下発

一一：三〇 横手山頂着（昼食）

一三：〇〇 山頂出発

一四：〇〇 芳ヶ平着

一五：〇〇 芳ヶ平発

一五：四五 平兵エ池入口着

一六：〇〇 平兵エ池発

一六：四〇 穴地獄

一七：三〇 引沼着

第一日目 七月三十日目(土)

山岳会としては、二回目のガラン廻行である。幸い天候に恵まれ、予定通りの出発となる。

帰りの車、買出しは、いずれも前日にすませたので、準備は全てOKである。

馬止までの輸送は、文夫君が引受けてくれたので、朝の涼風をつき、一路ガラン沢へと向かう。

途中、小倉で最年少の一久君が乗る。両親が、息子の無事を祈るように見送っている。

林道の鍵のことで心配であったが、とにかく行く所までは行ってみるということで、遮断機まで行くと、幸いに開いていたので、無事通過することができる。

馬止で、買入れた物をそれぞれ分担してザックに入れ、いよいよ自分の足でガラン沢を征服する廻行に出発である。

出発を前に、文夫君に全員の無事を願い、記念撮影をしてもらう。そこで文夫君に別れて山道に入る。

まだ刈りはられていない道は、朝露でたちまちびつしよりになる。きのこ沢の上で、第一回目の休憩をとり、早くも杖を用意する人がいる。

惣吉地蔵で、用意した塔姿で供養をする。供物、線香、賽銭、読経(春好)と、一応の儀式が終わり、会長の指導で、一同霊を拝み、供養を終える。

ところが、甘い臭いを知ってか、アロー蜂が飛び交い、ただ飛来するにはおかしいということで、調べると会長のザックの下になんと穴があるということ、一同びつくり、早速、花火でとることにする。ところ

が先をあせったか、花火師は危うく自分がやられそうになり、一同二度ビツクリ、二回目にどうにかやつつけることに成功した。

うじが出たが、うじは今晚のつまみということで、持つて行くことにする。

途中、去年の台風のつめあとがあちこちにある。広河原に出ると、水量も意外と多いようである。少し登ると左岸にテントらしい物があったが、仕事用か、人影はなかった。

日陰を過ぎ、日向に出ると、ピーコックの慰霊銅板があった。日向下をまいて、どうにもまけない大岩の下に出る。ところが、心配

をよそに、友さんはスルスルとその大岩を登り、ザイルをかけてくれた。そこで、全員難なく上がることが出来た。

間もなく、先頭が何か生き物の気配を感じ、恐る恐る進み、岩影を見ると黒い影が動き、熊かと後ろに戻ると、なんと人間であった。よく見ると、若い青年で、岩の下には、手製のベッド、薪、生活用品などが整然と並び、長い山の生活を思わせる。

顔はやさしい童顔で、うすいひげがホヤホヤと生えている。聞くと、六月四日から入り、すでに二ヶ月あまり入っているということだ。あまりのことに信じられない程であった。

しかし、この山の奥で会った人間に、ほのかな親しみを感じ、一同安堵の胸をなでおろす。「鉢山沢にテントを張るよ。」というのと、「遊びに行きますよ」と軽く言われ、まさかと聞き流す。

青年と別れて、間もなく昼食をとる。偶然にも前回と同じ場所であった。四年前のことをなつかしみながら、昼食をとっていると、なんと先ほどの青年がひょっこり現れたではないか。

みんな、「よく来たね」

「今夜は鉢山沢で一緒に飲まねえかい。」

「鉢山沢まで案内をたのまい。」と、大歓迎である。

昼食がすむと、いつか仙人とも、先生とも呼ばれる青年を先頭に、パーティは出発する。

さすがは、ガランの主にふさわしく、足は速く、コースも選定が早くついて行くのが大変だ。所によつては、深い水の中もいとわず通過する強引きもある。それぞれの小沢も、当然のように良く心得ていて、一つ一つ教えてくれる。すでにほとんどの沢に入っているとのことだ。

六月から今日までに、ガラン廻行をやつて来たのは、東京から二四人のパーティ、明大の二人のパーティ、そして今日の六合山岳会の三パーティだけだそうである。

今回の進行では、あらゆる所を、風倒木にさえぎられ、大木をくぐり、よじのぼり、渡つて行くので、時間的にも、身体的にも大変なことが多い。

去年の台風の荒れた様子がうかがい知れる。それでも仙人先生のおかげで予定通りに鉢山沢に到着する。

疲れも相当で、はうように辿り着いた中年組。八〇キロの巨体で試み心配された一久君も若さで最後まで先頭グループを保っていた。又、最大の荷物を引受けた山田君、撮影を一手に引受け、前になり後になり撮影してきた本多さん。初参加の宗晴、昭夫君も若さでいつも先頭グループで頑張っていた。

とにかく大変な難コースであった。しかしみんなよく頑張つた廻行であった。

所で疲れをとる間もなく、テント、燃料、炊事班に分かれて作業を開

始する。間もなく夕立気味の雨が降り始めたが、手早い作業でどうにか大雨前に作業は進む。先生も小まめに働いてくれ、山の生活の体験をおしみなく發揮していた。

六時頃までに、めし、汁、おかずなど、全ての準備が完了し、特製の囲炉裏も出来て、焼肉もできる段取りとなつた。

いよいよお楽しみの大パーティの開始だ。会長の音頭で乾杯を一日の廻行で乾いたのどをたつぷりとうるおす。

盃を干す回も重なり、苦勞して背負つてきたアルコール（酒三升、ウイスキー一升、ビール約三升）も少しづつへり、山ほどの肉も少なくなると、すつかりよいも回り、カラオケも回り始める。

花火師（春好）の準備も出来ると、小雨降るガランのせまい空に、一段とあざやかな花をそえる。先生も久しぶりの下界の雰囲気酔つたか話や歌もなめらかにとび出し、自分の身の上を語る。

名は尾崎博章、徳島の出身で二三才とのことである。時にははつきりした目的はないが、強いて言えば、自分を自然の厳しさの中で試してみることだと言う。

「ズビズバー……」の歌が出る頃、宴は最高になり、あまりの派手な宴会に「山岳会は、はあやだ!!」、という声も出る。又山に来るのに、これ程のアルコールを持つて来るパーティもないという仙人の言葉。

空き缶、空きびんを、どこにもためらうことなくすてる後から、すぐひろつてポケットに入れる仙人の態度には、やはり学ぶべきところがある。徳島人が愛するガランを、地元六合村人は当然愛すべきであろう。

宴は、いつまでも絶えることなく続く。

すでに石のベッドで、すやすやと寝ている者もいる。そんな人を寝せ

ないかのように、いつまでもカラオケをやっているグループもある。

食事すすみ、残飯もかたづけ、歌もつきる頃、時計は十一時を回ろうとしていた。囲炉裏を囲む人も四・五人となり、明日のこともあるので、ベッドに入ることにする。尾崎さんは、銀色のアルミのような物にくるまり火のふちにゴロリと横になる。会員は石のベッドに寝袋でねる。石のベッドは、一時は良いが、ねがえりをうつと、もう痛くてだめだ。それでも、どうにか朝まで休むことが出来た。

雨も、夜の内にやんだので、安心して休むことが出来た。

第二日目 七月三十一日(日)

五時半起床(炊事班)で朝食の準備をする。朝は昼食の分も一緒に煮るので、飯ごうが、めしの分六個、汁の分三個と大変な数である。

それでも良い火が燃えるので、順調に出来上がる。天候も心配ない好天なので、まずは、安心である。ホテルのかたづけも合わせて行ない、食事がすみ次第出発できるようにする。

それぞれ水洗のトイレで、用をすまして、いよいよ二日目の遡行開始である。

このコースは沢登りは、一時間ほどになるので、朝のうちのひと頑張りである。出発して間もなく、川底が黄色くなり、湯の花沢に近いことが分かる。湯の花沢と分けられると、水も少しよくなりコケですべりそうな横手裏沢である。やはり風倒木が多く、遡行困難な所が多い。

間もなく左手の丘の上がると、鉄山跡である。

二日間の遡行から、やっと解放されて、人の気配(人の手がかかった)を感じるコースとなる。

中部電力の水路で、冷たい水を補給し、平らな道を約一〇分、最後に急な登山道を五分登ると、草津峠である。コースも整備され、良い道であるが、この辺りに来ると、すでに足がすっかり参っているので、これから横手への登りが、なかなかきついコースである。木の階段と、緑のスキーコースを交互に登る。

この辺でヤングとオールドの差が出て、先頭と後部の差は、増々大きくなる。自動車やリフトがうらめしく、できることなら、乗って上がりたい心境である。なまけ心にムチ打って、最後の力をふりしぼって頂上を目指す。

いよいよ山頂である。色とりどりのハイカー、山荘の明るい感じ、豆ハイカーなどに、やっと人心地にひたる。ベンチに腰を下ろし、一休みした後、ビールと仙人の心づかいで、差し入れてもらった焼きたてのパンの旨かったこと。一つの目的を達成した後の、この飲み物とパンは、この世で仏に会った心地である。

山荘の奥さんに礼を言い、昼食をとる場所をみつける。アンテナの下で昼食をとり、二日に渡ってお世話になった仙人と別れる。

今夜は山荘で泊り、明日、岩手沢を下るのだそうだ。いつまでも名残りおいしい別れをして、芳が平へと一気に下る。

途中小雨になったが、大降りになることもなく、芳が平に着く。

そこで、佐藤さんの話を聞きながら、ブドー酒でゆっくり休む。芳が平には、爆発の灰が一面に降っていた。大平へのコースから、きれいに刈られて、歩き良くなっていた。

平兵エ池入口で最後の休憩をとり、穴地獄に向かう。

途中、大池、水池を通り、痛む足にむち打って、最後のコースを歩き

切る。穴地獄でやっと車にありつき、「車は便利だなあ!!」と誰ともなくつぶやく。

この二日間、一步一步の遅々とした歩みだが、みんなの力で、ガラシ淵行と、横手、芳が平一周をやりとげることが出来た。ごくろうさんでした。

山本 茂 記

秘境 秋山郷を訪ね苗場山に登ろう

一九九〇(平成二年)、八月四日(土)～五日 六合村山岳会

第一日目

- 七：四五 引沼
- 八：二〇 野反湖
- 九：〇五 地藏峠
- 一〇：〇〇 イタドリ沢手前
- 一〇：五五 左京横手
- 一一：五〇 渋沢ダム
- 一四：〇〇 軌道中間点
- 一四：五五 切明発電所見晴点
- 一五：五〇 切明温泉
- 一六：四〇 小赤沢

第二日目

- 七：〇〇 小赤沢
- 七：二五 三合目
- 八：〇五 四合目水場
- 八：五〇 五合六中間点
- 九：一〇 七合目
- 九：三五 八合目
- 一〇：三〇 苗場山頂
- 一一：三〇 苗場山頂
- 一二：〇〇 一〇合目
- 一三：一〇 四合目
- 一三：三〇 三合目
- 一四：三五 小赤沢
- 一六：四五 蓮池
- 一八：二〇 入山

参加者二四名

霜田清光(子ども一)

山本富雄

山田宗俊

山田今朝幸(子ども三)

山田とめ

本多辰雄

安ヶ川幸好

山本宗晴

山本八十二 山本春好

山本岩雄 山本 茂

関 隆(子ども二)

清水博巳(子ども一)

富沢みちよ

若林弥生

山田作次

登山記

中型で並の台風一〇号が日本本土に向かって北上しているということ
で、夜半から、雨になるのではないかと心配しながら床に着く。いつも
のように、六時に起床し、すぐ京塚山から赤岩方面の空の様子を見ると、
なんと快晴である。

これはもうけもんだと思い、急いでラジオ体操に行く。六時四十五分
頃家に戻ると富沢さんから電話があり、早くも清水屋さんに到着したと
いうことだ。

七時三十分に予定のメンバーが揃い、準備がすすむと、トラックで出
発である。和光原と大原台近くで残りのメンバーが乗り全員が揃う。総
勢二一名(車組三名)である。

野反を予定より三〇分遅れて出発する。快い涼風が顔に感じられ、さ
わやかな中での出発である。それでも日差しは強く、ハンノキ沢の登り
では、早くも玉の汗である。地蔵峠まで三〇分で背中は汗びっしりよ
りである。

水分、栄養物を補給し、地蔵さんに安全を祈願して出発する。北沢へ

の下りを子ども達を先頭グループに進む。コースはきれいに刈りはらわ
れて大変歩き良い。

子ども達は、カエルを見つけては、数えながら元気に歩いている。い
や、むしろ小走りに走っているという方が当たっている。

北沢の登りからは、日差しも強くなり、日陰も少なくなって暑さも厳
しくなる。でも涼風が時々吹いてきて、暑さを忘れさせてくれたり、木
陰に入ると冷たく感じるほどの涼しさなので快適な山登りである。

足元には、マイズルソウ、ゴゼンタチバナ、コイワカガミなどがあり、
ガクアジサイは見頃に咲いていた。

北沢を登りつめた所のつが林の中で、二回目の休憩をとり、イタドリ
沢への横巻ぎ道に向かう。イタドリ沢を過ぎ、オオイタドリの林の中を
進むと佐京横手へのゆるやかな登りになる。大倉山は、右後方になり、
ふり返ると野反湖がすぐ近くに見える。二時間半近く歩いたわりには、
遠くならないとがっかりした声も出る。

三〇年も前にこの辺の原生林を伐採して架線を出すためにワイヤを皆
で背負い上げた苦労話も出る。

見たところでは、直線にするとわずか三キロ足らずであろうと思われる。
人を寄せつけない千沢をはさんで左手には、岩菅連峰が手に取るように
見え、明治十六年に魚野川の支流の小せん沢のミネバリの木に縛りつけ
られ殉職した富永金太郎巡査の話も思い出される。ちよつと油断すると、
クマザサに足をすべらせて千沢に転落しそうな左傾斜の歩きにくい道を
しばらく行くと、いよいよ渋沢への急降になる大倉尾根、西大倉山で
ある。ここで三回目の休憩をとる。

以前、一人で来た時は、野反湖方向の林に猿がいたことを思い出す。

ここからは、ブナの原生林の中をジグザクに一気に約七〇〇メートルを下る。この下りは、後ろ向きに下りたい程きつい下りなので、あまり早く下りないようにしても、足が言うことを聞かず、つい早くなり足は増々笑い出してしまふ。下り始めて間もなくの所で、クマザサをかきわけて逃げるけもののような音に驚かされる。熊、猿、かもしかか？

途中には、シヤクナゲ、ツバメオモト、イワカガミなどがあるが、夢中で下りているので、あまり目につかない。それでも、ツバメオモトの実やイワカガミの葉の光沢は目にあざやかにとび込んでくる。

足つま先が痛いので、なるべく横になるようにして下りる。

次第に千沢、魚野川の流れの音が左に、渋沢の音が右に大きくなり、右下の方にダムが見えてくるとあとわずかである。先頭グループは子ども中心なのでつい足が速く、後続グループと一〇分くらい開く。

思わず「やったあ!!」と声が出るほどつらい下りが四〇分ほどで終わる。すでに朽ちかけた営林小屋をのぞくと、つりに入った人のサインが回りにすき間がないほど書き込まれている。渋沢のつり橋の直ぐ手前を川原に下りた所で昼食をとることにする。(出発は、予定より三五分遅れだが二五分も早く着く)

それぞれに背負って来たビールでのどをうるおし、昼食をとる。子どもは早々と裸足になり川に飛び込んで川遊びである。三才のさっちゃんも一緒になって川遊びの仲間入りである。この下りは自分で歩いてきたそうである。一時間程休憩をとる。

さあ、いよいよ二時間の軌道歩きである。日差しもさらに強くなったが軌道は大部分が日陰である。又、ところどころに沢やトンネルがあり、飲み水には心配ない。道もきれいに整備され歩き良いコースである。し

かし変化のないダラダラ道なので、意外と疲れを感じるコースである。沢の近くに山ブドウがたわわになっている所があった。ホツツジやガクアジサイも咲いていた。最初の隧道にはコウモリが居たが、人の気配に驚き、外に逃げ出してしまった。

右下の魚野川もダム下では水もかかれていたが、佐武流沢、松俣沢などが合流し、川も次第に深く(一〇〇メートルをはるかに越す高さ)なる頃には、水かさも多くなってきた。

切明の送水管が見える所で、二回目の休憩をとる、ここからは、あとわずかで高橋のつり橋への一気の下り坂である。後続グループと一緒にしたのでいよいよ最後のコースに向けて出発する。この頑張りが終わると、今日の歩く所は全て終了である。それにしてもつり橋への下りから切明への最後の登りは、今日一日の疲れと暑さの中でのコースなのできついことひとしおである。

特に林道に出てからは、ひとまがり一まがり期待をうら切り自動車道になかなかたどり着かず、参ってしまう。

自動車道で車に乗った人達を見た時は、みんな笑顔で「着いたぞ!!」と歓声が上がった。富雄さんのはからいで、冷えたビールで乾杯した時は、今日一日の苦勞を忘れさせるに十分なありがたさと言さが頭から足の先までしみ通るような気持ちであった。

ここまでで、富沢、若林の二人は帰ることになった。冷房のきいた車で秋山館へのコースは、車のありがたさをつくづく感じさせるものだった。

途中、和山、上野原、屋敷の部落を過ぎたが、天明三年の飢饉で無人と化した矢櫃六戸、大秋山八戸、甘酒二戸などの墓標と石だけが残って

いる部落があるなどとは、想像もできない程の変わりようである。道はほ装され、家は真新しくなつて、とても秘境などとは思えない所となりつつある。

小赤沢には、店、食堂が並び、賑やかな町の雰囲気さえ感じるほどである。やはり大自然の厳しさの中で生き抜いてきた人達のたくましい生活力の現れなのだろうと思う。

秋山館に着くと、宿のおいしいちゃん、おばあちゃん、それに若い夫婦の温かい歓迎を受け、貸し切りに近い状態で部屋を使わせてもらう。

お風呂をもらい、横になつてくつろがせてもらい、六時半頃から宴会になる。秋山館からの地酒のサービス（おぼすて）やきれいだころの秋山の民謡なども出て、大変な盛り上がりである。明日の苗場山のこともあるので早目に切り上げる。九時過ぎに床に就いたが、エネルギーのあまつている者があり、おかげずしや弁天食堂に出かける人も居た。それでもすまずに夜遅くまで賑わせていたようである。

次の朝は、予定を変更して、起床が六時で出発が七時となった。子ども達は、六時半からラジオ体操をやる。小赤沢の子どもと一緒にあそびになる。

今日も台風の心配のない晴天で、予定通り七時に出発する。三合目までバスが入つたので、一時間は短縮できた。

子どものグループを先頭に出発する。「登りのすぐじはバカがする。」と言いながら、すぐじ（近道）を登る人も居る。やせ尾根に出ると間もなく、四合目の水場である。女性二人のグループがモーニングコーヒーで朝食をとつていた。モーニングコーヒーをねだる者、下山に注意をしてやる者もある。ここから約三時間位の登りだろうということである。

水分を補給し、一〇分程休憩して出発する。

アスナロやツガの根の階段を一步一步登る。五合目頃からゆるやかな、広い尾根道になる。足元には、イワカガミ、ゴンゼンタチバナ、マイズルソウ、ツバメオモトなどがあつた。

頂上の方は、ガスつて見えないが、右方向の横手に登りになった頃かだが、苗場台地への最後の急登になるようだ。

沢が二つ程あつたが、いずれも猛暑のためか水はすっかり枯れていた。石ころだらけの横手で休憩をとり、最後の登りに備える。先頭グループはかなり先に進んだとみえて、連絡がとれなくなる。岩場に近いような急な石だらけの横手が終わるといよいよ最後の急な登りになる。合目もほとんど過ぎて八、九合目はたちまちの内に通り過ぎた。

急な坂を登りつめると、山の中腹を切り落としたように真平な卓上形台地が開けていた。そこから左手に台地が広がり、木橋がコースに並べられていた。

ここからは、まさに苗場にふさわしいかわいい苗田が一面に広がっている。この台地は、四キロメートル四方もあり、五〇〇に近い苗田があるそうである。

池の中にヒメホタルイが群生し、原には、キンコーカ、コバイケイソウ、チングルマ、ミヤマキンポウゲ、ワタスゲなどがあつた。その外、ミカエリスゲ、ナエバキスミレなどの貴重な植物もあるそうである。林の中には、ギンリョウソウがひっそりと咲いていた。

赤倉山、白砂山方面との交わり地点から左に折れると間もなく苗場山頂である。すぐ手前に、苗場山を愛し、開拓に尽した登山家、伊米神社と大平晟の像があつた。

山頂のヒュッチにたどり着くとひと安心。先着組は早くも登頂祝いの宴に入っていた。到着順に冷えたジュースやビールが出され、祝宴に加わる。昼食に加えて、みんなで食べたカップラーメンは、格別おいしい物だった。一時間半程のゆっくりとした休憩をとり、記念写真をとつていよいよ下山である。

なにはともあれ、下りは楽である。足がわらいだすかと心配した人もいたが全員順調に下山できた。特に子どもは快調で、元氣いっぱいの子であった。アスナロの林の中で「あすなろ」の歌も出るほどである。

あすなろ あすなろ あすはなろう

お山の誰にも 負けないで

ふもとの村まで 見えるまで

大きなひの木に あすはなろう

マイクロバスに乗り込んで、座るとひと安心。みんながんばって苗場山を征服した満足感あふれる顔、顔、顔であった。ところが出発間際に秋山館の若夫婦がワゴン車で来て、辰雄さんに家から急用ということ、先にワゴン車で帰る。何事かと不安が車内をつつむ。

通り出ると間もなく、辰雄さんが沈痛な面持ちで戻ってきた。「どうしたい。」というみんなの声に「……」涙をぐつとこらえて無言のまま、座席に着いたので不安は募るばかりである。しばらくして話したことに、車内は驚きと悲しみでいっぱいになった。鶴一さんが建前で二階から落ちて事故死したということだ。

あまりの急な出来事に信じられない思いであった。夢であつてほしい。ましがいいあつてほしいという気持でいっぱいである。

きのうからの楽しい思いが、一瞬にして消えそうである。ご冥福を祈

ります。

その後、山田正人さんが迎えに来て、辰雄さんは先に帰る。マイクロは奥志賀を通り蓮池の手前で野猿を見て、予定通り入山に戻つて来た。

とにかく、かなり強行な登山にもかかわらず、三才児から五〇才のおじん組までが、全員無事に行つて来たことに感謝したい。又、安全に我々を運んでくれた名ドライバーの富雄さんに感謝したい。

冬山登山 今年も厳寒の 野反湖へ

一九九九（平成十一年）三月十三日～十四日 六合山岳会

今年も冬山の時期になりました。この時期になると、いつもヒュッテのストーブを囲んで、強風が吹き荒れる厳寒の富士見峠で、冷やされた冷酒とビールで乾杯し、大きな鍋の特製料理をつまみに始まる大宴会を思い出します。

今年も一七人という大勢の参加を得て行われました。

第一日目 三月十三日（土）

入山小学校六時集合で大高縦走組は、馬止め目指して出発する。今回は六名の賑やかなパーティとなる。

車も馬止めまで入るので、快適なスタートとなる。天気は快晴、風も無く、暖かな日和で第一の壁の手前で一枚脱ぐ。

うんこ山から、キノコ沢を過ぎた所で、軽い朝食をとり、シールをつ

けて出発する。

去年、雪崩があった岩の下は、何も無く通過できた。尾根に上がった所で小休憩。御殿の森から大高、浅間、白根方面までが快晴の中に、はっきり眺望できた。そこから、御殿までの緩やかな登りをゆっくり登る。先発は、早く一五分位の差がつく。

御殿池にて、にぎりめしと副食でエネルギーを蓄えて、いよいよ大高への急な登りに進む。

今年も快晴のための、雪の白、ダケカンバの白の斑、空の碧が最高に調和して、素晴らしい眺めになっていた。

気分は爽快であるが、身体はきつい登りについていけず、一步一步のゆっくりした歩みになる。大高の肩から、岩菅方面を見ると、妙高も見えるかなという感じである。携帯電話が瞬間会長と通じ、位置確認ができる。

いつものことであるが、最後の雪庇が疲労限界の身体に重くのし掛かって、力をふり絞つての登頂となる。

やったあー登頂(一一・一七)どんなに大変でも、この快感があるから又来るのだ。すでに先発は、乾杯の祝杯をあげていた。

昼食、休憩の後、今回は時間の余裕があるので、裏大高山に寄ることにする。尾根伝いに約一五分で岩菅の真つ正面の素晴らしい展望台に出る。

「うわー良い眺め！」感激、感激・証拠写真をパチリ、パチリ。大高には何回も来たが、裏大高山は初めて。また、この展望台からの岩菅の眺めは、格別だ。

かもしか平へのコースは気温が高いため、あまり良くない。最後の下りも、ベテランを除くと、転倒の連続である。

今回は一尾根西を下りる。水場の下で、休憩とエネルギーを補給し、シールを付けて縦走の最もきつい三壁への挑戦となる。

今回は、高沢の最も下を巻いて沢を登るコースだ。ダケカンバ、コマツガ、空の碧のコントラストは見事である。

三壁の肩で、携帯電話をかけるがなかなか通じず、応援の依頼が出来ないかと心配したが、やはり瞬間通じ、位置確認だけできる。

いよいよ疲れを克服しての最後の下りである。気温が高いため、やはり条件は悪い。一滑り毎に転倒しながらの悪戦苦闘である。にしぶた沢から湖面に出た時は、予定を四〇分程、遅れていた。

スノーモービルの跡が湖面一面にあり、疾走を楽しんだ様子である。間もなく救助隊が来る。ほっとした一瞬である。湖面は、スノーモービルに率引されての快適な疾走である。富士見峠のヒュッテには二〇分遅れの到着である。

休む間もなく宴会の準備を始める。大きな鍋にたっぷりの具を入れて、あふれる程の鍋料理となる。

今回は女性コックが二人も居たので、大助かりである。やはり手際よく、盛りつけも良く、こまめにやってくれるので、例年の半分の手間で作れた。

今年、乾杯が大幅に遅れ、七時を回っていた。又宴会の中味も例年と大幅に異なり、重みのあるものであった。自己紹介の後、教育論、夫婦論(なれ染め)などが激論され、色々なその人の人柄が出て、なかなか意味のある宴会になった。

激論には関係なく持論を述べるもの、縦走の疲れで寝ている者、暴飲で酔いつぶれている者と様々な中、厳寒の中、雪洞で寝るといつてきか

ずに行く者、それぞれあつてなかなかおもしろい宴会となる。

夕食も遅れて十時を回った頃、やっと大きな鍋にうどんが入れられ、振る回られた。大鍋で煮込まれたうどんの旨いこと旨いこと。たちまち大鍋のうどんが減っていく。

三々五々床に着く者もあつて、宴も何時とはなしに終る。

しかし、最終はやはり頑張る。朝四時頃まで語り明かした者もある。

第二日目 十四日(日)

朝は、何も無かつたように明け、二日目が始まる。雪洞のやからは大丈夫かな？ 明け方近くまで頑張つた者は大丈夫かな？

七時はまだ夜中だ。起床者二人。朝飯の用意を始める。

しかし朝を意識する者二人、三人。八時過ぎにやっと朝が来た感じだ。ご飯と残り物のうどんとで朝が来た者から朝食にする。

朝食が全員すんだのは九時過ぎだった。

九時半過ぎ、今日の遭難対策訓練が始まった。スノーモービルでの湖畔走行。八間山への雪上登山、雪上登山は一〇人におよぶ。早い者は、八間スノーパージェレンデでかつこ良い滑りをしていた。

登頂は十一時十分。三六〇度の展望を充分に楽しみ、ゆつくり休憩してから下山とする。

滑る道具は、アルペン、テレマーク、山スキー、そりと様々である。技術も様々で、道具に合った格好良い滑りに、自己流の滑りとそれぞれでおもしろい。

十二時五十分 ヒュッテ着

残り物で昼食をすませます。

十五時には、片づけ、戸締まりをして帰路に着く。

しばらくぶりに二日間好夫に恵まれた冬山訓練が無事終了した。

コースとタイム

和光原・大原コース

九・三〇 引沼スタンド

一〇・〇五 大原口

一一・〇〇 大なら

一二・二〇 富士見峠

大高・かもしかコース

六・〇五 入山小

六・四〇 白根開善

七・一五 七・四五 馬止

九・一〇 大岩下

一〇・〇〇 御殿

一一・一七 一一・四〇 大高山

一二・〇〇 一三・〇〇 裏大高

一三・四五 かもしか平

一五・一〇 三壁

一六・一〇 にしぶた・湖面

一六・五〇 富士見

八間山雪上訓練

九・四〇 一二・五〇 ヒュッテ

一〇・〇五 八間ゲレンデ

- 一〇：四〇 肩
- 一一：一〇 一二：〇〇 山頂

冬山登山 遭難対策訓練を兼ねて 芳ヶ平へ

二〇〇〇年(平成十二年) 六合山岳会

コースと日程

第一日目 三月十日(土)

- 八：〇〇 入山スタンド
- 八：四〇 元山
- 八：五〇 ゲート
- 九：三〇 殺生
- 一〇：三〇 逢ノ峰
- 一一：〇〇 白根横手
- 一一：三〇 芳ヶ平
- 一三：〇〇 ヒュッテ
- 一四：四〇 池の塔
- 一六：〇〇 ヒュッテ
- 一八：〇〇 夕食
- 一九：三〇～二一：二〇 ビデオタイム
- 二三：〇〇～二四：〇〇 就寝
- 一二：三〇 日帰り組出発

- 一六：〇〇 田代ゲイト着

第二日目 三月十一日(日)

- 七：〇〇 七：四〇 起床
- 八：三〇 食事
- 一〇：四〇 出発
- 一一：三〇 だまし平下
- 一一：五〇 だまし横へのもどり
- 一二：一五 だまし横端
- 一三：〇〇 一三：四五 暴れん坊下
- 一四：〇五 長笹川
- 一五：〇〇 元山

遭難対策記録

第一日目 三月十日(土)

例年荒れ模様の日となるこの行事にしては、めずらしく好天に恵まれたの実施となる。

山麓駅の遭難対策室(パトロール)に届け出をして、今回はリフトで逢ノ峰まで上がる。スキーヤーを惑わさないために、リフト下から回って逢ノ峰を目指す。雪質は良いが、新雪が深く大変なので斜滑降でレストハウスを目指す。

吹たまりに何度も突っ込みながらやっと道路に出る。

夏道より遙か湯釜寄りを滑り、少し登りながら横巻きをする。

そこで木村さんの模範滑りを見学し、ガス場の横に下って一気に

ヒュッテに向かう。新堀ご夫妻と愛犬の歓迎を受け、みな元気に到着する。

天気が良いので外で無事到着の祝杯を上げ昼食にする。

日帰り組は、一時間の休憩をして、十二時三十分に田代ゲイトを目指して出発する。

宿泊組は、一時に出発して池の塔を目指す。今回は気温が高いので、登りは楽であったが、下りの滑降がべたつく感じで重たい雪のため深い雪に突込む事が多く、苦勞の連続である。

夕食は、奥さんのおいしい手料理でいつも大満足である。夕食後は、恒例のビデオタイムで楽しむ。

その後の雑談も盛り上がり、遅い組は十二時となる。

第二日目 三月十一日(日)

二日目はあいにくの荒れ模様のため、出発を見合わせて、十時四十分猛吹雪の中の出発となる。

初めは、西にコースを取りすぎて池の方に回り込み、大変な大回りをする。だまし平からの下り口も尾根手前に入り、引き返す羽目になる。登りでステップ・シールの無い人は一苦勞する。何段も続くスロープは絶好のコースである。次々に滑降して暴れん坊下で、昼食とする。

ここから新堀さんは引き返す。お世話になりました。

長笹を越えてまた上に戻りながら、大きく巻いて熊倉側に出る。間もなく林道のなだらかなコースになり橋に出る。

鋼管の木村さんの車まで歩き、芳ヶ平の冬山遭難訓練も無事終了する。ごくろう様でした。

真冬の芳ヶ平へ 池の塔から芳ヶ平の大滑降

二〇〇一(平成十三年)二月十日〜十一日 六合山岳会

第一日目 二月十日(土)

芳ヶ平に管理人さんの新堀研二さんが常駐になって初めて、六合山岳会としての表敬訪問ということで、冬山の下見を兼ねて出掛ける。

二月十日(土)という真冬の時期なので多少心配はあったが、幸い天候に恵まれ、逢の峰から芳ヶ平のコースは快適な滑降となる。

ヒュッテに着くと、番犬の二匹が大歓迎である。天候も良いので早速池の塔に出発する。しかし、登坂を始めると荒れ始め風も出てきた。国道下の木陰で風を避けて昼食を取る。気温も急激に下がり手も冷たくなる。

エネルギーシユな木村、蜂谷組はちよつとの時間も惜しみ滑降を楽しんでいたが、残りの組は、ゆっくり休む。

池の塔では、かすかに横手側が眺望できたが、風も強く直ぐ下ることにする。今回は、東側にコースをとり、急な壁を一気に下る。

夕方はくつろぎのビールと雑談でゆっくり休む。夜は夕食後、恒例のビデオタイムを楽しむ。

さらに懇談し、就寝は十一時になる。

第二日目 二月十一日(日)

朝はゆっくり起きて、好天の中横手方面に散歩に出る。木村さんは長笹方面に、山本、山田組は横手方面に向かう。

だまし平から上は、コースを下にとり過ぎ深い新雪に悩まされ、渋峠に出るのが大変きついコースとなる。

スキー場の放送を聞きながら、なかなか峠にでないので、少々心細い気持ちで焦りも出てくる。峠の圧雪車が見えた時は、ほっとする。

帰りは二五分の快適な滑降となる。登り三時間、下り二五分の違いは何だ。

後半から参加の宇野、大門組ともう一泊の木村、山田さんを残して、荒れ始めた中を、元山方面に出発する。宇野、大門組の登坂の後をたどりながら、田代側のゲートに着いたのは十六時三〇分（一時間二〇分）である。

お地藏さんいつもありがとう!!

地藏峠の地藏さんに感謝の帽子とちゃんちゃんこ

六合山岳会

日時 二〇〇九年十月四日（日）

八〇〇〇 南大橋

八二五〇 野反駐車場

九三三五 休憩

一一一一〇 一二三三〇 キャンプ場広場で昼食

九三五〇 一〇二二〇 地藏峠

参加者

山本 茂、藤江悦子

登山記

六合中登山の下見の時に同行した藤江さんが「地藏さんのちゃんちゃんこを編んでやりたい」ということで、秋の紅葉の時期にぜひと考え、今回の感謝登山となった。長い間、悪天候が続いていたので、ちよつと心配であったが、予報はどうか半日位は大丈夫だろうということで、実施する。

幸い好天に恵まれ、紅葉も見頃を迎え、地藏さん詣りは最高と思われる。

特に厳寒の冬を迎える前のこの時期であれば、地藏さんも安心して冬を迎えることができるであろうと思われる。紅葉を楽しみながら、ゆっくり登る。若い男女のカップルが元気に白砂を指していたので「帰りには新しい装いの地藏さんを見てね」と言う。「残念だけど、帰りは八間です」ということだった。

ゆつくりだったけど、前回より一〇分位早く到着する。

少しほころび始めた帽子とちゃんちゃんこを脱がして、ほこりをはらってやり、ていねいに着せてやる。ヨツバムグラも見守っていた。

編み物の先生作の帽子とちゃんちゃんこを着せてもらった地藏さんは、とても嬉しそうに、満足顔に見えた。

回りの笹も少し刈ってやり、冬を無事過ごして、また登山者の安全を守ってくれるようにお願いして別れる。

早い下山になったが、せっかくなのでキャンプ場の広場で昼食をとる。まめな藤江さんの極上手作りサラダ、キャラ煮のおいしいおかずをこちそうになりながら、紅葉盛んな野反湖を眺めながらの昼食は最高である。

今日の地蔵詣は、今までにない安堵の気持ちで行うことが出来たように思う。

この冬も山スキーで野反への入山を行う予定だが、少し温かい気持ちで来られそうだ。

藤江さんお世話になりました。有難うございました。

松岩山初詣登山

二〇一〇年一月十七日 六合山岳会 山本 茂

コースおよびタイム

- 九：〇〇 一五：一〇 陰居安兵衛
 九：一〇 一五：〇〇 休み堂
 一〇：一〇 一四：三〇 またぎ平
 一〇：四〇 一四：〇〇 天狗の踊り場
 一一：一〇 (昼食) 一三：四〇 天狗尾根
 一二：一〇 一三：二〇 松岩尾根分岐
 一二：五〇 一三：〇〇 松岩山

登山記

まったく予定していない松岩山登山となった。天気次第で行きたいなあと思っていたところ、幸い好天に恵まれ、よし行こうという事で急遽、行くことになった。

誰に気兼ねすること無い、単独行動の気安さで、軽い気持ちで出発する。大体、予定のコースタイムで進む。

またぎ平からはシールをつけて行く。心配したラッセルもそれ程ではなく、一人で十分くらいで順調に進む。

天狗の踊り場手前の浅間展望あたりは、ところどころ地肌が出ているため猪がエサをあさった所がいたる所にあつた。幸いコースは雪があつたためスキーのまま登ることが出来た。

天狗の尾根で昼食をとって、スキーはここまでとして、つぼ足で登ることにする。大半のコースをウサギが先導した足跡があり、助けてもらう。ウサギも人間と同じ習性を持っていて、歩きやすい所を心得ているようだ。いや、むしろ人間は動物に教えられて様々な生きる術を身に付けてきたのかも知れない。人間は今や、動物に学ぶところが多々あることを認識するべきかも知れない。

ほぼ予定の時間にピークに着く。幸い、晴れ渡った素晴らしい展望を望む事が出来た。セルフタイマーで記念の写真を撮って早めの下山とする。やはり下山は気持ちが開放され、軽やかだ。

天狗尾根からのスキーも無理せず、安全第一で下る。またぎ平まではスムーズに下り、ここからは世立コースで下ってみようと考えた。ところが、全く当てがはずれて、休み堂に出るつもりが、世立集落に出ってしまった。

おかげで、だいぶ時間のロスが出てしまった。(コースタイムは正規のコースタイムになっている)

好天に恵まれ、心地よい初詣登山となった。

冬山？春山？登山記

二〇一〇年三月二十七日 六合山岳会 山本 茂

登山場所 野反湖

コースおよびタイム

八：〇〇 一五：二〇 スタンド

八：五〇 一五：〇〇 大原口

一〇：三〇 一四：二〇 おおなら

一一：三〇 一三：五〇 富士見峠

参加者

山本 茂 アンダソン・さゆり夫妻

木村正臣 午後から（宿泊）

大門正明 午後から（宿泊）

登山記

残念ながら、参加者が少ないが幸い好天に恵まれる。参加予定者一人が、都合で不参加となり、最終参加者は五人となる。

もしかしたら、大原口から少しは、車で、なんて甘い考えで行くが、とんでもない、一月の時とほとんど変わらない積雪である。

それでもかち渡りでスムーズに進む。

ところが、おおならの手前あたりから、雪がスキーにつき悪戦苦闘。

直ぐ路も、後すべりはないが、雪がついて重くて大変である。

風がなくて快適だと思つた登山も、富士見峠に登るとやっばり厳しい強風に会う。ヒュッテの裏で昼食をとるが、強風であまり味わつて食べられない。早々に引き上げて、湖畔に下ることにするが、下りも着雪で直滑降でも滑らないほどの最悪の状態である。

正一小屋の斜面も全く滑らない。少しずつは変わっているが、なかなか快適な滑りにはならないので、五、六本滑つて下ることにする。下りもこんな状態かと心配しながら下山とする。

ところが、直ぐ路の斜面は思わぬほどのスピードが出て喜ぶのもつかの間、滑るのは良いが、雪が重たくて全く制動が効かない。

足が痛くなるほど、踏ん張つてゆっくりゆっくり下るので、足がびんびんに痛くなるほどである。

やつとおおならに着き、一休みして、そろそろ木村さん達が来るかなと待つていたが、なかなか来ないので出発すると間もなく二人の姿が吹き溜まりのカーブに見えた。

二人を待つて、おたがいの健闘を交わして別れる。天気が崩れる方向なので気をつけてほしい。

そこからは、かなり滑りが良くなったので、予定通りに下山できる。今回の登山は思わぬ天候不順で大変な山行きだったが、無事終つたことで安堵する。

山の天候の不安定を強く感じたことである。ごくろう様でした。木村、大門組は翌日まで十分楽しみ無事下山する。

二二七年目の慰霊登山

富永金太郎巡査安らかに

二〇一〇（平成二十二年）九月二十九日 六合山岳会 山本 茂

参加者

長野原警察地域課長 関口公広警部

草津町交番 近藤忠彦警部補

北軽駐在所 山口貴雄警部補

小雨駐在所 奥野正章警部補

六合山岳会元会長 山本峯松

六合山岳会長 山本 茂

慰霊登山記と日程

九：〇〇	一六：三〇	開善学校ゲート
七：二〇	一六：〇〇	馬止め
八：四〇	一五：〇〇	一つ石
九：二〇	一四：三〇	オッタテ
九：四〇	一四：〇〇	こせん沢
一：二〇	一三：三〇	五三郎小屋よりの沢との合流点
一：三〇	一二：二〇（二三時）	広河原
一：四〇	一二：一五	金太郎滝（現地）

六合小の運動会の日に奥野さんから「富永巡査の慰霊登山をやりたい

んだが」という話を聞いて「会としてもぜひ実現したい」旨を話し、日程を調整する。

一応、九月二十九日（水）を予定しているということなので、予定表を調べると空いているので、先ずミネバリの根元と言う場所が、どの辺りなのか、どの位の時間で行けるのかを調べることにする。

山岳会で行った人は誰も居ないので、以前行ったことのある角一さん、木村先生に情報を聞く。奥野さんは眞一さんより詳しく情報を得ていたので何とか行けるのではないかと考える。

角一さんはしばらく行っていないので確実な情報が得られないのとこと。木村先生は、強脚で、釣りに何回も行っているが、早いペースなのでかなり余分にタイムをとらないといけない。

いずれにしても、オッタテから先は初めてのことで、心配の種は尽きないが、まず行ってみることにする。下りる方がはるかに早いと言うことで、このコースをとることにする。

峯松さんと正人さんが同行してくれるということで心強い。

七時に開善奥のゲートに行くと、正人さんは都合で行けないとのこと。長野原警察署関係四人と、六人の体制で馬止めを目指す。天候も予報がはずれて秋晴れの快晴となり登山日和となる。

支度を整え出発する。石のプレートは草津、北軽の若い巡査が背負子で背負う。先頭は、しばらくは山本が先導するが、若手のペースが速い場合は途中から先に行ってもらうことにする。登山口から、しばらくは笹で覆われていたが、間もなく歩きやすい登山道になる。

早くも熊の柵があちこちにあり、熊には注意を要する。うんこ山の急登りを過ぎた展望の良い所で一休みする。

石のプレートを背負ったハンデイの人に合わせるように、ゆっくりペースで登る。しんがりには峯松さんが守ってくれるので安心して登る。

奥野さんの足に無理の無いように、先を急ぐ気持を抑えながら進む。一つ石までは、かなりの急登できついコースであるが、幸い、気温は低めなので、まあまあペースで登ることが出来た。

横手から白根山、四阿山、浅間山、榛名山、赤城山、日光方面まで素晴らしい眺めである。少しゆっくり休憩をとってオッタテに向かう。

ここからは、オッタテまで、なだらかな登りなので、快調な足取りで登る。

ここからは、未知のコースなので、全く先が読めないもので、期待と不安の中での沢歩きになる。さらに、昨日まで雨だったので、沢の水がどの程度出ているか、渡渉に苦労する所はないか、水こぎはどんなものか、全く不安だらけである。なるべく水こぎをしないように、石を選んで渡り、沢をまいて下り、進む内に左右から小さな沢がいく筋も流れ込み、だんだん水かさが増えてくるのでいつまでも靴を濡らさないうで渡ることも不可能になる。

五三郎小屋からの沢か手前の沢か分からないが、かなり大きな沢の所にテープでマークしてここからは、持ってきた胸までの強い長靴の助っ人で行くことにする。これだと、予想以上に快適な沢歩きとなり、ペースも上げられるが、自分だけが調子にのる訳にはいかないもので、同じペースとコースを選んで、慎重に慎重に下る。二本目の大きな沢に出て、これが五三郎小屋からの沢かと思われるが確かではない。

だとすれば、間もなく広河原になるはずだが、それらしき所が無いので、まだまだ下かと思われるが時間的にはそろそろ現地に近いはずだと

思う。広河原がどの位の広さで広河原と言うかすっかり情報を得てこなかったので止むを得ない。

しかし、間もなくそれと思われる滝らしき険しい所に出た。ここで少し待ってもらい、先発で先を確認することにする。

「右側のふみ跡を見つけて登り、大岩の突き出た下を過ぎ、樺の倒木に鉋の切り目がある。そこを登り下りのふみ跡を行くと、左のこせん沢に倒れるように皮をむかれた傷跡の残る根の高いミネバリの木がある」という木村先生の情報を元に辿っていくと、なんとなくそうかなと思われる所が確認できた。

この辺かなと思う所に塔婆らしき物はないかと見渡すと、なんと目の前に塔婆が二本あるではないか。

早速、後続にゴウサインをする。やつと胸のつかえが取れて安堵の気持でいっぱいである。周りを見ても、どうもミネバリらしい木は無く、すでに倒木となった樺の木らしき木があるだけである。

幸い、その根元に岩に囲まれた岩屋のような所があるので、その奥に石のプレート、会の手作りの慰霊の碑を立てたら、うまく収まるので、岩屋を整理する。この中なら、風雪にも耐え、雨に流される心配も無いので、半永久に慰霊することが出来るであろうと思われる。

記念の写真を撮り、持参の線香をたいて、丁寧に礼拝し富永金太郎巡查の冥福を祈る。

不安の中、未知の中を歩いてきたが、これで今日の責任が果たせたと思うと感慨もひとしおである。何はともあれ、この深山で一人賊の手で傷められた事は、なんとも痛ましいことだと思ふ。

帰りは、何か足よりも軽くなり、広河原と思われる所で昼食をとる。

水につかり、渡渉した為に、ずぶ濡れの足はさぞ冷たかろうと思う。

帰りは、かなりの時間を要すると思つたが、意外に速くオツタテに戻ることができた。そこからは、一つ石で休憩し、うんこ山で小休止して戻る。

全員無事に、しかも初期の目的を全う出来たことで、みんな満足の笑顔で下山を祝して、今日の慰霊登山を終る。ご苦労様でした。

また、情報を提供してくれた皆さんに感謝して慰霊登山記とします。

六 六合村婦人会の歩み

『昭和四十六年～平成二十二年三月二十八日まで』

六合村婦人は、戦後間もなく発足し、昭和二十二年、吾妻郡連合婦人会の一四支部の中で小さくても他の市町村に負けない素晴らしい活動をしてきた。昭和二十六年には郡の会員は約七、六〇〇人弱で、六合村の会員は三七二人だった。

昭和四十七年から五十二年ごろの郡会員は約五、〇〇〇人で六合村の会員は二三〇人だった。そして、人口が少なくて、小さな村ながら堅実な活動をしていた。

昭和五十三年～五十四年に六合村から富沢かんさんが吾妻郡連合婦人会長に就任して吾妻郡一四支部の先頭に立ち、婦人会を引っ張ってこられた。そのころは家庭婦人がほとんどで就労婦人は少なく交流の場や娯楽、レクリエーションを楽しみ、教養を高め、学びの場として全て婦人会に参加して行動していた。地域の行事等も行政に協力して、婦人会と青年団は欠かせないものだった。

昭和五十五年度の婦人会の県と郡と村の主な年間行事を書き出してみた。昭和六十三年～平成元年まで、吾妻郡連合婦人会会長の黒岩いちさんが六合村の会長の時の行事である。

四月	六合新旧役員引き継ぎ (六合村役場)	四月	町村民号による旅行説明会 (役場)
四月	郡新旧理事会 (中之条合同庁舎)	四月	郡連委員総会 (中之条合同庁舎)
四月	六合村役員会 (六合村役場 第一回)	四月	群馬県民踊大会・県スポーツセンター
		五月	地域婦人会長研修会・新旧役員総会
			(婦人青少年センター) 二日間
		五月	六合村新旧役員総会 (役場新旧役員)
		五月	郡理事会 (中之条合同庁舎)
		五月	西吾妻交対協総会 (長野原町山村開発センター)
		五月	郡地区別指導者研修会
		五月	中之条合同庁舎 (六合より五名参加)
		六月	第一回県消費者行政推進協力研修会
			(前橋商工会議所)
		六月	群馬県婦人大会・伊香保宿泊
		六月	村制八十周年記念行事実行委員会
			(六合村役場)
		六月	六合役員会・六合村役場 (第三回)
		六月	吾妻地区選挙推進会議 (長野原町山村開発センター)
		六月	学校総合問題審議会 (六合村役場)
		六月	社会教育委員研究集会 (婦人青少年センター)
		六月	村歌制定委員会 (六合村役場)
		七月	郡理事会 (中之条合同庁舎)
		七月	西部レク講習会・四〇名出席 (長野原東中体育館)
		八月	婦人大学 (埼玉県国立婦人教育会館泊)
		九月	六合役員会 (第四回・六合村役場)

- | | | | |
|-----|--------------------------|-----|-----------------------------|
| 九月 | 郡理事会及び広報委員会（中之条合同庁舎） | 十一月 | 郡家庭婦人バレーボール大会 |
| 九月 | 村民憲章草案検討会（六合村役場） | | （原町吾妻高校体育館） |
| 九月 | 選挙第一戦指導者研修会（中之条合同庁舎） | 十一月 | 消費問題説明会（渋川市役所） |
| 九月 | 郡民祭玉入れ練習（六合小学校校庭） | 十一月 | 六合村婦人会誌（りんどう）原稿編集委員会（六合村役場） |
| 九月 | 村歌原案発表（六合村役場） | 十一月 | 西吾妻交通安全協会総ぐるみ大会打合せ（六合村役場） |
| 十月 | 町村民号による婦人会研修旅行 | 十一月 | 郡理事会（中之条合同庁舎） |
| | 佐渡泊（参加六二名） | 十一月 | 六合村村政八十周年記念式典 |
| 十月 | 郡民体育祭（吾妻町二五名参加） | | 六合村村民体育館（二〇名参加） |
| 十月 | 地域婦人副会長研修（婦人青少年センター一泊研修） | 十二月 | 衛生大会（吾妻町山村開発センター） |
| 十月 | 村民運動会・総合グラウンド婦人会踊り | 十二月 | 移動理事会（北毛青年の家） |
| 十月 | 第一回バドミントン教室（村民体育館） | | 老人ホーム慰問 |
| 十月 | 社会教育委員会議（四万ゆずりは荘泊） | 十二月 | 議会傍聴（六合村役場） |
| 十月 | 郡理事会（中之条合同庁舎） | 一月 | 賀詞交換会（福祉会館）郡単位会会長 |
| 十月 | 文化祭打ち合わせ（六合村役場） | 一月 | 郡新年会（中之条町竹の家） |
| 十月 | 六合村婦人会役員会（第五回）役場 | 一月 | 郡理事会・料理講習会（中之条町役場） |
| 十月 | 消費問題研修及び視察（桐生方面） | 一月 | 六合村新年会（役員会）（六合村役場） |
| 十月 | 社会教育研修会（吾妻町山村開発センター） | 二月 | 婦人大会（文化会館）郡合計五三〇名 |
| 十一月 | 父の日大会（婦人青少年センター） | 二月 | 六合村婦人会役員会（六合村役場） |
| 十一月 | 文化祭準備（六合村役場）二日三日 | 二月 | 群馬県婦人の集い（群馬会館） |
| 十一月 | 六合村文化祭（六合村役場） | 二月 | 郡理事会（中之条合同庁舎） |
| 十一月 | 日赤群馬大会（県民会館） | 二月 | 母乳問題研修会（合同庁舎） |
| 十一月 | 六合村婦人会地区別研修会 | 三月 | 郡役員理事反省会（宿泊四万山口館） |
| | （六合村役場・九一名出席） | 三月 | 六合村婦人会総会（六合村役場） |
| 十一月 | 六合よいとこ音頭踊り練習（役場） | 三月 | 県新生活と貯蓄（婦人青少年センター） |

三月 県母乳問題研修会（婦人青少年センター）

時代の流れと共に、青年団もなくなってしまい、趣味の会やいろいろな婦人団体が誕生し、就労婦人も増え、会員数は減少の一途をたどる事となった。郡では、昭和五十九年に澤田支部が無くなり、平成二年坂上支部が、平成八年には太田支部が無くなって、昭和六十一年には、四、〇〇〇人いた郡会員も毎年一〇〇人単位で減っていった。

共働きもますます増え、少子高齢化の波が押し寄せて世代と共に婦人も様変わりしてきたが、婦人会の長い歴史の中で続く県の父の日大会、郡の婦人大会（六四年間続いて開催）、『あゆみ』（六六年続いて発刊されている）など、六合村婦人会も地域のために何か協力したいという気持ちで続いてきた。そして、皆様のお陰で楽しく親睦をはかり、活動が出来た。

平成六年には、行事として、ふる里祭り、敬老会、文化祭、村民運動会、郡民祭（昭和五十八年・平成四年・平成十二年・平成二十年・六合村で開催時は一七〇〇〜一〇〇〇人踊りで協力）、成人式、それから、国際交流デンマーク体操チーム歓迎会には、民謡踊りと国際交流で約六〇〇人の会員が浴衣姿で参加協力させていただいた。教育委員会の婦人学級で初めて四五人参加の観劇をお願いした。また、軽スポーツ、料理教室、議会傍聴、コーラス、手芸教室等と大変勉強させて頂いた。平成十六年・十七年、私が郡の会長でお世話になった時、郡会員は一、八〇〇人、六合村は七五人だったが、六合村の人達は活動に温かい気持ちで協力して下さり、活気に満ちていた事に感謝の気持ちでいっぱいだった。

一昔前は、この村も養蚕農家が多く、養蚕の合間に会議を組んだり、夕桑をくれて盆踊りに参加したりとの事、又、農閑期を利用してバスで

一泊旅行も大勢参加したとの事も聞いたが、こうして婦人会活動を顧みる時、役員は家族が健康で、理解が有ったから務まったのだと深く感謝している。

平成二十年に岩島婦人会が抜けて、吾妻町と東村が合併して東村婦人も休会となった。平成二十二年三月二十八日、六合村と中之条町が合併となり、六合村婦人会も、中之条婦人会六合支部となった。二十二年の郡会員は一、〇〇〇と三〇人で、六合支部は五〇人弱となったが、まだまだ女性を代表する大きな基礎団体と思う。郡の役員に萩原豊子さんがなっているので、六合支部の役員も若い後継者が皆と力を合わせて、中之条地区の皆さんとも、仲良く会員の和と輪を広げ、中身の濃い素晴らしい活躍をして頂ける事を期待している。

六合村婦人会歴代会長名及び副会長名

年度	会長名	副会長	備考
昭和二十四	湯本 とう		
二十五	福島 りん	富沢すい子	
二十六	武藤 キク	関 ぬい	
二十七	市川 ひさ	篠原うたじ	
二十八	福島 りん	山本 喜内	
二十九	武藤 キク	湯本 よし	
三十	山本 喜内	関 なを	
三十一	市川 ひさ	中沢みさを	
三十二	富沢 かん	市川 とみ	
三十三	中沢みさを	明田川三代	
三十四	富沢 かん	山田 しづ	
三十五	山本 喜内	市川 とみ	
三十六	富沢よし江	福島ハルエ	
三十七	湯本 禮	市川 いち	会長／富沢 かん(継)
三十八	福島ハルエ	明田川三代	
三十九	中沢みさを	高原 りん	
四十	湯本ふくい	市川 ふみ	
四十一	福島 スミ	富沢うた子	
四十二	中沢 もも	茂木 イチ	
四十三	篠原 きぬ	市川 トヨ	副会長
四十四	福島ハルエ	黒岩 いち	
四十五	富沢 かん	篠原はるの	
四十六	富沢 かん	武藤 宏子	
四十七	武藤 宏子	富沢ふき子	
四十八	中沢 貞子	富沢ふき子	
四十九	福島 スミ	富沢ふき子	
五十	萩原 好子	市川 トヨ	
		安原みとい	
		萩原 好子	山口千代の
		萩原 好子	大塚きみ江
		中沢 貞子	山本うた子
		篠原千鶴子	山本 なか
		山田 しづ	山本 つる
		茂木まさ江	山本 ふみ
		富沢 いそ	
		富沢きみ江	
		篠原 きぬ	
		篠原 いと	
		明田川三代	
		湯本ふくい	
		山本 国子	
		中沢 もも	
		福島 スミ	
		関 なを	
		高原 りん	
		市川 もり	
		朝比奈ゆき	
		市川 つい	

年度	会長名	副会長	備考
昭和五十一	武藤 宏子	安原 みか	書記／篠原 房江
五十二	中沢 もも	山本 国子	書記／市川 安江
五十三	篠原はるの	市川 春子	書記／関 はなえ
五十四	富沢ふき子	黒岩 いち	書記／山本 はつ
五十五	黒岩 いち	安原 さく	書記／市川千鶴子
五十六	市川 トヨ	篠原はつみ	書記／高原けさを
五十七	武藤 宏子	明田川知代	書記／篠原まさ江
五十八	市川 安江	中沢アキエ	書記／富沢うめ子
五十九	富沢コマ子	篠原てる子	書記／小池たけ子
六十	篠原てる子	中沢とみえ	書記／中沢 百江
六十一	中沢アキエ	明田川知代	書記／安原キヌエ
六十二	明田川知代	市川 げん	書記／市川富士子
六十三	市川 げん	市川富士子	書記／中沢 絹子
平成 元	市川富士子	山本 みの	書記／市川 良子
二	中沢 町子	中沢 百江	書記／山口寿美子
三	中沢 百江	市川 良子	書記／湯本けさ代
四	中澤 いし	安原キヌエ	書記／山本 ウラ
五	中沢とみえ	関 フサ子	書記／山本ミエ子
六	安原キヌエ	篠原まさ江	書記／関 順子
七	市川けさ江	黒岩てる子	書記／山本 なお
八	黒岩てる子	山本ミエコ	書記／加辺千鶴江
九	関 フサ子	加辺千鶴江	書記／関 みつ江
十	本多 静枝	山本ミエコ	書記／富沢 隆子
十一	山本ミエ子	中沢 絹子	書記／山本多津子
十二	中沢アキエ	市川ひろ子	書記／加辺千鶴江
十三	茂木 栄子	中沢 静江	書記／萩原 安子
十四	市川ひろ子	市川 章子	書記／湯本 京子
十五	市川 章子	山本 敏子	書記／湯本 京子

平成 十六	加辺千鶴江	湯本 京子	千川のぶ子	書記／市川ひろ子	会計／中沢 いし
〃 十七	中沢 いし	茂木 栄子	萩原 安子	書記／湯本 京子	会計／山本 なお
〃 十八	安原キヌエ	萩原 豊子	千川のぶ子	書記／山本ミエ子	会計／市川ひろ子
〃 十九	萩原 豊子	萩原 安子	市川ひろ子	書記／山口美砂子	会計／市川けさ江
〃 二十	茂木 栄子	山口美砂子	湯本 京子	書記／山口 信江	会計／市川 章子
〃 二十一	茂木 栄子	安原キヌエ	市川ひろ子	書記／市川 典子	会計／市川 章子
〃 二十二	安原キヌエ	市川 典子	市川ひろ子	書記／湯本 京子	会計／市川 章子

七 六合村青年団のあゆみ

(昭和四十六年度)

◎役員 団長 関 常男 赤岩

副団長 篠原 一美 ”

” 高倉 洋子 日影

書記 富沢 久 太子

” 山本とみ子 入山

会計 中村 富雄 入山

” 宮崎 照代 日影

事務局長 市川 初江 生須

◎事業予定

四月 理事会、総会

六月 作業奉仕

野反湖キャンプ場清掃

七月 野反湖下刈り作業

八月 キャンプ、成人式

十月 旅行、郡民体育祭参加

十一月 バレーボール大会 (支部対抗)

十二月 ダンス教室

一月 青年研修会、ボーリング大会 (支部対抗)

二月 スキー講習会

(昭和四十七年度)

三月 理事会、総会その他講習会、地域内奉仕作業、卓球大会、郡連行事参加

◎役員 団長 篠原 一美

副団長 篠原道太郎

” 富沢 恵子

書記 山口 和雄

” 山本とみ子

会計 富沢 元信

” 山本たか子

(昭和四十八年度)

◎役員 団長 篠原道太郎

副団長 中沢 信治

” 山口ゆり子

書記 山田 良秋

” 町田ひさ代

会計 安原 静男

” 山本 佐吉

(昭和四十九年度)

◎役員 団長 関 好仁

副団長 山本 清司

” 山口ゆり子

(昭和五十年度)

書記 町田ひさ代
 ” 山本 律子
 会計 山本 光也
 ” 篠原 秀美
 会計監査 山本 佐吉
 ” 篠原 修
 事務局長 篠原道太郎

◎役員

団長 山本 清司
 副団長 山本 一男

” 中沢志づ江
 書記 篠原 文雄
 ” 山本 好一
 会計 富沢 辰夫
 ” 山田今朝幸
 会計監査 篠原 茂夫
 ” 市川 松雄
 事務局長 橋爪 由枝

(昭和五十一年度)

◎役員

団長 篠原 文雄
 副団長 山本 久義
 ” 関上 辰弥

(昭和五十二年度)

書記 関 秋雄
 ” 山本ひろの
 ” 山本 八郎
 会計監査 山本 好一
 ” 市川 英俊
 事務局長 山本今朝吉
 事務局 橋爪 由枝

◎役員

団長 篠原 秀美
 副団長 山本 俊雄

” 関 秋雄
 書記 西山とし江
 ” 山本 菊子
 会計 中沢 夏樹
 ” 山本 好一
 会計監査 篠原 孝志
 ” 市川 英俊
 事務局長 安力川幸好

(昭和五十三年度)

◎役員

団長 関 秋雄
 副団長 山本 隆男
 ” 安力川幸好

(昭和五十四年度)

◎役員

団長 安力川幸好

副団長 関 富士雄

” 山口まち子

会計 湯本 光夫

” 山本 利枝

書記 篠原 幸弘

” 山本ふじみ

監査 山本 章男

” 山本 孝義

事務局 山本富美枝

支部長

入山 山本 栄一

・ミュージカル「おっ母さん」上演

会計 中沢 夏樹

” 山口まち子

書記 山本 好一

” 武藤けい子

監査 篠原 孝志

” 山本ふじみ

事務局長 山本富美枝

(昭和五十五年度)

◎役員

団長 関 富士雄

副団長 山本 栄一

” 山本ふじみ

書記 西山 肇

” 富沢 悦子

会計 市川 和義

” 山本みどり

事務局 山本 章男

” 山本くに子

監査 安力川幸好

” 山本 隆男

支部長

入山 山本 孝義

中部 市川 永二

赤岩 山本 和美

中部 茂木 等

赤岩 山本 章男

(昭和五十六年度)

◎役員

団長 山本 章男

副団長 市川 永二

” 山本 国子

(昭和五十七年度)

◎役員 団長 市川 永二

副団長 山本 和美

” 山本富美枝

書記 篠原 幸弘

会計 山田 富恵

事務局 市川 和義

” 山本美津子

支部長

入山 黒岩 文夫

中部 富沢 茂

赤岩 関 順一

書記 茂木 等

” 市川 和義

会計 山本 和美

” 山本美津子

事務局 黒岩 文夫

” 山本ますみ

監査 関 富士雄

” 山本ふじみ

支部長

入山 山本 忠雄

中部 西山 肇

赤岩 篠原 幸弘

・演劇「泥かぶら」上演

公演日 昭和五十六年三月十九日

会場 村民体育館

村民 五三四人入場・村外三七人入場

・青年団独自演劇「旅人」を演じる

・全国青年祭に参加

期日 昭和五十六年十一月六日

場所 東京国立競技場を主会場

参加種目 陸上男子一〇〇メートル(県代表) 関 順一

・吾妻郡民芸術祭並びに吾妻郡連合青年団芸能発表大会参加

期日 昭和五十七年二月二十一日

場所 吾妻郡文化会館

参加種目 フォークソング、意見発表、演劇「旅人」

・第二十七回群馬県青年祭

期日 昭和五十七年三月七日

場所 群馬県婦人青少年センター

「意見発表・フォークソング最優秀賞」受賞

意見発表 山本 正子(第三十一回全国青年大会出場)

フォークソング 市川永二、安カ川幸好、茂木 等

富沢 洋、山口まち子、市川和義

(昭和六十一年度)

◎役員 団長

西山 茂

・第十八回群馬県青少年顕彰

昭和四十二年以来続く野反湖清掃奉仕活動で県知事より表彰

副団長

篠原 良春

事務局長

山本 俊之

(昭和五十八年度)

◎役員 団長

山本 孝義

副団長

市川 和義

” 黒岩 文夫

書記・会計

山本 美幸

” 黒岩 文夫

支部長

山本 市郎

” 市川 明弘

” 関 順一

事務局

富沢 洋

” 篠原恵美子

(昭和五十九年度)

◎役員 団長

市川 和義

副団長

関 東一

” 山本 美幸

事務局

山本 市郎

” 山本 昭夫

” 山口たつみ

(昭和六十二年度)

◎役員 団長

篠原 良春

副団長

山本 佐吉

” 山本 勇人

事務局長

山本 俊之

” 次長

山口 昇芳

” 会計

黒岩 智美

会計監査

西山 茂

” 山本 弘美

・第三十二回群馬県青年祭参加 期日 昭和六十二年三月一日

テーマ「走り出そう希望の未来へ」

芸能文化の部参加

演劇の部 優秀賞受賞 「全国青年大会出場権獲得」

創作脚本の部 努力賞受賞「審査委員長
落合義雄氏より「落合演劇賞」受賞

第三回 参加者 篠原 文雄

・交通安全功労賞受賞 受賞日 平成元年九月二十八日

西吾妻交通安全総ぐるみ大会において野反湖の清掃奉仕活動
が二五年間つづいている功績が認められた。

期間 昭和五十年十一月二十三日～十二月八日（一七日間）
場所 日本丸で沖繩經由フィリピン

船内活動やマニラ市内研修、フェレナンド、グレーナ小学校
訪問及び交流

・栃木県馬頭町青年団との交流会実施

第五回 参加者 関 秋雄・萩原輝長

期日 平成五年二月十六日～十七日（二泊二日）

期間 昭和五十二年十二月六日～十二月二十三日（一七日間）

交流会 スキー交流（草津天狗山スキー場）

場所 香港・フィリピン

交流会（くじら屋） 三五人（馬頭町 二七名・六

船上活動やマニラに寄港し市内研修や現地青年と交換会

合村 一六名）

第六回 参加者 山本 栄一

期間 昭和五十三年十二月六日～十二月二十三日（一七日間）

場所 日本丸での沖繩、香港、マニラ

洋上での係別研修、テーマ別研修、東南アジア事情、英会話
など研修後、現地見学や交流会を実施

○青年洋上大学参加の状況

・群馬県青年洋上大学参加

県内の青年五〇名が選考され海外における視野を広め、地域におけ
る青年指導者として研修する者で、六合村青年団も積極的に参加した。

第八回 参加者 安カ川幸好

期間 昭和五十五年九月十四日～九月二十七日（一四日間）

第一回 参加者 篠原道太郎

場所 中国（上海・青島・天津・北京）中国船耀華号

期間 昭和四十八年十二月二十六日～一月十一日（二七日間）

場所 さくら丸でマニラ～香港航路の洋上研修

フィリピンを中心とした現地での交換会

青島にて人民政府招待の歓迎晩餐会に出席、海洋学院大学にて
交流会、天津では、天津八十九中学校を訪問、北京にて、天安

門広場、故宮を見学

昭和57年10月15日～27日

群馬県青年洋上大学参加
中国 大きかった中国の文化遺産
市川和義

第九回 参加者 山本 隆男

期間 昭和五十六年十月十六日～十月二十九日（二四日間）

昭和59年11月2日～11日

群馬県青年洋上大学参加

場所 中国（青島・大連・瀋陽・天津・北京）中国船耀華号

中国 西山 茂

青島にて「熱烈歓迎」を受け市内の貴州路校を見学や中国

平成4年10月13日～

群馬県青年海外派遣事業参加

青年と交流会を実施、大連では、ガラス工場、動物園などを見学、青島市人民政府主催の招待宴に出席、大連から瀋陽までの

カナダ 中沢光代

約四〇〇キロメートルを7時間かけて列車で移動、北京にて、

平成5年10月12日～21日

群馬県青年海外派遣事業参加 山口隆志

カナダ

カナダ

平成7年9月11日～20日

群馬県青年海外派遣事業参加 武藤勝年

カナダ 「カナダの福祉を学んで」

八 六合かるた

平成二十二年度に六合村は中之条町に合併することになった。

そこで合併前に、遠い昔から豊かな自然と風土、歴史の中で培われてきた貴い六合の魅力を後世に伝えるために、「六合かるた」を制作しようという話が持ち上がった。

限られた時間の中での企画であったが、幸い発案と指導助言で携わっていたいただいた樋口猛先生、事務局で題材募集から完成まで関わっていた田中充弘先生の全面的なご協力を得て、一年足らずの時間の中で完成させることができた。

また、学校、地域の六合をこよなく愛する人たちの思いが結集し、六合村の大切な宝「六合かるた」が完成したものと思う。

ここに改めて制作にご協力いただいた関係者のみなさんに感謝を申し上げます。

一、六合かるた制作 六合かるた作成委員会

六合村教育委員会

二、題材応募総数 一四六点

三、読み句応募総数 九一四句

四、絵札作成 六合小学校、六合中学校、白根開善学校

文化協会、切り絵部、俳画部、絵画部

五、読み札筆耕 中沢一孝

六、解説文作成 明田川道雄、山田武俊、山本 茂

市川義夫、山口和雄、黒岩勇、茂木真一

七、六合かるた作成委員会

委員長 山本 茂

副委員長 萩原豊子

委員 山本隆男 山本富美枝 山本ひとみ 山本佳代子

山田秀隆 油井文男 富沢 洋

教育長 茂木真一

事務局 山本忠雄 田中充弘 萩原治長

指導助言 吾妻教育事務所 社会教育主事 樋口 猛

八、「六合かるた」作成にあたって

六合かるた作成委員会委員長 山本 茂

いつか「六合かるた」を作りたいという気持ちをずっと持っていました。そんな折、この話が盛り上がり大変うれしく思いました。六合村に生まれ育って、やっぱり六合村は心のふるさとなんだとつくづく思っていました。

この源は何だろうと考えた時、六合村には人が生きるための大切なものがずっと守られ、受け継がれてきたからだと思います。

一つは、偉大な上信越高原国立公園に抱かれた自然の恵みであり、二つは、永い間受け継がれてきた伝統文化であり、三つはこのような自然と伝統文化の中で培われて、育てられてきた温かい人間性だと思います。

最後になりますが、作成に当たりご協力いただいた村民、各団体、学校のみなさんに感謝すると共に「六合かるた」が六合の証として永久に活用され、育てられていくことを心より祈っています。

九、「六合かるた」完成にあたって

六合村教育委員会教育長 茂木真一

「六合かるた」の作成事業は平成二十年度に計画し、今年度に入り具体的に進め、このほど完成をいたしました。

村民の皆様から題材と読み句多数の応募いただき感謝すると同時に身の引き締まる思いがいたしました。

企画指導いただいた樋口先生をはじめ、九名の作成委員さん、読み札筆耕の中沢さん、絵札作成の六合小、中学校、開善学校、文化協会（切り絵俳画、絵画部）の皆さん、解説文を書いていたいただいた七名の方々など多くの人たちの協力をいただきました。改めて感謝申し上げます。

この「六合かるた」が小中学生をはじめ、村民の皆様、また本村出身者の方々などに大いに活用されると共に将来にわたり親しまれる「六合かるた」になることを期待しています。

十、「六合かるた」読み句

- あ 愛と和と 人情厚き 六合の郷
- い 医療センター 守り続ける みんなの健康
- う 馬愛し 小雨と生須の 馬頭観音
- え 絵にしたい 白砂川の 溪谷美
- お おんべーや 七福神が 舞い踊る
- か かわいいね 六合のシンボル くにっこちゃん
- き 絹の糸 座繰につなぐ 重伝建
- く 六合村の 初代村長 山田弥惣治
- け 元気にね どんどん焼きで 厄落とし
- こ 小倉には しだれ桜の 咲く古道

- さ 沢に敷く 緑のじゅうたん チャツボミゴケ
- し シラネアオイ 育てて仰ぐ 八間山
- す すげむしろ織る ねどふみの里
- せ 線路道 桜並木で しのぶ太子駅
- そ それぞれの 面を持つ 百八十八観音
- た たねいっぱい ずんぐりむつくり 入山きゅうり
- ち ちようちんと 鳥追い太鼓で ホーイホイ
- つ 伝えよう 野反小唄は 郷土の踊り
- て 天地四方を以って 六合となす
- と 土木遺産の 吾妻橋
- な 名の高い 妙全尼僧 逆さ杉
- に にぎやかに 人の和つくる ふるさとまつり
- ぬ ぬくもりいっぱい 六合の温泉
- ね 年に一度の 矢倉の掛軸
- の 野反湖の 豊かな自然 日本一
- は 春祭り 日影の里に 獅子が舞う
- ひ 人の善 ひらく学舎 開善学校
- ふ ふる里の 願いを語る むかし話
- へ 平兵衛池 チエが主と 住むと言う
- ほ ほのぼのと 道を教える 道祖神
- ま 廻り道 世立に古木 しだれ栗
- み 見事咲く 花菜の里は 花の丘
- む むかしをさぐる 広池遺跡
- め 名人つくる めんばしゃもじに こんこんぞうり

も もうぞうは どんなぞうかと たずねられ
 や 山合いに 元気にひびけ 八間太鼓
 ゆ 雪の頃 冬住の里に おりてくる
 よ よつてがねえ 八つの滝と 天狗の足跡
 ら 蘭学医 長英かくまう 湯本の館
 り 旅情きざむ 暮坂峠の 牧水碑
 る 瑠璃色の 野反湖に咲く レンゲツツジ
 れ 歴史を語る 落人の里
 ろ 露天掘り 鉄鉱石の 群馬鉄山
 わ 綿すげの 芳ヶ平に 初夏の風



宗教

・入山の「仏堂存置願」

明治十年七月の紀年のある「仏堂存置願」という表題の古記録を見る
ことが出来た。

今までに見たことのない資料である。

しかも、どういうわけだか、この資料の関係地区は入山のみである。

「仏堂存置」という言葉も異常である。

この「存置」という言葉が不思議である。

文章の表題をそのまま解釈すれば、「廃止」の反対言葉になる。

「廃止」があるから「存置」となる。というように解釈してしまう。

もしそうならば、「仏堂が廃止になるのでその存置を願いだしたのだ」と言うことになる。

村にとつては大変な事である。

一大事である。

だから、

県令宛の願書を提出しているのである。

もう一点、不思議に思ったことがあるのである。

なぜこのことが、入山だけに限られているのかということである。

南部にも同様な施策が行われようとしていたかも知れないのだ。たまたま、

関連資料が未発見のために、入山の資料が目立つことになったのか

かもしれないのである。早合点してはならないのである。しかし、この

ことについての比較すべき資料を欠くので、入山のこととして論を進めることにしたい。

論をさらに進めて行けば、入山の特殊事情ということも考えられるのである。

大変むずかしい事になるので、一応、入山の特殊事情に基づく「仏堂存置問題」と言うことにして、勝手な事を書き立てて行くことにする。

原本を見ると、この願書の宛先は、群馬県令となっている。

と言うことになると、「仏堂の廃止」は県令の命によるものであることを知る。

この文書によつて推測することが出来ることは、各小字（ブラク）にある仏堂を破却することが命じられているのである。そのことに対して、各小字では、廃止に反対の態度を表明したのである。

このことが、「仏堂存置願」の合同提出である。

時に、明治十年七月のこと。

明治新政府が誕生して一〇年しか経っていない。

廃仏毀釈の嵐は、全国で明治九年ころまで吹き荒れていたというから、

六合にも仏堂破棄の動きもこのころまで続いていたのかもしれない。

今の行政組織から見れば、大字の下部の小字の段階で、県当局へ直接

願書を提出するなどという直接行動は、とても考えられないことである。

願書を見ると、各字の総代が、副戸長、戸長と連名で「仏堂存置願」

を県令宛てに提出しているのである。当時の地方自治の姿を見ることが

出来ると言えようか。

ここで、当時の入山における仏堂の存在状況を見ることにする。

「仏堂存置願」からの引用である。

長平	観音堂	信徒の戸数	十戸
根広	月洲庵		百七十七戸
和光原	観音堂		二十三戸
世立	観音堂		四十四戸
引沼	十王堂		二十八戸
湯ノ上	薬師堂		百七十七戸
京墳	観音堂		十四戸
品木	地藏堂		十三戸
荷付場	観音堂		十六戸

ここで、字毎の仏堂の信徒の様子を見ると、右のとおりである。ずば抜けて信徒が多いのは、根広の月洲庵と湯ノ上の薬師堂である。ともに信徒数が一七七名となっている。この数字は入山全体の戸数であると思われる。

ここで考えなければならないことは、仏堂の信仰圏の問題である。大部分の仏堂はその存在する地域の住民だけが信徒であるという形をとっているように見られる。ところが、湯ノ上の薬師堂と根広の月洲庵の二つの仏堂は、信徒が百七十七戸となっている。当時の入山全体の人達が、その信徒となっていると考えられるのである。つまり、この二つの仏堂は、大字全体を信仰圏としているのである。しかし、当時の信者の組織や、その信仰形態については、分からない。

湯ノ上の薬師堂は、入山中で管理している花敷温泉の言わば「温泉薬師」（湯薬師）として、温泉の守護を役目としているのである。そんな

点で昔から重要視されて来ているといえよう。

この薬師堂は、

間口が二間、奥行が二間二尺であると言う。

その規模から言えば、他のお堂と大差は無い。

薬師堂の本尊様は勿論薬師如来様である。

一方、根広の月洲庵は、お堂の広さが、

間口が五間二尺、奥行が四間二尺という。六畳の間に、八畳の間（須

弥壇あり）の二間あったとのことである。

月洲庵は、日影の龍沢寺の系統の末寺であるという。

かつては、一時的には寺の役目も果たしたと言われ、旅の坊さんの墓

（卵塔）もあり、その坊さんの耕したという畑も、その坊さんの名を取っ

て残されている。（げんとうの畑、りょうぼうの畑）

また、明治の初めのころに、一時、花敷小学校の仮設の校舎として、

使用されたこともあったという。

そういうことで、月洲庵は、明治時代には、入山の教育施設としての

役割までも果たしていたのである。

明治の初めころに、入山の人々の、精神的支柱としての役割までも果

たして来た、湯ノ上の薬師様と、根広の月洲庵という二つの宗教施設は、

時の政府の仏教弾圧政策の中にあっても、その社会的役割を十分果たし

て来ているのである。

以上、「仏堂存置願」という奇妙な表題の中身について、若干の検討

を行ってみたのである。

ここでは、何よりも、小字の人達が、自分たちの信仰している小堂宇

を、役所が破棄しようとしていることに対して、懸命に守ろうとした記録を紹介してみたのである。

その結果、廃棄の対象とされた、小堂宇はどうか。記録の上から結果はわからなかったが、それぞれの小字には、今でもその堂宇は残されているというから、明治初年の堂宇破棄事件も表面化しなかったのかもしれない。このことについての真相は不明である。

ただ、入山だけに残っている「堂宇廃棄事件」の関連資料が、思わぬ小事件の意味を教えてくださいましたのである。

小さな地域の人達の、長い間の、その地域の信仰上の拠点を守ろうとする気持ちに触れることが出来たのである。

「堂宇存置願」という小さな地域での、小さな出来事は、小地域での宗教活動の基本的な形を教えてくださいましたのである。

小地域の者だけで、自分たちの庵を守ろうとした、小字の人達の意気込みには感心した。

小字ごとにある、小堂宇の存在理由を、ここに改めて知ったのである。そしてさらに、大字というやや広域の信仰形態についても、再確認することができたのである。

それは、山村での、生活の基盤がどこにあるとみるべきか。小字の存在理由について、今度の資料を教訓にして考えて見るべきではなかったのではないか。

山村でのクミ（字）での日常生活の形について、改めて考えてみる必要があるように思う。

そこに、生活の形の基本があるはずである。

「仏堂存置願」とは、一体なんであったのか。

何故、字の人達が、団結して、組を守ろうとしたのか。
「仏堂の組（字）毎の存置」は、それだけに切なる願いであったのである。

根広の月洲庵のこと

昔、根広に月洲庵があった。無住の寺であった。村の人は「寮」（りょう）と呼んで居た。

時に、旅の僧が来て、

「俺が守る」

と言って、ここへ住みついた。

畑があつて、そこを耕して居た。

ムラの仏さんをトリオエタことはなかった。（死人に引導をわたすことがなかったということ）

入山には、お寺がなかった。

子供が亡くなったときには、家の者が位牌をこしらえて、それをお寺へ持つて行つて、坊さんに拜んでもらつて来た。

死んだ人が、人にならない人であった場合には、山の人は、位牌は自分で作つて、お寺へ持つて行つて、死んだ人の戒名を書いてもらつて来た。

（話者 根広の中村福美さん）

月洲寺の数珠回し

根広の月洲寺の関係の人達が、昔、数珠を回して、重病人の生死の決着を付けたというこの話は、同地のお年寄りの人達からお聞きして居る。

これは、病人に対する、諦め的手段、最後の手段であったという。

(話者 中之条町日影 龍沢寺の和尚さん 昭和十年生まれ 明田川

道雄さん)

「神祠取調明細記」― 入山

この資料も入山だけのものである。

入山地区の各小字に祀られている祠について、小字毎にかなり詳しく報告している。

それぞれの小字内に祀られている祠ごとの祭りの報告である。

その調査結果を、それぞれの祠掌(神官)と戸長の連名で県令宛てに提出した報告書である。

祭具や神宝、社木まで取り上げ、それが何本あるかまで報告して居る。

こうした調査報告が、氏子十数名というような小社いまで及んで居るのである。

なぜこのような詳細な調査報告がなされているのか。その理由については、現状では分からない。ただ事実を報告するだけのことである。

なぜこのような、「明細記」とまで称する調査が、入山のような山奥にまで行われたのか。しかも、小字単位の調査である。

「神社明細帳」

六合村の神社についての基本台帳としては、各村において、明治の初年に編纂して県へ提出された「神社明細帳」がある。「六合村誌」には、この台帳に収録されている資料に基づいて、六合村の各大字毎の神社についての一覽表を収載している。

この表を見ると、明治の初年には、各小字ごとに神祠を祀っていたことを知ることが出来る。

各字ごとの信仰の形をしるために、神社の記録を抜き出して見ることにする。南部地区は明治十二年の「明細帳」、入山地区は、明治十四年現在の「明細記」である。

(字名) (社格) (社名) (祭神) (境内末社) (氏子数)

①日影村

八升蒔	村社	八幡宮	菅田別尊	五社	50
合ノ畑	無格社	神明宮	大日靈尊	一社	5
田端	〃	諏訪神社	健御名方命	三社	5
		八坂刀売命			
平沢	〃	神明宮・熊野社	大日靈命	無し	5
		伊邪那美尊			
中沢	〃	稲荷社	宇迦御魂神	四社	6
下沢	〃	竈三柱神社	奥津彦神	六社	18
			火産靈神		
			奥津姫神		

② 太子村

花園	村社	諏訪神社	同前	二社	2
榎木	無格社	稲荷神社	倉稲魂命	一社	2
下太子	〃	大山祇神社	大山祇命	一社	2

③ 赤岩村

中野	村社	諏訪神社	同前	二社	6
鍛冶谷戸	無格社	熊野神社	速玉男命	七社	6

④ 生須村

同右	〃	神明宮	大日靈命	四社	6
中野	〃	稲荷神社	倉稲魂命	無し	6
同右	〃	飯綱神社	保食命	無し	6
矢ノ下	無格社	琴平宮	大物主命	八社	6
広池	〃	大山祇神社	大山祇命	三社	6
広池	〃	稲荷神社	倉稲魂命	一社	6

⑤ 小雨村

東平	村社	赤城神社	大己貴命	一社	1
同右	無格社	八坂神社	健速須佐之男命	一社	1
同右	〃	琴平宮	大物主命	三社	1

南	村社	諏訪神社	健御名方命	二社	2
小雨	無格社	神明宮	大日靈命	無し	2

⑥ 入山村

諏訪原	村社	諏訪神社	健御名方命	一社	1
小倉	無格社	白根神社	日本武命	六社	2
根広	〃	伊勢宮	豊受姫命	無し	1
和光原	〃	諏訪神社	健御名方命	無し	2
引沼	〃	白根神社	日本武命	一社	2
世立	〃	伊勢宮	豊受姫命	無し	4
京墳	〃	伊勢宮	豊受姫命	無し	4
品木	〃	赤城神社	大國主命	無し	1
梨木	〃	伊勢宮	豊受姫命	二社	1

以上、六合地区の明治初年における神社信仰に就いて考えるための基礎資料を提示してみた。

ここに、六合地区における、各地区（小字）における神社信仰の基本形が示されて居ると思う。

一番下の数字が、各小字の明治初年における戸数である。

当時の、六合地区の各大字は、概ね小地域の連合体という形を示して居る。

この一覧表によつてはつきりして居ることは、一つの村（いわゆる大

字)ごとに「村社」が一社ずつあり、そのほかの小社は無格社として同地区内で並列の扱いとなつて居るのである。

ここで問題になることは、このように地方の末端にまで及んで居る社格制度のことである。

明治初年には社格制度によつて、全国の神社は大きく、官社(官弊社と国弊社)と諸社に分けられていた。地方の神社の大部分は諸社に含まれて居た。(群馬県の場合、貫前神社だけが国弊中社として官社に属す)のである。諸社の中は府県社と郷社に分けられ、後に特例として郷社の付属として村社、更には無格社が認められた。

六合地区についてこの社格制度を当てはめて見ると、各大字に一社ずつの村社が認められ、その他の社は無格社として認められて居たのである。

もう一つ、注意して戴きたいことは、再下段の算用数字にご注目願いたい。各社の氏子数である。入山について言えば、178とあるのが当時の入山全体の戸数であつたと考えられる。この表を見れば、世立を除けば小さな集落が谷間に点在して居たということを知る。そんな共同体ごとに、思い思いに、神祠を祀つて居たのである。

そして、それぞれの神祠に政府による神格が付与され、全国的な規模での神社の差別化が行われて居たのである。村社は一村に一社だけである。その他の社は無格社。

ところで、時の政府は宗教政策についても、国家管理の強化を図つていたのである。神仏分離と神社合併による信教の統一を画策したのである。

その具体的な現れが、各村の無格社の村内への合併である。

このことは、別項に示すとおりである。赤岩では神社合併後の旧社地が未利用のまま、現在まで残つて居る様子を見て来て居る。

同じようなことは他地区でも聞いて居ることである。中には、神様が大神に強制合併された後も、土地の産土様のお祭りを元のままの形で継続して居るところもあるという。

六合地区の社寺の合併記録

一 神社合併関係の記録

・ 赤岩村字中野 村社諏訪神社 境内末社二社

明治四十一年八月十日許可。 村社赤岩神社へ合併。

一 基本金式百円也 関新十郎外五十五人ヨリ寄附。

右明治四十年四月三十日届出。

・ 赤岩村字中野 無格社稻荷神社

明治四十一年八月十日許可。 村社赤岩神社へ合併。

・ 赤岩村字矢ノ下 無格社琴平宮 境内末社七社

明治四十一年八月十日許可。 村社赤岩神社へ合併

・ 赤岩村字鍛冶谷戸 無格社神明宮 境内末社四社。

明治四十一年八月十日許可。 村社赤岩神社へ合併。

・赤岩村字鍛冶谷戸 無格社熊野神社 境内末社七社
明治四十一年八月十日許可。 村社赤岩神社へ合併

(明治)二十一年九月十二日落成届。

・赤岩村字廣池 無格社大山祇神社 境内末社一社
明治四十一年八月十日許可。 村社赤岩神社へ合併。

・太子村字下太子 無格社大山祇神社 境内末社一社
明治四十一年六月十三日許可。 村社諏訪神社へ合併。

・小雨村字小雨 無格社神明宮
明治四十一年六月十三日許可。 村社諏訪神社へ合併

・太子村字楡木 無格社稻荷神社 境内末社一社
明治四十一年六月十三日許可。 村社稻荷神社へ合併

・生須村字東平 村社赤城神社 境内末社一社
明治四十一年六月十三日許可。 村社諏訪神社へ合併

・日影村字下澤 無格社竈三柱神社 境内末社六社
大正二年七月三十一日許可。 同所村社八幡宮へ合併

・生須村字東平 無格社琴平宮 境内末社三社
明治四十一年六月十三日許可。 村社諏訪神社へ合併

・日影村字中沢 無格社稻荷神社 境内末社四社
大正二年七月三十一日許可。 同所村社八幡宮へ合併

・生須村字東平 無格社琴平宮 境内末社一社
明治四十一年六月十三日許可。 村社諏訪神社へ合併。

・日影村字田端 無格社諏訪神社 境内末社三社 (官有地
台帳ニハ、字八升蒔トアリ)張り紙)
大正二年七月三十一日許可。 同所村社八幡宮へ合併。

・太子村字花園 村社諏訪神社 境内末社二社
明治四十一年六月十三日許可。 村社諏訪神社へ合併。

・日影村字合畑 無格社神明宮 境内末社一社 (官有地台
帳ニハ、字壱貫地)トアリ)張り紙)

本社 間口二尺一寸、奥行三尺六寸
(明治)十六年一月二十七日建換聞届。

華表 高八尺 笠木九尺

・日影村字平沢 無格社神明宮 熊野社
大正二年七月三十一日許可 同所村社八幡宮へ合併。

右十六年一月二十七日新築聞届

・入山村字世立 無格社伊勢宮
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併セリ

・入山村字引沼 無格社白根神社 境内末社一社
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併セリ

・入山村字小倉 無格社白根神社 境内末社六社
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併セリ。

・入山村字和光原 無格社諏訪神社
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併セリ。

・入山村字梨木 無格社伊勢宮 境内末社二社
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併。

・入山村字京墳 無格社伊勢宮
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併セリ。

・入山村字品木 無格社赤城神社
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社
へ合併セリ。

・入山村字根廣 無格社伊勢宮
明治四十四年八月三十一日許可
同所字諏訪原村社諏訪神社へ合
併セリ。

民俗

一 六合の民俗

前著『六合村誌』の中の「民俗」関係の資料は、百三十六頁にわたって収録されている。その内訳は次のとおりである。

年中行事（八九三〜九二九頁）

食生活の現状（九二九〜九三三頁）

芸能（九三三〜九四五頁）

伝説と民話（九四五〜九六六頁）

方言と訛語（九六六〜一〇〇二頁）

石仏（一〇〇三〜一〇〇八頁）

姓と家紋（一〇〇九〜一〇一八頁）

村の神と信仰（一〇一八〜一〇二二頁）

禁忌・まじない・前兆・怪異（一〇二二〜一〇二三頁）

民家（一〇二三〜一〇二九頁）（民俗編合計一三六頁）

右の「民俗編」の目次を見て明らかのように、前の『六合村誌』では、「年中行事」と「方言と訛語」、次に、「芸能」にやや重点がおかれ、その他の項目については、概略に留まっていたようである。

特に、「人の一生」や「衣と食」「生産・生業」「民間信仰」などについての資料についてはほとんど無く、わずかに、「方言・訛語」を通して、

その一端を知る手掛かりとしている程度である。

そのことは、『村誌』という限られた紙面（枠内）での仕事であるので、やむを得ないことでもあったのである。そのために、今回の、『続・六合村誌』では、前著の補完、続編という形は取らなかった。新たな形で、「六合の民俗」を世に示すという、難しい課題（選択）を負わされること相成ったと言うことである。

そこで、前著と併せて、「六合の民俗」とは如何なる物かということについて、世に示してゆかねばならないのである。しかし、『村誌』の一部門としての「民俗編」の立場上、「六合の民俗」について、各部門にわたって系統的に論述しなければならないが、本稿では紙面の関係上不可能なことである。

そのために、便法として選んだ方法が、昭和三十六年に実施された県教育委員会による六合村をフィールドとする民俗調査の、調査結果をまとめた調査報告書『六合村の民俗』を参考にしながら、新視点に立つての「六合の民俗」の再構成と言うことであった。（『村誌』の巻末に『上毛文化』所収の「六合の民俗」の報文あり。参考資料として有効利用。）そこで、「六合の民俗」の大綱を示すために、まず、別冊の「六合の民俗」資料の中から、特長的な項目を取り上げて「六合の民俗」へのアプローチの一助とした次第。

① 旧暦から新暦へ

入山での、旧暦から新暦への切り替えは、昭和三十六年の正月からであったという。

このことは、六合村全体が一斉に言ったことではなく、入山地区だけのことであったのである。

ただ、仕事や、行事によつては、旧暦をそのまま存続する場合もあつたという。

いずれにしても、入山地区の人達は、遅くまで、旧暦による生活を営んで来たわけで、此処に大きな生活革命が行われたことを知るのである。

② 南部地区と入山地区の民俗（習俗）の違い

「六合の民俗」という標題で六合地区の民俗について表記出来ないほど、南部と入山ではその生活様式に違いが見られる場合があるという。

その点は、個々の民俗について表記する場合に、特に、「このことは、入山地区において著しく見られる」とか、「入山のみにおいて行われている習俗である」というような注記を必要とする資料のあることによつても知ることが出来る。

特例として挙げられる事例が、「昔がたり」である。入山地区において色濃く展開されて来た民俗の代表例である。人が亡くなったときに見られた「ツレニイグ」もその一例であつたという。

③ 小字が分立していた入山地区

このことについても本文中に特記しておいたとおりである。

前著『六合村誌』の特別資料として、当時の郷土雑誌「上毛文化」収載の「入山土俗考」の中で、前著『六合村誌』の編著者である萩原進氏は、入山の民俗全般について紹介しておられ、入山の各小字の自立的な生活についても言及され、また、前記旧暦生活についても特筆されておられる。昭和十三年の調査報告として貴重である。

次に注目すべきは、明治十年の各字の総代からの、県令宛に提出された「仏堂存置願」のことである。このことについては、稿を改めて報告を行つておいたが、小字単位の標記の如き、積極的な行動に驚く。この

ことは、別項に示すように、各字の自立性、独立性を具体的に示す行動と言えよう。

④ その他の特長的事柄（項目）について

次に、この他の特長的事柄（項目）について取り上げて、必要に応じて、簡単な解説を試みることにする。

*社会伝承

・家族の私財

ヘソクリ・ホマチ・キュウデ・コデ・コゼクリ・クスガネ

・病人駕籠

ムラの重病人を乗せて、草津の医者のところまで運んだ。駕籠は二人ずつ、交替で担いだ。オテンマであつた。

・オヤコとマケ

オヤコは親類のこと。アクセントは平板。マケは一族のこと。

・チョウヤ

ムラの集会所。今の公民館。

・オカシラサマ・コガシラ

ムラのリーダーと補佐役。

*経済伝承

・コウリヨク・オテンマ

ムラの相互扶助・共同作業。

・ユイ

手間交換のこと。

・ヤキハタ

ヤキマキ・ヤキヤマともいう。

・炭焼き

・木工業

マゲモノ・サイク。

ムシロ織り

ネドフミ・スゲムシロ

・カリウマ

信州の農閑期に、農耕馬を借りること。

・ヤキモチ・イリヤキ

・バクメシ

*儀礼伝承

・このことに関連しては、特に、前の『村誌』には、「人の一生（人生儀礼）」についての資料が、一切取り上げられていなかった。ただ、同じ筆者による入山の「人の一生」に関する資料が、特別資料として、前の『村誌』の付録として収録されているので、『村誌』の資料としては重複を避けたのかもしれない。

しかし、特にその「付録」の中に、目立った資料の掲載は見当たらないので、今回の『続・六合村誌』の中で注目すべき、主な資料項目を掲げてみることにしたい。

・ヨバイ・オシヨメ・トンビノハネ・ビツキ・皿売りの余興

・エズミ・カザゴ

・トドケ・ハウベイ・ツレニイグ・両墓制・アマオチと無縁仏

・年中行事としては、

正月の神様・仏様への供え物として・・・鏡餅・切り餅。

入山地区においては切り餅の形が多く見られたようである。自家製

の鏡餅を供える家は、ほとんど南部地区に限られていたようである。

六合地区においては、水田を耕作していた農家は少なかったようだが、水田を持たない農家や、非農家では、餅米を買って来てまでも餅を搗いて、伝統の正月行事として、鏡餅や、切り餅を作って、神様や仏様にお供えしたという。

前の『村誌』の「資料集」のところには、次のように出ている。(一〇四六頁)
餅は相応に搗いている。

お供え餅は別段作らず、角餅を進ぜる。

以下、前項のほかにも、年中行事として、注目したい行事。

オモリモン・オンベヤ(ドンドンヤキ)・かかし神への信仰・鳥追い

行事。入山の山本家の正月伝承

仏の正月(仏の年とり)・小雨の半年年・引沼のウブヤシナイ・日影のオカマップタ・ブラクごとの甘酒祭り。

子振舞い親振舞い・十日夜の晩の魔道。

・民間信仰については、

特に、矢倉のご本尊様への信仰が注目される。

中世から続いていると言われている信仰であるが、未解決の内容も含まれている。特に、信越方面の「マイリノホトケ」の信仰との関係など注目すべき信仰内容を含んでいると考えられている。また、「ネブツチョウ」のことなど、引導僧との関連など、菩提寺の存在形態との関連などを含めて、民間信仰の基本について問われているところである。

*言語伝承について

この分野においては、「昔話」と「方言」が目立つ。

「昔がたり」については、特に、早くから、県の内外の専門家から注目されて来た民俗文化財である。

入山の「昔がたり」については、特に古くからの研究歴があり、多くの専門家から、調査研究の対象として選ばれている。その結果、県外の研究者による入山の『昔話集』の刊行が行われているほど有名である。

「方言」についても、「昔がたり」と同様に、県内外の専門学者の研究対象に選択されるほど有名であり、特色ある内容を示している。

そのために、前の『村誌』や県教委による『六合村の民俗』の中にも代表的な「入山の方言」が数多く収録されている。古くは、鈴木牧之の『秋山記行』の中にも「入山の方言」が収録されていることは、衆知のとおりである。

「入山の方言」については、専門学者による研究書も出版されているので、詳細については、専門書に譲ることとする。その表現の特異性については、「世立言葉」なる表現もあるほどである。外部の人には世立の老人同士の会話の意味を捉えることが出来ないほどであったという。本書では、入山の「方言」については、生活用語としての面から、その用法を捉えたにすぎない。

以上、『続・六合村誌』の「民俗」編に関わる内容の概要について記してみた。

「六合の民俗」の全般に互つての資料の収録は困難であるので、あらかじめ、編集室で作成した民俗編の構成に準拠して、「六合の民俗」として特長的な資料（習俗）のみを選択して収録したものである。

食事のこといろいろ

・一日の食事（食制）の呼び名

アサメシ

コビル（コビリ） 十時休み

チャツケ 十二時（昼食）のこと。（空腹のときのこと）「やがて、チャツケ時分だ。腹が減っては駄目だ。チャツケでも食ってからに、すべえや」

コジユウハン 三時休みのこと。

ヨウハン ユウメシ

・昔の主食のこと

ヒエメシは、腹持ちがよかつた。

朝飯は、（普通は）ヒエメシだつた。

（身上の）いい家では、ひきわり飯を食べた。

その家にあるものを食つたので、むぎのある家では、麦を食つた。

米のない家では、米を食えなかつた。

稗と米の割合を、

7対3とか、8対2に、した。

まるつきり稗飯だつた。

稗飯はいやがつて、弁当にはジリヤキを持って行くものが多かつた。

稗飯はこぼれやすかつた。

昔の人は、麦がとれば、麦飯べえ、稗がとれば、稗飯べえ食つていた。

チャツケは、飯と味噌汁とおかず（漬物）ヒルメシともいう。

飯は、稗飯、麦飯で、米が少し入つて居た。

汁は、蕪でもジャガイモでもいっぺえ入れて、春先、青いものが取れるまで間に合わせた。

・コビルのこと

コビルにはヤキモチを食べた。

トウモロコシ、団子、蕪のゆでた物、ジャガイモの煮つころがしなど。

コビルのときには、ヤキモチを食べた。

コビルの場合は、飯を、茶碗に盛つて食うことをせずに、石を助けた。ヤキモチの数をうんと食つて、石（穀物）を助けたのである。

・コジユウハン

ヤキモチとかダンゴを食べた。

ダンゴは、チョウセンピエ、ヒエ、トウギミの粉で作つた。

イグサでよごせばうまかつた。

・夕飯

夕飯には、

オツケダンゴ

ホウトウ

ニコミウドン

小さなジャガイモの茹でた物などを食べた。

生の麵を汁に入れて煮たものが、ニボウトウ

茹でためんを、汁の中に入れて煮たものを、ニコミウドンと言った。

オツケダングは、翌朝の、温め返しの方が楽しみだった。

矢倉のご本尊様

霜田家のご本尊様

延享年間の頃に、矢倉には七軒あったという。

観音堂の改修時の寄付板に七軒の名がある。この観音堂は現存していない。今の矢倉の軒数は三軒。矢倉から和光原へ移ったという霜田姓の家がある。

・本尊様の祭り

矢倉の霜田さんのところで、八月十五日に、本尊様を出して、祭っている。

(阿弥陀様などの)掛軸を出して飾った。

元は、正月の十五日と、八月の十五日に掛軸を飾った。

今は、八月の十五日の朝、座敷に五本の掛軸を出して飾っている。

むかしは、七本の掛軸を飾っていたが、二本の掛軸が傷んで、出せなくなつたので、五本だけ出している。

この日、赤岩の鏡学院さんという法印さんに拝んで貰っていた。(93年当時の話 2011年にはこの事実なし)

・阿弥陀様(本尊様)の不思議

入山矢倉の霜田かず子さんのお宅では、盆の十五日に掛軸五幅をザシキに飾ってお祭りする。霜田姓の人が、この日集まって、お金を出し合つて供え物を買ったり、集まった人が会食をしたりした。

掛軸の中に、阿弥陀様の掛軸がある。

この阿弥陀様には、不思議な話がある。

霜田さんのところで庭に穀物などの干し物をして留守になって、雨が降って来たりすると、ちゃんと干し物を取り込んであるという。

夕立が来たというので、急いで家に帰つて来てみると、庭の干しものはちゃんと取り込んであったという話がある。

それで、これは、阿弥陀様を信仰しているので、阿弥陀様が干し物を取り込んでくれたのだということになった。

昔から、そう言っている。

・ご本尊様のこと

昔は、矢倉の霜田家の人が集まってご本尊様のお祭りをして居たという。

この日には、入山の下の方からも、草津の方からも、和光原からもお参りに来た。

昔は、(この辺の人)信仰対象としては、このご本尊様位しか無かった。頭が痛けりゃ、ご本尊様を拝みに来た。

いろいろのことで拝みに来た。

今でも、八月十五日なると、拌みに来てくれる人が居る。

(以上 話し手 入山字矢倉 霜田かず子さん 昭和九年生まれ)

・矢倉の阿弥陀様の掛軸のこと

矢倉の霜田かず子さんのところには、阿弥陀様の掛軸がある。

盆の十五日に出して祭って居る。

この掛軸のことは本尊さんと呼んでいる。

この掛軸は、昔、(入山の) 見寄から持つて来たという話もある。

見寄には大日如来の仏像があり祭られているが、これが昔は矢倉にあり、阿弥陀さんと取り替えつこをしたという話もある。また、阿弥陀様の掛軸を、見寄の人が竹藪の中に捨てたのを、矢倉の人が拾って行ったと言う話もある。

(話し手 入山字根広 中村福美さん 大正十五年生まれ)

・本尊様への供え物

八月十三日・・・お盆様が来た晩は、うどん。

十四日の晩・・・ご飯を炊いて上げる。(お椀に入れてあげる)

十五日には、本尊様には、

朝は、ご飯。

昼は、赤飯。ブドウの葉に載せて、お椀(二つ)に入れて上げる。

夜は、うどんなど。家の者が食べるものを上げる。(普通の皿に載せて上げる。)

十日夜

十日夜のこと

山稼ぎをして居る人は、十日夜には全部、山から家に帰って来た。

ところが、一人、因業な人が居て、その晩、山小屋に泊まって居たつて、そうしたら、夜中に、山小屋をこじ開けて、その人の用意して置いた夕飯をかつつあらって行ったものがあつた。

その人は、夜通しで、家に逃げ帰つたという。

入山の人は、山へ行つて、小屋を掛けて仕事をしていても、十日夜の晩には家に帰って来たという。家族と一緒に、十日夜の晩は過ごすようにした。

あるとき、ヒシヤクとか、メンパの山取りに、山で仕事をして居た人が、十日夜の日に、

「家なんざへは帰らねえ。山で十日夜をするから」

と言つて、一人で山に居たら、夕方になって、急に雪が降り出した。

それで、その人は、

「これでは、ここにいても、仕事になんねえ」

と言つて、家に帰つて来ようとした。しかし、雪が荒れて出して、途中で帰って来たが、とうとう山の中で死んでしまったという。

次ぐ日、村の人がみんなで行つてみたら、途中で、背負つて来た燃しし木を燃やして、当たろうとしたが、燃せないで、死んで居たという。

十日夜に家に帰らなかつた人に、罰が当たつたという話である。人が帰るときには帰るもんだということである。

旧曆十月十日の晩に、カカシを庭に立てた。
丸い餅（飴）を上げた。

カカシ上げは、十日夜の夜の行事であつた。

カカシさんには餅をしんぜた。

このとき、「長々お世話になりました」とお礼を言った。

種を蒔いて、鳥や獣に掘られないようにと、番をしてもらつた。その

お礼を言った訳。

十日夜のときには、子供が、藁鉄砲（ツトッコ）で、家の周りを叩いて回つた。

これは、モグラが土をおこさないようにとということであつた。

「十日夜、十日夜、十日夜はいいもんだ、よう餅食つちやあ、腹太鼓」

といいながら、藁鉄砲を叩いて歩いた。

十日夜は、お月見の訳という。

十日夜の晩に晴れると、餅類が当たると喜んだ。

「十日夜、十日夜、夕餅食つては、腹太鼓。たあたたけ、たあたたけ」

山仕事をしている人が、十日夜の晩に、山小屋に居ると、魔物が来て、山小屋を揺すつてそこに居られないから、十日夜の晩は、家に帰つて来るもんだと言つた。

十日夜の晩には、山小屋に居るもんじゃないと言つた。魔物がいたずらをするからという。

・十日夜と山男

十日夜には、山に泊まるもんじゃないと言つた。

このとき、家に帰つてくる人の後に、山犬がついて来たという話がある。

（話し手 六合村根広 中村福美さん）

・十日夜と山仕事

山仕事をする人が、山小屋にいても、十日夜には、家に帰つて来るもんだと言われた。

この日、マドウがやつて来ると言われた。

・十日夜の特例行事

十日夜の晩に、昔、あるところで、子供が寝てから、夫婦で次のような行事をした家があつたという。

おつかあは、汁杓子で、自分のおなかをたたく。

亭主は、男の物を出して、

「アワボ、ヒエボ、このとおり」

という。

おつかあは、

「わたしのカマスもこのとおり」

といいながら、おなかを杓文字でたたくと言う。

・昔は、

「十日夜は、女衆の年取りだ」と言った。

「この晩は、女衆の年取りだから、お勝手仕事はしなくてもいい」と、言った。

(話し手 六合村根広 中村けささん 大正七年生まれ)

・十日夜のこと

十日夜には餅を搗いた。

この日、子供たちは、藁鉄砲を作って、人の家の庭を叩いて歩いた。

本家のひいじいさんは、因業で、十日夜の晩に、山に泊まっても、何のことがあるかと言って、その晩、山へ泊まったって。

犬を連れて、鉄砲撃ちに行った。

それで、山小屋に泊まって居たら、山犬が来た。

小屋をバサバサかき回した。

「オオン」

と鳴いて居たという。

じいさんは、「今夜は山犬に食われる」と思っ居たという。

連れて行った猟犬は小屋の中に入れずに、戸を閉めて居たという。

その内に、山犬の鳴き声が聞こえなくなったので、山小屋を逃げ出したという。

じいさんは、家に帰って来る途中、

「十二様、十二様、二つ玉でござる」といいながら、空鉄砲を撃ったという。

その言葉を、繰り返しながら、家に帰って来たという。

山犬は、後を追いかけて来ても、空鉄砲を撃つと、少しの間は動かないで居る。

じいさんは、その間に逃げて来たという。

じいさんは、空鉄砲を撃ち、撃ち、逃げて来て、家の中へ逃げ込んだという。

翌朝見ると、じいさんの猟犬が、村外れで、骨だけになって居たという。

(話し手 六合村根広 中村けささん)

・十日夜の晩のこと

野反湖の山の奥に、山師がメンパの材料を取りに行った。

旧暦十月十日の晩の事である。

そしたら、一本眼の人が出て来て、

「今夜食うべえか、明日の晩に食うべえか」と言った。

その山師の人は、信州の善光寺さんへ行つて、拜んだことがあるので、

善光寺さんの御判を戴いていて助かったという。

一本眼に食われなかったという。

それから、十日夜の晩には、山にはとまらないという。

十日夜には、(お月様に)切り餅をしんぜた。

お月様に上げる切り餅の数は特に決まって居なかった。

お月様への供え物は、二階に上げた。野菜も一緒に上げた。

・十日夜と魔道

― 十日夜の晩には家で過ごさねばならないこと ―

その一

十日夜の晩には、山へ仕事に行つて居ても、必ず、家に帰つて来いと
言われていた。どうしてかという、この晩には、一本眼が出るから、
家に帰つて居ろと言われて居た。

(話者 入山字世立 山本美代子さん 昭和十一年生まれ)

その二

十日夜の晩には、山の中に入つて居ても、魔道が出るから、この日は、
家に帰れと言われて居た。

(話者 入山字根広 中村福美さん 大正十五年生まれ)

旧暦の十月十日に行われる十日夜は、収穫祭であるという。

山梨県のように、四月十日に山から下りて来た田の神が、この日、十
月十日に山に帰る日として居るところもある。そのために、この十日夜
が、稲の収穫祭の神送りの日でもあるとも言われて居るのである。

本県では、このようなはつきりした農業との係わりあいは表には出て
居ない。「大根の年取り」というのが一般的な十日夜の総括のようなも
のである。

このような、農業にとって大事な年中行事である十日夜に対して、入
山では、前述のように、ちよつと変わった説明を行つて居るのである。

入山の人達の山仕事に、なぜ、魔道が出て来るのか。

十日夜の晩になぜ山で過ごしてはいけないのか。

そのことが、命に係わるほどの重罪なのか。

これほど大きなこと、重いことを、魔道が一方的に決定することが出
来るのはなぜか。

別の立場から見ると

山人は、家に帰つて何をすることが義務づけられて居るのか。

言い変えると、山人の、この日の役目は何か。山人は、主人か、若い衆か。

十日夜の祭りをどのような形にすることが義務づけられて居るのか。

入山の十日夜は、どのような意味を持った行事なのか。

もう一つ別の立場から

魔道が、誰も居ないところで、自由気ままな行動がしたいから。

十日夜様の昇天を邪魔されないうために。

・十日夜の藁鉄砲の歌

十日夜、十日夜、

十日夜はいいもんだ。

朝そばきりに、昼団子、

よう餅食つちや、腹太鼓

たあたたけ、たあたたけ。

入山の神の信仰

山神様

・山の神様のこと

山も神様のことは、十二様という。

春先、一回祀った。

五月八日に祀った。この日は、端午の節句の最後の日（お仕舞い）である。この日は、オボタテをする。

小豆のご飯を炊いて、魚と一緒に持って行って山へ上げてくる。

この日、小豆飯を炊いて山の神様（山犬さんに上げる）にあげるのである。

山犬さんは、山の神様の下使いである。

山犬さんが子を生やすので、「山犬さんのオボタテ」というわけ。

さんだらぺえしの上に紙を敷いて、その上に小豆飯を載せて持って行った。

小豆飯に、ニシンを添えて持って行った。

小豆飯を、山まで持って行って上げて来たのである。

小豆飯を下げて分けて、オゴフウだと言って、露の葉に載せて、山からもらってきた。

このオゴフウを、子供が分けてもらって戴いた。

お頭が、公民館で煮たのを分けてもらった。

家の者が、露の葉っぱを持って（小豆飯を）もらいに行った。

この小豆飯を食べると、丈夫になる。まめになると言われた。

女の人は、月の巡りのときには、高い山にしか行ってはならないと言った。

・オボヤサン

旧の五月五日の節句の日に、ムラのお頭さんが、前日に小さな平茶碗に一杯の米を各戸から集めておいて、子供達を引き連れて、エノクボ（犬

の窟）へ行き、小豆を用意して行って、小豆飯を炊いた。その小豆飯を

鍋蓋に盛って、山犬さんにしんぜた。そこで、フキの葉っぱを取って来させて、その葉っぱを二枚向き合わせて、茶碗のようにして小豆飯をそ

れに盛り付けて、子供達に食わせた。

エノクボというところは、山犬が子育てをしたところ。

そこには人間が一人横になって入れるくらいの岩穴である。

そのそばに平らな所があって、そこで小豆飯を炊いた。

この行事は、山犬に小豆飯を進げる行事。

歩ける赤ん坊から、子守までの子供が参加した。

山犬さんは、狼と違っておとなしい。人に馴染むというので、この行

事をやっていたのだということである。

（話し手 入山長平 山崎忠一さん 八六歳 2012/09 調査）



オボタテ



オボタテの小豆飯

生須のウブヤシナイのこと

生須のブラクの北に山がある。辰の口というところにある。

その山の名は、「うつこおし」という。東平というところにある。

この山は、岩山である。ものすごい岩がある。岩に丸い穴があいている。その穴は、子供は楽にくぐれた。大人は、その穴のことを水穴（みずあな）と言っていた。

五月五日に、その穴に雪を入れておいた。村中の人が出て、その作業をした。氷を作ったのである。

村に病人が出ると、ここから氷をもらってきた。岩穴に氷があつたのである。

この山には、不動様が祀つてあつた。この不動様は、生須ブラクを守つてくれていた。

五月五日がウブヤシナイの日であつた。

この前日に、山の下草刈りをやった。

このときには、クミガシラが祭りの用意をしてくれた。

この日、ムラの公民館でクミの人達が、ウブヤシナイの祭りのお祝いをした。飲み食いをした。

子供達は、おこわをもらいに行った。ふだんは、ヒエ飯を食べていた時代である。山の麓まで子供は、おこわ（煮ごわめし）をもらいに行った。山のふもとまで行くと、にごわめしをもらつて食べたのである。

このときは、しらきたさんを拜んだ。

この行事は、今でもやっている。

（以上、話し手 生須 黒岩 勇さん 昭和四年生まれ）

十二様のこと

十二様には、子供が十二人いるという。

未婚の人とか、子供を産む人は、十二様に上げたものを食べてはいけないと言った。

十二様を祭る人もあるし、掛け軸を掛けないで祭る人もある。

板に「山神様」と書いて祭つた人もあつた。

その「山神様」の板の前に、お神酒を上げて拜んだブラクもあつた。ここには、十二様の掛け軸はない。

山の神様は、十二様と言つて、女の神様であるという。

生魚、生肉などは上げない。

お灯明、お神酒を上げる。

・十二様のお祭り

月の十二日に十二様を祭つた。

特に、十二月十二日には、山仕事をしているものが、山小屋で、十二様を祭つた。

一月十二日には、自分の家で、個人で十二様を祭つた。十二様のお祭りは個人でした。家の中に十二様の御幣束を祭つてある。その御幣束を拜んでいる。

和光原で十二様の掛け軸を見たことがある。鏡学院という法印さん宅に掛け軸があつた。

普通の家には、十二様の掛け軸はない。

・十二様の窓木

十二様の窓木は切るなという。

窓木というのは、元は一本で、途中で二本に別れ、それから先へ行ってまたくつついてある木のことである。

窓木を切ると、怪我をすと言った。

なお、十二日は、十二様の日だから、木を切るなと言った。

・上棟式のこと

上棟式のこと、タテマエという。

このとき餅を投げるといことは聞いている。

家が仕上がった時には、十二様（お宮）のところへ施主が、

餅、お神酒、おさい

を持って、お参りに行って来た。

東へ向けて上げて、拜んで来る。

家を建てるに就いて、木を切ったところへ供え物をして来る。

これは、十二様に対する感謝の気持ちであるという。

禁忌作物のこと

一 梨木できゅうりを作らないこと

昔は、伊勢から御師さんが大神宮様のお札を背負って来て、お札を配った。御師さんは、村の中では、「トンカン、トンカン」藁をたたいて、草履を作って居た。

御師さんが、聞いた。

「明日、何するんだ」

「鬼退治に行くんだ」

村の人たちは、御師さんが持っているお札の代金が欲しかったのだ。御師さんは、沢に追い詰められて、そこで殺された。そして、お金を取られてしまったと。

（御師さんの殺された沢は、後で、おしの沢と呼ばれるようになったという。）

こんなことがあつて、それで、村のてえが、伊勢参りに行くと、梨木の村が焼けるんだつて。村のては、こりやあ罰が当たつた、と言つて、

「これからは、きゅうりを絶対に作らねえから、勘弁してくれ」

つて、願掛けた。また、伊勢参りにも行かないという。

これは、実話である。

今でもこのしきたりは守られている。

梨木の人はきゅうりを作らない。

昔、梨木で旅の御師を泊めた。

その家の人が、そのとき、わらじを作っていた。

（それを見た）御師が言った。

「皆さん、働きますね」

「明日、しし追いをする。明日は早い」

実は、村の人は、（旅をする）御師の後をつけて行って、襲つて、金を取るうとしていたのだ。

それを（知つてか）、御師は、

「ししはわたしでしょう」

と、言った。

(村の人は)旅の御師に見透かされてしまったのである。

村の人は、御師を殺した。そして、御師の持っていた金を取ってしまった。
た。

そしたら、その後で罰が当たった。

それで、梨木の人は、

「これから、末代まで、キュウリを作らないから勘弁してくれ」と、謝ったという。

それで、梨木の人は、キュウリを作らないという。

二 日影の富沢一家の禁忌作物

日影の富沢一家では、里芋と胡麻を作ってはならないという。

富沢家の先祖が、むかし、里芋の葉っぱで滑って転んで、胡麻の殻で目を突いた。そのために、富沢一家では、片方の目が細いという。

今でも、里芋と胡麻を作らない。

胡麻の代わりにイグサを作っている。

(話し手 六合村日影 富沢一義さん 明治二十一年生まれ 昭和五十年調査)

三 白根さんの氏子 禁忌作物

草津の白根さんの氏子は、里芋と胡麻を作ってはいけないという。

昔、白根さんが、里芋の殻で滑って転んで、胡麻の木で目を突いたためという。そのために、この辺の人は、今でも、里芋と胡麻を作らない。

(話し手 六合村生須 話者不明 昭和五十年調査)

(話し手 六合村太子 話し手不詳 昭和五十年調査)

白根さんの氏子は、里芋と胡麻は作るなと言う。

昔、白根さんが里芋の殻で滑って転んで、胡麻の木で目を突いたという。そのために、白根さんの氏子は片方の眼が細いという。

(話し手 六合村日影 茂木こいさん 明治二十三年生まれ 昭和五十年調査)

四 根広はユウガオを作らないこと

根広の人の場合も同じ事情であった

昔、旅の僧が根広にやって来た。

その僧は鏡を持っていた。

そして、その鏡を(村の)子供に見せた。

子供は、珍しがって、鏡を覗いた。

親たちは、畑うないをして居た。そして、エンガで旅の僧を殺して、鏡を取って、子供に与えた。その後、根広の人に罰が当たった。

そのために、根広の人は、罪滅ぼしとして、

「ユウガオを作らないから勘弁してくれ」と頼んだ。

根広の人は、鏡を埋めて、その上に、大きな石を載せて、熊野社として祭ったという。

(話し手 六合村根広 中村福美さん 大正十五年生まれ)

ツレに行くということ

ツレニイグ

・近所の人が亡くなると、一週間くらい、その家に、近所の人が行って泊まって来た。

それは、家族を亡くした人が、寂しいだろうというのでこうしたのであるという。

夕飯を食べてから行った。

十日間くらいはやっている。今（1995年）でもやっている。

このことを、「ツレニイグ」と言った。

その家に行つて、話をして、泊まって来た。

見寄では、大晦日にはやらなかった。

各家から、一人ずつ行った。

その家の人を、慰めて来るわけ。

線香を上げて来た。

（話し手 六合村入山字見寄 山本新十郎さん 大正十四年生まれ

95/02/12 TEL)

・これは、亡くなった人の様子による。

例えば、八〇歳と言うような高齢の人が亡くなったときには、ツレには行かない。

若い人が亡くなって、同情に値する様な時に行く。

家族の人が、ひんやりしているときに行く。

人が亡くなったときに、一〇〇パーセント行くのではない。

近所の人、身内の人が行った。

別に、規則があつていくのではない。

一軒、一人行った。

わたしの場合、父親が早く死んだ。

子供とかあちやんだけになった。

（そのとき）近所の人、身内の人が一週間か、十日間くらい来てくれた。

（話し手 草津町草津 山本越太郎さん 大正生まれ 95/02/15

TEL)

近所の人や身内の人や、近所の人とか、身内の人や、その家の人や寂しいだろうというので来てくれた。

その家には（余分の）布団がないので、布団を持って来てくれた。

これは、亡くなった人の年齢には、特に関係はない。

その日数は、忙しいときと、暇なときでは違った。

昔は、四十九日のころまで来てくれた。

今（1995年）から、一五年前に女房が亡くなった。

このとき、せがれと二人で、布団を何人分も敷いて、（人の来てくれるのを）持っていた。

一人でも、二人でも、来てくれると有り難かった。

今でも、たまにはツレニイグ人がある。

ふだんの支度で行った。
寝るに行くだけであつた。
各家で、一人ずつ行く。

大晦日には、その一年間で人が亡くなった家にお見舞いに行つた。

「きみしい年越し」と言うので、慰めに行つた。

根広では、家によつては、ムラ中の人に来て貰うと、寝る場所がない。

そこで、班くらしいの人に来て貰うことが限度である。

ツレには、近所の人、親戚の人が来てくれた。

施主がお茶を出してくれた。

特にごちそうはなかつた。

よくよく寝る間際に来てくれる人もあつた。

早く夕飯を食べて、待っている場合もあつた。

ツレニイグというのは、入山全体でやっていることである。

根広でも、和光原でも、引沼でも、世立でもやっていた。

根広の場合だと、根広の人だけが来てくれた。

ツレニイグということは、受ける方からいえば、心の支えになつた。

(話者 入山字根広 話者不明)

病人駕籠のこと

病人駕籠

・根広には、今でも病人駕籠がある。

昔、大病人をこの駕籠に乗せて、草津の医者のところまで連れて行つたという。

・入山では、人が死ぬときでないと、医者に見せなかつたという。

重病人は、駕籠に乗せて、草津まで全力で送つて行つた。駕籠を交替で担いで行つた。

病人の家では、焼酎と肴を用意して駕籠を担いで行つたムラの人が帰ってくるのを待つていたという。

入山の昔の病人は、このようにして死んで行つたという。

病人の家では、ムラの人にご苦労見舞いをしたのである。

昔の入山の人にとっては、医者は、死亡診断書を書くだけの役目だったのだ。

(話し手 中之条町西中之条 奈良秀重さん 大正十年生まれ 昭和六〇/〇四/一八調査)

病人籠は二人で担いだ。

(駕籠に乗つた)病人の近所の人が担いだ。

死人も(籠に載せて)草津まで担いで行つた。

死亡診断書を作ってもらいに、草津まで行つて来たのである。

(話し手 草津町草津 山本越太郎さん 大正五年六合入山の生まれ)

病人は草津へ運んだ。

草津への道は、上り下りがあつた。

坂を下りるときには、背の高い人が前を担いだ。背の低い人が後ろを担いだ。こうして前後の高さを平にした。

病人籠の、草津へのコースは、
根広 — 長平 — 小倉 — 田代原 — 大沢 — ここを上り
上げれば草津である。

根広から草津までは二里あった。

担ぎ手は、交替しながら担いで行つた。

年を取つた人は重いからいやだといつた。

行きだけで、帰りには、用事があるからとか、何だかんだ文句を言つ

て、担ぎ手が逃げて仕舞つた。あるときなどは、二人だけで、交替なし

で担いできたこともあつたという。

現在の根広の病人籠は、澤渡から買つてきたものという。

籠に次のように書いてある。

昭和参年拾壹月十五日 御大典記念

沢渡温泉亀田屋ヨリ買求メ

代参円也

根広組一同所有

この籠の大きさは次のとおりである。

担ぎ棒 長さ 248センチ

太さ 径9センチ

高さ 97センチ

籠の高さ 54センチ

幅 59センチ

籠の台 53×50



病人駕籠 (根広)

背もたれ 52センチ

肩の幅 41センチ

登り坂に差し掛かつたときには、担ぎ手が後ろから押してもらつたといふ。

病人籠に乗せて行つた病人が、途中でなくなつた場合には、戸板に蚕を飼う籠を載せて、布団を敷いて、死人(仏様)を乗せて、籠も載せて、四人で、戸板を紐で吊して担いで、草津の医者のところまで運んで行つた。

戸板を用意してくれた者には、途中で手当を出した。

死人は、病人籠には乗せなかつた。

重病人でないと、医者には連れて行かなかつた。

富山の薬を飲んだりして居た。

病人が、どうにもならなくなると、病人籠に乗せて担ぎ出した。

病人籠に乗せて草津まで行つて、草津から無事に帰つてきた人もあつた。大丈夫というときに連れ帰つた。

伝染病の患者を運ぶときは、後ろを担ぐのがいやだつたといふ。

草津の栗生薬泉園へも連れて行つた。

草津には、当時、

石田、内山、布施の三人の医者居た。

重病人は、大体、この三人のお医者さんに掛かって居たという。

入山の病人駕籠

「病人駕籠」の問題は、山村の小地域（小字）を舞台とする「人間の命の終わり」に関するテーマである。集約すれば老人問題である。

それが、入山地区では、「病人駕籠」の習俗の中に込められているのである。「病人駕籠」のテーマを設定させたもう一つの要因は、草津の医療施設の存在である。

入山地区の近くにお医者さんの存在があったからである。

山村の中の都市的環境の存在である。

どこにでも成り立つ条件ではないのである。

その他にも、この「病人駕籠」の習俗を成立させた条件があるはずである。このことは、隣接する他地区の「病人駕籠」的習俗との比較をみると、例えば、生須や赤岩の「戸板様式」による「病人駕籠」の代用をみるとよく分かる。養蚕の籠に補強をして布団を載せて、病人を載せて医療機関まで運んだということは、「病人駕籠」の一步手前の代用の形である。

駕籠までたどり着かない、地域の特性を生かした一步手前の工夫がなされているのである。

入山地区においては、その駕籠を専門店から購入しているのである。その点が他地区より一步手前を歩んでいる姿を見るのである。

他地区との違いはそのことだけである。

重篤の病人を村人が協同で医療施設まで運ぶことは同じである。

地域協同の病人介護の姿勢がこの習俗の成立の基本条件であるのである。

本来ならば、それぞれの家の老人の最期を看取るのは家族であるはずである。

それを、地区全体の共同作業として、病人を医療施設まで運んでいるのである。

言わば、病人（特にその家の老人）が生前の最後の行動として「病人駕籠」に乗る事は、暗黙の了解として、この病人は、まさに「死への旅立ち」をして来たのである。それを、近隣の人達が応援しているのである。病人（老人）の家族への地域を上げての支援態勢がそこに見られるのである。

この習俗の出発点がどのようなものであったかは全く不明である。

・重病人をお医者さんのところまで運ぶこと

①赤岩の場合

昔、お大尽さんにはお駕籠があつたが、これには病人は載せなかった。

重病人は、戸板に載せて、お医者さんのところへ連れて行つた。

赤岩の場合は、病人を連れて行くところは、長野原の犬塚先生のところと、草津の国立療養所の楽泉園であつた。

ここへ連れて行く人は、大分弱つて来て、どうしようもないというときに、連れて行つた。まだまだ治る見込があるというような人は連れて行かなかつた。

最後の頼みというときには、家の人から始まって、組の人から区長さんのところまでお願いを、連れて行つてもらつたのである。

この辺の言葉に、「戸板に載る」と言う言葉がある。

重病人を戸板に載せてむらの人達が四人とか六人とかで、お医者さんへ運んで行くことを意味していたのである。

戸板に載せられてお医者さんのところへ連れて行ってもらった人が、元気になって帰ってくることはなかったという。

なお、この辺の昔からの言い伝えに、

「医者と法印の後は三代続かない」

というのがあった。

(以上話者 赤岩 関駒三郎さん 昭和七年生まれ)

②生須の場合

ここには病人駕籠はないし、よそ村へ病人駕籠を借りに行くこともしなかったという。

重病人は、蚕の籠を利用して、戸板のようにして板を敷いて、さらにその上に布団を敷いて、病人を載せて運んだ。

二人で担いで行つた。交替が必要だから、担ぎ手は最低四人いた。

ここから一番近い医療施設は、草津の楽泉園であった。ここには、当時としても優れたお医者さんがおられた。

この籠のことは、「かいこず」と言っていた。(注 和光原でもこの籠のことを、「かいこず」という。)

これに載って病院へ行つた人は帰って来なかった。重病人を最後に載せたので、帰りは空の籠であったのである。

この籠に帰りに載ってくる人は、怪我人が盲腸の手術をした人だけである。

(以上話者 生須 黒岩 勇さん 昭和四年生まれ)

葬礼関係の習俗

・両墓制のこと

六合村の昔の墓場の形は、仏様を埋ける場所と、石塔を立てる場所が別々のところにあつた。このことは、学者先生のいわれる両墓制という墓の形である。明治の初めのころまでの六合の墓制はこんな形であつたのである。今でもその名残が地域によっては見られるということである。

この墓制の特長は、一人の人の墓が二か所に分かれているということである。つまり、仏様を埋ける場所と、その墓標としての石塔を建てるところが別であるということである。

仏様を埋けるところを、ここでは、ウメバカと言って居る。目印に木などを植えておく。石塔を建てる方の墓のことを、ここでは、ヒキハカと言って居る。こちらの墓は、家に近いところに建てられている。ウメバカの土を一握り持って行つてヒキハカを作るといふ。(日影)

墓参りにはどちらへ行くのか。お話を伺いすると、家によつては違ふようである。ウメバカの方へ行く(世立)と言う形もあれば、ウメバカ、ヒキバカ双方へ行く(太子)

墓地を二か所に分離した理由はなんであつたか。

両墓制の成立事情は何であつたか。

・ホウベエとは

これは、六合村での特殊な呼び名である。

葬式の時だけに使われる言葉であるという。

村内の人が亡くなったときに、葬儀に係り使われる言葉である。

葬式のときに、仏様の親戚でもなく、組内でもなく、ムラ内の他人様が、区長さんから頼まれて、葬式に係る仕事をするのである。その仕事とは、

穴掘りをしたり、

棺担ぎをしたり、

棺担ぎをする人の履く草履作りをしたり、

(場所によると)

病人駕籠を担ぐこと。

人が亡くなったときのツゲに出る事。

葬式のときの旗持ち。

ホウベエの仕事が終わると、施主から、酒、引き物、結び。(時間によっては、膳立てをして、昼食を出す場合もあった。)

ホウベエは、施主から見ると、親戚でない者、組内の者で者。(地域によつては、ホウベエというのは、葬式のときに、組と親類を除いたブラクの者のことをいう。葬式のときだけの呼び名である。――生須)

以上のように、「ホウベエ」と言う言葉は、葬式のときだけに使う言葉である。(日影)

年取り

年取りのこと

十二月三十一日 大年という。

一月六日 六日年

一月十四日は、十四日年

この日、ドンドンヤキ

節分は、セツブドシという。

むかし、お婆さんの子供のころのこと、麦の煮たのを馬にくれた。

このときが、馬の年とりだと言った。日はつきりしないが、十二月二十八日のことかも知れない。

仏様の年取り

盆の十四日は、仏さんの年とりという。

夜ご馳走(米のご飯)を炊き、年とりだからということで、魚を買って来て、家の者が食べた。魚は仏様には上げなかつた。

仏様に上げのご馳走は、ブドウの葉を二枚並べて、その上に載せて供えた。

・盆の十六日には、盆の間に上げたものを、ブドウの葉にくるんだり、大きな紙に包んだりして、盆様を送り出すときに、墓まで持って行った。

・お盆の十四日の晩には、年寄りのご飯を仏様に(盆様)に上げた。

ご飯を、ブドウの葉っぱに載せて上げた。

盆の十四日の晩のことは、「おぼんどし」と言った。

盆十五日の朝は、赤飯したり、ぼたもち(おはぎ)を作ったりした。この家では、赤飯をこしらえて上げて居た方が多かつた。

昔の人は、(仏様には)何でも上げせえすればいいと思つて居たようだ。

十五日のお昼には、別に決まりは無かった。夜は、うどんをした。

十六日の朝は、ご飯を炊いて盆様に上げた。

これを、盆送りのときに、墓まで持つては行かなかった。

オモリモンという行事のこと

これは、正月の年とりの行われる日に、正月様とか仏様などに米の飯をお供えする行事のことである。

場所によつて、行事の日取りとか、供え物に若干の違いが見られるが、大筋においては、正月中の、大晦日、三が日、六日年、十四日年などの、いわゆる「年とり」の日に、正月様、屋敷神様、門松、仏様（仏壇）などに米の飯などをお供えする行事である。

この行事の大きな特長が、「米の飯」を、「正月の年とり」の日に家の神様、仏様に上げることとすることである。

この行事の意味はまだ捉えられて居ないが、なぜ「米の飯」をいろいろな神様にお供えするのか。

そして、「オモリモン」という特殊な呼び名の意味することは何か。

「仏の年とし」とともに、「米の飯」を取り立ててお供えすることの意味は何か。

入山での「米の飯」の存在価値と併せて考察すべき内容であるといえよう。

年取りのときに、オモリモンといって、米の飯をお椀に盛つて神様、仏様に上げること。

その機会は、次のとき、

大晦日

六日年

十四日年

この三回の時に、オモリモンと言つて、ご飯を炊いて、お椀にもつて、屋敷の神様

神棚・・・ここには、お正月のときに、おしめを張つた。お供えもあげる。

庭のお飾り・・・お松（おしめ）を立てたところ

仏様・・・ここには、正月中は、餅は上げない、お供えも上げない。

むかしから、ご飯は上げるが、雑煮とかお汁粉は作らなかつた。お客さんでも来れば、作つて出した。

ふだんは、米ぞつきは食べない。米に、稗とか粟を交せて食べていた。（以上、話し手 入山字京塚 山口愛子さん 昭和八年生まれ）

・フクデエ

暮れに搗いて、神様に上げるお供え餅のことを、フクデエという。フクデエモチという。

餅搗きのときに、お供え餅の分は、先に臼から取つて置く。

この餅のことを、オソナエとも、フクデエともいうのである。

・和光原のオモリモン

和光原では、

正月の三が日

六日年

七日年

十四日年

の日に、ご飯に、餅をサイコロのように切ったのを載せて、それをお椀にもって、

家の神棚

仏壇

門松

土蔵

井戸神様

屋敷神様(ある家)

などに上げる。

これを上げるのは、年男の役目であった。

門松のところには、藁でゴキと称する容器を作って下げておいた。それ

れにこのご飯を供えた。

この供え物のことをオモリモンと言った。

オモリモンの習俗は、六合地区に広く見られる。

(話し手 入山字和光原出身 山田武俊さん 昭和十三年生まれ)

・クロドシとは、すす払いのこと。

大晦日のことは、ホンドシと言う。

六日年

一月十四日のことは、「農道具の年取り」と言う。

この日、借りていた農道具は返した。

(話者 入山字根広 中村福美さん 大正十五年生まれ)

・ヨゴレドシ(煤払い)

煤払いは、十二月の二十五日ごろ、大安の日を選ぶ。

このとき、煤払いをして、スドシを取った。

このことを、ヨゴレドシと言った。

・大晦日

オオバライ、オオドシと言った。

普段は、家族の食事はお勝手ですが、大晦日には、家中の物が、茶の間で夕飯を食べる。このときは、ご飯を食べた。

お膳を作って、四つ椀で食べた。御平、皿、ご飯、おつゆ。

酒を一杯ずついただいて、家中の者が揃って、夕飯を食べた。

この晩は、一年中のお年とりだと言って、子供にもお神酒を飲ませた。

なお、大晦日に早く寝ると、白髪になると言った。

(話し手 太子字下太子 富沢虎之助さん すい子さん 明治四十三

年生まれ)

・六日年

これは、軽い年取りである。

ご飯を炊いて(神様―お正月様)に上げる。

おかずは、鮭の大きいのを買って来てあるので、これを切って焼いて

食べるくらい。

・米の飯を上げること

赤岩の関家では、

大晦日、六日年、十四日年の朝に、主人が、神棚、皇大神宮のお札、

戎大黒、窯神様、家の中の水神様、二階のお札、稻荷様、土蔵の神様、

便所の神様、井戸神様、

仏様（仏壇）

門松

に上げる。

このことについて、関家では、オモリモンとは言っていない。

六合地区の「仏の年取り」の伝承地

・南部地区

赤岩 そのような伝承なし

日影 伝承無し

太子 伝承無し

小雨 伝承無し

生須 「仏の年取り」の行事あり

・入山地区

和光原 「仏の年取り」の行事あり

引沼 「仏の年取り」の行事あり

世立 「仏の年取り」の行事あり

矢倉 「仏の年取り」の行事あり

根広 その伝承なし

長平 「仏の年取り」の行事あり

小倉 「仏の年取り」の行事あり

京塚 その伝承なし

荷付場 その伝承なし

梨木 伝承なし

品木 伝承なし

右のとおり、七箇所での「仏の年取り」の伝承を確認している。このことは、この行事に、その地区で出会ったという人の証言によるものである。このうちで、現在もこの行事が継続しているとの話があったところは、矢倉と世立の二か所に過ぎない。

この行事の伝承範囲は、思ったより狭い感じである。

以前はどうであつたかということについては、確認することは難しい。

いずれにしても、「仏の年取り」と呼ばれる行事が、六合地区において行われていたということを確認することができたのである。

年取りの行事の中心は、

年中行事の内中心行事（祭り）の前夜（宵）の行事のことであること。

この時の供え物は、米の飯と魚（正月の場合には、鮭の切り身）であること。

この二つの要件を満たすことが、年取りの行事にとって大切なことである。

世立の「仏の年取り」の行事は、

八月十四日の晩の行事で、仏様（ご先祖様）をお祭りする盆行事の宵祭りである。

供え物は、米の飯と、味噌汁のぐ（野菜と煮干し）を、べつべつの葡萄の葉っぱに載せて盆様に上げるといのである。

この時に、米の飯を炊いて盆様に上げるところに、注目点がある。葉っぱに供え物を載せてあげるといことも、古風な点である。

・十四日年

一月十四日のことを、十四日年という。

この日のことを、「百姓の年取り」と言った。

一月十三日に、お松を下げる。引っこ抜いた。

このとき、お繭玉にお飾りを変えた。

一月十四日には、ドンドンヤキのところへ持って行って、ドウロクジンヤを作って、燃やした。

この日のことを、「百姓の年取り」と言った。

百姓の道具（模型）を作って、台所のドジにしんぜた。

実際に、道具を作らないで、道具の目録を書いて代用する人もあった。

ドンドンヤキは、

小雨では、十五日の朝から、小屋を燃やした。

太子では、十四日の夕方燃やした。

道具の目録

奉納

金銀財宝蔵に満つ

農道具 一式

蚕具 一式

と、書いた。

一月十五日が小正月



小正月の作り物（赤岩）



おんべーや（和光原）

・厄年の人のこと

厄年の人は、十四日年のときに、子供が鳥追いをやるが、そのとき、ミカンを一箱とか、お金を少し気張って、子供にくれた。

太子の半年年

・半年の年取り

太子では六月三十日の晩、半年の年取りをする。

おじいさんが松の枝を切つて来て、神棚に上げた。

ご飯を炊いて、お皿に載せて上げた。

半年がよくなれば、新たに年を取って、次の半年がいい年であるようにとやったこと。

筒粥行事のこと

・峠さんの筒粥のこと

峠さん（碓氷峠の熊野神社の御師）が筒粥の結果を記した刷り物を持つ

て来る。ムラの人は、ソバを集めて、峠さんのところへ持って行った。

峠さんは、十一月頃寒くなるとやって来た。

そのために、(ムラの人は) 峠さんが来ると、寒くなると言った。

峠さんは熊野様のお札を持ってきた。

峠さんにはソバ粉を集めてやった。

峠さんに付いて、ソバ粉を集めて毎戸回る人がいた。

ソバ粉は、一升やる人に、二升やる人とあった。

お札の中の千羽鳥のお札は、味噌桶の上に貼って置いた。

このことは、わし(話者)の子供のころのことである。

(話し手 六合村和光原 山田正人さんほか 詳細不明)

・小倉のお筒粥の行事

一月十四日の晩の行事

子供と若い衆がやっている。

小倉の、村の世話役の家(組頭の家)でやっている。

一八戸の家を子供が前日に回って、米を杯に一杯ずつ集めて歩く。「筒

粥のお米をちょうだい」といつてもらい歩いた。二升足らずの米が集まった。お金は集めなかった。

組頭の家で、この米を煮てお粥を作る。

その時、ヨシを節を付けて三〇センチくらいの長さに切って、それぞれに作物とか、草津の旅館の景気はどうかとか、営林署の仕事はどうかとか、ヨシの茎に割り振って置いて、十分から十五分くらいの鍋の中で煮て、鍋から引き上げて、ナイフでヨシを割って見て、茎の中に何分くらいの米粒が入っているかを判断した。

昔は、三〇項目くらいの判断材料があったという。

それぞれのヨシの頭に御幣束の型を取り付けてやった。

昔は、神主さんが判断してくれたと言う。今は子供と若い衆が手助けをしてはんだんしているという。そばに書記長がいて、その結果を書き出した。

この結果は、紙に書いて、各戸に配ったり、子供が持ち帰ったりした。

お粥は、後で参加者が食べた。

味は好かったという。

お筒粥の行事は、始めは、ムラの大人がやって居たことである。

次に青年がやり、その次に子供がやるようになった。

昔は、小倉の筒粥はよく当たると言われて居た。

・和光原の筒粥の行事

和光原では、一月十五日の夜に、ドンドン焼きと同じ日に、ムラの集

会所で、筒粥の行事をやっている。むかしから、今でも続けてやって居る。

その会場は、昔は、チョウヤといわれたところ、今は、作り替えて、

公民館と言って居るところである。

この行事を主宰するものは、クミガシラ(任期は一年、重任も可)である。

和光原では、神社の近くにヨシが生えて居る。そのヨシを刈り取ってくる。それを短く切って、ヨシズを編むように、細い縄で編んで、米のおかゆの中に入れて煮た。

この日、クミガシラの奥さんを中心にチョウヤ(今は公民館)で筒粥の準備をする。外では、ドンドンヤキを行って居る。その行事と同時進

行に筒粥行事の準備が行われて居るのである。

それぞれのお筒が、何の項目、作物、月に該当するかと決めておく。それぞれの係(役)が割り当てられて居る。お筒の係は、一二人いる。

ヨシの筒を一定の時間、鍋の中で煮て、時間をみはからつて、それぞれの、お筒を切り開くことになる。決められた順番にお筒を切り開いていく。

お筒を、ナイフで切り開いて、その中に、何粒の、米粒が入って居るかを判定して、その結果を帳面に書き記していく。

おかゆは、米のおかゆである。

普通のおかゆよりは、ややゆるいおかゆである。

判定の結果を書記係の人が筆で書いて、その紙を公民館の梁に貼り出した。

この行事は、今までは、各地で行われて来たが、今でも継続して居るのは、和光原だけだという。

(2012年 一月十五日の筒粥の結果)

(項目) (判定の結果)

世の中	八分
夕顔	二分
豆類	〇分
五穀	〇分
野菜	二分
園芸	五分
商売	四分
健康	〇分

縁談 二分

しいたけ 一分

天候(月ごとに判定)

一月 一分

二月 四分

三月 十分

四月 十分

五月 十分

六月 十分

七月 八分

八月 四分

九月 三分

十月 四分

十一月 〇分

十二月 〇分

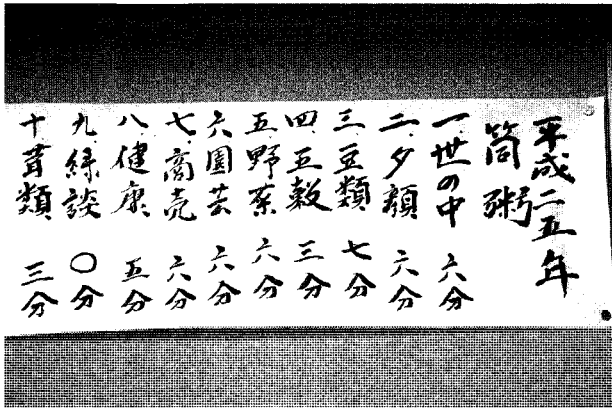
項目として、以上のほかに「養蚕」の項目があつたが、今はない。二〇〇〇年代のはじめの頃まで養蚕をやつて居たが、止めてしまったという。

チヨウヤは、平家で、くず屋根であつた。

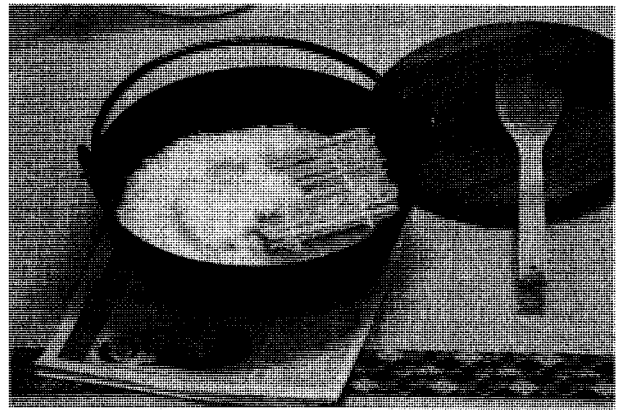
新公民館は、昭和三十九年に建てた。

筒粥行事が終わつた後で、お粥を参加者が分けて食べた。もとは、オテノコブであつたという。

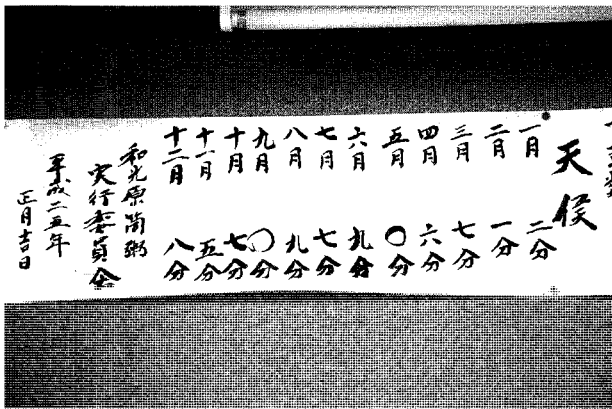
行事の結果は、書いて(印刷して)ムラの人に配るようなことはしな



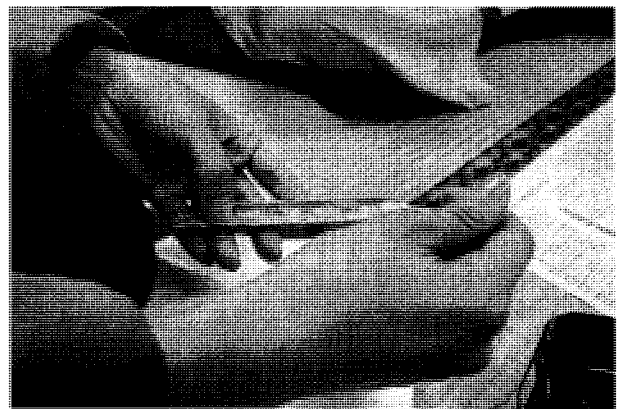
筒粥判定結果



筒粥 (和光原)



筒粥判定結果



筒粥判定

い。ムラの人は、貼り出された結果を見に来たのである。
(以上の事については、山田武俊さんの報告による)

神様のこと

・地神様

地神様は、作神様である。

畑を守ってくれる神様である。

地神様は、春と秋に祭る。

地神様は、春来て、秋に帰るといふ。

地神様は、春来て、畑の際にいて、作物を秋まで見守ってくれるといふ。

そして、秋になると帰って行くといふ。

畑の作物としては、大豆が一番先に実る。

その豆を、莢ごと煮て、でっかい入れ物に高盛にして、地神様に上げる。

初物を上げるわけ。

また、ぼたもちも作って、高盛にして上げる。

地神様がお帰りになるときは、早くあがらっしゃると、今年も陽気が
がいいと言った。

地神様が、遅くまでいらっしゃると、その年は、陽気が悪いと言った。
そういうときには、(人間界のこと)心配して遅くまでおられるのだ
という。

このときには、実入りが悪いという。

ふだん、作の上手な人は、村の人から、

「地神さんだ」

と言われた。

(話し手 中之条町入山字引沼 山本さかさん 明治二十五年生まれ、山本貞次郎さん 明治三十一年生まれ)

・山の神

山の神様のことは、十二様という。

男神か女神か分からない。

山の神の好物はオコジョだという。

嫌う物は特にないという。

山の神様の崇りとは、(山で) 怪我をした時に言う。

(山で) 怪我をしたときには、山の神様に罰を当てられたと言った。

そういうときには、山の神様に神酒とかご飯を上げてお詫びした。

山の神様の祭りは、月の十二日。

十二日は山の神様の命日と言って、十二講をした。

この日には、宿を決めて、山仕事をしている人の中の希望者が集まっ

て、お祭りをした。

十二様に、お神酒を上げて拝んだ。

集まった人が、酒を飲んだ。宿で作ったごちそうを食べた。

歌でも歌った。

むかしは、米のご飯、赤飯、うどんでも作って、食べた。これは、宿

の家で賄ったものである。

十二講をムラでやる場合には、隣近所の人が集まった。

同じ仕事に従事している人だけでやる場合もあった。

・道祖神様

道祖神様は、兄妹で夫婦になったという。

耳の不自由の人がお参りに来た。

お椀に穴を空けてお供えをした。

・便所神様

便所神様は、きれい好きな神様なので、便所に祭られているのだと言った。

便所をきれいにしておくと、きれいな子が生まれると言った。

婚礼習俗

・入山の結婚習俗

入山地区の結婚習俗については、「六合村の民俗」や、「ふるさとの昔と今」にくわしい。

これらの資料と、「秋山記行」や現地調査資料などを合わせて、本地区の結婚習俗について概観してみることにする。

「六合村の民俗」によると、かつては、入山では通婚圏が狭く、血縁結婚が多かったという。昭和二十八年の調査によると、入山の根広・和光原両区では、計九七組の夫婦のうち、その九〇%までが小字内での結婚であったという。ほかに近村との結婚が三%、その他が七%であった。

同書の小池善吉氏（群馬大学名誉教授）の引沼地区の調査資料によってもほぼ同じ結果がみられる。このように村内婚が圧倒的に多い理由について、小池氏による同地の故老からの聞き取り調査によれば（昭和三十年代後半）、「引沼のうちで結婚するのが娘の幸せというものだ」とか、「近所に人がねえわけじゃなし」という考えや、「近くから連れてきておいて、翌朝近隣に話せばよい」とか、「経費もかけずに、格式ばらずに」という、いわば近隣婚の手軽さによるものだと指摘しておられる。

昭和三十七年の群馬県教育委員会による同地の民俗調査の際、池田秀夫氏が記録した、ある老婆のことは、入山地区の古い結婚習俗を簡明に伝えていると思われるので、次に引用する。

結婚式なんてあげもしなかった。無論披露もなく、主人の家に仲人に連れられて来て、その日から働いたもんですよ。昔は貧乏でしたからね。鈴木牧之の「秋山記行」の中に、秋山郷では、婿も嫁も縁組みは秋山きりで、里からは迎えなかった。里の者と縁組みをすれば、親子親類の縁を切ったという習俗のあったことが記されている。かつての入山もこのような婚姻形態であったであろうか。

入山地区の結婚習俗については、地元のひとつからいろいろのことを教えていただいた。むかしは、「親戚は狭く、濃く」という考えが中心であったという。なるべく親戚をふやさないということであった。

だから、いとこ同士の間婚も多くあったし、中には、三代も同じ家と縁組みをしたという例もあるという。このようなことであつたから、一つの願望として、嫁に行くときは、「小便の丈だけでもいいから下へ出る」といつていた。入山から南の生須とか小雨あたりへ嫁に行く人はあつて

も、その逆はなかなかあつたという。

また、結婚式も質素であつた。ずっとむかしは、「隣んちは、ゆうべ嫁さんが来たらしい」という程度であつた。仲人が来て、夕飯を食べてから、嫁さんだけ先方へ連れて行ったというはなしもある。

よくても、嫁さんを仲人が「連れて来るのだから、形だけのトリムスビをして、翌日には、嫁さんが近所を、「よろしくお願いします」といってあいさつまわりをしたほどであつたという。

すぐ近くから連れて来るのだから、それでもよかつた。嫁さんにして、嫁に来た翌日朝草刈りに行くにも、昨日まで実家から行つていたところへ行けばよかつたというふうであつた。

・入山の特殊な婚礼習俗

入山に伝わつてきた婚礼習俗の中から、三つのことをとりあげてみる。

一 ビツキのこと

入山中学校の郷土学習調査報告集「ふるさとの昔と今」の中に、この「ビツキ」について報告があるので、原文のまま引用する。

「ビツキクンネーと通さねえど」

子供達はこう言いながら、泥のついたなわを道に張りめぐらし、花嫁さんを待ちかまえていました。

きれいな着物を着た仲人や花嫁さんは、着物がよごれてしまうので、しかたなしに「ビツキ（お金）」を子供達に分けてあげます。

お金がもらえることを楽しみにして子供達は本気で何か所もこれを作つて待ちかまえていたそうです。

待ちかまえる場所は各小字の出口か入口あたりでした。かしこい人達

は二回も三回も行いお金をもらって楽しんでいたといひます。

この様にある一人の結婚に村の子供全員がそれにかかり合い、結婚式を楽しんでいました。

ビッキクンナ、クンネージャ 通サネー通サネー（世立・見寄）

ビッキは、婚礼行列が通る時、待ち伏せして強請する銭のこと。

このことについて、ムラの故老にお聞きすると、主として子どもたちが、嫁さんの行列の通り道に縄を張って待っていた。先回りをしていて、「ビッキをくれないければ通さない」といつて立っていた。

仲人はあらかじめもらい方の施主からお金をもらって用意しておいた。子どもたちだけでなく、年寄りが子守をしながら、「孫にもくっておくれ」といつてもらったりしたという。また子どもの中には、何度もビッキを張ってお金をもらった。そのために、仲人さんはあずかったお金が足りなくなつて、子どもを待たせておいて、施主のところへお金をもらいに戻つたこともあつたという（引沼）。子どもの中には、「嫁みろ、婿みろ、嫁のベツチョはきんちやくだ」などと意味もわからずにはやし立てたものあつたというから、ビッキについては、明らかに大人の関与が認められといえよう。

ところで、ビッキをくれる方でも、決してそれを妨害とはみていなかった。ビッキが出ていないときびしく感じたという。

この「ビッキ」については、埼玉県秩父郡では、「神参りに来た人子どもがねだるおかね」であるという（「日本方言大辞典」小学館刊）また、喜多村信節の「嬉遊笑覧」には、「童等びつきくれせいとて旅人につきまとふあり」とあり、この「びつき」が、「疋にて銭をいふか、又は神酒の訛か」と記している。

・ビキのこと

ムラに嫁さんが来る時、子供がビキということをした。縄に泥をくっ付けて道に張る。

嫁さんのいい着物が汚れては大変だというので、仲人さんが子供にお金をやって縄を外して、嫁さんを通してもらった。

仲人は、このお金を貰い方の施主から預かつて来た。

隣の村から嫁さんを貰う場合は、子供のこともあらかじめわかつてるので、お金をどのくらい用意すればいいという。

子供は、一〇人くらいのグループである。ボスのものにお金をやって

「仲良く分ける」という。

一万円くらいやる場合もあつた。

この金額は、特に決まつてはいなかつた。昭和二十七年頃、一人一〇〇円くらいだつた。

お大尽さんの場合は、金額を弾んだ。

嫁さんの通るところ（道に）泥の付いた縄を張って置いた。子供のやること。

仲人さんが、先頭でやって来て、袋に小銭を用意して来た。

（道の妨害をしている子供に）仲人さんが金をやった。そうすると、子供は、嫁さんを通してくれた。

このお金は、仲人が、計算して、用意して置いてくれた。

子供は、それぞれのところで、ビキを取つた。

このことを、「ビキを取られる」と言つた。

子供たちが、嫁さんが通る道に縄を張っていた。道の両脇に子供が立っていて、

「ビキくんなければ、(嫁さんを) 通さねえ」

と言っていた。

仲人が、お金を用意して来て、子供にお金をやってその場を通して貰った。

嫁さんが村から出て行くときも、村へ入ってくるときも、道に縄を張った。

村の入り口とか、嫁、婿に来る家の玄関先でやったこと。

わしらが子供のころにやったことがある。

お祝いの意味があったという。

場合によつては、縄に泥(あるいはうんち)を塗ったこともあった。

二 荷背負い

若い衆が嫁さんの荷物を、嫁さんの実家から嫁ぎ先まで背負って行くのも大役であった。この荷背負いは、仲人が、二、三人の若い衆を選んで連れて行ったものという。

背負いの役目は、主として嫁さんの箆筒を背負って来ることであった。箆筒が今のように三つがさねになつていけば、三人の荷背負いが必要であった。箆筒を分けてこもにくるんだり、大風呂敷に包んだりして背負って来た。座布団もその上に乗せて来たという。

この荷背負いにも演技が要求された。荷物が軽くても、いかにも重い

ようにみせる。嫁さんの持参品がたくさんあるということを、みなにみせる必要があったのである。嫁さんの家を出るときから、この荷物は重いぞというしぐさを、まわりの人はそれを見ていろいろいう。

荷背負いが答える。

「大丈夫か、しつかりしろ」「大丈夫だ」「しつかり頼んだぞ」

荷背負いはその辺をよく心得ていて、上手にやつてくれる。あまり重くないのに「おもてえ、おもてえ」といつてわざとよろけてみせたりする。人の見ていないところへいけば軽々と背負って来る。もらい方の近くへ来るとまた重いふりをする。もらい方へ着くと、「もうとてもだめだ」といつて荷をおろすという。嫁さんの荷物が少ないと、嫁さんがかわいそうだというので、殊更に演技するという。

だから、荷背負いには演技の出来るものを選んだ。その若い衆には、くれ方、もらい方双方から祝儀が出た。荷背負い役目がすむと、お勝手にさがつて、ご馳走になつた。

荷背負いも、ご祝儀のもりたて役であつたのである。

三 皿売り

入山では習俗は小字ごとにちがうというから、この「皿売り」のことも、入山全体で行われたのではないようである。世立・見寄・京塚・引沼では行われたという報告があるがほかでは聞いていない。あるいは、もつとむかしには広く行われていたのかもしれない。

「皿売り」は芸がこんでいるから、かなりの芸達者の人でないと出来ない。たとえば、世立の人は芸達者の人が多く、「座持ちがいい」とか、「は

なし上手」などといわれていたという。まわりの人から世立のしょうはそう見られていたのである。

前掲の「ふるさとの昔と今」の中に、この「皿売り」について次のように記されている。

主人が披露宴を終わりにしてもらいたい時ある人に頼んで皿売りをしてもらおうそうです。頼まれた人は風呂敷に大小五〜六枚の組皿を持って入ってくるそうです。そして「お宅は今日おめでただつつうから皿を買ってもらいたくて来ました」といいます。すると主人が「その皿はいくらするもんだい」と聞くと、「これは何百万何千万するんだよ。お宅は今日おめでたの日だからぜひ買ってもらいたい」「はあそうかい。今日はなんしろおめでただから皿売ってもらおうべえ」と、この皿を主人が買います。主人はその皿一枚に酒をなみなみとついでお客にのませます。客は皿売りが出ると、この宴会も最後だなどと思って酒をのみました。この時売った皿は、台所からもつてきた人、特別大きい組皿を買って用意した人等いろいろでした。皿売りの役目は座敷をにぎやかにすること、宴会を楽しんでもらうためにあつたようです。

これは、昭和六十年年度の一〜三年生六名の調査資料で、入山の引沼と世立の人からの聞きとり資料である。

世立では、この「皿売り」はどのご祝儀のときにも披露されたという。京塚では、昭和四十七年の結婚式のときにも「皿売り」の余興があつたという。ところが嫁さんご本人はお色直しのためにその席にはいないで、実見していないとのこと。

どこの小字にも器用な人はいたのである。このような人が、座を盛りたてたのである。ところで、宴席では、この「皿売り」が出ないと夕飯

が出ない。したがってお客さんは帰ることが出来ない。そのために、前述の中学生の「報告」にもあつたように、「披露宴を終わりにしてもらいたい」ために、この「皿売り」が登場した。

お相伴がお勝手の準備の様子をみながら座のとりもちを行ったのである。お客さんが、「夕飯が欲しい」というと、お相伴は、「まだうどんがゆでてない」とか「まだお汁が出来ていない」などといって、座の進行をひきのばしたという。

頃合いをみて、宴会の最中に「皿売り」が登場することになる。「皿売り」の人二名はその席から抜け出す。支度をして、縁側から入ってくる。「皿売り」が口上をいう、旦那が応対する。

「下の方で聞いたら、こちらさんではご祝儀だというので寄ってみました。実にご大家ですね。立派ですね。わしらは末広を売ります」といつて、皿を出して見せる。

ここで、「皿売り」と旦那さんとの間でやりとりがある。

「ところで値段はいくらだい」

「夫婦そろって八年もねりあげたもの、品物には自信があります」

旦那が皿をたたいて音を聞く。

「なるほどいいねがする」といつてほめる。

「おあきんど、それじゃいい値だんべ、いくらだい」

「八千八百八十八万円です」

「いくらかまけられるべえ」

「こちらさんは大家でもあるし、またの縁つなぎにまけていくべえ。八千八百円にすべえ」

ここではなしがついて、旦那さんはこの皿を買うことにする。そのあ

と、お相伴は皿売りに、

「おあきんどさん、おなががすいているだんべから、お勝手に夕食をとつてください」というと、皿売りはお勝手にさがる。それから、旦那はお客さんに皿を買ったことを披露する。

「嫁ももらつたし、家宝の末広(皿)も買い求めた。わが家もこれで安泰です。皆さんでゆつくりやつてください」といって、買った皿をまわして、お客さんに酒を飲んでもらう。

それから、お相伴は間が抜けないように差配しながら座を終わらせる。以上が入山において結婚披露宴のときに行われた「皿売り」という余興の概要である。

この「皿売り」以外にも、ご祝儀の余興は歌や踊りなどいろいろあつたという。根広では、養蚕用のかごを用いての「宝船」の余興があつたという。京塚では、どじょうすくいをやつたり、民謡を歌つたりしたという。「皿売り」は、このような古い形の婚礼のときの余興の一つであつた。

(参考文献)

「六合村の民俗」(群馬県教育委員会 一九六三年)

「ふるさとの昔と今」(六合村立入山中学校 一九八七年)

「秋山記行」(信濃教育会出版部 一九六二年)

・むかしの婚礼

嫁さんの荷物を運んで来る役があつた。

仲人さんが、二人ほどの若い衆を連れて嫁さんの家に行く。

若い衆は、シヨイコを背負つて行つた。

背負つて来る荷物が軽い場合でも、若い衆は、

「重い、重い」

と、わざとよじけて見せたりした。

仲人が、そうした仕草を、若い衆にさせたのである。

嫁さんの荷物が少ないと、恥ずかしいので、そうさせたのである。

嫁さんが貰い方に来ると、トリムスビの座敷の障子に、若い衆とか子

供は、指の先にツバをつけて、穴を開けて、中を覗いた。貰い方では、障子に穴を開けて見て貰う方がいいと言つた。

昔は、母親同士が相談して縁談を進めた。

近親結婚が多かつたので、式もごく簡単に済ませた。

いとこ嫁もあつた。

お大尽さんは、結婚式は丁寧にした。

(話し手 六合村根広 中村福美さん)

赤岩のジジツカケ・ババツカケ

・ジジツカケ

むかし、ぼろでもいらねえもんは、ジジツカケへ持つて行つてぶちやあれと言つていた。

そこは、崖でもなく、岩もそんなになく、傾斜になつて居た。

下の大川までは、三丈くらいはある。崩れ落ちと言つた。崩れて落ちたところである。

ジジイッカケへ連れて行って、じいさんをぶちやる。そこからは上がったじいさんは、丈夫で、偉い働きじいさんだといって、歓迎されたという。

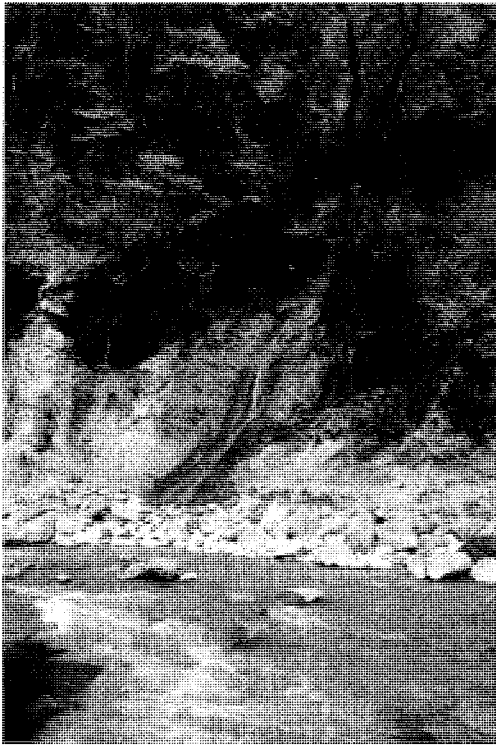
ジジイッカケから、五〇〇メートルくらい上流に、バンバサキというところがある。

ばんばさきのほうは、年寄りをぶちやっつたと言う話は聞かない。そこもいやな感じのするところである。

この話は、わたしが生まれた故郷の六合村にいたときに、近所のおばあさんから聞いた話である。

このおばあさんの亭主のおじいさんは、ジジイッカケへぶちやれねえような、丈夫なじいさんだと言っていた。

(長野原町川原畑でお聞きした話である。)



赤岩のジジイッカケ

・ジジイッカケ

赤岩に、バンバサキというところがある。崖になっていて、下に、須川が流れている。

その近くに、ジジイッカケというところがあつて、そこへは、むかし、六〇になった者をぶちやっつたという。

六合の赤岩というところに、バンバサキというところと、ジジイッカケというところがある。

二つの場所は崖になっていて、すぐ近くにある。

じじいっかけというところには、むかし、六〇になった人をぶちやっつたという。(ぶちやられても) その崖をはい上がってきたものは、(偉いというので) 仕事に使つたという話がある。

赤岩地先の白砂川の左岸に急な崖がある。

そこにジジイッカケとバンバサキと言われるところがある。

むかし、食糧難だったときに、食べ物が無くて大変だったので、六十過ぎのお爺さんをそこへ棄てたという。

そこが、ジジイッカケと言われるところである。

そこから、一〇〇メートル上流に、バンバサキといわれるところがある。そこには、六〇になったおばあさんを棄てたという。

これは、後からの説明のようなことであるが、ジイサマとバアサンをなぜ別々のところへ捨てたかという、男女を同じところに棄てると、子供が生まれるからだという。

そんな話を聞いている。

これはその続きの話である。
ある家に親孝行の息子がいた。
その息子は、六〇になった母親を家に隠しておいた。
親を捨てるということは、ひでえことだと、その息子は、姥捨てのしきたりに抗議していた。それで、ある時、殿様のところに談判に行った。そしたら、殿様がその息子に、難問を出した。(この問いが解ければ親を助けてやるという)
その問いとは、
「灰炭で縄をなつて来い」
ということであった。
その息子にはどうしていいか分からない。
それで、隠しておいたおばあさんに聞いた。
おばあさんに



赤岩のバンバサキ

「殿様にこういうことを言われた」と言った。
そしたら、おばあさんは、
「そんな事はわきやあねえ。藁を塩水に浸けて、堅く縛って、それを干してから燃やせば、灰の縄が出来る」と言った。
息子は、おばあさんに言われたとおりにして、灰の縄を縛って、そおつと、殿様のところへ持って行った。
そしたら、殿様に、
「どうして、このことが分かったか」と聞かれた。
息子は、六〇になつても、山に棄てないで家に隠しておいたおばあさんに教わった事を、白状した。
そしたら、殿様は、
「年寄りには知恵がある事が分かった」といつて、それから、六〇になった年寄りをジジッカケ、バンバサキに棄てる事を取りやめにしたということである。
(語り手 六合村赤岩 関駒三郎さん 昭和七年生まれ)

京塚の子守様

子守様は山の中に祭られている。

お宮の改修は平成七年。家だけ改修すると言ったら、京塚の人が中心になり田代原、引沼の人などの親戚の人が改修の資金を寄付してくれた。このときの神主さんは赤岩の安原義治さん。

子守様のことを、コウモリサンと呼んでいる。

昔からの言い伝えでは、子守様は子供を育てる神様であるという。子供を守る神様という。

ここへは、子供を連れてお参りに来た。

お参りに来る人は、布で作った前垂れとか帽子を上げて行く。手製の物である。

ふだんでもお参りに来た。知らず知らずのうちにお参りに来てくれ、お賽銭が上がっている。

今では、お参りに来る人は少ない。

ブラクの人はおサゴを上げて行く。

若い人はゆだれ掛けなどを上げて行く。

子守様のお祭りは旧暦の二月十八日

お参りの帰りに、山口愛子さんの所へ寄つてくれる。寄つてくれた人には、赤飯と煮物（インゲン、フキ、ワラビ、大根の煮物）を出してやった。帰りに赤飯を食べてもらい、お茶を飲んで行つてもらった。

お祭りの費用は、今は地域の人からはいたではない。

お酒を一升上げる。

お札は出さなかった。

元は、山口家の本分家で祭っていたが、今は、山口愛子さんのところだけでお守りしている。

なを、ムラとか親戚の家にご不幸があつた場合には、子守さんのお祭りは中止していた。

一〇〇日の間はお参りに来なかった。



子守さん

なぞなぞのこと

・ナンゾカケ

謎を掛けることを、

「ナンゾカケ」

と言った。

「ナンゾカケすべえや」

と言つて始めた。

「ナンゾ、ナンゾ、ナナンゾ」

ナゾを掛けられて、解けないときは、

「モンジャアゲ」

と言つた。

・昔がたりと謎

昔語りの間に、謎掛けをした。

ナンゾは冬の間にした。

昔は必ずやつた。

回りばんこに掛けた。

・謎掛けと罰

謎掛けをして居て、モンジャアゲになると、顔に墨を塗られた(入山)

・謎掛けの事(その一)

謎掛けのことは、「ナンゾナンゾ」と言つた。

友達の家を集まって、子供たちがやつたこと。

「ナンゾカケベえ」

と言つてやつたこと。

掛けられたナンゾが解けないときには、

「解らねえ」

と言つた。そうすると次の番の者にナゾを掛けた。(日影)

ナゾの主な例

・家中の力持ちなんぞ 鍵竹

・白壁土蔵にとぼうなしなんぞ 豆腐

・四つご背中あぶりなんぞ 炉ぶち

・人の家に行つて、這つているものなんぞ 下駄

・池に反り橋だんごちんこなあに 鉄瓶

・一里行つて、二里行つて、三里目の大火事なんぞ 煙管

・朝早く、細道通る物なんぞ 雨戸

・双子の日ぼせり(火悪さ)なんぞ 火箸

・上で算術、下でブランコなんぞ 柱時計

・天に三つの廊下あり それなんぞ てろうか(照る)

ふろうか(降る)

くもろうか(曇る)

・味噌玉に穴七つなあに 顔

・家中のひび切らしなあに 土壁

・家の周りを太鼓叩いて歩くものなんぞ 雨垂れ

・骨無し皮無しほやほやのぼつたんなあに うんこ

二 六合の昔話のこぼれ

「昔話」は、特別な口頭伝承である。

むかしから、その地区に、特別の内容と話型をもって伝承されてきた「語り物」である。

「昔話」は、ごく一部の地区に、ごく特別の語り手によって語り伝えられてきた。特別のはなしである。そのために語り手やその場所が特定されているのである。

六合、特に入山地区の、「昔話」は、早くから群馬県を代表する「語り物」として、利根郡片品村、(さらには藤原)の「昔話」とともに、その先鞭をつけてきたのである。

「群馬県史」資料編二七、民俗三の中には、「群馬の昔話の特色」について、その概略を報告してあるが、本県において、昔話が比較多く分布している地域として、利根、吾妻郡地方をあげてある。なかでも、六合、片品地区については、特に注目すべきであると記しておいた。(昭和五十年代の調査資料による)

六合地区の中でも、入山地区に、「昔話」は集中しているといつてよい。入山地区の「昔話」は、数も多く、質も高い。

語り手も多く、その語る昔話の内容も、いわゆる「本格昔話」が多い。一人で、何十話と語る語り手もおられたのである。

*入山は民話の宝庫

六合村には「昔話」がたくさん残っている。

特に入山地区に多く民話の宝庫といわれ、昭和四十年代には全国からたくさんの民話の研究者が採訪のために訪れている。

当時は、各集落に立派な語り部がいて、採訪に歩くと次々に世間話から、本格昔話までたくさんの民話を聞くことができた。

*入山に民話が残った理由

入山には完全な型の民話がたくさん残っているが、その理由としては次のようなことが考えられる。

一つには、社会的交流が少ない中で、地域、家庭の中で唯一の娯楽として代々子どもたちに語り継がれてきたこと。

二つには、長い冬の間に行う木工、菅等による手仕事をしながら、囲炉裏を囲んだ語りの場があったこと。

三つには、各集落に語りを受け継がれる立派な語り部がたくさんおられたこと。

四つには、地理的に奥まった位置にあったため都市化の波が遅く、後々まで古いしきたりと生活が残っていたこと。

*民話の呼び方

入山では、民話のことを「むかし」または「むかしかたり」と呼んでいる。

*語りを頼む時

「むかし 語つとくれ」、「むかし 語つてくだあれ」、「むかし 語らうしえ」

*語り始めの言葉

「むかしむかし」、「むかしむかしあるげだあ」、「むかしむかしあるところ」、「むかしむかしあつたつあ」

*合いの手

「ふん」、「ふうん」

*語り終わりの言葉

「それつきり」、「それで終わりだ」、「むかしはむくれていまはげた」、「むかしはむくれて」、「いまはげた」、「はげ山にも草が三本おえたとき」

六合の昔かたり

ぬかぼことこめぼこ

語り 山本 さか

収録 一九七〇年一月三十一日

むかし あるところにね ぬかぼこという娘がいたんだよ。

そつで お母さんがなくなつてね。そんで まあ こんどまあ、こん

どまあおとうさんが 後妻をよんだん。

そつで こめぼこという娘ができたんだよ。でまあ、姉妹（きょうだい）でしょ。

でね まあま母がね ぬかぼこという娘をよくしないんだよ。

自分の娘が生まれたんだからね。

そつでね田んぼへ米ぼひろいに今日は あんたなんざあ行つておいでつて、二人でね。

でまあ あのこめぼこには いい新しいかごをあずけて、ぬかぼこにはひつたの無いかごをあずけてね。そして やつたん。

そしたらね あのこめぼこはいいかんひろつたら いつぺえになつたん。かごがいいだからね。

ぬかぼこは いくらひろつたつて まいてしもうだからね。ひつたが無いだからいつべんならねえ。

「ぬかぼこ まあ 帰りましょう はあ暗くなるから」「じゃあ、おめえは先に帰つておくれ わしや いくらひろつてもいつぺえんならねえから、帰ればおつかさんにしかられるから、まあ いますこしひろつていぐから あの帰つておくれ」「そつじゃあ先に帰るから あとからおいで」つて、そのこめぼこの方が帰つたん。

ぬかぼこの方は帰りようがねえでしょ そつでいつぺえんならねえんだからね。そんでまあ そこでね たんぶりくらくなつたん。

そこから まあ むこうの山をね見たん。

そうしたら むつこう高つかい所で火なあかりがしたんね。

それから まあ 険しいとこだけど しょうねえから火をたよりにね。

また 山を道も無い所を上つて 火をたよつて行つたん。

そしたらねえ おばあさんが小屋の中にね 一人で住んでたん。

「今晚は おばあさん わしや こういうもんだだけど その米ぼひろいに来たけれども いくらひろつてもいつぺえんならねえ。うちへけえればこうゆうわけなおつかさんで そのしかられるから帰れないから一晩泊めてもらいたい」つてねえ。

「いつくらでも その泊めてやりたいが ここらにはね 次郎、太郎という鬼が来るんだから 人間なんざあいると食べつちまわれるから

その泊めることはできない」つてねえ。そつから その帰すんもかわいそうだから「そつじゃあ おれがねるから そのわしのおしりの下へもぐりこんでいねえようにはりつついて まあいろ」というわけで おばあさんのね おしりへ入りこんでね はりつついてたんだら、そこへね次郎、太郎という鬼が帰つてきたんだよね。

「今夜 どうしても その人間のおいがする」なんてひょうけて戸

をあけてね。「こんなところへ人間なんぞが、なんで来ようあるもんか」つてね。「だから 早くに そのおようはん食べて寝ろ」つてね。

「いや どうしても その 人間のにおいがする」つて そのさがすんでね。で まあかたくおばあさんがふとんをつめてね。

そして まあ番をしてね。ようやく そのおようはんをその食べさせで寝かせてね。したら 明日の朝 早くに まあ あのおばあさんの起きねえうちに その何かとりだか なんだか二人で出てはしつた。

そのるすに あばあさんがね。

「早く まあ このるすにおめえは 帰らなげやあなんねえから、わしが その『ゆんめえ小ぶくろ』という宝物をくれるから これをもつて帰りやあ なんでもお前の望みしでえのもんが これをはたけば出るし、その何にでもなれるんだから これを持って 一生おめえはふしあわせな人間だから わしがまあ 幸せに わしがしてやるから その何でん困ることは この袋と相談すれば 何でんできるから持つて帰れ」つていうわけだね。

「おばあさん ありがたい じゃあまあ このご恩は一生忘れないから」つて よくおじぎをして そこから出て「まあ 次郎、太郎が道であうから、そのあつたら このふくろをかぶつて その下ン道へころげろ」つてね。

それから まあ ふくろなんもらつて おばあさんにていねいにおじぎして まあうちへ帰つたら、そしたらむこう二人で その次郎、太郎つていう鬼は来るんで もうぞう（いそいで）それをかぶつて 下ン道へころんだつてね。

「おお そこー くずつきれがころぶ」とけつとばしておいて その

鬼やつめら通つて走つて そいから まあそれえ持つて その稲ほなんかひろえつこねえんだから かごしよつて帰つたん うちへね。

そしたらね「今日は そのしばやがあるンで その おらあしばや見に そのおつかさんといぐだが ぬかぼこもいがないか」つて こめぼこがゆつたつて。

そしたら おつかさんが出てきて「とんでもない、おめえはそのこめぼ一つひろつて来ないんだから そのしばや見どころじゃあ ありやしねえ。今日は その麦をからうすへ入れて その いっぱいについてほせ」つて いっぱい出しといて はしつたつて。

しばや見に 立派になつてはしつたつてね。こめぼつれて。それから まあ泣きしな麦をついたつて。いくらついたつて その麦なんで ただついたつてその皮むけようねえだからね。

「むけねえー」つておつかかかかって泣いたつてね。泣いたらその涙が一つぶ麦へかかった そのつぶがむけたつて。こりやあ まあ 水を入れてつくもんだ。そうだ、と思つてね。こんだ 水を少し入れてついたら、ほいでんむけてね。こりやあ どうも ひとら くええーついたらこの麦は このけんまくで出して、おつかさんが行ったんだから つききれつこねえから 一つおばあさんにふくろもらつてきた それえ一つたいてんべえと思つたね。そのふくろげね その、

「十七 八の男出ろ」とはたいたつてね。

そうしたら 立派な息子がそこへ出たつてね。

その人と二人でね麦を入れて たちまちついて 庭にいつぺえほして こんで まあ おれん しばや見い その息子といぐべえと思つて

ね。それからまあ、

「十二ひと重の小そで出る」って また それ たたいたら 立派な小そでがそこへ出たって。こんだあ馬に乗っていぐべえと思つて、「大乗りかけの 白馬出ろ」って たたいたら そこへ立派な白馬がプリプリ出たってね。

それから その息子には 馬方させて 十二ひと重の小そでを着てね そうして まあ 乗つて そうして行つたってね。

そうしたら その しばやなン見るものアーねエー その娘があんまり 立派な娘が いエー着物着て 馬に乗つてきただからね、その方ばつか みんな見たつてね。

それから まあ 先に帰つてきて もうそれ 支度ものいでいたら こめぼことおつかさんが そこへ帰つてきてネ「まあ ぬかぼこも今日は えんでみりゃあよかつた。しばやは まあ ともかくとして まあ あなんしろ立派な娘が その馬に乗つて ハエー小そでを着て まあ ハエー息子さんに馬方させて そればつか みんな 今日 人は それを見てしばやなんか見る人はなかつた」そういつて その こめぼこ 帰つてきて「ああ そうかい そりゃあいい娘で おめえなんかええと 見てきたけれども わしや おつかさんにいつつけられた仕事を果たさなけりゃあいけないから いぐこともできなかつた」そういつてまあ そうゆつていたけれどもね。

さあ その晩になつたら嫁もらう人が いっぱいきたつてね。「ぬかぼこを嫁さんにいたきたい」ってね。

人は もう知つていただけだね。で来て、それから おつかさんが ままだからね。「そんなものつれていつたつて何の教育もないだし、なんでもできないだから そのこめぼこなら なんでもできるから これ

つれてげ」って、そういつちやあ 来た人に「こめぼこはえらない ぬかぼこをくれてくれ」つちやあいう。

それで こめぼこはもらう人はなくつてね。

それで まあぬかぼこは 立派な人のそこへむらわれていつたけれども こめぼこをもらうものは おつかさんがそういうだから 一人もなかつたってね。

それで 仕方がねえから おつかさんが うすの上へおつけて ひいちやつたーつてね。こめぼこをね。ひいちやつたてね。

それで はあ ぬかぼこはそんなめにあつたけれども 立派なところへいつてしあわせに一生暮らしたし、こめぼこは おつかさんがひいてしまつた。

だから 人をめにあわせりや 自分の子をひくめにあうから 気をつけなければいけないと こういう話。

うりひめとあまんじやく

語り 中村 ゆき

昔 おじいさんとおばあさんがあつただつて。

ある日、おばあさんがせんたくに行つたら、うりが流れてきただつて。それで おばあさんが大切に家へ持つてきて たんすの中に入れておいて 一週間してたんすをあけてみたらあ きれえなうりひめが生

まれていただつちゆう。

それで おじいさんとおばあさんが大切に 育てて 大きくなったら機織りして、まいんち機織りしてただつて。

おじいさんとおばあさんが あらくーほつたら ほどが出たださうだ。

それーほつてきちやあ うりひめにくれたださうだ。

そうしたら よろこんじゃあ食つたださうだ。

ある日 おじいさんとおばあさんが だれがきても るすにやあ戸をあけちやあなんねえつて うりひめに言いつけて出かけたださうだ。

うりひめが その機(はた)屋へのぼつて機織つてたださうだ。

そこへあまんじやくつうもんがきたださうだ。

「うりひめ 戸をあけてくれ」つて言つたださうだ。

「おじいさんとおばあさんが あけちやあなんねえつて言つたから あけてやらねえ」つて言つたら、どうしてもきかねえださうだ。

そうしたら「ゆびのへえるだけ あけてくれ」つて どうしてもあけてくれつてきちやあしねえ。しかたねえ ゆびのへえるだけあけたつて。

そうしたら こんだあ「手の へえるだけあけてくれ」つて。

「どうしても あけちやあなんねえ あけちやあなんねえつて言われたから あけねえ」つて、言つたださうだ。

「どうしてもあける」つて どうしてもあけるつてきかねえださうだ。

しょうがねえから 手の へえるだけあけたださうだ。

そうしたら「からだのへえるだけあけてくれ」つて。

そうして なんてことわつてもきかねえで、また からだのへえるだけあけたつて。

そうしたらうりひめを機屋からずりおとして 前の柿の木にしばりつけて じぶんは機屋へのぼつて やつてたださうだ。

そうしたら おじいさんとおばあさんがけえつてきて、うりひめがいさきになつて いつものようにほどをにくれたださうだ。

そうしたら いつでもおじいさんとおばあさんがけえつてきちやあほどをにくれると うれしくつて うまがつて きれえに皮ーむいて

食うだが、きようは皮ごと みんなムシヤムシヤ食つてしまつたださうだ。「へんだなあ うりひめは いつもは皮あむいちやあ食つただが」つ

て、おじいさんとおばあさんが言つたださうだ。

こんだあ まあ うりひめのきになつて こんだあ その観音様へおまいりに 車に乗せて行くつうわけで、そのうりひめのつもりであま

んじやくを乗せたださうだ。そうしたら「うりひめののりもんに あまんじやくが乗つた」つて 声がするださうだ。

へんだ へんだと思つて庭へ出てみたら 木にうりひめがしばりつけられていたださうだ。

おじいさんとおばあさんがたいへんおこつて あまんじやくをいじめて 血んどろまつかにして 茅野かやのをずりまわしただつて。

それで 茅の芯が赤(あけえ)のは あまんじやくの血だつてき。

白 犬 子

語り 山本 さか

正直なおじいさんとおばあさんがいて 小さい犬子かっついていて かわいがつてねえ、おかゆにて 自分じゃあ お湯ばつか飲んで 犬子には 実のそばつかやつていたつてねえ。

そうしたら その犬子が大きくなつたらねえ「おじいさん きょうはあんまりお天気もいいしするから観音さんのお参りに わたしに乗つていがないかい」つてねえ その白犬子が言つたつて。

それでもかわいそうに思つて「おれなんざあ こんな大きいものに乗せるこたあねえから おめえは先にたつてえべ おれは後にくつついていぐから」つてねえ。おじいさんが そう言うんだが きかねえ乗せたとつてねえ。

それから乗つて えいかげん行つたらねえ。

「おじいさん しばらく行つて おれがけつがホッコイつていつたら わしのおしりを ほつてみておくれ」つて こういうわけだ。

それで おじいさんは かわいそうだけれども せつかくそういうもんだから そのしりを ほつたつてさあ、なんか かわのくさびなんだかだねえ。

そうしたら さあ お金がチャラチャラチャラチャラつて いっぱい その道い出たつてねえ。

おじいさんはひろうのがまにあわないほどねえ 出たもんで めたふくろにかき集めて入れて 犬子へ こうやつて二つふくろを下げてねえ

うちへ帰つてきてねえ うれしかったもんで その「おじいさん そのそつと入れなさい となりがいるから うるさいから」つて おばあさんが言うだが、おじいさんは うれしいもんだからふくろを高く上げて そのお金の箱の中へ入れたつて。

そうしたもんだから となりのおじいさんがボロを着て はだしで横つとびしてとんできてねえ「なににして うちじゃあお金とつたい」つちゅうわけで聞くもんで、おじいさんとおばあさんは正直だから「うちじゃあ犬子かっついていだが、こういうわけで観音参りにつれてぐに 乗れつていいで かわいそうだと思つたけれども乗つてとちゅうへ行つたらわしのけつが ホッコイといつたら ほつてみるつていうんで ほつてみたらこれが 出た」つて言つたら「そんじやあ その犬子をちよつとおれにかしておくれ」つてねえ、そういうわけだ。

「こりやあ とてんかすこたあできねえ わしの一番大事な宝もんだからかすこたあ できねえ」つてねえ。

どうしたつてきかねえ 犬子はいがない かきないつていう犬子無理になつて ひっぱつて そのおじいさんはひいて行つたつて。

正直だから そのおじいさんもかしたつきり取りもいげなかつただつちゅうわい。

そうして つれていって「おかゆをにてやつておくれ」つて言つたら ちつたあお米があつたが どうしたかな にただが自分でお米のところを食つて 犬子には そのおゆのところを少しづつなめさせたつて。

そうして 二日ばかりつて 乗つてえべとも言わないうちに乗り出したつて。

ホッコイとも言わないうちにおしりへほつただつて。

そうしたら きたねえうんこをたくさんベタバタバタしたつてねえ。こんな犬 きたねえ わしがめえ こんなきたねえ なに出してぶつつぶして山で松の木の下にいけといたつて。

そうしたら「はあよこしとくれ」つてきただつて。

ところが、そういうわけかわいそうな犬子ーいけられてねえ。

それで まあ おじいさんとおばあさんとうろそくもつたり、おせんこうもつたり、いろいろ食べものもつたり、そこへお参りに行つてねえ。その松の木を切つてきてするすーこしらえてするすーしいたつてねえ。「するすーこめすー」つてねえ「金を三升ひき出せー」つて、おじいさん、そうしやあ おばあさんのめえにや こつぶで おじいさんのめえにや あ小判がチャラチャラーン、チャラチャラーンつて いっぱい出たつて。それから また それーかき集めてねえ、そうして また お金の箱へ入れただつて。そうしたりやあ また、となりのおじいさんがきたんだつて、そこへ。

「なにしておたくじやあ そんなにお金とつただ」つてねえ。

そうしたら「おめえなんずに犬子かしたら殺されつちやつたから、松の木を切つてきて、するすーこしらつて ひいたら出たちゆうわけだ」そうしたりやあ「そのするすー また わしにちよつとかしておくれ」つて「おめえなんざあ とてもこりたから はあかさねえ」つてふたりでがんばつておせえていたが きかねえ ひいてつて かりてしよつてつてひいたつて。

そうしたら おじいさんの前は牛のくそ、おばあさんの前は馬のくそがベタバタバタバタ ひいたら出ただつて。

「こんなもーわつて かまへくべべー」つちゆうわけでねえ、かりてつ

たするすー かまへくべつちやつただつて。

それで また、とりー行つただつちゆうわい。「するすーよこしとくれ」つてねえ。「あんなものーきたなくつて おけたもんじやねえからわつて かまへくべた」つて そうゆつただつて。

「そんだらしかたねえから そのへえをもらつてくべー」つて おじいさんたちは するすのへえをもつてくるとねえ。

道へ少しづつこぼれると、へえがかかつた草にパチパチパチつて花が咲いたつて。

「こんなに花が咲くじやあ、おばあさん 花咲かじいさんにいぐからべんとうつくつておくれ」つてわけで、それから へえをもつてねえ。

江戸へ行つて 枯木ーのぼつてたつて。

そうしたら えらい人が 下に下につて通つたつて。

そうしたら「下じやあねえ 上だ」つて言つただつて。

そうしたら「そこにいたなあ なにもんだ さがれ」つちゆうわけでおこられてねえ。

それで まあ「枯つ木に 花咲かせてござります」つて そう言つたつて。「そんなめずらしいもんだら 咲かせてみる、ほんとう咲くか 咲かねえか 咲かせてみる」こういうわけで おじいさんが スポーンとへえを投げたら 桜の木に きれーにつぼみがいっぱいできたつて。「それー咲かせられるか」つて言つたつて。

「咲かせます」つて言つて「ひらけ」つて言つて残りのへえをかけると、いつぺんに立派に咲いたつて。「はあ 下りてこい ほうびをやる」つちゆうわけでねえ、うんとほうびーもらつて帰つてきただつて。

そうしたりやあ また となりのおじいさんがきたつて」。

「なにをして そんなにお金とつたい」って きたつて。

「おめえなんずに 犬子は殺されるし、するすはわられたからへえをもつてつて花咲かせに行つてきて 今もらつてきたとこだ」つて言うのと、「そんなじゃあ おれもあした そこいー 行つて」つちゆうわけで、おじいさんは、おばあさんにべんとうつくらせて ポロを着て、またへえをもつて行つたつて。

そうして、また 枯木にのぼつていただつて。

そうしたら また「そこにいたのはなにものだ」つちゆうわけで えらい人が通つただつて。そうしたら「枯木に はい 花咲かせてござります」つて「それじゃあ咲かせてみる」つて言つたで「つぼみ」つて言つてへえを投げたら えらい人の目へえがいつぱい入つただつて。はあ それで えらいけんまくでおこられて ずりおとされてねえ、それこそはたかれて、血んどうまっかになつて帰つてきて、おばあさんにやあ着ものはもされる。ふんとうにひどい目にあつて、まあ けして人のまねえして 悪い心得じゃあ、しちやあいけねえつていう話なんだよ。

六兵衛と七兵衛と権兵衛

語り 山本 さか

収録 一九七〇年一月三十一日

六兵衛と七兵衛と権兵衛と、その伊勢めえりにいぐんだよ 三人で
ま 仲の良い友達だでね。おかみさんち みんなおいて 伊勢めえり

に歩いていぐだから まあ いかも いかもかかるんだから。

まあ けつして まあ けんかはどんなことがあつてん けんかはしつこなし おこつた人からは お金四十両ずつとると こうきめえてね。うちから しつかりきめえてでかけたん。

そうして まあ めためた あのつづけて歩いてるうちにつかれつちやつたんでね。三人してね。いい田んぼのきわに いいしばまがあつたかいとこにあつたから そこでまあ ひとねいり ここでおひるやすみして 弁当食べて まあ ねておきていぐべえや なんちゆうわけで 三人でねたん。

そこで そうしたらねえ みんなねついて 三人がねついたが でまあ二人のね 六兵衛と七兵衛はね その目がさめたんだよ。

したが 権兵衛はさめねえで ぐんぐんねていたん。そつでまあ なにしてんおこりつこなしだから これ ひとつおいてぐべえやつちゆうわけでね。そつで 二人でおいてでかけたん。そうして まあ それからまああとで目をさましたら 六兵衛と七兵衛はいねえんだ 権兵衛、ひとりになつたんだね。

それからまあ しょうねえ まあ おこりつこなしだからね。

おこつてもしょうねえし。あとからいぐのもくやしいから これからまあ おうちへ帰つてね。それからまあ おうちへ帰つてきてね。

そつで 六兵衛と七兵衛のかかあをだましてね そしてね あの 六兵衛と七兵衛はね 海が荒れてしずんでしまつたけれど わたしは まあ いいあんべえに助かつて帰つてきたから それから おめえなんぞもぼうずになつて そつでまあ お堂へえつてまあ おねんぶつでんもうしてあげべえ。そのためだからつちゆうわけで それから まあ お

堂へつれてつてね しろくあたまみんなすつてね その奥さんがたの、
それからお堂へつれてつてね。

それから 六兵衛と七兵衛のそのためだ なんてね そしてまあ お
はらがたつたら 金がよんでるつちやあ しめえにゆつてね。

そして そのねんぶつ申したとこへ帰つてきたん。

その六兵衛と七兵衛がね。

さあ おこつてね。奥さんたち その丸ぼうずにしたんだからね。

おこりつこなしちゆう それおこつてね。

おこつたもんだからね そいじゃあ まあ そのお金四十両ずついた
だくつてわけだね。自分でとるつもりで それをおこらせるつもりで

自分たちが言ったのを それを反対に こんだとられつちやつた、二人
が 二人が、

四十両ずつとつてね。それでね。あ、うんと 権兵衛はもうかつてね
へへへへ、えらい その金持ちになつたなんていう そういうお話しな
んだよ。

四十束(づか)の畑ふみ

語り 山本 さか

収録 一九七〇年一月三十一日

むかし、あるところに おじいさんと おばあさんがありました。

それで その おばあさんは 毎日たき木をとつたり、おじいさんは
畑がたいへんあるもんだから 毎日 畑ふみに行つたりやあ いろいろ
畑仕事をしていただつて。

そうすると あの おじいさんは またきょうも畑へ行つて 畑ふみ
をいっしょうけんめいやつていたけれど どうも十二時になつたりやあ
おなかはすく 年よりだもんだから苦勞になつて えんがぁおつたて
まあ そのありやあ休んでて そうすると そのどうしてこの四十束の
畑ふんだらいいかと こまると思つて まあ休んでいたりやあ そこに
猿がきて「おじいさん畑ふみかね」つていうから「えーまあ畑ふみだけ
ども その年とつてるから いくらふんでんおわらねえで こまるけ
ども あんたがふんでくれるか、どうだ ふんでくれりやあ 娘三人
もつてるだが どれでん あんたが好きなのをあげるから」つて言つた
んだよ。そうしたりやあ猿は「わつきやあねえ 畑なんざあ ふむなあ
朝めし前だ」なんてねえ 猿がたちまち その四十束の畑ふんごろがし
ちやつた。

さあ それで おじいさんなあこまらあさあ はあ 娘くれるつちゆ
うわけにしたんだからね。

うちに来てねているんだよ。こまつてねえ。

そうしたりやあ まあ 一番大きい娘がお茶もつてきてね。

「おじいさん どこがいてえがな あの おきて湯でもあがつて下さ
い」つてね。そうすりやあ その「どこでも悪かあねえけども四十束の
畑をいくらふんでも おわらないから困つて寝ていたりやあ そこへ猿
がきたから さる この畑をふんでくれりやあ 娘三人あるからどれで
もあげるつ て言つたけれども その おめえはいつてくれないか」つ

てこういったんだい。

そうしたら その「猿のおかたになんざあ いややのことやら」つてその逃げてつたんだ。また そうしたら また まん中の娘がきたんだよ。また「おじいさん どこが悪いがな そのおきて ごはんを食べて下さい」つてきて おつくべして まあお茶をもつてきたけども「どこも悪かあねえが 畑ふみ行つてたら 猿がきたから その 畑をふんでくれりゃあ その 娘三人もつた どれでもくれるつて言つたがいや たちまちふんでくれて困るだけけども おめえは あした猿がくるども おめえはいつてくんねえか」つて言つたん。

そうしたらねえ「そんな猿のかたになんざなるんなら 生まれねえほうがよかつた」なんてね 帰つちやつたん。

そうしたら一番小せえ娘が またきたん「おじいさん ところが悪いがな 機嫌なおして出て ごはんあがつて下さい」つてね。

そうしたりやあ「どこも悪かねえけども こういうわけで その畑ふみに行つていたら 猿がきて猿に畑をふんでもらつたり その 畑を終わらしてくれりゃあ その娘三人のうち どれでもくれるつてゆつてあすの朝くるだけでも 困るから こうして休んでるんだけども おめえは そのいつてくれないか」つて こう言つたら その「わつきやあねえ わしが いくらでも あの喜んでいぐから おとうさんおきてくるろ」そうしやあ おじいさん喜んでおきてねえ。

「それでおじいさん いぐにやあ わしがいぐが たちうすをおくれ」つて、そうしたら「たちうすなん いくらでもくれる 持つていきな」つて言うだと。

そうして 次の朝 着物をきがえて はおりを着ていると そこへ猿

がお酒を一升つるして「はようございます それじやあ おやくそくのとおり きようはいただきますにきました」なんてねえ いせえでやつてきたん。そこへ そうして その娘をね そのまあ お酒のんで そしてその小せえ娘を猿にたちうすをしよわせてやつたん。

そうして やるにやあやつたけど その猿のおかたにやつたんだからねえ。おじいさんもおばあさんも心配して まあ いるにやあいたが約束だから しょうねえやつたん。

そうしてねえ まあいつたらねえ そんなで猿は喜んで その山へ帰つたん。

そうしたら「あしたはね三月のお節句だから それから まあ おじいさんの所へ まあ おもちをついてしよつていかなけりゃあならな」つて娘がゆつたん。

そうしたら「わつきやあねえ そんなものこげえたんついて しよつていぎやあいい」なんてねえ。それから べたんべたん二人でついてね。ふんで これから「はあ おめえのして切りなさい」つて猿がゆつたん。「おらがおじいさんは その のしたり どうしたりやあ食べない」つてね。それから それごとおかなけりゃあなんねえつて「そうか それじやあ それごとまるめてしよやあいいや」なんてね。

「それごとしよつたじやあいいけねえ そのたちうすごとしよわなけりやあ その おらがおじいさんは 喜ばねえ」つてねえ。

それからたちうすごと「そんなじやあ わつきやあねえ そんなのしよつて わつきやあねえ」なんてね。喜んで猿がおねてしよい出したんだねえ。しよいこいにゆいつけてねえ。

それから まあ 途中をブランブランしよわせてきたんねえ。

そうしたらねえ桜がりつぱの桜の木が青ンぶちに こうに深い青ンぶちに こうにおつかかつて りつぱに咲いていたん。

「その花が おらがおじいさんはほんとに好きだから そのおもちの上さして とつてさしてもつてつてくれりやあ喜ぶけど」つてゆつたん。

そうしたら「わつきやあねえ」そんな猿だからねえ 木なんざあのぼるなんざあ わつきやあねえから「それじゃあ ここへおろしてつて

まあ わしがのぼつていくから おめえが好きなのをえらべ」つて こうゆつたん。

「おらがおじいさん おろすとねえ 土くさいと食べないから たちうすごとしよつてのぼつてもらいてえ」つてねえ「わけでもねえ そんなもんしよつてのぼるんざあわきやあねえ」なんて喜んでねえ 調子にのつてねえ そのたちうすしよつたことのぼつたん。それで「ほら こちらの枝でいいか」なんてねえ いいかんのぼると猿が言うだよ。

下で そのおくさんが「いまひとだん上のぼるといい枝ぶりがあるが」なんて言うんで「わつきやあねえ ほいしよ」つちやあ またねえ。

そうしちやあ「はあ これはいいか」なんてねえ はしのとこいつてたちうすしよつているだから重いだから「はて いまひとだんのぼつてもろうええば おとつつあんどのほんとの好きな枝ぶりがあるんだがねえ」

そうしちやあ「わきやあねえ ほいしよ」つてなんて、それから一番上 一番上だらなあ ほんとにまつつぐの いい枝だが」なんてねえ、

そうすりやあ「わつきやあねえ ほいしよ」つちやあ そうしたら枝がさけて たちうすしよつているだから ミリミリミリーつてさけてねえ その青ンぶちへねえ おつちやつたん そのおもちをしよつたごと たちうすごとねえ。

猿が青ンぶちに流されていったで 娘はねえ 家へねえ 帰つてきてねえ 親孝行したにやあしただが、猿にやあそうゆういたずらをしただから どうも それで猿の供養は 毎日毎日そこへきてねえ おがんでねえ やつたという話だ。

ゆめみ

語り 山本 さか(七九才)

収録 一九七〇年一月三十一日

むかし あるところに でかい庄屋さんがあつたつてねえ

番頭や女中さんを まあ たくさんおく その庄屋さんでね。

それから まあ 今年とりだから うんと まあ飲めよ さわけよで まあ たくさん飲んで そいから「あすの朝は ゆめみだから いゆめ見りやあ おれが うんとおあしを出して おめえなんぞの お正月こづかいだけ出して買うから その みんないいゆめ 良くねて いいゆめ見るだぞ」つて そう言つて おうちのだんなさんが みんな 番頭、女中あつめて言つて聞かせてね そうしてねかしね。

でえみんないえー(家)帰つて いエー(良い)見てエで みんな枕の下あーおつかつて いろいろゆめの いいのを 富士の山がどうと かつちゆうのを書いてね みんな枕にして みんなねたん。

そうで あすの朝集めてね。

その一番々頭から始めてね「おめえなに見た」つて みんな そのゆ

めのいいにしたがつて その みんなお金をたんと出して買ったつて

その だんなさんがね そして まあ ふろの火をたくきたないよう
なごぞうがねえ ひとり残つててね「おめえ なんていうゆめ見た ま
あきようは わしがふんぱつして買うから」つて だんなさんが言った。

「おらあ 見ねえ」「そんなわきやあねえ なにか見たんだんべえ」つて
みんなしてせめる「おらあ見ねえ」つて どうしても見ねえつて はあ
いうもの「みんな その えんごうな むのは とつつかまえて

島流しにしべえや」つちゆうわけでね 女中さんに 番頭さんに つ
かめえて でつかい箱へ入れて その流したつて 川へ持つていつてね
がけからおとしてね「人のつきあいましらねえ その そんなもなあ流
せ」つてね。

そしたらね そのブヨブヨつて流されていったんだつてね。

そしたら まあ 岩へね 箱がぶつついてね こわれたつて そした
ら こぞうが出たあでしよ それから岩のだんこへ上がつて さむいか
らね 日にあたつていただつて。

そうしたら かーつぱが出てきてね 川の上えチヨロチヨロチヨロ
チヨロいて お天気ン歩つてただつてね それから呼んだつてね。

「まあ ゆさんげに おめえは歩つてる おれん それえちよつとか
してみねえか」つて言つたつてね。そしたらね あの やつぱり友だち
ほしいものだから「そつじゃあ おれがひとつきり あの 日にあたつ
てるから おめえ歩いてこう」つていうわけでね そのかしただつて
その川たびつていうものをね。

そうしたら かりてはいたらね おもしれえくつて そのチヨロチヨ
ロチヨロチヨロ ありけんだから その あつちこつち ありーただつ

て。どうしても帰つてこねえだつて。

そのうちに まあ下から おおくあのぼつてきたからね そつてまあ
「はあ まあいいかんだら おめえかえしてくれ」つちゆうわけで「ど
うも おりやあ こりやあかえせねえ どうもかりたりやあ どうもゆ
さんでかえせねえ」つてどうしても こうかえさなだつて たら

かーつぱがね「おめえにやあ いいものあげるから その わしやそれ
がなけりやあ ひとつきりも そのいらねえ おめえは人間だから

その あの村へ帰りやあ すきなことができるだから まあ おれにか
えしてくれ おれあ それがなけりやあ ひとつきりも その生活する
ことあできねえ」つちゆうわけで ようやくまあ かえしてもらつてね
そうして まあ「おめえなあ これえくれつから それが一つのがその
生針つて 一つのが死に針」つて 立派な きれいな その針が二本
入つた箱をくれたつてね。

「こつちの方をしりやあ その死んだ人が生きるし、こつちの方を 死
ませてえ人がありやあ これえしらあ死むし だからおめえ大切に こ
れえありやあ その一生樂に暮らせるから あの これ大切におぶちや
あらねえように身につけてろ」つて ぼろを着た そのおかしな野郎つ
こに それをくれただつてき。

それから まあ 持つておうちへ帰つてきた。おうちの方へ ぶらぶ
ら帰つてきたつて。

そうしたらねえ その村の一番大じんの家の その一人娘が亡くなつ
たつちゆうわけで いえーらい みんな集まつてねえ 大勢で その
なーいてたつて。いつくら その いえー その博士に お医者さんに
ンたのんでも 易者さん、たのんでも 何にしても その どうしても

かいがなくて その亡くなったつて その泣いたつてで そこへまあ
「こんにちはあ 家じゃあ何ごとかできましたか」つて言つたら「こうい
うわけで その大切なひとりっきりの娘が死んでしまつて その ほん
とうは ここじゃあ困つてゐるだ」つてそのがわのしょうがゆつたつて。

「しああ それえ見せてもらいてえ」つてゆつただつてね。

だが きたねえ ぼろを着た そいで そんな野郎つこに そんなと
てん お医者さんにでんなおらねえもの その上がらせるもんやねえ
なりいしてるだから「おめえが見てんくれたつてどうしようもねえだ
しとても上がつてもろうなにはねえから 帰つてもろいてえ」つてよせ
つけねえだつてね。「どうしても見せてもれえてえ」つて まあ その
言うだつてね。でまあ「ほつじやあしうねえから まあ通せ」つちゆ
うわけでねえ そつてまあ わかぞうに いいの まあはかせて まあ
ずっと奥のそのねえさんの亡くなつてゐる部屋へ通したつて。

ら おとつさんも おつかさんも しんるいしょうがみんなついてた
が「みんな出てもらいてえ」つてねえ「わし ひとらにして その出て
もろいてえ」つて「とてん その大切な娘 その おめえにたのんでそ
の出るわけにやあゆかねえ」つて そのうちの人が泣いてすがるのをき
かねえで そのみんな出して戸をしめてね それ 生き針、そのしたわ
けだね。三本したらねえ ムニユーンとこう起き上がっただと。

そうしてねえはあ喜んで そつてはあ そつてこつてまあ「入つても
れえてえ」つてちゆうわけで そのうちのしょうが いたが 生きて
ちやんと生きてただつて その娘が……

「まーず まあ ありがたいの ありがたいねえのに こんな人が世
にあるがな まあ 人助けてもらつて こんなありがたい人が どうし

てうちへ巡つてきてくれたがなあしれねえ まあ お札にやあおよば
ねえそのうちの婿になつてもれえてえ」つて そつち こつちのうち
の人から 娘から すがつたつて。

「おりやあ そんな人間じゃあねえ 人を助けてありくもんで その
むこになつて ここによんどんでなんかいらねえ」つちゆうわけで そ
れから立派な服をそこでもらつて着たり そのね お金も そこでお金
くれるつたが どうしてん取らねえだつてね。

「わしやあ 人助けて歩きやあいいだから そのお金なんかいらな
い」つてね しかし しかたがねえ 少しまあやつて そうしてまあ
どうしてん婿になつてもらいたいつちゆうのを なつてもらえねえだか
ら しかたあねえから そのまあ そつじや帰つてもろうつちゆうわけ
で まあ帰つてもらつたん。

そつちで まあ ぶらぶら下の方へ めた行つたらねえ そこでえ
またあ あのえらい大じんのつこで 娘が一人亡くなつたつちゆうわけ
でねえ ええ そこじやあ 婿をもらうべえと思つていたりやあ 結婚
式しべえと思つていたりやあ亡くなつたが どうも婿さんでん気に入
らねえだつたがなあ どうだつたがなあ まあ こういうわけだつ
ちゆうわけで またいた。

また「それえ見せてもらいてえ」つちゆうわけで そこへのりこんだ
おめえは とてもはあ きたないだから そんなそこじや その こ
んだ いい服を着せてもらつたり かばんなあ そのまあもらつたから
その まありつぱだつたんべえけども「おめえが見てもらつてン い
え博士さんに見てもらつただから とてもはあ およばねえ 亡くなつ
ただから その見てもろうつても いえーつてゆうわけだけれども「ま

あ見せてもらいてえ」つて きかねえから そつでまあ はえつて見て
そつじゃあ 見てだけでもろうだつちゆうわけで そんでまあ 見せたら
ねえ やつぱり「お家のしようにやあ 出てもらいてえ」つちゆうわけ
で まあ 出しておいて 針したがね その娘 また生き上がつてね。

そつでまあ うちのしようにやあ入つてもらいてえ うちのしように
喜んで まあ そこでん「まあ婿になつてもらいてえ」つていうわけで、
それえ「婿なんか はあ おれやあなりやあしねえ 人を助けてありか
なくつちやあなんねえだから 婿にやあならねえ」どうしてもなつても
らえねえ そこからまあ おわしを少しもらつて出て そこからまあ
うちへ帰つて まあ いえー うちこしらつて まあ そしてまあいた
ところが どうしてん そのふたありとこから その娘たちがきて
「どうしても、婿になつてもらいてえ」つちゆうわけ ふたありできて
せめこんできて「それじゃあ まあ わしが その瀬戸のいえー橋 あ
るがその橋の上へ まん中へ立つから どつちへでも そのよけいにお
めえなんかよけい引いた方の婿になる」つて そつからまん中へ その
人が立つてね。

「わしのがだ」「わしのがだ」つて両方から引つぱつたつて。

そうしたらねえ 一人の人が その手つてがのけるからねえ はなし
たつちゆうだい ではあ かわいそうではなして うんとひつぱつた人
の方はだめだから その人にやあいがねえ はなした人の方が情がある
はなした人の婿さんになるつて そつで いっしよに あの なんだ」
い 一生いい仲で」暮らしたなんて そつで いろいろ話

かーばのおかげで人を助けて そつで いろいろ夢見だつたわい それで そ
の売らなかつただつて

夢に それえ見ただつて ええ そうだから 売らなかつただつてそ
ういう夢見たから

よまぎとじょうぶ

語り 山本 いよ

収録 昭和四十九年

とつてもなかのいいおじいさんとおばあさんが くらしていて 子ど
もがなくて 毎日毎日神仏を信心していたそうで それで まあ お
ばあさんは山へ 木の葉はきー行つただつて 木の葉の中に女の子が
へえつてたで大よろこびで家へつれてきて、おじいさんは 山へまき切
りに行つたら 木の又に男の赤ちゃんが出て それをまあつれてきて
ふたありでたいへんありがたがつて なかよく まあ 育ててたつて。
まいんち 遊びにいつちやあいけない 遊びにいつちやあいな
い。つて言いつづけて 仕事に出ただつて。おじいさんも おばあさん
も。

どうもたいくつだからつて 今日野原へ遊びに行つてみようつて
兄妹が遊びに出たそうだ。

そして そこがあんまり広いので あつちこつち歩いたら暗くなつて
しまつて さあ まあたいへんだ。

おじいさんとおばあさんは うちへ帰つてみたら 子どもがいないん
でたいへん心配して ふたりでさがしに出かけたつて。

ところが いい原つぽで 兄妹は鬼の大群に出会ったぞうだ。

それで まあたいへんで ふたありで いっしょうけんめい逃げ歩いただつて。それで つかまるばつかなつた時、おじいさんとおばあさんは むこうの原つぽから いっしょうけんめい後を追いかけていってさがしあてたけど、鬼に 今少しでつかまりそうになつたで、それでやちの中に 子どもは入りこんだんだよ。そうしたところが やちで足をとられて動けなくなつてしまつて しめたとばかり 二ひきの鬼がとびかかろうとしたが、その 子どもは よもぎとしようぶがいつぺえあつたで それにつかまつてはい上がろうとしたが はい上がれねえで「たすけてくれえ たすけてくれえ」つてがなつたら 鬼が大よろこびで そばへ行つたところが よもぎとしようぶを見て これではどうにもならねえからつて 帰つて行つてしまつただつて。

そうしたら そこへおじいさんとおばあさんが かけつけてきて「ははあ こりやあ よもぎとしようぶが鬼はいやにちげえねえ」つてからつて それから五月五日にやあ しようぶとよもぎをしんぜるようになつただ。

天にとどく竹

語り 山本 いよ

収録 昭和四十九年

おとうさんとおかあさんが 子どもをひとり留守において出かけて

ひとりでいたとこへ そのひとりの人が「夕べの風でつき鐘が吹いていったが、こらに吹いてきなかつたか」つて子どもに聞いただつて。その したら その子の返事が「たしかにきたつた 風が吹いてうちの 夕べ うちののき場のくもいーひつかかつて ビーン ビーンつていつてた」つて。

そりやあおもしろえ子だと思つて きた人が また聞いただぞうだ。「おとうさんは そつじゃあどこへ行つた」つて聞いただぞうだ。

そうしたら「おとうさんは 富士の山がけるつて おがら三本持つて おこしに行つた」つて。

こりやあおもしろえ子だと思つて また聞いただぞうだ。おかあさんの「おかあさんは どこへ行つた」つて言つたら その「大きなみずうみがもるつて 綿あ持つてくしりもんに行つた」つて。

この子は とてもだめだと思つて その人があきれて けつてしまつただ。

そうして おとうさんとおかあさんが帰つてきただぞうだ。

おとうさんとおかあさんが「誰もきやーしなかつたか」つて聞いたら「つき鐘が吹いていったが こつちに吹いてきやーしなかつたか」つてたずねた人がきたから、吹いてきて うちののきばのくもずにひつかかつてビーンビーンつていつてた」つて言つたつて。

「そうしたら おとうさんは どこへ行つたつて言つたから 富士の山がけるつて おがら三本持つておこしに行つたよつて。

そうしたら こんだあ おかあさんはつて言つたから おかあさんは大きなみずうみがむるつて 綿あ持つてくしりもんに行つた、つてこつていうふうと言つた」つて言つただ。

そうしたら はあ おとうさんがたいへんおこつて「ばかやろうー、そんなことを言った」つて。その大変おこつて「このやろうは しょい出して おぶちやつてくる。どこへかすててくる」つて しょい出したそうさ。そうしたりやあ あの こんだあ あの大きなみずうみが見えただつて。おぶさつた子に さあ「おとうさん ありやあなんだ」つて聞いただつて。「ありやあ殿様のちようずだれえだ」つて 子どもに教えただつて。聞かれるだから しょうねえ。めた聞いていつただと。

そうしたりやあ 富士山が見えただそうさ。

「おとうさん あそこに天にとどく竹がある」つて言つただそうさ。

「このばかやろう 天にとどく竹なんかがあるもんか」つて、またおとうさんが言つただそうさ。そうしたりやあ「天にとどく竹がなかつたら おとうさん 殿様のちようずだれえのかけがえがでなかなべえ」つて言つただと。

「こりやあ りこうな子だ、すてねえで うちへしょいかえしていく」つて言つただそうさ。

四十束(つか)の畑ふみ

語り 山本 しめ

収録 昭和五十一年五月二十五日

まあ、おじいさんが四十束の畑ふみ行つたつて。

四十束の畑ふみ行つたりやあ さるがそこへきただそうさ。

「まあ さるどん おりやあ うちにやあ 娘三人もつたが どれでも好きなあまあくれるが この畑えふんじやあくれねえか」つて。

さるのこんだから たちまちふんごろがしてくれて、まあ 家えきてねてえて 一番でつけえ姉が「おじいさんなあ なぜねてござるがな。おきて 湯でん 茶でん上がらつしえー」つて言つたつて。

「おりやあ 飲みてえことも、食いてえこともねえが 四十束の畑ふみ行つたりやあ猿がきたから おりやあ さるどん 家にやあ娘え三人もつたが、どれでん好きなあ嫁にくれるから この畑えふんでくれねえか っつて言つたりやあ たちまちふんでいたが 猿のかかあにやあ行つちやあくんねえか」つて言つたつて。

「おらあ 猿のかかあなんざあ やんやのこと」つて、あねえどんなあ言つて行つちまつた。こんだあ 中てえの娘がきて「まあ おじいさんなぜねてござるがな。起きて湯でん 茶でん上がらつしえー」つて言つただつて。「おれは 飲みてえことも 食いてえこともねえが、四十束の畑ふみ行つたりやあ 猿がきたから おりやあ 家に娘三人もつたが どれでん好きなあ嫁にくれるから この畑えふんでくれねえか」つて言つたりやあ 猿がたちまちふんでえたが 猿のかかあに行つてくれねえか」つて。

「猿のかかあなんざあ やんやのことやら」つて はあ まあ 今ひとりになつただが じいさん 心配してねてりやあ、はあ 一番ちつちえが「おじいさんなあ なぜねてござるがな、起きて、湯でも、茶でも上がらつしえー」つて ゆつたつて。

「おりやあ 飲みてえことも食いてえこともねえが、四十束の畑ふみ行つたりやあ 猿がきたから、おりやあ家に 娘三人もつたから、

どれでん好きなのをくれるから この畑ふんでくんろつて言ったりやあ、たちまちふんごろがしてくれただから、猿のかかあに行っちゃあくれねえか」ちゆう。

「ああ ぞうさあねえ」つて そのちつちえ娘が言うだつて。

まあ じいさんも喜んで、まあちつちえ娘を猿のかかあにくれちゃつたつて。

それで まあ 一見いちけんに行くに もちーついて持つていくつて。

「じゃあ まあ どうして持つていくだ」つて「おらがおじいさんなあきれえだての人だから ならば これえたちうすごと持つていつてほしい」つて。「ぞうさあねえ」つて、猿がたちうすしよつて まあ いぐと、むこうの岩の上に桜の花が咲いていて「あれえ 一枝 たちうすのきわへ差してつてくれりやあ おじいさんがうれしがるが」つて言うだ。そうすりやあ猿は「ぞうさあねえ、こりやあ どこへおくだ」つて。

また「おらがおじいさんなあ きれえだてで 下へおきやあ 土くせえつて言うから ならば しよつたまんまのぼつていてえ」つて。

猿のこんだから たちうすしよつて 桜の木いのぼつて「はあ いくらへんでいいか」つてゆつたつて。

「はあ、いまいち段上のが やたらいいようだ」つて。

はあ まあ のぼるひようし はやあーたちうすしよつてたから 枝がふんぐじけて たちうすごとぶちおちて うちい まつくらさんぼに げてきたつて。

そういう話だ。

おわりのない話

語り 山本 しめ

収録 昭和五十一年五月二十五日

一人のおばあさんがなあ「まあ おれに話し さんざ聞かせてくりやあ 金は なにほどもやる」つて。

まあ、一人のおばあさんが よつびてえ話したが えつこうさんざになつてみねえつて。

「はあ よくよくおれえ さんざ話したから」つて、その人たあこうさんして、また ほかのおばあさんがきて

「まあ おききなされ、わしらがせどの大きな桜の木枝に はちがすを作つて ブーンと出ちやあ ブーンと帰り ブーンと出ちやあ ブーンと帰り・・・」つて、それをおつけえし、ひつけえし話したりやあ「おらあ、おめえのような ひとつことばつか、よくよくさんざだ」つて、その人たあ 金えたと得ただつて。

ぬかぼこ米ぼこ

語り 山本 しめ

収録 昭和五十一年五月二十五日

ぬかぼこ米ぼこつちゆうがあつて、まあ ぬかぼこがままつこで、米ぼこが実の子で 稲ぼひろいに行くつて。

米ぼこにやあ しまったのあるかごをあずけて、ぬかぼこにやあしつたのねえかごをあずけて稲ぼひろいにやつただつて。

米ぼこは すぐいつぺえになつて「はあ ぬかぼこ はあいつぺえになつたでいぐべえーや」つて言つたつて。

「おらあ はあ えつこういつぺえになんねえで行きようがねえや」つて。それで まあ 家行つて あしたしばや見に行くだが、ぬかぼこにやあ 麦ついて ほしておけて 米ぼこをつれてしばや見に行つて、ぬかぼこはいくらついても 皮がひけねえで はあ おけえおつかかつて泣いただつて。泣いたりやあ、その涙がかかつて、またひとせえついて出てみたりやあ その涙のかかつたつぶが 一つぶむけたで、こりやあ 水かけてつくもんだと思つて まあ、ねごうことのかのうたまつちゆうもんに、そりやあ、まあ、十七、八の若いしよう出ろつて まあ、ねごうことのかのうたまちゆうをはたいたりやあ 若いしようが出ただと。

それで その若いしようと二人して麦ついたつて。

それで おつかあが ついてほせて言われたから 麦ついてほして、それで、まあ おらもしばや見に行くだが まあ、十二ひと重の

小袖出ろつて まあ ねごうことのかなうたまをはたいだつと。

まあ、そうしたりやあ 立派な十二ひと重の小袖が出て とてもそえー着ちやあ歩くんじやあいげねえから おおのりかけのお馬出ろつて、はあ立派な馬が出て、十二ひと重の小袖着て 大のりかけの馬のつて 十七、八の若いしように馬方させて、しばや見に行つたださうだ。

まあ だれもしばやー見るもなあねえ、その人ばつか見て、はあ米ぼこがけえつてきて「まあ きようは ぬかぼこもえんで見りやあよかつた。まあ十二ひと重の小袖を着て 大のりかけの馬にのつて 十七、八の若いしように馬方させてきて、誰もしばやー見るもなあねえ。みんなその娘ばつか見てた」つて、そう言つたつて。

「おらあ、おつかあに麦ついてほせて言われただから 行きようはなかつた」つて、ぬかぼこは。

そんで そのあしたになつたりやあ ぬかぼこを嫁にいてえつて、もれえてがきたつて。

「ぬかぼこはいい、米ぼこをくれらあ」つて言うだが、
「米ぼこはいらねえ ぬかぼこをいてえ」つて、

はあ そうしたりやあ しばやのしたくで 大のりかけの馬にのつて 十七、八の若いしように馬方させて 十二ひと重の小袖え着て、大したしたくで嫁に出だつて。

きんな、しばやで見たなあ ぬかぼこだつたつて。

米ぼこは 誰にも嫁にもらいてがねえつて、この石のだんの上でうつちかれろつて、おつかあに言われたつて、そんな話だ。

ぬかぼこ米ぼこ

語り 熊川 卯三郎

収録 昭和五十一年五月三十日

むかし あるとこに ぬかぼこ米ぼこがあったと。

米ぼこは実の子で、ぬかぼこはままつこで、米ぼこをかわいがつて、秋、栗ひろいに山へいぐだが 米ぼこには しまったのある袋を持たせ、ぬかぼこにやあしつたのねえ 穴のあいた袋を持たせて「おめえなん栗ひろい行つてこう」つて栗ひろいにやつただつて。

ぬかぼこを先にたたせ、米ぼこは後から山に行き、栗をひろつていと、ぬかぼこは ひつたのねえ袋だもんだから いくらひろつてもみんな落ちちやあしまい、米ぼこは その落としたのをひろうから、めつけえるせわあねえ 夕方早くに たちまちいっぺえになつてしまい、ぬかぼこは一日かかつてもいっぺえにならねえ「ぬかぼこ おれはいっぺえになつたから どちら おらあけつてぐぞ」つて。

「おれは 今栗ひろはねえけると おつかさんにおどされるからおれはけえねえ 先にけえつてつてくれ、おれはけえねえからいっしょうけんめいひろうから」つて。それで 米ぼこは 家へけえつたつて。ぬかぼこは 夕方になつちまつて 山の奥へえつてつたからはあ暗くなつちやつて、家へけえることもできねえ。

山の向を見たら 明かりがチャンチャンする、それえーたよりに行つて見たら 小せえ山小屋があつて そこに山んぼが一人でいて それで「今晚は、おらあ栗ひろいにきただが 暗くなつて家へけえねえ 今

晩ひと晩とめてもらいてえが」

「ああ いいとも、おれつとこへとまつていげ、あしたいげ」つて。

「きょう 栗ひろいにきただが 袋にいっぺえにならねえで、ひろわねえで帰^{けえ}りやあ おつかさんにおどされるが」つて言うつと、

「そうか、そりやあかわいそうだ。おれがあしたの朝 しまったをぬつてくれるから とまつていげ。おりやあ こういうとこにいるだから 栗うんとひろつてあるから 栗めしにしてやるから 二人で食つて、さなぎ食つてねろ」つて。

次の朝 その袋のしつたをぬつてやつて ひろつてあつた栗を入れて「おめえ やだんべえが おれの頭ーとかして おれのしらみーとつてくんねえか」つて。「ああ いいよ、なんでもするよ」つて。

しらみをとつてやろうとすると、しらみつてえのはへびがチヨロチヨロするように、くしにみなさきつてきたつて。

「ばあさん まだ ここに一ついるがみんなとるんかい」つて言うつと、「まあ 一つは たねにおいてくんねえか」つて。それで栗はもらう。

おめえはいい子だから うちの小づちつうのをくれるから、これーもつてりやあ おめえは なんでも不自由はねえから」つて。

「金がほしけりやあ 金出ろ、米がほしけりやあ 米出ろつて。着物^{きもの}がほしけりやあ 着物出ろつていやあ なんでも出るから」つて。それえもらつてけえつてきたら「今日は、村にしばいがあるから みんなしばい見いぐから おめえは留守いをしてえろ」つて、家中みんないい着物(きもん)着て出かけたつて。

ぬかぼこは、みんなが出てつた後で、おばあさんにもらつてきたつちで しばい見に行くべえと「着物出ろ」つて言うつと、赤い着物(きもん)

がゾロゾロ出て出て、こんだあ「米出る」って言うとき米が出て、それでおむすびーこせえて、そんてまあ こんだあ「小づかいの金出る」って言やあ金が出る。こんだあ、かごにのつて行くで「かご出る」って言やあ、かごが出る。「人出る」って言やあ、人が出る。

そして、数々のいい着物を着て かごに乗って 化粧して きれえになつて行つたつて。

昔のゆつつけ舞台だもんだから 高棧敷があつて、花ーやつたから高棧敷い上がつて、それで なしでも、りんごでもうんめえもんをなんでも買つて食つて、なしー皮むいちゃあ 皮ー下に落とす、りんごーむいちゃあ下へ落とす。すると、米ぼこは、いつしうけんめい それーひろつちやあ食つたつて。

それで、しばいが終わりそうて、終わらないうちに家にけえらなきやあおどされるで、一足先に しばいが終わりきらないうちに またかごに乗つてけえつて、ふだん着に着げえて、しらぼつくれていたつて。

すると村のしうががガヤガヤつてみんなけえつてくる。
そのうちに米ぼこもけえつてきて、

「ぬかぼこ 今日ほんとおもしろかつたぜ」「そうかい」

「おれが見てる高棧敷から 立派なおじょうさんが見ていて りんごだーなしだーの皮だの、食いかけを落としてくれるで、それーひろつて食つて、ほんとにもうかつたぜ」つて。

「そうかい それは おれだ」つて言うとき「そんなことがあるもんか、おめえよりもつときれいな着物を着た女の人が落としてくれた。」つて。
「どんなわけで そんなことができるだ」つて。

おれは 栗ひろいに行つて、山んばにとめてもらつた時、山んばにう

ち出の小づちつちゆう なんでもたたけば願うもんが なんでも出るつちをもらつてきて、それをたたいたら なんでも出たから」つて言つたら、「そんなもんがあるもんか、それじゃあおれにもその小づちをかしてみる」つて。

ばあさんは 欲が深いもんだから うんと米も倉も、うんと出るように「米倉出る 米倉出る・・・」つて言つたもんだから 小めくらがうんと出ただつて、そんな話だ。

きゆうないとサツマ

語り 山本 直義

収録 一九七二年十月二十五日

きゆうないつちゆうのは まことに仕事きらいの男である。

ところが 子ぼんのうで 男の子が三つあつた

おばあさんも なかなかはたらきもんだが きゆうないは子ぼんのうで この三人の男の子に なにかとつてくれてえ なにかとつてくれてえつて考えていた

ところが その当時でんなんにもない 今のように買うものはねえとにかく川へようつりが仕事である ところが、頭をてぬぐいで半分かぶつてみたが どうも痛くてかなわねえだな ようつりい。

ところが行つて下げていたところが くもどんが来ちゃあ足い糸をひっかけ またきちゃあひっかけてみてえなところが どうもおかし

い。ひっかけていたところが きゆうないもおかしいなあと思つたら
松のがへ その糸をひっかけた

ところが かつぼどんがそれ一ずり込んで逃げまわつたちゆうむし。
まだ きゆうないの方が利口なわけだ。

かつば一だまかしただあなあ

またまあ なんとあすこんとこにいるから またようつりー行つたわ
けだあ ところが今度はでつかい魚だー そつけるようなでつかい。

それで まあ しょつて べつたかべつたかべつたかとはしまで そ
れをかついだりやあ でかいようで ところが その その今たば峠
ちゆうがあるべえなあ

ありやあ その たば峠ちゆうやつは あの そのとこまで来た
らあ そのようが きゆうねえどんさらばつて にげた

きゆうねえどんが あとをおつてつた

バツタバツタバツタバツ走つただつてな その時に たば峠つて

たばつたばつたばつたばつたつて つけたわけだなあ 名前

バツタバツタバツタバツつて走つただつてな その魚が

さあきゆうないどん どうも どうしても こりやあ どうもあきら
められねえんだなあ その魚がほしくつて どうもかなわねえ。こんど
は まあ 晩方行つてとるべえとか思つて そのまた そこへ晩方行つ
て なんとしても子どもにくれてえ だから その人は

ところが今度は そのう またひつかかつて てめえが川へずり込ま
れて こんだあ かたきとろうつて かつばに食つちまわられたつて

きゆうない 今でも きゆうない瀬つてあるが 決してあすこへより
つくもんじゃあねえだから

ところが そのあとに残つたおばあさんは その子どもの男の子を三
人あずかつてだ とつても よういのもんじやあねえ

その子どもが そのあにいほ おかしなもん おとうとは まあいい
が それもたいへんなもんじやない

その次の一番の弟が まあ まことにまじめのはたらきのいい人で
やつてみたところが その三人は どの子を だんだんだんだん 後で
どうみても一番弟が 一番いいつてね おばあさんは

ところが あにいほがどうもおかしなもんでだめだ おばあさんも ど
うもこの三人の男の子を育てるのは よういでねえ 子ぼんのうのきゅ
うないは ひきずり込まれちまつた

そこで かんげえた ババアもとてもおれの手じやあ この男の子
は育たねえ

それで 一晚 そのババアが それ子ども三人のうちへ行つただよ

にしら いまつとばかかせがねえじやあ おれが一人じやあ 一人で
したぐれえのこつじやあまにああねえぞつていつたが どうもきょうで
えが どうもみにしめない

にしらあ そんなにかせがねえじやあさじやあ しねえじやあ お
りやあ くびおつくくつて死んじもうぞ

ところが まだ野郎めら かまわねえ ババアも おつちんじまつた
くびをくくつて

さあ 三人の 子どもになつた ところがどうも子どもだから なあ
にしら あにいほは根性がわりいだし なかては まあ ひとはいいだが
ちよつときょう 一番弟が 一生懸命ババアの後をついて働いたもんだ
が とてもじゃあねえ そりやあ まだいろいろあるんだ。ところが

その当時 今でいやあ九州なあ 昔は薩摩の国って言ったもんだ そこからばくちうちが来たもんだ ばくちうちが さつまというものを持ってきただ 九州ちゅう薩摩から ここへ持つてきただ

それで ばくちぶつたところが そのうなかつての野郎が ばくちじょうずだもんだから やつたわけだあ 本職とな

ところが えらい金もうけたわけだあ この野郎はおもしれえ野郎だなあつて その本職のばくちうちが おれがいいものを見やげにくれるからつて サツマーえたわけだあ 今のサツマだなあ

今いろいろあるから食わねえだが あの手ツマというもんが めずらしくつて それーいたわけだなあ

これは こうしてやりなさいつて 食べるから 熱のある場へやれば食べるからつて ところが なかての野郎が その本氣にして それー今でいう あの堆肥のうだー そこへふせこんだわけだあ

ぬつくいとこへおきやあ おいるからつて言われたから なるほどおいた 芽が出たりやあいいもんだと喜んでいるうちに あ

にきが見つけて それーその 根性が悪いあにきだから サツマはうまいと聞いているから 道ばたの石持つてきて そのかわりにふせておいて ひっこぬいて焼いて食つちまつたちゅう

ところが きわは食わなくて きわからおいてきただつちゅう おいてきたやつを植えたら こんだあ サツマがなつた

さあ こんだあ この村の衆が さあいいもんがおいた おらげにも分けてくんろ おらげにも分けてくんろつて ほしがるわけだ そうしたところが おれえがめたくるなかつては ばくちがじょうずだ

から その時ばくちをやつたら めた金がとれる どこへ金をしまつておいても その野郎 あにいが根性が悪いだから どこへおいても ぬすまれつちまう こりやあだめだ どこへおいてもぬすまれるから こんどはまあ そう一番弟はただ働く一方 ああ 今はねえが 稗えとつて その入れ物へ入れといた訳だなあ

そこへ こんだあ 弟と相談して 金ちゅうもなあ ここへしまつておいたら つつとうしておいたら あにいもめつけめえから これへひとつめつけえたらたいしたもんちゅう訳で 稗ぬかの中へ そのぜにをつつこんでおいた訳だあ

いくもんかの金な ところが そのおにいには やくざもんで おかしなもんだから どうしてもぜにがめつかあらねえ

どうしても これーめつけて かんげえて ようく野郎があつちへ走るが こんだあひとつ ぬかーまいとくべー あにいのよた野郎 こんだあ その稗のぬかをずうつと そつちへまいておいた訳だあ

そうしたら そのなかつての弟がまたもうけてきて ぬかーまかれたーしらねえから どんどんそこへ行つて ぜにつこおつくつた訳だ

稗ぬかの中へ さあ おにいの野郎が それー見ていただ 足つこがつくだどんどん どんどんつて 足つこがある訳だあ

そこまできたらとまつた こん中にあるにそういないつちゅう訳でこうやつてみたりやあ なるほど ぜにがあるだあ そこに

またとられちまつた そういうことで そのう その弟は ばくちでもうけて どうやらこづけえもあつた またその弟は一生懸命働いて 稗(ひい)ぬかしつくつている あにきは そういう方法だで どうもうまくない

したがって どういう訳だかしんねえが どうもつまらなくなつて
その第二人も こりやあとでも どうあつてもだめだから 諦めべえと
いう訳で ふたありよつて あすこのきゆうねえぶちへ また沈めた訳
だあ

ところが 後へ残つたやくざ野郎は とり残つたが 結局それも首を
くくつて死んじまつたつう
それつきり

うりひめと あまんじやく

語り 中村 ゆき

収録 一九七一年十一月二十一日

じいさんとばあさんが あつただそうだ

でまあ あのじいさんは 山へしばかりに行つたそうだ

でおばあさんは 川へ洗たくに行つたそうだ

そうすりやあ まあ うりが流れてきただと まあ いいうりが流れ
てきたで おばあさんがとつつかめえてくんべえと思つたが えつこう
食うのは もつてねえで

うちへ持つてきてさ おじいさんにくれべえと思つて持つてきただつ
てよ そうしたりやあ おじいさんが そのうりは 食つちやあなら
ねえわたに包んで 囲炉裏のすみにおけつて 言われただちゆうよ

そうしたりや あの でえじにわたに包んで 囲炉裏のすみへおいた

りやあ 夜中頃になつたら えれえ オギヤア オギヤアつて泣く音が
するだつて それでまあ それちゆうわけで おじいさんとおばあさ
んと起きて行つてみたりやあ きれえにうりが二つにわかれて きれえな
あの 赤んぼうが生まれただちゆうよ

そうで まあ かわいがつて二人でお湯へ入れたり だえじにして
そうして まあ あれだちゆうよ うりひめつて名つけて そうで
まあ えつこう たちまち大きくなつたで ほれ 昔しやあ ホドつて
いうのを山からほつてきちやあ にくれただちゆうよ

そうすると きれえに皮むいて食つただちゆうよ 所でまあ大きく
なつて はあホドをにちやあくれ ホドをにちやあくれしたりやあ は
あ大きくなつて 昔ほれ はたおりつて しただが はたおりしただつ
ちゆうよ ふじやあ まあ きようはホドをほつてきてくれるから あ
のはたあ静かにおつてろつて おじいさんとおばあさんが 山へホドほ
りに行つただちゆうわい

そうしたら その留守にあまんじやくつてんがきて そうして お
れえ戸を開けて 入れてくんろつていうだが どうしても戸を開けてく
んねえ おじいさん おばあさんにおこられるから やあだつて言つた
だちゆうよ そじゃあ 少し手のへえるだけでんええから開けてくん
ろつて言つて そして少し開けてくれたら 入つてきて さあ そうし
てあれだちゆうよ きれえな着物を着ていたのを取つて あまんじや
くが着て 所で てめえのぼろを ぼろの着物をうりひめさんに着せた
だちゆうよ そうで はたあおつて そうで おじいさんとおばあ
さんが来てみたら うりひめさんのほ どつかへ連れてつて 木の根へ
ゆつつけておいてきて そして てめえできれえな着物を着て はたあ

おつてただちゅうよ

そうして おじいさんとおばあさんが来てて まあ ホドをにてください
ただそうだ

そうして うりひめや あのホドがねえたから食べるって言ったりや
あ はいって言つて来てみたりやあ そうしたら その ホドを食うの
に皮あ いっこうむかねえで食うだちゅうよ

きようは おもしれえなあ まあ 皮あいつこうむかねえけど まあ
今まじゃあ 皮あきれえにむいて食つたになあ

いい着物着てて うりひめのようにだが どうも変だがつて言つたが

それでん うりひめにちげえはねえつて思つて まあ ホドをさんざ
食わせて こんだあ きれえな車に乗せて おじいさんとおばあさんと
遊びへ連れ出しただちゅうよ

そうしたりやあ あの裏の柿の木に そのうりひめさんがゆつつけら
れて まあ おじいさんとおばあさんが乗り出すのを見て 泣いただつ
ちゅうよ ああ うりひめさんの車 あまんじやくさんが乗つていいこ
んだ いいこんだつて言つて 柿の木にゆつつけられて泣いただちゅう
うよ

まあ こりやあ 変だちゅうこんで おじいさんちが行つてみた
りやあ うりひめさんが そのあまんじやくのぼろ着せられて 木い
ゆつつけられて泣いていただちゅうよ

そうして まあ こりやあ まあ あまんじやくは こんなまあ 悪
ごとをしたちゅう訳で うりひめさんの もうぞう行つて 木からと
いて連れて来て そうして着物を着せて こんだあ あまんじやくさん
をはだかんしてん そうで えっこう茅あら ずり歩いただちゅうよ

そうで まあ悪いことをする このあまんじやくはつてことで 茅あら
はだかでずり歩いただつて

それで まあ それえ血が出て あれだちゅうよ あまんじやくさ
んがひどいめにあわされて 血い出して 茅あら引き歩かれたで あの
茅にやあ ほれ赤けえものが茅にやあね 茅あわるちゅうと まあず赤
けえものが えつばえあるんだよ しんに

あれが そのあまんじやくさんの血だだちゅうよ
ほんに茅にやあ血がついているだよ

ぬかぼこ こめぼこ

語り 山本 とく

収録 一九七一年二月二十一日

まあ むかしむかし あるつつあい
それで まあ ぬかぼここめぼこが あつたつあい

それから ぬかぼここめぼこふたりで 米ぼひろいに行つて は
あそれで 米ぼひろつて こめぼこのかごには しまったが あつて はあ
ぬかぼこのかごには こうしつたがなくなつて それでまあ めためた米
ぼひろつてりやあ そのこめぼこのかごはいっぱいになつて こめぼこ
のぼうがいっぱいになつて そして ぬかぼこのほうは しまったがねえ
ままあやだから しまったがなにかごをやつたから いつになつても
いっばいにならねい はあそれで暗くなつて それでまあ こまつたな

あと思つて 田んぼ歩つてたりやあ 山奥で明かりがする それで まあぬかぼこは まあ めためた暗くなつたから その明かりをたずねて行つたりやあ そのおばあさんが ひとり山奥にいた

そのおばあさんが そんなまあ よくきた おりやあここへひとりであるが こどものくる場じゃねえが その今夜 次郎 太郎 こるころだ はあ 次郎 太郎がそのいろいろの米しよつてこるから はあ おれのけつの下へ その はあ へつついてろ かくねてろつて

それで かくねたつて それでまあ 次郎 太郎がかくねてたらきただつて おばあさんつころへ

それで まあ おばあさん 今夜はどうしても 人つくせえよつて おばあさん 人くせえよつて そんなことは あるもんか はあ おれのけつに その ひもつができてゐるから それのにおいだつて おばあさんが言うだつて

それで まあ 夜の明けるまでおばあさんのけつにかくれてりやあ そうしたら また 次郎 太郎が 夕飯食つて とまつて 朝に出てはしつてつたつて

そうして おばあさんなあ ぬかぼこに ゆんめえこぶくろちゆうたからものをあずけて 次郎 太郎に どこげで 出会つたら このたからものをもつて ままころがりや いっこ あんじゃねえ めつけらんねえからつて

それで 次郎 太郎が米しよつてきて ままにころがつたりやあ たからものをつかんでたもんだから 次郎 太郎にめつからねえだつて ぬかぼこがうちへけるとね こめぼことおつかさんはしばいを見に いぐから 麦うちしとけつてね しばい見に行つたつて

たんと麦出して行つたつて

ぬかぼこがいくらついても終わらねえで 心配して 困つて どうしてんこげんつけねえもんで ないただそうだ そうしたりやあ 涙が落ちて 麦皮がむけるだつて こりやあ水入れてつきやあ つける」なつて水入れてついたりやあ たちまちつけて 庭いっぺえ その麦ついてほしただつて

そうして まあ しばや見におれも出かけていぐべえと思つても かつてきたゆんめえこぶくろを振つただつちゆう

十二単衣の小袖出ろつて振つたら 十二単衣の小袖が出ただそうだ 白馬出ろつてゆつたら 白馬が出ただそうだ

十七、八の馬方出ろつてゆつたら いい男の馬方が出たつちゆうよ そうして そのいい馬方で その白馬のいいのに乗つて 十二単衣の小袖着て しばや見に行つただそうだ

そしたら 白馬でいい男の馬方で来たぬかぼこばつか見て しばや見るもなあなかつたそうだ

そうして うちへけえつてきただつちゆうあい そうしたら あの嫁もれえが いっこう来たんだそうだ 嫁もれえが来て 誰も自身のこめぼこ なにはもらわねえだそうだ

ぬかぼこがほしい ぬかぼこがほしいつて みんながゆうもんだから おつかさんは こめぼこのもれえてがねえから こめぼこ うすの上 上がれ ひきうすの上 上がつてろつてゆつて こめぼこが上がつて ひいただつて そうしたら 手えくじいただつて

それつきり

四十づかの畑ふみ

語り 山本 いよ

収録 一九七一年二月二十一日

畑ふみに行つただそうだ 四十づかの畑ふみに行つただそうだ
 それであの とても疲れてなんねえから 休んでいたら サルがそこ
 へ来たんだって

それで 娘三人もつているから どれでもひとつ嫁さんにやるから
 是非踏んでもらいてえ そしたら喜んでその畑をたちまち 踏んでくれ
 たんだって

それでまあ ふまつてもらつて嬉しいだが 嫁ごに行つてくんなきや
 あ困ると思つて はあうちへ来て寝ていただつて 心配で寝ていたん
 だつて それであの娘が一人けえつて来ただつて 一番でかい娘がけ
 えつて来ただつて

それでおとうさん あのどこか悪いか その起きて お湯でもお茶で
 も飲まねえかつて言つただつて

どこでも悪かねえだが あの畑ふみに行つて とても疲れてなんねえ
 から休んでいたら サルが来て娘三人もつているからどれでん一つ嫁に
 くれるから うなつてもらいてえつつたら サルがやつてくれただが
 お嫁に行つちやあくれめえかつて言つただと

そしたら おサルの嫁になるなん おらいやだつて逃げて行つただつ
 て また 次の娘が来たんだつて それでまた おとうさんどこか悪い
 か 起きて お湯でも お茶でも 飲まねえかつて

どこでも悪かねえだが 四十づかの畑ふみに行つたら とても疲れ
 てなんねえから 休んでいたら あのサルが来て 娘三人もつているか
 ら どれでも一つお嫁にやるから あのうなつてくれつて言つたら う
 なつてもらつただが あの行つてくれねえかつて言つただつて

そしたら おら そんな サルの嫁にや嫌だつて また逃げてつち
 まつただつて お父さんが心配になつて寝ていただつて
 ああそれで 一番下の娘が来たんだつて

ああ そしたら また その娘が おとうさん どこか あの かけ
 ん悪いか 起きて お茶でも 湯でも飲まねえかつてゆつただつて

どこでも悪かねえだが 畑うないに行つたら さつぱり うなんねえ
 から 休んでいたら サルが来て 娘三人もつているから どれでも一
 つ嫁にくれるから うなつてくれつて言つたら うなつてくれただがつ
 て言つただつて

そしたら いくらでもおれがたちまちに行くから 早くお父さん起き
 ろつて言つたんだつて そしたら お父さんが喜んで起きて来て 元氣
 出したん

はあ そうして嫁に行つただそうだ

それで そしたら お父さんの所へ 一見に行がなくつちやあなら
 ねえつて もちついて いがなくつちやならねえ

それでまあ サルが喜んで まあ 一生懸命 もちいついただつて
 それで うすごと しょつてがなくつちや おとうさんが嬉しがら
 ねえつて

それで まあ たちうすごと しょい出しただそうだ そしたら ま
 あ 三月の節句が来てるから まあ歩く道中に きれいに桜の花のでか

い木が 咲いているだ

それが まあ どうでも その桜の花折つてがねえじゃ お父さんが
喜ばねえから たちうすぐとしよつて上がらなくっちゃなんねえつて
そうしたら なんとつて サルだもんだから あの喜んで たちうす
しよつたごと上がつただつて

そしたら こころ折つたらいいかつて 下の枝じゃだめだ 上の枝
取らなくつちやだめだ あじや こころでいいかつて また上がつただ
そうだ もつと上まで上がらなきやだめだ たちうす しよつたまんま
で そうして だんだん一番高い所の枝でなくつちやだめだつて上がつ
たもんだから 重くつて 下へたたき落つちやつただつて

ああ それで たちうすの下になつて 死んでしまつただつて
そうしたら その娘 喜んで 家へとんできただつて
一番小せえ娘が そういう知恵があつただつて

ゆめみ

語り 中村 せつ

収録 一九七〇年十月十二日

それこそ 大じんさんが番頭さんとか 女中さんとかうんと頼んでお
いたつてさあ うんと頼んでおいてさあ あのう 正月二日の晩に 夢
見の晩になあ 今夜は あのう いい夢見て おれに売つてくれえ そ
うすりやあ お金うんと出すからちゆう訳で ふんでまあ 番頭さんか

ら 女中さんから みんな聞いたつて

ところが 一人のもんが なんとしても聞かせねえだつてねえ
そのもんは いい夢見たつてねえ なんとしても聞かせねえさあねえ
それじゃあ おめえ島流しにするつちゆう訳でよ 箱へ入れて流し
たつてねえ そうしたら あの石あたり この石あたりして 箱が壊れ
て 困つていたらねえ そしたら そこへ あのかつばが チヨロチヨ
ロつて その 川たびちゆう 水の上へ入つても沈まねえものをはいて
きたつてねえ

そいで いいもんだなあ 私に貸さないかつてゆつたつてさあ
そうだねえ 貸しちゃあ困るけど すぐ持つてくりやあ貸してあげる
よつて ゆつたつて

それで まあ それをまあ かつばから とつてさあ それで川下り
シヨロシヨロ シヨロシヨロつて行つたつてさあ
いつまでもけえさねえもんだから 生き針 死に針ちゆうもんをくれ
るから けえしてくんろつてさあ

まあ それえもらつて めためたいぐとでえじんさんのひとり娘が病
んで 大変な騒ぎだつてねえ はあまあ こんだあ死ぬ 困るつちゆう
訳でさあ

ふんじゃあ わしが助けてやるからつちゆう訳で そのもんが言うだ
が へんなもん着ているもんだから そんなもんに そんなことのでき
ようあんめえが それでも あんまりのなんぎさに 頼んでみるかっ
ちゆう訳で 頼んでみたりやあ よくよく 死んだもんが生き針刺した
ら 生きてつてねえ

ふんでまあ 喜んで まあ おらが婿になつてくんろつちゅう訳 そうしたら また 向こうへ行つたら そののでえじんさんの娘も やつぱり はあ死ぬか 生きるかで 大変な騒ぎだつてさあ

それで それも そのもんが 生き針刺して 生かしてくれたつてところが 二人の娘が来て このもんはおらが婿だ おらが婿だつてひつぱり合うだつて

それで 手え放した優しい方の娘の婿になつた夢を見たもんだから聞かせなかつただと

ぬかぼこ こめぼこ

語り 山本 勇平

収録 一九七一年五月三十一日

まあ 最初は まま親に ぬかぼこ こめぼこが育てられるだつちゅうよ

こめぼこの方が あの まあ ほんとの親だけーど ぬかぼこの方が まま母だつちゅうよ

それで その 米ほ拾いにいぐだつちゅうわい

二人 米ほ拾いにいぐだが こめぼこの方には しまったのあるかごを預けるだつちゅうよ ぬかぼこの方にやあ そのしまったのねえかごー 預けるだつちゅうよ

それで その 米ほ拾いにやるだつちゅうわい

でその こめぼこはしまったがあるから たちまちいつぺえになるだつちゅうよ それで その ぬかぼこは しまったがねえから いつまで拾つても いつぺえにならねえだつちゅうよ

それで はあ こめぼこは ぬかぼこ ぬかぼこ はあ おれはいつぺえになつたから はあ うちーいぐべえやつてちやあ言うだつちゅうわい おらあやだ まだ えつこかごが いくら拾つてん いつぺえにならねえからちやあ 言うだつちゅうよ

はあ にしやあ いつぺえにならなくてもいいから はあいぐべえ やつちやあ言うだつちゅうわい

あーおりやあ やだ これーいつぺえにしねえじゃあ おつかさんに やれるからちやあ言うだつちゅうわい

じゃあ おりやあ いつぺえになつたから さきーいぐから にしやあ 後から しょつてこうつちやあ言うだつちゅうよ

そりやあ その どつちかつちやあ その ぬかぼこの方が拾うだが その いくら拾つてん下へ落ちるから それー そのこめぼこの方がか しけえから拾つて うちへけえつて来ただつちゅうわい

それで そのー あれだつちゅうよ ぬかぼこは あしたはしばいが あるだが かごがいつになつても いつぺえにならなくつて困る

そのうちに はあ だんだんだんだん 日が影つて暗くなるだつちゅうよ それで その しかたねえ 向こうの方を見ただつちゅうよ

そうしたら 火の明かりが見えるだつちゅうよ

そこで しかたーねえ そこへ訪ねて行つただつちゅうよ そうしたりやあ おばあさんが 一人つきりているだつちゅうよ で まあ おばあさんが おめえ何い こんなとこへ来たつちやあ

ぬかぼこは こめぼこと一緒に 米ぼ拾つてこうつて あのおれにやあ しまったのねえかごを預けて こめぼこにやあ しまったのあるかごを預けたから こめぼこは たちまちいっぺえ拾つて うちへけえつてつたつて

そりやあ まあ かわいそうに そうだりやあ あの おれのところで泊まれつて言うだつちゆうわい でまあ泊つて そのいろいろかんげえて泣いているだつちゆうわい

その 何故泣くだつちやあ 言つただつちゆうわい そうしたりやあ おれは その あしたは しばやがあるだが その えっこう しばやー 見いもいぎてえだが うちー いぎやあ おつかさんにやれるし

その いぎようはねえつて言つただつちゆうよ
それで まあ 着るもんもねえしつちやあ言つただつちゆう
そうだら まあ そりやあ あしたには おれが うんめえこづちつちゆうもんくれるから それー持つて その てめえで好きな物を 呼んで たてえてみるつちやあ 言うだつちゆうよ そうすりやあその

てめえの好きなもんが出るからつて言うだつちゆうわい
そうして まあ その 寝て起きて うちー来るだつちゆうわい
そうすりやあ こめぼこどんちやあ あの 家中して 支度して そのー しばや見い 行つてるだつちゆうわい

そして その ぬかぼこは しかたねえ うちー けえつて来てみたら 誰もいねえだつちゆうわい みんなしばやー見に行つて

それで まあ その向こうのおばあさんから そのうんめえこづちつちゆうもんいてきたから その たちうすの上で つけて言わ

れたから たちうすの上で つくだつちゆうわい はあ 一番最初 そ

の あれだつちゆうよ 乗り馬出ろつてたいただつちゆうよ 馬出ろつてたいただつちゆうよ そうしたら馬が出ただつちゆうよ

こんだあ まあ 乗鞍出ろつてたたくだつちゆうわい
そうすりやあ 乗鞍が出るだつちゆうわい

そうしちやあ こんだあ 着物出ろつて 言うだつちゆうわい はあ いい着物が出ちやあ その こんだあ まあ 帯出ろつてたたきやあ 帯が出たり 下駄出ろちやあ 下駄が出るだつちゆうわい

まあ そうして その それえいて着て しばやー見いぐだつちゆうよ しばやー見いいたりやあ こめぼこ その親ー しばやー見てるだつちゆうわい

そこへ まあ ぬかぼこどんなあ いい馬に乗つて いい支度して 行つただつちゆうわい はあ そうしたりやあ こんだあ お客さんちが しばやー見るずらーねえー こんだあ その ぬかぼこどんを見るで

その まあ いい支度して いい馬乗つて その来たつて みんな見るだつちゆうわい こめぼこどんちも見ろだつちゆうわい

その あれだつちゆうよ ぬかぼこどんは こめぼこどんの方へわざと行つちやあ まんじゅうなんか あんこぼつか食つちやあ 皮ー投げるだつちゆうわい そうすりやあ それえ こめぼこが拾つて食うだつちゆうわい

それえ こんだあ ぬかぼこは しばやー見て その先 けえつて来ただつちゆうわい はあ まあ けえつて来て その向こうのおばあさんからえたやつー ひっこませるだつちゆうわい

その 下駄ーひっこめ 帯ーひっこめ 着物ひっこめ 馬ひっこめつちやあ みんなひっこませるだつちゆうわい

そして その はあちゃんとひっこませてしまつて うんめえこづち
ちゅうもんを どこいだがなしまつといて しらばつてくれているだつ
ちゅうわい

そうしたりやあ そこへ こめぼこどんちゅうが けえつてくるだつ
ちゅうわい

そして その話 そのぬかぼこにおせえるだつちゅうわい

その ぬかぼこ ぬかぼこ 今日しばやー見はおもしろかつたぞつて
どこのおじょうさんだがな 来て あの まんじゅうなど食つて お
らがめえ めた その投げてくれるで おらあ それー拾つて食つて
とてもゆきさんだつたつて言うだつちゅうわい

今日のしばやは ほんとによかつたつておせえるだつちゅうわい

そうかい そりやあ まあ 今日のしばやーよかつたなあつて しら
ばつてくれているだつちゅうわい

うりひめ

語り 山本 勇平

収録 一九七一年五月三十一日

まあ あれだつちゅうよ じいさんとばあさんがあつて そのーじいさ
んが 山へ行つちやあ ほど掘つてきちやあ うりひめに 煮てくれつる
だつちゅうよ そうすりやあ うりひめは その はたー織つてるだつ
ちゅうわい ぎつちん ばつたん ぎつちん ばつたんつて はたー織つ

てるだつちゅうわい そうすりやあ その おじいさんが また その山
へ行つちやあ ほど掘つて来ちやあ煮てくれるだつちゅうわい

煮てくれりやあ 皮は皮の葉 実はみの葉ちやあ食うだつちゅうわい
それー食つちやあ はたー織つちやあいるだつちゅうわい

おばあさんとおじいさんなあ あんまりかわいいで その また ほ
ど掘つて来ちやあ 煮てくれるだつちゅうわい

そうすりやあ その皮は皮の葉 実はみの葉つちやあ食うだつちゅう
わい そうして また ほど掘りー行つて 山へ行つて 掘つてるうち

に その留守に こんだあ あまんじやくが来ただつちゅうわい

あまんじやくが来て うりひめ けえどの柿くんろつて言うだつちゅう
わい

おりやあ やだ それ くれりやあ おじいさんとおばあさんにやれ
るからつて 言うだつちゅうよ

あんじやあねえから まあ おれん くんろつちやあ その うりひ
めーそのだまかすだつちゅうわい

おらあやだ それー そのくれりやあ じいさん ばあさんにやれる
からつちやあ 言うだつちゅうわい それー その そうだらいいから

ちいつとんべえ 俺の指のへえるだけ開けてくんろつちやあ言うだつ
ちゅう

おじいさん おばあさんが山へいぐ時 かぎーかつといちやあいぐ
だつちゅうわい

あまんじやくは 指のへえるだけ開けてくんろつちやあ 言うだつ
ちゅうよ おらあやだ それー開けりやあ おじいさん おばあさんに
やれるからつちやあ 言うだつちゅうよ

少しいいから そうだら 頭のへえるつたけ開けてくんろつちやあ
言うだつちゆうよ

おらあやだ おじいさん おばあさんにやれるからつちやあ言うだつ
ちゆうよ

あんまりせめられるで なんねえで 少し開けてくれだつちゆうわい
そうしたら あまんじやくは 力があるから それーがらつと押し開

けただつちゆうわい

そうして その まあ うりひめ うりひめ けえどの柿くんろつて
えらいせめるだつちゆうわい

おらあやだ じいさん ばあさんにやれるからつて言うだつちゆうわ
い でまあ しかたねえ その 最後までにやあ その なんだかんだ

だまかされて くれるだつちゆうわい

でその くれて その うりひめは 下にいて さて そのあまん
じやくさん あまんじやくさん その まつといい柿を 俺に落として

くんろつて言うだつちゆうわい

そうしたりやあ ほーらよつて つばきー ひっかけちやあ落として
くれるだつちゆうよ

それで その まつといいのを 落としてくれつちやあ言うだつちゆ
うわい

そうじゃあ 鼻かんじゃあ おとしてくれるだつちゆうわい

そうしやあ 下にいて まつといいのを落としておくれちやあ 言う

だつちゆうよ

そうすりやあ けつーふいちやあ 落としてくれるだつちゆうわい

でまあ まつといいのを 落としてくんろつて 言うもんだから

しょうねえ そんなに食いたけりやあ にし その 木のぼつて その
もげつちやあ言うだつちゆうわい そうすりやあ おりやあ やだ じ
いさん ばあさんに こんな赤けえ着物を買っていたやつが汚れたり切
れたりするからつちやあ 言うだつちゆうわい

そうだら 俺がぼろと その とつけえべえちやあ 言うだつちゆう
わい

そうして その あまんじやくの汚ねえ着物をうりひめが着て うり
ひめの赤けえ着物をあまんじやくが着ただつちゆうわい

そうして うりひめが あまんじやくが また取つてくれねえとこへ
のぼつて取つてると あまんじやくが 縄ー持つて来て うりひめをし

ぱりつけただつちゆうわい

そうして あまんじやくは うちー来て はたー織つてるだつちゆう
わい そうして その じいさんとばあさんがけえつて来ただつちゆう

わい けえつて来て その うりひめ 今けえつて来たよつて 言った

だつちゆうわい

えつこ返事がねえだつちゆうわい
まあ こりやあ おらがうりひめは まあ きょうはどういう訳だが

なちやあ 言つただつちゆうよ
で まあ ほど掘つて煮てくれただつちゆうわい

皮ー かんたの薬 実は 耳の薬つちやあ 食つただつちゆうわい
で そのおかしいなあ おらがうりひめは こりやあ こんだあ 馬

鹿になつたちやあ 言うらしいよ

そのうちに うりひめが うりひめの のりかぐらへ あまんじやく
がのつたらばつて その さまどから 飛び出してつただつちゆうわい

して その 野郎 そのおかしいつて あの あまんじやくの
りかぐらへ うりひめがのつたらばつて けえどの柿の木の上を見ろと
かつて 飛び出していっただつちゆうわい

そして その 庭へ出て柿の木の上へ見たりやあ その うりひめー
それーしぱりつけといただつちゆうわい

さあて まあ じいさんとばあさんがその 刀で その えらい そ
のー 茅らー 追い歩つただつちゆうよ

そうしたりやあ 血んだら 真つ赤になつて その あまんじやくが
飛び歩つただつちゆうよ

それで その 茅のあふしの赤けえのは あまんじやくの血だつ
ちやあ おらが子どもの時は おさつただつたい

田の水かけ

語り 山本 勇平

収録 一九七一年一月二十二日

おじいさんとおばあさんがあつて おじいさんが その田の水かけに
いぐだつちゆうわい

そうしたりやあ その へびが そのうかえるを呑んでいるだつちゆ
うわい かえるを呑んでたやつを やれ離せ それ離せ 娘三人持つて
いるから どれでもくれるから 離してくんろつて 言つたらしいだあ
ねえ そうしたりやあ へびが それ 離れたちゆんだあねー

はあ まあ へびが離れたから はあ おじいさんは 娘のこんが心
配でうちへ来て寝ているだつちゆうわい そうすりやあ その一番でつ
けえ女の子が来て あれだつちゆうよ

おじいさん 何故寝てござる起きて 湯でも 茶でもあがらつ
しえーつて 言うだつちゆうわい

したりやあ その おじいさんな おりやあ 田の水かけへ行つた
りやあ そのへびがかえる呑んでいるから やれ離せ それ離せ 娘三
人持つてるから どれでもくれるから ぬしやあ いつてやつてくん

ねえかつて言つたらしいだあねー おれは へびのおかたなんざあ や
でがすすつて 一番でつけえ娘は ねつちまつたらしいだ

はあ まあ おじいさんは しかたあねえから なかなか そんな頭
やんで おきらねえで また 真ん中の娘が来ただつちゆうよ

おじいさん 起きて 湯でも茶でもあがらつしえーつて言うだつちゆ
うわい 飲みてえことも 食いてえこともねえが きんな田の水かけへ

行つたら へびがげえろを呑んでいたから やれ離せ それ離せ 娘三
人持つているから どれでもくれるから と言つたが にしは行つて

やつてくんねえかつて言うだつちゆうよ

おれは へびのかたになんざあ やでがんす ちやあ いぐだつちゆ
うわい まあ おじいさんは まあ よわらあ あと一人しかねえがど

うしたらいいがなつて言つて またいるだつちゆうわい そうして ま
あ一番ちつちえ娘が言つただつちゆうよ

おじいさん 起きて 湯でも茶でもあがらつしえつて 言うだつちゆ
うよ 何も飲みてえことも 食いてえこともねえが へびがげえろを呑
んでいるから その やれ離せ それ離せ 娘を三人持つているからく

れるつて言つたから ぬしが行つちやあくんねえかつて言つただつちゅうよ そりやあ おれがいぐから早く起きさつしえーつて言つただつちゅうよ まあ おじいさんは 喜んで起きただつちゅうよ そのかあし 針千本 ふくべ千本 その買つてきてくれりやあいぐつて言つただつちゅうわい

そのぐれえだら わつきやあねえつて そのいぐだつちゅうよ めためた めためた そのへびの後をくつついて おじいさんも途中までいぐだつちゅうよ

したりやあ 針売つてゐる店があつて 針千本買つて そのどこへだがなポケットへ入れていぐだつちゅうよ

めためた めためた行つたら こんだふくべ売つてる店があつたで ふくべ千本買つて そしていぐだつちゅうわい そして まあ そこで おじいさんはけえつてきて で まあ 娘は そのじやていの後をくつついていぐだつちゅうわい めためた めためた行つたりやあ でつてえ水たまりへ行つただつちゅうよ

さあここがおれがうちだから へえつてくんろつて言うらしいだ

おめえ先にへえつてくれつて言うだつちゅうよ

でまあ しかたねえ へびが先へへえつただつちゅう

へびが先にへえる その娘はへえる訳にやあいがねえから まず先に こりやあわしの贈り物だから 持つてつてくんろつちやあ ふくべ千本投げ込んだつちゅうわい へびは沈めべえとしてふくべに乗つかるだがボク ボクちやあ浮いてくる

そうしたりやあ これもわしの贈りもんだつちやあ 針千本投げ込んだつちゅうわい じやていは ふくべ沈めるつちやあ のたうち ぶ

くべはボク ボクつちやあ浮いてくる 針はおもてえから沈んできちやあ じやてえに刺さる

娘は親からいてきた贈りもんだから 残らず持つて行つてもらいてえちやあ言うだつちゅうわい

とうとうじやていは からだ中に針が刺さつて 動けなくなつただつちゅうわい

そうしたりやあ そのまま 水たまりに沈んじまつただつちゅうわい 娘はおかたが死んじまつたもんだから うちへけえつて来ただつちゅうわい

へっぴり嫁

語り 山本 さか(八〇歳)

収録 一九七〇年十月

お嫁さんもらつたら めたやせる

お嫁さんを息子のげへ もらつたらさ そしたら いくらご飯食べて

も めた小さくなる

はあ骨と皮ばつかになつちやつたつてね

お嫁さんがどうして まあ ご飯を食べるが あねえは そのやせるだつて聞いてみただつて しゅうとさんがね しゅうとばあさんが そ

したら へが出たくつて がまんしてるだつて

まあ へなんざあ ねえ こげえたんひりやあいい この世にへなん

ぞひらない人はいるもんじやあないから たくさんひつて そして ご飯をこんなに食べるんだから 今少し 太つてくれっていう訳で

そっじや ひつてもいいかいと こういう訳

いいつてさ へなんぞいくらひつたつていい みんなへなんぞひつてるだもの そしておばあさんが言つたつて

そしたら 始めただつて ブーブーブーブー そつで始めてね

おじいさんとおばあさんの はあ ひいろへ それ吹き上げて おば

あさんが まあねえ への口止めてくれ への口止めてくれつて そ

れえ言うだが いつこう 聞きやあしねえ ブーブーブーブーブーブーブーブーブーブ

のむしつこはねえそれ ひつただつてよ

あー あねえ頼む あねえ頼む まあ はあ ばあさんち しめえ

にや 落ちて来て それ あの上でねぎい一つか作つておいたが そ

れえつかまありやあ ねぎがこげ つかまありやあ ねぎがこげ ねぎ

が一つか ころお山にむしちまつた

どうしてんまあ あねえ止めてくれろ 止めてくれろ ばあさんちは

そこいらじゆう わあわあわあわあつて あれだつちゆうわい しめえ

に すーつと あたりやあ おばあさんとおじいさんの頭の毛へ おし

りの穴へみんなひつこんで おばあさんとおじいさん みんなはげつ

ちやつたつて そんな話しだつたんべや

おおぎ丸と木の葉姫

語り 山田 たま

収録 榎谷 明

あるところに、おじいさんとおばあさんがいて、仲よく暮しているんだけど子どもがなくなつてさ、で、子どもを育てるかわりに、毎朝鎮守様のお参りしちやあ、お掃除してたんだつて。

おじいさん、山へ柴刈りに行つたら大きい木の股に、男の子が生まれていたんだつてねえ。

それで家へ連れて来て育てて、そして、おばあさんは川へ洗濯に行つたら木の葉でこしらえた舟に女が乗つていて、それで、それ連れてきて二人仲良く育てていたんだつて。

それで、木の股から生まれたんだから、大木丸つちゆうにつけましょうつて、男の子の方を、大木丸つちゆうにつけて、木の葉でこしらえた舟に乗つていたんだから、木の葉姫つちゆうに、その女の子をつけましょうつて、そういつたつて。

それでそれ、大事に育てていたら大きくなって、今日は、二人で山遊びに行つて来るからつて、その子どもが出かけて、そして、山奥へめたへえつて行つて、道はずしつちまつて困ると思つてたずねていると、そこへ鬼ばあさんが出て来て、「今日は、えじきがいっつこう捜しあたらなかつたがよかった」つて、そのばあさんがいつたで、まあ、こう一所懸命逃げて、めためた奥へ逃げて、一心不乱になつて、かけ逃げて行つたんだつて。

そしたら、鬼ばあさんも一所懸命あとから追いかけて、今少しで追い

かけられるちゆうとこになったとこへ、大きな池のある所へ出たんだつて。

その池に、金魚だの、鯉だの泳いでいるで、そのおばあさんが、その水を飲むつて、そこへ転がり落ちて死んじまつてさあ、それで二人は助かったつて。

そして、あんまり奥へ逃げたもんだから、おじいさんとおばあさんがどんなにか心配しているでしょうけど、帰るに困るつて、二人して一所懸命道捜していると、そこへ神さんが出てきて、庖丁を女の子にくれて男の子には、弓矢をくれてね、そして「この細い道がここにあるから、これさえ持つてりやあ怖いことはないから、まっすぐ道をたどつて行くと、おじいさんとおばあさんのいる所へ出るから」つて、そういつて教えてくれたんだつて。

その道を帰つて来ると、おじいさんとおばあさんのいる庭へ出たんだつて。それでさあ、おじいさんとおばあさんを大切に、四人仲よく幸せに暮らしたつていう話だ。

木股丸と木の葉姫

語り 山本 栄
収録 梶谷 明

むかしむかしあるそうだ。

ある所に、おじいさんとおばあさんがあつたそうだ。

二人は子がなくて、毎日毎日、子どもを授けて欲しいつて神さんに祈りをこめて、ついつい白髪になつてしまつた。

それで、おじいさんが木の葉掃きに行つたら、その木の葉の中に女の赤ん坊がいて、それを拾つて来て、木の葉姫と名づけたそうだ。

今度は、そのあした、おばあさんがまた柴切りに行つたら、小さな木の股にや赤ん坊が登つていたそうだ。

それを連れて来て、大切に育てて、木股丸という名前をつけて育てたところが、だんだんと大きくなつて、もうそこら中遊びに歩くようになった。

それで、おじいさんとおばあさんは働きに出なければならぬので、「きょうは、五月の四日だから、鬼の来る日であるから、必ず遠くへ行つてはならない」つていつといつてまあ行つた。

そうしたところが、おつかないもの見たさで、鬼というものを見たいという気持ちで、二人、ついつい庭へ出たら、広々とした野原を果てしなく二人さまよい歩いた。

そうしたら大きな鬼が二匹やつて来て「これはよい御馳走が見つかったからいただこう」というので、追いかけて来た。

夢中になつて二人は、まあ逃げ出したところが、どうしてももう逃げきれなくなつて、草むらのしっけみ(茂み)の池のほとりい逃げて来てそうしたら足を取られてしまつて、二人が動けなくなつちまつた。

鬼がそこまでやつて来たところが、「ああいけない、こりやあわれわれの何よりの禁物の、蓬と菖蒲がある。こんな所へ入れば、私たちの体は溶けてしまうから、さあ逃げて行く」というので、鬼は、早速逃げて

行ってしまった。

それで兄妹は鬼のことを聞いて、鬼には蓬と菖蒲が何より毒だそうだからというので、それから五月四日には、菖蒲と蓬をお供えしたりそこらへしんぜる（供える）ようになったそうだ。

願ひの叶ひ玉

語り 山本 しめ

収録 梶谷 明

歳取りが来たが、歳取りの仕度もできねえ、なんもできねえで、歳神さんの棚下に寝ていたりやあ、「こりや、願うことの叶う玉だ」って、パンパランて頭もとへ豆太鼓でえこが落ちたつて。

こりやあまあよかつた。ええ物を授かつた。願うことの叶う玉だつちゅうから、また一つ、大尽でえじんの嫁の鼻の長くなるようにポンポンちやあ、その太鼓を叩いたりやあ、嫁御の鼻がえらい長くなつて「なあにこりやあ困った。鼻が長くなつて、こんなこまるこたあねえ」と思つて、まあ大尽だから、まあええお医者さんを頼み、占をみている人を頼みしていただ。

豆太鼓で鼻あ長くしたことだから、占になつて出かけたりやあ「あんなおかしな仕度うして、粗末な。まつとええを頼んでせえ直らねえだもの。まあとても直るつちゅうところへいぐめえが、それでん、あきらめのために頼んでみるか」つて、その占のじいさんを頼んだだそうだ。そ

の人は、てめえで長くしただこつだから、「あの嫁御の鼻の短くなるように」つちやあ、ポンポンて太鼓を叩いたりやあ、鼻がツーツちやあ短くなるつて。

まあ家の衆が喜びで、ああええ、占もお医者もすきな何う頼んだだが、まあ良かった。その人が二度ばかり拝んだりやあ、もとのぶんになった。はあそれでその人は、願うことの叶う玉で、金たんとして、それが正直なじいさんで、そういう恵みが来ただつて。

鳥吞爺

語り 山本貞次郎

収録 梶谷 明

むかしむかしある所におじいとおばあさんと、大変畑たくさん持つてゐるじいばあ暮らしのおじいさんおばあさんがあつたつて。

畑がたくさんあるもんだから、毎日毎日畑ふんだりさくかいたり（畦を作つたり）、耕作したりやつていたが、ちようど春先で、畑ふまなけりやあ春物をしつけられねえんで、それでまあ、毎日毎日畑ふみながら、「どうもおばあ、畑ふむなあ骨が折れてならねえから、きようは黍きみのぼた餅でんこしらえねえかえ」つたら、「そうかいおじい、そいじやあわけねえことだから、黍のぼた餅たくさんこしらえるから、しよつてつてまあ、一生懸命ふんでおくれ」つちゅうわけだ。

それでまあ、おじいさんは黍のぼた餅たくさんしよつてまあ畑ふみに

出かけて行つて、一生懸命えんが（足でふむ鋤状の物）で畑ふんでたら、十時頃になつたりやあ、どうも畑ふみやあ疲れてなんねえから、きの芝生へ腰かけて、それからまあえんが、畑の中へ、ふみかけのそこへおつ立つて、そうしてかたわらの芝生に休んで、じつと休んでたら、そうして休んでひとつきり休んで、おじいさんのことだから、トロトロとして目が覚めて見たりやあ、えんがの棒の先に、それはそれはきれいな鳥がいちゃあ、小せえ鳥が来て止まった。「はあてなあ、立派な鳥だな。あれ捕まえておばあに見せてえ」と思つて、それはそれは立派な鳥だて、眺めていたが、なんとも、それとる方法はねえ。

ようし、こりや思いついたことがある。きようは、おばあにぼた餅をこしらえさせておいたから、それまあ、一つそうと袋から取り出して、小豆がついているもんだから、それまあ粘らせさせにやあなんねえから、みんな小豆うむぎ落として、それから手で一生懸命つばぎをつけて、こねて、それからその鳥いめがけて、おじいさんが鳥を欲しさに、えんがの先の鳥のげえ、ペタリぶつつけた。

そうしたりや、ええ案配にそれが当たつて、ぼた餅がねばるもんだから、ポトポトポトとその畑の下へ落ちたわけ。おじいさんは、手早くその鳥う捕まえて、それからまあ、もと休んでた所へ来た。鳥う捕まえただ。ぼた餅が、鳥の羽へぶつつきたいせい（勢い）でたかつている（くつついている）から、それどうでもなめてくれたりなせてくれたりして、ぼた餅みなとつたつて。そうしてそのぼた餅がくつついているもんだから、羽なめてくれたりや、小せえきれいな鳥だもんだから、ヒョッコリと口の中へと飛び込んだじまつた。

さあ、こりやまあ大変なことができたもんだ。困つたことができた。

まあ、モゾモゾモゾとこう、喉の下、鳥が下がって走らつて。胃袋の中へモゾモゾ下がつたらしい。それでまあ、おじいさんもんでみたり、どうしたり、医者へ行かなけりやあなんねえから、畑ふみどこじやあねえ。家い帰つて、お医者さんへ行つて、鳥う取つてもらわなけりやあなんねえ。そしてまあいたら、なんとも痛くもねえし、かゆくもねえし、苦しくもねえ。おかしい。

その内に、鳥がムズムズムズとこうすると思つて、臍の穴、こう着物を分けてみたりやあ、臍の穴から、鳥の足が一つはみ出したつて。鳥が足一つ。こらまあ、これひとつ足うつかまえて、ここからひとつずり出しべえと思つて、おじいさん臍を広げて出した。初めのうちやあしつた切りやあ（途中で切つたら）、なおあとへ残るから、困るから、まあそうと、まあ片足う引いてみたつて。

そうしたりやあ、それはいい声で腹の中で
 キミノゴイワイゴヨノサカズキオチャピンチャンプー
 つてこう腹ん中で鳥が鳴く。変なことができたもんだ。家へ帰つておばあに話して、まあお医者に行かなけりやあなんねえぞ。まあ二回ばかりいじめたが、

ゴヨウノサカズキオチャピンチャンプー

いつこうそれで腹が苦しくねえから、それから家い帰つて、こいうわけだつておばあに話したりや、おばあ「そりやあ、おじいさん少し運が向いただよ」「運が向いたつて馬鹿な。腹の中へ鳥がへえつて、こりやあとても駄目だ」「いやそうでねえだよ。そうだら、おじいさんの、足う引いた時にやあ、キミノゴイワイゴヨウノサカズキオチャピンチャンプーつて鳴るだから、それがまあおらが家い運が向いただから、屁つぴりじいに行つちやあどうだい。苦しくねえだから」。

「それもよかんべえ」ちゅうわけで、それからそのあした着物着てえて、おじいさんが弁当しよつて、だんだんだん長野原から中山道、お代官だいかんさんの通る通りに出て、杖など突いて「屁つぴりじじいが参つた」つちやあ、「屁つぴりじじいが参つた」つちや、杖でも突いてたりや、「無礼なじじいがそこへ通りかかったから、そんなものかたづけろ」つていつたりや、さすがのお代官が、「いやそうでない。おもしれえことをいうおじいだ。その屁をひらせてみる」。

そのお代官さんのいいつけで、それでまあ供の者も仕方ねえ「じゃあその屁ひつてみる。おめえ、どんな屁がひれるか」つて。「ハイハイ」つていつたけど、「屁はひるけど、蒲団を三げん敷いてもらわなけりやあ、いささかひれる屁でねえから」「ああ、やつけえなじじいが来たもんだ」ちようど村屋であつたから、「村の庄屋さんから、蒲団の三げん芝生の上に蒲団を敷いたりやあ、「どっこいしょ」つておじいさん杖をかたわらに置いて、そこに座りこんだ。

それからまあ、この鳥の足を引いたのがわかつちやなんねえから、昔あ半纏あわせのような裕あわせのような物を着てえたから、手をこう、臍へそのところへこうやつて、そしてまあ「早くひらないか」つちや「はい、ただ今ひりますから」それからまあ、そうと臍へそのところへ手をやつて、鳥の足う引いたりやあ

キミノゴイワイゴヨノサカズキオチャピンチャンプーつて。

「うまいおじいだ。さすがにどうも立派な屁だ」それからまあ、二、三回お代官さんが繰り返させちやあ、「まことに立派な屁をひつたもんだ。褒美とらせるから」金を、大褒美の金を貰つて、それからまあ、家い帰つて来て、ばあさんにそのことを話したら、そうしたら、昔あ銭

箱つちゅうがあつてき、お代官さんに貰つた金、持つて来て、チャラチャラつと銭箱へはたいたりやあ、隣のおじいさんが聞きつけて来たつて。

「隣じゃあ、なに金儲けしたや。きのうはまあ、おそろしい、チャラチャラ銭箱へお金ほたいたようだが」「いや、なんでも別なことじゃあねえが屁つぴりじじいに行つて来たりやあ、お代官さんが、ちようどいい案配に通りかかつて、屁をひつてみるつて屁ひつたりやあ、妙なおじいだつて褒美の金たくさん貰つて、一生これで、じじいばあで暮らして出られるでよかつた」ついたら「そうかい。それじゃ俺もまあ行つてみてえが、そりやどうやつたらいいだ」「ふん、そんなことあわけねえだよ。へっぴりアカザをうんと煮て、そうしてそれさらして、あく抜いて、味噌をかつくねて、それ食べて、それ腹いっぺえ食べてそうして行きやあ、そりやあ、立派な屁がブーブーブーブーつて出るから、そうしておめえも金儲けしてこよう」つた。

そうしたら、悪い隣のおじいさんのことだから、いいことを聞いたつちゅうわけで、「おばあ、こういうわけだ」「それやあおじいわけあねえ」じじい、ばああで、日んがら一日（一日中）へっぴりアカザ集めて来て、茹でて、そうしてまあ水出しにして、じいさん食べるの食べるの、そりやあまあ、大褒食べたたら、まるで腹も身もふくれるほど食べたたら、「まあこのへんでよかあねえかね。あしたあ屁へそびりじじいに行くだから」つちゅうわけで、杖んぼ突いて弁当しよつて出たが、腹が苦しくて、いつこう、へっぴりアカザうんと食つたもんだから、どう仕様もねえ。

それからまあ、「屁つぴりじじいが参つた。屁つぴりじじいが参つた」つちや、そうしたりや、又、お代官が通りかかった。「また前の屁のような屁つぴりじじいが、変わった屁ひるだんべえから、ひらせてみる」つ

ちゅうわけで、そしたりや、やつぱりそのおじいも教わつてたもんだから「蒲団の三げんひいてもらわねえじゃひれねえから」「よし、ひいてやれ」それでまあ、三げんひいたら「まだその上毛氈を、新しいのを二枚ひいてもらわねえやあ、ひれねえから」「まあ、やつかいなおじいだなあ、今度のが」それでまあ、芝生へそれをひかせて、「早くひれ」つていわれて「ハイハイハイ」つて返事して、毛氈の蒲団の三げんひいたのに、どつかりそこへ。まあ腹が苦しくて、いつこうどう仕様もねえ。

そこへまあ座り込んで「早くひらないか」「ハイハイ、ただ今ひりますから」つて、そうしたりやあ、そのおじいが「ウーンウーン」ちゅう内にグアーと音がしと思つたりや、うんこひり出した。「ああ、このふてえじじいが。こんな者、そこへずり落とせ」つちゅうわけで、お供の者が、その下の、道下へずり落とした。

はたかれたり、やくざじじいだつて、まるで裸にされて、血んどろが(血みどろ)にされて、それで仕方ねえから、おじいさんは泣き泣き、顔も何も血んどろちがに、お供の者に棒ではたかれたりして、そうして帰つて来て、おばあに見える向こうの尾根へ来たりやあ、おばあは「まあよかつた。おじいが尻つぴりじじいに行つて、向こうの尾根へ、まるで着物かなんか着替えさせてもらつて真つ赤になつて帰つて来たよう、まあ良かった」ちゅうわけで、おばあは、お金大変しよつて来たからつて、てめえの着ていたボロも何もぶつこめて、竈へぶつこめて、裸になつていたつて。

来てみりやあ、「おばあ、こんな目にあつて、まあ本当ひどい目にあつ

た。お代官さんにひつぱたかれて、この始末だ」つちゅうわけで、悪いおじいさんは、何も成就しねえだ。こんなような話だ。

猿地蔵

語り 山本 さか
収録 梶谷 明

むかし、おじいさんとおばあさんがいて、正直で、二人で銭きょうとつてくりやあ、きょう食べちまつちゃあ、また明日、ボヤ(薪)でも切つて来ちゃあ、宿屋へでも持つて来ちゃあ、きょうのがああきょう食べちまつちゃあ、また明日。

それでまあ、おじいさんあんまり毎日それしたから、眠つたくなつて、ままつこ(道、畑、田のきわの土手)に寝ていただつて。

そしたら、お猿が二つつ来て、先い来たお猿さんが「あれ良かった、地蔵さん、おらめつけた」つて、こういうわけで、「そうかまあ、そりやよかつた。あの向こうの岩へ持つてつて祀るべえや」つて、こういに(こいうふう)に一人の人がいつたつてねえ。そうしたらその「それじゃあまあ、担つてく(背負つて行く)べえや。川で漏らしちゃあなんねえ。川越さなけりやあ、いい岩がねえだから」つちゅうわけ。

それから、まあ二人で、頭取る人に足う取る人にして、川あ「猿つぱぐりやあ(罌丸は)濡れてもええ、地蔵つぱぐりやあ濡れちゃあなんねえ」それ言いしな、向こうの岩に、いい、雨の降らねえようになった岩屋が

おつ立つてる、いいとこがあったで、「ここへ祀るべえや」つちゆうわ
 けで、そこへおじいさん連れてつておつ立てて、そうしておいて、お金
 いっぱえひんぜて(供えて)おいただつて。そして拝んで出て走つたつて。

それで、おじいさんはまあ、拝むがおかしいが笑えもしねえで、その
 お金、猿が走つたから弁当の袋へみんな詰め込んで、家へしよつて来て、
 「おばあさん、きようはボヤ切りどころじゃあねえ。儲けたんなんの。
 疲れたから寝ていたりやあ、猿が二つつ来て、俺、川、担え越して「猿つ
 ぺぐりやあ濡れてんええ、地蔵つぺぐりやあ濡れちやあなんねえ」つて
 歌、いいしな(言いながら)、俺、上の岩屋へ持つてつて祀つたが、俺、
 黙つて笑えもしねえ、こうしていたりやあ、お金いっぺえひんぜて置い
 てつたから、それ貰つて来て、きようは儲けたから、お金の箱ん中へ入
 れべえ」つちゆうわで、お金の箱へはたいて「はあ、これで何をしな
 くても歳も取れるしするから、これでいいや」つちゆうわでいた。
 そうしたら、隣の欲の深いじいさんの、何でもしねえでいる変なじい
 さんが来て、「何うしている、おめえなんざ金儲けした。今、えらい音
 がしたが」つちゆうわで来て、「おらこういいうわけで、ボヤばかり切つ
 て来ちやあ、売つちやあなんしたが、とても疲れて寝ていたら、猿が来
 て、おら担つてつて、地蔵さんだつて祀つてひんぜてくれたから、それ
 持つて、おりや帰つて、銭箱ん中へ入れたとこだ」つて、そういつただつ
 て。「ようし、あした俺もまあそこへ行つてみべえ」。

それから弁当しよつて、ボヤ切りに行つて、ボヤなんぞ切りやあしね
 え、そこへ行つて寝ていたりやあ、又猿が来て、「あれ、きのうも地蔵
 さんがいたつたが、きようも又一つ転んで。これもまあ祀るべえや」つ
 て、そういう音がしただつて。こりやあまあ、大丈夫だと思つてまあそ

のおじいさんが寝ていただつて。

そうしてまあ「猿つぺぐりやあ濡れてもいい地蔵つぺぐりやあぬれ
 ちやあなんねえ」つていいしな、川を連れ越しただつて。おじいさんな、
 川の真ん中頃行つたりやあ、おかしくておかしくて、とてもなんねえ(が
 まん出来ない)、笑え出しただつてよ。「こんなもの(もの)地蔵すらあ
 りやあしねえ。どこのか、ほのくれじいだんべ」つと思つて川の中へ、
 うんとしよ(うんとこしよつと)ぶん投げただつて。

ああそれで、着物はひとつくされになる、怪我はする、おじいさんな、
 ようよう家うち、よろよろんなつて帰つて来たりやあ、おばあさんな家で「お
 じいさんな、きようは、お金得てくるから、あんなぼろの着物なんぞ、
 はあ邪魔になるから、お金出して良いのを買つて、二人で着べえ」なん
 と思つて、籠かまへくべて、家のぼろをみんな燃やしちやつたつて。おじい
 さんの着換えかえを。そしたら、ところがおじいさんはひとつくされになつ
 て、その怪我はしてくる、着る物はなし、まあずひどいめにあつただつて。

だから人の真似はしてはいけねえやつて。そういうお話だ。
 話者は、この話を「地蔵つぺのこ」とよんでいる。

猿地蔵

語り 山本 勇平
 収録 柗谷 明

むかしむかしあるげだ。

おじいさんは山へ柴刈りに行つたげだ。柴刈りに行つてお昼になつたから、お弁当食つて、昼寝していたりや、猿が来て、良い地蔵見つけたつて、しよつてつてその川を越すだつちゆうよ。

子どもがいつぺえ見ていて、「地蔵つべぐり（罌丸）は濡れんな、猿つべぐりは濡れてもいい」いうだつちや。じいさんな、猿の背中ではよわせてえて、おもしれえだがいつこう悪いような氣して、じつと座つていりやあ、子どもがいつぺえ見ていちゃあその、「猿つべぐりは濡れていい、地蔵つべぐりは濡れんな」つちやあいうだつちや。

そうして川しよつ越して、向こうのでつけえ石の上へおじいさんのつけて、お金いつぺえひんげといて、猿がどつか行つた留守におじいさんが、その金みんなさらつて来て、家へ持つて来て、錢箱の中にジャラジャラつて入れただつちゆう。

そしたら隣の欲深じいさんが来て、「お前んとこ何しとるんだ。そんな金儲けして」つたら、「きのうなあ、畑ふみ行つて、畑の上で昼寝していたら、猿が来てしよつてつたから、その留守に金取つて逃げて来ちやつた」「おらもしてみるべえ」つてで、まあ、「おばあさん、弁当つくつてくだされ」つて弁当作つて、畑ふみに行つて畑ふんで、お昼になつたから寝ていただつちゆう。

又、猿が来て、「こりやあまあ、又良い地蔵さん見つけた」つて猿がしよつてつただつちゆうよ。しよつてつてまあ、ままた（崖下）みてえよいうな所へしよつてつてその、子どもがいつぺえ遊んでるとこへ、猿がしよいかけただつちゆうよ。

そして、また、川へしよいかけて、「猿つべぐりは濡れてんいい、地蔵つべぐりは濡れんな」つて子どもがいうだつちや。そうすりやあ、おじ

いさん猿の背中で、おかしくて、おかしくて、どう仕様もねえつちや。子どもが又「猿つべぐりは濡れてんいい、地蔵つべぐりは濡れんな」つていうから、猿の背中で、クスクス笑つただ。そうしたりや、「こんにやろ、じじいめ」つて川の中落とされただつちゆう。おじいさんまあ、いつこう流れてて、誰も助けてくれねえだつちゆう。その内に、遠くに流れてつちまつたつて。

はあ終わり

長者になる話

語り 山本 勇平

収録 柘谷 明

むかしむかしあるげだ。おじいとおばあさんがあるげだ。

村屋が三軒あるげだ。お正月が来たが、両側のしょう（人）は大尽でえじんで真ん中のしょうは貧乏だけだ。両側のしょうは正月が来たら、魚だあ、みかんだつちゆう買つて、良い歳取るだが、真ん中のしょうは、いい歳が取れねえで仕方がねえ。

昔あ、囲炉裏つちゆうのがあつて、囲炉裏回るだつちゆう。「あとさき、すつつべて、中ほつくりすつぺんたん」て、囲炉裏回つただつちゆう。そしちやあ、おじいさんとおばあさんが「あとさき、すつつべて、中ほつくりすつぺんたん」ちや回りやあ。両側のしょうが、「まあ、真ん中のしょうは、あんなことをいつて回つてなんねえ、おらがまあ、いろいろくれ

べえ」ってみかんなくなるの人に、米くれる人に、魚くれる人にしたりやあ、真ん中の人あ間もねえ内に、大尽になって、両側のしょうが貧乏になった。

まあそれつきり。

米ぼこ糠ぼこ

語り 中村 ゆき
収録 征谷 明

むかしむかしあるそうだ。

米ぼこ糠ぼことあつて、おつかさんに稲穂拾いに行つて来うつて言われて、米ぼこは下のある籠しったを預つて、二人で行つて、それでいつくら一所懸命拾つても、糠ぼこの方はいつべえにならねえ。米ぼこの方はたちまちいつぱいになつて、「おらいつべえになつたから、糠ぼこ、おら家行くぞ」つてゆつたら、「ああそうか、おめえはいつべえになつたら、はあ行つとくれ。おらまだいつこういつべえにならねえから、行けねえから」つて糠ぼこがいつたつて。

それではあ、暗くなつてしまつて、困つて向こうの方見たら、向こうの山で明かりがするで、そこへ糠ぼこあ尋ねて行つてみたら、白髪のおばあさんが一人でいるで「今晚は、暗くなつて困るが、是非、今夜俺一晚泊めてくんねえかい」つて言つたら、「ああ泊まってもいいけど、俺がとこへ、今夜丁半ぶちが来るから困るが、それでもまあ、何とかす

るだから泊まれ」つてそういつて言われて、泊めてもらつて、「それじゃあ、早くお夕飯を食べて、俺のお尻におつついて寝てろ」つてゆつたつて。そうしたら丁半ぶちが、鬼が丁半ぶちに、えらい大勢来て「おばあさん、今夜人つくせえじゃねえかい」つていうから、「なあに、人もなにもいやしねえが、俺が尻けつにネブツができてるから、それのにおいだ」つて、そう言つておばあさんが言つただと。「ああそうか、そうだらいいが」つてゆつて、えらい丁半ぶちして、そうして夜が明けたで、おばあさんに金うんとくれといつて、鬼が出走る。

それで、糠ぼこもおばあさんが、朝「はあ、これでまた鬼が行つたから、早くおめえらも家い帰つて、俺がそのかわり良い物をくれるから、延命小袋と打出の槌とくれるから、それで鬼が行き会つたら、この延命小袋をかぶつて、ままた（崖下）転がれ」つてそういう、「それで家い行つて、なんか欲しいもんがあつたら、この槌で、欲しい物を、何でもこの槌で叩くと出るから、叩き出せ」つてそういつていわれて、そのおばあさんに貫つて出たら、途中で鬼が会つたで、その延命小袋をかぶつて、ままた下へゴロゴロツと転がつたら、鬼が「あはは、沓つきれ（馬の沓）が転がつてるなあ」そういつて行つただつて。

それでまあ、そこで又家うちいそれからまあ上がつて帰つて来たら、そうしたら、今度こんだ途中来たら、米ぼこなんぞが芝居見に行くだつて。いい仕度して、みんな「糠ぼこなんぞ、今頃帰つて来たんか。おらあ芝居見に行くだぞ」こういうにゆつて、途中であつたつてさあ。「そうかい、いなあ」つていつて、家い帰つて来たら、おつかさんが「糠ぼこ、今頃来たんか、おめえはまあ、これから唐臼で麦でも搗け」つて、こう言われて、「はい」つていつて、麦いくらこうカツカンカン足で踏んで搗い

たけれど、いくら搗いても搗いても皮がむけねえんで、それでまあ「人が芝居見に行ったのに、麦搗くにつれえ」と思つて、泣きながら行つちやあ、搔かまわしたつちゆう。

涙が三つ粒ほどへえつたつちゆう。そうしたら、麦が三粒皮がむけたつてさあ。こりやあまあ、水入れて搗いたらむけるかと思つて、水入れて搗いてみただつてよ。そうしたら、皮がきれいにむけたんだつて。

それから、まあ良かったと思つて、水入れて搗いて、干しといて、今度打出の槌で「七重ねの小袖出ろ」つて叩いたら、いい七重ねの小袖が出たから、今度、「白馬に乗り鞍出ろ」つて叩いたら、白馬に乗り鞍が出て、それで「十七、八の若衆出ろ」つて叩いたら、若いもんが出て、小袖着て、白馬に乗つて、それに馬方してもらつて、芝居見に行つたんだつてさあ。

そうしたら、まず芝居見る人はねえ、まあ糠ぼこばかり見て、みんな、糠ぼこがまあえらい小袖着て、白馬に乗つて来たつて、みんなが見てみて、まあ、ほんとにえらい評判になつちまつて、それで人より先い家うちい帰つて来て、コセコセしていたつてさ。

そうしたら、ごうぎな（大変な）評判になつちまつて「ぜひ糠ぼこさんを嫁に貰いてえ」「糠ぼこさんを嫁に貰いてえ」つて来たんで、そうしたら家のおつかさんは「糠ぼこじゃねえ、米ぼこをくれるから、連れてつとくれ、米ぼこをくれるから連れてつとくれ」つちゆうが、「いや糠ぼこをくれ、糠ぼこをくれ」つて、みんな糠ぼこを貰いに来て、継つ子で、ひどい目にあつたけれども、またそれが、そういう難儀したのがあたりになつて、先さきい、いい所へ嫁に行けたつて。

大ごとをしての末にやあ、そういう良いことになるからつて、昔聞いたんだけえど。

金を放る馬（名馬の駒）

語り 山本貞次郎

収録 椋谷 明

むかしある所に、おじいさんとおばあさんが二人暮らしていた。

おじいさんは本当、正直な人で、どうもあんまり豊かな暮らしもできねえでいるような始末で、毎日入山の産物を少ししよつてつて売つて来たり、そんなようなことであるような、えらい豊かな暮らしができねえでいた。

それからまあ、暮れもさしつまつてくるし、米もどうも買えねえ、お棚飾りも、その他いろいろ金があるだがどうも買えねえ、どうも仕様がねえで、それでも暮れの二十七、八日頃になつて、入山の産物、うんとひとしよいしよつて、まあ商いに行つて来る。

前めえの川まで帰つて来たたら、どうもそれが、それしよつてたら、もとが出るもんだから、その、うまく売れねえから、どうも利益がたんとねえで、ただ串柿う、昔のこんで一把といか二把ばかりと交換して、前の川まで来た所が、どうもこんな物をこればかり持つてつても、おばあさんと米買つて歳う取る楽しみもつまらねえ、こんな物あ、橋の上から、「川のものさいば（歳暮）だ」つていいいな、いかと串柿を川へぶん投げちまつた。

そうしてまあ、からつけつて、しよいこしよつて帰つて来たたら、川原のこつちの橋ばまで来たりやあ、それはそれは立派な娘が、一人かたわらに腰掛けて、「先ほどあありがとうございました。大変な御馳走のお

土産頂いて」「いや、俺あ何でも、お前に上げたおぼえはねえか」ってゆつたら、「いや串柿といか頂いて、本当にありがたかった。お札を何か、おらあ家行つて差し上げてえから、是非行んでくれねえか」って。

「おらあ、あさつては歳取りだから、とてもあんたんとこへ行つてる間はねえから、行かねえから」つたら、「いやそりゃあ、あんたのその不自由なこたあさせねえ、お札をして帰つても連れてえだから」って、「おぼあさんの、ちゃんと歳の取れるように、お札としてえと思うから、是非、行んでくれねえか」って。「そうだから行つてみべえ」ちゅうわけで、おじいさん行つたりや、「その橋の上まで行んで下さい」それから、昔は小せえ橋だつたけど、そこまで行つたりやあ「目をおじいさんつぶつてくんねえか」「ああそうか」っていいいな、目をつぶつてそうしていたら、娘が「ちよつと、私におぶさつて下さい」って、立派な娘の上にはぼろを着たおじいさんが、言われるままに目えつぶつて肩の方から、つかまつておぶさつた。そうしたら、その娘が川の淵の中へしよいこんで行ぐらしく参るけど、どうも別に濡れもしねえ。

しばらく、どうもしよいこんで走つたような気がして、「さあこれで私の門口に着いたから、目を開けて下さい」そうして目を開けてみたりやあ、それはそれは立派な、それこそ、童宮の乙姫様ちゆうだかなんちゆうだか、立派な御殿へ連れ込まれて、そしてまあ、きれいな室に連れ込まれて、御馳走ごちそうをもらつたり、いろいろ御馳走になつて、そうしてまあ暮だから、帰かえらなけりやあなんねえから、「帰しても連れてえ」「そうだからその、長くいることはできねえだしすりゃあ、帰つてもろうから、おぼあさんも、さぞかし待つてることだろうから、帰つてもろうから、そいじゃあ、これお土産に何も差し上げるこたあできねえが、こ

れ一つ持つてつてくんねえか」。

そりゃあその、絹のふくきに包んだ、きれいな小さい手箱一つ貰つて「これくるまつてるから、あんたこれ家行つて、ほかのもんにはあ見せてなんねえし、奥へしまつといて、金の欲しいだけ、その、こういにな馬の駒つて引出が二つあるから、こつちに小せえ駒が入いつてるし、こつちの引出に、くれるお米が入つてるから、そりゃ別なお米だから、あんたよりはるかにやあ、開けちやあいけねえから、金の用な時あそれそのお米くれて、そうして金放ひらせて、そうして使えば、一生さしつかえねえから」。

さあ、おじいさん喜んで、こりゃあまあ良かったと思つて、それ貰つたのを風呂敷いくるんで、抱いて「さあ目をまたつぶつとくれ」って。それでまあ目つぶつて、きれいな娘のげ、おぶさつて、そうして「しばらく目を閉じて下さい」ちゅうで、しばらくそれ抱いて、こういたら「さあいいから、目え開けて下さい」ついたら、先の通りの前の坂へ来てる。

「それじゃあ、これでお別れするから」それでまあ手箱を貰つて来て、家うちい持つて来て、まあず嬉しくて嬉しくてたまらねえ。おじいさんそれから、奥り(奥まつた)の貧乏屋だから、「おぼあ、今帰つて来たよ」つていう。「ああそうかい。今か。何か歳取りの仕度ができたかな」「ああできるよ、大丈夫だから、あしたうんと買つて来るから」それでまあ黙あつて、それからおぼあにやあ言わずに、そして奥の押入へ入れておいた。

おぼあが外へ出た時、その言われたままに米一粒くれたら、チャランて、その小判を生んだ。二粒くれてみたりやあ、二つチャランチャランとこう生んだ。「まあこりゃあ良かったなあ。どんな歳でも取れる」と思つて、昔のことだから、小判も三、四枚生ませて、それから歳取り仕

度をして、いい歳を取つて、そうしていたりやあ、どうもおばあが不思議に思つて、おらがおじいさん、押入へえつてきちあ、金持ち出して来るようだが、まあどうゆうわけだと思つて、一つおじいさんのいねえ時、押入開けてみべえと思つて、おばあ、おじいさんが薪切りに行つた留守に、押入れ開けてみたりやあ、それはそれは、立派な手箱がある。

「これだ。こりやあどうゆうわけか」と思つて、引出う一つ引き出してみたりやあ、ヒヒヒヒンて小せえ駒が鳴いてる。それでこつちの方は、引き出してみりやあ、きれいな米が入つてる。これくれるにちげえねえと思つたから、お米一粒持つてつてその駒にくれたりやあ、駒がチャランて小判一つ生んだ。こりやあまあいいことを何した。おじいさんの留守に、五、六枚生ませて、五、六枚も十枚もたくさん生ませて、わからねえように、米はこんなに入つてるんだから、そうして俺はしまつとくべえと思つておばあ、こんだあ三つも四つもくれてみりやあチャラン、チャラン、チャランとこう生んむ。

さあ、おばあ欲が出たこんだ。その米一つかみ、こうしてつかんで駒にやつたら、駒がムリムリムリムリてえ食べてた。さあその内に、チャランチャランチャランチャラン引出ん中へ生んでたら、さあ、うんとくれたもんだから、駒がいせいづいて（勢いづいて）引出からとび出したつて。

さあ、家うち中へチャランチャラン駒が小判生みながらとび出したら、おばあは小判が拾ひえてえし、駒がとび出したのが困るで、それえつかまえて、引出い入れとかなけりやあ、おじいさんに叱られるからと思つて、一所懸命に何したら、さあ止めるどこじやあねえ、駒が強くて、チャランチャラン小判を生みながら、庭へとび出しちまつた。さあ困つてその後を追つて、小判を拾えながら後を追うだけど、それがその後を追う間

がねえ。

そうして、とうとうおばあさんは、メタメタあとを追つてたけえど、佐渡の金山かなやまへとんでつちまつた。それひりながら、それで、佐渡の金山が今にもつて金が出た。

こんなような話だ。

食わず女房

語り 山本 さか
収録 梶谷 明

一人つきりのおじいさんが、いいかげん年取つたつて、嫁は、女房は、御飯食べねえようなが欲しいだから、なくて、どこを捜してもなかつて、でいいかん六十にも七十にもなるけど、一人でいただつちゆうわい。そうしたらねえ「わたしが、飯ういつこう食べずに働くから、置いてもれえてえ」つて立派な娘が来ただつてよ。「そうだからいい。御飯を食べねえだら、いとくれ」つちゆうわいで、置いただつちゆう。

そして毎日山へ行つちやあ、留守になると釜で煮ちやあ、御飯を杓子ですくつちやあ、食べただつて。それまあ近所のしよう（人）が畑行つたら、えらい籠かまでボヤボヤ火が燃えてる。何にも食べねえだつちゆうから、火なん燃やすわけあねえがと思つて、壁のすき間からそうつと百姓してる人が覗いて見ただちゆう。そしたら釜ガラガラ煮たつて、お米サンサン入れて、お釜でいっぺえ煮て、杓子でペカンペカン食べたちゆ

うよ。

おじいさんな、飯う食わねえ嫁欲しいなんつって、貰ったなんつうが、それどこじゃねえ、人並じゃあありやしねえ、まるで杓子で食べたなんつって、行つて聞かせべえと思つて、聞かせえ来ただちちゆうねえ。

「おめえ、御飯食べねえ嫁貰ったなんて、とんでもねえ話だ。一年も普通の人の食うほど食うよ」「そんなことがあるもんじゃねえ。俺の嬢（かみ）なんか、御飯なんか食べるもんか」つていつこう承知しねえだつて。

それでまあ「今度山へ行くからつてゆつて、おめえは隠れていて見りやあいいやさあ」つて、そう言つてその人がゆつて、承知ができねかつたらつていうで、それでまあ「そんでんまあ、そうしてみべえ、そんなことあねえけども、そうしてみべえ」と思つて、「山へきようも行つて来るぞ」つて弁当しよい出して行つて、裏の、昔だから壁が落ちたようになつてるから、そのすき間からじつと覗いて見ていたりやあ、なるほど、竈（かま）へ火が焚きつけるから、見ていたりやあ、米洗わずに上から一斗缶で持つて来て、ザンザンザンてぶちまけて、そうして煮えたと思つたら、杓子で釜からペカンペカン。

こりやまあとても置けねえ。帰つて来て「おめえはまあ、御飯を食べねえちゆうわけで貰つたが、食べねえどこじゃねえ。きよう見たりやあ、釜で炊いて一ペンに杓子で食べてたから、おりやあ、そういう人はとても置くことあできねえから、行つてもれええ」つてそういつた。

そうしたら「行くつてわけあねえから、立白（うす）一つ貰えてえ」つていうわけで、「じゃあ立白ぐれえわけあねえから、しよつてきやあいい」ちゆうわけで、おじいさんが立白出して、しよいこのげえゆつつけて、「うしろの方へおめえがいて、俺が、はいつてゆつたら起こしとくれ」つて、

そういつたつて。「わけあねえ。起こしてやるさ」つて。後ろの方へまわつててえて、それから女がしようから、アイツてゆつたら、オイツつてゆつたら、ヒョッコラシヨ立白の上へ載せて、ヒョカヒョカしよつてつただつて、おじいさん載せて。

そして、いいかん淵の際へ行つたりやあ、「生魚（なまぎかな）取つて来たぞ。早く迎えに出ろ、早く出ろ」「早く持つて来う、持つて来う」つて音が、その淵の中でただちちゆうわい。それで河つぱだから、それ化けて来ただからね。それでおじいさんな、こりやまあえらいことができたと思つてまあ心配して、よくよく淵の際までしよつてかれて、しよい込まれる。まあこれあ困ると思つて、いい案配柳の木があるから、その上へヒョッコラシヨつかまつて、立白から降りてただちちゆうわい。

「それ、しよつて来たぞ、しよつて来たぞ」つて、立白しよい込んで行つただちちゆうわい。そしたら「何でもしよつてねえじゃねえか、生魚なんて。そんな嘘いつて」中のしようがいう音がしただつて。「いいや、今夜おれあ蜘蛛になつて、鍵竹から下がつて、そうして又、あのじじい釣り上げて来るから、あのじじいだまかすは、わけはねえから、今夜まで待ちろ」つていう音がしただちちゆうわい。

それからまあおじいさん、家（うち）い帰（かえ）つて来て、村の衆をいっぺえ頼んで刀かめえて、今夜来るからちちゆうわけで、蜘蛛になつて来るちちゆうわけだから、いたりやあ、そうしたら、鍵竹へでかい蜘蛛が、いいかんなしに（勢いよく）キュルキュルキュルンて音がして下がつて来ただちちゆうわい。おじいさんの前（めえ）へ。そうれ来たぞつてわけで、みんな刀で細かに切つてみたりやあ、それがみんな、細かな光る物になつて、みんな這（は）つて走つた。

そんなお話だった。

だから、今に池はあつても、野反湖にやあ、蛇体はいねえつちゅうわけだ。

和尚と色女

語り 山本 さか

収録 梶谷 明

むかしやあ、お寺に女は置いてはいけねえというわけねえ、ほんでまあ、オサンという娘が近所にあつて、その娘がちよいちよい来ちやあ、いろいろ持つて来てくれたり、御飯でん炊いてくれたりしちやあ、置いちゃあ行つただ。

お小僧と二人でいただ。和尚さんが、お小僧は、毎日裏にでかい雑木林があるんで、それ切つちやあ、いろいろ朝晩のお勤め聞いたあげくあ、大きな駒が一匹飼つてあるで、その馬にや、薪う裏から切つちやあ、つけてつちやあ：毎日売つて来ただ。お勤めしたあがりにやあねえ。和尚さんにいろいろ朝、ちゃんとお勤め聞いたあがりにやあ：それ売つちやあ来た。

そうしてまあ、その娘がどうも近ごろ、和尚さんと仲がええようだと思つて、お小僧がそう考えて、どうもわしが留守になると来ちやあ寝るらしいで、どうしてん仲がええとこ、それ一つまあ見定めてやりてえが、どうしたらいいがなと思つて、毎日薪切つちやあおいちやあ行つて来て、

切つといちやあ、あすの朝早くに、その駒につけて行つちやあ来る。

「はあ、きょうも行つてこう」つて和尚さんがいう。「はい」つて、きょうはまあ一つためしてみべえと思つて、駒を追つて「はい行つて来ますよ」つてそういいしな、薪をつけて出て、いいかん（適当に）遠くの松原まで行つて、駒つないで荷降ろしといて、それからまあ、それ見定めてえから帰つて来て、和尚さんの寝場の下へ入り込んでいたりやあ、そうしたら娘と二人で寝床に二人で寝ていたらしい。こりやあまあ、いい場へ入り込んだと思つて、そのお小僧は。

和尚さんは、オサンの髪つかめえて「オサン、こりや何だ」つて和尚さんが言つたら「はい、千本松原でございます」つていつたら、「そうか」じゃ、今度目つかまえて「これは」つてつたら「これはパチパチつくばでございます」そんなつぎ、鼻、今度「これはオサンなんだ」つてきいたら「はなみがたけです」つて。その次今度口う、「これはなんだ」つてつたりやあ「それは、ものがたりつくばでございます」つていうで、それで今度オサンのお乳つかめえて、「これは」つたら「秩父山のお山でございます」。その次、今度へそを「こりやあオサン何だ」「へそくり峠でございます」今度はべつちよ（女陰）をつかまえて「これは」つていつたりやあ「これは清水つくばでございます」つていう。

そしたらまあ、オサンが和尚さんのちんぽうをつかめえて、「これは和尚さん何ですかい」つてゆつたりや、「これはズキンカブリのとうべいさんだ」つて、そういつてまあ、まあいう。

これはいい話う聞いたと思つて、それから小僧どんな出て、それから、駒、空で行きやあしねえ、追つて来て「はいただ今」つて帰つて来たが：。「早かつたなあ」そういつただ、和尚さんが。

「そうだけえども和尚さん、きようは俺ひどい目にあつたんだよ。まあ、いつこう馬に暴れられて、きようは薪なんぞつけて行くどころじゃありませんねえ、いつこうつけたところが、いつこう方々へふりまいてしまつて、いつこうどう仕様もねえ。ただ売らずに帰つて来ただけども、千本松原へつないでおいりゃあ、パチパチつくぼへとび込んで、花見が岳へとび上がつて、物語りつくぼへとび込んで、秩父山のお山へとび上がつて、へそくり峠へとび込んで、清水つくぼへとび出したところを、ズキンカブリのとうべいさんが、ようやくとつつかまえて帰つて来た」つて、こういつた。

「この野郎め、人の寝床つばなしを聞いて、おめえ行つたじゃあありやしねえ、そんな野郎、はあ駒一匹くれるから、お小僧なんさせときゃあしねえ、追い出すから、おめえ、はあ行け」つて、そういつて言われて、「はあそうだりゃあ、行くよりほかじゃあねえから、じゃまあ、ひま貫つて、駒一つ貰つて、駒と二人で行くから」つて、それから松原へ行つて一日寝ていた。

駒のそばに寝てみたが、腹がへつてきたから、帰つて来たりゃあ、和尚さんが、ぼた餅ういっぺえ本尊さんへ上げてえたから、それまあ本尊さんの口へちつとばかり塗つて、ひん塗つておいて、そしてあと、みんな駒にくれたり、自分で食べたりにして、松原に寝ていたら、そしたりゃあ、和尚さんが、本尊がこんなに食つただ、口にくつついたからつて、池にこれ、ぶん投げようちゅうわけで、そしたら、クツクツクツクツターつて、沈んで走つたつてねえ、池の中へねえ、本尊さんが。

でまあ、一日寝てみたが、どうしたかと思つてそうつと帰つて来たら、本尊さんの、池ん中へ和尚さんが沈めてしまつたりしていたか

ら、それから来て、実はこういうわけで、俺が食べたから許しててえ（許してもらいたい）ちゅうわけで、今度つからこつたあねえから、許してもらいてえつていうわけで、お小僧もそこへ連れ込んでもらつて、今度つから一所懸命やつて、そんで、お寺へは、それから女は禁じただつて。

年表

西 暦	年 号	村 の 主 な 事 項	関 係 事 項
一九七二	昭和四十七	<ul style="list-style-type: none"> ・日影・入山幼稚園開設 ・歯科診療所開設「小雨」(12) ・野反富士見峠に鉄筋二階建ての休憩舎設置 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽井沢浅間山荘事件(2) ・沖繩返還、沖繩県発足(5) ・札幌冬季五輪(2)
一九七三	昭和四十八	<ul style="list-style-type: none"> ・南大橋が完成「日影・赤岩間」(3) ・野反湖ロツジが完成(7) ・六合村誌を発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次石油ショック始まる(10)
一九七四	昭和四十九	<ul style="list-style-type: none"> ・過疎対策褒賞条例制定(6) ・基幹集落センター「総合庁舎」完成(9) 	<ul style="list-style-type: none"> ・小野田少尉三〇年ぶり救出(3) ・群馬の森に県立近代美術館開館(11)
一九七五	昭和五十	<ul style="list-style-type: none"> ・生活改善センター完成(7) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナム戦争終結(4)
一九七六	昭和五十一	<ul style="list-style-type: none"> ・竜宮橋完成「沼尾・生須間」(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロッキード事件発覚(2) ・福田赳夫、本県初の内閣総理大臣に就任(12)
一九七七	昭和五十二		<ul style="list-style-type: none"> ・日航機ハイジャック
一九七八	昭和五十三	<ul style="list-style-type: none"> ・私立白根開善学校開校(7) ・入山小学校特別教室完成(3) ・自動電話開通(9) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日中平和友好条約の調印(8) ・成田空港開港(5)
一九七九	昭和五十四	<ul style="list-style-type: none"> ・六合小学校校体育館完成(3) ・入山小学校校舎完成(3) ・吾嬭橋完成「小雨・生須間」 ・山村広場完成(3) ・第三期山村振興指定(4) ・六合村総合運動場完成(4) ・国鉄六合山荘完成開業(10) ・六合山荘センター完成(12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「群馬の森」に県立歴史博物館開館(10)

一九八〇	昭和五十五	<ul style="list-style-type: none"> ・村民体育館完成(3) ・過疎地域振興特別措置法により過疎村に指定 ・六合村制施行八十周年記念式典 ・村民憲章制定・村の歌作成・村の木花鳥制定 	<ul style="list-style-type: none"> ・関越自動車道、東松山・前橋間が開通(7)
一九八一	昭和五十六	<ul style="list-style-type: none"> ・六合村柔剣道場完成(3) ・野反湖セントラルロッジ完成(12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・レーガン政権発足(1)
一九八二	昭和五十七	<ul style="list-style-type: none"> ・花敷橋完成(12) ・京塚橋完成「引沼・京塚間」(3) ・国道昇格「国道292号」 ・長野原町・小雨・荷付場・草津町間 ・主要地方道に昇格 ・梨木く花敷く長平く小倉く田代原く大沢く草津町間 ・「六合村報」を「広報く」と改称 ・林道小雨線開通(6) ・台風一〇号による大災害発生「入山地区孤立」(7) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日航ジャンボ羽田沖墜落事故 ・東北新幹線の開業(6) ・中曽根康弘、内閣総理大臣に就任(11) ・上越新幹線開通(11)
一九八三	昭和五十八	<ul style="list-style-type: none"> ・六合中学校校舎移転改築完成(3) ・第二十二回吾妻郡民体育祭六合村で開催される(9) ・矢倉発電所竣工(11) 	<ul style="list-style-type: none"> ・あかぎ国体冬季大会開会(1) ・あかぎ国体夏季大会開会(9) ・あかぎ国体秋季大会開会(10)
一九八四	昭和五十九	<ul style="list-style-type: none"> ・六合村高齢者センター完成(3) ・六合小・南小を統合し六合第一小となる(4) ・草軽交通定期路線バス廃止(5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・グリコ・森永事件 ・県人口一九〇万人を突破(8)
一九八五	昭和六十	<ul style="list-style-type: none"> ・六合第一小学校校舎完成(3) ・入山中学校運動場完成(3) ・学校給食センター完成(3) ・六合第一小学校運動場完成(12) ・信号機第一号点灯「役場前」(3) ・入山小学校体育館完成(12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・多野郡上野村の山中に日航機墜落(8) ・関越自動車道全線開通(10) ・FM群馬開局(10)

一九九三	平成五	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国道昇格「国道405号」(4) ・ 荷付場、野反湖、上越市間 ・ 六合中と入山中を統合し六合中として開校(4) ・ 六合村有害鳥獣対策協議会発足 ・ 新山村振興指定(4) ・ 南部地区温泉掘削に成功 赤岩地区(6) ・ 六合温泉医療センター開所(9) ・ 診療所「19床」・老人保健施設「つつじ荘50床」・健康増進施設「バーデ六合」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 北海道南西沖地震 ・ 県人口二〇〇万人突破(10)
一九九二	平成四	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皇太子白砂山登山(8) ・ 吾妻郡民体育祭開催「六合会場」(9) ・ 村道白砂根広線改良工事完成(11) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行政機関週五日制実施(8) ・ 学校週五日制始まる(9)
一九九一	平成三		<ul style="list-style-type: none"> ・ 長崎・雲仙普賢岳噴火(6)
一九九〇	平成二	<ul style="list-style-type: none"> ・ 過疎地域活性化特別措置法により過疎村に指定 	
一九八九	平成元	<ul style="list-style-type: none"> ・ 六合村総合計画策定(3) ・ 国道292号出立大橋・花園大橋竣工 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和天皇崩御 ・ 平成と改元(1) ・ 消費税3%導入(4) ・ 官庁土曜閉庁始まる(5)
一九八八	昭和六十三	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校社会科副読本改訂(3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 青函トンネル開通(3) ・ リクルート事件発覚(6)
一九八七	昭和六十二	<ul style="list-style-type: none"> ・ 林道京塚線開通(3) ・ 六合村観光物産センター完成(4) ・ 南部体育館完成「土間式」(8) ・ 六合村遭難対策協議会発足(12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国鉄の民営化・JR六社発足(4) ・ 県生涯学習センター開設(10)
一九八六	昭和六十一	<ul style="list-style-type: none"> ・ へき地診療所改築(12) ・ 広池発電所竣工(8) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ チェリノブイリ原発事故(4) ・ 三原山大噴火 全島民非難(11)

<p>一九九四</p>	<p>平成 六</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第一回六合ふるさとまつり開催(2) ・第一回六合村生涯学習推進大会開催(3) ・六合山荘をJRより買受(3) ・特定農山村地域指定(3) ・前橋地方気象台地震観測所を下沢に設置(4) ・六合村社会福祉協議会を法人化(4) ・村道花敷草津2号線開通「品木ダム」草津原間 ・熊倉発電所竣工(10) ・六合村情報連絡施設完成「防災行政無線」(11) ・集落林道日ヶ闇線開通(11) ・第一回村民海外派遣事業(独ロマンチック街道) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関西国際空港の開港(9)
<p>一九九五</p>	<p>平成 七</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・入山土間式体育館完成(3) ・しゃくなげハイツ完成 ・村営住宅 平沢団地完成 ・六合八間太鼓保存会設立(9) ・六合温泉医療センターに歯科開設(9) ・野反湖キャンプ場管理用道路兼遊歩道完成(11) 	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神淡路大地震発生(1) ・地下鉄サリン事件発生(3)
<p>一九九六</p>	<p>平成 八</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・六合ヘリポート整備(7) ・村営住宅 生須団地「二棟四戸」完成(7) ・引沼団地「一棟二戸」完成(7) ・暮坂畜産基地 暮坂団地竣工(8) 	<p>0-157</p>
<p>一九九七</p>	<p>平成 九</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・暮坂牧場国有地購入(3) ・六合ふるさと活性化センター完成(3) ・六合ふれあい屋内プール完成(3) ・六合つ子養育手当支給始まる(4) ・管内幼稚園給食始まる(5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルー日本大使館人質事件 ・消費税5%になる(4) ・長野新幹線高崎・長野間開業(10) ・東京湾アクアライン開通(12)
<p>一九九八</p>	<p>平成 十</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・六合村ホームページ開設(2) ・村立元山分校廃校(3) ・在宅介護支援センター温泉医療センターに併設 ・六合村保健センター・長英の隠れ湯完成(6) ・村営住宅 小雨ハイツ完成(7) ・小雨・日影屋内ゲートボール場完成 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬季オリンピック長野大会開催(2) ・小淵恵三、内閣総理大臣に就任(7)

<p>二〇〇二</p>	<p>二〇〇一</p>	<p>二〇〇〇</p>	<p>一九九九</p>
<p>平成 十四</p>	<p>平成 十三</p>	<p>平成 十二</p>	<p>平成 十一</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・西吾妻福祉病院開院 ・六合村結婚相談所開設(4) ・地域通貨「六合ふれあい切符」スタート ・第一回村民号実施「伊東温泉」 ・六合中美術教室等完成(12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・林道至球線開通(3) ・ALT「外国語指導助手」導入(7) ・第一回中学生海外派遣事業実施「イギリス」(8) ・林道寺社木線開通(11) 	<ul style="list-style-type: none"> ・暮坂総合交流ターミナル完成(7) ・第一小・入山小教育用パソコン導入 ・集中豪雨による被害発生 ・第三十九回吾妻郡民体育祭開催「六合会場」(10) ・広報縮刷版の発行 ・ヘリコプター郷土視察 ・イメージキャラクター「くにつ子ちゃん」作成 ・モニュメント「記念碑」設置 ・村民の日制定 ・広報縮刷版の発行 ・百周年ビデオと小冊子作成 ・六合村制施行百周年記念式典 ・自家用自動車有償運送事業「やまどり」運行(4) ・六合中学校教育用パソコン導入 ・村営住宅 世立団地完成「一棟三戸」(3) ・ふれあい広場「村民野球場」竣工(3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・六合村第二次総合計画策定(4) ・村道暮坂引沼線開通(9)
<ul style="list-style-type: none"> ・完全学校週五日制がスタート(4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次小泉内閣「福田康夫官房長官」(10) 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護保険制度スタート(4) ・小淵恵三首相死去(5) ・第二十七回シドニーオリンピック大会開幕(9) 	<ul style="list-style-type: none"> ・群馬県庁新庁舎開庁(9)

二〇〇三	平成十五	<ul style="list-style-type: none"> ・幼保一体化構造改革特区認定(4) ・六合産業振興社設立 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラク戦争始まる(3) ・日本郵政公社発足(4)
二〇〇四	平成十六	<ul style="list-style-type: none"> ・ねどふみの里完成(1) ・六合こども園開園(4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・北朝鮮拉致家族の被害者五人帰国(5) ・第二十八回夏季オリンピック・アテネ大会開幕 ・スマトラ沖M9地震発生(12) ・浅間山二一年ぶりに中規模噴火(9)
二〇〇五	平成十七	<ul style="list-style-type: none"> ・道の駅周辺整備(3) ・六合山荘リニューアル「宿 花まめに改称」 	<ul style="list-style-type: none"> ・愛知万博開幕(3) ・郵政民営化法案衆院本会議で可決(7)
二〇〇六	平成十八	<ul style="list-style-type: none"> ・赤岩地区重要伝統的建造物群保存地区に選定 	
二〇〇七	平成十九	<ul style="list-style-type: none"> ・健康管理等情報連絡施設完成 ・CATV開始「テレビ再放送・インターネット接続サービス」 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟県中越沖地震発生(7) ・福田康夫 内閣総理大臣に就任(9)
二〇〇八	平成二十	<ul style="list-style-type: none"> ・第一小・入山小を統合し六合小として開校(4) ・六合村第三次総合計画策定 ・見寄橋拡張工事完成 	<ul style="list-style-type: none"> ・野島崎沖でイージス艦衝突事故(2) ・秋葉原通り魔事件(6)
二〇〇九	平成二十一	<ul style="list-style-type: none"> ・長野原く花敷間JR定期バス廃止(3) ・道の駅直売所「くにつ子ハウス」オープン(4) ・路線バス実証実験運行(ローズクイーン交通) ・中之条町・六合村合併協議会設置 ・中之条町・六合村合併協定調印式(11) ・六合かるた作成 ・南大橋強度補強工事完成 ・丸谷峠改良工事着手(23年度完成予定)(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型インフルエンザ流行 ・裁判員制度始まる(5)
二〇一〇	平成二十二	<ul style="list-style-type: none"> ・六合民話の家完成(3) ・特産品加工施設完成(3) ・小雨出張診療所移転新築完成(3) ・六合村閉村式(3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・口蹄疫の流行

続六合村誌編纂関係者名簿

続六合村誌編纂委員名簿（平成二十六年四月一日現在）

委員長	唐澤 定市	中之条町文化財専門員	歴史・産業
副委員長	黒岩 勇	中之条町文化財専門員	教育・民俗
委員	明田川道雄	文化協会古文書部長	古文書
委員	井田 安雄	村誌編纂委員	民俗
委員	剣持 千秋	中之条町文化財専門員	歴史・教育
委員	田村 正勝	中之条町文化財専門員	石仏・道路
委員	戸谷啓一郎	前村誌編纂委員	自然
委員	福田 義治	ミュゼ学芸員	歴史
委員	丸山不二夫	前村誌編纂委員	教育・近世
委員	安原 義治	元六合村助役	行政・議会
委員	山田 武俊	中之条町文化財専門員	行政・文化財
委員	山本 茂	中之条町文化財専門員	民俗・教育

原稿協力者

・野反湖の消えゆく花たち	中村 一雄（根広）
・シラネアオイの復元	山口 和雄（品木）
・穴地獄とチャツボミゴケ	白根開善学校高等部二年
	泉 直人・清水 涼太
	担当教員 関口 正人
・基幹集落センターの建設	中沢 富一（生須）
・六合村農業協同組合	青木 隆（JAあがつま六合支店長）
・国鉄六合山荘	中沢 富一（生須）
・野反湖の冬山開発構想の思い出	中沢 富一（生須）
・冬住みの里資料館	市川 義夫（小雨）
・六合村婦人会の歩み	安原キヌエ（小雨）

事務局

山本今朝吉 六合支所

野村 泰之

（六合支所 平成二十四年七月一日～平成二十五年三月三十一日）

金井 正紀

（六合支所 平成二十二年四月一日～平成二十五年三月三十一日）

続六合村誌

平成 27 年 3 月 31 日

編集 続六合村誌編纂委員会

発行 中之条町

群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町 1091

印刷 有限会社 橋本印刷所